# 魔法少女リリカルなのは～ヘタレ転生者は仮面ライダー？～

G-3X

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

# 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのは～ヘタレ転生者は仮面ライダー？～

【Ｎコード】
Ｎ６５７９Ｎ

【作者名】
Ｇ－３Ｘ

【あらすじ】
仮面ライダー好きの地方の大学生がリリカルな世界に転生しました。
でもこの青年は原作を全く知りません。
はっきり言って根っからのモブキャラ体質です。
しかし主役であることも事実です。
ヘタレだってやるときゃやるんです。
チートでは無いけれど精一杯に頑張る等身大のヒーロー目指して？
彼は今日も歩き続けます。

# 第0話　テンプレ的なプロローグ　（前書き）

皆さん始めまして。もしくはお久しぶりです。

久しぶりに小説家になろうに帰ってまいりました。

更新していた小説がストップした頃交通事故に合い入院していたため小説が掛けなくなっていましたが今日からリハビリもかねて復帰します。

体調が未だ万全では無いので暫くかなり不定期な更新になると思いますが楽しんでいただけたら幸いに思います。

ちなみに二次創作はこれが初挑戦です。

# 第0話　テンプレ的なプロローグ

「大丈夫か？…お嬢ちゃん」

力なく道路脇に横たわる俺を、小さな女の子が両目に溢れんばかりの涙を溜めながら何か必死に呼びかけている。

俺には目の前の女の子が何を言っているのか聞こえなかったが、心配させているんだろうなと当たりをつけて少しでも安心させようと先ほどの言葉を搾り出した。

そもそも俺とこの女の子は知り合いでも何でもない。

じゃあ何で俺はこんな状況に陥っているのか、疑問に思うがどうにも頭の回転が鈍くなっているのか思い出せない。

仕方ないので俺は全く動かない体と霧が掛かった様に記憶が曖昧な頭を無理矢理使って思い出すことにした。

まず俺の名前は板橋純（イタバシジュン）しかない地方の大学生で二十歳だ。

特徴と言えば特撮番組である仮面ライダーファンという事ぐらいだろうか。

周りからは良くオタクだと称される。

確かに俺はアニメ等も嗜む程度には観賞するが基本仮面ライダーをリアルタイムで見るために朝方人間なので夜の大きなお友達が見る様なアニメは見ない。

同じくアニメ好きな友人達が言うには、

『それはエゴだよ』

とネタ的な台詞を返されるが、俺はあくまでこの件に関してはライトユーザーであると言い貫いている。

自分自身の実体を把握した所で、俺は今日この日に何があったのかをゆっくりと思い出してみる事にした。

今日は日曜日で俺は朝からハイテンションだった。

それも致し方無いだろう。

日曜は俺の大好きな仮面ライダーの放送日な上に、何と今日から新しい仮面ライダーが始まるのだ。

これで興奮しないライダーファンは潜りもいいとこだと正座させて三時間に及ぶ説教を行なう覚悟が俺にはあるぞ。

朝の番組を一通り見た後、俺は朝と昼の間所謂ブランチと言う名の食事を済ませ外出する事にした。

今日は大学の講義もバイトも友人との約束も無く完全なオフの日だった。

このままボケッとしているのも偶には良いかとも思ったのだが俺は朝からのテンションを未だ引きずっており無性に身体を動かしたい気分だったのだ。

それなら映画でも見るかなと、俺は財布と携帯をズボンのポケットにねじ込んで某ＤＶＤレンタルショップにライダー映画を借りに行くことに決定した。

家を出て暫く歩いて住宅街を抜けると十字路に差し掛かった。

この十字路を越えて五分程歩けば俺の目的地であるレンタルショップである。

俺は信号機の前で立ち止まり、早く歩行者ランプが青にならんものかと赤く点滅するランプを見つめていた。

すると何時からだろうか。

先ほどまでは俺の隣はおろか周りに人っ子一人すら居なかった筈なのに、いつの間にか俺の隣に一人の女の子が立っていた。

その女の子はまるで絵本から抜き出てきた様な不思議な雰囲気を纏っていた。

歳は小学生になったばかりといったところだろうか、腰の辺りまで伸ばされた髪は輝く様な金色、瞳は宝石の様に透き通った水色で明らかに日本人ではない。

顔の全てのパーツがまるで西洋の人形みたいに完成されており俺の様な年齢＝彼女居ない暦な奴でも将来美人になるだろうなと容易に想像できる程の美少女だった。

白いゴスロリ調の服を着た女の子はジッと前の信号機を見つめてい

た。

俺も何時までも女の子を見続けるのは失礼だし下手したら謂れ無き容疑を掛けられる可能性があるので、隣の女の子と同じく視線を前方に向けた。

暫くすると赤いランプが某光の巨人宜しく点滅し始めた。

これで信号の色が赤から青に変われば此処で立ち止まる必要も無くなり、目的地に向けて再び歩き出す事が出来る。

俺と女の子がその信号機が示すランプの表示が変わっていく様を見ていたが此処で俺達にとって予想外の出来事が起きた。

子猫が突然車道に飛び出してきたのだ。

信号が変わる間際とはいえ危ない事に変わりはない。

突然の出来事に俺は驚愕したが事はそれで終わらなかった。

先程まで俺の横に居たはずの女の子が猫に向かって駆け出していた。

俺は咄嗟に危ないぞと叫ぶが女の子にはそれが聞こえていないのか、そもそも日本語が通じるのかも分からない。

女の子は俺の制止の言葉を振り切って子猫の元に駆け寄っていく。

子猫は道路の真ん中で大人しくしており女の子は容易に子猫を抱きとめて安堵の溜息を吐いた。

だがこの話しはこれで終わりではなかった。

子猫を抱えた女の子に一台のトラックが迫っていた。

トラックの運転手も女の子の存在に気づき急ブレーキを掛けるが明らかに間に合わない。

その光景を目の前にした俺は何も考えず走り出していた。

そして女の子を道路から突き出すと同時に鈍い衝撃と音が俺に襲い掛かった。

…そうだ。

俺は女の子を庇ってトラックに突き飛ばされたんだった。

何で忘れていたんだろう。

身体の痛みが全く感じられなかったのでそのせいかもしれない。

思い出したら何だか頭がすごくスッキリした。

そんでもって気付いた事がある。

俺このまま死ぬんだな。

思春期の頃なんかに死って何なんだろうって考えた事もあったけれど実際に体験してみると意外とあっさりしているもんだ。

今までの人生で後悔が無いと言えば嘘になるがそれでも俺の人生は

幸せだったと思う。

その上最後は子供とはいえこんな美少女に看取られて逝けるのだからモテナイヘタレとしては上出来だ。

女の子の泣き顔を見ながら俺はそんなどうでもいい様な事を考えていたが、それすらも出来なくなってきた。

目の前の景色が目を閉じても居ないのに暗くなってきた。

意識もまるでゆったりとした睡魔に導かれるように遠のいていく。

俺は少しずつ薄れていく意識の中昔の夢を何故か思い出した。

微笑ましい程に大それた夢だ。

男の子なら誰でも一度は願ったかもしれない。

大人になれば皆忘れていく儚い夢。

俺は思う。

もしかしたら声に出していたかもしれない。

でもそれも分からないくらいに俺は眠い。

最後に俺はもう一度…

「仮面ライダーになりたかった」

「・・・で・・・・す・・・・」

「・・あ・・・・こ・・・・よ・・・・」

声が聞こえる。

ここは何処だ。

俺はどうなった。

分からない。

確か俺は女の子を庇って…

もしかして助かったのだろうか？

自身の両目を開けて確かめたいが上手く開く事が出来ない。

本当に訳が分からん。

とりあえずさっきから聞こえてくるこの声を聞いてみよう。

何か情報が得られるかもしれない。

「おめでとうございます。元気な男の子ですよ」

は？

「有難うございます先生」

え？

「名前はもう決めてらっしゃるんですか？」

「はい。主人と二人で男の子でも女の子でもこの名前にしようって考えた名前があるんですよ」

何だこの会話は？いよいよ意味が分からなくなってきた。

こうなったら意地でも目を開けてやる。

頑張れ俺の目！

ファイトだ俺の目！

明日は必ず勝つと書いてトンカツだ！！！

うおおおおおおおおどらっしゃあああああああ！！！！！！！

明らかに俺のキャラじゃないがそんな細かい事は言ってられないので、俺は現状を打破するため全力全開で目を開けることに集中した。

そのかいあってか程なくして俺の両目は無事開かれた。

血管がぶちきれる前に開いて本当に良かった。

さてと安心した所で現状を確認しなくては。

俺が目を開けて最初に見た物は一人の女性の顔だった。

歳は二十代前半といった所だろうか？

人懐っこそうな笑顔を浮かべながら俺に微笑みかけている。

何だこの状況？

男として嬉恥ずかしいシチュエーションではあるがますます持って意味が分からなくなってきた。

しかもこの女性と俺の位置関係から計算すると俺は今この女性に抱きかかえられている形になっているはずだ。

だが女性は成人男性である筈の俺を抱え上げているにも拘らず顔色一つ変えていない。

何だか怖くなってきた俺はこの女性に降ろしてくれるように紳士的に頼もうとしたのだが上手く声が出ない。

其処で俺は更なる矛盾と違和感に気づいてしまった。

縮尺がおかしいのだ。

明らかに俺と女性の大きさの比例が変なのだ。

最初俺は死んで巨人の国に迷い込んでしまったと思ったがその考えが間違いである事がこの後の女性の一言で理解した。

「私があなたのお母さんですよ」

どうやら俺の周りがでかくなったのではなく俺が縮んだだけらしい。

しかも俺はこの人からつい今しがた生まれたとの事だ。

つまり俺は赤ん坊になってしまったらしい。

さっきから淡々として冷静すぎじゃないかと思われるがそれは誤解だ。

余りにも超展開が連続して起こった為頭がオーバーヒートして逆にクールダウンしているだけだ。

暫くして落ち着いたらあらためてパニック状態になるのであしからず。

ここで最後言っておかなければいけない事がある。

正確には今現在喋ることが出来ないので心の中で思うだけなのだがそこら辺は容赦していただきたい。

え～どうやら俺は転生者になってしまった模様です…

## 第0話　テンプレ的なプロローグ　（後書き）

感想が一杯あると更新が早くなるかもしれません。

# 第一話　ヘタレの転生者（前書き）

連続投稿です。

# 第一話　ヘタレの転生者

どうも皆さんお久しぶりです。

転生者の板橋純です。

転生した日から五年ほど経過しました。

まずはその日から今日までの簡単なエピソードをかいつまんでご説明させて頂きます。

俺の名前は前世？と同じく板橋純になりました。

両親は前世とは別人だったのですが姓は同じ。偶然にしては出来すぎかと思うこともありましたが結局答えは出せずじまいでやっぱり偶然なのかと思うようにしました。

苗字から分かるように俺は今も日本人です。

転生したといっても神様に会って土下座されたわけでもないしチートな力を与えられたわけでもなくいたって普通です。

幾らか他と比べて裕福な家庭だなと思うことはあっても、それも常識の範囲内で変わったことはありませんでした。

なので最初俺は以前の自分が死んだ直後の世界で転生したと思ったのですがどうもそんな単純な話しでは無かった様なのです。

まず俺がこの五年間生まれ育った地名が海鳴市という所でした。

もしかしたら俺が知らないだけだったのかもしれないが少なくとも東京近くには無かったはずだ。

そしてこれが最大の理由になるのだが…存在しなかったのだ。

俺の命と同列と言っても過言ではない存在…仮面ライダーが！！！！

その事実に直面したとき俺はトラックに激突したり転生した以上の衝撃に襲われた。

その後三日間程塞ぎ込んでしまい両親から物凄く心配されたがこれは全く別の話しだ。

結論を言えば俺が今居るこの世界は、俺が元々居た世界の平行世界パラレルワールドと言われている場所なんじゃないかと言う事だ。

もしかしたら良く転生二次創作なんかにある漫画やアニメの世界かもしれない。

パラレルワールドならまだしも漫画やアニメの世界なんてお前は頭が沸いてんじゃないかと言われてもしかたない発言かもしれない。

だが俺にはその発言が現実味を帯びるに至る存在を身近で普段から眺めているので、厨二発言乙と言う感想は待っていただきたい。

その存在はお隣さんの高町一家である。

まず家族揃って物凄い美形揃いなのだ。

一家の大黒柱である高町士郎さんと奥さんの桃子さんが年齢不詳の若さを保っているのはテンプレだ。

そして俺がこの世界が漫画の世界であるとしたら主人公であろうと睨んでいる高町家の長男、恭也君だ。

君付けにしているが現在の俺とは十歳は歳が離れているので実際にはさん付けで呼んでいる。

この恭也君は父親である士郎さんから小太刀二刀御神流という古流剣術を習っているのだがその強さがハンパない。

正に目に見えない速さで動く、そのレベルは何処のクロックアップだよと突っ込みたくなる程だ。

更に恭也君の妹の高町家長女、美由希さんも御神流を習っている。

恭也君レベルでは無いがそれでも同年代でこの強さは異常だろうというと言える程に強い。

勿論この二人の師匠である士郎さんも強い。

ていうか化物だ。

士郎さんは何でもボディーガードの仕事をしているそうで良く家を空けていて世界中を飛び回っているそうだ。

帰ってくると恭也君と美由希さんを連れて高町家庭内にある道場や山篭りなどをして日夜修行に励んでいる。

何で俺がお隣さんとはいえこんなにも詳しく知っているのかって？

それは俺の家と高町家が家族ぐるみで仲が良いからだ。

お隣同士で幼い子供がいれば結構な確立で仲は良くなるものだ。

つまり高町家にはあと一人今の俺と同年代の子供がいるという事だ。

高町家の次女であり末っ子である高町なのはちゃん。

俺とは同い年になる。

出会いは俺が生まれてから半年が経った頃である。

高町夫妻が赤ん坊であるなのはちゃんを連れて家に挨拶に来たのである。

どうやら元々お隣さんで同時期に両家の奥さんが身篭っていた事もあり幾らかの交流があったそうだ。

特に俺の母さんは始めての出産ということもあり既に二回の出産経験のある桃子さんに色々とアドバイスをしてもらったそうだ。

しかし母さんも実年齢から幾らか若く見えるが桃子さんはそれ以上に若く見える。

これで中学生の子持ちだと言われたらまず自身の耳と頭が如何にかなってしまったのではと考えてしまうのは俺だけじゃないはずだ。

まあそんな訳で俺となのはちゃんは所謂幼馴染という関係だ。

赤ん坊の頃からほぼ毎日のように顔を合わせる日が続き自らの足で立って歩けるようになり幾らか喋れるようになると、なのはちゃんは毎日の様に家に遊びに来た。

俺が高町家に遊びに行くことも偶にはあったがそれでもなのはちゃんが家に来る回数の方が圧倒的に多かった。

俺は中身が既に二十代半ばに差し掛かっていたせいもあり、一緒に遊ぶ時はなのはちゃんを常に優先するようにしていた。

はたから見ても同年代が遊ぶと言うよりはお兄さんに遊んでもらう歳の離れた妹といった関係に見えただろう。

俺の母さんも桃子さんも必ずどちらかの目の届く範囲に俺となのはちゃんを置くようにしているのだが純君が居れば心配要らないわねと殆ど放任さていた。

実際俺は喜んでなのはちゃんの面倒を見た。

純粋に慕ってくれるのが嬉しかったのもあるが俺も本当に可愛い妹が出来たように感じて命一杯なのはちゃんを可愛がった。

なのはちゃんも俺に良く懐いてくれて大好きと良く言ってくれたり将来は純君のお嫁さんになると言うまでになっていた。

美幼女であるなのはちゃんがいうのだから本当の同年代やロリコンが聞けば卒倒物だろう。

しかし俺が抱いた感情は別のものだった。

なのはちゃんがどんなに可愛いと言っても俺の中身は二十代だし異常な性癖は持ち合わせていない。

それに幼馴染というよりお兄さん若しくは親戚のオジサン的な立ち居地に俺の感情は持っていかれてしまい恋愛感情というより家族愛的なものが芽生えてしまって、なのはちゃんのそういった発言を聞くたびに微笑ましい友愛の心に包まれていった。

そして今も俺はなのはちゃんの隣に居る。

というかなのはちゃんは一時的ではあるが俺の家に住んでいる。

何でも士郎さんが仕事先で大怪我を負って意識不明の重体で入院しているとの事だ。

実は最近になってなのはちゃんも大きくなってきた事もあって桃子さんの昔からの夢であった喫茶店を開店させたのだが、士郎さんもボディーガードの仕事を引退して喫茶店のマスターをする筈だった。今回の仕事は緊急で依頼主も昔からの士郎さんの知り合いであったため無碍には断れなかったそうだ。

そんな中での今回の悲報である。

高町家の精神的なショックは大きかったと思う。

事実二人で始める筈だった喫茶店は事実上一人でやらなくいけなくなり桃子さんの負担は士郎さんの怪我の心配もあり増大だ。

恭也君と美由希さんもお手伝いをすることは出来るが二人とも学生

であるためどうしても限界がある。

特に恭也君は士郎さんの怪我が精神的に相当のダメージになりいつも張り詰めた雰囲気を纏うようになってしまった。

美由希さんもそんな様子に同様を隠せずおろおろするばかりだった。

ここで問題なのはなのはちゃんだ。

なのはちゃんは今回のことで自分の居場所を家族の中で見失い塞ぎ込むようになってしまった。

でもそれを見た目子供である俺が高町家の人達に伝えた所でどれだけの効果があるのだろうか。

それに桃子さんを始め今の高町家の人達は自分の感情を制御するだけで精一杯の様に見えた。

だから俺は母さんを通して一時的にでもなのはちゃんを家で預かれないかそれとなく聞いてみた。

その後母さんも桃子さんの事を気にしていたこともありその旨を桃子さんに相談した。

桃子さんもなのはちゃんが塞ぎ込んでいる事には気付いており如何にかしないといけないと考えていたそうで、それならなのはちゃんと仲の良い俺がなるべく近くに居たほうが安心できるという考えからなのはちゃんは暫くの間俺の家で預かる事になったのだ。

それから俺達板橋家、特に俺は、兎に角なのはちゃんと、一緒に居

る様に心掛けた。

最初はなのはちゃんも遠慮したり放って置いてくれと突き放してきたが、俺はそれでも構い続けた。

やがてなのはちゃんの顔にも以前のような笑顔が戻ってきて安心した所更に良い知らせが入ってきた。

士郎さんの意識が回復して快方に向かっているとの事だった。

これで高町家全体にも以前の様な笑顔が戻ることだろう。

それからも暫くなのはちゃんは家で預かる事になっていたのだが、士郎さんも退院が決まりなのはちゃんもそれと同時に高町家に戻ることになった。

しかしここでまたしても予想外の出来事が起こった。

なのはちゃんが高町家に戻る直前に物凄い勢いで泣き始めてしまったのだ。

しかも俺のシャツを確りと掴んでおり離してくれそうにない。

なのはちゃんが幾分落ち着くのを待ってから如何して泣いたのかを聞いてみたところ、俺と離れるのが嫌だったとの事だ。

お隣なんだから何時でも会えるよと説得を試みるもなのはちゃんは断固として俺を解放してくれなかった。

あまりにも頑なに俺から離れないため俺はそのまま高町家に借り出

された。

高町家で士郎さんの退院祝いに普段よりかなり豪華な夕飯をとっている間もなのはちゃんは俺を離してくれない。

手を離さないとご飯が食べれないよと再び説得を試みるがなのはちゃんは笑顔で口をあけると食べさせてとおねだりしてきた。

とんだ甘えんぼ将軍だと思ったが、俺も甘えられるという行為に悪い気もしないので、素直になのはちゃんの要求を呑んで雛鳥に餌をあげる親鳥のように桃子さんの手料理をなのはちゃんの口に運んであげる。

高町家の面々はその光景を物凄く生暖かい視線で見つめている。

いや若干一名シスコン気味なお兄様が殺気を含んだ目で俺を見つめてくるが勘弁していただきたい。

言っておくがこれは冤罪だ。

この殺気の持ち主に襲撃されれば俺の命など一瞬でジエンドだろう。

それこそ俺の前世の死因であるトラックの衝突など軽く凌駕する一撃が俺の脳天に直撃しそうだ。

幸いにもそんな事にはならず無事に一日を終わることが出来た。

結局食事の後のお風呂でも離してくれることは無く寝るときに到っては俺は完全になのはちゃんの抱き枕と化していた。

間接的に生命の危機を感じたりして疲れた一日ではあったが隣で寝ながらも微笑んでいるなのはちゃんを見ていると偶にはこんな日も良いかと思えた。

翌日俺は前世からの得意スキルでもある早起きを発動してなのはちゃんの呪縛から抜け出し、同じく早起きしていた士郎さんに挨拶をしてからお隣である自宅に帰っていった。

全くの余談なのだが家に帰ってから二時間後お隣からなのはちゃんの盛大な泣き声聞こえてきた。

その数分後俺の家にやって来たなのはちゃんによって俺は再び囚われの身となってしまった。

この状態はこの日から一週間も続きやっと離れてくれた後も隙あらば俺に抱きつき甘えるクセが残ってしまったのだが、先のことを考えると早めに直したほうが良いと思うが今はそれでも言いと考えている。

俺は泣いてる顔のなのはちゃんより、笑顔のなのはちゃんが大好きだからだ。

## 第一話　ヘタレの転生者（後書き）

まだ変身はしませんよ。

## 第二話　動き出したかもしれない運命【前編】（前書き）

ストックはこれで終わりです。

# 第二話　動き出したかもしれない運命【前編】

「起きないと遅刻するよ」

俺は声を出して布団に包まった人物に声を掛ける。

毎朝のことなのだが本当に朝が苦手なんだなと感心してしまう。

だが感心していても今の事態が好転する事は無いので俺はもう一度声を掛ける。

「早く起きないと朝ご飯食べる時間なくなるぞ」

俺の声に反応したのか布団に包まった人物はもぞもぞと動き出して一言呟いた。

「う～ん…朝ご飯今日はいらないから…後五分寝かせて…」

やっと動き出したかと思ったらそんな事をのたまってきた。

今日は何時にも増して寝起きが悪いようだ。

こうなれば仕方が無い。

俺の精神衛生上余り使いたくない手ではあるが此処で奥の手の一つを使うとしよう。

「あ～あ。今すぐ起きてくれたら俺今日は何でも三つだけ言う事聞いてあげるんだけどな～」

布団がビクッと反応した。

もう少し畳み掛ければ落ちるな。

「後五秒以内に起きてくれれば絶対に言うこ「おはよう純君！」おはようなのはちゃん」

布団の主高町なのはちゃんは俺の目覚めの呪文と共に本日も無事に封印から解き放たれた。

「さっさと着替えて身支度してリビングに来なよ。桃子さんが朝食準備してくれてるからさ」

俺はなのはちゃんが起きたことを確認すると用件だけ告げてさっさとなのはちゃんの部屋を出ることにした。

「ちょっと待って純君」

「…何かな、なのはちゃん？」

なのはちゃんに声を掛けられた俺は、何を言われるか大体想像はつきながらもあえて知らない振りをして聞き返した。

もしかしたら逃げ切れる可能性も少なからず残っているからだ。

「今日は何でも言うこと聞いてくれるんだよね？」

なのはちゃんが小悪魔スマイルでそう問いかけてくる。

どうやらさっきの俺の台詞は確りと聞こえていたようだ。

なのはちゃんは朝が極端に弱いからもしかしたら良く聞き取れずに居て誤魔化せるかもと思ったのだが今日は無理そうだ。

しかもさり気無く三回だけという制限を取り払っている辺り妙な計画性すら窺える。

「うん確かに言ったよ。ただし三つだけだからね」

今俺に出来ることはせめて回数制限だけは死守することだけだった。

此処は高町家のリビングである。

今は平日の朝であり家族仲良く朝食をとっている。

そう。言葉通りとても仲睦まじいのである。

まずは士郎さんと桃子さんだが見ているだけでおなか一杯になる事受けあいだ。

次に恭也君と美由希さんだがこの二人も兄妹には見えない。

四人揃ってバカップルだ。

描写が無いのは勘弁していただきたい。

この一家の情景を文字で表そうとするならば余りの糖分過剰摂取のため生活習慣病になる恐れがある。

俺は普段から健康面に気を配っているので本当に勘弁してもらいたい。

だが今日に限っては俺もその光景の一部と言えるのかもしれない。

なぜならば…

「純君、あ～ん」

「はいはい待っててね。なのはちゃん次は何が食べたい？」

「うんとね、次は卵かな」

「なのはちゃんさっきからサラダ食べて無いでしょ」

「だって生のお野菜って苦いんだもん」

「だめだよ好き嫌いしちゃ」

「だって～」

「だってじゃ無いの。ちゃんと野菜も食べないと健康に悪いよ」

「…は～い」

さっきからこんな会話を繰り広げているわけですが、聡明な方なら

この台詞群を聞いただけで俺が現在どういった状況に陥っているのか分かってもらえると思う。

「食べたよ純君」

「うん。偉いね、なのはちゃん」

俺はなのはちゃんに偉い偉いと頭を撫でてあげながら褒めてあげる。

なのはちゃんは目を細めながら気持ちよさそうに俺の肩に頭を摺り寄せてくる。

そうです。

俺は今なのはちゃんにご飯を食べさせてあげている最中なんです。

誤解の無い様に言っておきますが俺は普段はこんな事致しません。

俺が今なのはちゃんにあ～んでご飯を食べさせてあげているのは先程の約束のためです。

なのはちゃんが最初にお願いしたことが、朝ご飯を士郎さんと桃子さんがしている様に食べたいとの事でした。

士郎さん…桃子さん…子供は幼い頃から親の真似をしたがる生き物なんですから情操教育のためにももう少しだけで良いので自重してください。

上のお子さんである恭也君と美由希さんは既に手遅れだと思うのでせめてなのはちゃんの前でだけは、と俺はなのはちゃんの食事の世

話をしながら念を送るのだがその思いが届いているのかは甚だ疑問だ。

それと恭也君…殺気を向けるのは止めてください。

土下座でも何でもしますし、なのはちゃんに手を出す気なんてまつ毛の先程も無い、ただのヘタレ転生者なので五慈悲をください。

普段俺は、朝ご飯は自宅で済ませてくる。

その後、朝に弱いなのはちゃんを起こす為、高町家にお邪魔して起こした後は高町家の食卓で、なのはちゃんが朝ご飯を食べ終わるのを待ちながら、桃子さんに淹れていただいた紅茶を飲むのを日課にしている。

最初の頃は起こした後は待っているだけだったのだが、桃子さんが何時頃からか、なのはちゃんを起こしてくれる御礼にと紅茶をもてなしてくれる様になった。

プロが淹れただけあって美味しいのは言うまでも無い。

前世からも含めて本格的に淹れた紅茶は飲む機会等は、皆無だったが今では朝はまずこの一杯を飲まないと始まらないと思うまでになってしまった。

甘い空気と命の危険を同時に感じるカオスな食事をどうでも良い事を考えながら終えた俺はなのはちゃんを連れて高町宅をあとにした。

士郎さんが大怪我を負ったあの日から一年が過ぎて俺となのはちゃんは小学生になった。

俺達の通う学校は私立聖祥大附属小学校という名前から分かる通りのエスカレーター式の良いとこの私立校だ。

入るには其れなりに難しい試験などもあるが其処は俺の唯一のチート能力である頭脳は田舎の大学生で無事に突破した。

これで合格出来なかったら俺は一生Ｏｒｚだっただろう。

なのはちゃんに至っては、最早高町家そのものを人類というカテゴリーに含めて良いものか、専門家に聞かなければ分からない領域にまで入ってきたので俺は考えることを放棄している。

兎も角俺はなのはちゃんと共にこの人生勝ち組コースが半ば確定している小学校に無事入学できた訳だ。

この学校は市内から広範囲に渡って生徒を募集している。

なので同じ市内といっても中には徒歩もしくは自転車で通うのも限界がある。

そこで学校では海鳴市内の至る場所に登下校用のスクールバスを待つためのバス停が設置されている。

俺となのはちゃんもその例に漏れず、バス組なので最寄のバス停に向かっている最中だ。

目的地についてからなのはちゃんと雑談をして数分がたった頃迎えのバスがやって来たので、俺となのはちゃんは運転手さんと他の生徒達に挨拶を済ませながらバスに乗り込む。

今日は何処に座ろうかと席を見渡すと後ろの座席から良く聴き慣れた友人の声が聞こえた。

「なのは、純、こっち席が開いてるから早く来なさいよ」

声のした方を振り向くと二人の少女が手を振っていた。

「おはよう。アリサちゃんにすずかちゃん」

俺が挨拶を交わすとなのはも俺の後に続いて二人に挨拶を交わす。

その後二人も俺となのはちゃんに挨拶を返してくれた。

この二人の少女は俺達が入学してから半月足らずで知り合った友達である。

最初に声を掛けてきた見るからに勝気な少女の名前はアリサ・バニングス。

名前を聞いてわかる通り外人さんだ。

本人いわく英語でも話せるそうなのだが産まれも育ちも日本なので基本的に日本語で話している。

ちなみにリアルツンデレだ。

もう一人の少女はアリサちゃんと対極的に物静かなおっとりした少女だ。

この少女の名前は月村　すずか。

普段から清楚な物腰で正に生粋のお嬢様だ。

だが見た目とこの上品な佇まいに騙されてはいけない。

すずかちゃんは学年一の運動神経を有しており、まともに相手が出来るのは精々運動が得意な最上級生の中でもほんの一握りだろう。

見た目から言えば、力のアリサに知恵のすずかといった印象を受けるが、実際はアリサちゃんの方が勉強の成績は上だったりする。

本当に型にはまらない子達で見ていて飽きない。

更にこれはなのはちゃんも含めてなのだが三人揃って美少女だったりする。

そんななのはちゃん達の横に俺が並んだとしたらどうだろう。

立派なモブキャラだ。

エースオブエース的なモブキャラに俺はなる。

ただでさえ地味という言葉を体現している俺だ。

一人位ならばまだしも、三人並べられれば俺の存在は、完全に世界

と同化し溶け込んでしまう事間違いなしなのである。

現に俺は担任の先生に入学してからこの一月半で三回も名前を呼び忘れられているのだ。

しかしこれだけは理解して欲しい。

俺は地味だが無個性ではないんだ。

単純に俺の周りの奴らのスペックが異常なほどに高いだけなんだよ。

今ではこんなに仲の良い三人組であるが出会いは意外とバイオレンスな物であった。

俺達の入学式が終わって一週間が過ぎた頃の事だ。

放課後になり帰ろうとした所なにやら教室のある一箇所が騒がしくなったのだ。

何事かと思い覗いてみるとなのはちゃんとアリサちゃんが取っ組み合いの喧嘩をしておりそれをすずかちゃんが慌てふためきながらおろおろとしている実にカオスな空間だった。

とりあえず俺は取っ組み合う二人の間に壁を作るように入り込み場が一瞬落ち着いた所ですずかちゃんが制止の言葉掛ける事でその場は収まった。

三人が大分落ち着きを取り戻した後俺が第三者として詳しくこうなった理由を聞いてみた所、

なのはちゃんいわく…アリサちゃんがすずかちゃんをいじめている様に見えたので止めに入ったとの事。

アリサちゃんいわく…本当はすずかちゃんとお話したかっただけなのだがどうやって話しかけて良いのかわからず物を借りる事で切っ掛けを作ろうとしていたとの事。

すずかちゃんいわく…話しかけてもらって嬉しかったのだが緊張してしまい過剰に反応してしまったとの事。

話しを聞いてみればただのすれ違いだったというだけの話だった。

その後三人は其々仲直りして今の仲良し美少女三人組となったのだ。

ちなみにその場にいて話の仲介役になった俺も事実上メンバーの一人に組み込まれたのだが担任の先生の行動を見て分かると通り俺はただのオマケであり所詮はしがないモブキャラだ。

「ねえ純君さっきから黙り込んでるけど、どうかしたの？」

「…え？ああ、ごめんねすずかちゃん。ちょっと考え事してただけだから心配ないよ」

先程からアリサちゃん達との出会いを思い出していたはずが、いつの間にか自分の今後の立ち居地と存在意義についての切実なテーマにすりかわってしまいそれが顔に出ていた様だ。

すずかちゃんは今も尚心配そうに俺の顔を覗き込んでくるので、俺は再度すずかちゃんに笑顔で何でも無いから大丈夫だよと告げる。

すずかちゃんは俺にいつも癒しを運んでくれる存在だ。

なのはちゃんとアリサちゃんは常時パワフルなスキンシップを敢行してくるので余計におっとり系のすずかちゃんと居ると心が和む。

俺はすずかちゃんの体から発せられる和みパワーに当てられてしまい無意識の内にすずかちゃんの頭を撫でてしまっていた。

我に返った時は既に後の祭りだった。

なのはちゃんに昔からやっていたクセとはいえ普通は同年代の女の子に軽々とやって良い物じゃない。

特にすずかちゃんはただでさえ引っ込み事案なのだ。

幾ら他の男の子より僅かばかりか知り合いである事で耐性のある俺だったとしても恥ずかしい事には変わりないだろう。

現にすずかちゃんの顔は真っ赤になっている。

俺は慌ててすずかちゃんの頭から急いで手を退けて全力全開であやまり倒した。

すずかちゃんは未だに顔を赤くしながらも笑って許してくれたのだが、それを横で見ていたなのはちゃんとアリサちゃんが物凄い形相で俺を見続けてきたので俺の胃が少し痛みを感じた。

その視線の迫力は何処か恭也君を彷彿とさせた。

恐らくは俺にすずかちゃんを捕られるとでも思ったのかもしれない。

この年頃は、同年代の同姓の友達が他の人と仲良く話していると嫉妬しやすいらしいからね。

もしかしたらこの三人とはもう少し距離を置いた付き合いをした方がいいのかも知れないのかなと考えながら俺はスクールバスの窓から外の景色を眺めることにした。

突き刺さるような視線による俺の胃腸の健康を護るために…

結果から言えば今日もいつも通り平々凡々な一日だった。

一つの出来事を除いては…

その一つというのが本日のなのはちゃんの二つ目のお願いである。

なのはちゃんは何を思ったのか今日は学校が終わるまで可能な限りなのはちゃん達三人の頭を平等に撫で続けなさいというものだった。

原因間違いなく今朝の出来事だと思われる。

俺がすずかちゃんの頭を撫でていた場面は不特定多数に目撃されている。

これでは変な噂が立つかも知れないのでそれを防ぐための作戦だそうだ。

はっきり言って俺のモブキャラスキルのおかげで噂になる可能性は皆無だと思うのだが、念には念を入れた方が良いという事なのだろう。

その友情に俺の目からは涙が零れた。

ついでに羞恥心で俺の胃腸もかなり痛んだ。

そんなこんなで俺は本日の学生のお勤めを終えて帰路についている所だ。

ちなみに美少女三人組は揃って習い事の稽古があるので珍しく俺は一人で登下校している。

今日の奇行のためか他の友達は俺に寄り付こうともしなかった。

友達がいないわけじゃないんだ。

今日は運が悪かった…ただそれだけなんだ。

俺は盛大な溜息を吐きながら自身の足を自宅に向けて動かす。

もうすぐ家も見える距離に差し掛かった所で俺は普段道端では見慣

れないものを見つけた。

それは一見してオモチャにも見える物体だった。

道に落ちていたため幾らか汚れているものの、とても細かい細部まで作りこまれた犬型のオモチャだった。

大人の手のひらサイズでメタリックシルバーの其れは今にも動き出しそうな程だった。

いやもしかしたら機械工学を勉強している学生が自作した本物のロボットに分類される物かも知れない。

ただそうなるとわからない物がある。

この犬のオモチャ？はその四つの足に携帯ゲーム機に見える物を抱え込んでいた。

とりあえず落し物は交番に届けるべきなので俺は交番に向かうため歩き出そうとするのだが数歩歩いただけでその動きを止めてしまった。

理由はなんてことは無い。

ただの好奇心だ。

何となくこのオモチャの正体が気になったのだ。

落し物なのだから一日位借りても良いだろうと俺は自分に都合の良い言い訳を付け加える。

それに薄汚れているから其れも掃除してあげよう。

その方が渡される警察官も落とし主も喜ぶはずだ。

俺は改めて大義名分を心の中で唱えてから、オモチャを抱えて家路に急いだ。

俺はこの時まだ何も知らなかった。

この選択が様々な運命の輪を変えていく結果になっていく事を…

# 第二話　動き出したかもしれない運命【前編】（後書き）

やっとフラグ的な物が立ちました。

## 第二話　動き出したかもしれない運命【後編】（前書き）

やっと主人公が変身します。

ちなみに次の更新は来週以降になると思います。

それでは少し長めですが楽しんでいただけると幸いです。

## 第二話　動き出したかもしれない運命【後編】

俺は今、自室で一つの謎に挑んでいる。

「これって結局何なんだろ？」

学校の帰り道で拾ったこのオモチャ？の正体を探るため、俺は試行錯誤を繰り返していた。

まずは汚れを綺麗に拭き落とす。

これでもしかしたら今まで目視出来なかった部分に、新たな発見をする事が出来るかもしれないからだ。

しかしこの作戦は失敗に終わった。

確かに見栄えは良くなったが、期待した様な変化は現れなかったからだ。

次にボディの溝部分を調べてみる。

最近のオモチャは完成度の高いものが多く、繋ぎ目などを上からはめ込み式のパーツ等で上から被せて隠すなんて事もするので油断できない。

暫くいじり倒してみたが、これも駄目だった。

だがこの犬型オモチャ？俺の力では動かせないが変形機構を備えている様なのだ。

それと使われている材質なのだが、見た目に反して軽いのだが、恐ろしいほどに頑丈だという事が分かった。

試したわけではではないがハンマーを振り落としても平気そうな程だ。

他にも思いつく限りの事を試みたんだがこれ以上は何も分からなかった。

とりあえず犬のオモチャはここまでにして次にこいつが抱えていたゲーム機？の様な物体を調べてみる事にした。

もしかしたらこれはこのオモチャ？のコントローラーという可能性もあるので期待大だ。

とりあえずサイズは丁度手のひらサイズで形状は俺の居た前世で流行っていたタッチペンがついた某ゲーム機と同じくらいだ。

形状も酷似している。

違いはボディの中央に見たことの無いロゴマークがついている事だ。

何処と無く英語のOか数字の0を変形させた様に見える。

マークの部分だけが黒で後の色は犬形オモチャ？と同じメタリックシルバーだ。

折りたたみ式になっていたので俺はそれを開いてみる事にした。

中には二つの大きめなスクリーンが取り付けられておりその両脇に幾つかのボタンが取り付けられていた。

ますます持ってあの某ゲーム機の様だ。

違いはタッチペンが無い事とボタンの形状だろうか？

俺は取り合えず適当にボタンを押してみることにした。

こういう類の物の起動スイッチは大抵が端に付いたレバーか、押しにくそうな小さなボタンなので、それを重点的に探してみる。

すると案の定、ボディの右側にそれらしき小さなレバーを見つけた。

俺は早速そのレバーを動かしたのだが、どうやら予想は的中したようで、先程まで黒一色だった画面が白い光を帯びた。

そこまでは予想の範疇だったんだが、そこから先は俺の予想を遥かに超えていた。

突然見たことの無い文字の羅列と、少なくとも日本人には発音が出来そうに無い機械的な音声が、テープの早送りをしているように聞こえてきた。

俺はその光景に言葉を漏らした。

「何なんだよこれって？」

俺が言葉を発した直後更に変化が起きた。

突然音声が聞こえなくなり画面に羅列された記号は俺の見知らぬ記号から、見慣れた日本語が五十音順に流れ始める。

『アラタナオンセイキコウヲシュトクイタシマシタ』

今度はゲーム機？から俺にも分かる言葉で機械的な音声が聞こえてくる。

『マスターニンショウガリセットサレテイマス。アラタニマスターセッテイノトウロクヲオネガイシマス』

言っている言葉の意味は良く分からないが様はこの音声の指示に従って操作をすれば良いって事なんだろうか？

『ジュンビガデキマシタラガメンノシタブブンニユビヲオシアテテクダサイ』

指紋認証が付いてるのだろうか？

俺は結構ハイテクなオモチャ？何だなと思いながら声の指示通りに人差し指を画面にくっ付ける。

『マスターシンキトウロクガカンリョウイタシマシタ。ゲンザイスベテノシステムガダウンシテイマス。
ゲンジョウサイキドウカノウナノハバディーシステムノミトナリマスガサイキドウイタシマスカ』

その音声が流れた後に下の画面にハイとイイエのマークが出てきた。

何かのシステムを起動させるかの確認てことだろう。

俺は迷わずハイを選択した。

『ニンショウカクニンシマシタ。コレヨリバディーシステムノサイキドウヲオコナイマス』

その音声が流れた後今度はさっきまで動く様子すらなかった犬型のオモチャ?が突然動作確認する様に間接部分を順番に動かし始めた。

その動作を暫く続けたあと更に音声が流れた。

『サイキドウヲカクニンイタシマシタ。イチブメモリーニハソンガミラレマスガドオサカクニンオヨビホカノシステムハイジョウアリマセン。コレニテショキドオササポートプログラムヲシュウリョウイタシマス』

動いたので次は操作説明かなと思ったんだがそのまま終わってしまった。

この後どうすれば良いんだろうと思いながら、俺は先程間接を動かしまくっていた犬のオモチャ?を見つめる。

『君がワタシのマスターか?』

今喋ったかコイツ?

落ち着け。

クールになるんだ板橋純。

これはきっとそういう音声が幾つか録音されてる物なんだよきっと！

『聞いているのか？マスター』

あれ？可笑しいな？

今このメタリックわんちゃんが俺の行動を観察して理解した上で、語りかけてきたように聞こえたんだが…

俺きっと疲れてるんだな、これは疲れから来る幻聴に違いない。

『言っておくがこれは幻聴ではなく紛れも無い現実だぞマスター』

俺の考えてる事まで読まれた！

『いやさっきから声に出ているぞマスター』

突っ込まれた上に駄目出しまで食らったよおい！

これは認めざるおえない様だな。

良いだろう。

俺のヘタレ転生者の全力全開をこのメカドックに見せ付けてやるぜ。

「え～メタリックカラーのお犬様。私ただの何処にでも居る様な、しがない一般市民なのですがいったいどういったご用件なので御座いましょうか？」

『気合を入れていたわりには物凄い低姿勢だなマスター』

うるさい！

なめるなよ！

こうやって瞬時に低姿勢になる能力が無ければ、俺は今頃お隣のシスコンお兄様に亡き者されている事間違い無しなんだからな！

確かに恭也君は手加減してくれるだろうけど、所詮はライオンがハムスターと戯れる様な力関係なんだぞ。

ライオンからすれば少し触った程度のつもりでも、ハムスターからしたら命を失いかねない一撃になるんだからな。

わかったか？このスクラップ駄犬が！

『ああ了解した。取り合えずマスターが現状パニックに陥っていることは理解した。ワタシはマスターに危害を加えたりしないから、まずは落ち着くことから始めようかマスター』

「さて、落ち着いた所で質問したいんだけどさ」

あれから十分ほどしてようやく正気を取り戻した俺は、取り合えず言葉というコミニュケーションによりこの謎の物体の真実を探るべ

く質問を開始した。

『取り合えずこれ以上突っ込みはしないが、答えられる範囲で答えようマスター』

「お前は何者なんだ？どうしてあんな道端で倒れてたんだ？」

『悪いが記憶メモリーの一部が現在閲覧不可能なため、すべての問いに答えられないがわかる範囲の説明でも良いだろうか？』

「ああそれで頼む」

俺の答えを聞いたメカ犬は一度首を立てに振ると了解したといって説明を始めた。

『まずワタシはこの世界で作られた存在ではない』

まあそこら辺は何となく納得できる。

明らかにこの世界の技術水準を越えている気がするからなコイツ。

『マスターの言葉で言う所の別次元からワタシはやって来た。やって来た理由なのだがまずはワタシの造られた経緯を説明させてもらおう』

「造られた経緯？」

『ワタシが造られた世界ではこの世界とは比べ物にならないほどに科学技術が発達していた。それと同時にこの世界には少なくとも…表向きには存在を証明されていないある技術が栄えていた。』

ある技術？

『それは身体エネルギーの技術転用。マスターの世界における気功やオーラ等と言われる物だ。ワタシのいた世界ではそれを科学技術と組み合わせて全く新しいシステムを完成させた。そのシステムの名はコンタクトフュージョンシステム、人間と機械の完全な融合だ』

俺は質問することも忘れて聞き入った。

メカ犬も質問が無いなら先に進めるぞと話しを再開する。

『このシステム瞬く間に世界中に広まった。それも当然のことだろう。このシステムを使えば誰でも超人的な力を得られる上に其々に異なった特殊な能力が得られるからな。このシステムのおかげでワタシの世界は更に発展した』

「それって良い事なんじゃないのか？」

そんなにいい世界なら、なんでこの世界にわざわざこのメカ犬がやって来たのかが分からない。

旅行にでも来て持ち主とはぐれたんだろうか？

『問題はここからだ。ここまでの出来事は全て仕組まれた罠だった。システムのコア部分の設計を行なった科学者は二人いたのだがその一人がシステムの中にあらかじめ暴走プログラムを仕込んでいたんだ』

「暴走プログラム？」

『ああ、システムの起動には強い身体エネルギー、オーラが必要になるんだがそれは人の感情や想いなどに深く関わっている。特に重要視されているの人の願いだ。科学者はそこに目を着けた。願いは暴走を起こし発動させた人間の理性を奪い、歪んだ形でその力を使い始める。やがてそれは更に高純度のエネルギーを生み出すんだ』

「何だよそれ…」

『科学者の本当の狙いはその高純度なエネルギーだった。奴はそのエネルギーを回収して何かをしようとしている』

「何かって何なんだよ?」

『分からない。ただこのまま放っておけばとんでもない事になるのは間違いない。そこでワタシが造られた理由が出てくるのだ。ワタシの製作者はコア部分を設計したもう一人の科学者だ。ワタシは彼を博士と呼んでいた。博士は誰よりも早くシステムの異常に気付き、それに対抗する独自のシステムを完成させた。それがワタシだ。ワタシのシステムはコンタクトフュージョンシステムを元に造られて入るが似て非なる物だ。私のシステムだけが科学者の仕組んだ暴走プログラムを破壊することが出来る』

「ち、ちょっと待ってくれよ」

俺は慌ててメカ犬の説明に割って入る。

『どうした? マスター』

「いやその話しが本当かどうか別として、そんなプログラムを唯一

お前だけが持ってるって言うんなら何でこんな別世界にいるんだよ？」

コイツの言っている事が真実なら、ますます持ってこのメカ犬がここに居るのはおかしい。

コイツがここにいる必然性が全く見当たらないんだ。

『その理由は簡単だ。科学者がマスターがいるこの世界にそのシステムを送り込んできたためだ。科学者は自分のいる世界のエネルギーだけでは不足と考え別次元に目を着けた』

「それがこの世界って事か？」

『その通りだ。博士はそれを知り、ワタシをこの世界に送り込んだんだ』

「じゃあその博士は今何処にいるんだよ。当然この世界に来てるんだろ？」

『残念ながら答えはＮＯだ』

「何でだよ。それっておかしくないか？」

絶対におかしいと思う。

唯一対策を立てられるのがその博士だけならば、このメカ犬と一緒に現場に来るのが確実だと思うんだが？

『それは無理なんだ。我々の世界では確かに次元を越えるシステム

が実験的に完成してはいるが、生身の人間はその時空移動に耐えられない。だから機械であるワタシが単独でこの世界にやって来たのだ』

話は何となく分かったがどうにも納得できない部分がある。

とりあえず今は分かる部分だけを聞いてみよう。

「お前がここに居る理由は分かったよ。それで何で道端で倒れていたんだ」

『すまないが其れは分からない。ワタシはこちらの世界に送られた直後からマスターに再起動して貰うまでの間システムがダウンしていたので情報が無いんだ。恐らくは次元を越える際の衝撃でメモリーの一部がショックを受けたのだろう。何分実験的な部分が未だに多いからな』

「それじゃあ次の質問なんだけどさっきから俺のことマ『キンキュウケイホウキンキュウケイホウ…』何だ?」

突然ゲーム機?から警報みたい音と音声が響きだした。

『どうやらこの近くでシステムが発動した様だなマスター』

「発動ってさっきの話の奴か?」

『ああそうだ。急ぐぞマスター』

「急ぐって何処にだよ?そもそも何で俺が…」

『詳しい場所はそのタッチノートに乗っている。それに説明している時間は無いぞ』

タッチノートっいうのはこのゲーム機？の正式名称だろうか？

俺は取り合えずメカ犬の言う通り二つ折りされているそれを開いて確認してみた。

「おい、この場所って…」

その場所は今日なのはちゃん達がお稽古をしている筈のピアノ教室だった。

俺は今全力全開で自転車を走らせている。

『そこを右だマスター』

「わかってるよ！」

自転車の前かごに収まっているメカ犬が道案内をしてくれる。

一応大体の道は把握しているが今は一分一秒が惜しい。

なのでメカ犬に目的地までの最短距離を計算してもらって自転車ですっ飛ばしているわけだ。

『後２００ｍで目的地だ気を抜くなマスター』

答えてる余裕は今の俺には無い。

そんだけ必死なんだよこっちは！

「何だよ、何なんだよこれ…」

それは正に惨状って言葉を表していた。

建物の至る所が重機の突撃でも食らったかのように抉られている。

周りには怪我をして蹲っている人や、それを助けようとするレスキュー隊の人に、逃げ惑う人達とそこかしこから漂う消炎の匂いで混乱を呈していた。

「うわあああああああああ」

この惨状の中、俺の目の前に文字通り人が吹っ飛んできた。

現実離れした光景に一瞬俺の頭がフリーズするが、何とか再起動させて吹っ飛んできた人を助け起こす。

吹っ飛んできた人は警察官だった。

「大丈夫ですか？一体何があったんですか？」

俺が警察官を助け起こしながら理由を聞きだすと、警察官は途切れ途切れになりながらも話してくれた。

「…ば化け、化物が…女の子達を…」

警察官はそれだけを呟くと意識を失ってしまった。

メカ犬が言うには命の心配は無いそうなので、俺はレスキュー隊の人に後の事を任せて警察官が吹っ飛んできた方向に走り出した。

目的の場所にはすぐにたどり着いた。

そこでは先程の警察官と同じタイプの制服着た人達が一斉に銃を向けている。

その標的には既に何発もの銃弾が命中しているのだろう。

しかしそいつは微動だにせず、ゆっくりと歩を進めている。

そいつの姿は正に異形だった。

ベースは人間なのだが、それは明らかに人間とは一線を画していた。

成人男性程の身長で、全身が灰色の金属で覆われ頭部の形状は蜘蛛を模している。

この惨状は全て奴がもたらした物だということは俺にでも簡単に想像できた。

『間違いない奴が反応元だ』

メカ犬がおれの隣で確信を得たように頷く。

そうだ、すっかり頭から抜け落ちていたけど、コイツが居ればあのメカ蜘蛛を如何にかできるんだった。

「なあ、お前ならあいつを如何にかできるんだろ？それなら早く如何にかしてくれよ」

『わかったと言いたい所だが、ワタシだけでは無理だ』

「どうしてだよ！？」

俺は予想外のメカ犬の言葉に思わず声を荒げながら聞き返した。

『少し落ち着けマスター』

「…ああ。ごめん、怒鳴ったりして」

『話を続けるが、マスターの家でも話したとおり、ワタシは奴らの対抗プログラムではあるが、やはり根っこの部分は同一のシステムなのだよ』

「何が言いたいんだよ」

『奴らが最大限力を発揮するのは如何いう状態かわかるかマスター』

こんな時に謎掛けやっている場合じゃないんだが、メカ犬の雰囲気がそれを許してくれそうに無い。

俺は仕方なく、家でのメカ犬との話を思い出しながら導き出した答えを言う。

「えっと人間と機械の融合で…おい、それって」

『マスターの考えている通りだ。ワタシにも同じ事が言える』

「じゃあ早くそれをしなくちゃだろ?警察の人の誰かに頼めば一人くら『マスター』どうしたんだよ?」

『今この場でワタシと融合が可能な人間はマスターだけだ』

「何だってんだよそれ?俺みたいなガキが少しくらい強くなった所で如何にかなるのかよ?」

俺は思ったことをそのまま返してみた。

確かに俺にもヒーロー願望位ある。

前世でも大の仮面ライダーファンだったからな。

でもそれと現実は違う。

今必要なのはヒーローオタクではなく、あの怪物と真っ向から戦える存在だ。

決して俺みたいなヘタレじゃない。

『正直わからない。だが、ワタシとマスター登録をしたのは君だ。

君以外では融合することは出来ない』

「なら俺以外の奴と今すぐにマスター登録って奴をすれば済む話じゃないのか」

『それは出来ない。詳しい話をしている余裕は無いが、少なくともこの場では無理だ』

「何だよそれ…」

『怖いのか？マスター』

「怖いのかって？当たり前だろう！今のこの惨状を作った張本人と真っ向から戦えなんて死にに行けって言っている様なもんだぞ！」

俺はメカ犬に再度怒鳴りつけた。

勝手すぎる。

成り行きで一緒に来た俺に勝てるか分からない命懸けの勝負をしろだって？

ふざけているにも程がある。

『…すまなかったなマスター。確かにマスターには戦う理由も必要性も無い事だった』

「メカ犬…」

『ただ最後に礼を言わせてくれ。マスターがワタシを起動してくれ

なければ、ワタシはこの場に駆けつけることすら出来なかったかもしれないのだからな』

メカ犬はそう言って俺に一礼すると、蜘蛛の化物の居る場所に駆けて行った。

俺はそれを半ば放心状態で眺めていた。

心の中でこのままで良いのかという迷いと、死に直面する恐怖の感情がせめぎあって身動きが取れない。

やがて化物蜘蛛の頭にしがみ付いていたメカ犬や警官達も吹き飛ばされた。

化物蜘蛛は再び歩き始める。

鈍足だが確実にその向かう先には…

「いやあああああああああ」

聞きなれた女の子の悲鳴が聞こえた。

「ちょっとこっちに来るんじゃないわよ！」

アリサちゃんが近くに落ちている小石を投げつけながら牽制している。

「なのはちゃん…」

すずかちゃんは自分も怖いだろうになのはちゃんを抱きとめながら

必死に気丈でいようとしている。

「・・・・・」

なのはちゃんは恐怖のあまり動けないでいるのか、震えながら僅かに唇を動かしている。

何なんだよこれは?

これはフィクションじゃないんだぞ?

何で俺の友達があんなわけの分からん化物に襲われなくちゃならないんだよ?

俺の中に迷いとも恐怖ともそして怒りとも違う言葉に出来ない感情が産まれた。

「…けて…たす…けて…助けてえええええええ純君!!!!!!!!!」

なのはちゃんの叫び声が木霊した。

何でなんだろう。

単純に強さで言うなら士郎さん達の方が圧倒的なのに、なのはちゃんはヘタレの俺なんかを呼ぶんだろう?

俺はいつの間にか走り出していた。

さっきまであんなに頭の中がぐちゃぐちゃになっていて、一歩も動

けなかった筈なのに、今は身体が羽みたいに軽く感じる。

そういえばこの感覚どっかで感じたことがあるな…そうだ。

俺が前世で、最後に何も考えずにトラックに突っ込んでいった時だった。

今思えば本当に無茶したよな。

結局それで死んだわけだしな。

でも、あの時ほど気持ちがスッキリした事も無かったけどさ。

俺は笑う状況じゃないと分かっていながらも唇が緩むのを止める事が出来なかった。

「おっ待たせー！！！！」

俺は渾身の力を込めて飛び蹴りを喰らわせる。

銃弾も効かないような化物だけど、バランス感覚はあんまり無い様で、子供の飛び蹴りでも何とかすっ飛んでくれた。

伊達に俺の脚力も、人外シスコンお兄様の襲撃をかわす為に鍛えられたわけではないみたいだ。

「純？」

「純君？」

「…純君なの？」

美少女三人組が、突然の展開にあっけに取られながら俺の名を呼ぶ。

そりゃビックリもするだろうな。

第一本来の俺は、こんな事をするキャラじゃ絶対にない。

「なのはちゃんが呼んでくれたから真っ先に駆けつけたんだよ」

とりあえず俺は軽口を叩いて見ることにした。

その台詞にアリサちゃんがバッカじゃないのと突っ込みを入れてきたのだが、その顔は笑顔だったのでいくらか恐怖を取り除くことは出来たのかもしれない。

「三人とも早く逃げて、ここは危ないからさ」

「確かにそうね。早くここから離れましょ」

俺の意見にアリサちゃんが肯定する。

なのはちゃんとすずかちゃんも無言だが頷いてくれた。

「え～と、悪いんだけど皆は先に逃げてくれるかな？」

「何でよ？こんなとこにいたら純も危ないわよ」

「そうだよ」

「何でそんなこと言うの純君」

三人が口々に抗議してくる。

当たり前だろう。

でも俺はここに残ってやらなきゃいけない事がある。

だからと言って今から三人に説明している時間も余裕ない。だから俺はそれっぽい事を言わなければいけない。

「実はここに来る途中で怪我をした警察官の人に頼まれたんだ。今ここに機動隊の人達が向かってるんだけどここに来た警察の人達は全員怪我で動けなくて詳しい場所に誘導できるのは怪我している警察官の人から誘導用の発信機を預かった俺だけなんだよ。だから俺は警察の人達をここまで誘導しないと」

勿論嘘だし、こんなんで騙されてくれるはず無いんだろうな。

「なによそれ？それが本当だと「大丈夫」しても…」

俺はアリサの返答を途中で強引に終わらせる。

本当にもう余裕が無いんだ。

「…本当に大丈夫なんでしょうね？」

「うん、大丈夫」

「はあー、分かったわよ。でも絶対に危ないことをするんじゃない

わよ」

「当たり前だろ。俺は史上稀に見るヘタレだぞ」

アリサちゃんを始め、三人とも笑っていた。

俺は三人がこの場所から遠ざかっていくのを確認すると、恐らく既にこの場所にたどり着いているだろう化物蜘蛛に声を掛ける。

「待たせたかな」

化物蜘蛛は無言でこちらに歩いてくる。

どうやらただ単に足が遅いだけらしい。

『マスター』

俺の足元にはいつの間にかメカ犬がやって来ていた。

「なあ、俺ならあいつと戦うことが出来るんだよな」

『ああ』

「俺以外じゃ駄目なんだよな」

『ああ』

「だったら力貸してくれよ…相棒！！！」

『ああ！！！』

俺の問いにメカ犬は答えてくれた。

この先のことは分からないが、少なくともこの瞬間は、この戦いの間だけは、俺達は一蓮托生のパートナーだ。

「で、どうすればいいんだ？」

『まずタッチノートを開くんだ』

俺は指示通りゲーム機？改めタッチノートを開く。

『次に左側の一番大きなボタンを押すんだ』

指示通りにボタンを押すとタッチノートから音声が流れる。

『バックルモード』

「うを！！？」

隣のメカ犬が突然変形し始めた。

そしてメカ犬は見事に銀色なベルトになり、自動的に俺の腹部に巻かれた。

『次はタッチノートを閉じて音声キーワードを入力して、そのままバックルの中央の窪みに差し込むんだ。それで融合が完了する』

「音声キーワード？」

『マスターの好きな言葉で構わない。今は未設定になっているから、今回使った言葉を正式採用する』

好きな言葉か…

それなら俺にはあれしかないだろう。

正直俺なんかが使って良いのか迷いもするが、いや…だからこそ俺はこの言葉で、少しだけ彼らの勇気を分けてらうんだ。

俺はタッチノートを閉じて、目の前の化物蜘蛛に掲げながらキーワードを口にする。

「変身」

キーワードを口にしてから、俺はメカ犬の指示通りに、バックルの中央部にタッチノートを差し込んだ。

『アップロード』

差し込んだ瞬間に俺は白銀の眩い光に包まれた。

そして次の瞬間その場に居たのは板橋純という人間ではなく一人の戦士だった。

「何じゃこりゃ？」

俺の初変身の最初の台詞はこれだった。

丁度自分の姿が見えるガラスがあったので確認してみたのだ。

全体的にボディはメタルブラックで覆われており、そこにバックルを中心として、銀色のラインが四肢に伸びている。

頭の額部分には同じく銀色でV字型の角飾りが取り付けられており、両目の部分には昆虫のバッタを模した様な大きな赤い複眼がある。

「これ、どこの仮面ライダーだよ？」

『仮面ライダー？特にこの状態での名称は無いのだが中々良い響きだな。良し、この形態の時はこれから仮面ライダーと名乗ろうマスター』

メカ犬の奴は、何か仮面ライダーという単語が気に入ったらしく勝手に決定してしまった。

まあ…別に良いんだけどさ。

「あ～メカ犬。一つだけ聞きたいんだけども良いか？」

『何だマスター敵は目の前に居るんだぞ。手短にしてくれ』

「俺って一応小学一年生なんだけどさ。何で変身したら大人サイズになってんの？」

これがテレビの中での話だって言うんならまだご都合主義で納得も出来るんだけど、実際に体験した俺としては物凄く自分の身体が心配なんですが。

『マスターこれは装着ではなくて融合した状態なのだ。マスターと

融合する際に遺伝子データを読み取り最もマスターが力を発揮できる身体データを擬似的に再現している』

「つまりどういうことだよ？」

『この姿の身長は若干の差異は出る可能性はあるが、約十数年後のマスターの姿ということだ』

もはや今日は驚きの連続過ぎて驚く気もうせた。

「はあ、とりあえず納得したよ」

おふざけはここまでにして、ここからは真面目にいってみよう。

それじゃ、とりあえずやってみますか。

「いくぜメカ犬。サポート頼むぞ」

『了解だマスター』

俺は全速力で化物蜘蛛に駆け寄り、その速度を乗せたまま右拳を叩き込む。

拳銃には蚊がさした程のリアクションもしなかった化物蜘蛛が、初めて痛みという感情を垣間見せた。

この攻撃で俺は完全に敵と見なされて、蜘蛛も反撃をして来るが、俺はそれをことごとく避けきった。

『マスター本当に戦うのは初めてなのか？素人の動きには見えない

ぞ。特に攻撃の裁きかたなど秀逸だ』

メカ犬が賞賛するが、俺からしてみればこれくらいは出来て当然のことだ。

攻撃の裁き方が下手だったら俺は今頃お隣さんのシスコンお兄様に殺されている。

というか今日の俺って今の所、恭也君のおかげで生き残ってる？

感謝して良いのか恨めば良いのか分からなくなってきた。

「うおおりゃああ！！！」

俺は化物蜘蛛の攻撃をかわした瞬時に、カウンターで蹴りを叩き込んで吹き飛ばした。

『そろそろけりを着けるぞマスター』

「けりを着けるってどうやってだ？」

『暴走したシステムと素体となった人間を分離させてプログラムだけを破壊する。今からやり方を説明するから指示通り頼む』

「分かった」

俺がメカ犬の声に頷くと、メカ犬は説明を始めた。

『まずはバックルからタッチノートを取り出して開くんだ』

俺はメカ犬の指示にしたがって、バックルからタッチノートを引き抜いて開いた。

「開いたぞ。次はどうすれば良い？」

『次は画面左の緑色のボタンを押せ』

指示通りにボタンを押すと、下の画面に俺の全体図が表示された。

『所でマスターはキックとパンチどっちの方が得意だ？それと右利きか、左利きか？』

「どっちかと言えば蹴りかな、あと一応は両利きだぞ。それがどうかしたか？」

『それなら取り合えずキックでいいだろう。マスター、画面の右足部分をタッチした後、もう一度バックルにタッチノートを差し込んでくれ』

「あ、ああ、分かった」

俺は取り合えずメカ犬の言うがままに操作して再度タッチノートをバックルに差し込んだ。

『ポイントチャージ』

差し込んだ瞬間に電子音声が聞こえてきた。

同時にバックルから白い電気の様な物が流れて、それがボディの銀色のラインを通って右足に集約する。

光を纏った右足が物凄く熱い。

『その右足を思い切り叩き込むんだマスター。それで決着が着く。所謂必殺技といった所だ』

なるほど、必殺技ね。

それじゃ、ご期待に添えないとな。

「こいつで決めるぜ」

俺は化物蜘蛛を視点にして大きくジャンプした。

「ライダーキック」

右足から放たれる光を纏いながら、俺は急降下して全力全開の蹴りを叩き込んだ。

化物蜘蛛は爆発四散してその場所には、気絶したスーツを身に纏った初老の男性がいた。

恐らくこの人が化物蜘蛛の素体になった人なのだろう。

とりあえず呼吸はしているので心配は無さそうだ。

安心して周りを見渡すと男性以外にもう一つ発見した。

「ビー玉？」

エメラルドグリーンに輝くそれは、二つに割れているものの確かにビー玉の様に見えた。

『それが暴走システムだ』

俺がそれに触ろうとした瞬間メカ犬がそう言い漏らした。

思わず視線をバックルに向けてしまったが、もう一度先程のビー玉に視線を戻すとそれは跡形も無く消えていた。

とにもかくにも、こうして俺の戦いは一先ず幕を閉じたのである。

戦いを終えて俺が安全地帯に戻ってくると、三人組が俺に一斉に飛び掛ってきて抱きつかれた。

その後三人は心配したんだからと泣きまくってしまったので、俺は学校でしたように三人が泣き止むまで頭をなで続けた。

俺は今、なのはちゃんをおんぶしながら家路に着くため歩いている。

乗ってきた自転車があのドサクサに紛れて紛失してしまったからだ。

アリサちゃんとすずかちゃんは家の迎えが来るまで待つそうだ。

一緒に乗せてきてもらえばよかったとも思うのだが、我が家は二人の家と比べてここからそんなに離れてないし、道路の復旧作業が少し掛かるそうで結局徒歩になったのだ。

メカ犬は暫く現場に残って調べ物をしたいそうなので現在別行動中だ。

そしてなのはちゃんをおんぶしている理由なのだが、これは本日三つ目のお願いって奴だ。

なのはちゃんは俺の背中で気持ち良さそうに眠ってらっしゃる。

「全く、とんだ甘えん坊将軍なんだから、なのはちゃんは」

「…純君」

なのはちゃんが俺の名前を呼んだ。

不味い、もしかして起こしちゃったかな。

肩越しになのはちゃんの顔を覗き込むが、相変わらず規則正しい寝息を立てている。

「ただの寝言か」

俺はやれやれと再び前を向いて歩き出そうとした所、またしてもなのはちゃんの寝言が聞こえてきた。

「純君…大好きだよ…」

満開の花が咲く様な笑顔がそこにはあった。

「俺も大好きだよ、なのはちゃん」

心なしか、なのはちゃんの体温が少し上がった気もするが気のせいだろう。

恐らくは今をもって浴び続ける、夕日のせいに違いない。

俺はなのはちゃんを抱え直すと、またゆっくり家路に向けて歩き出した。

俺が仮面ライダーなんてなれるわけが無いって今でも思うけれど、それでも今日この笑顔を護りきったのは確かに俺なんだなって、少しだけ自身を持つことが出来た。

そんな気がする。

## 第二話　動き出したかもしれない運命【後編】（後書き）

アイデアなどあると感想に書いてもらえたら嬉しいです。

## 第三話　戦う覚悟がヘタレにあるか？【前編】（前書き）

お久しぶりです。

投稿してから3日程で１００００アクセスを超えていたのでビックリしました。

そんな訳でお話の続きです。

楽しんでいただけると幸いです。

# 第三話　戦う覚悟がヘタレにあるか？【前編】

「それじゃあまた後でね。純君」

「うん。また後でね、なのはちゃん」

俺はなのはちゃんに手を振りながら、なのはちゃんが高町宅の玄関に入って行くのを見送った。

なのはちゃんが玄関の扉を開けて家の中に入った事を確認した俺は、手を振るのを止めて、高町宅のお隣さんである我が家に帰るべく歩き出した。

メカ犬と出会って、成り行きの中命を賭けて戦ったあの日から丁度一週間が経った。

現在は学校の下校途中であり、今は先程まで一緒にいたなのはちゃんを丁度見送った所だ。

本来なら今日はなのはちゃんは習い事があるため、一緒に帰ることは無いはずなのだが、その習い事であるピアノ教室があの化物蜘蛛に半壊させられてしまったので、今現在も復旧作業中なのである。

そのためなのはちゃんを始め美少女三人組は本日のお稽古はお休みという事になり、一緒に下校して来たというわけだ。

ちなみに俺はあの戦いの日以来メカ犬とは会っていない。

調査をしに行くと行って別れてから全くの音信不通だ。

タッチノートも捜査をする上で情報分析や何やらで必要になるというのでメカ犬に渡してある。

まあ、あれは元々俺の物ではないし俺が持っていても仕方の無いものなので別に構いはしない。

一度ぐらいは俺の前に姿を現すと思っていたがこの様子だとそれも無さそうだ。

マスター登録が如何とかで俺しか変身出来ないという事をメカ犬は言っていたけど、もしかしたら既に新しいマスターを見つけたのかもしれない。

ほんの一時とはいえ、共に命懸けで戦った仲なのだから一言もないという事に少しだけ寂しさを感じる。

事情が事情だけに仕方がないのかもしれないが、それでもだ。

だからと言って俺自身、これからも一緒に戦ってくれと言われても、即答ではいとは答えられない。

メカ犬もそのあたりを察してくれたのかもしれない。

時間が経てばあの日のことも昔の思い出の一つになって何時かは忘れていく事になるだろう。

今にして思えばあれは全部が夢だったんじゃないかとすら思えてくる。

もしかしたら仮面ライダーの番組が存在しないこの世界に転生した俺に、神様がくれた小さな奇跡で一度だけ仮面ライダーに変身させてくれたのかもしれない。

多くの損害や怪我人が出た中でそんな事を思うのは不謹慎かとも思うが、不幸中の幸いにも死人は出ていなかったし、なのはちゃん達もあれ以来蜘蛛嫌いになった以外は後遺症は無いそうだから、少しだけ思う位は許してもらいたい。

俺はそれだけ根っからのライダーファンなのだ。

一週間が経った今もまた化物が出たという事件は一切無いし、俺の周りは至って平和だ。

何となく物思いに耽っていながら歩いていたら我が家の玄関にたどり着いていた。

高町宅の様に道場がある訳ではないが、一般水準の一戸建てとしたら中々の物件である。

俺は今では既に見慣れた玄関に足を踏み入れ扉を開く。

まだ夕方にもならない時間帯ではあるけれど、専業主婦である母さんはいつもこの時間には家に居るので鍵は掛かっていない。

やはり今日も変わらず母さんは家に居たため扉は一切の抵抗をする事無く開いた。

俺は家の中に入ると、今現在家の中に居るであろう家族に帰ってきたことを伝えるために声を掛ける。

「ただいま。母さん」

「あら、お帰り純」

程なくして廊下の奥から、我が家の家族の一人、転生した現在の俺の母親でもある女性が顔を覗かせる。

「もう少ししたら、なのはちゃんが遊びに来ると思うから」

俺はこれから我が家に頻繁にやって来る来訪者が今日もやってくる事を母さんに告げてから、制服から私服に着替えるため自分の部屋へと移動を始める。

俺と母さんの間で、帰り際に良く交わされる会話だ。

普段ならここで母さんが、

「あら、それじゃあお菓子か何か準備しておくわね」

と言って台所に向かうのだが、今日はいつもと違う台詞が返ってきた。

「あ、ちょっと待って純」

呼び止められたのだ。

このパターンだと何かしらの用事だろうか。

恐らくは留守番かお使いかなと予想しながら俺は母さんに返事を返

す。

「如何したの？母さん」

「今ね、純のお客さんが来てるのよ」

「お客さん？」

「ええ、純が帰ってくる少しだけ前にいらしてね。もうすぐ純も帰ってくる時間だったから純の部屋にお通して待ってもらっているのよ」

通常であれば、平凡な小学一年生である俺に用事で訪ねてくる人物等は友達以外は殆どない話なのだが、最近の俺にとってはそんなに珍しい話でもなかった。

その理由は一週間前のあの化物騒ぎだ。

あの事件は各種メディア、マスコミの興味を強く引き大々的な調査が行なわれた。

なので俺を含め、あの場に居た殆どの人達の所に当時の詳しい状況をインタビューしたいと、テレビ局のレポーターや新聞若しくは雑誌の取材記者等がこぞってやって来た。

最初の３日は連日揉みくちゃにされそうな勢いだったが、それを過ぎると情報が纏まったのか似たような意見ばかりなのでアプローチを変えたのかめっきりこなくなった。

俺も勿論色んな事を質問されたが、メカ犬のことは喋らなかった。

別に隠し事をしようと思った訳ではないのだが、子供の俺が言った所で誰も信じる訳がない。

せいぜい三面記事の隅っこか、その週刊号のゴシップ記事を多少騒がせる位だろう。

そんな経緯があるので俺にお客が尋ねてくるのは、既に頻繁とは言い難いが有り得ない事ではなのである。

俺は母さんに分かったよと一言返事を返してから、再び自分の部屋に向けて歩き出した。

自室の部屋の前にたどり着いた俺は軽く二、三度扉をノックしてお待たせしましたと言いながら扉を開けた。

・・・・・・。

そしてそのまま扉を閉めた。

俺は扉の前で考えを巡らせた。

今俺は何を見た?

あり得ないと呟きながら俺の脳裏に一つの考えが浮かぶ。

もしかしたら先程俺の目に入ってきた光景は何かの見間違いなのではと思い、今度は静かにゆっくりと扉を少しだけ開けてその隙間から室内の様子を再度確認した。

・・・・・・。

そして再び扉を静かに閉じた。

あれ？おかしいな。

まだ幻覚が見えるよ。

やっぱり俺疲れてんのかな？

まずあれがお客なのか？

母さんもなんであんなのをお客さんだと言って平気で迎え入れてるんだ？

ありえないだろう？

母さんが変なのか、それとも俺が変なのか、そもそもこの世界が狂っているのか、俺は壮大なるテーマに答えを出すべく考えを巡らせる。

だがその答えは見つからなかった。

いつまでも答えのない命題に時間を取られる訳にもいかない。

俺は一旦この考えを頭の中の押入れに無理矢理叩き込んで、思考を切り替える。

俺が今すべき事は目の前にある現実を見据えた上で正しい行動をする事なのだ。

俺は部屋の前で大きく深呼吸をして気合を入れ直して、再三に渡り扉を開けて自室に足を踏み入れた。

「何やってんだお前は？」

俺は母さんがお客さんと言っていた、俺の部屋に居る存在にその言葉を浴びせた。

大きさは平均的な成人男性の手のひらに収まりそうなコンパクトサイズ。

全身の彩色がメタリックシルバーで彩られており、その形状を一言で表すのならば犬が最も相応しい。

そいつは俺の部屋の中心で、座布団を下に敷いた状態で礼儀正しくちょこんとお座りしていた。

『戻るのが遅くなってすまんなマスター。所で先程から部屋の出入り口を連続開閉していたのはマスターの宗教上の決まりか何かなのか？』

一週間ぶりの再会で奴が俺に言った言葉はそんなどうでもいい事だった。

「煩い。ただ単に己の現実から少しだけ目を背けていただけだ。それと俺は宗教には入信してなんかいないぞメカ犬」

俺はとりあえずそのメカ犬の言葉に突っ込み返した。

「さっきも言ったけど何でお前が俺の家に居るんだよ?新しいマスターを見つけたんじゃなかったのか?」

俺は改めてメカ犬に質問をする。

『うむ?何の話だ。ワタシのマスターはマスター以外にはありえんではないか。そもそもワタシはマスターに調べることがあると連絡して別行動をしたのだが、何か不明な点でもあったか?』

「いや、一言だけそう言ってタッチノートも一緒に持って一週間も姿を見せなけりゃ、もう二度と会えないもんだと思うだろうよ」

メカ犬は俺の言葉を聞いてから暫く首をキュイキュイと金属音を鳴らしながら動かした後に言葉を発した。

『そうか。どうやら誤解をさせてしまったようですまないなマスター。しかし調べることが多くて今日まで此処に戻ってくることが出来なかったのも事実なのだ』

メカ犬はそう言うと、再びすまないと言って頭を下げた。

メカ犬にも悪意が有った訳ではない事は態度を見るからに明らかではあるし、俺も元からそのことに対して攻める気はないので許すから頭を上げてくれとメカ犬に言った。

「その件に関しては一旦置いておくとして、なんでお前がお客さん扱いで俺の部屋に居るんだよ?」

他にも言いたい事や聞きたいことが山ほどあるが今の俺が気にしている最大の謎はそこだ。

こういった話では、セオリー上帰ってきたら既に居たとか、窓を叩いて存在を知らせるとか、兎に角他の家の住人とは接触しないでコンタクトを図ろうとするのがお約束じゃないんだろうか。

『それは勿論玄関前で呼び出し用のチャイムを鳴らした後に、マスターの母殿にこちらの用件を話したからだ。何も問題はない』

問題有りまくりだろう。

まず家のチャイム鳴らしたのがメカ犬な時点で常軌を逸している。

俺がメカ犬に再度突っ込みを入れようとした所で、部屋の扉から母さんの声が聞こえた。

「純、ちょっと入るわよ」

そう言うと母さんは部屋の扉を開けて入ってきた。

その手には平たい木製のお盆が握られており、その上にはコップに注がれたオレンジジュースが一つと…

何故か乾電池が乗せられていた。

「はい、どうぞ」

母さんは俺の目の前にオレンジジュースの注がれたコップを置き、メカ犬の前には乾電池を置いた。

その様子はまるで粗茶ですがと言いながら渡すような光景で、あま

りにもそれをナチュラルにこなす母さん。

メカ犬もそれをまるで、接客のマニュアルでも見ながら行なっている様な対応をしながら、二本の前足で器用に乾電池を掴みこんでメカ犬自身の頭部に近づける。

するとバチバチと下敷きに静電気が発生した時に鳴る様な音を立てながら黄色い光をメカ犬の頭部と乾電池の間で発生させる。

何なんだこの物体??

マジ怖いんですけど!?

やがて発光現象と謎の怪奇音が収まりメカ犬が母さんに話しかける。

『結構なお手前で』

「あらあら、ご丁寧に。御粗末様です」

俺は何処か異次元にでも迷い込んでしまったのだろうか。

先程以上の深い思考の谷底に意識が持って行かれそうになったが、俺はそれを何とかギリギリで回避して母さんの腕を掴んで一旦部屋を出る。

「ちょっといいかな母さん?」

「如何したの純?駄目よあんまりお客さんのワンちゃんを待たせちゃ」

ワンちゃんって…

そんな事より母さんに聞いて置かなくっちゃいけない事がある。

「今はそんな事良いんだよ。それより母さんは何とも思わないの？」

「何ともって？」

「いや、あいつ明らかにおかしいだろ。身体全身フルメタルのシルバーカラーで喋るんだよ」

普通は驚く位するだろう。

「そうね。私もビックリしたわ」

一応母さんも俺が表情を読み取れなかっただけで驚いてはいるらしい。

俺は少しだけその事実を知ってホッと胸を撫で下ろす。

「最近のオモチャって進んでるのね。会話まで出来ちゃうなんて本当にビックリしたわ。私は最近のオモチャってあんまり詳しくないから全然知らなかったわよ」

なん…だと。

あのメカ犬、母さんにどういう説明しやがった？

それから母さんの話を要約すると、どうやらあのメカ犬は自分の事をオモチャ会社の新しい最新作で、俺の家には懸賞で当選したので

プレゼントとしてやって来たのだと説明したらしい。

母さんはそのことを俺に説明した後、あらそれじゃあお客さんじゃなくて新しい家族ねと今更のように言って、今夜は新しい家族が増えるお祝いにご馳走作らなきゃとテンションのボルテージを上げながら台所に向かっていった。

俺はもはや何も考えまいと、この件に関して考えることにそっと蓋をして、メカ犬が待つ部屋に戻ることにした。

「それじゃ改めて、色々聞きたい事があるんだけど良いか？メカ犬」

『ああ何でも質問してくれて良いぞ。マスター』

部屋に戻った俺は早速メカ犬に聞きたいことを聞いてみる事にした。

「まずこの一週間でお前は何を調べてきたんだ？それとこれから先どうするつもりなんだよ？」

『うむ、まずは順を追って説明していく事にしよう。最初に説明することはワタシがこの一週間で調べていた事についてだ』

そう言ったメカ犬は先程まで座っていた座布団を捲り上げてその下からタッチノートを引き摺り出して俺に持つように指示してきた。

さっきから無いと思っていたらこんなとこにあったのかよ。

俺はメカ犬の指示した通りタッチノートを手に持つ。

するとメカ犬は俺の腕に飛び乗り、俺の腕の上からタッチノートを

操作し始めた。

画面には地図の様な図面が表示された。

何処かで見たことがあるなと思いながら見ていたのだが暫く眺めていて俺はこの図面が何を示しているのかに気付いた。

「海鳴市の地図か？」

『その通りだ』

メカ犬が俺の言葉に肯定した。

するとメカ犬は続いてタッチノートの操作をし始める。

またしても画面が変わり今度は日本の全体地図と思われる画面が表示される。

地図帳等に掲載されている形と大差ない。

唯一違う部分をあげるならば、地図のある場所が、全体がライトグリーンで表示されている中でその一定の場所だけが赤く表示されていることだ。

その場所に俺は心当たりがある。

「この赤くなっている場所ってもしかして…」

『ああ、マスターの考えている通り、赤く表示されているのは海鳴市全体だ』

「これが一体なんだって言うんだよ？」

『これはコンタクトフュージョンシステムの捜索用レーダーだ。システムはここ海鳴市全体にばら撒かれている』

今とんでもないこと言ったぞ、このメカ犬。

『システムがこの世界にばら撒かれたのはワタシがマスターと出会う約3日前と調査の結果判明した。ばら撒かれたシステムの数は次元転送の残留磁場等から計算した結果、少なくとも百以上存在する』

俺はメカ犬の言葉を聞いて戦慄する。

つまり少なく見積もったとしても、あの化物蜘蛛みたいな奴がこの海鳴に百体以上潜んでるって訳だ。

「でも、俺達が戦った日から一週間は経つけどあの日以来、化物が出たなんて話どこからも聞かないぞ？」

『うむ、その事なんだが本来はあのような短時間で、大きな身体変化が発現することは無い筈なのだ』

「如何いう事だよ」

『個人の願いやオーラの総量などでもかなりの個人差が出てくるが、肉体が変化するまでには三日という期間はあまりにも短すぎる。例外はあるが本来ならばまず有り得ない事情だ』

「じゃあ、あの時俺達が戦ったのは一体何だったんだよ。メカ犬の

世界はどうなってるか知らないけどこの世界には少なくてもあの姿で日常生活送っている人類は存在しないぞ？」

あんな人間と蜘蛛が超融合した存在が外で健康の為にジョギングとかしていたりしたら、心臓の弱い人は見ただけで心停止する可能性すらあるぞ。

『あれは例外中の例外だ。既に現物は完全に破壊してしまった為、確認することは出来ないが恐らくはシステムの制御装置が故障して誤作動をしたのだろう』

「誤作動を起こした？」

『うむ、その証拠にたとえ姿が変わったとしても人語を喋ることは可能な筈だし、使い続ければ別としてすぐに人間の理性が全て失われることはない。何よりあのホルダーは個々に備えている筈の特殊能力を使っていなかった。本来ならばまず能力が発現できるようになり、その後から少なくても5日は経過しないと肉体変化を起こす事は不可能だ』

「つまりあの段階で理性が無くなって能力が使えないのに、身体だけが化物になってたからメカ犬は変だと思った訳か」

『その通りだマスター』

メカ犬は首を縦に振りながらそう告げる。

「ところでさっき言ってたホルダーって何だ？」

俺は先程のメカ犬の説明で出てきた聞き慣れない単語について聞い

てみた。

『ホルダーとはシステムを所持し使用する者の総称だ。本来なら特殊技能を扱える様になった人物を指す使い方をされていたが、今では寄生されている状態を指す言葉として使われる様になってしまった』

嘆かわしい事だとメカ犬は呟く。

「それでお前は、システムの所在を掴むためにこの一週間の間、捜査を続けてきたって事か」

『ああ、だがシステムを回収することは出来なかった。システムが発動してホルダーが力を振るえば現在地を把握できるが、所持しているだけでは待機状態の様な物だ。それでは地域を特定する事までなら絞り込めるが、それ以上は直接対峙でもしない限り不可能に近いと言える』

「なるほどな。それでこれからお前はどうするつもりなんだ？このまま放って置く事はしないんだろ」

メカ犬がこの一週間で捜査したことに対して大体の納得を得た俺は、個人的にもかなり気になるこれからの方針を聞いてみる事にした。

しかしなるべく考えない様にはしているのだが、物凄く嫌な予感がする。

『そのことを含めて今一度マスターに頼みたい。暴走プログラムを破壊できるのはワタシだけだ。そしてワタシを扱うことが出来る人間はこの世界ではマスターただ一人、このまま見過ごし続ければマ

スターの世界もワタシの居た世界もとんでもない事になるのは間違いない。だから無理を承知で頼む。ワタシと共に戦ってはくれないか』

メカ犬は俺の顔を一点に見つめながら淀みなくそう言い放った。

悪い予感的中だ。

確かに俺はあの時、覚悟を決めてメカ犬と共に、正に命懸けで戦った。

でもそれは、その時それ以外の選択肢が無かったからで今は状況が違う。

「なあ、あの時は確かにそれ以外に手が無かったし、利害が一致したから俺も戦ったぜ。でも今は違う手段が取れる筈だろ」

そう、ただ一度俺は実践を経験し勝利を納めはしたが、所詮はそれだけの戦闘に関して言えばただの素人だ。

「俺は所詮ただの無力な子供だ。それに今はあの時みたいな緊急事態じゃないんだから、そのマスターの再登録って奴に多少時間が掛かったとしても、俺よりも戦いになれている大人にマスターになる様に頼んだ方が安心だろ」

少なくともヒーローオタクよりも、戦闘のプロに任せた方がメカ犬にとってもメリットは大きい筈だ。

何ならお隣の超人三人集の誰かに頼んでも良いと思う。

あの人達の内二名ならば生身でも真っ向勝負出来そうな気がする。

まあ、頼むとしたら恭也君だろうな。

士郎さんは退院したとはいえ未だに怪我が完治してない。

美由希さんは一応女の子だしそれに今年は中学三年生で受験生だ。

あまり負担は掛けたくない。

俺がこれからの指針について考えを巡らせているとメカ犬がゆっくりと喋りだした。

その内容は俺の先程までの考えを根底から覆す物だった。

『すまないマスター。それは無理なんだ』

「え？」

『確かにマスターの再登録をすること自体は不可能ではない。しかし今はその方法を取ることは出来ない』

「どういうことだよそれ？」

俺は一瞬自分の耳を疑った。

だが俺はメカ犬の言った言葉の意味を知らなければいけない。

だから俺は聴きたく無いと思いながらもその真意を確かめるためにメカ犬の答えを待つ。

『マスターの登録抹消及び再登録を行なえる人物は、ワタシの製作者である博士だけだ。しかし博士はこの世界には居ない。逆に現状ワタシが元居た世界に帰る手段もない』

俺の考える中でも最悪に近い答えだった。

俺は今再び選択を求められている。

今度は一時の感情の昂ぶりで如何にかなる類の物じゃない。

命を賭して戦い続ける覚悟。

俺が昔、テレビ画面越しで観てきた彼らが通ってきた道。

素直に彼らを尊敬した。

憧れを抱いていた。

だからこそ俺は迷う。

俺に彼らの様な覚悟を持って戦い続けて、大切な何かを守り続ける事が可能なのかと。

メカ犬は何も言わずただ俺の答えを待っている。

出会ってからそんなに時間は経っていないが、それでも俺は何となくメカ犬の考える事が理解できる。

たとえ俺が戦う事を拒否したとしても、メカ犬は俺を攻めることは

しないと思う。

それどころか無理だと理解した上でも、一人で戦いの場に赴くだろう。

それで良いのだろうか。

良いわけ無いと頭では理解している。

でもそれを弱い俺の心が否定してくる。

俺はそれから考え続けたが、結局答えにたどり着く事は叶わなかった。

だから俺は考える事を放棄する。

思った事をそのまま口にしよう。

それが俺の嘘偽りない答えになる筈だ。

「…メカ犬、俺さ、やっぱり戦う事なんて…」

『マスター…』

俺は激しい運動をした訳でもないのに、カラカラに乾いた喉で一つの答えを搾り出す。

「戦う事なんて「純君遅くなってごめんね。遊びに来たよ～！」よ？」

何の前振りも無くなのはちゃんが部屋に襲来した。

俺は今になって、そういえば遊ぶ約束をしていた事を思い出した。

なのはちゃんは俺とメカ犬のシリアスムードを自覚しないままに、しかしそのある意味一つの世界とも言える事象を見事なまでに破壊した。

全く似ても似つかない筈なのに、なのはちゃんの背後に薄っすらとマゼンタ色の世界の破壊者が見えた気がするのは、きっと疲れているからなんだろうなと俺は思った。

## 第三話　戦う覚悟がヘタレにあるか？【前編】（後書き）

変身は次話になります。

## 第三話　戦う覚悟がヘタレにあるか？【後編】（前書き）

またしても無謀ながらに連続投稿です。

また無駄に長いですが楽しんでいただけると幸いです。

# 第三話　戦う覚悟がヘタレにあるか？【後編】

なのはちゃんの突然の来襲で、俺とメカ犬のシリアスな話は一旦打ち切りとなった。

メカ犬も答えは後で良いと、俺だけに聞こえるような小さな声で呟いていた。

そんな訳で今現在、俺の目の前でなのはちゃんとメカ犬が互いに自己紹介を行なっている。

「始めまして。私立聖祥大附属小学校一年生の高町なのはです。なのはって呼んでね犬さん」

『うむ、宜しく頼むぞなのは譲。ワタシはオモチャ会社の新製品の犬型オモチャだ。今日から板橋家の一員となった』

「宜しくね。私のお家は純君のお隣さんなんだよ」

『そうか。なのは譲はマスターと同年代なのだな。今もこの家に訪問しに来たという事は仲が良いのだろうな』

「マスター？」

なのはちゃんが首を傾げる。

『マスターとは、なのは譲が呼んでいる純君の事だ。そうだな…ワタシとマスターの関係は、ワタシを本物の犬とするならば、マスターは飼い主と言った所だ』

「へ～そうなんだ」

傍から見て思うがやっぱりこの光景は異常に見える。

俺とメカ犬の会話ももし他人が傍観していたとしたら今俺が感じている様な見え方になるんだろうか？

いや、なのはちゃんの様な美少女が小さな動物なんかに話しかけている所なんて微笑ましいものだろう。

人によっては大金を払ってでもその両目に映像を刻み込みたいと言い出す輩が続出しそうだ。

なら俺はどうだ？

恐らくは白けた目線か痛い何かを哀れむ視線、いやもしかしたらとてつもなく慈愛に満ちた最大級の生暖かな目線にその身を晒す事になるかもしれない。

しかしそれすらも序の口で、まさかの伝説の黄色な救急車が登場して俺を連行するなんて未来が待ち受けている可能性すらある。

これ以上の想像は俺の精神的な何かを失うと思い至ったので、俺はメカ犬となのはちゃんの会話に混ざろうと少し離れた位置から近くに寄った。

この後二人プラス一匹？でトランプをしたりして遊んだ。

つうかメカ犬よ。

お前はナチュラルにカードゲームまでこなしているが、ハッキリ言って異常な事極まりないぞ。

なのはちゃんもなのはちゃんで全くこのメカ犬の存在のあり方を気にした様子も無く共に遊んでいる。

確かに高町家は既に人外魔境と言える場所であり、その中で生活を送るなのはちゃんからして見れば喋るメタルな犬など常識の範囲内に余裕で収まってしまうのかもしれない。

もはや今の俺にできる事は乾いた笑い声を上げながらなのはちゃんと共に遊びに興じる事のみだろう。

その後暫く遊び続けたのだが、突然なのはちゃんが心配そうな顔をして俺に話しかけてきた。

「ねえ純君。何だかさっきから少し元気がないみたいだけど何かあったの？」

俺は驚いた。

確かに俺はなのはちゃんが来るまでにメカ犬との会話でかなり悩んでいたが、なのはちゃんが来てからはこのことは後回しにしようと考えない様にして来た。

決して顔に出さない様にと笑い続けていたんだけど、それでも隠し切れないくらいに自分で思っていた以上のショックを受けていて、それが顔やしぐさに出ていたって事だろうか。

「…良く分かったね、なのはちゃん」

俺はその時何を考えていたのだろうか？

妹分である筈のなのはちゃんに自分の情けなさを認める様な答えを返していた。

「うん。私ね、純君の事だったら何だって分かっちゃう自信があるんだから」

なのはちゃんは自分の予感が当たった事でやっぱりねと胸を張りながらそんな台詞を言った。

「何か悩み事とかあるの？」

先程まで自慢げな顔をしていたなのはちゃんだけど、またすぐに不安げな顔になって俺に話しかけてきた。

本来ならなのはちゃんに言う事じゃない。

相談するならなのはちゃんのお父さんにあたる士郎さんの方が妥当

な筈だ。

でも俺は、なのはちゃんに相談していた。

勿論真実を言うつもりはないので内容を多少濁してだが…

「実は俺、今凄く迷ってるんだ」

なのはちゃんは黙って俺の話を聞いていた。

「俺が必ずやらなきゃいけないってことじゃ無いし失敗するかもしれないんだけど、俺じゃなきゃ出来ない事があるんだ。でも俺さ、それをやり遂げる強さも自信もないんだ。でもそれが色んな人にとって大切な事かもしれなくて…何言ってんだろうね俺、ごめん。何言いたいのか良く分かんないや」

なのはちゃんは俺を見つめ続ける。

やっぱり意味が分からないのだろう。

言ってる俺ですら意味が分からないんだから仕方ないかもしれない。

「大丈夫だよ」

なのはちゃんは柔らかい笑顔をしながら一言だけそう言った。

俺はその笑顔を見て動く事が出来なくなった。

唯一思った事はその笑顔が小学一年生とはとても思えなくて、何処と無く桃子さんに似ているなということだけだった。

気付いたときには俺の視界からなのはちゃんの姿が、俺の目の前から消えていた。

その代わり俺は自分以外のもう一人の体温を直に感じていた。

さっきまで俺の目の前に居たなのはちゃんだ。

俺はいつの間にかなのはちゃんに抱きしめられていた様だ。

「純君なら大丈夫だよ」

なのはちゃんは俺の耳元で赤ん坊を優しくあやす様な、寝かしつけるようなそんなやさしい口調で語りかけてくる。

「純君なら出来るよ。純君はすっごく強い男の子だもん」

俺の事を励まそうとしてくれているのだろう。

でも俺は自分がヘタレだって事を知っている。

本当に強いのは俺みたいなヘタレな軟弱者じゃなくて恭也君みたいな人を言う筈だ。

「…俺は強くなんかないよ。ただのヘタレだ」

俺はなのはちゃんの言葉を静かに否定した。

自分から慰めてくれと言っている様な物なのに俺はどれだけ罰当たりなんだろうと自嘲する。

「そんな事ないよ。純君は強いよ。誰よりも強いよ。私のお父さんより、お兄ちゃんより、純君の方がもっと強いよ」

俺の言葉を否定したなのはちゃんは尚も俺に語りかける。

でも幾らなんでも俺があの二人よりも強いなんて有り得ないだろう。

それこそ一瞬で俺がＫＯ負けになる事は誰の目にも明らかだ。

それでもまだなのはちゃんは俺に語りかけ続ける。

「純君は強いんだよ。この前だって一番に駆けつけて助けてくれたもん」

あれは今から思えばただの偶然の産物だ。

その場に恭也君が居たらもっと早くなのはちゃん達を助けていただろう。

「…あれはただのぐう「それだけじゃないよ」え？」

なのはちゃんの俺を抱きしめる力が少しだけ強くなる。

「純君はずっと前から私に色んなものをくれたんだよ。側に居て欲しいときは何時だって居てくれたんだよ。なのはは純君に一杯勇気を貰ったんだよ。純君は何時だってなのはのヒーローだもん」

そう言ってなのはちゃんは俺の身体からゆっくりと手を離した。

再びなのはちゃんの顔が見える様になった。

なのはちゃんの瞳が少しだけ潤んでいるように見えた。

「今から純君に貰った勇気を少しだけ私が返してあげるね」

そう言ったなのはちゃんは次に目を瞑ってとお願いしてきた。

俺は、なのはちゃんの言葉に素直に従って静かに目を瞑る。

「これはすっごく効き目があるから絶対大丈夫だよ」

なのはちゃんの言葉が聞こえる。

やけに近い位置から聞こえると思った次の瞬間、俺の左の頬に少し湿った温かい感触を感じた。

時間にしたら一分くらいだろうか、その状態が続きやがて左頬の感触はゆっくりと離れていった。

「もう目を開けて良いよ」

なのはちゃんから許可を得た俺はゆっくりと目を開く。

一番に目に飛び込んで来たのはなのはちゃんの顔だった。

心なしか両頬を赤く上気させて微笑んでいる。

「…元気出たかな？」

なのはちゃんは俺の顔を見て照れた様子を見せながら、それでも真っ直ぐに俺の瞳を見つめながら尋ねた。

俺はゆっくりと首を縦に一度だけ動かした。

言葉を発する事が何となくだが強張ってしまいそうだったからだ。

なのはちゃんは俺の反応に満足したようでそっかと小さく呟いた。

なのはちゃんと俺は暫く無言で見詰め合っていたのだが、やがてなのはちゃんは今日はもう帰るねと言って立ち上がると部屋の扉の前で。

「頑張ってね、純君」

そう言って元気良く部屋を出てお隣へと走り去っていった。

『マスター…』

恐らくそれほど時間は経っていないだろう。

メカ犬が俺を呼ぶ声を聞き俺はようやく現実に帰ってきた気がした。

「メカ犬、俺さ…」

俺はメカ犬に答えを出すことにした。

この結果を出した事に正しい選択をしたとは思えないそれでも俺は…

俺がメカ犬に俺自身の答えを言おうとしたその時だ。

タッチノートから以前にも聞いた憶えのある音声と警報音が流れる

『キンキュウケイホウキンキュウ…』

俺とメカ犬は無言でタッチノートを見つめる。

俺はゆっくりとした動作でタッチノートを手に取りメカ犬に近づく。

俺の答えは既に決まっている。

「…行くぜ。力貸してくれよ相棒!!!」

『ああ!!!』

俺はメカ犬と共に勢い良く部屋を飛び出した。

「それでどうやって現場に向かうんだ？」

俺たちは勢い良く飛び出したものの未だに玄関先に居た。

だって仕方ないだろう。

現場がここから１０？以上離れてるんだぞ。

２、３？程度なら自転車使うなりしてどうにかなるが、これだけ離れてると流石に無理がある。

いっその事バスで行くか？

でも現場には間違い無く化物、ホルダーが居るだろうから向かう車なんてパトカー位のものだろうか。

『マスター何やら考えているようだが少し良いか』

俺が現場に向かうための方法を考えているとメカ犬が話しかけてきた。

「なんだよ？何か良い手でも思いついたのかメカ犬」

『結論から言えばその通りだ。マスタータッチノートを出してくれ』

なんかタッチノートが最早、青い耳無しネコ型ロボットのポケットの様に思えてきたがそれは言ってはいけないお約束なのだろうか？

俺はそう思いながらもメカ犬の言う通り指示に従う。

『タッチノートの黄色のボタンを押せ。それで移動手段が手に入る』

俺がメカ犬の言うとおり黄色のボタンを押すと、お約束と言わんばかりにタッチノートから音声が聞こえてきた。

『チェイサー』

すると道の曲がり角から大きなエンジン音が聞こえてくる。

音のした方角を見てみると一台のバイクが近づいてくる。

黒いライダースーツを着用して黒いヘルメットを装着した人物がこれまた黒い大型バイクで此方に猛スピードで近づいてくるのだ。

黒で統一されたその存在は全身が隠れる程の土煙を巻き上げながら俺とメカ犬の目の前で急停止した。

『お待たせ～あら、この男の子がアタシ達のマスターかしら？かんわいい～』

なんか明らかに女口調なのに声が某カエル型侵略者の赤い奴みたいに渋い声が聞こえてきたんですけど？

砂煙が晴れるとそれを巻き起こした張本人の姿をより明確に確かめる事が出来た。

乗っている人は全身黒尽くめという点を除けばありふれた格好なのだが、バイクが凄い。

大型スクーターを基にしたフォルムをしているが明らかに従来使われているバイク製品ではない。

これをもしも車検に出そう物なら即落ちるだろう。

しかし現実的な部分を抜きにするとそのデザインは俺好みだった。

というよりもライダーファン好みと言った方がしっくりと行く気がする。

俺が食い入るように見つめているとまたしてもあの渋いながらも乙女なオッサンボイスが聞こえてきた。

『そんなにじっくり見られちゃうとアタシ興奮しちゃうわ～』

うん。キモさ１００％です。

言っている事にはこれでもかってくらいに感情が篭ってるのにバイクに乗ってる黒尽くめの新宿二丁目な姉さん?は微動だにしない。

メカ犬とは別ベクトルの恐ろしさを感じる。

あれ?

確かメカ犬の奴は生身の人間は転送できないって話してたよな。
この人何処からどう見ても人間に見えるんですけど。

「なあ、メカ犬。確かお前の世界から生身の人間はこっちの世界には来れないんじゃ無かったのか」

『うむ、その通りだぞマスター』

「目の前でバイクに乗っている人はどっからどう見ても人間に見えるぞ」

『何を言っているんだマスター。チェイサーはワタシと同一のシステムの一部だぞ』

チェイサーってのはこの黒尽くめの人の名前みたいだけど流石にこの人が人間じゃないって言われても俄かには信じられないぞ。

『うふふ。信じられないって顔してるわねマスター。そんなに疑うならアタシに触ってみなさいな、きっと驚くわよん』

正直あんまり触りたくないなと俺は思ってしまったが、僅かに知的探究心の方が強かったようだ。

俺は緊張しながらもこのチェイサーさん?に触れるべく手を伸ばす。

そして触れたと思ったのだが何かがおかしい?

今正に俺は触れている筈なのに、その感触が一切感じられないのだ。

おかしいと思った俺は少し腕に力を入れて軽く押してみる。

「嘘だろ？」

突き抜けました！

何がって？

俺の手が！

チェイサーさんの身体を！？

こう、ずぼって！！！！

やっちまったのか？

俺はやっちまったのか！？

『落ち着けマスター。良く見てみろ』

煩いぞメカ犬。

俺は…俺は…俺は…あれ？

なんかチェイサーさんの身体が、映りの悪いテレビ画面みたいにブレまくってるんだけど？

これってもしかして…

『それはただのホログラムよ。アタシの身体はその下ね』

喋るフルメタルな犬に続いて今度は新宿二丁目的なバイクのご登場とそういう訳ですか。

なんか頭痛がしてきたよ俺。

『マスターあまり時間がない。早く目的地に向かうぞ』

頭を抑えて蹲る俺に対してメカ犬は早く行くぞと催促してくる。

突っ込み所満載な気がするけど、確かに移動手段は手に入ったんだ。

メカ犬の言うとおり急がないとな、うん。

「で、俺はどうやって乗ればいいんだ?」

見た目小学生な俺が運転すれば即逮捕されるだろうし、ホログラムに掴まってる振りをしようにも触れないから走り出した瞬間に放り出されるぞ?

それともここで変身してから乗ればいいのかな。

『このままシートに乗ればそれで良いわよマスター。後はアタシが優しくリードしてあげるから』

『早く乗るぞマスター』

メカなお二人から催促を受けた俺は、それじゃ失礼してと言いながらシートによじ登った。

『認識阻害装置始動』

チェイサーさんは俺がシートに座った事を確認すると突然こんな台詞を口にした。

「認識阻害？」

『チェイサーの能力の一つだ。周りから見ればマスターの姿は見えずにホログラムの姿しか認識されない様になる』

おお！なんか凄いハイテクだ。

『安全装置作動』

またチェイサーが喋りだした。

今度は何となく分かるぞ。

安全装置って事は俺がバイクから振り落とされない様にしてくれるんだよな。

さっきのハイテク振りからして今度は重力制御とかまたＳＦみたいな機能が出るのかもしれない。

ガキン！！！

…ちょっと待ってくれ。

突然バイクの両脇から鉄のワッカみたいのが出てきて俺の腰辺りを完全に固定してきたんだけどさ。

まさかこれが安全装置？

『さあ行くわよ～！』

待って。

行かないで！

さっきまであんなにハイテクだったのに何でここだけローテク設計なの？

俺の不満を訴える叫びは全てチェイサーさんのエンジン音？でかき消される。

次の瞬間チェイサーさんはバイクでは有り得ない初速を出して走り出した。

ちなみに俺がこの時発した台詞は…

「らめえええええええええええええええ！！！！！！！！！」

だった。

『これは酷いな』

俺達は今、チェイサーさんの運転で目的地へと向かっている。

現在は目的地のかなり近くまでやって来たのだがこの場所の惨状を目の前にして、メカ犬が先程の言葉を呟いたのである。

今俺達が通過しているのはビルが立ち並ぶビジネス街。

その至る所に細い植物のツタが張られているのである。

中には何故かツタで簀巻きにされた人達も随所に散りばめられている。

酷い事をするなと思いながら回りを見回していたらメカ犬が声を掛けてきた。

『マスター。もうすぐ視認可能な領域に入るぞ気を抜くな』

メカ犬の言葉を聞き正面を向いた俺にまず見えたのはこちら側に逃げてくる無数の海鳴市民の人達だった。

更にその先に見えたのは異形の化物、そうホルダーだ。

全身が緑色で身体のあちこちに細いツタを巻きつかせている。

頭部は種類は分からないが赤い花を模している様に見える。

『ホルダーで間違いない。反応は奴から出ているぞ』

メカ犬が叫んだ。

『それじゃあ、このまま突っ込むわよ～！』

チェイサーさんが何やら不穏な発言をしたと思ったら一気に急加速してきた。

マジだよ、この新宿二丁目バイク。

凄まじいスピードで草型ホルダーに接近するチェイサーさん。

流石に暴れていたホルダーも気付いたが時は既に遅かった。

「ぶべら！？」

チェイサーさんのバイクタックルを受けたホルダーが世紀末的な断末魔を描きながら宙を舞う。

あまりにも華麗に吹き飛ぶその姿はある種の芸術と呼べるかもしれない。

やがてホルダーの身体が地面に舞い落ちると、変則的な痙攣を起こし始めた。

やばいぞ。

あの痙攣の仕方は、俺の前世でお隣さんのお爺さんが可愛がってい

た、猫のにゃん吉が天に召される前日にしていた痙攣とそっくりだ。

俺はチェイサーさんに頼んで安全装置を解除してもらいシートから飛び降りホルダーの様子を伺う。

幸いにもホルダーは、にゃん吉と同じ運命を辿る事無く現世に命を繋ぎ止めた様で、ゆっくりと立ち上がる。

「あいたたた…何だ突然に、ん?」

立ち上がったホルダーと俺の目線が重なる。

「子供?駄目だよ君。小学生がバイクの運転なんかしたら」

メカ犬の言うとおり本当に喋ったよ。

しかも凄くまともなこと言ってるし!

もしかしたら話せば分かる相手かもしれないかな?

俺はホルダーが案外まともな人格者の様なので話し掛けてみる事にした。

「あの、どうしてあなたはこんな酷い事をするんですか?」

「うん?何でかって、それは地球環境のためだよ」

予想の範囲を死角から鋭く抉り込む様な回答が返ってきました。

「地球の緑は今も急速な勢いで減ってきている」

ホルダーは何処かの教育番組のナレーターみたいに地球環境についての見解を話し始めた。

「…では何故地球の自然は破壊され続けているのか」

五分以上ホルダーは自然について俺に話して聞かせてきたがここからやっと本題に入るらしい。

「地球を汚染してきたのは人間だ。それは間違いない。しかし人間も自然の一部だ。では本当の原因は何か?それは人間の作り出した文明だ。だから僕はこの街を手始めに全ての文明を破壊する」

ホルダーが熱く語る。

正気じゃないぞこの人。

考えが極端すぎる。

「その考えはあまりに強引じゃないんですか?」

俺はホルダーの意見に異論を唱える。

「子供には分からないかもしれないね。それじゃ僕は忙しいからもう行くよ。それとも君は僕の邪魔をする気かい?邪魔するきなら子供だからといっても容赦しないよ」

ホルダーが俺に殺気をぶつけて来る。

前回の戦いでは感じる事の無かった人の明確な意思を宿した殺気だ。

俺はその殺気に恐怖を覚えて足を後ろに一歩引いた。

『マスター』

恐怖に慄く俺にメカ犬が話しかけてきた。

『「大丈夫」なんだろマスター』

その言葉は俺に勇気を分けてくれたお隣さんの、幼馴染の、甘えん坊の、誰よりも優しい魔法の言葉。

『マスターは一人じゃない。マスターはワタシを相棒と呼んでくれた。もしマスターが自分を弱いと言うのなら、相棒のワタシが幾らでも力を貸そう。それにマスターは既になのは譲から勇気という力を貰っている筈だ』

「メカ犬…」

『マスターが自分の力を信じられないなら、ワタシとマスターの二人の力と、なのは譲の勇気を信じてくれ。今のマスターは絶対無敵のヒーローだ』

俺の竦んでいた足はいつの間にか元に戻っていた。

確かに俺一人だけならただ恐怖に震えていただけかもしれない。

でも今の俺にはなのはちゃんから貰ったでっかい勇気と一緒に戦ってくれる相棒がいる。

「…そうだな。今の俺は本物のヒーローだ！」

『それでこそマスターだ』

俺はホルダーの前に立ちふさがり啖呵を切る。

もう俺の中に迷いは無い。

「あなたを野放しにする訳にはいかない。俺があなたを止めます」

「…言った筈だよね。子供でも容赦しないって」

ホルダーがどすの聞いた声で俺に語りかけてくる。

それでも俺はもう一歩も引きはしない。

「悪いけど、ただの子供じゃないんでね。行くぞメカ犬！！！」

『何時でもＯＫだマスター！！！』

俺はタッチノートを開いてボタンを押す。

『バックルモード』

タッチノートから聞こえる音声と共にメカ犬が銀色のベルトに変形して俺の腹部に巻き付いた。

俺はタッチノートを眼前にいるホルダーに向けて掲げる。

今から俺が言う台詞は以前とは意味が違う。

この言葉は弱い俺を奮い立たせる言葉じゃない。

戦い続ける事の覚悟の証明。

憧れながら見上げていた彼らと肩を並べる為の決意。

俺は今この時から憧れを捨て本物になる。

「変身」

この言葉を放つと同時にタッチノートをバックルの中央の溝に差し込む。

『アップロード』

バックルに差し込んだタッチノートから流れる音声と同時にバックルを中心に俺の身体を白銀の光が包み込む。

やがて光が収まって再び現れた俺の姿は板橋純というヘタレな小学生とは似ても似つかない存在だった。

身長は成人男性と変わり無く、全身がメタルブラックのボディ。

それを彩る様に銀のバックルを中心に四肢に伸びた同色のラインと額に輝くV字の角飾り。

顔の半分を覆う様な二つの赤い複眼が更にその存在を引き立たせている。

そこに居るのは正真正銘の正義の味方。

仮面ライダーだ。

俺の凄まじいほどの変化を見たホルダーは俺に質問をする。

「確かにただの子供じゃないですね。君は何者なんですか？」

何者なんだと聞かれたら、一応仮面ライダーなんだが、これからも戦い続けると決めたんだから固有名詞が欲しいよな。

何か良い名前あるかな？

そういえばメカ犬は別の世界から来てるんだよな。

本来なら存在しない筈の別世界の存在。

もう一つの世界…そうだ。

俺が前世で見てたアニメでそんなコンセプトのタイトルが着いたロボットアニメやってたよな。

あのタイトルの名前を頂いちゃおう。

即興だが名前が決まったので俺は質問をしてきたホルダーに決まりたての名前を告げる。

「俺はシード。俺の名前は仮面ライダーシードだ」

「正義の味方気取りですか？やっぱり子供だね」

ホルダーは俺を嘲笑う。

「一応本物のヒーローなんだけどね。だから止めさせてもらうぜ」

「やれるものならやってみなさい」

ホルダーが此方に駆け寄ってくる。

前に戦った蜘蛛のホルダーとは比べ物にならない素早さだ。

『来るぞマスター』

「分かってる！」

俺はメカ犬の言葉に短く答えた後、ホルダーに対して迎撃体制を取る。

確かに素早さは段違いだけど、それでも見切れるレベルだ。

俺はホルダーの攻撃にカウンターを合わせて何度も己の拳を叩き込む。

「はっ」

カウンターの右ストレートから左の前蹴りを放ってホルダーを後ろに下がらせる。

「ぐっ中々やりますね」

ホルダーは膝を着きながら言うが何処か余裕を感じる。
何か奥の手でもあるんだろうか？
「でも、これならどうですか！」
ホルダーがそう言って両腕を大きく上から下に振ると草のツタが鞭の様に俺に襲い掛かってきた。
「危ね！？」
俺はその身を横に捻り転がりながらそれを何とかかわした。
「何だよあれ？」
『恐らくあれがこのホルダー特有の能力なのだろう』
「あの草の鞭みたいな奴がか？」
『植物の成長促進とコントロールといった所だな』
俺は連続で襲い掛かる草の鞭をかわしながらもメカ犬の言葉を聞く。
「如何すればいいんだよこんなの」
『接近戦にさえ持ち込めればこっちの土俵だ』
「こんな連続で攻撃されたら近づくことも難しいですけど？」
メカ犬がもっともな事を言うがそんな事は言われなくても分かって

る。

可能ならとっくにやってるっての。

『こちらから近づけないなら向こうから近づいてもらえば良い。マスター、戦いで傷つく事を恐れては勝利はないぞ』

「何言ってんだよ、向こうからやって来てくれるわけ…なるほどね。俺の相棒は無茶を言うぜ」

『出来るさ。マスターなら必ずな』

「信じるぜ相棒」

『うむ』

俺は回避行動を止めて立ち止まる。

すると当然のように鞭の嵐が俺の身に襲い掛かって来た。

はっきり言ってメチャクチャ痛い。

それでも俺はその痛みを耐えながら、相棒が俺に授けてくれた作戦を成功させるべく、感覚を研ぎ澄ませる。

一本のツタが真横から襲い掛かる。

まだだ。

まだ。

もう少し…今だ！

俺は真横から迫り来る一本のツタをその手に掴み取る。

「捕まえたぜ」

これに驚いたのはホルダーの方だろう。

「な、何のつもりですか！？」

「どうもこうも…こうするつもりだ！」

俺は掴んだツタを綱引きの要領で思い切り引っ張り込む。

変身した事で超人的に強化された俺の筋力でツタごとホルダーをこちら側に呼び込んだ。

「はあ！」

飛び込んできたホルダーに俺は渾身の右拳を叩き込んだ。

「があっ」

ホルダーは短く悲鳴を上げて先程までいた位置に転がりながら戻っていく。

『流石だマスター』

「ああ、作戦通りだな」

ホルダーは悶絶しながらもまだ立ち上がってくる。
中々にタフネスだ。
「まさかここまでとは予想外ですね」
『これで貴様のアドバンテージは無くなった。覚悟しろ』
「ふふふ、諦めるという言葉は僕の辞書にはないんですよ」
ホルダーは再び両腕からツタを伸ばし振るう。
俺は襲い掛かるであろう、衝撃に備えて防御の構えを取るが一向にその衝撃は襲ってこない。
変に思い前方に目を向き直ると俺の頭上に草のツタが伸びていた。
その先端は電柱の頂上部分に巻き付いている。
「残念ですがこのまま戦っても勝ち目は無さそうなのでこの場はこれで失礼させて頂きましょう」
「何だと?」
「それではさようなら。仮面ライダー君」
ホルダーはまるでターザンの様に飛び上がりながらツタを交互に前方の電柱に巻きつけ遠ざかっていく。

『マスター、このまま逃がしてはまずいぞ』

「分かってるけど如何すれば良いんだよ？」

結構なスピードで移動してるぞあのホルダー。

流石にチェイサーさんでもあの速度に追い着くのは無理があると思う。

『心配ないわよマスター。アタシに任せなさい』

チェイサーさんが近づいてきて自信満々にそう言い放つ。

『それじゃマスター、早速お願いしたいんだけど、タッチノートの黄色いボタンをもう一度押してくれないかしら』

またタッチノートですか。

マジで便利ツールだな、タッチノート。

俺はチェイサーさんのお願い通り、タッチノートの黄色いボタンを押した。

『リミットオフ』

タッチノートから聞こえる音声の後、チェイサーさんに変化が起こった。

黒一色だったボディに銀のラインが走る。

ボディの両脇と前面にV字マークだ。

更にV字の下部分は全て黒から赤へと染まる。

『うふふ、これがアタシの真の姿って奴よ』

カッコイイ！

カッコイイよ、チェイサーさん！！！

これぞライダーバイクだよ！

『二人とも、それぞれ興奮している所失礼するが、そろそろ追いかけないと本当に逃げられるぞ』

メカ犬よ、仲間のパワーアップシーンをスルーするなんてKYにも程があるぞ。

チェイサーさんは元からバイクとしては有り得ないスピードだったけど、この状態になったら更にスピードが上がった。

仮面ライダーに変身している筈の俺ですらかなりの風圧を感じる。

『追い着いたぞ』

メカ犬が声を上げる。

確かに前方に見えるのはターザン飛びで逃亡を図る草型ホルダーだ。

ホルダーはこちらの接近に気付いたらしく小さく舌打ちして皮肉を言った。

「本当にしつこいですね。あんまりしつこいと女性に嫌われますよ」

『アタシは女なんかに興味は無いのよ。好みの男に一度アタックして断られたって、何度でもアタックしてやるんだから』

それは、男からしたらかなり怖い意見に聞こえる気がするんですけど、チェイサーさん…

ホルダーはチェイサーさんの返答は無視して今度は無言でそこらじゅうにある物をツタで絡め取って此方に投げつけてきた。

ポストに標識、大きな岩に横転した自動車等と兎に角道にある物は何でもだ。

『あら、プレゼント攻めなんてお姉さんのツボを心得てるじゃない』

そんな軽口を良いながらチェイサーさんはそれをことごとく回避する。

最早バイクの稼動限界を軽く凌駕してるよね、チェイサーさん？

『…でもね。アタシは愛されるよりも愛いしたいのよ！！！』

チェイサーさんは咆哮を上げると、ホルダーが投げてきた自動車を踏み台にして飛び上がる。

その軌道の先に居るのは勿論ホルダーだ。

ホルダーが此方に振り向く。

表情なんて今の状態では読み取る事は出来ないが驚愕している事だけは理解できた。

『アタシの愛をうけとりなさあああああい！！！！』

チェイサーさんがホルダーに向けて叫ぶ。

もしかして最初のバイクタックルも含めてこれはチェイサーさんの求愛行動なんですか？

「ひでぶ！？」

あまりにも過激なラブアタックを受けたホルダーは力無く地に落ちていく。

その落ち様は、またしても世紀末で芸術的だった。

『それじゃあ後はお願いするわねマスター』

先程までのやり取りなど一切無かったかのようにチェイサーさんが俺に言う。

俺はとりあえずこの人？だけは色んな意味で敵に回さない様にしようと密かに心の中で決意してチェイサーさんの座席シートからホルダーの近くまでジャンプする。

ホルダーは何とかふらつきながらも立ち上がろうとするがそれすらも叶わない様だ。

肉体的にも精神的にも相当ダメージ受けてそうだからな。

『マスター、今がチャンスだ』

メカ犬が俺に声を掛ける。

「ああ、任せてくれ」

俺はバックルからタッチノートを取り出して以前と同じ操作を繰り返して再びバックルに差し込む。

『ポイントチャージ』

タッチノートからの音声と共に、バックルから白い光が発生し、その光が銀のラインを伝って右足に集約する。

「こいつで決めるぜ」

俺は大きく跳躍する。

自らの右足をホルダーに向ける。

今から行なう行動はこの戦いに終止符を打つ、最強の技だ。

「ライダーキック」

右足は一層その輝きを増して行く。

ホルダーに俺の右足が当たった瞬間、奴は白い光を放ちながら爆発した。

爆発後の場所には三十代に見えるメガネを掛けた男性が気絶していた。

その隣にはエメラルドグリーンの球体、この男性をホルダーに変えた原因である暴走システムが落ちていたが間も無くして跡形も無く砕け散った。

「なあ、メカ犬」

『何だ？マスター』

「…これからも宜しくな相棒」

『ああ、こちらこそ宜しく頼むぞ相棒』

俺はこの日、仮面ライダーとして戦い続ける覚悟を決めた。

あの戦いの次の日、俺は恭也君に追い掛け回されていた。

あの後なのはちゃんは高町家の全住人に、あのときの事を詳しく話して聞かせたそうなのだ。

問題はこの話を恭也君が聞いていたって事だ。

俺は今、昨日の戦い以上の生命の危険に晒されている。

でも俺は恭也君に感謝しないといけないのかなとも思う。

俺が曲りなりにも戦えるのは恭也君のおかげだからだ。

そう思うとこれは特訓してパワーアップするチャンスなんじゃ無いだろうか？

それなら立ち向かうべきじゃなかろうかと俺は後ろを振り向く。

鬼が居た。

元恭也君という名前であったであろう悪鬼が無言で俺に迫り来る。

俺の生存本能が全力全開で逃げろと言っている。

俺は勿論プライドや男として大切なもの全てを投げ出す覚悟を速攻で決めて逃げ出した。

「お兄ちゃんも純君も本当に鬼ごっこが好きなんだから」

『マスターの体捌きはこういった日々の賜物なのだな』

俺と恭也君の命を賭した逃走劇を、主に俺の命が危険に晒される原因を作る一人と一匹がのほほんと見ながら談笑している。

何時かこいつらに目に物見せてやると俺はその心に硬く誓い、今は自身の命を守るために走り続ける。

とりあえず今日の海鳴は、命の危険は付き纏っているが概ね平和だ。

## 第三話　戦う覚悟がヘタレにあるか？【後編】（後書き）

次回は来週以降になります。

ポケモンの新作出るんで少し遅れるかもです。

## 第四話　ワンワンパニック！バニングス？【前編】（前書き）

お久しぶりです。

意外と早く出来上がったので更新です。

早ければ今週中に後編を出すと思います。

予定通りなら来週です。

それでは楽しんでいただければ幸いです。

# 第四話　ワンワンパニック！バニングス？【前編】

「ねえ、純。あんたの…その…見せなさいよ」

「えっと、今ここでって事？」

俺が今いる場所は、なのはちゃんの両親である士郎さんと桃子さんが経営する喫茶店、翠屋だ。

イケ面な店主に超絶美人のパティシエと、これまた美少年と美少女のお手伝い。

これだけでも話題性は抜群だと思うがこれに加えてパティシエである桃子さんが作るお菓子はどれも絶品なのである。

そんな訳で翠屋は日々繁盛している。

今日は日曜日の昼下がりという事もあり、お客さんの入りも中々でかなり混雑している。

本来の俺は、わざわざ休日に絶対混雑すると分かっている場所に自ら赴くなんて蛮行をすることはしない。

それならば、何故俺が今こんな所に居るのかと言えば答えはいたってシンプルだ。

呼び出されたのだ。

呼び出した相手は俺の友人の一人であり、美少女三人組の一角、ビ

ジュアル的にももっとも目立つ金髪碧眼の外人ツンデレ娘のアリサちゃんである。

特に予定があった訳でもないし、友人に頼み事があると言われれば、多少面倒と思う物の断る程に俺は薄情な人間でもないつもりだ。

なので俺は待ち合わせ場所に指定された此処、喫茶翠屋にやって来たわけだ。

店内に入ると士郎さんが俺の存在に気づいて挨拶をしてきた。

俺もそれに軽く挨拶を返すと、士郎さんは予め俺が待ち合わせでここに来たのを知っていた様で、俺を席に案内してくれた。

案内されてやって来た席には呼び出した張本人であるアリサちゃんがイチゴのパフェを美味しそうに食べながら座っていた。

なのはちゃんとすずかちゃんも呼んでいると聞いたのだが姿が見えない。

どうやら俺が一番に着いたのだろう。

古来から年齢に関係無く女性は出掛ける準備に時間が掛かるという伝説が脈々と伝承されているので、男の俺が一番先に到着するのは自然の摂理なのかもしれない。

俺は士郎さんに礼を一言述べてアリサちゃんの座る席に歩き出した。

それを見送った士郎さんも自分の仕事に戻って行く。

お客さんの数を見る限り、自分の仕事も忙しいのに娘の友人の為に多少とは言え時間を割いてくれるのだから、士郎さんを始め高町家の人々は人外魔境な部分を除けば本当に良い人達だ。

俺の接近にアリサちゃんも気づいたらしく、手を大きく振りながらこっちに来なさいと言ってくる。

俺もアリサちゃんに軽く手を振り替えしながら分かったと返事を返して席に着いた。

今日は休日なので、俺もアリサちゃんも当然の事ながら学校の制服など着ているはずも無く、私服姿だ。

男の俺の描写等気にする奴は皆無だと思うが一応黒いTシャツとブルーのジーンズそれにオレンジのショルダーバックを肩から提げている、という事だけは言っておこう。

アリサちゃんは若草色のワンピースを着ており犬の肉球がプリントされた白地のハンドバックを自分の席の隣に置いている。

小学一年生なのでそんなに着飾るといったことはしていないが、元が良いのとその日本人ではない外見からあいまってハリウッド映画の子役俳優にも見える。

この麗人揃いの喫茶店で見るその光景はまさに、映画のワンシーンをそのまま切り抜いて現実に持って来た様な錯覚に陥ってしまうほどだった。

席に座った俺に、アリサちゃんが言った言葉が冒頭のそれだった。

俺はその台詞があまりにも周りから見たら意味深に聞こえそうなので思わずそう言い返してしまった。

「そうよ。純の…あれよ。私に見せなさいよ」

アリサちゃんがもう一度言い直した。

「いや、でもこんな人の沢山居る場所ではちょっと…」

俺はアリサちゃんの要求に難色を示す。

すると、アリサちゃんはその返答が気に入らないらしく、テーブルを跨いで俺の上に覆いかぶさる様に迫ってきた。

完全に目が据わっていらっしゃる。

「良いじゃないのよ。ここで見せてくれたって、誰も気にしないし減るもんじゃ無いでしょ。それになのはは何度も見てるのに私やすずかは一度も見てないなんて不公平じゃない」

もはや馬乗りとも言える体制でアリサちゃんが俺に捲くし立てる。

余りにも近いその距離にアリサちゃんの女の子特有の甘い香りと先程食べていたパフェのせいか微かなバニラの香りが俺の鼻腔を擽る。

アリサちゃんは誰も気にしないなんて言ってるけど店内のお客さんメチャクチャ見てるからね。

それに減るよ。

主に俺の精神的な何かが現在進行形で急激なまでに浪費されているからね。

「そ、そんなに見たいの？」

俺は周りの視線に狼狽しながらも何とかアリサちゃんに問い返す。

アリサちゃんは俺の言葉に何度も力強く頷いて見せた。

そこまでにして見たいらしい。

「分かったよ。見せるから、だから取り敢えず俺の上から降りてくれるかな？」

「あ！」

俺の言葉にアリサちゃんも正気を取り戻した様で、頬を赤くしながら、

「わ、悪かったわね…」

と言いながら素直に俺の上から降りてくれた。

何やら俺とアリサちゃんを取り囲む周りの空気が妙な感じになっている気がするが気にしたってしょうがない。

俺はアリサちゃんとの約束を守る為に、早速行動に移す事にした。

「それじゃあ、見せるよ」

「う、うん」

俺はジッパーに手を掛けながらアリサちゃんに確認を取った。

アリサちゃんは期待と緊張を孕んだ短い頷きを返すと、今にもかぶり付きそうな勢いで俺が手を掛けているジッパーの先を凝視している。

ついでに周りのお客さんもなんだなんだと注目してくる。

はっきり言って恥ずかしい。

できることなら、今すぐこの場からオサラバしたいが、アリサちゃんと約束してしまった手前それも叶わない。

ならば今の俺にできる事は、少しでも早く現状を先に進めて今を綺麗な思い出へと昇華することだけだ。

「それじゃいくよ」

俺はそう声に出して一気にその手に持ったジッパーを引き下ろした。

引き下ろしたその先から見えるものは先程からアリサちゃんが言っていた例のブツである。

『初めましてだな、アリサ嬢。君の話はマスターやなのは嬢から良く聞いているぞ』

俺が持参したショルダーバックのジッパーを引き下ろして中から出てきたブツは、全身メタリックカラーの手乗りサイズのロボットな

犬であり流暢に喋っても見せた。

「か…」

『アリサ嬢は無類の犬好きと聞いていたのでワタシも会えるのを楽しみにしていたぞ』

アリサちゃんと初対面を果たしたメカ犬は尚もアリサちゃんに喋りかける。

メカ犬はナチュラルに会話を繋げようとするがアリサちゃんは、壊れたラジオのようにメカ犬に視線を集中させたまま、同じ言葉を呟いている。

今までが異様なまでに普通の反応だったので、言葉が出なくなっている程の反応を見せたアリサちゃんに俺はある種の新鮮さを覚える。

本来ならこうなるのが当たり前なのだ。

普通にお客さんとして家に上げて乾電池をお茶代わりに出してきたり、何の疑問も抱かずに自己紹介しだす方が何処かずれているってもんだ。

やっぱりアリサちゃんは常識人だなと感心する俺だったが、何時までもこの状態にしておく訳にもいかないので、アリサちゃんに現実世界に帰還してもらうべく声を掛ける事にした。

「ねえ、アリサちゃん…」

「…か…い」

俺がアリサちゃんに正気に戻ってきてもらおうと声を掛けた直後、さっきまで壊れたラジオ化した様に呟いていた声のトーンが急に変わった。

「え？」

「…い。かわ…い…」

何やらプルプルと震えだした。

ショックで気でも触れたのかと俺がもう一度声を掛けようとしたら、アリサちゃんが突然勢い良く立ち上がった。

「かわカッコイイ！！！！！！！！！！！」

アリサちゃんの魂までも振るわせる様な雄たけびが喫茶翠屋に響き渡った。

それと同時に俺の常識人名簿からアリサバニングスという一人の少女の名前が抹消される事と相成った。

「アリサちゃんは犬さんの事になると性格が変わっちゃうからしょうがないよ」

「そうだね」

アリサちゃんの魂のシャウトから暫くしてなのはちゃんとすずかちゃんも翠屋に辿り着いた。

現在メカ犬を抱き上げながらトリップしているアリサちゃんを視界にに捕らえながら俺は二人と談笑している。

ちなみにすずかちゃんとメカ犬のファーストコンタクトは中々にシュールなものだった。

アリサちゃんにより抱え上げられ振り回されているメカ犬と、それを少し離れた場所から見ていたすずかちゃんが、互いに宜しくと言って頷くだけで終了となったのだ。

多分にアリサちゃんの暴走の為にこうなってしまったと思える部分が垣間見えるがそれでもあっさりしすぎな気がする。

だからと言って慌てふためくすずかちゃんというのも想像できないとまでいかなくても、実際中々見れないので、ある意味正しいのかとも思う。

十分にトリップしてアリサちゃんも現実に帰ってきた所で、やっと四人プラス一匹?による会話が再開された。

「私がみんなを呼んだのは別に純にこのメー君を見せてもらいたかっただけじゃないのよ」

現実回帰したアリサちゃんがそう言って話を切り出した。

ちなみにメー君とはメカ犬の事だ。

俺はこいつの事をいつの間にかメカ犬と呼んでおり、メカ犬もそれを否定する事もしないのでこの呼び方が定着してしまっていた。

チェイサーさんも名前?が有った事からこのメカ犬にも正式な名称があるのだと思い聞いてみた所、システム上の名称はあるがメカ犬の固体を表す名称は存在しないそうだ。

一応はバディーシステムというらしいがあまり名前といった感じがしない。

それを言ったらチェイサーさんも同様ではあるけれどメカ犬の名称と比べれば名前として使う分には違和感は感じない。

名前を考えようかと話もでたのだが俺とメカ犬の間では今更な気もして俺は今でもメカ犬と呼んでいる。

詳しい経緯は話さないが俺がこのメタリック犬をメカ犬と呼んでいる事を掻い摘んで伝えたところ、猛反発してきたのが、美少女三人組であり、中でも犬好きであるアリサちゃんは凄まじかった。

俺を含めた三人とプラス一匹？が軽く引く程に凄まじかったのだ。

その後様々な案が出されたがそれはそれは全てメカ犬本人により却下された。

まあ、フランソワとかグングニールにシュバルツ等、名付けられる方としては勘弁願いたいのだろう。

もっともその名を多く口にする事になる俺としても、その気持ちは痛いほどに分かる。

結局新たな名前は決まる事は無く、それならばせめてもう少し可愛い感じに呼びたいと言う意見によりメカ犬の頭を取って三人はメカ犬をメー君と呼ぶ事に落ち着いたのである。

「それで何のお話なの、アリサちゃん？」

なのはちゃんが代表するようにアリサちゃんに聞いた。

俺とすずかちゃんもその言葉に同意の頷きをする。

「うん、私ね、昨日の帰り道で子犬を拾ったのよ」

アリサちゃんはそう言うと犬の肉球がプリントされたバックから一枚の写真を取り出した。

写真に写っていたのは所謂ダックスフンドという犬種の子犬だった。

ダックス特有の長い胴と短い足。

この子犬は短毛種の様で色は薄めのブラウンだ。
首には赤い首輪を付けている。
「拾ったその日に首輪を付けてあげたの？アリサちゃん」
写真を見て最初にそういったのはすずかちゃんだ。
確かにアリサちゃんは昨日拾ったと言っていたがこの写真には良く目立つ赤い首輪がはっきりと写っている。
昨日拾ったその日の内に付けたのか、今日俺達と会う前に付けてあげたという事かも知れないが何となくそうでは無いなと思う。
「それって、この子犬は最初からこの首輪をしていたって事かな？」
俺は直感的にそう思いアリサちゃんに聞いてみた。
「ええ、そうよ」
アリサちゃんは肯定して続きを話し出した。
「この子ね、最初から首輪を付けてたし、見つけた時も殆ど汚れてなかったのよ。だからこの子は野良じゃ無くて迷子なんじゃないかと思って保護したの」
犬ってのは帰巣本能があるって聞くけど、子犬にそれができるか確かに分からないからな。
アリサちゃんの判断は間違っていないと思う。

「それで俺達に頼みたい事ってのはこの子犬の事かな」

「そうなのよ。他でも調べてもらってはいるんだけど、拾ったのはこの近くだし子犬には自力でそんなに離れた場所まで移動できないなって思うから、みんなにこの近くを探すのを手伝って欲しいの」

俺達はアリサちゃんの頼み事に二つ返事でＯＫと返した。

困っている時に助けるのは友達として人として当たり前の行為だし、何より子犬に帰る場所があるのなら少しでも早くその場所に返してあげたいといった気持ちからだ。

取り合えず俺達は二手に分かれてこの付近を聞き込みする事にした。

女の子が少人数で動くのは物騒かもしれないと言う事で、美少女三人組と、翠屋でお手伝いをしていた美由希さんが偶然にも俺達の話

を聞いていた様で、一緒について来てくれる事になった。

俺には目視出来るほどに凄まじい殺気を飛ばす恭也君が一緒に来てくれると声を掛けてきたのだが、俺はそれを丁寧に全力全開の土下座をする事で何とか切り抜けてメカ犬と共に捜査をする事になった。

あの翠屋でのやり取りで、何が気に入らなかったのか分からないが、このまま一緒に行動していたら俺は確実に亡き者にされていた。

士郎さんの方としても、これ以上の労働力の消費はまずいと考えたのか俺の援護に回ってくれたので、本当に助かった。

そもそも恭也君は常日頃からギャルゲーと少年漫画の主人公的な日常生活を過ごしているんだから、俺の様なモブキャラ等放っておいて欲しいと思うのだ。

恭也君からしてみれば俺は溺愛する妹に寄って来る悪い虫に見えるかもしれないが俺にはそもそもなのはちゃんとどうなるつもりも無い。

確かに現時点では親しい幼馴染だし俺もなのはちゃんを大切に思ってる。

なのはちゃんも俺に対してそれなりの好意を抱いてくれているとは思うがそれは恋愛感情とは別種の物だろう。

いずれはなのはちゃんも幼馴染離れして恋をして彼氏を高町宅に連れてくる筈だ。

恭也君の凄まじいまでの戦闘力はその未来の彼氏にこそぶつけるべ

きなのだ。

その時は俺も僅かながらではあるが力を貸そう。

『マスター、考え中の所悪いがワタシの話を聞いてくれないだろうか』

俺が幾分ダークサイドな考えに思考が傾きかけた所でメカ犬から声が掛かった。

俺達は現在なのはちゃん達とは別ルートで聞き込みを行っている最中だ。

「如何したメカ犬？」

『うむ、このまま闇雲に探していてもらちが明かないと思ってな』

「だからって言ってもこれ以外に探す方法も無いだろう」

『いや、確実とは言えないがワタシに一つだけ心当たりが『キンキュウケイホウキンキュウ…』新たなホルダー反応だマスター。ここから南に３ｋｍだ』

ポケットに入れておいたタッチノートから警報が流れる。

場所が余り現在地から離れていない為かメカ犬も反応を察知した様だ。

「こんな時にホルダーか。行くぞメカ犬」

『了解だマスター』

俺はタッチノートを開いて黄色のボタンを押した。

『チェイサー』

タッチノートから聞こえる音声と共にこちらに激しいエンジン音が近づいてくる。

『おん待たせ～』

猛スピードで近づいてきたのは黒い弾丸とも言える様な勢いだった。

それは一台の真っ黒なバイクであり乙女口調なオッサンボイスである。

俺のある意味もう一人？の相棒になるライダーバイクのチェイサーさんだ。

『さあ、急ぐぞマスター』

メカ犬が早く乗るように急かして来る。

「ちょっと待ってくれ」

だが俺はそれに待ったを掛ける。

「乗る前にこれだけは言わせてくれ」

俺は一匹？と一台？に対して神妙な顔で問い掛ける。

「乗る前に変身させてくれ」

このまま乗れば前回のらめえええ！！！にまたなる事受けあいなので俺はそう進言した。

いや、マジ辛かったんですよあれ…

「また凄い事になってるな」

『うむ、そうだな』

『ほんとにね～』

ホルダーの反応があった場所、俺達が居た場所から南に３ｋｍ程進

んだ商店街に俺達はやって来た。

メカ犬は既にバックルモードになっており俺も変身済みだったりする。

チェイサーさんもリミットオフで完全なライダーバイク化しているので、何時でも戦闘準備は万端だ。

だが肝心のホルダーの姿が見えない。

商店街の惨状に映るのは犬だ。

大量の犬だ。

飼い犬、野良犬が所構わずあちらこちらで商店街を蹂躙している。

食べ物を扱う店に無断で侵入する犬。

電柱に親の敵と言わんばかりにマーキングする犬。

トイレの便器に入った水を飲んだ後に近くの人の顔を舐めようとする犬。

これ以上は文章で表すのは恐ろしすぎる事をしている犬達。

「まさに地獄絵図だな…」

『うむ、そうだな…む！マスター、ホルダーを目視できるレベルで発見したぞ』

メカ犬の声に反応してメカ犬の言う方向を見ると、そこには確かに人に似ながらも人では無い者がいた。

青白い体毛が全身を覆っており、その両腕には鋭い爪、耳は尖がっており口も大きく前に突き出された上で裂けてその口の中からは鋭い牙が見える。

『犬型のホルダーだな』

犬型とはタイムリーな話である。

『それじゃあ突っ込むわよ～！』

『うむ、犬型とはワタシとキャラが被る可能性があるからな』

相変わらず物騒な発言をする新宿二丁目バイクと、妙なライバル心を剥き出しにするフルメタル犬がいるが俺はあえて突っ込みは入れない。

何故かここで突っ込んだら負けな気がするからだ。

それに急いで終わらせて聞き込みの続きをしないといけないからな。

チェイサーさんが猛スピードでホルダーに迫る。

ただでさえバイクでは有り得ない素早さを誇る上に今はその枷が外されているのだ。

人外の強さを誇るホルダーといっても簡単に避ける類の物じゃない。

大分近づいた事でホルダーも俺達の存在に気づくが既に手遅れだった。

「きゃいいん!?」

見た目のわりに甲高い声を上げながらきりもみ回転して飛んでいく犬型のホルダー。

俺はその光景を何処か遠くの出来事の様に思いながら、交通安全第一だと硬くその心に誓った。

この一撃で完全に逝ったかと思われたホルダーだがどうやら無事だった様で、よろめきながらも何とか立ち上がった。

「い、いきなり、何してくれんのあんた?」

ホルダーが俺に話しかけてきた。

実際はチェイサーさんの独断特攻で俺の意思は何処にも介入してないんだが、ホルダーから見れば俺が轢き殺す勢いで突っ込んできた様に見えるだろうから俺が恨まれるのは仕方ない事なのか?

取り合えず、誰だと聞かれれば答えるのが何とやらって奴だ。

「俺は仮面ライダーシードだ」

「仮面ライダー?なんだか良く分からないけど邪魔するってんなら容赦しないよ」

ホルダーが吼える。
その姿は正に闘犬といった感じだ。
「やっぱりこの騒動の原因はお前なんだな。どうしてこんな事を…」
「あんたにはわからないさあああ！！！！」
ホルダーはそう叫ぶと、その両腕の鋭利な爪を武器に俺に襲い掛かってきた。
しかしチェイサーさんの特攻が余程効いたのか動きは幾分鈍く俺はホルダーの攻撃を難なく裁ききる。
「たあっ！」
俺はカウンターを合わせるまでも無いと、自らホルダーに飛び蹴りを叩き込む。
「ぐぎゃあ」
ホルダーは勢いの付いた俺の飛び蹴りをいなすことができずに後ろに吹き飛ぶ。
『今だ。マスター』
「ああ」
俺はメカ犬の言葉に短く答えてバックルからタッチノートを引き抜く。

緑のボタンを押す事で画面に全体図が表示される。
さらに画面の右足をタッチしてからバックルに再び差し込んだ。
『ポイントチャージ』
バックルから放たれる白い光が銀のラインを伝って右足に集まる。
「こいつで決めるぜ」
俺がその場から飛ぼうとしたその時だ。
俺の足に何匹もの犬が纏わり付いてきた。
「な、何だよこれ？」
下手に外そうとすれば今の俺ではこの犬達を傷つける可能性が高いので俺は身動きが取れない。
『そうか、これが奴の能力か』
「これがか？」
『恐らくは音波の一種を操る事が出来るのだろう。その波長が犬達に影響を与えて命令を下していたんだ』
メカ犬の言葉に俺は驚愕した。
そしてその能力を持つ本人にもう一度向き直るがそこにホルダーの

姿は無かった。

「いない！？」

俺は犬達を何とか傷付けずに引き剥がしてからホルダーの居た近くに行くものの既に痕跡すらなかった。

『反応もロストした。悔しいが逃げられたな』

メカ犬がそう告げる。

「如何するんだよ。このままにしておくのはまずいだろう」

俺はメカ犬にあたっても仕方ないと分かっていながらもそう言わずにいられなかった。

『うむ、それでこの事も含めてさっきの話に戻りたいのだマスター』

しかしメカ犬から返ってきた返事は意外な答えだった。

「タッチノートが反応する直前に何か言おうとしてたけど、今回の事と関係あるのか？」

『ああ、情報屋に聞こうと思ってな』

何やらまたこいつから意外な言葉が出てきた。

「情報屋？」

『ああ、海鳴市を調べていた一週間の間に知り合った。報酬さえ支

払えばどんな情報でも持ってきてくれる筈だ』

俺は突っ込まねえぞ。

もう、ここまできたら俺もボケに回ってメカ犬と一緒にボケ倒してやる。

「報酬って言ったって、小学生の俺に大金なんか用意できないぞ」

『それなら心配無い。奴に用意する報酬は現金ではないからな』

そう言ってメカ犬が俺に用意する様に要求してきた報酬に対して俺は…

思わず突っ込みを入れてしまった。

## 第四話　ワンワンパニック！バニングス？【前編】（後書き）

ポケモン新作プレイしました。

何と言うか…あれですね？

## 第四話　ワンワンパニック！バニングス？【後編】（前書き）

頑張って出してしまいました。

これで本当に続きは来週以降となります。

それと前編でサブタイトルの頭に第四話が入っていないので修正したのですが、何故か結果が反映されないのでそのままになってます。

分かり次第手直しするのでご了承お願いいたします。

それでは楽しんでいただけると幸いです。

それと今回は後書きにおまけがあるので見ていただけると嬉しいです。

# 第四話　ワンワンパニック！バニングス？【後編】

表があれば必ず裏もある。

普段は目に見えるものしか人は気づかないが、それでも見えない部分は確かに存在するのだ。

「なあメカ犬。こんな所にお前の言う情報屋なんて本当にいるのか？」

『ああ、間違いない。彼はこの場所を拠点に活動しているからな』

俺達は先程の戦いで犬型のホルダーを取り逃してしまった。

だがメカ犬がもしかしたら逃がしたホルダーの情報が何か掴めるかも知れないと言ってきた事から、現在海鳴市住宅街の裏街道を歩いている。

まだ日が落ちるには早い時間ではあるが何処か薄暗く、人が近くに居る気配も微塵も感じられない。

何でもこの街道の先にその情報屋がいると言う事なのだがどうにも胡散臭い。

メカ犬からその情報屋が要求する報酬というのを聞いたときも俺は、五秒前に決意した事を一瞬で放棄して突っ込みを入れてしまった程だ。

こんな報酬を要求するのは、一体全体どんな奴なんだとメカ犬に聞

いてみたのだが、会えば分かると言うだけで全く話にならない。

他に手掛かりになりそうな物も無いし、このまま闇雲に探してもどうしようもないという事から、取り合えず駄目元でメカ犬の案に賛同してここまで来た訳だ。

ちなみに例の報酬を持って来る為に一旦、自宅に帰った所、なのはちゃん達と顔を合わせる事になった。

なのはちゃん達の捜査は収穫が有った様で、どうやら子犬の飼い主が三丁目で犬おばさんと呼ばれるほどに犬好きで有名な人と分かったらしい。

それで、一度アリサちゃんの家に寄って子犬を連れてから、その犬おばさんの所に行ってみようという話に決まったのだ。

俺も誘われはしたがホルダーの件があるので、急用が出来たので間に合えば後で合流すると言って、詳しい住所だけ教えてもらってから、この裏街道にやって来て今に至る。

なんにせよ子犬の件はこれで解決しそうなので、一つ肩の荷が下りたって訳だ。

『着いたぞ。マスター』

メカ犬の声で俺は無事目的地にたどり着いた事を知ったが、その場所で最初に感じたのは疑惑だった。

「本当にこの場所なのか？メカ犬」

俺は思わずメカ犬にそう言い返していた。

俺は最初案内された場所に、その情報屋の家もしくは事務所でも有る物だと思っていたのだが、何も無いのだ。

その場所には建物等何も無い空き地だった。

有る物といえば空き地の端に数個のドラム缶と所々に雑草が申し訳無い程度に生えている程度で他には目に止まりそうな物は何も無かった。

『うむ、少し待っていてくれマスター』

メカ犬はそう言うと空き地の真ん中にまで移動して、俺とメカ犬以外誰も居ない筈の空き地で声を掛け始めた。

『今この町で起きている異変に対して出来るだけ多くの情報が欲しい。報酬も十分な量を用意している。姿を現してくれ』

空き地にメカ犬の声が響き渡る。

メカ犬の声が響いた数秒後、俺達以外の存在が皆無だった筈の空き地を含む周辺に、突然新たな一つの気配が生まれるのを感じた。

俺は気配の感じた方に視線を向ける。

その目線の先に見えるのは俺達がやって来たのとは別の薄暗い通路だ。

気配が此方に近づくにつれて、気配とは違う別の情報が得られるよ

うになる。

俺の耳にザッザッと地を踏みつける音が聞こえてくる。

気配と音が確実に俺達のいる空き地に近づいて来るのが分かる。

そしてその存在は、暗闇の中から姿を現した。

その姿は俺の思っていた人物像とは微塵も一致しなかった。

それは人の姿ですらなかったのだ。

全身が白い体毛に覆われていた。

所謂手と呼べる物は存在せず正に獣と呼ぶに相応しい風体だ。

地に着く四足には鋭い爪があった。

その口には人では到底有り得ない鋭利な牙を覗かせている。

耳は三角にピンと立って…

大きなつぶらな瞳が俺達をみつめていた…

「きゃん！きゃん！」

俗にチワワと呼ばれる犬種の犬が俺達の目の前に現れた。

「なあ、メカ犬」

『何だマスター』

「有り得ないとは思うが一つ聞きたいことがあるんだ」

『今更遠慮するなどマスターらしくないな。何でも聞いてくれ』

「ありがとうな。馬鹿馬鹿しい事を言ってるとは分かってるんだが如何しても聞きたいんだ」

『前置きが長いぞマスター。早く用件を言ってくれ』

「このチワワがお前の言っていた情報屋って事は、まさか万が一にも…有り得ないよな？」

『何を言っているんだマスターは』

「そ、そうだよな流石にチワワは無いよな。ハハハハ」

『彼がワタシの言っていた情報屋に決まっているだろう』

やっぱりそうですか！！！！！

俺はその場でＯｒｚに崩れ落ちた。

『彼がこの海鳴市一の情報屋のジャックだ』

「きゃん！きゃん！」

メカ犬の紹介でチワワ改め情報屋のジャックが短く鳴声をあげた。

何時までもショックで崩れ落ちている訳にもいかないので、俺はなるべく前向きにこのメカ犬と生犬との会話に参加しようと心に決めた。

『それじゃあワタシがジャックの翻訳を担当するからマスターは質問を頼む』

本当に今更なんだがお前は犬ともナチュラルに会話が出来るんだな…

メカ犬についてはもう存在からして常識とかけ離れた位置に属していると分かっているが、それでも日常生活に曲がりなりにも関わっている存在として、少しだけで良いから自重してほしい。

「それじゃあ早速…最近飼い犬や野良犬問わずに異変が発生してると思うんだが何か分かる事は無いか？」

俺はジャックに話しかける。

メカ犬に話しかけるのは随分慣れたけど、まさかチワワにマジで会話を試みる事になるとは思ってもみなかった。

「きゃんきゃん。きゃきゃん！きゃんきゃんきゃん！」

『その件についてなら俺の方にも幾つかの情報が集まっている。事の発端は今日から二週間程前にさかのぼるが、この付近を住処にしている野良犬達が連続で行方不明になった。保健所が来た訳でも無いのに突然にだ。その翌週には野良犬だけでなく、飼い犬までもが失踪し始めた。だが今日その行方不明になった犬達が姿を現した。場所は此処、海鳴市の商店街だ。と言っている』

あの短い鳴声にそこまでの意味が有る事にも驚愕するが、このチワワのジャックの言っている事が真実だとしたらこの事件は間違い無くあの犬型ホルダーの仕業だろう。

俺は次の質問をする事にした。

都合良くこの質問で犯人が何処の誰かなんて分からないかもしれないが、もしかしたらってこともある。

「もう一つ質問させてくれジャック。今から恐らく二週間前を前後して、この海鳴市内で犬に何かしらで深く関わっている人物が緑色のガラス球の様な物を拾っている筈なんだが、何か分からないかな？」

ホルダーの持つシステムは強い願いに反応するとメカ犬は言っていた。

それが本当なら今回のホルダーは犬型な上に犬を操る特殊能力を持っていた事から、普段の生活から犬と密接に関わっている可能性が高いと考えて俺はこの質問をしたのだ。

「きゃん！きゃきゃきゃん！きゃんきゃんきゃん！」

『不確かな情報だが三丁目の赤坊の飼い主がそんな感じの物を拾っていたと言っていたな。それとそのご主人はそれを拾ってから少し雰囲気が変わったとも言っていたぞ。と言っている』

雰囲気が変わった？

この情報だけじゃ判断がしにくいと俺は考えて俺は更に質問を続ける。

「その情報をもっと詳しく知りたいんだけど分かるかな？それと出来ればその赤坊にも会って直接聞きたいんだけど」

「きゃんきゃん！く～ん、く～ん」

『すまないがこの件に関してのこれ以上の情報は今の所、俺も持っていない。赤坊の所在についてだが彼と会うことは出来ない。昨日行方不明になった。彼も犬だったから恐らくは今回の失踪事件に巻き込まれたのかもしれないな。後これは情報と言うよりは、俺が個人的に疑問に思った事なんだが、今日の商店街で他の最近失踪した犬が全て現れた中で、赤坊だけはその姿が確認できなかった事だな。と言っている』

出来ればその赤坊にも聞きたかったけど、これ以上の情報は無いって事か。

その拾った飼い主に直接尋ねるって手段も有るけど、違う可能性もあるし、もしホルダーだったとしても素直に自分がホルダーだって事をばらすとは到底思えない。

結局振り出しかと溜息をつきながら、頭の中でこれまでの情報を整理する事にした。

そこで俺は奇妙な違和感を感じた。

今までのジャックとの会話で得た情報と、別の件での幾つかの情報が合致したのだ。

三丁目…

迷子の子犬…

行方不明…

犬と深い関わり…

商店街に現れなかった…

俺の頭の中で本来交わる事の無い二つの事件が何故か繋がる。

俺はこの妙な情報の合致に答えを出すために再びジャックに質問を再開する。

「ジャック。その行方不明の赤坊って犬はもしかして、赤い首輪をしたダックスフンドの子犬じゃないのか?」

「きゃん！きゃきゃん！きゃん！！」

『その通りだ。良く分かったな。この近辺では最近生まれた子犬でいつも赤い首輪をつけている事から、彼は犬連中の間では赤坊と呼ばれている。と言っている。む！マスター、まさか』

メカ犬も俺の考えた答えに気づいたのだろう。

今回のホルダーとアリサちゃんのお願いは、意図した訳ではないが、偶然にも繋がっていたのだ。

恐らく今回の犬型ホルダーの正体は三丁目の犬おばさんで間違いない筈だ。

赤坊と呼ばれた子犬の飼い主は、なのはちゃん達の話を聞いた限り三丁目の犬おばさんの可能性が極めて高い。

更にジャックの情報だ。

確かに証拠は無いが現時点でもっともホルダーの可能性があるのはこの人しか居ない。

「待てよ。だとしたら今なのはちゃん達は…不味い事になってるかも知れない。急ぐぞメカ犬！」

『了解だマスター』

俺とメカ犬は急ぎ走り出す。

しかし俺はそこで思い出したかのように反対に向き直り、ジーンズのポケットからある物を取り出してジャックの傍に置いた。

「情報ありがとうなジャック。これは約束の報酬だ。受け取ってくれ」

「きゃん！きゃん！」

メカ犬の通訳は無いが今回は俺にも何となくジャックの言っている事が分かった。

恐らくは、ありがとうと言った感じの事だろう。

俺とメカ犬は再び走り出す。

空き地には一匹のチワワと今回の報酬であるビーフジャーキーだけが残った。

俺とメカ犬は走っていた。

なのはちゃん達から貰った犬おばさんの住所は幸いな事に、俺達が居た空き地からはそんなに離れてもいなかったので、もしかしたら三人が犬おばさんの家に着く前に出会えるかもしれない。

『間も無く目的地に着くぞマスター』

「ああ」

この先の道角を曲がれば犬おばさんの家がすぐ目の前に見えるはずだ。

兎に角間に合ってくれと俺は心の中で何度も祈りながらその角を曲がった。

その先には最悪では無いが、その数歩手前の状況が広がっていた。

既になのはちゃん達は到着しており今正に犬おばさんの家のインターホンを押していた所だからだ。

「ごめんくださーい」

インターホンを押したのは子犬を抱き上げていたアリサちゃんで、インターホンに設置されていたスピーカーに話しかけていた。

「みんな！」

俺は大声を張り上げて三人の元に駆け寄った。

「純君？」

「もう、用事は済んだの？」

インターホンで会話しているアリサちゃん以外が俺が走って来るのを見て声を掛けてきた。

「ま、まあね」

何とか追いついたのは良いけれど、この先どうやって説明しようかと内心考えていたら、急に犬おばさんの家の扉が開いた。

中から出てきたのは五十台半ばと思われる女性だった。

恐らくこの人が犬おばさんで間違い無いだろう。

「あの、この子なんですけどご近所の方が貴女の飼い犬何じゃないかと言うのでお尋ねしたんですけど…」

アリサちゃんが代表して犬おばさんに話しかけた。

犬おばさんは黙って頷いた。

これで何の問題も無いならそれに越した事は無い。

でも俺の心の中で何かがざわめく。

一見普通のおばさんに見えるが何かがおかしい。

確証は何処にも無いけれど物凄くいやな感じだ。

俺は言い知れぬ不安を抱きながら犬おばさんを観察する。

そして観察した末に見つけてしまったのだ。

それは俺が戦いの中で何度か目撃したもの。

一見ただのガラス球にも見えるが、存在感がまるで違う。

エメラルドグリーンに輝くそれが犬おばさんの右の人差し指に指輪状になって取り付けられていた。

『マスター！』

どうやらメカ犬もあれをシステムと判断した様だ。

ならば今俺がやるべき事はただ一つ。

「アリサちゃん！この人に子犬を渡しちゃ駄目だ！」

俺とメカ犬はアリサちゃんと犬おばさんの間に壁を作るように割って入った。

「ち、ちょっとどうしたのよ突然？」

アリサちゃんが抗議の声を上げるが、それよりも後ろにいた二人は、ある異変に気づいたのか後ろに一歩後退した。

犬おばさんの身体全体が薄緑の光を発し始めていたのだ。

「な、何よこれ？」

「良く分からないけど様子が変だ。アリサちゃんも下がって！」

俺の言葉と同時に更に犬おばさんを包む光は強烈になった。

だがそれは一瞬の事で緑色の光はすぐに飛散した。

そしてその場に佇んでいたのはもはや人と呼べる生物ではなかった。

全身に青白い体毛を生やし、その両腕と口に鋭い爪と牙を持つ怪物、商店街で一度戦った犬型のホルダーだった。

「「「きゃあああああああ！！！！」」」

その姿を間近で見たことで恐怖したであろう三人が叫ぶ。

「みんなは早く逃げて！！！」

俺とメカ犬はホルダーに勢い良く飛びついた。

メカ犬は奴の視界を遮る為に頭部に、俺は少しでも動きを阻害しようとその胴体に必死にしがみ付いた。

「な、何やってんのよあんた！」

「危ないよ！」

「純君も早く逃げて！」

三人が俺の行動を見て我に返ったのか其々に叫んでいる。

「いいから！は、早く逃げて！出来るなら早く助けを呼んできてくれ！！」

俺はホルダーにしがみ付きながらも何とか三人に叫び返した。

この三人の前で変身する訳にはいかない。

もし俺がこんな危険な事をしているなんて知ったら、この子達は絶対に自らもこの一連の事件に関わろうとするからだ。

なのはちゃんもありさちゃんもすずかちゃんも、余りにも優し過ぎるのだ。

たとえ自分に力が無いとしても、それでも何かが出来るんじゃないかと考えて行動に移すんだろうなと、容易に想像できる。

だからこそ三人には絶対に言えない。

俺が力を手に入れたのは全くの偶然だけど、俺はみんなの様に力が無くても何かが出来るんじゃないかなんて考えられないけど、それでも俺はこの心優しい女の子達を全力で守りたい。

「早く行け！！！」

俺は普段より口調を荒げて叫ぶ。

その気迫が伝わったのかどうかは分からないが、三人は渋々ながら

も納得してくれたようだ。

「すぐに戻ってくるからね」

「絶対無事でいてね」

「死ぬんじゃないわよ」

三人は口々に言って走り出した。

此処で手をこまねいているよりは一秒でも早く助けを呼んできた方が良いと判断したのだろう。

俺は走り去る三人の後姿を見て少しだけ安心した。

それが油断になったのかもしれない。

俺はホルダーの爪でシャツを摘まれて持ち上げられてしまった。

反対側の手にはメカ犬が摘まれている。

「よくもやってくれたね。あんた達」

俺とメカ犬を摘み上げたホルダーが恨めし気に言う。

「なあ、メカ犬。俺さ…凄く嫌な予感がするんだ」

『奇遇だなマスター。ワタシもだ』

俺とメカ犬の予感は全く残念な事に現実の物となった。

ホルダーは何を思ったのか、俺とメカ犬を人の限界を超えた驚異的な筋力を持って上空に放り投げたのである。

ホルダーは俺達を放り投げると一気に走り去って行った。

今の所最大の問題は、上空に放り投げられた俺達だ。

俺とメカ犬は目下パラシュート無しの逆スカイダイビングの真最中なのである。

もしもこのまま地面に落下すれば、メカ犬は兎も角俺の命は無いだろう。

一体如何したもんか？

『マスター！』

俺が半ば放心状態に陥っていると、落下しながらもメカ犬が此方に近づいて話しかけてきた。

『マスター！こうなったらこのままやるぞ！』

「…マジでか？」

メカ犬の言うやるとは間違いなくあれの事だろう。

こんな非常時にうまく出来るのかと俺は不安に刈られた。

だがこのまま下に落ちればそれこそ命は無い。

どちらにしても今は、一縷の望みを信じて賭けに出るしかないわけだ。

「ああ…こうなったらやけくそだ！行くぞ！メカ犬！！！」

『ＯＫだ！マスター！！！』

俺はポケットからタッチノートを取り出しボタンを押す。

『バックルモード』

音声がすると同時にメカ犬は銀のベルトに変形して俺の腹部に巻き付いた。

「変身」

俺は決められたキーワードを叫び、バックルの中央の溝にタッチノートを差し込んだ。

『アップロード』

俺は凄まじい勢いで落下しながら白銀の光に包まれた。

その光が収まって現れるのは、メタルブラックのボディに銀のラインとＶ字の角飾りに赤く大きな瞳を持つ一人の戦士だ。

俺は体制を保ちながらそのまま地面に降り立つ。

その衝撃で幾らか地面が陥没するが俺への被害は多少足が痺れる程

度だった。

『成功だな。マスター』

「な、何とか間に合った…」

俺は今命がある事に心から感謝する。

『それよりも急がないと、なのは嬢達が危険だぞ。マスター』

「あ！そうだった！！急いでホルダーを追うぞメカ犬」

『うむ！』

仮面ライダーに変身した俺はホルダーの後を追うべくその場から移動を開始した。

チェイサーさんを呼んでホルダーの後を全速力で追う俺達。

ホルダーの反応は本当に目と鼻の先ですぐに追いつく事が出来た。

だが俺の視線に映る情景は余り好ましくない物だった。

ホルダーは既になのはちゃん達に追い着いており、なのはちゃん達は怯えながらも懸命に子犬を守ろうとホルダーと子犬の間に立ち塞がろうとしている。

『不味いぞマスター』

「分かってる」

俺はチェイサーさんにスピードを更に上げてくれる様に頼んだ。

『まっかせなさ～い』

軽快な返事と共に俺の頼みを聞いて一気にスピードが加速するチェイサーさん。

その姿はまさに放たれた一発の弾丸だった。

『さあ、突っ込むわよ』

『うむ、やはりキャラが被る可能性があるからな』

「今回に限っては反対しない」

ある意味初めて全員の意見が一つに纏まり突っ込む事になった。

チェイサーさんは相変わらずだし、メカ犬はまたしても意味不明なライバル心から、俺も先ほどの逆スカイダイビングは結構本気で死ぬかもと思った恨みから、二人?の意見に賛同する事にした。

みるみる内に俺達とホルダーの距離は縮まっていく。

ホルダーも近づいて来た俺達にようやく気づきはするが、反応するには遅すぎた。

「きゃういいいいん!?」

再びホルダーにチェイサーさんのバイクタックルが綺麗に決まった。

今回に限っては同情の余地は一切無い。

ホルダーは前回のきりもみ回転に加えて縦の回転も披露してくれた。

これを一つの技術として昇華できたならば、新体操界に新風を巻き起こすことも夢では無さそうだ。

「え?」

「何なの?」

「今度は何だって言うのよ?」

ここまでの流れの一部始終を見ていて驚いているであろう、なのは

ちゃん達が混乱しながらも思った事を口に出す。

まあ、驚くのも無理は無いだろう。

突然目の前の人が怪物に姿を変えて襲い掛かってきたと思ったら、バイクに乗ったメタルブラックの何かが突っ込んできたのだ。

驚くなと言う方が無理な話だ。

俺はチェイサーさんから降りてホルダーとなのはちゃん達三人を遮る様に立ち塞がる。

全力で突っ込んだにも関わらずまだホルダーは動く事ができる様で、ゆっくりながらも立ち上がってきた。

「ま、またあんたかい。一体なんだって言うんだいあんたは？」

立ち上がったホルダーがよろめきながらも俺に話しかけてくる。

最初に会った時に確かに名乗ったんだけど、どうやら覚えてくれていないらしい。

しょうがないから俺はもう一度改めて名乗る事にした。

「俺は仮面ライダー。仮面ライダーシードだ」

しかしこの名乗りに反応を返したのは目の前のホルダーではなく背後にいる美少女三人組だった。

「「「仮面ライダー？」」」

三人の声が見事にシンクロした。

そういえば三人が仮面ライダーを見るのってこれが初めてだったな。

「あ、あの仮面ライダーさん」

なのはちゃんが俺にというか、仮面ライダーな俺に話しかけてきた。

「私達と同じ年ぐらいの男の子があの毛むくじゃらの近くにいたと思うんだけど何か知らないですか？」

アリサちゃんがホルダーに指差しながら言葉を繋げる。

「その男の子、私達のお友達なんです。何か知っているのなら教えてください」

すずかちゃんが懇願するように訴えかけてくる。

三人が言っているのは恐らく俺、板橋純のことだろう。

こんな状況でも他人の心配をしてくれるなんて本当に優しい子達だ。

「ふん、あのムカつくガキなら今頃ミンチになってる頃だろうよ」

三人の質問に答えたのはホルダーの方だった。

ホルダーの言葉に顔が青ざめていく三人。

余計な事言ってくれるな、このホルダーは。

俺は三人を安心させるために一芝居打つ事にした。

「心配する事は無いぞ。お嬢さん達。お嬢さん達が言っている少年は無事だ」

「「「本当ですか！？」」」

俺の言葉に暗くなっていた三人の顔に笑顔が戻ってきた。

「ああ、俺がここに来る途中に助けた。今は安全な所にいるから大丈夫だ」

この言葉に三人は心から安心した様だ。

「さあ、ここは危ないから下がっていてくれ。後の事は俺に任せろ」

俺は安心したであろう三人に下がる様に促した。

なのはちゃん達はがんばってくださいと言いながら俺の指示する通りに後ろに下がってくれた。

さてと、本番はここからだな。

「おい！お前の目的は何だ。何故犬達に商店街を襲撃させた。それに何でこの子達に襲い掛かろうとしたんだ？」

「…いいだろう。教えてやるよ。あたしゃ犬が大好きでね。近所じゃ犬おばさんなんて呼ばれる程さ。だけどあたしゃ気づいちまった。犬を不幸にしているのは、紛れも無いあたし達人間だってことにね。

あたしゃこの力で犬達が幸せに暮らせる世界を作るのさ。そのためには犬が人間を支配する必要があるだよ。人間が犬にしてきた様に、今度は犬が人間を支配してやるのさ」

この人も暴走したシステムの影響下にあるのか、正気の沙汰じゃない。

『考えそのものがプログラム侵食されているようだな。マスター、戦う以外にこのホルダーを止める術は無いぞ』

「ああ、分かってるさ」

ホルダーは話はここまでだと言わんばかりに襲い掛かってきた。

その両腕の爪が何度も俺を切り裂こうと振り上げられる。

だがそんな物に素直に当たってやる謂れの無い俺は、その攻撃を裁きながらカウンターに右と左の拳を交互にホルダーの横っ面に叩き込む。

「おりゃ！」

俺は尚も振り上げられるホルダーの腕を押さえつけてその胴体を思い切り蹴りつけて後方に吹き飛ばした。

本来ならここで必殺技が決められる筈なのだが、それを邪魔する存在がこの戦いの場にやってきた。

「ちっまたか！」

商店街で暴れていた犬達がまたしても俺の身体に纏わり付いてくる。

「ふふふ、これで形成逆転って訳だね」

そういえばこのホルダーの能力は犬を操る事だった。

俺が万事休すかと思った直後である。

突然俺に張り付いていた犬達が離れて、ある一点目掛けて走っていく。

「な、なんだい？一体如何したっていうんだい？」

ホルダーもこの現象が理解できずに困惑している。

犬達の走り去った方向の先を見ると、俺の良く見知った顔の三人組、なのはちゃん達が何かの袋を持っており、その袋の中の何かを犬達に与えていた。

「アリサちゃん！こっちのもうすぐ無くなりそうだよ」

「こっちも～」

「任せなさい！まだまだいっぱい有るわよ」

アリサちゃんはなのはちゃんとすずかちゃんの言葉に答え犬の肉球がプリントされたバックから新たにその袋を幾つも取り出した。

「あ、あれはまさか！」

その袋を見て驚いたのはホルダーだ。

どうやらホルダーはこの袋の正体を知っているらしい。

「あれは犬ならば本能のままに求めてしまうと言われる大人気ペットフード！ワンちゃんまっしぐら！！！」

「その通りよ！！！」

ホルダーの言葉にアリサちゃんが肯定の言葉を発した。

「真の愛犬家なら誰でも、何時だって常備している大人気ペットフードワンちゃんまっしぐらよ！どんなに躾けられた犬でもこれを出されたら五秒で落ちるわよ！！！」

アリサちゃんが自信満々に言い放った。

「くう、まさかその手で来るとは…」

何やら犬至高主義の二人にしか分からない駆け引きが発生しているみたいだけど、これはホルダーの能力を無効化できたって事なんだろうか。

「それに毛むくじゃら！あんたの言ってる事は間違ってるわよ！！！一人の愛犬家として言わせて貰えば人と犬はただの主従関係なんてものじゃ決して無いわ。犬はね、一緒に人生を生きるパートナーなのよ！！！」

アリサちゃんが小学一年生とは思えない犬と人の在り方についての持論を繰り広げる。

「仮面ライダー！！」

アリサちゃんが今度は俺に喋りかけてきた。

「一人の愛犬家としてお願いするわ。あの道を踏み外した毛むくじゃらを止めてあげて。犬を本当に愛しているなら…こんな事、犬達の為に絶対良くない事だもの」

確かにアリサちゃんの言うとおりだ。

これ以上は、このホルダー自身だって本当の犬好きなら望みはしない筈だ。

「少女よ。その願い。確かに俺が引き受けた。こいつは俺が全身全霊を持って止めてみせる！」

俺はアリサちゃんの願いを聞き入れた。

今俺は、愛犬家の魂と共にホルダーに立ち向かっているんだ。

「ふん、うるさいんだよあんたらは！！！！」

ホルダーは痺れを切らして再び俺に駆け込んでくる。

『来るぞマスター』

「ああ！！！」

俺はバックルからタッチノートを引き抜き緑のボタンを押して画面

に自身の全体図を表示させる。
そして右腕の部分をタッチして再びバックルに差し込んだ。
『ポイントチャージ』
音声が聞こえると、バックルから白い光が放たれて銀のラインを伝って右の拳にその光が集約する。
「こいつで決めるぜ」
俺は輝く右の拳を腰に持っていく。
「ライダーパンチ」
俺は走り出す。
勿論向かう先はホルダーだ。
互いにその拳が届く距離にまで接近する。
ホルダーは鋭い爪で、俺には全てのエネルギーを集約した拳を持って、目の前の敵を捕らえようと突き出す。
「うおおおおおお!!!!」
俺の拳がホルダーの爪を砕きそのままホルダー自身の肉体にも突き刺さった。
その瞬間ホルダーは全身から白い光を放ちながら爆発した。

後に残ったのは、仮面ライダーである俺自身とその足元で気絶している犬おばさんだけだった。

爆発が収まり俺はアリサちゃんに振り向く。

ここで言葉は要らない。

俺は彼女との約束を果たした事を示すために一つの行動を取る。

右手を肩の辺りまで持ち上げて拳を握り締め親指だけを立てて見せた。

所謂サムズアップだ。

約束への報酬は、一人の少女の最高の笑顔だった。

あの事件の後、子犬は無事に犬おばさんの元に戻っていった。

それというのも、犬おばさんにはホルダーとなっていた間の記憶が無かったのだ。

メカ犬が言うにはそれは当たり前の事らしい。

詳しい仕組みは聞いても俺には良く理解する事が出来なかったが、本人にとっても子犬にとってもその方が幸せだという事は間違い無いだろう。

兎に角これで今回の犬騒動は終わった訳である。

『ここは犬パラダイスだなマスター』

「…ああ」

俺は今、アリサちゃんの自宅であるバニングス邸にお邪魔している。

「それでね…ちょっと純聞いてるの？」

「ああ、うん、聞いてる。聞いてるから」

「それなら良いのよ！それでね…」

俺は今、バニングス邸で飼われている犬達の鳴声をバックコーラスに、アリサちゃんの犬談義につき合わされている。

あの事件以降アリサちゃんの犬好きは更に拍車が掛かり手が付けられない程となっていた。

なのはちゃんとすずかちゃんも呼ばれているがやはり古来からの…
以下略な訳でいまだに来ていない。

今の俺にできることはアリサちゃんの犬談義にひたすらうなずき続ける事だけだった。

『大変だなマスターは』

「そう思うなら変わって『ワタシは用があるのでジャックの所に言ってくるぞ』逃げやがった」

「でね～って純！あんた私の話本当に聞いてるの？」

「うん、聞いてるよ」

取り合えず、今日の海鳴は犬も含めて至って平和だ。

# 第四話　ワンワンパニック！バニングス？【後編】（後書き）

おまけ

「行くぞメカ犬！！！」

『了解だマスター！！！』

『バックルモード』

脅威の変形機構！

リアルなサウンド！

更に光る！

「変身」

『アッププロード』

白銀の光を浴びて君も仮面ライダーシードに変身だ！！！

ＤＸシードバックル近日発売決定！！！

勿論冗談です。

## 第五話　読書少女と森の妖精さん【前編】（前書き）

約一週間ぶりの投稿になります。

基本は前編と後編で分けながらやって行こうと思っていますがこれだと一話一話が長いでしょうか？

それでは楽しんでいただけると幸いです。

後編は恐らく来週になると思います。

また頑張る可能性もありますが…

# 第五話　読書少女と森の妖精さん【前編】

昔々あるところに一人の女の子がいました。

女の子は人里を離れた山の中で家族と共に平和に暮らしていました。

家族はとても平和に暮らしており、女の子も今の生活に大きな不満はありませんでした。

だけど一つだけ、女の子にも悩みがありました。

女の子には暖かな家族はいましたが友達が居なかったのです。

人里を離れた山の中に住んでいるため家族以外に人と接する機会も殆ど無く、女の子の唯一の遊び相手は女の子の住んでいる山の森だけでした。

その日も女の子は森で一人遊んでいましたが、女の子はこの日不思議な出会いをします。

森の中で女の子が遊んでいると、綺麗な歌声が聞こえてきたのです。

女の子は思いました。

なんて素敵な歌なんだろう。

女の子は歌声の聞こえる場所に向かいました。

歩き続けて暫くすると、女の子は歌声の主を見つけました。

その容姿はとても可憐で、黄色のローブの様な物を纏っておりその背中からは四枚の透き通った羽があったのです。

歌声の主は人では無かったのです。

女の子は歌声の主の前に出て行き言いました。

あなたは森の妖精さんですか？

女の子はこの日、生まれて初めての友達と出会ったのです。

「…面白いお話だね、純君」

「うん、そうだね」

俺はすずかちゃんにそう返事を返すと両腕をゆっくりと上に持って行き大きく伸びをした。

流石に長時間本を読んでいると身体が硬くなってしまい、背中の辺りがバキバキと軽快な音を鳴らした。

俺が今居る場所は海鳴市の図書館だ。

今日は俺とすずかちゃんの二人でのんびりと読書を楽しんでいたのである。

普段みんなで遊ぶ時は余りこういった施設には来ないのだが、俺とすずかちゃんだけの場合は当たり前の様に図書館で読書をするという選択肢が追加される。

元々今日は、なのはちゃんとアリサちゃんも一緒に遊ぶ約束をしていたのだが、二人とも家の都合で来れなくなってしまい俺とすずかちゃんの二人だけになってしまったのだ。

それで如何して図書館なんだと疑問に思うかもしれないが、それなりの理由も存在する。

すずかちゃんは見た目おっとり系な割に怪力美少女でもあるが、見た目通りの趣味も持ち合わせていたりするのだ。

その趣味の一つが読書だ。

小学一年生にしては、すずかちゃんはかなりの読書家で、何処でも常に一冊は本を持ち歩いている程に本を嗜む。

そして俺はそんな読書大好きなすずかちゃんに、同類の本好き読書少年と認識されている。

なぜそんな認定を下されたかというと、これは俺の転生してから行った行動の一つに起因する。

俺は年齢的に最低限の文字を理解できてもおかしくない時期になってから兎に角この世界の情報を集めまくった。

勿論その時に本も情報の一つとして多量に読み漁っていたのだ。

そしてこの時は同時進行でなのはちゃんの面倒も見ていたわけだが、なのはちゃんから見たら俺はただ単に本を読むのが好きな少年に映っていたのだろう。

つまりなのはちゃん経由ですずかちゃんは俺の事を自分と同じ読書仲間だと思った訳だ。

それを知ってからはすずかちゃんは良く、俺と一緒に本を読もうと誘うようになってきた。

幾ら頭が良いとは言っても今は小学校に入学してそんなに時間も経っておらず、成績トップクラスのアリサちゃんでさえすずかちゃん程には本を読まないので、自分と同程度かそれ以上に本を読んでいる同年代というのは、すずかちゃんにとっては稀な存在なのかもしれない。

実際の所俺自身も前世の頃から本はジャンルを問わず中々の量を読んでいた方だったので、お互いに時間の空いたとき等は、二人で読書をする事に異論は無い。

最初の頃は同じ場所で其々別の本を読んでいたのだが、それでは一緒に居る意味が無いとすずかちゃんは、本好きの飽くなき探求スピリッツを発揮し、それなら一冊の本を二人で読もうと提案してきたのだ。

何やら気合の入りまくったすずかちゃんに、俺は当然の事ながら反抗する事など出来る筈も無く、この提案は即座に可決とされた。

そういった経緯で俺は今現在進行形で、すずかちゃんと一冊の本を密着状態で読んでいる。

普段のすずかちゃんであれば、こんな状態になれば瞬時に離れて恥ずかしがる筈だが、本に魅せられた今のすずかちゃんには、隣に密着している俺の存在がある事など全く意に介さない。

この状態が当たり前と言わんばかりに堂々とした態度で読書を楽しんでいる。

「あら、可愛いカップルさんね」

俺達が読書をしていると、後ろから女性の声が聞こえた。

振り向くとそこに居たのは、二十台半ばと思われるこの図書館の司書の制服に身を包んだ女の人だった。

「もうすぐ夕方になるから、遅くならない内に帰らなきゃ駄目よ。特に君はこの子の彼氏なんだからちゃんと帰りもエスコートしてあげないとね」

司書のお姉さんは二人にというよりも、俺に対して悪戯っ子の様な笑顔を浮かべながら言って、サービスカウンターの方向に歩き去って行った。

この時すずかちゃんはこの司書のお姉さんの言葉で顔を真っ赤にさせて口を金魚のようにパクパクさせ続けていた。

先程のやり取りが余程恥ずかしかったみたいだ。

俺とすずかちゃんは司書のお姉さんの言いつけ通り其れから程なくして図書館を出る事にした。

結局そのとき読んでいた本は読みきる事が出来なかったので借りて帰る事になった。

その貸し出しの際にカウンターに居たのが先程俺達を可愛いカップルと言った司書のお姉さんでまたしてもからかわれたが、このあた

りの記述はすずかちゃんの名誉に関わるので割愛させていただこう。

まあ、そんな紆余曲折を経て俺達は図書館を出てきたわけだ。

「それじゃあ純君。この本は私が預かっておくからまた明日二人で一緒に読もうね」

「うん。また明日。すずかちゃん」

俺はすずかちゃんの家である月村のお屋敷前まで送り、挨拶を済ませてから家路へと急いだ。

しかしアリサちゃんの家もそうだけど、すずかちゃんの家も相当にでかい。

なのはちゃんの家だって家の敷地内に道場がある時点で一般的では無いし、如何して俺の関係者は家庭からにして一般とかけ離れた人物が多いのか偶に不思議に感じる。

これでは益々俺のモブキャラスキルに磨きが掛かってしまうと不安になるが、それを言った所で今更な部分も多いので、気にしても仕方ない事なのかもしれない。

ただ、担任の先生に点呼の際に呼び忘れられる回数が最近は加速度的に増えているので、出来る限りの対策は考えておくべきだと、俺の本能が警報を鳴らしていたりもする。

俺は考えても答えの出ない己の人生における最大のテーマをその胸中に抱えながら、自宅への帰還を果した。

その翌日。

昨日の約束通り、俺とすずかちゃんは二人で本の続きを読むために一緒に居た。

場所は昨日の図書館では無く俺の家だ。

『すずか嬢は本当に本が好きなのだな』

今日はメカ犬も家におり、すずかちゃんが本を取り出すのを見ながら話しかけてきた。

「うん。本は色んな事を教えてくれるから私は大好きだよ。それに物語を読んだりすると実際にその場所に行った様な気分になったりするしね」

『それは中々に興味深い。ワタシは情報を得る際は解析やダウンロードといった手法を用いるため読む概念が如何にも理解出来ないからな』

「う～ん。メー君はそれをして面白いって感じたことは無いのかな？」

『うむ。個人的な主観に基づき、すずか嬢の言っているであろう状態になった事は何度かあるかも知れないな』

「それと似たような物だと私は思うよ」

『成る程。それではワタシも読書を楽しんでいると言えるのかもしれないな』

「ふふふ、きっとそうだよメー君」

すずかちゃんとメカ犬は示し合わせた様に笑い合った。

『それではマスターにすずか嬢。これから読書する所を邪魔して済まなかったな。ワタシはジャックに用事があるのでこれで失礼するぞ』

メカ犬はそう言うと、俺達の前から歩き去って行った。

「純君。メー君が言ってたジャックって誰なの？」

「ああ、メカ犬の犬友達だよ。最近良くつるんでるんだ」

ジャックとはこの海鳴市一の情報屋でありチワワな奴だ。

メカ犬は日頃からホルダーの情報が無いかと良く彼の所へ行くのだが、何か馬が合ったらしく最近はプライベートでもジャックに会いに行っているらしい。

メカ犬も取り合えず形としては犬にカテゴリーできるかもしれないので、それも有りなのだろう。

「そうなんだ。それじゃあ早速続きを読もっか」

「うん。そうだね」

俺はすずかちゃんに返事を返してから隣の椅子に腰掛けた。

そして本を開いたのだが、そこで異変が起き出した。

ページを開いた瞬間に本が眩いまでに発光しだしたのだ。

「な、何なの？」

「分からない。でも危ないかもしれないからすずかちゃんは下がって！」

俺は咄嗟にすずかちゃんを背中に庇いながら尚も輝き続ける本を睨みつける。

『キンキュウ…』

ん？

今一瞬だけどタッチノートが反応した様に思えた。

一応ポケットから取り出してみる物のタッチノートは沈黙を守っており、ホルダーの反応が無い事を教えてくれている。

気のせいだったんだろうか…

「じ、純君。あれ見て！」

すずかちゃんの言葉に我に返った俺が指し示された指の方角の先を見ると、謎の発光現象を続ける本に更なる変化が始まっていた。

本は己の姿を捨てて光の中で別の何かに変貌していった。

そのシルエットが何処か人の形を思わせる形を取った時、更に光は勢いを増して俺は堪らず目を閉じた。

その急激な発光も瞬間的なもので、暫くしてから目を開けると、そこにはファンタジーな存在が居た。

黄色いローブの様な布を全体に巻きつけており、背中からは四枚の羽を生やしている。

この特徴を除けば今目の前に居るのは普通の女の子に見える。

だけどこの子が人間では無い事は一目で分かる。

その奇抜な格好や背中の羽以前に決定的に違う部分が存在するからだ。

この女の子は小さかったのだ。

それもサイズにすればメカ犬と同程度の手のひらサイズである。

俺の知っている限りではこんな存在が実在するなんて聞いたことが無い。

もし仮にいたとしても、日本のこんな一般家庭に何の前触れも無く出現する確立なんて限りなく無いに等しい事だろう。

それでも今一つの現実としてこのファンタジーは目の前に、確かに存在しているのだ。

暫くはファンタジーも何処か放心していた様だったが、やがてその瞳に一つの確固たる意思を灯して、辺りをキョロキョロと見回し始めた。

そしてその視線が一人の少年と、一人の少女を捕らえた。

つまり俺とすずかちゃんの事だ。

ファンタジーは俺達を交互に見た後、屈託の無い笑顔を浮かべて文字通り飛んできた。

四枚の羽を細かくはためかせ、黄金色の粒子を撒き散らせながら飛んできたファンタジーは俺とすずかちゃんの目の前にやって来ると自己紹介を始めた。

「初めまして。私の名前はフェアリーベル。森の妖精だよ。ベルって呼んでね」

ベルと名乗った女の子はそう言ってから、宜しくねと言っておじぎをした。

この一連の中で俺とすずかちゃんができた事はただ固まり続ける事だけだった。

未知との邂逅を果した俺達はあの後何とか正気を取り戻して、自身を森の妖精だという手乗りサイズの女の子、ベルに色々と聞いてみる事にした。

俺はメカ犬の事も有り多少は耐性が出来ていたので割りと早く回復する事が出来たのだが、すずかちゃんも俺と殆ど変わらずに復帰してきたのは以外だった。

まあ、パニックに成られても困ってしまうので余り気にしない事にしておこう。

取り合えず質問をしてみた結果なのだが、ぶっちゃけて言ってしまえば最初のベルの自己紹介部分の情報以外は殆ど分からなかったのである。

ベルは自身の名前と森の妖精だという事と、今まで眠っていたという以外は何も覚えてないと言うのだ。

本人が分からないと言ってる以上、先の進展も期待できないので如何しようかといった話になったのだが、この時すずかちゃんが一つの提案を出してきた。

「だったら私のお家に来れば良いよ」

俺はこの時まですずかちゃんは基本おっとり系だと思っていたけれど、意外にアグレッシブな一面もある事を知った。

ベルもそのすずかちゃんの提案に賛成した。

俺の家で預かっても良かったが、俺の家には既にメカ犬が居るし、女の子同士の方が何かと都合も良いだろう。

この後も話し合いは続き、取り合えず暫くの間は周りにもベルの事は内緒にして、様子を見てみようという事に落ち着いた。

話し合いが終わる頃には日も傾き掛けており、今日はこれで解散する事になった。

「私と純君の…二人だけの秘密だね」

すずかちゃんはそう言ってベルを連れて帰っていった。

すずかちゃんとの約束の手前、誰にも言う訳にはいかない。

だけど俺は突然目の前に現れた森の妖精ベルについて、幾つも気になることがある中で、特に気になる事が一つだけある。

俺の勘違いなのかも知れないが、一瞬だけタッチノートが反応した様に思えたのだ。

ベルがホルダーだとは勿論思えないが、それでも何かしらの関係が在るかもしれない可能性が少しでもあるならば、メカ犬にだけでもこの事を話して置かないといけない。

俺はメカ犬が帰ってきてから、一度相談してみる事にした。

俺が決意を決めてからそう時間も掛からずにメカ犬は帰ってきた。

『今帰ったぞ。マスター』

メカ犬が俺の部屋に入ってくる。

「なあ、メカ犬に話があるんだ。少し時間良いか？」

『うむ。何の話だ？今更改まって』

メカ犬は俺に続きを話すように促してきたので俺は話を切り出す事にした。

「実は俺さ…妖精に遇ったんだ」

『…マスター。原因はストレスか？』

あれ？

何か話が変な方向に向かってないか？

『最近のマスターは戦いの連続だったからな。ワタシの立場としては余り多くの事を言ってやる事はでき無いが、今日は取り合えず早く寝た方が良い。さあ、早く布団に入るんだマスター。ゆっくり休むんだぞ』

何故だろう。

メカ犬にとんでもない誤解を与えている気がする。

変だな？

悲しくとも何とも無い筈なのに俺の目から心の汗が流れ出てきやがる。

『さあ、マスター早く布団に入るんだ。明日も辛いようならワタシから母殿に言っておくから、病院に行って看てもらおう』

メカ犬の優しさが俺の心を抉り捲くりやがった。

俺の心の汗の洪水量は本日最高を記録する事に相成った。

俺が心の汗を大量に流したあの日から一週間が過ぎた。

メカ犬の誤解は未だ解けておらず、今も妙な優しさを持って俺に接してくる。

俺とメカ犬の事はさて置き、この一週間ですずかちゃんとベルは随分と仲良くなった。

すずかちゃんには珍しい事に、ベルを呼び捨てで呼んでいる事からも仲の好さが伺える。

未だ俺以外にはベルの存在は秘密にしているが、もうそろそろなのはちゃん達にも打ち明けても良いのではないかと思う。

その旨をすずかちゃんと話した所、すずかちゃんも同じ事を考えていた様で自分から話すと言っていた。

だが俺は一つの後悔をする事になる。

すずかちゃんは俺と同じ過ちを犯してしまったのだから…

放課後の教室ですずかちゃんは、なのはちゃんとアリサちゃんに満面の笑顔で言い放った。

「私ね。妖精さんとお友達になったんだよ」

周りの空気が凍るのを俺は確かに感じた。

そしてなのはちゃん達の心の距離が遥か彼方に飛んで行くのを、俺は心の目で確りと目撃したのだ。

程なくして心が無事に身体へと帰還した、なのはちゃんとアリサちゃんの瞳が慈愛に満ちていた。

「すずかちゃん…私達何があってもお友達だよ」

なのはちゃんが優しくすずかちゃんを抱きしめた。

「悩みがあるなら言いなさいよね。私達にできる事なら何だってしてあげるから」

アリサちゃんがその後ろからすずかちゃんの肩にそっと手を添えていた。

「え？え？」

雰囲気がすっかり変わってしまった二人にすずかちゃんは戸惑うばかりだった。

俺はその光景を見ながらまるで一週間前の自分を見るかのようで、

再び心の汗を己の目から流していた。

メカ犬同様二人の慈愛モードは解除される事無く、今日はこのまま帰る事になった。

帰り際の二人の会話で千羽鶴計画なる単語が聞こえたが、気にすれば負けだと俺は自分に言い聞かせた。

今日はなのはちゃん達を遊びに誘っても無理であると判断し、すずかちゃんと後で遊ぶ約束をしてから皆と別れた。

「ただいま～」

『お帰り。マスター。無理はしていないか？』

俺が家に帰ってくるとメカ犬が迎えてくれた。

相変わらず妙な優しさを振り撒き続けるのはいい加減にしてもらい

たい。

「だからあれはメカ犬の勘違いだって言ってるだろう」

これ以上誤解を招き続けても仕方ないので、今日こそはメカ犬の誤解を解くために一週間続けてきた説得を今一度実行する。

『自分の疲れとは自覚症状が無い物だ。今のマスターは疲れている』

「だからそれが誤解だって『キンキュウケイホウキンキュウケイホウ…』メカ犬！」

タッチノートからホルダーの反応が感知され警報が鳴り響いた。

『うむ。しかしマスターは…』

「だー！もうその話は後だ！さっさと行くぞ！」

俺は問答無用でタッチノートを開く

『バックルモード』

音声と共にメカ犬が銀のベルトに変形して俺の腹部に巻かれる。

変形しながらもメカ犬は何か言っているが、今は緊急事態なので無視だ。

「変身」

俺は半ば強制的に変身した後チェイサーさんを呼んで現場に向かっ

た。

『さあ…それじゃあ後は宜しくねマスター』

現場に到着した後、チェイサーさんはいつもの様にホルダーに突進せずに少し離れた場所で降ろしてくれた。

何でも、今チェイサーさんはワックス塗り立てで突っ込むとケアが大変になるから二時間は待って欲しいとの事だ。

今にして思えばチェイサーさんはメカ犬以上に謎の多い人?である。

俺が呼んだ時以外は普段何処に居るのかとか、塗りたてのワックスにしろ誰が塗ってるんだよと思う。

機会が有れば其の内詳しく聞いてみようかなと思う。

『マスター。ここまで来てしまったからには、それに対してはワタシは何も言わない。全力でホルダーを止めるぞ』

「ああ、分かってるさ」

俺はホルダーの元に走り出す。

爆発音が聞こえたので、そちらに全速力で向かうとそこには自動車を大きな木槌でボコボコに叩きまくる化け物が居た。

全身が黄緑色でまるで体系は力士の様だった。

顔はオレンジの羽毛をトサカの様に逆立たせ口は裂けており鋭い鷹を思わせる眼光を持っていた。

「あれが今回のホルダーだな」

『…おかしい』

メカ犬が呟いた。

「おかしいって何がだ？如何見たってあれはホルダーじゃないか」

『分からない。確かに奴から反応は出ているが…兎に角気をつけてくれマスター。あれは何かがおかしい事だけは間違い無い！』

メカ犬の言ってる事に要領を得ないが、メカ犬そう言うなら何かが有るのかも知れない。

「分かった。出来る限りやってみる」

『うむ』

俺は全速力でホルダーに駆け込み、飛び蹴りを喰らわせた。

「ぐがあああっ」

身体の大きさの割に重さは余り感じず結構な距離を転がっていった。

『マスター！』

「一気に攻めるぞ」

俺はバックルからタッチノートを取り出し、ボタンを押す事で全体図を表示して右腕の部分をタッチして再びバックルに差し込んだ。

『ポイントチャージ』

バックルが白い光を発して、銀のラインを通して右腕に光が集約する。

「こいつで決めるぜ」

俺は光る右拳を腰に添える。

「ライダーパンチ」

俺はホルダーに走り出す。

ホルダーは何とか立ち上がろうとするが奴が態勢を整えるよりも俺

の足の方が幾分早い。

「うをおおおおおおおおおお！！！」

俺は無防備に身体を曝け出すホルダーに必殺の一撃を容赦無く叩き込んだ。

しかしホルダーは爆発しなかった。

鏡が割れるように、粉々に砕け散ったのである。

「どうなってんだよこれ？」

勿論システムも素体になった人もこの場には居なかった。

『うむ…ん！マスター。何か足元に落ちているぞ』

「足元？」

メカ犬の言葉に従って下を見てみると一冊の本が落ちていた。

俺はその本を拾い上げて中のページを適当に捲ってみる。

この本の内容は簡単に言えば剣と魔法を舞台にしたありがちなファンタジー小説の様だ。

「な？」

『如何したマスター』

俺は何となく目に映った挿絵に驚愕した。

その挿絵に描かれているのは、この小説に出てくる主人公と戦うモンスターの姿だったのだが、その姿が先程俺が倒したホルダーに瓜二つだったのだ。

次々に訳の分からない事が起こる中、考える間も無く更に予想外の事が起こった。

俺の周りに爆発音が幾つも響く。

『マスター！ホルダー反応がこの付近に同時に三つ出現したぞ！？』

「何だって？」

俺が周りを見渡すと確かに居たのだ。

俺が倒した筈のホルダーが同時に三体現れて街を破壊している。

『兎に角今は、これ以上の被害を防ぐためにも奴らを倒すぞマスター』

「それしかないだろ！！！」

俺は走り出す。

分からない事だらけではあるが今やらなければ成らない事は、目の前で暴れているこいつ等をどうにかする事だ。

「はあああああ！！！」

俺は近くに居た一体を標的に定め、飛び蹴りを繰り出した。

## 第五話　読書少女と森の妖精さん【前編】（後書き）

やっぱりもう少し小分けにして連続投稿にした方が読みやすいんでしょうか？

## 第五話　読書少女と森の妖精さん【後編】（前書き）

少し遅れてしまいましたが後編です。

楽しんでいただければ幸いです。

そしてやっと投稿十回目です。

続きは来週以降だと思います。

## 第五話　読書少女と森の妖精さん【後編】

『これでラストだマスター！』

メカ犬が叫ぶ。

「行くぞメカ犬！」

俺もそれに呼応するように叫び返す。

バックルからタッチノートを引き抜いて、全体図を出しながら右足部分をタッチして再びバックルに差し込む。

『ポイントチャージ』

白い光がバックルから発生してそのまま俺の右足に集約する。

「はっ！」

俺は足に光が集約すると同時に飛び上がる。

「ライダーキック」

右足に帯びた光を急降下しながら全身に浴びて、俺は連続四回目になる、渾身の一撃をホルダーに御見舞した。

ホルダーは俺の放ったキックに触れると、鏡が砕け散るように、乾いた音を立てながら跡形も無くなった。

ここで本来ならば、ホルダーは暴走したシステムと素体になった人間に強制的に分離される筈なのだが、今回俺が戦った四体のホルダーはいずれもその現象を起こさずに消え去ってしまった。

「ハア…ハア…ハア…こ、これで全部倒したな」

俺は息も絶え絶えに呟く。

『うむ。しかし分からない事だらけだ。同一のホルダーが一度に四体出現したと思いきや、倒しても分離されずに跡形も無く消え去っていく。唯一残る物といえば…』

メカ犬の考察を聞きながら俺はホルダー達が消え去った位置を視界に捕らえていく。

そこにある物は、最初に倒したホルダーの近くに落ちていた物と同じタイトルの本だった。

もはやこの本は偶然この場所に置いてあったという事は無いだろう。

何かしらの形でこの本はホルダーと関係している。

それが何かは分からないが今は目の前で起こった事を事実として受け止めるしかない。

『マスター。取り合えずこの四冊の書物を回収するぞ。詳しく調べれば何かのヒントが掴めるかもしれない』

「そうだな」

俺はメカ犬の意見に同意し、落ちていた四冊の本を拾い上げると、その場を離れ俺の家に帰る事にした。

「う～ん…何も分からん」

『此方もだマスター』

俺とメカ犬は自宅の俺の部屋で、四冊のファンタジー小説を並べながら、揃って首を傾げた。

俺とメカ犬は家に帰ってきた後、其々に分担してこの本について調べてみる事にした。

メカ犬はこの本その物から何か特殊な反応があるのかを、俺はこの本についての全般的な情報をだ。

まずメカ犬の調査した結果だが何も分からなかった。

メカ犬が言うにはこの本はどれも、書店に並ぶ物と大して変わらないただの本らしい。

俺の方といえば、小説のタイトルをインターネットで検索に掛けてみて大体の事は把握したのだが、ヒントになりそうな物は見つからなかった。

この本は一週間前に発売された物で、前評判も良くて今は何処の書店を覗いても専用コーナーが作られている程の小説だという事ぐらいだ。

そういえば、一週間前にすずかちゃんと海鳴図書館に行った時に新作コーナーでこの本が数冊置かれていたのを見たような気もする。

まあ、そんな事が分かった所で何にも成らない。

「なあ、これって本当にただの本なのか？」

俺は手元にあった四冊の内、一冊を手に取り軽くページを捲りながらメカ犬に聞いてみた。

『ああ、間違いない。その書物からは何も特殊な物は感知出来なかった』

俺はメカ犬の言葉にそうかと返しながら視線は捲られていくページに向け続ける。

「ん？」

全てのページを捲り終えた後、俺は本の巻末部分に貼り付けられたある物を発見した。

巻末のページの中央に紙製の袋がのり付けされており、袋の中には一枚のカードが入っていた。

そのカードには俺も良く見覚えがある。

一週間前にもすずかちゃんはこれと同じカードを使っていた。

そう、これは海鳴の図書館で使われている貸し出し用図書カードだ。

もしやと思い、俺は他の三冊の本の巻末も調べてみると、やはり海鳴の図書カードが入っていた。

つまりこの本は同じタイトルの本というだけではなく、同じ場所にあった物だという事になる。

「同じ場所に置かれた本が姿を変える…」

ふと俺の頭の中に最近似た現象が起きた事を思い出した。

一週間前に俺とすずかちゃんの目の前で一冊の本から妖精へと姿を変えたフェアリーベルである。

思い返してみれば類似点は幾つもある。

同じ海鳴の図書館で管理されていた本である事。

本からその姿を変えた事。

そしてベルの方は俺の見間違いの可能性もあるがどちらもホルダー反応があった事だ。

話していて分かるが確りと意識と良識を持ったベルがホルダーだとは断定できない。

だとしてもベルと今回のホルダーの類似点は無視できる物じゃない事も揺るがない事実だ。

確かめる価値は十分に有る。

「なあ、メカ犬」

『む、如何したマスター？』

「俺がこの前話した妖精の事だけどさ」

『マスターその件はまた後で話し合おう。そちらもマスターの精神衛生において重要ではあるが、今は一刻を争うときだ』

「だからそれに関係ある事だっつーに！！！」

これ以上の会話は誤解を上乗せするだけなので、俺はメカ犬を黙らせて一週間前に起こった出来事から今に至るまでの説明を順を追って話した。

「いらっしゃい純君。遅かったから心配したんだよ」

「ごめんね。遅れちゃって」

すずかちゃんは気にしないでと言いながら俺を月村のお屋敷に招き入れてくれた。

メカ犬に話を聞かせた後、何でこんな重要な事を話さずにいたのだと怒鳴られた。

それを言ったらお前は俺の事を可哀相な人扱いしてくれたじゃねえかと売り言葉に買い言葉で、ひと悶着あったのだが、事は一刻を争うという事でベルに会うため急ぎ月村のお屋敷にやって来た訳である。

今日は元々すずかちゃんと遊ぶ約束をしていたが幸いだった。

ちなみに現在の俺はお気に入りのオレンジ色のショルダーバッグを担いでおり、メカ犬はその中に入っている。

「じゃあ純君は私の部屋で待っててね。私はノエルさん達にお茶を入れてくれる様に頼んでくるから」

すずかちゃんはそう言って、俺を自室に入れた後廊下を歩いて行ってしまった。

ノエルさんという人はこの月村家お抱えのメイドさんの一人である。

詳しい人数は俺も知らないが、俺達子供の相手を良くしてくれているのはこのノエルさんとファリンさんという二人だ。

ノエルさんはクールな人でファリンさんはまあ…ドジっ娘と覚えてもらえれば良いと思う。

この二人に出会った時、俺はリアル職業が美少女メイドな人って実在したんだなと、前世の友人に教えてやりたくなったものだ。

さて、こんな事考えてる場合じゃ無いしベルに確かめたい事もある。

俺は気を取り直しすずかちゃんの部屋に入り、恐らくこの部屋の何処かに隠れているであろう小さい妖精を呼んでみる事にした。

「おーいベル。純だ。君に聞きたい事があるから出てきてくれるかな」

俺はすずかちゃんの部屋でベルに呼びかけた。

すると天井付近から光の粒子の様なものが俺の頭上に降り注いできたのだ。

視線をそちらに向けるとそこにお目当ての妖精であるベルがフヨフヨと飛びながらやって来た。

「あら、純じゃない。遊びに来たのね。いらっしゃい」

ベルは俺の前にやって来ると挨拶を交わした。

「ああ、その事な『これは驚いたな』メカ犬？」

ショルダーバッグからメカ犬の声が聞こえてきたので、俺は急ぎバッグのジッパーを降ろして中のメカ犬を外に出した。

ファンタジーな森の妖精さんとＳＦなフルメタル犬のご対面である。

この絵図等だけを見ると、この世界が物語だったとした場合何処に向かおうとしているのか、制作方針不明な事限りない状態になっているだろうなと考えてしまう。

暫く無言で互いを見詰め合っていたベルとメカ犬だがやがてメカ犬の方が俺に話しかけてきた。

『マスター、結論から言おう。彼女はホルダーだ』

「な！？」

俺はメカ犬の余りに突然な言葉に思わず声を上げてしまった。

『いや…正確にはホルダーの一部と言った方が正しいだろう』

「やっぱり…そうなんだね」

メカ犬の言葉に反応したのは意外な事にもベルだった。

俯いているせいでその表情は確認できないが、その搾り出すような声からベルの悲しさが俺にも伝わってきたように感じ取れた。

「ベル。君は記憶が無かったんじゃないのか？」

俺は記憶が無い筈のベルに何故そんな事を言うのかを聞いてみる事にした。

「うん。純の言う通り私も最初は記憶が無かったんだよ。でもね時間が経っていくと段々分かってきたの。自分が如何いう存在なのか、私を生んだ人が誰で今何をしているのか…怖かったんだ。すずかに純に知られたら嫌われちゃうかもしれないってそれに信じたくなかった。これは何かの間違いなんじゃないかって思っていたかったから…」

ベルは自分の両肩を自身の両腕で抱きながら震えていた。

『ベルよ。辛いと思うが話してはくれないか。こうしている間にも自体は悪い方に向かっている可能性が高いのだ』

メカ犬はベルに話を促す様に語りかけた。

こんな状態のベルに残酷な事を言っているのは分かっているがメカ

犬が言っている事も間違っていないと分かるので、俺は何も言うことが出来なかった。

ベルは俺とメカ犬を交互に見ると、少しだけ震えが小さくなり、俯かせていた顔を上げてほんの少しだけ微笑んだ。

「そっか…街で戦ってた黒い人は純だったんだね」

「分かるのか？」

「うん。私も、純が戦ったあのモンスター達も、私のマスターから、純達が言うホルダーが創った同一の存在でその人を通じて何をしているのか分かるから」

ベルは悲しそうに言った。

「ベルとあいつらが同じ存在？あれは如何見たって別物だろう」

俺は思った事をそのまま口にする。

『そうか。そういう訳だったのか』

ベルが俺の問いに答えようとしたその時、今まで黙って話しを聞いていたメカ犬が声を上げた。

『今回のホルダーの能力が分かったぞ』

「ホルダーの能力？」

『うむ。かなり特殊な部類になるがホルダーの能力は本来自身を超

人化する能力を外部で発生させる派生型能力だ。そして本来持っている能力はデータの再構築といった所か』

メカ犬の言葉にベルは無言で頷いた。

それを確認するとメカ犬は続けて説明を再開する。

『本来の能力は媒介とした物をデータ化して人口のＡＩを生成する事の筈だ。その媒介が今回は書物だったというわけだ。本当ならばそれ以外に出来る事は無い筈なのだが今回ベルの様な存在を生み出したのが派生能力による物だ。派生したのは本来なら自身を強化するホルダーならば誰にでも扱う事の出来る能力だがそれを今回のホルダーは自身の能力で生成したＡＩに施したのだな』

メカ犬が言うには今回のホルダーは自分を怪人の姿に出来る力を内部だけでなく、外部にも使う事が出来る特殊なホルダーで生成したＡＩに肉付けする事で量産型の人工ホルダーを造っていたというわけだ。

「その話だと俺達が戦った四体は説明が着くけどベルは当てはまらないんじゃないか？ベルからは今もホルダー反応が出てないんだぞ」

『それは生成された時期に関係があるのだろう。恐らくベルはこの能力で一番初めに誕生した筈だ。もしかしたらホルダー自身も未だに能力に気づかず無意識の内に生み出した可能性すらある。ワタシとタッチノートに組み込まれているホルダーサーチはあくまで暴走プログラムに対して反応する様に設計されている。プログラムそのものが無ければ反応もしない』

「えっとつまりベルは…」

『うむ。幾つもの要因が重なって偶然にも生まれた本来のホルダー能力の化身と言える存在かもしれないな』

暴走プログラム一つで結果がここまで変わるって事なのか。

そのせいで色んな人達が傷ついているっていうのに…

「ねえ純。お願いがあるの」

ベルは突然に俺の目前まで飛んできて懇願してきた。

「私のマスターを止めて欲しいの。このままじゃ色んな人達が傷つく事になる。それに私を生んでくれたマスターをこれ以上暴走プログラムで苦しませたくない」

俺は無言で頷いた。

言われなくてもこれ以上ホルダーの好き勝手には出来ない。

それにホルダー自身も、純真な願いを歪められた一人の被害者だ。

一刻も早くその苦痛から開放させてあげたい。

メカ犬も同じ気持ちだろうと視線を向けると、その対象は意外な事を口にした。

『ベル…お前はその選択で後悔は無いんだな』

メカ犬の言葉にベルは一瞬だけ肩を強張らせたが、強い意志を宿し

た瞳がメカ犬を見据えてベルは力強く頷いて見せた。

「何が言いたいんだよお前は？」

『マスター。恐らくベルを生み出したホルダーを倒せば、ベルの存在は消滅する』

その言葉が俺の耳に入った直後、理解が出来なかった。

いや、理解する事は出来ていたんだと思う。

ただ認めたくなくて無意識にでも理解しない様にしようとしただけなんだ。

「ベル…本当なのか？」

一瞬とも永遠とも言える沈黙がこの場を支配した。

でもそれは実際には数秒の出来事で、沈黙は一人の妖精の言葉であっさりと崩れ去る。

「…うん」

それは認めたくない。

でも認めなければいけない肯定の言葉だった。

「私はきっと消えて居なくなると思う。でも、それでも…」

ベルは言葉を繋げようとする。

その姿を見ながら俺の脳裏にはベルの顔の横に一人の少女の顔が浮かび上がった。

俺がその少女の名前を口にしようとした時、部屋の入り口辺りからガシャンと陶器を落とす音が聞こえた。

その音の先に居たのは、俺が脳裏に浮かべた少女だ。

「…すずかちゃん」

俺は本来とは別の用途でこの言葉を使う事になった。

すずかちゃんの足元にはティーカップが二つ落ちている。

恐らく先程の音の正体はこれで間違い無いだろう。

問題は何処まで聞かれていたかだ。

入った瞬間に手が滑っただけというならば良いのだが…

すずかちゃんの青ざめた表情を見る限り、少なくともベルが消えていなくなると言う件は間違いなく聞こえていたと確信できる。

「嘘…だよね？ベルが消えて居なくなっちゃうなんて、ねえ純君」

俺は何も答える事ができない。

何も答えない俺にすずかちゃんは痺れを切らしたのか、続いてベルに問い質した。

「ねえベル…」

その言葉は身を引き裂かれるような悲痛な感情が篭っている様に俺は聞こえた。

でも現実は残酷ですずかちゃんの期待した答えは返ってこなかった。

「…ごめんなさい」

このベルの言葉がトリガーになったのだろう。

すずかちゃんは後ろを向いて走り去っていった。

俺は反射的にすずかちゃんを追いかけようとしたがその時。

「待って!!!」

呼び止めたのはベルだった。

「このまますずかちゃんを放っておくなんて出来ないだろう。早く追いかけないと!」

俺はベルの制止を振り切り、再びすずかちゃんを追おうとするが、今度は言葉ではなく俺の腕にしがみ付く事で、ベルは俺がこの場から居なくなる事を阻止した。

「純。すずかの事は私に任せて欲しいの。それに純にはお願いが有るって言ったよね」

俺はベルの顔を見た。

その瞳には、悲痛なまでの覚悟が秘められていた。

「それじゃ行くぞメカ犬」

『了解だマスター』

俺とメカ犬は扉を開けて室内に入る。

室内は独特の紙の香りに包まれており、読書好きの俺としては何処か落ち着く気さえする。

やって来たのは海鳴市一の蔵書量を誇る図書館。

一週間前に俺とすずかちゃんが訪れたのもこの図書館だった。

俺は迷わずに前へと歩を進める。

その先に見えるのはこの施設のサービスカウンターだ。

俺がサービスカウンターの前まで行くとそこに常駐している司書さんが話しかけてきた。

「あら、君はこの前の可愛いカップルの彼氏君じゃないの。今日は君一人なのかしら？」

その司書さんは一週間前に俺とすずかちゃんが読書しているのを見て可愛いカップルさんと茶化していたあのお姉さんである。

「ええ。返却したい本があるんで持ってきたんですよ」

俺は司書のお姉さんに相槌を打ちながら用件を述べた。

「でも、先週借りた本なら返却日までにはまだかなり日が有るわよ？」

司書のお姉さんは不思議そうな顔をして言った。

「それとは別で返却したい本が何冊かあるんでお願いできますか」

俺は肩に提げたショルダーバッグをサービスカウンターに置いて、バッグの中から四冊の本を取り出して見せた。

その本を見たお姉さんの眉が少しだけ動いたのが見えたが俺はかま

わず続けた。

「俺が借りたわけじゃないんですけどもね。道端に同じタイトルの本が四冊も落ちていたんですよ。しかも不思議な事に全部この図書館の本だったんで吃驚です」

「そ、そうなの？それは変な話ね…本当に」

「はい。しかも突然化け物になって暴れ始めるもんですから苦労しましたよ」

「なっ！、君…今日はエイプリルフールじゃないんだからお姉さん嘘は感心しないわね」

俺は顔に笑顔を貼り付けたまま更に司書のお姉さんに近づいて、耳元で小声で話した。

「嘘を言ってるのはお姉さんの方ですよね？俺知ってるんですよ。お姉さんが緑色のガラス球みたいのを拾ってから不思議な事が出来る様になったって事…」

司書のお姉さんは俺が耳元で言った言葉に両目を見開いて距離を離すと俺を未知の生物でも見るかのようにいぶかしみながら尋ねてきた。

「…君、一体何なの？」

「俺ですか？そうですね…しいて言えば正義の味方ですかね」

俺の返答は司書のお姉さんからすれば予想外だったのだろう。

時間その物が凍りついた様に司書のお姉さんはその身を固めてしまった。

しかしその硬直はほんの少しの間の話で時は再び動き出した。

「…ぷっあはははははははははははは！！！！！」

司書のお姉さんの盛大な笑い声が図書館内に木霊した。

近くに居た他のお客さんも何事だとサービスカウンターに視線を集中させる。

「あは、はははは面白すぎるよ君！じゃあお姉さんは差し詰め敵の怪人って所かしら？」

腹筋が捩れそうなほどに笑ったのか司書のお姉さんは苦しそうに腹の中程を手で押さえながら聞いてきた。

「客観的にみればそうなるでしょうね」

俺はその質問にしれっと答えた。

「あはははは！！！やっぱり面白いよ君！うんそうね、君のヒーローごっこお姉さんが一緒にやってあげるわ！」

そう言うと司書のお姉さんは制服のポケットから何かを取り出した。

それは薄い緑の輝きを放つ、パッとみビー球にも見えるが其れとは一線を隔す存在感を持っていた。

其れを司書のお姉さんが握り締めると、握り込んだ拳を中心に緑色の光が全身を包んでいった。

その光が一層眩しく光った後、そこには異形の存在が佇んでいた。

全身が木の様なブラウン色で頭に四角い帽子にも見える物体を被っている。

眼光も鋭く口の様に見える部分には上下から鋭い牙が二本伸びていた。

右目に位置する部分にモノクルらしき物が付けられているのはお洒落なのだろうか。

更に両肩には分厚い本が取り付けられている。

もっとも近い表現をするのなら昔話に出てくる様な鬼に学者さんの格好をさせればこんな感じになるかもしれない。

この光景に驚いたのは周りの人達だ。

図書館内はパニックになり俺とメカ犬、そして目の前のホルダー以外は全員この図書館から我先にと逃げ出していった。

実を言えば俺も最初はホルダーの正体を聞いたとき自分の耳を疑った。

でも冷静に考えてみれば其れも合点がいった。

モンスターになった本は全てこの図書館の本であった事と、ベルの姿に変わった本をその日の内に多く触ったのは俺とすずかちゃんを除けば一番可能性の高いのはこの司書のお姉さんに違いないからだ。

ベルからこの司書のお姉さんの性格は、基本ノリが良い所で正気を失っていても性格的な根っこは変わらないからと、聞いていたため自ら正体を現させる為に一芝居打ったのである。

ちなみに脚本と演出は隣で黙って見ていたメカ犬で役者は俺である。

出来る事ならばこんな心臓に悪い芝居は二度とやりたくない。

戦うのとは別ベクトルで嫌過ぎる。

兎にも角にも正体を現してくれたので万々歳だ。

「ふ～ん…君は逃げないんだね」

目の前のホルダーが興味深げに聞いてきた。

「言ったでしょ。俺は正義の味方だって」

俺はポケットからタッチノートを取り出してボタンを押す。

『バックルモード』

タッチノートから流れる音声と共に隣に居たメカ犬がベルトに変形して俺の腹部に巻かれる。

本当なら戦いたくは無い。

このホルダーを倒したらベルの存在は消えて無くなる。

でもそれでも俺は戦わなくちゃいけない。

何より其れがベルから俺に託された願いだからだ。

ベルは願ったのだ。

自分の命よりも誰かの平和を…

ベルを助ける事の出来ない俺にできる事は何なのか。

ベルの望みを出来る範囲で叶える位しか俺には出来そうも無い。

そのベルが俺に戦う事を望んだのだ。

自分の命と引き換えにこのホルダーを苦しみから解放して欲しいのだと。

俺じゃなければ救えたかもしれない。

もしかしたらこんな結果にならなくて済む最善の結果を導き出せたのかもしれない。

せめてベルの考えを改めさせる事ぐらいならば可能だったかもしれないのだ。

でも俺にはそんな事できないから、だから俺は戦う。

せめてベルの思う様にしてやりたいと願うから…

「変身」

俺はキーワードとなる言葉を紡ぎタッチノートをバックルの中央部に差し込んだ。

『アップロード』

白銀の光がバックルを中心に俺の全身を覆っていった。

光が飛散したその場に居るのは一人の戦士だ。

全身メタルブラックボディに四肢に伸びる銀のラインとV字の角飾りに大きな赤い瞳。

「…本当に面白いわね君。まるで本物のヒーローじゃないの。一体何なのかな君は？」

ホルダーは俺の変身をまるで無邪気な子供の様にはしゃぎながら見学して、こんな感想をのたまった。

「俺は仮面ライダー…仮面ライダーシードだ！」

俺はホルダーの望み通りに答えて見せた。

「仮面ライダーか…いい名前だね！！！」

ホルダーは言うと同時に俺の傍に駆け寄って来た。

『来るぞマスター！』

「分かってるって」

ホルダーが顔面目掛けて連続で拳を振るって来る。

パワーは相当な物で当たればかなりのダメージになりそうだが、生憎俺には当たってやる謂れは無い。

力は有っても攻撃が単調で読みやすい。

俺はホルダーの攻撃を見切りながら、お返しとばかりに右拳をホルダーの腹部に畳み込む。

「くうっ」

ホルダーが拳の連打に怯んだ所で俺は回し蹴りを繰り出した。

ホルダーも受け止めようとするが、俺はそれを力任せになぎ払い吹き飛ばした。

「おりゃあああ！！！」

突き飛ばされたホルダーは図書館の壁を突き破り表に転がっていく。

その後を追って俺も風穴の開いた壁からホルダーを追撃するために外に出た。

外に出るとホルダーは殴られた箇所が未だに痛むのか腹部を押さえながら苦しんでいた。

『マスター今がチャンスだ』

「そう「待ってくださーーーーい!!!」な!?」

俺は驚愕した。

其処にはこの場に居ないであろう人物が居たからである。

「お、お願いします。仮面ライダーさん!…この人を見逃してあげてください…そうじゃないと私の友達が…ベルが消えて…」

すずかちゃんが俺とホルダーの間に割って入って来たのだ。

ベルの姿は何処にも無い。

恐らくは行き違いになったのだろう。

それよりも問題は今此処にすずかちゃんが居るって事だ。

すずかちゃんは俺を仮面ライダーを真っ直ぐな瞳でみつめている。

俺と違いすずかちゃんは諦めていないのだ。

友達を、ベルの命を救う事を…

その意志の強さに今の俺が叶う分けも無い。

俺は身動きが出来ずただ立ち尽くす事しか出来なかった。

「何か良く分からないけどチャンスみたいね」

ホルダーはこれを好機と見たか、俺に襲い掛かってきた。

俺は避ける事も忘れその攻撃を喰らい続けた。

鈍い痛みが俺の全身を襲う。

『マスター反撃するんだ！！！このままでは殺されてしまうぞ！？』

メカ犬が俺に檄を飛ばす。

頭ではこのままではいけないと理解できる。

でも身体が言う事を聞いてくれない。

ベルの願い。

すずかちゃんの真っ直ぐな思い。

そして俺自身の動揺が俺の思考を動きを支配している。

俺はなすがままに痛めつけられそのまま地に伏せた。

ホルダーの声が、メカ犬の声が、すずかちゃんの声が聞こえてくる。

だけどその声はどれも何処かぼやけて聞こえてきて…

…意識も薄れてきた俺は、もうこのまま楽になりたいなって思い始めて…

「…ダー！」

何だ？

「…ライダー！」

煩いな…

「仮面ライダー！！！」

はっきりと俺を呼ぶ声が聞こえてきた。

「約束したでしょ！私のお願いを聞いてくれるって！戦いなさいよ！こんな事で助かる命なんて…誰かの犠牲で助かる仮初の命なんて…私絶対嫌だからね！！！」

黄金色の粒子が俺に降り注ぐ。

四枚の透き通る綺麗な羽をはためかせながら。

可憐な笑顔が似合う筈の顔を涙で歪めながら俺に必死に呼びかけているのだ。

「…ベル？」

泣いている。

誰がだ？

友達が…

すずかちゃんが…

ベルが…

俺は何やってんだ?

こんな所で寝てる場合じゃないだろう?

俺は誰だ?

俺は…

「俺は仮面ライダーだ!!!」

軋む身体を無理矢理に持ち上げ立ち上がる。

体中に痛みが走るがそれが俺の意識を繋ぎ止めた。

『マスター!大丈夫か!?』

「ああ。まだまだ行けるぜ!!!」

俺は一歩前に踏み出す。

その眼前に映るのはホルダーだ。

「まだ動けるんだ?でもいい加減うざったいかな!!!」

ホルダーがみたび拳を俺に振るう。
だがその拳は俺に届く事は無かった。
「な！は、離しなさい！？」
俺はホルダーの拳を自身の左手で掴みその動きを完全に封じた。
俺はもがくホルダーを他所に空いている右拳にありったけの力を込めて振りかぶる。
「これでもくらえ！！！」
渾身の力を込めた右拳をホルダーに叩き込み吹き飛ばす。
それを見たすずかちゃんが再び俺とホルダーの間に割って入ろうとするがそれをベルが無言で押し止めた。
俺はすずかちゃんの事はベルに任せてホルダーに向き直る。
『マスター…』
「…」
俺は無言でタッチノートを引き抜き全体図を表示する。
右足の部分をタッチしタッチノートを再びバックルに差し込んだ。
『ポイントチャージ』

ベルトから稲妻の様に白い光が発生し、銀のラインを伝ってその光が右足に集約する。

俺は一度だけベルを見た。

隣ではすずかちゃんが泣いていた。

ベルも泣いていた。

でも俺の視線に気づいた二人は俺に泣きながらも笑って見せたのだ。

二人がどんな会話をしたのかは分からない。

俺が今しようとしている事は、二人を永遠に引き裂く事になる行いだ。

そんな俺を見て二人は笑っているのだ、泣いているのに、泣くほど苦しい筈なのにだ。

だから俺は自身の全力を尽くす。

一人の、誰よりも大きな優しさを持った小さな友達の願いに答えるために…

「こいつで決めるぜ」

俺は大きく跳躍した。

ホルダーを軌道に捕らえ右足を突き出す。

「ライダーキック」

光の粒子が俺を包み込みながら俺はホルダーにこの輝く右足を突き刺した。

ホルダーは白い光を発しながら爆発する。

其処に残るのは気絶した司書のお姉さんと分離されたシステムだ。

俺はベル達の方向を見る。

ベルの身体は既に半分以上が透けてきて今にも消えて無くなりそうだった。

すずかちゃんはそんなベルを必死で抱きとめている。

俺の位置からは二人が何を話しているのかまでは分からなかった。

だが最後の言葉だけは口の動きで理解する事が出来た。

あ・り・が・と・う

その言葉を最後にベルは消えた。

一冊の本を残して…

女の子と妖精はいつも一緒でした。

楽しい事も

嬉しい事も

辛い事も

悲しい事も

二人は何時までも一緒に居ようねと約束しました。

お互いが最高の友達だと思えたからです。

しかしそんな二人にも別れの日がやって来ました。

妖精は本来居るべき場所に帰らなければならないのです。

別れを悲しみ泣きじゃくる女の子に妖精は言いました。

お話しすることはもう出来ないけど私は何時だって君の隣に居るよ。

私と触れ合いたいのなら森の木に寄り掛かってみてね。

私の歌が聞きたくなった時は耳を済ませて風の音を聞いて。

私は森の妖精…この森に来てくれれば何時だって会えるからね。

だから忘れないでね。

覚えてくれていれば私は何時だって君の隣に居るから…

だから、ありがとう…またね。

「面白い本だったね純君」

「…うん、そうだね」

俺とすずかちゃんは今ベルだった本を読み終わった所だ。

ベルが消えてから三日後、俺の前にこの本を持ってきたすずかちゃんが一緒に読もうと誘ってきたのだ。

何でもこの本の続きを俺と一緒に見る様にとベルと約束をしていたそうだ。

あれからすずかちゃんは時折寂しそうな表情を見せる物の以前よりは元気を取り戻して来た様で笑顔も幾分見せてくれる様になった。

「「できたあ！！！！」」

俺とすずかちゃんとの読書タイムに急遽乱入者が二人程現れた。

なのはちゃんとアリサちゃんである。

二人の手の中にあるのは色取り取りの折り紙で折られた大量の鶴だった。

最近何かこそこそとやっていたと思ったらどうやら二人でこんな物を作っていた様である。

「最近すずかちゃん元気無いみたいだから頑張って作ったんだよ！！！」

「私となのはが丹精込めて作ったんだから有り難く受け取りなさいよ！」

二人はそう言うとその千羽鶴をすずかちゃんに手渡した。

最初はすずかちゃんもきょとんとしていたがやがて花が咲き誇る様な満開の笑顔で二人にお礼を言った。

「ありがとう！」

俺はそんな三人の様子を見ながら手元の本の最後のページを見た。

其処には挿絵が描かれており、森の妖精が優しげな笑顔で微笑んでいた。

今日の海鳴は悲しみを吹き飛ばす笑顔に溢れていて…至って平和だ。

## 第五話　読書少女と森の妖精さん【後編】（後書き）

次回の主役は…かもしれないです。

## 第六話　高町さん家の小さなパティシエール【前編】（前書き）

今週も頑張ってもう一話投稿してしまいました。

続きはまたしても来週以降になります。

それでは楽しんでいただけると幸いです。

# 第六話　高町さん家の小さなパティシエール【前編】

俺は今…

ある意味命の危機に瀕している。

俺は現在高町宅のリビングの椅子に座っている。

そして向かいには恭也君が座っている。

いつもなら俺が高町宅に居て目の前に恭也君がいらっしゃる＝俺の命の危機という図式が完成するのだが今日はいつもと様子が違った。

今から三十分程前に時間が遡るのだが、恭也君が俺の家に訪ねて来たのだ。

なのはちゃん絡み以外で恭也君がやって来るなんて殆ど無いので何事だろうと俺は玄関前まで出迎えに行った。

玄関先まで行くと、恭也君はいきなり俺に頭を下げて黙って俺について来てくれないかと言われた。

そのいきなりの行為に驚いた俺は、このままでは意味が分からなかったので、取り合えず顔を上げてくださいと恭也君の顔を上げさせたのだが、俺は顔を上げた際の恭也君の表情を見てまたしても驚いた。

前世の頃観た戦争映画で死地に向かう兵士がしていた表情と同じ顔を恭也君がしていたからである。

あの恭也君がこんな顔をするなんてただ事じゃ無いと思った俺は、恭也君の指示に素直に従う事にした。

導かれるままに案内されたのはお隣の高町宅。

何で自分の家に行くのにそんな顔をしているのかと疑問に思っていたのだが、玄関で迎えてくれた人物をみて俺はその意味を問答無用で理解する事となった。

恭也君と俺を出迎えてくれたのは、高町家長女で、恭也君の妹であり、なのはちゃんの姉でもある美由希さんだった。

ただ単に出迎えてくれただけなのなら何も問題は無かったのだが、問題はその美由希さんの格好だった。

エプロンをしていたのだ。

肩紐部分にフリルをあしらった淡いピンクのシンプルなエプロン。

更に右手には泡だて器を持ち、左手にはステンレス製のボウルを持っている。

泡だて器の先っぽに付いている白い半液状のものは恐らく生クリームか何かだろう。

言葉にせずともその姿は私今お菓子作りしていますと体言していた。

それが意味する事は…

美由希さんが料理をしているという揺ぎ無い事実だ。

俺は恭也君にどういう事なのかと目だけで合図すると恭也君も言葉を使わず目ですまないと合図を送ってから目を逸らしてしまった。

俺と恭也君がこの時アイコンタクト等というプロサッカー選手顔負けの高等技術を使えたのはお互いに共通認識を持っていたからだ。

美由希さんの作る料理。

それは高町家の惨劇と言っても過言ではないだろう。

俺がその惨劇を始めて目にしたのはまだ二足歩行を始めて間もない頃だった。

普通ならそんな昔の事覚えていられる筈も無いと思うが俺は生まれた時点で中身は大学生だったので良く覚えている。

その日の俺は珍しく高町宅で預けられていた。

俺は隣で軽くなのはちゃんをあやしながら時間を潰していたのだが、面倒を見てくれていた桃子さんが急な用事で二時間程家を空けなくてはならなくなったのだ。

そこで俺達のお世話を命じられたのが、当時小学生だった恭也君と美由希さんだった。

忘れもしない惨劇はここから始まったのだ。

桃子さんの用事は予想よりも時間が掛かってしまい、出掛けてから

二時間程経った後電話が掛かってきて更に一時間は掛かると連絡が入ったのだ。

その時は既に日も傾いており、夕飯には間に合いそうに無いから出前を取る様にとも言っていた。

恭也君は最初それに従い出前を取ろうとしたのだが美由希さんがそれを制した。

美由希さんは何を思ったか、材料はあるんだから私が作ってあげるよと進言したのである。

その言葉に恭也君はあっさりと賛成の意を示した。

今にしてみればそれが後に続く惨劇の幕開けだったのだ。

美由希さんは意気揚々と台所に向かって行った。

暫くすると食欲をそそる良い匂いが台所から漂って来た。

テーブルに出されたのはオーソドックスな野菜炒めだった。

俺となのはちゃんは桃子さんが哺乳瓶にミルクを入れてから出掛けて行ってくれたので、用意されたのは恭也君と美由希さんの二人分だ。

いただきますと言って二人は食べ始めた。

異変はすぐに恭也君を襲った。

野菜炒めを食べた恭也君の顔色はみるみる内に紫色に染まり口から泡を吹いて倒れたのだ。

幸いにも恭也君は命を取り留めたのだが…この先は恭也君の名誉を守るために描写は控えさせてもらおう。

ちなみに一緒にこの野菜炒めを食べていた美由希さんは、何とも無かった所か美味しそうに食していた。

それから美由希さんは料理に目覚めてしまい被害は拡大していった。

恭也君の次の被害者は士郎さんだった。

あの人なら大丈夫なんじゃないかと思っていたのだが、美由紀さんの料理は士郎さんをも一撃の元に撃破してしまった。

このままでは不味いと桃子さんと俺の母が美由希さんに料理を教えたのだがその効果は全く実らず味見の際に二人も新たな犠牲者となってしまった。

俺はそんなに凄い物なのかと無謀な好奇心を抱いてしまい、美由希さんの料理をほんの少しだけ舌の上に乗せてみた。

次に気づいた時は病院のベッドの上で三日が経過していた。

好奇心とは時として己の身を滅ぼす事になるという事を俺はその身体で実感した。

そして被害者一同の総意により美由希さんに料理禁止令が言い渡された。

美由希さんはこれに猛反発してきた。

もはや料理は美由希さんの趣味と言えるレベルに達していたし、何故か作った美由希さん本人だけはこの特殊兵器とも言える料理を美味しいと平気で食べてしまうのだ。

自分の作る料理が美味しいという事を微塵も疑っていない。

だが被害者連合である俺達も此処で退く訳には行かないのだ。

人数差に物を言わせ半ば無理矢理に、美由希さんが料理を作らないように承諾させた。

これにより被害は殆ど無くなった。

そう…

殆どとは言うものの、全く無くなる事は無かったのだ。

美由希さんは俺達の隙を突き偶に料理をする様になってしまった。

出来れば完全に止めさせたいのだが、本当に偶にしか作らないのと、主な犠牲者は恭也君だけだったので被害者一同は恭也君を除き暗黙の了承をする事に決まった。

それからは主な被害は恭也君だけになり一同は胸を撫で下ろしたのだが、これを面白く思わない者が居た。

唯一被害を被り続ける事になった恭也君だ。

それから恭也君は死なば諸共の精神で美由希さんの手料理を食べる時は道連れを誘い込む様になったのだ。

つまり今回の生贄は俺だったわけだ。

完全に油断していた。

恭也君の決死の顔で気付くべきだったのだ。

俺が今此処に居るということは既に士郎さん達は避難している頃だろう。

恭也君がターゲットにするのは既に美由希さんの手料理の洗礼を受けた者のみだ。

高町家と板橋家でこの洗礼を未だに受けてないのは、なのはちゃんと俺の父だけだ。

父は元々美由希さんとの接点が少ないので食べる機会其の物が余り無い。

なのはちゃんの場合は流石に命が危なくなる可能性が高いため俺を含め周りが全力で守り通した。

さて、そんな事を考えている間に美由希さんは料理を完成させた様で、俺と恭也君の目の前にショートケーキを持ってきた。

今回はお菓子作りに挑戦しているのだろうなと、玄関で見た泡だて器で予想をしていたが、中々にオーソドックスなお菓子がやって来

たものだ。

見た目はとても美味しそうなのだ。

匂いだってこれは美味しいですよと強く自己主張をしている。

しかしそれを真に受けて食べれば一瞬で意識を刈り取られる事を俺は経験から知っている。

美由希さんは俺と恭也君に早く食べるように催促してくる。

出来る事なら一秒でも早くこの場を立ち去りたい。

だがそれは無理な話だ。

俺の身体能力では逃げた所で剣術少女である美由希さんから逃れる事は出来ない。

仮に上手く隙を突いて美由希さんを振り切れたとしても、人外な強さを誇る恭也君が俺の逃亡を阻止するだろう。

なのはちゃん絡み程では無いにしろ、美由希さんに対してもシスコンパワーは適用されるのだ。

まあ、そのシスコンパワーのせいで恭也君は美由希さんの料理を拒みきれず食べる羽目に陥ってもいるのだが…

そんな事を考えている場合じゃない。

何とかこの場から逃れる手段を模索しなければと、己の生存本能を

フル回転させ作戦を考えていたその時、緊急事態が発生した。

「良い匂いがするけどどうしたの？」

なのはちゃんが俺達の居るリビングに姿を現したのだ。

そのなのはちゃんに美由希さんはあろう事かなのはも食べると聞いたのだ。

無邪気に食べると返事を返すなのはちゃん。

その瞬間俺と恭也君の視線が交差する。

言葉等という無粋な物は俺達の間に必要無い。

互いの役割を即座に決めて実行に移す。

俺と恭也君の顔はどちらも命懸けのミッションに挑むエージェントさながらの表情をしている事だろう。

恭也君は瞬間移動とも言える素早さで台所に向かった。

俺は目の前に恭也君に差し出されたケーキを引き寄せ、俺のケーキと共に素手で鷲掴みにすると、俺は鷲掴みにしたそれを躊躇う事無く自分自身の口に放り込んだ。

それと同時に台所の方向から人一人が崩れ落ちる様な音が聞こえてきた。

どうやら恭也君も無事にミッションを遂行した様だ。

そう、俺達の目の前に置かれたのはショートケーキだった。

つまり今回の特殊兵器は1ホール分作成されており、目の前に出されたこれを俺達が食べたとしてもオカワリという名の魔の手がなのはちゃんに迫るのだ。

なので俺と恭也君は役割を分担する事にしたのだ。

まず恭也君が自分の分を此処で食べればそこで戦闘不能になってしまう。

そこで俺が恭也君の分も引き受けて、特殊兵器の総本山である台所に恭也君に向かってもらったのだ。

俺はその場に出されたケーキを命懸けで処分する。

同じく恭也君は残りのオカワリという名の悪魔達を根絶やしにする。

俺達の大切な者を守るための命懸けのミッションは無事成功した。

遠くなる意識の中で俺は目の前にいるなのはちゃんと美由希さんに最高の笑顔を見せながら崩れ落ちてその意識を完全に手放した。

今回は被害が少なくて済んだ方なのだろう。

今までの料理と違いお菓子作りという事で食材が限定された事で威力が抑えられたのかもしれない。

何せその日の内に意識を取り戻す事が出来たのだからこれは奇跡と言える事だ。

俺は恭也君の部屋で眠っていたようだ。

部屋の主である恭也君は俺の隣で死んだ様に眠り続けていた。

恭也君はまだ意識を取り戻すに至っていなかったみたいだ。

俺よりも多くの量を摂取したのだからそれは致し方無い事かもしれない。

まあ、二切れ食べた俺がその日の内に回復したのだから、命の危険は無いだろう。

今はただ一人の勇者に安息の時を過ごして欲しいと心から願う。

「あ！起きたんだね純君」

俺が恭也君の部屋から出るとなのはちゃんが廊下を歩いて話しかけてきた。

「ビックリしたよ。ケーキを凄い勢いで食べたと思ったら笑顔で気絶しちゃうんだもん」

俺は乾いた笑いで返す事しか出来なかった。

「気絶するくらいに美味しかったんだね。お兄ちゃんなんて台所にあるケーキまで全部食べちゃって、やっぱり純君と同じように笑顔で気絶してたんだよ」

なのはちゃんは私も食べたかったな～と暢気な事を言っている。

これは後で被害者連合を招集して緊急会議を行う必要があるな…

「でも私知らなかったな。純君ってそんなにお菓子が好きだったんだね」

別に特別好きという訳では無いが、それを言うのは今を守り通した勇者に面目が立たないと思って俺は、

「うん。まあね」

と答えておいた。

嫌いな訳ではないし嘘をついてる訳でもない。
実際に桃子さんが作るお菓子全般は俺にとってかなり好きな部類に入る。

「そっか…」

俺の返事を聞いたなのはちゃんは暫く考えるそぶりを見せていたがやがて良しと気合を入れた掛け声を言ってから俺に話しかけてきた。

「じ、じゃあね。私がお菓子を作ったら純君は食べてくれる？」

なのはちゃんが俺の事を上目遣いに見ながらそんな事を聞いてきた。
どうやら今回美由希さんがお菓子作りをして俺や恭也君が食べていたのを見てお菓子作りに興味を示した様だ。

なのはちゃんのお母さんである桃子さんは、プロのパティシエだしお姉さんの美由希さんも味は如何あれお菓子作りをするのだ。
お年頃なのも相まって周りがそんな状況なら一人の女の子がお菓子作りに興味を持つ事は当たり前の事なのかもしれない。

「うん。なのはちゃんの作ったお菓子俺も食べてみたいな」

「うん！私頑張るね」

「ただし！！！」

俺はなのはちゃんの両肩を掴み引き寄せる。

「え！？」

俺はなのはちゃんを真っ直ぐに視界に捕らえる。

お互いの距離が零に限りない程になりながら俺はなのはちゃんに話しかけた。

「なのはちゃん…」

「純君…」

「お願いが有るんだけど良いかな？」

「お、お願いって？」

「お菓子作りを習うときは必ず桃子さんに習って欲しいんだ！！！大事な事だからもう一回言うよ！美由希さんではなくプロである桃子さんに絶対に頼むんだよ分かったね！！！」

「は、はい！」

なのはちゃんの了承を得て安心した俺はなのはちゃんの両肩から手を離した。

取り合えずの予防線を張る事には成功した。

万が一にもなのはちゃんが美由希さんに師事を仰ぎ第二の美由希さんとなれば惨劇は更なる拡大を辿る事になるだろう。

少なくとも恭也君の命が最も危険に晒される事は間違い無い。

そんな事が有り、なのはちゃんのパティシエ修行が開始された。

『最近この海鳴市で不思議な事件が起こっているそうだぞマスター』

「不思議な事件？」

メカ犬が突然俺の部屋にやって来たと思ったらそんな事を言ってきた。

俺は唐突なメカ犬の発言に思わずオウム返しで答えてしまった。

『うむ。ジャックからの情報なのだが、海鳴市内の甘味が突如紛失する怪現象が多数発生しているそうなのだ』

「何だよそれ？」

『言葉の通りだ。一般家庭や飲食店、デパートに限らず、海鳴市の至る所で所謂甘い味の食べ物が消えている』

メカ犬はそう言ってから俺にタッチノートを出す様に指示してきたので、メカ犬の目の前に置いてやる。

メカ犬がタッチノートを操作を始めると海鳴の全体地図が表示されて、其処から一定の区間が色別で区別されていた。

「この色別になっているのは何なんだ？」

『うむ。それはその日被害のあった場所を色分けして表示しているのだ』

色分けされた地図はエリア内を一直線に進んでいる。

『そして今までの被害から計算すると恐らく此処が明日狙われる筈だ』

メカ犬がタッチノートを操作して映し出したのは駅前だ。

「確かここには美味いって評判のケーキ屋が在ったな」

『その通りだ。次に襲われる可能性が最も高いのは計算上この場所で間違いない』

「なあ、メカ犬。こんな話を俺にするって事はもしかしてこの事件の犯人はホルダーって事なのか？」

『うむ。確証が在る訳ではないが犯人がホルダーという確立はかなり高い。普段なら後手に回ってしまうが、今回は偶然にもそれらしい前情報を掴んだので、待ち伏せをしたいと思うのだ』

「何でホルダーの確率が高いなんて思うんだよ？」

確かに変な事件だと俺も思うが、それがホルダーの仕業だというのは、幾らなんでも強引過ぎやしないだろうか。

『消え方がかなり特殊なのだそうだ。何でも消えた甘味はどれも突然宙に浮いて何処かへ飛んでいってしまうらしい』

ああ…確かにそんな事、普通の人間には無理っぽいな。

「…分かった。丁度明日は日曜日で学校も無いし、その駅前に行ってみるとしますか」

『すまないなマスター』

メカ犬はそう言って頭を下げた。

それにしてもお菓子が突然宙に浮いて消えるなんて変な事も起きる物である。

お菓子といえば、なのはちゃんが先週からお菓子作りを桃子さんから習っているけど、何時頃俺にも食べさせてくれるんだろうか？

作り始めて三日程経ってから聞いてみたら、もう少し練習して上手くなってからと言っていたけど、そんな事を言われると何気に食べるのが本当に楽しみになってきた。

『嬉しそうだなマスター。何か良い事でもあったのか？』

メカ犬にそんな事を聞かれた。

俺は自分が思っている以上に、なのはちゃんの作ったお菓子を食べるのが、顔に出る程に楽しみにしていた様だ。

素直に言うとメカ犬にからかわれそうなので俺は何でも無いと軽く流し、メカ犬と明日の張り込みについて話し合う事にした。

「ここで間違い無いんだな？」

『うむ。他にめぼしい所は余り無いし、甘味の質から言ってもこのケーキ屋で間違いないだろう』

俺とメカ犬は現在、昨日話していたケーキ屋に居る。

幸いな事にこのケーキ屋には軽食を食べられる様に幾つかのテーブルと椅子が備え付けられており、俺はケーキ屋でチョコレートケーキを買ってから隅っこの席に陣取って一般客に混じっていた。

ちなみにメカ犬はそのままだとかなり目立つので、俺のお気に入りのショルダーバッグから頭だけ出した状態で店内を監視していた。

何時事件が起こるか分からないし、長期戦も覚悟していたのだが異変は案外早くに訪れた。

店内の誰かが突然叫び声を上げたのだ。

その叫び声を皮切りに他の声も店内に響き始める。

ケーキが空を飛んでいる！

シュークリームが箱から飛び出てきた！

私のシナモンロールがああ！！！

等とそこかしこから聞こえてくる。

そして目の前にあったチョコケーキも他の例に漏れず浮き出した。
店内の甘味が残らず浮き出すとそれらは勢い良く店内を次々と飛び出して行った。

『追うぞマスター！』

「ああ！分かってる！」

俺はメカ犬の呼びかけに頷き、未だパニックとなっているケーキ屋を後にして飛び去ったケーキ達の追跡を開始した。
追跡を開始してから十分程走るとビル街に入っていた。

『マスター！あのビルの屋上だ！』

メカ犬の言う方向を見てみると飛んで行ったお菓子達が一棟の商業ビルの屋上に集まってきている。

『キンキュウケイホウキンキュウ…』

「タッチノートが反応し始めたって事は、これはホルダーの仕業で間違い無いって事か！？」

『うむ。あのビルに急ぐぞマスター』

たどり着いた商業ビルには外側に非常階段が設置されており、ビルの中に入らなくてもこの階段で屋上まで行ける構造になっていた。
俺達は非常階段を上り屋上に向かう。

屋上にたどり着いた俺の視界に入ったのは異形の姿をしたホルダーだった。

その姿はかなり太っているというのが第一印象だった。

体中に様々なお菓子類の様なオブジェが付けられており、腹の部分には大きな口があって、そこから飛んできたお菓子を次々と食べている。

「見つけたぞホルダー！」

『観念しろ！』

俺とメカ犬の声に反応したホルダーはお菓子を食べるのを一時中断して、此方に振り返った。

「何だお前ら？」

「どうしてこんな事をするんだ？色んな人に迷惑だろうが！」

ホルダーは何処か間の抜けた感じで頭をボリボリと掻くとめんどくさそうに俺の質問に答えた。

「何でかってオイラは甘いもんが好きだから腹一杯食いたいだけなんだけどなあ」

答えまで間の抜けた物だった。

思わず脱力してしまいそうだ。

『マスター、奴に何を言っても無駄だろう。既に本能のままに行動している様だ』

「はあ～。仕方ない…やるぞメカ犬！」

『了解だマスター！』

俺はタッチノートを取り出してボタンを押す。

『バックルモード』

タッチノートから流れる音声がすると共にメカ犬が銀色のベルトに変形して俺の腹部に巻きつく。

俺はタッチノートをホルダーの眼前に向けて音声キーワードを口にする。

「変身」

俺はキーワードを口にすると手に持っていたタッチノートをバックルの中央の溝にはめ込んだ。

『アップロード』

音声が流れるとバックルを中心に俺を白銀の光が包み込む。

その光が飛散して現れるのは一人の戦士だ。

「何だお前は？」

俺の変身を見たホルダーが驚きながら聞いてくる。

「俺は仮面ライダーシードだ！」

「か、か、可変ライターシール？何じゃそりゃ？」

ホルダーはあり得ない様な間違い方で俺の名前を呼んでくれやがった。

本当に脱力しそうになるホルダーだ。

「仮面ライダーシードだ！人の名前を間違えるな！」

ホルダーはああそうなんかと言いながら頭をボリボリと掻いている。

『マスター。余り気にしない方が良いと思うぞ』

メカ犬が慰めてくる。

「…そうだな。さっさとあいつを止めた方が良いもんな」

俺は溜息を吐きながらホルダーに向き直り臨戦態勢をとる。

「何か良くわかんねえけどオイラの食事を邪魔すんならゆるさねえかんな！」

ホルダーから見ても俺達は自分の食事を妨害する邪魔者と認識されたらしく、襲い掛かってきた。

『来るぞマスター！」

「ああ！」

俺は正面から走ってくるホルダーに迎撃態勢を取り迎え撃った。

## 第六話　高町さん家の小さなパティシエール【前編】（後書き）

恭也君は次の日に無事意識を取り戻しました。

## 第六話　高町さん家の小さなパティシエール【後編】（前書き）

約一週間ぶりの更新になります。

楽しんでいただけると幸いです。

次回の更新はまた来週以降になると思います。

## 第六話　高町さん家の小さなパティシエール【後編】

「オイラの楽しみを邪魔すんなあ」

ホルダーが叫びながら俺の方に迫り来る。

そのポッチャリ体型の為腕が後ろに回らないのか、連続で左右からフックを仕掛けてきた。

「当たって堪るか！」

俺はそのフックが放たれる度に半歩下がる事で回避した。

「今度はこっちから行くぜ」

左右から来る連打を裁きながらホルダーの右拳が振り切られると同時に、俺はタイミングを合わせて反対に拳を叩き込んだ。

ぽにゃん。

叩き込んだのだが、ホルダーから妙な音が聞こえると、俺の拳がはじき返されてしまった。

「な！？」

ホルダーは拳を叩き込んだ場所を数回程さすると、また連続フックで襲い掛かってくる。

「おわ！」

俺はそのフックをかわして一旦距離を置いて、飛び蹴りをホルダーのふくよかなボディに浴びせ掛ける。

ぽんよよ～ん。

見事命中するのだがまたしても妙な音と共に俺の蹴りははじき返されてしまった。

「一体どうなってるんだよ！こいつの身体は？」

さっきからぷよんだのぱおんだのと俺の攻撃が一切効いていない事に苛立ちを覚える。

『恐らくこれが奴の能力だな』

メカ犬が先程の俺とホルダーの戦いを分析していた様だ。

「もしかしてこいつの能力って高い防御力か何かか？」

俺は迫り来るホルダーに身構えながらメカ犬に質問をする。

『そうではない。奴の能力は…む？ホルダーの様子がおかしいぞマスター』

メカ犬の声に何事かと思い、ホルダーを見ると、俺に背を向けてホルダーは集めたお菓子の元に走っていた。

「運動したら腹が減っちゃったよ」

そう言いながらお菓子の山の前にたどり着いたホルダーは、無雑作にお菓子を掴み腹部に有る大きな口に放り込んだ。

何処までもマイペースなホルダーである。

『いかん！早く奴が食べるのを止めさせるんだマスター！』

「え？」

俺は二つの意味で驚き声を発してしまった。

一つ目はメカ犬の言葉に、そして二つ目はホルダーを見た際だ。

お菓子を食べ続けるホルダーが少しだが、ほんの少しだが一回り大きくなったのだ。

見間違いではないかと思い何度も見るが、やはり大きくなっている事に間違い無かった。

『奴の能力は吸収と増殖だ。ある特定の物質を取り込む事で、本来のホルダーの身体能力にエネルギーとして上乗せする事が出来る』

その特定の物質ってもしかして…

「まさかその物質があのお菓子なのか？」

『正確には甘味の中に含まれる糖分だ』

「じゃあケーキが突然飛んだり、俺の攻撃がはじかれるのは何なんだよ？」

「甘味類が飛ぶのは吸収の副産物だ。磁力で吸い寄せる様に吸収にはある程度その物質を引き寄せる事が出来る力が有る。あの防御に関しては、エネルギーが人で言う所の皮下脂肪の様に溜まった状態になっていた為、衝撃がエネルギーに分散されたのだろう』

つまり…まんまお相撲さんみたいな状態になってるって訳か。

「こっちの攻撃が効かないってんなら如何すれば良いんだよ?このままじゃ倒す所か、あの馬鹿食いを止めるのも無理っぽいぞ」

俺とメカ犬が話している間にも、ホルダーは目の前のお菓子の山を喰らい続けている。

心なしか、また少しホルダーの身体が大きくなった気がした。

『解決策は二つ有る。今すぐ行動に移せるのは一つだけだがな』

「何でも良い。今すぐその一つを実行するぞ」

俺はメカ犬の出した提案に即答した。

『うむ。通常の攻撃が効かないならば道は一つだ。奴の防御を凌駕する強力な一撃をぶつけるしかない』

それってつまり…

『早い話が必殺技なら効く筈だという事だ』

「回りくどいなおい!」

結局いつも通りって事らしい。

「まあ、シンプルな作戦が一番って事もあるか…」

一度溜息を吐いてから俺はバックルに手を掛けてタッチノートを引き抜いた。

全体図を表示させてから右足部分をタッチしてもう一度バックルにタッチノートを差し込む。

『ポイントチャージ』

タッチノートから流れる音声と共にバックルを中心に白い光が発生し、その光が右足の銀のラインを伝い足元に集約していった。

「こいつで決めるぜ」

狙いをホルダーに定めて俺は大きくジャンプした。

「ライダーキック」

右足に纏った白い光を全身に浴びながら俺は今だにお菓子を食い続けるホルダーに必殺の一撃を放った。

流石に空から猛スピードで向かってくる俺に気がついた様でホルダーは食べる手を止めて身構えた。

「ぐうぼぼぼぼぼぼおおおおお！？」

ライダーキックを喰らったホルダーはそんな奇声を上げる。

このホルダーの能力の所為なのか、俺の右足はホルダーの腹部にめり込んだまま抜けずにいた。

変化は突然にやって来た。

俺とホルダーは磁石の同じ極を合わせたかの様に別方向に吹き飛ばされたのだ。

「ぐはっ」

俺はビルの屋上のフェンスに激突し、ホルダーはビルから下へと落下していった。

『大丈夫かマスター！？』

メカ犬が慌てながら声を掛けてくる。

「何とかな…」

痛みはあるが動けない程では無いので、心配無いと言いながら俺は立ち上がった。

「それよりホルダーはどうなったんだ？」

俺は急ぎホルダーが落下したあたりに走って行き、下を覗き込む。

「逃げたのか？」

倒せたのなら下には素体となった人が気絶している筈なのだがそんな人は見当たらなかった。

『うむ。確実にダメージを与える事は出来たが倒すには至らなかった』

「チェイサーさんで追えば如何にか追い着けるかな？」

『無理だな。既にホルダー反応が無くなっている上に回りに大勢の人が居る。砂漠で特定の一粒の砂を探す様な物だぞ』

「お手上げか…」

ビルの屋上には意気消沈する俺達と食べかけのお菓子の山だけが残された。

「所でもう一つ有る解決策って何なんだよ？」

俺とメカ犬は変身を解いた後、今も尚屋上に居座り作戦会議を開始していた。

俺が聞いたのはメカ犬が言っていたもう一つの奴への対抗策を聞くためだ。

ライダーキックが効かなかった事から奴ともう一度戦った時に確実に倒す手段が今の所俺達には無い。

だから少しでも倒せる確率を上げる為にやれる事をやっておきたいのだ。

『うむ。もう一つの手段なのだが、正直な話を言えば実行する事は不可能に近い事かもしれないのだ』

「何でだよ。専門的な技術が無いと出来ないとかか？」

『あのタイプに共通する弱点なのだが、一定の物質に反応して変化をするホルダーはそれと違う物質を取り込むことで弱体化する場合も有る』

「じゃあその物質ってのをあのホルダーに食わせればあのぽよんとか、ぱおんとかのふざけた身体を無効化できるんだな？」

他のホルダーなら分からないが、あのホルダーならお菓子の山の中にでもそっと忍ばせて置けば勝手に食ってくれそうだ。

「意外と何とか成りそうだけどな」

『話はそんな簡単では無いのだマスター。まずその物質が不明な上に調べる手段が、奴を捕まえて研究するか、その物質を食べるまで無尽蔵に与え続けるくらいしか方法が無い』

確かに捕まえる事が出来るぐらいなら、倒してしまった方が早いし、後者の方法は少しの量を食べさせる事が出来たとしても、何度も使える手ではないだろう。

「何かその物質に成り易い傾向とかは無いのか。真逆に位置する物とかでさ。今回の奴なら糖分の反対に例えば唐辛子みたいな？」

『そういった法則は無いが…人の本能に訴えかける様な刺激物ならばもしかしたら無条件でその物質と同じ働きをするかも知れないな。だがそのような物は簡単に入手出来ないだろう。唐辛子等では代用出来る訳も無い』

「そっか…」

人の本能にねぇ…

辛い位じゃ駄目って言うと毒位の物しかないのだろうか？

俺は過去でそんな物と巡り会った事があるだろうかと思い考えた。

…在った。

一つだけだが、人類の本能に訴えかけるような物で入手可能な、しかも外見的には食べ物が！

だがこれは一人の人間として、迂闊に手を出して良い物なのかと言

うと微妙な所だ。

下手をすれば無用な犠牲を招く事態に陥る可能性も少なくない。

しかし背に腹は変えられないのだ。

「メカ犬。俺に一つだけ心当たりがある」

俺は覚悟を決めて、不敵な笑みを浮かべながらメカ犬に話しかけた。

『本当かマスター！？』

「ああ。この件は俺に任せておいてくれ。それと一つだけ確認したい事が有るんだが…」

俺とメカ犬の作戦会議はこうして約三十分後に終了した。

「遅いなメカ犬の奴…」

俺は喫茶翠屋で紅茶を飲みながら愚痴を零した。

作戦会議を終えた後、俺達は役割を分担し、三時間後に一度この翠屋で落ち合う事にしたのである。

メカ犬は次にホルダーが現れそうな場所の情報を探りに行き、俺はある物を入手する為とある人物に会いに行ったのだ。

目的が明確だったのと、その会いに行っていた人物が快く例の物を譲ってくれたので、俺の用事は案外早くに終わった。

なので、早めに翠屋に辿り着いた俺は優雅に午後のティータイムなんぞをしている訳だ。

偶に時間の空いた士郎さんや桃子さんと世間話をしつつ時間は過ぎていった。

その際に桃子さんから聞いたのだが、なのはちゃんは今でも頑張ってお菓子作りに励んでいるそうだ。

明日を楽しみにしててねと意味深な事も言っていたので、明日はなのはちゃんの作ったお菓子のお披露目会でも有るのかもしれない。

実際の所は如何なのか聞いてみても、上手い具合にはぐらかされてしまったので、あくまで可能性の話である。

『遅くなってすまないなマスター』

予定の時間から十分程送れてメカ犬が翠屋にやって来た。

「いや大丈夫だ。気にするな」

『うむ』

メカ犬は頷くと俺の横の空いている椅子に飛び乗った。

『それで例の物は手に入ったのかマスター？』

「ああ。こっちは無事に手に入れた。それよりも問題はメカ犬の方だろ」

フルメタル犬の登場に翠屋のお客さんは誰も驚きはしない。

それどころか常連さん等は軽く挨拶してくる程だ。

人間って生物は高い適応能力を持ってるんだなって改めて思う。

『これを見てくれマスター』

メカ犬が一枚のチラシを出してきた。

そんな物を何処から出したんだと突っ込みを入れたいが、今の雰囲気では出来そうに無いので、スルーしてメカ犬が出してきたチラシに目を通した。

「海鳴グランドホテル主催世界のケーキ展？」

チラシの上部分にはその文字が大きく書かれており、文字の下には

色々なケーキの写真が写っていた。

『次に奴が現れる可能性が最も高いのはその場所で間違い無い筈だ』

あのホルダーの特色から見ても、確かにこの場所にやって来る確率は高そうだ。

ただ…

「どうやって中に入ればいいんだよ？」

チラシの一番下に書いてあるのだが、このケーキ展に参加するには予約制のチケットを前以って購入していなければいけないと書かれていたのだ。

しかもこの展示は今夜七時からパーティー会場を貸切で開催される。

既に予約できる期間は終了していたのだ。

俺とメカ犬が如何するべきかと悩んでいると、

「何やってんのよ純？」

突然後ろから声を掛けられた。

振り向けくと、其処には俺の良く知る人物、金髪が特徴的な美少女アリサちゃんが居た。

「何それ？」

アリサちゃんはそう言うと、俺の手からチラシを奪い取って目を通した。

「あら純。もしかしてあんた、この場所に行きたいの？」

チラシに目を通したアリサちゃんが俺に聞いてくる。

「うん。だけどチケットが無いと入れないらしいんだよね」

俺がそう返すとアリサちゃんが不適に微笑みながら、俺に数枚の紙を見せてきた。

「ふっふっふっ…これなあ～んだ？」

目の前に出された紙の束を良く見ると、チラシにも載っていた海鳴グランドホテルの文字とケーキのイラストが描かれている。

「もしかしてそれ…」

「そうよ。そのケーキ展の招待チケット」

「何でアリサちゃんが持ってるの？」

「この企画はね、お父さんの会社の企業も参加してるのよ。それでお父さんから興味が有るならお友達も連れて行ってきなさいってチケットを沢山貰ったの」

アリサちゃんは胸を張って答えた。

そういえばアリサちゃんは、大企業の社長の娘で本物のお嬢様だっ

た。

普段はあまりお嬢様って感じがしないからすっかり頭の中から抜け落ちていた。

お嬢様っていったら如何してもすずかちゃんのイメージが先行しちゃうんだよな。

「はい。このチケット純にあげるわ」

アリサちゃんがチケットの一枚を俺に差し出してきた。

「え、貰って良いの？」

「元々そのつもりで持ってきたのよ。最近なのはがお菓子作りに凝ってるって言ってたし、純がその、そ、そういった物好きだって聞いたから…か、感謝して受け取りなさいよね！」

俺は差し出されたチケットをありがたく受け取った。

「ありがとう！アリサちゃん大好きだ！」

俺は予想外の出来事で、チケットが手に入った事でテンションが上がってしまい、思わずアリサちゃんに抱き着いてしまった。

『大胆だなマスター』

メカ犬の言葉が聞こえると同時に、翠屋のお客さん達から笑い声が上がった。

ハイテンションで抱き着く俺と、真っ赤になってされるがままになるアリサちゃん。

そして微笑ましい物でも見ている様に、笑い声を上げる翠屋のお客さんが暫くの間店内を一層賑やかにしていた。

暫くしてテンションが戻った俺は誠心誠意の土下座でアリサちゃんに謝罪した。

「なんて言うか…凄いな」

「そうだね」

「そうかしら？パーティーって言ったらこれ位普通じゃない」

「二人はこういった場所に慣れてないだろうし、仕方ないと思うよアリサちゃん」

俺は今海鳴グランドホテルのパーティー会場に来ている。

会場内には凄い数の人と、見たことも無いような色とりどりのケーキが用意されていた。

俺は普通の私服だが美少女三人組は赤、青、黄色とドレスを身に纏っていた。

会場内では俺以外にも私服の人は結構居るので全体的に浮いた感じはしないが、三人の傍に居ると如何にも居心地が悪い気がする。

それほどまでに三人はドレスを着こなしているのだ。

アリサちゃんがドレスを着ていた事には納得したのだが、なのはちゃんとすずかちゃんも、特になのはちゃんがドレスを着ていた事には正直驚いた。

良くこの短時間で準備が出来た物だと思ったのだ。

しかしこれには一つの理由があった。

なのはちゃんとすずかちゃんは、俺よりも何日も早くに誘われていた様で全て準備が整った状態で、ホテルに行く際に迎えに来てくれたアリサちゃんの車に普通に乗っていた。

何で俺だけが当日に誘われたかというと、なのはちゃんからの情報で俺が大のケーキ好きだと思ったアリサちゃんが、折角だからサプライズで、当日に知らせて驚かそうという話になったそうだ。

だから二人がドレスを着ていることは当たり前だったのだ。

後、流石に子供だけでこんな場所に来る事は出来ないので、アリサちゃんの専属執事である鮫島さんに保護者として同行してもらっている。

鮫島さんは執事としては物凄く優秀な人だ。

このホテルに来る際も運転は鮫島さんにしてもらった。

ただ俺は個人的な理由で、この人とはあまり関わり合いたくなかったりする。

初めて顔を合わせたその日から会う度に俺を勧誘してくるのだ。

何でも俺には執事の才能が有るとかで、バニングス家で修行しないかと挨拶と同レベルの頻度で言われている。

何せ今日も車に乗る際に、こんばんわ執事になる決心は着きましたかと言われたのだ。

今の所執事になる気は毛頭無いので断り続けている。

しかし最近は、主人であるアリサちゃんまでをもどうやってか味方に着けたらしく、鮫島さん程では無いがアリサちゃんからも勧誘される様になって来たのが心配の種だったりする。

最初は固まって行動していたのだが、其々見たい物や食べたい物が分かれたので暫く別行動をする事になった。

俺としては好都合なので、一時間後に会場のステージ近くで落ち合う事にして一人一旦会場を後にした。

『会場内に異常は無かったかマスター』

扉を出てすぐに、廊下から走ってきたメカ犬が俺に話しかけてきた。

メカ犬はホテルに到着した直後に周辺の様子を調べてくると言って別行動を取っていた。

「いや、タッチノートにも反応は無いし、会場内にも見るからに怪しい奴はいなかったな」

『そうか。だが油断は禁物だぞマスター。今朝ダメージを与えた事からも、奴は一刻も早く傷を癒す為に大量の甘味を必要としている。この様な絶好のチャンスをみすみす逃すとは到底思えない』

「そうだな…」

『キンキュウケイホウキンキュウ…』

突然タッチノートから警報が鳴り出した。それと同時に扉一枚を隔てた会場内から悲鳴が聞こえてきた。

『マスター！』

「ああ！」

俺は急いで扉を開けた。

其処に広がる光景は、今朝のケーキ屋を再現している様だった。
様々なケーキが宙を舞っている。
全てのケーキが浮かぶと、まるで示し合わせた様に会場の窓を突き破ってケーキ達は外へと飛び出していった。

『追うぞマスター』

「分かってる」

俺とメカ犬はホテルを出て一旦人目の無い所まで移動した。
周りに誰も居ない事を確認してから、タッチノートを取り出してボタンを押す。

『チェイサー』

タッチノートから音声が流れると遠くからエンジン音が聞こえてきた。
エンジン音を鳴らす一台の黒いバイクが俺達の前にやって来た。

『はあ～いマスター。こんな時間に呼ぶなんて珍しいわね。夜更かしは美容の大敵よん』

オッサンボイスな乙女バイクのチェイサーさんがやって来た。
何時もながらにご機嫌なテンションをしていらっしゃる。

「チェイサーさん！あの宙を浮かんでるケーキ達を追って欲しいんだ！」

『ＯＫマスター。早くアタシに乗りなさ～い』

俺はチェイサーさんの言葉に急ぎシートによじ登る。

メカ犬も俺の肩にしがみ付いていた。

あ、しまった！

俺はチェイサーさんに登ってから重大な事に気づいたのだが既に手遅れだった。

ガキン！

俺の腰が鉄の輪の様な物で固定される。

『さあ！飛ばすわよ～！』

「ちょっとまラメえええええええええええええ！！！！！！！」

俺が最後まで言葉を言う前にチェイサーさんは疾風の如く走り出した。

俺は急いでるあまりに失念していたのだ。

チェイサーさんに乗る前に変身しないと、ジェットコースターにも勝る体験をする事になるという事を…

ケーキの後を追って辿り着いたのは以前に俺が情報屋のチワワであるジャックと出会った裏路地の空き地だった。

空き地には今朝戦ったホルダーが物凄い勢いでケーキを食べている。

その身体は明らかに以前よりも二周りほど大きくなっていた。

『さあ～突っ込むわよ！』

チェイサーさんはホルダーの姿を確認すると何時もの如く突貫する。

「んあ！？」

ぽんよよよ～ん。

ホルダーは何とも力の抜けそうな衝撃音を上げながら吹っ飛んだ。

数回程ゴム鞠の様に弾むと、たいしたダメージも無いのかホルダーは平然と立ち上がった。

「何だあ一体？」

頭部をボリボリと掻きながら、相変わらずのマイペースを披露して来る。

しかしチェイサーさんのバイクタックルにも耐え切るとは、このホルダーの耐久力は凄まじい物があると改めて実感してしまう。

包容力のある男って素敵ね等と言っているチェイサーさんから降りた俺は、ポケットからある物を取り出して何時チャンスが来ても良い様に備える。

「ん？またオイラの邪魔しに来たのかお前達はあ」

バイクから降りた事で、俺の姿を確認してきたホルダーが嫌な物を見た様な言い方をしてきた。

ここからが本当の作戦だ。

「またこんな事をやってるのかお前は！」

「オイラは甘い物が食いたいだけだ。邪魔すんじゃねえ」

「もうこれ以上勝手にお菓子を盗まないって誓うならこれをやるぞ」

俺はホルダーに手に持っていた例の物を見せ付ける。

それは白い袋にピンクのレースでラッピングされた物だった。
俺はピンクのレースを解いて、その中身をホルダーに確認させる。
「そ、それは！」
袋の中に入っているのはクッキーだった。
「そいつを寄越せえ」
俺が持っているのをお菓子だと確信したホルダーは目の色を変えて
俺からクッキーの入った袋を奪い取った。
「うほほ。美味そうだなあ」
新たに手に入れた甘味を手にホルダーは歓喜の声を上げる。
俺は心の中で静かに笑った。
計画通り…
『良いのかマスター？奴にわざわざ甘味を与えるような事をすれば
取り返しが着かなくなるぞ！』
メカ犬が何をしているんだと捲くし立てる。
「まあ見てろって。多分上手くいく筈だ」
俺が普通のクッキーをホルダーに与えるなんてする訳が無い。

あのクッキーは特別性だ。

「頂きまあす」

ホルダーは案の定躊躇う事無く俺から奪い取ったクッキーを貪り始めた。

そして奴の変化は突然やって来る。

「う！？」

ホルダーが苦しみもがき出したのだ。

『如何したのだ。マスターはあの甘味に何を仕込んだというんだ？』

苦しみだしたホルダーを見たメカ犬が俺にネタばらしを要求してきた。

「別に特別変な物は入れてないさ。ただあのクッキーの製作者が美由希さんだった…それだけの事だ」

そう。

材料は普通だが製作者が普通じゃない。

高町美由希の手作りクッキー。

別名を高町家の惨劇と呼ぶ。

最初から俺には確信があったのだ。

美由希さんの料理なら、理屈とか全てを超越してこのホルダーを弱体化する事が出来る筈だと！

そして予想は見事的中して今正にホルダーは弱体化している。

ただしこの結果に至るまでに、尊い犠牲を出す事となってしまった。

俺は美由希さんの前で、恭也君が美由希さんの手作りクッキーを食べたがってると嘘情報を囁いたのだ。

それを聞いた美由希さんが嬉々として大量のクッキーをかなりの気合いを込めて作り始めたのである。

俺はその御裾分けを貰ってきたのだ。

今頃は、恭也君の為に美由希さんが大量の手作りクッキーという名の特殊兵器を量産している事だろう。

俺は一人の勇敢な勇者の名を決して忘れはしない。

『美由希嬢の料理は凄まじいのだな…』

「ああ。本当にな…」

苦しむホルダーを見ながら俺とメカ犬はしみじみと頷いた。

「お前らよくもやってくれたなあ…」

苦しさもいつの間にか収まってきたのか、先程と比べれば大分スリムになったホルダーが睨んできた。

『マスター！今の奴なら攻撃が届く筈だ』

「ああ！気合い入れていくぞメカ犬」

『うむ』

俺はタッチノートを開きボタンを押した。

『バックルモード』

音声が流れるとメカ犬が銀色のベルトに変形して俺の腹部に巻き付く。

「変身」

キーワードを発した俺はタッチノートをそのバックル中央部の溝に差し込んだ。

『アップロード』

白銀の光が俺を包み込み一人の戦士へと変えた。

「また可変ライターとかいうのになりやがったなあ」

「だから仮面ライダーだっての！」

いい加減名前を間違えるのは勘弁してもらいたい。

『突っ込みを入れている場合ではないぞマスター』

メカ犬の言う通り、ホルダーは俺の名前を間違いながらも襲い掛かった来た。

随分スリムにはなった物の、それでも一般から見ればふくよかな体型なので、ホルダーは前回同様に連続フックを仕掛けてきた。

俺はそれを裁きカウンターを喰らわせる。

「ふあっ」

今度は妙な音もせずに普通に攻撃が効いた。

『効いている。いけるぞマスター！』

「ああ！」

だがそれでも他のホルダーに比べ耐久力が高いのか中々倒れない。

俺はホルダーのフックを避けて一旦距離を取った。

『あれを試すのかマスター？』

「確実にあいつを倒すには出し惜しみ出来ないだろう」

俺はメカ犬の質問にそう答えるとバックルからタッチノートを引き抜いて全体図を表示させる。

何時もの様に右足部分をタッチする。

そしてここからが何時もと違う。

俺は続いて左足をタッチしてから右腕と左腕にもタッチして、再びタッチノートをバックルに差し込んだ。

『ポイントチャージ』

『ポイントチャージ』

『ポイントチャージ』

『ポイントチャージ』

バックルから白い光が発生して順次に右足、左足、右腕、左腕へと集約していく。

俺は四肢に光を纏いながらホルダーに駆け込む。

「はあ！」

「やあ！」

まずは左拳を叩き込んだ。

続いて右拳を喰らわせる。

「たあ！」

ホルダーが怯んだ所を左回し蹴りをお見舞いして吹き飛ばす。

「こいつで決めるぜ」

俺は大きく跳躍し右足をホルダーに向ける。

「ライダーラッシュ」

全身に光を纏った俺は全力の蹴りをホルダーに叩き込んだ。

それをまともに受けたホルダーは白い光を発しながら爆発した。

爆発した後にいたのは、気絶したポッチャリ系の中学生男子だった。

「…上手くいったな」

『うむ。初めてとは思えない完成度だったぞマスター』

俺は美由希さんの特殊兵器が効かなかった時を考えて、メカ犬に一つ質問をしていた。

それが必殺技を同時に発動出来るかどうかだ。

答えは俺次第と言われた。

二つ以上の使用はコントロールが難しいので、変身した本人が如何にかするしかないらしい。

だから一つの賭け的な要素を含んでいたが、結果から言って俺は賭けに勝ったようだ。

「きゃんきゃん」

いつの間にかジャックがやって来ておりホルダーの残したケーキの山を食べていた。

この時ジャックが何を言っていたのか後日メカ犬に聞いてみると、

『今回の話で使われた食材はスタッフが美味しく頂きました。と言っている』

と言っていた。

何じゃそりゃ？

翌日の放課後。

学校が終わった後翠屋に来て欲しいとなのはちゃんに言われた俺は素直にやって来た。

俺よりも早く帰ってきたなのはちゃんは翠屋で俺が来るのを待っていたのだ。

なのはちゃんが俺を席に案内して座ると、

「ちょっと待っててね」

と言って厨房に消えていくなのはちゃん。

暫くするとなのはちゃんはシンプルなショートケーキを持ってきて俺の目の前に置いた。

「もしかしてこのケーキってなのはちゃんが？」

俺の言葉になのはちゃんが頷いた。

「うん。まだあんまり美味しくないかも知れないけど、食べてくれるかな」

「うん。喜んで頂きます」

俺はフォークでケーキを一口分すくい上げ、それを自らの口に入れた。

それと同時に口の中に程好い甘さが広がった。

桃子さんと比べれば勿論純粋な味では勝負にならない。
でもこの味はそれとは別の、なのはちゃんの優しさが伝わってくる、そんな味がした気がする。

「とっても美味しいよ。なのはちゃん」

その言葉を聴いたなのはちゃんの表情が緊張を孕んだ物から一転華が綻ぶ様な笑顔に変わった。

「ありがとう純君」

俺となのはちゃんの穏やかな時間が店内で流れる。

『もう一つの現実から目を逸らして良いのかマスター？』

…言うなメカ犬。

俺だって出来る事なら助けたいがそれは不可能なんだ。

俺となのはちゃんが穏やかに談笑するその後ろの席で恭也君が痙攣していた。

その手と目の前の皿の中には大量のクッキー…

更に瀕死の恭也君に追い討ちを掛けるが如く、美由希さんがオカワリを大量に持ってきていた。

俺は心の中で恭也君に謝罪しながらも、なのはちゃんに笑顔を向け

てまた一口ケーキを口にし、美味しいよと答えた。

今日の海鳴は甘いお菓子の香りに包まれて、約一名の勇者を除いて大体平和だ。

## 第六話　高町さん家の小さなパティシエール【後編】（後書き）

次回はついにフォームチェげふんげふん！

## キャラクターファイル第一弾（前書き）

登場人物が増えてきたので六話までの人達を一旦まとめてみました。

一部人で無い物等が混ざっていますがお気になさらないでいただけるとありがたいです。

一応最後には短いですがおまけも載っています。

## キャラクターファイル第一弾

登場人物

○板橋　純　　初登場　第０話

ご存知この小説の主人公。

元地方の大学生をしていたが、何故か死亡後リリカル世界に転生してしまった。

大の特撮好きで、特に仮面ライダーは己の人生のバイブルと豪語するほどだ。

特徴は地味。

それがリリカル世界においての彼の個性と言える。

性格は基本ヘタレで自分を卑下する傾向があるが、目の前で困っている人が居れば考えるより先に行動してしまう一面も持っている。

メカ犬との出会いを経て本物の仮面ライダーになってしまった。

最初は戦う事に戸惑っていたが、メカ犬となのはに勇気を貰い、戦う事を決意した。

今はメカ犬と協力して日々海鳴市の平和を守っている。

○仮面ライダーシード　　初登場　第二話【後編】

純とメカ犬が融合した姿。

バックルモードになったメカ犬を純が腹部に巻きつけ、音声キーワードである変身の言葉と共にタッチノートを差し込む事で誕生する。

仮面ライダーの名に相応しい超人的な力を持っていて、主な戦闘方法は素手による格闘戦を得意としている。

唯一ホルダーの暴走プログラムを破壊できる能力を有している。

必殺技はポイントチャージから繰り出す、ライダーキックとライダーパンチ、複合技でライダーラッシュ等が有る。

○メカ犬　　初登場　第二話【前編】

別次元で作られた犬型ロボットで純の相棒。

ホルダーの脅威を察知した博士の手によりこの世界にやってきた。

偶然にも拾い再起動させた純とマスター登録をした為、純をマスターと呼ぶ。

正式名称はバディーシステムだが、マスターである純にはメカ犬と呼ばれ、主な女性陣にはメー君の愛称で呼ばれている。

性格は真面目だがユーモアも持ち合わせている。
得意技はナチュラルトーク。
次元転送された際に一部のメモリーを紛失してしまっている。

○タッチノート　　初登場　第二話【前編】

もはやこの小説の万能ツール。
変身に使ったり、レーダーになったり、地図になったり、バイクを呼んで極めつけは必殺技でも使用する。
これからも機能は増えるかもしれないです。

○チェイサー　　初登場　第三話【後編】

新宿二丁目系のオッサンボイスな乙女ライダーバイク。
メカ犬と同じく博士に設計されたサポートシステム。
メカ犬以上に謎だらけな存在で、普段何処で何をやっているのかは今のところは一切不明。

だが純が呼べば必ず駆けつけてくれる頼れる第二の相棒である。

性格は正に姐さん。

得意技は猛スピードで突っ込むバイクタックル。

○高町なのは　　初登場　第一話

この小説を読んでいる人ならば誰もが知っているであろう原作主人公。

この小説では純の影響の為か、オリジナルよりも甘えん坊な所が有るが、やはり強い正義感を持っている。

純のお隣さんで幼馴染。

魔法少女になるのはもう少し後になりそう。

この小説においてはメインヒロイン的なポジションを勤めている。

○アリサ・バニングス　　初登場　第二話【前編】

原作キャラの一人。

この小説では無類の犬好きなリアルツンデレお嬢様。

純の同級生で、メインヒロインその二的なポジションを持っている。

○月村すずか　　初登場　第二話【前編】

アリサ同様原作キャラの一人。

見た目おっとり系だが大の力持ち。

趣味は読書で、この小説ではメインヒロインその三的ポジション。

○高町士郎　　初登場　第一話

原作キャラでなのはの父にして生身では最強の部類の強さを誇っている。

この人の出番を増やすとパワーバランスがヤバイ可能性が有るので出番はあまり来ない予定。

一番近いポジションは仮面ライダー定番のオヤッサン？

○高町桃子　　初登場　第一話

原作キャラでなのはの母。

夫の士郎と共に喫茶翠屋を経営している。
この人には台詞があっても良いのではと思うが今の所喋る予定は無し。

○高町恭也　　初登場　第一話

原作キャラの一人でなのはのお兄さん。
台詞こそ無い物の出番はかなり多い。
この小説においては最強のシスコン剣士。
純の天敵でも有る。

○高町美由希　　初登場　第一話

原作キャラの一人でなのはのお姉さん。
普段この小説では影の薄いキャラだが、料理をさせれば士郎や恭也を凌駕する最強キャラになる。
第六話【後編】でホルダーを倒したのは事実上彼女と言っても過言では無いだろう。

○純の母　　初登場　第０話

転生後の純の母親。

名前は今の所出ていないがその内出す予定。

かなりの天然が入っている。

何気に最初から出番と台詞が有る人。

○純の父　　初登場　第一話

転生後の純の父親。

一応描写で少しだけ触れられているので乗っている普通の人。

多分その内出番が来る筈です。

○ホルダー　　初登場　第二話【後編】

メカ犬が居た別次元からやって来た暴走プログラムが人と融合した際の総称。

元はコンタクトフュージョンシステムという、人の可能性を広げる物だったのだが、一人の科学者の野望により悪魔のシステムへと変貌してしまった。

正式に名称が出てきたのは第三話【前編】から。

○博士　　初登場　第二話【後編】

メカ犬やチェイサーの製作者で、コンタクトフュージョンシステムの開発もしていた。

この世界にメカ犬達を送り込んだ人でも有る。

メカ犬の説明でのみの登場なので今の所は詳細不明。

○科学者　　初登場　第二話【後編】

システムを改変して純達の世界に暴走プログラムをばら撒いた張本人。

その目的も素性も今の所全てが謎に包まれている。

○金髪の女の子　　初登場　第０話

トラックに轢かれそうな所を純に助けられた不思議な雰囲気を纏った謎の少女。
リリカル世界の住人では無いので再登場があるのかは未定。

○子猫　　初登場　第０話
突然道路に飛び出てきた子猫。

○トラック　　初登場　第０話
純が転生した事から、このトラックはまさか二次創作界伝説の転生トラック？

○友人達　　初登場　第０話
純の前世で友達だった人達。
重度のオタクを患っている。

○先生　　初登場　第０話

産婦人科のお医者様。

○仮面ライダー　　初登場　第０話

日本が誇る特撮ヒーロー番組。

知らない人は今すぐＤＶＤレンタルショップにＧＯだ！

○スクールバスの運転手と乗車していた生徒達　　初登場　第二話【前編】

モブキャラです。

○最上級生　　初登場　第二話【前編】

未来のアスリート達。

○担任の先生　　初登場　第二話【前編】

私立聖祥大附属小学校の教師で純達の担任。
点呼の際に純の名前だけ呼び忘れる事が有る。

○クラスメート達　　初登場　第二話【前編】
空気の読める賢い子供達だ。

○自転車　　初登場　第二話【後編】
最高瞬間時速３０キロを誇る純専用のママチャリ。
一時紛失するが後日無事に戻ってきた。

○レスキュー隊員　　初登場　第二話【後編】
海鳴市の人々の平和を守る屈強な人達。

○海鳴市の市民達　　初登場　第二話【後編】
モブキャラパート?。

○海鳴市の警察官　　初登場　第二話【後編】

ホルダーと勇敢に戦った人達。

何気に一人だけ台詞が有った。

○初老の男性　　初登場　第二話【後編】

不完全な形でホルダーの素体になった人。

その正体は企業戦士サラリーマン。

○マスコミ及びマスメディアの人達　　初登場　第三話【前編】

日々最新のニュースを追っている。

○乾電池　　初登場　第三話【前編】

メカ犬のおやつ的な物。

その食事風景は純の部屋をカオスに陥れた。

ちなみにサイズは単三型。

○マゼンタ色の世界の破壊者　初登場　第三話【前編】

なのはの後ろに純が見た幻。

いつか本人と本編で共演させようかと考えてたり無かったり…

○青い耳無しネコ型ロボット　初登場　第三話【後編】

個人的には初代の声が好きです。

○某カエル型侵略者　初登場　第三話【後編】

地球を侵略するであります。

○赤い奴　初登場　第三話【後編】

目を食いしばれ！

○簀巻きにされた人達　　初登場　第三話【後編】

モブキャラパート?。

○メガネを掛けた男性　　初登場　第三話【後編】

ホルダーの素体になった人。

ホルダー時の能力は植物の成長促進とコントロール。

本来は自然を愛する青年である。

○お隣さんのお爺さん　　初登場　第三話【後編】

純の前世のお隣さん。

大の猫好き。

○にゃん吉　　初登場　第三話【後編】

お隣さんのお爺さんの飼い猫。

最後は無事天寿を全うした。

サイドストーリーに前世の純とお爺さんとにゃん吉のハートフルな物語が有るらしい？

○喫茶翠屋のお客さん達　　初登場　第四話【前編】

海鳴市の市民の中でも特に適応能力が高い人が多い。

ノリも良く他のモブキャラとは一線を画しており、出番も頻繁に有る。

○オレンジのショルダーバッグ　　初登場　第四話【前編】

純のお気に入り。

本編でも何気に使用されている事が多い。

○犬の肉球がプリントされた白地のハンドバック　　初登場　第四話【前編】

アリサのハンドバッグ。

中には女の子の秘密が詰まってる？

○赤坊　　初登場　第四話【前編】

ダックスフンドの子犬。

赤い首輪がトレードマークである。

実際の登場は後編だがアリサが前編で写真を見せているので初登場は前編扱い。

○大量の犬　　初登場　第四話【前編】

ホルダーに操られていた犬達。

海鳴商店街を地獄絵図にした。

○海鳴商店街の住人達　　初登場　第四話【前編】

御愁傷様としか言いようが無い。

○三丁目の犬おばさん　　初登場　第四話【前編】

名称は後編からの登場だがホルダー状態は前編で登場しているので前編と記載。

海鳴三丁目で犬好きで有名なおばさん。
ホルダー時の能力は音波の一種を操る事で、犬達を操る事が出来る。

○ジャック　　初登場　第四話【後編】
海鳴市一の情報屋なチワワ。
メカ犬とはプライベートでも仲が良い。
報酬はビーフジャーキーで…

○ワンちゃんまっしぐら　　初登場　第四話【後編】
愛犬家御用達の大人気ペットフード。
その魅力に犬は抗う事が出来ない程だ。

○バニングス邸の飼い犬達　　初登場　第四話【後編】
皆御主人様のアリサが大好き。

○ＤＸシードバックル　　初登場　第四話【後編】　後書き

完全なジョーク企画。

発売予定はありません。

○絵本の女の子　　初登場　第五話【前編】

童話の主人公の一人。

内容が気になる人は海鳴図書館に行ってみよう。

○森の妖精さん　　初登場　第五話【前編】

童話の主人公の一人。

歌声がとても綺麗。

○司書のお姉さん　　初登場　第五話【前編】

海鳴図書館で司書をしているノリの良いお姉さん。

ホルダー時の能力は、能力を複合して人工のホルダーを作り出すか

なりの変り種。
図書館は原作でも縁のある場所なので、準レギュラーも夢ではないかも知れない。

○フェアリーベル　初登場　第五話【前編】
すずかが借りた童話の本から出てきた妖精。
愛称はベル。
その正体はホルダー能力で生み出された人工の存在だった。
すずかとは友情を育み親友になるが、最後はホルダーが倒されると同時に消滅している。

○モンスター　初登場　第五話【前編】
ホルダーの能力で生み出された人工ホルダー。
ベースはファンタジー小説の敵キャラ。

○ノエル　初登場　第五話【後編】

月村家の専属メイド。
描写だけで出番はまだ無い。
性格はクールビューティー。

○ファリン　　初登場　第五話【後編】
ノエルと同じく月村家の専属メイド。
純いわくドジっ娘属性があるらしい。

○図書館に居た人達　　初登場　第五話【後編】
もしかしたらこの中に車椅子の関西弁少女が居るかもしれない…

○千羽鶴　　初登場　第五話【後編】
なのはとアリサの計画で誕生し、すずかにプレゼントされた。
友達を思う優しさが詰まっている。

○戦争映画に出てくる兵士　　初登場　第六話【前編】

かなりの演技力を持つ。

実力派俳優。

○アイコンタクト　初登場　第六話【前編】

互いの目を見ただけで会話が成立する高等技術。

命の危機を察した純と恭也は、この技を自在に使いこなしていた。

○美由希の手作り料理　初登場　第六話【前編】

有る意味この作品で最強の武器。

ただし使用する度に一人の勇者が犠牲になる。

○駅前で評判のケーキ屋　初登場　第六話【前編】

ホルダーの被害にあったお店。

売れ筋はシナモンロール。

○ケーキ屋のお客さん　　初登場　第六話【前編】

悲痛な叫びからも彼らが真の甘党で有る事が推測できる。

○ポッチャリ系中学生男子　　初登場　第六話【前編】

ホルダーが前編で登場している為記載は前編としています。

本来は超甘党の素朴な少年。

ホルダー時の能力は糖分を吸収することでエネルギーに変換する事が出来る。

○海鳴グランドホテル　　初登場　第六話【後編】

海鳴市の高級ホテル。

定期的に様々なイベントも開催されている。

○鮫島　　初登場　第六話【後編】

アリサ専属の凄腕執事。

純に執事の素質が有ると言って顔を合わせる度に勧誘してくる。

○スタッフ　　初登場　第六話【後編】

この作品を裏から支えてくれている人達。

様々な役割を担っている。

おまけ

俺はホルダーに回し蹴りを食らわせて吹き飛ばした。

『今だマスター！』

「ああ！」

俺はバックルからタッチノートを取り出し全体図を表示させる。

俺は頭部をタッチして再びバックルにタッチノートを差し込んだ。

『ポイントチャージ』

光が俺の頭部へと集約し神々しいばかりの輝きを放つ。

「こいつで決めるぜ」

俺は大きく跳躍し輝く頭部をホルダーに向ける。

「ライダーヘッドアタック」

俺は輝く頭部を全力全開でホルダーにぶつけた。

見事ホルダーを倒し、変身を解いた俺の頭部は天然の輝きを放っていた。

キラリン☆

おしまい

## キャラクターファイル第一弾（後書き）

次回こそは真面目に本編を更新します。

## 第七話　スキャンダルは仮面ライダー？【前編】（前書き）

約一週間振りの更新になります。

楽しんで頂けると幸いです。

続きは早ければ今週中に一回遅ければ、来週は執筆出来る時間が取れないかも知れないので再来週以降になると思います。

# 第七話　スキャンダルは仮面ライダー？【前編】

晴れた日の早朝はとても清々しいものだと俺は思う。

空気は澄んでるし、朝日を浴びると太陽から元気を分けて貰えてる気がして来る。

俺の朝は早い。

前世の頃から朝型人間だった事も有るし、今の俺は一応小学生なので夜更かしする訳にもいかないのである。

すると自然と就寝時間も早くなり、それに比例して起床時間も早まるのだ。

今日もその例に漏れず俺は朝早くに目を覚ました。

布団から這い出た俺は、部屋のカーテンをあけて朝日を全身に浴びながら大きく伸びをする。

朝の日差しで眠気を覚まし、軽く身支度を整えた後、俺は部屋を出てリビングに向かった。

リビングに着くと食欲を刺激する美味しそうな匂いが漂ってきた。

我が家のキッチンは開放型でリビングと繋がっているので誰かが料理をしていればすぐに分かる様になっている。

そしてこの家で料理をするのは大体決まっている。

「おはよう母さん」

俺が挨拶をするとお玉を持った母が顔を覗かせた。

「おはよう純。今、純の分の朝ご飯準備するから待っててね」

「うん」

台所に母さんが戻っていくのを確認した俺は、朝食の準備が出来るのを待つ為に食卓に向かった。

食卓には既に板橋家の住人が、台所にいる母さん以外全員揃っていた。

「おはよう父さん」

まずは一家の大黒柱である父に挨拶をする。

父さんは俺の周りの人達の中で、一番普通の人と言える存在だ。

特にイケメンな顔でもないし、お隣さんみたいに特殊能力を兼ね備えている訳でもない、善良な会社員なのである。

「おはよう。今日も早起きだな純は」

新聞の経済面を見ていた父さんは俺の挨拶を聞くと、新聞から顔を上げて俺に挨拶を返してきた。

「まあね」

俺は適当に相槌を打ちながら、椅子に座る。

「メカ犬もおはよ…如何したんだよそれ？」

先程まで父さんに視線を向けていたので気付かなかったのだが、メカ犬の様子が何時もと違ったのだ。

何と言うか…

普段のメカ犬は輝く程のメタリックシルバーで光沢を放っているのだが、それが所々焦げている、もしくは煤塗れと言える状態になっていた。

「おはようマスター。これには理由があるのだ」

見た目がやけに黒々となったメカ犬が、何故自分がこうなったのかを俺に説明してきた。

何でもメカ犬は今日も朝早くから母さんのお手伝いをしていたらしい。

メカ犬が毎日そんな事をしていたのを俺が知ったのは最近の事だ。

それにメカ犬が何をどうやってお手伝いしているのかは今回は割愛しておく事にしよう。

兎に角お手伝いを終えたメカ犬は、何時もの報酬として自分の朝ご飯である、乾電池を母さんから貰ったそうだ。

メカ犬が言うには、本来は自分の中に発電装置を持っているから、外部からのエネルギー補給は必要無いそうなのだが、俺達人間で言う所の味覚の様な物を持ち合わせており、電気を嗜好品として好むらしい。

板橋家では朝は全員揃ってから食事をする事が殆どなのでメカ犬もそれに合わせて、家族の一員として食事に参加している。

ただ今日のメカ犬は朝早くから、情報屋のジャックと会う約束をしていた為、家族全員が揃うのを待たずに、先に食事を始めたそうだ。

そこに起き抜けの父さんがやって来た。

父さんは癖なのか、それとも習慣なのか、起きるとすぐに玄関ポストに朝刊を取りに行き、台所でコップに一杯の水を入れてからリビングにやって来て、それを飲みながら新聞に目を通す事でようやく起きるのだ。

それまでは何処かふらついた足取りをしているので、傍から見ていると何処か危ないと思えてしまう。

今日もその例に漏れず父さんはふらつきながら、メカ犬が食事をしているリビングにやって来たのだ。

メカ犬は食事の際に発光現象を引き起こす。

そんな事を寝ぼけている人の目の前でやったとしたら、どうなるだろうか。

寝ぼけていた父さんは突然の激しい光に目が眩み、唯でさえふらつ

いている足取りは、当然の如くバランスを崩す。

此処で更に不運が重なった。

バランスを崩した父さんは、思わず手にしていたコップを手放してしまったのだ。

しかも落とすのではなく、光を遮る為に咄嗟に腕を顔に持って行った為に投げる様な形になってしまった。

水入りのコップは放物線をを描きながら飛んでいった。

そして、その着地点に居たのは食事中のメカ犬だった。

「…つまり水浸しになって、全身に電気が感電してそんな有様になったと？」

『うむ。その通りだマスター』

幸いにもメカ犬の身体自体は無事だったらしく、俺は食卓に有った布巾でメカ犬の煤を落としてやりながら、こうなった経緯を聞いた。

「本当にすまなかったなメカ君」

俺が来るまでに何度も謝ったそうなのだが、父さんは改めてメカ犬に謝罪の言葉を口にした。

『あまり気に病まないでくれ父殿。ワタシはこの通り何とも無い』

今でこそ普通に会話をしている父さんとメカ犬だが、初対面の時は

大変だった。

何せ初めてメカ犬と会話を交わした事で父さんはショックで気絶してしまったのだ。

有る意味これが当たり前の反応だと俺はその時思った。

だがその翌日には今の様な関係になっていた。

俺の知らない間に、二人に何があったんだろうか？

「そう言ってもらえると助かるよ。所で純。今日は確か学校帰りに高町さんの所の翠屋に寄るんだって？」

「うん。そうだよ父さん」

この話は此処までといった所だろうか。

父さんは話題を変える為か、俺に話を振ってきた。

普段ならば俺は学校帰りに寄り道等せずに一度家に帰宅するのだが、今日は特別だった。

何と今日は翠屋が雑誌の取材を受けるのである。

海鳴ジャーナルという会社が発行している雑誌、月間ウミナリの喫茶店特集記事に是非載せたいという事で、士郎さん達に取材依頼が来たのだ。

なのはちゃんの話では、取材を受ける時間が俺達の学校が終わって

から向かっても十分間に合いそうだった事と、面白そうだった事も有り皆で見学する事になったのである。

俺は最初邪魔になってしまうんじゃないかと思ったのだが、インタビューコーナーで俺達の様なお客さんの意見を聞く事もあるそうだから、寧ろ来て貰いたいと士郎さん達が言っていたそうなので、問題無いらしい。

暫く親子の語らいと言う世間話をした後、父さんは読みかけの新聞の経済面を再び読み始めた。

俺も話しながらメカ犬の煤を落としていたのを、他にやることも無かったので本格的にやり始める事にした。

真面目にやるとそんなに時間は掛からず、程無くしてメカ犬は元の輝くシルバーボディを取り戻した。

「ふう～。終わったぞメカ犬」

「助かったぞマスター。そういえば、後で良いのだがマスターに話しておかなければいけない事が有るのだ」

「話したい事？」

『うむ』

ここで話さないって事は多分ホルダー関係の事なのだろう。

メカ犬の様子を見るに、別段慌てているわけでも無いので、急を要する事態では無さそうだ。

「分かった。今夜にでも聞かせてくれよ」

『了解した。それではワタシはこれから用事が有るので先に失礼するぞ』

メカ犬はそう言うと玄関に向かって行った。

「ああ。行ってらっしゃい」

『うむ』

俺に短く返事を返したメカ犬は、今度こそリビングを出て玄関先へと姿を消した。

その後何時も通りに家族で食事を済ませた俺は、今も夢の中に居るであろうお隣の幼馴染を起こす為に高町宅に向かった。

案の定、なのはちゃんは何時も通り、幸せそうな寝顔を浮かべながら布団の中で丸まっていた。

もはや俺にとって平日のライフワークとなっている。

高町宅にて眠っているなのはちゃんを起こすというミッションを今日も無事やり遂げた俺は、なのはちゃんを連れて、学校に向かった。

今日もまた俺が先生に点呼の際に呼び忘れられる以外は、特に変わった事も無く放課後を迎えた。

当初の予定通り、俺達四人は翠屋に取材見学に行く事となった。

翠屋に着いた俺達を、士郎さんと桃子さんがいらっしゃいと言って出迎えてくれた。

二人が通常通りに仕事をしている事から推測するに、雑誌の取材はまだ始まっていない様だ。

なのはちゃんが取材の事を桃子さんに聞いた所、少し前に連絡があったそうで、後十分程したらやって来るらしい。

待つ事約十分後。

翠屋の扉が開き一人の女性がやって来た。

首から提げられた一眼レフカメラが印象的だった。

見た感じの歳は二十歳前半だろうか。

髪型はショートカットで快活なイメージが持てる。

絶世のとは言えないまでもスポーティーな美女と分類できるであろう、健康美に溢れた魅力を自然と纏っている。

それを如実に示しているのは、女性の表情だ。

陰りの無い爽やかな笑顔が、そのイメージを更に揺ぎ無い物にしている。

女性は翠屋に入ると、声を上げた。

「どうも、海鳴ジャーナルの者です。今日は宜しくお願いしますね」

どうやらこの女性が取材に来た記者の人だった様だ。

取材は滞り無く進んでいった。

士郎さんと桃子さんに話を聞きながら記者の女性はメモを取っていく。

話を終えた後は、店内を首から提げたカメラで取り始めた。

何度もシャッターを押して満足できる写真が取れたのか、それが終わると、女性記者さんは次に店内に居るお客さんに、翠屋についてのインタビューを開始した。

数人のお客さんに質問をした後、女性記者さんは俺達の座るテーブルの前にやって来た。

「初めましてお嬢さん達。私は海鳴ジャーナルの風間恵理って言います。恵理って名前で呼んでくれて良いからね。少しお話しても良いかな？」

そう言って簡単な自己紹介をした女性記者の恵理さんに、俺達も簡単に自己紹介をする事にした。

「私はアリサ・バニングスよ。宜しくね。何でも聞いてくれて良いわよ」

「私は月村すずかです。宜しくお願いします」

「俺は板橋純です。どうぞ聞きたいことがあれば遠慮無く言って下さい」

「私は高町なのはです。この翠屋をやっているお父さんとお母さんの娘です。どうぞ宜しくお願いします」

俺達の自己紹介というよりも、なのはちゃんの自己紹介に恵理さんが反応した。

「あなたが桃子さん達が言っていた娘さんね。それにお友達のお話も聞いてるわよ」

恵理さんは仕事柄か、元々の性格なのか、とても気さくな人で、インタビューの話はとても弾んだ。

「それじゃ私は次の人の話を聞きにいくわね。楽しかったわよ皆」

俺達へのインタビューを終えた恵理さんは、次の人にインタビュー

をする為にそう言って隣の席に去って行った。

俺達は頑張ってくださいねといった意味合いの言葉を、其々に恵理さんの背中に投げかけた。

暫くして、一通りの席を回り終えた恵理さんは、再び士郎さんと桃子さんに話しかけていた。

幾つかの言葉を交わし恵理さんは一礼すると、今度は俺達の席にやって来た。

「ご一緒して良いかしら？」

恵理さんは俺達にそんな事を聞いてきた。

特に断る理由も無いので俺は、どうぞと言って空いている席に座る様に促した。

「取材はもう終わったんですか？」

席に座った恵理さんになのはちゃんが質問を投げかけた。

「ええ。最高の記事にするから楽しみにしててね」

恵理さんは笑顔で答えた。

「所で、何で私達と合席しようとしたんですか？」

続けてすずかちゃんが質問をしてくる。

「折角記事にするんだもの。自分でお店の味を確かめたいじゃない。それと私は食事を出来るだけ楽しむ様に心掛ける性質なのよ。あなた達となら楽しいお話をしながら食事が出来ると思ってね？」

すずかちゃんの質問に答えた恵理さんは悪戯っ子の様に笑ってウインクをした。

席に座る前に注文を済ませていた様で、暫く世間話をしていると桃子さんが林檎のタルトと紅茶を持ってきた。

食事をしながらも会話は続き、そんな中でアリサちゃんの口からこんな質問が出た。

「恵理さんは、他にどんな記事を作ってるの？」

「色々よ。一概に括る事が出来ないくらいにね」

恵理さんはそう言うと何かを思い出した様に、そう言えば今話題の事件を調べてるのよと語りだした。

「最近この海鳴市で不思議な事件が相次いでるって知ってる？突然ビル街が植物だらけになったり犬達が商店街に襲撃してきたり、果てはお菓子が空を飛んだりね。しかも未確認情報なんだけどそれに合わせた様に人間と同じぐらいの大きさの怪物も目撃されているって話なの」

まるで幼子が母親の化粧箱を始めて開けた時の様に、瞳を輝かせながら話す恵理さん。

俺はその話を背中に大量の冷や汗を流しながら、表面上は平静を装

いながら聞き続けた。

間違いなく話題の正体はホルダー達だ。

多少の噂にはなっていると思っていたし、ゴシップ的な取材はされているだろうと覚悟もしていたが、恵理さんの様な大手の会社の記者の人が興味を持っているとまでは予想してなかった。

何故かホルダー絡みでの事件で遭遇率が極めて高い美少女三人組は、この話に大層興味を持ち私達もその場に居たんですよと返しを入れた。

それを聞いた恵理さんは益々瞳を輝かせた。

「それならあなた達は見た事が有るかしら。実はね、この連続で起こる事件を影で解決している黒い超人が居るそうなのよ」

俺の背中を流れる汗の量が倍増した。

恵理さん…知ってる所か、本人があなたの目の前に居ますよ。

なのはちゃん達が揃って目を合わす。

「それってあの人だよね多分…」

「間違いないわよ。特徴も一致してるし」

「私は二回会った事が有るよ」

三人は揃って恵理さんに言った。

「「「それって仮面ライダーさんだよ」」」

「仮面ライダー？」

オウム返しで聞き返した恵理さんになのはちゃん達は、自分の知っている仮面ライダーについての説明を始めた。

「凄い、凄いわ。まさかあなた達がそんなに凄い情報を持ってるなんて思ってもいなかったわよ！」

若干興奮気味の恵理さんは仮面ライダーについての話を聞いた後一枚の写真を俺達に見せた。

「実はね、一般の人が投稿してきた写真なんだけど、これに見覚えは無いかしら？」

写真には海鳴のビジネス街の風景が写されていた。

パッと見ただの街の様子を写した風景写真なのだが、集中して見てみると、ある違和感に気付いた。

風景の右端の上部分に何かが映り込んでいるのだ。

ぼやけていて良く分からないが、白い体毛を持った何かの動物にも見える。

「これはね。今海鳴で噂になっているスカイモンキーの写真よ」

「「「「スカイモンキー？」」」」

先程とは逆に、今度は俺達が恵理さんの言葉にオウム返しをしてしまった。

「最近話題になっててね。上空から突然人間サイズの巨大なサルが降って来て、人からバックなんかの持ち物を強奪してから、また空に飛んで消えてしまうって報告が多発しているのよ」

俺達はこの事は初めて聞いたと言うと、恵理さんは特に残念そうにする訳でもなく、そっかと言って写真をポケットに入れた。

「さてと、これ以上ゆっくりしている訳にもいかないし私はそろそろ行くわね」

恵理さんはそう言って立ち上がると、楽しい御喋りだったわよと言って去って行った。

まだ解散するには早い時間なのでなのはちゃん達はもう暫く翠屋に居ると言っていたのだが、俺はこれから用事が有るからと言って翠屋を出る事にした。

用事というのは、ホルダーについての事だ。

恵理さんの話と見せてもらった写真から、確証は持てないが可能性は極めて高い。

少しでも早くこの事をメカ犬に伝えないといけないと思い俺は、今日はジャックの所に行って来ると言っていたメカ犬の言葉から、ジャックが普段から拠点にしている裏路地の空き地を目指して走り出した。

『うむ。それについての話を丁度話していたのだマスター』

裏路地に着いた俺は無事にメカ犬と合流し、翠屋で聞いた話をメカ犬に説明した。

メカ犬もジャックから似た話を聞いていた様で、説明はすぐに終わった。

しかもメカ犬がジャックから聞いた情報は更に詳しい物だった。

事件は一日に二回起こっており、どちらも夕方頃に起こるらしい。

しかも出現場所は、海鳴市のビジネス街を中心に半径約五キロの距離を時計回りに回っているそうなのだ。

『このサイクルで犯行が行われているならば、間も無く海鳴商店街にそのスカイモンキーが現れる筈だ』

情報をまとめて次の出現場所を計算したメカ犬が言った。

「一度確かめてみた方が良いな。今から行ってみるか？」

此処から距離もあまり離れていないし、今から言っても間に合いそうだったので俺はメカ犬に進言する。

『うむ』

メカ犬の肯定の言葉を確認した俺は、メカ犬と共に一路スカイモンキーがこれから現れるかも知れない商店街に向けて移動を開始した。

商店街を歩き続けながら、俺はメカ犬に話しかけた。

「なあ、商店街の可能性が高いって話だけど、商店街って結構広いぞ。もう少し場所を絞れたりしないのか？」

『これでもかなり絞り込んだ方なのだ。これより先は運を天に任せて探し続けるしかない』

俺はそのメカ犬の言葉にそうですかと返して溜息を一つ零した。

それから俺達は、まるで犯人の犯行現場を押さえる為に隠密行動をする刑事の様に、商店街を歩き続けた。

『キンキュウケイホウキンキュウケイホウキンキュウ…』

俺達の祈りが天に通じたのか、タッチノートから警報が鳴り響く。

それと時を同じくして俺達の前方から女性の悲鳴が聞こえて来た。

『近いぞマスター！』

「ああ！」

俺とメカ犬は悲鳴の聞こえてきた前方に走り出した。

辿り着いた場所には気絶したＯＬ姿の女性とその人の持ち物なのか女性物のハンドバッグを持った人外の化け物、ホルダーが居た。

ホルダーは全身を白い体毛で覆われており、顔の部分は木彫りのサルの様な能面をしていた。

この見た目ならば噂でスカイモンキーと言われるのも納得である。

『ホルダーで間違いないぞマスター』

「見れば分かるって」

俺はメカ犬に言いながらポケットのタッチノートを取り出した。

「やるぞメカ犬！」

『ＯＫだマスター！』

メカ犬の合意の言葉を聞き、俺はタッチノートを開きボタンを押した。

『バックルモード』

タッチノートから流れる音声と共にメカ犬が銀のベルトに変形し俺の腰に巻かれる。

「変身」

タッチノートを閉じてホルダーに掲げた俺は、仮面ライダーになるためのキーワードを放ち、ベルトの中央にタッチノートを差し込んだ。

『アップロード』

白銀の光が俺の全身を包み込み、激しい光を放つと俺の姿を脆弱な一人の小学生から、メタルブラックのボディを持った戦士の姿に変える。

「なっ！ガキが変わりやがった！？」

俺の変身を目撃したホルダーが声を上げる。

「悪さをするのは其処までにするんだな」

『盗んだ物を今すぐ持ち主に返すのだ』

俺とメカ犬は盗みを働くホルダーに正論で諭す。

「けっ嫌なこった！大体何なんだお前はよ」

ホルダーは俺に悪態を吐きながら聞いてくる。

「俺は仮面ライダーシード。お前みたいな悪党をのさばらせて置け

ないんでな、止めさせてもらうぞ！」

「うるせえんだよ！」

ホルダーの怒りの沸点はかなり低いらしく、いきなり飛び掛ってきた。

「はっ！」

俺は飛び掛るホルダーに上体を逸らしながら避けて、落ち際に蹴りを叩き込む。

「ぐげっ」

ホルダーはそれをまともに喰らい吹き飛ばされるが、直ぐに体制を立て直して襲い掛かってくる。

単純な素早さで言えば、このホルダーは俺よりも確実に素早いのだが、怒りで我を忘れているのか、攻撃が単調で読みやすいので、近づき様にカウンターを叩き込んで確実にダメージを与えていく。

「はあ！」

大分弱った所で俺は右のストレートを腹部に打ち込んでホルダーを吹き飛ばす。

『今だマスター！』

「ああ！」

メカ犬の言葉に頷き、タッチノートをバックルから取り出すために一瞬だけホルダーから目を離したその時だ。

「ぐはっ！？」

突然背中に衝撃が走り俺は溜まらずに倒れこむ。

何が起こったのかと後ろを向くと、先程まで目の前に倒れていた筈のホルダーが居た。

「なあ！？」

俺は驚きを隠せず驚愕の声を上げる。

ホルダーは俺に追撃を掛ける様な事もせずに黙ってかなりの跳躍で飛び去っていった。

「どうなってるんだよ一体！？」

まるで瞬間移動でもしたかの様に、ホルダーが俺の背後に一瞬で回っていたのだ。

『何だと言うのだ奴の能力は？』

メカ犬もこの一連の出来事を理解できていないらしい。

「兎に角後を追うぞ！」

俺がこの場を後にしようとしたその時だ。

脇からカメラのフラッシュの光とシャッターを押す音が聞こえてきた。

振り向いてみると其処に居たのは、カメラを持つ一人の女性。

今日喫茶翠屋で知り合ったばかりの快活な雑誌記者の恵理さんが居たのだ。

「あ、あの少しお話をしたいんですが！」

恵理さんは若干怯えた素振りを見せながらも俺に、仮面ライダーに話しかけてきた。

取り敢えず、ホルダーを追う前に恵理さんを如何にかしなくてはいけない事が半ば確定した事を、この場の雰囲気から察した俺は、如何した物かと、心の中で首を捻らせた。

## 第七話　スキャンダルは仮面ライダー？【前編】（後書き）

次回はついに…！

## 第七話　スキャンダルは仮面ライダー？【後編】（前書き）

頑張りました。

後編をお届けいたします。

楽しんでいただければ幸いです。

それと来週はもしかしたら本編の更新は出来ないかもしれないのですが、記念企画の様な物はやるかもしれません。

それでは・・・

# 第七話　スキャンダルは仮面ライダー？【後編】

「なるほど。正式なお名前は仮面ライダーシードさんっていうんですね」

「は、はい」

恵理さんはメモ用紙にペン先を走らせながら、次々に俺へと質問を投げかけてくる。

現在俺と恵理さんは、海鳴公園のベンチで緊急独占仮面ライダー座談会を開催している。

商店街で話し掛けられた時に、逃げようと思えば簡単に逃げる事は確かに出来た。

だがそれをすれば、プロの記者である恵理さんは躍起になって、俺の動向を追う様になるだろう。

それは後々の事を考えると非常に拙い。

ならば此処はあえて恵理さんのインタビューに応じる事で、満足してもらい余計な手間を省こうと、メカ犬と相談して決めた。

かくして、この様なガチのヒーローインタビューという、シュールな光景が繰り広げられる事になったのである。

ちなみに何故海鳴公園のベンチで開催しているかというと、流石に商店街のど真ん中では目立つし、仮面ライダーの格好で落ち着ける

様な飲食店に行こうものなら、その店が落ち着かない事になる事受け合いだからである。

一瞬だけ、翠屋なら大丈夫そうだなと思いもしたが、それはそれで新たな厄介の火種を生む恐れが有るので、近場で夕方なら人気が少ない、この海鳴公園でする事になったのである。

「ズバリ聞くんですけど、仮面ライダーさんは何者なんですか？」

恵理さんが興奮気味に瞳を輝かせながら聞いてくる。

「えっと、正義の味方をやってます…一応」

これから更に三十分にも及ぶ恵理さんの質問攻撃は続いた。

俺達やホルダーの事はそれとなくぼかしながら、話せる範囲を話し切った事で、恵理さんは満足したようだ。

「貴重なお話ありがとう御座いました。良い記事にしますんで楽しみにしていてくださいね」

「はぁ」

絵里さんは俺に一礼するとベンチから立ち上がり公園を走り去っていった。

その後姿が見えなくなるのを確認した俺は全身を脱力させた。

「…はぁ～やっと行ってくれたな」

『うむ。しかし完全にホルダーを見失ってしまったな』

恵理さんが居なくなった事でメカ犬も喋りだした。

「ああ。それに分からない事も有るしな」

『目の前に居た筈のホルダーが、突然後ろから攻撃を仕掛けてきた事か」

「メカ犬は何か分るか？」

俺の質問に無言で暫く熟考してからメカ犬は答えた。

『すまないマスター。現状では情報が少なすぎて言える事は何も無い』

俺達は変身を解く事も忘れ、夕日が沈むまで考えたが答えは出なかった。

その為、家に帰るのが随分と遅くなってしまい、母さんに怒られたが、それはまた別の話だ。

一ヶ月の間お小遣い５０％カットは何気に痛かったりする。

こうなったら翠屋でバイトでもさせてもらおうか…

まぁ、それこそ別の話である。

結局ホルダーの能力の謎を解く糸口も無いままに、今日という一日は終わりを告げた。

翌日もメカ犬は朝早くから出掛けていった。

少しでもあのホルダーの情報を得る為に、事件が起こっている中心部のビジネス街で探りを入れてみるらしい。

俺も一緒に行きたかったのだが、生憎今日は平日で学校がある為、放課後に合流する事を約束して見送った。

そういえば昨日はホルダーの事で頭が一杯だったので、メカ犬の話とやらを聞くのを忘れていた。

メカ犬からすればホルダーの優先度の方が高いというだけの事なのだろうか。

まぁ、どちらにせよ、本人が話すのを待てば良いだけの事だ。

時間が経っても話さずに、忘れていたと感じた時に聞いてみれば良いだろう。

それよりも今の問題はホルダーだ。

被害者の人から聞いてみれば、何かヒントが掴めるかも知れない。

でもどうやって調べれば良いのだろうか。

ジャックに聞いてみるのが一番手っ取り早いが、ジャックから得られるのは如何しても動物目線になってしまうだろう。

今回のホルダーは人間のみを相手にしてる上に、目的が強盗という人間特有の犯罪なので、動物からの状況証拠だけじゃ、今持ってる以上の情報は集まりそうに無い。

あーでも無い、こーでも無いと考えながら俺は家を出て何時もの通り隣の高町宅に赴いた。

人間の慣れという物は中々に恐ろしい物で、考え事をしながらも無意識の内に、俺は普段通りなのはちゃんを起こし、学校に向かっていた。

何時もと同じ学校生活を送り、今日も無事に放課後を迎えた俺は、全速力で教室を飛び出した。

後ろから美少女三人組が俺に何か言っている気もするが、今はそれどころではない。

振り返りもせずにまた明日と叫び返し俺は更に速度を上げた。

幸いな事に途中で、教師に遇って廊下を走るなと注意される事も無

く、校門前にまで辿り着く事に成功した。

メカ犬とは海鳴公園で合流する約束をしていたので、急いで向かおうとした所、進行方向に見知った顔を俺の視界が捕らえた。

「あら、確か君は翠屋に居た純君だったよね」

あちらも俺を視界に捕らえた様で話しかけてきた。

「こんにちわ。恵理さん」

話しかけてきたのは、昨日知り合ったばかりの新聞記者の恵理さんだった。

恵理さんは気付いていないだろうが、俺としては仮面ライダーの状態で昨日は質問攻めに遭ったばかりなので、どうも身構えてしまう。

それにしても恵理さんは良く俺を認識できた物だと感心してしまう。

それと言うのも、初対面の時、俺は美少女三人組であるなのはちゃん達と一緒に居たのである。

個人的に知り合ったのなら兎も角、そうで無いのであれば、俺なんぞしがないモブキャラでしかないので、印象なんぞ塵一粒程も残らない筈なのだ。

しかし恵理さんは覚えていた。

やはりプロの取材記者なだけあって、洞察力が凄いのかもしれない。

もしもそうだとするのなら、少しだけで良いから俺の存在を頻繁に忘れる我が担任に分けてあげて欲しいと切実に願ってしまう。

「此処で会ったのも何かの縁かもしれないわね。そうだ！今日も取材をしているんだけど、少しだけ協力してくれないかしら純君」

恵理さんはお願いと手を合わせてお願いしてきた。

急いでいるので、断ろうとしたのだが、その意思を言葉にする前に、俺の頭の中で一つの考えが浮かんだ。

恵理さん雑誌の記者だという事だ。

つまり取材で様々な事を調べている。

しかも昨日翠屋で見せたスカイモンキーの写真と、仮面ライダーにインタビューをしてきた事から、今恵理さんが取材している内容が今回のホルダーと何らかの関わりを持っている可能性はかなり高い筈だ。

餅は餅屋とも言う事だし、恵理さんの手伝いをしていれば新しい情報が得られるかも知れない。

ならば、俺が取るべき行動は一つだけだ。

「ええ、良いですよ。何だか面白そうですし、俺は何をお手伝いすれば良いんですか？」

俺は笑顔で協力する事を承諾した。

「助かったわ、本当にありがとう純君。手伝って欲しい事なんだけどね…まずはこれを見て欲しいのよ」

恵理さんはそう言ってから数枚の写真を俺に渡してきた。

「昨日の夕方に撮った写真を現像した物なんだけどね」

俺は恵理さんから受け取った写真に目を通すと、其処には信じがたい物が写り込んでいた。

「これってもしかして…」

「そう。スカイモンキーの写真よ。しかもこれは…今までの見解を塗り替える物なのよ」

確かに、この写真に写りこんだ画像は、俺の固定概念を見事なまでに砕き散ってくれた。

「…ていう訳なんだよ」

『うむ。確かにそれならば、全ての説明が着くな』

俺は恵理さんからある頼まれ事をされた後、別行動を取り海鳴公園に向かい、メカ犬と合流していた。

恵理さんに見せてもらった写真から俺が導き出した見解をメカ犬に説明した所、メカ犬はそれで間違い無いだろうと、太鼓判を押してくれた。

『しかし恵理殿。これではまるで…』

メカ犬が何かを考え込む様に若干言葉を濁した。

「如何したんだ?」

考え込むメカ犬に俺は如何したのか聞いてみた。

『・・・いや、今はそれよりもホルダーを如何にかしなくてはいけないな』

悩む行為と解決する事を自己完結したメカ犬は、俺に何でも無いと告げた。

多少気にはなったが、メカ犬が言う通り今はホルダーを如何にかする事が最優先事項だ。

俺とメカ犬は早速作戦会議を開始した。

『本当にこの場所にホルダーが来るのかしらマスター？』

明らかにオッサンボイスなのに、乙女な口調の声が俺の隣から聞こえてくる。

「うん。多分ね。その時は頼むよチェイサーさん」

俺は声の主である新宿二丁目系ライダーバイクのチェイサーさんの質問に息を潜めながら答えた。

チェイサーさんを呼んだのは勿論作戦の為だ。

俺とチェイサーさんは現在ビジネス街のビルの陰から、こっそりと表の道を睨みつけながら張り込みをしている最中なのだ。

ちなみにメカ犬は俺達とは別の場所で身を潜めている。

暫くすると、靴底がコンクリートを軽く打ち付ける様な足音が聞こ

えてきた。

白い色の鍔が長い帽子の所為で顔までは確認できないがその帽子と同じ色でコーディネートされたレディスーツを身に纏った女性が歩いてきた。

打ち付ける様な足音がするのはその女性が赤いハイヒールを履いている為であろう。

誰が見ても相当な値段が付きそうに見える、高級感溢れるハンドバッグを、優雅に揺らしながら気品すら漂う歩き方をしている。

足音は段々と俺達に近づき、そして俺達の前を通過すると、少しずつ音が小さくなっていく。

このまま一人の通行人として立ち去ってしまうと思われたその時だ。

「きいえええええええええ！！！」

空から異形が降ってきた。

その異形は成人男性と同等の背丈で、全身を白い毛に覆われていた。

顔は木彫りの猿の能面を貼り付けた様にしている。

昨日遭遇したホルダーだった。

「きやあああああああああ！？」

突然の怪物の襲来に女性は大声を上げるが、あまりにも大きな精神

的ショック受けた所為か、次の瞬間操り人形の糸が切れてしまったかの様に力無く倒れた。

それを見たホルダーは下劣な笑い声を上げると、気絶した女性に近づき、その手に持っているハンドバックに手を掛けようとした。

『そこまでだホルダー！』

俺とチェイサーさんが隠れている場所と反対側から、この時を待っていたと言わんばかりにメカ犬が走り込んで来て、ホルダーの顔面に飛びついた。

「な！？何だってんだ！？」

突然視界を奪われたホルダーはパニックに陥り手足をバタつかせている。

『今だ！』

メカ犬のＧＯサインが出た。

「頼むよチェイサーさん」

『まっかせなさ～い！』

チェイサーさんはそう言うと、エンジンの唸りを上げてホルダー目掛けて突っ込んだ。

チェイサーさんの接近に気が付いたメカ犬はホルダーを足蹴に飛んでその場から退避した。

『いっくわよ～』

更に加速して突っ込むチェイサーさんに、メカ犬が顔面から離れた事で視界を取り戻したホルダーも気づきはするが、避けるにはあまりにも時間が足りなさ過ぎた。

「まそっぷ！？」

気づいた瞬間には既にチェイサーさんのバイクタックルによって華麗に宙を舞っていた。

此処からは俺の出番である。

俺はある物を手に持ちながら、倒れているホルダーに近づくと、手にした物をホルダーに向けて構えた。

次に俺が手にした物が俺の指を一本動かす度に眩い光とシャッター音を放つ。

そう、俺が手にしている物は一眼レフカメラなのである。

「全く、無茶する人だよ本当に…」

十分な量の写真を取った後、俺は幾分あきれた口調で、気絶している女性に視線を送った。

俺は気絶した女性に近づき、持っていたカメラをその女性の手に握らせてから、帽子を取り払った。

帽子を取った事で露わとなった、その顔はこのカメラの持ち主である恵理さんだった。

実は今回の作戦は恵理さんの計画に乗っかった部分がかなりの率を占めているのだ。

俺が恵理さんから頼まれた事とはこういった物だった。

恵理さんは独力でかなりの情報を掴んでいて、次のホルダーの出現しそうな位置を俺達以上の精度で計算していたのだ。

其処で恵理さんは自分自身を囮にして、ホルダーを誘い込もうと計画したのである。

俺の本来頼まれた事とは恵理さんの代わりにその現場を押さえて写真に収めて欲しいとの事だった。

最初は勿論反対した。

何でそんなに危険な事をするのかと。

それでも恵理さんは一歩も引かなかった。

時間もあまり無く、俺としてもこのチャンスは逃したくないので、妥協案を模索したのだ。

恵理さんには腕っ節の強い人を呼んでおくので絶対に無理をしない様にと釘を刺して置いてから、この囮作戦を基準にした俺達の計画を考えたのである。

万が一の事態を考えて、チェイサーさんには腕っ節の強い人という設定で、待機してもらう事にしたのだ。

今回は恵理さんが気絶してしまったので、意味は無かったのだが、本当はチェイサーさんがホルダーを攻撃している間に恵理さんを逃がして、それから仮面ライダーに変身して戦うつもりだった。

写真を撮るのは二の次だ。

危険だと判断したのなら変身を見られる事を覚悟すらしていた。

実際は恵理さんが早くに気絶してしまったので、余裕が生まれて写真を撮る事まで出来た訳だ。

「痛ってぇ…ってまたてめえかこのクソガキ！」

漸く動けるほどに回復したのか立ち上がったホルダーは俺を見るや、指をさして地団駄を踏んだ。

昨日も思ったが本当に直情的なホルダーである。

『行くぞマスター！』

俺の隣にやって来たメカ犬が戦いの始まりを告げるかの様に叫んだ。

「ああ！」

俺もそれに気合いを込めた返事を返して、ポケットからタッチノートを取り出してボタンを押した。

『バックルモード』

タッチノートから流れる音声と共に、隣のメカ犬が銀色のベルトへと変形して俺の腹部に巻きつく。

「変身」

設定された音声キーワードを放ちタッチノートをバックル中央の溝に差し込んだ。

『アップロード』

バックルに差し込んだタッチノートから音声が流れると同時にベルトを中心に白銀の光が俺の全身を包み込む。

更に眩い光を放つと光は飛散し一人の戦士が姿を現す。

背丈も成人男性と同程度に変わり、メタルブラックのボディには、銀色のベルトを中心に四肢に同色のラインが伸びている。

更に?字の角飾りと、赤く大きな二つの複眼を持つ、仮面ライダーが誕生したのだ。

「しゃらくせえんだよ!!!」

ホルダーは変身が完了すると同時に昨日と同じ様に飛び掛ってきた。

余程に怒りの沸点が低いのか、ただ単に学習していないだけなのだろうか?

「はっ！」

俺はがむしゃらに飛び掛ってくるホルダーに、避け様の肘鉄を腹部に喰らわせた。

軌道修正の出来ないジャンプ中にそんな攻撃を喰らえば、当然バランスを崩して着地もろくに出来ないだろう。

案の定ホルダーは腹を手で押さえて痛みに耐えながらアスファルトの地面を転がっていく。

俺は更に追撃を仕掛ける為にホルダーに向かって走り出す。

『後ろだマスター！』

俺は突然のメカ犬の声に反応してサイドステップで瞬時に横に移動してから、先程まで自分の居た場所に確認もせずに回し蹴りを叩き込んだ。

本来ならば放った回し蹴りは空を蹴りそれで終わる筈だった。

しかし俺が放った回し蹴りは確かなまでの感触を感じたのだ。

「ぐは！？」

それは苦痛の声を上げて先程まで俺が戦っていたホルダーの方向に吹っ飛んでいった。

俺がその吹っ飛んだ正体を確かめる為に前方を向くと、そこに居たのは同じ姿をした二体のホルダーだった。

いや正確に言えば、限りなく似ているホルダーと言った方が正しいだろう。

先程吹っ飛ばしたホルダーの木彫りの様な能面の方が若干色が濃いし、毛並みも多少だが黄色がかっている。

「大丈夫か兄貴!?」

白い毛並みのホルダーがそう言って、吹き飛ばしたホルダーを支え起こしている。

『うむ。兄弟でホルダーになっていたという事か。それならば姿が似ている事にも納得がいく』

メカ犬がホルダーの言葉から納得のいく答えを導き出した様だ。

「…ぐっ、何で俺が居ることに気づいた?」

黄色い毛並みのホルダーが弟のホルダーに支えられながら起き上がるとそんな質問をしてきた。

「さあ、如何してだろうな…」

俺はその質問を適当に流す。

ネタばらしをするのならば、それは恵理さんに見せてもらった写真のおかげだ。

写真には昨日の戦いで、俺が突然背後から攻撃を受けた瞬間の風景

が写し出されていた。

そこに写っていたのは俺とそして…二体のホルダーだった。

だから思ったんだ。

これはホルダーの能力でも何でも無く、単純にもう一体のホルダーが居るんじゃないかってさ。

だからメカ犬に頼んで俺が攻撃している最中も出来るだけ周りの気配に気を配ってもらっていた。

事前に来るであろう攻撃を予測出来ていたからこそ、避けきった上で反撃をする事まで出来たのだ。

まぁ、兄弟でホルダーやっているとまでは予想していなかったけれど…

「チクショウが！」

白い毛並みの弟ホルダーが吼える。

今のこの状況がよっぽど腹立たしいみたいだ。

「まあ待て」

それを黄色がかった毛並みの兄ホルダーが制す。

「確かに一人ではあの仮面ライダーとかいう奴に実力で負けているかもしれないが、俺達は二人居るんだぞ。力を合わせれば勝てる筈

だ」

弟に対して兄は常に冷静沈着の様だ。

兄ホルダーの言葉に弟ホルダーも冷静さを取り戻したのか、荒くなっていた息を落ち着かせ始めている。

「そうだな兄貴。俺達の連携を見せてやろうぜ」

「ああ」

二体のホルダーは互いに頷くと俺と距離を取りながら走り始める。

先程までの動きよりも確実に早い。

『奴らの能力は二体とも速度強化の様だな。オーソドックスでは有るが手強いぞマスター』

「みたいだな・・・」

俺はメカ犬の声に返事を返しながら、何処から攻撃が来ても良い様に身構える。

「きえええ!!」

弟ホルダーが背後から奇声を上げて飛び掛ってきた。

俺は即座に振り向いて反撃に移ろうとするが突然横から兄ホルダーが不意打ちを仕掛けてきた。

「しゃあああ！！」

身を捩る事で何とかかわすが、この兄弟ホルダーは入れ替わり立ち代り、連携した攻撃を仕掛けてくる。

「くそ！裁くので精一杯だ。このままじゃジリ貧だぞ」

素早さは向こうの方が早すぎる為、俺は近づいてきた所をカウンターで仕留めるしかないのだが、肝心の動きに着いて行けないでいる。

冗談抜きでピンチかもしれない。

「如何にかならないかメカ犬！？」

俺は藁をも掴む思いで、ホルダー達の連撃を避けながらメカ犬に尋ねる。

『うむ。逆転する為の秘策はあるぞ』

メカ犬から返ってきた返答は、かなりのアグレッシブさを含んでいた。

「何か自信満々だな・・・」

その意味不明な自信に俺は逆に一抹の不安を覚えるんだが。

『奴らがスピードを武器にするのならば、此方もそれ以上のスピードで対抗するのだ』

言っている事は理解できるのだが、それが出来ないから、現状こん

なに苦労していると思うんだけど？

「奴ら以上のスピードで対抗するってそんな事出来るのか」

『うむ。実は昨日の朝ワタシがマスターに話したいと言っていた事は、この事に深く関わっているのだ』

「話したい事が有るって言っていたあれか？」

『今まで失われて閲覧不可能となっていた、ワタシのメモリが一部ではあるが復帰して、戦闘時の能力の閲覧が出来るようになったのだ』

「素直におめでとうって思うけど、如何してまた急に？」

『うむ。昨日の朝から閲覧が可能になった』

昨日の朝？

俺がその言葉を聞いて思い出したのは・・・焦げて煤塗れになり黒っぽくなったメカ犬の姿だった。

「まさか、昨日の感電騒ぎで記憶が戻ったて事は無いよな」

俺はまさかと思い冗談っぽく聞いてみた。

『案外効くのだな。ショック療法という奴は』

自分でも驚いているといった口振でメカ犬は言っている。

どうやら冗談抜きで昨日の感電が原因らしい。

こんなシリアス展開中で、まさかのギャグを投入してくるとは、流石に予想外だ。

突っ込みたい所だが、今は生憎そんなほのぼのとした状況じゃない。

「あ～もうギャグだろうがコメディーだろうが、かまうもんか！解決策があるなら早いとこ教えてくれよ！」

俺は半ば自暴自棄になりながらメカ犬に話の続きを促した。

『うむ。了解だマスター。これからワタシがする通り、指示に従ってくれ』

「ああ」

俺はメカ犬の言葉に、ホルダーの攻撃を捌きながら短く返事を返す。

『まずはバックルの右側を押さえ込みながら後方にスライドさせてくれ』

俺はメカ犬の言う通りに自分の右腰に手を当てて軽く動かしてみる。

すると溝になっている部分が軽くスライドしたのだ。

中には横並びに複数のボタンが並んでいた。

手前から順番に、黒・緑・青・赤色の円形のボタンが、そして他のボタンと違う四角形で黄色のボタンが一つ並んでいたのだ。

『開いたら複数のボタンが有る筈だ。その中から緑色のボタンを押してくれ』

俺はその指示に若干の恐怖を抱きながらも、メカ犬が言う通りに押してみた。

『スピードフォルム』

「うを！？」

ボタンを押すと何故かタッチノートから音声が流れ出す。

変化はそれで終わりじゃなかった。

いや、寧ろ始まりだったのだ。

ベルトを中心に白銀の光が再び俺を包み込む。

その光は一瞬だけの物で俺は光からすぐに開放される。

次に俺は自分自身の身体を確認して驚いた。

「何じゃこりゃ！？」

何時ものメタルブラックでは無く、ボディカラーがライトグリーンに変わっている。

それにどういう事か、自分の身体がやけに軽く感じる。

「色が変わりやがった？」

「むう？」

突然俺の姿に変化が現れた事で兄弟ホルダーが警戒を強めた。

『それはシステムの能力の一つ。スピードフォルム。その名の通り、最も素早さに重点を置いた状態だ』

俺はそのメカ犬の説明に納得した。

道理で身体が羽の様に軽い筈である。

『だが素早さに比重がいっている分、格闘戦時の威力は落ちているから気をつけてくれマスター』

再びメカ犬から補足説明が入る。

「ああ、ってそれじゃ駄目だろ！？ただでさえ1対2なんだぞ」

素早さで勝っても、こっちの攻撃が効かないんじゃ意味が無いだろう。

『心配無用だマスター。対策は万全だ。今度は一番奥の黄色いボタンを押してみてくれ』

「何だよ対策って？」

俺は疑問に思いながらも手を右腰にやり黄色のボタンを押してみる。

『スピードロッド』

再びタッチノートから音声が流れると、今度は白銀の光が俺を包むのでは無く、俺の目の前に集まり始める。

『その光を掴むんだマスター』

メカ犬からの指示が飛ぶ。

はっきり言って躊躇してしまいそうになる光景ではあるが、背に腹は変えられない。

俺は覚悟を決めて、目の前の光を鷲掴みにする。

すると、光はまるで生き物の様に蠢き、一つの形に変化していく。

光が飛散すると、俺の手元には成人男性身長程の、一本の棒の様な物が握られていた。

両端は今の俺と同じライトグリーンで中央部が銀色になっている。

中心には持ちやすいグリップの様な部分があり、その脇には出っ張りが有って、その中には溝が設けられている。

『それがこのスピードフォルムの専用武器であるスピードロッドだ』

俺はメカ犬の説明を聞きながら、手に持ったスピードロッドの感触を確かめる様に、軽く振り回す。

足りない分は武器で補えという事なのだろう。

「へっ！あんなのこけおどしだろ」

弟ホルダーが俺の変わった姿を見ながらそう言うと、再び飛び掛ってくる。

『来るぞマスター』

「ああ」

俺はロッドを構えて迎え撃つ。

「きえええええええ！！！」

飛び掛かるホルダーに対しロッドの先端を斜めに打ち込みその軌道を変えてやる。

更に脇から兄の方が攻撃を仕掛けて来るが、俺は持ち手を先端に持ち替えて、円を描く様に振り回す事で近づけない様に牽制する。

「今度はこっちから行くぞ」

俺はロッドを斜めに持ち構えながら、弟ホルダー目掛けて走り出す。

今の俺の速さはこのホルダー達を完全に凌駕していた。

距離を置こうとするホルダーに、追い着いた事でホルダーは驚愕している。

俺は驚き固まっているホルダーに、お構い無しのロッドによる連撃

を叩き込む。

「はっ！」

最後に突きを喰らわせ後方に吹き飛ばす。

「しゃあああああ！！」

弟ホルダーを吹き飛ばした直後、今度は兄ホルダーが俺の背後から飛び掛ってきた。

俺はロッドを垂直に地面に叩き付け、棒高跳びの選手の様に垂直に飛び上がる事で、背後からの攻撃を回避する。

「うおりゃあああ！！！」

更に上空からホルダーの脳天目掛けて、ロッドを上段に構えて叩き込んでやる。

「がは！」

攻撃は見事に決まり、ホルダーはよろけながら後方に下がっていく。

しかし使いやすいな、このスピードロッド。

「兄貴！」

吹き飛ばされた兄ホルダーに、弟ホルダーが駆け寄っていく。

「こうなったら同時攻撃で行くぞ」

今だよろめきながらも弟ホルダーに指示を出した兄ホルダーは、弟が無言で頷くのを確認してから、同時に別方向に走り出す。

「仕掛けて来る気か」

俺はロッドのグリップを握り直し襲撃に備える。

『マスター。奴らが仕掛けてくる前に此方から決めるぞ』

身構える俺に対してメカ犬がまたしてもアグレッシブな発言をした。

「こっちからってどうやってだよ」

『即興だが、説明プログラムを組んでみた。簡単な図解も入っているから目を通してくれ』

メカ犬がそう言うと、俺の視界にウインドウの様な物が出てきた。

それを読んでみると、これは今の状態の俺が使える必殺技についての記述だった。

「・・・OKだメカ犬。こっちから仕掛けるぞ」

『うむ』

内容を把握した俺は、決着をつけるべく行動を開始する。

まずバックルからタッチノートを取り出した俺はスピードロッドの溝に、取り出したタッチノートをスライドさせた。

『ロード』

スライドさせる事で音声が流れ、俺は再びタッチノートをバックルに差し込んだ。

『アタックチャージ』

何時もとは少し違う音声が流れると同時にベルトから白い光が発生する。

その光は右腕の銀のラインを通して、スピードロッドに流れ、その先端に集約する。

「きえええええええ！！！」

「しゃあああああああ！！！」

俺が何かをやっている事に気づいたのか、兄弟ホルダーが同時に雄叫びを上げながら突っ込んできた。

しかし気づくのが少し遅かった様だ。

俺の準備は既に整っている。

「こいつで決めるぜ」

俺はそう言ってからロッドを構える。

「スピードロッド」

俺は自分を支点として、ロッドの先端に集まった光が手前に来るようにしながら、回転し始める。

「ウインドテイスティング」

光は円状に波紋を描きながら、真空の刃を俺を中心とした円範囲に撒き散らす。

その様はさながら、ワイングラスを回した際に、中のワインが波打つ様な光景だった。

勿論この範囲には二体のホルダーも入っており直撃を受けた。

二体のホルダーは真空の刃を受けた場所を中心に白い光を発しながら爆発した。

爆発した後には二人の高校男子が気絶していた。

顔を見てみると、不気味な位同じ顔をしていたのである。

ただの兄弟では無く、双子だったらしい。

まぁ、取り敢えずこれで今回の事件は、一件落着といった所だろう。

何だか今回はやけに精神的に疲れた気がする。

「いらっしゃいませ～」

今回の事件が解決してから数日後。

俺は今、翠屋でウェイターのバイトをさせて貰っている。

お小遣い５０％カットは、予想以上にかなり深刻な事なのだ。

勿論俺は中身は大人とはいえ、見た目も戸籍も小学生なので、一部の例外を除いて現金を頂く分けにはいかない。

俺の働いた報酬は翠屋限定で使用できるタダ券だ。

翠屋にはよく顔を出すし、これだけでも凄く助かる。

それと言うのも、何故かアリサちゃんは生粋のお金持ちのお嬢様だというのに俺に飲食店で奢らせようとして来る事が多々あるのだ。

しかもなのはちゃんと、挙句の果てはすずかちゃんまで便乗してくるので、俺のお小遣いの約半分は毎月美少女三人組の胃袋を満たす為に使用されてしまう。

士郎さんと桃子さんはその光景を見ながら、それが男の甲斐性だと言ってくるが、やられている本人としては何の励ましにもならない。

そう思いながらも、小学生の身で健気に労働をする俺は、彼女達に甘いのだろうか？

『マスター。ウェイター姿がよく似合っているぞ』

店の隅で座っているメカ犬がよく分らない微妙な励ましの言葉を掛けてくる。

下手な慰めならしないで貰いたい。

メカ犬を睨み付けた直後、翠屋の扉が開き新たなお客さんがやって来た。

「いらっしゃいませ…来たんだ、なのはちゃん達」

噂をすれば何とやらだろうか。

美少女三人組が俺の目の前に居た。

「その格好、似合ってるよ純君」

「お仕事大変そうだね」

「アルバイトしてるって聞いたから見に来てあげたわよ」

三人は口々に言ってくる。

「あら、皆揃ってるわね」

なのはちゃん達の後ろから声が聞こえてきた。

四人で声のした方を見てみると其処に居たのは、数日前に知り合った雑誌記者の恵理さんだった。

恵理さんは軽く挨拶を交わすと、一冊の雑誌を取り出した。

「これ、今月号の月刊ウミナリよ。みんなの事も載ってるから見てみてね」

それを見たなのはちゃん達三人はお礼を言いながら雑誌を受け取り読み始めた。

俺はその後方で背中に大量の汗を、密かに流す。

表紙を見て度肝を抜かれたのだ。

何せ表紙を飾っていたのは俺、つまり仮面ライダーだったのだ。

それだけなら別にかまわない。

正式にインタビューにも答えたし、写真撮影にだって協力した。

それならば、何が問題なのか。

その問題の写真は本来ならば恵理さんが持っている筈の無い写真だったからだ。

表紙を飾る仮面ライダーのボディカラーは、メタルブラックでは無く、ライトグリーンだったのだ。

俺はスピードフォルムを恵理さんに見せた覚えは一度も無い。

という事は…

メカ犬が俺の足元まで近づいてきていた。

それに合わせて恵理さんも俺のすぐ近づいて来ていて、小声で話しかけてきた。

「いい写真だったから表紙に使わせて貰っちゃった。仮面ライダー君」

悪戯が成功した子供の様な笑顔で恵理さんが言ってきた。

『やはり気付いていたのだな恵理殿』

メカ犬がやっぱりかといった具合で話しかけてきた。

「まあね。でも安心してね。何だか正体を内緒にしてるみたいだし、雑誌にもインタビューで聞いた以上の事は載せてないから」

どうやら仮面ライダーの正体をばらす心算は全く無いらしい。

今にして思えば、不可解な行動も結構あったと思う。

囮作戦なんて俺が仮面ライダーだって事を知っていたからこそ、やろうと思った作戦なんじゃないだろうか。

『目的は何なのだ?』

「目的なんて無いわよ。私はただ真実が知りたいだけ」

メカ犬の質問にそれだけ答えた恵理さんは、背中を向けて手を振って去り際にこう言った。

「また取材させてね。正義の味方さん」

悪い人では無さそうだけど、如何にも油断ならない人だなと俺は恵理さんの背中を見送りながら思った。

今日の海鳴はスキャンダルが多々あるが・・・それなりに平和だ。

# 第七話　スキャンダルは仮面ライダー？【後編】（後書き）

やっと一つ目ですね。

## 緊急特別企画！祝・累計１０００００ＰＶ＆ユニークアクセス数１００００人突

一週間振りの更新になります。

本日は本編ではないのですが、楽しんで頂ければ幸いです。

本編の更新は来週から再スタートになります。

**緊急特別企画！祝・累計１０００００ＰＶ＆ユニークアクセス数１００００人突**

「メカ犬の奴・・・こんな場所に人を呼び出して何のつもりだっていうんだ？」

一枚のメモ用紙を握りながら俺は独り言で愚痴る。

俺が今居る場所は、海鳴市内のとある貸しビルのロビーだ。

何故そんな場所に俺が居るのかというと、先程愚痴った相手であるメカ犬に呼び出されたからである。

何時もの様に学校から帰宅してから、部屋で着替えていた所、机の上に一枚のメモ用紙が置かれている事に気が付いた。

出掛ける前にはそんな物無かったと思い、俺はそのメモ用紙を手に取った。

そのメモ用紙には以下の様な文面が書かれていた。

【マスターへ

とても大事な用件が有るので、話がしたい。

このメモを確認し次第、以下に記されている場所に来てくれ。

メカ犬より】

メモ用紙にはその文章と、俺が今居るビルの住所だけが書かれていた。

意味が分らなかった。

何で態々こんな回りくどい真似をするのだろうか？

そうは思っても、このまま放って置くという選択も出来ないので、俺はメモの指示に従って記されていた住所であるこの貸しビルまでやって来た訳だ。

来たのは良いのだが、ビルのロビーにはメカ犬の姿は見当たらない。この空間に現在居るのは、俺とフロント受付のお姉さんだけである。

他に聞ける人も居ないので、俺は受付のお姉さんに何か知らないか聞いてみる事にしてみた。

「あのう・・・」

「いらっしゃいませ。板橋純様ですね。お待ちしておりました」

俺が話しかけたら、お姉さんは仕事上での営業スマイル全開で、挨拶を返してきた。

それ以前に、何で俺の名前を知ってるんだ？

「此方から右手の廊下を進んで頂きますと、スタジオ０１と書かれ

た扉が有りますのでそちらにお入りください」

受付のお姉さんはスマイルを固定しながら、右の方向を優雅な動作で指すと淡々と説明してきた。

俺がそれ以上何かを聞こうとしても、いってらっしゃいませとしか言ってくれないので、俺は仕方なくお姉さんの指示通りに右に続く廊下を歩きスタジオ０１と書かれた扉の前にまでやって来た。

連続して起こる、意味不明な出来事に頭を悩ませながらも俺は、扉のドアノブを手にゆっくりと開けた。

「失礼しま～す」

遠慮がちに、扉を開くとその先には何処までも続く様な暗闇が広がっていた。

「誰も居ないのか？」

暗くて何も見えない事から、誰も居ないのかと疑問を口にしたその時、部屋の一部の照明が点けられた。

『待っていたぞマスター』

突然点灯した照明の下に居たのはメカ犬だった。

この不可思議現象の元凶であるメカ犬に、何が起こっているのか問い詰めようとした所、俺が言葉を発するよりも早く、残りの照明が連鎖反応を起こした様に点灯していき、この部屋の全容を曝け出した。

「な！？」

俺はその光景に驚愕の声を出していた。

それも致し方ない事だろう。

数え切れない程の黒子姿の人達が居たのだ。

驚きながらも俺は、部屋を埋め尽くす黒の集団の先にいるメカ犬をもう一度見てみると、先程まで気づかなかったのだが、メカ犬はこの部屋の奥のステージ場の上を陣取っており、首の下には赤い蝶ネクタイを装着していた。

更にその上の天井近くには豪華な装飾がされている一枚の看板が設置されていてある文章が書かれていた。

俺はその文章を無意識に声に出して読んだ。

「祝・累計１００００００ＰＶ＆ユニークアクセス数１００００００人突破記念座談会？」

俺が言葉を言い終わると同時に黒子達が溢れんばかりの拍手がこの場を支配した。

口々におめでとうと黒子達に祝福されながら俺は、数人の黒子達によりメカ犬の居るステージ上に誘導される。

ステージに上がると、更に拍手の音が大きくなり、歓声が鳴り響いた。

「な、何なんだよこれ？」

俺はこの現状に困惑しながらも、メカ犬の隣まで移動しながら質問してみる事にした。

『うむ。今回は本編ではなく特別編をお送りする事が決まったので、急遽この様な場が設けられたのだ』

「は？」

『第七話【後編】が投稿された日に、この作品のアクセス数が１０００００ＰＶを突破したのだマスター』

つまりこの謎空間はあれか？

俺が読んだ看板通りの企画だと・・・

『そこで今回は本編をお休みして座談会等をお送りするぞマスター』

・・・もう決めた。

俺はこの場についての一切の突っ込みを拒否しよう。

場の流れに乗って楽しんだ方がきっと己の為になる筈だ。

そうと決めたならば、幾つか質問してみよう。

「それはもうこの場の空気で嫌という程理解できたんだが、何で俺はこの場に呼ばれたんだ？」

『今回のメインＭＣにワタシとマスターが選ばれたからだ』

「聞いてない！俺そんな話一言も聞いてないよ！？」

『それはサプライズという粋な計らいだマスター』

「いや、粋な計らい所か嫌がらせでしかないからな！」

さっき突っ込みをしないと誓ったのに、五秒と持たなかった。

俺何時も通りの本編で八話目前編だと思って、一人称で冒頭から始めてたからな！

『まあ、そんな些細な事はどうでも良い事だマスター』

さらっと流された！

俺へのサプライズが小川のせせらぎの如く綺麗に流されたよ！

俺とメカ犬が会話をしている間に黒子達がステージの上にソファやらテーブルを持ってきてセッティングをし始める。

完成したセットは、あまりにも有名なお昼の平日の玉葱カットな大御所さんのお部屋的番組みたいになっていた。

黒子の一人に促されながされて、完成したセットのソファに腰を下ろす俺。

向かい側にメカ犬も座ると、準備を終えた黒子達はステージから去

って行った。

『ご苦労だったなスタッフ』

「あれスタッフだったの！？」

一応キャラクターファイルにも載ってはいるけど、まさかこんな場面で出てくるとは夢にも思わなかったぞ？

『さて、準備が整った所で本番を開始するぞマスター』

メカ犬は淡々とこの場を進行させていく。

普段から基本的にマイペースなメカ犬だが、今日は何時もより輪をかけて酷い気がする。

「ああ、それは良いんだけど俺何も聞いてないから、何を話せばいいのかも分らないぞ・・・」

『心配するなマスター。そんな事も有ろうかと進行プログラムを貰ってきておいた』

「誰から！？」

メカ犬がスタッフを呼ぶと、黒子の一人がステージに上がってきて、俺に一枚の紙を渡してきた。

『これで大丈夫だなマスター』

メカ犬は満足そうに頷く。

何だか今日の俺は、ひたすらにおいてけぼりだ。

「ああ」

俺は適当に返事を返しながら、スタッフの黒子から手渡された紙に目を通す。

「まずは始めの挨拶か・・・」

どうやら最初にメカ犬と声を合わせてタイトルコールから始まるらしい。

『それでは始めるぞマスター』

「はいはい・・・」

俺は溜息混じりに返事を返した。

※ここから先は純の一人称ではなく、殆どが会話オンリーですのでご注意ください。

軽快な音楽が流れる　　ＳＥ

「『緊急特別企画！祝・累計１００００００ＰＶ＆ユニークアクセス数１００００人突破記念座談会～』」

「いや～それにしてもめでたいなメカ犬」

『そうだなマスター』

「連載開始から約一ヶ月半でこんなにも沢山読んでもらえるなんて最初は思ってもいなかったからな」

『そうだな。作者は本来第二話後編で終わらせるつもりで書いていたらしいから、今を思うと驚くばかりだ』

「そうだったの！？」

『うむ。今は連載を意識してプロットを組んでいるから、すぐに打ち切りは無いから安心していいぞマスター』

「そうなんだ・・・」

『さて、今回のメインなのだが、これを記念して普段からこの作品を読んでくれている読者の方々の為の参加型企画をやる事を発表しようと思う』

「参加型企画？」

『うむ。頼むぞスタッフ』

黒子達がテロップを掲げる

○君の考えた断末魔

○あなたが創るオリジナルホルダー

○これが知りたいサイドストーリー

○何でもメカ犬相談室

『内容はこんな所だな』

「いや、二つ目以降は何となくタイトルで理解出来るけど、最初のタイトルからは物騒な事しか連想できないからな！？」

『それも順を追って説明するから落ち着いてくれマスター』

「・・・ああ。それで、取り敢えず最初のタイトルはどういう意味なんだ？」

『この作品を読んでいれば分ってくれると思うが、ホルダーが現れる度にワタシとマスターは現場に駆けつけているな』

「ん、確かにそうだけどそれが何だって言うんだよ？」

『そこではかなりの高確率でチェイサーに乗って登場するだろう』

「まあそうかな・・・」

『そしてチェイサーは大抵ホルダーを轢き倒す』

「まさか!?」

『そうだ。このタイトルでは、ホルダーがチェイサーに轢かれる際に上げる断末魔を募集しようというコーナーなのだ』

「確かに断末魔だ!?」

『そういうわけでホルダーの断末魔を大募集するぞ。ドシドシ応募してくれ』

「随時募集するらしいから、もしかしたらこれを読んで考えてくれた台詞が、本編の中で使われるかも知れないよ」

『この調子で次の紹介に行ってみようかマスター』

「本当にこの調子で大丈夫なのか?」

『次は、あなたが創るオリジナルホルダーについてだ』

「これは俺でも何となく分るぞ。読者の皆さんにホルダーを考えて欲しいって事だよな」

『うむ。ホルダーの簡単な身体的特徴と能力を書いてくれればＯＫだ。書ける人は簡単なあらすじを書いてもらえれば、それを基に作者がストーリーを創るぞ』

「この募集の締め切りは11月末までの募集で、作品としての発表は来年の一月か二月になる予定ですから、早めのご応募をお勧めします」

『そして次は、これが知りたいサイドストーリーだ』

「サイドストーリーって事は本編とは別の話って事だよな？」

『普段の本編ではマスターの一人称で描かれているから、情報が限定されるからな』

「つまりそれ以外の視点でのお話って事か？」

『うむ。それも間違いでは無いが更に幅広く、このキャラクターが主役の話が見てみたい、第〇〇話の後日談等でも構わないぞ』

「この募集も随時募集するから遠慮無く送ってくださいね」

『そして最後に発表するのはワタシが主役を務める何でもメカ犬相談室のコーナーだ』

「ある意味これが一番意味不明だけど、どういうコーナーなんだよ？」

『ワタシは常々思っていたのだが、この作品の後書きはお粗末過ぎると思わないかマスター』

「何でいきなり後書きへの駄目出し！？」

『だからワタシは決意した。面白くないならば、ワタシが乗っ取って、面白おかしくしてやろうと！』

「思考が独裁者みたいになってる！？」

『読者諸君と共にこの面白みが全く無い後書きに革命を起こすのだ！！！』

「メカ犬のテンションがおかしくなってるから代わりに説明するけど、ようはこの作品を読んで気になった事をメカ犬が後書きで説明してくれるコーナーです。このコーナーも応募期間は定められていないので随時募集しますね」

『ワタシと共に後書き界に新風を巻き起こすのだ！！！』

「お前はいい加減正気に戻れよ！？」

※暫くお待ち下さい。

『見苦しい所を見せてすまなかったなマスター』

「・・・ああ。元に戻ったならそれで良いさ・・・」

『さて、先程の話の続きなのだが、応募をする際は感想欄に送ってくれ』

「最初にコーナー名を書いてもらってから、内容を書いてもらえればそれで大丈夫です」

『勿論普段通りの感想も、今まで通り送ってくれてＯＫだ』

「以上で全部の説明が終わった訳だけど、これでこの座談会もおしまいかメカ犬？」

『甘いなマスター。これで終わりではあまりに味気無いだろう』

「・・・まだ何か有るのかよ？」

『この場を借りた告知といった所だな』

「告知？」

『まず本編だが、次回から夏休み編に突入するぞ』

「そうなの？まだ学校メインの話を一回もやってないのに！？」

『学校でのイベントは二学期からが本番だ。残念だがそれまで辛抱してくれマスター』

「それは構わないんだけど告知って話の内容が次回から夏休みになるだけかメカ犬」

『甘い、甘いぞマスター。砂糖菓子にシロップと蜂蜜をぶちまけてベトベトになった物を食べられなくて結局捨てて、定食屋で焼き魚定食を注文するぐらい甘いぞマスター』

「それ甘い要素皆無だよな！？」

『本当に分らないのかマスター。夏休みと仮面ライダーと言えば自ずと答えは導き出せる筈だ』

「夏休みと仮面ライダー・・・まさか！」

『うむ。ワタシ達もやるぞマスター。仮面ライダーシード映画化決定だ！』

「マジかそれ！？」

『本編が夏休みに入った事を記念して、今までよりも長編な話を本編とは別に掲載する事が決定したのだ』

「それが映画版って事なのか」

『普段とは一味違ったストーリー展開になる予定だから楽しみにしていてくれ』

「ハードルを上げる様な言い方するなよ・・・」

『これで告知する事も取り敢えずもう無いな』

「・・・やっと終われるんだな」

『それでは次は、次回の本編で会おう』

「夏休み編では新フォルムが続々登場するのでお楽しみに」

「『それでは皆さん。またの機会にお会いしましょう～』」

軽快な音楽が流れる　　ＳＥ

「本当に疲れた・・・」

俺はそう呟くと、ソファに自分の身を預けて全身を脱力させた。

今日の海鳴は平和だが・・・これから先はイベントの連続な予感がする。

**緊急特別企画！祝・累計１０００００ＰＶ＆ユニークアクセス数１００００人突**

『次回からここでワタシのコーナーが始まる予定なので宜しく頼むぞ』

「何かキャラまで変わってるぞメカ犬・・・」

沢山のご応募お待ちしております。

## 第八話　小さな願いを叶えるために【前編】（前書き）

来週から再スタートと言う話だったのですが、筆が思ったよりも進んだので投稿します。

楽しんでいただければ幸いです。

後編は今度こそ来週以降となります。

後書きには新コーナーもありますので、良かったら見てくださいね。

# 第八話　小さな願いを叶えるために【前編】

夏と言えば何が思い浮かぶだろうか。

レジャー好きな人なら山だろうか。

避暑地に選ぶならばやはり海を選ぶのがベターな選択かも知れない。

食べ物なら冷たい物が自然と欲しくなるだろう。

日本でのカキ氷やアイスの売り上げは夏が最高値を示すのは揺ぎ無い事実だ。

他にも祭りや何やらとイベント満載な季節であるが、俺達学生が総じて楽しみとしているのは、やはり夏休みと言っても過言ではない筈である。

小学生の夏休みと言えば宿題と朝のラジオ体操という名の敵の存在さえなければ、最高の一時だ。

まあ、超が付くほどの朝型人間で中身大学生の俺にとっては、こいつ等夏の二強は敵にすらならない。

ならば俺は、さぞかし有意義な夏休みを満喫しているのだろうと思うかもしれないが、世の中はそんなに都合良く出来ていない物だ。

それと言うのも・・・

「店員さん。こっち注文お願いします」

「はい！ただいま！」

俺は声に反応しその場所に素早く移動する。

「お勘定お願いしたいんですけど？」

「少々お待ち下さいませ！」

更に移動速度を加速させて声に対応していく。

俺は今ウェイターとして、アルバイトに精を出しているからだ。

何で現在小学生の俺がウェイターをしているのかというと、俺が今現在働いている喫茶店翠屋を経営している、高町家の家庭事情に起因している。

普段ならばウェイターをやっているのは、高町家の長男である恭也君と、同じく長女でウェイトレスの美由希さんなのだが、その二人が同時に不在となっているためだ。

まず恭也君なのだが、現在友達と旅行に行っている。

しかもその友達は皆美少女だった。

売れっ子アイドルが多数所属している事務所から選別したとしても歯が立たないであろう、凄まじいレベルの美少女達だ。

ちなみにその中には、すずかちゃんのお姉さんもいるらしい。

お姉さん経由によるすずかちゃんの情報によると、この美少女達は皆恭也君に好意を持っており、今回の旅行、その実態は恭也君の彼女を決める乙女の聖戦だとか。

まあ、恭也君の代わりに汗水流して働いている俺の意見を言うのなら・・・

リア充はモゲてしまえばいい。

何処かとはあえて言いはしないがモゲてしまえばいいと心の底から渇望している。

思い出すとムカつくので、イケメンリア充の事はこれぐらいにして置き、次は美由希さんだ。

美由希さんは何処かに泊り込みに行っている分けでも無く、高町宅に居る。

いや、居るのだが恭也君と反対に、美由希さんは一歩も家から出る事が出来ない状況に置かれているのだ。

今の美由希さんは中学三年生である。

そう、今という日本の受験戦争を戦い抜く、受験生という名のソルジャーなのだ。

そして恐ろしい事に、このソルジャーは期末試験で赤点と呼ばれる、敵の総攻撃を受け満身創痍の、重傷となってしまったのだ。

なので現在は、二学期から前線へと復帰する為に、鬼気迫る勢いで

勉強に取り組んでいる。

彼女が翠屋に帰還する事が出来るのは暫く先の話になるだろう。

唯一自由に行動できるのは、高町家が誇る、ある種のリーサルマスコットのなのはちゃんだが、ちょっとしたお手伝いなら兎も角、本格的な接客となると体力面が持たない事は結果を見るまでも無く明らかだ。

喫茶店の接客業とは、その見た目に反してかなりの体力が求められるのだ。

二年後位なら何とかなのはちゃんでも、できる様になって来るかもしれないが、現状では難しいだろう。

今この場に必要なのは集客率を高める存在ではなく、店を回せる事が出来る即戦力だった。

以前に雑誌に載ったおかげか翠屋に訪れるお客さんは随分増えたのだが、戦力となる二人が不在な為士郎さんと桃子さんの二人では対応が追い着かない。

今からアルバイトを雇うにしても、研修をさせている暇が中々無いのである。

その翠屋の現状で白羽の矢が立ったのが俺だった。

俺は以前にもこの翠屋で、とある理由から、一時期アルバイトをしていた。

なのはちゃんと同年代ではあるが、隣のシスコンお兄様のおかげで、体力はかなりある。

仕事も前世のファミレスのバイトで培った経験で直ぐに覚えたので、そこらのバイト初体験な高一の若者よりも役に立つと自負できる。

それに普段から懇意にしてくれるお隣さんの頼みとあれば、そう無碍には断る事も出来ない。

まあ、最後はバイト代弾むからと言う士郎さんの一言により俺はあっさりとバイトを承諾した。

俺が主にシフトに入っているのは午前中から昼過ぎまでだ。

最近は夏休みという事も有るのか、お昼時が一番混むのだ。

それさえ過ぎれば、後は二人でも何とかなるそうなので、偶に夕方にシフトが入るぐらいである。

「ありがとうございました～」

お昼時の最後のお客さんをお見送りして俺は漸く一息ついた。

未だに店内にお客さんは数人居はするが、その誰もが常連さんで、店内での一時を楽しんでいるため、暫く呼ばれる事は無いだろう。

店の柱に立て掛けている時計に目をやると、時計の短針は間も無く二時になろうとしていた。

そろそろ俺の今日の労働時間が終了する頃だ。

程無くして、士郎さんに呼ばれて今日もご苦労様と労いの言葉を貰い、翠屋で少し遅めの昼食を食べた後に、店を出た。

普段ならこの後、誰かと遊びに行ったりするのだが、生憎今日の俺は、母さんからお使いを頼まれていたので、遊びには行かず商店街を目指した。

今回のミッションは醤油を無事に確保する事だ。

もう板橋家には醤油の備蓄は残り少なく、このままでは、後数日で我が家の食卓から、日本人の魂である醤油が消えてしまうのである。

生粋の日本人として、そのような惨事は未然に防がなくてはならない。

板橋家は揃いも揃って和食党なのだ。

そんな日本人としての決意を胸に秘めながら商店街を目指していると、俺の視界に一人の少女の姿が映り込んだ。

「う～ん・・・動けへん」

往来の道の隅で少女はそう言いながらうんうんと唸っていた。

普通なら昼間から道の隅っこでそんな事をしていれば、何だこの子はと思うかもしれないが、少女はとある事情の為かそれは自然な行動に見えていた。

少女は車椅子に乗っていた。

そして右側の前輪が溝に挟まっている様で動けないで居るのだ。
周りを見渡すが俺と車椅子の少女以外に通行人の姿は無い。
ならば俺が取るべき行動は一つである。
「大丈夫かい君？」
「ふえ？」
俺は少女に声を掛けた。
車椅子の少女は今まで必死で俺の存在に気がつかなかったのか、間の抜けた声を上げた。
「今引っ張り上げるから少しジッとしててね」
「は、はい」
少女は俺の言葉に素直に従って車椅子の手すりを掴み、自らを固定した。
俺はそれを確認してから力一杯車椅子を引っ張った。
車輪は幸いな事に力を加える場所が変わった為か、直ぐに溝から出てくれた。
「あ、あの、ありがとうございます」

少女は遠慮しがちにお礼を言ってきた。

さっきまで気にして無かったが改めて少女を見てみるとかなりの美少女である事に気がついた。

なのはちゃん達の様な派手さは無いのだが、目の前の少女は、日本人特有の清楚な感じを纏っている気がする。

「わ、私の顔に何か付いてはるんでしょうか？」

俺が少女の顔をずっと見ていた為だろうか、少女は思案顔になりながら聞いてきた。

「ああ、ごめん。何でも無いから気にしないで」

何時までも人様の顔を見てるのは失礼なので、俺は少女の顔から少しだけ視線を逸らして、適当に誤魔化した。

「さっきは助けてもらって本当にありがとうございます」

「いや、困った時はお互い様だから」

「それで、私何かお礼をしたいんやけど、何か私にして欲しい事ってありますか？」

「いや、お礼なんて別に・・・」

別に要らないですと返そうとした所、俺は一つ思いついた。

「・・・それじゃ一つ頼みたい事が有るんだけど良いかな？」

「はい。私に出来る事なら喜んで」

俺は少女の合意の返答を聞き笑顔で頼み事を告げる。

「それじゃあ、俺と付き合ってくれるかな」

「え？」

「いや～君のおかげで得しちゃったよ」

「御礼やから気にせんでええよ」

俺と少女は海鳴商店街最寄のスーパーから出てくると、そんな会話を交わした。

俺の手には先程出てきたスーパーのレジ袋が握られており、その中にはお徳用サイズ醤油のボトルが二本収まっていた。

「お一人様一本までの安売りだったから、二本も買えるとは思ってなかったからね」

「それにしても、頼みがあるって言うた次に出てきた言葉には驚いたんよ」

「ははは、ごめんね。何か変な誤解させちゃったみたいで」

俺がこの少女に頼んだ事とは、一緒にスーパーに来てもらってレジに並んで欲しいという事だった。

今日はスーパーの特売日であり、醤油がお一人様一本限りのお値打ち価格だったのだ。

他の食材は前日に母さんが買っていたが、醤油の安売りが今日だった為に俺がお使いを頼まれたのである。

主語を入れずに言ってしまった俺の一言で、少女にあらぬ誤解を与えてしまったが、最後は快く了承してくれたので、無事にミッショ

ンを達成する所か、それ以上の結果を得る事に成功できた。

「さてと、それじゃ早速これを家に届けないとな」

「あ、うん・・・そうやね」

俺の言葉に少女は少しだけ寂しさを含ませた表情をした。

少なくても俺にはそう見えた。

「それじゃあ、私はこれで・・・」

俺はそう言って背中を向けて車椅子を押す少女を見て、何処かであの表情を見た事がある様な気がした。

「ふえ？」

少女は驚いた様な声を上げた。

それもその筈である。

俺が車椅子の背もたれに設置されているグリップを突然掴んだ為に、少女は驚いてしまったのだ。

「送ってくよ」

何故だか俺はこの一人の女の子を放ってはいけない気がして、自然と身体が動いていた。

「で、でも君に迷惑やない？」

「全然そんな事ないよ。それと板橋純」

「え？」

「俺の名前は板橋純。よろしく純って呼んでくれれば良いよ。君の名前は？」

そういえば俺達はお互いの名前すら知らないんだなと思った俺は取り敢えず自己紹介してみる事にした。

「えっと・・・」

何やら戸惑いを見せている少女。

仕方ない・・・あんまり俺のキャラじゃ無いが、笑いでも取りにいって見るか。

「可愛らしいお嬢さん。宜しければ、しがない一般庶民なこの俺にその可憐なお名前を教えては頂けないでしょうか？」

少しおどけた態度で言ってみる。

・・・ああ、恥ずかしい！

「・・・」

外したか！？

何かキョトンとした顔でメチャクチャ俺の顔を凝視してるんですけ

ど！？

俺にとって痛すぎる沈黙が支配する。

だがその沈黙は間も無くして、少女の変化を伴う事で終わりを告げる。

何やら少女は小刻みに震えだした。

俺が慌てて少女の前に回りこみ表情を確認すると、何かを必死に耐える様な顔をしていた。

少女の目の前に俺が回りこんだ事で互いの視線が重なる。

それが少女の最後の防波堤を崩したのだろう。

「・・・ぷふ」

少女はお腹を抱えて笑い出した。

失礼な事に涙を流す程に、勢い良く笑っている。

まあ、先程の痛い沈黙と比べれば、断然此方の方が良い。

暫く笑いは収まらなかったが、やがて落ち着きを取り戻し始めた様で、少女は俺に話し掛けてきた。

「き、君やなくて・・・純君。ほんまにおもろいな～。私こんなに笑ったの始めてかもしれへんよ」

笑いすぎた為に目頭に溜まった涙を拭いながら少女が言う。

「お気に召して頂きありがとうございます。お嬢様」

「・・・はやてや」

「ん？」

少女が一度呟くように言葉を零した。

「私の名前。八神はやて。はやてって呼んでくれてええよ」

今度ははっきりと自分の名前を言う少女、はやてちゃん。

「はやてちゃんか、良い名前だね」

「そうやろ」

俺とはやてちゃんは今度は穏やかに笑い合った。

「ここがはやてちゃんのお家か」

俺とはやてちゃんは雑談しながら移動してはやてちゃんのお家である八神宅に辿り着いた。

ここに来るまでに幾らか話をした。

どうやら俺とはやてちゃんは同い年らしい。

しかも驚いた事に私立聖祥大附属小学校の学生だったのだ。

現在は足の事もあり、休学中だそうだが、勉強はかなり得意なんだそうだ。

「送ってくれたお礼にお茶でも飲んでいかへんか？」

はやてちゃんは俺に家に上がる様勧めてくる。

突然お邪魔するのは、はやてちゃんのご家族の方に迷惑になるんじゃないかと思い断ろうとしたんだが、その俺の雰囲気を感じ取ったのか、はやてちゃんは先程スーパーの前で見せたのと同じ表情をした。

「・・・それじゃ少しだけお邪魔させて貰おうかな」

またあの寂しさを含んだ笑顔だ。

何故かあの顔を見ると俺は、はやてちゃんを放って置けなくなる。

俺ははやてちゃんに促されて八神宅に入る。

玄関に入る際に一匹の猫が視界の隅に入ったのだが、俺の視線に気が付いたのか何処かへ走り去ってしまった。

まあ、猫っていうのは余程人に慣れていなければ、警戒心の強い生き物だから仕方ないだろう。

俺は猫の生態について考えながらお邪魔しますと言って八神宅に改めて入った。

「すぐに準備するから、適当に座って待っとってな」

俺をリビングに案内したはやてちゃんはそう言ってキッチンに向かっていった。

俺は特にやる事も無いので部屋の様子を観察する事にした。

室内のあちこちには、手摺や、床にも傾斜になる板が設けられている等、車椅子の生活でも不自由にならない様な様々な工夫が施されていた。

でも何故だろうか。

その正体が分らないのだが、妙な違和感を覚える。

俺が得体の知れない、妙な感覚に頭を悩ませていると、はやてちゃんが車椅子の取っ手にトレーを固定させた状態でやって来た。

「お待たせ。お茶もってきたで」

固定されたトレーの上にはお茶が入っているであろうポットと二つの湯飲み、それとお茶菓子であろう煎餅が数枚乗っかっていた。

「手伝うよ」

流石にこれをテーブルに置くのは、はやてちゃんには難しそうなので、俺は手伝う事を宣言する。

「おおきにな」

俺ははやてちゃんから了承を貰い、トレーをテーブルに移動させる。

全ての準備が整い俺とはやてちゃんはお互いに向き合う形で席に着く。

「それじゃあ頂きます」

「どうぞ召し上がれ」

俺の言葉にはやてちゃんが笑顔で返す。

何だかくすぐったい気分だ。

俺が煎餅を一口食べてから、はやてちゃんの淹れてくれたお茶を飲んでいると、はやてちゃんが、そんな俺の様子を見ながら何やらニヤニヤしているのを視界に捕らえた。

「如何したの？」

俺が質問すると、はやてちゃんは笑顔のまま、目を細めて幸せそうに言葉を紡いだ。

「う～ん何かな・・・凄い嬉しいんよ。私な、誰かと家でこんな風にお茶をした事なんて無かったから・・・」

はやてちゃんはそう言ってから、お茶を一口飲んで話をし始めた。

「私な、両親がいないんよ。物心がついた頃には一人ぼっちやった。何か事故でお父さんもお母さんも亡くなったんやって」

「・・・・」

俺は無言ではやてちゃんの話を聞き続ける。

「血の繋がった親戚も誰も居らんでな、本当は施設に預けられる筈やってんけど、お父さんの知り合いやっていうグレアムさんって人が色々援助してくれて、私がある程度の年齢になるまでの財産管理までしてくれる事になったんよ。本当はその人の所で一緒で暮らすのが筋なんかも知れんけど、その人名前の通り海外の人でな、私こんな身体やし・・・治療はここでするのが一番ええからって事で一人暮らししてるんよ」

まあ、ヘルパーさんが一週間に一回尋ねてきてくれて色々してくれるんやけどなと、はやてちゃんはこの会話を締める様にまたあの笑顔を浮かべながら言った。

「でも、不思議やな・・・純君とは初対面なのに色んな事話したいって思ってまうんよ」

俺は気づいた。

この部屋の違和感。

そしてずっと引っ掛かっていたあの笑顔の正体に・・・

俺は以前にも同じ表情を見たことがある。

小学校に上がる前のお隣の幼馴染の顔なのだ。

心の中で寂しいって叫んでいるのに、誰にも悟らせない様にしようと、無理矢理笑顔を作ってる。

自分の心がその度に傷つくと分っている筈なのに・・・

俺がはやてちゃんに言葉を掛けようとした時、リビングに一本の電話が鳴った。

その電話でこの場の空気が変わり、はやてちゃんは急いで受話器を取りに向かう。

「はい八神です」

暫くして受話器を定位置に戻して戻ってくるはやてちゃん。

だがはやてちゃんの顔は、何処か不安を含んだ表情をしている。

「何かあったの？」

心配になって俺は思わず聞いてみた。

「ん～何か最近多いんやけど、無言電話があってなあ」

はやてちゃんの話によると、一ヶ月程前から掛かってくる様になったらしい。

最初は一週間に一回程だったのだが、一週間毎にその感覚が狭まってきており、昨日も掛かってきたらしいので、これで連日無言電話が掛かってきた事になる。

はやてちゃんは未だに浮かない顔で溜息をついている。

普通の人でも十分怖い事だろうに、はやてちゃんは普段は家で一人なのだ。

不安に成らない筈が無い。

そこで俺は一つの妙案を思いついた。

「はやてちゃん！」

「・・・ん、どうしたん、純君？」

「俺から一つ提案が有るんだけど・・・」

俺は思いついた妙案を、はやてちゃんに話した。

「今日は一日よろしゅうお願いします」

「ええ、遠慮せずに寛いでいってね。はやてちゃん」

はやてちゃんが頭を下げて挨拶すると、母さんが笑顔でそう返した。

俺が思いついた妙案とは、俺の家にはやてちゃんを招待する事だった。

はやてちゃんも余程不安だったのだろう。

迷惑じゃなければと、二つ返事でＯＫしてくれた。

そして母さんは・・・まあ見たままに嬉しそうだ。

『始めまして、はやて嬢。ワタシはオモチャ会社の新製品だ。マスターからはメカ犬と呼ばれている。はやて嬢も好きな様に呼んでくれ』

いつの間にかやって来たメカ犬が、はやてちゃんに自己紹介をしだした。

別にメカ犬の存在をはやてちゃんに隠す気は無かったのだが、幾らなんでも突然すぎだろ！？

見てみろよ。

はやてちゃん、いきなりの未知との遭遇で放心してるぞ？

暫くして放心状態から抜け出したはやてちゃんが俺に向き直り、ぎこちない笑顔を浮かべながら聞いてくる。

「な、なあ純君。ほんまにあれって・・・ただのオモチャなん？」

はやてちゃんの言いたい事は痛いほどに分かる。

だが目の前にいる、このフルメタルドックは残念な事に、紛れも無い現実なのだ。

「はやてちゃん・・・あれはオモチャとかそういったものというよりも、見たままの存在だって思っていた方が良いよ」

俺はきっと、悟りの境地に辿り着いた聖人の様な表情を浮かべてはやてちゃんを説得していた事だろう。

「そ、そうなんか？」

俺の真摯な説得に、はやてちゃんも納得してくれた様だ。

人生に置いて、妥協して先に進む事も、時には必要だと俺はメカ犬を見ながら切実に思った。

メカ犬のおかげで一悶着あったが、はやてちゃんを迎えた板橋家の午後は平和に過ぎていった。

中でも母さんは大層はやてちゃんを気に入ったようで、傍から見れば殆どお人形みたいな扱いになっている。

やがて日は沈み、俺達の様な子供は就寝しなければいけない時間となった。

「それじゃ、はやてちゃんは純のお部屋で一緒に寝るって事で良いかしら？」

母さんが唐突にとんでもない事を言い出した。

「突然何言い出すんだよ母さん！？」

俺は当然ながら異議を申し立てる。

しかし敵は天然という最強スキルを標準装備していた。

「あら、はやてちゃんはそれで良いわよね？」

ターゲットは話題の当事者である、はやてちゃんに移行された。

「え？えっと・・・私は・・・別にそれでもええですよ・・・」

アウトだ。

そしてそのままゲームセットだ。

板橋家のヒエラルキーは女性が優位を示している。
はやてちゃんが合意を示したならば、俺に覆す術は無いだろう。
「うふふ。それじゃあ決まりね」
しかし今日の母さんは本当に終始ご機嫌である。
俺は複雑な感情の入り混じった溜息を一つ、静かに吐き出したのだった。

俺とはやてちゃんは現在一つの布団で横になっている。
「何か、ごめんな・・・迷惑やなかった？」
「・・・別にそんな事無いよ」
俺とはやてちゃんは背中合わせに会話を交わす。

「私な、嬉かったんよ」

「ん？」

「病院以外でお泊り何て初めてでな、何や舞い上がってもうてなあ・・・」

「・・・そっか」

はやてちゃんは背中越しに少しもぞもぞと動くと会話を再開してきた。

「なあ純君。私な、純君にお願いがあるんよ」

はやてちゃんの声が少しだけ近くに感じられる様になった。

俺が振り向こうとするとはやてちゃんの手でやんわりと押せえられる。

「そのままで聞いてほしいんよ」

俺を抑えるはやてちゃんの手が僅かに震えている事に気づいた俺は、振り向くのを止めてはやてちゃんの言葉に耳を傾ける。

「ありがとうな・・・」

はやてちゃんも俺の頭から手を離すと話の続きを喋り始めた。

「純君。お願いです。私と・・・お友達になってくれますか？」

俺ははやてちゃんの言葉に一瞬だけだが、思考が停止する。

だが次の瞬間には再起動する。

言われるまでも無い。

俺の答えは最初から決まっている。

「はやてちゃん。俺達は・・・」

はやてちゃんに俺の答えを伝える為に、俺も言葉を紡ぐ。

だがその言葉を最後まで言う事は叶わなかった。

『キンキュウケイホウキンキュウケイホウキンキュウ・・・』

部屋の机の上に置いていたタッチノートが突然に警報を上げる。

その事態に驚きの声を上げる間も無く、部屋の窓ガラスが割られ何者かが俺とはやてちゃんしか居なかった筈の空間に、突如侵入する。

更に謎の衝撃を受けた俺は部屋の壁に叩きつけられる。

不幸中の幸いか布団ごと吹き飛ばされた為それがクッションとなって、怪我をする事は無かった。

「きゃあああああ!?」

突然の衝撃に吹き飛ばされ現状が把握できない中、はやてちゃんの悲鳴が俺の聴覚を刺激した。

俺は急ぎ視界を遮る布団を退かすと、其処に映る光景に驚愕する。

人外の化け物が俺の部屋に居たのだ。

全体が黒い羽毛に包まれており、黒いクチバシと羽を携えている。

一言で最も近い生き物を上げるのならばカラスが一番あっているだろう。

間違い無いこいつはホルダーだ。

何故ここにホルダーが居るのか分からないが、今はそれよりも問題にしなければいけない事がある。

ホルダーが気絶したはやてちゃんを脇に抱えていたのである。

はやてちゃんを抱えたホルダーは無言で割られた窓から飛び出すと、飛び去ってしまう。

「ま、待て！」

俺は咄嗟にはやてちゃんの腕を掴もうと試みるが、無情にもそれは叶わず、ホルダーに抱えられたまま月明かりだけが照らす夜空へと消えていく。

俺は机に置いてあったタッチノートを手に取ると、ホルダーの後を追う為に走り出す。

「待ちなさい！」

俺は突然の声に固まる。

こういった状況で真っ先に駆けつけて来るのは、メカ犬だが今の声は明らかに違う。

若い女性の様な声だった。

しかしその声は母さんのものでもない。

それどころか、俺の聞いた事の無い声だった。

俺は声の聞こえた窓際に振り向く。

其処には謎の影があった。

月が雲で隠れているせいかその姿が見えない。

見えない時間はそんなに長くは続かない。

雲は常に移動し、すぐに月を隠していた雲もその場を退く。

月明かりに照らされたその影の正体は・・・一匹の猫だった。

「・・・お前が喋ったのか？」

常識的に考えればそんな事はありえない。

妄想も良い所である。

だが現実はその妄想を真実にした。

「八神はやてにこれ以上近づくな」

再び発した猫の言葉は鋭い氷の刃の様に、俺の心へと突き刺さった・・・

## 第八話　小さな願いを叶えるために【前編】（後書き）

何でもメカ犬相談室【第一回】

『読者諸君。本編は楽しんで頂けただろうか？』

『今回の本編では出番の殆ど無かったワタシだがその分こちらで活躍させてもらうぞ』

『さて、記念すべき第一回目の相談だが　、神崎はやて殿からのお便りだ。神崎殿は普段から感想を頻繁に送ってくれるので本当にありがとう。おかげでワタシのコーナーが無事に始められたぞ』

『それでは早速読んでみるぞ』

○オーズドライバーをはじめ、メダル同根のグッズがどこにも売っておらず、メダルの1枚すらまだ持ってません！　この気持ち、どこにぶつければいいですか！　教えて、メカ犬様！！

『うむ。その気持ちワタシも良く分かるぞ。この質問への回答なのだが・・・神崎殿はゲームセンターには良く行くだろうか？メダルへの欲求はメダルで発散するのだ！！！後は発売日を待ちながら、インターネットで予約しておけば発売日に手に入る事間違い無しだぞ！！！』

『もうすぐクリスマスがやって来るから店頭で購入を考えている場合は注意してくれ！！！』

『それではまた質問があればドンドン質問してくれ！！！』

「お前は、何処に向かおうとしてるんだよメカ犬・・・」

沢山のご応募お待ちしております。

## 第八話　小さな願いを叶えるために【後編】（前書き）

後編が出来たので投稿します。

楽しんでいただければ幸いです。

それではどうぞ。

# 第八話　小さな願いを叶えるために【後編】

この場を静寂が支配する。

月明かりが照らすのは、突然室内で暴風でも発生したのかと、疑ってしまう様な惨状だった。

無残に砕け飛び散った、部屋の窓ガラスや、家具がその凄惨さを物語っている。

そして俺は今、その様に変わり果てた自分の部屋で、一匹の猫と対峙している。

「・・・どういう意味だよ?」

俺は連続で起こる突発的な出来事に、様々な疑惑と混乱を覚えながらも、対峙している猫に質問を投げかける。

「どうもこうも、言った通りの意味としか言い様が無いわね」

俺の質問に猫は幾分か飽きれたといった風の感情を乗せて答えた。

猫が人の言葉を使い会話をしているという事実だけでも、十分に驚愕する出来事だが、今の俺にはそれよりも優先させなければいけない事がある。

「それで、はいそうですかと納得できる訳無いだろう。何で人語を喋る猫に、そんな事を言われなきゃならない?それになんではやてちゃんは突然攫われたんだ?それもお前の仕業だっていうのか!?」

俺は矢継ぎ早にこの喋る謎の猫に質問をぶつけていく。

猫は俺の質問を黙って聞いており、俺の質問が終わると、気だるそうに溜息を一つ落とし、面倒くさい子供だと呟くと、再び喋りだした。

「さっきも言った通りよ。これは忠告。八神はやてに近づけば君は後悔する事になる」

「後悔する？」

「最初に言っておくけど、これ以上話す気は私には無いわよ。知らない方が君にとっては幸せな事だろうしね」

猫はそこまで言って、またしても溜息を一つ吐き、続きを話し始める。

「それに私は、本来なら君の前に姿を現して会話をする気すらまったく無かったんだから・・・」

「じゃあなんでお前は今俺の前でこんな話をしているんだ？」

どうにも俺と猫の間で噛み合わない部分のある会話は続く。

「想定外のイレギュラーが起こったからよ。君が偶然にも八神はやてと接触した事と、彼女があの鳥の様な化け物に攫われた事・・・君の事だけでもどう対処しようか思案していた所だったのに、本当に面倒な事になったわ」

今の発言を聞くと、どうやらこの猫は俺とはやてちゃんをずっと監視していた様だ。

そういえば、はやてちゃんの家の前で猫を見たが、その時俺が見た猫はこいつだったのかも知れない。

それにこの猫は今気になる事を一つ言った気がする。

「ちょっと待て。お前の話し方からすると、はやてちゃんが攫われた事とお前は無関係なのか？」

俺の問いに猫は相変わらず面倒臭そうに答える。

「当たり前でしょ。私だってこれから如何するか悩んでる所なんだから」

その回答に、俺と猫の間で噛み合わなかった部分が、見事に合致した。

俺は思い違いをしていたのだ。

はやてちゃんを攫ったホルダーとこの猫は何らかの繋がりがあるのではないかと、俺は思っていた。

だからこそ俺はこの喋る猫との会話を試みたのだ。

しかしホルダーとこの猫が何の関係も無いというのなら、俺がこの場所に留まる理由は無い。

この猫の言っている事を全面的に信用する事は出来ないが、現には

やてちゃんは、俺の目の前でホルダーに連れ去られているのだ。

一刻も早くはやてちゃんを助けに行かなければならない。

俺は握り締めたタッチノートに更に力を込めると一目散に走り出す。

「だから待ちなさいって言ってるでしょ！」

急いで走り出した俺を猫が一喝し制した。

「八神はやては無事よ。・・・今の所はね」

「なんでそんな事がお前に分かるんだ？」

「答える必要は無いわ」

「その答えに俺が納得するとでも思ってるのか？」

「納得してもらわなくて構わないわよ。八神はやては私が何とかするわ。だから君は今日の出来事を全て忘れて自分の日常に戻りなさい」

事情は分からないが、俺はこの猫が決して悪人では無いという事を感じ取った。

言っている事は全てにおいて納得出来ないが、言葉その物から優しさが滲み出ている。

しかし、それではいそうですかと答える気は毛頭無い。

この猫に任せておけば俺の知らない所で全てが上手くいくのかも知れない。

もしかしたらそれが最善の選択であると、全ての事情を知る者なら言うかも知れない。

しかし俺の脳裏を巡るのは、数刻前の俺とはやてちゃんとのやり取り。

頭には震える小さな手の感触が未だに残っている。

その耳には、少女の小さな・・・あまりにも小さな一つの願いの言葉が響き続ける。

俺は、はやてちゃんに自らの言葉で伝えなければいけない。

自らの決意を胸に俺は猫に一言だけ告げる。

「断る」

俺の言葉で一瞬の沈黙が訪れる。

しかし、俺の言葉を聞いた猫は先程と違う氷の様な雰囲気を纏い俺に再度問う。

「本気で言ってるの？」

剥き出しの刃の様な威力の感情を含む一言が俺を襲う。

はっきり言って今すぐにでも逃げ出したいと思う。

でも、その度に一人の少女の寂しげな笑顔が俺の頭の中に浮かび上がり、その感情を押さえつける。

俺はゆっくりと頷いた。

「つまらない意地をを張るつもりなら、止めておいた方が身の為よ。それにただの子供に何が出来るって言うのかしら？」

確かにその通りだ。

普通に考えればただの子供が怪物を如何にか出来るなんて誰も思う筈が無い。

でも俺は・・・

『あまりワタシのマスターを見縊らないで貰おうか』

聞きなれた声が聞こえてきた。

ガラスが割れた事で通気性の上がった窓から、小さな影が俺と猫しか居なかった部屋に突如乱入する。

その存在は月明かりにより白銀の光を帯びていた。

『駆けつけるのが遅くなってしまいすまないマスター』

「いや、気にして無いさメカ犬」

俺には何時だって苦楽を共にしてくれる、頼りになる相棒がいる。

「・・・結界を張っていた筈なんだけど、何なのこの銀色は？」

猫が心底驚いた様な声を上げる。

結界というのは良く分からないが、この猫が何かをしていたのだろう。

流石に母さん達が部屋がこんなになる様な。ど派手な音を立てていたにも関わらず、部屋に来ないのはおかしいと思っていたのだ。

猫は俺とメカ犬を交互に見比べると、先程まで纏っていた氷の様な雰囲気を四散させた。

「魔力は感じないけど、ただの一般人って訳でも無いようね・・・」

猫は何やらブツブツと呟いていたが、もう一度俺達を見て投げやり気味に言ってきた。

「いいわ・・・今回は君に任せる事にする。まだ猶予は残っているしね。でも忘れない方が良いわよ。八神はやてと共に居れば君は必ず後悔する事になる」

それだけ言うと猫は踵を返した。

去り際に猫は独り言を呟く様に喋った。

「海岸に行ってみなさい。そこに八神はやてが居る筈よ」

猫は続いてまた会う事があるかもねと言うと窓から走り去り、俺達

の前から姿を消した。

「・・・行くぞメカ犬！」

『うむ。一刻も早くはやて嬢を救い出さなくてはな！』

俺とメカ犬は急ぎ部屋を飛び出し海岸へと向かった。

『さあ、着いたわよマスター』

「ありがとうチェイサーさん」

俺はチェイサーさんに感謝の言葉を言ってからシートを降りる。

『ここがあの猫の行っていた海岸だがはやて嬢は何処に居るのだ？』

俺達は板橋宅を出るとすぐにチェイサーさんを呼んで、あの喋る猫が去り際に教えてくれた海岸に連れて来てもらった。

潮の香りとさざ波の音、海面に映る月が夜の海岸を何とも幻想的な雰囲気にしている。

こんな状況で無ければ夜の海岸も良い所だと思えるのだが、生憎俺達はここに遊びに来た訳では無い。

捜索を開始してから数分程で、浜辺で寝そべる少女とその隣に座る男性を発見した。

俺とメカ犬は二人の傍に駆け寄っていった。

寝そべっている少女は間違い無くはやてちゃんだった。

近づいた事で時折寝息が聞えるのを確認出来た事から、どうやらあの猫が言っていた通り無事だった様だ。

俺は少しだけ感じていた不安が一つ解消した事により、ホッと胸を撫で下ろす。

しかし今は安心し続けている場合じゃ無い。

問題は、はやてちゃんの隣に座り海を眺めている男性だ。

この男性が俺の部屋を襲撃し、はやてちゃんを連れ去ったホルダーとみて、まず間違いないだろう。

男性はキッチリとしたビジネススーツを着こなし、見た目三十台半ば頃と思われる。

男性は何処か虚ろな瞳で、俺達が傍にやって来たにも関わらず、未

だに海を眺め続ける。

「何であなたはこんな事をしたんですか？」

このまま黙っていてもらちが明かないと思った俺は、意を決して男性に話し掛けてみた。

「・・・君は海を見てどう思う？」

男性は視線を海に固定させたままで静かに語り始めた。

「僕は海が大好きだ。海を見ている時だけは嫌な事を全て忘れられる・・・」

今まで海から視線を外さずにいた男性が、一瞬だけ俺を見てからはやてちゃんを見て、再び視線を海に向ける。

「このお嬢さんの父親・・・八神さんと僕は同じ職場の同期だったんだよ」

男性は抑揚の無い声で語り続ける。

「八神さんは僕に無いものを沢山持っていた・・・仕事の実績に、友人。素敵な奥さんと娘。彼の周りは何時だって賑やかだった。僕は昔から人と接する事が苦手でね。こんな僕とは正反対の八神さんを何時も羨ましく眺めていたものさ」

自嘲する様に、僅かに唇の両端を吊り上げる男性。

「そんな僕にも八神さんは良くしてくれてね。頻繁に食事に誘って

くれたりと、世話を焼いてくれた。本当なら感謝する事だろうね。僕自身も始めは八神さんの優しさに感謝していたんだよ・・・」

男性は淡々と話す。

「でもね。それが続く程に僕は同時に惨めな思いもしたんだよ。何で僕には何も無いんだ?僕の何がいけない?八神さんと僕の何がそんなに違うんだ!?」

少しずつ男性の語気が荒くなる。

「そんな折、八神さんは亡くなった!僕に孤独を思い知らせた本人が勝手に居なくなったんだ!!」

男性は立ち上がる。

「散々僕に惨めな思いさせておいてだよ!!酷い話だろ!?」

男性は演説の様に宣言した後、だけど・・・と呟きはやてちゃんを見た。

「だけど八神さんは僕に素敵な贈り物を残していってくれたんだ」

男性は妖しく唇の両端を限界まで吊り上げて笑みを浮かべる。

「八神さんの娘さんは僕と同じ孤独の中を生きている。周りに人の絶えなかった、あの八神さんの娘がだよ!その事実だけで僕は日々を生きていく事が出来るのさ!!!」

「・・・どういう事ですか?」

「簡単な事さ。僕と八神さんは同じ痛みを知る仲間さ。だから一人で孤独から抜け出そうとするのは許せなかったんだ！普段から遠めに観察したり、電話をかけたりして様子を探っていたからね・・・」

気持ち悪い笑顔を浮かべていた男性は、今度は俺を睨みつけ、怒りの形相を浮かべた。

「そんな幸せな一時を過ごしていた中に、君の様な無知な子供が現れたんだ！！！」

俺に対し男性は咆哮を上げる。

「子供だから少し怖い目に遭えば恐怖で近付かなくなると思っていたんだけどね。それどころか、まさか追って来るなんて夢にも思わなかったよ」

男性はスーツのポケットに手を入れると、中から緑の球体を取り出し、握り込んだ。

男性は全身から緑色の光を放ち、その姿は劇的に変化する。

光が収まりその場に居たのは、俺の部屋を襲撃した黒い翼を持ったホルダーだった。

「もう二度と近づこうと思わない様に、確りとその身体に恐怖を刻み込んであげないとね」

ホルダーへとその姿を変貌させた男性が楽しそうに言う。

『来るぞマスター』

メカ犬が俺に注意を呼びかけてくるが俺はそれに答えないままホルダーを睨みつける。

いや、答えないのではなく、今の俺には答える事が出来ないのだ。

今俺の心は怒りで満たされている・・・

「・・・ざけるな」

怒りは腹の底から上へと押し上げられる。

「ふざけた事言ってんじゃねえええええ!!!」

その怒りはついに俺の言葉となり体外に放出された。

「お前なんかとはやてちゃんを一緒にするな!!!」

この男性がどういう人生を歩いて来たのかなんて、俺は知らない。

だから俺はこの男性の全てを否定するような事は出来ない。

ただ間違い無く言える事が一つだけある。

「小さな女の子にあんな顔をさせて良い訳無いだろ!」

本当の孤独が何なのか、平凡な人生を日々歩んできた俺には想像する位しか出来ない・・・でも、だからこそ!

「本当の孤独を知ってるなら何で手を差し伸べないんだよ！泣いてるんだぞ！たとえ笑顔で笑っていたとしてもその度に心の中で助けを求めて泣き叫んでるんだぞ！？」

はやてちゃんとこいつは決して同じなんかじゃない！

「お前は何かをしたのか！？助けを求めたか！自ら孤独を脱しようと努力をしたのかよ！？」

はやてちゃんは俺に言ったんだ。

友達になってくださいって。

一人の孤独から逃れようと一歩を踏み出したんだ。

勇気を出して今を変えようとしたんだぞ！

「俺はお前を絶対に許さない！行くぞメカ犬！！！」

俺はタッチノートを取り出し開く。

『うむ。このホルダーの曲がった根性をワタシ達で叩きなおすぞマスター！』

俺はタッチノートのボタンを押す。

『バックルモード』

音声が流れると同時にメカ犬は銀色のベルトへと変形し俺の腹部に自動的に巻きつく。

「変身」

音声キーワードである言葉を叫びタッチノートをバックル中央の窪みに差し込む。

『アップロード』

ベルトを中心に白銀の光が俺の全身を包みこむ。

一瞬更に眩い光を発すると俺を包んでいた光はその役目を終えて散っていく。

そして、その場所に佇むのは一人の戦士である。

メタルブラックのボディと銀色のベルト。

其処から伸びる四肢への銀色のラインに額のV字型の角飾り、顔の半分近くを覆う赤い複眼が特徴的だ。

「!!!仮面ライダーだったのか!?」

どうやらこのホルダーは仮面ライダーの事を知っているらしい。

まあ、最近は雑誌に載ったりしているので、不思議という事も無いのかもしれないが・・・

俺は驚くホルダーに駆け込み拳を叩き込む。

「は!」

突然の攻撃にホルダーは後方に飛ばされるが空中でバランスを整えると翼を大きく広げ羽ばたかせた。

すると羽ばたいた翼から俺に向かっていくつもの羽がダーツの様に一直線に迫り来る。

『避けろマスター』

俺はメカ犬の指示に従いその場から転がり回避する。

更に俺はバックルの右部分をスライドさせて緑のボタンを押し、続けて黄色のボタンを押した。

『スピードフォルム』

音声が流れると同時に、ベルトを中心に光が俺を包み込む。

光が収まりメタルブラックのボディは、ライトグリーンに変わる。

『スピードロッド』

更に俺の目の前に光の粒子が集まる。

それを俺が掴む事により、形を成さなかった光が確かな存在となる。

それは素早さに重点を置いたこのフォルムの専用武器、スピードロッドだ。

「見た目が変わっただけでどうなるというんですか？」

ホルダーはスピードフォルムとなった俺に対し再び翼の羽を連続で放つ。

「変わったのは見た目だけじゃないさ！」

俺は今度は避けずに、スピードロッドを振り回す事で飛び掛る全ての羽を叩き落す。

「くっ！」

それを見たホルダーは更に多くの羽を飛ばしてくるが、俺はその羽をロッドで跳ね飛ばし、時には避けながらホルダーに接近する。

「おりゃあああ！！！」

ロッドの届く射程距離まで近づいた俺は、容赦無く連撃をホルダーに叩き込み吹き飛ばす。

吹き飛ばしはするが、地に伏す事無く、ホルダーは翼をはためかせながら滞空する。

「・・・不本意ではありますが、ここは一旦退くとしますか」

ホルダーは呟くと翼を大きく広げ、踵を返して月夜に消えていく。

「待て！！！」

ここでホルダーを逃がす訳には行かない。

あのホルダーを逃がせば、またはやてちゃんに危害を加える事は確実である。

だけど空を飛んでいくホルダーを、俺に追う術は無い。

「このまま見ている事しか出来ないのか！？」

『大丈夫だマスター。まだ手はある』

俺の苦虫を噛み潰した様な言葉にメカ犬が答える。

『ここはアタシに任せてマスター』

更に後ろからチェイサーさんが俺に話しかけてきた。

『タッチノートを出してくれマスター』

「ああ」

俺はバックルからタッチノートを取り出す。

『そしたらまずはアタシをリミットオフしてねマスター』

続いてチェイサーさんが指示を出してきた。

この場でチェイサーさんをスピードアップさせてどうなるのか分からないが、俺は取り敢えずボタンを押してチェイサーさんをパワーアップさせる。

『リミットオフ』

タッチノートから流れる音声と共にチェイサーさんの全身黒のボディに、銀のラインと赤いカラーリングが追加される。

「これで何をしようって言うんだよ？」

俺の疑問にメカ犬とチェイサーは、含み笑いをしてから言い放った。

『『もう一度ボタンを押せば良い』』

何か気味が悪い同調を見た気がするが、今の俺には生憎と他の手段を考えている時間が無い。

俺はメカコンビの指示通りにもう一度ボタンを押してみた。

『ホバーチェイサー』

音声が流れるとチェイサーさんに更なる変化が訪れる。

前輪と後輪が横に倒れると車体の下にスライドして行き、背面にはボディの中からバックパックの様な物が姿を現す。

それだけでもかなりの驚きなのだが、重要なのは其処じゃない。

・・・浮かんでいるのだ。

チェイサーさんが俺の目の前で先程の音声が現す様にホバリングしているのである。

「飛べたのチェイサーさん！？」

その見た目から実は、マシントルネイダーの親戚か何かと、俺は思ってしまった。

『空中では基本距離を置いた戦いになる。フォルムを換えるぞマスター』

チェイサーさんの変形を目撃し呆けていた俺に、メカ犬が声を掛ける。

「・・・あ、ああそうだな」

俺はその言葉で正気を取り戻すと、ベルトの右側をスライドさせて、青いボタンを押す。

『サーチフォルム』

三度ベルトから光が発生し俺の全身を覆っていく。

光が飛散すると俺のボディカラーは、ライトグリーンからスカイブルーに変化する。

このフォルムになる事で、俺の五感全てが鋭敏になる。

既に姿が見えなくなっていた筈のホルダーの姿が目視出来る所か、その羽音までもはっきりと聞えてくる程だ。

『準備が出来たら乗ってねマスター。全力で飛ばすから！』

俺がフォルムチェンジし終えるのを確認したチェイサーさんが話し

かけてきた。

その言葉に頷いた俺は、サーフィンのボードに乗る様にシートの上に両足を置いて、所謂立ち乗り状態を取る。

『それじゃあいっくわよ！！！』

チェイサーさんの叫びと共に背面のバックパックから爆発するかの様な爆発が発生し猛スピードで飛んでいく。

そのスピードは凄まじく一瞬とも言える時間でホルダーに追い着いた。

「逃がさないぞ！！！」

俺はホルダーに対し叫ぶ。

ホルダーはその声に気付き俺の方に首を向け驚愕するが、すぐに平静を取り戻した様で、素直に感想を述べてきた。

「驚きましたよ。しつこいと思っていましたが・・・ここまでしつこいとはね！！！」

言葉が終わると同時にホルダーは羽を大きく振りかざし、いくつもの羽を放つ。

「チェイサーさん！」

『任せなさい！』

俺の言葉に短い返事を返したチェイサーさんは、遅い来る羽を緊急回避する。

『こちらからも仕掛けるぞマスター』

「分かってる」

メカ犬の指示に俺は頷きながら、ベルトの右側をスライドさせて黄色のボタンを押した。

『サーチバレット』

発生する光を掴む事で俺の手の中で生まれるのは、スカイブルーのカラーリングが施された銃だ。

上部分だけは銀色で、やはり溝が設けられている。

これがサーチフォルムの専用武器、サーチバレットだ。

俺は銃なんて撃った事は無い。

精々ゲームセンターのシューティングゲームをやった事がある程度である。

だけど今の俺になら、サーチフォルムの俺にならこの銃を自在に使いこなす事が出来る。

続け様に俺達に羽を放つホルダー。

俺はその迫り来る羽と、その先に居るホルダーに銃身を向けて、引

き金を引く。

銃身からは青い光が、引き金を引く毎に撃ち出され、その光弾全てが羽を相殺する。

「何!?」

その光景に驚愕するホルダーが更に羽を飛ばすが、俺はその羽も全て撃ち落しホルダーにも光弾を当てる。

サーチフォルムは俺の五感を強化する。

周りの情報が手に取るように頭に入ってくるし、指一つを動かすだけで次に何が起こるのかをも予測出来るのだ。

他のフォルムより、身体能力は落ちてしまうが、遠距離の相手と戦うならばかなり有効に戦える。

『決めるぞマスター!』

「ああ!」

俺はメカ犬の言葉を合図にタッチノートをバックルから取り出し、サーチバレットの溝部分に当ててスライドさせる。

『ロード』

音声が聞えるのを確認し、タッチノートを再びバックルの中心部分に差し込む。

『アタックチャージ』

ベルトから発生する白い光が、右腕の銀のラインを通ってサーチバレットの銃口に集約される。

「はっ！」

俺はチェイサーさんから飛び上がり更に上空へと飛翔する。

俺という枷が外されたチェイサーさんは更なる加速を見せてホルダーに突っ込む。

ホルダーはそれを避けきる事が出来ずに、跳ね飛ばされた。

「こいつで決めるぜ」

そんなホルダーに俺は輝くサーチバレットの銃口を向ける。

「サーチバレット」

標準を合わせ引き金を引く。

「ガトリングブースト」

青い光弾が一列に幾重にも連結され、ホルダーに射出される。

連結し射出された光弾は、その全てがホルダーを捕らえ、大きな爆発を起こした。

爆発の中からは素体となった男性が気絶した状態で落下していく。

再びチェイサーさんの上に乗った俺は、落下する男性を空中でキャッチし、今だ気絶しているはやてちゃんの元に戻るべく、海岸への移動を開始した。

「・・・ん、私どうなったんや？」

「おはよう。はやてちゃん」

目を覚ましたはやてちゃんに俺は挨拶をする。

夜が白み始めた海岸の浜辺で、俺は現在はやてちゃんを膝枕している。

今戻っても部屋はボロボロだろうし、今すぐ戻るよりも暫く言い訳を考えながら、この幻想的な夜の海岸の雰囲気を感じていたいと考えたからだ。

「・・・純君。もしかして純君が助けてくれたんか？」

未だに寝ぼけているのか、何処かウトウトとしながらはやてちゃんは質問をしてくる。

「俺じゃないよ。正義の味方が助けてくれたんだ」

俺の答えにはやてちゃんは目を擦りながら、何処か納得のいかない様な表情をする。

その後何かを考える様なしぐさをした後、はやてちゃんは少しだけ困った様な笑顔を浮かべた。

「・・・まあ、純君がそう言うなら、そういう事にしといたるわ」

何か含みのある言い方だが気にしなくても良いだろう。

何だかまだ寝ぼけてるみたいだし・・・

「はやてちゃん。俺まだはやてちゃんに答えを言ってなかったよね」

「・・・うん」

俺ははやてちゃんのお願いに対し答えを示す。

俺は、はやてちゃんのおでこに、軽くデコピンを喰らわせた。

「あいたっ！何すんの純君!?」

そんなに力を入れたつもりは無いのだが、大げさなリアクションで痛がって見せるはやてちゃん。

さすが関西出身といった所だろうか？

「はやてちゃん。俺とはやてちゃんはもうとっくに友達だよ。もう一度馬鹿な事言ったら今度は三回デコピンするからね」

俺の言いたい事は言った。

友達は頼まれてなるものじゃ無い。

気付いたらもう友達になってるものなんだ。

少なくとも俺は、既にはやてちゃんを友達だって思ってる。

俺の言葉に目を見開いていたはやてちゃんだが、やがてその目には大粒の涙が溜まり始めた。

「・・・あり・・・と。ありがとなあ・・・純君」

はやてちゃんの涙腺は決壊したかの如く、その頬に目頭に溜まっていたが零れ始める。

「あ、あかんなあ。嬉しい筈なのに、笑いたいのに涙が止まってくれへん・・・」

俺は黙ってはやてちゃんが泣き止むまで、赤ん坊をあやす様にはやてちゃんの頭を撫で続けた。

はやてちゃんが泣き止む頃、夜は明けて海の向こうから朝日が昇り始める。

「帰ろうか。はやてちゃん」

「・・・うん」

はやてちゃんの表情は朝日の陽光に照らされながら、暖かな笑みを浮かべながら、答える。

その笑顔にはもう・・・寂しさを含んではいなかった。

帰った後、家では不思議な事が起こっていた。

まるで室内で台風が発生した様な惨状だった筈なのに、戻ってみると部屋はその痕跡は何も残っておらず、あの夜以前の状態に戻っていたのである。

分からない事といえば、その夜に現れて俺に謎の忠告をしてきた猫もだ。

あの夜以降、俺の目の前にあの猫は一度も姿を現してはいない。

いっそあの日の事は全て夢だったのではと考えた方がすっきりするかもしれないが、あれは紛れも無く現実で間違い無いだろう。

如何してか分からないが、あの猫とはそう遠くない未来でまた会う事になるんじゃないかと思ってしまった。

まあ、答えを知るには今の俺には情報が少なすぎる。

それと、補足になるのだが、俺ははやてちゃんにこの話はしていない。

話しておいた方が良いのではと考えもするが、今分かっている事を伝えても不安を煽る事しか出来はしない。

取り敢えずこの件に関しては、俺とメカ犬の心の中に留めて置く事にした。

消化不良に思う部分は多々あるが、こうしてこの一件は無事に解決したのである。

「店員さ～ん。お水の御代わりおねがいしま～す」

「はい。ただいまお持ちいたします」

未だに俺は翠屋のバイトに精を出していたりする。

あと三日程で恭也君が戻ってくるので、そうすれば俺の休みもかな

り増えるのだが、それまでは毎日フル稼働である。

「本当に忙しそうね。純は」

「私もちゃんとお手伝い出来ればいいんだけどね」

「それは仕方ないよなのはちゃん」

俺のバイト風景を見ながら美少女三人組は翠屋でランチを楽しんでいた。

しかもそのランチは俺のバイト代である翠屋のタダ券によるものだったりする。

チャッカリしている事この上ない。

三人を見て溜息を吐くが、翠屋の玄関に気配を感じたので、俺は反射的に接客対応をとる。

「いらっしゃいませ・・・あ」

それは俺の知り合いだった。

いや、最近出来た新しい友達だ。

「本当にバイトしとったんやな純君」

車椅子に乗った少女、はやてちゃんである。

「いらっしゃい。はやてちゃん」

俺は改めてはやてちゃんに挨拶をする。

「何でも奢ってくれるって言うから来て上げたんやで」

はやてちゃんは胸を張って、美少女にご飯を奢れるなんて光栄に思うんやなと自信満々に言って来た。

あれから気付いたのだが、はやてちゃんは遠慮が無くなるとかなりノリの良い性格をしている様なのだ。

偶にそのテンションに振り回される事もしばしばだが、それがはやてちゃんの本来持つ魅力の一つだと俺は思う。

「はっ!?」

何やら突然背中に悪寒が走った。

「その子は誰かな純君?」

「いつ仲良くなったのかな?」

「勿論話してくれるわよね。純?」

何故だろう?

三人とも笑顔で俺に話しかけて、はやてちゃんを紹介してくれと言ってるだけなのに、それだけの筈なのに・・・

俺の本能が警告を鳴らしている。

俺はこの場で唯一頼れるであろう、はやてちゃんに助けてくれと視線だけで合図を送る。

その視線に気付いたはやてちゃんは俺に笑顔で任しときと答えてきた。

その笑顔が頼れる筈なのに何故か悪魔に見えた気がするのは俺の被害妄想だろうか？

はやてちゃんは、なのはちゃん達の目の前に移動すると自己紹介を始めた。

「どうも始めまして。八神はやてです。皆さんよろしゅうお願いしますね」

普通の自己紹介でホッとした俺だが、それはただの嵐の前の静けさである事を俺は思い知る事となる。

「純くんとは最近付き合い始めたらぶらぶカップルなんやで」

空気が凍った。

そして、笑顔を貼り付けたなのはちゃん達が俺に無言でにじり寄ってくる。

何この状況！？

『モテモテだなマスター』

店内の隅に座っていたメカ犬の、意味不明な一言により、翠屋の店内に嵐が巻き起こる。

この後一騒動起こったのは当たり前だが、それはまた別の機会に話せれば言いと思う。

何よりも、一人の少女の小さな願いが叶ったのだ。

これ以上言う事は無いだろう。

今日の海鳴は、賑やかで寂しさなど感じる暇も無いほどに平和である。

# 第八話　小さな願いを叶えるために【後編】（後書き）

何でもメカ犬相談室【第二回】

『今回の話も楽しんでくれただろうか。読者諸君』

『今回の本編ではワタシも大活躍だったが、ここでも活躍させてもらうぞ』

『さてそれでは早速今回の相談内容だ』

『応募してくれたのは第一回目に続き神崎殿からだ』

〇作品が最終決戦へ向かっており、多くのキャラを多くの場所で動かさなくてはならなくなり、執筆のスピードが激減しています。なんとかならないでしょうか！？

『・・・これは難しい問題だな』

『執筆スピードは個人差が出るものであるし書き手の得意とする手法も様々だ』

『この作品の作者もプロフィールで執筆速度が亀だと言っている程だからな』

『だからワタシの個人的な答えを言わせて貰おう』

『まずはどんな形でも良いから最後まで書いてみるのだ』

『プロットとあまり変わらないかもしれないが、何かしらの形を持たせる事で、人のイマジネーションとは加速されるものだ。それは間違い無いぞ』

『頼りない答えかもしれないが、参考になったのならば嬉しく思う』

『それではまた次回でお会いしよう』

「何かスタンスがラジオのはがきコーナーみたいになって無いか？」

ジャンルを問わず様々なご応募をお待ちしております。

## 第九話　マジカル・コスプレ・コンテスト？【前編】（前書き）

今回はお話を読む前に、注意書きをさせて頂きます。

話の冒頭はある種の痛い内容となっておりますが、間違って違う短編小説を投稿した訳ではないので、ご安心ください。

それでは楽しんで頂けると幸いです。

# 第九話　マジカル・コスプレ・コンテスト？【前編】

マッチョな大男が街で破壊活動を行っている。

街は大パニックだ。

しかしそこに、可憐な四人の少女が駆けつけた。

「行くわよ皆！」

「「「うん！」」」

四人の少女達が右手を空に向けて突き出す。

「「「「マジカル・ミラクル・メイクアーップ！！！」」」」

その言葉を合図に四人の少女が黄金の光に包まれる。

光の中で彼女達の服装は学校の制服から、戦う為の聖なる衣へと変化する。

帽子は魔女を思わせるトンガリ帽子。

服装は短めのスカートをしたドレスで、その上からレースがあしらわれたエプロンを着けている。

そして胸の部分には、赤い十字マークが強く自己主張をしている。

四人は同じデザインで色違いの衣装を身に包んでいた。

「純白の乙女！マジカルナノネ！」

白いドレスに身に纏った少女がポーズを取りながら名乗りを決める。

「真紅の乙女！マジカルアリス！」

マジカルナノネと名乗った少女と同じデザインで赤色のドレスを身に纏った少女も名乗りを上げる。

「蒼穹の乙女！マジカルスズノ！」

青いドレスを纏った少女が名乗る。

「漆黒の乙女！マジカルハヤメ！」

最後に三人と同じ様に黒いドレスを身に纏う少女が名乗る。

「世界の悪は許さない！」

白いドレスの少女ナノネが叫ぶ。

それに合わせる様にして、次の台詞を四人が声を合わせて言い放つ。

「「「「私達！マジカルナースメイドプリンセス☆」」」」

四人のバックには、演出過多と思える程の花びらが大量に巻き上がる。

「くっ！やはり来たな！マジカルナースメイドプリンセス☆どもが

！！！」

四人の登場に動揺を隠せないでいる、世界の悪？と思われる大男。

この人物は唐突な登場に思われるかもしれないが、彼は最初から街で破壊活動を行っており、それを阻止する為にマジカルナースメイドプリンセス☆はやって来たのである。

「悪事もそこまでよ！ゴクアクーダ！！！」

マジカルナノネが街で暴れていた謎の大男、ゴクアクーダに言い放つ。

「ふん！しゃらくさいわー！！！」

ゴクアクーダはその言葉に対し怒りの咆哮を上げると、マジカルナースメイドプリンセス☆達に口から強力なビームを放ち攻撃する。

「「「「きゃあああ！！！」」」」

その攻撃に吹き飛ばされるマジカルナースメイドプリンセス☆。

「がはははははは！その程度か！マジカルナースメイドプリンセス☆」

勝利を確信したのか下品な笑いを高らかに上げるゴクアクーダ。

だがマジカルナースメイドプリンセス☆は誰一人として諦めない。

「私達を甘く見ないで！」

「そうよ！」

「どんな時でも希望を捨てたりしない！」

「それが私達マジカルナースメイドプリンセス☆なんだからね！」

四人は立ち上がり、先端に其々のドレスと同色の宝石がはめ込まれたバトンを取り出す。

「「「「集まれ！！！正義のマジカルパワー！！！！！」」」」

四人の叫びに呼応するかの様に、バトンに付けられた宝石が眩い光を放つ。

「「「「マジカル・リリカル・ハイパーキャノン！！！！！！！！」」」」

四人の言葉で、先程ゴクアクーダが放った以上の極太ビームがゴクアクーダに向けて発射された。

「ぎゃあああああああ！！！！！？」

その極太ビームにゴクアクーダは飲み込まれ断末魔を上げながら消滅する。

ちなみにその後ろにあった、ビルも全壊する。

「「「「正義は絶対勝つのです！！！」」」」

見事ゴクアクーダを倒したマジカルナースメイドプリンセス☆の四人は決め台詞とポーズを決めた。

「今日も最高に面白かったね！マナメプ☆！！！」

テレビから流れるエンディング曲を聴きながら、俺は少し興奮気味のなのはちゃんに、取り敢えず相槌を返しておく。

俺は現在高町宅でなのはちゃんとテレビを観ている。

最近は翠屋のバイト続きであまり一緒に居られなかったので、その埋め合わせもかねて、なのはちゃんの好きな番組を一緒に観賞していたのである。

マジカルナースメイドプリンセス☆とは、今日本全土で小さな女の子達と、一部の大きなお兄さん達に絶大なる支持を受けている、大人気アニメである。

ちなみになのはちゃんが言っていたマナメプ☆とは、マジカルナースメイドプリンセス☆ファンが名付けた略称だ。

なのはちゃんは現在このアニメの大ファンで、毎週欠かさずこの番組を観ている。

それだけではなく、アリサちゃんにすずかちゃん、そしてはやてちゃんまでもが、このアニメにご執心なのだ。

はやてちゃんは出会いこそあれだったが、すぐになのはちゃん達と仲良くなった。

今では三人とすっかり馴染んでおり、見事なムードメーカーの役割を担っている。

その分、はやてちゃんの悪戯による、俺の心的負担が増えたが、そこはあえて触れないで置こう。

考える事を放棄する様に、俺はマジカルナースメイドプリンセス☆のエンディングを映すテレビに視線を向ける。

丁度エンディングが終わりをむかえる所であり、普段はこの後次回予告をやってそのまま終わるのだが、今日は何時もと違い、マジカルナノネがアップで映ると、告知を始めたのだ。

【いつもテレビから応援してくれてる皆にお知らせがあるよ！】

「！！！！」

そのマジカルナノネの声を聞いたなのはちゃんの顔が、普段は見れ

ない程のレベルで真剣な表情になる。

よっぽど好きなようだ、マジカルナースメイドプリンセス☆・・・

【特別イベント！！！君も今日からマジカルナースメイドプリンセス☆を開催しちゃいます！！！】

謎のポーズを決めたマジカルナノネ。

俺もアニメは好きな方だが、如何にもこの番組のテンションには着いて行けない・・・

この告知の内容だが、一言で表すのなら、ファン主体のコスプレコンテストを開催するという事らしい。

ファン主体ではあるが、テレビや雑誌の取材もかなりの数が来るそうで、コンテストの優勝者には番組の収録現場を見学出来る権利が与えられると言っていた。

参加者は、完全な応募制で当選した人だけが、参加資格を得るんだそうだ。

【応募先はこちら・・・】

「純君！メモ！早くメモ！！！」

マジカルナノネが応募先を言い始めた事で焦るなのはちゃん。

俺は、バイト上何時も持ち歩く様になっていた、メモ帳とボールペンをなのはちゃんに渡してあげた。

何とか無事に応募先の住所を書き上げると、なのはちゃんは絶対に当選してナノネに会いに行くんだからと、気合いの入った雄叫びを上げて、大量のハガキを持ってきた。

何でも去年の年賀状を書くときに、多めに買った物が高町宅に、大量保管されていたらしい。

「さあ！書くよ純君！！！」

俺にハガキの束を手渡すなのはちゃん。

これは、あれですか？

俺に手伝えと、そういう事ですか、なのはちゃん？

「取り敢えずノルマは五十枚だよ！」

なのはちゃんはそれだけ言うと、マジカルナースメイドプリンセス☆のテーマソングを鼻歌で歌いながら、嬉々として、ハガキを書き始める。

一度暴走すると、中々止まらないのは、高町家の血筋なのだろうか？

この状態になったなのはちゃんを止める術は俺には無いので、俺もなのはちゃんの隣に座り黙って作業を開始した。

結局作業は夜通し続き、俺は高町さん家で夕飯をお呼ばれされる事と相成った。

「「「「はあ・・・」」」」

なのはちゃんの強制ハガキ書き事件から一週間後。

翠屋のテーブルの一つを囲んだ美少女四人組みが落胆の溜息を吐いていた。

なのはちゃん以外の三人もあの日、マジカルナースメイドプリンセス☆の告知を見ていたらしく、揃って大量のハガキで応募をしたんだそうだ。

その四人がこんなにも暗い雰囲気をかもし出しているのは、その告知の件が関係しているのだ。

全員が応募に落選したのである。

四人とも大量のハガキを送ったにも関わらず、誰一人として当選出来なかったのだ。

まあ、こういった応募は、枚数を多く出せば必ず当たると言う訳でも無いので、そういう事もあるのだろう。

今日も翠屋でバイトをしていた俺は、残念会を開催し淀んだ空気を醸し出している四人を不憫に思い、奢りでオレンジジュースを配った。

「「「「ズズズズズズ・・・はあ・・・」」」」

少しでも元気を出して欲しいと思いした事なのに、何故か更に残念な感じになってしまった・・・

今日はもう、そっとしておいた方が良いだろうと俺は考え、四人を放置して仕事に集中する事にした。

暫くウェイターに徹して、翠屋の店内のお客さんがほぼ常連さんだけになった頃、常連では無いが俺の知る顔のお客さんがやって来た。

「いらっしゃいませ・・・恵理さん！？」

「ヤッホー純君。久しぶりだね」

その人は今年の春頃、この翠屋を取材しに来た海鳴ジャーナルに勤める雑誌記者の風間恵理さんだった。

俺が仮面ライダーだって事を知っている数少ない人の一人だが、俺はこの人が如何にも苦手だったりする。

決して悪い人ではないのだが、何か裏があるんじゃ無いかとつい勘ぐってしまう。

「お久しぶりですね。恵理さん」

取り敢えず俺は無難に挨拶を返す。

「うん。改めて久しぶり。所で何でバイトしてるの？もしかして、またお小遣いカットでもされたのかしら」

恵理さんが不思議そうに聞いてきた。

「ははは。実はですね・・・」

俺は恵理さんに、俺が翠屋でバイトをする事になったまでの経緯を説明した。

「・・・という訳なんですよ」

俺の説明にうんうんと頷く恵理さん。

「なるほど。それは大変ね」

ちなみに美由希さんは未だに高町宅の自室で缶詰状態なのだが、恭也君は既に旅行から帰って来ているので、本来俺はそんなに頻繁にバイトに出る必要は無い筈なのだが、これには俺にとってあまり面白く無いエピソードがあったりする。

恭也君と美少女達との旅行で結局、恭也君のハートを射止め見事彼女の座を手にしたのは、すずかちゃんのお姉さんだった。

恭也君がモゲ無かった事を俺は非常に残念に思うが、それは今説明

している事に対しての核心ではない。

つまり恭也君はこの夏に、めでたく彼女持ちとなったのである。

ここで考えていただきたい。

夏休みに初めて彼女が出来た高校生・・・

余程の事情が無い限り、一秒でも多く一緒の時を過ごしたいと思うのは世の常である。

恭也君もその例に漏れず、健康的な思春期男子なのだ。

翠屋の手伝いを全くしないという事は無いが、結構な量を、結局俺が引き続き継続する事になってしまったのである。

リア充にイラッと来る部分はあるが、その気持ちが全く理解できないという事も無いので、俺は快く引き受けた。

まあ、そのうちはやてちゃんあたりを参謀に迎え入れて、皆でこのネタを元に恭也君を弄り倒すのは、決定事項だが・・・

「こんな所で長話してすいません。すぐに、お席にご案内しますね」

俺は接客モードに切り替えて、恵理さんをカウンター席に誘導する。

「取り敢えずブレンドコーヒーを一つお願いするわね」

席に着いた恵理さんが、俺に注文をする。

「かしこまりました。ブレンドコーヒーを、お一つですね」

注文を確認した俺は、士郎さんに注文を伝える。

程なくして完成したコーヒーを、俺は恵理さんのもとへと運ぶ。

「お待たせいたしました。こちらブレンドコーヒーになりますね」

ありがとうと言う恵理さんの前に、俺は運んできたコーヒーを置く。

「所で純君に話したい事があるんだけど、ちょっとだけ時間良いかしら？」

恵理さんが両手を合わせてお願いのポーズを取ってくる。

確かに今は常連さんしか翠屋に居ないので、少しくらいは大丈夫だと思うが、仕事中である以上俺の独断で決定する訳にも行かない。

俺は許可を求めるべく、士郎さんに視線を向ける。

俺の視線に気付いたのか、士郎さんはこちらを向くと笑顔で頷いた。

どうやらＯＫらしい。

「じゃあ、少しだけなら・・・」

雇い主である士郎さんから許可が出たので、俺は恵理さんの隣の席に腰を下ろす。

「それで話したい事なんだけど・・・その前に、あれは何があった

の？」

恵理さんは現在この翠屋で触れる事が、タブーとされているダークゾーンを指差した。

そのダークゾーンには、これでもかというほどに、暗い雰囲気を醸し出すなのはちゃん達が居た。

まあ、あの様子を目の当たりにして、気にするなと言うのも無理な話である。

俺は苦笑いを浮かべながら、恵理さんに事の経緯を説明した。

「・・・という訳でして、今日は皆して、ずっとあんな状態なんですよ」

俺の説明を聞き終えた恵理さん、はなるほどと頷いた後に、不適な笑みを浮かべた。

「ふふふ。これは好都合かもね」

その顔と言動はまるで悪の女幹部の様だ。

「えっと・・・どういう意味ですか？」

嫌な予感しかしないが、無視する分けにもいかないので、俺は仕方なく恵理さんにどういう事なのか、説明を求める。

「実はね、私が純君に話したいと思っていた事に、そのマジカルナースメイドプリンセス☆の特別イベントが関係してるのよ」

「そうなんですか？」

「ええ。そのイベントに私の会社も取材に行く事になったんだけどね。うちの社長がそのイベントの最高責任者と昔から仲が良くて、一般の応募枠とは別にテレビ映えしそうな参加者を何人か見繕ってくれないかって頼まれたのよ」

恵理さんはやれやれといった感じで、コーヒーに一口飲むと改めて話を続ける。

「それで回りまわって私が参加者を連れてくる事になっちゃったんだけどね。子供番組の事は私は良く分からないから、子供の知り合いで一番話を理解出来そうな純君に相談しようと思って来たんだけど・・・」

恵理さんの言葉は最後まで言う事無く途中で黙ってしまった。

その顔を見ると、何やら凄く驚いた様な表情をしている。

俺の後ろに何かあるのかと思い俺は振り向いてみる。

「如何したんですか恵理さん？後ろに何かあ・・・」

俺も恵理さん同様に振り返った瞬間、固まる事となった。

あのような光景を見れば、俺や恵理さんの様になるのは致し方無いだろう。

先程までテーブルの隅で、暗い雰囲気を醸し出していた筈の四人組

みが、いつの間にか俺の後ろにやって来ており、恵理さんを何かの期待を秘めた輝く瞳で、見つめていたのである。

「ど、如何したのかしら皆？」

いち早く復活した恵理さんが辛うじてそう質問を返した。

その言葉に四人は、気合いの入った声を出して答える。

「「「「その話詳しくお願いします！！！！」」」」

その声は周りの空気を震わせる程に思えた。

「・・・はい」

この気迫の中で、返事を返す事が出来た恵理さんを、俺は素直に心から尊敬した。

「・・・良かったですね。恵理さん」

「・・・ええ、そうね」

恵理さんが探していたイベントの特別参加枠は、見事なのはちゃん達に決定した。

なのはちゃん達四人は恵理さんに口々にお礼を言うと、早速準備をしなくてはと、息巻いて翠屋を飛び出していった。

それにしても、なのはちゃん達がマジカルナースメイドプリンセス☆にかける情熱は、物凄いものを感じる。

四人に囲まれた恵理さんは精神的に燃え尽きたのか、俺に先程の返事を返した後は、カウンター席で項垂れていた。

恵理さんの口振からするに、最初からなのはちゃん達に頼むとは思っていたが、分かっていてこの様な状態にされる事から、その情熱の凄さと恐ろしさが垣間見える。

「・・・お水。お持ちしますね」

俺は燃え尽きて白い灰となっている、恵理さんを労わる様に話しかけた。

「・・・お願いするわ」

「かしこまりました」

早く潤さないと本当に灰になりそうなテンションをしていたので、俺は急ぎコップに水を汲み、恵理さんに与えることにした。

「ふう・・・助かったわ。純君」

水を飲んで潤いを取り戻した恵理さんは、完全とは言い難いが、何とか普通に会話が出来る程度までには回復した様である。

これならば続きを話しても大丈夫そうだ。

「それで、本題は何なんですか？恵理さん」

俺は恵理さんに質問してみる。

「あら、何の事かしら？」

俺の質問に、分からないという素振りを見せる恵理さんだが、悪戯に成功して喜んでいる子供の様なその表情をしている事から、それが嘘だという事は容易に想像できる。

「誤魔化さなくて良いんで、話があるんなら聞くだけ聞いてあげますよ」

この人が子供番組のイベントで相談しに来るというのは、如何にも怪しいと俺は思っていたのだが、先程の恵理さんの反応で、俺の中の疑惑は確信へと変わっていた。

暫く俺と恵理さんの無言の対峙が続いたが、恵理さんの一言でその沈黙は終わりを告げる。

「ふふふ。お姉さん、賢い子は好きよ」

先程のなのはちゃん達とのやり取りさえなければ、ミステリアスな感じになっていたのかもしれないが、今となっては、そのリアクションは如何したものかと思ってしまった。

俺の哀れさを同情する視線に気付いたのか、恵理さんは恥ずかしさの為か、頬を赤く染めて照れ始めた。

「い、一度、こういうやり取りをしてみたかったのよ！良いじゃない少しくらい乗ってくれたって・・・」

歳の割に可愛い事を言う恵理さん。

本来俺の中身の年齢は今の恵理さんと同じぐらいなせいか、妙に愛らしく見えてしまった。

まあ、傍から見たら、下手すれば親子程歳が離れている訳だけどね。

恥かしがる恵理さんに何やら癒されるが、俺はSでは無いので、そろそろ話しを進める事にした。

「ふざけるのはこれ位にして、本題を話しましょうよ」

「そ、そうね」

俺の助け舟に恵理さんも乗ることにした様で、一度大きく咳払いをしてから、その本題の話を始めた。

「さっき話していたイベントの話なんだけどね。あれも嘘じゃないんだけど、それとは別にもう一つ私は頼まれた事があるの」

「何なんですかそれは？」

「実はイベントの開催告知があった翌日に、イベント企画部宛てに脅迫文が届いたのよ」

「脅迫文？」

「ええ、最初は子供番組のイベントでって事で、タダの悪戯だろうと企画部の人たちは、その脅迫文を無視していたのよ。でもね・・・」

「何か無視できない出来事が起こったって事ですか？」

俺の予測に恵理さんは静かに頷くと続きを話す。

「そうなのよ。それから連日イベントの関係者が人間と同じぐらいの大きさの化け物に脅されたって証言が相次いでね。その脅しの内容が脅迫文に書かれている事を実行しろというものだったそうよ」

何となく話の流れから、恵理さんが俺にこの話をして来たのか、見当が着いてきた・・・

「その脅迫文の内容って何なんですか？」

俺の質問を聞いた恵理さんは俺に一枚の用紙を差し出してきた。

「これは？」

「企画部の人に頼んで脅迫文のコピーを貰ってきたのよ。それと同じものがイベント企画部に届いて、化け物がその内容を実行しろと

関係者に脅しをかけてるの」

俺は恵理さんから用紙を受け取り、何が書かれているのかを、自らの目で確認してみる事にした。

【企画部へ告ぐ！！！

拙者はマジカルナースメイドプリンセス☆を心から愛する一ファンである。

今すぐ今回のイベントを中止成されよ！

崇高なるマジカルナースメイドプリンセス☆を愚かな現実世界で汚す事は拙者が許さん！！！

これは警告である！

もしもこの要求が通らず、イベントが開催されるのであれば、不本意であるものの此方も実力行使を省みない事をここに宣言する！！！

マジカルナースメイドプリンセス☆を愛する一ファンより】

「・・・」

「どう思う？」

恵理さんが紙に書かれた内容を全て読み終えた俺に質問する。

どうもこうもこれは・・・

「何から言えば良いのか迷うんですが・・・取り敢えず、この文がとても痛い文章だという事だけは理解しました」

こんな文書が送られてきたら、真面目に仕事している人は誰だって無視するのは当たり前だ。

「そんな文書で、直接脅しをかけてくるのも化け物だって話だから、警察も捜査してくれないのよ。だからせめて証拠さえあれば、警察も動いてくれるんじゃないかって事で、私が調べる事になったって訳なのよね」

「それでこの話を俺にしてきたのはやっぱり・・・」

恵理さんは何処か含みのある笑みを浮かべた。

「相手が化け物なら、専門家に頼むのが筋だと思わない？仮面ライダー君」

俺は苦笑いを浮かべながら、やっぱりこの人は苦手だと心底思った。

# 第九話　マジカル・コスプレ・コンテスト？【前編】（後書き）

何でもメカ犬相談室【第三回】

『ついに今回の前編では全く出番が無く終わってしまったワタシだが、代わりにここで確りと、目立たせて貰うぞ』

『このコーナーは早くも三回目を向かえた訳だが今回は二つの質問を読ませてもらうぞ』

『それでは一つ目の質問はなっぺ殿からだ』

○最近、用事が立て込んで小説の更新が難しくなっています。どうしたらいいでしょうか？

『うむ。なっぺ殿の用事がどういった種類の物かは、ワタシには分からないが、スケジュール管理をし直してみるのはどうだろうか？』

『小説を書くのは、多くの時間と精神力を必要とするのは、書く事を経験した者ならば誰もが理解できる事だ』

『何かをする為の時間とは、出来る物では無く、作る物だとワタシは考えているぞ』

『この答えが役に立ってくれたら嬉しいと思う』

『陰ながら、応援させてもらうぞ！なっぺ殿』

『それでは次の質問に行くぞ。今度の質問はクレイ　殿からだ』

○ガンバライドではライダー同士の相性がありますがもしシードが登場するなら他のライダーとの相性はどんなものでしょうか

『うむ。ガンバライドに参戦出来たのならば、ライダー冥利に尽きるな』

『詳しく話すと後書きの文字制限を越えてしまうので、個人的に相性良いと思われるライダーを代表で一人だけ紹介させてもらおう』

『それはズバリ仮面ライダーWだ』

『マスターの性格と戦い方から考えると、現時点で一番上手く共闘できそうなのは、二人で一人の仮面ライダーな彼だとワタシは思うぞ』

『む！そろそろ終わりの時間の様だな』

『それではまた次回でお会いしよう』

「段々こなれてきたな・・・メカ犬の奴」

色々なご質問をお待ちしております。

## 第九話　マジカル・コスプレ・コンテスト？【後編】（前書き）

少し早めに出来たので、後編を投稿致します。

次の投稿は来週になります。

それとあくまで未定ですが、次回は番外編になるかもしれません。

念のためにもう一度、予定は未定です。

それでは楽しんでいただければ幸いです。

追記ですが今回のホルダーの断末魔に、なっぺさんの案を採用させていただきました。

# 第九話　マジカル・コスプレ・コンテスト？【後編】

『凄まじい熱気だな。マスター』

俺のお気に入りのショルダーバッグから、頭だけを覗かせたメカ犬が、周りを見回しつつ、俺に言ってきた。

「ああ、そうだな」

俺もメカ犬と同じ事を思い、同意の返事を返す。

今俺は、マジカルナースメイドプリンセス☆の、イベント会場に来ている。

今日はイベント当日日であり、俺が何故こんな場所に来ているのかというと、翠屋にやって来た恵理さんと話た内容が大きく関わっているのである。

「第一化け物が出たって言ってもそれがホルダーとは限らないんだよな・・・」

あの脅迫文の内容を知った後では、どうにも今回の脅迫騒ぎがホルダーの仕業とは、今一考え辛い。

『うむ。確かにそうかも知れないが、可能性が捨てきれない以上、このまま放って置く訳にもいくまい』

翠屋で恵理さんと話した後、家に帰りメカ犬と相談した結果、胡散臭い事この上ないのだが、俺達はその化け物の正体を探る為、イベ

ントに参加するなのはちゃん達と共に、イベント会場にやって来た訳である。

ちなみにイベント会場は、海鳴市からさほど離れていないとはいえ、子供だけで来れる場所でも無いので、恵理さんに保護者兼任という事で、連れて来て貰った。

恵理さんも最初から、そのつもりだった様で、車椅子のはやてちゃんの事も考慮してか、ワゴンタイプのレンタカーで迎えに来てくれた。

話を持ってきたのは元々恵理さんなのだが、色々と気を使わせてしまい申し訳ないと言うと、これらも含めて、全て会社の経費で落ちるから大丈夫だと言われた。

そんな経緯もあって会場に来た訳だが、俺は今メカ犬と共に単独行動をしている。

連れて来てくれた恵理さんは取材の準備もあるので、別行動だし、なのはちゃん達コンテストの参加者は今頃、会場に設けられている参加者用の控え室で着替え中だろう。

まあ、俺が今回ここに来た目的を考えれば好都合なので、会場内に怪しい奴が居ないか探りを入れているのである。

準備が出来てから、一度控え室に様子を見に行く事をなのはちゃん達と約束してはいるが、その時間にもまだ暫く時間がある。

しかし、人が多い事この上ない。

参加者は応募制であるものの、イベントの観覧自体は自由参加なのだ。

参加者の家族に、純粋なマジカルナースメイドプリンセス☆のファン、挙句の果てには、大きなお兄さんの集団が背中にマジカルナノネのイラストがプリントされた桃色ハッピを羽織り、応援歌と思われる謎の歌を合唱をしている等メインイベントが始まる前から、かなりの熱気を放っている。

「この大量の人の中から怪しい奴を見つけろって・・・」

はっきり言って無理である。

それに、そんな事を言えば、物凄い偏見ではあるが、桃色ハッピのお兄さん達なんぞ怪しさの塊以外の何者でもない。

しかしこのお兄さん達のテンションは、何処か俺の前世の友人を彷彿とさせる。

前世でのある日、今夜は一緒に鍋でもやるかと言う話になり、材料を買いにスーパーで買い物をした時に、長ネギを持った友人が謎の踊りを踊りだし、みっくみくとか言い出したあのテンションに似ている気がするのだ。

俺が彼らを見ながら何となく前世の頃を思い出していると、そのピンクの集団の中で謎の歌とは別の声が聞えてきた。

「もう一度言ってみろ軍曹!!!」

それは怒鳴り声であった。

気になった俺はピンクな人の壁を掻き分け、声のした方向に向かう。
そこには、やはり桃色ハッピを着込んだお兄さんが二人居た。
片方は尻餅を着いており、もう一人はその尻餅を着いたお兄さんを睨みつけている。

「もう一度言ってみろと言っているんだ軍曹！！！」

睨みつけているお兄さんが尻餅を着いている方のお兄さんに再度怒鳴りつける。
尻餅を着いているお兄さんが、萎縮しながらも立ち上がり喋り始める。

「は、はい。先程可愛い四人組みの女の子が、参加者用控え室に入って行くのを見たんで、今日のイベントは楽しみだなと言ったであります隊長殿！！！」

軍曹と呼ばれていたお兄さんは最後に直立で敬礼する。

「バッカヤロウがあああ！！！！」

軍曹に隊長と呼ばれたお兄さんは、怒りの雄叫びを上げながら、右拳を軍曹の右の頬に叩き込んだ。

「ぶげっ」

まともに隊長の一撃を喰らった軍曹は再び尻餅を着く。

「軍曹！！！拙者達は何だ！？」

「はい！僕達はマジカルナースメイドプリンセス☆ファンです！」

「声が小さい！！！拙者達は何だ！？」

「マジカルナースメイドプリンセス☆ファンです！！！」

「そうだ！！！その拙者達が現実世界の人間に萌えるのか！？」

「いいえ！！！僕達の至高の萌えは画面の先にあるのであります！！！」

「その通りだ！！！」

叫んだ隊長は、今度は桃色の集団に対し演説を始めた。

「お前達も良く聞け！！！拙者達が今日ここに来たのは、コスプレを見て萌える事等では断じて無い！！！」

拳を握り締め、隊長は尚も熱く語り始める。

「拙者達の目的は、そんな邪まなものでは無く、純粋にマジカルナースメイドプリンセス☆ファンとしてこのイベントを盛り上げる事である！！！その崇高なる目的を決して忘れるな！！！」

隊長の言葉に桃色集団から、凄まじいまでの歓声が巻き起こる。

そして、またしても謎の歌が再開される。

『・・・凄い熱気だな。マスター』

「・・・ああ、本当にな」

何で女の子向けアニメから、この様な嫌な方向に突っ走った軍隊紛いの集団が生まれたのか、理解に苦しむ所ではあるが、何かを好きになり夢中になるという気持ち事態は俺だって分かる。

俺にとっての仮面ライダーが、彼らにとってはマジカルナースメイドプリンセス☆だったという事なのだろう。

『む！マスター。そろそろなのは嬢達と待ち合わせした時間になるぞ』

「そうか、それじゃあ控え室に行ってみるか」

俺は桃色集団に背を向けて控え室を目指して歩き始めた。

それにしても、あの隊長って言われていた人の喋り方、何処かで聞いた事がある様な気がするんだよな？

一旦立ち止まった俺は、脳内検索をしてみるものの、あの様な個性的な喋り方をした別の人間は、思い出す事は出来なかった。

「まあ、気のせいか」

特に思い出せない事から、別に気にしなくても構わないだろうと、俺は結論を出して、なのはちゃん達の待つ控え室に再び歩き出した。

会場のステージは屋外に設置されているので、参加者用の控え室は仮組みされたテントが使用されていた。

万が一着替え中だとしたら不味いので、俺はなのはちゃん達が居る筈のテント前に辿り着くと、入る許可を取る為に声を出して、来た事をなのはちゃん達に伝えた。

「あ、純君!?皆準備出来てるから入って大丈夫だよ!」

なのはちゃんの返事が返ってきた事で、俺は遠慮無くテントの入り口を潜った。

俺の目の前にはかなりの完成度を誇る、四人のマジカルナースメイドプリンセス☆が居た。

「どうかな純君?」

マジカルナノネの衣装を着たなのはちゃんが感想を求めてくる。

「うん。皆まるで本物みたいでビックリしたよ」

俺の感想に、赤いドレスを着たアリサちゃんが、胸を張りながら答える。

「ふふん。そうでしょ！作るのに苦労したんだから」

アリサちゃんの衣装はマジカルアリスの様だ。

「皆で桃子さんに、お裁縫を習って作ったんだよね」

青いドレスを着たすずかちゃんが、アリサちゃんの言葉を補足する様に言う。

すずかちゃんはマジカルスズノみたいだ。

「私は初めから純君がこの姿を見て、メロメロになってまうのはわかってたんやで！」

最後に黒いドレスの、はやてちゃんが締めた。

見た目はまさに、マジカルハヤメだった。

というか、似合うとは言ったし、素直に可愛いとは思うけど、別にメロメロになんぞなって無いぞ俺は？

俺ははやてちゃんのギャグを軽く流し、皆にエールを送ってから、客席から見ていると言ってテントを出た。

テントを出た後、改めて、なのはちゃん達のコスプレを思い出す。

まあ、冗談抜きで皆凄く似合っていたので、もしかしたら四人の内誰かが優勝というのは、本気であるかも知れない。

「あ～やっぱりこっちに居たのね。純君」

突如俺の名を呼ぶ声がしたので、振り向いて見ると、恵理さんが手を振りながら此方にやって来た。

「あ、恵理さん。もう準備は良いんですか？」

俺の前にやって来た恵理さんは、まあねと言って爽やかな笑顔で答える。

「所でそっちの方は如何なの？何か分かったかしら？」

『いや、残念ながら今の所収穫は零だな』

恵理さんの問いにメカ犬が答える。

「そっか・・・」

メカ犬の答えに落胆の表情を見せた恵理さんだったが、すぐに表情を引き締めて、俺に一枚の紙を差し出してきた。

「これは？」

「ついさっき、会場の設営所に届いた新たな脅迫文よ。文面から、以前送ってきた人物と同一人物だと思うわ」

俺は恵理さんから紙を受け取り、その新たな脅迫文の内容を確認してみる。

【このイベントの関係者諸君へ

度重なる拙者の要求を呑む事無く、この様な愚行に至った事を、拙者は悲しく思う。

其方が考えを変えないというのであれば、此方も実力行使をさせてもらう。

このままイベントを続けるのであれば、この会場全てを破壊する。

今からでも間に合う。

この様なマジカルナースメイドプリンセス☆を汚す蛮行を取りやめるのだ。

これは最後の警告である！！！

諸君らが正しき判断を下す事を期待する。

マジカルナースメイドプリンセス☆一ファンより】

「・・・」

『何やら書かれている事が過激になっているなマスター』

「そうなのよ。これが本当に悪戯なら良いんだけど、本気だったと

したら洒落で済む話じゃ無くなって来るわ」

この内容の書き方・・・

俺は少し前に考えていた事を思い出す。

「恵理さん、メカ犬・・・俺この脅迫文を送ってきた犯人が誰か分かったかも知れない」

俺の発言に、メカ犬と恵理さんが驚きの声を上げる。

『本当かマスター！？』

「一体誰なの純君！？」

俺は二人に一旦落ち着く様に宥めてから話を再開する。

「確証は全く無いんですが、一人だけ心当たりがあるんです」

俺は二人にその人物の事と、どうして俺がその人を犯人だと思ったのかの、説明を始めた。

会場から少し離れた備品置き場で、一人の人物が、憤慨していた。

「あれだけ言っても中止にしないとはな。かくなる上は・・・」

『其処までだ』

備品置き場に、憤慨していた人物以外の声が木霊する。

「だ、誰だ!?」

声に反応した人物は、その声の主を探し周りを見渡し始める。

「俺の推理が当たったって事で良いのかなこれは・・・」

「子供に犬のオモチャ？」

先程声を出したのはメカ犬だ。

そして俺とメカ犬の突然の登場に驚く、脅迫文を送ってきた犯人と思われる人物に、俺は話しかける。

「さっきの発言からすると、あなたが脅迫文を送ってきた犯人という事で、間違い無いですよね・・・隊長さん」

マジカルナノネのイラストがプリントされた桃色ハッピを羽織った、お兄さんで隊長と呼ばれていた人に俺は視線を向ける。

最初に隊長さんを見た時から、何処かで聞いた事があると思っていても、思い出す事が出来なかったのは、それが文章だったからだ。

それに軍曹さんが現実の女の子を可愛いと言っていた事に激怒していた事から、脅迫文を書いた人物とかなり近い性格に思えたのだ。

だが一番の理由は・・・何というかこの人ならやらかしても不思議じゃ無さそうだったからだ。

もはや推理でも何でも無いが、大事なのは犯人を突き止める事だ。

推理小説みたいに、まさかあの人が犯人だったのか！何て展開は別に望んでないし、現実では大体多くの人がこの人が怪しいと思う場合は、証拠さえ見つけられれば、即逮捕である。

「何を言っているのか良く分からないな？遊びたいなら、他の人に頼んでくれないか。拙者は今忙しいのだ」

俺を子供だと思い適当にはぐらかそうとする隊長さん。

「あら、そんな冷たい事言わなくても良いんじゃない」

「！？」

俺とメカ犬が出てきた反対側から、ある物を手に持った恵理さんが姿を見せる。

「さっきのあなたの独り言。確りと録音させてもらったわよ」

恵理さんの手に持っている物はボイスレコーダーだ。

確かに子供の俺が、このまま警察に駆け込んで事の真相を話しても、相手になんかされないだろう。

だけど、大人の恵理さんが証拠を持って警察に行けば話しは別である。

俺達は、隊長さんにターゲットを絞り尾行を続けた訳だが、どうやら上手く行ったみたいだ。

しかし問題はここからだ。

この人が普通の人ならこの一件はこれで解決出来るのだが、そうで無いとしたら・・・

「拙者ははめられていたという訳か・・・」

もはや取り繕う必要が無いと悟ったのか、隊長さんは舌打ちをして、懐から緑の球体を取り出した。

どうやらこの事件を解決するには、もう一頑張りしなければいけないらしい。

隊長さんが球体を握り込むと、緑の光に包まれその姿を劇的に変化させる。

光が飛散し現れたその姿は全身が黄色で背中に大きな甲羅を背負った、一言で例えるならば人間サイズの亀の様だった。

『化け物の正体はやはりホルダーだったのだな！』

隊長さんの変貌を見たメカ犬がそんな感想を言う。

「みたいだな。危ないんで下がっていてください恵理さん！」

メカ犬に答えながら俺は、のんきにホルダーをカメラで激写している恵理さんに下がる様に指示を出す。

「頼むわよ。仮面ライダー君」

そう言って下がりながらも、写真を撮り続ける恵理さんの根性にあきれを通り越して、俺は感動すらし始めてしまった。

気を取り直して俺はホルダーに対峙する。

「行くぞメカ犬！」

『うむ！』

俺はタッチノートを取り出し、ボタンを押す。

『バックルモード』

タッチノートから流れる音声と共に、メカ犬が銀色のベルトに変形し俺の腹部に巻かれる。

「変身」

音声キーワードを入力し、バックルの中央部にタッチノートを差し込む。

『アッププロード』

白銀の光が俺の全身を包みこみ、その姿をメタルブラックのボディを持つ一人の戦士、仮面ライダーシードへと変える。

「きゃあ～カッコイイ！」

恵理さんが今度は俺を写真に撮り始める。

緊張感が削がれるんで、せめて黙っていて欲しい。

「こんな子供が仮面ライダーだったとは・・・」

一方のホルダーは俺の変身にかなり驚いている様だ。

「このイベントは皆が楽しみにしているんだ。あんたの独りよがりな拘りで、潰して良いものじゃない！」

俺はホルダーに言い放つ。

「ふん。子供だからと言って手加減はしないぞ！」

ホルダーは俺に向かい吼えると、亀にしては早いと言える動きで襲い掛かる。

だがそれでも、ホルダーとしては遅い部類に入る素早さなので俺はその攻撃を難なく避ける。

「今度はこっちから行くぞ」

俺はホルダーの拳を掻い潜り、逆に此方の拳を叩き込む。

「いてっ！？」

見事叩き込んだのだが、逆に攻撃した此方がダメージを受けてしまった。

『どうやら奴の能力は、その身体の防御力そのものの様だ』

メカ犬が冷静にホルダーの分析をする。

それにしても手が痛い・・・

『マスター。奴は防御力は高いが機動力は余り無いようだ。動きを封じて一気に攻めるぞ』

「動きを封じるか・・・」

俺はホルダーを観察する。

・・・あ！

一つ思いついた。

「分かった。何とかやってみる！」

俺はホルダーに駆け寄る。

「ふん。拙者に並の攻撃は効かんぞ！」

ホルダーの攻撃を紙一重で捌いた俺は、重心を下に下ろし、ホルダーの膝を折る様に蹴りを喰らわせる。

案の定ホルダーは背中からバランスを崩して倒れこむ。

「バランスを崩したからと言って如何したと言うのだ。ダメージを与えられなければ、意味があるまい！」

確かにそうだが、その台詞は、きちんと現状を把握してから言って貰いたい。

倒れながらも勝ち誇った台詞を吐いたホルダーは、立ち上がろうとするが、背中の甲羅が邪魔をして立ち上がれず、もがきだす。

「な！？まさかこれを狙って！」

まあ、見た目からしてそうなるとは思っていたのだが、実際に見ると結構シュールな光景である。

『今がチャンスだマスター』

「ああ！」

俺はメカ犬の言葉に答え、バックルからタッチノートを取り出し、全体図を表示させ右足部分をタッチした後に、もう一度バックルに差し込んだ。

『ポイントチャージ』

ベルトから白い光が発生し右足へと集約される。

「はっ！」

空高くジャンプした俺は、輝く右足を倒れてもがき続けるホルダーに向ける。

「ライダーキック」

俺の凄まじい勢いの蹴りが、ホルダーに向けて放たれる。

このままこの技が決まれば、それで終わりだったのだが、突如ホルダーの動きが変わった。

「拙者はこのまま終わる訳にはいかんのだ！！！」

ホルダーが気合いを入れて、両腕を地面に叩きつける事で、その推進力を利用して、あの体制から起き上がってきたのである。

そしてホルダーは、自身の背中に背負う甲羅を、俺の方に向けてきたのだ。

俺のライダーキックとホルダーの強固な甲羅がぶつかり火花を散らす。

「くっ！」

ホルダーを吹き飛ばす事は出来たものの、その防御を完全に突破する事は出来ず、俺も衝撃の余波で、後方に吹き飛ばされる。

『大丈夫かマスター？』

「・・・ああ、何とかな」

メカ犬の声に返事を返しながら俺は何とかその場で立ち上がる。

「大変よ純君！」

恵理さんが慌てた素振りを見せながら此方に近づいてくる。

「如何したんですか恵理さん？」

「さっき純君に吹き飛ばされた奴なんだけれど、あの方向には、イベントが行われるステージがあるのよ！」

「何だって！？」

俺の驚愕する声とほぼ同時に、ホルダーが吹き飛んだ方向から、悲鳴が聞えてきた。

『不味い！急ぐぞマスター！！！』

「ああ！！！」

こんな時はあの人の出番だ。

俺はバックルからタッチノートを取り出して、あの人を呼ぶためのボタンを三回連続で押した。

『ホバーチェイサー』

すぐに上空からエンジン音が聞えてきた。

『お待たせ～マスター』

空の上から、オッサンボイスな乙女口調の声が聞える。

やって来たのは、最近空も飛べる事が判明した、新宿二丁目系ライダーバイクのチェイサーさんだ。

「ステージに居るホルダーの所まで頼むよ！チェイサーさん！」

『任せといて～ん』

俺はチェイサーさんの了承を得ると、すぐにチェイサーさんのシートの上に飛び乗り、足を乗せた。

ちなみにこの光景を間近で見ていた恵理さんは、凄いわ！と連呼しながら写真を撮り捲っている。

『さあ！いっくわよ！』

俺が乗った事を確認したチェイサーさんが、一気にステージ目掛けて空を飛ぶ。

ステージは先程の場所から殆ど離れていないので俺はすぐにホルダーの姿を視界に捉えた。

『突っ込むわよ～』

チェイサーさんが上空から、ホルダーに向けて、スカイタックルを試みる。

ホルダーも、上空から突っ込んでくるチェイサーさんに、気付いた様ではあるが、あの機動力では、まず避ける事は無理だろう。

巻き添えは御免なので、俺は早々にチェイサーさんから飛び降りて、ステージ近くに着地する。

それとほぼ同時に、チェイサーさんのスカイタックルも、見事ホルダーに命中する。

「むげっ！」

防御力には自身のあるホルダーにも流石にチェイサーさんの一撃は効いた様で、車に潰されたカエルみたいな声を上げて、吹き飛ぶ。

取り敢えず、駆けつけてはみたものの、問題はこれから如何するかだ。

どうやら今のままでは、俺の攻撃は殆ど効きそうに無い。

「やっぱりあれで行くしか無いか？」

俺の呟いた言葉に、メカ犬が反応する。

「いけるかマスター？あれは本来マスターが得意とする戦い方とは真逆とも言えるが・・・」

「・・・まあ、何とかやってみるさ！」

俺は自分に言い聞かせる様に言ってから、バックルの右側をスライドさせ、赤いボタンを押した。

『パワーフォルム』

ベルトを中心に光が俺の全身を包みこむ。

そして飛散すると、先程までメタルブラックだった俺のボディカラーは、クリムゾンレッドに変化していた。

「・・・色が赤くなった?」

チェイサーさんのタックルのダメージが抜けてきたのか、立ち上がり、俺の姿を見たホルダーが呟いた。

俺はホルダーの方に身体を向け、歩き出す。

「く、くそう!!!」

俺の更なる変化に、恐怖を覚えたのかホルダーは、叫びながら俺に攻撃を仕掛けてくる。

ホルダーの拳が迫り来る。

だが俺はその拳を避けもせず、防御すらせずに、その身に甘んじて受けた。

「・・・くっ!?」

異変が起きたのは、攻撃を受けた俺ではなく、見事拳を命中させた筈のホルダーだった。

ホルダーは拳を放った状態のまま動けずにいる。

今の状況を簡潔に説明するのであれば、ホルダーの攻撃は俺に一切効いていなかったと、そういう訳である。

このパワーフォルム。

その名の通り、俺の戦闘能力を最大限にまで高めてくれる、近接戦闘では、最強の強さを誇るフォルムなのである。

ただし他の能力、特に機動能力は、全フォルム中最下位に位置するので使い所が、難しいのだ。

俺はホルダーの拳を左手で掴み、空いている右腕で、何度も腹部を殴りつける。

更に左手を離し、ホルダーを蹴りで吹き飛ばした後、俺は再びバックルの右側に手を置き、今度は黄色のボタンを押した。

『パワーブレード』

発生する光を掴み生まれるのは、赤い刀身の両手剣である。

柄の部分は銀色で、他の武器同様に溝が設けられている。

ホルダーの方を見やると、既に立つのもやっとの様だ。

『行くぞマスター！』

『ああ！』

俺はメカ犬の声に短く返事を返し、バックルからタッチノートを抜き出し、パワーブレードの溝にスライドさせる。

『ロード』

音声が流れてから、タッチノートをもう一度バックルに差し込んだ。

『アタックチャージ』

ベルトからは白い光が発生して右腕のラインを通して、パワーブレードの刀身に集約される。

「こいつで決めるぜ」

俺は刀身が輝くパワーブレードを頭上に掲げる。

「パワーブレード」

俺は掲げたパワーブレードを一気に振り下ろした。

「ブレイクインパクト」

振り下ろした事で直線上に発生した強力な衝撃波が、ホルダーを捕らえ、その強固な甲羅を粉砕し爆発を巻き起こした。

爆心地には、桃色ハッピを羽織った隊長さんが、何やら足を痙攣さ

せながら気絶していた。

他のフォルムより威力が高すぎた所為で、ダメージ過多になってしまったんだろうか？

まあ、何はともあれ、これでゆっくりとイベント観賞が出来るというものである。

「「「「「・・・はあ・・・」」」」」

マジカルナースメイドプリンセス☆のイベントが開催された翌日の翠屋にて、またしてもテーブルの一角が美少女四人組みの手により、ダークゾーンと化していた。

結局あのイベントでは、四人のうち誰も優勝する事は出来なかったのである。

いや、正確に言うのであれば最初から、四人は出場枠そのものに入

っていなかったのである。

今回恵理さんがなのはちゃん達に与えたのは、一般枠ではなく、宣伝効果を重視した・・・まあ、ぶっちゃけて言えば見世物小屋の動物扱いだったのである。

つまり、最初から見せる事が目的であり、利益は発生しないのである。

本来この役目は、新人アイドルが勤める筈だったそうなのだが、急遽アイドルの子達が脅迫文の事でドタキャンしたとかで、成り手が見つからなかったのだと、恵理さんがイベント後にネタ晴らしをしていた。

口では知らなかったと言ってはいたが、あの人の場合、絶対に確信犯だと俺は思う。

そんな訳でなのはちゃん達は、何の見返りも無くただコスプレを一般大衆の前で晒すだけで終えたという事だ。

会場の盛り上がりは、四人が出ている時が、最高な感じだったので、余計に残念に思う。

俺としても、もはや何と声を掛けて良いのか、言葉が見つからないので、ただそっと見守っている事にしている。

ただ、今日もここにバイトに来ている者の意見としては、営業妨害になっているので、なるべく他の所で落ち込んで頂きたい。

そして何気に俺のタダ券を使い、やけ食いを始めようとしているの

は、もはや無意識の行動なのだろうか？

俺はここで働く意味を本気で考えなくてはいけない岐路に立たされているのかもしれない。

今のなのはちゃん達を見ていると、暗い気持ちが伝染しそうなので、仕事に打ち込んでいた所、この空気の原因を作り出した諸悪の根源がやって来た。

「いらっしゃいませ・・・恵理さん今度はどんな厄介事ですか？」

俺は翠屋にやって来た恵理さんをジト目で睨みつける。

「あら、失礼しちゃうわ。今回は流石に私も、悪い事しちゃったかな～と思ってお詫びの品を持ってきたんだから！」

「お詫びの品ですか？」

恵理さんはそう言うと、四枚のサイン色紙を俺に手渡してきた。

「何ですかこれ？」

「まあ、兎に角一度それを良く見てよ。手に入れるのに苦労したんだから」

恵理さんの言うとおり、サイン色紙に目を通すと其処には・・・

「「「「マジカルナースメイドプリンセス☆の直執サインだああ！！！！」」」」

いつの間にか俺の背後に回ってきていた四人が同時に叫ぶと、俺の手から次々に色紙を奪い去って行った。

「喜んでもらえた様で良かったわ」

「・・・そうですね」

今日の海鳴は、好きな事に一生懸命になれば、夢が叶うかもしれない程に平和である。

# 第九話　マジカル・コスプレ・コンテスト？【後編】（後書き）

何でもメカ犬相談室【第四回】

『やあ、読者諸君』

『今回の本編は楽しんでいただけただろうか？』

『やはり本編でのワタシの活躍は素晴らしいの一言に尽きるな！』

『さて、それでは早速今回の質問に行くぞ』

『今日の質問は神崎殿からだ』

『神崎殿は早くもこのコーナーの常連だな！』

〇ディケイドの登場予定はありますか？
ないとしたら、いえ！　あったとしても是非！！　いずれ、僕の作品とのコラボを申し込みたいっ！！

……すみません、少し興奮してました。

検討してはいただけないでしょうか？

『うむ。質問と言うよりもこれは、出演依頼と捉えた方が良いのかも知れないな』

『この質問への答えだが、作者から伝言を預かっているぞ』

『答えは・・・OKとの事だ』

『寧ろ、好きなように使ってくれて構わないとまで言っていたぞ！』

『そんな訳でワタシも神崎殿のディケイドと共闘できる日を楽しみにしているぞ』

『それではそろそろ時間の様なので、また次回で合おう』

「・・・マジで！？」

お悩み相談等も受け付けております。

## サイドストーリーエピソード1（前書き）

約一週間振りの更新になります。

今回から暫く短めなお話が続きますが、近いうちに長いお話を投稿すると思います。

それでは楽しんで頂けると幸いです。

そして、後書きのメカ犬のコーナーなのですが、暫く此方もお休みして突発企画がスタートします。

# サイドストーリーエピソード1

軽快な音楽　　ＳＥ

『今回もやって来たなマスター！』

「あんまり来て欲しくは無かったけどな・・・」

やけにハイテンションなメカ犬に、俺は投げやりな答えを返した。

前回の座談会同様に、メモ用紙を見た俺がスタジオにやってくると、既に某玉葱カットな大御所さんのお部屋番組的なセットが準備され、大量の黒子と、赤い蝶ネクタイをしたメカ犬が待ち受けていたのである。

無視して来ないという選択も出来たのだが、それをやってしまうのは、俺が良くてもこの作品全体が困った事になるので、仕方なく来た訳だ。

「・・・それで今度は何をやるんだよメカ犬？」

来てしまった以上は最低限の仕事をしなければならないと思い、俺は適当に話題を振ってみる事にした。

『うむ。今回の話なのだが、以前に募集したサイドストーリーが幾つか来たので、それを発表する事になったのだ』

「それなら俺達のこの件は要らないんじゃないか？」

サイドストーリーが見たいって読者の人が言っているのに、俺達の駄弁る描写を入れて誰が喜ぶんだろうか？

『それにも訳があるのだマスター』

「どんな訳だよ？」

『それは最後に発表する事になっているのだ』

このコーナーでの俺は、相変わらず置いてけぼりの様である。

『取り敢えず先に、番外編を順次紹介して行こうではないかマスター』

突っ込んだ所で、解決されそうも無いので俺は話を先に進める事にした。

「・・・ああ、そうだな」

適当に相槌をしていると、黒子の一人が俺の傍に来て、カンペを見せてくる。

「・・・」

カンペに書かれた内容を見て、俺は一時思考が停止してしまった。

程なくして意識を再起動させた俺は、カンペを持った黒子に、本気かこれは！という意味を己の視線に含ませて、睨みつける。

黒子は俺の視線に気付くが、動じた様子も無く、サムズアップして

きた。

『・・・さて、それでは番外編にいってみようかマスター』

さっきまで、一人で喋り続けていたメカ犬が、俺に対してある意味死刑宣告な発言をしてきた。

周りの雰囲気からしても、俺がカンペの内容をやらないのは、無理である。

これが集団意識という物だろうか？

俺は覚悟を決めて、己の肺に限界まで空気を送り込む。

自身に大丈夫だと何度も心の中で自己暗示をかけながら、俺はカンペに書かれた内容を実行に移す。

「『それじゃあ番外編！は～じま～るよ～♪』」

恥かしい・・・

軽快な音楽　　ＳＥ

○番外編その一　　なのはのお菓子作り修行編

なのは日記より一部を記載

○月×日

今日はお姉ちゃんが、お菓子作りをしていました。

私は食べる事が出来なかったのですが、お兄ちゃんと純君が美味しそうに食べていました。

二人ともよっぽど美味しかったのか、食べ終わると笑顔で気絶してしまいました。

食べられなかった事が本当に残念です。

その後すぐにお父さんが来て、気絶した純君達に良くやったなと言いながら、お兄ちゃんのお部屋に運んで行きました。

なんのお話なのでしょうか？

私にはよく分かりませんでした。

ただ、二人を背負ったお父さんの目からは涙が零れていました。

如何して泣いてるのと聞いてみると、目にゴミが入って沁みたんだ

そうです。

あれは痛いので気持ちは良く分かります。

その後私は、お部屋でお勉強をしていました。

すると、お兄ちゃんのお部屋から物音が聞えてきました。

聞えてきた声から、起きてきたのが純君だと判断した私は、急いで部屋を出ました。

純君とお話するのはとても楽しいです。

最近は学校のお勉強やお稽古で、前よりも一緒に居ることが出来なくなったので、こういう時間は大切にしなければいけません。

今日は純君とお菓子のお話をしました。

純君はお菓子が大好きだと言っていました。

私も大好きなので、お揃いです。

その時私は閃きました。

私が美味しいお菓子を作れる様になれば、もっと純君と一緒に居られるかも知れないという事にです。

お母さんも言っていました。

お父さんと仲良くなったのは、お料理が一つのキッカケになってい

たと！

それなら、純君が大好きなお菓子が上手に作れれば、私も純君と、お母さん達みたいにもっと仲良くなれるかもしれません。

私は早速純君に確認を取りました。

純君は私の作るお菓子を食べてみたいと言いました。

これはもう、やるしかありません！

私はこの日、お菓子作りをする決心をしました。

○月△日

今日から私の特訓が始まります。

お母さんに事情を話すと、なのはもそんな年頃になったのねと頭を撫でてくれました。

そしてお母さんを先生に、私は生まれて始めてのお菓子作りをしました。

・・・失敗しました。

見た目は良く出来ているのですが、お母さんの作るお菓子みたいに美味しくありませんでした。

最初から何でも上手く出来る人は居ないのだから、焦らなくて大丈

夫とお母さんが励ましてくれました。

私はお母さんの言葉を信じてもう一度頑張って挑戦することにします。

ありがとうお母さん。

でも一つだけ気になる事があります。

お菓子作りを習っている間お母さんはずっと泣いていました。

それに、なのはがまともで良かったと何度も呟くのです。

謎です。

何で泣いてるのか聞いてみるのですが、目にゴミが入ったのだそうで気にしなくて良いと言われました。

お父さんも昨日、目にゴミが入って泣いていたので、お揃いですね。

その後も私のお菓子作りは続きました。

○月□日

お菓子作りを始めて数日が経ちました。

今日はすずかちゃんと、アリサちゃんと一緒にピアノ教室に行きました。

終わった後、そこでお菓子作りのお話をしました。

するとアリサちゃんから、ケーキのイベントがあるから、皆で行こうとお誘いを受けました。

お母さんも、色んな人が作ったお料理を食べるのは良い勉強になると言っていたので、私は直ぐに賛成しました。

私が純君がお菓子が好きな事を話すと、当日に話して驚かせようというお話になりました。

このお菓子のイベントはとても大きいそうなので、ドレスを着る人もいるそうです。

それなら私達もドレスを着てみないか、というお話になったので、当日はドレスを着る事になりました。

今からとても楽しみです。

純君は喜んでくれるかな？

〇月▽日

いよいよ明日は、純君に私が作ったお菓子を食べてもらう日です。

今日まで何度も失敗しました。

今でも凄く美味しいとは言えません。

それでも、お母さんはなのはの気持ちを思い切り入れれば、純君は必ず美味しいと言ってくれるから、大丈夫と言っていました。

私も純君に食べて欲しいです。

だから、私は頑張って今自分に出来る最高のケーキを作ります。

大好きな人にこの想いが届くように、一杯の想いを込めて・・・

完成したケーキに私はもう一度だけ、想いを込めます。

大好きな人に喜んで貰えますように！

ＥＮＤ

軽快な音楽　　ＳＥ

『楽しんで頂けただろうか。読者諸君?』

「・・・いや、メカ犬!流石に俺もこれ以上はスルーしきれないから、突っ込ませてもらうぞ!?」

『如何したマスター?』

「如何したもこうしたも、なのはちゃんの日記を持ち出して来るんじゃねえよ!?」

プライバシーの侵害だろ!?

それに読まれた部分がピンポイントで俺にのみ恥かしいって、狙ってやってるだろスタッフ一同!?

『まあ、そんな事はさて置き、マスターの最初の質問に答えなくてはな』

またしても流された!

しかも俺の質問に答えながら、俺の質問を無視するって、何だか新しい切り口できやがった!?

スタジオの雰囲気も早く先に進めろといった感じになっている。

先程カンペを出していた黒子は今度は、

【巻いて！巻いて！】

と書かれたカンペを俺に見せながら、左腕をグルグルと回転させている。

ここは俺にとって、どこまでもアウェイらしい・・・

半ばこの状況に絶望を感じつつ、俺は話を進める事にした。

「・・・で何で俺達のこの件が今回は必要だったんだよ？」

『うむ。実はまたしても告知があるのだ！』

何故だろう？

そのメカ犬の言葉に俺は嫌な予感しか感じない。

『以前座談会で言っていた映画版のプロットがようやく完成したのだ！』

「そうなのか？」

告知がそれだけなら、俺は構わない！

だからもうこれ以上は、止めてくれメカ犬！

俺は必死に心の中で願うが、その願い届く事はなかった・・・

『そこで暫くは大量の執筆になる為、本編をお休みして、短めの番外編が、今週のメインになる事が決定したぞ！』

「・・・それで？」

『勿論ワタシ達がメインＭＣだ。それに来週からは、映画のネット配信風な連続短編の嵐がやってくるぞ』

早く本編を書いた方が良いと思うのは俺だけなのだろうか？

『それでは次の番外編でお会いしよう』

「・・・へ？ちょっと！？」

何だか締めに入ってるメカ犬に気付き俺は慌てる。

始まりも終わりも今回は、突然すぎだろう！？

「『それでは次でお会いしましょう～♪』」

軽快な音楽　ＳＥ

「何とか間に合った・・・」

最後の挨拶に何とかタイミングを合わせる事に、成功した俺は、前回同様に脱力してセットのソファに身体を沈めた。

「次回もこのテンションで行く気か？メカ犬の奴・・・」

# サイドストーリーエピソード1（後書き）

突発企画　今日の一言【第一回】

「どうも始めまして。いつもこの作品を見てもらってありがとうございます」

「高町なのはです」

「何だかメー君の代わりに暫くの間、後書きのコーナーを任されたんで頑張りますね」

太鼓の音が響く　ＳＥ

「今日の一言！」

「お母さんが言っていました。帰ってきたらうがい手洗いを忘れずに」

太鼓の音が響く　ＳＥ

「最近インフルエンザが流行り出してるからね」

「それじゃあ次回でお会いしましょう～」

『まだまだだな・・・なのは嬢』

突発企画ですので御気になさらず・・・

## サイドストーリーエピソード2（前書き）

二弾目の更新になります。

本編の更新はもう暫くお待ちください。

それでは楽しんでいただければ幸いです。

## サイドストーリーエピソード2

軽快な音楽　　ＳＥ

『サイドストーリー第二弾がやって来たぞマスター』

「・・・うん。もう慣れた。これから俺は無心でＭＣに徹する・・・」

『先程から何をブツブツと言っているのだマスター？』

「・・・いや、なんでもないさ！早速始めようぜメカ犬！」

『何か気持ち悪い程に爽やかだぞマスター』

「気のせいさ！」

『まあ、良いだろう。今回のストーリーは、募集でも多数寄せられた。ワタシ達が今まで戦ってきたホルダーの話になるぞ』

「後日談って奴か？」

『うむ。それでは早速始めよう』

「『それじゃあ番外編！は～じま～るよ～♪』」

軽快な音楽　　ＳＥ

## ○番外編その二　　海と孤独と変わる時

僕はいつも孤独だった。

生まれた時から親の愛情を知らず、物心がつく頃にはいつも一人だった。

別に生活に困った事はない。

幼い僕の周りの世話は、お金で雇われた使用人達がやってくれていた。

だけど、それだけだった。

僕は孤独だった。

近くに居る大人達は優しく接してくれたが、所詮はビジネスでそうしてくれているだけだし、同年代の子供とはどうにも話が合わず、

距離を置いていた。

僕の日課は家が海辺の近くにあった事からか、いつも一人で砂浜に座り海を眺める事だった。

海を見ていると心が落ち着く。

何処までも続いていく様子を見ていると、その時だけは自分の全ての悩みが小さく思えてきて、何でも無い事に思えた。

やがて僕は大人になり、一人の社会人となった。

僕は唯一の親への反抗をした。

本来ならば家業を継がなければいけないが、僕は周囲の反対を押し切りとある企業に入社したのだ。

今思えば僕は、孤独を恐怖していたのかも知れない。

このままただ親に敷かれたレールに乗り続ければ、僕は一生変わる事が出来ない気がしたのだ。

入社してから暫くして、変化はやって来た。

僕の同期の一人が頻繁に僕と会話をしてくれる様になったのだ。

今まで僕は、人と事務的な会話しかした事が無かったけれど、彼との会話はとても楽しく思えた。

僕は彼をただの同僚としてではなく、何時しか一人の友人として接

していた。

僕が自身の人生で、ここまで人に対し心を開いたのは初めてだった。

信じていた。

尊敬していた。

・・・しかしそれと同時に激しく嫉妬していた。

彼が僕と違う人生を歩んできて今に至るのは、頭では分かっている。

だけど、だからこそ、何故だと僕の心が悲鳴を上げた。

僕と同じ場所に立っている筈の彼は、僕と違い孤独ではなかった。

数多くの友人。

最愛の妻。

何よりも愛しい愛娘。

他にも、彼の周りは、いつも賑やかで僕は彼の傍に居ても良いのか、

日々自問自答していた。

それでも僕は彼の友人として、傍に居続けた。

心の中で、

憤慨しながら・・・

尊敬しながら・・・

恐怖しながら・・・

信頼しながら・・・

疑心暗鬼に囚われながらも、僕は彼の隣に居続けたいと願った。

だけどその願いは脆くも、裏切られた。

彼が事故により、亡くなったのだ。

僕はその事実を知った瞬間全ての希望を失った。

それと同時に彼を激しく憎んだ。

僕はこれからどうすれば良いのかと、心の中で彼に何度も罵倒した。

それから暫くの間、僕の世界からは、全ての色が失われ茫然自失とした日々が続いた。

だが僕はある日、一つの真実お知る事となった。

それを知ったのは、偶然だったが、しかし僕はそれを運命だと思えた。

彼の愛していた娘が一人孤独の中で生きている事をしったのだ。

一つの真実を知ったその時、僕の世界に全ての色が取り戻されてい

った。

僕の中に喜びが生まれたのだ。

僕は一人じゃない。

僕と同じ気持ちで生きている人間が他にも居るのだと、歓喜した。

それから僕は、遠くから彼の娘、彼女を見続けた。

突然なのだが、僕は現在記憶喪失である。

記憶喪失といっても、全ての記憶が無い訳ではなく、ここ一ヶ月程の記憶だけがすっぽりと抜け落ちているのだ。

最後に残っている記憶は、確か道端に落ちていた緑色の玉を拾った所までだ。

それ以上はどれだけ思い出そうとしても思い出せないでいる。

会社の人からは、僕の記憶が失われている間も、普通に仕事をしていたというのだから、不思議な話である。

一度精神科医に見てもらったが、特に異常も無いと言われたので真実は謎のままだ。

記憶に無いだけで、その間も見に来ていたのかもしれないが、僕の感覚では約一ヶ月ぶりに彼女の様子を見に行ってみた。

彼女を見て僕は驚いた。

僕の目から彼女がかつての彼の様に見えたからだ。

彼女は同年代の子供達に囲まれて、歳相応の笑顔を浮かべていた。

裏切られたと思った。

また僕は一人孤独に戻るのだろうか？

再び僕の世界から全ての色が失われていくのを感じた。

しかし、僕の世界から色が失われようとした瞬間、幻聴なのか少年の様な声が聞えた気がした。

【お前は何かをしたのか！？助けを求めたか！自ら孤独を脱しようと努力をしたのかよ！？】

何て青臭くて陳腐な言葉だろうと思った。

だけど・・・

その言葉は、何故か僕にとって救いの様にも思えた。

僕は今を変えるために入社する以外に何をしただろうか？

がむしゃらに助けを求めたりしたのだろうか？

いつの間にか孤独を受け入れて、努力する事を諦めていなかっただろうか？

僕の中に今までに無い想いが生まれた気がした。

僕は今を変えたいのかもしれない。

目の前の彼女の様に、

今は亡き彼の様に、

僕は彼女に背を向けて、立ち去る事にした。

彼女の顔を見た後は、海に行く予定だったのだが、僕にはやる事が出来てしまった様だ。

海に行くのはまたの機会にしよう。

次に海を見る時は、これから出会うかもしれない友人と、笑顔で眺めたいと願ったのだから・・・

ＥＮＤ

軽快な音楽　　ＳＥ

『さてマスター。これからの方針について話したいのだが』

「これからの方針って、暫くは短編風の番外編で行くんじゃ無かったのか？」

『うむ。その方針は変わらないぞ。ただな・・・』

「如何したんだよ？はっきりしないな」

『この作品の作者のＧ－３Ｘがインフルエンザになってしまい、今家族から強制的に執筆を控える様に説得されている所なのだ』

「内輪ネタにも程があるだろ！？」

『うむ。前回のなのは嬢の一言が己の身に降りかかったという訳だ』

「それじゃあ、この続きはどうなるんだよ？」

『まあ、少なくても今週の更新はここまでになるだろうな』

「確かにさっさと直して続きの話を書いてもらわないと、俺達が困るからな・・・」

『本当は、今週中にもう一本短編を仕上げるつもりで、プロットまで完成しているのだが、今私の台詞を書いている時点で、限界突破しそうになっているからな』

「・・・俺にはもう、早く布団で安静にしてろとしか言えないぞ」

『そういった訳で、更新スケジュールが多少変更になるかも知れないという事を言いたかっただけだ』

「こんな時事ネタを書いて、一年後や二年後に見た読者はどんな反応をしたら良いんだろうな？」

『流しながら読んでもらえると助かるな』

「もしくは後で、この部分だけ修正入るのかもな」

『最も恐ろしいのはこれ以降の更新が途絶える事だろうな。それはつまり・・・』

「言うな！！！それは本気で縁起でも無いから！！！」

『うむ。そうだな。それでは今回はこのあたりで終わりにしておくかマスター』

「ああ、そうだな」

「『それでは次でお会いしましょう～♪』」

軽快な音楽　　ＳＥ

「本当にこんな内輪ネタやって良かったのかよメカ犬？」

『まあ、作者がインフルエンザなのは事実なのだから仕方あるまい』

「・・・それはそうかもしれないけどさ」

『これの投稿が完了した後は安静にすると、家族にも明言しているのだし別に良いではないか』

「・・・そういう問題か？」

『うむ。それで良いのだ。ではワタシは後書きにも顔を出していくので失礼するぞ』

「あ！行っちゃったよ・・・」

## サイドストーリーエピソード2（後書き）

突発企画　今日の一言【第二回】

「コーナーも二回目になりました」

「今回も私、高町なのはが全力全開で頑張りますね！」

太鼓の音が響く　ＳＥ

「今日の一言！」

「お母さんが言っていました。料理の基本は、さしすせそ」

太鼓の音が響く　ＳＥ

「お料理って奥が深いですよね」

「それではまた次回でお会いしましょう～」

『ちなみに、【せ】は醤油の事だぞ』

三回目もあるかもしれません。

そして皆さんもインフルエンザには注意しましょうね。

予防は大切です。

本当に・・・

## サイドストーリーエピソード3（前書き）

皆様一週間振りになります。

未だ完治してはいないのですが、大分と良くはなって来たので、本来先週中に投稿する筈だった短編をお届け致します。

このまま順調に回復すれば来週からはまた通常のスピードで更新が出来ると思います。

それでは楽しんでいただければ幸いです。

# サイドストーリーエピソード3

軽快な音楽　ＳＥ

『我々は帰ってきた！』

「いきなりネタ的な発言だなメカ犬・・・」

『まあ、良いではないかマスター』

「でも俺達がこうやって喋ってるって事は、作者のインフルエンザはもう良いのか？」

『まだ完治という訳では無いが、随分良くなったそうだぞ』

「取り敢えずこれで安心て事かな」

『うむ。それでは早速今回の番外編に行ってみようかマスター』

「ああ！」

「『それじゃあ番外編！は～じま～るよ～♪』」

軽快な音楽　　ＳＥ

○番外編その三　　図書館司書さんのカップル観察記録

私の名前は柿崎（かきざき）　保奈美（ほなみ）。

海鳴市の図書館で日々司書の仕事を頑張ってるのよ。

今年の春先に少しの間だけ記憶が無かったりする上に、周りの人達がいきなり私が怪物になったなんて言うんだけど、皆して同じ夢でも見たのかしらね？

そんな小さい事はさて置き、図書館は毎日たくさんの人が利用している事は皆知ってると思うんだけど、私が勤めている図書館には、面白い子達が頻繁にやってくるのよ。

今日は少しだけ、皆にもその面白い子達の事を教えてあげるわね。

男の子と女の子の可愛いカップルなんだけど、何時も二人でピッタリとくっついて、一冊の本を読んでいる仲良しさんなのよ。

でもね・・・

私は見てしまったのよ。

普段は熱々のカップルな二人の内の一人・・・

男の子の方がなんと！

違う女の子を連れて、図書館に来ていたのよ！！！

女の子は、ツインテールで普段一緒に居る女の子にも勝るとも劣らない美少女だったわ。

私は真実を知る為に、そっと後ろから接近して会話を傍受する事にしたの。

誤解しないで！

これはただの好奇心なんかじゃ無いのよ！

場合によってはカップルの女の子に、この事実を伝えなくてはいけないという、崇高な使命があるの！！！

会話内容

「う～解んないよ純君」

「なのはちゃんは他の教科は大丈夫なのに、国語だけは苦手だよね・・・」

「だって難しいんだもん」

「まあ、人によって得意不得意はあるからね」

「そうだけど、この宿題は難しすぎるんだよ・・・」

「だからこうやって一緒に勉強会をしてるんじゃない。解らない所があったらヒントは出すからさ」

「ヒントを出してくれるなら、答えを出して欲しいんだけど・・・」

「それをやったらなのはちゃんの為にならないでしょ？」

「そうだけど・・・」

「全部出来たらご褒美あげるから、頑張ってなのはちゃん」

「・・・本当？」

「本当、本当」

「・・・解った！私頑張るよ純君！！」

「やる気が出たみたいで良かったよ」

なんて事なの！？

ラブラブじゃないのあの二人！

これは由々しき事態よ！

あんな年齢で二股なんて、あの男の子の将来が心配だわ・・・

その後も私は、二人が帰るまで会話を傍受し続けたわ。

帰り際には男の子は、女の子の頭を撫でるなんて、事までしてみせ

るラブラブ具合だったのには、思わず砂糖を吐いてしまいそうになったほどよ。

でもね・・・この話はそれで終わりじゃ無かったのよ。

いいえ。

寧ろ此処からが本当の始まりだったのよ。

それはまた別の日の出来事だったわ。

例の男の子がやって来たのだけど、またしても違う女の子と一緒に来ていたのよ!!!

私が今まで見た女の子達とは違い、勝気そうな金髪の女の子だったわ!

そしてこの子もやっぱり美少女だわ!

しかも外人さん!

何気にインターナショナルね!?

私は前回同様に気付かれない様に近づいて会話を傍受する事にしたわ。

え?

仕事は良いのかですって?

今はそんな事よりも未来ある若者が、道を踏み外さない様に、見守らなければならない義務があるのよ！！！

会話内容

「やっぱり犬は最高ね」

「何で犬の話をするのに図書館に来る必要があったのアリサちゃん？」

「だって純が私の犬の話をちゃんと聞かないんだもの。だからまずは写真で説明を入れながら純に犬の良さを教えてあげようと思ったのよ」

「でも犬を見ながら説明するなら、アリサちゃんの家に行けば沢山居るじゃないか」

「それじゃ駄目なのよ！」

「如何して？」

「だって・・・」

「だって？」

「だって本物の犬を目の前にしたら、可愛がるのに忙しくて純に説明出来なくなるじゃない」

「本当に犬が好きなんだね。アリサちゃんは」

「当たり前よ！ほら解ったら早く隣に来なさいよ！今日は私が純に犬の良さをたっぷりと教えてあげるわ！」

「・・・はい、はい」

「はい、は一回で良いのよ！」

「・・・はい」

またしても何て事なの！？

あの女の子ともラブラブじゃないの！

まさかの三股だなんて！

この男の子はプレイボーイね！

金髪の女の子も楽しそうに話しているわ！

これだけで既に驚愕と言える現象だけど・・・

まだ・・・

まだこの話には続きがあったのよ！！！

それはまたまた別の日の出来事だったわ。

男の子がまた図書館にやって来たんだけど、何とまたしても！

重要な事だからもう一度言うわよ！

またしても男の子は別の女の子と一緒にやって来たのよ！！！

しかも今回連れてきた女の子は、私も良く知っている女の子だったの。

その女の子の名前は、八神はやてちゃん。

はやてちゃんは足が不自由で車椅子生活をしている女の子なの。

そのせいもあってかはやてちゃんは普段から、図書館を良く利用しているから、知り合いになったんだけど・・・

まさかあのはやてちゃんまでもが、あの男の子の毒牙にかかっていただなんて、知らなかったわ！！！

私は最近特技に分類出来るレベルになってきた、ステルス歩行術で会話を聞き取れる場所にまで移動を開始したわ。

何ですか館長？

仕事をさぼるなですって？

あなたは図書館の仕事と、未来ある若者の将来の行く末のどちらが尊いと思ってるんですか！？

え？

そんな事はどうでも良いから仕事をしろ？

解らない人ですね！

そんな事ばっかり言ってると、私鬼みたいに怒っちゃいますよ！！！

・・・えっとそんな、土下座して泣いて謝らなくても、だ、大丈夫ですから私は鬼になりませんし、用事が済めばすぐに仕事に戻りますから。

私の説得により、館長は泣きながら去って行ったわ。

それにしても、一体何だったのかしら館長？

あら、そんな事よりも私には大事な使命があるのよ！！！

私は改めて二人に近づいて聞き耳を立てる事に、全神経を集中させたわ。

会話内容

「それにしてもはやてちゃんが、読書家だったなんて結構以外だね」

「そうやろか？」

「うん。でもはやてちゃんは普段どんな本を読むの？」

「う～ん・・・色々やな」

「それじゃあどんなジャンルが好きだったりする？」

「やっぱり物語ならハッピーエンドやな。それと図鑑なんかは良く

読むなあ」

「ハッピーエンドの物語っていうのは、何となく分かるんだけど図鑑っていうのは何で？」

「図鑑って色んな絵や写真が載っとるやろ。私はあんまり自由に色んな所に行けないから、図鑑を見てるとそれがある場所に行った気分になるから、好きなんよ」

「そっか・・・ねえ、はやてちゃん」

「ん？なんや純君」

「今度さ、何処かに遊びに行こうよ。あんまり遠くに行けなくても、近い場所に意外な物って結構あるものだよ」

「純君・・・ありがとな」

「うん！」

ラブラブだあああああ！？

何なのあの男の子！？

まさか三股では飽き足らず、脅威の四股だなんて！！！

あの男の子の将来はどうなるのかしら？

でもこれで分かったわ！！！

ここは大人として私は、あの男の子に一言伝えないといけないわね！！！

私がそんな覚悟を決めた次の日、男の子が今日もやって来たわ。

そしてもう当然の事ながら、本日も女の子連れだったわ。

今日は普段一緒に居る女の子だったわ。

本妻も大切にするという事なのね。

私は恒例となる、会話の傍受を行なうために静かに接近する。

館長が無言で此方を見ているけれど、もう話しかけて来る事は無さそうなので、私は気にせず行動したわ。

会話内容

「それじゃあ今日は何を読もうか。すずかちゃん」

「う～んそうだね。それじゃあこれかな？」

「これって・・・」

「うん。私この本が大好きだから」

「そっか」

「これを読んでると、ベルに会えるから・・・だからこの本は純君と一緒に読みたいんだ」

「・・・早速読もうよ。すずかちゃん」

「・・・うん」

「それじゃあ隣に座って純君」

「分かったよ」

・・・これはもう決定ね。

私は決意を胸に二人の傍に近づき、軽く男の子の肩を叩く。

「ん？」

それに反応して男の子が私の方向を向いたわ。

言うのよ保奈美。

一人の大人として。

人生の先輩として。

「君・・・」

「はい？」

私はその言葉を、男の子に伝える。

「ハーレムは程々にしなさいね」

「何ですかいきなり！？」

ＥＮＤ

軽快な音楽　ＳＥ

「それで次以降の更新は何時になるんだメカ犬？」

『うむ。最初に言っていた通り、未だ作者のＧ－３Ｘは完治していないからな。残念ながら本格的な更新再開は来週からになるだろうな』

「まあ、無理して倒れられても困るからな・・・」

『それで来週からだが、今度は数話の短い話を連続更新した後に、映画版を更新する流れになるぞ』

「そうなんだ」

『取り敢えず今週の更新はこれだけになってしまうが、来週以降は更新ラッシュになる予定だぞ』

「予告でテンションを上げるのは良いんだけど、作者がインフルエンザの熱をぶり返したらどうする気だよ?」

『それは・・・』

「それは?」

『その時は仕方が無い!』

「無責任!?」

『まあ、無理さえしなければ大丈夫だろう』

「そういうものか・・・」

『うむ。それではそろそろ今日は、これぐらいで終わりにしようかマスター』

「言うだけ言って逃げたな」

「『それでは次でお会いしましょう～♪』」

軽快な音楽　　ＳＥ

『来週更新がされていなかったら、Ｇ－３Ｘの体調不良だと思ってくれ』

「それをここで言うか！？」

## サイドストーリーエピソード3（後書き）

突発企画　今日の一言【第三回】

「このコーナーも三回目です。なのはです」

「それでは早速行きます！！！」

太鼓の音が響く　ＳＥ

「今日の一言！」

「お母さんが言っていました。錬金術の基本は等価交換だ」

「これ違う人の台詞じゃないの！？」

『立って歩け！前へ進め！』

恐らくこのコーナーは今回で終わりだと思います・・・

次回からはメカ犬の何でも相談室特別編が始まる予定です。

体調が良くなる事を祈りながら・・・

## 映画版予告ＣＭ（前書き）

お久しぶりです。

Ｇ－３Ｘです。

今週は更新が出来なくて申し訳ありませんでした。

インフルエンザも大分良くなってきたので、やっとですが映画版仮面ライダーシードの本格始動です。

早ければ映画本編は来週中に、連続短編は今週末にでも更新すると思いますので、楽しみにしていただけたら幸いです。

**映画版予告ＣＭ**

映画版仮面ライダーシード制作本格始動

今・・・仮面ライダーシード史上最大の戦いが始まる。

「・・・遂に、遂に完成したぞ！」

「計画の首尾はどうなっている？」

「利用価値ですか？」

「仮面ライダーか」

「もうすぐだ・・・もうすぐ計画は現実の物になる！」

静かに始まりを告げる計画。

「起きろなのはちゃん！早く起きないと遅刻するよ！」

「今日からこのクラスに新しいお友達がやってきます」

「お昼の件。頼んだわよ」

「ご、ごめんなさい・・・でもおかしくって・・・」

「こういう時は、ありがとうって言うんだよ」

「まずは私達を名前で呼んで。お友達になるのはそこからだもん」

日常に訪れる小さな変化。

『マスター。街で十体以上のホルダーが暴れているぞ！』

「違和感？」

『今の段階では、情報が少なすぎて何とも言え無いが、今の所その可能性が最も高い』

「兎に角戦うぞメカ犬！どっちにしろ放っておく訳にも行かないだろ！？」

「もしかして、これも暴走プログラムなのか！？」

「率直に用件を言おう。我の頼みを聞いて欲しい」

「仮面ライダーに話される前に確保できればそれで良い」

「あれにもまだ利用価値はある」

計画は日常に侵食し・・・新たな戦いを呼ぶ

『戦い方を変えるぞマスター。相手が数で来るならば、こちらはスピードで勝負だ』

「飛ばすぞメカ犬！」

「じゅ、純が仮面ライダー！？」

「それなら力任せで行くか」

「それじゃあ、頼みますよチェイサーさん！」

「素晴らしい！！！」

「研究？まさか・・・あんたが作った・・・だと？」

「モデルになったのは君なんだよ！！仮面ライダー！！！」

「・・・簡単なことだよ」

「そうだな・・・せめて私が君の名前を、受け継ぐとしよう」

「今のおぬしがすべき事は他にあるのではないか？」

戦いは更に加速していく

「・・・行くぞメカ犬」

「ＯＫだマスター！」

「変身」

「・・・前置きは無しだ。覚悟しろ！」

仮面ライダーシード最大の敵は！？

「仮面ライダーデビル。それが今日から私の名前だ」

『どうやらピンチの様だなマスター』

「遅いんだよ。お前は！」

相棒を勇気を信じて立ち上がれ

「こいつで決めるぜ」

映画版　仮面ライダーシード　シークレットエピソード　プリンセ

スメモリアル

近日公開予定

## 映画版予告ＣＭ（後書き）

何でもメカ犬相談室【特別編】

只今準備中・・・

# ネット配信風ミニヘタレ劇場　八神さん家のゲーム大会　その？（前書き）

お待たせしました。

何か久しぶりに予定通りの更新が出来た気がします。

今回の連続短編が終了する頃に映画版を更新すると思います。

それでは楽しんでいただければ幸いです。

# ネット配信風ミニヘタレ劇場　八神さん家のゲーム大会　その？

「時代は王様ゲームや！！！」

はやてちゃんが高らかに宣言する。

この場に居た俺と、なのはちゃんに、アリサちゃんと、すずかちゃんが一斉にはやてちゃんに注目する。

世間は夏休み真っ盛りであり、今日も蝉が外で忙しなく鳴き続けている猛暑のお昼過ぎ。

八神宅に遊びに来た俺達に対し、はやてちゃんは右手に割り箸の束を持ちながら、興奮気味に叫んだのである。

「「「王様ゲーム？」」」

なのはちゃん達が、はやてちゃんの言葉に首を傾げる。

まあ、小さい子供が普通知ってる事は稀だろうし、この反応は当然だろう。

寧ろその単語を理解して発言した、はやてちゃんの方がどうなんだろうと俺は思う・・・

「いきなり如何したのはやてちゃん？」

何故か嫌な予感がするが、俺は話を進める為にはやてちゃんに話しかける。

「だから、時代は王様ゲームなんや！！！」

いや、それはもう良いから・・・

「王様ゲームって何なの？」

なのはちゃんが頭の上に、大きな？マークを浮かべながらはやてちゃんに説明を求める。

はやてちゃんは、なのはちゃんの質問を待ってましたと言わんばかりに、解説をし始めた。

「ふっふっふ・・・良くぞ聞いてくれたでなのはちゃん！！！」

はやてちゃんは、右手に掴んだ数本の割り箸の束を、なのはちゃん達に見せる。

「割り箸？」

目の前に突き出された割り箸を見てすずかちゃんが呟く。

「王様ゲームにはこれを使うんやで！！！」

「この割り箸の先に書かれた数字と、一本だけ赤い色が付けているのは、どんな理由があるの？」

アリサちゃんが割り箸を観察しながら疑問を口にする。

「良い所に眼を着けたでアリサちゃん！王様ゲームにはこれが不可

欠なんや！！！」

「これってどう使うのはやてちゃん？」

なのはちゃんは、割り箸の一本を手に取り眺めながら言う。

「焦ったらあかんで、なのはちゃん！今から順を追って説明するから、黙って聞いてや」

はやてちゃんの言葉に、なのはちゃん達は改めて説明を聞く態勢を整える。

「それじゃ説明するで。王様ゲーム・・・それは大人の遊びなんや！！！」

「「「大人の遊び！？」」」

「そしてこのゲームに必要なんが、この割り箸なんや」

はやてちゃんはなのはちゃん達に割り箸に書かれた数字とマークを見せる。

「さっきもアリサちゃんに言っとったけど、王様ゲームではこれが大きな意味を持つんやで！」

割り箸の数字の付いた方と赤いマーキングされた方を分けた。

「ゲームに参加する人は、まずこの数字とマークの付いた部分を隠して一人一本ずつ配るんや」

はやてちゃんは実際にやってみた方が早いと言って、なのはちゃん達に割り箸を配り始める。

その結果以下の結果になった。

なのはちゃんが一番の割り箸。

すずかちゃんが二番。

はやてちゃんは三番。

そしてアリサちゃんの割り箸には赤いマーキングがされていた。

「これは其々の役割を決める為の下準備なんや！この結果で今回はアリサちゃんが王様って事になるんや！」

「私が王様？」

マーキングをされた割り箸を眺めながら、アリサちゃんが聞き返す。

「そうやで。そしてこのゲームでは、この王様が特別な役割を担うんや！！！」

なのはちゃん達三人の視線が、アリサちゃんの持つマーキングされた割り箸に注がれる。

「王様になった人はな、絶対的な命令権を持つんやで！！！」

「「「命令権！？」」」

「そう、その名の通りまさに王様なんや！王様になった人はな、それ以外の番号を引いた人達に好きな命令を出す事が出来るんよ！！！」

はやてちゃんは畳み掛ける様に、熱く拳を握り込みながらなのはちゃん達に力説した。

「それじゃあ、王様になった私は好きな命令をして良いって事？」

あまりにも熱い、はやてちゃんの力説を聴いたアリサちゃんは、自分の持つ割り箸を見ながら、はやてちゃんに確認を取った。

「その通りやで、アリサちゃん」

アリサちゃんの質問に満足そうにはやてちゃんが頷く。

「でもそれだけや無いんやで！命令が出来る王様にも、ちゃんとルールがあるんや！！！」

しかし今日のはやてちゃんのテンションは、天井知らずだな・・・

一体王様ゲームの何が、はやてちゃんをそこまでかき立てるのだろうか？

「王様の命令は特定の人間を限定したらあかんのや！でもそれじゃあ、折角何でも命令出来るのに楽しさ半減になってまう・・・」

そう言ったはやてちゃんはおもむろに、犯人はお前だ！！！

とでも言う様に、自身が持つ番号入りの割り箸を指差す。

「それを解消して、王様ゲームを更なる高みへと導くキーパーソンがこれなんや！！！」

更にテンションギアを上げながら説明をするはやてちゃん。

「王様は命令する人を特定出来ない代わりに、この番号を言う事で、より賭け引きを必要とする高度な遊びへと、王様ゲームを進化させるんやで！！！」

一通り説明を終えたはやてちゃんは、どうや？と言いながら、途中から黙って聴く事に徹していたなのはちゃん達の反応を伺う。

なのはちゃん達の反応はというと・・・

「面白そうね・・・」

「私もやってみたいかな・・・」

「ちょっと興味もあるし・・・」

三人の反応は、はやてちゃんにとって上々なものだった。

「それじゃあ決まりやな？」

はやてちゃんは三人の反応を見ながら確信を得たようで、満足げに目を細める。

さてと、それじゃあ俺は・・・

「ちょっと待ちいや。純君?」

はやてちゃんが突如俺に声を掛ける。

部屋の出入り口付近に居た俺に対して・・・

「何処に行くんや?」

「ち、ちょっとトイレまで・・・」

「それはおかしな話やな~。純君は確か、私が王様ゲームの話を始める直前にトイレから戻ってきたばっかりやん?」

「今日は・・・その、お腹の調子が良くなくて・・・」

俺の答えにはやてちゃんは大袈裟な態度で、

「それは大変やな!?それじゃあ早く・・・」

はやてちゃんの台詞が言い終わる前に、俺はこれが最後のチャンスと読み、脱出を試みる。

だが、このミッションは、俺のズボンをはやてちゃんが掴む事で簡単に阻止されてしまった。

車椅子の筈なのに、何時から近づいていたのか全く気付かなかった!?

「それじゃあ早く・・・と~っても楽しい遊びで気を紛らわせんとあかんなあ?」

今のはやてちゃんの俺を見る瞳は、獲物を狩る肉食獣のまさにそれであった。

俺は完全に、はやてちゃんという名の肉食獣の餌食となった。

そして此処に、第一回八神宅主催王様ゲーム大会が、開催される事と相成ったのである。

つづく。

○???

その日運命の出会いをした。

俺は研究者だ。

同時に追われる側に居る人間でもある。

奴らが言うには、俺がやっている事は、多くの人間を不幸にするから、放って置けないんだそうだ。

俺はただ知りたいから、それを知る為に好きな事をやっただけである。

その過程で誰がどうなったか等、俺の知った事ではない。

俺にとっての他人とは、役に立つ駒か、俺を妨害する邪魔者、それ以外は辺りに落ちている小石と同じだ。

俺はその日奴等の執拗な追跡を掻い潜り、俺の運命を変える出会いの場に行き着いた。

それは無雑作に地面に置かれていた。

最初は何となく拾い上げただけだったが、手に持った瞬間にそれの凄さを実感した。

俺の中で、急速に研究意欲が湧き上がる。

それと同時に一つの野望が生まれる。

これを使えば俺を否定した奴らを消す事だって出来る。

そうすれば、俺は何の気兼ねも無く好きな事が出来るのだ。

俺の中に生まれた野望はとても甘美なものであった。

しかし足りない・・・

その野望を実現させようと思うのならば、今俺が持っている物だけでは余りにも少ないのである。

・・・俺は閃いた。

無いのならば作れば良いのだ。

これを大量に作れば、それで全ての問題は解決するのである。

そうと決まれば早く準備を始めなければならない。

俺はこの場から立ち去る為に移動する事にした。

俺の野望を叶えてくれる、怪しくも緑に光るそれを眺めながら・・・

# ネット配信風ミニヘタレ劇場　八神さん家のゲーム大会　その？（後書き）

○何でもメカ犬相談室【特別編】

『久しぶりに帰ってきたぞ！読者諸君！』

『やはり後書きは、ワタシがメインでなければならない様だな』

『さて、早速本題に入るが・・・ついに仮面ライダーシードの映画版制作が本格始動し始めたぞ！』

『そこで、今回から暫くこのコーナーでは、映画版に関する情報をワタシが伝えていこうと思う』

『第一回という事で、読者諸君が気になっているであろう事を話そう』

『今回の話の最後に、謎な文章があったと思うが、この文章は映画版のサイドストーリーとして扱われているので、要チェックだ』

『ネタバレが嫌だという人は、映画版の本編を読んだ後に改めて読んでみるのも良いかも知れないぞ』

『それでは今日はここまでにしておくとしよう』

『次回からは、このコーナーにゲストも交えて、映画版の紹介をして行くから、楽しみにしていてくれ！』

『では、また次回で会おう』

次回のゲストは八神はやてさんを予定しております。

## ネット配信風ミニヘタレ劇場　八神さん家のゲーム大会　その？（前書き）

ネット配信風第二弾を更新します。

映画版本編も現在鋭意執筆中ですので、もう暫くお待ちくださいね。

それでは楽しんでいただけると幸いです。

**ネット配信風ミニヘタレ劇場　八神さん家のゲーム大会　その？**

○八神家式王様ゲーム基本ルール

一人ずつ割り箸を引いた後「王様だ～れだ！？」の掛け声で王様になった人は自分が王様になった事を宣言する。

王様になった者の命令は絶対であり、必ず遂行しなければならない。

王様以外の番号が書かれた割り箸を引いた人は、命令が決定するまで、自分の番号を他の参加者に教えてはならない。

○追記ルール

今回の第一回に限り、特別ルールを追加。

詳細は別途記載。

「第一回八神宅主催王様ゲーム大会！開催や！！！」

はやてちゃんがハイテンションで宣言する。

俺は面倒な事になりそうなので、脱出を試みたものの、はやてちゃ

んの手により、いとも容易く妨害されてしまい、強制参加する事になってしまった。

「それじゃあ、早速いくで！！！」

はやてちゃんが五本の割り箸を握り込みながら、その拳を突き出した。

なのはちゃん達は嬉々として、一人1本ずつ引いていく。

この状況で俺だけが引かないというのは、雰囲気的にも駄目そうなので、残りの二本のうち一本を引いた。

「皆引いたな？」

俺を含めた全員が頷く。

「それじゃあ皆一緒に言うんやで？」

その後はやてちゃんのせ～の、の掛け声で皆が同時に同じ言葉を口にする。

「「「「「王様だ～れだ！？」」」」」

ルールで言う事になってるとはいへ、かなり恥かしいのは俺だけだろうか？

全員がこの言葉を言い終わった後に、その中の一人が遠慮しがちに手を上げた。

「私が王様・・・で良いのかな？」

赤い目印の付いた割り箸を、俺達に見せながら手を上げたのは、すずかちゃんだった。

ちなみに俺は二番だった。

俺は王様になったすずかちゃんを見ながら、しめたと思った。

このゲームの発案者の、はやてちゃんは度外視するとして、すずかちゃんが王様なら安心である。

俺にとって癒しの権化たるすずかちゃんなら、突拍子も無い命令をしてくることは無いだろう。

なのはちゃんのボキャブラリーなら問題無いと思うが、いきなり突飛な発言をしてくる可能性も捨てきれない。

アリサちゃんは普通に無茶振りしてきそう出し、はやてちゃんは・・・考えるのは止めておこう。

兎に角すずかちゃんならば、和やかな命令でこの場を上手く収めてくれる筈だ。

欲を言うならば、このままゲーム自体が自然消滅してくれれば、それが一番望ましい。

しかし・・・

そんな俺の幻想は、一人の少女の行動により打ち砕かれる事となる。

「それじゃあ先ずはこれを引いてな！すずかちゃん」

そう言ったはやてちゃんは、すずかちゃんの前に一つの箱を、何処からか取り出した。

箱の頭頂部には丸い穴があいており、中には折り畳まれた紙が何枚も入っている。

「これって何なの？」

目の前に箱を置かれたすずかちゃんが、箱を眺めながら、その箱を持ってきた張本人であるはやてちゃんに質問を投げかける。

はやてちゃんを除くこの場の全員が、謎の箱に興味を抱いていたので、その答えを知るであろう車椅子の少女に視線を集中させる。

視線の集中砲火を浴びたはやてちゃんは、ミステリー小説の謎解きをする主人公の様に、この謎の箱の解説をし始めた。

「良い質問やですずかちゃん。取り敢えず説明しながらゲームを進めよか？」

はやてちゃんはそう言うと箱を持って、すずかちゃんの前に改めて突き出す。

「まずはこの箱の中から適当に紙を一枚引いてな。話はそこからや」

すずかちゃんは、意味が分からないという表情をしながらも、はやてちゃんの指示に従って、箱の中から一枚の折り畳まれた紙を取り

出した。

「その内側に文章が書かれてるから、読んでみてや」

すずかちゃんが一枚の紙を取り出した事を確認したはやてちゃんが、新たな指示をすずかちゃんに提示してくる。

「う、うん」

頷きながらすずかちゃんは折り畳まれていた紙を開いて中に書かれている文章を読み始めた。

「えっと、【愛してると感情を込めて十回言う】って書かれているんだけど？」

「「「は？」」」

なのはちゃんとアリサちゃんに俺は、その内容を聞き同時に言葉を発した。

何故だろう？

この内容を耳にして、意味が理解出来ない以上に、凄く嫌な予感がする。

「これに何か意味があるの？はやてちゃん」

なのはちゃんがこの場を代表して、はやてちゃんに質問する。

その質問を投げかけられた張本人であるはやてちゃんは、なのはち

ゃんに良くぞ聞いてくれたワト○ン君、といった具合で語り始めた。

「私らはこのゲームの素人でビギナーや！それじゃあ王様ゲームを盛り上げることなんて土台無理な話や・・・そこで私はこのゲームのエキスパートに協力を頼んだんよ！！！」

その説明で、俺の中の危険感知センサーが更なる警報を鳴らす。

もう、確実に嫌な予感しかしない。

「・・・そのエキスパートって誰なの？」

俺は大体想像がつくものの、念のため聞いてみる。

「保奈美さんや」

やっぱりか！？

保奈美さんは俺達が良く利用する図書館で司書をしているお姉さんである。

俺と、すずかちゃん、特にはやてちゃんとはとても仲が良い。

基本的には無害な人なのだが、稀に暴走して突っ走る上に、大人気ない悪戯でいたいけな子供を（主な被害者は俺）に傷つける困ったさんなのだ。

どうやら今回の一連の出来事はあの人の差し金によるものの様である。

その事実を知って、俺は余計に先程、脱出に失敗してしまった事に後悔を覚えてしまう。

そんな俺の苦悩など誰も知るよしも無く、はやてちゃんの説明は続いていった。

○追記ルール

王様になった者は、指令ＢＯＸから一つ指令を取り出す権利を得る。

指令の内容を確認した後、王様はその指令を実行する者を番号で指定する事が出来る。

尚指令内容によっては三人以上指定する場合もある。

個人の判断に委ねるが王様自身を指定する事も可能とする。

○？？？

私は戦場を渡り歩く流れの傭兵だった。

最初は生きる為に始めた事だったが、何時からか私の目的は戦いそのものへと変化していった・・・

常に戦いを求めて、私は数々の紛争地帯を駆け抜けていった。

私はやがて更なる力を求める様になっていった。

こんな生業をしながら生きて来たのだから、当然身体を鍛えるぐらいの事はしている。

だが、そうでは無いのだ。

身体など幾ら鍛えた所で、個人差はあれど、限界が訪れるし、老いていけばそれすらも失われていく。

私が求めるのは、そんな枠を超越した絶対的な力なのである。

男として生を受けたならば、一度は夢見る事だろう。

しかし私は我慢出来なかった。

心の底からそれを渇望した。

そんなある日私は不思議な男と出会った。

その時の私はらしくないがある国の城で、雇われ兵士として働いていた。

次の戦場が見つかるまでの繋ぎとしか思っていなかった仕事だった

のだが、今では此処で働いていた事に、感謝すらしている。

男は私に言った。

【俺について来るのなら、君に力と戦う戦場を用意しよう】

魅力的な言葉だった。

私は迷う事無く、その男に賛同した。

もうすぐだ・・・

もうすぐ私の夢が叶う。

絶大な力と、命を燃やすべき戦場が私の手に入るのだ。

# ネット配信風ミニヘタレ劇場　八神さん家のゲーム大会　その？（後書き）

○何でもメカ犬相談室【特別編】

『さあ、今日もワタシがメインの時間がやってきたぞ』

『それでは第二回となる今回から、映画版の見所をゲストと共に紹介して行こう！』

『今回のゲストは、はやて嬢だ！』

「・・・はぁ」

『如何したんだはやて嬢？何やら元気が無い様だが』

「・・・無いんや」

『ん？』

「私・・・メインヒロインの筈やのに映画版で殆ど出番無いんや・・・」

『な、なんと言うかそれは・・・災難だったとしか言様が無いな』

「分かってるんよ。私が初登場する前に、プロット書き始めたって言うのもあるし、日常の場面は今回は殆ど学校内の描写やって話しやから、休学中の私には出番の増やしようが無いって事ぐらい・・・せやけど！」

『は、はやて嬢！？』

「もう少し位何とかなったと私は思うんよ！第一私は・・・」

※暫くはやてちゃんの愚痴が続きます。

『まあ、そんな訳で、今回の映画版では今までよりも少しだけ、マスター達の学校での日常風景が垣間見れるかもしれないという事が分かったな。それでは今回はこれぐらいにしておく事としよう』

「・・・大体こんなに魅力的な私を、出さないなんて世界的な・・・」

『まだ言っていたのか・・・』

次回からのゲストは映画版初登場の人物を予定しております。

## ネット配信風ミニヘタレ劇場　八神さん家のゲーム大会　その？（前書き）

連続更新です。

映画版本編の更新まで、突っ走れれば良いなと思います。

それでは楽しんでいただけると幸いです。

**ネット配信風ミニヘタレ劇場　八神さん家のゲーム大会　その？**

指令内容？【愛してると感情を込めて十回言う】

王様　　すずかちゃん

「えっと・・・私は、この書かれてる内容を実行する人を、番号で選べば良いんだよね？」

すずかちゃんが指令ＢＯＸから引いた紙を見ながら、はやてちゃんに確認を取る。

「そうやですずかちゃん！」

はやてちゃんはサムズアップで答えながら、早く指定するように促した。

俺はどの番号を指定するのか悩むすずかちゃんを見ながら、どうか俺の番号は言わないでくださいと、二番の番号が書かれた割り箸を握り絞めながら、天に祈りを捧げる。

「それじゃあ、二番の人が四番の人に・・・で良いかな？」

天への祈りは届く事が叶わなかったらしい・・・

神様は俺に何か恨みでもあるんだろうか？

二番　俺（言う人）

四番　アリサちゃん（言われる人）

俺とアリサちゃんは、お互いに向き合って見詰め目合う。

ちなみに俺とアリサちゃん以外の三人は、俺とアリサちゃんを見世物に、興味津々といった表情を貼り付けながら、黙って見学している。

一体これは何の羞恥プレイだと叫びたくなってしまう・・・

もういいや・・・

無心でさっさと言って成るべく早く終わらせよう！

これはゲームなんだし、サクッとやってしまえばそれで良いんだ！

「アリサちゃん」

「は、はい！？」

俺は向き合ったアリサちゃんに話しかける。

アリサちゃんは俺が話しかけると、跳ね上がる様なリアクションをしながら返事をした。

何処と無く顔が赤くなっているし、アリサちゃんもこの状況がかなり恥ずかしいんだろう。

これは俺の精神衛生の為だけでなく、アリサちゃんの為にも早く終わらせなければならない。

俺は深呼吸をしてから、指令を実行する。

心は無心で、しかし俺の出来る限りの感情を込めながら、アリサちゃんに愛してると伝える。

「愛してる」

「ちょっと！いきなり始めないでよ！？」

「愛してる」

「だから、まだ心の準備が・・・」

「愛してる」

「め、面と向かって言われるとかなり恥ずかしいわね・・・」

「愛してる」

「そ、そんな真剣に言わないでよ！？」

「愛してる」

「げ、ゲームだからってこれはやり過ぎ・・・」

「愛してる」

「も、もしかして本気なの？」

「愛してる」

「やっぱりそうなんだ・・・」

「愛してる」

「そうよね・・・ゲームだからってこんなに嘘でこんな顔できないもんね・・・」

「愛してる」

「まだ私そういうの良く解らないけど、純がどうしてもって言うのなら・・・」

「愛してる」

「しょうがないわね・・・そこまで言うなら私・・・」

ふう～、やっと終わった。

何も考えないで言っていたせいか、自分が言った回数意外の記憶がまったく無いけど、これで終わりで良いんだよな？

「これで良いんだよね、はやてちゃん？」

俺は終わったことを、この羞恥プレイを見物していたはやてちゃんに報告する。

「・・・あ！？え、え～とそうやで！」

何か呆けていた様だけど、俺の声に反応して返事を返してくれるはやてちゃん。

なのはちゃんと、すずかちゃんも同じ様に呆けている。

もしかして三人ともつまらなくて別の事でも考えてたんだろうか？

まあ、見られていないなら、それに越した事無いんだけど、無心になってまでがんばったのに、何の感想も無いってのは、それはそれで悲しいと思うのは、俺のわがままだろうか・・・

「そ、それじゃあ！次いくで！！！」

はやてちゃんが気合を入れて拳を突き上げながら叫ぶ。

「「お、オー！」」

その声に呆けていた二人も正気に戻ったのか、はやてちゃんの真似をして、気合を入れながら叫びだした。

何か妙な気迫すら感じるんですけど。

「・・・本当にしょうがないわね・・・取り敢えず私の、その、か、か、彼氏・・・」

そういえばこの場に、アリサちゃんだけが黙っているな、と思い隣に居たアリサちゃんを見ると、何やらブツブツと呪文の様な言葉を矢継ぎ早に唱えている。

あまりにも早口で言っている為に、何を言っているのかは全く分からないが、その見た目は犬を愛でる時と似ている気もする。

窓の外から野良犬でも見えたんだろうか？

このままにしておくのも怖いので、俺はアリサちゃんに正気に戻ってもらう為に話しかける事にした。

「ちょっと、アリサちゃん！戻ってきて！次のゲームが始まるみたいだよ！」

「だからそれはまだ早いってば・・・はっ！？」

ようやく正気を取り戻したのか、アリサちゃんが声を上げる。

「わ、私は何を・・・」

どうやら本当に正気を取り戻したみたいである。

これで一安心だ。

「ほら、アリサちゃん。早くしないと次のゲームが始まっちゃうよ？」

「そ、そうね！？は、早く行きましょう！！！」

正気に戻ったアリサちゃんはそう、矢継ぎ早に言うと、なのはちゃん達の下に行ってしまった。

一体どうしたというのだろうか？

「純君も早く来てよ。ゲームの続きを始めるよ！」

なのはちゃんが俺を呼ぶ。

「うん。今行くよ」

まあ、別に良いか。

俺は深く考えても仕方ないと思い、なのはちゃんの声に答えながら、ゲームに参加する為に近づいて行った。

しかし・・・

参加しながら思うのだが、このゲームはいつ終わりを迎えるんだろうか？

「「「「「王様だ～れだ！？」」」」」

二回目の王様を決めるゲームでも、五人揃って声を上げる。

今回俺が引いた番号は一番だった。

そして王様になったのは・・・

「ふっふっふっ・・・ついに来たんや！来たんやで！！私の時代が！！！」

はやてちゃんが赤いマークの付いた割り箸を掲げながら、宣言する。

何だろうかこの果てし無いまでの絶望感は？

・・・いや！

絶望するのはまだ早い！！！

かなり不安ではあるが、まだ指令ＢＯＸがある。

きっと指令ＢＯＸには頭を撫でるとか、軽めの指令も入ってる筈だ。
幾らはやてちゃん自身がぶっ飛んでいても、指令が軽めの物ならばダメージが小さくて済むだろう。
出来れば俺の番号が宣言されない事を願うばかりだが・・・

「さ～て私のお題はなんやろな～♪」

鼻歌交じりに指令ＢＯＸに手を突っ込むはやてちゃんを見ながら、俺は今度こそと、天に祈りを捧げる。

そしてはやてちゃんの引き当てた指令は・・・

「私が引いた指令は【胸を揉む】や！！！」

・・・神は死んだ。

つづく。

○？？？

俺はある組織に属している。

別に悪の組織なんて物じゃない。

それどころか真逆に位置すると言える組織だ。

世界には何故か悪事を働く奴等が後を絶たない。

そんな奴等を捕まえて裁くのが俺の仕事なのである。

俺が所属するチームは、その犯罪者の一人を追っていた。

しかしあと少しという所で、取り逃がしてしまったのだ。

だが完全に見失った訳ではない。

まあ、だからと言って、事態は俺達に有利に働いているという訳でもなかったりするが・・・

大人数で移動すれば、奴に気付かれる危険性もある。

それに奴の潜伏先と思われる、場所は複数存在している為、しらみつぶしに探すにしても、その間に完璧にロストする可能性が極めて高い。

そこで俺達は先遣隊を各地に送り、現地捜査をする事になった。

俺もそのメンバーの一人である。

ここで突然だが、俺には歳の離れた小さな妹が居る。

幼くして両親を無くした所為か、俺に良く懐いてくれている。

今は知り合いに預かって貰っており、この仕事が片付いたらすぐに迎えに行くと約束しているのだが、この分ではまだ当分の間は帰れそうに無さそうだ。

こりゃあ妹にも預けている知り合いにも帰ったら大目玉を食らう事確実だな・・・

俺は気を取り直して、自分の派遣先を確認する事にした。

【第９７管理外世界】

そこが俺の派遣場所である。

# ネット配信風ミニヘタレ劇場　八神さん家のゲーム大会　その？（後書き）

○何でもメカ犬相談室【特別編】

『さあ！今日も私のコーナーがやって来たぞ！！！』

『前回のゲストに呼んだはやて嬢は途中で暴走してしまったからな』

『それでは、今回のゲストを呼ぶとしよう』

『今回のゲストはマスター達の担任だ』

「どうも、なのはちゃん達のたんにんで～す」

『文字だけでは分かりにくいが、女性の教師だったのだな』

「そうですよ。名前は『映画本編で紹介するので今はまだ秘密だ』そうなんですか！？」

『うむ』

「・・・それじゃあ仕方ないです」

『それでは気を取り直して、映画版での見所を一つ紹介して貰えないだろうか？』

「見所ですか～。やっぱり私が武装して教室にやって来た屈強な男達を、見事に撃退する所ですかね～」

『・・・随分とバイオレンスなのだな』

「真実は映画版で確かめてね？」

『それでは今回はここまでにして置こう』

「映画版での私の活躍を楽しみにしててね」

『それではまた次回で会おう！』

次回も映画版初登場の人物がゲストの予定です。

## ネット配信風ミニヘタレ劇場　八神さん家のゲーム大会　その？（前書き）

少し更新時間が変わってしまい申し訳御座いません。

それとミニヘタレ劇場は今回で終了となります。

次の更新はいよいよ映画版となりますので。

それでは楽しんでいただけたら幸いです。

王様ゲームは混迷を極めていった。

特にはやてちゃんは酷かった。

【胸を揉む】という指令が出た後、する側を自分に指定して、される対象をそれ以外の全員にしてしまったのである。

特に何故か男の俺だけが執拗なまでに、乳首を攻められたのだが、はやてちゃんは何処へ向かおうとしているのだろうか？

その後もポッキーゲームやら、ツイスター等、道具の有り無し拘わらずやけにハードな内容の物が続いていった。

そしてはやてちゃん以外の体力は限界を向かえ、次のゲームが最後となる事になった。

「「「「「「王様だ～れだ！？」」」」」」

俺が引いたのは・・・

赤いマークの入った割り箸だった。

つまりこれは・・・

「最後の王様は純君やな」

はやてちゃんはそう言うと俺の目の前に指令ＢＯＸを持ってきた。

俺は差し出されたＢＯＸの穴に手を突っ込んで、軽めの指令が来るようにと、万物の神々に祈りながら、一枚の紙を取り出す。

そこに書かれていた内容は・・・

【王様は誰か一人を指定してキスをする】

何故にこれだけ王様が強制参加！？

これを書いた人は何を考えてるのかじゃなくて、このタイミングでこれは、俺に恨みのある超能力者でも存在してるんじゃないかと思えてしまう。

俺がそんな現実逃避をしていると、なのはちゃん達が俺の周りに集まってきた。

「ねえ純君は何の指令を引いたの？」

「何か凄い汗かいてるけど大丈夫？」

「何の指令かみせてみなさいよ！」

油断していた俺は、あっさりとアリサちゃんに指令の書かれた紙を奪われてしまったのだ。

「あ！？」

しかし気付いた時には既に遅く、四人は既に指令内容を書かれた紙に目を通していた。

「「「「・・・・」」」」

そして何故かおれの事を無言で見詰めてくる。

何この沈黙!?

もしかしてこれって四人の中で完全に罰ゲームみたいな事になってる!?

俺は如何するべきかと、冷や汗を流しながら考えていると、その沈黙を意外な物が破ってしまった。

『キンキュウケイホウキンキュウケイホウキンキュウ・・・』

この場でまさかのタッチノートの警報が鳴り響いてしまったのだ。

「な、なんやのいきなり!?」

はやてちゃんが驚きの声を上げる。

不味い・・・

何とか誤魔化さないと・・・

「あ~え~と!ごめん、今日は母さんからお使い頼まれててさ。忘れないように、時間になったらアラームがなるようにしてたんだよね!!」

「「「「何でそんな物騒なアラームにしたの!?」」」」

少し苦しい気もするが、このまま押し切る！！！

「そういう訳で俺急いで行かなくっちゃ！それじゃあそう言うことで！！！」

俺は勢い良く八神宅を飛び出した。

『マスター！ホルダー反応が出ている！急いで現場に向かうぞ！！！』

玄関には既にメカ犬が来ており、出会い頭に催促してくる。

「分かってるって！」

俺はタッチノートを開き、ボタンを押す。

『チェイサー』

音声が流れると同時に、エンジン音が近づいてきて、俺達の目の前に黒いバイクが止まる。

『お待たせマスター』

このオッサンボイスな乙女口調なバイクこそ、俺達の誇る最近飛べる事が発覚した、新宿二丁目系ライダーバイクのチェイサーさんである。

「お願いしますねチェイサーさん」

俺は急ぎチェイサーさんに飛び乗る。

やはりさっきのいい訳には無理があったようで、四人が俺の事を追ってきたらしいのだ。

『急いでくれ』

更に俺の後ろにメカ犬が飛び乗り指示をだす。

『ＯＫ！』

チェイサーさんは気前の良い返事を返し、

ガキン！！！

「あ・・・」

俺をワッカで固定した。

「ち、ちょっとま・・・」

俺の制止の言葉を言い終わる前に、チェイサーさんは風を切る様な速さで走り出した。

「らめえええええええええええええええええ！！！！！！！！！！」

俺はまたしてもジェットコースターを越える体験をする事になったのである。

映画版につづく。

○？？？

我は一国の姫じゃ。

最近どうも城の様子がおかしい気がするのじゃ。

何がおかしいのかは分からないのじゃが、あえて言うのであれば全体の雰囲気じゃろうかのう？

我がその事に気付いたのは、この国に新たな大臣が就任してからじゃった。

その者はこの国の者では無く、外部からやって来た者じゃったが、いつの間にか大臣の一人へと成り上がったのじゃ。

はっきり言えば異常じゃ。

いきなり外からふらりとやって来た男が、その国の中枢を担う役職に就くなど、子供でもありえない事だと理解出来る・・・

しかしこの国の大人達はそれを誰一人として疑問に思わんのじゃ。

そして我は、その事実に恐怖した。

我の身近な大人で一人だけ、大臣が就任した時期にこの国を離れていた者が居ったのじゃが、その者は正常でやはりこの国はおかしいと言っておった。

その者の助言で、今は静観するしかないと言われた我は、日々悪夢にうなされながらも見て見ぬふりををし続けたのじゃ。

じゃがその時も長くは続かなかったのじゃ・・・

我は偶然にも大臣とその護衛の者とが話しているのを聞いてしまったのじゃ。

内容は途切れ途切れではあるが、恐ろしい物じゃった。

復讐・・・

この国を乗っ取る・・・

世界を混乱に・・・

計画・・・

実験・・・

我はそれ以上の内容を聞くのが恐くなりその場から逃げ出した。

しかし運悪く、我は立ち去ろうとした時に、大きな物音をたててしまったのじゃ。

その音に大臣達も気付いたのじゃろう。

此方に足音が近づいてくる。

我は何とか急ぎ立ち上がるとその場から走り去ったのじゃ。

その後特に大臣達から何かを言われると言った事は無かったのじゃが・・・

我は更に恐怖した。

これ以上は耐えられぬと感じた我は、唯一の正常な意識を保っていた者に再び頼る事にした。

その者は日本に行ってみてはどうかと助言をしてきたのじゃ。

少なくともこの場所に留まるよりも、違う国に居た方が安全なのだと言っておった。

何故日本なのかと聞くと、可能性は高く無いが、日本に行きある者と接触すれば、力を貸してくれるかも知れないのだそうじゃ。

普通に他の国に助けを求めたとしても、証拠が無ければ相手になぞされないが、その者ならばもしかしたらという事らしい。

その者の名は・・・仮面ライダー。

我は仮面ライダーに助けを求める為に、日本へ行く準備を開始した。

# ネット配信風ミニヘタレ劇場　八神さん家のゲーム大会　その？（後書き）

○メカ犬何でも相談室【特別編】

『さあ！今回もやってきたぞ』

『早速ではあるが今回のゲストの登場だ』

「我を呼ぶとは中々良いセンスをしておるようじゃの」

『・・・言葉使いだけでは判断しにくいのだが・・・ゲストはどういった容姿をしているのだ？』

「我の容姿は美少女に決まっておるじゃろ！」

『そうなのか・・・それでゲストの役割はどういったものなのだ？』

「ヒロインじゃな」

『・・・何かこれ以上は話していても、読者に無用な混乱を招きそうだな』

「まあ、このような企画よりも早く本編を出した方が我も懸命だと思うがの？」

『それもそうか』

「そういう訳で我の事を詳しく知りたければ、映画版本編を見るのじゃぞ！」

『それでは今日はここまでだ』

「またの～」

次回から暫く映画版本編のため通常の後書きに戻ります。

長らくお待たせいたしました。

遂に映画版の更新です。

普段より長めなので、手元にジュースとお菓子等を準備するのも良いかも知れません。

それでは楽しんでいただければ幸いです。

尚、この作品は全ての小説家になろう及びその関連コンテンツをご愛用の読者の皆様に捧げます。

「・・・遂に、遂に完成したぞ！」

何処かの研究室であろうか。

素人が見てもその用途を窺い知れそうに無い、大量の機材の中で、男は歓喜の声を上げる。

「これで・・・俺の夢が現実になる！」

何かをかみ締める様に呟くと、男は我に帰った様に思考を切り替えた。

「そうだ。まずは実験をしなくてはな・・・計画をより確実にする為にはデータが足りなすぎる」

棚から世界地図を取り出した男は、それを機材が置いてある台の空いているスペースに広げる。

「・・・やはり実験をするならばここが相応しいか」

男は世界地図のある一箇所に、ペンでマーキングを施した。

男が実験をするのにその場所を選んだのは、簡単な事だった。

男が完成させたそれは、その場所で見つけたものが基となっているものだったからだ。

其処は島国であり、この物語の中心となる場所・・・日本である。

「らめえええええええ！！！！！！」

俺はチェイサーさんの上で悲鳴を上げる。

タッチノートの警報により、ホルダーが現れた事を知った俺とメカ犬は、現場に向かっていた。

急いでいた為に、変身する事を忘れてチェイサーさんに乗ってしまった俺は、ジェットコースター以上の恐怖を絶賛体験中である。

『もうすぐ反応のあった場所だぞマスター！』

俺を風除けにしているメカ犬が現状報告する。

チャッカリと自分だけ安全確保しているメカ犬に、俺は確かな殺意を覚えるが、今はそれよりも優先しなければいけない事がある。

何とか体制を立ち直し、俺の視界は前方を視認する事に成功した。

目の前に見えるのは、何処までも続く様な青い海だった。

今俺達が向かっている場所は海鳴海岸である。

今は夏休みであり、海水浴客も多く来ている筈だ。

そんな所でホルダーが暴れたりしたら、大変な事になる。

「急いでくれよ！チェイサーさん！」

『任せてマスター』

チェイサーさんは俺の催促に二つ返事で答えると、更にスピードを増す。

『見えたぞマスター！』

メカ犬の声の言う通り、俺にも前方にホルダーがいる事を確認出来た。

出来たのだが・・・

「なあなあ、少しお茶するぐらい良いだろ？」

全身が赤くて、八本の触手を持つまるでタコの様な姿をしたホルダーが、水着のお姉さんをナンパしていた。

水着のお姉さんは本気で嫌がっているのが見て取れる。

「一緒にアバンチュールな夏を過ごそうぜ～」

うざい！

このホルダーマジでうざい！！

そして先程メカ犬に感じた以上の、大きな殺意と怒りが俺の心の中で膨れ上がってきた。

「・・・やっちゃってください。チェイサーさん」

『ＯＫ！』

俺のお願いを快く聞いてくれたチェイサーさんが全速力でナンパ中のホルダーに突っ込んだ。

「ぬべらっ！」

奇声と共に吹き飛ぶホルダー。

水着のお姉さんはこれを好機と見たのか、一目散に逃げ出していった。

他の人達は既に避難していたのであろう。

水着のお姉さんが去った後、この海岸にいるのは俺達と、チェイサーさんに突き飛ばされて、目の前でやばげな痙攣をしているホルダーのみである。

俺とメカ犬はチェイサーさんから降り、未だに痙攣しているホルダーに近づいていく。

「こんなくだらない事の為に、俺はあんな目に遭ったっていうのか・・・」

大きな被害が無かった事は、嬉しい限りではあるが、チェイサーさんの上で恐怖体験してまで急いで来た俺の苦労はなんだったのかと、やり場の無い何とも言えない感情が俺の心の中を支配する。

「いっつつ・・・何だってんだ一体？」

俺が心の中で葛藤しているうちに、やばげな痙攣が治まったのか、ホルダーが立ち上がってきた。

「ん、子供？」

目の前にいる俺に気付いたホルダーは、俺を見ると何でこんな所にと、疑問を口にした。

「・・・一応聞いておくんですけど、何でこんな事をしたんですか？」

全力で殴り倒したい衝動を抑えながら、俺は取り敢えず形式上の質問をしてみた。

俺の質問を聞いたホルダーは、突然目の前に現れた子供である俺に、疑問を抱いている様子を見せつつも、律儀に答えて見せた。

「ああ？そんなもん決まってるだろ！夏だぜ！夏と言えばロマンスだろ！！！そしてナンパだろ！！！！！」

答えているうちに、テンションが上がってきたのか、最後の方は殆んど叫んでいる様にしか聞えない。

・・・うん。

何と言うか。

俺の中の何かがぶち切れた気がする。

ある意味欲望に忠実ではあるけど、ホルダーになってまでする事では無いだろう？

俺はタッチノートを取り出して開く。

「・・・行くぞメカ犬」

『うむ。それにしてもマスター。今日は何時に無く得体の知れない迫力を纏っているな』

俺の隣に陣取っているメカ犬が、俺を見ながら何か言っているが、今は気にしないでおく。

今の俺は一秒でも早く、このやり場の無い不条理な怒りという感情を、目の前にいるホルダーに、拳で叩き付けたいのだ。

『バックルモード』

タッチノートのボタンを押すと音声が流れ、隣にいたメカ犬が銀色のベルトに変形して、俺の腹部に自動的に巻きつく。

「変身」

定められている音声キーワードを入力し、タッチノートをバックル

の中央部の溝へと差し込む。

『アップロード』

差し込んだ瞬間に音声が流れ、バックルを中心に俺の全身を、白銀の光が包みこんだ。

光が飛散したその場所に佇むのは一人の戦士だった。

メタルブラックを基調としたボディに銀色のベルト。

そのベルトを中心に四肢へと伸びるラインに同色の額に光るV字型の角飾り。

顔の赤く大きな昆虫を彷彿とさせる複眼が、その存在をより一層引き立たせている。

「か、仮面ライダー!?」

俺の変身を見たホルダーが驚愕の声を上げる。

今更に思うが、仮面ライダーの認識度も、随分と広まった物である。

俺の脳裏に、腹黒な雑誌記者のお姉さんの顔が浮かび上がった。

あの人をこのまま野放しにしていたら、いつの間にか世界的に広められてしまいそうな気さえする。

あまり深く考えると気分が優れなくなりそうなので、俺は頭を切り替えて、目の前で驚愕しているホルダーを見据える事にした。

「・・・前置きは無しだ。覚悟しろ！」

俺はそれだけ言い放つと、脱兎の如くホルダーに向けて走り出す。

「くっ俺の何がいけないって言うんだ！？俺のナンパは最近噂の正義の味方に妨害されるほどに、迷惑だとでもいうのか！？」

迫り来る俺にホルダーが、主張してくる。

いや、俺だってナンパしてるだけなら、相手が余程嫌がってない限りは、本人同士の問題だから、干渉したりはしない。

だが、あえて言わせてもらうなら・・・

「それくらい自力でやれやあああ！！！」

俺は思いの丈を叫びながら、ホルダーに拳を叩き込んだ。

「ぐへ！」

ほぼ無防備に俺の拳を受けたホルダーは、タコの様な黒い液体を吐きながら吹き飛んだ。

その光景に俺は少しだけ、スッキリした。

しかしあのホルダーが吐いた墨みたいのは何なのだろうか？

もしかして墨を吐くのが、あのホルダーの能力なのかも知れない。

だとしたら救いようが無いな・・・今回のホルダー。

『今だマスター！』

メカ犬の声に反応してホルダーを見てみると、ホルダーは俺の怒りの一撃が余程効いた様で、蹲っていた。

・・・本当に何だっていうんだ、今回のホルダーは？

不味い、頭痛がしてきた気がする。

「ああ、分かってる」

俺はメカ犬に短い返事を返しながら、バックルのタッチノートを引き抜く。

俺の今の心境は、早く帰りたい、この一言に尽きる。

タッチノートを開き全体図を表示させて、右足をタッチし、再びバックルに差し込む。

『ポイントチャージ』

音声と共に白い光が発生し、ラインを通して光が右足に集約される。

「こいつで決めるぜ」

俺はその場から上空に舞い上がる。

そして輝く右足を、ホルダーに向けて必殺の一撃を繰り出す。

「ライダーキック」

凄まじい勢いで放たれた必殺の蹴りは、情け容赦など一切無く、ホルダーに見事直撃して爆発を巻き起こした。

爆発から出てきたのは海パン姿の若いロン毛なあんちゃんだった。

『やったなマスター』

「・・・ああ、そうだな」

何時に無く虚しく感じる勝利に、俺はメカ犬に適当な返事を返す。

「・・・帰るか」

『うむ』

メカ犬の了承を得た俺はその場を後にした。

残されたのは、海パン姿で気絶しながら、エロい寝言を呟くロン毛ただ一人であった。

俺はまだ知らない。

この時別の場所で、大きな計画が動き出そうとしている事を・・・

そしてその計画に、俺が否応無く巻き込まれていく事など、夢にも

思ってなどいなかった。

【映画版　仮面ライダーシード　シークレットエピソード　プリンセスメモリアル】

「は～い。皆久しぶり。夏休みは楽しかったですか？先生は楽しかったですよ」

海鳴市にある私立聖祥大附属小学校の一室の教卓で、一人の女性教師が、目の前に居る数十人の小学生にそう挨拶した。

彼女の名前は山中真理子〈やまなかまりこ〉。

ここ私立聖祥大附属小学校に勤務する教師で年齢は乙女の秘密らしいが、見た目は二十代半ばといった所だろう。

髪はショートカットで、いつも寝癖の様な癖っ毛が猫の耳を思わせる形で標準装備されている。

正確は穏やか、かつ天然であり生徒にも人気がある。

何でこの私立聖祥大附属小学校教師である真理子先生が、教卓で先程の事を言っていたかというと、答えは至ってシンプルだ。

真理子先生が言っていた通り、夏休みは昨日を最後に終わりを告げた。

今日は9月1日で二学期最初の登校日なのである。

そして、既に気付いている人もいるかと思うが真理子先生は何を隠そう、俺やなのはちゃん達の担任なのだ。

つまりこの真理子先生こそが、普段から俺の存在を忘れる天然ボケ教師であり、案の定今日も点呼で俺は呼び忘れられたのである。

悪意等が無いだけに余計に性質が悪い。

二学期早々これなのだから、俺と真理子先生の戦いはこの先も長く続きそうである。

「二学期が始まって早速なんですけど、皆に重大なお知らせがありま～す」

何故か真理子先生が言うと、重大という言葉がとてもほのぼのとした意味に聞えてくるのは、どういう事なんだろうか。

だが、既に一学期でこの人の大体の人柄を把握している、俺を含めたクラスメイト達は、その間延びしたような声にも、はっきりとし

た反応を示した。

教室がにわかにざわめき始める。

「真理子先生。重大なお知らせって何なんですか？」

クラス全体を代表して、この教室でもリーダー的な位置付けを確立しているアリサちゃんが質問した。

真理子先生はアリサちゃんのその質問に対して、いかにも待ってましたと言いたげな表情をして答えを返す。

「ふっふっふっ・・・実は今日からこのクラスに新しいお友達がやってきます」

とても似合わない含み笑いをした真理子先生が、自身のオシャレメガネを摘んで位置直しながら告げる。

新しいお友達って事は、転校生でも来るのだろうか？

「さあ！入ってきて！！！」

教室のドアに向かって真理子先生が、合図を送る。

その合図に教室に居た全員の視線が、教室のドアに集中する。

そして幾多の視線に晒されたドアが、真理子先生の合図に呼応するかのように開け放たれる。

扉の先から教室に入ってきたのは、途轍もなく長い赤色のカーペッ

トだった。

次に教室に入ってきたのは、今すぐ戦争地帯に行っても平気そうな、フル装備を整えた数十人の屈強な男達だった。

男達はカーペットを囲む様に的確な動きを見せる。

その光景はまるで、テロリストの掃討作戦か、予算を大量に注ぎ込んだアクション映画のワンシーンである。

あまりにも突然な出来事に全員が唖然としていると、赤いカーペットを一人の老人が歩いてくる。

所謂執事服を身に纏った老人は、何故か片手にバスケットを持ち、その中に入っている薔薇の花弁を撒きながら真理子先生が居る教卓の前まで歩を進めてきた。

というか、この状況を呼び込んだ張本人であるはずの、真理子先生まで唖然としているのはどういう事だ?

老人は教卓前で立ち止まると、一息だけ、息を吸い込むと、叫び声と言っても過言では無い大声を張り上げた。

「姫様のおなああああああああありいいいいいいいいいいいいいいいい!!!!!!」

その瞬間武装していた男達が何処から取り出したのか、ラッパでファンファーレを吹き鳴らす。

うるさい事この上ない。

一連の意味不明な現象の後に、更なる登場人物がこの教室にやって来た。

それは、この学校の制服を着た一人の女の子だった。

見た目からして、年齢は俺達と同じ位であろう、その少女は腰まで届きそうな綺麗な銀髪を揺らしながら、カーペットの上を歩いてくる。

端正な顔立ちと、強い意志を宿した力有る瞳が、彼女をどこか遠い存在の様に思わせる印象を与えていた。

女の子は教卓の前にまでやって来ると、俺達を眺めてから、その見事な銀髪を右手でかき上げると、言葉を発した。

「我が名はエミリー・シルバーライト・キャンベル。短い間ではあろうが世話になるぞ」

その日俺達のクラスにやって来た転校生は・・・一人のお姫様だった。

「え～それでは改めまして、交換留学生のエミリー・シルバーライ

ト・キャンベルさんです。皆仲良くしてあげてくださいね～」

教卓の前で真理子先生が隣の銀髪の女の子を、俺達に紹介している。

先程までこの場に居た執事服の老人と、屈強な男達に、カーペットと薔薇は既にこの教室から姿を消していた。

意外な事にあのカオスな状況を見事に解決したのは、その原因を担った一人である、我がクラスの愛すべき天然ボケ教師の真理子先生だった。

女の子が言葉を発した後に言語機能が復活した真理子先生は、激怒した。

見た目としては恐い所か微笑ましい事この上ないのだが、兎に角怒ったのである。

切々と常識を語られた真理子先生に、老人が最後まで抵抗していたのだが、結局今回の軍配は常識を説いた真理子先生に上がり、老人と、屈強な男達はこの場を退散して行ったのだ。

「エミリーさんはなんと！あのシルバーライト島のお姫様なんですよ～」

この日常を勝ち取った今日の勝利者である真理子先生が、女の子の補足説明をしてきた。

シルバーライト島。

それはこの日本とハワイの丁度中間地点に在る島だ。

前世では、そんな島は無かった筈なのだが、此方の世界では、何故かその場所に存在していたのである。

以前この世界の事を色々と調べていた俺は、その島の存在を知った時興味を持ったので、触り程度ではあるが調べてもみた。

シルバーライト島には、一つの独立した国家が築かれていて、何処の国にも属していない独自の法の基に成り立っている。

しかも、今尚一貫された国王政権を貫いているのを知った時は、驚いたものだ。

今目の前に居るこの女の子がお姫様だというのも、現シルバーライト島の王様の娘ならば、確かな真実だ。

それならば、先程この教室にやって来た男達に対しても護衛だと思えば、取り敢えずの納得はいく。

日本はシルバーライト島と近い場所にある事もあり、昔から交易も頻繁に行われてきたので、両者の関係は良好ではあるのだが、それでも疑問に思う事がある。

幾ら仲が良い国同士とはいえ、一国のお姫様が如何して留学生なんぞしているかという事だ。

こんな事が両国の間で行われた事など、少なくても公式の史実には全く無い。

それを裏付ける様に、あの過剰なまでの護衛体制だ。

政治的な何らかの策略があるのでは無いかと、勘繰るのは無理も無い話しである。

「それじゃあ、エミリーさんの席は何処にしようかしら？」

俺がシルバーライト島に関して知っている事を思い出しているうちに話が進んだのか、真理子先生がお姫様の座る席を探し始めた。

「我はあの場所が良い。日当たりがとても良さそうじゃ」

お姫様が、教室のある一点を指差した。

その場所は窓際の一番後ろの席で、確かに晴れた日は、日当たりも良さそうである。

人数の関係で、其処には人が居なかったので丁度良いというのもあったのだろう。

「それじゃあ残るは、エミリーさんのお世話係ね・・・」

席は何の障害も無く決まったのだが、もう一つ決めなくてはいけない厄介な事があった。

それは先程真理子先生が呟いたお世話係の事だ。

老人は、真理子先生に討論の末に敗北して、この場を後にして行ったのではあるが、最後にかなり無茶な面倒事を頼んで来たのである。

それがお姫様の専属お世話係だ。

最初は執事服の老人がその役を担うはずだったのだが、真理子先生一蹴の下それは即座に否決されてしまった。

ならばせめてクラス内で、誰か一人を校内に居る間だけでも良いから、その任につけてくれと懇願して来たのである。

首を縦に振るまで此処から一歩も動かないという意志が老人の全体から漂っていた。

これには流石の真理子先生も了承する以外出来なかったわけなのだ。

「う～んそれじゃあね～・・・うん！君に決めた！」

悩んだ挙句に真理子先生は、永遠の十歳な魔物使いみたいな事を言って一人の生徒を指差した。

教師が生徒に指差すなとか、言いたい事は山ほどあるが、今は取り敢えず良い・・・

良くは無いが、今はそれ所ではないのだ。

それと言うのも・・・

「エミリーさんのお世話係は君に一任するから頼むわね。純君」

その指を差された生徒が俺だったからだ。

普段から人を散々呼び忘れるくせに、如何してこんな時に限り、俺に無茶振りをしてくるのだろうかこの天然教師は！？

「それじゃあ、席も決まった事なんで移動しましょうね～」

その真理子先生の言葉を合図に、クラスメイト達が俺の席を一つずつ詰めながら移動を開始する。

今の一言で真理子先生が言わんとする事を瞬時に理解した生徒達が、俺の席がお姫様の隣に配置される様に動き出したのだ。

小学一年生にして、この順応速度の速さは異常な事とすら感じる今日この頃である。

移動は直ぐに完了して、お姫様が俺の隣の席に着く。

「そなたが我の世話係か。良きにはからえ」

お姫様は何処かおかしな日本語を喋りながら、俺に話しかけてきた。

「えっと・・・こちらこそよろしくお願いします。お姫様」

どう接して良いのか分からないが、何とか挨拶を試みてみる。

「そんなに硬くならなくても良いぞ。そなたには特別に、我をファーストネームで呼ぶ事を許可してしんぜよう」

以外にもフランクな姫様は、とても硬い感じの挨拶をしてきた俺に対して、優しげな言葉をかけてきた。

やっぱり何処か変な日本語ではあるけれど・・・

「それじゃあ・・・宜しく。・・・エミリーちゃん」

「様を付けぬか！この馬鹿者が！！！」

俺の頭頂部にお姫様のチョップが炸裂した。

どうやらお姫様の中では、俺は今同級生であると同時に雇われた使用人的な位置付けにある様だ。

だから、呼ぶ時は敬意を込めて様付けしなければいけないらしい。

お姫様改め、エミリー様専属のお世話係になった俺は、痛む頭頂部を擦りながら、取り敢えずこんな事を思った。

この仕事は報酬出るんだろうかと・・・

「計画の首尾はどうなっている？」

薄暗い会議室と思われる部屋の一室で、男は質問する。

「はい。計画は順調に進んでいます。例の物も無事に散布し終えましたので、予定通り実験の開始は今から五時間後に」

質問されたもう一人の男がその質問に対して答えを返す。

「そうか・・・もうすぐだな。この実験が成功すれば、君にも約束していた物を用意する。確りと頼むぞ」

男の答えに満足した様に頷いた男は、報酬をちらつかせながら、念入りに答えを返した男に言い聞かせる。

「はい。・・・しかし宜しいのですか？あの者を野放しにしておいて。もしかしたら私たちの障害になるのでは？」

男は言葉に不安という感情を乗せながら進言する。

「ふふ・・・別に構わんさ。どうしても邪魔になるようならば消してしまえば済む事だ。それにあれにはまだ利用価値も残っているしな」

「利用価値ですか？」

「君が気にする事でも無いだろう。それよりもまずは例の実験を成功させる事が今は重要だ」

男は笑う。

深い闇の様な笑みは、まるでこの部屋と男の内面を表しているかの様だった・・・

私立聖祥大附属小学校は初日から授業がある。

一般の小学校なら初日は、校長の演説聴いたら即終了な所が多いかもしれないが、生憎とこの学校はそんな日本の伝統は通用しないみたいである。

さて、そんな訳でお姫様であるエミリー様の専属お世話係に、見事抜擢された俺も、この学校に通う一学生である為、当然の事ながら授業を受けていたりする。

エミリー様の留学期間は、真理子先生の話しでは二週間だけなのだそうで、実は俺のやる事はそんなに多くなかったりする。

ようは二週間の間はなるべくエミリー様を一人にしない様に心掛ければそれで良いんだそうだ。

それに意外な事にエミリー様は、少しおかしな日本を使う以外は、何処にでも居る女の子とさほど変わり無かった。

まあ、礼節やらそういった事はさて置き、エミリー様本来のお世話係であるサバスチャンという人が俗世の事も教えてくれるんだとか。

サバスチャンとは、朝一番に教卓前で真理子先生とガチンコトークバトルを繰り広げていた執事服を身に纏っていた老人の事である。

エミリー様の少し変な日本語もそのサバスチャンが教えた物らしい。

ちなみにどんな教え方をされたのか聞いてみた所、エミリー様が一冊の本を鞄から取り出して、俺に見せてくれた。

その本を参考にしてエミリー様は日本語を勉強したそうだ。

本の表紙には、やけに可愛らしいく、見覚えのある女の子のイラストが描かれていた。

その本のタイトルは、

【萌え萌え！マジカルナノネの日本語講座♪】

とても返答に困る物を持ち出された俺は困惑した。

取り敢えず今の俺に出来る事は、エミリー様にサバスチャンと二人きりの時は、絶対に油断しない様に注意を促す事だけであった。

他には特に変わった事も起こらず、無事に放課後を迎えた。

放課後といっても、今日は午前中だけの授業しかなかったので、まだお昼前ではあるけれど。

流石にこの学校も二学期の登校初日に午後までたっぷりと授業をする気は無いようである。

「エミリー様はお帰りになる際は如何するんですか？」

この数時間ですっかりと様付けが慣れた俺は、帰り支度をしながらエミリー様に話しかける。

脳内でも既に様付けが固定されているあたり、後戻り出来ない領域に既に足を踏み入れているんじゃないかと、多少の不安を抱く。

「帰りは我の護衛の者達とサバスチャンが来る予定じゃ。案ずる事はないぞ」

俺の質問にエミリー様が笑顔で答える。

それを聞いた俺は安心する。

最近の海鳴はホルダーが出たりと物騒な事が多いから、これで徒歩で帰られて事件にでも巻き込まれたりしたら、国際問題に発展する危険すらある。

サバスチャンには別の意味で危機感を感じるが、あの屈強な男達がエミリー様を護衛するなら、特に心配する事も無さそうだ。

「それじゃあ、校門までお見送りしますね」

「うむ。頼むぞ板橋」

俺はエミリー様と連れ立って教室を後にして、校門へと向かった。

「所でエミリー様は、シルバーライト島では、現地の学校に通われていたんですか？」

廊下を無言で歩くのも何なので、俺は軽い世間話等をしてみる事にした。

今日一日ではあるが、俺はエミリー様と一緒に居る時間と、会話をする機会も多かったので、多少の日常会話をするほどの仲にはなっていた。

他のクラスメイト達なのだが、朝の姫様チョップが原因なのか、相手がお姫様という事で気後れしているのか、軽い挨拶程度はするものの、あまり話しかけて来る事はしなかった。

なのはちゃん達ですら話しかけて来ないのだから、よっぽどだろう。

でもその最大の要因は、エミリー様自身にある様に思えた。

お世話係に任命された俺に対して以外は、何処かクラスメイト達を遠ざける様な態度を示してくるのである。

それが他国のお姫様としては、当然なのか俺には分からないが、俺への態度と比べると、どうもそういう事では無さそうだ。

「いや、島にも幾つかの学校はあるのじゃが我は立場もあるのでな。勉学は全て家庭教師じゃ。こういった場所で勉強をするのは始めての経験じゃな」

エミリー様は何処か困惑した様な表情と、恥かしそうな表情を合わせた様な顔をして答えた。

「それじゃあ、エミリー様は今日が学校初体験って事だったんですね。でも何で此処に交換留学生としてやってきたんですか？今までシルバーライトの王族の人が日本の学校に通った何て話は初めて聞きましたけど？」

少し立ち入った事を聞いてしまったと思うが、気になっていたのだから仕方が無い。

そもそも、あんなにも厳重な護衛体制を敷くならば、余程の事態でも起こらない限り、こんな事等しないだろう。

聞けなくても当たり前な精神で俺はエミリー様に質問した。

エミリー様は俺の質問に、一瞬だけ瞳を大きく見開き動揺するが、すぐにその表情は形を潜めた。

「・・・悪いが言えぬのじゃ。すまぬな。隠し事等をする主で・・・じゃが」

「ひ～め～さ～まあああああああああああああ！！！！！！」

エミリー様が俺に何かを言いかけたその時、外から校舎の全ての窓をぶち抜けそうな程の大声が轟いた。

「・・・どうやら迎えが来たようじゃな。急ぐぞ板橋」

先程の話はこれで終わりと言わんばかりに、エミリー様は校舎の玄関に向けて早足で歩き始める。

エミリー様が俺に何を秘密にしているのか、さっきは何を言おうとしていたのか、とても気になるが、この様子では聞いても答えてくれそうには無い。

「待ってくださいよエミリー様」

俺も少々不躾な質問をしてしまった事に反省しながらも、エミリー様を追いかけて、揃って校門へと向かった。

「ご無事でしたか姫様!?サバスチャンは姫様と引き離されたこの数時間、生きた心地が致しませんでしたぞ!!!!!!!!!」

校門前にやって来たエミリー様を目撃した、老執事こと、サバスチャンは咽び泣きながらエミリー様に抱きつこうとするが、慣れた手付きの屈強な護衛達により取り押さえられた。

護衛達のやれやれまたかといった表情から、このサバスチャンの奇行が一度や二度で無いことは、この光景を始めて目撃した俺でも容易に想像出来る。

「全く心配性じゃな、サバスチャンは・・・」

エミリー様が苦笑いを浮かべながら言ってはいるが、止める相手が居なくて本当に抱きつこうものならば、この老人は笑い事では済ませられない事になりそうな勢いがある気がするのは、俺の思い過ごしだろうか。

暫くは興奮状態で話にもなら無そうだったからか、護衛の一人がサバスチャンの代わりにこちらに近づいて来た。

「お迎えに参りました姫様」

いかにも歴戦の戦場を渡り歩いてきたソルジャーだと言わんばかりの、顔のそこらじゅうに古傷を持った大男がエミリー様に話しかけてきた。

「うむ。ご苦労じゃったな黒澤」

エミリー様に労いの言葉を貰った大男は一礼した後、エミリー様の隣に居た俺に視線を向けた。

その厳つい顔で見られた事により俺は、一瞬だけ命の覚悟をしてしまいそうになった。

正直に言おう。

この人めっちゃ顔恐い・・・

「姫様。この少年は？」

何とか表面上は平静を装う俺というか恐怖で微動だに出来ない俺を見ながら、黒澤と呼ばれた大男が、エミリー様に質問する。

「その者は我が学校に通う間、の世話係になった板橋じゃ、短い間ではあるが、黒澤達同様に我に仕える同僚じゃ。良きにはからえ」

「はっ！」

黒澤と呼ばれた大男がエミリー様に向かい敬礼すると、今度は確実に俺の所にやって来た。

「私の名前は黒澤一夜〈くろさわいちや〉だ。この護衛隊の隊長を務めている。校内には基本私達は立ち入る事が出来ないので、姫様の事を宜しく頼むぞ。板橋君」

改めて俺に自ら自己紹介をした黒澤さんは、俺に右手を差し出し握手を求めてきた。

「えっと、エミリー様のクラスメイト兼お世話係になった板橋純です。こちらこそよろしくお願いします」

俺はおっかなびっくりしながらも差し出された右手を掴み、大男と少年の傍から見れば奇妙にすら見えそうなシェイクハンドを成功させた。

「さて、それではホテルに戻りますよ姫様」

長くとも短くとも思える握手時間が終了すると、黒澤さんがエミリーさんにそう進言した。

「そうじゃな。それでは今日は、ご苦労であったな板橋。明日もこの調子で頼むぞ」

エミリー様は黒澤さんの進言を聞き入れると、今度は俺に労いの言葉をかけた。

「それでは外に車を用意させているので、お乗りください姫様。T！姫様を送迎の車にお連れしろ！」

黒澤さんがそう言うと、護衛隊の一人が返事をして俺達の前に走ってくる。

「はい！了解しました隊長！」

走ってきたTと呼ばれた人物は、他の屈強な男達と違い高校生ぐら

いと思われる好青年だった。

見方によれば、現役高校生の恭也君よりも若く見えるかも知れない。

Tと呼ばれた隊員は俺を見ると、笑顔で話しかけてきた。

「宜しく。板橋君。暫く俺は護衛隊では専任で姫様のお付きで、君と会う機会も多いと思うから、挨拶しておくよ。隊長が呼んでいた通り俺はTだ。改めて宜しく」

先程の黒澤さんと同じく、Tさんも俺に握手を求めてきた。

「板橋です。こちらこそ宜しくお願いします。ところでTって珍しい名前ですね？」

俺は求められた手を取り握手をしながら、素直に思った事を口にした。

「へ？ははは。違うよ板橋君。俺の本名は他にちゃんとあるさ。これは仕事上のコードネームさ。隊長のように特別な役割を担っている人意外は効率的な作業が出来るように便宜上の名称が使用されているだけだよ」

説明を終えたTさんは俺の質問が余程つぼに入ってしまったのか、いまだに笑っている。

「T！私語はそれ位にして仕事をしろ！」

Tさんの笑いに腹を立てたのか黒澤さんが一喝する。

「まあ、良いではないか。サバスチャンの暴走に比べれば、この様な私語なぞ可愛いものじゃ」

エミリー様が怒った黒澤さんをたしなめる。

一応は認識してるんだな、エミリー様もあの老執事の変態性を・・・

「・・・確かにそうですね」

そしてそれで納得しちゃうんだ黒澤さん!?

サバスチャンはこの人達にとってどういう位置付けなのだろうか？

今も尚、隊員さん達に押さえつけられながらも、エミリー様に抱きつく事を諦めずにもがくサバスチャンを見ながら俺は、密かにエミリー様の将来を心配してしまった。

「それでは参りましょうか。姫様」

「うむ」

Tさんの言葉に頷くエミリー様。

俺は校門の外へと歩いていくその姿、を手を振りながら見送った。

やがて姿も見えなくなり、無事に役目を果たした俺は大きく伸びをした。

「さてと俺も帰るか『キンキュウケイホウキンキュウケイホウ・・・』ホルダー反応!?」

ポケットに忍ばせていたタッチノートが警報を鳴らすと同時に、俺にある人物が声をかけてきた。

『マスター。街で十体以上のホルダーが暴れているぞ！』

俺の事をマスターと呼ぶのは一人しかいない。

声に振り向けば予想通りその姿が俺に向かって走ってくる。

だがそれよりも気がかりな事は、話していた内容にあった。

「どういう事だよメカ犬！？今までホルダーがそんなに同時に同じ活動するなんて無かっただろ！？」

俺はすぐ傍まで走ってきたメカ犬に対してどういう事なのか問質す。

『同じ時期に同じ欲望でホルダー化したのであれば可能性はゼロでは無いが、その可能性は限りなく低い筈だ。しかし現実にホルダーは同時に複数・・・いやもしかしてこれは！？』

「何か分かったのか？」

『・・・いや、確証も無いのに下手な事は言えないな。すまないマスター。だが実際に多数のホルダーが街で暴れているのは確かだ』

メカ犬の言うとおり、原因はさて置き、一刻も早くホルダーを止めないとこの海鳴市が大変な事になる。

「行くぞメカ犬！」

『うむ！』

俺はメカ犬と共に学校を出て、現場へと向かった。

「確かに、ホルダーだらけだな・・・」

『うむ』

チェイサーさんを呼んで、急いで駆けつけたのだが、現場にはメカ犬が校舎前で言っていた様に、少なくても十体以上のホルダーが文字通り暴れていた。

しかもホルダー達の姿は全員同じ姿をしていた。

黒いボディスーツに頭部が骸骨を模した形をしている。

「取り敢えず、こいつ等を如何にかしないとな」

『・・・』

「如何したメカ犬？」

既に仮面ライダーに変身しているので、メカ犬はベルトの状態で俺の腹部に巻かれているのだが、返事を返さない事を疑問に思い、如

何したのかと改めて聞いてみた。

『・・・いや、どうにもこのホルダー達に違和感を感じるのだ』

考え事をしていただけだったのか、メカ犬はすぐに返事を返した。

しかし同時に気になる事も言ってくる。

「違和感？」

『うむ。このホルダー達は、今まで戦ってきたホルダーと何処か根本・・・いや、別の何かが混ざっている様な違和感がある』

「何かが混ざっている？」

メカ犬の言おうとする事が段々と難解になってきた。

『マスターはフェアリーベルの事を覚えているか？』

「・・・ああ」

確かに覚えている。

あの子の事を忘れるなんて俺にはそれこそ無理な話だ・・・

『そのフェアリーベルや街で戦った能力で作られた四体のホルダーと全く同じでは無いが、近い感じがあのホルダー達から感知出来るのだ』

「それって、あいつ等も何かの能力で作られた人工のホルダーって

事か？」

『今の段階では、情報が少なすぎて何とも言え無いが、今の所その可能性が最も高い』

まあ、奴らの正体はさて置き、今俺達がやらなきゃならない事は・・・

「兎に角戦うぞメカ犬！どっちにしろ放っておく訳にも行かないだろ！？」

『うむ。だが気をつけろマスター』

「分かってるさ！！！」

俺はメカ犬に返事を返すと、最も近い場所に居たホルダーに接近して、殴りかかる。

それを合図に周りに居た他のホルダー達も、目的を街の破壊活動から、突如現れた邪魔者の排除、つまり俺と戦う事に目的を変えたらしく、一斉に襲い掛かってくる。

『来るぞマスター右だ！』

メカ犬からの状況報告が俺の耳に届く。

「ふん！」

俺は上体を斜めにして右方向から来るホルダーの攻撃を避けて、反対に拳を叩き込んで吹き飛ばす。

更に正面から、二体のホルダーが迫る。

一体は飛び込み様に蹴りを入れて下がらせてから、その隙にもう一体の相手をする。

しかしその瞬間背中に衝撃が走り、俺は後方に吹き飛ばされる。

「ぐは！？」

俺はホルダー達の囲みから少し離れた場所に転がる。

『大丈夫かマスター！？』

痛みはあるが動くのに支障は無いので、俺はすぐさま立ち上がり、メカ犬に答えを返す。

「ああ、でもこうも数が多いとやりにくいな」

『戦い方を変えるぞマスター。相手が数で来るならば、こちらはスピードで勝負だ』

「分かった！」

俺はベルトの右側をスライドさせて、緑色のボタンを押す。

『スピードフォルム』

音声が流れると同時に俺の全身を光が包みこむ。

光が飛散すると、先程までメタルブラックだったボディーカラーがライトグリーンに変化する。

更に俺は緑のボタンの近くに配置されている黄色のボタンを続け様に押す。

『スピードロッド』

バックルから俺の目の前に光の粒子が集まりだす。

それを俺が掴んだ瞬間に更なる変化が起きて一つの形を成した。

その名称はスピードロッド。

棒状の武器で、このスピードフォルムの専用装備である。

俺はスピードロッドを構えて、目の前のホルダー達を見据える。

「飛ばすぞメカ犬！」

『うむ！』

このフォルムは全フォルム中最も早さと跳躍能力に特化している。

代わりに肉弾戦の能力が若干下がる為に、それを補う武器も用意されているのだ。

俺はその素早さを活かして一気にホルダー達との距離を詰める。

「は！」

スピードロッドを縦横無尽に振り回して、困惑するホルダー達に連撃を叩き込む。

やっと自分達の置かれた現状に気付いたのか、反撃を開始するが、それを黙って容認する訳には行かない。

ロッドの先端をホルダーの一体に引っ掛けて壁にしつつ、最後に吹き飛ばす。

残りのホルダー達は、持ち手を端に持ち替えたロッドを、円形に振り回して牽制する。

『囲まれたぞマスター！』

メカ犬から声が飛ぶ。

「好都合だ！」

俺はその声に短い返事を返しながら、バックルからタッチノートを引き抜き、スピードロッドの溝にスライドさせる。

『ロード』

音声を確認してから、再びタッチノートをバックルに差し込む。

『アタックチャージ』

ベルトから発生した光が右腕のラインを通って、スピードロッドの先端に集約される。

「こいつで決めるぜ」

俺はスピードロッドを光りが集約された先端を前方に向けて構える。

「スピードロッド」

そのまま自分を支点として振り回す。

「ウインドテイスティング」

真空の刃が波紋を描きながら円状に広がり、俺を囲んでいた全てのホルダー達に見事命中して、爆発を引き起こした。

「・・・ふう」

全てのホルダーを倒した事を確認した俺は、安堵の溜息を零す。

『やったなマスター』

「ああ」

メカ犬の労いの言葉を聞きながら俺は、爆発の起こった地点を観察する。

其処には、倒したホルダーと同じ人数の気絶した人たちが居た。

子供から大人まで、年齢も性別も血縁関係も無さそうな彼らが、何故同じ姿のホルダーになっていたのか、疑問に思う。

「ん、これは？」

俺は見慣れない物が落ちていたので、近づいて拾い上げてみる。

形としてはビー球程の大きさの球体でひび割れている。

それは黒色だったが、これはまるで・・・

「もしかして、これも暴走プログラムなのか！？」

俺はベルト状態のメカ犬に確認を求める。

『いや、この世界に送られてきたシステムは、全て同一の筈だ。新たに送られてきた物ならば、こちらから反応が確認できるだろう』

帰ってきた返答は否定の言葉だった。

『だが、それは確かに暴走プログラムに類する物で間違いない』

否定したと思えば今度は肯定の言葉を言ってくるメカ犬。

どうにも要領を得ない。

「結局これは何なんだよメカ犬？」

『・・・あり得ないと思うのだが・・・いや現に実物があり、使用者が実際にホルダー化したのだ。これは純然たる事実として受け止めなければならないな』

メカ犬は暫く自問自答を繰り返したが、やがて自分の中に一つの答

えを導き出したのか、俺に説明し始めた。

『マスター。事態はワタシ達が思っている以上に、深刻になっているかも知れない』

「どういう事だよ？」

『恐らくマスターが今手に持っているそれは、暴走プログラムの模造品だ』

「模造品？」

『うむ。予測ではあるがそれは、この世界の誰かが、本来の暴走プログラムを基に作成したこの世界の暴走プログラムだ』

メカ犬の発した言葉に俺は、一瞬思考が停止した。

だがすぐに考えを再開してメカ犬に疑問をぶつける。

「この世界の技術で、そんな事可能なのか！？」

『難しいだろうな。いや、今の技術力で完全に再現するのは無理と断言できる。だが現実として実物は目の前に存在している』

誰がこんな物をどうやって作ったのか、この先俺達が何をすべきか思案しようとしたその時に、背後に人の気配を感じた。

振り返ると、其処には一人の少女が居た。

腰まで届く綺麗な銀髪が風に流れる。

端整な顔立ちに、強い意志を秘めた瞳が俺をみつめている。

俺はその少女を知っている。

知っている所か、少し前まで一緒に居たのだ。

見間違える筈も無い。

今俺の目の前に居る少女の名は、エミリー・シルバーライト・キャンベル。

正真正銘シルバーライト島のお姫様である。

如何して護衛の人達と帰った筈のエミリー様がこんな場所に居るのだろうか？

さっきから訳の分からない事の連続で頭が如何にかなりそうである。

「おぬしが仮面ライダーじゃな？」

エミリー様が俺に、仮面ライダーに話しかけてきた。

取り敢えず俺はその問いに無言で頷いた。

「・・・そうか」

俺が頷いたのを見て、安心したのか少しだけ微笑むが、すぐに真剣な表情をしたエミリー様が俺に近づいてくる。

「率直に用件を言おう。我の頼みを聞いて欲しい」

そう言ったエミリー様は一枚の紙を取り出して俺に突き出してきた。

「この場で全てを話したいのじゃが、今の我には其処までの時間は残されていないのじゃ。すまぬが、おぬしに我の話を聞く意思があるのなら、明日この紙に書かれた時間と場所に来てはくれぬか？そこで全てを話す」

俺は突き出された紙を受け取った。

するとエミリー様は再び笑顔を浮かべてから、後ろを向き、頼むぞと呟くと、その場を去って行った。

俺はその後ろ姿を無言で見送りながら、一体何が起ころうとしているのか、考えを巡らせる事しか出来なかった。

暗い会議室の様な部屋で椅子に座った男が、目の前で直立する男に話しかける。

「実験は上手くいったか？」

「はい。起動に問題も無く、使用者に対してのマインドコントロールも完璧です。ただ・・・実験体は全てロストしました」

「仮面ライダーか」

「はい」

「構わんさ。寧ろ後の処理をせずに済んだ事を感謝したい程だ」

「しかし、奴が計画に気付けば面倒な事になるのでは？」

男の質問に椅子の背もたれに身を寄せながら座っていた男は笑みを浮かべる。

「奴の預かり知らぬ場所で計画を実行すれば良いだけの話だ。流石の仮面ライダーも知らなければ、海を越えてまでやってくることはあるまい」

そこで直立していた男が、新たな情報を提示する。

「それに関してご報告があります」

「何だ？」

「その仮面ライダーなのですが、戦闘後に例の人物と接触した様です」

その言葉を聞いた男からは先程までの余裕の笑みが消えて、怒りの表情を露にする。

「あの小娘が・・・突然日本の学校に通うと言い出した時は、丁度良い口実が出来たと思っていたが、これが狙いだったのか！」

「その様ですね。私も油断していました」

「それで、計画は仮面ライダーにばれたのか！？」

椅子に座った男が声を荒げる。

「いえ、接触はしましたが、今の所はそれだけの様です。しかしこのまま放置すれば、確実に計画は知られるでしょう」

「ふん、下手に手を出せば、其処から計画が明るみになるかも知れないと思い放置していたが、実験が成功した今ならばその必要も無いだろう」

「それでは、処理なさるのですか？」

男の質問に対し、幾分か溜飲を下げたのか椅子に座った男は冷静な口調で新たな指示をだす。

「・・・いや、あれにもまだ利用価値はある。生け捕りにしろ」

「はい。決行は何時にしますか？」

「明日で構わん。方法はお前に一任する。なるべく穏便に頼むぞ」

「それでは明日の夕方という事で宜しいですか？」

「仮面ライダーに話される前に確保できればそれで良い。ああ、それと・・・」

椅子に座っていた男は大人の手の平に入り込む程度の大きさの箱を取り出して、直立した男に手渡した。

「君への報酬だ。君の分と別に、予備としてもう一つ用意してあるから、君が自分で使うなり、誰かに使わせるなり、好きに使いたまえ」

「・・・ありがとうございます」

箱を受け取った男は一礼すると部屋を後にした。

椅子に座った男は窓の外に目を向ける。

「もうすぐだ・・・もうすぐ計画は現実の物になる！」

窓の外に広がる海鳴市の光景と違い部屋の中は、漆黒の闇に彩られていた。

「起きろなのはちゃん！早く起きないと遅刻するよ！」

朝の高町宅の末っ子の部屋。

俺の幼馴染であるなのはちゃんは、相変わらず朝に弱いらしく、布団に包まり微動だにしない。

「・・・あと五分」

テンプレートで使い古された言葉を使うなのはちゃんに、俺は飽きれたと言わんばかりの溜息を吐く。

「仕方ないか・・・」

この手段だけは使いたくなかったのだが、起きないならばこちらにも考えという物がある。

俺は布団の端を掴むと、力の限り引っ張った。

「どっせい！！！」

「にゃああ！！？」

布団に包まる様に入っていたなのはちゃんは、引っ張られたことにより、中で回転して最後はずり落ちて、俺にそのパジャマ姿を曝け出した。

「おはよう。なのはちゃん」

俺は今最高の笑顔で挨拶している事だろう。

「・・・おはよう御座います」

今日一番の戦いは俺の勝利で幕を下ろした。

なのはちゃんの身支度が完了するのを待ちつつ、俺は紅茶を優雅に

頂く。

準備が整ったなのはちゃんを連れて、学校のスクールバスを待つのは俺のライフワークである。

今日はなのはちゃんを起こすのに少し手間取ったので、ギリギリの時間になってしまったが、何とか無事にバスに乗ることが出来た。

「おはよう。なのは、純」

「おはよう。何だか今日はドタバタしてるね」

バスに飛び乗った俺となのはちゃんに、アリサちゃんとすずかちゃんが挨拶をしてきた。

なのはちゃんはいまだに大量の酸素を必要としているのか、後ろで今もゼーゼー言っているので、俺がなのはちゃんの分まで挨拶を返す。

「おはよう。二人とも」

「今日は何だか何時もより遅かったけど如何したの？」

すずかちゃんが俺に話題を振ってくる。

「・・・いや～今日はなのはちゃんが中々に手強くってね」

俺は今も後ろで息切れしているなのはちゃんを見ながら、苦笑いしながら答える。

二人もなのはちゃんを見ながら、ああまたなの・・・という表情をする。

俺達三人の視線に、何か言いたそうな顔をするなのはちゃんではあるが、まだ喋るまでは回復していないようで荒い呼吸を繰り返すばかりであった。

その後席に座って、なのはちゃんの息が整うのを待ってから、再び雑談が再開された。

「・・・って言う訳でさ。今の所エミリー様が俺以外と昨日はあんまり話そうとしないんで、皆にもっと積極的に話しかけて欲しいんだよ」

俺は話題の一つとしてと同時に昨日の気になった事をなのはちゃん達に話した。

「話すのは構わないんだけどね・・・」

「う～ん・・・」

「難しいかもね・・・」

快く了承してくれると思っていたのだが、三人の反応はイマイチだった。

「如何したの皆？」

三人の話をまとめると、なのはちゃん達以外にも女子はほぼ全員一度は話しかけたらしいのだが、如何にも壁を挟んで会話をしている

様に感じてしまって、話が続かないそうなのだ。

「・・・まあ良いわ。今日は午後の授業まであるから、一緒に昼食を食べましょう。頼んだわよ純」

「私ももっとエミリーちゃんとお話したいしね」

「そうだね」

話にくい印象はあるそうだが、三人ともエミリー様ともっと話したいという意思はあるようで、最後は賛成してくれた。

話が一段落ついた所で、スクールバスが学校前のバス停で停止する。

運転手のおじさんに御礼を言ってから、バスを降りて校門に向かう。

「姫様！！！！！サバスチャンは姫様と離れる事が悲しゅううううう御座いまあああああああす！！！！！！！」

校門前には、昨日から知り合ったシルバーライト島のお姫様であるエミリー様と、その変態老執事サバスチャンと護衛隊の人達が居た。

サバスチャンは相変わらず、護衛隊の人達に取り押さえられている。

どれだけハッスルお爺ちゃんなんだろうかこの人は・・・

サバスチャンを苦笑いしながら眺めていたエミリー様だったが、ふと俺の居る方向に視線を向けると、爽やかな笑顔に変わり、手を振ってきた。

多分俺にこっちに来いと言いたいのだろう。
俺はエミリー様の傍に歩き始める。
「おはよう。エミリー様」
近くに来てから、俺はエミリー様に挨拶する。
「うむ。おはようじゃ。今日も我の世話役を頼むぞ板橋」
昨日街で会った時とは違い、放課後に別れた時のエミリー様がそこに居た。
結局昨日のあれは何だったのか、俺の中に未だ答えは出ないでいる。
「如何したのじゃ板橋？」
考え込んでいる俺を見て、エミリー様が心配そうに声を掛けてくる。
「・・・いえ、考え事をしていただけ何で、何でも無いですよ」
俺は何でもないと言って、笑って誤魔化した。
「えっと・・・おはようエミリーちゃん」
俺の後ろからやって来たなのはちゃんが、今の雰囲気ならいけるかも知れないと思ったのか、エミリー様に挨拶を試みた。
その後に続き、アリサちゃんとすずかちゃんもエミリー様に挨拶をする。

すると、エミリー様は何処か、固い表情になりながら、三人に挨拶を返した。

「お、おはよう・・・」

何だか借りてきた猫の様になってしまった。

俺とは普通に話していたのに、何でなのはちゃん達には、素っ気無い対応になってしまったのだろうか？

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

確かにこれじゃあ、会話も続かないというのにも納得である。

「そ、それじゃあ私達先に行くね純君」

何とか体裁を保ってすずかちゃんが言うと他の二人もそれに頷く。

「お昼の件。頼んだわよ。純」

去り際にアリサちゃんが、力一杯俺の背中を叩きながらそう言うと、三人とも逃げるように校舎に向かっていった。

「・・・」

エミリー様の様子を伺うと、未だに沈黙を保っている。

「エミリー様。俺達も早く行かないと、遅刻扱いにされちゃいますよ？」

俺の声に反応したのか、エミリー様の身体が一瞬跳ね上がる。

「そ、そうじゃの。早く行くぞ板橋」

まだ若干ギクシャクとした動作ではあるが、なのはちゃん達に話しかけられる直前の状態に戻ったエミリー様は校舎に向けて歩き出した。

その後、午前中の授業は何の問題も無く、滞り無く進み、お昼休みが訪れた。

俺はエミリー様に昼食は屋上で食べようと進め何とか了承を得た。

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

気まずい。

俺は今非常に気まずい空気の中で、如何にかこの状況を打破出来ないかと、思考を巡らせ続ける。

エミリー様を屋上に呼ぶという所までは計画していたのだが、その先は全くのノープランだった。

それはなのはちゃん達も同じだったのだろう。

エミリー様は朝の時と同じ借りてきた猫状態だし、他の三人も会話をする切欠を掴めずにいる。

・・・ここは俺が如何にかするしか無いって事か！？

考えるんだ！

板橋純！

俺は前世で大人だったんだぞ！

女性を喜ばせる話題の一つや二つ位・・・

思い浮かばなかった・・・

そういえば俺って、前世からも含めて、彼女が居た事すら一度も無

かったんだっけ・・・

「と、取り敢えず食べよっか皆・・・」

今の俺に出来る事は、これが精一杯だ。

皆ごめん。

不甲斐無い俺を如何か許してくれ・・・

「そ、そうね」

辛うじてアリサちゃんが頷いた事により、それを合図にして其々がお弁当を準備し始める・・・一人を除いて。

他の全員が準備を始める中で、エミリー様だけが、何もせずにジッとしているのだ。

「お弁当準備しないんですか？」

俺はエミリー様に何か有ったのかと思い、話しかける。

「・・・のじゃ」

エミリー様が、小さな声で呟く。

俺には残念な事に、その声を聞き取る事が出来なかった。

「え？」

思わずそんな声が零れる。

「・・・いのじゃ」

もう一度呟いたかと思うと、今度は大声でエミリー様が叫んだ。

「我はお弁当なぞ持ってきておらんのじゃ！！！」

突然の叫びに、なのはちゃん達の動きも止まり、此方に注目する。

「わ、忘れたって事ですか？」

「・・・最初はサバスチャンが、我に持たせようとしたのじゃが断ってきたのじゃ」

エミリー様が少し涙目になりながら俺を見る。

「な、何で断ってきたんですか？」

「楽しみにしてたのじゃ・・・」

「楽しみ？」

「うむ。学校には給食という特別な食事があるのじゃろ？我はそれを楽しみにしていたのじゃ」

何となくだが、エミリー様の言いたい事が俺にも理解出来た。

エミリー様は学校に来るのは初めてだと昨日言っていた、人間ってのは興味が有っても、普段は出来ない事なんかには、異常なまでの

期待を抱く事が多々あったりするものだったりする。

確かに、普段学校に行けない人にとって、給食っていうのはある種の憧れみたいなものが有るのかもしれない。

エミリー様にとって、残念な事だが、この学校に給食制度は無いのである。

付属の中学校からならば学食があるのだが、小学校には購買部しかない。

「楽しみにしていたのじゃぞ。本当に・・・」

エミリー様が半端なく落ち込んでいる。

楽しみにしていたのは良く分かったのだが、無いものは無いので、何時までもこのままにして置く訳にはいかない。

取り敢えず購買で何か買ってくるかと、立ち上がろうとした時、俺とエミリー様以外の声が聞えてきた。

それは笑い声だ。

必死に堪え様としているのに、止められないといった感じの笑い声が俺の耳に入ってくる。

笑い声の発生源は目の前のなのはちゃん達だった。

「なんじゃ、おぬし達。我の不幸を笑うなぞ酷いでは無いか・・・」

流石にエミリー様もこれには怒りを覚えたのか、涙の溜まった瞳でなのはちゃん達を睨みながら、抗議の声を上げる。

「ご、ごめんなさい・・・でもおかしくって・・・」

三人の中で比較的、笑いの浅いすずかちゃんが謝罪の言葉を口にする。

なのはちゃんとアリサちゃんは、喋る余裕も無いのか、両手でお腹を押さえて蹲り、プルプルと震えている。

暫くして笑いの収まった三人は、エミリー様に平謝りした。

「「「本当にごめんなさい」」」

「・・・分かれば良いのじゃ」

「それで・・・お詫びって訳じゃないんだけど、お弁当が無いなら私たちのお弁当を分けてあげるね、エミリーちゃん」

頭を上げたなのはちゃんが、提案を出してくる。

その両脇で一緒に謝っていた二人も、なのはちゃんの提案を支持した。

「そ、そうか・・・それはすまんの・・・」

「ちがうよエミリーちゃん」

エミリー様の言葉をなのはちゃんが遮る。

「こういう時は、ありがとうって言うんだよ」

なのはちゃんの言葉に、エミリー様は顔を赤く染めて、遠慮がちではあるが、感謝の言葉を口にする。

「あ、ありがとう・・・なのじゃ」

「どういたしまして」

俺の目の前で、とても微笑ましい光景が繰り広げられる。

「何だ。普通に話せるじゃないの」

なのはちゃんとエミリー様のやり取りを見たアリサちゃんが、思った事をそのまま口にした。

「あの、エミリーちゃんは如何して純君とは普通に話せるのに、私達と話す時は別人みたいに無口になるの？」

続いてすずかちゃんが、この場の誰もが気になっていた事への核心をつく質問をする。

「そ、それはのう・・・」

恥かしそうに語り始めるエミリー様の姿に、俺達四人の視線が集中する。

「初めてなのじゃ」

「「「「え？」」」」

エミリー様の言葉に俺達四人は思わず同じ言葉を発してしまった。

「板橋には話したと思うのじゃが、我は学校に通うのは昨日が始めてだったのじゃ」

俺達の様子を見ながら、エミリー様の話は続く。

「我は今まで城から一人で出る事など無くてのう、家臣の者以外と接するなどこれが始めての事なのじゃ・・・」

それって事はつまり・・・

「俺と普通に話せてたのはもしかして・・・」

「家臣として接していたから、板橋とは何とか話が出来たのじゃが、やはりそれ以外の者とは、何を話せば良いのか分からなくてのう・・・」

エミリー様はそれだけ言うと、恥かしそうに俺達から視線を逸らせてしまう。

するとなのはちゃん達三人はその場で立ち上がり、突然自己紹介をし始める。

「私は高町なのは」

「私はアリサ・バニングスよ」

「私は月村すずかです」

三人の自己紹介に、驚きを隠せない表情をするエミリー様。

「と、突然如何したのじゃ？おぬしら・・・」

「なのはだよ」

なのはちゃんが再びエミリー様の言葉を遮る。

「まずは私達を名前で呼んで。お友達になるのはそこからだもん」

なのはちゃんは笑顔でエミリー様に言った。

「我が・・・友達？」

エミリー様の言葉になのはちゃん達が頷く。

その様子を見たエミリー様は、意を決した様に立ち上がると、目の前のなのはちゃん達を見据えた。

「我の名はエミリー・シルバーライト・キャンベルじゃ」

屋上にエミリー様の声が響き渡る。

「これで我も友達なのじゃろ・・・なのは？」

エミリー様は恥かしそうに、はにかみながら、なのはちゃんの名前を呼んだ。

「うん！」

なのはちゃんはその問いに元気良く答える。

この瞬間エミリー様となのはちゃん達はかけがえの無い友達になったのだ。

これで俺が気がかりな事の一つは解決した。

後は・・・

「さっきから何を黙っとるのじゃ？」

考え事をしていた俺の目の前に、突然エミリー様の顔を近づく。

内心驚いたが、何とか態度には出なかったようなので、俺は平静を装う。

「ちょっと考え事をしてただけですよ。それより如何したんです？」

「ぬ～何か堅いのう」

「は？」

「板橋はなのは達と話す時と、我が話す時の喋り方が違い過ぎるのじゃ。我に対しても同じ様に話さぬか！」

何やらエミリー様は、俺の喋り方が、なのはちゃん達と接する時と違う事が気に入らないらしく、お怒りになっている。

そうは言われても、下手すれば国際問題に発展しかねないんだからしょうがないと俺は思うのだが・・・

「そうじゃ！」

エミリー様は、良い事を思いついたという顔をして、俺に提案してくる。

「いまから我も板橋の事を名前で呼ぶ！じゃから板橋も我にもっと親しげに話しかけぬか？」

捲し立てる様に説明したエミリー様は、早速始めようと俺の目の前に座ると、俺の目を見ながら話しかけてくる。

「良いな？純」

期待を込めた瞳で俺を見るエミリー様。

そんな顔をされて、頼まれたら俺には断る事なんて出来そうに無い。

「はい。わかり・・・じゃなくて、分かったよエミリーちゃん」

躓きながらも、何とか敬語を止めて話す事に成功した。

それを見たエミリー様は、

「様を付けぬか馬鹿者が！」

昨日に続き、エミリー様は俺に対し、お姫様の脳天チョップを繰り出した。

チョップは見事に俺の脳天に直撃を果たし、頭には衝撃が走る。

どうやら、エミリー様の中では、敬語を止めても良いらしいが、俺は様付けをしなくてはならない立場らしい。

なのはちゃん達はそんな俺達の様子を見ながら、失礼にも楽しそうに笑っている。

・・・こうやって見ていると、エミリー様も一国のお姫様という肩書きさえ無ければ普通の女の子なのだ。

だからこそ分からなくなる。

何で昨日の戦いの場にエミリー様が現れたのか。

仮面ライダーの俺に何を頼みたいというのか・・・

あの紙には夕方の時間帯に、海鳴公園に来るようにとしか、書かれていなかった。

確実に何かが起ころうとしている予感がするのだが、それが何なのかは皆目見当もつかない。

俺は言い知れぬ不安を胸の内に秘めながらも、この穏やかな時を見守る事しか出来なかった。

「じゃあまた明日ね。エミリーちゃん」

「うむ。また明日じゃ。なのは」

なのはちゃん達三人は俺とエミリー様に別れの挨拶を告げると、教室を出て行った。

昼休みに少し騒動はあったものの、それ以降は何事も無く、無事に放課後を迎えた。

あれからエミリー様は、すっかりなのはちゃん達とも打ち解けた。

明日も一緒にお昼を食べる事を約束したのは勿論の事で、次の休日には、ある事情から学校を休学している、もう一人の友達のはやてちゃんを紹介する約束までしているのだ。

本当はなのはちゃん達とも一緒に帰りたかったのだが、今日は三人ともピアノの稽古があるから、次の機会にしようという事になり、今日は断念した。

「それじゃあ今日も、校門前までで良いかな？エミリー様」

俺はエミリー様に確認する。

しかし、様付けしながら砕けた口調っていうのは何気に喋ってる側としては違和感が凄い気がするな。

「それなんじゃが、今日は純に案内して欲しい場所があるのじゃ」

「俺は全然構わないけど、サバスチャン達は？」

俺は突然のエミリー様の質問に対して当然の質問を返す。

「うむ。今日の迎えはその場所に来る様に頼んでおいたから大丈夫じゃ。お願い出来るかの？」

エミリー様は軽い感じで聞いてくる様にも見えるが、その瞳の奥には何かの決意をした意思がある事を俺は感じ取った。

「・・・良いよ」

俺はその頼みを聞き入れる事にした。

エミリー様が案内を頼んだ場所は、仮面ライダーの俺と会う約束をしている海鳴公園だった。

現在俺達は海鳴公園を目指して、街を歩いている。

「でも、今日は護衛の人も居ない何て何かあるの？」

そう、俺達は今二人で公園に向かっているのだ。

あれだけの人数がいるのだから、何かしらの事情が有ったとしても、数人くらいはエミリー様の護衛にあてがいそうなものである。

「黒澤達は、本来我の警備隊という訳ではないのじゃ」

エミリー様は、俺の隣を歩きながら、質問に答えていく。

「黒澤達は外交を勤める大臣の護衛が専門なのじゃ。今回は我が日本の学校に通いたいといった時に、最初は反対されたんじゃが、大臣の一人が自分も日本に交渉をしに行くから、その間に護衛の何割かを我にあてれば良いと進言したのじゃ」

「その大臣って人は良い人なんだね」

「違う！！！」

俺の返答にエミリー様が過剰に反応した。

「えっと・・・」

俺が突然の反応に困惑していると、エミリー様は正気に戻った様で、

「す、すまぬな・・・しかし奴は決して良い人間ではない。我は奴を信用できんのじゃ・・・」

如何にもエミリー様の雰囲気が暗くなった事で、如何しようと俺は考え始めるが、その時俺達の周りに妙な違和感を感じた。

街の真ん中を歩いているというのに、俺達の周りに人の気配が全く無いのである。

今は夕方であり、本来なら何時人とすれ違ったとしてもおかしくない筈なのに、全くと言って良い程に、気配が無いのだ。

しかし、それはすぐに終わりを向かえ、複数の気配を感じる。

いや、これは・・・

俺はこれに近い気配を感じた事が多々ある。

それはシスコンモード全開で俺を追い回す時の恭也君の殺気だ。

でも似ているだけであって、同じではない。

あの状態の恭也君の気配は命の危険を本気で感じるが、今感じている気配には、それ程の意思は感じない。

強いて言えばそれは悪意。

その悪意が明らかに俺達に向けられている。

狙いは俺か、それとも・・・

どちらにしても、早くこの場所から離れた方が良さそうである。

「エミリー様。はや・・・」

俺が言葉を言い終わる前に、気配の正体が俺達の目の前に現れる。
それは昨日戦ったのと同タイプのホルダーが三体だった。
俺の隣に居たエミリー様は突然の出来事に唖然としている。
何でこんな状況に陥っているのかは、全く分からないが、奴らの狙いが、姿を現した事からも確実に俺達のいずれか、もしくは両方に有る事が分かった。
「こっちだ！エミリー様！」
俺は放心状態のエミリー様の手を取って、建物が密集している住宅街に向けて走り出す。
「あ、あれは何なのじゃ！？」
住宅街の路地を走り抜けながら、俺に手を引かれて走るエミリー様が質問してくる。
「あれはホルダーっていう人の力を超えた怪物だ。正確には・・・くっ！？」
俺が言葉を言い終わる前に、回りこんでいたのか、ホルダーの一体が俺達の正面からやってくる。
俺は慌てて踵を返すと、今度は横の路地を曲がって逃げる。
何度かそれを繰り返すが、やがて逃げ道は無くなって行き、最後には行き止まりに追い詰められた。

「くそ・・・」

俺は、エミリー様を背後に隠しながら、何か打つ手は無いかと、思考を巡らしながら三体のホルダーを睨みつける。

更に三体のホルダーが俺達に接近しようとして来て、ここまでかと思った瞬間・・・

最高のタイミングで、この場で最も頼りになる俺の相棒が現れた。

『どうやらピンチの様だなマスター』

頭上から声が聞える。

上に視線を向けると、屋根の上からメカ犬が此方を見ていた。

「遅いんだよ。お前は！」

俺はメカ犬に八つ当たりする勢いで叫ぶ。

『そう言うなマスター。ワタシも別に遊んでいた訳では無いのだ』

メカ犬はそう言うと、屋根から飛び降りて俺の隣に着地する。

「それにしても良くこの場所が分かったな？」

幾らなんでもタイミングが良すぎである。

『うむ。人払いをしていた様だが、それは人間に限っての事だろう。

ここはジャックの庭のようなものだ。異変があればすぐに分かる』

「・・・なるほど」

俺の頭の中でビーフジャーキーを齧るチワワの姿が浮かんだ。

「でもこっちにメカ犬が来てるって事は例の方も良いのか？」

『うむ。取り敢えず頼んでは置いたぞ。結果までは分からないがな』

「ち、ちょっと待つのじゃ！！！」

「『うん？』」

俺とメカ犬は同時に後ろを振り向く。

そこには話題に取り残されて、現状を理解出来ないでいる一人のお姫様の姿があった。

「さっきから何なのじゃ純！？それにそのロボットみたいのは何じゃ！？」

突如現れたホルダーに追い詰められたと思ったら、今度はメカ犬の登場で、しかも俺がその謎のメタリックワンワンと仲良く御喋りしていたものだから、エミリー様の許容範囲を超えてしまったのだろう。

まあ、突然の超展開が連続して起こったからパニックになっても仕方ない。

そんなエミリー様に何を思ったのかメカ犬が近づいていく。

『君がエミリー嬢か。この姿で会うのは初めてだったな。ワタシはオモチャ会社の・・・』

メカ犬が毎度お馴染みのナチュラルトークを試みる。

「後にしろメカ犬！今はこの状況を如何にかするのが先だ！」

メカ犬の登場で場が和みまくっているが、依然として状況は変わらないのだ。

もう少しその場の空気を読んだ行動をして欲しい。

『うむ。そうだったな』

そう言うとメカ犬は俺の隣に戻ってくる。

それを確認した俺は、メカ犬と共にホルダーの居る前方に一歩を踏み出す。

「ま、待つのじゃ純。おぬしは一体・・・」

静止の言葉をかけようとするエミリー様に俺は振り向きながら答える。

「エミリー様。今から起こる事は、他の人には秘密にしておいてくれよ？」

俺は人差し指を口に当てながらそう言って、再び前を向いた。

「それじゃあ・・・行くぞメカ犬！」

「ＯＫだマスター！」

俺はポケットからタッチノートを取り出してボタンを押す。

『バックルモード』

音声が流れると同時に、メカ犬が銀色のベルトに変形して、俺の腹部に自動的に巻きつく。

「変身」

音声キーワードを入力してタッチノートをバックルの窪みに差し込む。

『アップロード』

差し込んだ瞬間に、白銀の光が俺の全身を包みこみ、その姿を一人の戦士へと変える。

「じゅ、純が仮面ライダー！？」

俺の変身を見たエミリー様が驚愕の声を上げる。

『マスター。この近辺に他にも複数の反応が出ている。増援が到着する前に仕留めるぞ』

メカ犬の声がベルトから聞える。

「それなら力任せで行くか」

俺はベルトの右側をスライドさせて赤いボタンを押した。

『パワーフォルム』

ベルトから発生する光が再び俺を包み込み、飛散すると先程までメタルブラックだったボディーカラーがクリムゾンレッドへと変わる。

そして続け様に俺は同じくベルトの右側に付いている黄色のボタンを押す。

『パワーブレード』

三度ベルトから光が発生しそれを俺が掴む事で、光は新たな姿へと変化を遂げる。

それは赤い刀身を持つ両手剣だ。

これこそが、このフォルムの専用武器になるパワーブレードである。

ホルダー達は、痺れを切らしたのか、三体同時に襲い掛かってくる。

俺は防御を完全に捨ててその内の一体に切りかかる。

その攻撃を受けたホルダーは火花を散らして吹き飛んでいく。

俺は同じ要領で、二体目、三体目と切り伏せていく。

『決めるぞマスター！』

三体のホルダーが目の前でよろけているのをチャンスと読んだのか、メカ犬の激が飛ぶ。

「ああ！」

俺はバックルからタッチノートを引き抜き、パワーブレードの柄に設けられた溝部分にスライドさせる。

『ロード』

音声が聞えると同時に、俺は再びタッチノートをバックルに差し込む。

『アタックチャージ』

ベルトから発生する光が右腕のラインを通りパワーブレードの刀身に集約される。

「こいつで決めるぜ」

俺はパワーブレードを空に掲げる。

「パワーブレード」

そしてその輝く刃を三体のホルダーに向けて振り下ろす。

「ブレイクインパクト」

振り下ろすと同時に凄まじい衝撃波が三体のホルダーを飲み込み爆発を引き起こした。

爆発後に居たのは、俺にも見覚えのある人達だった。

「この人達は・・・」

それは昨日俺達の教室に突入してきたフル装備の屈強な男達・・・

「何でこの人達がホルダーなんかに？」

そう、この人達はエミリー様の護衛隊の隊員達だ。

「やはり・・・」

この光景を見たエミリー様は、何か思う所があるのか呟いている。

「何か心当たりが『話は後だマスター。先程の爆発を聞きつけたのか、此方に多数の反応が向かってきている。早くこの場所を離れるぞ』・・・分かった」

俺は一旦エミリー様に話しかけるのを中断して、バックルからタッチノートを取り出すとボタンを押した。

『チェイサー』

音声がすると同時に、遠くからエンジン音が響く。

『お待たせマスター』

やって来たのは乙女口調なオッサンボイスで、ライダーバイクのチェイサーさんである。

「これは？」

チェイサーさんを見たエミリー様が、不思議そうな顔をする。

俺はチェイサーさんに乗ると、エミリー様にも乗るように促す。

「エミリー様も早くこっちに！」

俺の言葉に少しだけ戸惑うが、エミリー様は意を決したように頷くと、此方に駆け足でやって来た。

「・・・頼むぞ」

エミリー様はそう言うと、チェイサーさんの上によじ登る。

『それじゃあいっくわよ～』

よじ登ったエイミー様を鉄のワッカが固定すると、チェイサーさんは走り出し、この場を後にした。

## 映画版　仮面ライダーシード　シークレットエピソード　プリンセスメモリアル

後書きと言うよりも中書きですね。

まだまだ続きますので、後編をお楽しみに。

## 映画版　仮面ライダーシード　シークレットエピソード　プリンセスメモリアル

連続更新で続きです。

「それにしても純が仮面ライダーだったのには驚いたのじゃ」

チェイサーさんが海鳴の道路を走る中、ワッカに固定されているエミリー様が、クリムゾンレッドの色をした俺を見ながら話しかけてくる。

「隠していてごめん・・・でも今は、その話よりも先に聞きたい事がある」

俺は先程エミリー様が言おうとしていた事を、聞いてみる事にした。

「さっきエミリー様は、ホルダーだった護衛隊の人達を見てやっぱりって言っていたけど、何か気になる事があるのか？それに昨日俺に頼みたい事があるって言っていたけど、それはこの一連の出来事に関係があるの？」

エミリー様は俺の質問に、少しだけ答える事に戸惑を見せつつも、ゆっくりと話し始めた。

「恐らく先程襲ってきた護衛隊の者、純がホルダーと言っていた奴らの狙いは、我で間違い無いじゃろう」

『しかしそれはおかしいのではないか。本来であればその護衛隊はエミリー嬢を守る存在のはずだろう？』

メカ犬がエミリー様の言葉に対して、指摘してくる。

確かに言われてみればそうである。

ホルダー化して暴走していたと言えば、それまでかも知れないが、奴らは明確な意思を持って俺達を襲ってきた。

「それは我がこの一連の事件の犯人を知っておるからじゃ。あの者達もその犯人の差し金で間違い無いはずじゃ。我の行動が邪魔になると思い、この様な行動に移してきたのかも知れぬのう・・・」

影を落とした様に、暗い表情を垣間見せながらエミリー様は溜息を零す。

「犯人を知ってるって、如何してエミリー様がそんな事を知ってるんだ？」

エミリー様は確かにただの一般人では無く、一国のお姫様ではあるが、それでもそんな情報を知っているのはどう考えても不自然に感じる。現に先程ホルダーに襲われた時の様子を見る限り、荒事に慣れているとは到底思えないし・・・

一体全体、エミリー様は何を何処まで知っているというのだろうか？

「我は犯人は知っているが、奴がこの様な真似をするとまでは、思っていなかったのじゃ」

エミリー様は自身が聞き知った事を俺達に切々と説明し始めた。

「犯人の名はガルド。・・・我の国の大臣じゃ」

苦虫を噛んだように苦々しい表情で、エミリー様は犯人の名を口に

する。

「奴は最初から怪しかったのじゃ・・・」

「怪しい？」

俺はエミリー様の言葉をオウム返しに聞き返す。

「うむ。そもそも奴・・・ガルドは我の国の者ではなく、外部から突然やって来たのじゃが、城に勤め始めてから僅か一ヶ月程で、今の大臣という役職に就いてしまいおったのじゃ」

「勤め初めてから一ヶ月で大臣！？」

シルバーライト島の就職事情がどうなっているのか、イマイチ分からないが、エミリー様の言っている事が本当だとしたら、とんでもないサクセスシンデレラストーリーだ。

「勿論これは異常な事態じゃ。確かに外部から来た者でも、優秀な人材ならばそこまでの役職に就く事は不可能では無いが、一ヶ月でというのは我のような子供にも理解出来る程に、特異な事じゃ」

俺の反応を見たエミリー様が補足説明を付け足す。

確かに一ヶ月で大臣というのはおかしい。

シルバーライト島の大臣が何処までの権限を持つのかは知らないが、少なくても大臣という事は、その国の中枢の一角を担う事に間違い無い筈である。

「でも、エミリー様からもそんな意見が出る位なら、他の人、特に大人や重要な役職に就いている人達は何も言わなかったのか？」

俺は一つの疑問を提示する。

その質問にエミリー様は、自らの首を静かに横へと振った。

「反対する者は誰一人おらんかった・・・いや、正確にはガルドが大臣に就任する際には、反対する者は全員賛成する側に回っておったのじゃ」

そう言ったエミリー様は、何かを思い出したように悲しそうな表情をした。

その顔の表情からは、誰かを心配しているような様子が伺い知れる。

『どういう事だ？』

メカ犬が続きを促す。

「ガルドは職場ですぐに頭角を現してきおった。我の耳にも入ってくる程なのじゃから、その実力は相当な物じゃったのだろう。じゃがガルドには同時にこんな噂も流れておったのじゃ」

「噂？」

「実力は確かにあったそうなのじゃが、かなり強引な手段も数多く行なったと風の噂で聴いてのう・・・それが我の国の穏健派の反感を買っていたらしいのじゃが・・・のう」

そこまで言った所で、エミリー様は言い淀むが、気を取り直し、続きを話し始める。

「ガルドのやり方に異論を唱えた者は、次の日には性格が別人の様に変わってしまい、逆にガルドを支持するまでになってしまったのじゃ。最初の犠牲者は我の国の王・・・我の父だったのじゃ」

エミリー様のそのあまりとも言える話の内容に対し、俺は掛ける言葉を見つける事が出来なかった。

「それを皮切りに、城内のガルドに異論を唱えていた者達は、次々と父同様にガルドを支持する様になっていってしまったんじゃ・・・」

目の前に居る一人の少女の独白は、更に続いていく。

見えない何かにじわじわと、侵食されていくかのような恐怖にエミリー様は毎日耐え続けたそうだ。

しかし、その日々にも終わりを迎える時が来る。

偶然にもエミリー様は、ガルドの企みの一部を耳にしてしまったのだ。

エミリー様はそれを聞き、更なる恐怖と自分自身の身に危険を感じた。

『エミリー嬢が狙われる理由は理解したのだが、何故この日本に居る仮面ライダーに、助けを求めようとしたのだ?』

ある程度の事情を話し終えたエミリー様に、メカ犬が質問する。

メカ犬の質問も、当然に思う。

最近は雑誌の紙面で紹介されている事もあり、知名度は上がってきてはいるが、それも国内に限っての事で、国際的に有名になった覚えは、全く無い。

だけど、エミリー様は仮面ライダーを知っていた。

それは揺ぎ無い事実なのだ。

だからこそのメカ犬のあの質問である。

「我には協力者がおったのじゃ」

メカ犬の質問にエミリー様が答える。

「協力者？」

俺はそのエミリー様の答えに思わず聞き返してしまう。

「うむ。その者が仮面ライダーの事を教えてくれたのじゃ。それに日本に行き、協力を仰ごうと我に助言を呈してくれたのも、その者じゃった」

なるほど・・・

その協力者って人が俺達仮面ライダーの事を知っていて教えたから、外国人で本来なら存在すら知らないでいた筈のエミリー様が、日本

にいる仮面ライダーを知っていた訳だ。

「その協力者っていうのは？」

「純も会った事があるぞ。何せ我の専属執事じゃからのう」

その協力者ってもしかして・・・

「サバスチャンは大の日本フリークでのう。サバスチャンもガルドに異論を唱えておった者の一人じゃったが、丁度所要で日本に行っておって、助かったのじゃ」

あの変態老紳士であるサバスチャンが協力者だった様だ。

更にエミリー様の話によると日本に留学した後も、サバスチャンの協力で護衛隊による警備という名の監視を掻い潜り、危険を承知で戦いの場にやって来たのだそうだ。

「今日も護衛隊が来なかったのは、実はサバスチャンの協力によるものじゃったのじゃがな・・・どうやら今回は逆に利用されてしまったようじゃのう」

そう言ってから、エミリー様は、真剣な表情を俺に向けた。

「純・・・いや、仮面ライダー。勝手と分かった上でおぬしに頼む。ガルドの野望を阻止してほしいのじゃ。本来ならば我の国の不祥事・・・我の国の中で決着を着けねばならぬ事じゃ。しかし今の我には奴を止める力が無い・・・じゃから我には他者に助けを求める事しか出来ぬ。我に出来る事なら何でもする。じゃから頼む。我の国を救ってくれ仮面ライダー！」

エミリー様は、そう言い終わった後、俺に対し頭を下げた。

一国の姫であるエミリー様が、俺のような一般市民に頭を下げるなんて、有り得ない事だろう。

それ程の覚悟がこの小さくも凛々しいお姫様にはあるという事なのだろう。

この事件にはホルダーが深く関わっている。

頼まれなかったとしても、何時かは関係していた事だろう。

だがエミリー様はあえて俺に頭を下げたのだ。

俺は答えなくてはいけない。

その覚悟に対して、力を持つ者として・・・

しかしそれ以上に俺はエミリー様に伝えたい事がある。

「・・・エミリー様。俺は『悪いけど話は一旦ここまでにした方が良いわよ』如何したんですかチェイサーさん？」

『マスター！後ろから多数のホルダー反応だ！」

俺の言葉を遮ったチェイサーさんの後に、メカ犬が警告してくる。

俺はそのメカ犬の警告を聞いてから、チェイサーさんのバックミラーを覗き込むと、６台のバイクが此方に迫って来た。

バイクに乗っているのは全員、先程も戦ったのと同じタイプのホルダーである。

間違い無く狙いは、エミリー様だろう。

確かにチェイサーさんの言う通り、今は話している場合では無さそうだ。

「エミリー様。そんな訳で話はまた後で。ちょっとスピード上げるんで、舌を噛まないように暫く黙っててくれよ？」

「う、うむ。分かったのじゃ！」

俺の言葉に素直に頷いたエミリー様は、身を縮めながら目をギュッと閉じた。

俺はそれを確認した後、バックルからタッチノートを取り出して開く。

「それじゃあ、頼みますよチェイサーさん！」

『任せなさ～い！』

チェイサーさんの合意を得た俺はタッチノートのボタンを押す。

『リミットオフ』

音声が流れると同時に、チェイサーさんの漆黒のボディーに銀のラインが走り、ボディーの下部分に赤いカラーリングが施される。

俺は再びバックルにタッチノートを差し込んで、ハンドルのグリップを両手で強く握りこむ。

『さあ！飛ばすわよ～』

チェイサーさんは俺の準備が整ったとみたのか、一気にスピードを上げる。

しかし、後ろから追ってくるホルダーを振り切るまでには至らない。

乗っているのが、俺とメカ犬だけならばもっとスピードを上げて振り切る事も出来るだろう。

でも今は俺達以外にも、守るべき存在である、エミリー様が乗っているのだ。

このスピードでも、かなりの負担をエミリー様に与えている事は間違いない。

これ以上スピードを上げれば、生身のエミリー様は耐えられないだろう。

今のスピードでも普通の市販車では追い着けない速さではあるのだ。

それでも追いついてくるという事は、ホルダー達の乗っているバイクも普通では無いのであろう。

徐々に距離は縮まり遂には、追って来たバイクの中の一台に完全に追いつかれる。

ホルダーは完全に俺の右横にバイクを寄せると、拳で攻撃を仕掛けてきた。

「くっ！」

俺はその拳を自分の腕を使い、軌道を逸らす事でかわす。

しかしホルダーの攻撃はこれだけでは終わらない。

再びホルダーは連続で拳を振るう。

その攻撃に俺はやはり、その腕で対応していく。

だが何時までも、防御に徹していてもジリ貧だ。

俺は今まで防御に徹していた腕を、今度は逆に攻撃に転ずる。

その拳は見事にホルダーの顔面を捉えた。

ホルダーはそのままバランスを崩してバイクから転倒する。

残り五台。

転倒したバイクが障害物となり、後続のバイクを襲うが、何の苦も無く回避して追ってくる。

その内の二台が再び追いついて来た。

追いついて来たバイクが、今度は左右から俺達を挟み込んで来る。

『コンビネーションで決めるわよマスター！』

チェイサーさんが挟み込まれる直前に、俺に合図を送ってくる。

「了解です！チェイサーさん！」

俺はチェイサーさんの意図を汲み返事を返す。

完全に二台のバイクに挟み込まれた瞬間に、チェイサーさんは車体を横に傾けながら前輪部分を右側のホルダーにぶつける。

更に車体を回転させながら俺は足を突き出して、左側のホルダーに叩き込む。

俺とチェイサーさんの同時攻撃を受けたホルダーはバイクごと吹き飛んでいった。

残り三台。

後ろから残りのホルダーがバイクで迫り来る。

『攻撃は最大の防御よ！！！』

チェイサーさんは叫ぶと同時に反転して、ホルダー達に突っ込んでいく。

このまま突き進めば正面衝突は確実だが、そうはならなかった。

チェイサーさんが車体の重心をずらしたかと思うと前輪が宙に浮く。

更に後輪部分を跳ね上げて飛び上がった。

そのまま宙に舞い上がったチェイサーさんは、正面からやって来たバイクに乗るホルダーのみに直撃する。

突然の事態に対応出来るはずも無く、直撃を喰らったホルダーは勢い良く、吹き飛んでいった。

残り二台。

空中でホルダーに直撃を浴びせた後、無事に着地を決めたチェイサーさんはもう一度反転する。

ホルダー達もバイクを反転させ、一時的ではあるが硬直状態になった。

だが、その状態は長くは続かない。

『決めるわよマスター！！！』

チェイサーさんの叫びが開始の合図となり、再び走り出す。

先程と同じ様に、チェイサーさんは宙に舞い上がる。

『マスター！身体を思い切り捻るのよ！！！』

俺に対し、チェイサーさんが指示を飛ばす。

「了解！！！」

俺はチェイサーさんに短く返事を返しながら自身の上体に捻りを加える。

するとチェイサーさんの車体は真横を向き、その前輪と後輪部分が、見事にホルダーの顔面を同時に捉えて吹き飛ばした。

ホルダーを吹き飛ばした後も、更に捻りを加え続け空中で体勢を整えてから何とか無事に着地する。

「ふう～、これで全部かな？」

周りを見回してみれば、転倒した際に炎上したバイクと、倒れたホルダー達の光景が伺える。

この様子ならば暫くは追って来れないだろう。

「終わったよ。エミリー様」

かなり派手に動いたが、悲鳴一つ上げなかったエミリー様の安否を確認する為に声を掛ける。

「・・・我はもう・・・絶叫マシン等・・・怖く・・・無いのじゃ・・・」

言葉では強がっているが、その声の調子から余程恐かったであろう事が窺い知れた。

そもそもこの年齢で乗れる絶叫マシンって何があっただろうか？

『安心するのは早いぞマスター！新たなホルダー反応だ！！！』

続けて話をしようとした所で、メカ犬が声を上げる。

メカ犬の声が俺の耳に届いた直後、俺の足元に何かの衝撃音が響き煙が発生した。

「な、何だ!?」

煙が晴れると、地面にはパチンコ玉程の大きさをした穴が、数箇所出来ていた。

『空だ!!!』

メカ犬の声に反応した俺は空を見上げる。

空には米粒程の大きさにしか見えないが、何かが居る事だけは分かった。

『どうやら長距離からの攻撃に特化したホルダーのようだな・・・』

メカ犬が先程の攻撃を分析しながら呟く。

「悪いけどもう暫く辛抱してくれよ。エミリー様!」

俺の言葉にエミリー様は無言で頷いた。

このままここで立ち止まっていれば、格好の的となってしまうので、俺はエミリー様が頷くのを確認すると、すぐさまチェイサーさんに頼み、その場から走り去る。

しかしホルダーがそう易々と、俺達を見逃してくれる筈も無く、遠距離から謎の攻撃を連続で行なってくる。

何とか攻撃をかわしながら暫く走り続けると、前方にトンネルが見えてきた。

『一旦あそこに避難するわよ！』

チェイサーさんはそう言うと、ホルダーの攻撃をジグザグにかわしながらトンネル内部に突入した。

トンネルに入ることで、一時的にだがホルダーの攻撃が止んだ。

だがこれでは何の解決にもならない。

幸いにもホルダーはトンネルの中にまで進入するような事はしてこなかった。

正確には追ってくる必要が無かったのだ。

俺達が逃げ込んだトンネルは長さも短く、簡単な作りの為、非常口等は存在せず、トンネルから出るには先に進むか戻るかしか選択できない。

痺れを切らして外に出れば、またあの攻撃に晒される事になるし、このまま篭城していても埒が明かない上に、後からやって来るかもしれない増援に周りを包囲される可能性もある。

どちらを選んでも危険な綱渡りとなる事は目に見えているのだ。

俺がこの現状を如何するべきか悩んでいると、今まで黙っていたエミリー様が意見を口にした。

「純よ。お主には空を相手取る者と戦う術は無いのか？」

「それは・・・」

答えはＮＯである。

戦う事は可能なのだ。

でも今その戦い方をするのは不可能である。

今それをするには、一つの大きなリスクを伴う事となるからだ。

だからそれは選択肢に入れる事すら出来ない。

「・・・どうやらあるようじゃのう」

俺の反応を読み取ったのか、エミリー様は確信したように呟く。

「我が邪魔になるならばここで降ろせば良いのじゃ。そうすれば気兼ね無く全力が出せるのであろう？」

エミリー様は俺が最も危惧していた事を提案してきた。

確かにエミリー様を降ろせば全力で戦えるが、それは追われている立場にあるエミリー様をこの場に残していく事になる。

その間エミリー様は完全な無防備になってしまう。

何処から相手が狙ってきているのか分からない現状で、今俺がエミリー様から離れるのは、かなりの危険が彼女に付き纏う事となるのだ。

だからこそ俺はこの選択を最初から無い物として扱ってきたのだが、どうもエミリー様の考えは違うらしい。

「どちらにせよ今は危険な状況なのじゃろう？ならば先に起こるかもしれない危険にばかり気を取られておっては前には進めぬ。我の身を案じてくれる純の気持ちには感謝するが、今のおぬしがすべき事は他にあるのではないか？」

気丈にも俺を諭すエミリー様だが、その手を見ると僅かに震えていた。

気丈に見えてはいるが、それでもエミリー様は一人の女の子なのだ。

こんな状況を幼い子供が体験して何の恐怖も感じない筈が無いのである。

恐くない訳が無い。

不安が微塵も無いなんて事はあろう筈も無い。

それでもエミリー様は真っ直ぐな瞳で俺に諭してくる。

その姿を見た俺は・・・

「・・・分かった。すぐに戻ってくるからここで待っててくれ」

俺は答える。

エミリー様の気持ちを無駄にしない為にも、現状を打破して目の前の少女の表情から不安や恐怖を消し去る為にも。

「う、うむ。頼んだぞ」

「あ、そうだ！」

俺は思いついたようにエミリー様に提案を出した。

「この問題が全部解決したら、皆で休日にでも何処か遊びに行こう。きっと楽しいからさ」

少しでも不安が無くなるように、明日への希望を抱いて欲しいと願いながら、俺はエミリー様に軽口を言った。

「・・・うむ！分かったのじゃ！」

その答えに僅かではあるが元気が戻ってきたような気がした。

チェイサーさんに頼んでワッカを外してもらいエミリー様を降ろした後に、俺はバックルからタッチノートを引き抜きボタンを押す。

『ホバーチェイサー』

音声が流れると、チェイサーさんの変形が始まり、空を翔る為の姿であるホバーモードへと移行した。

タイヤは横に倒れて、背面には内部からバックパックの様な物が現れる。

チェイサーさんが変形し終えた事を確認した俺はタッチノートを再びバックルに差し込むと、続いてベルトの右側をスライドさせて、現れた複数のボタンの中から青いボタンを押す。

『サーチフォルム』

音声と同時に俺の全身を光が包みこみ、クリムゾンレッドだったボディーカラーをスカイブルーへと染め上げる。

更に俺は続いて、青いボタンと同じ箇所に存在する黄色のボタンを押した。

『サーチバレット』

再びベルトから光が発生し俺の目の前に光が集まりだす。

その光を掴むと、光は更なる変化を発生させて、一丁の銃に姿を変える。

この銃こそがサーチフォルムの専用武器であるサーチバレットだ。

俺は変化を終えたサーチバレットを携えて、ホバーモードのチェイサーさんに飛び乗った。

「それじゃあ、行って来るから」

俺はチェイサーさんの上からエミリー様に言う。

「うむ。早く戻ってくるのじゃぞ！」

俺はエミリー様の答えにサムズアップで返し、チェイサーさんに頼んで一気にトンネルから飛び出た。

サーチフォルムの特性は俺の全身の感覚を特化させる事にある。

そのおかげでさっきまでは、米粒程度にしか見えていなかったホルダーの姿が、今度ははっきりと見えた。

ホルダーを一言で表すならば、その姿はまさに蜂である。

黄色と黒のツートンカラーに素早く羽ばたかせ続ける二枚の透明な羽。

大きく違う点は人型である事と、針が右腕から生えるように露出している所だ。

俺達がトンネルから飛び出してくるのを確認したホルダーが針の突き出した右腕を俺達に向けると、なんとその針が俺達目掛けて勢い良く射出されたのである。

『先程の攻撃の正体はこれだったのか！』

その様子をみたメカ犬が納得したように言った。

俺はメカ犬の声を聞きながらサーチバレットを構えて、迫り来るホルダーの射出した針に狙いを定めて引き金を引く。

青い光弾が発射され、それは見事に目標物の針を捕らえて相殺した。
その様子にただ撃つだけでは俺達に当てる事は出来ないと思ったのか、ホルダーは、新たな針を右腕に発生させると素早い動きで移動を開始した。

『遅れを取るわけにはいかないぞマスター！』

「分かってる！」

俺はメカ犬にそう返事を返すと、チェイサーさんに頼んで此方も尋常ではない速度で移動を始める。

互いにサーチバレットの光弾と針を撃ち合いながら、先に相手の死角を取るべく、空中を自在に飛び回る。

しかし決着は中々着かずに時間だけが過ぎていく。

「こうなったら・・・正面突破で行くぞ！チェイサーさん！」

『分かったわ！』

チェイサーさんは俺の指示に従ってホルダーと正面に対峙する。

一瞬の静寂が訪れるが、それは一瞬で終わる。

俺はサーチバレットを、ホルダーは右腕の針を構えて突進しながら射出する。

互いの距離は少しずつ縮まっていき、射出される光弾と針の量もそ

れに伴い増していく。

そして針の一本がサーチバレットの弾幕をすり抜けて俺の胸に直撃コースで接近する。

他の針の対処も行なっている俺には、避ける事も、サーチバレットを向ける余裕も無い。

その光景を見たホルダーは、勝利を確信したのか、隙を見せる。

だがそれは大きな間違いである。

俺はこの瞬間を待っていた。

避ける事も撃ち落す事も出来ないのならばそれ以外の選択肢を選べば良いのである。

「はっ！」

俺はサーチバレットを持っていない左手を使い、迫り来る針が胸に届く直前に、その針を握る事で押し止めたのだ。

それを見たホルダーは唖然とする。

『今だマスター！羽を狙え！』

「ＯＫ！」

メカ犬の合図に俺は素早くサーチバレットの狙いをホルダーの羽に定めて引き金を引いて二発の光弾を撃ち出す。

青い光弾は見事にホルダーの左右の羽を撃ち抜く。
飛行能力を失ったホルダーは成す術なく地面へと落下していった。
俺はチェイサーさんから飛び降りて、落下したホルダーの近くに着地する。
『マスター！今がチャンスだ！』
「ああ！」
俺はメカ犬に短く答えながら、バックルのタッチノートを引き抜いて、サーチバレットの溝にスライドさせる。
『ロード』
音声が流れるのを確認した俺は、再びタッチノートをバックルに差し込む。
『アタックチャージ』
ベルトから発生した光は右腕のラインを通り、サーチバレットの銃身に集約される。
「こいつで決めるぜ」
俺は光が集約されて激しく輝くサーチバレットをホルダーに向ける。
「サーチバレット」

狙いを定めた俺は引き金を引いた。

「ガトリングブースト」

銃身からは幾重にも連結した光弾が発射され、その全てがホルダーに直撃して、爆発を巻き起こした。

爆発後にはやはり護衛隊の服装をした男が気絶していた。

そしてその近くには・・・

「何だこれ？」

俺は見慣れない物を見つけたので、拾い上げてみた。

それは壊れているようだが腕輪のように見える。

しかも何かの装置のように、やけにメカニカルな見た目をしていた。

「素晴らしい！！！」

俺が謎の腕輪を眺めていると、何処からか男の声が聞えた。

少し離れたビルの上から一人の男が俺を見上げて拍手している。

男は短い金髪で外見はスーツの上からでも分かるような細身だった。

実年齢は分からないが見た感じ三十代前半程に見える。

男は猛禽類を彷彿させる鋭い眼光で俺を見据えてきた。

表情こそ笑顔を浮かべているが、その笑顔からは一片の暖かみすら感じられない。

「お初にお目に掛かるね。俺の名前はガルド。今は小さな国の大臣をしている者だ」

「な!?」

その男の名前は驚愕に値するものだった。

ガルド。

それがこの事件の犯人の名前だとエミリー様が言っていた。

諸悪の根源が、今俺の目の前に居るのである。

驚いても無理は無いだろう。

そのガルドは、俺の驚いた事への反応も何処吹く風といった具合でマイペースに話を続ける。

「俺の研究成果はどうだったかな?個人的にはかなり良い出来だと思うんだがね」

「研究?まさか・・・あんたが作った・・・だと?」

俺の問いにガルドが満足そうに答える。

「その通り。そして実験も上手くいった！これで次のステップに進める！！！」

「実験？次のステップ？一体何のことだ！？」

訳の分からないままに、話が進んでいく。

「これから死に行く君には関係無い事だ」

その言葉を合図にしたのか、此方にヘリコプターが近づいて来る。

俺とガルドの間辺りで滞空すると、ヘリコプターの扉が開き、中から人が出てきた。

それは俺も知っている人間だった。

護衛隊の装備に身を包んだ男は、顔中に古傷がある。

「く、黒澤さん！？」

その人物は黒澤一夜。

護衛隊の隊長だった。

確かに今まで戦っていたホルダー達の正体が、護衛隊の人達だった事からもこの人がガルドに組する側だったとしても、不思議ではないかもしれない。

だが分かっていたとしても、それは驚くべき事である。

黒澤さんはヘリコプターの下部分に、ワイヤーを括りつけると、一気に飛び降りてきた。

着地する直前に勢いを消す事で、黒澤さんは無事に着地した。

俺の目の前に着地した黒澤さんが歩み寄って来る。

「仮面ライダー・・・いや、板橋君と言った方が良いかな？」

「な！？黒澤さん・・・俺の正体に？」

俺の目の前に来た黒澤さんが仮面ライダーとしてではなく俺の名前を言い当てた。

「簡単な事さ。君達を襲った私の全ての部下には高性能カメラを取り付けてあってね。今までの行動は全てカメラ越しに見させてもらったよ」

俺は確かにホルダー達の前で変身している。

黒澤さんはその様子をカメラ越しに見てたから、俺の正体を知っていたという訳か。

「しかし君は強いな・・・本当に強い！！！」

黒澤さんはそう言うと左手手首の部分を自身の胸の辺りに持ってくる。

その手首には、俺が先程拾った物と同じ物が取り付けられていた。

「それは？」

「確か板橋君はこう言っていたね・・・変身！」

黒澤さんがそのキーワードを言うと同時に全身が薄紫色の光に包まれていった。

光が飛散して現れたその姿はまさに異形と言える姿だった。

全体的に昆虫の甲殻を思わせる赤黒い身体に、頭部には二本の触角が生えている。

その中でも特に特徴的な部分が眼である。

大きな二つの黄色い複眼がその存在感を絶対のものとしている。

その姿はまるで・・・

「黒澤さん・・・その姿は一体？」

俺が黒澤さんに質問をすると、答えは俺達の居る所から上のビルの上から返って来た。

「それも俺の研究成果の一つさ！そしてそのモデルになったのは君なんだよ！！仮面ライダー！！！」

ガルドは天に咆哮するかのように叫ぶ。

「黒澤は俺から報酬としてこれを受け取るために随分と協力してくれたのさ！！！」

ガルドは再び叫ぶ。

仮面ライダーをモデルに作った？

どうして一人の人間にそんな事が出来るのかは謎だが、今は目の前の人に聞かなければならない事がある。

「何でこんな物を自ら望んだりしたんですか黒澤さん！？」

如何して黒澤さんが、他人を利用しようとするあの男から力を彼が望んだのか、俺はそれが知りたかった。

「・・・簡単なことだよ」

異形の姿になった黒澤さんは、ゆったりとした動作で此方に近づきながら、語りだした。

「私は力が欲しかった。そしてガルド様は計画に協力すれば、俺の望む物をくれると約束してくれた。・・・だから喜んで協力したのさ！」

ある程度近づいてきた黒澤さんはそれで話は終わりだと言わんばかりに拳を振るってきた。

俺はそれを何とか紙一重でかわし、バックステップで距離を取って反撃する為にサーチバレットを構えるが、

「下手な事をしない方が賢明だぞ！仮面ライダー！！！」

ガルドがそう叫ぶと上空を飛んでいたヘリコプターが、ガルドの居るビルの屋上に着陸する。

中から出てきたのは、護衛隊の人達が数人だったのだがその手の中には・・・

「エミリー様!?」

護衛隊の手の中にはロープで縛られた上に、テープで口を塞がれたエミリー様がいた。

その光景に俺は後悔した。

やっぱりあの時、エミリー様を一人あの場に残すべきじゃなかった。

過ぎてしまった事を後悔した所で、時間が戻ってこないと分かっていても、それでも俺は後悔せずには要られない。

「どうやら理解できたようで嬉しいよ!!!さあ、黒澤!!!仮面ライダーに止めをさせ!!!」

「・・・」

人質を取られた事で身動き出来ずにいる俺を、黒澤さんが無言でみつめる。

やがて黒澤さんはやる気が失せたといった感じで、肩を一度だけ下げてから俺に話しかけてくる。

「すまないな板橋君・・・こんな形での決着は私の望む所では無い

が、これも命令だ」

「どうして黒澤さんは其処までして力を・・・」

「理由か、もしも君がもう一度私の前に立ちはだかったとしたら、教えても良いかもしれないな」

そう言うと黒澤さんが右拳を握り込む。

その拳には薄紫の光が集約されていく。

「そうだな・・・せめて私が君の名前を、受け継ぐとしよう」

黒澤さんは思いついたようにそう言うと、考えを巡らせ始める。

「この力は君から見れば、私が悪魔に魂を売った事で手に入れたように見えるだろう・・・悪魔、そうだな。それが私にお似合いか・・・」

そう言うと黒澤さんの右拳が俺の胸部に叩き込まれた。

「がっ！？」

拳が当たった部分から凄まじい衝撃が、俺の全身を襲い、後方へと吹き飛ばされる。

吹き飛ばされた俺は何とか意識を繋ぎ止めようと試みるがそれすらも叶わない。

『マスター！？しっかりしろ！！！』

メカ犬からの激が飛ぶが、その声すらも霞がかった様に聞える。

意識が薄れ行く中で俺の耳に最後に入って来たのは黒澤さんの声だった。

「仮面ライダーデビル。それが今日から私の名前だ」

その言葉を最後に、俺の意識は完全に途絶えた・・・

女の子が泣いている・・・

俺はその女の子を良く知っている。

だけど何故か名前が出てこない。

泣かないでって言ってあげたいのに、声が出ない。

手を差し出そうとするのに俺の手は届かない。

こんなに近くに居るはずなのに・・・

凄く遠くに感じるんだ。

如何してだろうか？

俺はそれでも声を掛けようと必死に叫び続ける。

その叫びが届いたのだろうか？

女の子は泣き顔をおれに向けながら俺に何かを伝えようとする。

少女は俺に・・・

「・・・ここは？」

意識がまどろむ中、目を開けると、其処には俺の知らない天井があった。

「どうやら意識が戻ったみたいだね」

俺の横から声が聞える。

横を向くと其処に居たのは、護衛隊の一人で、確かエミリー様の転校初日に挨拶した・・・

「T・・・さん？」

俺はその人の名前を口にする。

本名では無いらしいが、俺はこの人の呼び方をこれしか知らないので、他に呼びようも無いから仕方が無い。

「ここは一体！？それにエミリー様は、ぐっ！？」

俺は意識が覚醒してきた事で、現状を理解しようとすると同時に、身体を持ち上げようとするが、身体に鋭い痛みが走る。

「まだ無理をしない方が良い。君の相棒君の話だと、外傷は無いそうだが、暫くは痛みが残ると言っていたからね」

俺は取り敢えずTさんの言葉に従い、再び横になる。

Tさんが言っていた相棒とは恐らくメカ犬の事だろう。

それよりも、意識がはっきりしてきてから、一旦落ち着いて考えてみると、俺は今どんな状況なんだろうか？

目の前に居るのは護衛隊の一人であるTさんなのだが、全くと言って良いほどに敵意を感じない。

それどころか、俺をベッドに寝かせて傍に居てくれた事からも、Tさんは看病してくれていたに違いない。

メカ犬とも会話しているようだし、悪い人では無さそうだ。

次に気になったのはこの部屋である。

六畳一間程の清潔な部屋ではあるが、やけに生活感が漂っている事から、ホテル等の宿泊施設では無さそうだ。

「あの、ここは・・・」

何処か?と聞こうとした所、扉が開きある人物が部屋に入ってきた。

「あら、純君目が覚めたのね。良かったわ~。身体の方はもう良いの?」

その人は俺が仮面ライダーだという事を知る数少ない人で、海鳴ジャーナルで雑誌記者をしている風間恵理さんだった。

「え、恵理さん!?如何して恵理さんがこんな所に!?」

流石に予想外の人物の登場に、俺は身体の痛みも一瞬忘れて、叫んでしまう。

「如何してって、ここは私の家なんだから、私が居るのは当然でしょ?」

恵理さんはあっけらかんと答えてみせる。

その回答で恵理さんがここに居る事が、当然だという事には納得出来たのだが、それだと何故俺とTさんがここに居るのか、全く分からない。

その部分を聞こうと再度質問をすると、

「その質問には私が答えましょう」

扉の向こうから声が聞えた。

そう言った声の主は、部屋に入って来る。

「あなたは!?」

声の主はエミリー様の専属執事である、老執事のサバスチャンだった。

何故か全身包帯だらけではあるが・・・

俺の視線に気付いたのかサバスチャンが照れたように説明を始める。

「む、この怪我かね?恥かしい話だが、不覚を取ってしまっての・・・私も歳という事かもしれんな・・・」

話を要約すると、ホルダー数人と素手で戦って怪我したんだそうだ。

このサバスチャンからも、士郎さん達と同じ匂いがするのは、気の

せいだろうか？

俺の聞きたい話を説明してくれるサバスチャンなのだが、話の合間に妙に自分の過去の武勇伝と、エミリー様の可愛らしさについての話を挟んでくるので、俺はその辺りは軽く受け流しながら、頭の中で話の内容を整理する事にした。

まずサバスチャンは、裏でエミリー様に協力していた事がばれてホルダーにボコボコにされた後、Tさんに救出されたそうだ。

次に意外な話であるが、サバスチャンと恵理さんは、昔からの知り合いなんだそうだ。

世界は案外狭いものだと、昔の誰かが言っていたが、これはまさにその一例だろう。

Tさんはサバスチャンの指示で恵理さんの所に運んだそうだ。

俺がここに居るのも、黒澤さんにやられた俺をあの護衛隊の集団の中に居たTさんが、俺を死んでいるという事にして、ここに運んでくれたらしい。

話の概要は大体理解出来たのだが、一つだけ分からない事がある。

「Tさんは何者なんですか？」

ここまでの話で、俺とサバスチャンが今でも生きていられるのは、どう考えてもTさんのおかげである。

だからこそ気になる。

それはこの場に居た他の人も同じ意見だったようで、俺の質問と同時に、全員の視線がTさんに集まる。

「え～とね・・・」

突然の視線の集中放火に、流石のTさんも焦ったのか、言葉を濁そうとする。

だがそれで視線を背ける人は誰も居ない。

何せここに居るのは、

ヘタレ転生者

腹黒雑誌記者

変態老執事

というある意味中々のラインナップなのである。

そう簡単に逃れる事は出来ないだろう。

尚も続く視線攻撃にTさんも観念したのか、溜息を一つ吐くと、渋々と話し始めた。

「・・・まあ、この場に居る人達は少なからずとも、今回の件に首を突っ込んでるから、俺の話せる範囲で話させてもらおうかな」

Tさんはそう前置きをしてから話し始める。

「俺はある組織の一員だ。何の組織かは聞かないでくれ。それがこの場に居る人達の為でもある。そして、その俺が護衛隊の隊員になったのには理由がある」

「理由？」

恵理さんが首を捻りながら呟く。

Tさんはそれを気にする事も無く、続きを話す。

「その理由っていうのはシルバーライト島の大臣・・・ガルドに近づく為だった。ガルドは俺達と・・・同じって訳ではないんだが、組織に近い技術力を持つグループで天才と言われるほどのまど、いや、科学者だったんだ」

何か言い直した様にも聞えたのだが、取り敢えずガルドが凄い技術を持っているって事だけは分かった。

それならば、ガルドが暴走プログラムの模造品を作ったという事も、辛うじてだが納得出来ないでもない。

「それでTは何が目的でガルドに近づこうとしたのだ？」

包帯グルグル巻きのサバスチャンが訊いてきた。

この人は結構平然としているけど、間違いなく重傷だと思うんだが・・・

「俺の・・・組織の目的はガルドを捕まえる事だ。ガルドは多くの

人間を犠牲にする様な研究を繰り返してきた。今回も・・・だから今度は必ず奴を捕まえなくちゃいけない！」

Tさんは最後に拳を握り、俺達に聞かせるというよりも自分に言い聞かせる様に話していた。

「う～ん。話を聞いて思ったんだけど、今回の事って、私達みたいな一般人から見れば裏の世界の話って奴なのよね。何でその裏の世界の有名人が、こんな表舞台に出て来るのよ？」

恵理さんが言うようにこれが裏の世界の話かはさて置き、今まで静かに動いていた奴が自ら大臣になった上に、派手に立ち回るのは、確かに違和感を感じる。

「それは、分からない・・・俺が知っているガルドも、確かに残忍な男ではあったものの、こんな立ち振る舞いをする奴じゃ無かった筈なんだ」

結局の所、Tさんにもガルドの目的は測りかねているらしい。

分からないと言っている事を聞いていても埒が明かないので、俺は他の気になった事を質問する事にした。

「エミリー様が言っていたんですけど、シルバーライト島の大人達が突然別人みたいになったって・・・Tさんには何か心当たりはありますか？」

「・・・結論から言えばある。詳しくは言え無いが、それはガルドが持つ技術の一つなんだ」

「治す事は可能なんですか？」

「多少の時間は掛かるかもしれないが、治せない事はないだろうな。それにこの件では、俺の方からも組織に治療の出来る者を手配する予定でいたから、安心すると良い」

俺はその言葉を聞いて少しだけ安心した。

だが最大の不安は今も消えないでいる。

「あの・・・その話をしてくれた、エミリー様は今何処に？」

この質問をした瞬間に、この場の全員の表情に影が差した。

「すまない・・・出来れば姫様も救出したかったんだが、俺一人の力じゃどうにもならなかった」

Tさんが俺に対して頭を下げる。

「それってつまり・・・まだエミリー様は」

部屋にいる全ての人が無言になる。

しかしその無言が答えを導いた。

俺は立ち上がる。

立ち上がる際に、全身に痛みが走るが、そんな事は、今はどうだって良い事だ。

「・・・何処に行く気だい？」

突如立ち上がった俺にTさんが質問してくる。

そんなもの・・・答えは決まっている。

「・・・約束を果たしに行ってきます」

「今の君はそんなにボロボロなんだよ？約束した相手だって後で訳を話せば許してくれるんじゃないかな？」

Tさんが俺に正論をぶつける。

確かに今の俺はボロボロだ。

痛い目にもあったし、攻撃を受けたからこそ分かるのだが、黒澤さんは強い。

今まで戦ってきた相手とは格が違う事を実感した。

エミリー様を人質に取られていて、抵抗出来なかった事を抜きにしても、今の俺に勝てるかどうか分からない。

行けば確実に、あの人と戦う事になるだろう。

俺は心の中で、強敵と戦う事に恐怖している。

だけど・・・

「Tさん。俺ここで起きるまでに、少し変わった夢を見たんですよ。

小さな女の子が一人で泣いていて、よく知っている筈なのに名前も出てこなくて、手を差し伸べる事さえ出来なかったんです・・・」

俺の心に残るのは、少女の泣き顔だった。

それをみて辛いと思った。

この女の子には笑顔でいて欲しいって・・・

「何が正しいかなんて、俺には判りません・・・でも俺はどうしても今やらないと一生後悔すると思うから！」

言葉ではうまく表現できないが、俺はの心は決まっている。

「・・・はあ～、負けたよ。君は相棒君の言ったとおりのお人好しみたいだな」

Tさんは俺の言葉を聞いた後、苦笑いを浮かべながら、ポケットからある物を取り出して、俺に手渡してきた。

それは、とても見覚えのある、俺にとって相棒との絆・・・

「何でTさんが、タッチノートを？」

「君の相棒君から【マスターが目を覚ましたら渡してくれ】って頼まれていたんだよ。それともう一つ伝言がある。【先に行って待っている】だそうだ」

なるほど。

メカ犬の姿がこの場に無かったのはそういうことか・・・

「最後に確認するが、如何しても行くのかい？」

Tさんは俺に再度質問を投げかける。

「板橋君には、まだ話していなかったけれど、あと二週間程待ってくれれば俺の所属する組織から、援軍がやってくる。君が何もしなくても、後は俺達が全ての後始末をするよ。勿論姫様の救出だってするさ」

その言葉はとても魅力的な物だった。

こんなボロボロな俺が行くよりも、その道のプロに任せた方が、良い事は良く分かる。

その提案を提示してくれたTさんに対して俺は・・・

首を数回横に振り、自ら戦いの場へ向かう事を示した。

理屈じゃない。

今こうしている間にも、エミリー様は一人恐怖している筈なのだ。

二週間なんて待ってはいられない。

俺は神様でもなければ天才でもないただの凡人だ。

全てを守れるなんて思っちゃいない。

どんなに守ろうと必死になっても、この手から零れ落ちてしまうものもきっとあるだろう。

だけど・・・

それでも、俺は守りたいと思う。

少しでも俺に出来る事があるのなら、この手を伸ばせば救えるかもしれない大切な何かを俺は全力で守りたい。

俺は約束したんだ。

まだ小さいのに、不安で押し潰されそうな筈なのに気丈に振舞うお姫様と。

そのお姫様は、俺の友達なのだ。

友達が友達を助けたいと思う事に、それ以上の理由は要らない。

だから、これは俺の自己満足であり、わがままだ。

でも、それで構わない。

俺のわがままで、一人の女の子のかけがえの無い日常を取り戻せるなら、それだけで戦う意味がある。

「・・・どうやら、答えは変わらないみたいだな」

Tさんは暫くの間俺と視線を交わしていたのだが、そう言うと椅子から立ち上がり、部屋の出入り口に歩き始める。

「Tさん?」

俺がTさんの突然の行動に対して戸惑っていると、扉の付近まで移動していたTさんが振り返った。

「何しているんだい。早く来ないと、置いて行くよ?」

Tさんが俺に笑顔で言ってくる。

「えっとそれは・・・」

「言っただろう?俺にも理由があるって。確かに組織の救援を待ちたいけど、時間が掛かり過ぎるのも事実だからね。君が行くと言うのなら、その間に俺が単独行動でガルドを捕獲して、無効化するのも悪くない作戦なんだよ」

スラスラと説明口上するTさんだが、どうやらTさん成りに俺の意思を汲んでくれているらしい。

説明を終えたTさんは再び俺に背を向けながら来るのか、来ないのかと聞いてきた。

Tさんは俺をお人好しと言ったが、この人も相当なお人好しだと思う。

「はい!」

俺は照れ隠しなのか、再度来るように促してきたTさんに、元気良く答えた。

「さて、それでは僭越ながら私も・・・」

俺とTさんの会話が一段落して、恵理さんの部屋を出ようとした所、如何見ても今すぐ入院が必要そうな見た目のサバスチャンが、ついて来ようとする。

「はいはい。サバちゃんは怪我人なんだから大人しく寝ててね」

そこに恵理さんが、一本背負いで、先程まで俺が寝ていたベッドにサバスチャンを叩きつけた。

呼び方からしても二人の関係性がどういったものか気になりはするが、一つだけ言いたいことがある。

恵理さん・・・

サバスチャン泡吹いて気絶してます。

「純君」

恵理さんが先程までのやり取り等無かったかのように俺の名前を呼ぶと、俺に何かを投げて寄越した。

「おわっと」

俺はそれを慌ててキャッチしてから、何なのか確認してみる。

「携帯電話？」

これは恵理さん携帯だろうか？

白いボディーカラーのシンプルなデザインの携帯は何処と無く恵理さんが好んで持ちそうな気がする。

でも、如何して恵理さんは俺に携帯なんて寄越したんだろうか。

「恵理さん・・・これは？」

「純君達に、頼まれた件なんだけど、今回はあんまり役に立てなかったから、それはその罪滅ぼしよ」

恵理さんは俺にウインクしながら答えた。

実は街で暴れていたホルダーを倒した後に、メカ犬に頼んで恵理さんに何か情報が無いかお願いしていたのだが、今回はTさんから聞いたので、あまり意味が無くなってしまったのである。

それにしても、この携帯が罪滅ぼしとは如何いう事なのだろうか。

「その携帯の中に、純君を倒したっていう黒澤一夜の情報を可能な限りいれておいたわ。何かの役に立つかも知れないから持って行って」

如何も俺が気絶している間に、Tさんから話を聞いた恵理さんが、僅かな時間で可能な情報を集めていてくれたらしい。

「・・・ありがとうございます。恵理さん！この情報きっと無駄にはしませんから！」

俺は携帯を握りしめながら、恵理さんに感謝した。

俺とTさんは改めてこの場を後にする。

目指すは守るべき人の為に戦場となるであろう場所・・・

「ここにエミリー様がいるんですか？」

俺はTさんに話し掛ける。

「ああ、間違いなくね」

Tさんは俺の質問に小さく頷きながら答える。

俺達は今、夜の闇に隠れながら、船着場に身を潜めていた。

俺が気絶していた時間はそんなに長く無かった様で、恵理さんの部屋で起きた時点で、三時間ほどしか経っていなかったそうだ。

「ガルドは午前零時と同時に、船を出航させてシルバーライト島に向かうつもりだ。奴がシルバーライト島に行くことは、何としてでも喰い止めなければいけない」

「如何してですか？」

確かに日本を出られたら、厄介ではあるけれど後を追えれば、それで済む筈だ。

「潜入調査で気付いた事なんだけど、どうもガルドの目的の一つとして、奴はシルバーライトの王と成り代わろうとしているらしい」

「王に成り代わる？」

「そうだ。そしてその手段にガルドは、姫様を利用しようとしているんだ」

Tさんから衝撃の言葉が飛び出した。

「エミリー様を利用するって、如何いう事ですか？」

「板橋君は、一般人が王様に成るには何が一番手っ取り早いと思う？」

一般人が王様に・・・それはやっぱり一から国を作るか・・・まさか！？

「気付いたみたいだね」

俺の反応を見たTさんが、理解したと見たのか、答えを口にする。

「ガルドは島に帰ったら直ぐに姫様と婚姻を結び、今の事実上のトップではなく、名実共に正真正銘の王に成るつもりなんだ」

Tさんの言った答えはまさに俺が今考えていた事だった。

「正直な所を言えば、板橋君の提案は個人的にありがたいものだったんだ。この時を逃せば、ガルドは今以上の権力を手にする事になる。そんな相手に手を出せば、周囲に与える影響はより多大なものになるからね」

「でも、エミリー様はまだあんなに幼いんですよ。それに今でも事実上のトップの筈なのに、何で急に婚姻を結ぼうと思ったんでしょうかね？」

「それは俺にも分からない。俺が調べていた時も、ガルドが姫様と婚姻を結ぼうとしていたのはもっと先の話だった筈なんだけど、まるでガルドに何かが取り付いて操っている様な気がしてくるよ・・・」

分からない事だらけだと、Tさんは呟いた。

何かが取り付いて操っている・・・

最初はこの一連の事件が余りにも大きくなっていたので、気にも留めていなかったが、もしかしてガルドは・・・

［『聞こえるかマスター？』］

俺がそこまで思考した所で、先に此方に来ている筈のメカ犬の声が

聴こえた。

しかし、その声は俺達の周囲からではなく、俺のポケットからだった。

［『聴こえているかマスター？』］

またしてもメカ犬の声がポケットの中から聴こえてくる。

その音源はタッチノートからだった。

［『マスター。ワタシの声が聴こえたならば、タッチノートを開いて右下の小さいボタンを押してくれ。それで通話が出来る』］

俺はそのメカ犬の指示通りに、タッチノートを開いて、ボタンを押してからタッチノートに向けて喋ってみる。

「聴こえてるのか？メカ犬」

［『マスター！目が覚めたのだな！！』］

俺の声が聴こえたようで、メカ犬が返事を返す。

「ああ、それにしてもタッチノートに、メカ犬との通信機能が有るなんて知らなかったぞ」

こんな便利な機能が有るのなら、始めに教えておいて欲しかった。

［『それなんだがマスター・・・』］

タッチノート越しに聴こえるメカ犬の様子がおかしい。

もしかしてこの流れは・・・

［『実はこの機能が使えるようになったのは、あのデビルという輩の攻撃を喰らった後なのだ』］

「・・・だと思ったよ」

以前にもメカ犬は、父さんのせいで感電したら、記憶の一部が戻ってフォルムチェンジの機能を使えるようになった経緯があるが、今回も同じパターンらしい。

こいつは異世界のハイテクロボットなのか、昭和のブラウン管テレビなのか偶に分からなくなる。

「まあ、その話は別に良いとして、お前は今何処に居る［「純!?純なのか!?」］この声はエミリー様?」

タッチノートからメカ犬の声ではなく、エミリー様の声が聴こえてきた。

［「本当に純なのじゃな・・・良かった・・・本当に・・・・」］

その声から察するに、エミリー様は泣いているみたいだった。

まだ出会ってから二日しか経っていないけれど、エミリー様は俺を凄く心配してくれていたらしい事が良く分かった。

「俺はこの通り元気だから、心配しないで」

音声だけしか届かないので、俺はなるべく優しい口調でエミリー様を宥める。

暫くして、エミリー様が泣き止んだのを確認した俺は、改めてメカ犬との会話を再開する事にした。

「それで、メカ犬はエミリー様と一緒に居るんだな」

［『うむ』］

という事はメカ犬が今居る場所は・・・

「間違い無く、姫様と君の相棒君はあの場所に居る」

俺とメカ犬の話を聴いていたTさんが、ある一点に指をさす。

その指の先にある物は、大きな船だった。

船は船でもその大きさは半端なく巨大だった。

幾ら一国の大臣だからって、個人で持てる物じゃない代物である。

見た目は年収が億を超えている人達が船旅に乗る様な、豪華客船並みだ。

「あれは、シルバーライト製のガルド専用船だ。姫様はあの船の中の一室に閉じ込められている」

俺は船を見詰めながら、タッチノート越しに、エミリー様に話しか

ける。

「もう少し辛抱してくれよエミリー様。絶対に助け出してみせるから」

「「・・・良い・・・もう良いのじゃ。我の為にこれ以上純が傷付くのは・・・見たくない・・・」」

タッチノート越しに聴こえてきたのは、否定の言葉だった。

俺が一緒に居たのは僅かな時間だが、それでも分かる事がある。

エミリー様は、お姫様だとかそんな事を抜きにして考えても、心優しい一人の女の子だ。

この言葉も俺の身を案じて言ってくれた言葉なのだろう。

その言葉に俺は・・・

「ふざけるな！」

怒鳴り返した。

「エミリーちゃんが俺をどう思ってるのかは知らないが、俺はエミリーちゃんを大切な友達だって思ってる！」

本人に否定された位で諦めたりなんて絶対にしてやるつもりは無い。

「どれだけ止めろと言われても俺は助けに行くからな！」

これは俺のエゴだ。

「たとえこの足が動かなくなったとしても、必ず助けるぞ！！」

だから、最後まで俺は・・・

「分かったら大人しく助けられるのを黙って待ってろ！！！」

俺自身の意地を通す。

［「・・・純」］

「エミリーちゃん・・・」

［「・・・様を付けぬか・・・馬鹿者・・・」］

「その方がずっとエミリー様らしいよ」

俺はこの一人の心優しい女の子を助けたい。

今俺が戦う理由はそれだけで十分である。

さて、心構えを新たにした所で、これから如何するかが問題だ。

俺とTさんはこれから如何するべきかと、作戦会議を始める。

［『マスター』］

作戦会議の途中で、通信回線を繋ぎっ放しだった、タッチノートからメカ犬の声が聴こえてきた。

「ん？如何したメカ犬」

俺は一時会議を中断して、メカ犬に応答する。

［『ワタシに一つ提案があるのだ』］

メカ犬は、一つの作戦を提示してきた。

その内容を聴いた俺とTさんは、こんな大雑把な計画で大丈夫なのかと、思いもしたが生憎と時間も人手も無い事から、結局メカ犬の作戦を採用する事に決定してしまった。

俺は今船内の廊下を走っている。

近くに人の気配は全く無い。

メカ犬の作戦とは、とてもオーソドックスな物だった。

現在船着場では、チェイサーさんが縦横無尽に暴れ回っている。

つまり、陽動作戦だ。

更にTさんが先行して、船内の人達を誘導したので、殆どの人が船外に出ている。

俺はその隙を付いて、エミリー様が捕らわれている船に潜入したのである。

Tさんから教えてもらった道を頼りに、俺はエミリー様の居る部屋を目指して走っているのだ。

俺に道を教えてくれたTさんも、今頃は船内の人間を誘導切り上げて、ガルドの捕縛に向かっている事だろう。

今の所作戦は順調に進んでいる。

いや、上手く進み過ぎていて、若干の恐怖すら覚える。

だが今がまたと無いチャンスである事も事実だ。

俺は頭に浮かんだ疑念を振り払い、今はエミリー様を助け出す事だけに集中する事にした。

走ってから暫くして、俺は目的の場所に無事辿り着いた。

途中に若干の船員が残っていると思っていたのだが、誰一人として、遭遇する事は無かった。

「やっぱり何かおかしい・・・」

俺は呟きながら、目的地である、部屋の扉の前に立つ。

扉にはカード式の鍵が取り付けられている。

俺はポケットから一枚のカードを取り出して、扉の差込口にそれを差し込む。

すると扉から電子音が流れた後、ガチャリという音が鳴った。

俺が先程使ったカードは、Tさんがここまでの道を教えてくれた後に、託してくれた物だ。

鍵が開いた事を確認した俺は、勢い良く扉を開け放つ。

「エミリー様！」

部屋の中に居たのは、ドレスを着た少女だった。

「純・・・」

エミリー様は突如俺が現れた事に驚愕したのか、呆気に取られた顔をしている。

だがそれも少しの間の事で、エミリー様の表情からは、喜びも感情浮き上がってきた。

「迎えに来たよ」

「純！！！」

俺が来た事に感極まったのか、エミリー様は俺に駆け寄り抱きついてきた。

その衝撃によろけつつも、俺は何とか堪えてエミリー様を抱きとめる。

「・・・本当に助けに来てくれたのじゃな・・・」

俺の胸の中でエミリー様が呟いた。

「言っただろ。助けに来るって」

俺はエミリー様を落ち着かせる為に、頭を撫でながら言う。

少しの間だけこの時間が続いたが、エミリー様も落ち着いてきた様なので、一旦離れる。

しかし離れてから改めてエミリー様を見てみると、先程までは気にならなかったのだが・・・

「何でドレス？」

最後に見た時は、学校の制服を着ていた筈なのだが、今のエミリー様は純白のドレスに身を包んでいる。

まるで、ウェディングドレスをそのまま、子供用にした様な・・・

ってもしかして！？

シルバーライト島に着いたら、婚姻を結ぶと知っていたけれどガルドって・・・

俺はそこまで思考を進めた所で、慌ててこれ以上考える事を否定した。

幾ら敵だからと言っても、個人的な嗜好及び趣味等のプライベートな部分に踏み込むのは、マナー違反である。

まあ、シルバーライト島の法律で問題が無いのであれば、俺から言う事は何も無いが、日本でやってしまった時は別の意味で犯罪なので、国家権力の方々に通報させてもらうけど・・・

「このドレス・・・何処か変かの？」

俺の視線を気にしたのか、エミリー様が自身の着ている子供用ウェディングドレスを見ながら、訊ねてくる。

別にそんな事を考えていた訳ではないのだが、エミリー様に誤解を与えてしまったようなので、俺は急いでフォローに回る事にした。

「い、いや、変なんかじゃないよ！寧ろ凄く似合ってるから！」

「そ、そうかの？」

少し言い方が露骨過ぎたのだろうか？

今度は顔を赤くして、黙り込んでしまった。

俺とエミリー様の間に妙な沈黙が生まれる。

何なんだこの雰囲気は！？

『お楽しみの所失礼するが、早く脱出した方が良いと思うぞ』

この空気の中で、メカ犬が発言した。

いつの間にか俺の足元にメカ犬が居る。

そういえばこいつも居たって事、一連の流れですっかり頭から抜け落ちていた。

あの雰囲気から俺を救い出してくれた事には感謝するが、それとは別としてお楽しみって何なんだよ！？

この場で断固協議したい所ではあるが、メカ犬の言う通りこんな場所に何時までも居ない方が懸命だ。

「確かにそうだな。急ごうエミリー様！」

俺はエミリー様の手を引いて、元来た道を走り出した。

「もう少しで船外に出るから頑張って！」

「わ、分かったのじゃ」

俺とエミリー様とメカ犬は部屋を出てから数分間走り続けた事で、もう間も無く出口に着こうとしていた。

そしてここに到達するまでの間に、やはり誰かと鉢合せする等という事も、起こらなかった。

これは益々もって怪しい・・・

「ちょっと待って！」

俺は出口を前にして立ち止まる。

『如何したマスター？』

俺はポケットからタッチノートを取り出してある操作をした後直ぐにしまって再び走り出す。

「悪いなメカ犬」

『何をしていたんだマスター？』

「一応の保険をかけといただけだ」

走りながら会話を交わした俺達は、今度こそ出口を目指して走る速度を上げた。

再び走り始めてから、さほど時間も掛からず、俺達は出口へと辿り着いた。

時刻は既に夜の十一時を過ぎており、あたり一面は闇の覆われていた。

あたりに人が居ない事を確認しようとした所で、俺達を隠してくれる筈の闇が突如光の濁流に飲まれる。

俺達が居る場所を中心に船着場に設置されていた大型のライトが全て点灯し、まるで昼間のような明るさを生み出したのだ。

「待っていたよ。板橋君」

光の先から俺を呼ぶ声が聴こえた。

その声の主は光の中からゆっくりと此方に近づいてくる。

その男は顔に幾重もの古傷を持つ、歴戦の戦士だった。

「・・・黒澤さん」

その声の主は黒澤さんだった。

恵理さんの携帯に入っていた情報で知った事だが、この人は幾つもの戦地で戦い続けて来た本物の兵士だ。

出生は謎で、赤ん坊の頃に孤児院の前で捨てられていた事と、十六歳までその孤児院に居た事までは分かったが、その後行方不明になり、四年後に所在を知る事が出来た時には、既に各地の戦場を転々としていたらしい。

そして今もこの人は、この場所で戦いにその身を置こうとしている。

「しかし、私が予想していたよりも随分と早く来たものだね。身体の方はもう大丈夫なのかい？」

まるで俺が来るのを確信していた様に話を進める黒澤さん。

「・・・まさか！？黒澤さん。あなたもしかしてわざと・・・」

俺の脳裏にある可能性が浮かぶ。

「今となってはどうでも良い事だ。この場に私と君が居る・・・今はそれだけ分かっていれば良い」

黒澤さんはそう言うと右手を上げる。

それを合図にしたのか、ライトの光の先から二十体を超える、街で戦った時と同タイプのホルダーが姿を現せた。

「まずは今の君が私と戦うに相応しいコンディションか、こいつ等を使って確認させてもらおう」

完全に俺達は囲まれてしまった。

そして黒澤さんの号令が掛かろうとしたその時、空中からけたたま

しいまでのジェット音が鳴り響いた。

『お待たせ～マスター！』

空中からオッサンボイスが聴こえて来る。

「ナイスなタイミングですよチェイサーさん！」

俺はもしもの時の保険として、陽動に出ていたチェイサーさんをホバーモードにして、上空で待機して貰っていたのだが、どうやらこの選択は間違いではなかったようだ。

俺は下に降りて来たチェイサーさんに素早くエミリー様を乗せる。

「早く純も乗るのじゃ！」

チェイサーさんに乗ったエミリー様が俺に手を差し伸べて来るが、俺はそれを首を横に振り拒絶する。

「ごめん。まだやらなきゃならない事があるから」

やるべき事を成すまで、俺はこの場を離れる訳にはいかない。

「何故じゃ！？純はもう十分頑張ってくれたじゃろ！？命がけで我を助けてくれたじゃろう！？」

確かにここまでやったのだから、逃げたって良いのかも知れない。

正直な所、俺は今この場に居る事すらも恐怖している。

でも・・・

「約束しただろ？エミリー様の国を救うって」

俺はまだこのお姫様の願いに答えを返さずに居た。

だからこの場で答える。

はっきり言って俺が国を救うなんて柄じゃないし、そんな大層な器は持ち合わせては居ない。

俺はただのヘタレ転生者だ。

だけど俺は・・・

「俺は仮面ライダーだからさ！」

エミリー様に今自分に出来る最高の笑顔を見せてから、チェイサーさんに安全な所まで上昇してもらった。

その姿を見送ってから、俺は一度だけ深呼吸をしてこの場に共に残っている相棒に話しかける。

「そういう訳だから・・・力を貸してくれよ。相棒！」

『当然だ。ワタシは相棒だからな！」

俺は周りのホルダーを見据えながら、タッチノートを取り出し、ボタンを押す。

『バックルモード』

隣に居たメカ犬が音声が流れると同時にベルトに変形して、俺の腹部に自動的に巻きつく。

「変身」

俺は音声キーワードを入力して素早くタッチノートをバックルの窪みに差し込んだ。

『アップロード』

ベルトを中心に俺の全身を白銀の光が包み込み、俺の姿を一人の戦士へと変化させる。

光が飛散した後に現れたその姿はメタルブラックのボディーに四肢に伸びる銀のラインと額の？字型の角飾り。

二つの大きな赤い複眼が、凄まじいまでの存在感を放つ。

「残ってくれて嬉しいよ。さあ、思う存分戦おう！」

黒澤さんはそう言うと上げた右腕を前に振った。

それを合図に俺を囲んでいたホルダー達が一斉に駆け出した。

「派手に決めるぜ相棒！」

『うむ！』

短く会話を交わした俺達も、駆け出し目の前のホルダーに拳を叩き込む。

更に横から後ろからと迫り来るホルダーの攻撃を捌きながら、カウンターをお見舞いしていく。

『フォルムを換えるぞ！』

メカ犬のアドバイスがベルトから聴こえる。

「ああ！」

俺はその声に答えながら、ベルトの右側をスライドさせて、緑のボタンと黄色のボタンを続けざまに押す。

『スピードフォルム』

『スピードロッド』

ボディーカラーをライトグリーンに染め上げながら、専用武器であるスピードロッドを握り締めて、近くに居るホルダー達にロッドによる連撃を喰らわせる。

「はっ！」

俺は近くのホルダーに軒並みロッドの一撃を打ち込んだ後、スピードフォルムの身軽さを生かして高いコンテナの上に飛び乗り、再びベルトの右側のボタンを押す。

『サーチフォルム』

『サーチバレット』

ボディーカラーをスカイブルーにしながら、右手に握ったサーチバレットの銃身を、下に居るホルダーに向けて引き金を引き、発射される光弾が容赦なくホルダー達に直撃していく。

しかし撃ち漏らしも出てくるので、コンテナの下から這い上がろうとするホルダーが増えてくる。

俺は三度ベルトの右側のボタンを押しながら、下の地面へと舞い戻る。

「たあ！」

『パワーフォルム』

『パワーブレード』

飛び降りながらボディーはクリムゾンレッドに染め上がる。

地面に着地した俺は、赤い刀身の剣を両手で握りながら、近くのホルダー達を次々に切り伏せていく。

「どうやら板橋君のコンディションは問題無いみたいだね」

パワーブレードを振るう俺の近くに黒澤さんが近づいて来た。

「・・・変身！」

左腕を胸の上に当てながら黒澤さんがその言葉を放つと同時に、左腕の腕輪を中心に薄紫色の光が発生して、その姿を変質させる。

変わり果てたその姿は、昆虫の甲殻を彷彿とさせる赤黒いボディーと額の長い二本の触角に黄色の複眼。

黒澤さんはこの姿の自分を仮面ライダーデビルと名乗っていた。

その姿を変えた黒澤さんが俺に殴りかかる。

「ぐっ！」

俺はその一撃をブレードで受けながら後退する。

パワーフォルムでさえこの威力を御しきれないということは、あのデビルという姿のパワーは相当なものである。

「さあ、決めようじゃないか。私と板橋君の、どちらの仮面ライダーが強いのか！」

そう宣言した黒澤さん・・・いや、デビルは再び俺に拳を振るう。

「くそ！」

俺は拳を掻い潜りながらブレードで切りかかるが、デビルはバックステップ後ろに下がってその一撃を避けきる。

更に追撃をかけようと前に出ようとするがそこに両脇から二体のホルダーが襲い掛かってくる。

咄嗟に迎撃体勢を取るが、その隙を突かれて一気に距離を詰めてきたデビルの蹴りをまともに喰らってしまい、吹き飛ばされる。

「うわ！？」

吹き飛ばされて直ぐに二体のホルダーが追撃を仕掛けてくるが、俺は痛みに耐えながら、パワーブレードを振るい何とか切り伏せる。

「うっ」

しかしダメージが未だに抜け切らず、思わず片膝を付いてしまう。

『大丈夫かマスター！？』

ベルトからメカ犬の俺を心配する声が聴こえてきた。

「ああ・・・まだまだ行ける」

俺は心配させまいと立ち上がりながら、考えを巡らせる。

一対一の戦いなら、パワーフォルムが一番有利に戦えそうだが、生憎俺の相手は現在複数居るのだ。

どれだけ力が強くても機動力皆無じゃ、あのレベルの相手をしながら同時に他の相手と戦うのは、かなりの無理がある。

本来なら多数を相手にするのはスピードフォルムが一番だろうけど、今度はパワー不足で倒しきれるのか怪しくなってくる。

なら今の俺が出来る手段は・・・

「・・・メカ犬。あれをやるぞ！」

俺は決意を決めてメカ犬に話しかける。

『む？マスター。あれとは・・・まさかあれの事か！？』

メカ犬が驚きの声を上げる。

それもそうだろう。

一応の説明聞いてあるが、実戦で使うのはこれが初めてな上に、他のフォルムとはその概念からして離れている物なのだ。

ぶっつけ本番で何処まで使えるのか、全くの未知数なのである。

「ああ、あれだ」

『しかしこの場でいきなり使うのはリスクが高いぞ』

「しょうがないだろ？今この状況をどうにか出来そうなのはあれしかないんだからさ」

これは賭けだ。

確かに危険は伴うかもしれないが、今はやるしかない。

『分かった・・・行くぞマスター！』

「ああ！」

俺はベルトの右側をスライドさせて、黒いボタンを押した。

『ベーシックフォルム』

音声が流れると同時に全身が光に包まれてボディーカラーがメタルブラックへと変化する。

このフォルムはシードの全フォルムの中でも、最もバランスの良い能力を有しているが、このフォルムにも一つだけ、特殊な能力が存在している。

その能力が、今この場で必要なのだ。

俺は更に続けて黄色のボタンを押す。

『ベーシックファントム』

音声が流れると同時に、大量の光がベルトから発生する。

その光はやがて人型を形成し、その光を飛散させた。

光の中から現れたのは、もう一人の仮面ライダーシードである。

正確には瞳の色が灰色な部分とベルトの後ろに溝がある以外はだが・・・

『上手くいったなマスター』

メカ犬の成功を喜ぶ声が聴こえる。

ただし、俺のベルトからではなく、俺の隣に居るもう一人のシードからだ。

しかも俺の肩に手を乗せてくる。

この能力が基本形態のベーシックフォルムが持つ特殊能力のベーシックファントムだ。

他のフォルムでは武器に変換する能力を、分身体を作製する事に使い、その分身体の制御をメカ犬が遠隔操作で行う。

時間制限等もあるし、この能力を使っている間は、メカ犬本体は俺のベルトにいるが、遠隔操作で分身体を操っている為、その間の直接的なサポートが出来なくなるが、単純に味方が増えるのは心強い。

「俺があいつの相手をする。メカ犬は他の奴らの足止めを頼むぞ！」

俺はデビルを指さしながら、隣のシードの姿をしたメカ犬に指示を出す。

『うむ。任せろ！』

メカ犬はそう言いながら、戦う構えを取る。

「それじゃあ行くぞ！」

俺も構えを取り、戦う態勢を整える。

『負けるなよマスター！！！』

「分かってる！！！」

俺達はそれぞれの成すべき戦いをする為に走り出した。

「はあ！」

俺は右拳を目の前のデビルに振るう。

「ふん！」

しかし攻撃は捌かれてしまい、お返しとばかりに蹴りを放ってくる。

「おわっと！？」

目前に迫る蹴りを俺は紙一重でかわしながら、追撃を受けないように警戒しながら、二歩程後ろに後退する。

この人、やっぱり強い！

さっきからお互いに攻撃をしては避けての繰り返しである。

やっぱり本物の戦場で戦ってきた相手に、俺の我流で挑むのには限界があるって事なのだろうか・・・

「ふふふ・・・やはり君は強いな」

お互いに警戒を解かず構えながらも、デビルが俺に話しかけてきた。

「何でこんな状況で笑ってるんですか？」

俺はその笑みの意味を知りたいと思い、質問をする。

「楽しいからに決まっているじゃないか。強い敵と戦う・・・それ以上の喜びが何処にある？」

それが当然とばかりに返事を返してくる。

「それは誰かの日常を壊してでもするべき事ですか！？」

俺は言葉と共に前蹴りを繰り出す。

「そんな事は私の知った事ではない！」

俺の前蹴りを避けながら、答えるデビル。

「それでは逆に聞くが、君は何故その力を振るう？力とは争いその物だ！その力を君は戦い以外に使うのかね！？」

今度は俺に拳を振るいながら、質問を投げかけてくる。

俺はその拳をかわしきれずに後方に吹き飛ぶ。

「・・・力とは理不尽な物だ。力の無い者は意見を言う権利すらない」

俺はその声を聴きながら考える。

俺がこの力を手にしたのは、全くの偶然だ。

最初は力その物を否定していた位だ。

少しだけ・・・

少しだけだが俺は先程の言葉に共感を持つ事が出来る。

確かに力は理不尽だ・・・

どれだけ大切にしていても、どれだけ守ろうとしても、力が及ばなければ全てを根こそぎ奪われていく。

だけど・・・

そんな力だけが全てなんだろうか？

俺にはとてもそうは思えない。

本当の力ってなんだろうか？

そんな事・・・

俺に分かる筈無いけれど・・・

これだけは言える。

「俺は諦めない・・・」

「ん？」

俺は痛む身体を持ち上げながら、目の前の理不尽に言い放つ。

「確かにあなたの言う通りかもしれない・・・弱い人は大切な物を何も守れない・・・けれど！」

人の強さはそんな単純なものなんかじゃない！

人は其々に自分だけの強さを持っている。

もしもその人達が、理不尽に日常を奪われそうになったのなら・・・

「俺が守る！」

強さの意味は一つじゃない！

誰かの力が足りないのなら補えば良いんだ！

だから俺はこの力で、理不尽な力から皆の日常を守りたい！！

「俺の力は守るための力だ！！！」

俺は叫びを上げて、バックルからタッチノートを取り出し、全体図を表示させると、右拳の部分をタッチして再びバックルに差し込んだ。

『ポイントチャージ』

ベルトから光が発生して、右腕のラインを通じて、拳に光が集約する。

「良いだろう・・・その勝負受けて立とう！」

俺の様子を見てそう言うと、デビルの右腕にも薄紫色の光が集約していく。

俺達は互いに向かい合いながら構えを取る。

そして視線が合わさった時、同時に駆け出した。

「「うおおおおおおおおおおお！！！！！！」」

駆け寄った俺達は互いの右拳振りかざし己の出来る力の全てを叩き込んだ。

「「ぐうううううううう！！！！！！」」

俺達の拳は火花を散らし、どちらも引かないという意思表示を相手に見せ付ける。

「力だ！！力こそが全てだあああああ！！！！」

デビルの力に更なる力が入る。

「ぐっ！？」

俺の拳が少しずつ押し戻される。

「守るための力！？そんなものはただのまやかしだ！！！！現に君はその守る者の為に一度私にやられているのだからね！！！！！」

更に俺の拳は押し戻される。

「・・・確かにそうかも知れないけど・・・守る何かがあるからこそ・・・強くなれる力だってきっとある！！！！！！！」

俺は左手でバックルからタッチノートを取り出して、全体図を表示して、身体の四肢にタッチして再び差し込んだ。

『ポイントチャージ』

『ポイントチャージ』

『ポイントチャージ』

『ポイントチャージ』

俺の四肢に光が集約する。

特に右腕は更なる輝きを放ち始める。

「うをおおおおおおお！！！！！！！」

俺は一気にデビルの拳を押し戻し吹き飛ばす。

吹き飛ぶデビルに俺は更なる追い討ちをかける。

左の拳を打ち込み、怯んだ所で、左右から連続で蹴りを一発ずつ叩き込む。

「ライダーラッシュ！！！」

俺は最後に一際大きな輝きを放つ右拳を喰らわせた。

その一撃を喰らったデビルも流石に今の一撃には耐えられなかった様で、爆発を引き起こした。

爆発の中から出てきたのは右拳ゆっくりと引いていく俺と、地面に横たわる黒澤さんだった。

「・・・君の勝ちの様だな・・・」

普通ならやられたらその場で気絶する筈なのに、この人は・・・本当に歴戦の戦士なんだな。

「最後に一つだけ聞きたい・・・次に目が覚めた時には・・・君の事を・・・忘れているかも知れないからね・・・」

「・・・何ですか？」

「・・・君が一番守りたいものは・・・何なんだい？」

俺が一番守りたいもの・・・

「それは・・・絆って奴かもしれません」

「・・・絆？」

「俺にも上手く言えないんですけど、俺が今日ここで戦ったのは友達の為です。それに・・・」

俺の脳裏に浮かぶのは一人の幼馴染の女の子だった。

「俺に戦う勇気をくれたのも、大切な友達だったから・・・」

世界を守るとか、そんな事は出来ないと思うけど、俺は守りたいと思う・・・

せめて俺の大切な何かを・・・

「・・・ありがとう・・・そ・・れが・・・君の・・・つ・・よ・・・さ・・・・・」

黒澤さんはそれだけ言うと深い眠りに着く様に、その意識を手放した。

「終わったのか・・・っと」

俺は全ての事が終わって力が抜けたのか、崩れ落ちそうになる。

『おっと！』

しかしそのまま倒れる事は無く、誰かに支えられた。

支えてくれたのは、俺と同じ姿をした仮面ライダーだった。

「・・・悪いな・・・相棒」

『気にするな。良く頑張ったなマスター』

メカ犬はそう言うと俺を支え起こした。

何とか自分の足で立ちながら俺は確認を取る。

「所でお前がこうしてるって事は他のホルダーは？」

『うむ。全員倒しておいたから心配するな』

メカ犬の答えを聞いた後、あたりを見渡すとあちらこちらに気絶した男達が転がったいた。

「・・・流石だな」

これで取り敢えず俺達の役目は大体片が着いた。

後はTさんがガルドを捕まえれば・・・

そこまで考えた所で、Tさんとガルドが乗っている筈の船から爆発が起きる。

「な、何だ！？」

更に爆発は連続で起こり、俺達が近くに居た場所の船体の一部が吹き飛ぶと、その中から一人の人物が、此方に吹き飛ばされてきた。

俺はその人物を咄嗟に受け止めたのだが、その人物は、

「Tさん！？」

護衛隊の武装とは違う何処かの軍服の様な服を着ており、右手にはSF映画に出てくる様な近未来チックな銃が握られているが、確かにTさんだ。

素人目に見た所では、致命傷になりそうな傷は見られないが、それでもボロボロである。

「気をつけろ・・・奴は・・・ガルドは・・・狂ってる・・・」

Tさんが俺にそう呟いた後に、船体から更なる爆発が起きて、その中から一人の男が出てくる。

短い金髪に猛禽類の様な鋭い眼光の男。

「ガルド!?」

それがこの男の名前であり、この事件の真の黒幕である。

ガルドは周りを見回した後に、溜息を一つ吐き俺達を睨み付けてきた。

「管理局の犬だけではなく、仮面ライダーまで居たとはな・・・おかげで俺の計画は台無しだ・・・」

「計画?」

俺の呟きが聴こえたのか、ガルドは語り始める。

「シルバーライトの王になる事を皮切りに、島で俺の忠実な兵士を量産して世界を俺の住みやすい世界に変えようと思っていたのに・・・なのにだ!!!管理局も仮面ライダーも俺の邪魔ばかりする!!!!!」

怒りの咆哮を上げるガルドから、緑色の光が立ち上る。

「メカ犬・・・これってまさか！？」

『うむ！どうやらガルドもホルダーだったという事のようだな』

つまりガルドの意識は既にホルダーに侵食されていたって事か？

緑色の光は更に輝きを増し、そして飛散する。

そしてその光の後に居たのは・・・

「嘘だろ！？」

体長が３０ｍを超える巨大な蟹の様な生物が浮いていたのだ。

『どうやら人並み外れた欲望が、ホルダーの姿に多大な影響を及ぼしたようだな・・・』

メカ犬が冷静に分析するが、そんな落ち着いている場合じゃないだろ！？

蟹の様なホルダーはハサミの中に何かのエネルギーのような物を溜め込み始める。

『不味いぞマスター！早く避難しなければ・・・』

メカ犬がそこまで行った所で、集められた光が発射されて辺り一帯をを吹き飛ばす。

俺達もそれに巻き込まれ、力無く倒れ伏す。

もう限界なんて、とっくに超えているのだ。

そこにあんな滅茶苦茶な奴なんて反則も良い所である。

俺はここまで良くやった。

流石にこれ以上は・・・

「なにやっとるのじゃあああああ！！！！！！！！」

意識を手放そうとしたその時、俺の耳に一人の少女の声が響いた。

「・・・エミリー・・・様」

チェイサーさんの上に乗った俺の友達のお姫様が俺に叫んでくる。

「純は仮面ライダーなんじゃろううううう！！！！！仮面ライダーはこんな所で諦めてしまう奴なのかあああああああ！！！！！！！！！！」

そうだ・・・

思い出した・・・

過去に画面越しに見た彼らの事を・・・

彼らはどんなにピンチになろうとも諦めなかった・・・

ピンチになる度に、自らを奮い立てて最後まで戦い抜いた・・・

今の俺に、そんな彼らと同じ名を名乗る資格があるのだろうか・・・

俺は確かめるように指を一本ずつ動かしていく・・・

大丈夫だ・・・

動く・・・

・・・俺はまだ戦える!!!!

「・・・まだ動けるか・・・相棒?」

俺は隣で倒れている仮面ライダーの姿のメカ犬に声を掛ける。

『・・・うむ。ワタシは大丈夫だ・・・』

メカ犬の方も、何とか動けるらしい。

「立つぞ・・・」

『うむ・・・』

俺達は立ち上がる。

満身創痍ではあるが、まだ負けてはいないのだ。

たとえ勝ち目が限りなく低くても、勝利を信じて戦い抜く・・・

それが・・・

仮面ライダーだ！！！

『恐らく奴に小手先の攻撃は通用しない・・・最大の一撃で勝負を掛けるぞ！』

「ああ！」

俺はタッチノートを引き抜く。

「ちょっとくすぐったいぞ」

俺はそう言いながら、メカ犬に背中を向かせて、ベルトの後ろの溝にタッチノートをスライドさせる。

『ロード』

音声が流れると同時に、メカ犬の操る分身体の右足に光が集約する。

そして俺は再びタッチノートをバックルに差し込む。

『アタックチャージ』

その音声と同時に俺の右足に光が集約する。

俺とメカ犬は視線を交わし同時に構えを取る。

「『こいつで決めるぜ！！！』」

俺達は同時に飛び上がり、両者の輝く右足をホルダーの一点に向けて最大の一撃を放つ。

「『はあああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！！！』」

二人の輝く右足が火花を散らしながら、巨大なホルダーの甲羅に少しずつ亀裂をつけて行く。

「『いっけえええええええええええええええええええええ！！！！！！！！！！！！！！！』」

俺達の気合の咆哮と共に右足に纏う光は強まり、亀裂は広がり遂には貫き貫通する。

その身体を貫かれた巨大ホルダーは、地響きを起こすほどの叫びを上げて爆発を巻き起こした。

そして爆発跡地には、気絶したガルドの姿があった。

俺は巨大ホルダーの最後を確認した後、バックルからタッチノート引き抜き、右の小さなレバーを引っ張った。

『ロードアウト』

音声が流れると、隣に居た分身体は消えて、ベルト状態だったメカ犬も元の犬型に変形した。

そして俺の全身は光に包まれ仮面ライダーの姿から、元の板橋純の姿に戻る。

「終わったな・・・今度こそ」

俺はそれだけ言うと地面に大の字でぶっ倒れた。

流石に限界である。

もう指一本動かせそうに無い・・・

『本当に良くやったなマスター』

隣に居たメカ犬が俺に話しかけてきた。

俺は大の字で夜空を見ながら短く返事を返す。

「ああ・・・」

こうして夏休みが明けて、初めてのホルダー事件は無事に幕を閉じた。

## ○エピローグ

あの日から二週間という時間はあっという間に過ぎていった。

平凡な日常だったかと聞かれると、答えに苦しむ部分もあるが、それでも楽しい毎日を過ごすことが出来た事だけは確かである。

エミリー様は約束通り、次の日からもなのはちゃん達とお昼にはお弁当を食べ、休日にははやてちゃんも一緒になって海鳴市の色んな場所に遊びに行った。

他にもクラスに仲の良い友達が出来たようで、俺は本当にこのお姫様の日常を守る事が出来たんだなと実感できた。

ただその楽しかった日々も今日で一旦終わりを迎える事となる。

「皆・・・我を送り出してくれて本当に感謝するのじゃ」

俺達は現在飛行場に来ている。

昨日をもって、エミリー様の留学期間は終わり、これから国へ帰らなければ行けないのだ。

「またきっと会えるよね」

「今度は私たちが遊びに行ってあげるわよ」

「休みの日にしか、あんまり遊ばれへんかったけど、私たちは友達

やで」

「絶対にまた会えるよ！エミリーちゃん！！」

俺達はエミリー様を見送る為に皆でここに来たのである。

ここまで車で乗せてきてくれた恵理さんには素直に感謝している。

その恵理さんは、子供達とは別にサバスチャンと別れの挨拶を交わしているのだが。

あ！

何かサバスチャンが叩かれた。

一体どういう関係なんだろうかあの二人は？

そして俺はと言うと・・・

「もう怪我の具合は良いんですかTさん？」

「ああ、何時までも寝てる訳には行かないしね」

最後にガルドを無力化した後、Tさんの仲間だという女性が現れて、ガルドの身柄を拘束していったけど、大丈夫なんだろうか？

「あの・・・ガルドはあの後どうなったんですか？」

「ガルドは昨日まで、この街で拘束していたけど、漸く組織のメンバーがやってきて然るべき場所に送られたよ」

「そうですか・・・」

ガルドの所在は分かったのだが、黒澤さんの姿は、俺の身体が動くようになった時には船着場から煙の様に消えてしまっていた・・・

黒澤さんは執拗なまでに力に固着していたけど・・・

もしかしたらあの人にも、何か守りたい大切な何かがあったのだろうか・・・

「板橋君には本当に感謝しているよ」

「Tさんはこれからどうするんですか？」

潜入調査で護衛隊に入隊していたって事は、このまま例の組織に帰るのだろうか。

「後片付けがあるからね。シルバーライト島でそっちの件を早く終わらせて、知り合いに預けている妹を迎えに行くよ」

「妹がいるんですか？」

「ああ、可愛い盛りでね。何時か板橋君にも会わせてあげるよ」

Tさんは爽やかな笑顔を見せる。

「楽しみにしてます」

俺がTさんと会話をしていると、

「お～い純！！！！！何時までTと話しておるのじゃ！！！！我にも挨拶をせんか！！！！！」

エミリー様からのお呼び出しが掛かった。

「ご指名みたいだよ？ヒーロー君」

Tさんが茶化しながら言ってくる。

「そうみたいですね・・・それじゃあお元気で」

「うん」

俺は短くではあるがTさんに別れの挨拶をした後に、エミリー様の元に走る。

「ごめんね。待たせちゃったみたいで」

「全くその通りじゃ！純とはもっと話したい事があったと言うに、もう殆ど時間が無いではないか！！！」

「本当にごめん」

確かに殆ど時間は無いようで、サバスチャンもTさんも別れの挨拶を済ませてエミリー様を遠くで待っているようだ。

「仕方ないのう～」

エミリー様は溜息を一つ吐くと、真剣な眼差しで俺を見た。

「ありがとうなのじゃ」

真剣な表情から出てきた言葉は、お礼の言葉だった。

「純のおかげで我は幾つものかけがえの無い物を守る事が出来た・・・何度礼を言っても言い足りぬ」

「いや、その日にお礼は何度も聞いたから、今更改まって言わなくても・・・」

「それでの・・・このままでは我の気が済まぬから、純には我の大切な物を進呈しようと思うのじゃ・・・」

エミリー様はそう言うと俺に一歩近づいてくる。

「いや、何かくれるってのは嬉しいんだけど、そんなに大切なものなら受け取れないよ!?」

仮に幾つもある物だったとしても、高価なものだったら、逆に萎縮してしまいそうである。

「大丈夫じゃ。荷物にもならぬし、一度誰かにやれば奪われる心配も無いものじゃ」

エミリー様はそう言ってまた一歩近づいてくる。

「だから遠慮無く受け取るのじゃ」

そう言って近づいてきたエミリー様の姿は遂に俺の視界から完全に

消えてしまう。

代わりに俺の唇に、何か柔らかい感触が生まれる。

時間にすれば数秒の事だったのだが、その時間はやけに長く感じられた。

唇に感じていた感触が無くなると同時に、再びエミリー様の表情が視界に入る。

「え、エミリー・・・様」

目の前に居るお姫様は頬を桜色に染めながら、

「我が純に送るプレゼントは・・・忘れられない思い出じゃ！」

そう言うとエミリー様は走り出していった。

そしてサバスチャン達の傍に着いてから一度だけ振り向き、

「もう様は付けなくて良いからのー！！！」

それだけ言うとエミリーさ・・・エミリーちゃんはターミナルの奥へと二人を引き連れて去っていった。

俺が手を振り見送っていると・・・

「はっ！？」

後ろから凄まじい殺気を感じた。

後ろを振り向くと、なのはちゃん達四人が俺に殺気を放ちながら、笑顔を貼り付けていた。

「ど、どうしたの皆？」

「・・・ねえ純君」

代表してなのかなのはちゃんが俺に声を掛けてきた

「な、何かな？」

俺が聞き返すと今度は四人で・・・

「「「「ちょっとお話しよっか？」」」」

俺は言い知れぬ恐怖を感じて、全速力で走り出した。

俺は生存本能に従い、全力全開で走り続ける。

何か後ろからかなりの罵詈雑言の嵐が聞こえて来るが、一体何が彼女達の怒りの琴線に触れたのだろうか？

俺は全力で思考を巡らせて一つの結論に辿り着く。

まさかなのはちゃん達！！！！

ユ○なのか！？

そうなのか！？

確かにはやてちゃん辺りは怪しいなと思う事が多々あるけど！？

そう言えばエミリーちゃんは将来お姉さまって素で言われそうなタイプだったからな～。

俺が一人納得しながら走っているとタッチノートから、

「『マスター！街でホルダーが暴れているぞ！直ぐに来てくれ！』」

メカ犬の通信が入ってきた。

ただでさえ今は忙しいっていうのに・・・騒動ってのは連続で起こるものなのだろうか！？

今日の海鳴は、そんなに平和じゃないが、海の向こうの友達が居る国はとても平和だ。

完

## 映画版　仮面ライダーシード　シークレットエピソード　プリンセスメモリアル

どうもこのような所を最後までお読みいただきありがとう御座います。

作者のＧ－３Ｘです。

途中でインフルエンザ等と体調を崩しましたが何とか完成させる事が出来ました。

しかし一つの内容でここまで長く書いた作品は初めてでしたので、個人的には消化不良気味な所が多々有ったりします。

何はともあれ次回からは通常更新に戻ると思いますので次回を楽しみにしていただけたら嬉しいです。

多分間に仮面ライダーの能力表が入ると思いますが・・・

# 仮面ライダーシード　解析ファイル（前書き）

感想欄で要望がありましたので載せてみました。

# 仮面ライダーシード　解析ファイル

○仮面ライダーシード

●ベーシックフォルム

シードの基本フォルムで全体的な能力のバランスが良く様々な戦いに対応出来る。
武器は使わず格闘戦を得意としている。
ボディーカラーはメタルブラック。

身長２０５ｃｍ　体重１００ｋｇ　パンチ力５ｔ　キック力１０ｔ
走力１００ｍを５．４秒　一跳び３５ｍ

必殺技＝「ライダーキック」　「ライダーパンチ」　「ライダーラッシュ」　「ツインシードスマッシュ」※

特殊武器＝ベーシックファントム

自身の分身体を作り出す。
制御はメカ犬が担当する。

※この技は映画版の最後で使われた技の正式名称である。

●スピードフォルム

全フォルム中で最も素早さに秀でたフォルム。
他に特殊武器のスピードロッドの特性から一対多数の戦闘を得意としている。
ボディーカラーはライトグリーン。

身長２０５ｃｍ　体重８５ｋｇ　パンチ力２．５ｔ　キック力４ｔ
走力１００ｍを１．８秒　一跳び８０ｍ

必殺技＝「ウインドテイスティング」

特殊武器＝スピードロッド

棒状の武器。

●サーチフォルム

他のフォルムと違い身体的な能力ではなく感覚的な部分を強化するフォルム。
特殊武器のサーチバレットは全フォルム唯一の遠距離攻撃を可能にしている。
ボディーカラーはスカイブルー。

身長２０５ｃｍ　体重９７ｋｇ　パンチ力２ｔ　キック力３ｔ　走力１００ｍを６秒　一跳び２５ｍ

必殺技＝「ガトリングブースト」

特殊武器＝サーチバレット

連射性能に優れた銃。

●パワーフォルム

全フォルム中で最も力に秀でたフォルム。
機動力を犠牲にした代わりに唯一ベーシックフォルム以上の近接戦闘能力を誇る。
ボディーカラーはクリムゾンレッド。

身長２０５ｃｍ　体重１２０ｋｇ　パンチ力８ｔ　キック力１２ｔ
走力１００ｍを１０秒　一跳び１５ｍ

必殺技＝「ブレイクインパクト」

特殊武器＝パワーブレード

赤い刀身の両手剣。

## 仮面ライダーシード　解析ファイル（後書き）

それでは今度こそ次回からは本編に復帰です。

## 第十話　俺が執事で怪盗を追う！ちなみに主は・・・【前編】（前書き）

約一週間振りの投稿になります。

本編の更新は久し振りですが、楽しんで頂けたら幸いです。

# 第十話　俺が執事で怪盗を追う！ちなみに主は・・・【前編】

窓の外から、朝の爽やかな陽射が降り注ぐ。

俺はその光を浴びて、今日の始まりを感じながら、長い廊下を歩く。

良く掃除が行き届いているのであろう、塵一つ見当たらないその清潔な廊下を暫く歩き、辿り着いたのは、とある部屋の前である。

俺はその部屋のドアを数度ノックする。

これが今日という長い一日で、俺が最初にする仕事になるのだ。

返事があれば俺が取り敢えずそれ以上する事は無いのだが、この部屋の主からの返事が無ければ、次の行動に移らなければならない。

・・・・・

如何やら結果は後者の様である。

「しょうがないな・・・」

俺はそう呟き、返事が返ってこないと分かっていながらも、失礼しますと言って、部屋へと入室する。

部屋には別に鍵が掛かってるという訳でも無く、すんなりと入る事が出来た。

ノックをしたのは、プライベートを尊重したマナー的なものである。

俺が入った部屋は一般家庭と比べれば、かなりの広さを誇っている。
部屋の主の趣味が反映されているのであろう。
室内には大量の犬グッズが見受けられる。

「・・・くぅ・・・くぅ・・・」

その部屋の主は幸せそうな表情で、全長一メートルはあろうかと思われる、白と黒の斑点カラーな犬のヌイグルミを抱いてベッドの上で眠っていた。

その顔を見ていると、起こすのが忍びなく思えるが、これも俺の仕事なのでそうも言っていられない。

俺はこの部屋の光を遮っていたカーテンを勢い良く横に引っ張る。

そうする事で、今までこの部屋の光の進入を防いでいたカーテンは、その役目を終えて朝日が部屋の全体に満ちていく。

それはベッドの上も例外では無く、この部屋の主の顔にも光は降り注がれる。

「・・・う、う～ん」

目を閉じていても顔に当てられる光に眩しさを覚えたのだろうか、部屋の主は不快に感じた様で、怪訝そうに声をあげた。

俺は起こすなら今だなと、これを好機と見て、声を掛ける。

「もう朝ですよ。早く起きてください」

部屋の主は俺の声の反応したのか、ゆっくりと瞼を上げた。

「・・・もう朝？」

まだ寝ぼけているのか、俺にそんな質問を投げかけてくる。

「はい。そうですよ」

だから早く起きてくださいね、と俺は部屋の主を急かす。

「分かったわよ・・・」

そう言って部屋の主は、ベッドから上半身を起こして、欠伸をしながら伸びをしてから、

「おはよう純」

と言って俺に朝の挨拶をした。

「はい。おはようございます。アリサお嬢様」

俺はこの部屋の主である、アリサちゃんのその言葉に、爽やかな笑顔で返事を返す。

執事服を着た状態で・・・

ヘタレ転生者、板橋純。

バニングス邸にて、見習い執事生活を始めて三日目の朝の出来事だった。

何故俺がアリサちゃんの家で執事見習いをしているのかというと、鮫島さんのしつこ過ぎる熱意についに折れたという訳では無く、ちゃんとした理由があるのだ。

それは今を遡る事、三日前の出来事なのだが・・・

【三日前】

『最近謎の怪盗が海鳴市に出没するそうなのだマスター』

メカ犬が唐突に俺に告げた。

自室でカップのバニラアイスを食べながら寛いでいた俺は、いきなり部屋に入ってきて、発言したこのフルメタルドッグを如何したものかという表情で見る。

夏休みが終わり、二週間を過ぎても、まだまだ残暑の厳しいこの時期。

その上夏休み明けから最近までは、海外からお姫様が留学生としてやってきたり、ホルダーの大群と大立ち回りを演じる等忙しい事この上なかった。

更にこれから小学校では運動会という大きなイベントが控えているのである。

おかげで俺は最近疲れ気味なのだが、メカ犬の言動からは更なる疲れを助長しそうな予感がビシビシと伝わってくるのだ。

久しぶりに少しだけ、ノンビリと過ごす事が出来る時間がやって来たので、寛いでいた訳なのだが、如何やら安息の時間は開始数分で終わりらしい。

「・・・それが如何したんだよ？」

無視する訳にも行かないので、俺はリラックスタイムを終了させて、嫌々ながらも話を進める事にした。

『マスターは海鳴市に出没する怪盗の話を知っているか？』

「ああ・・・まあ、最近有名だからな」

海鳴市の謎の怪盗。

それは以前から偶に話題に上がって来ていたのだが、今年の夏休み

が終わった辺りから、急激に知名度の上がってきた話題である。

怪盗は女性であろうという事意外は、全て謎に包まれている謎だらけの存在だ。

そんな怪盗がどうして皆の注目を集めたのかというと、それなりの理由がある。

世間では裏で悪い事をする権力者等、何時の時代でも居るものなのだが、今回メカ犬が言っている怪盗は、そういった奴らの家に予告状を送り盗みを働くのだが、その際に権力者の裏の部分を明るみにして、世間に公表しているのだ。

そしてこれはあくまで噂なのだが、その盗んだ物は換金されて、世界中の恵まれない人々に匿名で寄付されているらしい。

最初に誰が言い出したのか、この女性怪盗を人は何時からか現代のネズミ小僧の再来と言い、レディーマウスと呼ぶ様になった。

ただしこれは、夏休みが終わる以前に流れていた噂である。

最近話題になっている噂では、今まで流れていたレディーマウスの話とは全く別の話なのである。

今流れている噂では、レディーマウスは兎に角海鳴市近辺のお金持ちの家に予告状を送りつけて、金目の物を強奪していくらしいのだ。

しかも今までは、その容姿も性別が女性であること意外は、表に流れて来なかったのだが、この新しい噂では一つの容姿が提示されている。

人外の異形。

もしくは怪物だ等と言われているのだ。

メカ犬も恐らくはその噂からこの事件はホルダーの仕業かも知れないと、あたりを着けたのかもしれない。

『最近の噂でワタシはこの怪盗が怪しいと思うのだが、マスターは如何思う？』

メカ犬の発言から、俺の予想は当たっていたらしい事が分かった。

「確かにここまで以前と違う内容の噂が流れるのは気になるけど・・・」

気にはなるが何処で待ち伏せすれば会えるのかも分からないし、どうやって探せば良いのか想像もつかない。

唯一の手段に出来そうなのは、予告状の送られた場所に犯行予告日に張り込む位だが、一般人である俺にそれを知る手段は無い。

こういう事は、雑誌記者の恵理さんに聞くのが一番手っ取り早いと思うのだが、それは残念ながら無理なのである。

恵理さんは現在タイミングが悪い事に、海外に取材に出ており、戻るのは来月になるそうなのである。

何でも海外の都心部で恐竜の様な何かが目撃されたとかで、緊急チームを組んだらしいのだが、海鳴ジャーナルは何処まで手広く取材

する気なのだろうか？

『心配無いぞマスター』

俺が思案顔で考えていた為か、その表情から俺の考えを読んだのであろうメカ犬は、自信満々に俺に言う。

「如何いう事だよ？」

『実は犯行予告された場所に、心当たりがあるのだ』

質問した俺に対しメカ犬は、当たり前の様に答える。

それこそ如何いう事だって話だ。

「何でメカ犬がレディーマウスの犯行予告なんて知ってるんだよ？」

『ジャックからの情報だ』

ジャックとは、メカ犬と個人的にも仲が良いチワワの情報屋だ。

情報屋なので、ジャックがこの情報を知っていてもおかしくないと思えるのだが、その情報ソースも基本は動物からなので、目撃情報等は集まりやすいが、逆に人の中だけで完結する内容は集まり難いと思っていたのだが、意外な情報源があるのだろうか？

「良くジャックがそんな事知ってたな」

俺は素直な感想を口にする。

『うむ。何でも予告状の届いた家で飼われているコジローという者が、主人から相談されたのだと言っていたぞ』

「ああ・・・」

そういえば居るよな。

一人暮らしのＯＬさんとかが、飼い犬とかに人生相談するとか・・・

それも考慮するならば、案外動物発信の情報でも、意外な情報が入ってくるものなのかもしれない。

「取り敢えず居場所に見当がつくなら、動いても良いと思うけど、その犯行予告日って何日後なんだ？」

『今日の夕方五時だ』

「は！？」

俺はメカ犬の声を聴き、急ぎ部屋の壁に取り付けられている時計に視線を向ける。

現在の時刻　　午後四時二十五分十八秒

「後三十分位しか無いんじゃないか！？」

俺は時計の時刻を確認して驚愕した。

『うむ。急がなければ間に合わないので行くぞマスター』

メカ犬はそう言うと部屋を足早に出て行く。

「ち、ちょっと待てって！」

俺も急ぎメカ犬を追って部屋を後にした。

家に帰ってから気付くのだが、食べかけの俺のバニラアイスは完全に溶けていた。

出かける前に冷凍庫に入れてくれれば良かった・・・

「コジローってこいつがか？」

俺達はチェイサーさんに犯行予告のあったお屋敷にまで連れて来てもらった。

意外と自宅からも離れていなかったので、余裕で時間に間に合った俺達は、ジャックの情報源にもなったコジローに詳しい話を聞こうと思ったのだが・・・

「コジローってワニだったのかよ!?」

全長二メートルを超えそうな巨体のワニが、鋭い瞳で俺を見ている。

ここのお屋敷の主で、このワニのコジローの飼い主は齢七十を超えるお婆ちゃんなのだが、お婆ちゃんは異常な程にコジローを溺愛しており、メカ犬がコジローの友達だと言ったらすんなりとお屋敷に入れてくれたのだ。

そんなアッサリ入れてしまって大丈夫なのかと思ってしまうが、お婆ちゃんは嬉しそうに言う。

「コジローのお友達が訪ねて来るなんて初めてでね～。お散歩に行く時も皆コジローを避けるから、お友達が居たなんてあたしゃあ安心したよ」

突っ込み要素が多すぎて、何処から突っ込んで良いのか判断に困る。

それに下手に突っ込みを入れて、お婆ちゃんの機嫌を損ねて追い出されては、元も子もないので俺は全面スルーを決め込む事にした。

お屋敷の庭にある、コジロー専用の池に案内してくれたお婆ちゃんは、ゆっくりしていってねと言って、屋敷に戻っていった。

俺としてはお婆ちゃんから話を聞いた方が、内容的にも命の安全的にも良いと思うのだが、メカ犬は早速とばかりにコジローと話し始めるし、今からお婆ちゃんを追うのも躊躇われるので、なるべく大人しく事の成り行きを見守る事にした。

それにしてもメカ犬・・・

・・・お前はワニとまでもナチュラルトークが出来たんだな。

時刻は間も無く午後五時を迎えようとしている。

現在俺とメカ犬は、コジローの池がある近くの茂みになっている部分に身を潜めていた。

「しかし本当に来るのか？」

俺は茂みに身を潜めながら、同じく隣で身を潜めているメカ犬に質問する。

『コジローの言っている事が真実ならば間違い無いだろう』

メカ犬の通訳で聞いたコジロー話は、非常に驚くべき内容だった。

犯行予告で盗むと言われた物とは・・・

何とコジロー専用の歯磨きだったのである。

この歯磨き、勿論ただの歯磨きな訳が無い。

ボディーには高い純度の純金が使用されており、更にその中には一般人の結婚指輪よりも高価なダイヤモンドを始めとする様々な宝石が埋め込まれ、ブラシの部分には高級象牙が使われていたりする。

恐らくその総額は、サラリーマンである俺の父さんの年収所か、一生涯で稼いだ金額でも、精々二割に届くかどうかといった所であろう。

何でも飼い主のお婆ちゃんが、コジロー用にオーダーメイドしていた物が、後から追加で要望を継ぎ足しているうちに、この超高級ワニ用歯ブラシを誕生させてしまったのだそうだ。

金持ちの道楽なんて言葉があるが、これは既にその一線を越えてしまっている気がする。

さて、肝心のその高級歯ブラシなのだが、毎朝お婆ちゃんがコジローの歯を磨いた後は、池の横に設けられている歯ブラシ置き場（諮問照合の鍵付き）の中に片付けるらしい。

コジローの話だと今日も予定通りに使用した後、お婆ちゃんは元の位置に戻したんだそうだ。

鍵があるからといって、外にこんな高価な物を置いておく等、一般市民の思考を持つ俺には想像すら出来ないが、これは待ち伏せするには好都合である。

普通ならば、警備員の人とかが見張りをしそうな物だが、そんな事は一切無かった。

まあ、内容だけを聴けば、お宅のペットの歯磨き取っちゃうぞというだけの話である。

お婆ちゃんも、取られたら新しい歯ブラシを買ってあげるから、と話ただけでこの話題は終わったそうなのだ。

ハッキリ言って次元が違うと思った。

俺はお婆ちゃんとの間に決して越えられない、見えない壁の存在を確かに感じたのは、いた仕方ない事だろう。

「本当に『キンキュウケイホ』！？」

もう一度メカ犬に文句を言おうとした所で、タッチノートから警報が鳴り響いた。

咄嗟に警報音を切り、出来るだけ気配を消す事にした俺達の目の前に、異形の存在が現れる。

タッチノートが反応した事から、あの異形がホルダーなのは間違い無さそうだ。

その異形は身のこなしが軽いようで、お屋敷の高い塀を意図も容易く飛び越えてきた。

その異形は全身が灰色の体毛に覆われており、お尻には肌色の細長

い尻尾、頭の上には二つの丸い耳が付いていた。

一言で例えるなら超ド級にデカイ二足歩行のネズミである。

巨大なネズミは歯ブラシの保管されている場所に手を突っ込み、中から無理やり取り出し、一目散にその場を走り去っていった。

あまりの強引さと素早い行動に俺は呆気に取られる。

『何をしているマスター！早くしないと逃げられるぞ！？』

「は！そうだった！！」

メカ犬の言葉で我に返った俺は茂みから飛び出し、タッチノートを開く。

「行くぞメカ犬！」

『うむ！』

メカ犬の返事を聴いた俺はタッチノートのボタンを押す。

『バックルモード』

タッチノートから音声が流れて、隣に居たメカ犬がベルトに変形すると、自動的に俺の腹部に巻きつく。

「変身」

音声キーワードを入力した俺は、バックルの中央の窪みに、タッチ

ノートを差し込んだ。

『アップロード』

音声と共に白銀の光が発生すると、その光が俺の全身を包み込み、一人の戦士の姿に変える。

メタルブラックのその姿は、知っている者ならば皆が仮面ライダーと呼ぶであろう、まさにそれだ。

『奴の素早さに追いつくにはスピードフォルムだマスター！』

「ああ！」

俺は短い返事を返しながら、ベルトの右側をスライドさせて緑色のボタンを押す。

『スピードフォルム』

メタルブラックの身体は光に包まれ、飛散すると同時に鮮やかなライトグリーンへと変貌する。

「それじゃあ行くぞ！」

『うむ！』

全身が軽くなる事を実感した俺は、急ぎ走り去ったホルダーの追跡を開始した。

「見つけた！」

スピードフォルムの恩恵で、素早さが上がっているからか、ホルダーに追いつくには、さほどの時間は掛からなかった。

「か、仮面ライダー！？」

俺の声が聞こえたのか、振り向いて俺の姿を見たホルダーが驚きの声を上げる。

その声は男性的な低い声である。

「声は明らかに男だけど、こいつはレディーマウスじゃ無かったのか？」

ホルダーが発した低い声を聴いた俺は、このホルダーはレディーマウスの偽者なのかと思った。

『それを判断するのは、早計だぞマスター』

ベルトからメカ犬の意見が聞こえる。

「如何いう事だメカ犬？」

『あまり使う機能ではないのだが、ホルダーの中には自身の肉声を変質させる事が出来るタイプもいる。素体となった人間が本物の怪盗だとするならば、その特性を持つ可能性は極めて高い』

メカ犬の言っている事はつまり・・・

「正体を見ないと、如何とも言えないって事だな」

『そういう事だ』

俺とメカ犬の間で一つの議論が完結した所で、ホルダーが俺に言い放つ。

「仮面ライダーが私に何の用があるんだ。私は別に誰かを襲うような事をした覚えは無いが？」

詭弁でこの場を何とかしようとでもいうのか、ホルダーが言い訳がましい事を言ってきた。

俺はホルダーの右手に握られている物を指さして、言い返す。

「襲ってはいなくても、盗みは働いただろう！大人しくその右手に持った歯ブラシを持ち主に返すんだ！」

この一文だけを文章化して皆に見せたら何言ってんだこいつはって

感じの台詞ではあるのだが、その歯ブラシが一本あれば、人生観が変わる位の大金が手に入る品なのだ。

とても冗談で済む話ではない。

「・・・仕方が無い」

ホルダーは右手を下ろすと・・・

「・・・なら貴様を倒すまでだ!!!」

下げた右腕から細長い尻尾が歯ブラシを巻き取り、両腕が自由になったホルダーはそう叫びながら襲い掛かってくる。

『来るぞマスター!』

メカ犬が近づくホルダーに対し、俺に警告する。

「分かってる!」

俺は返事を返しながら、拳を振りかざすホルダーをバックステップで避けながら、ベルトの右側をスライドさせて、黄色のボタンを押す。

『スピードロッド』

音声が流れると同時にベルトから光が発生する。

俺がその光を掴むと変化を起こし、スピードフォルムの専用武器であるスピードロッドへと姿を定着させる。

「はっ！」

ロッドを回転させながら俺はホルダーの頭部、腹部へと一撃ずつ喰らわせていく。

「ぎゃあ！！！」

ホルダーはロッドの連撃に耐え切れずに吹き飛ぶ。

しかしダメージは思ったよりも負っていなかったらしく、すぐに立ち上がると、俺に戦いでは敵わないと悟ったのか逃走を始めた。

『逃げる気だぞマスター！』

「待て！」

建物を跳躍しながら、逃走するホルダーを追って、俺も同じ様に建物を飛び越えながら追跡する。

追跡を開始して暫くすると、ホルダーは逃げ切れないと悟ったのか、

「そんなに返して欲しければ返すよ！！！」

そう言って尻尾に巻きつけていた歯ブラシを俺に投げつけた。

「うわ！？」

突然の事に俺は、慌てるものの、何とか歯ブラシを取りこぼす事無く、見事にキャッチに成功する。

「・・・良かった」

俺はその手に抱き止めた高級過ぎる歯ブラシの無事を確認しながら、安堵の溜息を吐いた。

『マスター！ホルダー反応が消失したぞ！？』

安心した所で、メカ犬が現状を報告してくる。

恐らくホルダーは逃げる為の一瞬の隙を作る為に、俺にこの歯ブラシを投げつけて来たのだろう。

俺はまんまとホルダーの作戦に引っ掛かったって訳だ。

だが小市民の俺に、ホルダーを優先してこんな高価な物をぞんざいに扱う事など出来る筈も無い。

「どの辺りで反応が消えたか分かるか？」

『うむ。それなのだが・・・』

何かメカ犬は言い辛そうにしている。

「如何した？」

『反応が消えた場所なのだが・・・驚かないで聴いて欲しい』

メカ犬が改めて言う。

『反応が消失したのは・・・バニングス邸。アリサ嬢の家だ』

「はあ！？」

俺が驚いたのは言うまでも無い。

バニングス邸周辺を独自に調べてくるという事で、一足先に家に帰ってきた俺が、部屋の中で無残にも溶けきったアイスを目撃してから暫くして、メカ犬も調べ事を終わらせて家に帰って来た。

『結論から言おう。今回のホルダーは今日バニングス邸に居た人物の誰かで間違い無い』

この日メカ犬は、俺達がホルダーと遭遇する前に、ジャックに頼んで海鳴市の動物達に何か異常が無いか探らせていたのだそうだ。

更にバニングス邸の飼い犬達に意見を聞いた所、俺達がホルダー反応を見失った前後の時間に、見知らぬ人物は見かけなかった。

そう。

見知らぬ人物は見かけなかったという事は・・・

ホルダーはバニングス邸の飼い犬達が良く知る人物の可能性が極めて高いのである。

「これから如何する？」

俺は何か良い方法は無いものかと、思考しながら、メカ犬にも意見を聞いてみる。

するとメカ犬は・・・

『ワタシに一つ良い方法があるぞ』

と言った。

その方法は・・・

「今日から一週間という短い間ですが、執事見習いとして指導させて頂きます。板橋純です。宜しくお願いします」

メカ犬の言う良い考えとは・・・

潜入調査というものだった。

こうして俺は執事見習いとしての生活をスタートさせたのである。

# 第十話　俺が執事で怪盗を追う！ちなみに主は・・・【前編】（後書き）

○何でもメカ犬相談室【第五回】

『読者の諸君元気にしていただろうか？』

『久し振りの本編更新という事で、今日はリアルで作者が質問された事に答えようと思うぞ』

○質問です。

仮面ライダーシードのベルトの右側はフォルムチェンジの機能が付いていますが左側にも何かあるんですか？

『・・・答えにくい質問が来たな』

『だがワタシは答えよう！』

『答えは有るだ！』

『残念ながら今はそれ以上言えないが、いずれ本編で日の目を見る事もあるだろうから、その日を楽しみにしてくれ！』

『それではまた次回で会おう！！！』

「久し振りなせいかぶっちゃけたな・・・」

メカ犬相談室は何時でもご質問やお便りをお待ちしております。

## 第十話　俺が執事で怪盗を追う！ちなみに主は・・・【後編】（前書き）

続きの更新になります。

楽しんで頂けたら幸いです。

# 第十話　俺が執事で怪盗を追う！ちなみに主は・・・【後編】

俺が執事見習いを始めたことを、一番喜んだのはアリサちゃんの専属執事をしている鮫島さんだった。

今まで熱心に勧誘を続けてきた努力が、ついに実を結んだのだと、一筋の涙を流す程に・・・

更に鮫島さんは感極まったのか、俺は一週間だけの体験学習だと最初に言っておいたにも関わらず、俺を自分の後継者にすると言い出し、見習い兼アリサちゃんの専属第二執事の称号を頂いてしまった。

それだけならば良いのだが、鮫島さんの暴走は留まる事無く、見習い期間中はバニングス邸付近に建てられている社宅で暮らす様にと指示されたのである。

それは流石に色々な問題があるだろうし、第一に小学生が両親が居るのに一週間とはいえ、一人暮らしをするのは無理があると反論したのだが・・・

「良いわよ。頑張ってね純」

という母さんの二つ返事の了承により、許可が出されてしまった。

ただの天然なのか、それとも俺を信じてくれているからこそなのか。

個人的には後者であって欲しいと切実に願うが、正解は限りなく前者のような気がする・・・

まあ、そんな訳で、俺は肉体年齢が小学生にして、一人暮らしをする事になった。

平日は学校もあるので、執事の仕事は朝と夕方が主となる。

執事見習い初日に俺は、鮫島さんから執事とは何かを座学で学ぶ事となった。

俺は正直執事という仕事を甘く見ていたのかもしれない。

勿論仕事なのだから、大変な事もあるのだろうと思ってはいたのだが、執事の仕事とは俺の予想を遥かに超えていたのだ。

鮫島さんいわく、【執事とは奉仕のプロフェッショナルでなければならない】との事だ。

仕えるべき主が、何時如何なる時に、何を必要としても、迅速に対応出来る様に、常に執事は自身を鍛え準備を怠ってはならない。

身の回りのお世話は当然として、高い教養と、身体能力。

家事全般に始まり、あらゆる乗り物の操縦にその他諸々が出来なくては、一流とは言えないのである。

鮫島さんは俺に執事の才能があると言ったが、そんなにも過酷な事をこなせる才能は凡人の俺には皆無である。

俺は鮫島さんに如何して凡人である俺に、執事の才能があると言ったのか尋ねてみた。

すると鮫島さんは、確かに執事には幾多の才能と多大な努力が必要ではあるが、それ以上に大切な物があると言った。

その執事にとって最も大切な物とは、主を想う奉仕の真心なのだそうだ。

この真心がどんな才能よりも執事には必要であり、鮫島さんは俺に出会った瞬間にこの少年を一流の執事にしなければならないという天啓を受けたとか・・・

俺にそんな真心があるかどうかは自分では良く分からないが、鮫島さんに俺は如何見えたのだろうか？

まあ、ここまで色々言ってきた訳ではあるが、乗り物の免許を取得するのは、年齢制限があるし、専門知識を覚えるには一週間という時間はあまりにも短すぎる為、今回は俺の出来る範囲でアリサちゃんのお世話をする事で、執事の在り方を少しでも学ぶ事が課題となった。

座学で執事の心得を触りだけではあるが学んだ俺は、次にアリサちゃんの身の回りのお世話でするべき事を、今の俺にでも実行可能な部分で習い、早速次の日から実践する事になったのである。

今の俺に出来る事等、たかが知れたものであり、アリサちゃんの日常をサポートするぐらいしか出来ないのだが、俺はアリサちゃんの執事として二日目を終えた時ある事に気付いた。

仕事という事もあり、アリサちゃんに敬語を使って話していた以外は普段の俺と殆ど大差無かったのである。

大きく変わった事は、起こす相手がお隣のなのはちゃんから、ご主人様であるアリサちゃんに代わった位のものだった。

俺はこの事実をどう受け止めたら良いのだろうか・・・

ちなみにこの日、俺が起こしに行かなかった為か、なのはちゃんが遅刻した。

暫くの間は起こしに行けないって伝えたのだが、なのはちゃんの寝起きの悪さは筋金入りのようだ。

まあ、そんな感じで俺の執事＆一人暮らし生活は、何気に変わり映えしないなという感想を抱きながら、数日が過ぎていった。

『つまりホルダーは、この三人の内の誰かという事だな』

「あの中にホルダーが居るならな」

俺は今社宅で自分に与えられた一室でメカ犬と作戦会議をしている

所だ。

執事見習いになったのはホルダーを見つける為の潜入捜査であり、本気で執事を目指すつもりは、鮫島さんには悪いが今のところは無いのである。

今俺達は、この数日で行った其々の調査を報告し合い、ホルダーの正体に出来るだけの目星を着けようとしていたのだ。

俺はホルダーと戦った日に、バニングス邸内で働いていた従業員のシフト等、兎に角出来る限りの情報を集めた。

メカ犬は俺が内部で調査をしている間、夏休み前後を中心としたレディーマウスの動向を詳しく調べてもらっていたのである。

そして二人の情報を結び合わせた結果、バニングス邸内部の人間で犯行が可能であろう人物を三人にまで、絞り込む事に成功したのだ。

一人目の容疑者は、バニングス邸専属の庭師。

二人目の容疑者は、お抱えシェフの料理長。

三番目の容疑者は、最近雇われた新人のメイドさん。

集めた情報から、犯行時間にバニングス邸内部に居ながら、アリバイの無かったのが、この三人である。

「問題はこの中の誰かがホルダーと仮定した場合、誰がそうなのかって事だな・・・」

『うむ。一番手っ取り早いのは、身体調査でもして、暴走プログラムを所持しているかを確認する事だが・・・」

メカ犬の言う方法が実行可能ならば、確かに話は早いのだが、そんな事をするのは無理なのは分かっている。

せめて新たに犯行予告でも出してくれれば、やり様もあるのだが今の所は、これ以上の絞込みは出来そうに無い。

「相手がボロを出すまで、監視するしかないか?」

『うむ。それしか無いだろう』

古典的ではあるが、これからの作戦を監視作戦にする事が決定した。

こうして俺達の作戦会議は、一旦終わりを告げたのである。

「手伝ってくれてありがとうね」

「いえ。これも見習いの勤めですから気にしないでください」

俺は掃除用具を抱えながら、お礼を言うメイドさんに返事を返す。

「まだ小さいのに確りしてるわね純君は。お姉さん感心しちゃうわ」

「そんな事無いですよ」

俺とメイドさんは互いに爽やかな笑顔で笑う。

今俺が会話をしているこのメイドさんは、作戦会議で容疑者の一人に上がっていた新人のメイドさんで名前は葉山瞳（はやまひとみ）さん。

綺麗な黒髪で腰まで届きそうな髪が印象的な、大和撫子を彷彿させる女性である。

昨日の作戦会議の結果、俺達は其々分担して相手を監視する事に決定した。

そして俺が担当する事になったのが、今目の前にいる瞳さんなのだ。

ちなみにメカ犬は、身体の小ささを有効活用して調理場に潜入し料理長を、残る庭師は、チェイサーさんがホバーモードで空から監視している。

「でも私のお手伝いなんてしてて良いの？純君のお仕事はアリサお嬢様のお世話だって聞いたけれど・・・」

「ああ、それなら大丈夫です」

アリサちゃんは今日なのはちゃん達四人でやる事があるとかで、男の俺には着いて来ないように言われているのだ。

何をするのかは知らないが、元々女の子のグループの中に男の俺が一人混じっている方が変なのである。

女の子だけで会話をしたい日も当然あるのだろう。

「今日は女の子だけで遊ぶみたいで俺はお留守番なんです。だから気にしないでください」

「あら、そうなの」

俺と瞳さんはその後も時折雑談を交わしながら、邸内の清掃活動を続けた。

掃除をしながら思うのだが、今の所俺には瞳さんがホルダーとは到底思えないのである。

三人の中では唯一の女性であり、ホルダーの正体がレディーマウスだとしたら、この人が一番怪しいと思っていたのだが、全くと言って良い程に、そんな素振りを見せはしない。

まだ油断は出来ないが、俺はこの人はホルダーじゃないのではと考え始めている。

「ねえ。純君にちょっと聞きたい事があるんだけど良いかな?」

バニングス邸内で、瞳さんが担当する掃除場所を全て回り終えた頃、瞳さんが俺に質問をしてきた。

「純君はどうしてこの歳で執事見習いになろうと思ったの？」

瞳さんの表情からは興味津々という感情が読み取れる。

まあ、普通に考えれば、基本的には平和な日本で年齢一桁の子供が、本格的に職業訓練していたら、大抵の人が興味を持つだろう。

俺が執事見習いを始めたのはホルダーの正体を探るためなのだが、勿論正直に言う訳にもいかない。

「え～とそれは・・・」

「それは？」

前のめりで聞いてくる瞳さんに言い逃れは出来そうに無いと感じた俺は・・・

「・・・それが必要だと感じたからです」

流石に詳しい事は言えないが、重要な部分を言わなければ大丈夫だろうと考えた俺は、やはり正直に答える事にした。

「・・・如何して必要だって思うの？」

俺が真面目に答えた為か、雰囲気が少しだけ変わったと思ったのだろう。

瞳さんからも、少しだけ真面目な雰囲気が出ている気がする。

「・・・それは言えません。でも俺はここでやらなきゃならない事があるんです。こんな答えじゃ納得して貰えないかも知れないですけど、今はこれ以外に言い様も無いんで・・・」

「・・・そう」

瞳さんは俺にそう一言だけ返した。

「こんな答えで納得してくれるんですか?」

「ええ。だってこれ以上聞いても純君が困っちゃうだけでしょ」

瞳さんは微笑みながら言う。

「それに純君・・・とっても良い目をしてたから」

「目・・・ですか?」

「とっても澄んだ目をしてる。何か強い決意を持ってるような・・・純君はそんな目をしてるよ」

瞳さんはしゃがみ込んで、俺と視線を合わせてから、両手で俺の頬を包み込み、一心に俺の目を覗き込んでくる。

「ひ、瞳さ・・・ん?」

俺は瞳さんに、流石に恥ずかしいので、放してくれる様に声を掛ける。

「あの人と同じ目をしてる・・・」

しかし聞こえていないのか、瞳さんは独り言の様に話続ける。

「私にもやらなきゃならない事があるんだ・・・あの人の意志を継ぐ為に、何より私自身がそうしたいって望んでるから・・・」

話がよく見えないのだが、瞳さんにもやらなきゃならない事があるらしい。

単純に考えればメイドの仕事なのだろうけど、俺にはどうも違う事を言ってる様に思える。

暫くすると、瞳さんは俺の頬から手を放してくれた。

「・・・ごめんね。純君の目が私の知ってる人に凄く似てたから・・・」

そう言って瞳さんは、呆ける俺を置いてその場を去って行った。

その日の夜。

バニングス邸で、レディーマウスからの予告状が発見された。

『これはチャンスだぞマスター』

社宅の俺の部屋で、第二回になる作戦会議を開始すると、メカ犬が開口一番にそう口にした。

予告状が発見されたその日、バニングス邸は大騒ぎとなった。

レディーマウスから予告状が来たのだから、騒ぎになるのは当然の事なのだが、一番の問題はその予告状には【最も大切な物を頂く】の一文だけが書かれており、何を盗むのか明確には記載されていなかったのである。

これにより、バニングス邸の警備は、最高レベルまで引き上げられる事となった。

俺とメカ犬は二十四時間見張っていた訳では無かったので、分からなかったのだが、チェイサーさんは予告状が発見される時間まで、庭師の監視を続けており、ホルダーかどうかは兎も角、庭師が今回の予告状をバニングス邸に置いていない事だけは証明された。

確定では無いが、これで容疑者は暫定的に、料理長かメイドの瞳さんのどちらかに絞り込まれたのである。

「チャンスってどういう事だよ？」

『うむ。予告状には次の日の夜七時に来ると書かれていたのだろう』

「ああ」

確かにメカ犬の言う通り、犯行の予告時間は夜七時と書かれていたそうだ。

『ならばワタシ達もその日の夜はバニングス邸で、レディーマウスが来るのを待ち伏せるぞ』

メカ犬が言うことは最もオーソドックスな作戦であるが、その作戦に賛成するには一つだけ解決しなければならない事がある。

「待ち伏せをするのは良いんだけど、あの広いバニングス邸の何処で待ち伏せるんだよ？」

予告状には何を盗むのかは、書かれていなかったのである。

何処で待ち伏せるかで、下手をすれば逃げられる危険性も出てきてしまうかもしれない。

『その事だが、ワタシに一つ心当たりがある』

「心当たり？」

『実はアリサ嬢に、家で最も高価な物は何なのかを聞いて置いたのだ』

メカ犬がアッサリと言い放つ。

一体何時の間にアリサちゃんに、そんな事を聞いたんだろうかこい

つは・・・

『そういう訳で次の作戦は、待ち伏せで行くぞマスター』

こうして俺達の第三の作戦はバニングス邸での待ち伏せ作戦に決定したのである。

「本当にここに来るのかな？」

俺はバニングス邸の、とある部屋の近くの庭で身を伏せながら、呟いた。

とある部屋とは、アリサちゃんの両親の部屋の事である。

幸か不幸か、部屋の主であるアリサちゃんの両親はとても忙しい人達で、この日も海外に居るらしい。

そのアリサちゃんは、今日は危険かも知れないという事で、すずかちゃんの家にお泊りに行っている。

しかもそれに便乗したのか、なのはちゃんとはやてちゃんも一緒にお泊りをするそうで、すずかちゃんの家では、現在パジャマパーティーが開催されている事だろう。

所で俺が何故こんな場所で、待機しているのかというと、それなりの理由がある。

メカ犬の話ではバニングス邸で最も高価な物が、この部屋にあるんだそうだ。

それはアリサちゃんのお母さんのティアラである。

アリサちゃんが言っていたそうなのだがそのティアラは高価であると同時にとても思い出深い品なのだそうだ。

「・・・守りたいよな」

その思い出が何なのかは、俺のあずかり知らない所ではあるが、誰にとっても大切な思い出とはあるのである。

それを盗むなんて許せる筈が無い。

左腕に着けた腕時計で時間を確認すると、現在の時刻は午後六時五十分を回っている。

犯行予告の時間まで後十分も無い。

俺が時計から目を離し部屋の近くを確認した時、人影が動くのを見つけた。

今の時期は残暑が厳しいながらも、空が暗くなるのは随分と早くなっており、何の光源も無しでは、かなり近づかなくては顔を確認する事すら出来ない程である。

ライトを持っていない様なので、警備員では無さそうだ。

俺はタッチノートを取り出し、別の場所で待機している、メカ犬に連絡を取る。

「聞こえるかメカ犬」

「『如何したマスター。まだ犯行予告の時間ではないが、何かあったのか？』」

「ああ、怪しい人影を見つけたから、これから後を追ってみる！」

「『分かった。ワタシも直ぐに行くから気をつけろ！』」

「了解！」

俺はタッチノートの通信を切り、謎の人影を追って走り出した。

その人影は建物の近くで不審な動きをしている。

「そこで何をしているんだ！？」

俺はライトを付けてその人影に当てながら叫ぶ。

メカ犬が来るまでにはもう少し時間が掛かるが、変身出来なくても

多少の時間ならば稼げるかも知れないと考えた俺は、思い切って声を掛けたのだ。

「！？」

突然ライトを浴びた人影が此方に振り向く。

その正体は・・・

「瞳さん！？」

そこに居たのはメイド服を着た女性である瞳さんが居た。

やはり瞳さんがホルダーだったのかと俺が思ったその時・・・

『キンキュウケイホウキンキュウケイホウキンキュウケイホウ・・・』

タッチノートから警告音が鳴り響く。

それと同時に、俺の近くの壁にひびが入る。

「危ない！！！」

それを見た瞳さんが、俺を抱え込みながら、その場から離れる。

その次の瞬間、先程まで俺の居た場所には、無数の崩れた瓦礫が降り注いだ。

もしも俺があの場所に居続けたとしたら、今頃は大怪我では済まな

い事態に陥っていたかも知れない。

「どうやら当たりみたいね・・・」

瞳さんが何やら呟きながら瓦礫のさらにその先を見据える。

その先に居たのは人外の化け物と言うに相応しい姿をした存在が居た。

一言で表すのであれば、二足歩行の巨大なネズミ。

間違い無く、以前ワニのコジローが飼われていたお屋敷で遭遇したホルダーだった。

俺は瞳さんがホルダーではないかと疑っていたのだが、どうやらそれは間違いだったらしい。

「ごめんね純君。君は私が必ず守るから、少し下がっててね」

瞳さんは俺にそう言うと、抱えていた俺を解放して、ホルダーを睨み付けながら、一歩前に出る。

「やっと見つけたわよ。偽者さん」

「ん？」

ホルダーに指差しながら啖呵を切る瞳さんに、ホルダーが反応した。

「何だいこのメイドさんは？」

「あなたね！最近レディーマウスの名を騙って、悪さをしているっていうのは！？」

「突然何を言い出すんです貴女は？私は正真正銘レディーマウスですよ。第一仮にそうだとして、どうして貴女は私が偽者だと分かるんですか？」

「それはね・・・」

瞳さんはホルダーに言葉を返しながらスカートに手を入れる。

「本物がここに居るからよ！！！」

スカートの中から瞳さんが取り出したのは、鞭だった。

慣れた手つきで鞭を振るう瞳さんは、そのままホルダーに鞭の一撃を浴びせ様とするのだが・・・

「ふん！」

ホルダーは自身の尻尾を瞳さんが扱う鞭の様に操り、その一撃を防いでしまう。

この一連の出来事に驚き続ける俺だが、一番驚愕したのは、瞳さんがホルダーの攻撃をした時に言った言葉である。

それが真実であるならば、瞳さんは本物の・・・

「なるほど・・・貴女が本物のレディーマウスだったという訳ですか。道理で私が偽者だと分かる筈です」

ホルダーが俺の思っていた事を口にする。

「そういう事よ。良くも人の名前を使って好き放題やってくれたわね」

「それはすみませんね・・・でもその心配も今日までの話ですよ」

「ふざけないで！」

瞳さんはホルダーの言葉に激昂し、再び鞭の一撃を繰り出す。

しかしその攻撃はまたしても、ホルダーに届く事は無かった。

ホルダーは先程も鞭の一撃を防いだ自らの尻尾を使い、鞭を絡め取ってしまったのである。

「きゃっ！？」

自身の手から鞭が無理やり奪い取られた事で、瞳さんは手を傷めたのか、後ろに後退した。

「ふざけて等いませんよ。何せ今日から私が本物のレディーマウスになるんですからね」

瞳さんは俺を庇う様に、手を広げながら後ろに下がっていく。

そしてホルダーが、お遊びはここまでだとばかりに、襲い掛かろうとしたその時、俺の良く知る声が聞こえて来た。

『遅くなってすまないなマスター』

その声の主は頭上から、俺の横に降って来て、見事に着地を決める。

「何処言ってたんだよお前は？」

俺はメカ犬に遅いぞと文句を言う。

『それなのだがマスター、先程からの違和感に気づかないか』

遅れてやって来たメカ犬はそんな事を言い出した。

「違和感？」

『周りには大勢の警備員がいる上に、こんなにも大きな音を立てているというのに誰も来ないだろう』

メカ犬に言われて俺も気付く。

確かにこんな大騒ぎをしているのに誰も来る気配が無い。

「如何いう事だよ？」

『これが奴の能力だ。恐らく奴の能力は認識阻害で間違い無いだろうな』

「認識阻害って、チェイサーさんも使ってる奴と似たようなのか？」

『原理は違うが、似たような物ではあるな。奴の場合は自分から一定距離を置いている相手からの存在を隠蔽できる様だ。逆にその範

囲の内側に居る相手には何の効果も無い様ではあるがな』

「じゃあメカ犬が遅くなったのは・・・」

『マスターが張り込んでいた場所を中心に、奴の能力の範囲の内側に入るまで、しらみつぶしに探していたのだ』

如何やらメカ犬も相当苦労してここまで来てくれたらしい。

「ねえ、純君・・・それって何なの？」

瞳さんがメカ犬を未知の生物を見る目で、指差しながら俺に質問してくる。

そういえば最近ここで働き始めた瞳さんは、メカ犬を見るのはこれが初めてだった筈だ。

俺がどう説明しようか考えていると、

『始めまして。ワタシはオモチャ会社の新製品の（以下略）』

メカ犬がもはや持ちネタのギャグになりつつある例の説明を開始した。

「それは取り敢えず、今はいいから・・・」

仕方なく俺はメカ犬に軽く突っ込みを入れて黙らせる。

「え～と、こいつの事を一から説明すると長くなるんで、俺の相棒だって思ってくれれば良いです」

俺は簡潔にメカ犬の説明を済ませる。

「相棒？」

まあ、こんな説明では余計に分からなくなるであろう。

瞳さんも頭の上に大きな？マークを浮かべている様な想像が容易に出来そうな程に、困惑した表情を見せている。

「君達・・・何時まで私を無視しているんですか？」

今まで突然のメカ犬の登場により、放心していたホルダーが、我に返った様で、俺達に指摘して来た。

確かに何時までも無視する訳には行かない様だ。

「それじゃあ行くかメカ犬」

『そうだなマスター』

俺とメカ犬は一歩前に足を踏み出す。

「ち、ちょっと！危ないわよ！？」

俺達の突然の行動を見て、瞳さんが慌てて声を掛ける。

その声を聞いた俺は、瞳さんに答えを返す。

「大丈夫ですよ」

「純君？」

「俺が今ここに居るのは、この為なんですから」

俺はそれだけ言うと、ポケットからタッチノートを取り出して開く。

「やるぞメカ犬！」

『了解だマスター！』

メカ犬と声を掛け合いながら、俺はタッチノートのボタンを押す。

『バックルモード』

隣のメカ犬は音声が流れると同時にベルトに変形して、俺の腹部に自動的に巻かれる。

「変身」

俺は音声キーワードを入力して、素早くタッチノートをバックルの窪みに差し込んだ。

『アップロード』

白銀の光が俺の全身を包み込み、その姿をメタルブラックの戦士に変える。

「「仮面ライダー！？」」

俺の変身シーンを見た瞳さんとホルダーが同時に驚きの声を上げる。

驚くのも無理は無いと思うのだが、今この場に居る全員が、仮面ライダーにホルダーとレディーマウスなんていう普通の人が居ない状況なので、自分の事を棚に上げてそこまで驚くのは、失礼じゃないかと思ってしまうのは、俺のわがままなのだろうか？

『また逃がしては面倒だ。一気に迫るぞマスター！』

何気に意気消沈している俺にメカ犬が声を掛けてくる。

「ああ、分かってる！」

俺は気を取り直しながら、ベルトの右側をスライドさせて緑のボタンと黄色のボタンを続けざまに押す。

『スピードフォルム』

『スピードロッド』

ボディーカラーは鮮やかなライトグリーンに変わり、俺の右腕にはこのフォルムの専用武器であるスピードロッドが握られる。

「それじゃあ派手に行くぜ！」

俺はロッドを振るいながら素早く接近してホルダーに連撃を打ち込んでいく。

「ぎゃ！？」

ホルダーは俺の素早さに対応出来ないのか、俺の連続攻撃をまともに喰らい吹き飛ぶ。

「くそ・・・」

ホルダーはまたしても逃走を図る為に立ち上がろうとするが、それを許すほど俺達は甘くない。

『逃げる気だぞマスター！」

「させるか！」

俺はバックルからタッチノートを引き抜き、スピードロッドの溝にスライドさせる。

『ロード』

音声が聞こえた事を確認した俺は、再びタッチノートをバックルに差し込む。

『アタックチャージ』

ベルトから発生した光が右腕のラインを通り、スピードロッドの先端に集約する。

「こいつで決めるぜ」

俺は集約した光の先端をホルダーに向けて、全力で走り出す。

「スピードロッド」

全力で走る事で得た力の全てを収束させて、最高の突きをホルダーに食らわせる。

「ダッシュ・エア・プッシュ」

高速で繰り出された突きを喰らったホルダーはそのまま爆発した。

爆発跡に居たのは、コック姿の男性だった。

その男性には見覚えがあった。

「ホルダーの正体は料理長だったんだな・・・」

こうして今回の怪盗騒ぎは無事に幕を閉じたのである。

以外にも早くホルダーの事件が解決したので、俺がこれ以上執事見習いをする必要は無いのだが、周りはそんな事情は知らないので、翌日も俺は朝から仕事の為にバニングス邸に訪れていた。

まあ、昨日はアリサちゃんがお泊りの為、すずかちゃんの所に行っているので、あまりする事は無さそうなのだが、恐らくメイドさんが一人居なくなっているであろうから、そのフォローが出来ればと思い来て見みた訳だ。

俺がバニングス邸の敷地内に入ると・・・

「おはよう純君。昨日は大変だったわね」

「ええそうですね。昨日は本当に・・・って瞳さん!?」

そこにはメイド服を着た瞳さんが居たのである。

「ど、如何して瞳さんがここに居るんですか!?」

「如何してって私はここで雇われてるメイドなんだから、ここに居るのは当然でしょ」

瞳さんは当然とばかりに言う。

俺はその態度に本気で驚愕している。

てっきり俺は、偽者が居なくなった事でここに居る理由が無くなっただろうから、何処かに居なくなるのだとばかり思っていたのだが・・・

その事を言うと瞳さんは微笑みながら、

「私も最初はここに来た目的は、この付近に偽者が出る事を突き止

めて、いずれ狙われそうなここで潜伏してただけなんだけどね・・・」

そう言いながら瞳さんは、以前俺にした様に、しゃがみ込んで俺の頬を両手で包むと、耳元で囁いたのである。

「私ね。純君に凄く興味が出ちゃったから、暫くはここに居ることに決めたんだ」

それから瞳さんは何も無かったかのように、俺を解放して今日もお仕事がんばるぞ～等と言いながら去って行った。

俺は暫くその光景を見ながら固まっていたのは、致し方無い事だろう。

今日の海鳴は女性の謎を垣間見つつも、それなりに平和である。

○オマケ

「ただいま～」

俺が一週間の執事見習いを終えて自宅に帰り、玄関を開けた時、俺の目の前に信じられない光景が広がっていた。

「「「「お帰りなさいませご主人様」」」」

メイド服を着たなのはちゃん達が、玄関でお出迎えをしたのである。

その日の俺は・・・

・・・これはまたの機会に話す事としよう。

# 第十話　俺が執事で怪盗を追う！ちなみに主は・・・【後編】（後書き）

○何でもメカ犬相談室【第六回】

『さあ、今回もワタシのコーナーがやって来たぞ』

『それでは早速今回の質問に行ってみよう』

『今回は断空我さんの質問に答えるぞ』

○あなたは動物全部と会話できるんですか？
今回　ワニが出てきましたけれど

『結果から言えば、答えはイエスだ』

『ワタシには高性能な翻訳機能があるので、ある程度の思考回路を持っていれば、何とでも会話する事が出来るぞ』

『それではまた次回で会おう』

「俺も初めて知ったぞ・・・その事実」

お便り待ってますね。

## 第十一話　努力の先にあるものは【前編】（前書き）

今週の更新になります。

それと来週は普通に更新出来ると思うのですが、再来週以降は年末年始で多忙の為、更新が出来なくなると思われます。

その時はまた詳しく書くと思いますが・・・

それでは楽しんで頂ければ幸いです。

# 第十一話　努力の先にあるものは【前編】

「大丈夫？すずかちゃん」

俺はすずかちゃんに、確認する。

「うん、平気だよ」

すずかちゃんは俺の質問に、笑顔で答えてくれた。

特に痛みは感じている様子も無いので、本当に大丈夫なのだと思う。

「きつかったら遠慮無く言ってね。出来るだけ痛くないようにするからさ」

見た感じ大丈夫だとは思うのだが、我慢しているだけという可能性も少なからずは存在するので、俺は念を押す様に、もう一度だけ、確認した。

「あっん・・・」

確認をする時に、俺が多少動いた為か、すずかちゃんの声の調子が少しだけ変わる。

何故俺が動く事で、すずかちゃんが反応するかというと、俺とすずかちゃんが、限りなく密着している為だ。

一緒に本を読む時等は、何時も寄り添う様な形になるが、今はそれ以上に・・・言ってしまえば今の俺達は一つに繋がっているのであ

る。

だからどちらかが動けば、もう片方が何かしらの影響を受けてしまうのは、仕方の無い事なのだ。

「やっぱり、何処か痛かった？」

すずかちゃんの反応を見た俺は、再度安否を確認する。

「大丈夫だよ。ちょっとくすぐったかっただけだから・・・」

すずかちゃんはそう言った後、頬を桜色に染めながら、何処かモジモジとした動きを開始した。

現在密着状態である俺は、その動きに確かに、相手に動かれるとくすぐったいなと感じながら、質問する。

「突然モジモジしだして如何したの？」

「う、うん・・・何か今頃になって純君とこんなにくっ付いてるのが恥ずかしくなってきちゃって・・・」

恥ずかしそうに言ったすずかちゃんは、羞恥で頬を赤く染めながら、上目遣いで少しだけすずかちゃんより背の高い俺を見上げてくる。

まあ、確かにこれだけ密着というか、繋がっている状態では、すずかちゃんみたいに奥ゆかしく控えめなタイプの人は恥ずかしいと思うのも無理はないのかも知れない。

しかも目の前でこんな反応をされてしまうと、何だか俺まで恥ずか

しくなってきてしまう。

「そ、それじゃあ少し動くよ？」

このままでは場が持たないと判断した俺は、次のステップに移行するために提言した。

「う、うんそうだね」

すずかちゃんもこの恥ずかしい空気には耐えられないと感じたのか、俺の案に同意の意志を示す。

「それじゃあ、早速練習しよっか！」

「うん！」

俺とすずかちゃんはゆっくりと歩幅を合わせながら、長めの手拭いで繋がれている、俺の右足とすずかちゃんの左足を同時に前に出す。

季節は今も残暑が厳しい秋。

俺とすずかちゃんはもうじきやってくる運動会の本番に向けて、出場種目である二人三脚の特訓を開始したのである。

「今日は皆にお知らせと、話し合って貰いたい事がありま～す」

私立聖祥大附属小学校の一室の教卓で、我らが担任にして、独身・天然・自称２０代の真里子先生が俺達生徒達に対し、緩やか～な宣言をした。

今の時間は本日の授業が終了し、残すはこのＨＲのみであり、この時間が終われば、学生ならば余程の事情が無ければ、誰もが望むであろう放課後が待っているのだ。

そんな中で話し合いを要求するのだから、余程の内容でなければ、このクラスの生徒達は納得しない事だろう。

それというのもこの真里子先生は、普段は仕事に対して真面目なのだが、稀にその天然を発揮して、俺達を困惑させるのである。

一学期にはＨＲの時間に如何して自分に彼氏が出来ないのか、そして作るには如何すればいいのかを、マジ討論する様に言ってきたのだ。

その提案をしてきた前日に合コンで失敗したらしいからというのは、本人談である。

そもそも教師が合コンに参加した上に、それを自分の受け持つ生徒に話すのはどうかと思うが・・・

小学一年生にして、このクラスメイト達は空気を読む能力に長けており、この様な個人的で正直どうでも良いような議題にも、真剣に対応した経緯がある。

他にも例を挙げれば限が無いのだが、兎に角俺も含め、このクラスの生徒は全員この天然教師の奇行には随分と慣れているのだ。

そしてそんな俺達の共通認識としては、この状況からだと、普通に行事連絡をする場合と変な頼み事をするのかは、確率的に半々なので、取り敢えず今は様子を見守るというのが、セオリーである。

俺達は普通の議題であってくれと祈りながら、真里子先生の話の続きを黙って聴く。

「中には知ってる人もいると思いますが、もうすぐこの聖祥大附属小学校で、運動会が催されます」

真里子先生の今回の議題はこの発言から判断出来る通り、まともな物だった様だ。

クラス一同はホッと胸を撫で下ろした。

「あなた達一年生はこの学校の運動会は初めてだろうから、簡単な説明をするわね」

俺達が大人しく聴いている事を確認しながら真里子先生が運動会の説明をしていく。

運動会等は学校によって多少の差異はあるものの、何処の学校も似

たり寄ったりなもので、この学校もその例に漏れる事は無かった。

真里子先生の話を要訳すると、この学校では赤組と白組に分かれて、得点を競うらしい。

この時のチーム分けなのだが、これはクラス対抗になる為、このクラスの全員とその上の学年は少なくても全員味方になる。

それ以外は毎年くじ引きで、混合チームになるので、くじを引くまではどのクラスが味方、もしくは敵になるのかは、分からない仕様になっているのだそうだ。

そして真里子先生が言っていた今回俺達が話し合う事だが、この運動会で参加する個人競技に誰がエントリーするのかを決めて欲しいという事なのである。

まあ、そうは言っても俺達一年生が参加できる個人競技は、上級生と比べると制限もあり数が限定されてはいるが・・・

例えば騎馬戦や障害物競走等の体格差が出てしまう物には出られないのである。

騎馬戦は学校によっては廃止されている所もある程に危険だし、障害物競走は逆に小さい俺達では素通り出来るレベルになってしまったり、上級生に合わせるとクリア不可能な物が出てきたりと、バランス調整が難し過ぎる為、参加出来ない様になっていたりするのだ。

そういった訳で、俺達は全学年参加の全体競技以外にはあまり出れる種類は無かったりする。

大抵が道具を使わない５０メートル走や、体格差で勝負の優劣が決まらない借り物競争だったりになってくる。

話し合いは順調に進み、俺の参加する競技も無事に決まった。

俺は決まったのだが・・・

「それじゃあ行くよ！」

「うん！」

「私は何時でも良いわよ！」

なのはちゃんのやけに気合の入った言葉に、すずかちゃんとアリサちゃんも、負けないほどに気合の入った返事を返す。

今なのはちゃん達は、自分達が参加する競技の出場枠を賭けた、真剣勝負に挑もうとしている。

何故この様な事態になったかと言うと、始まりはなのはちゃんの一言だった。

どの競技に出場するのか迷っていた俺に、なのはちゃんが一緒に参加しようと持ち掛けてきたのである。

その競技は二人三脚だった。

この学校では、勝負を公正にする為か、二人三脚は男女一組のペアが参加条件になっているそうなのだ。

道具を使う競技で二人三脚は、一年生の俺達が参加出来る数少ない競技でかなり人気がある。

なのはちゃんもそこに魅力を感じたのか、男子の俺に一緒に参加しようと言ってきたのだろう。

まあ、なのはちゃんの場合は運動が苦手という事もあり、一人で走るよりは勝機が見出せると考えたのかもしれない。

特に断る理由も無いし、丁度出場枠も後一枠分空いていたので、俺となのはちゃんでエントリーしようとした所で待ったの声が掛かった。

その声を発したのは、聖祥大附属小学校一年生の美少女三人組（最近新たに一名加入された）の二人であるすずかちゃんと、アリサちゃんだった。

如何やら二人も二人三脚に参加したいらしい。

現在其々の参加競技と出場者を、真里子先生が黒板に書いているのだが、それを見ると残るエントリー可能な競技は、二人三脚が一枠と、借り物競争だけしか残されていなかった。

二人ともどうせ参加するのなら、面白そうな方に出たいらしく、二人には借り物競争よりも二人三脚の方が面白そうに思えたらしい。

俺は個人的には借り物競争の方が楽しそうな気がするのだが、女の子の思考回路とは、全く分からないものだ。

ここで異論を唱えたのが勿論なのはちゃんである。

二人が待ったの声を掛けなければ、そのまま参加競技が決まったのだ。

ならばこの反応も当然の事だと言えるだろう。

しかしこれに更なる異論を唱えるすずかちゃんとアリサちゃん。

話は収拾が着かず、混迷を呈したその時、その様子を見ていた真里子先生が一つの提案を提示した。

その提案とは・・・

「「「ジャンケンポン！！！」」」

平和的であり、かつ確実に公平な決着を着ける事が出来る、ジャンケンだった。

そしてこの勝負を見事に制したのは、

「・・・私の勝ちみたいだね」

すずかちゃんが、なのはちゃんとアリサちゃんに勝利宣言した。

こうして俺とすずかちゃんがペアで二人三脚に、なのはちゃんとアリサちゃんが借り物競争が今回の運動会における参加競技に決まったのである。

「ふう～。少し休憩しよっか？」

今日の練習を始めてから、一時間程経った頃、一旦立ち止まり、息を整えながら俺はすずかちゃんに提言した。

「うん。そうだね」

すずかちゃんも少し疲れ始めていたのか、俺の提言に肯定の意思を示す。

この時期の聖祥大附属小学校では、放課後のグラウンドと体育館が運動会の練習用に開放されており、俺とすずかちゃんは放課後のグラウンドで二人三脚の練習をしていた。

「もうすぐ運動会も本番だね」

休憩の為に、グラウンドの隅の木陰に移動し座っていた俺に、同じく隣で座っていたすずかちゃんが言ってきた。

「うん。こうして見ると、本当にもうすぐなんだって実感出来るよね」

すずかちゃんの言葉に頷きながら、俺は校庭の中心部を見る。

校庭の中心部では、競技の練習をしている生徒達以外に、運動会の実行委員をしている上級生達が、運動会本番に向けて、設営準備を行っている。

参加競技を決めて、練習を始めてから一週間が過ぎ、遂に週末は運動会本番を迎えるまでに迫っていた。

「何だか私、今からドキドキしちゃうな」

すずかちゃんも校庭の様子を見ながら、運動会本番が近づいていると実感したのか、俺にそんな事を言ってくる。

今日まで出場種目を決めてから、毎日練習に励んでいた事もあり、すずかちゃんも緊張してきたのだろう。

日々の努力を誰かに見せる機会は、様々な場面で訪れるものではあるが、運動会というのも間違い無くその一つである。

こういった場面では誰もが、多かれ少なかれ緊張するものだと俺は思うが、かく言う俺も結構緊張していたりする。

「俺もそうだよ」

俺はすずかちゃんの言葉に同意の答えを返す。

その後も俺とすずかちゃんは他愛の無い雑談をして休憩を続けた。

「私はもう十分休めたけど、純君は大丈夫？」

実際に休憩していたのは数分程だったが、すずかちゃんは元気良く俺に言ってきた。

すずかちゃんは見た目こそおっとりとした癒し系に見えるが、これで学年一のパワフルガールなのである。

先程の練習でも、体力的に疲れたというよりは、力をセーブしながら走っていた為の気疲れといった方が正しいのだ。

俺も毎日のようにお隣の人外パワーを所有するシスコンお兄様に木刀片手に追い掛け回されている為か、同年代ではあり得ない体力を有しているが、それでもすずかちゃんのパワーには驚かされるものがある。

まあ、それを分かった上でも、男の子って奴は女の子の前では強がりたいものなのだ。

俺もやっぱり男な訳で、幾ら自分より圧倒的に強いといっても、女の子が同じ事をやって平気そうにしているのに、自分が弱音を吐くのは躊躇われる。

「うん。俺も大丈夫。そろそろ練習をさい「きゃあああああああ！？」な、何だ！？」

立ち上がり練習を再開しようとしたその時、校庭の方から、女の子の悲鳴が聞こえた。

慌てて声のした方向に視線を向けると、上級生と思われる女子生徒

が座り込んで震えていた。

恐らく先程の悲鳴は彼女のもので間違い無い筈だ。

だが何故彼女は突然悲鳴を上げたのか、その答えは震える彼女のすぐ先に存在していた。

その存在を認識して悲鳴を上げた彼女のすぐ近くに居た生徒の一人が、彼女と同じようにその存在に対して新たな悲鳴を上げる。

「怪物だあああああああああ！？」

その声は、校庭全体に響き渡り、学校は瞬く間にパニックに陥った。

それは悲鳴の通り、人の姿をしていなかった。

しかもその存在は一体ではなく二体存在していたのである。

一体目は黄色い毛並みに黒い斑の入った模様と、猫科を思わせる顔立ちをしていた。

二体目の方は全身が黒い毛並みであり、一体目と若干顔質は異なるものの、似ている見た目だ。

例えるのならば、豹と黒豹である。

そう・・・

あいつ等は、俺が知る限りホルダーと見て間違い無い。

でも如何して学校にホルダーが突然やってきたんだ?

俺が疑問を抱き悩んでいると、騒ぎを聞きつけてやって来た先生達が、生徒の避難誘導を開始する。

「じゅ、純君私達も直ぐに避難しよう!」

隣に居たすずかちゃんが、校庭の様子を慌てた様子で見ながら、俺に言ってくる。

その間にも二体のホルダーは、何故か校内の設置途中である運動会に関するものばかりに狙いを定めて破壊活動を開始した。

その様子を見ながら俺はある事に気付いてしまった。

「・・・すずかちゃんは先に安全な所に行ってて」

俺は呟く様にすずかちゃんに言った。

「ど、如何して!?」

こんな時にそんな事を言うのは、不自然極まりないだろう。

勿論すずかちゃんも、突然こんな事を言う俺に異論を発するが、俺は無言である一点を指さす。

そこには破壊活動を続けるホルダーの近くで、最初に悲鳴を上げた女子生徒が未だに身動き出来ずに居た。

「あの人を助けなくちゃ・・・」

先生達は他の生徒の避難で手一杯で、あの女子生徒の存在に気付いていない。

気付いていたとしても、女子生徒を助けに暴れるホルダーの真っ只中に、躊躇無く生身で飛び込める人間はそう多くは居ないだろう。

「如何して・・・純君が助けに行かなくちゃ行けないの？・・・危なすぎるよ」

如何して俺がこんな事を言ったのかを察してくれたすずかちゃんだが、それでも尚俺がこの場で向かうのはおかしいと言ってくる。

正直言って俺も怖い。

特に今はタッチノートも練習の邪魔になる為、教室に置いてきてしまった為に、メカ犬と連絡を取ることすら出来ない。

それでも俺は気付いてしまったし、何とかしなくちゃって考えてる。

今は彼女に関心を示す事無く、設備の破壊を続けるホルダーだが、何時その牙を彼女に向けてもおかしくないのだ。

だから俺は今の自分に出来る最大限の事をしたいと思う。

「・・・大丈夫」

俺はすずかちゃんの両肩に軽く手を乗せて、向き合いながら、諭す様に問い掛ける。

「すずかちゃん。今は急がなくちゃいけないんだ。先生達は他の生徒達の非難で精一杯だし、この場で気付いてるのは多分俺だけだ。」

「でも・・・」

「大丈夫！」

尚も反論しようとするすずかちゃんに俺は出来る限りの笑顔で言う。

「・・・純君はズルイよ・・・」

有無を言わせない俺のやり方に、怒りを覚えたのか、すずかちゃんが頬を膨らませながら、少しキツイ視線を向ける。

「絶対・・・怪我しないでね・・・」

すずかちゃんはそれだけ言うと、俺から離れて先生達が生徒を避難誘導している場所へと走り出す。

その後姿を目で追っていると、すずかちゃんは一度だけ振り向いて俺に言った。

「純君のわがままを聞いてあげたんだから、後で私の言う事も何でも一つ聞いてね？」

その言葉に一瞬面食らったが、俺は何とか頷く事で、すずかちゃんに返事を返す。

俺の返事にすずかちゃんも満足した様で、今度こそ本当に避難場所へと駆け出して行った。

「・・・さてと、それじゃあ行くかな！」

俺はすずかちゃんが避難場所に向かうのを確かめてから、自分自身に気合を入れて、走り出した。

目指すは、現在も破壊活動を続ける、二体のホルダーがいる校庭の中心部だ。

中心部にまでやってくると、流石にホルダーの力の異常さが良く分かる。

こんなものを突然何の前振りも無く、目の前で見せ付けられたりすれば、身動き出来なくなるのは当然と言えば当然と言えよう。

「大丈夫ですか！？」

俺はホルダーの暴れる近くで震えている上級生の女子生徒に、肩を手で軽く揺すりながら話しかける。

すると今までの放心状態が解けたのか、その目に精気を取り戻していく。

「わ、私は今まで何を？」

「立てますか？」

「え、ええ・・・」

「ここは危ないですから、早く逃げて！」

女子生徒は、正気を取り戻したものの、未だに現状が把握しきれていない様で、俺の指示に従いながら、この場を立ち去っていく。

「さてと、それじゃあ俺も・・・っ!?」

言いかけた所で、後ろから殺気を感じた俺は、咄嗟に己の身を捻りながら前方に転がった。

その直後に後ろから轟音が鳴り響く。

後ろを振り向けば、先程まで俺のいた位置の地面が抉れていた。

その現象を引き起こした原因と殺気の正体に俺は直ぐに気付いた。

黒い毛並みのホルダーが、俺に殺気を放ちながら、その右腕に大量の砂を付けているのだ。

何故か知らないが、ホルダーが俺に対して敵意をむき出しにしている。

先程まで人には興味を持たず、設備の破壊に集中していた筈のホルダーが何で急に!?

さっきまでここに居た女子生徒と性別は違うものの、俺は変わった格好はしていない。

学校指定の体操着。

それだけだ。

唯一無理にでも一つ挙げるのであれば、二人三脚に使う手ぬぐいを休憩中の間、俺の肩に巻きつけていた位だが、それ以外は強いて違いを言う事等、出来はしない。

これ以上考えても答えは出るはずも無く、ホルダーが再び俺に襲い掛かる。

咄嗟に避けた事で、未だに動く体制を整える事が出来ずにいた俺は、避ける事も出来ずに目の前に迫るホルダーの一撃を正面から喰らうことになると確信したその時・・・

「ほばっ！」

黒い巨大な塊が俺に迫り来るホルダーに突っ込み、見事に吹き飛ばした。

その黒い塊の正体は、

『危ない所だったわねマスター』

乙女口調なおっさんボイスの新宿二丁目ライダーバイクのチェイサーさんだった。

「な、何でチェイサーさんがここに！？」

俺は呼んでいない筈のチェイサーさんがいる事に驚きの声を上げる。

『ワタシが呼んだのだマスター』

チェイサーさんの座席シートの上から声が聞こえてくる。
俺がそこに視線を向けると、全身メタリックシルバーなあいつが居た。
「メカ犬！」
『受け取れマスター！』
メカ犬は俺に何かを投げて寄越す。
それを掴み確認すると、教室に置いてきた筈のタッチノートだった。
「何でメカ犬がタッチノートを？」
俺はタッチノートを確認しながら、手渡してきたメカ犬に質問する。
『ホルダー反応が、マスターの学校付近で出たので連絡を取ったのだが、応答が無くてな。もしやと思いタッチノートの場所に来てみたのだ。何時ホルダーが現れるのか予測出来ないのだから、これからは常に手元に置いてくれよマスター』
如何してタッチノートを持っていたのか、説明したメカ犬は最後に説教をプラスして、現状説明を終了した。
「悪かった。これからは気をつけるよ」
俺はメカ犬に素直に謝りながら、受け取ったタッチノートを開く。
『本当に頼むぞ』

メカ犬はそう言いながら、チェイサーさんから飛び降りて、俺の隣にやってくる。

それを確認した俺は、開いたタッチノートのボタンを押す。

『バックルモード』

音声が流れると同時に、隣にいたメカ犬が銀色のベルトに変形して、俺の腹部に巻かれる。

「変身」

音声キーワードを入力した俺は、バックル中央の窪みに、タッチノートを差し込んだ。

『アップロード』

すると俺の全身を白銀の光が包み込み、俺を一人の戦士に変える。

メタルブラックのボディーカラーに、銀のベルトから四肢に伸びるラインと、額に輝く同色のV字型の角飾り。

二つの赤い複眼が、その存在を最大に引き出している。

「仮面ライダー！？」

俺の変身を目撃した、チェイサーさんに轢かれなかった方の、黄色い毛並みのホルダーが驚愕する。

「さてと・・・派手に行くぜメカ犬」

『うむ』

俺はメカ犬にそう言いながら、ホルダー目掛けて駆け出して行った。

## 第十一話　努力の先にあるものは【前編】（後書き）

○何でもメカ犬相談室【第七回】

『今日もやって来たぞ読者諸君』

『今回は複数の質問があるから期待してくれ』

『それでは最初の質問は三毛猫ヤマト殿からの質問だ』

『後書きに載せるには少々文章量が多いので、勝手ながら此方で要訳させて貰ったぞ』

○純君は昭和ライダーの様な特訓はしないのですか？

○二号ライダーが本編に出てきた場合、純は目上の立場になるのですか？

『早速質問に答えよう』

『ワタシの見る限りではマスターは毎日の様に特訓しているぞ』

『恭也殿と一緒にな！』

「あれは命がけで逃げているだけなんだけど・・・結果的に修行になってるのか？」

『次の答えだが、マスターの肉体年齢では、変身している間は兎も角、変身していない時に相手が敬意を必要以上に払うのは無理があ

ると思うぞ』

『まあ、最近の平成ライダーだとあまり先輩後輩の概念を持ち出す事は少なくなってきたからな・・・』

「まるでＩＴ企業の若者の下克上？」

『さあ、それでは続けていくぞ』

『次の質問は神崎はやて殿からだ』

○メカ犬相談室へ

・純君は仮面ライダーをどのシリーズまで知っているのですか？

・メカ犬の情報源としてよく名が挙がるのはジャックですが、他によく情報を教えてくれる者（動物）はいるのですか？

『最初の質問にはマスターに答えてもらおう』

「え～と、最後に見たのはオーズの第一話です。リアルタイムで仮面ライダーを見たのはクウガからで、昭和のライダーはＤＶＤで見ました」

『だそうだ。それではドンドン答えるぞ』

『ジャック以外の動物の情報源か・・・』

『基本ジャックは街の情報屋だからな。例えば山に行けば山に詳しい動物に情報を聞くぞ』

『取り敢えず一人紹介するのならば、ヒグマのプーやん等だな』

『他にも会話する動物は多くいるぞ！』

「プーやんって・・・」

『それではまた次回でお会いしよう』

「今回は長かったな・・・」

ご相談は何時でもお待ちしております。

他にもメカ犬に人生相談等もありましたらお気軽にどうぞ。

## 第十一話　努力の先にあるものは【後編】（前書き）

十一話の後編を更新します。

楽しんで頂ければ幸いです。

# 第十一話　努力の先にあるものは【後編】

「はっ！」

俺は一気にホルダーとの距離を詰めて、拳を叩き込む。

「ぐう！？」

ホルダーもまさか俺が仮面ライダーだとは思っていなかったのであろう。

唖然としていた所を強襲された形となり、俺の拳をまともに喰らい、吹き飛ぶ。

更に俺が吹き飛んだ黄色の毛並みを持つホルダーに、追撃を仕掛けようとしたその時、後ろから殺気を感じた。

『後ろだマスター！』

殺気を感じたと同時にメカ犬の声を聞いた俺は、後ろを確かめる事無く、前方に駆け出そうとした身体を無理やり側転させる。

その直後に先程まで俺が居た場所に轟音が響く。

振り向くとそこに居たのは、先程チェイサーさんに吹き飛ばされた黒い毛並みのホルダーだった。

「がああああ！！！」

ホルダーは雄叫びを上げると、凄まじい勢いで、俺に突っ込んでくる。

俺はホルダーの突進を右腕を添えて、受け流しながらカウンターの蹴りを繰り出す。

「ぐるあああ！！！」

黒い毛並みのホルダーと戦っている間に、黄色の毛並みのホルダーが態勢を整えた様で、俺と黒い毛並みのホルダーの間に割って入り、俺に攻撃を仕掛けてくる。

「二対一で素手はキツイか！？」

二体のホルダーによる波状攻撃を、何とか捌きながら、ベルトの右側をスライドさせて、緑色のボタンを押す。

『スピードフォルム』

音声が流れると同時に、全身を光が包み、メタルブラックのボディーカラーをライトグリーンに染め上げていく。

「はあ！」

俺は身軽になった自身の特性を利用し、その場から跳躍する事で、ホルダー達と一旦距離を取る。

跳躍しある程度の距離を取った俺は、再びベルトの右側をスライドさせて、黄色いボタンを押した。

『スピードロッド』

発生した光を掴むと、それは一つの形を成し、スピードフォルムの専用武器であるスピードロッドへと、その姿を形成する。

俺はロッドを構えながら、再びホルダー達に向かって駆け出す。

「おりゃあああ！」

十分にホルダーに接近した俺は、上段に構えたロッドを振り下ろし、黒い毛並みの方のホルダーに一撃をお見舞いする。

「ぐるあああ！！！」

俺が黒い毛並みのホルダーに攻撃を仕掛けた次の瞬間、もう一体の黄色い毛並みのホルダーが俺の背後から襲い掛かってきた。

『マスター！』

「ああ！」

メカ犬が何を言いたいのかを瞬時に理解した俺は、ロッドを持つ手を先端に持ち替えて、弧を描く様に振り回して、正面のホルダーを警戒しつつ、背後のホルダーに対しても牽制する。

二体のホルダーはロッドの攻撃範囲から逃れる様に下がると、何故か自身の身体を小刻みに震わせ始めた。

「何のつもりだ？」

その様子を見ながら俺は疑問を口にする。

『気をつけろマスター！奴等は、何か仕掛けてくるつもりだ！』

メカ犬に言われるまでも無く、俺はロッドを構えて、臨戦態勢を崩さずに、二体のホルダーを見据える。

ホルダー達の様子を伺いながら、仕掛けてこないのであれば、此方から攻めてみるかと、考えたその時、ホルダー達に激しい変化が起きた。

「な！？」

二体のホルダーがまるで細胞分裂で増殖するかの様に、増えていくのだ。

その数は四体、八体、十六体と急激に増えていく。

どういう仕組みかは知らないが、これ以上放っておく訳には行かないと思い、俺は一番近くにいた増殖するホルダーの一体に攻撃を仕掛ける。

「たあ！」

俺のロッドによる一撃がホルダーに命中する。

いや、した筈だった。

「ふあ！？」

しかしその攻撃は、ホルダーにダメージを与える所か、まるで何の感触も無いままに空を切る。

その直後に俺の背後に衝撃が走る。

「ぐあ！？」

突然の衝撃に倒れこみながらも、受身を取って素早く体勢を立て直すと、そこには先程の衝撃の正体であろう、拳を突き出したホルダーの姿が見えた。

「くそ！」

俺は反撃するべく、ロッドを構えるが、そこに増殖したホルダーの内、四体が俺に向かってくる。

「邪魔だ！」

気合と共にロッドで一閃するが、先程と同じ様に、攻撃がすり抜けてしまう。

「が！？」

攻撃した次の瞬間、今度は右の頬に痛みが走り踏鞴を踏む。

何とか踏み止まり、左を向けばそこにはやはり俺に攻撃を仕掛けたであろうホルダーの姿があった。

そのホルダーに対し反撃を試みようとするが、またしても増殖した複数のホルダーが此方に向かってくる。

「何度も『待つんだマスター！』メカ犬？」

俺が再び襲い掛かるホルダー達に攻撃しようとしたその時、メカ犬が待ったの声を掛けてきた。

『恐らく攻撃を仕掛けても無駄だ』

「確かにそうかも知れないけど、攻撃しないとこっちがやられるだろ？」

先刻から俺の攻撃が、全てすり抜けてしまっている事は、分かってはいるが、それでも攻撃しなければ相手の攻撃を受けるのは此方なのである。

こんな討論をしている間にも、多くのホルダーが此方に迫って来ている。

「くっ！」

俺は近くまで駆け込んできた数体のホルダーに迎撃体勢を取るが、メカ犬が再び叫ぶ。

『動くなマスター！』

その声に俺の動きが一瞬硬直してしまう。

そのために、攻撃をするタイミングを完全に逃してしまい、数体のホルダーが俺の目前まで接近する。

もはや避ける事さえ出来ないと悟り、次の瞬間来るであろう衝撃を覚悟するが、その衝撃が訪れる事は永遠に無かった。

俺の攻撃をすり抜けたのと同じ様に、今度は俺の身体をすり抜けて行ったのだ。

『やはりそういう事か』

先程の出来事に俺が驚愕する中、メカ犬が一人納得した様に言う。

「どういう事なんだよ？」

俺は一人で納得しているメカ犬に説明を求める。

するとメカ犬はいつもの様に解説をし始めた。

『あのホルダー達は別に増えた訳では無い。増えた様に見せているだけだ』

「増えた様に見せているだけ？」

『うむ。マスター、周りを良く見回してみろ』

メカ犬の言う通り、俺は多数のホルダーが闊歩する校庭の様子を見てみる。

其処には縦横無尽に走り回るホルダーや、何故か何も無い所に拳や蹴りをするホルダー他にも統一性の取れない動きを見せるホルダーが大量に見受けられたのだ。

「・・・まさか!?」

その様子を見ていた俺はある事に気付いた。

『如何やらマスターも気付いた様だな』

「ああ」

メカ犬の言いたい事が俺にも分かった。

『奴等の本体はあくまで二体だけだ』

「他の姿は多分・・・過去の姿を投影して見せているって所か?」

『うむ』

如何やらこれが奴等の能力らしい。

「だから俺の攻撃がすり抜けたって事だな」

答えが分かれば当たり前の事である。

其処に実体が無いのだから、俺が幾ら攻撃した所で届く筈が無い。

『カラクリは分かったが、問題はどうやって本体を探り当てるかだな』

メカ犬がこれからの方針を考え始める。

「それなら俺に一つ考えがある」

ネタが分かった為、頭が冷えたのか、俺に一つの解決策が浮かんだ。

『本当かマスター？』

俺の言葉にメカ犬が質問を返す。

「ようは本体に攻撃が届けば良いんだろ」

『うむ。確かにその通りだが、如何する気だマスター？』

「まあ、ここは俺に任せてくれ」

俺はメカ犬にそう言ってから、スピードフォルムの跳躍力を生かして、限界まで飛び上がる。

かなりの高さまで飛び上がった俺はベルトの右側の青いボタンと黄色いボタンを続け様に押す。

『サーチフォルム』

『サーチバレット』

光に包まれると同時に、ライトグリーンのボディーはスカイブルーに変わり、俺の右手には専用武器である銃型武器のサーチバレットが握られる。

俺はそのままバックルからタッチノートを取り出して、サーチバレットの溝にスライドさせた。

『ロード』

音声が流れる事を確認した俺は、タッチノートを再びバックルに差し込む。

『アタックチャージ』

ベルトから発生した光が右腕のラインを通り、サーチバレットの銃身に集約される。

「こいつで決めるぜ」

俺は光輝くサーチバレットを地上に向けて自分自身の身体を回転させて行く。

「サーチバレット」

俺は回転運動をしながら引き金を引いた。

「シューティングサークル」

数珠繋ぎに連結された光弾が、まるで激しく降りしきる雨の様に校庭に降り注ぎ、校庭全体に落下する。

勿論校庭に居た全てのホルダーはこの攻撃に飲み込まれた。

「よっと！」

俺は校庭全体に攻撃が届いた事を確認しながら、無事地上に着地した。

『全く、考えがあると聞いた時は何をするのかと思ったが、これほど無茶な事をするとは思わなかったぞマスター』

着地した直後にメカ犬が感心半分、呆れ半分という具合で話しかけてくる。

「でもこれなら本体にも攻撃が届くだろ？」

俺はメカ犬に軽く言葉を返す。

『・・・うむ。確かにその通りではあるがな』

メカ犬と会話を交わしながら、俺はホルダーがどうなったかを確かめるために、あたりを見回す。

校庭全体を攻撃した為に大量の砂が舞い上がり、暫くの間視界を塞いでいたが、それもすぐに風に流されて行き、問題無く周りの景色が見える様になった。

すると早速新たな発見をした。

校庭の真ん中で、恐らく俺と同年代と思われる男の子が気絶していたのである。

戦っている間周りに人の姿は見当たらなかったので、この男の子がホルダーの素体だったのだろう。

うつ伏せで気絶しているので顔は確認出来ないが、俺が着ている体操服を着ているので、この学校の生徒で間違い無い。

俺は気絶している男子生徒に近づいて、顔を確認する。

「え！？」

気絶した男子生徒の顔を確認した瞬間、俺は驚きの声を上げた。

『如何したマスター？』

俺の様子を怪訝に思ったのか、メカ犬が声を掛ける。

「如何したって・・・そりゃこの顔を見れば驚きもするだろ」

その顔は俺の良く知る顔だったのだ。

というか、クラスメイトの一人だったのである。

この男子生徒の名前は稲葉一樹（いなばかずき）。

俺と同じ一年生でクラスメイトでもある。

「まさか稲葉君がホルダーだったなんて・・・」

気絶した稲葉君を見ながら俺がそう呟いていると、

『妙だぞマスター』

メカ犬が俺に話し掛けてきた。

「何が妙なんだよ？」

『ワタシ達が戦っていたホルダーは二体だった筈だ。ならばこの素体の少年の他にもう一人気絶した者が居なければおかしいだろう』

俺はメカ犬に言われ校庭を見回す。

確かに稲葉君以外に倒れている人所か、誰一人として居なかった。

「これってもしかして・・・」

『うむ。あのドサクサに紛れて逃げた様だな』

如何やらこの事件は、まだ終わりを迎えるには早い様である。

『着いたわよマスター』

チェイサーさんが目的地に着いた事を、俺に知らせてくれる。

「ありがとうチェイサーさん」

俺はチェイサーさんにお礼を言って、身体に固定されたワッカを外してもらい、シートから飛び降りた。

『本当にここに居るのか？』

俺が着地した直後に、メカ犬も俺の横に着地すると、辺りを見回しながらそう告げる。

「ああ、稲葉君が言っていた事を信じるなら、ここに居る筈だ」

俺達は今、現在は廃墟となり、立ち入り禁止の看板が立てられている廃ビルの前に居る。

「行くぞメカ犬」

『うむ』

短く会話を交わした俺達は、立ち入り禁止の看板を無視して、廃ビルの中へと入っていく。

中に入り階段を上り、屋上に辿り着くと、其処には予想通りの人物が居た。

「やっぱり来たんだな板橋君・・・」

屋上の隅で景色を眺めていたその人物が、俺に背を向けたまま喋り始めた。

「ああ、稲葉君から君なら何かあったらきっと、ここに来るだろう

からって聞いたからね」

その人物は、景色を見るのを止めて、此方に振り向く。

その人物は、稲葉君と同じく俺のクラスメイトの男子生徒である。

「ホルダーの正体は木村君だったんだな」

木村真（きむらまこと）。

それがこの少年の名前だ。

メカ犬の能力で強制的に暴走プログラムと分離された素体の人間の、ホルダーだった間の記憶は特殊なケースを除けば全て失われてしまう。

俺が校庭で倒したホルダーの素体となった稲葉君も例に漏れず、ホルダーだった間の記憶は失われていた。

だけどその直前までの記憶はあるのだ。

だから俺は気絶していた稲葉君を起こして、何かヒントはないかと、最後に残っている記憶の部分を尋ねたのである。

稲葉君は言っていた。

秘密基地で、緑色の球体を二つ見つけて、その場に居た友達と其々手にしたのだと。

その友達が木村君だったのだ。

更に緑の球体、暴走プログラムを見つけたという秘密基地がこの廃ビルなのである。

稲葉君の話では、二人は何かあった時は、必ずこの場所にやってくるのだそうだ。

そして木村君は決まって屋上からの景色を眺めるらしい。

俺はその話を聞き、木村君はここに来るんじゃないかと思いやって来たのだが、予想は見事に的中した様だ。

「板橋君がここに居るって事は一樹君が喋ったんだな」

木村君は俺を睨み付けながら、苦虫をかんだ様な表情を見せる。

「木村君。如何してあんな事をしたんだ?」

俺は木村君に質問を投げ掛ける。

「如何してだって?そんなもの決まってるだろ・・・僕は運動会が大嫌いだからさ!」

答えている間に感情が高ぶったのか、最後の方は叫ぶ様な言い方に変わっていく木村君。

「嫌いだからってあんな事をするなんて・・・」

暴走プログラムのせいで、理性の枷が外れているとはいえ、あの破壊活動はやり過ぎだ。

「板橋君は良いよな。運動が得意だもんな。でも僕や一樹君みたいに運動が苦手な奴に運動会なんて必要無い行事なんだよ！」

そういえば、稲葉君も木村君も男子の中では、かなり運動が苦手だった。

それで運動会を無くそうとあんな事を・・・

「だから僕達は運動会を無くそうと思った。でも誰かを傷つけるつもりなんて無かったから、運動会で使う道具を全部壊してやろうって一樹君と計画を立てたんだ」

木村君はそう言うと、ポケットからある物を取り出した。

「すごいよねこれ。何にも努力しなくても、これがあれば運動が苦手な僕でも凄く早く走れるし、力だって大人よりずっと強くなるんだ！板橋君なら分かるよね？だって板橋君は仮面ライダーだもんね」

緑色の球体、暴走プログラムを嬉しそうに眺めながら、木村君が俺に言う。

なるほど・・・

木村君の話からすると、あの時俺に以上な殺気を放っていたのは、本当に肩に巻いていた手ぬぐいが原因だったらしい。

確かにこれも運動会で使う道具だもんな。

でも今はそれよりも、木村君に言いたい事がある。

「木村君。それは所詮紛い物の力だよ。それで凄い力を手に入れたとしても何も変わらない」

力を手に入れたとしても、その力の使い方を間違えば、それはただの暴力にしかならない。

「そうかな？これがあればどんなに努力したって出来ない事が出来る様になるんだよ？僕みたいな奴がどんなに努力したって出来ない事は出来ないし、如何にもならないんだからさ。使える物を上手く使わなくっちゃ」

木村君は俺に、どんなに努力をしても無駄な事はあると言った。

それを聞いた俺は・・・

「・・・本当にそうかな？」

「ん？」

俺は木村君と視線を合わせながら、ゆっくりと喋りだす。

「だからその力で運動会を無くそうとしたのか？」

「ああ！そうだよ！僕みたいのがどんなに努力したって勝てる筈が無いんだから、僕は自分に出来る事をしようとしただけさ！」

真面目な努力が無駄？

「木村君・・・無駄な努力なんて俺はこの世に無いと思うよ」

確かにどれだけ努力をしたとしても、それが必ず実を結ぶとは限らない。

失敗して挫折して、泣きたくなる事だって、落ち込む事だってある筈だ。

だけど・・・

「人は生きている限り、努力し続ける生物だって俺は思うよ」

努力は人の持つ可能性だって俺は思う。

今は出来なくても、続けていけばそれが出来る様になるかもしれない。

たとえ出来なかったとしても、その努力はその人の大切な財産になって、新しい自分にしか出来ない何かを始められる。

「木村君だって今から頑張れば、運動会で一位を取れるかも知れないだろ?」

「そんなのただの奇麗事だろ?僕は騙されない!」

俺の言葉に木村君は、暴走プログラムを握り締める。

それと同時に木村君の全身が緑色の光に包まれて、黒い毛並みを持つ黒豹を模した様な姿をしたホルダーへと変わっていく。

「行くぞメカ犬・・・」

俺はタッチノートを取り出して開きながら、隣のメカ犬に合図を送る。

『うむ』

木村君の言う通り、確かに俺が言ってる事は奇麗事でしかない。

でも、だからこそ・・・

「やる前から諦めるよりも、俺は努力すれば出来るかも知れないっていう可能性を信じたい！」

俺は叫びながらタッチノートのボタンを押す。

『バックルモード』

隣のメカ犬は銀色のベルトに変形すると、自動的に俺の腹部に巻きつく。

「変身」

音声キーワードを入力した俺はタッチノートをバックルの中央部の窪みに差し込んだ。

『アップロード』

音声が流れると同時に、俺の全身を白銀の光が包み込み、俺の姿をメタルブラックの仮面ライダーへと変えていく。

木村君が変化した黒豹の姿を模したホルダーが身構える。

それに合わせ、俺も間合いを伺いながら、臨戦態勢を取った。

暫くは、互いに相手を見据えながら間合いを図っていたが、それは次の瞬間終わりを告げる。

「がああああ！！！」

先に動いたのはホルダーの方だった。

「はっ！」

俺は勢い良く突進を仕掛けてきたホルダーの勢いを利用して、カウンターの拳を叩き込む。

「ぐっ！？」

その一撃を正面から喰らったホルダーは後方に吹き飛ぶが、すぐに立ち上がりその身体を小刻みに振るわせ始める。

『不味いぞマスター！また姿を投影してくると面倒だ！』

その様子を見ていたメカ犬が俺に忠告する。

「ならこっちも分身だ！」

俺はそう言いながら、ベルトの右側をスライドさせて黄色いボタンを押す。

『ベーシックファントム』

ベルトから大量の光が発生して、その光が人型を形成していく。

それは俺と若干の違いがあるものの、メタルブラックのボディーを持つ、まさに仮面ライダーだった。

若干の違いは赤い筈の複眼が灰色な事と、ベルトの後ろに溝がある位である。

これが基本フォルムであるベーシックフォルムの持つ能力。

ベーシックファントムだ。

「それじゃあ時間稼ぎは任せたぞメカ犬」

俺は光が形成した分身体に話しかける。

『任せろマスター』

すると分身体から、メカ犬の声が聞こえて来た。

この能力を使っている間は、メカ犬が遠隔操作でこの分身体を動かしているのだ。

メカ犬は俺の頼みを快く聞き入れると、勢い良く小刻みに震えるホルダーに駆け寄り、投影を阻止する為に攻撃を仕掛ける。

俺はその隙にバックルからタッチノートを引き抜き開くと、全体図を表示して右足部分をタッチして、再びバックルにタッチノートを

差し込んだ。

『ポイントチャージ』

ベルトから発生した光は、右足のラインを通り俺の右足に集約される。

『今だマスター！』

俺の準備が整うとほぼ同時にメカ犬が俺に叫ぶ。

見ればメカ犬は丁度ホルダーに右拳を叩き込んだ直後であり、吹き飛ばされたホルダーが痛みで苦しんでいた。

その様子を見た俺は跳躍する為に構えを取る。

「こいつで決めるぜ」

そして俺は跳躍して、ホルダーに向けて光が集約された右足を突き出す。

「ライダーキック」

必殺の一撃が見事にホルダーに直撃して爆発を引き起こした。

爆発跡に居たのは、勿論素体となった木村君が気絶していた。

俺は気絶している木村君に、聞こえていないと分かった上で話しかける。

「木村君・・・やるだけやってみようよ。きっとその方が木村君の為になるって俺は思うからさ・・・」

目を覚ませば今日の事を全て忘れていると分かってはいる。

だけど・・・

それでも願わずにはいられない。

どうせやるのなら全力で挑みたいって思うし、それで木村君の中で、何かが変わるかも知れないって思うから・・・

ホルダーによって破壊された運動会の設備だが、他の近隣の学校から借りることが出来たので如何にかなった。

むしろそれ以上に苦労したのは、俺がサーチバレットで校庭に作ったクレーターの方だった。

学校側は教師生徒問わず、修復に参加してくれる人を緊急募集した。

面と向かって謝る訳に行かなかった俺も勿論参加して、心の中で何度も平謝りしながら、スコップ片手に作業に順じた。

そのかいあってか、何とか無事に運動会を開くことが出来る事と、相成ったのである。

「頑張れ木村君！」

俺は大声で声援を送る。

現在行われている競技は５０メートル走だ。

目の前では木村君が必死に走っている。

あれから木村君と稲葉君は残り少ない時間の中で出来る限りの努力をした。

皆が運動会を開くために必死に頑張る姿を見て、やる気になってくれた様だ。

この運動会の５０メートル走では五人で一組として走る事になる。

稲葉君は既に走り終えており、順位は四位だった。

「稲葉君も頑張ったんだから木村君も頑張れ！！！」

俺は更に大きな声を出して応援する。

今の木村君の順位は五位だ。

でも四位との差はほんの僅かであり、徐々にその距離を木村君は縮めて来ている。

ゴールが迫る中、木村君が四位の生徒に追いつきそして・・・

【「次は二年生の５０メートル走に移ります」】

実行委員の女子生徒のアナウンスが校庭に響く。

一年生の５０メートル走が全て終わり、一年生は旗を持っている実行委員に先導されながら、校庭中央のトラックの内側から移動を始める。

木村君は四位の旗を持った実行委員の生徒に誘導されていた。

二人とも一位を取る事は出来なかった。

でも努力をした結果この順位になったからなのか、二人とも凄く良い笑顔をしていたと俺は思う。

その後も競技は順調に進んでいった。

俺とすずかちゃんが参加した二人三脚は残念ながら二位という結果に収まった。

途中までは一位だったのだが、途中で手ぬぐいが破れてしまったのである。

急いで破れた部分を結んで応急処置をしたのだが、結局一位は逃し

てしまったのだ。

これぱかりは時の運というものもあるのだから仕方ない。

それよりも問題は借り物競争だった。

この借り物競争も５０メートル走同様に五人一組で競争するシステムになっていた。

二十メートル程は普通に走る事になるのだが、その地点には借りる物が書かれているカードの入った箱が五つ置かれている。

出場者は好きな箱から一枚だけカードを引きそこに書かれているカードを借りて残り３０メートルの距離を走破するのだ。

借りる物は、物であったり人であったりと、結構なバリエーションに富んでいる。

走る速さも大切だが、それ以上に運が試される競技なのだ。

まずアリサちゃんだが、アリサちゃんが引いたカードに書かれていた内容はオモチャだった。

アリサちゃんは何を思ったのか、一般観覧者用の席に向かったかと思うと、其処からとんでもない物を借りてきたのである。

俺はその借り物を見て思わず噴出した。

それは太陽の光に照らされて、輝くメタルシルバーのボディーを持つフルメタルドッグこと我が板橋家の家族であるメカ犬だったのだ

から。

メカ犬を抱えながらアリサちゃんは見事に一位でゴールしたのだが、本当の問題はここからだった。

ゴールした後に待機していた先生が、借りた物がカードの内容と一致しているかチェックするのだが・・・

『だから何度も言っているだろう。ワタシはオモチャ会社の新製品で（以下略）』

黙っていれば良いものを、メカ犬は懇切丁寧に待機していた先生に説明し始めたせいで、オモチャと分類するべきか緊急会議が行われる事になってしまったのだ。

結果を言えば、本人?がオモチャだと言っていることもあり今回に限り認められる事になったのだが、次は無いと先生から厳しく注意されていた。

次はなのはちゃんなのだが、なのはちゃんの引いたカードは木刀だった。

普通に考えれば運動会に木刀持って来る奴なんて居る筈がない。

しかしなのはちゃんは迷わず高町家が揃う応援席に向かうと、恭也君が立ち上がり、当然の様になのはちゃんに木刀を差し出した。

なのはちゃんはそれを嬉しそうに受け取ると、余裕でゴールした。

小学一年生の女の子が運動会で木刀を持って走る・・・

とんでもなくシュールな光景である。

そもそもこのカードを作成した奴は、何を考えて木刀なんてワードを選択したのか、疑問に思ったのはきっと俺だけでは無い筈だ・・・

ちなみに順位は借り物がかなりの短時間で手に入ったので三位となった。

その後も競技は滞り無く進み、昼の休憩時間を迎えた。

「それじゃあここに座ろっか純君」

「そうだね」

俺はすずかちゃんに案内された木陰で、ビニールシートを広げると、そこに二人で腰を下ろした。

「純君。約束のあれ。持って来てくれたよね？」

隣に腰を下ろしたすずかちゃんが俺に言ってくる。

「うん、一応約束だからね」

俺はそう言ってビニールシートの上にお弁当箱を置いた。

すずかちゃんの言う約束とは、ホルダーが学校の校庭に現れた時に交わした後ですずかちゃんのわがままを何でも一つだけ聞くというものだった。

そしてすずかちゃんが要求してきた内容が、運動会の日に俺が作ったお弁当を二人で食べるという事だった。

本当は皆で食べた方が美味しい気がするのだが、これは俺の事を配慮してくれたからだと思う。

流石に皆の前で、普段しない手作り弁当を披露するのは、それなりの抵抗を感じる。

俺は心の中で、ここまで配慮してくれたすずかちゃんの優しさに感謝しながら、弁当箱の蓋を開ける。

「本当に初めて作ったの純君？凄く美味しそうだよ」

弁当箱を覗き込んだすずかちゃんが感想を述べる。

お弁当箱は色鮮やかであり、作った俺も我ながら美味しそうだと思った。

俺も前世では一人暮らしをしていたので、それなりに自炊は出来るのだ。

しかし所詮は食べれれば良いという男料理ばかりだったので、母さんから、徹底的にお弁当の盛り付け方を教わったのである。

如何やらすずかちゃんも気に入ってくれた様で、頑張って良かったと素直に思えた。

「あ～ん」

すずかちゃんは何を思ったのか、頬を桜色に染めながら突然俺に向かって口を開く。

これはあれか？

食べさせろと言う意思表示なのか？

俺は困惑しながらも、弁当箱の中から玉子焼きを箸で摘み、すずかちゃんの口に運んだ。

玉子焼きをゆっくりと租借したすずかちゃんは、

「美味しいよ！」

と笑顔で感想を言った。

「それじゃあ今度はこれが良いなぁ～」

すずかちゃんは次に食べたい物を指名すると、再び口を開けて催促してくる。

「分かったよ」

俺はすずかちゃんの指示通り、箸でおかずを摘み、すずかちゃんの口に運んで行く。

こうして俺達の、運動会当日のお昼は過ぎて行った。

今日の海鳴は運動会日和の快晴で、ゆったり平和だ。

## 第十一話　努力の先にあるものは【後編】（後書き）

○何でもメカ犬相談室【第八回】

『さあ、今回もワタシが主役の時間がやって来たぞ』

『今回はリアルで質問された事に答えよう』

○この作品では純君がオリジナルの仮面ライダーに変身していますが、原作の歴代ライダーは出て来ないんですか？

『相変わらず答え難い質問だな・・・』

『だが答えよう！』

『詳しく何時、誰かは言えないが出演予定はあるぞ！』

『どんな形での出演になるかはこれからの展開を楽しみにしていてくれ』

『それでは今回はここまでだ。また次回で会おう！』

「本当に！？」

ご応募は何時でもお待ちしております。

# 第十二話　ゴースト・イン・ザ・ホスピタル【前編】（前書き）

どうもお久しぶりです。

作者のＧ－３Ｘです。

今年も残す所、後僅かになってまいりましたね。

更新する合間に、例の法案が可決されたりと色々ありますが、それでも自分に出来る事を続けて行こうと思います。

さて、話は変わるのですが、今年の本編の更新はこの話の後編で終わると思います。

もしかしたら、年末最終日に短編が一本更新されるかも知れませんが、本編は間違いなくここまでになりますね。

来年の更新予定ですが、早くても一月の上旬になると思います。

続きを楽しみにして頂いている皆様には申し訳無いのですが、年末年始は予定が立て込んでいるので、ご了承の程、お願い致します。

来年は仮面ライダーシードに色々と新展開が起こりますので、お楽しみに。

それでは今回のお話も楽しんでいただけたら幸いです。

# 第十二話　ゴースト・イン・ザ・ホスピタル【前編】

人によって、平気な人と苦手な人がいると思うが、俺はどちらかというと苦手な部類に入る。

この独特の雰囲気と、建物全体に漂う消毒液の香り・・・

怪我や病気になった時は、とてもお世話になる場所なのだが、やはりなるべくお世話にならない方が、良い所だろうと俺は個人的に思う。

健康はそれそのものが大切な財産なのだから。

病院にお世話になるのは、健康診断と予防接種の時ぐらいに止めて置きたい。

まあ、こんな事を思うのも、単に俺が病院の雰囲気が苦手というだけの話なのだが・・・

何故、突然こんな事を話すのかというと、俺は今海鳴市でも大きな設備を有している、海鳴大学病院に来ているからだ。

最初に誤解の無い様に明言して置くが、俺は至って健康優良児である。

じゃあ何で俺が病院に来ているのかと言うと、友達のお見舞いに来ているからだ。

入り口付近のカウンターで、友達の居る病室を聞いた俺は、病院内

の廊下を歩いて行く。

暫く歩くとカウンターで教えてもらった病室の前に辿り着いた。

「ここで良いんだよな？」

俺は病室の前で、ナンバープレートに記載された番号がカウンターで教えてもらった番号と一致している事を確認してから、その病室の扉を軽く二、三度ノックする。

この病室は個室になっているので、一応マナーは守るべきだろう。

「どうぞ～」

すると扉の向こうから、声が聞こえてくる。

病室の主から入室の許可を得た俺は、扉の取っ手を掴み静かに扉を開けた。

「具合は大丈夫？はやてちゃん」

俺は病室のベッドに腰掛けているこの病室の主の、はやてちゃんに声を掛ける。

「大袈裟やな純君は。ただの検査入院なんやから、何も変わらんよ」

はやてちゃんが笑顔で俺に答えた。

お見舞いに来た友達というのは、はやてちゃんの事である。

運動会の本番前日、元々の日程だったそうで、はやてちゃんは三日程前から足の検査の為、この海鳴大学病院に入院する事になった。

「そっか、元気そうで安心したよ」

俺ははやてちゃんの普段と変わらない様子を見て、ホッと胸を撫で下ろす。

「あ、そうだ！」

「何や？」

俺は安心した事で、頼まれていた事を思い出し、自身の右手に持ったバスケットをベッドの近くに設置されていたテーブルに置いた。

「これ皆からお見舞いの品の果物だから」

バスケットの中にはりんごや、バナナ等の、定番な果物が入っている。

本当はなのはちゃん達もお見舞いに来たがっていたのだが、今日は三人とも、習い事がある為、終わってから病院に来ても面会時間が過ぎてしまうので、俺一人で来た。

この果物の詰め合わせは皆のお小遣いを持ち寄って購入したのだが、そんな経緯で俺が代表して持って来る事になったのである。

全員の予定が空いている日に行こうという話しも出たのだが、はやてちゃんが入院してから、何かと予定が重なってしまい、お見舞いに来れなかったので、俺だけでも先行して行って来た方が良いとい

う事で話が纏まったのだ。

「本当はなのはちゃん達も来たがってたんだけど、如何しても予定があって来れそうに無いみたいだったからさ。お見舞いに来るのが遅くなっちゃってごめんね」

俺は、はやてちゃんに事情を話しながら、ベッドの脇に備え付けられた椅子に腰を下ろす。

「ううん。良いんよ」

はやてちゃんは俺の謝罪に軽く首を横に振りながら、笑顔で俺に言う。

「・・・足の方は大丈夫なの？」

俺は思い切ってはやてちゃんに聞いてみる。

「ボチボチやな。良くはなってないけど、悪くなった訳でもないんよ」

はやてちゃんの話では、今だ原因不明なのだそうだ。

「そっか・・・」

俺ははやてちゃんの話に頷きながら、今年の夏休みに初めてはやてちゃんと出会った日の事を思い出していた。

あの日の夜、俺は不思議な喋る猫と会話したのだが、その時喋る猫は俺に、はやてちゃんに近づくなと言っていた。

もしかしてはやてちゃんの足について、あの猫は何か知っているのではと俺は思うのだが、あの夜以来喋る猫は今日まで俺の目の前に姿を現してはいない。

それにこれは俺の勝手な推理で、その喋る猫と偶然にでも再会出来たとして全てが解決するかは分からない。

結局今の俺がはやてちゃんに出来る事と言えば、こうして入院した時等にお見舞いに来るぐらいのものである。

「わ！」

「のわ！？」

考え事をしていた所に、俺の耳元に大きな声が聞こえて来た。

突然の事態に俺は、思わず身体ごと跳ね上がってしまう。

「いきなりびっくりしたよ！？」

俺は大きな声の発生元であり、隣のベッドでお腹を抱えながら笑っている、悪戯好きな関西弁の美少女に抗議する。

「ふふ・・・ごめんな。でも何だか純君が難しい顔しとったからついな・・・」

はやてちゃんは悪戯が成功して余程嬉しいのか、俺に謝りながらも笑い続けている。

流石に病院ではやりすぎだと思った俺は、はやてちゃんに一言注意しようと口を開く。

「はやてちゃん。病院なん・・・」

俺の言葉はそこで遮られる。

それと言うのも、はやてちゃんの人差し指が俺の口を軽く押さえていたからだ。

「・・・ありがとうな。純君・・・私の事、心配してくれたんやろ？」

はやてちゃんは普段見せる悪戯っ子の笑顔とは少し違う、何処か優しさが内側から染み出して来るような、暖かい笑顔を俺に向けた。

俺はその笑顔を見て、もう何も言えなくなってしまっていた。

暖かい雰囲気が俺とはやてちゃんしかいない病室の中に流れるが、その時間は直ぐに終わりを告げる。

病室の扉から、ノックする音が聞こえて来たのだ。

「どうぞ～」

俺の口から人差し指を離しながら、はやてちゃんが扉の向こうでノックをしているであろう人物に返事を返す。

扉の向こうの人物にはやてちゃんの声が届いたのだろう。

病室の扉が静かに開かれる。

「はやておねえちゃん。えほんをよんでもらっていいですか？」

扉を開けた人物は小さな女の子だった。

見た目からすると、俺達よりも二つか三つ程年下の様に見える。

肩に掛かる程の短めに切り揃えた髪を揺らしながら、女の子は絵本を片手に俺達の方に小走りでやって来た。

「おにいちゃんは、はやておねえちゃんのおともだち？」

女の子は俺を見ながら首を傾げ、はやてちゃんに質問してきた。

「ああ、この男の子はな・・・」

はやてちゃんが女の子に俺の紹介を始める。

「この男の子は純君。私の彼氏や」

俺は、物凄くナチュラルに嘘の入った、はやてちゃんの紹介に勢い良く噴く。

小さい子に何を平然と嘘を吐いてるんだはやてちゃんは！？

しかもそれを聞いた女の子は・・・

「すご～い！はやておねえちゃんおとなだ～」

女の子は純粋な輝く瞳で俺達を見る。

そんな曇りの無い清らかな瞳で見られると、さっきのは嘘だから信じないでね、とは非常に言い難い。

「・・・はやてちゃん、この子は？」

俺は取り敢えず、目の前の女の子の純粋な心を守る為に、突っ込みをしたい衝動を何とか堪えて、はやてちゃんに目の前にいる女の子を紹介してくれる様に頼む。

女の子に尊敬の眼差しを向けられて、良い気分に浸っている様子のはやてちゃんだったが、そのはやてちゃんに代わり、女の子自身が俺に自己紹介をしてくれた。

「はじめまして。じゅんおにいちゃん。みかんはみかんっていいます。よんさいです」

女の子、みかんちゃんは俺に元気な挨拶をすると、

「じゅんおにいちゃんは、はやておねえちゃんのこいびとなんですよね？」

みかんちゃんは瞳から、星でも出さんという勢いで輝く純粋な瞳で、俺を見詰めながら尋ねて来る。

しかも何時の間にか、彼氏から恋人にランクアップしてるし！？

「え、えっと・・・は！」

答えに困っている俺だったが、隣から妙な視線を感じたので、視線だけをゆっくりと横に向ける。

そこには興味津々といった感情を剥き出しにしたはやてちゃんが、俺の言葉を聞き逃すまいと聞き耳を立てていた。

正面には、みかんちゃんの純粋な瞳。

横には、はやてちゃんの聞き耳。

はやてちゃんの嘘に便乗してみかんちゃんの夢を守るか、それとも横に居る悪戯っ子に突っ込みを入れて俺の精神衛生上の安定を確かなものにするべきか・・・

俺が選んだのは・・・

「・・・どうも初めましてみかんちゃん。俺は板橋純。何時も俺の彼女のはやてちゃんと仲良くしてくれて、ありがとう」

「ふわわ!!みかん、はやておねえちゃんのこいびとさんに、おれいをいわれてしまいました!!!」

俺の挨拶にみかんちゃんは、驚きながら照れるという、器用なリアクションをする。

そして俺の隣ではやてちゃんは、俺を凄いにやけ顔で見ながら、

「録音しとけば良かったわ~」

と、俺に聞こえてみかんちゃんには聞こえないという、絶妙な音量

で呟く。

頼むから勘弁してくれ！

そんな事をされて、何かの間違いで衆人観衆の耳に入ったりしたら、俺は羞恥心で、暫く立ち直れなくなるぞ！？

「ほんとうにすごいです～」

俺が心の中で葛藤している間も、みかんちゃんは俺とはやてちゃんを交互に見ながら、凄いという言葉を連呼している。

その様子を見ながら、俺は何とか心を平常保つ事を心掛ける。

良いじゃないか。

俺が少し恥ずかしい思いをした事で、一人のいたいけな少女の純粋なハートを守る事が出来たのだ。

それ以上の喜びが何処にある！？

俺は自分自身に言い聞かす。

というか、そう思ってでもいないと、俺の心が折れてしまうから！

俺は心の羞恥を笑顔という名の仮面で隠して、みかんちゃんにへの対応を続けた。

「こいびとどうしのじゃまをするのは、いけないことだって、ままがいっていたので、みかんはこれでしつれいします」

俺とはやてちゃんに、恥ずかしい質問を幾つも続けたみかんちゃんは、突然そう宣言して、部屋を飛び出して行った。

「・・・何か嵐みたいな子だったね」

みかんちゃんが出て行った直後、俺は病室の扉を見ながら、言葉を紡ぐ。

「そうやろ。何か一緒の居るだけで、元気を貰える感じがする子なんよ」

はやてちゃんが俺の言葉に頷きながら、言ってくる。

確かに一緒に居ると落ち込む暇も無いなと、俺は思った。

「さてと・・・」

スーパー元気な嵐が過ぎ去って、一段落した所で、俺ははやてちゃんに先程までみかんちゃんの前で見せていたのとは別種類の表情を、仮面の様に装着する。

「ひ！？」

俺のその表情を見たはやてちゃんは、短く悲鳴を上げた。

自分では今の顔を確認出来ないが、ある意味でとても良い顔をしているのは間違いない筈だ。

今も尚、怯えた様子を見せるはやてちゃんに俺は、ゆっくりと語り

掛ける。

「はやてちゃん」

「は、はい！」

幾ら俺がヘタレでも、怒る時は怒るのだ。

俺はその怒りを、この一言に集約して解き放つ。

「ちょっとお話しようか？」

こうして海鳴大学病院の一室において、俺の説教タイムの幕が上がった。

それは三十分以上の長丁場になるのだが、この場では割愛させて頂こう。

代わりに一つだけ言っておく。

さあ、お前の罪（主にはやてちゃんが俺に対して今までやってきた悪戯）を数えろ。

「ねえ、知ってる？あの噂」

何だかんだあったはやてちゃんのお見舞いを終えた俺が、病室を出て廊下を歩いていると、廊下の曲がり角付近から、偶然にも、そんな声が聞こえて来た。

曲がり角を曲がって確認してみると、そこには二人の看護士さんが居た。

一人は若いお姉さんで、もう一人は見るからに世間話が好きそうなおばちゃんである。

看護士のおばちゃんが、近所の公園で井戸端会議をするかの様に、若い看護士さんに話し掛けているのだ。

恐らく俺の耳に先程入ってきた声はおばちゃんの声で間違い無さそうである。

「知ってますよ。例の幽霊の事ですよね？」

俺はそのまま、通り過ぎようとした時、おばちゃんと話していた若い看護士さんが、答えた。

幽霊？

何と無く気になった俺は、その話に耳を傾ける。

「そうなのよ。ずっと前からこの病院には、小さな女の子の幽霊が出るって噂があったじゃない。でもこれとは別に、最近変な話が患者さんの間で広まってきたのよ」

「確か人間サイズの昆虫みたいなのが出てくるとか、私も何人かの患者さんから聞きました」

「何でも夜の病院で毎夜の事、誰かが目撃してるらしいわよ」

「しかも、何故か目撃するのは患者さんばかりで、夜の見回りをしている私達や警備員さんは、一度も見た事が無いって言うんですから不思議な話ですよね」

「でもそれって裏を返せば、単に怖がりの患者さんが見間違えただけって事なのかも知れないわよね」

「あはは、そうかも知れませんね」

看護士さん達の幽霊の噂話はここまでの様で、二人の話題は幽霊話から、今年の秋に流行りそうなファッションの話へとシフトして行った。

「夜の病院に出てくる謎の巨大昆虫ねえ・・・」

俺は看護士さん達が話していた内容を思い出しながら呟く。

病院や学校等の普段から多くの人が利用する場所では、こういった

噂が出来やすいという話を前世の友人に聞いた事がある。

普段から見知ったものであるからこそ、人の想像はリアリティーを増すらしい。

そう考えるとただ単に、この話も噂話の一つだと受け止めるのは簡単なのだが、俺は如何にもこの話には引っ掛かる部分がある気がするのだ。

それと言うのも・・・

「何やら面白そうやな」

面白い？

「まあ、確かにそういうのが好きな人にとっては、面白い話かもしれないね」

オカルトやホラーが好きな人にとっては、こういう話を生ですると喜ぶかも知れない。

でもその一方で、そういった話に拒絶反応を起こす人もいたりするので、一概にそう受け取って良いのかは疑問ではある。

「入院生活って退屈なんよ。だから私は刺激が欲しいんや」

「刺激ねえ？」

ジェットコースターに乗るのと似た様なものだろうか。

いや、あれは刺激というよりも、最早死の恐怖だろう。

「所でさ・・・」

俺は一度、軽く深呼吸してから、言う。

「何でここに居るの？はやてちゃん」

俺の横には、関西弁を喋る車椅子の美少女が居た。

自分の記憶に間違いが無ければ、確か俺は、はやてちゃんに先程別れの挨拶をして部屋を出た筈なんだが・・・

「純君が帰って暇やったから、少し病院内を歩こうと思ったんやけど、良い話を聞けたわ」

はやてちゃんがまたしても、悪戯っ子な笑みを浮かべる。

少し前まで、俺の説教で幾らか懲りてくれれば、助かると思っていたのだが、如何やらはやてちゃんの悪戯は、説教の一つや二つを受けた所で改善される様な、生易しいものでは無いらしい。

無駄に逞しいその心意気を、もう少し何処か違う場所に、運用出来なかったのだろうか？

「さてと、俺もそろそろ帰ろうかな」

この場に居ても嫌な予感しかしないので、俺は早々に撤退する為に行動を開始する。

「ちょっと待とうな純君」

しかし、敵は俺の一枚上手だった。

俺の素早い撤退行動を事前に感じ取ったはやてちゃんは、俺のズボンを握り込んでその動きを阻害してくる。

「・・・如何したのかな?はやてちゃん。俺早く帰らないといけないんだけど」

はやてちゃんが俺に何を言いたいのか、何と無く分かるが、俺はあえて知らない振りをする。

諦めなければ、何処かに勝機を見出せるかも知れないからだ。

「とぼけなくても良いんやで。彼女の私は純君の考えは何だってお見通しなんやから」

はやてちゃんが、わざとらしく恥じらいを演出させながら、言ってくる。

いい加減に、そのネタを持ち出すのは勘弁して貰いたい。

「今夜は一緒に夜の病院で、秘密の肝試しデートで決定やな」

そしてはやてちゃんは俺が予想していた事を、いや、それ以上にいかがわしい言い方で言ってきた。

この言い方にも突っ込むのは当たり前だが、それよりもまずは・・・

「はやてちゃんはただ単に暇潰しがしたいだけだよね！？話相手ならまた今度してあげるから、今日の所は勘弁してよ！それに俺とはやてちゃんは・・・！？」

俺はその次の言葉を口にする前に気付いた。

誰かの視線を感じたのだ。

俺は恐る恐る、その視線の先に振り向いてみる。

「よるのびょういんでひみつのでえと・・・おとなです！おとなすぎます！！！」

純粋な心と、歳相応な好奇心が見事にブレンドされた瞳で、一人の女の子が俺とはやてちゃんを観察していた。

「俺とはやてちゃんは・・・何なん？」

この状況ではやてちゃんは、俺に分かりきった事を質問してくる。

今の俺に選択肢は無い。

言論の自由を奪われた俺に、今唯一出来る事。

それは・・・

「・・・俺とはやてちゃんは・・・最高のカップルさ！」

俺は心の中で咽び泣きながら、再び笑顔という名の仮面を被った。

願わくば、この光景を無垢な瞳で見ているみかんちゃんが、清らかな心を持ちながら成長してくれる事を、俺は切に願っている。

『・・・それで何故ワタシが呼ばれたのだ?』

はやてちゃんの病室にやってきたメカ犬が、来て早々に開口一番でそう口にした。

いやね。

俺だって正直な所、悪いとは思ってるんだよ。

でもさ、他に今この場に来れる人物で、多少なりとも俺以外にはやてちゃんのストッパーが出来そうなのってメカ犬しか思い浮かばなかったんだって。

なのはちゃん達じゃ、悪戯っ子として覚醒したはやてちゃんを、制御する術は無いし、大人に正直に言えばやる前に禁止されてしまうだろう。

だから大人以外で、何かがあった時に対処可能になりそうなのは、メカ犬位しか思い付かなかったのだ。

メカ犬が居れば、最悪の場合でも変身出来るし、大抵の事は自力で如何にか出来る筈だ。

そもそも変身する機会は無いと、思いはするけれど・・・

『しかし珍しいな』

俺が平謝りする中、メカ犬が呟いた。

「何がだよ？」

『いや、普段のマスターならば、こんな事をする前に止める筈だろう』

確かに普段の俺なら、メカ犬の言う通り、こういう事をしようとしたら、止めるだろうな・・・

「ちょっと思う事があってさ」

俺は視線をベッドでみかんちゃんに絵本を読んであげている、はやてちゃんに向けながら言う。

「初めてなんだよ。はやてちゃんが、俺にこういうわがままを言うのってさ」

はやてちゃんは今からやろうとしている事が、決して褒められる事

じゃないって事を分かっていると思うのだ。

今年の夏に出会ってから、今日までに色々なわがままを聞いた事に、違いは無いのだが、今回のわがままは何時もと少しだけ違っている。

普段言ってくるわがままは、度を越えている部分もあるが、本質的に誰かに迷惑が掛かるものではなかったのだ。

しかし今回は、ばれたら病院関係者やその他諸々に怒られる事必至なのである。

「俺達の誰一人も、今日までお見舞いに来なかった事をさ。はやてちゃんは俺が予想する以上に寂しく感じてたのかなって思ったんだ」

だから今日は何があっても一緒に居たかったんだと思う。

実際にはやてちゃんの心の内が、どうなってるのかは分からないけど、俺にはそう見えたし、感じた。

俺は、はやてちゃんに向けていた視線を、少しだけ下げてみかんちゃんを見る。

病室で話している間に少しだけ話したのだが、みかんちゃんははやてちゃんが検査入院した初日から、毎日病室に遊びに来ていたそうだ。

この事実を聞いて、今目の前に居るはやてちゃんとみかんちゃんのやり取りを見ながら、俺は心の底からみかんちゃんに感謝している。

みかんちゃんが居てくれたから、はやてちゃんは寂しさを紛わせる

事が出来たんだと思う。

本当ならば、今日俺はあの日見た寂しげな笑顔を、再び見る事になっていた筈だ。

本人は勿論意識して無いだろうし、はやてちゃん自身もそんな事思っていないかも知れない。

でも俺は、それでも感謝したいのだ。

ありがとう、みかんちゃん。

俺の大切な友達の笑顔を守ってくれて・・・

現在の時刻はまだ、日も出ている夕方。

肝試しの時間までには、もう少しだけ時間が在った。

# 第十二話　ゴースト・イン・ザ・ホスピタル【前編】（後書き）

来年最新話予告編

時を駆ける列車デンライナー

次の行き先は、過去か？未来か？

「これってもしかして・・・」

「行くぜ！良太郎！」

『この者達は有名なのか？マスター』

「サイン貰って良いですか？」

それは出会わない筈の邂逅だった

「君可愛いね」

「泣けるで！」

「これって犬なの？何かピカピカしてるけど」

「ぎゃー！！！犬うううう！？」

『だからワタシは犬ではなく、オモチャ会社の（以下略）』

新たな敵の出現！？

「イマジンが時の運行を乱そうとしています」

「俺は蘇ったのさ。そして今度こそ最高の悪の組織を作ってみせる」

「狙いはこれだったのか？」

今！

二人の戦士が立ち上がる！！！

「行くぞメカ犬！」

「行くよモモタロス！」

「『任せろ！！！』」

「「変身」」

「俺！参上！！！」

「こいつで決めるぜ！！！」

超・電王トリロジーアフター・エピソードシルバー
帰ってきたクライマックス刑事！
ミッションコードはギャラクシードリームプロジェクト！？

２０１１年１月更新予定。

# 第十二話　ゴースト・イン・ザ・ホスピタル【後編】（前書き）

どうもＧ－３Ｘです。

今年最後の本編更新になります。

それでは楽しんで頂けると幸いです。

# 第十二話　ゴースト・イン・ザ・ホスピタル【後編】

「それじゃあ、【海鳴大学病院夜の秘密肝試し】を始めるで！」

はやてちゃんが小声で、しかし元気良く宣言した。

「「『おー！』」」

それに合わせて、俺とメカ犬、そしてみかんちゃんが、同じく小声で言いながら、右腕（メカ犬は右前足）お天に向けて突き出す。

現在の時刻は良い子はとっくに眠ってる時間であり、勿論面会時間なんて、とうの昔に過ぎ去ってしまっている。

というか既に消灯時間も過ぎているので、俺達は明かりの消えた、真っ暗状態な、はやてちゃんの病室で待機していたりするのだが・・・

「しかし、良く見付からなかったよな」

俺はこれから肝試しという事で、静かにテンションを上げている、他のメンバーを見ながら、思わず口に出していた。

はやてちゃんは、この病院の事は物心が付いた時から知っているそうで、当然の様に看護士さん達の夜の見回り時間帯から、消灯時間の際に何処までチェックするのか、そして何処に居れば見付からずに済むのかを、かなり細かい所まで把握していたのである。

お陰で俺とメカ犬は、面会時間を過ぎても、病院関係者に見付かる

事無く、はやてちゃんの病室に留まる事が出来た。

ちなみに俺がここに居る事を、母さんには伝えてある。

母さんは天然だが、下手な嘘は速攻でばれるので、俺の正直な気持ちをそのまま電話越しに言った。

そして母さんは一言だけ、

「はやてちゃんを宜しくね」

と優しい声色で言っていた。

あの夏休みに出会った日から、はやてちゃんは板橋家に良く遊びに来る様になったが、特に母さんとは凄い勢いで仲良くなった。

今では俺以上に、はやてちゃんと母さんは親子の様な仲に見える。

母さんもはやてちゃんの事が、やっぱり心配なんだろうな。

はやてちゃんが検査入院する事を話した時も、かなり不安そうにしてたし、時間さえあれば、お見舞いに来ていた事は、間違い無いだろう。

普段は専業主婦をやっている母さんなのだが、残念な事に今は臨時のアルバイトをしているので、自由になれる時間が作れないでいるのだ。

何でも学生時代からの親友らしいのだが、その人がプロの漫画家さんだそうで、母さんはその人がデビューする前から、ずっとアシス

タントをしてきたらしい。

今ではかなりの売れっ子で、アシスタントさんを雇っているから、呼ばれる事は少ないのだが、今回は締め切りが近い上に、急にアシスタントの人が、来れなくなったのだそうで、母さんに白羽の矢が立ったのである。

しかもその漫画家さん・・・今は諸々の事情から、仕事道具を一式家に持ち込んで、仕事をしているのだ。

もう家で仕事を始めてから、三日が経つのだが、初めて来た日は本当に大変だった。

まあ、この話は今するべき話じゃないから割愛しておこう。

兎に角そういう経緯があり、俺は病院関係者に知られては困るが、取り敢えず親の承諾を得てこの場所に居られるのである。

「良し！それでは隊員諸君！これから隊長である私が、作戦内容を発表するから良う聞いとくんやで！」

はやてちゃんからの指示が下る。

先程まで静かにしていたのは、はやてちゃんの情報で、まだ看護士さんが近くにいる可能性があったからなのだが、そのはやてちゃんが動き出したという事は、もう看護士さんはこの近くにはいないという事なのであろう。

見るとメカ犬とみかんちゃんは、既にはやてちゃんの話しを聞く姿勢に入っていた。

それを見て俺も慌てて、聞く姿勢に移る。

はやてちゃんは俺達全員が、話を聞く準備を整えた事を確認すると、満足気に頷き、説明を始めた。

説明を聞きながら、俺が第一に思った事は、今夜は長くなりそうだなという、肝試しとは無縁な考えだった。

今日の夕方頃に、看護士さん達が話していた噂の詳細を補填する為に、俺はまだ日が明るい内に、病院内で情報集めをしていた。

そして話を聞いて行く内に、この噂話は大きく三つに分かれる事が判明したのである。

まず一つ目の噂が、この病院で最も古くから噂されている話で、小さな女の子の幽霊だ。

出会うと遊んでとせがまれはするが、特に害は無いらしい。

噂によるとこの女の子は、この病院で亡くなったとか、座敷わらしなのだとか、様々な憶測が飛び交っている様である。

二つ目の噂は謎の巨大昆虫。

何でも夜に人間サイズの昆虫が病院内を闊歩しているのだそうだ。

今まで目撃した人は、全員恐怖で気絶してしまったそうなので、これ以上の詳しい情報は手に入らなかった。

そして最後の噂なのだが、この話を聞いて、俺は日中に看護士さん達が話していた時に感じた、違和感に気付いたのである。

三つ目の噂では、この二つの話が混じっているのだ。

最初俺は、看護士さん達が二つの違う話をしているのに、如何して繋がりがある様な言い方をするのか、疑問に思っていたのだが、答えは意外と単純だったわけだ。

女の子が出会った人にお願いをするというのは、一つ目と同じなのだが、違うのはその内容なのである。

お願いの内容が、一緒に遊んでというものから、二つ目の噂に出てくる人間サイズの昆虫を止めてくれというものに変化したのだそうだ。

女の子が謎の昆虫の何を止めてもらいたいのかは、分からなかった。

一つ目の噂は、随分と昔からあったものらしく、誰がいつ頃言い始

めたのかは、分からなかったのだが、二つ目の噂は今から三ヶ月程前から、噂になり始めたらしい。

そして三つ目の噂は、二つ目の噂が流れ始めてから一週間ほどで、急速に広まったのだそうだ。

ここで不思議に思うのは、今までの話で、かなりの数の患者さんが目撃しているのに、夜の見回りをしていて本来ならば、一番目撃する確率が高い筈の看護士さんが、誰一人として目撃した事が無いという事である。

正確に言えば、看護士さん達は目撃しているのだ。

ただしそれは、一つ目と三つ目の話であり、何故か二つ目の謎の昆虫とは遭遇していない。

日中に話していた看護士さん達も、恐らく二つ目の噂をメインに話していたのだろう。

そしてもう一つ情報を補足すると、一つ目と三つ目の目撃情報は、病院内の至る所に渡っているのだが、二つ目の噂だけは如何いう事か、目撃場所が病院の最上階に集中されているのである。

最後にこれは三つの噂とは関係無いのだが、病院の屋上の床や壁の部分に、刃物で傷付けた様な謎の跡が残っていたと聞いた。

話を聞いた看護士さんの話だと、この現象も三ヶ月程前から起こり出し、一週間に一度の割合で今も増え続けているそうだ。

俺が集めた情報を全て纏めると、これ位なのだが、俺はこれを知っ

た上で、この病院関係者の方々に一言物申したい。

ここはどんだけ不思議現象が起こってるんだよ！？

はっきり言って、目撃情報が、多すぎるのだ。

病院内の道行く人に、質問すると五人に一人は何かしらの不思議体験を経験しているのだ。

俺は幽霊とかは、居たら良いなと思うが、其処まで信じてはいない。

特に俺は一度死んでるのに、幽霊になった経験が無いという事もある。

だがこれだけの現状を、目の当たりにしてしまうと、取り敢えず御祓いしてもらえよと言いたくなるのは、俺だけでは無い筈だ。

『さっきから何を、ブツブツと呟いているのだマスター』

如何やら俺の思考が声に出ていた様で、俺の隣に居たメカ犬が指摘してきた。

「悪いな、少し考え事をしてただけだから、気にしないでくれ」

俺はメカ犬に軽く謝罪した。

「五月蝿いで二人とも！あんまり騒ぐと見回りの人に気付かれてまうやろ！？」

俺とメカ犬の会話に割り込んで、注意するはやてちゃん。

しかし注意している筈のはやてちゃんの声が、一番大きいのは良いのだろうか？

「『ごめんなさい』」

ここでそれを指摘しても、無用な争いを生むだけだと判断した俺達は、低姿勢で謝り、この場を収める事に全力を注いだ。

「じゅんおにいちゃんは、はやておねえちゃんの、おしりにひかれてるんだね」

その光景を見たみかんちゃんが素直な感想を言う。

何処でそんな言葉を覚えたのか、非常に気にはなるが、それよりも俺とはやてちゃんの関係が、みかんちゃんから見ると、その言動から、恋人を通り越して、既に夫婦レベルに上がっている気がする事が俺は問題な気がする。

俺達は現在、窓からの月明かりだけを頼りに、病院の廊下を歩いている。

ここで改めて、今回の肝試しに参加しているメンバーを紹介しておこう。

最初に紹介するのは、言い出しっぺであるはやてちゃん。

そして俺が無理を言って呼び出したメカ犬。

そして巻き込まれた俺・・・と最初はこのメンバーで行く筈だった

のだが、

「おばけさんにあえるのたのしみです」

急遽追加メンバーとして、純真無垢な幼女のみかんちゃんが参加する事に決まったのである。

日も暮れかけた頃、みかんちゃんはまた明日と言って、病室を出て行ったのだが、暫くして完全に日が暮れた後、再び病室にやってきて、この肝試しに参加したいと言い出したのだ。

これを承諾するのは、あまり好ましい事だとは思えなかったが、はやてちゃんが即断でＯＫを出してしまったのである。

まあ、はやてちゃんの気持ちも何と無く分かるのではあるが・・・

多分はやてちゃんは、みかんちゃんが自分と同じ様に、寂しい思いをしているのではと感じたのだろう。

そして結局は、俺もみかんちゃんの参加を承諾したのだから、同罪かな？

それにしても、みかんちゃんも恐らくこの病院に入院している患者の一人だと思うのだが、やたら元気に見える。

入院着は着ていないが、はやてちゃんと同じ様に、自分のパジャマを着ているから、俺の考えが間違いという事は無いと思うが・・・

「さあ、もうすぐ第一の目的地に着くで！」

先頭で車椅子による移動を続けていたはやてちゃんが、強い好奇心と若干の未知への恐怖を混ぜた声で、後続の俺達に伝える。

今回の肝試しなのだが、噂で目撃情報が多く、それでいて見回りの人達の目を、掻い潜る事が出来る場所を数箇所見て回るという趣旨に決定した。

そして最初に辿り着いた目撃スポットが、ここである。

「深夜の談話室コーナーには出るらしいで・・・」

はやてちゃんが両手を自身の胸の辺りで垂らして、古典的なオバケのポーズを取りながら言う。

辿り着いた第一の目撃スポットは、昼間はこの病院内で最も人の集まる場所の一つである、患者さん達が自由に利用する事が出来る、談話室であった。

『特に怪奇現象と言える事象は発生していない様だが？』

談話室全体を見回したメカ犬が、何処か残念そうに呟く。

メカ犬も俺に文句を言いながらも、肝試しを楽しみにしていたのかもしれない。

しかし俺から言わせて貰えば、今の現状での一番の不思議現象はメカ犬の存在だろ。

もうこの辺りに突っ込みを入れるのは、今更な気がするので、言及する事はしないが・・・

「それじゃあ、次の目撃スポットへ出発するで！」

談話室の探索を終えたはやてちゃんが、俺達を一箇所に集めて次の作戦指示を出してきた。

「「『おー！』」」

俺達は病室を出る時と同じ様に、返事を返す。

今夜の肝試しはまだ始まったばかりである。

俺達は談話室を出た後も、見回りの看護士さん達の目を欺きながら、肝試しを続けた。

そして約一時間をかけて、予定していた目撃スポットを全て回り終えた時、はやてちゃんが溜息を吐いてから、呟いた。

「それなりに面白かったけど、幽霊には会えんかったな・・・」

呟いた後に、はやてちゃんはもう一度溜息を吐く。

「まあ、肝試しって大抵はそういうものだから仕方ないよ」

「そうだよ。おばけさんにはあえなかったけど、みかんはたのしかったよ」

夜遅くでテンションも下がって来たであろう、はやてちゃんに、俺とみかんちゃんが、フォローの言葉を投げかける。

「・・・そうやな」

はやてちゃんは、肝試しの熱が冷めてきたのか、突然睡魔に襲われたのか、俺とみかんちゃんのフォローに頷いた後、本日はこれで解散という運びになった。

俺は、はやてちゃんを病室まで見送り、隣に居るみかんちゃんに話しかけた。

「それじゃあ、次はみかんちゃんを病室まで送るね」

後はみかんちゃんを病室に送れば、今日の肝試しは終わりである。

「ねえ、じゅんおにいちゃん・・・」

病室まで送ると言った俺に、みかんちゃんが何かを伝えようとして、その直後に何故か躊躇いを見せた。

「如何したの、みかんちゃん?」

「あのね・・・」

何かを伝えようとしてはいるのだが、やはり躊躇うみかんちゃん。

その様子を見た俺は、出来る限り優しく、手のひらをみかんちゃん頭に乗せてから言った。

「何か言いたい事があるなら、言ってみてよ。どんな話でもちゃんと聴くからさ」

俺の言葉でみかんちゃんの表情から、躊躇いが消えて、何かの強い決意の意思が生まれる。

「・・・ありがとうございます。じゅんおにいちゃん。じつは、じゅんおにいちゃんにおねがいがあるんです」

「お願い？」

俺のオウム返しな返答にみかんちゃんが、頷く。

「はい。みかんといっしょにいまからおくじょうにきてほしいのです」

みかんちゃんは、先程までの躊躇い等無かった様に、はっきりと言い放つ。

それ以上俺は、質問する事が出来なかった。

目の前のみかんちゃんから、物凄い決意を感じたからだ。

「・・・分かった」

だから俺は、肯定の返事だけを、短く告げた。

先程までのみかんちゃんと、今のみかんちゃんの印象が、大分違うのも気になるし、何故そこまでして俺を屋上に連れて行きたいのかは全く分からない。

でも、俺はみかんちゃんのこのお願いを聞かなくちゃいけないって思ったのだ。

俺にとって、みかんちゃんは、友達の笑顔を守ってくれた恩人なのである。

何か俺に出来る事があるのなら、協力したい。

「ありがとう。じゅんおにいちゃん」

みかんちゃんは笑顔で俺にそう言うと、病院の屋上に向けて歩き出した。

俺もその後を追い、後ろを歩き出す。

暫く歩き、屋上に出る為の階段を上り始めたその時、

「ん！？」

突如妙な感覚に襲われる。

その上重ねる様に、

『キンキュウケイホウキンキュウケ・・・』

ズボンのポケットに入れていたタッチノートから、何の脈略も無く突然警報が鳴り響いたのである。

『マスター。この周辺そのものが、謎の反応を強く発しているぞ』

機械である筈のメカ犬にも、何かが感じ取れたのか、俺に注意を促してくる。

「はやくいきましょう」

突然の異常事態に立ち止まっていた俺達に、前を歩いていたみかんちゃんは、後ろに居る俺達にそう一言だけ言うと、再び歩き出す。

『これは明らかに何かが変だぞマスター』

前を歩くみかんちゃんを見ながらメカ犬が言う。

メカ犬の言う事は良く分かる。

これは異常だ。

今俺達が居る場所も、空間も、そして・・・目の前を歩くみかんちゃんさえも・・・だけど。

「・・・行くしかないだろ?」

俺は先を歩くみかんちゃんを追って再び歩き始める。

この先に何があるのか分からないが、今は進むしかない。

それからは誰も一言すら発する事無く、階段を上り終えて、屋上へと出る為の扉の前に辿り着くと、みかんちゃんが扉のドアノブに手をかけながら、俺に一言だけ言った。

「あけるね」

その言葉を言い終わると同時に、ノブを回して、屋上への道が開かれる。

深夜の屋上は、穏やかな日中とは違い、静寂な闇に包まれていた。

これだけでも感じる印象とは、随分と変化するものではあるが、それ以外は、普段の屋上と何ら変わり無かった。

一つの例外を除いて・・・

そこには人ではない何かが居た。

全身が昆虫を思わせる緑色の甲殻で覆われており、基本の形は人間と大差無いのだが、その両腕が巨大な鎌になっていたのである。

その姿はまさに巨大なカマキリというのが相応しいだろう。

「来たか・・・」

扉を開けて、屋上にやってきた俺達を見ながら、その巨大なカマキ

リは呟いた。

「あれって、やっぱりホルダーなのか？メカ犬」

先程もタッチノートが発動した事から、そうだろうと思うが、俺は念の為、隣に居るメカ犬に確認する。

『・・・いや、正直判断が出来ない』

しかしメカ犬から帰ってきた答えは、如何にも要領を得ないものであった。

「如何いう意味だよ？」

俺はメカ犬に聞き返す。

『そのままの意味だ。奴からは確かにホルダー反応を感知する事は出来るのだが、普通のホルダーとは若干違う反応を示している』

「それって、あれも以前戦った奴みたいに、能力か何かで作られた分身みたいなものだって事か？」

『それは無いな。本体は今目の前に居る奴で間違い無い』

「それじゃあ何が違うって言うんだよ？」

「じゅんおにいちゃん」

俺が更にメカ犬に質問をした所で、みかんちゃんが会話に割って入る。

「おねがいです。あのひとをとめてあげてください」

みかんちゃんは謎のホルダーに指さしながら、改めて俺に頼んできた。

ん？

ちょっと待てよ・・・

この状況ってまるで・・・

「三つ目の噂・・・」

俺の口から自然と声が漏れる。

そうなのだ。

この状況は、若干違う部分もあるが、この病院に流れている三つ目の噂に、不気味なほど酷似している。

「だまっててごめんなさい。でもじゅんおにいちゃんなら・・・」

「みかんちゃん・・・」

もしも今の状況が、噂の真実だとするのなら、みかんちゃんの正体は・・・

「少年よ」

ホルダーが俺に話しかけてきた。

「少年が私と戦ってくれるのか？」

何なんだこのホルダーは？

何処か物腰が静かなホルダーは、ただ淡々と俺に質問する。

『戦うだけが目的だとでも言うのか』

ホルダーの質問にメカ犬が疑問をぶつける。

「私は待っていたのだ・・・この時を」

メカ犬の質問に答えたのか、独白しただけなのか判断の着かない言葉を口にするホルダー。

『如何するマスター？』

メカ犬が今度は俺に聞いてきた。

如何するもこうするも・・・

正直今の現象は全てがまともじゃないが、それでも俺は・・・

俺は一瞬だけ、みかんちゃんを見た。

「・・・約束は果たさなきゃならないだろ？」

俺は言いながらポケットの中に入っていたタッチノートを取り出し

開くと、ボタンを押した。

『バックルモード』

隣に居たメカ犬が、銀のベルトに変形して、俺の腹部に自動的に巻きつく。

「変身」

音声キーワードを入力した俺は、バックル中央の溝にタッチノートを差し込んだ。

『アッププロード』

俺の全身が白銀の光に包まれて、一人の戦士へとその姿を変えていく。

光が収まり、其処に佇むのは、メタルブラックのボディーが特徴的な仮面ライダーシードだ。

「・・・ありがとうじゅんおにいちゃん」

多少予測はしていたが、目の前で俺の変身を見ていたみかんちゃんは、驚く所か、眉のひとつすら動かさずに、平然としていた。

俺の中の疑惑が確信へと変わっていく。

「感謝するぞ少年・・・」

ホルダーは、俺に対して一言だけ、感謝の言葉を述べると、両腕の

鎌で構えを取った。

『マスター。相手が武器を使うのならば、此方も武器だ』

「ああ」

俺はメカ犬の助言に頷きながら、ベルトの右側をスライドさせて、赤いボタンと黄色のボタンを続け様に押した。

『パワーフォルム』

『パワーブレード』

光に全身が包まれると同時に、メタルブラックのボディーがクリムゾンレッドに染まり、俺の右手には赤い刀身の両手剣が握られる。

「行くぜメカ犬」

『うむ』

俺はメカ犬に話しかけながら、パワーブレードを構える。

「いざ、尋常に参る！」

俺が構えた事を、合図に、ホルダーが右手の鎌を振り被りながら、駆け寄ってきた。

「は！」

ホルダーの攻撃に迎撃態勢を整えながら、俺はパワーブレードで、

ホルダーの鎌と斬り結ぶ。

右の鎌を塞がれた事で、今度は左の鎌を振り被るが俺はブレードで右の鎌を抑えつつ、ホルダーの腹部に蹴り込む事で、強制的に距離を取らせる。

「たあ！」

それを隙と判断した俺は、今度は此方から距離を詰めて、ブレードの斬撃を放つが、ホルダーはその一撃を両手の鎌をクロスさせて挟み込み、受け流す事で、俺の一撃を回避してしまう。

俺とホルダーの間には、再び距離が生まれる。

「・・・やるな少年」

互いに構えを取りながら、ホルダーが俺に話しかけてきた。

「其方こそ。かなりの剣の心得があるみたいですね」

このホルダーの体裁き。

何処か恭也君や美由希さんに似ている気がするのだ。

基本の動きとか、そういうものではなく、本質的な何かが近い様に思える。

この勝負はあまり長引けばこっちが不利になるかもしれない。

「次だ」

ホルダーが俺に呟く。

「次の一撃でこの勝負を終わらせよう。だから少年も、今の自分に出来る最大の一撃を私にぶつけて見せろ」

如何やら俺の考えは杞憂だったらしい。

何かこのホルダーと戦っていると、時代劇に出てくる侍と勝負している様な気になってくる。

「ええ、次で終わりにしましょう・・・」

俺はホルダーの意見に賛同して、バックルからタッチノートを引き抜き、パワーブレードの柄部分にある溝にスライドさせた。

『ロード』

音声が流れると同時に、タッチノートを再びバックルに差し込む。

『アタックチャージ』

ベルトから発生する光が右腕のラインを通り、赤い刀身へと集約される。

「こいつで決めるぜ」

俺は輝く剣を構えて走り出す。

それに合わせた様に、ホルダーも両腕の鎌を構えて走り出した。

「パワーブレード」

俺が必殺の一撃を繰り出そうとした瞬間。

「甘い！」

ホルダーが一気に俺の懐に潜り込み、両腕の鎌を俺の肩に振り下ろす。

「貰った！！！」

ホルダーは自身の勝利を確信し、歓喜の声を上げる。

そしてホルダーの鎌は俺の肩に吸い込まれる様に、辿り着き・・・

「何い！？」

切断される事無く、その場で押し留まった。

このパワーフォームの最大の利点はその力にある。

それは単純な力だけでなく、防御力にも適応されるのだ。

そして付け加えるのならば、俺はこのホルダーの剣技は力ではなく、恭也君達と同じ様に技にあると、予想した。

剣の達人は斬る時に、最も斬れ味が増すとされる、芯の部分を捉えるそうだ。

だから俺はわざと攻撃される様に誘導して、意識的にホルダーが斬りつけようとした場所から、僅かにポイントをずらしたのである。

俺は再び刀身が輝くパワーブレードを構え、ホルダーが俺の両肩に鎌を乗せた状態のまま、最大の一撃を放つ。

「カウンターステｨング」

パワーブレードの突きが、ホルダーの腹部を貫いた。

「ぐっ！？」

ホルダーからしてみれば、勝利を確信した直後のまさかの反撃である。

これを予測して、避けきれる者等、早々居ないだろう。

「・・・肉を切らせて骨を絶つか・・・・・・見事だ少年・・・があ！？」

ホルダーは俺にその言葉だけを残し、爆発四散した。

爆発後に残されたのは・・・俺だけだった。

『やはり素体が居ないか・・・』

メカ犬がこの現象を目の当たりにしながら、考え込む。

俺もメカ犬と同じく、こうなるとは予測していたが、やはり目の前で起こっても、それが真実だとは、中々納得する事が出来ない。

何時までも考えた所で、答えは出ないだろうな思い、俺はするべき事が終わった事を、みかんちゃんに伝えようと、辺りを見回すのだが、何処にもみかんちゃんの姿が見えないのである。

俺が何処に居るのだろうと思い、探す為に歩き出そうとしたその時、

「ありがとう。じゅんおにいちゃん」

みかんちゃんの声が聞こえてきた。

俺は声の主を探そうと辺りを見回すが、誰も居ない。

「じゅんおにいちゃんのおかげで、あのひともきっとゆっくりねむれるとおもうの」

再び声が聞こえる。

「何処に居るんだみかんちゃん!?」

周りに目線を移動させながら、俺はみかんちゃんに呼びかける。

「これでみかんのやくめもおわり・・・ばいばいじゅんおにいちゃん。はやておねえちゃんといつまでもなかよくね・・・」

その声を最後にみかんちゃんの声は聞こえなくなってしまった。

「やっぱりみかんちゃんは・・・」

深夜の病院の屋上で俺が呟いた声は、あまりにも小さく、風の中に

消えていった。

肝試しをした翌日。

なのはちゃん達三人も予定が空いたので、俺達は改めて四人揃ってお見舞いに行く事になった。

現在は学校も終わり、昨日の俺と同じ様に、四人で病院の廊下を歩いている所だ。

「今日は皆でお見舞いに来れて良かったね」

俺の隣を歩くなのはちゃんが俺に笑顔で話しかけてくる。

「ああ、そうだね」

「純君。何かあったの？」

なのはちゃんが俺の顔を心配そうに覗き込んできた。

「な、何でも無いよ！」

俺は慌てて元気だからと言う。

実際の所、俺は昨日の夜のあれが現実に起こった事なのか、判断出来ないでいた。

もしかしたら、今でも夢だったんじゃないかって、思ってしまう。

「純君」

再びなのはちゃんが、俺に話しかける。

「話したくなったら、何時でも話してね。私に出来る事なら、何だってしてあげるから」

真剣な瞳で俺に言ってくるなのはちゃん。

それを聴いた俺は、

「ありがとう」

そう言ってなのはちゃんの頭に軽く手を置いて撫でた。

俺がよっぽど辛気臭い顔をしていたのだろう。

確かに気にした所で、今回の事に、答えが出せるとは到底思えないのだから、前向きに考えよう。

「純君？」

「もう大丈夫だから、心配しないで」

俺は今の自分に出来る限りの笑顔を、大切な幼馴染に向ける。

「・・・うん！」

なのはちゃんは俺の笑顔に納得したのか、とても良い笑顔で返事を返してくれた。

さて、なのはちゃんのお陰で、大分と気は楽になったが、謎は多く残ったままである。

二つ目の噂は恐らく昨日戦ったホルダーで間違い無いと思うのだが、如何して最上階だけでしか目撃されなかったのだろうか？

屋上に付いていた傷もきっとホルダーの鎌だろうし・・・

本当に謎だらけである。

「着いたよ二人とも」

俺となのはちゃんの少し先を歩いていたすずかちゃんが、話しかけてくる。

「入るわよ」

アリサちゃんは病室の扉をノックしてはやてちゃんに確認を取っていた。

「どうぞ～」

扉からはやてちゃんの声が聞こえたので、俺達は、遠慮無く病室へと入室する。

其処に居たのは、当然ながらはやてちゃんと、そして・・・

「あ！じゅんおにいちゃんだ～」

みかんちゃんが居たのである。

俺が呆然としている間にも、みかんちゃんは、当然の様に、なのはちゃん達に自己紹介を続けていく。

「あら、今日は随分と賑やかね」

病室に女性の声が聞こえた。

入って来たのは、白衣を着た美人さんである。

この人の名前は石田（いしだ）　幸恵（さちえ）さん。

この病院に勤めているお医者様で、はやてちゃんの主治医でもある。

「あ！こんどはさちえせんせいだあ～」

なのはちゃん達に、自己紹介をしていたみかんちゃんは、石田先生が病室に入ってくるのを見ると、すかさず飛びついた。

「あら、みかんちゃんは今日も元気ね」

右足に中々の威力のタックルを喰らいつつも、石田先生は笑顔を崩さない。

「えっと・・・石田先生は、みかんちゃんの事知ってるんですか？」

俺は恐る恐る質問する。

「知ってるも何も、みかんちゃんは、この病院の院長のお孫さんよ？」

「うん！ここみかんの、おじいちゃんのびょういんだよ」

何かさらっと衝撃的な事実が飛び出した。

「それにしても似てるわね～」

石田先生がみかんちゃんの顔を観察しながら呟く。

「・・・な、何がですか？」

俺は脳の処理速度が、限界に近づきつつも、何とか石田先生に質問を続ける。

「実はね、院長室に古い写真があるんだけど、その写真に写ってる女の子が、みかんちゃんにソックリなのよ」

話を聞くと、その写真の女の子は、院長のお姉さんの生前の写真なのだそうだ。

写真のお姉さんは、この写真を撮ってから暫くして流行り病でお亡

くなりになったそうだが・・・

「確かそのお姉さんの名前もみかんだった筈よ」

「そのしゃしんね。みかんもってるよ！」

俺と石田先生の会話にみかんちゃんが、突如乱入し、俺に一枚の写真を見せてきた。

その写真は随分と古い物で、端々が破れていて、写真自体もカラーではなく、セピア色をしていた。

「あの、この人は？」

確かに写真には、みかんちゃんに瓜二つな、女の子が写っていた。

だが写っていたのは、その女の子だけでは無かったのである。

もう一人。

写真には軍服を着た、初老の男性が写っていた。

俺はこの人が誰なのかを、石田先生に尋ねてみる。

「ああ、その人はね…」

石田先生が院長から聞いた話によると、この人は院長の叔父にあたる人で、生前の姉が良く懐いていたそうなのだが、同時期に姉と同じ流行病で亡くなったのだそうだ。

この人は、かなり腕の立つ剣術家であったのだそうだ。

それと同時に、何故か高い所が好きだったから、当時空を飛べる職業である空軍の軍人になってしまったという変わり者だったらしい。

それと写真に写ってる二人はかなりの医者嫌いだったという話は、今でも続くこの医者の家系において、有名な話なのだそうだ。

……何故だろう。

今になって、何か知らなくても良かった事実まで、知ってしまった気がする。

俺と世間話をした石田先生は、はやてちゃんに二時間後に検査があるから、その時間には、病室に居てねと簡単な連絡をすると、病室を出て行った。

「ねえ、じゅんおにいちゃん」

石田先生が病室をでて暫くすると、みかんちゃんが話しかけてきた。

「きのうの、きもだめしでえとは、たのしかったですか？」

この質問が出るという事は、やはり夜の肝試しに参加したみかんちゃんと、今俺の目の前に居るみかんちゃんは、別人だったという事なのだろうか…

しかし今は、そんな考察をしている暇は無い様だ。

それと言うのも……

「へえ～夜の？」

「肝試し？」

「デート？」

なのはちゃんと、アリサちゃんに、すずかちゃんから、何故か凄まじい殺気を放たれているからだ。

「純君…」

「ちょっと…」

「説明してくれるかな…」

三人がゆっくりとした動作で、俺に近づいて来る。

何をそんなに怒っているのか知らないが、俺は三人の怒りの琴線に触れてしまったのかもしれない。

「今日は天気が良いから、お外でご本を読もうなあ～」

「うん！」

はやてちゃんは、自分だけちゃっかりと、みかんちゃんを連れて避難して行く。

「お、俺も一緒に行こうかな？」

何とか俺も便乗してこの場から逃げようと試みるが、後ろで凄まじいオーラを放つ三人に肩を掴まれて、あえなく失敗に終わる。

そして俺が、恐怖のあまり、逆に引きつった笑顔で振り向くと其処には、怒りのオーラを放ちながら、凄く良い笑顔をしているなのはちゃん達が居た。

「「「ちょっとお話しようか？」」」

この日。

海鳴大学病院において、四つ目の噂として、謎の少年の断末魔が加わったというのは、全く別の話である。

今日の海鳴は、秋の夜長のミステリーと、若干のバイオレンスがあるが、それなりに平和だ。

ロサンゼルスのホテルの一室で、一人の日本人女性が、一眼レフのカメラを大切そうに専用の掃除用具を使って、磨いていた。

「うん！綺麗になったわ！」

この女性の名前は風間恵理。

海鳴市で雑誌記者をしており、ここロサンゼルスには、会社の取材で来ているのだ。

「それにしても、あの子、無事に純君の所に着いたかしら？」

恵理は何かを思い出す様に、瞳を閉じる。

「何か、純君の相棒のメカ犬君と知り合いみたいだったから、宅急便で送ってあげたけど……」

其処まで言って恵理は、大きく伸びをしながら、

「まあ良いわ！それよりも折角早めに取材が終わったんだし、ショッピングにでも行ってこよっと！」

そう言って、恵理はホテルの部屋を出て、ショッピングに出かけて行った。

## 第十二話　ゴースト・イン・ザ・ホスピタル【後編】（後書き）

今回のお話で、本編の更新は終了ですが、短編は一本だすと思います。

ですが、予想以上にこれから忙しくなりそうなので、保険として今の内に言っておきます。

皆さん来年も良い年でありますように。

それでは、次は年末か、来年のお正月にお会い致しましょう。

## キャラクターファイル第二弾（前書き）

仕事の合間に仕上がったので載せますね。

しかし…

こうして見るとこの作品はオリジナルキャラの数がとんでもない事になりつつある気がします。

まあ、これからも増えるんですけどね。

それでは楽しんで頂ければ幸いです。

ただのキャラ紹介ですけどね……

## キャラクターファイル第二弾

登場人物

○風間　恵理　　初登場　第七話【前編】

海鳴ジャーナルの雑誌記者。

純が仮面ライダーだという事を知る、数少ない人物の一人。

最初は完全なゲストキャラとして扱っていたのだが、何時の間にか、準レギュラーに昇格した。

○スカイモンキー　　初登場　第七話【前編】

海鳴で噂になっていた都市伝説の一つ。

その正体は、ホルダー化した双子の犯行だった。

能力は超加速。

兄は常に冷静沈着。

逆に弟はかなりの短気。

ちなみに二人は現役の高校生である。

○ＯＬの女性　　初登場　第七話【前編】

スカイモンキーに襲われた被害者。

○仮面ライダーシード・スピードフォルム　　初登場　第七話【後編】

メカ犬が失われていた自身のメモリーを一部だが、思い出す事で変身可能になった姿。

その名の通り、素早さに優れた能力を有している。

専用武器であるスピードロッドは純いわく、とても使いやすいらしい。

その為か、他のフォルムと比べても使用頻度が高い。

必殺技は、自身の周囲を同時に攻撃出来る、ウインドテイスティング。

○恭也の同級生達　　初登場　第八話【前編】

その辺のアイドルでは太刀打ち出来ない程の、美少女軍団。

全員が恭也の彼女の座を虎視眈々と狙っている。
リア充はモゲてしまえば良いと思う。

○すずかちゃんのお姉さん　　初登場　第八話【前編】
夏休みの旅行で、見事に恭也をＧＥＴした女性。
原作でもお馴染みのあのお人です。

○醤油　　初登場　第八話【前編】
日本人には馴染み深い調味料の一つ。
和食好きには無くてはならない大切な味。

○八神　はやて　　初登場　第八話【前編】
原作キャラの一人でこの作品のメインヒロインの一人。
車椅子の関西弁少女。
純と友達になってから、この子の生活環境はかなり変わった。
最近の趣味は、純を弄り倒す事。

なのはちゃん達に加入して美少女四人組になった。

○グレアム　　初登場　第八話【前編】

はやての両親の知り合いらしい…

今言えるのはそれだけである。

○ヘルパーさん　　初登場　第八話【前編】

はやての家に一週間に一度、お世話をしに来てくれる。

気の良いおばさん。

○海を眺める男　　初登場　第八話【前編】

はやての父の同僚。

ホルダー時の能力は、飛行と、翼の羽を武器として飛ばす遠距離攻撃。

以外な人気を博した事により、何気に番外編で主役をしていたりもする。

○謎の喋る猫　　初登場　第八話【前編】

謎と言ってるが、原作を知ってる人は皆正体と目的を知ってると思うので、特にこれ以上言う事も無かったり…

○何でもメカ犬相談室　　初登場　第八話【前編】後書き

記念すべき第一回目のメカ犬のコーナー。

一番最初に質問を送ってくださった神崎はやて先生、本当にありがとう御座います。

○チェイサー・ホバーモード　　初登場　第八話【後編】

実は空を飛ぶ事が出来たチェイサーさん。

これを皮切り、空中戦はチェイサーさんの見せ場になった。

作者的にも大助かりである。（あ！ここはオフレコでお願いします）

○仮面ライダーシード・サーチフォルム　　初登場　第八話【後編】

スピードフォルムに続く第二のフォルム。

身体能力よりも、感覚機構の強化に重点が置かれている。

専用武器のサーチバレットは唯一の遠距離攻撃を可能にしている。
ホバーモードで空を飛ぶチェイサーと連携して戦う事が多い。
必殺技は、連続で光弾を相手に撃ち込む、ガトリングブースト。

○マジカルナースメイドプリンセス☆　　初登場　第九話【前編】
純白の乙女！マジカルナノネ！
真紅の乙女！マジカルアリス！
蒼穹の乙女！マジカルスズノ！
漆黒の乙女！マジカルハヤメ！
そして細かい突っ込みは受け付けません！

○ゴクアクーダ　　初登場　第九話【前編】
名前からにして、見事なやられ役です。

○マジカル・リリカル・ハイパーキャノン！！！！！！！！
初登場　第九話【前編】
集まれ！！！正義のマジカルパワー！！！！！

……何か、本当にスイマセンでした。

○ダークゾーン　初登場　第九話【前編】

なのは達四人が構成する負のマイナス領域。

飲まれれば鬱になること必至。

○脅迫文　初登場　第九話【前編】

マジカルナースメイドプリンセス☆を愛する一ファンから送られてきたとても痛い手紙。

○隊長　初登場　第九話【後編】

熱狂的なマジカルナースメイドプリンセス☆のファンで、ある意味カリスマ的存在。

脅迫文を送ったのもこの人だった。

ホルダー時の能力は、高い防御力にある。

その防御力はベーシックフォルムのシードの攻撃をものともしない程だった。

○軍曹　　初登場　第九話【後編】

出番とほぼ同時に、隊長に殴られた人。

この人もキャラが濃い筈なのに、全て隊長に持っていかれた。

○桃色ハッピの集団　　初登場　第九話【後編】

軍隊並みに統率のとれた嫌過ぎる集団。

日々マジカルナノネの普及活動に精進している。

○仮面ライダーシード・パワーフォルム　　初登場　第九話【後編】

スピード、サーチに続く新たなフォルム。

機動力を犠牲にした代わりに、その名に相応しい力を有している。

専用武器は赤い刀身の剣、パワーブレード。

必殺技は強力な衝撃波を相手にぶつけるブレイクインパクト。

○マジカルナノネの直筆サイン色紙　　初登場　第九話【後編】

恵理が純に報酬として持ってきた物だったが、翠屋で見せた直後、なのは達に強奪される。

○館長　　初登場　サイドストーリーエピソード３

サイドストーリーでついに名前をＧＥＴした保奈美が勤める、海鳴図書館の館長さん。

厳格で仕事に真面目な人なのだが、怖がりなのがたまにキズ。

○ガルド　　初登場　映画版　仮面ライダーシード

映画版のシード最大の敵であり、事件の計画を仕組んだ黒幕。

Ｔの話では優秀な科学者らしいが、如何もそれだけでは無いらしい。

物語の最後では自身も巨大なホルダーになって戦うが、純とメカ犬の前に敗れ去っている。

○水着のお姉さん　　初登場　映画版　仮面ライダーシード

セクシーな水着を着用している。

夏は人を解放的にさせるのさ！

○ロン毛の兄ちゃん　　初登場　映画版　仮面ライダーシード

ナンパする為にホルダーになった？良く分からない出オチ要員。

過去最大速度で倒されている。
能力は墨を吐く事？

○　山中　真理子　　初登場　映画版　仮面ライダーシード

私立聖祥大附属小学校に勤める教師で、純達の担任。
早いうちから、話題には出ていたのだが、映画版でやっと出番がやって来た。
天然が入っているが、生徒からの評判はそれなりに良い。
ちなみに独身で自称２０代。
現在恋人募集中。

○サバスチャン　　初登場　映画版　仮面ライダーシード

姫様専属の変態老執事。
本当はもっと見せ場があったのだが、作者の都合で丸々カット。
本当は凄い優秀な筈なのに、変態部分だけが目立ってしまった。
恵理とは昔からの知り合いらしい。

○エミリー・シルバーライト・キャンベル　初登場　映画版
仮面ライダーシード

シルバーライト島のお姫様で、映画版では完全なメインヒロイン。

何気にこの作品初めての、完全オリジナルキャラなヒロインである。

サバスチャンの教育影響のせいで、少し変な口調の日本語で喋る。

まだ幼いながらも、国の行く末を真剣に考えているしっかりした子だが、歳相応の部分もちゃんとある。

もしかしたら、再登場もあるかもしれない。

○永遠の十歳な魔物使い　初登場　映画版　仮面ライダーシード

行け！　ピ○チュウ！！！

１００○ボルトだ！！！！！

○萌え萌え！マジカルナノネの日本語講座♪　初登場　映画版　仮面ライダーシード

サバスチャンはこの本でエミリーに日本語を教えた。

参考箇所は、【お姫様の話し方編！　これで明日から貴女も立派なお姫様！】だそうです。

○護衛隊　　初登場　映画版　仮面ライダーシード

元々はガルド専属だが、日本ではエミリーの護衛もしていた。

しかし大半の者が、マインドコントロールを受けており、ホルダー化して純達に襲い掛かった。

大抵は量産化されたシステムを使っていたが、一人だけ黒澤から、ガルドから報酬として貰った特殊なシステムの予備を貰い受けており、他とは違う形と能力を有していた。

そのホルダーの能力は、飛行能力と、体内で針を生成して右腕の発射口から敵に向けて撃つ事が可能な遠距離攻撃。

○黒澤一夜　　初登場　映画版　仮面ライダーシード

護衛隊の隊長を務めている歴戦の戦士。

元々は戦場を渡り歩く流れの傭兵だったのだが、ガルドと利害が一致した事により、計画に加担した。

報酬としてガルドから譲り受けた、システムでホルダー化した自身を、仮面ライダーデビルと名乗っていた。

最後は純との死闘の末敗れ去るが、その後の消息は全くの不明。

○T　　初登場　映画版　仮面ライダーシード

護衛隊のメンバーの一人だったのだが、実はガルドを追って潜入調査をしていたある組織の先遣隊員。

ガルドが表立った行動を開始した直後から、純達の支援に回る。

その正体は原作のあの人？との声が多く寄せられているが、今の所はノーコメントでお願いします。

○ホルダーが乗っていたバイク　　初登場　映画版　仮面ライダーシード

全速力ではないものの、リミットオフしたチェイサーに追い着く、中々に高性能なバイク。

○泣いている女の子　　初登場　映画版　仮面ライダーシード

デビルに敗れた純が、気を失っている間に、夢に出てきた女の子。

顔も名前も分からなかったが、純はその姿を見て守りたいと思った。

○恵理の携帯電話　　初登場　映画版　仮面ライダーシード

純が気絶している間に恵理が集めた黒澤の情報が詰まっている。

エミリー救出に向かう純に恵理が託した。

○通話機能　　初登場　映画版　仮面ライダーシード

デビルとの戦いで敗れた後に、取り戻したタッチノートの新機能。

離れた場所に居ても、タッチノートを通して、メカ犬と会話する事が出来る。

他にもまだ隠された機能が眠っている可能性は高い。

○子供サイズのウェディングドレス　　初登場　映画版　仮面ライダーシード

ガルドってもしかして……

○船　　初登場　映画版　仮面ライダーシード

ガルド専用の船。

そこら辺の豪華客船並みに大きい。

○ベーシックファントム　　初登場　映画版　仮面ライダーシード

シードの基本形態であるベーシックフォルムの特殊能力。

分身体を作り出しメカ犬が遠隔操作する。

必殺技は、分身体と同時に繰り出す、ツインシードスマッシュ。

○白と黒の斑点カラーな犬のヌイグルミ　　初登場　第十話【前編】

アリサお気に入りの大きなヌイグルミ。

寝る時は、何時も一緒。

○カップのバニラアイス　　初登場　第十話【前編】

純のおやつ。

食べかけで部屋に放置した為に、完全に溶けた。

○コジロー　　初登場　第十話【前編】

富豪のお婆さんに飼われているワニ。

舌が肥えているので、餌以外は食べない。

○お婆さん　　初登場　第十話【前編】

コジローの飼い主。

ボケているのか、わざとなのか良く分からないお金持ち。

コジローを溺愛している。

○コジロー専用歯ブラシ　　初登場　第十話【前編】

これ一本あれば、日本の財政赤字も一部解消されそうな程に高価。

○レディーマウス？　　初登場　第十話【前編】

レディーマウスの名を語った偽者。

正体はバニングス邸お抱えの料理長。

ホルダー時の能力は認識阻害。

○葉山　瞳　　初登場　第十話【後編】

バニングス邸で働く新人メイド。

その正体は本物の怪盗レディーマウス。

あの人とは誰なのかは、これからのお話で分かるかも知れません。

○予告状　　初登場　第十話【後編】

レディーマウスが犯行予告に使う。

今回は偽者が送った物で、本物では無い。

○ティアラ　　初登場　第十話【後編】

アリサの母、思い出の品。

○ダッシュ・エア・プッシュ　　初登場　第十話【後編】

スピードフォルムのバリエーション技。
最大加速で渾身の一撃を相手にお見舞いする。

○上級生の女子生徒　　初登場　第十一話【前編】
学校の校庭でホルダーを一番最初に目撃した。

○　稲葉　一樹　　初登場　第十一話【前編】
純達の同級生。
運動が苦手な事から友達の木村と一緒に、運動会を中止させる為にホルダーになって校庭で暴れた。
ホルダー時の能力は、自身の過去の映像を投影する事が出来る。
尚、あくまでも映像なので、触れる事は出来ない。

○木村　真　　初登場　第十一話【前編】
説明は稲葉と同上。
運動会本番では、力の限り努力した。

○ヒグマのプーやん　初登場　第十一話【前編】後書き

メカ犬の情報源の一匹。

好物は蜂蜜と鮭。

○シューティングサークル　初登場　第十一話【後編】

サーチフォルムのバリエーション技。

空中から全体無差別射撃をする。

回りすぎると目を回す可能性がある。

○廃ビル　初登場　第十一話【後編】

木村と稲葉の秘密基地。

男の子なら一度は作った経験がある物ですかね？

○純の手作り弁当　　初登場　第十一話【後編】

すずかのリクエストで純が運動会当日に作ってきた。

見た目も美味しそうで、味もそれなりらしい。

○海鳴大学病院　　初登場　第十二話【前編】

原作縁の場所でもある。

これからも偶に出てくる事でしょう。

○みかん　　初登場　第十二話【前編】

はやてと仲の良い女の子。

実は病院の院長の孫娘。

院長の幼い頃に無くなったお姉さんと瓜二つ。

夜の肝試しに参加したのは……

○看護士さん達　　初登場　第十二話【前編】

海鳴病院に勤める白衣の天使達。

年齢は問題にならないのである！（ここ重要）
噂好きな人が多い。

○プロの漫画家さん　初登場　第十二話【後編】
純の母の昔からの友達。
現在は板橋家に居候しながら、締め切りに追われている。

○謎のホルダー　初登場　第十二話【後編】
両腕が大きな鎌になっている昆虫の様なホルダー？
武士道精神に溢れ、最後まで正々堂々と戦った。
能力や正体は不明。
純の予想が正しいのであれば……

○カウンタースティング　初登場　第十二話【後編】
パワーフォルムのバリエーション技。
相手の攻撃を真正面から受けきり、ゼロ距離からカウンターの一撃

を放つ。

○石田　幸恵　　初登場　第十二話【後編】

海鳴大学病院に勤めているお医者様。

はやての主治医でもある原作キャラ。

○院長　　初登場　第十二話【後編】

海鳴大学病院の院長。

孫娘のみかんを溺愛している。

○あの子　　初登場　第十二話【後編】

恵理の話振りからすると、メカ犬の知り合いらしい。

本格的な出番は２０１１年で！

## キャラクターファイル第二弾（後書き）

短編と電王編はもう暫くお待ちくださいね。

それと、メカ犬の相談コーナーは来年の本編から再開しますので。

# 年末福袋！短編集だよ！今年最後のヘタレ劇場お得版！！！（前書き）

どうも皆さん作者のＧ－３Ｘです。

これで本当に今年は最後の更新になります。

※最後のおまけ部分は事情により削除させていただきました。

御了承の程御願い致します。

今回のお話では、キャラ崩壊を起こしている人がいたり、妙にはっちゃけたり何気に新キャラが出たりと色々ありますが笑って許して貰えると嬉しいです。

それでは今年最後のお話を楽しんで頂ければ幸いです。

※このお話では本編と関係ある様で全く無かったりもしますのでご注意ください。

**年末福袋！短編集だよ！今年最後のヘタレ劇場お得版！！！**

軽快な音楽　　ＳＥ

「ついに２０１０年も終わりだなメカ犬」

『そうだなマスター』

「今年の９月からこの作品の連載が始まったわけだけど、随分と色々な事をやったよな」

『うむ。最初は四話構成の話だった筈なのに、こんなにも長く連載してこれたのは、ひとえにこの作品を見てくれる読者の方々のおかげだな』

「ああ、そのおかげで作者がやる気を出してくれているんだもんな」

『そういう訳で、今回もこうやってワタシ達が話しているという事は、如何いう事なのか分かるかマスター』

「ふふん！舐めるなよメカ犬！今回は俺にもちゃんと事前に連絡が回ってきたんだからな！」

『むしろ今まで蚊帳の外だった事が、ワタシは不思議に思うのだが？』

「それを言うなあああああ！！！！」

『さて、マスターのトラウマを軽く抉った所で、話を進めようか』

「…お前はさり気無く酷い事を言うよな」

『復活が早いなマスター』

「流石に毎度の事だと、打たれ強くもなるさ…」

『それも如何かと思うぞ』

「俺の話よりも今回の話を先に進めようぜ」

『…マスターがそう言うのならばそうするか。それでは改めて、実は今回は特別編をお送りする事になっているのだ』

「そう！今回は年末最後の特別企画！連続短編集を皆にプレゼントするぞ！」

「『それでは今年最後の特別編！は～じま～るよ～♪』」

軽快な音楽　ＳＥ

○海鳴お笑いコンテスト

「楽しみだね純君」

俺の右隣に座っているなのはちゃんが、少し興奮気味に話しかけてくる。

「やっぱりお笑いは、関西人の嗜みやからな～」

更に俺の左隣からは、車椅子に座ったはやてちゃんが、なのはちゃん以上のテンションで言う。

「ちょっとうるさいわよ二人とも！」

そして俺の真後ろからは、二人を注意するアリサちゃんの声。

「ア、アリサちゃんの声も大きすぎるよ。それに皆も、もうすぐ始まるから少し落ち着こう？」

そしてアリサちゃんの真横、俺からすると、右斜め後ろからすずかちゃんの皆に注意を促す声が聞こえる。

俺はその光景を見ながら苦笑いを浮かべるばかりだ。

さて、現在俺達がいる場所は、海鳴市にある多目的ホールの席の一角である。（はやてちゃんは通路側に車椅子を止めているだけだが）

今日はここで海鳴市主催のお笑いコンテストが開催されるのである。

何でそんな所にいるのかと言うと、俺達の知り合いがこのイベントに出場するそうなので、応援に来たというしだいなのだ。

やがて多目的ホールに大きなブザー音が鳴り響く。

すると、今まで降りていたステージの幕が上がり、司会者が進行を始める。

この大会は、もう十年以上続く大会で、参加する人は全て素人に限定されているものの、中々にレベルが高い。

大会も順調に進み、そしてついに俺の知り合いの出番がやってきた。

その知り合いとは……

「さあ！お次の参加者は、コンビでの登場だ！」

司会者の声が会場内に木霊する。

「コンビ名！【人口天然ドッグズ】どうぞ！！！」

司会者の紹介で出てきた瞬間。

先程まであんなにも盛り上がっていた会場が静寂に包まれる。

はっきり言おう。

気持ちは痛いほどに良く分かる！！！

出て来たのは、全身がフルメタルシルバーな犬であり、我が板橋家

の家族で俺の相棒のメカ犬。

それだけでも、驚きなのだが、今回メカ犬はコンビで参加している。

そう…

つまり奴ともう一人、相方がいるという事なのだ。

メカ犬の次に出て来たのは、血統書付の人気ペット…チワワであった。

俺はそのチワワの正体にすぐに気付いた

如何見てもあいつは海鳴市で情報屋をしているジャックである。

念の為言っておくが、俺はメカ犬が出場する事は事前に知っていたが、まさか相方がいて、しかもそれがジャックだったとは全く知らなかった。

参加登録は母さんがしていたのだが、俺も目を通しておくべきだったと、今更に後悔する。

「…え、え～それでは早速始めて頂きましょう！」

いち早く復活した司会者のお兄さんが、場を繕う。

その姿はまさにプロの鏡である。

未だ放心状態が慢性的に会場中を支配する空気の中で、司会者の合図のもと、メカ犬とジャックによる人口天然ドッグズのネタは始ま

ってしまった。

『どうも皆さん。先程司会者の方からご紹介されました。人口天然ドッグズのメカ犬と、相方のジャックです』

「きゃんきゃん」

『さて、夏も終わり最近は秋も深まるこの頃ですが、皆さんは如何お過ごしですか?』

「きゃんきゃん」

『ん?ははははジャック。それは早計という物では無いか」

「きゃんきゃん」

『スマン、スマン。今のはワタシが悪かったな』

「きゃんきゃん」

『む!ジャックよ!確かにそれはそうだが、この場で言うのは如何かと思うぞ』

「きゃんきゃん」

『過激だな……』

「きゃんきゃん」

『それはマスターのおやつだろう』

「きゃんきゃん」

『もうお前とはやっとれんわ！』

「きゃん！」

『如何もありがとう御座いました』

「きゃんきゃん」

……意味が全く分からない。

会場に居る人達全てが、同じ事を考えている事だろう。

どんなにつまらないネタを見せられても、失笑の一つ位出るだろうに、今この会場は、完全な静寂に包まれている。

しかしこの静寂は破られる事となる。

それは俺の真後ろから、音源が会場に響いたからである。

「いける！このコンビは世界を狙えるわ！！！」

俺の真後ろで、何かを確信したアリサちゃんがそう言いながら、メカ犬達に拍手を送る。

会場にはアリサちゃんの声と拍手だけが虚しく「ブラボー！！！」

いや、前の方の席から、歓声が聞こえる。

その声の主には見覚えがあった。

「あれって、三丁目の犬おばさん…」

こうして人口天然ドッグズの初ネタは会場の熱気を根こそぎ奪いながらも、一部の熱狂的なファンを誕生させて、その初舞台を何とか無事に?終わらせた。

「…さ、さて次はどんな人が出てくるのでしょうか!?」

司会者のお兄さんが、この冷え切った会場にありながらも、無理やりテンションを上に持っていく。

本当にこの人のプロ根性には頭が下がる。

頑張れ司会のお兄さん!

俺も僅かばかりでも、力になれる様に、司会のお兄さんに拍手を送る。

「さあ、それでは続きまして、今度の出場者は名前からすると女性の様です。それでは【呟きの魔女チェイ姉さん】どうぞ!」

司会のお兄さんの紹介でステージに出てきた出場者は…

『は～い。呟きの魔女チェイ姉さんとはアタシの事よ♪』

全身黒いおっさんボイスのバイクだった。

あなたもですかチェイサーさん！？

こうして今年の海鳴お笑いコンテストは、混迷を極めた。

○怪力すずかちゃん

海鳴図書館で本を読む事にした俺とすずかちゃんは、それぞれに読みたい本を席に持ち寄る事にしたのだが、

「凄いよすずかちゃん！？」

俺は図書館に居るという事も忘れて、大声で言ってしまった。

だがそれを注意する者は誰も居ない。

その場に居た全員が、俺と同じ感想を抱き、口に出していたからである。

「そ、そうかな？」

すずかちゃんが何処か照れながら言う。

本人は至って普通にしている所が、余計に凄く見せている。

だってすずかちゃんは…

「いや、分厚い本を十段積んだ状態で小学生が平気そうにしてたら、それは凄い事だよ」

俺はこの時、間違ってもすずかちゃんを怒らせる事は極力避けようと誓った事は、当然の話である。

○メイドに囲まれた一日

「「「「お帰りなさいませご主人様」」」」

俺がバニングス邸での一週間に及ぶ執事修行を終えて、家に帰ると四人のメイドさんが、迎え入れてくれた訳なのだが…

「純。お茶を淹れてくれるかしら?」

「はいただいま!」

俺はアリサちゃんの指示に従い急ぎお茶を淹れる。

「あ、純君。私にもお願い出来るかな?」

「はい、喜んで！」

追加を注文する、すずかちゃんに俺は某焼肉屋の様な返事で対応する。

「純君。ちょっと移動したいから、車椅子押してくれへんかな」

「どこまで押せば良い？」

すぐさま車椅子を押しながら、俺ははやてちゃんに何処に行けば良いのか聞く。

「純君…ケーキを作ったんだけど、何だかキッチンが凄い事になっちゃって…お掃除手伝って貰えるかな？」

「……うん。良いよ」

キッチンに行くと、なのはちゃんが生クリーム塗れになったキッチンを背景に俺にお願いしてきた。

そしてその後も、

「ねえ」

「ちょっと」

「良いかな？」

「早く～」

俺は何故かメイド服を着たなのはちゃん達に、ご奉仕して貰う所か、逆にご奉仕してその日を終わらせる事と相成ったのである。

『ある意味らしいといえばらしいがな……』

メカ犬が一人隠れながら、そんな事を言うのを聞いた俺は、突っ込みを入れたかったが、そうする気力すら残されてはいなかった。

「メイドさんは、もう懲り懲りだ……」

○ヘタレ転生者は夢を見る？　オペレーション恭也

それは何時もの朝だった。

違う事といえばそれは……

「何で恭也さんが俺の部屋に居るんですか？」

誤解の無い様に言っておくが、俺は恭也君を実際に呼ぶときはさん付けで呼んでいるので、これで間違いじゃないんだぞ。

さて、それよりも今気にするのはそこじゃない。

「あの、何で深緑色のタンクトップに半ズボンで、右の手を広げながら、顔の半分を隠してるんですか？」

俺は気になっている事を聞いてみた。

しかし恭也君の答えは決まって、【お前を殺す】なのである。

日頃から割と言われ慣れている部分もあるので、今更な気はするが、やはり気になる。

すると恭也君が、空いている左手で俺に見えない死角から何かを取り出す。

また俺を木刀で追い回すのかなと考えていると、恭也君は俺の予想斜め上を行く代物を取り出してきた。

当然その時の台詞も【お前を殺す】である。

「それって！？」

俺は恭也君の取り出した物を見て驚愕した。

武器に変わり無いのだが、木刀の方が幾らかましだったと俺は思う。

恭也君が取り出した物は、小型拳銃だったのだ。

拳銃の銃口を俺に向けた恭也君は、躊躇無く引き金を引いた。

事前に回避する準備だけはしておいた俺は、引き金が引かれる瞬間に何とか射出される銃弾から回避して、部屋を出る事に成功した。

死に物狂いで家の廊下を走る俺の目の前に、

『如何したのだマスター？そんなに血相を変えて』

俺の目の前にメカ犬が現れた。

続く

○勘違いした外人ホルダーさん

「ジーザアアアアス！」

海鳴市の街中で断末魔が木霊する。

それも当然である。

『今日はやけに景気良く吹き飛んだわね』

「そうですねチェイサーさん」

何せ俺がチェイサーさんに頼んで、街に現れたホルダーにバイクタックルを食らわせたのだから……

「ヒドイネ！そこのヒーロー！」

ホルダーは意外と打たれ強い様で、勢い良く立ち上がると、俺に抗議を開始する。

ホルダーの台詞で分かってもらえると思うが、俺は今仮面ライダーの姿だ。

「チェイサーさん。もう一度お願いします』

『ＯＫ！』

俺の指示でチェイサーさんが再びホルダーに突っ込む。

「タンバリン！？」

抗議の声を上げる間も無く、ホルダーは二度目のバイクタックルを喰らい、吹き飛ぶ。

しかしホルダーも諦めず、再び立ち上がってくる。

俺はその様子を見ながら、三度お願いをする。

「もう一度お『少しは話を聞いてやったらどうだマスター』

三度目のお願いをしようとした所で、俺の言葉をメカ犬が遮る。

「ちっ」

「イマ、シタウチしましたよね！？ヒーローなのに！？」

俺の舌打ちが聞こえた様で、再び抗議の声を上げるホルダー。

『今日のマスターは頗る不機嫌だな……』

俺とホルダーのやり取りを見ながら、メカ犬が呟く。

そう。

今俺は凄くイライラしている。

実は今日俺は、翠屋でアルバイトをしていたのだが、その理由が俺を不機嫌にさせているのだ。

夏休みが終わってから、俺が翠屋で働く頻度は随分と減ったのだが、それでも稀に手伝いに行く事がある。

そして今日翠屋を手伝いに行く事になった理由なのだが……

恭也君がデートなのだそうだ。

その為俺にバイトのピンチヒッターを依頼してきたのである。

それ自体は別に構わない。

俺だって鬼ではないのだから、知らない仲でない相手に彼女とデートしたいから、シフト変更して、と頼まれれば、快く代わってあげるさ。

しかし恭也君は、その話題を当日に言って来たのである。

俺は今日は休日という事もある上に、珍しく誰とも予定が無かったので、久しぶりに己の趣味に没頭していた。

幾つかの趣味はあるが、折角一人で過ごすのだから、一人で出来る趣味をやる事に決めた。

そして俺がやる事を決めたのはジグソーパズルである。

前世の頃からも俺は、仮面ライダーの次にジグソーパズルが好きだった。

特に最近は時間が無くて、手を付けられなかったので、上機嫌で箱に入れたパズルを取り出そうとした時、玄関のチャイムが鳴った。

丁度家には俺しか居なかった為、誰だろうと思い、玄関の扉に向かい開けて見ると、恭也君が居たのである。

そして隣には見知らぬ女性。

何処と無くすずかちゃんに似ている気がした。

それもその筈である。

その女性の名前は月村忍（つきむらしのぶ）さん。

正真正銘すずかちゃんのお姉さんだったのだ。

俺と忍さんが、挨拶を交わすと、恭也君と忍さんが見事なまでのフットワークで俺の左右に回り込み、俺の脇の下に腕を通して持ち上げたのだ。

その光景は、多少の違いがあったものの、まるでこれから連行されて行く宇宙人を彷彿させるものだった。

結局俺はそのままの状態で翠屋へと連行されて、アルバイトする事になってしまったのである。

其処にホルダー反応というダブルパンチ…正直たまったものじゃない。

俺は士郎さんに適当な理由を言ってバイトを一時抜け出してこうして来たのだ。

これだけでもかなりイライラは溜まっていたのだが、それを爆発させたのが、今目の前に居るホルダーである。

まずこのホルダーの見た目なのだが、身体全体は臼に似ており、胸には鏡餅、そして頭には門松と無駄に縁起物だらけなのだ。

その上このホルダーが、何をやっていたのかと言うと……

遊んでいたのである。

ホルダーが一人で凧揚げをしながら、遊んでいたのだ。

その光景を見た瞬間、俺の中に積もり積もった鬱憤が爆発し、先程の流れに至ったのである。

人が大変な時に、呼び出されたというのに、目の前でその原因が遊んでいれば、人として怒るのは当然の事だろう?

だが、この怒りをこれ以上ホルダーを轢く事で解消させるのは、確かに周りの教育上にも宜しく無さそうなので、仕方なく話を聞いてみる事にした。

「……で、何でこんな事をしていたんですか？」

「オウ！やっとハナシをキクきになったネ！」

ホルダーは俺が話し掛けてきた事が、余程嬉しかったらしく、こ踊りし始める。

もう一度位なら轢いても構わないかな？

「そ、それであなたは何がしたかったんですか？」

俺はストレスで胃潰瘍になる事も、覚悟の上で衝動を抑えながら、話を先に進める事にした。

「オットそうデシタ。ワタシじつハ、にほんのオショウガツダイスキなので、オショウガツをたのしみにヤッテキマシタ」

俺はその言葉を聴いて、一言だけ返す。

「あの、お正月は一月で、今の日本は9月です」

その言葉を聴いたホルダーは、

「オーマイゴッド！？」

本場のオーバーリアクションで驚いてくれた。

……如何しようこの人。

続く

○はやての誘惑

「なあ純君。一緒にお風呂に入らへん？」

俺の家に遊びに来たはやてちゃんが、いきなり俺に聞いてきた。

「良いよ」

はやてちゃんのお願いに俺は二つ返事で返す。

「え！？」

幾ら秋と言っても、まだまだ残暑が厳しいしな。

はやてちゃんの家なら、足が不自由でも一人で入れる設備があるけど、俺の家では、そんなもの無いから、一人じゃ無理そうだしね。

「それじゃ早速行こうか」

俺はさっさっと終わらせてしまおうと、車椅子を押して脱衣場へと向かう。

「へ？ちょ？ほんまに！？」

●約３０分後●

「あ、洗われてもうた…隅々まで……」

お風呂から上がったはやてちゃんは、何か力尽きていた。

「大丈夫？」

俺は心配になって、はやてちゃんに話しかける。

「な、なあ純君」

「何？」

「純君って…その…お、女の子とお風呂入るのとか、気にしないん？」

「いや？昔からなのはちゃんとは良く入ってるし、最近は入ってな

いけど、今でもせがまれるしね」

むしろはやてちゃんにそんな羞恥心があるのかと俺は質問したくなる。

「あ、あかん。作戦失敗や……」

「は？」

はやてちゃんは謎の言葉を残し、そのまま完全に力尽きた。

○ヘタレ転生者は夢を見る？　オペレーション恭也？

俺はメカ犬に事情を話し、恐る恐る部屋に戻ってみた。

『誰も居ないではないか？』

先程まで銃を構えていた筈の、恭也君の姿は何処にも無かった。

「いや、そんな筈は無いんだけど……」

『夢でも見ていたのではないか？』

「そうなのかな……」

言われてみれば、確かに俺はあの時、寝起きだったし、メカ犬の言うとおりなのかも知れない。

『それではマスター。ワタシはこれから用事があるのでこれで失礼するぞ』

「ああ、悪いな。忙しい所に」

『気にする事は無い』

メカ犬はそう言って去って行った。

「俺も学校に行く準備するか……」

●時間は流れ学校の昼休み●

何時もの様になのはちゃんを迎えに高町家に行ったのだが、恭也君は学校の日直なのだそうで、会えなかった。

現実で恭也君を確認できれば、あれは俺が寝ぼけて見た幻だったと確信する事が出来たのだが……

結局俺は、このモヤモヤ感を抱えたまま、現在小学校の屋上で、なのはちゃん達と昼食をとっていた。

「ぶっ！？」

俺は思わず噴出した。

だがそれも致し方ないだろう。

屋上には生徒達が、危なくない様に、フェンスが設けられているのだが、その外側に恭也君が佇んでいたのである。

やはり、深緑色のタンクトップに半ズボンで、何故か右手で顔の半分を隠して。

続く

○アリサのモノマネショー

『頼むよアリサちゃん！」

俺はアリサちゃんに頭を下げて、懇願した。

「別にそれ位なら良いけど、これに何か意味があるの？」

アリサちゃんは一枚のプリントを読みながら、俺に聞いてくる。

今アリサちゃんが読んでいるプリントは俺が準備した物であり、俺が頼んだ事とはそのプリントに書かれている内容を声に出して、読んでほしいというものだった。

「ありがとうアリサちゃん！」

俺は改めて御礼を言う。

「……何なのよ一体？」

「さ！それじゃあ、読者の皆さんもお待ちかねだから、頼むねアリサちゃん！」

「へ？何よ読者さんって！？」

「まあまあ、良いから早く！」

「ち、ちょっと純！？」

「それではアリサちゃんの、年末モノマネショーの始まりです！！！」

●アリサオンステージ●

「この馬鹿犬！！！」

「うるさいうるさいうるさい！！！」

「くぎゅう」

「卵かけご飯が食べたいアル」

「はやてぇ～！」

……

「も、もうこれくらいで良いでしょ？」

「うん。ありがとう！」

本当は他にも色々とやって貰いたかったけど、時間的にもページ的にも、しょうがないからね。

「それでは以上！アリサちゃんの反則ギリギリモノマネショーでした！！！」

「さっきから純は何処に向かって喋ってるのよ！？」

○ヘタレ転生者は夢を見る？　オペレーション恭也？

「一体全体何なんだ今日は？」

朝に昼休みもそうなのだが、ふと気づけば、俺の視界に深緑色のタンクトップに半ズボン姿の恭也君が、何故か右手を広げて、顔の半

分を隠した状態で映りこんでくるのである。

その度に銃口を向けられる俺としては、何時も以上に生きた心地がしない。

原因を究明したいとは思うが、今日は兎に角疲れたので、今の俺にそんな気力は残っていない。

「今日はさっさと寝よう」

俺は入念に戸締りを確認してから、布団に入り電気を消した。

……どれ位の時間を眠っていたのだろうか。

目蓋を閉じた状態ではあるが、光を感じない事からしてまだ夜なのは間違い無さそうである。

「喉が渇いたな……」

俺はそう呟きながら、重い目蓋を開けると其処には……

【お前を殺す】

深緑色のタンクトップに半ズボン姿で、何故か右手で顔の半分を覆い隠していた恭也君が俺の眉間に銃口を突き付けながら添い寝をしていた。

あまりにも唐突な出来事に、俺が悲鳴すら上げる事が出来ずにいる中で、恭也君が銃の引き金を絞る。

そしてついに……

「はっ！？」

気が付くと俺は、布団を跳ね除けて、寝起きであるにも関わらず、勢い良く立ち上がり辺りを警戒する。

「……いない？」

暫く見回すが、部屋の中には俺だけで、深緑色のタンクトップに半ズボン姿で、何故か右手で顔の半分を覆い隠していた恭也君等というふざけた存在は居なかった。

「夢だったのか……」

ようやく警戒を解き、額の汗を拭った俺の耳に、ある言葉が聞こえてきた。

【お前を殺す】

【シャクを返すでゴンス】

その声を聞き、俺の全身から滝の様に冷や汗が流れる。

嫌な予感しかしないが、俺は声の聞こえた方向に振り返った。

其処に居たのは、深緑色のタンクトップに半ズボン姿で、何故か右

手で顔の半分を覆い隠していた恭也君と頭に青い一本角を付けた士郎さんだった。

色々と言いたい事はあったが、最初に俺の口から零れ落ちた言葉はこんな物だ。

「増えた……」

悪夢はまだ終わらない……

完

○ヤンデレなのはちゃん

「あの、なのはちゃん」

「如何したの純君？」

俺は今最大級に気になる事をなのはちゃんに聞いてみた。

「何で俺縛られてるの？」

そう。

何故か俺は、全身簀巻き状態に縛られた状態で、薄暗い部屋に閉じ込められているのである。

俺の記憶が確かならば、先程まで自分の部屋で、ジグソーパズルをしていたのだが、気が付いたら薄暗い部屋でこんな状態で目の前には、なのはちゃんが仁王立ちしていた。

他に人も居なかったので、俺はなのはちゃんに如何いう事か、質問してみた訳だ。

「それは簡単な事だよ純君」

なのはちゃんが、唯一むき出しになっている俺の頭にに近づいて、優しく頬を撫でながら言う。

「今日の私は、ヤンデレだからだよ」

「はい？」

何か変な事を言うなのはちゃん。

「えっとね…」

なのはちゃんは、部屋の隅から大きな鍋を持ってくると、それを俺の目の前に置き、お玉でかき混ぜ始めた。

ちなみに鍋の中身は何も無い。

所謂空鍋である。

「どう？」

何がどうなのか分からないが、なのはちゃんが俺に意見を求めてくる。

「いや、如何と言われても……」

俺には何を言えば良いのか、全く分からない。

「…おかしいな？」

なのはちゃんは俺の反応に納得いかなかった様で、一旦空鍋を混ぜるのを止めると、一冊の本を取り出して読み始める。

どうも表紙から、その本は漫画の様だ。

「これで良い筈なんだけどな？」

「あの、なのはちゃん」

漫画を読みながら、首を捻るなのはちゃんに俺は声をかける。

「ん？如何したの純君」

「一つ聞きたいんだけどさ……何読んでるの？」

俺の質問になのはちゃんは、嬉々として答えた。

「この漫画ね。お姉ちゃんに借りたんだよ。最近の男の子はこの漫画に出てくるヤンデレな女の子が大好きだって聞いたんだけど、純君は嬉しかった？」

俺はその答えを聞いて、最近の疲れからか、最速の速さで、意識を手放す事にした。

後で美由希さんに何らかの報復をする事を心に誓って。

○勘違いした外人ホルダーさん　続

「何で俺はこんな事をしてるんだろ？」

「さあ！ショウブデスよヒーロー！！！」

俺とホルダーは凄まじい温度差の中で対峙している。

間に地面に広げられたカルタを挟んで。

この忙しい時に、ホルダーの奴があまりにもごねるので、一つだけ正月らしい遊びをする事になったのである。

「それじゃあ始めますよ」

偶然買い物帰りに通りかかったバニングス邸の新人メイドな瞳さん

に読み手を頼み、ここに世にも珍しい仮面ライダーと怪人のカルタ勝負の火蓋が切って下ろされた。

「犬も歩けば棒に当たる」

瞳さんが一枚目を読み上げる。

「モラッタネ！！！」

ホルダーが素早く反応して、読み上げた文章と同じカードに手を伸ばす。

俺はそれを見ながら、バックルのタッチノートを取り出し、全体図を表示させて、右腕をタッチして、再びバックルに差し込んだ。

『ポイントチャージ』

ベルトから発生した光が、右腕のラインを通り、右拳に集約される。

「ホワッツ！？」

その様子に気づいたホルダーが驚きの声を上げる。

「こいつで決めるぜ」

「なにをキメルキデスカ！？」

「何って、カードを取るに決まってるだろ」

俺はしれっと言い放つ。

「ナンダ。それならアンシンです」

その言葉に納得したのか、ホルダーの抗議が止む。

「ライダーパンチ」

「イマ！アキラカにフェニッシュてきなコトをイイましたヨネ！？」

「気のせいだって」

俺は言いながら拳を振り上げて、カルタのカード付近に居るホルダーに必殺の一撃を喰らわせる。

「な～んだそうか…ってソンナワケなっ」

ホルダーの言葉は最後まで言い終わる事無く、見事にライダーパンチを喰らい爆発した。

『今日のマスターは本当に不機嫌だな……』

その光景を見ていたメカ犬が何か言っているが、俺には何も聞こえない。

こうして俺は、この場で気絶しているくどい顔の外人さんを瞳さんに任せて、バイトに戻っていった。

## 年末福袋！短編集だよ！今年最後のヘタレ劇場お得版！！！（後書き）

それでは皆さん！良いお年を！！！

# ２０１１年　特別編への序章（前書き）

あけましておめでとう御座います。

作者のＧ－３Ｘです。

新年最初の更新になりますが、何時もと大分感じが違う事になっている上に、短めなので、少し不安だったりします。

そんなこんなで、今回も楽しんで頂けたら幸いです。

# ２０１１年　特別編への序章

「待て！！！」

青年が叫びを上げながら、駅の連絡通路と思われる場所を走る。

青年の年齢は恐らく、十代後半から二十代前半といったところであろう。

とても端正な顔をしており、今の様に血相を変えて、走ってなどいなければ、かなりの好感が持てるであろう事は間違いない。

しかし今それを青年に指摘したとしても、青年は走る事を止めはしない筈だ。

それというのも、

「待てと言われて待つ奴が居るかよ！！！」

青年が走る方向の前方から、青年に返事を返す声が聞こえる。

その声の主は人語を喋るものの、人間の姿をしていなかった。

一番近い形で表すとするのであれば、平均的な成人男性サイズの赤黒い蜘蛛である。

その蜘蛛の様な怪物が、人間同様に二足歩行で、青年から逃走を続けているのだ。

青年の走る目的は、この蜘蛛の怪物を追う事だったのである。

「そこまでだ！」

何時まで続くのか終わりの見えなかった、青年と怪物の逃走劇は新たな介入者の登場により、終焉を迎える。

その新たな介入者は、蜘蛛の怪物の進行方向に立ち塞がり、その退路を断つ。

新たな介入者も、人間の姿をしてはいなかった。

全体的に青系色の身体で、二本の短い角がある。

「良くやったぞ！テディ！！！」

後方から走る青年が、青い方の異形に声をかける。

テディというのは、如何やらこの新たな介入者の名前の様だ。

「くっそ……」

蜘蛛の怪物は、前方と後方を塞がれた事により、退路を断たれたと悟り苦々しく、声を出す。

破れかぶれとばかりに、後ろを振り向いた蜘蛛の怪物は、青年に向かい突っ込む。

しかし青年は慌てる事無く、冷静に蜘蛛の怪物の突撃を回避して、すれ違い様に、足を引っ掛けて転倒させる。

「ぐは！」

そのあまりにも見事な一連の動作に、蜘蛛の怪物は哀れにもバランスを崩して、床に頭から崩れ落ちる。

青年はその隙に、前方で退路を塞いでいたテディの隣に移動した。

「流石だな。幸太郎！」

テディは青年、幸太郎の先程の行動を見て、賞賛の声を浴びせる。

「話は後だ。行くぞ！」

幸太郎はそう言って、己の腰に一本のベルトを巻きつけた。

ベルトの中央には、Tのイニシャルを斜めに描いた様なマークが入っており、その脇には複数の小さなボタンが縦一列に並んでいる。

幸太郎はベルトを巻きつけると、右手に黒い手のひらサイズの定期入れの様な物を取り出す。

「変身」

その言葉と同時に、幸太郎は手に持った定期入れの様な物を、ベルトの中央にセタッチする。

『ストライクフォーム』

ベルトから機械的な音声が上がり、幸太郎の全身に張り付く様に、

鎧とも言えそうな藍色の何かが、付着していく。

更に電車のレールの様な装甲が、上半身を覆い、最後に頭部が赤く三角に尖ったサンバイザーの様な物が装着される。

青年の名前は、野上幸太郎（のがみこうたろう）。

そして彼の今の姿は電王。

正確には、仮面ライダーＮＥＷ電王である。

「テディ！」

ＮＥＷ電王に変身した幸太郎が、指を二回鳴らすと、隣に居たテディが軽く飛び上がり、藍色の銃剣に変形して、ＮＥＷ電王の右手に収まる。

テディは幸太郎と契約している、ターミナルで生まれた、人工の派遣イマジンなのだ。

「そこのはぐれイマジン！お前がターミナルの保管庫から盗み出した物を、返してもらうぞ！」

テディが変形した銃剣、マチェーテディを蜘蛛の怪物、スパイダーイマジンに向けて突きつけながら、ＮＥＷ電王は言い放つ。

「誰がそう言われて、はいそうですかと返すか！！！」

立ち上がったスパイダーイマジンは、ＮＥＷ電王に返答すると同時に、口から糸をＮＥＷ電王に向けて、射出する。

「ちっ！」

スパイダーイマジンが射出したその糸を、ＮＥＷ電王は紙一重で回避し、スパイダーイマジンに近づくべく、走り出す。

尚も連続で糸を射出するスパイダーイマジンだが、ＮＥＷ電王はその糸をマチェーテディの刀身で裁きながら接近していく。

「はあ！」

ある程度接近した所で、マチェーテディの銃口を、スパイダーイマジンに向けて、光弾を発射する。

光弾は見事にスパイダーイマジンに命中し、吹き飛ばす。

「今だ！」

ＮＥＷ電王は定期入れの様な物、ライダーパスを取り出し、変身したときの様に、ベルトの中央にセタッチする。

『フルチャージ』

ベルトから流れる音声と共に、右手に持つマチェーテディの刀身にエネルギーが蓄積されていく。

「はあああああ！！！」

大きく飛び上がったＮＥＷ電王は、気合の咆哮を上げながら、未だによろめく地上のスパイダーイマジンに向けて、必殺技であるカウ

ンタースラッシュを喰らわせる。

スパイダーイマジンは、抵抗する間も無く、ＮＥＷ電王が繰り出すマチェーテディの一撃で、一刀両断され爆発四散した。

爆発すると同時に、青い色をした鍵の様な物が空中に舞い上がる。

それを視界に捕らえたＮＥＷ電王が、落ちてくるそれを掴もうとしたその時である。

目の前に突如影が生まれ、ＮＥＷ電王とそれの間を遮ってしまう。

「何だ！？」

驚きの声を上げるＮＥＷ電王のすぐ近くに、突如生まれた影の正体が居た。

「封印の鍵……確かに頂いた」

全身を黒いローブで包んだ人物が、鍵を掴みながら言い放つ。

「そうはいくか！！！」

ＮＥＷ電王はすぐさま取り戻す為に行動を開始する。

今黒いローブで全身を包む謎の人物が掴んでいる、封印の鍵と言われている物こそが、ＮＥＷ電王がターミナルの駅長に取り返す様に、依頼されていた物なのだったのだ。

何が何でも取り戻そうと、走り出そうとした時、ＮＥＷ電王の至近

距離で爆発が起こる。

「ぐっ！？」

明らかにローブの人物とは別の場所からの攻撃で、一瞬怯むＮＥＷ電王。

爆煙を振り払い、ローブの人物が居た場所に辿り着くＮＥＷ電王だったが、その場所には既に誰も居なかった。

「……逃げられたか」

辺りを確認したＮＥＷ電王はそう呟きながら、腹部のベルトを外し、幸太郎の姿へと戻る。

それと同時に銃剣のマチェーテディから、通常のイマジン状態に戻るテディ。

「如何する？幸太郎」

テディがこれから如何するべきか意見を求める。

「取り敢えず、ターミナルに戻って報告するぞ」

幸太郎はテディにそう答えると、踵を返して、走ってきた道を戻り始めた。

「もしかしたら、この事件。爺ちゃん達の協力も必要かも知れない……」

ターミナルに戻る道中で、幸太郎はそう呟き零した。

この戦いは、ほんの序章にすぎなかった。

この事件により、二つの世界の、出会う筈の無かった仮面ライダー達が、邂逅を果たす事となる。

今……時間を超え、時空を超え、全てを超えた新たな戦いが始まろうとしていた……

## ２０１１年　特別編への序章（後書き）

電王コラボは次の更新以降で本格スタートです。

## ２０１１年特別企画　超・電王トリロジーアフター・エピソードシルバー　帰

どうも！

作者のＧ－３Ｘです。

今回は映画版とも本編とも違う形で、一話一話を少し短めにして、更新していく事にして見る事にしました。

それでは楽しんで頂ければ幸いです。

「ありがとうございましたー！」

背中に某黒猫のロゴが入ったジャケットを羽織った、宅急便のお兄さんが俺に元気に挨拶すると、我が家の玄関を出て、急ぎ足で去って行く。

「俺宛に荷物って何なんだろ？」

宅急便のお兄さんの仕事といえば、それは勿論宅配物を送り先から、送り宛てへと届ける事である。

先程まで家に居た宅急便のお兄さんも、当然の事ながら例に漏れる筈も無く、板橋家の誰かに宛てられた荷物を届けに来たわけだ。

そして俺の手の中には、板橋純宛てと書かれた用紙の張り付けられた、ティッシュ箱と同程度の大きさの白い箱がある。

取り敢えず送り主の名前を確認して見ると、そこには俺の良く知る人物の名前が記されていた。

「恵理さんから俺宛に荷物を？それにこの発送元って……」

俺は送り主というよりも、この荷物が何処から送られてきたのかという事に驚いた。

「何で国外からわざわざ荷物を送ってきたんだ？」

発送元には、達筆な英文でロサンゼルスと記載されている。
それ以上は俺には達筆過ぎて、読み取る事が出来なかった。
何はともあれ、中身が無性に気になるので、早速箱の中身を確認しようとした所で、俺のズボンのポケットから警報が鳴り響く。
『キンキュウケイホウキンキュウケイホウキンキュウケイホウ……』
その音を発しているのは、俺が普段から持ち歩いているタッチノートである。
タッチノートには、ホルダーが近くで出現した時に、それを感知出来る機能があるのだが、この警報こそがまさにそれなのだ。
『マスター多数のホルダー反応だ！』
家の奥から全身メタリックシルバーのフルメタルドッグ事、メカ犬がやって来た。
「多数？ホルダーが複数現れたのか！？」
メカ犬の発言に俺は驚きを隠す事が出来ない。
通常ホルダーは、その特性から同時に多くても二体以上が出現する事は殆ど無いのである。
過去に何度か例外的に出現した事はあるが、それでもやはり早々ある事では無いのだ。

『うむ。しかもこの反応は以前戦った模造品の反応に限りなく近いぞ』

「それってガルドが作ったシステムって事か！？」

ガルドとは、以前戦ったシルバーライト島の大臣で、暴走プログラムを独自に研究改良して、メカ犬が言う模造品を作り出した張本人である。

今はTさんの所属する組織に連行されて、悪さを働くなんて出来ない筈だし、シルバーライト島にあるという研究施設もTさんが後始末して、現在はその模造品の現物は何処にも無い筈なのだが……

『兎に角急ぐぞマスター！場所は海鳴博物館だ！！！』

考え込む俺をメカ犬が急かす。

「ああ！分かった！」

俺は急ぎメカ犬と共に、玄関を出るとポケットからタッチノートを取り出して、ボタンを押した。

『チェイサー』

俺達はやって来たチェイサーさんに乗り込み、急いで現場に急行した。

チェイサーさんが走り始めた後に気づいたのだが、俺は余程慌てていたらしく、恵理さんから送られてきた宅配物の箱を持ったまま、出て来てしまった様なのである。

家に戻しに行く時間は無かったので、俺は仕方なくその箱を現場に持って行く事に決めた。

海鳴博物館とは、海鳴の歴史等を展示している海鳴市の市営博物館である。

主に展示されている物は、江戸時代中期頃からの物が中心ではあるが、何故か恐竜の化石等も展示されているので、小さなお子様でも中々楽しめる場所だ。

しかし今、その海鳴博物館は、ホルダー達の襲撃を受けて悲惨な現状となっていた。

そのホルダー達の姿は、確かに以前戦った事のある、骸骨がモチーフとされている姿だった。

何故あのホルダー達が、再びこの海鳴で暴れているのかは分からないが、それを放っておく訳にもいかない。

俺達は博物館に到着し現状を確認すると、チェイサーさんの座席から飛び降り、暴れているホルダー達を止める為に変身しようとしたのだが、そこで更なる異常が発生する。

突如駅で流れる様な、電車の発車音と思われるメロディが、辺りに鳴り響いたのである。

しかしこの音楽……昔何処かで聞いた事がある様な、とても懐かしいとさえ思える気がするのは、気のせいだろうか？

『マスター！上空から巨大な質量反応を察知したぞ！！！』

メカ犬の声に反応して俺は空を見上げる。

その瞬間俺は、自らの目を疑う光景を目の当りにした。

上空に大きな光が発生したかと思うと、その中から次々と電車のレールが数珠繋ぎに出現して道を作って行く。

更にその後から、赤い三角の瞳の様な前面を持つ列車の様な物体が、そのレールの道を走って来たのだ。

俺はそれを良く知っている。

実物を見た事等、ある筈も無いが、前世の俺は、その列車を画面越しに何度と無く見ていた。

「まさか……デンライナーなのか？」

俺は思わず呟く。

デンライナーは、空中から地上すれすれを走り、博物館の前で数人の人物を外に出すと、再び空に舞い上がり、光の中に消えて行った。

デンライナーの中から出て来たのは、全部で六人。

俺はその六人も当然の事ながら、良く知っている。

その内の二人は、中学生程の、男の子と女の子が一人ずつ。

後の四人は成人男性程の体格ではあるが、明らかに人間では無い。

赤に青と黄色、そして黒に近い紫色の見た目だけを言えば怪人に見える、彼らが全員横一列に佇んでいた。

その人物達を、俺は決して忘れはしない。

俺は彼らに何度と無く、画面越しから、勇気を貰って来たのだから。

今でも俺は彼らの名前を、即答で答える事が出来る。

少年の名前は、野上良太郎。

少女の名前は、コハナ。

赤い怪人はモモタロス。

青い怪人はウラタロス。

黄色の怪人はキンタロス。

紫の怪人はリュウタロス。

彼らを見ながら俺は、もしかしてこれは夢なのかと思い、自らの頬をツネって見るのだが、確かな痛みを感じ、これが夢でない事を、俺に教えてくれる。

「俺達！」

横一列に並んだ六人の一人、モモタロスが叫ぶ。

すると残りの五人も両足を広げ、例のポーズの前準備をする。

「「「「「「参上！！！」」」」」」

最後に六人で叫ぶと両腕を広げて恒例のポーズを決めた。

「それじゃあ行くよ。モモタロス」

良太郎が自分の腰にベルトを巻きつけながら、黒い定期入れの様な物、ライダーパスを取り出して、モモタロスに告げる。

「おう！久々に暴れてやるぜ！！！」

モモタロスの返事に頷きながら良太郎は腰に巻いたベルト、電王ベルトの赤いボタンを押す。

『ソードフォーム』

凄く聞き覚えのある音声とメロディーが辺りに流れる。

「変身」

良太郎はお決まりのその言葉を言うと、ライダーパスをベルトにセタッチした。

それと同時にモモタロスが半透明に透けて、良太郎の身体の中に飛び込む様に消える。

『ソードフォーム』

再び音声が流れると、良太郎がプラットフォームと呼ばれる状態に変わり、更にそれの周りを回るかの様に、複数の装甲が出現して、上半身を覆っていき、最後に顔を先程のデンライナーの前面を模した様に見える仮面が、装着された。

その姿はまさに俺の知る憧れの仮面ライダーの一人。

仮面ライダー電王。

そのソードフォームである。

「俺、参上！」

モモタロスが主人格となるソードフォームに変身した電王は、自分自身を指差した後に両腕を広げてお馴染みの決めポーズを決めた。

「先輩。早くしないとあいつ等何処かに逃げちゃうよ」

ポーズを決めるソードフォームの電王に、ウラタロスが注意してくる。

「言われなくても分かってんだよ亀！」

電王はそう言うと、腰に取り付けてある四本の棒状の物体の内、二本を手に取り連結させてから、上空に放り投げる。

その間にもう二本を取り出して、落下してくる連結した物を挟み込む様に、連結させると、それは剣の姿に変わった。

それは、連結の仕方により、複数の形態になる、電王の専用武器デンガッシャー。

先程電王が連結させて完成した剣もその内の一つである。

「それじゃあ改めて、行くぜ行くぜ行くぜぇ！！！」

デンガッシャーを振り回しながら、博物館で暴れているホルダーに突撃する電王。

それに続き他の三人のイマジン達も後に続く様に走り出す。

「ちょっと君。ここは危ないから、早く逃げなさい」

俺が一連の動向を呆けながら見ていると、その姿を見付けたのであろう、コハナが俺に話しかけてくる。

「え、は、はあ……」

咄嗟に声を出す事が出来なかった俺は、思わず口篭ってしまう。
その様子を心配そうに見るコハナだったが、ここで事態は急変する。
電王達が戦っている中から抜け出してきたのか、一体のホルダーが、此方に向かってくる。

「危ない！」

俺はコハナを突き飛ばし、自らも転がる様にホルダーの突撃を回避した。

『マスター！良く現状は理解し難いが、ワタシ達も行くぞ！』

俺の隣にやって来たメカ犬が俺に告げる。
確かに今も多少混乱気味ではあるが、こんな状態では落ち着いて考える事も出来はしない。

「ああ！まずはこのホルダー達を如何にかするぞ！」

「君？一体何を……」

俺とメカ犬の様子を見たコハナが何かを言おうとしているが、今はそれどころではない。
ポケットからタッチノートを取り出した俺は、開いてボタンを押す。

『バックルモード』

音声が流れると同時に、隣に居たメカ犬が銀色のベルトに変形して、俺の腹部に自動的に巻きつく。

「変身」

音声キーワードを入力し、俺はタッチノートを素早く、バックルの溝に差し込んだ。

『アップロード』

音声が流れ白銀の光が俺の全身を包み込んで、その姿を変質させていく。

光が飛散しそこに現れたのは、一人の戦士である。

メタルブラックのボディーを基調に、銀のラインにV字の角飾りに赤く大きな複眼が特徴的なその姿は、まさに仮面ライダーと言える風体であろう。

「その姿って……」

俺の変身を見たコハナが、驚愕する。

しかし俺がそれに答える前に、再びホルダーが襲い掛かってきた。

「はあ！」

咄嗟に俺は、ホルダーの攻撃を避けて、電王達が戦っている方向に、蹴りを喰らわせて吹き飛ばす。

「話は後で！」

俺はコハナにそれだけを告げて、吹き飛ばしたホルダーを追撃する為に、走りだした。

俺が到着すると、十体以上のホルダーが電王達と熾烈な戦いを繰り広げていた。

「ん、何やあいつは？」

「あ～！何か黒いのが来たあ！」

「何なんだろうね本当に……」

「ああ？何だありゃ！？」

シードに変身した俺の姿を目撃したイマジン達の面々が、口々に言う。

取り敢えず俺は、近くに居たホルダーに攻撃を加えながら、全員に聞こえる様に言い放つ。

「自己紹介は後にしましょう！今はこいつ等を如何にかするのが先決です！」

その言葉を聴いた面々の内、ウラタロスが独り言の様に呟く。

「如何にも、敵って訳じゃないみたいだね」

その後も混戦状態が続くが、相手のホルダー達も大分と疲弊してき

た事が分かった。

「よっしゃあああ！！！久々に俺の必殺技を見せてやるぜ！」

電王はそう言うと、右手に持っていたデンガッシャーを左手に持ち替えて、ライダーパスをベルトにセタッチさせる。

『フルチャージ』

機械的な音声が流れると同時にライダーパスを投げ捨てると、再びデンガッシャーを右手に持ち換える。

するとデンガッシャーにエネルギーが蓄積されて行き、刃先の部分が分離して空中に舞い上がっていく。

『此方も終わらせるぞマスター！」

その様子を見ていたメカ犬が俺に告げる。

「ああ！」

俺はメカ犬の声に頷きながら、バックルに差し込まれたタッチノートを引き抜き、全体図を表示させて、四肢をタッチしてから、再びバックルにタッチノートを差し込む。

『ポイントチャージ』

『ポイントチャージ』

『ポイントチャージ』

『ポイントチャージ』

音声が流れる度に、俺の四肢に光が集約されていく。

「こいつで決めるぜ」

俺は目の前のホルダー達目掛けて、走り出す。

拳を振るい、蹴りを喰らわせ、何体ものホルダーに必殺の一撃を叩き込んでいった。

そして俺が走る方向に居た最後の一体にその拳を抉り込む。

「ライダーラッシュ」

その時とほぼ同時に、電王も必殺技を大勢のホルダーに喰らわせる。

「俺の必殺技パート2！」

空中に浮いたデンガッシャーの刃先が、電王の右手に持ったデンガッシャーの動きに合わせて、縦横無尽にホルダー達を捉えていく。

右に左にと薙ぎ払い、そして最後は天高く舞い上がると、電王が勢い良く振り被る動きに合わせて最後の一体に一撃を叩き込んだ。

俺と電王の必殺技を喰らったホルダー達は、一斉に爆発を引き起こした。

「へへ、決まったぜ」

その様子を見ながら、電王が鼻のある辺りに手を当てて、鼻の下を擦る様な仕草を見せる。

続いて俺は、多数のホルダーが爆発した地点を確認するが、そこには素体となった人は一人も居らず、変わりに砂漠にある様な、サラサラの砂が大量に落ちていた。

「一体何が起こってるって言うんだ……」

俺は大量の砂を見ながら、誰に言うでもなく、呟いた。

こうして二人の仮面ライダーは本来出会う筈の無い邂逅を果たした。

そしてその出会いが新たな物語を紡ぎ、一人の少女の運命を変える事になるとは、この時点では誰も知る由も無かった……

## ２０１１年特別企画　超・電王トリロジーアフター・エピソードシルバー　帰

本音を言えば、通常本編の分量だと、中途半端で、映画版風にすると、一話分の限界文字数が大変な事になりそうだったからなんです……

それでは次回の【理解編】でお会い致しましょう。

## ２０１１年特別企画　超・電王トリロジーアフター・エピソードシルバー　帰

続きの更新になります。

かなりオリジナルな設定が入ってきますが、笑って許して貰えると嬉しいです。

それでは楽しんで頂ければ幸いです。

時の狭間にターミナルが出来る以前……

時の狭間に迷い込んだ人々は、過去・現在・未来、全ての時間、全ての時空の英知を結集させ、一つの街を作り上げた。

その街の技術力を持ってすれば、望む全てが手に入る。

まさに理想、ユートピアと呼ぶに相応しい街だった。

しかしそれは、人が手にするには、あまりにも大きすぎる力だったのである。

その力が万が一にでも、悪用される事があれば、全ての時間、全ての世界に止まらず、全宇宙すらも巻き込む災いを招く事になるであろう。

その事態を恐れた時の狭間の賢人達は、その街を永久に封印する事を決定した。

時の狭間の奥深くに街を封印した後、賢人達はその封印が二度と破られぬ様に、封印する為に使用した道具を三つの鍵に変え、その内の二つは別の時空へ、残りの一つは時の狭間に取り残した。

この事態が何時頃起こったのか、それは誰にも分からない。

何故なら時の狭間は同時に過去であり、未来であり、現在であり、そしてそのどれかですら無いのだから……

「……そういう事情があったんですか」

「うん」

「そうなのよ」

事情を聞きながら言った俺の言葉に、頷き答える、良太郎君と、コハナさん。

「えっと……話が壮大過ぎて、事態が飲み込めないんですが、兎に角凄そうなお話ですね」

俺達の会話を聞いて、海鳴警察署に勤める新米刑事の、長谷川啓太（はせがわけいた）さんが呟く。

何で俺達の会話に突如、海鳴警察署に勤める刑事さんが混ざってくるのか、それには理由がある。

俺達が博物館での戦いを終わらせた後、落ち着ける場所で互いの事を話し合おうという話になり、連れて来られた場所がここ、海鳴警

察署の一室である。

その一室の扉の上に設置されているプレートにはこう記載されていた。

デンライナー署と……

前世の頃に観た映画のクライマックス刑事でも、似たような事をやってはいたが、この人達は何か警察に大きなコネでも持っているのだろうか？

最初にここを訪れたときに、デンライナーのオーナーさんと挨拶を交わした際に聞いてはみたのだが。

「本当に聞きたいのですか？」

と物凄い含みを入れた笑顔で言われ、俺は自身の言及を速やかに、無かった事にした。

世の中には知らなくて良い事というものもある。

これはまさにそういう部類のものだ。

まあ、そういった経緯があるので、この場に長谷川さんが居たとしても、何もおかしい事は無い。

寧ろ、漸く刑事になれたと思ったら、この様な超常現象対策委員会の様な部署に配属された事があまりに不憫に思う。

全面的に協力をする事を、受け入れた俺も人の事は言えないが、あ

んな話を聞いたら放っても置けない。

さて、話がずれてしまったので、本題に戻すが、俺は話を聞いてみて、様々な事に驚愕しっぱなしである。

なので、順を追って話して行こうと思う。

まず第一に聞いたのは、何故電王メンバーがここに居るのかだ。

始まりは、ターミナルで起こった一つの事件。

ターミナルで保管されていた封印の鍵と呼ばれる物が、侵入してきたはぐれイマジンに盗まれて、それを幸太郎君が追っていたそうなのだが、鍵を盗んだイマジンを倒した直後、何者かに横取りされたのだそうだ。

この報告を受けて、事態を重く見たターミナルは、デンライナーの皆にも協力を要請した。

封印の鍵の残りは二つ。

しかしその鍵は、其々に別の時代の異なる場所に封印されている。

本来ならば探しようも無い筈なのだが、それを探す方法が、今出来る手段で二つだけ残されていた。

一つは封印の鍵を使う事。

元々一つだった鍵は、他の鍵と共鳴を起こし、その在り処を探知出来るのだそうだ。

鍵を奪った謎の人物はその方法で、他の鍵の封印された場所に、行こうとしているらしい。

そしてもう一つの方法。

実はターミナルには、封印の鍵と共に、二枚の特別なチケットが保管されていたのである。

それは封印の鍵に辿り着く為のチケットだった。

時の賢人達は、様々な場合を考慮し、もしも悪意ある者に封印の鍵が渡った時、他の鍵を奪われない様にする為に、封印の鍵に辿り着く道しるべを残していた。

デンライナーはそのチケットの一枚を使い、ここにやって来たのだそうだ。

つまり封印の鍵は、俺が居るこの世界の、しかもすぐ近くにある可能性が極めて高い。

博物館が襲われたのも、近くで封印の鍵の反応を探知したからなのである。

しかし未だこの時代の何処かにある筈の、封印の鍵は発見出来ていない。

取り敢えずデンライナーの皆が、ここに居る理由は分かった。

だが、分からない事も多々ある。

封印の鍵の在り処は、勿論の事なのだが、それとは別に、博物館で暴れていたホルダー達だ。

しかも、倒した奴等からは、大量の砂……

俺の知らない所で、何かが起こっている事は、間違い無さそうである。

「お話は喉が渇くでしょうし、コーヒーをどうぞ」

俺が脳内でここまでの話をまとめていると、横からそんな声が聞こえてきて、目の前にかなり個性的なコーヒーを置かれた。

容器は普通なのだが、問題はその中身である。

何かピンクや青の原色系なフレーバーが、所狭しと散りばめられており、これを見ただけで、コーヒーと判断するのは、些か難しいであろう事は、容易に想像できる代物だった。

この様なコーヒーを持ってくる人物は、俺の知る限り一人しか居ない。

一瞬何処かのレースクイーンの衣装を着ているのではと、思える奇抜な格好のお姉さん。

その正体は、電王でもお馴染みな、デンライナーの食堂車両を預かる。

「ありがとうナオミさん」

良太郎君に先に言われてしまったが、あのナオミさんだ。

俺が視線をナオミさんに、そして更にその先に向けると、俺達よりも先にコーヒーを運んで貰っていたのか、イマジン達は既に、コーヒーを美味しそうに飲んでいた。

いや、正確には、飲んでいたのは、ウラさんとキンさんの二人で、後の二人はと言えば……

「何かピカピカしてるね。この犬さん」

メカ犬の頭を撫でながら、リュウ君がご機嫌な声を上げる。

「おい！鼻タレ小僧！！！その犬をぜってえええに、こっちに近づけるんじゃねえぞ！？」

逆に室内の隅で、怒鳴りながらも小刻みに恐怖に震えているモモさん。

先程から俺のこの呼び方なのだが、今日の前に居るこの人達は、俺が知るフィクションの登場人物では無く、現実に存在する本物だと認識したので、呼び捨ては失礼かと思い、勝手ながら俺なりの呼び方にしてみたのだ。

基本は君かさん付けなのだが、イマジン組みは、名前が微妙に長いので、頭の二文字を取った訳である。

モモタロスはモモさん。

ウラタロスはウラさん。

キンタロスはキンさん。

リュウタロスは他の三人に比べて、精神年齢が低そうなので、リュウ君と、君付けにしてみた。

『マスター』

署内の様子を見ていた俺に、未だにリュウ君に頭を撫で続けられているメカ犬が話し掛けてきた。

「如何した。メカ犬」

『この者達は結局の所何者なのだ？それに先程の博物館での戦闘は、何処かマスターの戦い方に近いものを感じたのだが……』

まあ、メカ犬の疑問も当然の事であろう。

前世の記憶で、この人達を知っている俺は良いが、何も知らない人達が見れば、未知との遭遇な訳だしな。

それを言ったらこの質問をしてきたメカ犬自身も、そのカテゴリーに入ると俺は思うがそれは野暮ってものだろう。

それと戦い方が近いと感じるのは当然の事だろう。

何せ俺が仮面ライダーとして戦う時の戦法は、多かれ少なかれ、俺が前世で画面越しに観ていたライダー達を参考にしているのだから。

その中には、勿論電王も入っている。

「兎に角この人達は味方だ。それは間違いないから心配するな」

何も知らない人に全てを説明するのは、かなり面倒なので、俺は取り敢えずメカ犬にそう言って、話を続ける事にした。

「それで何処まで話しましたっけ？」

イマジン達から視線を戻し、俺は良太郎君とコハナさんに意見を求める。

「えっと、確か封印の鍵が、きっとこの海鳴市の何処かにあるって話までだったかな」

良太郎君が思い出そうと、首を捻りながら答えてくれる。

「そうよ。チケットを使ってこの近くに来た訳だし、そんなに遠くにある事は無い筈だから、封印の鍵はきっとこの近くにあるわ」

俺と良太郎君の話にコハナさんも混ざって来た。

「はあ、そんな物なんですぶうううううう！？」

俺達の会話を聞きながら、ナオミさんの淹れたコーヒーを口に含んだ長谷川さんが思い切り噴出してしまう。

その様子に署内の中に居た全員が一斉に注目する。

「あ～あ、やっちゃったね」

やれやれという感じで、両肩を軽く上下させるウラさん。

「ガーゴー……」

自分のコーヒーを飲み終わった直後から、居眠りを始めていたキンさんは、一瞬だけ長谷川さんを見るが、またすぐに、夢の世界へと旅立って行った。

「あはははは！噴いた！噴いた！」

それを見てリュウ君は何故か大喜び。

「飲めねえなら飲むんじゃねえよ！」

それを見て怒鳴るモモさん。

メカ犬を警戒しつつ、部屋の隅で震えながらではあるが。

「す、すいま、せん……」

咽ながらも何とか謝罪の言葉を口にする長谷川さんだが、その様子を見るに、かなりのダメージがあったのだろう。

現在も喉に残る、コーヒーに悪戦苦闘している。

そう言えば、ＴＶシリーズでも、映画でもこのコーヒーは見た目だけでなく、その味も個性的だと言われてきたが、はたしてどの様な味なのだろうか？

俺は己の目の前に置かれているコーヒーを見詰め、おもむろにカップを持ち上げると、好奇心の赴くままに、自身の口へと、先程の長谷川さんの悲劇を巻き起こした物と同種の液体を飲んでみた。

俺がカップの中身の三分の一程を飲み終えて、カップを置くと、何故か先程までの騒動はなりを潜め、俺に多くの視線が注がれる。

「……大丈夫なの？」

この空気を最初に打開してくれたのは、俺の近くに居た良太郎君だった。

その隣ではコハナさんが、何度も首を縦に振っている。

「はい。とても個性的な味ですね」

良太郎君に短く返答を返し、ナオミさんにも簡単に感想を述べておく。

確かに個性的な味ではあるが、何も飲めないというほどでは無い。

それに俺は……

「お隣に住んでいる幼馴染のお姉さんが作る料理と比べれば、身体に影響が無い分、俺にとってはご馳走ですよ」

「「は？」」

「いえ、此方の話なんで、気にしないで下さい……」

つい本音が漏れてしまったので、俺は慌てて訂正した。

俺の様子に気遣ってか、良太郎君とコハナさんはこれ以上この話題を話す事は無かった。

「それで話を戻すんだけど、まずはこの街で聞き込みをしていきたいと思うのよ」

話題を変える為、という部分もあるが、何よりもこの話題は先程まで話していた本題なので、俺は黙ってコハナさんの話に、耳を傾ける。

「でも聞き込みって誰に如何いう風に聞き込みをするの？」

良太郎君がコハナさんの提案に疑問を唱える。

「それについては考えが幾つかあるわ。私達はチケットのお陰でここまでこれたけど、それ以上の情報は何も無い。ここまでは良いかしら？」

俺と良太郎君は黙って頷く。

「話はここからよ。私達にはこれ以上の鍵の探索は困難だけど、相手はそれが出来るわ。何故なら……」

コハナさんの話を聞いて、閃く。

「そっか！鍵の共鳴！！！」

俺は思わず声を上げる。

「そういう事よ」

「如何いう事？」

俺の反応に頷くコハナさんと、首を傾げる良太郎君。

「つまりこういう事だね。ハナさんの話を纏めると、僕達に出来ないなら、他の人達にやって貰えば良いって事だよ」

俺達の話を聞いていたウラさんが話を簡潔に纏める。

「そうよ。奴等は博物館に現れて、かなり派手に暴れていたから、色んな人に目撃されている筈。だから鍵の在り処じゃなくて、街で暴れている奴等の情報を集めるのよ。そうすれば、いずれ鍵の居場所に辿り着けるわ」

「なるほど……」

コハナさんの話の概要を聞いた良太郎君は、感心した様で、何度も頷く。

「ほら！モモタロスも触ってみなよ！可愛いからさ！」

これからの行動基準が見えた所で、俺の耳にリュウ君の声が聞こえてきた。

何かと思い、見てみると、メカ犬を抱き上げたリュウ君が、モモさんににじり寄っていた。

「ぎゃあああああ！？い、い、犬を俺に近づけるなあああああ！？」

メカ犬を突きつけられたモモさんは、今にも発狂しそうである。

『まあ、そう怖がらなくても良いではないか。赤い者よ。それに私は犬では無く、オモチャ会社の（以下略）』

この様な状況でもナチュラルトークを展開する、メカ犬に俺は最近敬意すら覚える様になってきた。

「ほ、本当か？」

メカ犬のトークにより、僅かながらに恐怖が薄れたのか、モモさんが尋ねてくる。

『うむ』

「だから触ってみなよ？」

その質問にメカ犬が頷き、リュウ君が再び、触るように勧める。

「そ、それなら少しだけ……」

モモさんは意を決したのか、恐る恐るメカ犬の頭に、己の手を近づけて行く。

『……わん』

メカ犬が一鳴き吠えた。

「ぎっやぁぁぁぁぁぁ！！！！！嘘つきいいいいいいいいいいいいいいいいい！？」

「あはははははははははははは！！！！！！引っかかった！！！！」

モモさんは今度こそ発狂し、リュウ君はそれを見て、大笑いする。

本当に何やってるんだろうか。

暫くして場が落ち着いた所で、俺達はコハナさんの提案を実行する事に決定し、早速行動に移す事にした。

「ちょっと待って下さい！」

デンライナー署を出ようとした所で、俺はある事を思い出し、叫び声を上げる。

その声に立ち止まる一同に俺は、一つのお願いをした。

「あの、サインを貰って良いですか？」

ライダーファンとして、本物の仮面ライダーに出会ったのだから、サインを頼むのはもはや義務であろう。

無事に全員のサインをGETして、俺達は今度こそ、聞き込み捜査を行う為に、デンライナー署を後にした。

## ２０１１年特別企画　超・電王トリロジーアフター・エピソードシルバー　帰ってきた電王

それでは次回の【捜査編】でお会いしましょう。

# ２０１１年特別企画　超・電王トリロジーアフター・エピソードシルバー　帰

まさかの連日投稿です。

それでは楽しんで頂けると幸いです。

電王メンバーの話を聞いて分かった事なのだが、如何やら彼らは時系列的に、俺が前世で観た映画、エピソードイエローの約三ヶ月後の世界から、やって来た様だ。

俺にとっては、その映画を観たのは何年も前の筈なのに、彼らにとっては、一年の半分にすら至らない。

改めて考えてみると、時間を超えるというのは、とても不思議なものである。

俺は少し哲学的な考えをしながら、海鳴市の住宅街の裏街道を歩いて行く。

「あの～、何処に向かってるんだい？」

俺の右横を歩く新米刑事の長谷川さんが聞いてきた。

そのすぐ後ろには、ゾウの着ぐるみと、ペンギンの着ぐるみがついて来る。

『今ワタシ達が向かっているのは、この街で一番の情報屋が居る場所だ』

長谷川さんの質問に、俺達の少し先を歩くメカ犬が、答えた。

現在俺達はデンライナー署を出て、聞き込み捜査を開始した所なのだ。

まず俺達は、捜査を効率的に進める為に、二手に分かれる事にした。
捜査をするだけならば、更に細かく分散させた方が良いかも知れないが、場合によっては突発的に戦う事になるかも知れない。
中には戦いに向かない人も混ざっているし、出来るだけ人数が居た方が安全だと考えて、捜査班を二つのチームに分ける事にしたのである。
最初に違う班になる事が決まったのは、俺と良太郎君だった。
俺と良太郎君はこのメンバーの中では、唯一の変身が可能な人材なので、戦闘になる時に備えて、分ける事にしたのだ。
すると自動的にメカ犬は俺と同じに、そしてモモさんとリュウ君に、コハナさんが、良太郎君と同じ班に、残りのウラさんとキンさん、最後に長谷川さんが、俺と同行する事に決定したのである。
そして今俺達の、後ろをついて来るのが、何を隠そうゾウがキンさんで、ペンギンがウラさんなのだ。
二人が何故着ぐるみを着ているのかというと、元の格好で外に出れば、騒ぎになるという事もあるが、これから街で暴れていたホルダー達の目撃情報を集めるのに、普段の格好したモモさん達を見た人達が、デンライナーのイマジンの皆とホルダー達を混合させて、意味の無い情報が発生するのを事前に防ぐ為でもある。
「街一番の情報屋ですか……」

メカ犬の言葉を聴いた長谷川さんは、そんな存在がこの街に居たのかと、何度も感心した素振(そぶり)を見せた。

『さあ、着いたぞ』

暫く歩いた後、立ち止まったメカ犬が俺達に宣言した。

辿り着いた場所は、俺の何度か着た事のある、裏路地の空き地。

周りを見渡す三人をよそに、メカ犬が情報屋である、奴の名を高らかに呼ぶ。

『出て来てくれジャック！』

するとメカ犬の呼び声に答える様に、路地の裏側から、一匹の獣がその姿を現した。

「きゃんきゃん」

舌を出し、短めの尻尾を振りながら、ジャックが一鳴きする。

「「「チワワ？」」」

ウラさんとキンさんに長谷川さんが、声を揃えて言う。

その気持ちは良く分かる。

俺も最初はそうだった。

誰がチワワを情報屋だと思うだろうか？

しかし現実は意外と何でもありな物かも知れないと、俺は最近思うようになって来た。

メカ犬との出会いに、始まり色々あったからな……

驚愕する三人と、思い出を振り返る俺を無視して、メカ犬によるジャックとの会話は、順調に進んで行った。

『ジャックの情報だと、この近くの筈なのだがな』

無事にジャックから情報を聞き出した俺達は、メカ犬の指示に従い、ホルダー達が目撃された地点に向かっていた。

「しっかし、この辺りにほんまに、鍵なんかあるんかいな？」

キンさんが顎に手を当てながら、疑問を口にする。

確かに今俺達が居るのは、商店街のど真ん中。

ホルダー達の姿は何処にも見えないし、この先には海鳴図書館位しか無い筈だ。

ジャックの話では、この近くで多くの動物達が目撃したそうなのだが、変な話である。

「もしかしたらこの近くの何処かに、潜伏してるかも知れないから、試しにあの子達に聞いてみようよ」

ウラさんがペンギンのフリッパー（ペンギンの羽の部分）を指し示した先には、俺の良く知る人物達。

通称仲良し美少女四人組が居た。

「なのはちゃん達！？」

俺がなのはちゃん達との、突然の邂逅に驚いていると、ウラさんが、俺の肩をフリッパーで軽く叩いてきた。

「それじゃあ僕が聞いてくるから、ちょっと身体を借りるよ」

あまりにも軽いノリで言われたので、つい良いよと返事をしてしまいそうになるが、とんでもない発言をしてくるウラさん。

「な！？ちょっとま」

俺が待ったの言葉を口にする前に、半透明になったウラさんが、ペンギンの着ぐるみから抜け出ると、俺の身体に吸い込まれる様に入り込んでくる。

「……中々良い感じだね。君の身体」

ウラさんが俺の意思を無視して、勝手に俺の口を動かして喋る。

『マスター！？』

その様子を見て、何事かと動転するメカ犬。

「またかいな……」

何処か諦めを含んだ溜息を漏らすキンさん。

「……」

ちなみに長谷川さんは先程の光景を見た直後に気絶している。

「所であの子達の名前は何なのかな？」

俺の口が勝手に動いてそんな言葉を吐く。

これは恐らく俺に聞いているのだろう。

こうなっては仕方ないので、俺はウラさんになのはちゃん達の名前を教える事にした。

今の俺に出来る事は、なるべく早く目的を達成して貰って、早急に身体から出て行ってもらう事を、願うばかりである。

「あ！純く…ん…だよね？」

俺の姿を見つけたなのはちゃんが、手を振りながら近づいてくるのだが、近くに来た所で、普段の俺と何処か違う事に気づいた様で、疑問系になってしまった。

「何か普段と雰囲気が違うね」

俺の様子を観察しながら、感想を述べるすずかちゃん。

「何でメガネなんてしてるのよ？」

アリサちゃんが続いて指摘してくる。

というか今の俺って、やっぱりメガネしてるんだ。

この分だと、髪にも青いメッシュが入っていたりするんだろうな。

「何やイメチェンか、純君。中々似合ってるやないか！」

ウラさんに憑かれてる状態の俺を、イメチェンと判断したはやてちゃんが、賞賛の言葉を俺に送ってくる。

「それにしても、皆可愛いね」

またしても俺の口が勝手に動き、ウラさんはなのはちゃんの手を優しく握りこむ。

「にゃあ！？」

突然のスキンシップにより、なのはちゃんが猫の様な声を上げる。

それを見ていた三人は鳩が豆鉄砲を喰らわされて、ロケット花火の追撃をお見舞いされた様な顔をしていた。

このまま放置すれば、何事かと、いずれ思考回路を復活させた皆に攻め立てられる事が、目に見えているだろうが、そこは百戦錬磨のウラさんである。

女性の扱いに関して、彼に抜け目は無い。

「勿論君達もだよ！」

到底俺には不可能であろう、女性限定キラースマイルとウインクを全員に発射した。

ちゃんとなのはちゃんにもやる所が、ウラさんの凄さを実感させる。

その一撃を受けたなのはちゃん達四人は、一斉に胸を押さえて、頬をこれでもかと赤く染めていく。

何故か俺の耳に四発の銃弾が発射される幻聴が聞こえたが、それはあながちただの幻聴では無い様な気がするのが、電王ワールドの恐ろしさだ。

「……酷い目に遭った」

なのはちゃん達から、何とか無事に情報を引き出し、別れた後、俺はやっとウラさんから解放され、両肩の力を脱力させながら、呟いた。

別れ際にウラさんが、勝手に決めたデートの約束を、如何したら良いのか、俺を無駄に悩ませるが、今はそれ所ではない。

重要なのは、なのはちゃん達から聞き出した情報だ。

四人の話では、如何も図書館の敷地内で妙な連中を目撃したという噂が流れていたらしい。

場所としてもジャックの言っていた場所に近い事から、その連中が博物館に居たホルダー達と同種の可能性は極めて高いのである。

俺達は気絶している長谷川さんを、キンさんのビンタで無理やり叩き起こすと、急いで図書館を目指した。

「純君！」

図書館に辿り着くと、一足先に良太郎君達の班が現場に到着していた。

「遅せえぞ！お前ら！！！」

俺達の到着にモモさんが怒鳴り声を上げる。

しかしコハナさんの背中の後ろから言っているあたり、やはりメカ犬を警戒している様だ。

「うっとうしいのよ馬鹿モモ！！！」

背中に纏わりつかれたのが、不快だったらしく、コハナさんの鋭い右ストレートが、モモさんの脇腹にクリーンヒットする。

「がっ！？それは…反則だって……」

見事なまでにその攻撃を受けたモモさんは、尚も文句を言いながら、地面に崩れ落ちた。

「如何やらここで当たりみたいやな」

「そうだね」

もはや彼等にとっては、何時も通りの流れなのか、何事も無かった様に話を進めて行く、電王メンバーの皆さん。

唯一リュウ君が、その辺に落ちていた小枝で、倒れたモモさんをつっついているのが、余計に哀愁を誘う。

俺も例に習い、ウラさん達の見ている先を確認すると、そこには博物館でも暴れていたホルダー達の姿があった。

「兎に角今は、奴等を止めよう」

良太郎君が電王ベルトを巻きつけながら、俺に言う。

「はい！」

俺は良太郎君に返事を返しながら、タッチノートを取り出すが、ここで事態は急転する。

突如周囲に、デンライナーの汽笛に近い音が流れてきたのだ。

俺にはその音に聞き覚えがあった。

まさかと思い、上を見上げると、そのまさかは俺の予想を飛び越え、現実のものとなってしまったのである。

『一体何だと言うのだ？』

メカ犬が呟く。

それ以外の人は、声すらも出ない。

ちなみに気絶から復活したばかりの長谷川さんは、その光景を見て、再び気絶してしまった。

俺は当然の事ながら、電王メンバーは一度直接戦っているのだから、誰もがその正体を知っていた。

だがそれを認識出来たとしても、何故それがこの場所にあるのか？

その答えが分からない。

「何でネガデンライナーがこんな場所に……」

デンライナーに良く似た時の列車。

かつて電王と激しい戦いを繰り広げた、奴が操っていた筈だが、俺の知る限りこのネガデンライナーはその時に、完全に消滅した筈である。

あまりにも突然な、予想外の登場に俺達が呆けていると、ネガデンライナーの側面が開き、一号車の砲門が顔を出す。

「皆逃げてえええええ！！！！！」

それを見たコハナさんが、逸早く皆に叫び注意を促した。

俺達はその言葉を聞き、急いでこの場から走って距離を稼ぐ中、無常にも砲門がその猛威を振るう。

背後から襲い来る爆風に煽られて、俺達は悲鳴を上げながら、吹き飛ぶ。

全身に痛みを覚えながらも、俺は何とか自分が五体満足な事を、確認してから、周囲を見回す。

全員吹き飛ばされて倒れてはいるものの、誰も砲撃に直撃した者は居なかった様だ。

気絶していた長谷川さんと、コハナさんの一撃で倒れていたモモさ

んも、キンさんが背負って逃げてくれていた様なので無事みたいである。

俺は全員の安否を簡単に確認した後、この状況を作り出した元凶をその視界に捉えるべく、前を見据えた。

「な！？」

目の前にはまるで隕石でも衝突したかのような大きなクレーター。

もしも今の直撃を喰らっていたとしたら、塵の一つも残らなかったのではないかと、俺の心を恐怖に染め上げる。

俺がクレーターを見て、戦々恐々としていると、またしても聞こえてくる先程とは違うメロディー。

空を見上げて俺の視界に映ったものは、デンライナーと同じく、俺が前世で何度も画面越しに見ていた時の列車。

緑と黒のカラーリングを基調としたゼロライナーが、俺達のすぐ近くに停車した。

そして自動式の扉が開かれると、そこから出て来たのは、一人の青年と、黒い神父服を着た様な姿のイマジン。

「……侑斗」

良太郎君がその青年の名前を呼ぶ。

そう。

ゼロライナーから出てきた青年の名前は、桜井侑斗。

仮面ライダーゼロノスに変身するのは、ライダーファンであれば、誰もが知る所であり、ＴＶシリーズでは様々な場面でのキーパーソンでもあったのは、あまりにも有名な話だ。

「大丈夫か～！野上～！」

侑斗さんの脇をすり抜けて走ってきたイマジンが倒れている良太郎君を抱き上げる。

「だ、大丈夫だから心配しないで……」

苦笑いを浮かべながら、何とか律儀に答えを返す良太郎君。

この心配性なイマジンの名前はデネブ。

元々は、今目の前に居る侑斗さんよりも更に未来の侑斗さんと契約したイマジンだったのだが、その契約内容により、過去に飛び、今の侑斗さんと共に戦う事を決めた心優しいイマジンである。

「ちっ遅かったか」

デネブさんに続いてゼロライナーを降りてきた侑斗さんが、正面を見据えながら、苦虫を噛み潰した様な顔をした。

「あれって！？」

俺も正面を見てみると、そこにはネガデンライナーが空けたクレー

ターの中から、黄色い鍵が浮かんで来ていたのだ。

この時俺は気づいてしまった。

先程の砲撃は別に俺達を狙ったものでは無かったのである。

最初から目的は、ただこの場所を掘り起こす事。

二つ目の封印の鍵は、この図書館の敷地内の地中深くに、封印されていたのだ。

どんどんと高度を増して、浮かんで行く封印の鍵。

その時、俺達の見るその先に鎮座する、ネガデンライナーの扉が開かれた。

中から出てきたのは全身を黒いフードで覆われた謎の人物。

その特徴から、幸太郎君からターミナルに保管されていた鍵を横取りして盗んで行ったという人物は、奴で間違い無いだろう。

奴は封印の鍵を悠々とその手に収める。

「残る鍵は後一つ……」

そんな呟きが聞こえた次の瞬間、奴を包んでいた黒いローブが風に流されて、俺達の視界に奴の全貌が晒される。

ネガデンライナーが現れた時点で、もしかしたらと頭の中で、予想はしていたが、如何やら俺の予想は当たってしまったらしい。

「……ネガタロス」

奴の姿を見て誰かがそう口にした。

その名が封印の鍵を手にする奴の正体。

かつて自分の悪の組織を結成しようとして、夢半ばに散っていったイマジンである。

**２０１１年特別企画　超・電王トリロジーアフター・エピソードシルバー　帰ってきた電王**

それでは次回の【追跡編】をお楽しみに！

# ２０１１年特別企画　超・電王トリロジーアフター・エピソードシルバー　帰

まさかまさかの、連続連日投稿になります。

それでは楽しんで頂けると幸いです。

「久しぶりだな。お前達」

ネガタロスは、ネガデンライナーから俺達を見下ろしながら、言葉を紡ぐ。

「やっぱりお前だったんだな……」

侑斗さんは、そう吐き捨てる様に言うと、上空にいるネガタロスを鋭い眼光で睨み付ける。

「ふん！貴様らに付き合っているほど、俺も暇では無いんでな。お前達はこいつ等とでも遊んでいろ」

そう言うとネガタロスは、封印の鍵を持つ手とは逆の手を出す。

「それは！？」

ネガタロスの手にはあるものが、大量に握られていた。

俺はそれを見た瞬間、驚愕の声を上げる。

黒いビー玉の様な物体。

『あれはやはり以前ガルドという輩が、所持していた模造品か！？』

俺の隣に居たメカ犬が叫ぶ。

メカ犬が言うのなら間違い無いのだろう。

あれは確かに、以前ガルドが作り出した暴走プログラムの模造品で間違い無さそうである。

ネガタロスはそれを思い切り握りこむと、己の身体全体の表面に砂が発生して行き、その砂が、模造品に吸収されていく。

そして全ての暴走プログラムの模造品を、地上に向けて投げ放つと、空中で激しい変化を起こし、模造品はホルダーに姿を変えて、次々と地上に舞い降りる。

「如何だ?今度の俺の部下達は?今回の部下は以前の奴等とは違い、俺の命令には忠実だぞ!」

俺は先程の一連の流れを見た事で、一つの確信を得た。

博物館で倒したホルダーが何故砂になったのか。

あくまで俺の予想だが、イマジンは本来不安定な存在だ。

そして確かな存在になりたいという思いに、あの模造品が反応して、ホルダー化するという形で、夢を叶えている。

詳しい原理は、科学者でも何でも無い俺には、理解できないが、あながち的外れな考えでは無いと思う。

「俺はこれで失礼させてもらうぞ。何せ最後の鍵を取りに行かないといけないんでな」

ネガタロスはそう言うと高笑いをしながら、ネガデンライナーに乗り込み、時の狭間へと消えて行った。

「早く追わなくちゃ！」

良太郎君が言うのと同時に、一体のホルダーが、良太郎君に襲い掛かってくる。

「危ねえ！」

それに逸早く気付いたモモさんが、コハナさんの一撃のダメージが既に抜け切ったのか、ギリギリの所でホルダーに横から蹴りを入れて吹き飛ばす。

「でも、こうも邪魔されちゃ、追いかけるどころじゃないね」

ウラさんがウラタロッドを振り回し、ホルダーに攻撃しながら、良太郎君に意見する。

「確かにそうやな」

その脇では、キンさんがホルダーに突っ張りを喰らわせながらウラさんに同意している。

「うりゃ！」

少し離れた位置では、リュウ君がリュウボルバーをホルダー達に乱射している。

「おい野上！お前等はネガタロスの後を追え！ここは俺が何とかす

る」

現状を見た侑斗さんが、一本のベルトを腹部に巻きつけながら叫ぶ。

「でもこの人数じゃ「それなら俺が助太刀するよ」え?」

良太郎君が侑斗さんに意見する声が、突如ゼロライナーの扉が開くと同時に、中から出てきた人物によって、遮られてしまう。

「えっと……誰?」

唐突にゼロライナー中から出てきた人物に、良太郎君は目を丸くする。

「その声はまさか!?」

しかし俺にはその声に聞き覚えがあり、思わず凝視してしまう。

その人物の正体は……

「Tさん!?」

俺はその人物の名前というか、知っていた当時のコードネームを呼ぶ。

「やあ、板橋君。久しぶり。相変わらず事件に巻き込まれてるみたいだね」

久しぶりの再開だと言うのに、如何にも軽いノリで、俺に皮肉な挨拶をしてきたTさん。

その様子を見る限り、Tさんも相変わらずらしいが、今はそんな事を考えてる場合じゃない。

「何でTさんが、ゼロライナーに乗ってるんですか！？」

予想外にも程がある。

「実は危ない所を、彼に助けられてね」

Tさんはそう言って侑斗さんに親指を向ける。

簡単に話を纏めると、Tさんはシルバーライト島にある、ガルドの研究施設に残っていた、暴走プログラムの模造品を、組織にサンプルとして持ち帰ったらしいのだが、保管の最終手続きをしている際に、ネガデンライナーの強襲を受けたらしい。

突然の強襲による混乱に乗じて、模造品を奪われたが、駆けつけたゼロライナーのお陰で、何とか助かったのだそうだ。

Tさんは、そのまま去ろうとするゼロライナーを強引に止めて、侑斗さんに模造品の危険性を説明すると、専門家に協力を求めようという事で、ここに来た……というか！

良く生身一つで時の列車を止めたなと感心したり、専門家って間違い無く俺の事だろうと、突っ込み所があり過ぎる。

「まあ、そんな訳で、ここは俺達に任せて、板橋君達は、奴を追ってくれ」

一通り話した後、Tさんはそう言って、何時かの未来チックな銃を構えると、侑斗さんの近くに降り立つ。

「急げ野上！」

Tさんが近くに来ると同時に、侑斗さんが再び良太郎君を急かしながら、緑のラインが入った一枚のカードを取り出す。

腹部に巻きつけたベルトの上部分をスライドさせると、俺も前世で画面越しに良く聞いていたメロディーが流れ出した。

「変身」

侑斗さんはそう力強く言い、ベルトの横から、カードを挿入する。

『アルタイルフォーム』

音声が流れると同時に、侑斗さんの全身を黒と銀と緑を基調とした鎧を纏い、最後に電王と同じく顔に仮面が装着される。

その姿は俺が、前世で観ていた仮面ライダーゼロノス、まさにそのものだった。

「最初に言っておく」

侑斗さんはそう言って、腰に備え付けられている。ゼロガッシャーを連結させて、大剣サーベルモードに変形させると、それを大きく円運動させながら、言い放つ。

「俺はかーなーり強い！」

そしてサーベルを構えた状態で、Tさんと共に、ゼロノスはホルダーの大群に走り出す。

「急げ皆！」

デネブさんが、手の指から放つ銃弾で、威嚇射撃をしながら、俺達に早く行けと合図を送る。

俺達はこの場をTさん達に任せて、ネガタロスを追う為に、この場を後にした。

「ここがデンライナーの中か……」

俺はあまりの感動で、思わずそう言葉を漏らす。

今この時も、Tさん達が戦っているという事を考えれば、不謹慎だと自覚はしているのだが、仮面ライダーファンとして、本物のデンライナーに乗車したとなっては、感動しない訳が無い。

現在俺達は、図書館のホルダー達を、Tさん達に任せて、デンライナーで、ネガタロスの後を追っている。

良太郎君は、モモさんを憑けた状態で電王ソードフォームに変身して、今は専用バイクデンバードの格納庫も兼ねている操縦席で、運転を行っている最中だ。

ちなみに俺の専用バイクとも言える、オッサンボイスの新宿二丁目乙女系なチェイサーさんは、万が一という事も考えて、デンライナーの後部車両に乗せてもらっている。

それ以外の人は、俺も含めて、全員が食堂車両に、集合していた。

「あ！見えたわよ！」

暫く時の狭間を走らせると、ネガデンライナーを窓の外から、視認する事が出来た。

それを見つけて、コハナさんが、第一声を上げる。

相手も俺達が来た事に気付いたのだろう。

複数の車両のハッチが開き、攻撃態勢に入る。

そこから先は、激しい砲撃の撃ち合いだ。

当然の様に、横に縦に斜めに、おまけに一回転の宙返りと、縦横無尽に時の列車同士の戦いが繰り広げられる。

中に居る俺達も、バーテンのシェイカーに入れられたカクテルの材料の様に、何度もシェイクされて、電車酔い?を引き起こしそうになる。

途中気絶していた、長谷川さんが目を覚ますが、すぐに頭を座席に強打させて、再び気絶してしまった。

あの場所に置き去りにするのは、危ないと思って取り敢えず連れては来たけど、こっちもあまり変わらなかったかも知れない。

砲撃合戦は熾烈を極めた時、ずっと置物の様に、微動だにしなかったオーナーが、その重い口を開いた。

「如何やら……間も無く目的地に着く様ですね」

その言葉を聞き、窓の外に視線を移すと、確かに線路の先には光が見える。

恐らくは、あの光の先が、目的地という事なのだろう。

もうすぐ辿り着くのだと、確信を得た直後、激しい衝撃に見舞われる。

その直後何故か車両の中だというのに、食堂車両全体に突風が吹き荒れた。

突然の突風により、吹き飛ばされそうになる身体を、何とか座席に掴まって、支えながら風の吹き荒(すさ)ぶ方向を見ると、壁に大きな風穴が開いていた。

如何やら先程の大きな衝撃は、ネガデンライナーの攻撃が直撃した為の様だ。

この穴がその証拠であろう。

他の皆も突然の突風に己の身を守る為に、何処かしらに掴まっている……ただ一人を除いて。

気絶している長谷川さんは、全くの無防備状態のまま、穴の方に飛ばされて行く。

「不味い！？」

俺はそう叫ぶと、座席の掴む手を離して、長谷川さんの服の襟を辛うじて掴み、穴の端に足を引っ掛けて、何とか踏み止まる。

考え無しに、咄嗟に実行したが、上手く行って良かった。

今と同じアクションをもう一度やれと言われても、多分無理だろう。

まさに今のは、俺の本日一番のファインプレーである。

しかし問題はここからだ。

何とか掴めたが、所詮は子供の身体である俺には、大人の長谷川さんを引き上げるだけの力は無い。

「誰でも良いから引き上げてえええ！！！！」

俺は残る力を振り絞りながら、助けを求める為に、叫び声を上げる。

「今行くから待っとき！」

最初に俺の助けに答えてくれたのは、キンさんだった。

キンさんとウラさんは、その手に長いロープを掴んでいる。

「すぐ行くから待ってて！！！」

そのロープの先には、リュウ君が括りつけられていた。

「頼むよリュウタ」

「任せといてよ！」

ウラさんの頼みに、元気良く答えたリュウ君は、勢いをつけて、俺と長谷川さんの引っ掛かっている穴の横に、飛び込んでくる。

「早く掴まって！」

俺の真横まで来たリュウ君が、そう言って手を伸ばす。

「俺は後で良いんで、先に長谷川さんをお願いします！！！」

はっきり言って俺の握力は限界だ。

何時手を離してもおかしくない。

「うん！君もすぐに助けるから、もう少し頑張って！」

リュウ君はそう言ってから、長谷川さんを掴む。

俺はそれを確認してから一旦手を離す。

手を離した瞬間、両手の感覚を全く感じなかった事から、本当に後少し遅れていたら、危なかったのだと実感してしまう。

「カメちゃん！クマちゃん！一回引き上げて！」

「「せーの！！！」」

リュウ君の合図に合わせて、ウラさんとキンさんが、リュウ君達を引き上げる。

無事に引き上げられた長谷川さんは、ウラさんが掴んで、再び突風で吹き飛ばされない様にしていた。

その様子を見て俺は安心したのだが、それは甘かったと次の瞬間思い知る。

俺の足が引っ掛かっていた場所が壊れて、支えを失った俺は、そのまま突風に煽られて、デンライナーの外に吹き飛ばされる。

『マスター！！！！！』

メカ犬の叫びがまるでスローモーションの様に俺の耳に聞こえてくる。

「間に合え！！！」

咄嗟にリュウ君が飛び出して、俺に手を伸ばす。

それに答える様に、俺もリュウ君の手を掴もうと手を伸ばした。

互いの手が触れ合おうとした瞬間、俺の全身が光に包まれる。

目的地に辿り着いたのだろう。

しかしこの光により、俺とリュウ君の視界が遮られ、掴めた筈の手が、互いに宙を切る。

しまったと思った瞬間。

俺の意識は光に包まれると共に、自分自身が光になるかの様に、消えて行くのを感じた。



目蓋の上からでも、眩しいと思える光を感じた。

暖かく緩やかな風が、髪を撫でながら、少しずつ俺の意識を浮上さ

せていく。

俺は今まで何をしていたのだろうか？

未だぼやける思考を働かせながら、最後に意識を失った時の状況を、思い返す。

段々と思い出していく中で俺は……

「は！？」

その最後の瞬間を思い出した俺は、声を上げて、一気に己の意識を覚醒させた。

辺りを見回すと、白を基調としたシンプルな部屋に、微かに香る薬品の匂い。

そんな部屋の中で、俺はベッドの中に居た。

俺の想像が正しければ、ここは何処かの病院だろうか？

更に辺りを見渡すが、他に現状を確認出来そうな、情報は何も無かった。

如何やら個室の様なので、俺以外には誰も居ない。

このままこうしている訳にもいかないので、新たな情報を求めて、取り敢えずベッドから出ようとした所で、部屋の扉が開く。

「あ！目が覚めたんだ！」

部屋に入ってきたのは、一人の女の子だった。

ベッドから出ようとしている俺を見た女の子は、人懐っこい笑顔を浮かべながら、俺に近づいてくる。

見た目で言えば、今の俺の肉体と同じ年齢か、少し年下だろうか？

金髪に緑のリボンがとても似合っている。

「心配したんだよ。海岸にうち上げられてるのを、見た時は、死んでるかと思っちゃったんだから」

女の子はそう言いながら、ベッドの脇に、備え付けられている椅子に腰を下ろした。

「お医者さんが言うには、特に怪我も無いみたいだし、意識さえ戻れば大丈夫だろうって言ってたから、これで一安心だよ」

俺は突然部屋に入ってきた女の子のマシンガントークに、何も答えられずにいた。

しかしこの女の子の言う事を、照合すると、俺は何とか時の狭間の外まではやってくる事が出来たらしい。

多分その直後に海にでも投げ出されて、岸に流れ着いたのだろう。

これが場所によっては、とんでもない事になっていたかと思うと、背筋がゾッとする事この上ない。

そしてこの女の子は、そんな俺を初めに発見して、救急車を手配してくれたのだろう。

それだけでも、大助かりなのに、ここまで親身になって貰えるとは、この女の子の優しさが窺い知れる。

「ねえ、お兄ちゃん」

女の子が俺に向かって、言ってくる。

「お兄ちゃんって俺の事？」

「そうだよ。他に誰も居ないでしょ。お兄ちゃんは如何してあんな所で倒れてたの？それに……」

女の子は再びマシンガンの様に喋り出し、俺に幾つもの質問をぶつけて来る。

「ちょ、ちょっと待って！一度にそんな沢山答えられないから、質問は一つずつにしてよ！」

これは堪らないと、俺は女の子にストップをかける。

「あ！そうだね。それじゃあまずは……お兄ちゃんのお名前は？」

如何にか静止を聞き入れてくれた様で、女の子が最初の質問をしてくる。

これまでの経緯を全て話すのは、不味いかも知れないが、俺の名前ならば、取り敢えず問題無いだろう。

「俺の名前は板橋純。それで君の名前は？」

俺は自分の名前を言いながら、そう言えばこの女の子の名前を知らなかったなと気付き、逆に質問してみた。

「何か珍しい名前だね。それに私の名前って……」

女の子は俺の名前を聞きながら、そう言うと、考え込む表情を浮かべた後、何かに気付く様な表情に変わる。

「あ！そう言えば私の名前って、まだ教えて無かったね」

女の子はそう言うと、椅子から立ち上がり、優雅にクルッと一回りした後、軽くお辞儀をして俺に、可愛らしい笑顔を向けた。

「私の名前は、アリシア・テスタロッサだよ。よろしくね。純お兄ちゃん」

女の子、アリシアちゃんはそう言うと再びお辞儀をした。

## ２０１１年特別企画　超・電王トリロジーアフター・エピソードシルバー　帰ってきた電王

それでは次回の【異世界編】でお会いしましょう。

## ２０１１年特別企画　超・電王トリロジーアフター・エピソードシルバー　帰

またまたついでにまたの連続連日更新です。

そして今回は引き続き、オリジナル設定や独自の解釈が入ってきますが、やはり笑って許して頂けると嬉しいです。

それでは楽しんでいただければ幸いです。

「魔法！？」

俺はアリシアちゃんの話を聞いて、思わず驚愕の声を上げた。

お互いの自己紹介を済ませた後、病室にお医者さんがやって来て、意識が戻ったならすぐにでも退院して良いと言っていたので、俺はすぐに退院手続きに同意した。

治療費等は如何しようかと思ったのだが、お医者さんは、困惑する俺に対して次元漂流者から代金請求なんかしないよと、笑いながら言って、病院から出る俺達を見送ってくれた。

俺の事を見て、【次元漂流者】と呼んでいたが、一体如何いう意味なのだろうか？

お医者さんの言葉に疑問を覚えながら、アリシアちゃんと共に、病院を出た俺だが、この言葉は俺をこれから幾度も驚愕させる氷山の一角にしか過ぎなかった。

病院の外に出た俺の視界に飛び込んだ光景は、何処の未来都市だここは？というとんでも映像の連発だったのだ。

人が空を飛んでいらっしゃる……

しかも一人じゃない。

一人の男性が、上空を滑空し、その後ろを何かの制服であろうか、

同じ格好をした二人組みが追いかけている。

それ以外にも、街全体が、何処か未来チックで、ここが実は近未来を模した、アミューズメントパークなのではないかと、疑ってしまう程だ。

俺は隣で空を飛ぶ人達を見ながら、最近マナーの守れない人が多いわねと、のんきに言っているアリシアちゃんに説明を求めた。

それじゃあ落ち着ける場所で話をしようという事になり、近くにある公園のベンチで腰を落ち着けてから俺は、アリシアちゃんの説明を受けたのである。

冒頭の台詞は、この時の説明に驚愕した為だ。

「……という訳よ。分かった？純お兄ちゃん」

大体の説明を終えたアリシアちゃんが、最後に俺に今の話を理解出来たのか、確認を取る。

「はあ……」

何とか俺が言葉として発する事が出来たのは、そこまでが限界だった。

俺は頭の中で、アリシアちゃんが話してくれた内容を、何とか咀嚼して、理解しようと思い、初めから思い返してみる。

アリシアちゃんが言うには、この世界はミッドチルダというらしい。

科学的に、魔法という存在が確立された世界らしく、この世界では様々な分野で用いられているのだそうだ。

魔法というと、ゲーム等から連想してしまう俺は、何でも出来る万能な力に思えてしまうが、アリシアちゃんが言うには制約も多いらしい。

まず魔法を使うには、先天的な素質が必要で、身体の中にリンカーコアと呼ばれる魔法を使う為の器官が存在していないと、どんなに練習しても、魔法は使えない。

更にそのリンカーコアを持っている人の中でも、ランクが存在し、その中でも細かく分類される部分があって、個人の資質によって、同じ位の力を有したリンカーコアを持っていたとしても、出来る事が違ってくるらしいのだ。

たとえば、俺達が病院を出た矢先に目撃した空を飛んでいた男も、魔法を使って飛んでいたそうなのだが、これも個人の資質で、仮にその男の倍以上の力を持つリンカーコアがあったとしても、適性が無ければ、浮くだけでも困難なのだと、アリシアちゃんは言っている。

ちなみに街の中では、許可無く空を飛ぶのは違法で、先頭を飛んでいた男はこれを破った為に、俺の知っている所の警察の様な役割を持つ人達に追われていたのだそうだ。

更に言うならば、このリンカーコアを持つ人も、全体の割合から見れば、かなり少ないそうで、少しでも資質があるだけで、かなり珍しい部類に入るらしい。

そして資質を持つ殆どの人は、少ない資質しか持たず、自力で使えるのは、念話と呼ばれるテレパシーの様なものを使うのが限界らしいのだが（俺としてはそんな事が出来るだけでもかなり凄いと思う）、それを補助してくれる機械があるそうなのだ。

名称をデバイスと呼ばれているそれは、様々なタイプがあるらしい。

アリシアちゃん自身は、魔法を使う素質が無いそうなので、どれだけの種類があるのか、分からないそうなのだが、アリシアちゃんのお母さんが、かなりの凄腕らしく、今度聞いてくれると言っていた。

この世界では、魔法という物が、日常的に存在している事は理解した。

次に病院で、お医者さんが俺の事を、次元漂流者と呼んでいた件についてなのだが、如何やら言葉の意味そのままらしい。

アリシアちゃんの話を信じるのであれば、世界は無数に存在しており、この世界の人々は魔法の力と科学を結集させた乗り物で、別の世界を行き来する事が可能なのだそうだ。

何やら話を聞けば聞く程に、話が壮大なＳＦになってきたな……

話を続けるが、やはりその乗り物でも行ける世界には制限があるそうで、本当にどれだけの数の世界が存在しているのかは、分かっていないらしい。

行く事が出来る世界でも、文明レベルは様々で、下手に干渉が出来ない世界や、そもそも人類が存在していないという世界も少なくは無いのだそうだ。

その上、所謂怪獣の様な生物まで、存在するのだというのだから、もはや何でもありに思えてくる。

さてと……話を戻すのだが、多くの次元移動では、その乗り物によって移動するのが、一般的なのだが、例外も幾つかあるらしい。

一つは魔法だ。

数ある魔法の中で、移動魔法と言われる部類が存在していて、その素質と魔力量が天才的な人は、高性能なデバイスの補助を受ける事によって、次元世界ごと移動出来るらしい。

概念的な部分は理解しにくいが、移動する世界同士が近ければ、ある程度の高ランクの力を持っている人は、デバイスの補助により、如何にか移動する事も出来るそうなのだが、大抵は専用の装置を使って、擬似的に再現するのだそうだ。

移動する世界によっても、移動は困難になったりと、この部類の魔法は、個人での運用はかなり難しそうである。

そしてもう一つは、突発的な事故が多いとの事だ。

この辺りは、個人のケースによってかなり細かく分類されるそうなので、話半分にしか聞かなかったのだが、自然に発生した歪みに巻き込まれたり、何かの高エネルギーを扱う作業の近くに居たりと、次元を遮る壁は、俺達人類の考え及びもしない状況で、取り払われる場合があるらしいのだ。

そういった事情で、世界の壁を越えて、別の世界に迷い込んだ人々

を、このミッドチルダでは、次元漂流者と呼ぶらしい。

恐らく病院で俺を診てくれたお医者さんは、俺の反応等を見て、次元漂流者だと判断したのだろう。

確かに俺も、デンライナーに乗って、この場所に行き着いた訳だから、あながち間違いではないが、時間まで飛び越えてしまっている為に、今居る場所が、本当に異世界なのか、それとも気の遠くなる様な、未来の地球なのかすら判断しようが無いのである。

もしかしたらタッチノートの通信機能を使えば、メカ犬との連絡が取れるかも知れないと思い、試してみたのだが、一向に繋がる気配は無かった。

同時にチェイサーさんも呼び出してみたのだが、これも駄目だった。

チェイサーさんならば、たとえ別の次元に居ても、普通に出て来そうなイメージがあったので、期待していたのだが、世の中はそんなに甘くは無い。

今の所、俺だけが別の世界に迷い込んでしまったのか、ただ単にタッチノートで連絡が取れる範囲外にメカ犬達が居るだけなのか、判断しようにも、その判断材料が少なすぎるのだ。

だが、もしもこの世界に、最後の封印の鍵があるとするならば、必ずネガタロスが、何らかの騒ぎを引き起こす筈である。

その場所には、きっとメカ犬と良太郎君達が居る筈だ。

騒動が起こる事を望むのは、如何かと思うが、今はそれに賭けるし

か無さそうなので、しょうがないだろう。

「ねえ、純お兄ちゃん」

俺が頭の中で今後の方針を纏めていると、アリシアちゃんが話し掛けてきた。

「次元漂流者なら、帰る場所を探してくれる場所があるから、そこに行ってみる？」

心配そうな表情で、俺に助言をしてくれるアリシアちゃん。

恐らく考え込んでいる俺を見て、現状に不安を感じていると予想したのだろう。

「うん。それが一番良いのかも知れないけど、もしかしたら俺の仲間も、ここに来てる可能性があるんだ。だからせめて、この世界に居るかどうかだけでも、確認してからにしたいかな」

本来ならば、その場所に行って捜索も頼むのが、手っ取り早いのだろうが、デンライナーで来た彼らを、その人達が見つけられるとは到底思えない。

ならば何も制限の受けない今の状態で、ネガタロスが関係していそうな事件を追った方が、遭遇出来る確率は高い気がする。

アリシアちゃんが、行く事を進めてくれた場所に行くのは、自分自身では捜索は不可能だと判断した後の方が得策だろう。

「……そっか、それじゃあ純お兄ちゃんは、暫くミッドに居るんだ

ね？」

俺の言葉を聞いたアリシアちゃんが、再度確認する様に、聞いてくる。

何故かその顔は頗る笑顔だ。

「うん。まあ、そういう事になるかな」

「だったら私のお家に来なよ。探すって言っても、今の所は何の手がかりも無いんでしょ？」

俺の返事を聞いたアリシアちゃんは、これは名案だとばかりに、提案してきた。

「それは嬉しい話なんだけど、お家の人に迷惑じゃないかな？」

アリシアちゃんの提案は素直に嬉しいし、此方としても助かるのだが、早々世話になる訳にも行かないので、まずはその辺りを聞いてみる。

「大丈夫だよ。お家には私とお母さんとリニスしか居ないけど、お母さんは最近仕事が忙しくって、お家に帰って来ないし、リニスはとっても良い子だもん」

予想外の返答を返してくるアリシアちゃんだが、俺はこの時のアリシアちゃんの言葉に、一つだけ聞きなれない単語を聞き取った。

「アリシアちゃん。そのリニスって誰なの？」

アリシアちゃんのお母さんの話題は、何度か出たので、分かるのだが、このリニスというのは、一体何者なのだろうか？

「純お兄ちゃんがお家に来てくれたら、直接会わせてあげるよ！」

そう言ってベンチから飛び上がると、一目散に公園の出口に、走り出すアリシアちゃん。

これはもう追いかけるしか選択肢が無いと思うのは俺だけなのだろうか……

俺はしょうがないなと溜息混じりに言葉を吐きながら、重い腰を上げて、既に公園の出口付近にまで到達していたアリシアちゃんを追いかけて、走り出した。

「ただいま～」

鍵を外してから扉を開けたアリシアちゃんは、そう言って玄関先に進んで行った。

あの様な、未来チックな建物を見た後に、何故俺の世界にもある様な手動式の扉が使われているのか、不思議に思ったが、案外その答えは簡単に出た。

今でも大抵の家庭では、自動的なものではなく、手動式を用いるらしい。

コスト面等の問題も当然あるが、一番の問題は、停電等の電気トラブルが起きた際に、対応が出来なくなってしまうからなのだそうな……

言われてみれば、公共施設ならば、その際の対応も出来るかもしれないが、一般家庭の殆どは出入り口を幾つも設けて、更に様々なタイプにするというのは、あまり現実的では無い。

仮に出入り口が一つしかない状態で、停電が起こった時に、それが自動式ならば、完全に締め出しを喰らう事となる。

それだけならばまだ良いが、下手をすれば中に閉じ込められて、何時間後に開放されるのか、分かったものじゃない。

窓から脱出出来れば良いが、それすらも出来ない状況だったとしたら、目も当てられないだろう。

俺が扉の重要性と利便性について、熟考していると、アリシアちゃんが、後ろ手に何かを持って、俺の目の前にやって来た。

「えへへ。純お兄ちゃん。私の後ろに居るのは誰でしょうか？」

突如問題を出題してくるアリシアちゃん。

というか、その誰かと思われる長い尻尾が脇から飛び出て丸見えになっている。

「正解はこの子です！」

別に俺の答えは待っていなかった様で、アリシアちゃんは、間髪入れずに、俺に正解を見せてきた。

俺の前に差し出されたのは、猫である。

しかもただの猫じゃない。

種類によっても固体差というものがあるが、今俺の目の前に居る猫は、それを抜きにしても、従来の猫よりデカイのだ。

しかも別に太っているという訳ではない。

元々が大きい種類なのだろう。

ここは別世界の可能性が極めて高いので、違う可能性もあるが、俺が知る限りこの猫の種類は一つしか思い浮かばない。

「もしかして、山猫？」

俺はその猫の種類と思われる単語を口にしてみる。

「正解です！山猫のリニスだよ！よろしくね。純お兄ちゃん」

如何やら山猫で正解だったらしい。

アリシアちゃんは、リニスを持ったまま、何度も嬉しそうに飛び跳ねる。

されるがままになっているリニスだが、特に嫌がっている様子も無く、偶にアリシアちゃんの言葉に、合いの手をするかの様に鳴くだけだ。

かなりおおらかな猫なんだなと思い、暫く眺めていると、リニスの首元で何かが揺れているを見つけた。

リニスは首輪をしているのだが、大抵は鈴等をつける場所に、宝石の様な物が取り付けられているのだ。

それはエメラルド色の半透明で、球状な形をしており、中にははっきりと見えないが、何かが入ってる様に見える。

「ねえ、アリシアちゃん。リニスの首輪につけてある宝石みたいなのって何なのかな？」

何となくそれが気になった俺は、未だ喜びを身体全体で表現しているアリシアちゃんに聞いてみた。

「うん？これはね、お母さんがお仕事先で、お土産に貰ってきたんだよ。良く分からないけど、珍しい琥珀なんだって」

「へえ……」

俺はアリシアちゃんの説明を聞きながら、改めてその琥珀を観察し

てみる。

琥珀というのは、大昔の植物の樹液等が、硬質化していき、現代に残った物であるが、中には、当時の昆虫や、植物等を、取り込んだまま琥珀となり、考古学の研究でも重要視される事がある物だ。

良く見えないが、この琥珀の中にも何かがある様で、薄っすらとだが、棒状の何かが見える。

更に俺が観察を続けようとした時、何やら近くで、グ～という音が聞こえてきた。

「ねえ純お兄ちゃん……お腹空かない？」

その音の発生源と思われるアリシアちゃんが、照れながらそんな事を言ってきた。

そのあまりのタイミングと、華麗なまでに決まった例の音に、俺が笑ってしまった事は、致し方ないだろう。

暫く笑ってから、溜飲を下げた俺は、アリシアちゃんに文句を言われながらも、一緒に台所へと移動を開始する事にした。

## ２０１１年特別企画　超・電王トリロジーアフター・エピソードシルバー　帰ってきた電王

それでは次回の【家族編】でお会いしましょう。

## ２０１１年特別企画　超・電王トリロジーアフター・エピソードシルバー　帰

連日更新が出来るのは、恐らく今回までだと、思います。

次回以降はまた今週末あたりになると思いますので……

それでは楽しんで頂けると幸いです。

「お腹空いたよ～純お兄ちゃ～ん」

間延びした声を上げたアリシアちゃんが、続けてご飯まだ～？と俺に催促してくる。

「もうすぐ出来るから、もうちょっと待っててね」

俺は熱したフライパンに、溶き卵を入れながら、返事を返す。

この一連の会話で、殆どの人は気付いたかと思うが、現在俺はアリシアちゃんの家の台所を借りて、料理の真っ最中だ。

何故俺がアリシアちゃんの家で料理をしているのかというと、俺が普段のアリシアちゃんの食生活を知ってしまった事がそもそもの原因なのである。

アリシアちゃんの案内の元、台所にやって来た俺達だったのだが、最初はアリシアちゃんの母親がアリシアちゃんの昼食を作り置きしているのだと、思っていた。

しかしアリシアちゃんは、台所に辿り着くと、キッチンに行く様子も無く、近くの棚を開けて、何やら中を漁りだす。

「あった～！」

そう声を上げて、アリシアちゃんが棚の中から、取り出した物体を見て、俺は心底驚いた。

アリシアちゃんが、その手に掴んでいる物体は、如何見ても俺の世界で人気を博す人気お手軽保存食と同じ物だったのだ。

メーカーや、種類によって、呼び方等は変わるが、大抵の人はこう呼ぶだろう。

「異世界にもあるんだな……カップラーメン」

口に出すつもりは無かったのだが、無意識のうちに口からそんな言葉が零れ出てしまう。

アリシアちゃんの話では、お母さんが居る時は、ちゃんと料理を作ってくれるそうなのだが、最近は凄く忙しい仕事を任されているらしく、数日家に帰れなくなる時もあるそうなので、その間外食するには十分なお金を貰っているのだそうだ。

どんなワーカーホリックだと思う所もあるが、異世界の基準等、今の俺には理解出来ないし、アリシアちゃんも年齢にしては、怖すぎる程にしっかりしているので、大丈夫そうではあるが……

話を聞くと、アリシアちゃんは外食するのは、あまり気が進まないらしく、すぐに食べられるレトルトや、先程取り出したカップラーメン等で、殆どの食事を済ませているらしい。

はっきり言おう。

育ち盛りの子供が、こんな物ばかり食べていたら、将来は生活習慣病になること間違い無しである。

俺はアリシアちゃんに冷蔵庫の場所を聞くと、急いで冷蔵庫に向かい、中を確認した。

幸いにも中には、十分な食材が入っていたし、野菜類も見た所、痛んでは無さそうだ。

恐らくアリシアちゃんのお母さんが、買い足しておいたのだろう。

次に確認したのはキッチンだ。

もしかしたら俺の世界とは全く違う形なのではと、心配したのだが、我が家の物と差はあれど、俺にも扱えるタイプの物であった。

ここまでお膳立てが揃っていれば、俺のする事はただ一つである。

「俺が料理を作るから、待ってなさい！」

俺はカップラーメンを片手に此方を見ていたアリシアちゃんに、そう宣言した。

まるで合いの手をするかの様に、リニスが一鳴きするが、それは俺に対してのエールなのだと、勝手に解釈させてもらう事にした。

これが俺が料理をする事になった理由である。

アリシアちゃんの催促する声を聞きながら、調理を続けた結果。

漸く料理を完成させる事が出来た。

「出来たよ。アリシアちゃん」

俺は完成させた料理を皿に盛り付けて、アリシアちゃんの待つ食卓へと運んで行く。

「おお～」

テーブルに置いた皿の中身を見ながら、アリシアちゃんが、何やら感嘆の声を上げた後、俺に視線を移す。

「有り合わせで作ったんだけど、如何かな？」

俺が作った料理は、本当に簡単な物である。

冷蔵庫の野菜の幾つかを使った野菜炒めに、キノコの卵とじや、挽肉があったのでハンバーグを作ってみた。

何の肉かは俺も知らない。

主食にはフランスパンの様な物が置かれていたので、バターを溶かしたフライパンで焦げ目が着く位に熱して、調味料の一つとして用意されていたので、香草をまぶしてみた。

本当は本格的にサラダも作りたかったのだが、俺の良く知る野菜と酷似しているとはいえ、それが生で食べられるのか判断出来なかったので、熱を通した野菜炒めだけに、留めておいたのである。

調味料も、香草等分かりやすい物から、何に使うのか不明な物まで、色々だったので、味見をしながらの大冒険であった。

同じ人間なので、そんなに違いは無いと思うのだが、（カップラー

メンがあった程だし）俺はアリシアちゃんに確認をしてみる。

「凄い……凄いよ！純お兄ちゃん！！！」

俺を輝く瞳で見つめながら、アリシアちゃんが、早く食べようと言って、俺に早く席に座るよう促す。

あまりの勢いだったので、俺は残りの料理が乗った皿を、全て持ってきた後、急ぎ席に着く。

ちなみにリニスは、俺が料理をしている間に、アリシアちゃんが専用のペットフードを準備したみたいなので、既に悠々と食事にありついている。

生粋の日本人な俺としては、箸で食事をしたい所ではあるが、この家には箸が無い様なので、フォークで食べる事にした。

「いただきます」

俺は手を合わせて軽く一礼する。

「ねえ、純お兄ちゃん」

それでは食べようかと、フォークを謎肉なハンバーグに突き刺した所で、アリシアちゃんが話し掛けてきた。

「如何したの？」

「いただきますって何なの？」

不思議そうに質問してくるアリシアちゃん。

そういえば、妙に俺の居た世界と共通点が多かったり、何故か日本語で意思疎通が出来るので、意識から離れてしまうが、ここでは食事の時に、いただきますって言わないのか。

俺は改めて、食事をする時に何故、いただきますと言うのかを、俺が分かる範囲で説明してあげた。

普段からあまり意識して使ってる訳じゃないが、確か感謝を意味していたと何処かで聞きかじった気がする。

あまり要領を得ない説明ではあったが、アリシアちゃんは、俺の説明を聞くと、先程俺がやっていた真似をしてから、料理を食べ始めた。

個人的には悪くない味に仕上がったと、自負できるが、はたしてアリシアちゃんの口に合うのか、それだけが不安だったのだが、美味しいと言って食べてくれるのを見て、俺も改めてフォークに刺しっぱなしだった謎肉ハンバーグを口に放り込んだ。

そういえば最後にまともな食事をしたのは、家で摂った朝食が最後だった気がする。

その後は昼前に、恵理さんから、荷物が届いて中身を確認しようとしたら、ホルダー反応がして急いで現場に向かったのだ。

そこでいきなりデンライナーがやって来て、一緒に戦う事になって、警察署に行ったら、デンライナー署が設立されていて、確かそこで話し合いをしながら、ナオミさんのコーヒーを飲んだんだっけかな。

そう言えばあのコーヒーを最後に飲んでいた時までは、小腹が空いていた筈なのに、今はそんなに空腹感を感じては居ないんだよな。

俺がアリシアちゃんに発見されたのは、朝で病院に運ばれてからも、二時間程で目を覚ましたって聞いたから、今は少し遅めの昼食になる。

そう考えると、あのコーヒーを最後に飲んだ時を、最後にした食事とカウントしたとしても、結構な時間が経っている筈なのだが、あまり腹が減っていないというのは異常ではないのだろうか？

一番に考えられる原因は……あのコーヒーか？

考えても答えが出る筈も無いが、気になる物は気になる。

「純お兄ちゃん」

俺が如何でも良い様な事で悩んでいると、既に料理の半分以上を平らげたアリシアちゃんが、俺に笑顔で話し掛けてきた。

「何？」

「えへへ。何でも無いよ」

俺が返事をすると、アリシアちゃんは笑顔でそう答える。

「純お兄ちゃん！」

またしても俺に笑顔を浮かべながら、言ってくるアリシアちゃん。

「さっきから如何したの？それに何かご機嫌みたいだし」

このままでは無限ループに突入しそうなので、アリシアちゃんの真意を確かめる為に、俺は質問を返して見る。

「何だか嬉しいんだ……」

「え？」

「私ね、お母さんに妹が欲しいってお願いした事があるんだ」

アリシアちゃんは、笑顔ではあるが、何処か寂しそうに見える瞳を浮かべながら、語り始めた。

「最近のお母さんは、お仕事が忙しいみたいで、あんまり一緒に居られないし、普段はリニスが居てくれるけど、お喋りは出来ないからね」

そこまで言ったアリシアちゃんは、リニスにおいでと声をかける。

リニスはアリシアちゃんの言葉を理解したのか、足早にアリシアちゃんに近づくと、アリシアちゃんの膝上に飛び乗り、軽く一鳴きした。

「妹が出来たら、一杯可愛がってあげるんだ。大きくなったら一緒に遊んだり、お買い物に行ったり、お化粧したり、出来る事は全部……でもね」

そこまで言った後、アリシアちゃんは膝の上で寛ぐリニスに視線を

落とし、一撫でしてから、再び俺を真っ直ぐに見つめる。

「もしも私に、本当のお兄ちゃんが出来たのなら、純お兄ちゃんだったら良いなって思ったんだ」

アリシアちゃんの瞳からは、寂しさが消え、代わりに嬉しさの感情を宿した様な優しい雰囲気になった。

「アリシアちゃん……」

「ねえ、純お兄ちゃん。純お兄ちゃんのことを、本当のお兄ちゃんと思っても良いかな？」

その言葉に俺は心の中で、如何答えるべきか、考える。

アリシアちゃんには、助けてもらった恩があるし、何よりアリシアちゃん自身とても良い子だ。

俺がずっとここに居る事が出来るのであれば、二つ返事で答えてあげる事も出来るだろう。

しかし俺にはやらなければいけない目的があるし、帰るべき場所がある。

頷くのは簡単だが、俺は本当の肉親ではなく、今から遠くない未来に、別れなければいけないただの他人に過ぎないのだ。

「ごめんね」

俺が如何答えを切り出すべきか、迷っていたその時、アリシアちゃ

んが一言だけ、呟きを零す。

「さっき私が言った事は忘れて良いからね！純お兄ちゃんは、何処かに居るかもしれない、お友達を探さなくちゃならないんだもん！あ、そうだ！ご飯を食べ終わったら、一緒に街に出てみようよ！誰かを探すなら、近くの道位覚えてないと、純お兄ちゃんが迷子になっちゃうからね？」

先程までの事を無かった事にするかの様に、早口で喋ったアリシアちゃんは、出かける準備をしてくると言って、食卓から走り去ってしまった。

……俺はこの時、如何答えるべきだったのだろうか。

この場に取り残された山猫に尋ねてみても、一鳴きするだけで、答えを教えてはくれなかった。

「この先が、買い物モールになってて、他所からここに来た人は、大抵一度は通る筈だよ」

大きな通りに差し掛かった所で、アリシアちゃんが、俺に教えてくれた。

その隣では、アリシアちゃんに、合いの手をするかの様に、リニスが一鳴きする。

あれから暫くして、準備が出来たと、俺とリニスの前に出て来たアリシアちゃんは、もう何時も通りの明るい笑顔を見せる元気な、アリシアちゃんだった。

最初は心配したのだが、俺としても如何答えて良いのか、分からなかったので、先程の話題には触れない様に、振る舞い続ける事にした。

その後も順調にアリシアちゃんのガイドは進み、今日中に回れそうな施設を回り終えると、最後に帰り道を兼ねた住宅街を進む事に決定した。

だがここで、予想外の出来事が起きてしまう。

住宅街を歩く最中、突然リニスが走り去ってしまったのである。

「リニス！？」

それを見たアリシアちゃんが、慌てて追いかけるのだが、予想外の出来事はこれだけでは無かった。

『キンキュウケイホウキンキュウケイホウキンキュウケイ……』

「な！？」

現状では何の意味も成さずにいた筈の、タッチノートが、反応を示したのである。

急いで、タッチノートを取り出し、反応場所を確かめると、そこは俺が今居る場所の目と鼻の先だった。

「きゃあああああああ！？」

その直後聞こえてくる女の子の悲鳴。

聞こえた方向は、先程アリシアちゃんが、リニスを追って走り出した方角だった。

「まさか！？」

俺は急いで悲鳴の聞こえた先を目指して走り出す。

目的地に辿り着くには、数十秒とかからなかったが、そこには出来れば今は会いたくない奴等が居たのである。

「ちょっと！何なのよあなた達！？リニスを放しなさいよ！」

そこにいたのは、博物館や図書館にも現れたホルダー達だった。

数は全員で三人。

その内の一体が、リニスを捕まえている。

アリシアちゃんは、そのホルダーに対して、リニスを放せと訴え続けていた。

如何してこんな所にホルダーが、突如現れたのか、分からないが、今俺がすべき事は、何とかして奴等からリニスを助け出して、アリシアちゃんと共に、この場から逃がす事である。

俺は何か役に立ちそうな物は無いかと、辺りを見渡す。

「これだ！」

そして見つけたのは、鉄パイプの束である。

置いてあった近くの建物を見てみると、建設中の家があったので、恐らくは外周を囲む為に使う一部なのだろう。

人の物を勝手に拝借するのは、如何かと思うが、今は緊急事態なのだから、勘弁願いたい。

急いで束ねられていた鉄パイプの内の一本を引き抜くと、俺はその鉄パイプを棒高跳びの選手の様に構えて、ホルダー目掛けて走り出す。

「どいてアリシアちゃん！！！」

俺は走りながら、アリシアちゃんに注意を促し、俺とホルダーの間を、隔てる物が何も無い事を確認してから、鉄パイプの先端を地面に叩きつけ、自身も跳躍する。

そのまま鉄パイプを離した俺は、慣性の法則で得た力を込めた身体

で、リニスを掴んでいたホルダーに渾身の体当たりを叩き込む。

仮面ライダーに変身した時の力には、遠く及びもしないが、子供が行う不意打ちとしては、相当効いたのだろう。

ホルダーはリニスを離してしまい、後方に倒れこむ。

俺は考えるよりも早く、立ち上がる事だけを優先させて、立ち上がり様に叫ぶ。

「逃げろ！！！」

アリシアちゃんは、咄嗟だった俺の声を聞き入れてくれた様で、ホルダーから開放されたリニスを抱きかかえると、その場を走り去る。

出来れば俺もこのまま逃げたい所だが、それでは恐らくアリシアちゃんはホルダーに追いつかれてしまう。

「何処まで時間稼ぎが出来るかな……」

俺は先程使用した鉄パイプを拾い上げて、スピードフォルムの時にやる構えと同様のポーズでホルダー達を威圧する。

言っておくがこんなものは、ただの見せ掛けだ。

生身の状態の俺でも出来そうな事は、避けるだけで、まともな攻撃なんて、さっきの様な不意打ちでもしなければ、まともに喰らってはくれないだろう。

しかし対峙しているホルダー達は、先程の俺の不意打ちで、すっか

り臨戦態勢である。

そして互いの緊張感が最高潮に達した時、ついにホルダー達が動き出した。

鉄パイプを構えてハッタリを続けながら、如何しようと焦りまくり、ホルダーの拳が俺を捉えようとした瞬間。

「子供一人に、それは卑怯だろう？」

そんな声が聞こえた。

次に気付いた時には、目前まで迫って来ていた筈のホルダー達が吹き飛ばされており、俺とホルダーを遮るかのごとく、一人の戦士が佇んでいた。

全体的に藍色なボディーに、上半身を覆う列車のレールを模した装甲。

背中に背負った銃剣を引き抜きながら、赤いバイザーの様な顔を此方に向ける。

「君。大丈夫だった？」

俺に心配そうに声をかけてきた。

彼の名を俺は知っている。

良太郎君の実の孫であり、時の運行を守るために戦う。

その名は、仮面ライダーＮＥＷ電王。

まさに窮地に現れた、新たなヒーローである。

## ２０１１年特別企画　超・電王トリロジーアフター・エピソードシルバー　帰ってきた電王

それでは次回の【再会編】でお会い致しましょう。

## ２０１１年特別企画　超・電王トリロジーアフター・エピソードシルバー　帰

少しだけ早めに出来たので、続きの更新になります。

それでは楽しんで頂けると幸いです。

『フルチャージ』

ＮＥＷ電王がライダーパスを、ベルトの中央にセタッチさせると、ベルトから音声が流れ、エネルギーが右手の銃剣の刀身へと集まりだす。

「たあああああああ！！！」

そして一気に駆け出したＮＥＷ電王は、気合を込めた一閃のもと、三体のホルダーを必殺の一撃により、斬り伏せる。

三体のホルダーはその斬撃を喰らい、砂へと帰っていった。

「ふう～。これでもう大丈夫だよ」

相手を倒した事を確認し、安堵したＮＥＷ電王は、此方に振り向きながら、安心させる様な声色で話しかけてきた。

恐らくは俺の事を、ただ巻き込まれただけの、子供だと思っているのだろう。

ＮＥＷ電王は俺に、一言告げた後、そのまま立ち去ろうとするが、俺の立場としては、ここで彼等を黙って返す訳には行かない。

「あの、幸太郎さんとテディさんですよね？」

帰り際に発した俺の言葉により、背を向けて歩き出していたＮＥＷ

電王の動きが止まり、再び俺の方に振り向く。

「如何して俺達の名前を？」

普通に考えれば、本来居た筈の時間軸では無く、自分を知る者は居ない筈の状況で、己の名前を言い当てられれば、さぞかし驚く事だろう。

現に表情は確認できないが、俺に質問してきたその声質から、動揺している事が、窺い知れる。

「話は移動しながらにしましょう。もしかしたら俺の友達が狙われている可能性があるんです」

俺はそう言って、アリシアちゃんが逃げていった方向を、指差しながら移動を開始した。

出来ればゆっくりと事情を説明したい所ではあるが、先程のホルダー達は明らかにリニスを狙っていた。

その理由に何となくではあるが、俺は心当たりがある。

もしも俺の推測が、当たっているのだとしたら、一刻も早く、アリシアちゃん達と合流しなければならない。

それに加え、俺の世界でネガタロスが、率いていた模造品から作り出したホルダーの数を考えると、この近辺で活動していたホルダーがあれだけとは、到底思えない。

如何にも嫌な予感がするのだ。

俺は未だ動揺を見せる、ＮＥＷ電王に簡単に事情を説明しながら、アリシアちゃんが逃げていった方向を目指して走り出した。

夕方の住宅街を今、一人の仮面ライダーが走っている。

……俺を小脇に抱えながら。

まあ。効率を重視するのであれば、当然の結果であろう。

ただでさえ大人と子供の体格差がある上に、幸太郎さんの方は、現在進行形で、常人を遥かに超えた身体能力を持つ、仮面ライダーに変身中なのだ。

そんな相手と並走する等、短距離走の記録保持者でも不可能である。

急いでいる状況下であるならば、こうなってしまうのは最早（もはや）自然の摂理なのだ。

そうでも言っておかないと、今の俺とＮＥＷ電王の姿は、あまりにも滑稽に見えてしまうだろう。

「それじゃあ君は、爺ちゃんの協力者って事か」

「はい。時の狭間で、デンライナーから落ちて逸れてしまいましたけど」

俺と幸太郎さんは、互いの事情を説明しながらアリシアちゃんの後を追っていた。

幸太郎さんの話によると、やはり最後の封印の鍵は、この世界にあるらしい。

俺のいた世界に良太郎君達がやってくる頃と同じくして、幸太郎さん達も、別のルートで此方に封印の鍵を探しに来ていたのだそうだ。

「でも君の言っている事が本当だとしたら「前方から何かが来るぞ」ん？」

俺の推測を聞いたＮＥＷ電王が返事を返そうと話している途中で、今も銃剣状態で、背中に背負われているテディさんが、俺達に報告してくる。

その言葉に反応し前を見てみると、一匹の山猫が此方に走ってくるのが見えた。

「リニス！？」

俺はその山猫の名前を呼んだ。

リニスは俺達の目の前までやってくると、何かを訴える様に、何度も鳴き続ける。

今日一日見ただけだが、リニスが、これ程に鳴くのを見たのは、初めてだった。

その異常な行動を続けるリニスを見て、再び嫌な予感が俺の脳裏を過ぎった次の瞬間、俺の予感は最悪な形で現実になってしまったのである。

「全く、手こずらせるなよ。小娘が」

「放しなさいよ！」

リニスが、やって来た方向から、新たにやってくる集団。

その先頭には、あのネガタロスが居た。

しかも嫌がるアリシアちゃんの腕を掴みながら、引きずる様にして、多数のホルダー達を従えながらである。

互いを認識出来る距離まで、やって来たネガタロスは、その場で立ち止まり、俺達に話しかけてきた。

「おい、お前達。そこに居る猫を、いや、猫がしている首輪に付いている物を渡せ」

淡々と要求を述べてくるネガタロス。

その要求を聞き、俺の推測が真実へと変わっていく。

「やっぱりこれが、最後の封印の鍵だったんだな」

俺の言葉に、ネガタロスは、含み笑いをしてくる。

「その通りだ。早くそれを渡せ。渡さなければ……」

「痛い！？」

恐らくは、ネガタロスがアリシアちゃんを掴む手の力を強めたのだろう。

痛みに顔を歪めながら発せられた、アリシアちゃんの悲痛な声が聞こえてくる。

「止めろ！！！」

俺はその光景を見て、一瞬だが、我を忘れて怒りの咆哮を上げる。

「なら早くしろ」

これは警告なのだろう。

渡さなければアリシアちゃんは……

もうこのまま奴に、封印の鍵を渡す以外に手は無いのかと、俺が考え始めたその時、俺は腹部に違和感を感じた。

俺を小脇に抱えているＮＥＷ電王の指が、俺の腹部で細かく動いて

いるのだ。

何かと思い、その動きに意識を集中させると、それは文字を書いているのだという事が理解出来た。

俺はその文字の全てを読み取り、視線だけをＮＥＷ電王に向ける。

その視線に対して、ＮＥＷ電王は一度だけ、首を縦に振った。

「分かった。鍵を渡すから、アリシアちゃんには絶対に危害を加えるな」

俺はそう宣言して、ＮＥＷ電王に小脇から降ろして貰い、リニスを抱き上げると、首輪に付いていた琥珀を取る。

「同時に交換と行こうか。その方が後腐れ無いだろ？」

素直に要求に従う俺を見て、機嫌良さそうに提案してくるネガタロス。

此方から提案しようとした事なので、向こうから言ってくれたのは、不幸中の幸いである。

「それじゃあ、そっちに投げるぞ？」

ネガタロスがアリシアちゃんを放す態勢を整えるのを確認した俺は、ほぼ同時に掴んでいた琥珀を放物線を描く様に投げ放つ。

そしてネガタロスも、放物線を描きながら、自らの手に飛んでくる琥珀を確認して、アリシアちゃんを開放する。

その時、ＮＥＷ電王が動いた。

背中の銃剣を抜き放ち、俺が投げ放った琥珀目掛けて投擲する。

俺は既にＮＥＷ電王が銃剣を抜き放つと同時に走り始めていた。

銃剣は空中でテディさんの姿に戻り、ネガタロスの手に収まる前に、琥珀をキャッチする。

「受け取れ！」

テディさんはそう言うと、掴んだ琥珀を俺に投げ返す。

俺はそれを受け取りながら、未だ突然の出来事に頭が追いついていかない様で、俺達の様子を見ているアリシアちゃんの手を掴み、逆走する。

それと交代するかの様に、ネガタロス目掛けて駆け抜けていくＮＥＷ電王。

「な！？」

あまりにも流れる様な流れに、驚愕の声を上げたのはネガタロスだ。

当然の事ながら、先程までの全ての動作を瞬時に判断して出来る程、俺は機転の利く人間ではないし、幾ら知識で知っていたとは言え、ほんの数刻前に出会ったばかりの彼等と、言葉のやり取りも無しに連携出来る訳も無い。

全ては幸太郎さんの作戦である。

俺の腹部で動かしていた指の動きを読み解く事で、先程の作戦を一方的に受け取るだけだったとはいえ、意思の疎通が取れたのだ。

その上ネガタロスが、油断からなのか、此方の作戦を実行しやすい条件を出してくれたお陰で、作戦は恐ろしい程に上手くいったのである。

ＮＥＷ電王が戦闘を開始したのを確認した俺は、この場をＮＥＷ電王に任せ、鍵とアリシアちゃんを連れて、住宅街を抜ける為に、全力で走り出した。

何とか住宅街を抜け出した俺達は、海岸まで辿り着いた。

これが普通の犯罪者に追われているという事ならば、人ごみの多い場所に行くのが、良いのだろうが、奴等はそんな事お構いなしに、暴れ回るであろう。

無関係の人達を巻き込む訳にもいかない為、選択したのが、この場所だったのだ。

確かに敵に発見される可能性は高いが、それは同時に味方に見つけてもらう場合も同じ事である。

「鬼ごっこはそこまでだ」

走る俺達の前方に、突如現れてそう告げる。

その声を発したのは、ＮＥＷ電王と戦っていた筈の人物、ネガタロスである。

いや、正確には違う。

恐らくＮＥＷ電王との戦いで変身したのだろう。

ソードフォームの電王に酷似した姿であるネガ電王となっていた。

その足元には、下敷きにされたＮＥＷ電王。

やはり幾らＮＥＷ電王といえども、多数のホルダーとネガ電王を、同時に相手にするのは、無理があった様である。

一歩一歩着実に近付いて来るネガ電王から守る様に、俺はアリシアちゃんとリニスを後ろに庇う。

「さあ、早く渡せ。そうすれば……そうだな、お前の後ろに居る小娘の命ぐらいなら、助けてやっても良いぞ？」

俺に最後の慈悲を見せるかの様な、発言をするネガ電王。

はっきり言って、奴の言う事等、信用出来る筈もない。

しかし現状は、俺に選択出来る余地を残して等居ないのである。

俺だけならば最後まで、抵抗するだろうが、後ろには恐怖で震えているアリシアちゃんが居るのだ。

アリシアちゃん達は、巻き込まれただけで、本来ならばこんなに怖い思い等せずにすんだ筈だ。

これ以上彼女達を、苦しめる訳には行かない。

「……分かった。その代わり、俺の後ろに居るこの子達には、絶対に手出しするな」

俺は握り込んでいた琥珀を、ネガ電王に放る。

「……純お兄ちゃん」

この光景を見ていたアリシアちゃんが、俺に話しかけてきた。

「如何して、私の事をそこまでして守ってくれるの？私は妹でも何でも無いのに……」

恐怖に震えながらも、疑問を呈するアリシアちゃんに、俺は今思っている事をそのまま口にする。

「守りたいからだよ」

「え？」

「俺は確かにアリシアちゃんの兄じゃない。ただの他人だ」

実際俺達は出会ってから、まだ一日も経っていない。

「でも俺はアリシアちゃんを、命懸けで守りたいんだ」

理屈じゃない。

ただ俺は目の前の脅威から、彼女を今の俺に出来る全てを賭けて守りたいんだ。

今の俺は何の力も無い、ただの無力な子供に過ぎないかもしれない。

それでも俺は……

「ずるいよ……純お兄ちゃんは……」

アリシアちゃんはそう言って、俺の手を握る強さを強めた。

「感動的なシーンですまないが、俺からも一つ良いか？」

俺が投げ渡した琥珀を確認していたネガ電王が、突如俺とアリシアちゃんの会話に、割って入ってくる。

「悪人は約束を破る。良く覚えておくと良い」

そう言い放ち再び俺達に近付いてくるネガ電王。

こうなる事を予感していた部分は確かにあるが、嫌な意味でベタ過ぎだ。

だが、ベタな事も悪いばかりではない。

ネガ電王が、足を一歩前に踏み出したその時、俺の耳に聞き慣れた電車の発車音が聞こえて来た。

誰かがピンチの時、ヒーローが現れるのも、またベタなのである。

上空に光が生まれ、そこから飛び出して来たのはデンライナーだ。

更に前面のハッチが開き、デンバードに乗ったソードフォームの電王が、此方に向けて射出される。

「行くぜえええええええええ！！！！！」

電王はそう叫びながら、飛んで来て、そのままネガ電王に突撃を慣行した。

その間に下りてきたデンライナーが、俺達のすぐ近くで停車し、扉が開く。

『マスター！！！』

中から一番に出てきたのは、メカ犬である。

『無事だったのだなマスター』

俺のすぐ隣までやって来たメカ犬が安堵の声を漏らす。

本当に心配性な相棒ではあるが、その気持ちが何よりも嬉しいと感じるのも事実だ。

「心配かけたな相棒」

他のメンバー達も次々に降りて来て、俺に一言声をかけた後、海岸で倒れているＮＥＷ電王を助け起こしていた。

「のわあああああああ！？」

無事合流する事が出来て、安堵した瞬間、モモさんの悲鳴と爆発音が聞こえて来た。

爆発音がした先に視線を移すと、中破したデンバードと此方に吹き飛ばされてくる電王、そして爆煙の中から悠然と出てくるネガ電王。

電王は爆発の衝撃で変身が解除されてしまった様で、良太郎君の姿に戻ってしまう。

「良太郎君！」

俺の居た場所のすぐ近くに、放り出されたのを見た俺は、すぐに駆け寄り、助け起こした。

「ぶ、無事だったんだね」

自分が吹き飛ばされながらも、俺を見て最初に出た言葉は、あまりにも良太郎君らしい言葉だった。

「すいません。ネガタロスに全ての鍵が……」

今の俺には、謝罪する事しか出来ない。

もう少しだけでも時間を稼げれば、奴に鍵を渡さなくてすんだかも知れないと思うと、余計に俺のした事に後悔の念が浮かぶ。

「もう過ぎた事はしょうがないよ。それよりも、今僕達に出来る事を全力でしよう」

そう言って良太郎君は、手を差し出してきた。

俺はその手を見て思う。

画面の中で彼は、何度も困難に立ち向かい、そして乗り越えてきた。

彼にとっては、今この瞬間もきっとそうなのだ。

自分に出来る事をやろうとしている。

「はい！」

俺はその手を握り返し、力強く答えた。

後悔する事は、終わった後でかまわない。

俺が今すべき事は、ただ一つ！！！

「貴様等……絶対に許さんぞ！！！！！！」

激昂したネガ電王が、その手から黒く光る幾多の模造品を投げ放ち、ホルダーの姿へと変質させる。

ホルダー達は、未だ戦いの準備も出来ていない俺達に襲い掛かろうとするが、俺達の間に突如として銃弾が連射され、ホルダー達の動きを牽制した。

「俺達も忘れてもらっちゃ困るな？」

声のした方向に振り向くとそこに居たのは、

「Tさん！！！」

「侑斗！！！」

俺と良太郎君が、その名を呼ぶ。

銃を構えたTさんと、アルタイルフォームのゼロノスがそこに居た。

これは役者が揃ったという事なのだろう。

連続で起こる一連の出来事に、一人置いて行かれているアリシアちゃんに、俺は今の気持ちを伝える。

「アリシアちゃん。俺は確かにずっと一緒に居る訳には行かない存在かも知れないけど、この瞬間を……君を守るよ。俺がそうしたいって望むから」

そう言ってから俺は、ネガ電王と、ホルダー達に向き直る。

「行くぞメカ犬！」

「こっちも行くよモモタロス！」

俺と良太郎君が、互いのパートナーを呼ぶ。

『「任せろ！」』

頼もしい相棒達の答えを聞きながら、俺はタッチノートを取り出し、良太郎君はベルトを巻きつける。

『バックルモード』

『ソードフォーム』

其々のボタンを押す事で、メカ犬が銀色のベルトに変形し俺の腹部に巻きつき、良太郎君のベルトからはメロディーが流れる。

俺達は一度互いに向き合いながら、頷きそして力ある言葉を口にした。

「「変身」」

俺はタッチノートをバックルに差込み、良太郎君は、ライダーパスをベルトの中心にセタッチする。

『アップロード』

『ソードフォーム』

モモさんが良太郎君の身体に吸い込まれる様に消え、全身にスーツを纏っていく。

俺の全身も白銀の光に包まれて、その姿を戦う為の戦士へと変えていった。

今ここに並び立つのは、板橋純と野上良太郎ではなく、己の大切にするものを守る二人の戦士である。

「「俺達、参上！」」

その言葉が、この戦いの始まりの合図となった。

## ２０１１年特別企画　超・電王トリロジーアフター・エピソードシルバー　帰ってきた電王

それでは次回の【激闘編】でお会いしましょう。

## ２０１１年特別企画　超・電王トリロジーアフター・エピソードシルバー　帰

何とか連日更新に間に合いました。

それでは楽しんで頂ければ幸いです。

「今日の俺達は、最初から最後まで、クライマックスだぜ！」

ソード状態のデンガッシャーで、ホルダー達を薙ぎ払いながら、電王が叫ぶ。

別の場所でも、他のイマジン達や、ＮＥＷ電王にゼロノスが、戦いを繰り広げる。

Ｔさんとコハナさんは、アリシアちゃんを安全な場所へと誘導してくれていた。

俺自身も、現在はこの乱戦の中で、戦っている最中である。

「来い！デネブ！！！」

その中で逸早く動きを見せたのは、アルタイルフォームのゼロノスだった。

デネブさんを呼び寄せると同時に、ベルトに差し込んでいたカードを取り出して、裏返す。

表側に緑のラインが入っていたのに対し、裏側には黄色のラインが入っていた。

自身の背後にデネブさんが来た事を確認したゼロノスは、裏返したカードをそのまま、再びベルトに差し込む。

『ベガフォーム』

音声が流れると同時に、デネブさんが両腕を交差させて、ゼロノスの肩に乗せる。

するとデネブさん本体は、吸い込まれる様にゼロノスの中に吸収され、ゼロノス自身の形状をも変化させていく。

肩にはデネブさんの手がそのまま装甲として残り、神父の服を模した黒衣が、背中全体を覆うマントへと変貌を遂げる。

更に上半身を覆っていた装甲も、デネブさんの顔をあしらった物に変わり、最後には頭の上からドリルが顔を伝い中程でそれが三つに開かれると、赤い二つの複眼がその姿を現す。

この姿こそが、デネブさんの力を借りて変身するゼロノスのもう一つの姿、ベガフォームである。

「俺も最初に言っておく」

デネブさんの声で話し始めたゼロノスが、周りのホルダー達に宣言し始める。

「胸の顔はただのか……ごめん」

と思ったら言いかけて謝り出した。

恐らく侑斗さんに怒られたのだろう。

ゼロノスは、何やら分かったと呟くと、サーベルモードのゼロガッ

シャーを構えて、ホルダー達に突撃して行った。

「そろそろ交代してよ！モモタロス！」

先程までの様子を見ていた為なのか、リュウ君が、電王に交代を要求してきた。

普段の彼等のやり取りを見ていれば、一つ二つの文句が出た後に、結局交代するのだろうが、ここで予想外の出来事が起こったのである。

後方に停車されているデンライナーの扉が突如として開き、中からバスケットボール程度の大きさを持つ光が飛び出てきたのだ。

しかも飛び出てきた光は、あろう事か電王に衝突し、良太郎君に憑いていたモモさんを弾き出してしまう。

俺は弾き出されるモモさんを見ていて、その直後の電王を見ていなかったのだが、何故かピアノの音が聞こえて来たのだけは分かった。

何かと思い目をやると、初めに俺の視界が捉えたのは、舞い散る白い羽だった。

その先に居たのは、白と金を基調とした装甲を持つ電王。

主に映画版で活躍した電王の特別版、ウイングフォームである。

「我……降臨、満を持して！」

ウイングフォームとなった電王が、左手を腰の後ろに回し、右手を

空に掲げながら、高らかに宣言した。

あの台詞、間違い無く鳥な人だ。

「ジーク!?」

その様子を見たコハナさんが驚愕の声を上げる。

「何でテメエがここに居るんだよ手羽先!?」

問答無用で弾き出されたのが、余程不満だったのか、モモさんがその元凶であるジークさんに食って掛る。

「ふむ。偶には私の顔でも見せておこうと来たのは良いが、何やら皆忙しなかったのでな。奥の部屋を借りて眠っていたのだ」

如何やら話を聞くと、外が騒がしくて起きてしまったらしく、外を見ると俺達が戦っているのが見えたので、助太刀しに来てくれた様だ。

未だ怒り収まらぬモモさんの言葉を無視して、電王はデンガッシャーを再度連結し直すと、ブーメランとハンドアックスにして、辺りのホルダーに斬りかかる。

「もう!僕が行こうと思ってたのに!!!」

しかしそれ以上に不満を持ったのはリュウ君だった。

そして、その発露は以外な方法によって解消される事となる。

「そうだ！君の身体、ちょっと貸してね！」

何とリュウ君の標的が俺へとシフトしてしまったのだ。

「え！？ちょ、待ってリュ」

俺が静止の言葉を言い切る前に、半透明になったリュウ君が、俺の身体の中に入って来る。

『サーチフォルム』

その上何故かフォルムチェンジが自動で発動してしまい、メタルブラックのボディーがスカイブルーへと染まっていく。

「ねえねえ！何か武器って無いの？」

勝手に俺の口を使って喋るリュウ君。

こうなっては仕方ないので、俺はリュウ君にサーチバレットの呼び出し方を教える事にした。

出来るだけ早く満足して、身体から出て行ってもらう以外に、今の俺に出来る事は無い。

『サーチバレット』

早速俺の説明を実践したリュウ君が、例の言葉を言い放つ。

「倒すけど良いよね？答えは聞かないけど！」

そしてサーチバレットの光弾を辺りのホルダー達に、独特のダンスステップを披露しながら撃ち始める。

やがて満足したのか、俺に一言感謝の言葉を言って、開放してくれたリュウ君だったのだが、これはまだ序章に過ぎなかったのだ。

「それじゃあ、リュウタの次は僕だね」

そう言うと、リュウ君と入れ替わりに、ウラさんが俺の中に入ってきた。

『スピードフォルム』

再びフォルムチェンジが、自動で発動する。

スカイブルーのボディーが、今度はライトグリーンに変わり、ウラさんもリュウ君のやり方を真似て、武器を呼び出す。

『スピードロッド』

ロッドを釣竿を抱える様に手にしたウラさんも例の言葉を口にする。

「お前達。僕に釣られてみる？」

そう言ってから、ロッドの端を持ち、弧を描く様に振り回して、辺りのホルダー達を薙ぎ払うウラさん。

「今度は俺の番や！」

もうウラさんの時点で予測はしていたのだが、今度はキンさんがそ

う宣言して、戦闘中のウラさんに割って入る。

ウラさんも何か抗議の声を上げようとするが、キンさんは問答無用で俺の中から、ウラさんを出して、入ってきた。

『パワーフォルム』

三度フォルムチェンジが発動し、俺のボディーはクリムゾンレッドに染まっていく。

「ええと確かこうやったな……」

キンさんもやはり、武器を呼び出す。

『パワーブレード』

「何や、斧とちゃうんか！？」

呼び出したパワーブレードを見て、不満を口にするキンさん。

だがそこに文句を言われても、無い物は無いのだからしょうがない。

キンさんはしゃあないなと言いながら、呼び出したパワーブレードを地面に突き刺すと、近くのホルダーに突っ張りを喰らわせた。

如何やら武器は諦めて、素手で戦う様だ。

「俺の強さは泣けるで！」

突っ張りを喰らわせてホルダーを吹き飛ばした直後に、顎に手を当

てゴキリと鳴らしながら、決まり文句を口にする。

「よっしゃあ！次は俺だ！」

そしてお次はモモさんだ。

こう何度も入れ替わり立ち代りに交代されると、体力的な面は問題無いのだが、俺の精神的な疲労はかなり溜まってくる。

実際に体験してみて、何時もこれをやっている良太郎君を改めて凄いと感じてしまった。

『ベーシックフォルム』

キンさんとモモさんが、交代した事により、またしても発動するフォルムチェンジ。

クリムゾンレッドのボディーは周り回って、メタルブラックのカラーへと帰結する。

「俺、再び参上！」

自身を親指で指差してから、ポーズを決めたモモさん。

如何でも良い事なのだが、これが三回目以降になったら、どんな台詞を言うのだろうか。

「さ～てと、俺のは何かな？」

もう恒例となってきた武器の呼び出しタイムであるが、俺はこの時

ベーシックフォルムだけは、少し特殊な能力だと言う事を伝え忘れていた。

『ベーシックファントム』

そうとは知らず、モモさんは分身体を呼び出してしまう。

「うを!?何故か増えた!?」

『これはそういう能力なのだから、仕方無いだろう』

驚くモモさんに対し、分身体を操作するメカ犬が、冷静な突っ込みを入れる。

折角呼び出したので、メカ犬にはこのまま戦ってもらう事にしたのだが、ここでモモさんが、普段の俺が絶対にやらない様な行動を実行に移す。

「何か良い武器は……お!丁度良いのがあるじゃねえか!!!」

モモさんがそう言いながら、辺りを見渡して見つけたのは、先程キンさんが地面に突き刺していったパワーブレードである。

嬉々として地面からパワーブレードを引き抜いたモモさんは、上機嫌で行くぜ!と叫びながら、ホルダー達に突貫して行く。

もはや、やりたい放題だよこの人達……

しかしここで戦いの空気は様変わりする事となる。

「貴様ら……舐めるのも対外にしろ！！！」

ネガ電王は怒りの咆哮を上げると手にしていた琥珀を砕き、中にあった封印の鍵を取り出した。

そして三つの鍵が揃ったその時、上空と三つの鍵を結ぶ様に、光の柱が現れて、三つの鍵はその光の柱へと吸い込まれて行く。

変化はそれで終わりという事は無かった。

いや、始まっても居なかったのだろう。

夕方とは言え、まだ太陽が出ている筈なのに、辺り一面に影が生まれる。

モモさんが空を見上げる事で、俺の視界にもその光景が飛び込んできた。

「何だありゃあ……」

思わずそう呟くモモさん。

その気持ちは俺にも良く分かる。

突如あんなものが、上空に現れれば、誰だって似た様な呟きを漏らしてしまうだろう。

上空には巨大な大陸が浮いていたのである。

その上部と下部には、巨大なクリスタルが填め込まれており、その

周りには何かの建造物が乱立していた。

「ははははは！！！これだ！！！これこそが俺の夢！！！これさえあれば最強の悪の組織を作れる！！！全世界を……いや、全宇宙を支配する事も可能だ！！！！！」

封印の鍵によって、呼び出された大陸を見ながら、ネガ電王が歓喜の叫びを上げた。

すると突如俺達の頭上に出現した大陸のクリスタルが輝き始める。

その輝きは稲妻の様な姿となって、ネガ電王に直撃した。

何が起こったのか、最初は分からなかったが、光を受けたネガ電王の姿を見た事で、とんでもない事が起こっているのだという事を、無理やりにでも自覚させられてしまう。

ネガ電王のボディーに更なる追加装甲が足されて行く。

その装甲は、クライマックスフォームの電王に酷似している。

強いて言うのであれば、その姿はクライマックスネガ電王と呼ぶのが、最も相応しいかも知れない。

「人の格好を真似てんじゃねえぞ！」

「むん！」

パワーブレードを構えながら、その姿を変えたネガ電王に突っ込む、俺に憑いているモモさんとウイングフォームの電王。

しかし二人の攻撃は、ネガ電王に届く事は無かった。

近付く二人の仮面ライダーに対し、その両腕を向けると、その手から稲妻の様な光が発生し、二人に直撃する。

その衝撃により吹き飛ばされてしまい、モモさんとジークさんは、半ば強制的に俺と良太郎君の中から、弾き出されてしまった。

だがネガ電王の攻撃はそれだけで終わる事無く、未だダメージで立ち上がれない俺達に対し、先程の稲妻を容赦無く放って来る。

『危ない！！！』

そこに俺達の身の危険を真っ先に感じたのか、分身体を操るメカ犬が割って入り、稲妻の直撃を喰らってしまう。

分身体は、そのダメージに耐え切れず消し飛ぶ。

「メカ犬！？」

『ワタシは大丈夫だマスター。しかし分身体を一撃で吹き飛ばすとは、相当なパワーだぞ』

一瞬メカ犬自身がやられてしまったのではと思ったが、ベルトから聞こえて来た事で、分身体を操ってるのは、遠隔操作をしているだけだったという事を思い出す。

如何やらメカ犬自身は無事だった様なので、安心したが、現状ピンチなのには変わり無い。

「ちょっと良いですか～！！！」

「箱が貴方に話があるそうなんですけど～！！！」

この状況を如何切り抜けるべきか、必死に考えていたその時、デンライナーの停車している方向から、ナオミさんと長谷川さんが、大きな声で叫びながら、此方に走ってくる。

この非常時に何の用事だと思うが、そう言えばナオミさんが、叫びながら箱が俺に用があると言っていたのを思い出す。

何故に箱？

俺の目の前までやって来た二人は、荒い息を整えてから改めて俺に用件を伝える。

「えっとですね。純君から預かっていた箱が、突然動き出したと思ったら、兎に角連れて行けって喋りだしたんですよ！」

ナオミさんが、早口にそう告げる。

「これです。あの所で、何故男の子の荷物を仮面ライダーさんが？」

次に長谷川さんがそう言いながら、俺に箱を差し出してきた。

如何やら長谷川さんの中では、板橋純と仮面ライダーが別人と思われている様なのだが、今はそんな事に構っている暇は無い。

渡された箱は、ロサンゼルスに居る恵理さんから送られて来た荷物

だった。

しかも中で何かが動いている様で、箱自体が激しく動いている。

しかも二人の言葉を信じるのであれば、この中に入っている何かは言葉を喋るらしい。

『兎に角開けてみた方が良いのではないか？マスター』

「そうだな」

メカ犬の助言を聞き、俺は躊躇いながらも、箱を開封して、中身を確認してみた。

『あ！あなたがボクのマスターですね？』

中に入っていた物は俺の視線に気付くと、そんな言葉を発した。

箱の中に入っていたのは、メカ犬の半分程の大きさで、メタリックレッドが眩しく光る、ティラノザウルス型のオモチャという感じだった。

だがこれがオモチャでない事は、良く分かる。

それと言うのも……

『いや～長旅のせいか、すっかり寝てしまいましてね。ロサンゼルスで恵理さんにお世話になってから、ずっと箱の中で参ってしまいましたよ。あ！良く見たら今のマスターの姿って、例の仮面ライダーって奴ですか！生で見た方がカッコいいですね！バディ先輩……

マスターはメカ犬と呼んでいるんでしたね？マスターの世界に送られてくる前から、博士と一緒に良く画像データで見てましたよ！それにですね「ちょっとストップ！！！」はい？』

このメカ恐竜は、アリシアちゃん以上のマシンガントークで喋り捲くる。

何処かの芸人並に喋るこいつが、ただのオモチャなのだと、誰が思うだろうか？

あまりに一方的に喋りまくるので、思わずストップをかけてしまったが、後で聞いておきたい事は山ほどある。

『あの……マスター。詳しい話は後にするとして、今は大変ピンチなのではないですか？』

箱から飛び出てきたこのメカ恐竜を如何するべきか、俺が思案し始めたその時、再びメタリックレッドの恐竜が話しかけてきた。

「分かるのか？」

俺は思わずそう返事を返す。

『はい！ボクは全シリーズ中でも、高い感知能力を持っていますから！』

そう言って、胸を張るメカ恐竜。

『ワタシを先輩と呼ぶと言う事は、まさか……』

『そうです！ボクは博士に作られました。マスター達を補助する為に送られて来た増援です』

メカ犬の言葉に肯定の返事を返したメカ恐竜は、続け様に俺に言う。

『だからボクを使って下さいマスター！』

「お前を使う？」

『そうです！ボクは今までのマスターの戦闘データを元に、強化及び最適化を目的として作られましたから！』

詳しい話は現時点で理解し難いが、つまりこのメカ恐竜を使えば、あのデタラメな強さを誇るネガ電王と対等に戦えるって事か？

俺は如何するべきか考えながら、一度ネガ電王に視線を移す。

現在はゼロノスとＮＥＷ電王が、戦ってくれているが、戦況は芳しくない。

「……分かった！お前の言葉信じるぞ！！！」

『任せてください！！！』

俺は覚悟を決めて、メカ恐竜……この言い方だと長くて呼び難いから、メカ竜で良いか。

メカ竜に共に戦う決意を伝えた。

『それではまずタッチノートを出してください』

俺はメカ犬の指示に従い、タッチノートをバックルから引き抜き開く。

すると、メカ竜が赤いポインターライトの様な光を口から吐き出して、タッチノートに照射する。

何をしているのかと思い、タッチノートの項目を見てみると、画面に見た事の無い項目が追加されていた。

「ガイアシステム？」

突然現れた項目には、そう書かれていたので俺はその項目を読みあげて見た。

『その項目部分を直接タッチして下さい』

「ああ」

俺は言われるがままに、項目部分をタッチする。

『スタンディングモード』

タッチノートから音声が流れ、メカ竜の姿が変化していく。

手足が収納され、首の部分も斜めに曲がり、丁度手の平に収まるサイズになってしまった。

『続いてベルトの左側をスライドさせて下さい』

フォルムチェンジの要領で実行してみると、右側がフォルムチェンジのボタンがあるのに対して、此方は何かの差込口の様な穴が開いていた。

良く見れば変形したメカ竜の背中部分には、丁度差込口に入りそうな、突起が設けられている。

『タッチノートをバックルに差し込んだ後、ボクを左側の穴に差し込んで下さい』

メカ竜の言葉で、やはりそうなのかと思い至った俺は、タッチノートをバックルに差込み、変形したメカ竜をベルトの左側に差し込んだ。

『ベーシック・ガイア』

差し込むと同時に音声が流れて、俺の全身に変化が生じる。

メタルブラックのボディーにメタルレッドの追加装甲がされていく。

それと同時に、今まで以上に力が漲るのを感じた。

「これが強化なのか？」

俺は自身の姿を確認しながら呟く。

傍で見ていたナオミさんが、手鏡を貸してくれたので、マジマジと見てみると、何処と無くメカ竜の姿が反映されている事が分かった。

ちなみに長谷川さんは、俺の変化を見て、またしても気絶していた。

何度気絶すれば気が済むのだろうかこの人は？

気絶した長谷川さんをナオミさんに任せて、俺はネガ電王を見据える。

「それじゃあ行くか！メカ犬！メカ竜！」

『うむ！』

『はい！』

俺はこの土壇場で現れた、新たな仲間と共に、再び戦線に復帰する。

「僕達も行くよ皆！！！」

漸くダメージが抜け切ったのか、ジークさんが弾き出された事で、プラットフォームに戻ってしまった電王が、赤い携帯電話の様な物、ケータロスを取り出しボタンを押していく。

「よっしゃ！」

「そうだね」

「任しとき！」

「イェイ」

「私もか？」

その言葉を聞き、イマジン達が各々答えを返す。

『モモ・ウラ・キン・リュウ・クライマックスフォーム』

ケータロスを操作して流れる音声と共に、電王はベルトにケータロスを取り付ける。

「てんこ盛りで行くぜぇ！！！」

モモさんがそう叫びながら、電王に飛び込み、他のイマジン達も、次々に飛び込んでいく。

「何故その道具は、私の名を呼ばないのだ？」

若干一名、余分に入った気もするが、あまり気にしない方が良さそうである。

顔、両肩、胸に其々のフォームの仮面が装着されて行き、最後には背中にも一際大きな仮面が装着された。

この姿こそが、電王が誇る最強の姿。

超・クライマックスフォーム！の筈なのだが……

「またテメエか鳥！？」

「重い……狭い……苦しい」

「もう定員一杯やろ！？」

「ちょっとキンちゃん、もう少し詰めてくれないかな」

「お供達よ。何故あの道具は私の名前だけは呼ばないのだ！？」

「皆！真面目に戦おうよ……」

このフォームはなる度に、大変そうだな……いや本当に。

「兎に角今はこれで行こう！！！」

如何やら話が纏まった様で、俺の隣に並び立つ電王。

俺達は共に走り出し、ネガ電王に攻撃を仕掛ける。

ゼロノスとＮＥＷ電王を、退けて俺達に稲妻を浴びせるネガ電王だが、俺達は構わず走り抜けてその拳を叩き込む。

数発の拳を叩き込んだ後、俺と電王は、同時に蹴りを叩き込み、ネガ電王を後方に吹き飛ばす。

『決めましょうマスター！』

「ああ！！！」

メカ竜の言葉に俺が返事を返すと、俺の視界にウインドウが表示され、説明文が流れ出す。

俺はその指示に従い、行動を開始する。

左腰に差し込まれているメカ竜の本体部分の首は、レバーになって

おり、俺はそのレバーを下に引く。

『マックスチャージ』

音声が流れると同時に、光が足に集約され、その上四体の分身が生成される。

四体の分身体は、俺の後方に一列に並び、一番後ろの分身から、順次高く飛び上がって行く。

一番後方の分身体が、前に居る分身体の背中に蹴り込むと、その分身がその蹴りにより加速した状態で、更に前の分身に数珠繋ぎに蹴りを叩き込む。

そして最後に、一番前に居た俺の背中に分身の蹴りが叩き込まれる事により、俺は通常では不可能な速度の蹴りを、ネガ電王に喰らわせる。

「があ！？」

それを受けて、相当のダメージを受けたのは確実だろうが、当然これで終わりな訳が無い。

『チャージ＆アップ』

俺の耳にはその音声が流れ込む。

そして、背中からエネルギーで生成した翼をはためかせ、大空に飛び上がった電王が必殺の蹴りで追撃する。

「うをおおおおおお！！！！」

気合の雄叫びと共に繰り出された蹴りを、まともに喰らったネガ電王は、己の野心を叫ぶ。

「俺は絶対に負けんぞ！必ず最強の悪の組織をおおおお！！！！！！！」

その叫びを最後に、大きな爆発を起こすネガ電王。

跡形も無く吹き飛んだ様を見て、終わったのだと感じたその時、上空で整然としていた、大陸に異常が起きた。

突如として大陸の巨大なクリスタルが輝き始めると、付近を稲妻が無差別に襲う。

その稲妻は俺達のすぐ近くにも舞い落ち、その衝撃をまともに喰らった俺達は変身が解除されてしまう。

俺は何とか立ち上がり、突如起こったこの非常事態に対して、疑問を口にする。

「一体何が起こってるんだ！？」

「使用者がいなくなった事で、暴走を引き起こしたんだ」

その疑問に答えたのは、同じく横で立ち上がった侑斗さんである。

「暴走って、一体如何すれば……」

続いて立ち上がった良太郎君が、俺がしようとしていた質問を侑斗さんにした。

「あれだ」

侑斗さんは、上空に浮かぶ大陸の中央に建つクリスタルを指差す。

「封印の鍵は、あの街全体にエネルギーを供給する為の、装置を始動させる起動キーでもあるんだ。其処に直接強い衝撃を叩き込めば、この暴走を止められるかもしれない」

如何やらその装置が、あのクリスタルの内部にあるらしい。

「それじゃあデンライナーで「あああああ!!!俺のバイクが!?」

良太郎君の声を遮り聞こえてきたのは、悲痛なモモさんの叫びだった。

何事かと思い、視線を向けると、其処にあるのは中破してボロボロとなったデンバード。

そう言えば、最初に助けに入った際、ネガ電王に壊されてたんだった。

確かデンバードが無いと、デンライナーって動かないんじゃ……

『それってアタシじゃ駄目なのかしら?』

薄っすらと絶望感が漂うこの場の空気を払拭したのは、今までその存在をすっかり忘れてしまっていた馴染み深い声だった。

オッサンボイスな乙女口調の新宿二丁目ライダーバイク……その名も！

「チェイサーさん！！！」

俺にはこの時のチェイサーさんの声が、オッサンボイスではあるが、天使の囁きの様に聞こえた気がした。

## ２０１１年特別企画　超・電王トリロジーアフター・エピソードシルバー　帰ってきた電王

次回は電王編最終章【超・クライマックス編】でお会いしましょう。

## ２０１１年特別企画　超・電王トリロジーアフター・エピソードシルバー　帰

何とか今日も連続投稿が出来ました。

それでは楽しんで頂ければ幸いです。

俺は前世の頃から、一度デンライナーを運転してみたいなと思っていた。

思っていたのだが……

「こんな命懸けの運転は嫌だあああ！！！」

『ほらマスター！叫んでる暇があるなら前を見て運転する！じゃ無いと死ぬわよ』

「今はデンライナーを動かせるのが、お前だけなんだから頑張れよ！」

俺の心からの叫びに対して、好き放題言ってくるチェイサーさんと、ソードフォームの電王。

「そんな事言ったって「次が来るぞ！！！」はいいいいい！！！」

言いかけた俺は、死にたくない一心で、ハンドルを切る。

ここまでの流れで理解して貰えると思うのだが、現在俺はデンライナーの運転をしているのだ。

以前にもデンバードを使わずに、マウンテンバイクで走った事が劇中であった事を思い出し、チェイサーさんを無理矢理デンライナーに仮付けする事で、何とか走行する事を可能としたのである。

本当は運転慣れしている電王メンバーの誰かと代わりたいのだが、チェイサーさんのマニュアル運転は、マスター登録している俺じゃないと出来ないそうなので、俺が運転しているわけだ。

今まではチェイサーさん自身が勝手に走っていたので、全く気付かなかったが、とんだ落とし穴である。

しかも現在チェイサーさんは、デンライナーと仮接続する為に、全ての機能を総動員させている為、無事にこの稲妻の嵐を抜けて、大陸のクリスタルに辿り着けるかは、全て俺の腕に懸かっているという無茶振りだ。

前世の頃でも、一応は免許を持っていたので、運転出来ない事は無いのだが、それも安全運転に限っての事である。

何とか今は、ベーシックフォルムに変身しているお陰で、様々な感覚が強化され対応出来ているが、不測の事態が起きた場合、それに対処出来るかは分からない。

そして不測の事態とは、そんな事を考えた時に限ってやってくる。

「おい！あれって……」

後部座席に座っていた電王が、何かを発見した様で、声を上げながら指差す。

辺りから降り注ぐ稲妻に気を配りながらも、俺が指が指し示す方角に視線を向けると、そこにあったものは、

「ネガデンライナー！？」

俺達が目指す大陸の更に上から、俺達の進行方向目掛けて、ネガデンライナーが落ちて来たのである。

何故こんな所に?と思うのは当然なのだが、今の状況はそんな事をのんきに考えている場合じゃない。

避けようにも、今進行方向を変えれば、稲妻の餌食になるし、このまま進めば間違い無く、ネガデンライナーと衝突する事になってしまう。

考えている間にも、ネガデンライナーは、容赦無く此方に向かって落下してくる。

一か八かこのまま特攻するしかない、という考えが俺の頭を過ぎったその時だ。

突如デンライナーの横から、新たな時の列車が現れる。

緑と黒を基本カラーとしたゼロライナーだ。

前頭部分には巨大なドリルが唸りを上げている。

そのままデンライナーを追い越したゼロライナーは、デンライナーお連結させて、更に加速していく。

最高速度に達したデンライナーとゼロライナーは、落下してくるネガデンライナーをそのドリルで粉砕しながら、一気に稲妻地帯を抜けて、大陸のクリスタル付近まで、到着した。

駆けつけて貰って助けてくれたのは、素直に感謝しているのだが、一つだけ文句を言いたい。

ゼロライナーはあの海岸からは離れた場所に停車してあると言うから、俺がデンライナーを運転する事になったのに、間に合うのならば、もっと早く言ってくれ！

しかし現状の俺は、そんな言葉を言う余裕すら無かった。

デンライナーの前方部分、つまり俺が今居る場所の屋根が開いて行く。

これってもしかして……

『それじゃあ行くわよマスター』

チェイサーさんの言葉で俺がこの先どうなるのか、理解してしまう。

俺と電王を乗せた状態で、射出されるチェイサーさん。

「やっぱりねえええええええええ！！！！！！！！」

空中に放り出された俺は、そんな叫びを上げながら、チェイサーさんと電王と共に、クリスタルに突っ込んで行く。

クリスタルに大穴を開けて、そのまま最深部まで突き進む俺達の前に現れたのは、見た事も無い様な、装置の数々だった。

暫く進むと最深部に辿り着いた様で、チェイサーさんが停車する。

そこは祭壇を思わせる作りになっており、東京ドーム並の広さを誇っていた。

ドームの中心には光の柱があり、その中程には、三つの鍵がオーブに包まれている。

恐らくあれが侑斗さんが言っていた、この大陸全体にエネルギーを送る為の起動キーなのだろう。

「兎に角あれを壊せば、良いんだな」

電王が、俺と同じくオーブを見ながら、ライダーパスを取り出す。

「ですね」

俺も頷きながら、バックルのタッチノートを引き抜いてから、全体図を表示させて、右足をタッチする。

あのオーブに強い衝撃を与える事で、この暴走が収まるのであれば、今この場で俺達がやる事はただ一つだ。

電王はライダーパスをセタッチし、俺は再びタッチノートをバックルに差し込む。

『ポイントチャージ』

『フルチャージ』

互いのベルトから、音声が鳴り響き、発生したエネルギーが其々の足へと、集められていく。

「こいつで決めるぜ！」

「俺達の必殺技！」

俺と電王、二人の仮面ライダーが飛び上がり、光の柱に向けて、同時に右足を突き出す。

「「ダブルライダーキック！！！！！」」

二人の声が重なり、最高の一撃が繰り出される。

光の柱に守られていたオーブは俺達の放った衝撃で砕け散る。

着地した後に、辺りを見渡せば、その力を失うかの様に輝きを失っていく無数のクリスタルがあった。

『終わったな』

この大陸全体が、機能を停止させていくのを確認しながら、メカ犬が呟く。

「そうだな」

俺はメカ犬の呟きに、安堵の溜息を零しながら答えた。

こうして俺の本当に長い一日は、終わりを告げた。

「お別れなんだね……純お兄ちゃん」

「……そうだね」

あの戦いから翌日の早朝、海岸に停車されたデンライナーの前で、俺とアリシアちゃんは、別れの挨拶を交わしていた。

本来ならばすぐにこの場所を、去らなければいけない筈だったのだが、デンバードの修理や、大陸の再封印等もあり、徹夜となってしまい、気付けば朝を迎えてしまったのである。

侑斗さんとデネブさん、それにTさんは、一足早くゼロライナーで時を越えてこの場を去ってしまった。

現在は大陸も、オーナーが再封印した為、時の狭間の奥深くへと戻って行ったし、デンバードも、取り敢えずの修理は完了したので、後はこのまま帰るだけだ。

俺とアリシアちゃんが、今こうして話しているのも、本当ならば時の運行を妨げてしまう可能性があるので、いけないらしいのだが、今回だけは特別にという粋な計らいのお陰で、こうして会話をして

いる。

「また……会えるかな？」

瞳に一杯の涙を溜めながら俺を見つめるアリシアちゃん。

「それは……」

情けないが俺には何も約束出来ない。

世界が違う上に、恐らく俺とアリシアちゃんは、存在している時間そのものが、違っている可能性が高いのだ。

再び出会える可能性は、限りなく無いに等しいだろう。

だから俺は……

「アリシアちゃん。少し目を閉じてくれるかな」

「うん。良いよ」

アリシアちゃんは、素直に目を閉じてくれた。

それを確認した俺は、ズボンのポケットからある物を取り出して、アリシアちゃんの首にかける。

「純お兄ちゃん？」

「もう目を開けて良いよ」

俺の言葉に、目を開けてから、自身の首元を見るアリシアちゃん。

「これって……ネックレス？」

「俺にはこれ位しか出来ないから……」

俺がアリシアちゃんの首にかけた物は、誰が見てもただのネックレスに見えるだろう。

銀の細い鎖に、中央部分は、黄色の丸い宝石の様な物が一つ飾られている。

如何して俺がこんな物を持っているのかというと、理由は以外と単純なものだ。

戦いが終わった後に、メカ竜が俺に渡してきたのである。

何でも博士からの俺に対する餞別だそうで、お守りの様なものらしい。

貰い物を更に他の人あげるのは、失礼かもしれないが、今の俺がお守りになりそうな物で、あげられそうな物が、これしか思い浮かばなかったのだ。

「ありがとう……私大切にするから……絶対に純お兄ちゃんの事……忘れないから……」

アリシアちゃんの瞳からは、ついに大きな雫が零れ落ち、それと同時に抱きついてくる。

俺は自身の胸で泣き続ける、アリシアちゃんの頭を優しく撫でながら、その言葉に頷き続けるしか出来なかった。

その足元では、山猫のリニスが一鳴きする。

やがてお互いにどちらとも無く離れ、俺はデンライナーに乗り込む。

俺が乗り込んだ事で、扉は閉まり、ついに別れの時が訪れる。

さよならは言わない。

また何時か、出会える時が来る事を信じたいから……

「これで僕達もお別れなんだね」

「はい」

時の狭間を抜け、俺が居た時代の海鳴市へと戻った今、もう一つの別れの時がやって来た。

「テメエも犬にしては、やるじゃねえか……」

俺と良太郎君が別れの挨拶をしているその横では、モモさんが何と自分からメカ犬に話しかけていた。

『赤い者もな』

「あ、当たり前だろ……」

メカ犬の言葉に少し照れた素振りを見せるモモさん。

「力を貸してくれて、本当にありがとう」

コハナさんが改めて俺達に感謝の言葉を述べる。

「それでは僕は、署に戻って報告しなければならないので、これで失礼します」

俺達が別れの挨拶を交わす中で、長谷川さんは、そう言うと一足先に、デンライナーを後にした。

「純君。君に渡す物があります」

長谷川さんが出て行った直後、突然オーナーが、喋り出すと、俺の前までやって来て、ある物を手渡した。

それは何も描かれていない、一枚の白紙のカードだった。

「これは？」

「それは今回の君への報酬です。何時か役に立つ時が来るでしょうから、大切に手元に置いておくと良いでしょう」

オーナーは俺に意味深な言葉を告げる。

「はあ……」

この人のやる事は、如何にも分からないが、取り敢えず俺は頷き、受け取ったカードを、ポケットにしまった。

オーナーの話も終わり、俺がデンライナーを出ようとした時、電王メンバーの皆が俺に一言ずつ声をかけてくれた。

「また会おうね」

良太郎君が、

「それじゃあ元気で」

コハナさんが、

「今度は僕と釣りでもしよう」

ウラさんが、

「健康には気を付けや」

キンさんが、

「バイバ～イ！」

リュウ君が、

「さらばだ。新たなお供よ」

ジークさんが、

「また会える時まで」

幸太郎さんが、

「達者で」

テディさんが、

「またコーヒーを飲みに来てくださいね」

ナオミさんが、

「……じゃあな！」

そしてモモさんが、

「はい！また何時か……未来で」

俺は、電王メンバーの皆に別れを告げてデンライナーから、降りる。

俺達全員が降りた事を確認すると、デンライナーの扉は閉まり、発車音を辺りに響かせながら、走り出す。

やがて空中に大きな光が現れると、デンライナーの走る線路がそこまで延びて行き、吸い込まれる様に消えていった。

『行ってしまったな』

『不思議な方達でしたね』

『でも楽しかったわよね』

「ああ、そうだな……」

俺達は、デンライナーの消えていった空を見ながら、其々の言葉を口にした。

「さてと！取り敢えず俺達も帰るか」

何時までもこの場で呆けている訳にも行かないので、俺がそう言った瞬間、再び例のあのメロディーが聞こえて来た。

「まさか！？」

俺はもしかしてと思いながらも、空を見上げる。

『デンライナーだな』

メカ犬がその音の正体を口にした。

先程時を越えて、この世界から消えてしまった筈の、デンライナーが、今再び俺達の前に現れたのだ。

やがて俺の目の前で、停車したデンライナーの扉が開くと、中から出て来た良太郎君達に、俺達は半ば無理矢理引き摺り込まれる。

「如何したんですか一体!?」

揉みくちゃにされながらも、俺は何とか質問を声に出した。

「訳は後で説明するから、兎に角着いて来て!」

「また君達の力を借りたいのよ!」

俺の質問にそう早口で告げる良太郎君とコハナさん。

如何やら俺と彼らの冒険はまだ、もう少しだけ続くらしい。

「クライマックスで行くぜ!!!!」

モモさんの言葉で、再び走り始めるデンライナー。

今日の海鳴は、平和なのだが、如何にも別の時間はそうでも無いらしい。

しかし如何にかなる事だろう。

何せ今の俺達は、何時だって超・クライマックスなのだから!

電王編　完

おまけ

全ての戦いが終わり、俺がへとへとで家に帰ると、そこに待ち受けていたのは、やけに気合の入ったおめかしをした、なのはちゃん達だった。

そしてなのはちゃん達四人は、俺にこう告げる。

「「「「さあ、これからデートに行きましょう」」」」

……ヤバイ。

この事をすっかり忘れてた。

如何やら俺にとって、別の戦いが始まってしまった様だが、これはまた別の機会に話したい。

取り敢えず俺は、目の前の問題を解決する事から始めなければ、ならないのだから……

## ２０１１年特別企画　超・電王トリロジーアフター・エピソードシルバー　帰

どうも作者のＧ－３Ｘです。

約半月をかけて続いた電王編も、取り敢えず今回で終了となります。

次回からはまた本編の更新に戻りますので。

それにしても、これだけ名前と台詞のある人物を、同時に動かしたのは、初めてでしたので、手探りな作業の連続でした。

しかしこれも良い経験と言えるのかもしれませんね。

また機会があれば、別の原作ライダーとの競演を書きたいです。

それでは恐らく、次回は来週以降になりますので、それと次回の本編からは、あの企画がスタートしますので、お楽しみに。

# 第十三話　トリック・オア・トリート&モスキート？【前編】（前書き）

一週間振りの更新になります。

本編でも、これから新展開が始まります。

それと去年の秋に企画した、皆さんに考えてもらったホルダーが、今回の話から出てきます。

最初のホルダーは、クレイさんが考えてくれましたモスキートホルダーが原案となっておりますので。

クレイさん！

考えてもらって本当にありがとう御座います。

それでは楽しんで頂ければ幸いです。

# 第十三話　トリック・オア・トリート&モスキート？【前編】

闇の中、更に深い影が二つ出現する。

「あれが仮面ライダーか。確かに手強そうではあるな……」

低い老人男性の声が、闇の中に一つの音をもたらした。

「ていうかさ～。あのネガ何たらっていう奴？折角僕達が、色々お膳立てしてあげたのに、あっさりやられちゃうんだから、参っちゃうよね～」

続いて聞こえて来た声は、同じく男性の声なのだが、何処か幼さの残る声だった。

「ふん。奴は所詮捨て駒だ。それよりも問題は、これから私達の行う作戦をどう推し進めて行くかだ」

「そんなのさ、取り敢えず邪魔になりそうな奴を片付けてから、適当に進めていけば良いじゃん。それぐらい僕達なら余裕でしょ？」

老人の声主の発言に、幼声の男がそう返答すると、この場を移動する足音が、辺りに木霊す。

「何処へ行く気だ」

先程の音は、如何やら幼声の男が、この場を離れ様とした為に、聞こえて来た足音であり、老人の声主が、それに対し、制止の言葉をかける。

「何処にって遊びに行って来るんだよ?遊びにね……」

幼声の男は、明るい声で答える。

しかしその声からは、何処か寒気を覚える程の鋭さが感じられた。

「……程々にな」

「大丈夫だって」

会話を交わした後、再び闇の中で足音が鳴り出し、やがて二つの影の内、一つが完全に消えてしまった。

「ふん。まずは様子を伺って見る事も、一興か……」

そしてこの言葉を最後に、もう一つの影も消え去り、この場には冷たい風を感じる闇だけが取り残された。

「ふ〜ん。私がロサンゼルスに行ってる間に、そんな事があったん

だ」

そう言って恵理さんは、淹れたてのコーヒーを口にする。

「それにしても、恵理さんから送られて来た荷物に、まさかあんな物が入ってるなんて、思いもしませんでしたよ」

俺はそれこそ、他人事だという感じで話を聞く、恵理さんに対して、皮肉を言ってみる。

海外での取材が終わり、日本に帰ってきた恵理さんが、翠屋に久しぶりに顔を出してきた。

最近またバイトに出る回数が増えてきていた俺は、その日も子供店員として、働いており、恵理さんが注文したコーヒーを届けた訳だ。

現在は常連客しか居ないし、時間帯的にも、あまりやる事が無いので、カウンターに居る士郎さんに許可を取り、こうして久しぶりに会った恵理さんと、話をしている所なのである。

その話の内容は、勿論あの荷物の中身についての事だ。

「えっと……純君はメカ竜って呼んでるのよね？本当は私が直接連れて来たかったんだけど、一秒でも早く行きたいって急かすから、手っ取り早くあの子を純君達に送り届けようとしたら、あんな方法になっちゃったのよ」

ごめんねとウインクする恵理さん。

多少の罪悪感はあったのかもしれないが、反省はしてなさそうだ。

恵理さんの話によると、メカ竜との出会いは、元々の取材で、恐竜らしき何かの目撃情報が多かった場所で調査をしていた時の事らしい。

今にして思えば、その恐竜の目撃情報も、現地の人達が、メカ竜の影等を見て、噂になった物なのかも知れないなと、俺は思う。

それにしても、問題はメカ竜である。

デンライナーを降りてからすぐ、急いで調べなければいけない事があると、俺達に言った後、何処かに居なくなってしまい、それ以降全くの音信不通なのだ。

まあ、メカ犬も最初はそんな事を言って、一週間程、何処かに行ってしまった事もあるので、そのうち顔を出すとは思うのだが、メカ竜には色々と聞きたい事があるので、出来るだけ早く再会したいものである。

「ところで純君」

話題に出てきていたメカ竜の事を考えていると、恵理さんが俺の頭頂部を指差してきた。

「その帽子、何だか可愛いわね」

「ああ、これですか？もうすぐあの日なんで、翠屋でもイベントをやるそうなんですよ。それで雰囲気を出すための余興にって、桃子さんが無理矢理……」

俺は頭に載せている帽子を触りながら、答えた。

オレンジ色のカボチャの形で、その中心には、笑った顔のシルエットが刺繍されている。

所謂ジャックオーランタンを模した帽子だ。

「そっか、もうすぐハロウィンだもんね」

恵理さんが、納得したように頷きながら言う。

ハロウィンとは、元々はヨーロッパを起源としている民族行事で、ハロウィーンとも呼ばれている。

近年では様々な国に広まっており、日本でもイベントの一つとして、認知され始めているものだ。

トリック・オア・トリート、お菓子をくれなきゃいたずらするぞ、と言いながら、仮装をした子供達が民家等を回り、お菓子を貰うというのが最も有名な話だろう。

この習慣の原点はヨーロッパでの習慣が元になっており、キリスト教で推奨されていた魂のケーキの分配が、時代の変化と共に、お菓子に変わり、何時の頃からか、クリスマスの様に別の、日本では楽しむ為のイベントへと変化した。

俺の被っている帽子の元である、ジャックオーランタンとは、ハロウィンでも多く用いられている物だ。

カボチャの中身を刳り抜き、顔の形に穴を開けて、中に蝋燭等を入

れて、手作りのランタンにして、家の中や、玄関に飾り、魔除けとするのが、習わしとされているらしい。

店内を見渡せば、俺の頭の帽子以外にも、多くのハロウィングッズが、飾られている事が分かる。

海鳴市でも、市を上げてのイベントが開催されるので、この近辺のお店も、それに便乗している所が殆どだ。

翠屋の場合は、桃子さんの趣味による部分が高い気もするが……

俺と恵理さんの話の内容が、メカ竜の話から、完全にハロウィンの話になった頃、翠屋の扉が開かれた。

「いらっしゃいませ」

扉の開く音が聞こえたと同時に、俺は恵理さんとの会話を切り上げて、扉を開けてやって来たお客様の対応を開始する。

「はあ……何時ものので」

入ってきたのは、二十代前半の男性で、俺に溜息混じりにそれだけ言うと、カウンター席に座ってしまった。

「かしこまりました」

俺は注文を取り、すぐに士郎さんに注文内容を伝える。

この男性は、翠屋の常連の一人で、田中さんという。

何時ものとはコーヒーと、フレンチトーストの事で、田中さんは翠屋に来ると、必ずこれを頼む。

田中さんの注文は、俺も何度も取っているので、何時ものと言えばそれで通じてしまう程だ。

それにしても、最近の田中さんは、何時にも増して暗い雰囲気を纏っている。

普段から物静かな性格の人なので、暗い印象を待たれやすいというのもあるのだが、最近の田中さんは、それだけでは、説明しきれないレベルの暗さを誇っているのだ。

「ご注文の品をお持ちしました……また何かあったんですか？田中さん」

俺は注文の品である、コーヒーと、フレンチトーストを置きながら、田中さんに話しかける。

「……聞いてくれるかい、板橋君」

「ええ、まあ……」

というか、注文の品を置いてこの場を離れようとした、俺のエプロンを掴みながら、捨てられた子犬みたいな目をする大人と遭遇してしまったら、聞くしか道は無いだろう。

「そうか、実はね……」

田中さんは、そう言うと、俺のエプロンを掴む手を放して語り始め

る。

最初から話す気、満々だったな、田中さん……

田中さんの話を聞くと、何でもここ三ヶ月程前から、同じ職場に好きな女性が出来たそうで、彼なりのアタックを続けてきたのだそうだ。

その成果が、あったのか、やっとデートに漕ぎ着け、その場で告白をしようとしたらしいのだが、結果は散々だった。

しかもその理由というのが……

「彼女……既に結婚していたんだ」

絶望的な表情をしながら呟く田中さん。

如何にもその女性は、とても気さくな人なのだそうで、男女隔てなく接してくれるらしい。

つまりデートと、意識していたのは、田中さんだけだった様で、女性の方は普通に男友達と遊ぶといった感覚だったのだそうだ。

「はあ……如何して俺ってこうなんだろう」

再び深い溜息を吐く田中さん。

実は田中さんの話は、これ一つでは無い。

小さな不幸から、大きな不幸まで、兎に角災難な目に遭う事が、常

人よりも圧倒的に多いのである。

まるで良太郎君と同じ体質の様な気もするが、田中さんの場合はそれとは少し違う。

どちらかと言えば、体質というよりも、何処かに意識が行くと、注意散漫になってしまい、それが失敗へと直結してしまうのだ。

今回の好きな女性が結婚していたという話も、聴いてみれば、職場でその女性が既婚者だったのを知らなかったのは、田中さんだけだったそうだし、予め周りの話に耳を傾けていれば、防げていたかもしれないのである。

世の中に全知全能な人等、早々居るわけが無いので、殆どの人が失敗する事もあると思うのだが、それにしても田中さんの間の悪さは、筋金入りだ。

「えっと、その内良い事もありますよ？」

最早俺に言えるのは、何の根拠も無い様な、励ましの言葉ぐらいのものである。

「……ありがとう。何だか板橋君に話を聞いて貰っていたら、少しだけ元気が出て来た気がするよ」

弱々しい笑顔を浮かべながら、俺に感謝の言葉を述べた次の瞬間、田中さんの目が怖いくらいに見開いた。

「ど、如何したんですか？」

俺は突然の田中さんの表情の変化にドン引きしながらも、何があったのか尋ねてみる。

「あ、あああああ、ああ、あの、綺麗な女性は、だ、だ、誰何だ！？」

田中さんの視線の先を見ると、そこには優雅にコーヒーを飲む恵理さんの姿があった。

「恵理さんが如何かしたんですか？」

「あの女性は、恵理さんと言うのかい！？」

「え、ええ、そうですけど……」

俺は鬼気迫る勢いで詰め寄る田中さんに、狼狽しながらも、何とか答えを返す。

すると田中さんは、何を思ったのか、突如席を立ち、恵理さんの前に歩き出す。

恵理さんの目の前までやって来た田中さんは、驚く恵理さんに、直角のお辞儀をしながら叫んだ。

「好きです！！！俺と付き合ってください！！！」

その突然の告白に、店内に居た全ての人間が注目する。

数秒の静寂の後、恵理さんが、口を開く事で、その静寂が破られた。

「えっと……ごめんなさい」

翠屋の中で、恵理さんの発した言葉が虚しく響く。

その言葉を聞いたであろう田中さんは、恐ろしい程の無表情で、今度は俺の前にやって来て、ズボンのポケットから、財布を取り出して、五百円玉を一枚と、百円玉が三枚そして、十円玉を四枚出すと、それを俺に手渡した。

「し……」

良く聞き取れないが、田中さんが身体を小刻みに、震わせながら呟き出した。

「失礼しましたあああああああああああ！！！！！！！！」

そして最後は叫びながら、田中さんは翠屋の扉を駆け抜けていく。

「あ、ありがとうございました……」

俺は決まりなので、翠屋を出て行く田中さんに言葉を投げかける。

田中さんの間の悪さの原因の一つには、普段は物静かなのに、意識が何かに行くと、その物事に対して、暴走する事があるというのは、間違い無いだろう。

俺の手の中に握られた総額８４０円の硬貨が、独特の音を鳴らす。

それは田中さんの注文した、フレンチトーストにコーヒーの代金だった。

走り去る前に、支払いを済ませていく辺り、こういった出来事が、今まで何度あったのか窺い知れてしまい、俺は涙を流しそうになってしまった。

『随分と悲惨な、有様となっているな』

「何なんだよこれ……」

翠屋でのバイトが終わり、自宅で寛いでいる時に、タッチノートの緊急警報が鳴り響いた。

俺とメカ犬は、変身してチェイサーさんを呼び出し、すぐさま現場に向かったのだが、その現場である商店街を見て、俺は思わず言葉漏らしてしまう。

「痒い～！！！」

「あ～ムズムズするううううう！」

「掻き毟ったら痛くなってきた……」

ハロウィンムードが漂う商店街のど真ん中で、自分の身体の全身を掻く、海鳴市民達。

良く見れば、その人達は全員幾つもの腫物が出来ており、最初は何かの病原菌に感染したのかと、思ったのだが、俺の目の前を、独特の羽音を立てながら飛行する約一ｃｍ程の生物を、目撃した事で、それが間違った考えである事に気付く。

「よっと！」

俺は半ば本能的に、目の前までやって来た生物を両手を勢い良く合わせる事で、圧死させる。

「蚊だな……」

『うむ。蚊だ』

『確かに蚊ね』

俺とメカ犬、そしてチェイサーさんが、俺の手の中で圧死している生物を見て、その名称を言った。

蚊。

日本では夏場に繁殖期を迎える昆虫で、世界各地に生息している、有名な害虫の一つである。

そして更に良く見れば、俺が潰した一匹だけではなく、そこらじゅ

うに、大量に飛んでいた。

恐らく痒いとのた打ち回っている人達は、皆この蚊達に刺されたのだろう。

「しかし何で、この時期に蚊がこんなに居るんだ？」

蚊が多い時期は、確かに夏ではあるが、冬でも無い限り、蚊を目撃する機会は何気にあったりする。

確かに十月でハロウィン間近なこの時期に、大量に目撃するのは、異常な事だが、一番の問題は、其処じゃない。

何故蚊が、血を吸っているのかという事だ。

蚊というのは、血を吸うイメージが、大きいがそれは、種類によって違うし、日本に原生している蚊は、繁殖時期である夏に、メスの蚊だけが、卵を産む為の栄養を求めて吸うのである。

それ以外の時期の蚊や、オスは普段は水を飲んでいるらしいのだが、現に今目の前で、多くの人達が、蚊に刺されて苦しんでいるのだ。

『マスター！この先を抜けた所にホルダー反応がある。急ぐぞ』

蚊について考えていると、バックル状態のメカ犬に先を急げと、催促された。

「そうだな」

確かにここで、あれこれ考えていても、答えは出ないのだから、メ

カ犬の言う通り、先を急ぐのが、得策だろう。

俺はチェイサーさんに頼み、ホルダー反応がより強く出ている場所へと、移動を開始する。

その場所は、俺達が先程まで居た場所から、目と鼻の先であり、程無くして、ホルダーを目視で捉えた。

「恋愛が何だ！！！！俺は彼女なんて要らない！！！！彼女がいる奴と彼氏が居る奴は！！！！全員痒さで地べたで這い蹲れば良いんだ！！！！！！！！！！ちくしょおおおおおおおおおおおおおうううううううううう！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

ホルダーはそう叫びながら、大量の蚊を先導して、市民の人達にけしかけていた。

背中に薄く細い羽を生やし、口元は鋭く延びるそいつは、まさに蚊と人間が融合した様な容姿をしている。

『奴がこの事件を巻き起こしているとみて、間違い無いだろうな』

「そうだな」

メカ犬の言葉に頷きながら、俺はチェイサーさんにお願いして、更に加速してもらい、一気にホルダー目掛けて突っ込む。

「ふはははははは！！！！！！え！？」

高笑いを上げながら、蚊を撒き散らすホルダーだったが、フルスピードで急接近する俺達に気付き、驚愕の声を上げる。

しかし気付くのが遅すぎた。

既に俺達は、ホルダーの目の前にまで、迫って来ており、回避する事もままならないだろう。

そしてホルダーにとっての悲劇は現実のものとなる。

「ぺぷし！？」

チェイサーさんのバイクタックルを喰らい、ホルダーは見事なまでの放物線を描きながら吹き飛んでいく。

その吹き飛び振りは、過去のチェイサーさんに吹き飛ばされた歴代ホルダー達の中でも、上位を狙える程だった。

俺はチェイサーさんにお礼を言ってから、座席シートから降りて、未だに衝撃で痙攣を起こしているホルダーに近付く。

「さてと、何だってこんな事をしてるんですか……って、聞こえてないか」

如何やらチェイサーさんのバイクタックルが、過去最高にクリーンヒットしたらしく、ホルダーは意識を失っている様なのだ。

『今の内に倒してしまおうマスター』

「ああ」

メカ犬の提案に、俺は肯定の返事を返しながら、バックルのタッチ

ノートを引き抜こうとしたその時である。

「駄目だよそんな事しちゃ」

突如俺の耳にそんな声が入って来た。

咄嗟に声のした方角に振り向くと、其処に居たのは、藍色の身体をした謎の怪人だった。

「ホルダー？」

当然ながら藍色の身体の一般人等俺は見た事が無いし、そう考えるのが妥当だろう。

しかし、謎の怪人から帰ってきた返答は、否定の言葉だった。

「ホルダー？そんな奴等と僕を一緒にしないでくれるかな。僕はホルダーを超えた存在……そうだね、仮にオーバーって名乗る事にしようかな」

まるで子供の様に、無邪気な話し方をする、オーバーと名乗る藍色の怪人だが、俺はそのオーバーの声に得体の知れない、何かを感じ取る。

『貴様……もしかしてワタシと同じ世界から？』

「さあ？それは如何だろうね。それぐらい自分で考えなよ。でも無駄になるかもね。だって……」

メカ犬の言葉に対して、あっさりと返事を返したオーバーは、おも

むろに手を突き出すと、その手が光を発して、一振りの剣を生成する。

「ここで死んじゃったら、そんな事考える必要無くなるでしょ！！！」

そう言うとオーバーは、生成した剣を振りかざし、俺に襲い掛かってきた。

「くそ！？」

俺はオーバーが発し続ける得体の知れなさに、嫌な予感を感じていた為、何とか不意の一撃を避けきり、バックルの右側をスライドさせて、赤いボタンと黄色いボタンを続けざまに押す。

『パワーフォルム』

『パワーブレード』

メタルブラックのボディーはクリムゾンレッドに染め上がり、俺の右手には、パワーフォルムの専用武器である、赤い刀身が特徴的な、パワーブレードが握られる。

「は！」

俺はパワーブレードの刃で、追撃を仕掛けてくるオーバーの斬撃を受け止めて、パワーフォルムの特性でもある力で、無理矢理押し返す。

「へえ、それが噂のフォルムチェンジって奴？面白いね！」

そう言うと再びオーバーは俺に向かって、攻撃を仕掛けてくる。

俺もそれに対抗する為に、パワーブレードを身構えて、臨戦態勢を整えた。

そして俺とオーバー、両者の刃が光を放ち、強い衝撃が生み出されたのだ。

# 第十三話　トリック・オア・トリート&モスキート？【前編】（後書き）

メカ犬のワクワク何でもコーナー【第一回】

純「あれ？何だかタイトルが変わってる上に、台詞の上に名前が入ってる？」

メカ犬「その通りだマスター。今回から、何でも相談室改め、ワクワク何でもコーナーがスタートするのだ」

純「随分と唐突だな」

メカ犬「うむ！これからは、このコーナーで更なるフリーダムな活躍をして見せるぞ！」

純「そ、そうか（今以上に自由になったら、手の付けようがなくなりそうだけどな）」

メカ犬「まあ今日は挨拶ついでに、今回出て来たオーバーの正体を……」

純「いや！それを後書きで言うのは、幾らなんでも不味いだろう！？」

メカ犬「うむ。そうか。取り敢えずこのコーナーではこれから様々

な企画をやって行くから、マスターも協力を頼むぞ！」

純「ああ、出来る範囲でな」

メカ犬「それでは本格的なスタートは次回からになるので、今回はここまでだ！」

純「皆さん次回でお会いしましょう！」

メカ犬に言ってもらいたい事を何でも募集しますので、お気軽にご応募して頂けると嬉しいです。

# 第十三話　トリック・オア・トリート&モスキート？【後編】（前書き）

後編になります。

楽しんで頂ければ幸いです。

# 第十三話　トリック・オア・トリート&モスキート？【後編】

俺とオーバーの刃が、鍔迫り合い、火花を巻き起こす。

先に動いたのは俺の方だ。

現在パワーフォルムで戦ってる俺には、機動力が無い。

基本的に相手が此方側に近づいてくれなければ、攻撃する事もままならないのである。

だからこそ、相手が戦意剥き出しで向かってくる内に、此方から仕掛けなければならない。

「はあああああ！！！」

俺はパワーブレードを握る手に、ありったけの力を込めて、オーバーの身体を、剣ごと強引に後方に吹き飛ばす。

「お！凄い力だね～」

それでも何処か余裕を見せるオーバーは、軽口を叩きながら、先程まで居た場所から、２m程後ろの地点に着地する。

『今だマスター！』

「ああ！」

メカ犬が俺に叫び、その叫びに俺も頷く。

直接剣を交えて分かったのだが、あのオーバーと名乗る奴の実力は相当なものだ。

今は何故か様子見の為なのか、手を抜いているみたいだが、俺達にとっては、それこそが勝機。

オーバーが実力を発揮する前に、一気に畳み掛ける。

俺はバックルから、タッチノートを引き抜き、パワーブレードの溝にスライドさせた。

『ロード』

音声が流れる事を確認しながら、俺は再びタッチノートを差し込む。

『アタックチャージ』

ベルトから光が発生して、その光が右腕のラインを伝い、パワーブレードの刀身に集約される。

「へ～。何か凄そうだね？」

俺のやっている事を、楽しそうに見ているオーバーだが、すぐにその余裕を後悔させてやる！

「こいつで決めるぜ」

俺は光が集約されたパワーブレードを空に掲げる。

「パワーブレード」

そして刃をオーバーに向けて、全力で振り下ろす。

「ブレイクインパクト」

全力で振り下ろした一撃は、凄まじい衝撃波を生み出し、その進行方向に居るオーバーに対して、猛威を振るう。

並みのホルダーであれば、一撃で倒せる技なのだが、しかし今俺が戦っている相手は、並みの相手ではなかった。

「な!?」

俺は驚愕の声を上げる。

オーバーがブレイクインパクトの衝撃波をその手に握る剣で、受け止めたのだ。

「はあ!!!」

しかもオーバーは、掛け声と共に、そのまま剣を斜めに傾ける事で、衝撃波の流れを変えて受け流してしまった。

『防いだだと!?』

その光景に、メカ犬も驚愕する。

「ふう〜。かなりの威力だね。僕の腕が痺れちゃったよ」

言いながら手をぶらつかせる、オーバーだが、その言動には、やはり余裕が感じられる。

「さてと……」

そう言いながらオーバーが剣を頭上に掲げるのを見て、俺は咄嗟に身構えるのだが、ここでオーバーは予想外の行動に出た。

オーバーは頭上まで上げた剣を、手放してしまったのだ。

その手を離れた剣は、初めから其処には何も無かったかの様に、光となって四散してしまう。

『如何いうつもりだ？』

てっきり攻撃をしてくると、身構えた所に、予想外の行動をしたオーバーに疑問を抱いたのだろう。

メカ犬がその行動を行った当人であるオーバーに、質問をぶつける。

「今日はただの顔見せだからね」

「顔見せ？」

オーバーの返答に俺はオウム返しで口を開く。

「そうだよ。でも安心したよ。あんまり弱いようならこのまま倒しちゃう所だったからね」

そう言って、オーバーは俺達に背を向けて、歩き出す。

「待て！」

『貴様には聞きたい事が、山ほどあるのだ！』

その姿に、俺とメカ犬が待ったをかける。

突然出て来たと思えば、いきなり襲い掛かってきた上に、このオーバーという奴は、自分の事をホルダーを越えた存在だと言っていた。

このままオーバーを逃がしては行けないと、俺の本能が警報を鳴らしているのだ。

「僕なんかに構ってて良いのかな。ホルダーの方はもう逃げちゃったみたいだけど？」

オーバーはそう言って、ホルダーの倒れていた場所を指差す。

俺がその方向に、視線を向けると、確かに先程まで倒れていたホルダーの姿が、忽然と消えてしまっていた。

しかしそれ以上に驚いたのは、すぐに視線を戻した筈なのに、オーバーの姿までもが、何処かに消えてしまったという事である。

「居ない……」

『如何やら逃げられたようだな』

先程まで戦いの場となっていた場所には、虚しく俺とメカ犬の声だけが響き渡る。

「あのオーバーとか名乗ってた奴は、一体何者なんだ?」

『すまないマスター。それはワタシにも分からない。ただ一つ言える事は……』

質問をぶつける俺に、メカ犬は分からないと答えながらも、自身の考えを口にする。

『この海鳴市で、今まで以上の何かが、始まろうとしている』

闇の中に一つの闇よりも更に暗い影が佇んでいる。

しかし其処に変化が生じ、影はもう一つ出現した。

「ただいま～」

後から現れた影が、明るい声で、言葉を発する。

「ふん。随分と派手にやってくれたな」

その言葉に返事を返すのは、先程の声とは、対照的に、何処までも低く暗い老人の声だった。

「まあ、そんなに硬い事言わないでよ。やっぱり遊びは楽しんでこそ遊びなんだしさ」

「私が言ってる事は、そういう事ではない。この時点で私達の存在が明るみになるという事は、作戦内容の漏洩にも繋がる可能性が、あるのだぞ」

「そんなにカリカリしないでよ～メルト」

「メルト？」

「あんたの名前さ。僕がオーバーで、あんたの名前がメルト。僕達って最近生まれたばかりなんだから、名前ぐらいは付けて置いた方が良いでしょ？」

「……好きにしろ」

「そうするさ」

「だが暫くは大人しくしておけ。今私達が動く事は、得策ではない」

「はいはい。暫くは大人しくしておきますよ」

闇の中にあって更に深い闇を持つ二つの影は、その言葉を最後に、周りの闇に溶け込むかの様に消えていった。

オーバーと戦ってから、三日が経ちハロウィン当日となった。

あれから奴は姿を現さないし、ホルダーも出てきていない。

不安は残るが、探そうにも何の手掛りも無い現状では、如何にもお手上げなのである。

「ねえ純君。この格好どうかな？」

「似合ってるよ。なのはちゃん」

考え事をしていた所で、なのはちゃんが俺に話しかけてきた。

俺はなのはちゃんの姿を見てから、素直な感想を言う。

なのはちゃんの今の格好を、一言で表すとするならば、猫娘である。

シンプルなレモンイエローのワンピースに、猫耳カチューシャ。

更にはご丁寧に肉球グローブと、どういった原理で動いているのか分からないが、お尻の方からは長い尻尾がユラユラと、揺れている。

「ありがとう。純君も似合ってるよ」

「そうかな？」

「うん。凄く似合ってるよ」

「だと良いんだけどね」

現在の時刻は、もうすぐ夕方から夜へと変わる時間帯だ。

今日はハロウィン当日という事もあり、これからイベントが催される。

この近辺に住んでいる子供達が、仮装をして集まり、このイベントに協力している個人宅や、お店を回り、お菓子を貰うというものだ。

俺となのはちゃんは、一緒にイベントに参加する為、集合場所である、多目的ホールへと向かっている最中なのである。

ちなみに他の皆とは、集合場所で待ち合わせする事になっている。

周りを見てみれば、俺達以外にも、仮装をした子供達が、続々と家から出てきて、同じ場所を目指しているので、既にちょっとしたパレードの様だ。

ハロウィンでは雰囲気を壊さない様にする為に、子供を一人で家か

ら送り出すのだが、それでは流石に危ないので、有志の大人達が、何人も辺りを見回りしている。

勿論大人の人達も、仮装をしている。

『キンキュウケイホウキンキュウケイホウキンキュウケイ……』

俺が肌身離さず持っているタッチノートから、警報が鳴り響く。

「ま、また変なアラームが鳴ってるよ純君?」

タッチノートの警報音を聞いたなのはちゃんが、俺に言ってくる。

そういえば以前なのはちゃん達には、タッチノートの警報を、タイマー式のアラームだって誤魔化した事があったっけ。

「なのはちゃん。集合場所に行く前に、母さんに頼まれていたお使いがあったのを思い出したから、先に行ってて!」

俺はそれだけ伝えると、全力で走り出す。

「え、ええ!?」

なのはちゃんは突然、俺にそんな事を言われたからなのか、慌てふためく。

これがすずかちゃんだったら、確実に追いつかれていただろうが、運動の苦手なのはちゃんなら、追いつかれる心配はまず無いだろう。

かなり強引に振り切ったので、後が怖いが今は緊急事態なので、致し方無い。

『マスター！』

子供達が進む道から少し外れた所で、俺はメカ犬と合流を果たす。

「タッチノートから、警報が鳴ったけど、この近くにホルダーが居るのか！？」

『うむ！ここからかなり近い！急ぐぞマスター！』

「分かった！」

俺とメカ犬は、会話を簡潔に纏めると、再び走り出す。

メカ犬の言う通り、チェイサーさんを呼ぶまでも無く、俺達はホルダーの居る場所へと辿り着いた。

其処に居たのは、三日前に商店街を襲撃した蚊を操るホルダーだった。

「ハロウィンなんて浮かれたイベント……俺が潰してやる！！！」

何やら物騒な事を言っているホルダー。

前回も彼女がどうとか言っていたが、彼の私生活に何が有ったというのだろうか。

まあ、何があったとしても、それで他人に迷惑をかけるのは、絶対

にやってはいけないことなので、俺とメカ犬は、急いでホルダーの前に躍り出る。

「止めろホルダー！」

『悪さも其処までにして置くんだな！』

俺とメカ犬はホルダーの前に立ち塞がり、その進行を遮った。

「……板橋君？」

俺の姿を見たホルダーが、何故か俺の苗字を言い当てた。

「何で俺の名前を？」

もしかしてこのホルダーの正体は、俺の知ってる人物なのだろうか。

「……ああ、この姿じゃ分からないのも無理ないか」

ホルダーはそう言うと、全身を緑色の光で包み込む。

その光が消えた時、ホルダーの姿が、素体となった人の姿へと戻る。

その人物は俺の良く知る人物だった。

「田中さん！？」

俺はその人物の名を口にする。

「君とは知らない仲じゃないから、忠告しておくよ。ここは今から

地獄になるから、離れた方が良い」

「田中さん……如何してそんな事を言うんですか？」

田中さんは、俺の質問を聞くと、普段の物静かな雰囲気は、なりを潜め、怒りを露にした。

「ムカつくんだ！何もかも！！！俺がこんなにも上手くいかないのに、周りの奴等は、そんな俺を見ながら嘲笑っていやがる！！！だから俺はそんな奴等に復讐してやるのさこの力で！！！！」

そう言うと、再び田中さんの全身が緑色の光に包まれて、ホルダーの姿へと変わる。

『マスター。田中殿は、完全に暴走プログラムに意識を支配されている様だぞ』

「みたいだな」

俺はメカ犬と会話を交わしながら、タッチノートを取り出す。

「田中さん」

タッチノートを開きながら俺は、田中さんに話しかける。

「ん、まだ逃げていなかったのかい？」

「ええ、田中さんをこのまま放っておく訳には行かないですし、今の内に言っておきたい事があるんで」

「言っておきたい事？」

俺は一度だけ軽く頷いてから、田中さんに語りかける。

「確かに田中さんは、何かに失敗する事が多いですけど、それは誰にだって言える事なんです」

「何が言いたいんだい？」

「たとえ人は、失敗して倒れたとしても、必ず立ち上がる強さを持っている筈です。自暴自棄にならないで下さい。田中さんは誰よりもその強さの大切さを知っているんですから」

何時も失敗をしては、落ち込む田中さんは、その度に翠屋にやって来て、コーヒーとフレンチトーストを頼んで、店員の俺達に愚痴を零す。

だけどその後は、笑顔で元気になったと俺達に報告してくれる。

田中さんは、何度失敗したとしても、再び笑顔で明日を頑張ろうとする強さを胸に秘めているんだ。

だからこそ……

「俺は田中さんを止めます」

俺はタッチノートのボタンを押す。

『バックルモード』

音声が流れると同時に、メカ犬が銀色のベルトに変形して、俺の腹部に巻きつく。

「変身」

俺は素早く音声コードを入力して、バックルにタッチノートを差し込む。

『アップロード』

白銀の光が俺の全身を包み、その姿を一人の戦士へと変えて行く。

光が飛散し現れたその姿は、メタルブラックのボディーに、四肢に伸びる銀のラインとV字の角飾り。

そして赤い二つの複眼が、圧倒的な存在感を感じさせる。

「板橋君が、仮面ライダーだったのか……」

俺の変身を見たホルダーが呟く。

その通り。

今の俺は板橋純という、ヘタレ小学生ではなく、一人の戦士。

仮面ライダーシード。

それが今の俺だ。

「悪夢はここで終わらせる」

俺は言いながら、動揺を見せるホルダーに向かって走り出す。

「は！」

一気にホルダーの懐に入り込み、拳を連打で叩き込む。

「ぐう！？」

ホルダーも反撃とばかりに、腕を振り回してくるが、俺はその攻撃を掻い潜りながら、更に拳を打ち込んでいく。

「くそ！！！」

ホルダーはそう言いながら、俺の拳が届かない位置まで下がると、背中の羽を広げて空へと舞い上がる。

『逃げる気だぞマスター！』

「させない！」

メカ犬の報告を聞きながら、俺はベルトの右側をスライドさせて、青いボタンと黄色いボタンを続け様に押す。

『サーチフォルム』

『サーチバレット』

メタルブラックのボディーは、スカイブルーへと染め上がり、俺の右手にはこのフォルムの専用武器である銃、サーチバレットが握ら

れる。

「こいつで落とす」

俺はサーチバレットの照準をホルダーの羽に合わせて、引き金を引く。

銃身からは光弾が射出され、ホルダーの羽へと向かう。

「ぐあ！？」

光弾は見事にホルダーへと命中し、飛行能力を失ったホルダーは、なす術無く地面へと落下する。

地面にホルダーが落下した事を確認した俺は、バックルからタッチノートを引き抜いて、サーチバレットの溝にスライドさせた。

『ロード』

音声を確認しながら、俺は再びタッチノートをバックルに差し込む。

『アタックチャージ』

ベルトからは光が発生して、右腕のラインを通り、サーチバレットの銃身へと集約される。

「こいつで決めるぜ」

光が集約されたサーチバレットを構えながら、俺はホルダーにその銃身を向ける。

「サーチバレット」

よろけながらも立ち上がり始めたホルダーに対して、俺は引き金を引く。

「ガトリングブースト」

光弾が数珠繋ぎで、連続射出されて、その全てがホルダーに命中する。

そしてホルダーは、光弾の全てを喰らった後に、爆発を引き起こす。

爆発後に残ったのは、気絶した田中さんだけだった。

これで終わったと思ったその瞬間である。

突如拍手が聞こえて来た。

その音のする発生源に目をやると、其処に居たのは藍色の怪人。

「オーバー!?」

俺は急ぎサーチバレットの銃口を、オーバーに向ける。

「おっと!そう警戒しないでくれるかな!今日は別に戦いに来た訳じゃないんだから」

相変わらず余裕を見せる態度と口調で此方に話しかけてくるオーバー。

『ならば何をしに来たと言うのだ!?』

メカ犬もオーバーの動きに警戒しながら、質問をぶつける。

「見学だよ」

「見学？」

「そうさ、見学。それと報告かな、暫くは君達の前に顔を出さないと思うから、その報告にね」

オーバーからはまたしても予想外の言葉が発せられる。

『如何いう事だ？』

「僕も結構忙しい立場なんでね。まあ、心配しなくてもその内また会えるさ」

「喋り過ぎだぞオーバー」

俺達の会話に突如として新たな乱入者が現れる。

声のした方角を向くと、其処に居たのは、全身が灰色の怪人で、オーバーと比べると、かなり恰幅が良い体格をしていた。

「やはりここに来ていたか。暫くは大人しくしておけと言って置いた筈だが？」

「ごめんメルト。でもさ、別に会いに行くなとは言ってなかった訳

だし、作戦さえばれなきゃそれで良いじゃん」

突如現れた怪人を、オーバーは、メルトと呼んでいた。

恐らくはそれが、奴の名前なのだろう。

それにもう一つ気になる事を言っていた。

作戦と言っていたが、奴等は何をしようとしているんだ？

「兎に角行くぞ！」

メルトと呼ばれた怪人が、オーバーに言いながら、右手に光を発生させて、大型の銃を作り出し、その銃口を俺に向けた。

「さらばだ仮面ライダー。またいずれ会う事となるだろうがな」

そう言いながら、銃の引き金を引き、一発の銃弾が、俺の足元の地面に命中して、爆煙を発生させる。

「くそ！？」

その煙は俺の視界を遮り、オーバーとメルトの姿が目視出来なくなってしまう。

やがて煙が晴れると、其処には俺と、気絶した田中さんだけが残されており、オーバーとメルトの姿は消えてしまった。

『またしても逃げられたか』

「みたいだな……」

自分自身をホルダーを超えた存在だと名乗っている上に、何かの作戦を実行に移そうとしている、オーバーとメルト。

メカ竜の奴も、ろくに話をしない内に何処かに行ってしまうし、分からない事だらけである。

確かにメカ犬の言う通り、この海鳴市で、何かが起ころうとしているのかもしれない。

「遅いわよ純！」

多目的ホールに辿り着いた直後、俺はアリサちゃんに怒鳴られた。

「心配したんだよ」

「純君てば、突然走っていなくなっちゃうんだもん」

「それで用事は済んだんか？」

それに続いて、すずかちゃんとなのはちゃん、最後にはやてちゃんが話しかけてきた。

ちなみに皆してなのはちゃん同様、猫娘の格好をしている。

「本当にごめんね。もう用事は片付いたからさ」

あの後俺は、ハロウィンの事を思い出して、気絶した田中さんを、メカ犬に任せて集合場所である多目的ホールに急いでやってきた訳だ。

何とか全体の集合時間には間に合ったものの、それでも俺が皆の中では、一番遅かったので、怒られるのは仕方が無いだろう。

「それにしても……ぷ！」

先程まで、怒りを露にしていたアリサちゃんの顔が、俺の顔を見続ける内に、緩んで行き、最後には噴出した。

「中々似合うで純君」

「そうだね」

「やっぱり皆もそう思うよね」

俺を見て口々に言ってくるなのはちゃん達。

いや、如何見てもアリサちゃんの反応で、俺の今の格好が似合って

ないと言っている様なものだろう。

今の俺の格好は、普段着であるが、頭の上には猫耳カチューシャが装備されている。

まあ、所謂猫男という奴であろうか。

アリサちゃんはさっきから、お腹を抱えて笑っているし、逆にすずかちゃんは、俺達全員を怪しい視線で見つめていたりする。

先程の戦いとは、別種の不安を抱きながら、ハロウィンの夜は更けていった。

「はあ……板橋君。何時ものをお願いするよ」

ハロウィンのイベントが過ぎてから二日後の事である。

翠屋にやって来た田中さんは、溜息を吐きながら、何時もの様にカウンター席に座り、バイト中の俺に注文をしてきた。

「えっと、また何かあったんですか？」

何時ものという事で、コーヒーとフレンチトーストを、田中さんの席に持ってきた訳だが、またしてもエプロンを鷲掴みにされたので、俺は仕方なく暗いオーラを醸し出す田中さんに、質問を試みる。

「うん。実は今回は結構深刻な事でね。最近の記憶が全く無いんだ」

「それは……」

恐らく暴走プログラムと素体となった田中さんを、引き離した時に起きる副作用の為だと思うのだが、どうやって説明すれば良いのだろうか。

俺が内心如何するべきかと、悩んでいるその時、翠屋の扉が開かれる。

「純君居るかな？ちょっと頼みたい事があるんだけど」

翠屋にやって来たのは、海鳴ジャーナルで雑誌記者をしている恵理さんだった。

頼み事って……物凄く嫌な予感がするんですけど。

「ねえ……板橋君。あの綺麗な女性と君は、知り合いなのかい？」

俺と会話をしていた、田中さんが、両目を見開き、恵理さんを捉えながら、質問してくる。

「何言ってるんですか。知ってるも何も、田中さんは恵理さんに一度……あ」

そこで俺は、田中さんが最近の記憶を失っていたという事を思い出す。

このままでは不味いと思い、田中さんを止めようとしたのだが、時既に遅く、田中さんは恵理さんの目の前に立ち、翠屋全体に響く声で、以前見た光景を再現した。

「好きです！付き合ってください！」

「ごめんなさい」

やっちゃったよ。

しかも今度は恵理さん即答だし……

そして田中さんは、俺に無言で近づくと、数枚の硬貨を渡して、背を向ける。

「失礼しましたあああああああ！！！！！！！！！！！」

田中さんはそう叫ぶと、全力疾走で、翠屋を駆け抜けて行った。

「何なのかしらあの人？」

恵理さんが、田中さんの走り去る背中を見ながら、首を傾げる。

「ははははは……」

俺はこの一連の流れに、８４０円分の硬貨を握り締めながら、苦笑いを浮かべて、走り去る田中さんにありがとうございましたと言う事しか出来なかった。

そして田中さんに心の中で声援を送る。

また明日も溜息を吐きながら、何時ものと翠屋で注文して愚痴を零すのだろうと思いながら。

今日の海鳴は、大きなイベントが終わって、静けさを取り戻した何でも無い日ではあるが、一部の男性にはとっては、知らない内に同じ女性に二度振られた日という失恋記念日ではある、まあ、取り敢えず平和という事に、かわり無いので良しとしておこう。

# 第十三話　トリック・オア・トリート&モスキート？【後編】（後書き）

メカ犬のワクワク何でもコーナー【第二回】

メカ犬『さて今回は、如何いう話をしようか』

純「何も決めて無いのかよ！？」

メカ犬『む！そんな事は無いぞ！ただ何から話して良いのか整理がつかないだけだ！！！』

純「威張って言う事じゃ無いだろう……」

メカ犬『良し！それではこの前の電王と共闘した時に変身した新フォルムについて話をしよう』

純「お！以外とまともな話だ」

メカ犬『正式な名称は、ダウンロードガイアフォルム。地上戦を目的として主に攻撃力特化が、図られた状態だ！』

純「へ～それで？」

メカ犬『続きは次回で！！！』

純「え!?こんな中途半端な所で、次回に持ち越すのか!?」

メカ犬『それではまた次回で会おう!」

続く

## 第十四話　アウトロー・スピード・ウォーズ【前編】（前書き）

少し遅れましたが、更新になります。

それと今回のホルダーは、なっぺさんが考えてくれたバイクホルダーが原案となっております。

この案は複数来ていたので、他の人の案も混ざってはおりますが……

それでは楽しんで頂ければ幸いです。

# 第十四話　アウトロー・スピード・ウォーズ【前編】

「舐めてんじゃねえぞテメエ！！！」

「あんだよやんのかあああ！！！」

海鳴市内のとあるクラブハウスの中心で、見るからに不良と分かる二人が、互いを罵倒している。

片や長ランにリーゼントという生きる化石の様な格好をした男と、金髪に染め上げられた短髪に、刺繍入りの改造学ランと、もう一人の方も格好が何処か古臭い。

店内を見渡して見れば、多少の違いはあるものの、二人と似た格好をした人達が半々に派閥を形成しており、其々が店内の中心で罵倒しあう二人の不良に声援を送っている。

「テメエの所も今日で終わりにしてやんよ！！！」

「それはこっちの台詞じゃあ！！！」

尚も彼らの互いを罵倒する行為は、激しさを増していき、最早何時、暴力沙汰になったとしても、おかしくは無いだろう。

だが実際には其処まで発展する事は無く、二人の不良は最後に覚悟しろと言った内容の啖呵を切ると、背を向けて歩き出す。

そして先程まで、クラブハウスの中心で、店内の全員の注目を浴びていた不良の一人の内の片方、長ラン&リーゼントが、俺に近づい

てきた。

俺の前までやって来た不良は、勢い良く頭を下げる。

「つう訳で、お願いします！先生！！！！」

見れば他の、似た方達も俺に頭を下げて、一斉にお願いしますと声を揃えて、言ってくる。

『こうなっては、仕方が無いのではないかマスター？』

メカ犬が、無責任な発言を俺にしてくる。

この状況で良くお気楽に発言出来るものだ。

ここまで来て、その発言が出来るという事に対して俺は、もう呆れを超えて、感心すらしてしまう。

「はあ……分かりました。やりますよ。やれば良いんでしょ」

確かに目的を果たす為には、俺が彼らの願いを聞き入れるのが、一番手っ取り早い。

俺は溜息を吐きながらも、承諾の答えを半ばヤケクソで彼等に返す。

「皆！先生がやる気になられたぞ！！！」

俺の言葉を聞き、長ラン&リーゼントが、他の人達に吉報を伝え、それに呼応するかの様に、喝采が巻き起こる。

その光景を見ながら、俺は軽い頭痛を覚えた。

こんな事態になってしまったのも、元を正せば恵理さんのせいなのである。

そう……今のこの状況を作り上げた全ての原因は、俺が翠屋でバイトしている時に、やって来た恵理さんがした頼み事に起因するのだ。

話は今から、数時間程前にまで遡る……

「ねえ純君、この辺りには、二つの大きな暴走族の派閥があるって知ってる？」

翠屋でバイト中の俺に、頼み事があると訪ねて来た恵理さんは、俺が士郎さんに話す許可を取ってから、席に座るとそんな事を言ってきた。

「暴走族ですか？」

俺もこの海鳴市に暴走族が居る事は知っているのだが、詳しい事までは知らないので、その事を素直に伝える。

すると恵理さんが、俺にその暴走族の大まかな説明をしてくれた。

恵理さんの話によると、その二つの派閥に分けられた暴走族は、その単語で一括りにされているが、活動内容にかなり差があるらしい。

先ず最初の派閥で、チーム名は海鳴連合。

このチームは、かなり古くから何代にも受け継がれているチームで、活動内容は暴走族では少し珍しい部類に入るかもしれない。

チーム方針でバイクの速さを追求しているのだが、普段は迷惑をかけているお詫びにと、ボランティア活動等にも積極的に参加しているちょっと血気盛んなお兄さんの集まりの様だ。

そしてもう一つのチーム名は、ドラゴンというらしい。

このチームは最近作られたのだそうで、元々は海鳴連合のメンバーだった一人が新たに作り出したそうだ。

このチームも海鳴連合と同じ様に、バイクの速さを追求しているのだが、それ以外の素行がかなり悪い。

メンバーの最下位位置に居る人達は、軽犯罪を繰り開始行っては補導されているし、海鳴連合はバイクを走らせる際に、人気の無い場所や、レンタルサーキットを借りるのだが、ドラゴンは周りの事等お構い無しに、街中をまさに暴走するのだ。

まあ、一般的な暴走族と聞けば、確かにドラゴンの方が、スタンダードと言えるかもしれないが、こうして聞くとあまり気分の良いものでは無い。

取り敢えず恵理さんの話で、二つの派閥の事は理解出来たのだが、その暴走族のチームと恵理さんの頼み事がどう繋がるというのだろうか。

「その暴走族が、如何かしたんですか？」

「ええ、実はその二つのチームが、最近になって抗争を始めたんだけど、その中で妙な噂が流れてるのよ」

「妙な噂？」

恵理さんは、頷きながら続きを話始める。

「二つの派閥は、出来るだけ平和的に事態を収束させるために、お互いが得意としているバイクで勝負する事にしたらしいんだけど、ドラゴンが助っ人を雇ったそうなのよ」

「確かにお互いが得意としてる分野なのに、態々助っ人を呼び込むっていうのは、妙な話かも知れないですけど、そんなに気になる事ですか？」

俺の返答に、恵理さんは首を横に数回振り、否定の意を示す。

「噂には続きがあるの。その助っ人っていうのが、如何もただの人じゃないらしくてね……変形するそうなのよ」

「はい？」

恵理さんの言葉に、俺は一瞬だが、脳内の処理が追いつかなくなり硬直してしまう。

しかし何とか頭の処理速度を回復させる事に成功し、俺は質問の続きをする。

「変形ってあの、変形ですか？」

俺の頭の中には、前世の頃に見ていた某ロボットアニメの映像が蘇る。

「そう、ドラゴンが雇った助っ人は、バイクに変形するそうなのよ」

真面目な顔で答える恵理さん。

「そんな人間居る訳無いじゃないですかって……もしかして」

突っ込みを入れている最中に、俺は一つの可能性に思い至る。

その様子を見た恵理さんが、やっと気付いた様ね、と嫌な笑顔で俺を見た。

「純君の考えている通り、ただの人間じゃないみたいなのよ」

恵理さんは、俺が予想していた通りの言葉を返す。

そして恵理さんの頼み事の内容も、大体だがこの時点で予測がついた。

「と言う訳で、純君にお願いしたい事っていうのはね……」

「その助っ人が、ホルダーなのか確かめてほしいってところですか？」

俺は恵理さんが言い終わる前に、言葉の続きを口にする。

「当たり！」

如何やら俺の予想は、当たっていた様で、恵理さんはクイズ番組の司会者の様なリアクションで、正解だと教えてくれる。

ここまで正解しても、嬉しくないクイズというのは、生まれて初めてだと思う。

「それで、頼めるかな？」

恵理さんが改めて聞いてくる。

断れるものならば、断りたいたいが、本当にその助っ人がホルダーだったとしら、放っておく訳にも行かないだろう。

それにバイクに変形するというのも、個人的にかなり気になる。

「分かりました。それで俺は何をすれば良いんですか？」

俺は自らの責任感と好奇心に負けて、恵理さんの頼みを承諾した後、これから如何するべきなのかを、話し合う事にした。

闇の中に浮かび上がるのは、更なる闇を内包する一つの影。

「あ！戻ってきたんだ」

その影が声を上げた。

すると先程まで一つしかなかった筈の影が、もう一つ現れる。

「それで、例の実験は上手くいったのかな？」

元からその場所に居た影、藍色の怪人オーバーが、先程現れた影、灰色の怪人メルトに何やら確認を取る。

「ああ、実験は成功だ。従来のプログラムとは比べ物にならないレベルの適合性を示した」

話しかけられたメルトは、淡々と結果だけを言葉として吐き出していく。

「ふふ、その答えを聞いて安心したよ」

メルトの言葉を聞いたオーバーは心底嬉しそうな声で言う。

「ただ……」

しかしそこで、メルトが言葉を濁す。

「ただ？」

「素体となった人間の、闘争心が高すぎた様でな。既に暴走の兆しを見せている。あれでは仮面ライダーが嗅ぎつけて来るのも、時間の問題かもしれん」

「う～ん。それはそれで、良いんじゃないかな？」

オーバーは、数瞬考える素振りを見せながらも、メルトに対して、楽観的な発言を返す。

「どっちにしろ、早いか遅いかの違いでしかないんだしさ。戦うことになったなら、戦闘データを取らせて貰えば良いじゃない」

「……確かにそれもそうか」

先程オーバーがした説明に納得したのか、メルトはゆっくりと頷く。

メルトのその言葉を最後に、闇の中に浮かぶ二つの影が、一瞬だけ大きく揺らぐ。

次の瞬間に二つの影は、最初から其処に無かったかの様に、跡形も

無く消え去り、ただ静寂を保つ静かな闇が広がるばかりだった。

『それで引き受けたという訳か。しかしホルダーが変形とは……』

事情を聞いたメカ犬が、興味深そうに呟く。

俺は恵理さんと話合った後、翠屋のバイトを終わらせてからすぐに行動を開始した。

メカ犬を呼び出し説明しながら、今俺達はある場所に向かっている。

「ここか……」

目的地に辿り着いた俺は、辺りを見渡し観察を開始する。

其処はジャックが根城にしている裏路地とは、また違った意味で人が寄りつかなそうな、雰囲気を醸し出していた。

言ってしまえば治安が悪そうなのだ。

海鳴市は、比較的に治安が安定してはいる方ではあるが、やはり人が多く集まれば、大なり小なりこういった場所が形成されていくのは、仕方ない事なのかもしれない。

先程から通りには、柄の悪い男や、汚れた衣服を身に纏った浮浪者と思われる人物が視界に入ってくる。

そして俺達の目の前には、一軒の建物が聳え建っていた。

建物には看板が立ててあり、クラブハウス・パラレルと書かれている。

恵理さんとの相談した結果、俺達はまずどちらかのチームと接触して、情報を得る事にした。

効率を考えるのであれば、ドラゴンに接触するのが、一番の近道なのだが、噂を聞く限り危険が伴うのは確実だ。

ならば比較的に、女子供には、手を出さないであろう海鳴連合で情報収集をする事が良いだろうという結論に至った。

恵理さんの話によるとここ、クラブハウス・パラレルは、その海鳴連合のメンバーが普段から常駐している場所なのだそうだ。

「しかし来てみたは良いけど、どうやって情報を集めれば良いんだ？」

俺は暴走族の牙城を前にして、途方に暮れる。

幸いにも店は営業している様だし、特に店の前で見張りをしている人間等も居ないので、子供の俺でも入店する事だけは出来そうだが、問題はその先だ。

暴走族の皆さんが、素直に話してくれる訳が無いだろうし、下手したら入った直後に摘み出される可能性だってある。

『取り敢えず入ってみるしか無いのではないかマスター』

如何するべきか思い悩む俺に対して、隣のメカ犬が助言してくる。

「……確かにそうだな」

メカ犬の言う通り、ここで幾ら悩んでいても答えは出ないだろう。

ならばあえて飛び込むことで、見出せる活路もあるかもしれない。

俺はメカ犬の助言に頷きながら、店内に入ろうとした。

その時である。

クラブハウス・パラレルの店内から、複数の怒鳴り声と、物音が聞こえて来た。

「行くぞメカ犬！」

『うむ！』

俺はメカ犬と、共に急ぎ店内に駆け込んだ。

入り口を入るとすぐに大人一人が通れる程の、狭い階段が地下に伸びており、その先には、簡単な作りの扉が設置されていた。

「ぐあ！？」

その扉を開けて、中に入ると此方に吹き飛ばされてくるリーゼントな髪型で、長ランという失われた過去の時代の化石の様な格好の男性。

俺はその姿を目撃して、まず何よりも、現代でもこの格好をフォーマルに着こなす事が出来る存在が実在した事に対して、ある種の感動を覚える。

だが今は、この感動をゆっくりと噛み締める暇は無い様だ。

辺りを見渡せば、店内には他にも、似たり寄ったりの格好をした男達が、倒れており死んでいる訳では無さそうだが、その全員が軽傷を負っている。

その中心には、拳を突き出した一人の金髪男と、それをとり巻く様に、複数の男性が、倒れている男達を見下す感じの笑みを浮かべて眺めていた。

彼等も制服を着てはいるが、其処には派手な刺繍が施された、所謂改造制服で、髪を金や茶、中には赤や青等と染め上げている者も居る。

長ラン程では無いが、此方の男達の格好も何処か古臭い印象を受ける。

『如何やらこの惨状は、あの者達の仕業で、間違い無い様だな』

現状を見て、メカ犬が俺に言ってくる。

恐らくはメカ犬の言っている事が、真実で間違いだろうと俺もこの惨状を見て思う。

そしてこの惨状を作り出した男達が多分、ドラゴンなのだろうと大体の予測が出来る。

「あ～あ。情けねえなあんた等」

倒れた男達を見下ろしながら、金髪の男が吐き捨てる様に言い放つ。

その発言の直後、とり巻きと思われる連中が笑い声を上げる。

「何の……つもりだ？」

殆どのリーゼントの男性が力無く倒れている中で、先程俺の近くにまで吹き飛ばされてきた男だけが、意識を保っていたのか、辛うじて苦虫を噛んだ様に言葉を紡ぎ出す。

「ああん？まだ喋れる奴が居たのかよ」

その声に反応した金髪の男が、尚も相手を小馬鹿にした笑みを浮かべながら、リーゼントの男に近づいて行く。

「……何でこんな事をするんだ？それに勝負の方法はバイクで着ける筈だったろ」

「めんどくさくなったんだよ。やる前から勝負の結果は見えてたしな」

「何だと?」

「それじゃつまらなねえと思って、折角強い助っ人を引き入れたっつう噂を流してやったのに、テメエ等は対策すらしやしねえ」

そう言いながら、金髪の男は己のズボンに手を入れて、何かを取り出した。

金髪の男が手に持つそれは、ビー玉の様な形と大きさをしており、鈍く灰色に輝いていた。

「だからこれ以上待っても意味がねえと思って、手っ取り早い方法に出た訳さ。それと助っ人を雇ったのはただのでまかせだが、半分は本当なんだぜ?」

会話の流れからして、これは海鳴連合とドラゴンの抗争なのだろう。

しかし今はそれ以上に気になる事がある。

先程の金髪男が発言していた内容と、何気なく取り出した灰色のビー玉だ。

何か嫌な予感がする。

「これから良い物を見せてやるよ」

金髪の男は、リーゼントの長ランの男にそう言うと取り出したそれ

を強く握り込む。

するとその手を中心に、くすんだ銀色の光が全身を包み、その姿を変質させていく。

『キンキュウケイホウキンキュウケイホウキン……』

その現象と同時に、タッチノートから、警報が発せられる。

「これって!?」

『如何やら恵理殿の予想が的中した様だな……しかし』

タッチノートからの反応で、あの金髪の男が、ホルダーだという事は分かるのだが、それでも分からない部分がある。

メカ犬もそれに気が付いているのだろう。

言葉を濁しながら言ったのが何よりの証拠だ。

あの金髪男が持っていた暴走プログラムは、今までのものとは確かに違う、初めて見るタイプのものだった。

更にホルダーの姿も、今までとは何処か違う異質さを感じる。

まるで、ロボットの様な外見に両手と両足には、車輪と思わしき物体が、装着されていた。

「ん?何でこんな所にガキが居るんだ?」

変化を終えたホルダーが、俺の存在に気付いて、首を傾げる。
それに合わせる様にして、とり巻きの男達も、この場にそぐわない人物である俺に、注目しだす。
「おいおい。ガキンチョがこんな場所に来たら駄目だろ？」
とり巻きの一人が、俺に近づきながら、手を伸ばしてくる。
後１０？程で、男の手が、俺の頭に触れようとした時に、俺は行動を開始した。
恭也君の剣裁きに比べれば、こんなゴロツキの手等止まって見える。
俺は近づく手をすり抜けると、その腕を両手で掴んで、自身の身体を持ち上げて、男の顎に、不意打ちのドロップキックを放つ。
幾ら子供の一撃といえども、不意打ちの上に、普通に暮らしていては、鍛え様の無い急所に直撃したのである。
男の意識は一瞬で刈り取られただろう。
案の定男は、白目を向いて、力無く崩れ落ちる。
伊達に人外の強さを誇るお隣さんと、普段から命懸けな鬼ごっこをしている訳じゃない。
ある意味で、潜って来た、文字通り死線と場数が違うのだ。
こんな技は、恭也君はおろか、美由希さんにも通用しないだろうが、

常識が通用する範疇の不良程度が相手ならば十分に通用する。

「ほう？」

その光景を見て、ホルダーは俺を興味深げに見る。

「いきなり何しやがんだ！このガキ！」

先程の男が倒れるのを見た男が、仲間をやられた怒りをぶつけるかの様に、俺に叫ぶ。

その怒声を皮切りに、他のとり巻き達も、一斉に俺に襲い掛かってきた。

身体が小さいというのは、こういう時には案外得なものである。

相手が複数というのもあるが、俺という標的に的を絞るのが、恐ろしいほどに難しくなるからだ。

第一この人達を十人以上相手にするよりも、手加減してくれている恭也君を相手にする方が、千倍怖い。

俺は雨の様に降り注ぐ蹴りと拳を回避しながら、店内に居るとり巻きの数を確認する。

メンバーは９人。

全員が十代半ばから後半程度で、男性だ。

この場に女性が一人でも居れば、使わずにおこうと思っていたが、

如何やらその心配は無用らしい。

今この時、俺は男としての情を捨てて鬼となる。

俺が今から使う技は、出来れば良い子は勿論、悪い子もやってはいけない禁じ手中の禁じ手だ。

ほぼ大人と同程度の体格を持つ相手と、小学校に入りたて程度の俺だからこそ面白いくらいに決まる、必殺技……

その一撃を最初の相手に放つ寸前、俺はせめてもの慈悲が彼等を導いてくれる事を祈りながら、反動を着けて拳を繰り出した。

相手の股間目掛けて。

その一撃を喰らったとり巻きの一人は、最後の断末魔すら上げる事無く、自らの股間を両手で押さえながら、倒れ込む。

その光景を見た、他のとり巻き達が、あまりの衝撃映像に自らの股間を押さえて防御するが、そんなものは、はっきり言って無駄である。

俺は今度は隙だらけの頭部に狙いを定めて、容赦無く蹴りを叩き込み、意識を刈り取った。

両手で股間を押さえていれば、そりゃあ隙だらけにもなるだろう。

その後も俺は、股間を防御する相手には、頭部を狙って意識を刈り取り、その防御を捨てて攻撃に転じる者には、容赦無く股間を拳で撃ち抜くという行動を繰り返した。

「す、すげえ……」

最後の一人を静めた所で、この光景を見ていたリーゼントの男が、顔を青ざめながら呟く。

まあ、男としてこの光景はある意味トラウマものだろう。

それをやってのけた俺としても、出来ればこの技は使いたくなかった戦法の一つである。

「あっはははははははは！！！！！！！！」

リーゼントの男とは逆に、ホルダーの方は上機嫌で笑い声を高らかに上げる。

「良いぞ！ガキ！テメエは気にいった！！！」

心底楽しそうに喋るホルダー。

「でもよ……お遊びはここまでだぜ？」

その直後、今度は逆に何処までも底冷えしそうな冷たい声でホルダーが告げる。

如何やらここから先は、俺も本気で行かなきゃ駄目らしい。

「行くぞ！メカ犬！」

『うむ！』

俺はメカ犬を自身の隣に呼び寄せながら、タッチノートを取り出して、ボタンを押す。

『バックルモード』

隣に居たメカ犬は、銀色のベルトに変形すると、そのまま自動的に、俺の腹部に巻きつく。

「変身」

俺は音声キーワードを入力して、素早くバックルに差し込む。

『アップロード』

音声が流れると同時に、白銀の光が俺を包み込み、俺の姿を一人の戦士に変える。

メタルブラックのボディーが光るその姿で、ホルダーも俺の事を理解したのだろう。

確かめる様に、ゆっくりとその名を呼ぶ。

「ただのガキじゃ無いと思っていたが……仮面ライダーだったのか」

俺は何時、戦闘が開始されても良い様に構えるが、ここでホルダーは予想外の行動に出た。

何とくすんだ銀色の光を放つと同時に、素体に戻ったのである。

「ははははは!!!相手が仮面ライダーなら話は別だ。おい!!!」

ホルダーから素体へと戻った金髪の男は、倒れているリーゼントに言葉を投げかけた。

「気が変わった。テメエ等、海鳴連合との勝負、予定通り受けてやるよ。ただし!!!」

金髪の男はリーゼント頭の男に、一つの提案を出すと続いて俺を指差して要求を口にした。

「テメエ等は、そこに居る仮面ライダーを助っ人に雇え!それが条件だ!」

言う事だけを伝えると、金髪の男は、俺が気絶させた男達を起こしながら、一旦ここを去る事を伝え始める。

「如何するメカ犬?」

いきなりの予想外な展開に、如何するべきか俺はバックルモードのメカ犬に聞いてみる。

『今は様子を見た方が良いかもしれん。奴は使っているプログラムも異質だ。何を隠しているのか探って見るのも手だろう?』

確かにメカ犬の言っている事にも一理ある。

もしかしたらこの前の、オーバーとメルトという奴等が関係している可能性もあるのだ。

今は少しでも多くの情報が欲しい。

俺はメカ犬との相談の結果、この場は大人しく店を出て行くドラゴンの面々を黙って見送った。

「あ、あの……」

彼等が店を出て行った直後、リーゼントの男が俺に話しかけてきた。

そういえばこの人への説明は、何も考えてなかった。

これからホルダーと勝負する為にも、海鳴連合に入らなければいけない俺は、どうやって説明し様かとしたその時、リーゼントの男が突如として、土下座をしてきたのだ。

「お願いします！仮面ライダー！！！いや……先生！！！！！！俺達に力を貸してください！！！！！！！！」

今夜の勝負が始まる三時間前の出来事であった……

## 第十四話　アウトロー・スピード・ウォーズ【前編】（後書き）

どうも、作者のＧ－３Ｘです。

まだ未定の話ではあるのですが、仕事先の方針転換で、暫くの間、更新速度が週一ペースに落ちてしまうかもしれませんが、出来るだけ定期更新は続けていこうと思いますので、これからも宜しくお願い致します。

## 第十四話　アウトロー・スピード・ウォーズ【後編】（前書き）

続きになります。

今回は少し短めになりますが、楽しんで頂けると幸いです。

# 第十四話　アウトロー・スピード・ウォーズ【後編】

彼等の戦う前に行う伝統行事が、無事に済んだ所で、俺の出番がやって来た訳だ。

俺を助っ人に迎えた海鳴連合とドラゴンは、クラブハウスを出て、海鳴市の街から少し離れた山へと移動する。

そして辿り着いた場所は、目視で確認出来る範囲では、通る車すらも確認出来ない峠。

ここが俺とホルダーが勝負するフィールドとなる。

ルールは至ってシンプル。

この峠の始まりから、終わりまでを先に駆け抜けた方の勝利だ。

俺は呼び出したチェイサーさんに跨り、スタートの時を待つ。

既にリミットオフをしてあるので、何時でも全力が出せる状態だ。

ちなみに俺は、クラブハウスの中で変身してから、ずっとその変身を解いていない。

あの場でホルダーを除けば、俺の変身を目撃したのは、海鳴連合で唯一意識を保っていたリーゼントで長ランを着た人だけだったので、その人にだけ口止めをして、他の人達には最初から仮面ライダーの姿で助っ人することにしておいた。

「それが仮面ライダーのバイクか？」

今回の勝負の相手、金髪の男が俺に近づきながら、くすんだ銀色の光を放ち、その姿を異形の存在、ホルダーへと変化させる。

完全に変化を完了させたホルダーは、軽く飛び上がり、更にその姿を変えていく。

空中で両手と両足を垂直に合わせると、車輪部分が前方と後方に重なり合いながら、移動してホルダーの身体自身がバイクの様な形になる。

そのまま地面に着地した後も、ボディーの部分が一部スライドされて、よりバイクと呼ぶに相応しいフォルムを形成した。

これが噂に聞いていた変形なのだろう。

確かにこれを一言で表すならば、変形という言葉が、一番しっくり来る気がする。

というかそれ以外に言様が無い。

「まあ、俺以上に早く走れるとは思えないがな」

バイクへの変形を果たしたホルダーが、俺達を見下しながら、けたたましくエンジン音を唸らせる。

『あら、面白い事を言うじゃない？』

その言葉に反応したのは、チェイサーさんだった。

何時もの乙女口調な、オッサンボイスだが、その声からは何処か何時も以上に意味不明なプレッシャーを感じる。

「ほう……仮面ライダーのバイクは喋るんだな」

ホルダーが感心と驚きを交えた声で呟く。

それを言ったら、お前は自分がバイクになってるだろうがと、突っ込みを入れたいが、今はチェイサーさんのプレッシャーが、過去最高に不味い事になっているので、俺は言葉に出すのを躊躇う。

『初めまして。アタシはチェイサーよ。自分を倒す相手の名前ぐらいは覚えておきたいでしょうから、特別に自己紹介してあげるわ』

如何やらこのホルダーは、チェイサーさんの触れてはいけない琴線に触れてしまったらしい。

更なるプレッシャーをホルダーに放ちながら、チェイサーさんは、悪意がたっぷりと篭った挑発をする。

「……何だと？」

その言葉を聞いたホルダーの方も、声からは余裕が消えて、怒り一色に染まってしまう。

ホルダーとチェイサーさん。

両者の間に、必ずこいつをブッチギルというオーラが立ちこめる。

『これは荒れるな』

「下手な事言うなよ。こっちに飛び火するかも知れないだろうが…」

その様子を見ながら呟いたメカ犬に、俺は小声で突っ込みを入れた。

白熱する両者が、何時その感情を爆発させたとしてもおかしくないと感じ取った俺は、スタートの合図を任されている暴走族の一人に、早く合図を出せと指示を出す。

合図を送る方も、何か良からぬ気配を感じ取っていたのだろう。

素早く頷き、全ての準備を整える。

チェイサーさんに乗った俺と、ホルダーが、真横に並び更にその隣には白と黒の網状に模様の入った、カーレース等で、良く見かける旗を持った暴走族の一人。

「スタート！」

その暴走族が言葉を発しながら旗を振るのをスタートの合図にして、俺とホルダーはアクセル全開で、静かな夜の峠に、ライトの光とエンジンの爆音で色と音を与える。

最初に先頭に出たのは、ホルダーの方だった。

最高速にどちらが分があるのか、まだ判断出来ないが、初速に関しては相手が一枚上手だった様だ。

「はははは！！！！大口叩いてたわりにその程度かよ？」

前を走るホルダーが、笑いながらチェイサーさんを小馬鹿にしてくる。

「悔しいけど早いな」

『……マスター。今からちょっとだけ激しく動くからしっかりと掴まってなさいね」

俺が素直な感想を口にした直後、チェイサーさんが、普段とは全く違う抑揚の無い声で、俺に宣言する。

先程のホルダーの発言が、チェイサーさん自身が持つバイクとしてのプライドを刺激した為だろうか？

直線の道路が終わりを告げて、今度は峠特有の山の外周を不規則に曲がる連続カーブへと突入する。

突入した瞬間、俺はチェイサーさんが、先程俺に言った言葉の意味を、嫌という程理解した。

連続カーブを減速する事無く、猛スピードで駆け抜けたのである。

一度曲がる度に、側面が地面すれすれに、それどころか肩が多少擦れる程に倒しながらだ。

その迫力は、普段のジェットコースター張りに走るチェイサーさんの走りが、遊園地で見かける１００円入れると動くハンドル付き某動物乗り物シリーズ（一番有名なのは中国に生息する白黒で熊の仲

間）に乗っていると思えてくる程である。

『一気に抜くわよ！！！』

チェイサーさんは宣言通り、カーブが終わる直後に、減速したホルダーを一気に抜き去った。

俺はチェイサーさんの凄まじい走りに悲鳴を上げる事も出来ない。

何とかしがみ付くだけで精一杯だ。

それと今更気付いたのだが、チェイサーさんは単独でも走れるのだから、俺って乗ってる意味無いんじゃないだろうか？

そもそも俺は文字通り、お荷物になっている様な気さえしてくる。

……まあ、それは兎に角、俺達がこのままホルダーよりも早く、ゴールになっている峠の終わりまで辿り着ければそれで勝利なのだ。

しかし勝負は終わってみるまで分からないと、幾多の先人達が言っていた。

そして俺達にもその現象が舞い降りたのである。

「何だ！？」

突如後ろから、激しい衝撃が加わった。

何事かと後ろを振り向けば、先程抜き去ったホルダーが後ろまで追いついている上に、チェイサーさんに体当たりを喰らわせていたの

だ。

「卑怯だぞ！？」

「はっ！誰も相手の邪魔をするな、なんてルールは言って無いだろうが！ようは先にゴールに着きゃ良いんだよ！！！」

俺の抗議に、ホルダーは吐き捨てる様に言い放つ。

奴にはもう走る事への、プライドすら無いのかも知れない。

『勝つわよマスター』

尚もホルダーに体当たりを続けられながら、チェイサーさんが、俺に言った。

『バイクは走る為に生まれてきたわ。アタシはその代表として、この勝負を汚したホルダーを許して置けない！』

静かに、だけど熱い程の闘気を漲らせるチェイサーさん。

バイクであるチェイサーさんにとって、この純粋なスピードだけを追求した勝負は、それだけ神聖なものだったのだろう。

チェイサーさんが闘気を漲らせたその瞬間、俺の視界の中にウインドウが映りこむ。

「何だこれ……ドライブチェイサー？」

取り敢えず一番上の部分の文章を俺は、声に出して読んでみる。

声に出したその時、チェイサーさんが黄金色に輝き始め、その姿を変えていく。

銀色のラインの脇に金のラインが走り、黒と赤を基本としたボディーカラーの上に青と、緑のカラーリングの追加ボディーが、足されていく。

視界に映るウインドウを読み上げるとそこには、この現象に対しての詳細が書かれていた。

ドライブチェイサーモード。

チェイサーさんの中に組み込まれている自己学習プログラムが、一定以上成長する事によって、初めてなる事が出来る強化形態らしい。

つまりこの勝負の最中に、チェイサーさんの自己学習プログラムが、規定値に達してチェイサーさん自身の感情の爆発を引き金とする事で発動したのである。

『飛ばすぜマスター！！！』

チェイサーさん改め、ドライブチェイサーさんが叫ぶ。

というか何時もの乙女口調じゃ無くなっている！？

叫びと同時に、ドライブチェイサーさんは、今まで以上に有り得ない速度で峠を一気に越えていく。

そしてホルダーを置き去りに、圧倒的な差を着けて俺達は勝利した。

峠の終わりで、俺達が待機していると、大分遅れて、ホルダーが追いついてきた。

『オレサマの勝ちで文句は無いだろ？』

ドライブチェイサーさんが、上から目線で、やって来たホルダーに言う。

もう一人称まで変わってしまって、この人？が先程まで、新宿二丁目風な喋り方をしていたとは到底思えない。

「……う！？」

ショックを隠しきれないのか、無言でいたホルダーだったのだが、何故か急に苦しみ出す。

「何だ！？」

『マスター！あのホルダーの身体から異常な程の熱源が発生しているぞ！』

突発的な事態に驚く俺に、メカ犬が説明してくれた。

メカ犬の説明を聞きながらホルダーを見てみると、ホルダーの身体は、自身が放つ熱のせいで、赤く変色しだしている。

「……ない……とめない……オレが負けたなんて認めて堪るか！！！！！！！」

先程まで苦しんでいたホルダーが、今度は一転して、辺り一体を揺るがす程の叫びを上げる。

『これは……システムが暴走しているのか？』

ホルダーの様子を見ながら、メカ犬が呟いた。

「暴走って、如何いう事だよメカ犬！？」

『うむ。如何やらあのホルダーが使っていたシステムは、欠陥品もしくは、試作品だったのだろう』

俺達が初めて戦ったホルダーも確か欠陥品だって、メカ犬が言っていたが、今目の前に居るホルダーの状態はあまりにも結びつかない。

これは恐らく欠陥品というよりも……

『恐らくは奴等の仕業だろうな』

メカ犬が推測を口にする。

多分メカ犬が言っている奴等とは、この前いきなり出て来たオーバーとメルトの事で、間違い無いだろう。

何をしようとしているのかは分からないが、このホルダーも奴等の作戦の一部なのかも知れない。

「うをおおおおおおおお！！！！！！！！！！！！！」

より一層大きな叫びを上げると、ホルダーは先程来た峠を、来た時とは比べ物にならないスピードで、逆走を開始する。

「不味い！？」

俺は思わず声を上げる。

あのまま行けば、スタート地点には、他の暴走族の人達が居る筈だ。

今のホルダーが、彼等と接触すれば、大きな被害を出す可能性がある。

「お願い出来ますか？」

俺はドライブチェイサーさんにホルダーを追う様に頼む。

「オレサマに任せておけ！すぐに追いつくぜ！」

ニヒルに笑いながら言うドライブチェイサーさん。

その時またしても、オレの視界にウインドウが現れる。

またかと思いながらも、俺は再びその文章の頭を読んでみる事にした。

「ジェットドライブモード？」

俺がその文章を読み上げた瞬間、またしてもドライブチェイサーさんに変化が訪れた。

まるでホバーモードの様な形態に変わって行くのだが、追加された部分のボディーパーツが、両脇にバーニア状に接続される。

『さあ！飛ばすぜ！！！』

俺を乗せたドライブチェイサーさんが、凄まじい速度で、空へと舞い上がる。

ホバーモードの時も、それなりの速さは出ていたが、今はそれの比じゃない。

そして俺達は瞬く間に、峠を爆走する、ホルダーに追いつく。

「見つけた！」

『マスター。見つけたのは良いが如何やって奴を止めるつもりなのだ？』

ホルダーを見つけた所で、メカ犬が俺に、そう指摘する。

そう確かにそれが一番の問題だ。

現在ホルダーは物凄い速度で、峠を疾走している。

奴の足を止めようにも、あの速度じゃその攻撃を届かせる事すら出来ない。

『ここはオレサマに任せな！！！』

何か名案は無いかと、思案する俺に対して、ドライブチェイサーさんが、自信満々に言い放った。

本当に性格変わっちゃったなこの人？は……でも、その言葉が今は何よりも心強く感じる。

「……分かりましたお願いします！」

俺達は一度ホルダーの進行方向に上空から先回りして、正面から迫り来るホルダーに突っ込む。

「悪夢はここで終わらせる」

俺は言いながら、タッチノートを引き抜き、全体図を表示させて両足をタッチさせて、再びタッチノートを差し込んだ。

『ポイントチャージ』

『ポイントチャージ』

ベルトから発生した光が、両足に集約し、光を帯びる。

「こいつで『こいつで決めるぜ！！！』……台詞取られた」

俺は予想外のドライブチェイサーさんの乱入に、気を落としながらも、両足を踏ん張り、力を蓄積させていく。

その瞬間ドライブチェイサーさんが垂直状態で、急停止すると、俺の身体は、急加速によって生み出された力を得た状態で、勢い良く射出される。

「ジェット・ドライブ・スマッシュ」

俺は輝く両足を突き出し、ドライブチェイサーさんの力を借りた一撃を繰り出す。

その一撃はホルダーの身体を突き抜けて、爆発を引き起こした。

俺は着地するものの、勢いの付いた身体は止まる事を知らず、地面と接している足の裏から火花を散らしながら、数メートル前に移動して、漸く停止した。

その現象に先程の技の威力が、とんでもないものだったという事が、改めて窺い知れる。

後ろを振り向けば、気絶している素体となった金髪の男と、塵となり消えていく灰色の暴走プログラム。

「本当に何が起ころうとしてるんだ……」

誰にとも無く呟いた俺の言葉に答えが帰ってくる事は無かった。

唯一帰ってきたのは、峠の中、吹き荒ぶ風の音だけだった……

「あ～あ。負けちゃったね」

峠の最も高い木の上で、藍色の怪人オーバーが、言葉を漏らす。

「ふん。所詮は実験段階に過ぎないのだ。精々あの程度だろう」

その隣には、灰色の怪人メルトが居る。

如何やらこの二人は、この場所から先程までの仮面ライダーとホルダーの勝負を見ていたらしい。

「そんな事言って、本当は結構悔しいんじゃない？」

オーバーが、ふざけた態度を取りながら、メルトに質問をぶつける。

「馬鹿な事を言うな……私は行くぞ」

「あれ、もう行っちゃうの？」

「もう既に十分なデータは取らせてもらったし、予想外のものも見れたからな。これからの参考にさせてもらう」

それだけ言うとメルトは、木の上から飛び降りて、この場を去ってしまった。

「メルトは仕事熱心で偉いね。僕なんて仕事よりも、寧ろ楽しみたいって思うんだけどな……」

オーバーは独り言を口にしながら、尚も峠の先を熱心に見詰め続ける。

その瞳の奥に、鋭い狂気を抱きながら、一人の少年を捉えて……

「はあ……」

「如何したの純君。今日は何だか溜息ばっかりだよ？」

朝の登校途中、スクールバスのバス停に向かう中、俺の本日何度目か分からない溜息を聞き、なのはちゃんが、心配そうに声をかけてくる。

なのはちゃんには悪いと思うが、今の俺は自分で思う以上に心が疲弊しているらしく、溜息が止まらないのである。

それというのも全ては昨日のあの出来事が原因だ。

昨日は恵理さんの頼み事を聞いたお陰で、色々と大変な目に遭ってしまった。

まあ、結果的にはホルダーを早期に発見出来たので、寧ろ良かったのだが、一番の問題は其処じゃない。

どちらかと言えば今の俺の疲れは、ホルダーを倒した後から来るものだった。

ホルダーの暴走を食い止めた後、俺が気絶した金髪の男を連れて、スタート位置に戻ると、一気に歓声が巻き起こった。

如何やらこの勝負には、お互いのチーム存続が賭けられていたらしく、海鳴連合に助っ人として参加した俺が勝った事によって、ドラゴンが解散する事になったからの様である。

これ以上は俺が関わる事はでは無いと思い、気絶した金髪の男を渡して、さっさと立ち去ろうとしたのだが、ここでその場に居た暴走族の全員が、俺に対して土下座をして来たのだ。

しかも何故か、海鳴連合とドラゴン両名共々である。

如何してこんな事をするのかと聞くと、長ランリーゼントの男、如何やらこの人は、海鳴連合のリーダーらしい、が純粋な夢見る少年の様な瞳で俺に言ってきた。

何でも俺の走り（正確にはチェイサーさんだが）と俺の強さ（クラブハウスでの俺の連続反則攻撃だが）に惚れたのだそうで、新たなリーダーになってくれと頼まれたのだ。

勿論丁重にお断りしたのだが、それでも尚、暴走族の皆さんはしつこく付き纏ってきた。

最後には仮面ライダーの身体能力で、振り切ったのだが、ある意味戦う以上に疲れたのは言うまでも無い。

そんな事をなのはちゃんに話す訳にも行かないので、俺は少し疲れてるだけだから大丈夫と返すので、精一杯だった。

話しながら歩いていたら、バス停が見えてきたのだが、如何にも様子がおかしい。

何時もは他にも何人かが、バス停でバスを待っている筈なのだが、通りの途中で、何やら怖いものを見たかの様に震えているのである。

「如何したんですか？」

なのはちゃんが、上級生と思われる女の子に聞き込みを開始した。

「えっとね……何だか怖いお兄さん達が、バス停近くで並んでるんだよ」

女の子は震えながら、俺達にも近づかない方が良いと忠告してくる。

「怖いお兄さん達？」

なのはちゃんが首をかしげながらオウム返しで言葉を返すが、俺は何となくこの話を聞いて、嫌な予感がした。

「ちょっと様子を見てくるから、なのはちゃんはここで待ってて」

そうなのはちゃんに告げながら、俺は自分の予想が外れていたら良いなと願いつつ、バス停に急いだ。

……そして嫌な予想は、残念な事に的中してしまった。

「あ！！！魔巣田さん！！！！おはようございます！！！！！今日もご勉学頑張ってください！！！！！」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「おはようございます！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」

リーゼントの長ランの男を先頭に、数十人の厳つい顔をした男達が、俺に頭を下げて挨拶してきたのである。

良く見てみれば、集団の中には、金髪の男や、俺がクラブハウスの中で、撃沈させた男達も混ざっていた。

突っ込み所は多々あるが、俺は取り敢えずリーゼントの長ラン男を一人呼び出して、如何いう事なのか説明を求める事にした。

「如何いう事なんですかこれは！？」

「はい！実は俺達、あの後も海鳴連合のリーダーは魔巣田さん以外考えられないと思って、何処の誰なのか、聞き込みしたんですよ。そしたら海鳴ジャーナルで記者をしているらしいお姉さんが、ここで待っていれば、会える筈だと教えてくれたんすよ！」

海鳴ジャーナルの記者でお姉さん……間違い無く恵理さんだな。

結果報告は後で良いと思って、昨日は帰ってそのまま寝ちゃったのは悪いと思ったけど、これはその異種返しか！？

「それとさっきから俺の事を魔巣田と呼ぶのは何故ですか？」

「ああ！それも記者さんから聞いたんですよ。部下にはそう呼ばせていると聞いたんで」

これはあれか？

恵理さんの復讐なのか、それとも本名は伏せてくれている優しさと受け取って良いのか、判断がしにくいにも程がある。

特にあながち間違いでも無い所が、余計に性質が悪い。

「それと俺の事は、気軽にヤスって呼んでください魔巣田さん！！！」

そう言ってリーゼント改め、ヤスさんは、俺に再び頭を下げた。

後ろを見れば、ヤスさんが頭を下げるのを見た男達もそれに習い、俺に頭を下げてくる。

俺はその光景を見ながら、また一つ大きな溜息を吐き出した。

今日の海鳴は、良い天気で平和である。

何せこの街の暴走族のリーダーが、小学生に決まってしまった程なのだから……

# 第十四話　アウトロー・スピード・ウォーズ【後編】（後書き）

メカ犬のワクワク何でもコーナー【第三回】

メカ犬『電王編で、マスターがネガ電王に使った技名はガイアチェーンスマッシュだ！！！』

純「如何したんだよ開始早々」

メカ犬『いや、前回はお休みしたのでな。今回は開始一番に言ってみたのだ』

純「そうですか……」

メカ犬『更に今回は、めでたい発表をするぞ！』

純「今日は本当に初めから、飛ばしまくるな」

メカ犬『何とこの小説のアクセス総数が５０万ＰＶを突破したのだ！』

純「おお！！！それは本当に凄いな！！！」

メカ犬『そこで近々、また何かイベントを企画しようと思う』

純「そういう訳で、やって欲しい企画等あったら、お気軽にお便りを下さいね」

メカ犬『それではまた次回で会おう！』

皆様のお陰で、ここまでこれた事を、心より感謝致します。

# 第十五話　自分らしい強さ【前編】（前書き）

どうもお久し振りです。

今回のホルダーは、神崎はやてさんの考えてくれたファイターホルダーと、ガードマンホルダーを参考にさせて頂きました。

ホルダーと一緒にストーリーの原案も考えて頂いたので、其方も参考にさせて頂きました。

本当にありがとうございます。

それでは楽しんで頂けると幸いです。

# 第十五話　自分らしい強さ【前編】

「明日も頼むぜ？く・る・と君♪」

夕焼けに染まる海鳴公園の隅で、数人の中学生が、一人の小学生の少年を囲んで、笑っている。

「うん……分かったよ」

小学生の少年は、ぎこちない笑顔で、その中学生達の一人が言った事に対して、返事を返す。

その反応を見た中学生達は、より一層楽しそうに笑うと、満足した様で、夕方の公園に少年を一人残して去って行った。

一人公園に残された少年は、中学生達の姿が完全に見えなくなるまで、そのぎこちない笑顔を浮かべ続けた。

そして中学生達の姿が、居なくなるのを確認した少年は、その貼り付けた様なぎこちない笑顔を止めて、代わりに憎しみをその顔に浮かべながら、拳を強く握り締める。

少年の心の中には、様々な感情が渦巻く。

先程まで居た、彼等に対しての憤怒、己自身の情けなさ、全てを分かった上でも如何にも出来ないでいる焦燥感。

幾重もの負の感情が、その小さな身体の中を駆け巡り、大粒の涙を地面に落としながら、少年は一言だけ言葉を発する。

「強くなりたい」

自分が強くなれば、全てが解決する。

弱いからこうなるのだ。

自分が弱いから、だから他の強者や集団に良い様に搾取される。

強ければこんな事にはなりはしない。

自分の何かを他者に奪われる事も無いし、それどころか返り討ちにする事だって出来るのだ。

だからこそ、今を変える力を少年は心から渇望した。

「その願い……私達が叶えよう」

少年以外誰も居ない筈の夕暮れの公園で、少年以外の声が、風の音に乗りながら、その耳に届いた。

「ありがとうございました！」

翠屋でそんな威勢の良い声が、響き渡る。

声の主は翠屋の従業員エプロンを身に着けて、左胸の辺りに手書きの研修中と書かれたプレートを取り付けたイケメン男子だ。

１８０ｃｍを越す高身長に、強い意志を秘めた鋭い瞳と、短く切り揃えられた短髪。

恭也君を爽やか系と表すのであれば、彼はワイルド系に分類される事だろう。

「それじゃあ次は、接客とは別のホールの仕事を覚えてもらうから宜しく」

「はい！純の旦那！」

俺の言葉に、元気良く返すワイルド系イケメン男子。

彼の名前は、高木康則（たかぎやすのり）。

通称ヤス。

何を隠そう彼は、この海鳴市に古くからある暴走族、海鳴連合の元リーダーで、現在は自称俺の弟子らしい。

いや、俺は弟子にした覚えは無いのだが、本人がそう言って聞かないのだ。

突然そんな事を言っても、理解が追いつかない人が殆どだと思う。

なので彼が、何故翠屋でアルバイトをしているのかという事を、順を追って説明して行きたい。

事の始まりは、俺が朝のバス停で、数十人の暴走族に、リーダーになってくれと頭を下げられた時の事だ。

結局俺は、リーダーになる事を、改めて丁重にお断りした。

その前日に仮面ライダーである俺に、散々しつこく付き纏っていたので、もっと某大豆発酵食品並みに粘り強く交渉してくると思っていたのだが、彼等は案外素直に引き下がってくれた。

理由を聞いてみると、本当は仮面ライダーと俺のツートップで、リーダーになって欲しかったそうなのだが、次に断られたら、潔く引き下がろうと事前に皆で決めていたらしい。

ここで一つ気になる発言があったと思う。

彼等の中で、仮面ライダーと俺が別人として扱われているのだ。

確かに俺は、このリーゼントのヤスという人と、ホルダーになっていた金髪の男以外の前では、変身していない。

この場に居る人達も、現場には居はしたが、全員気絶していた。

ホルダーになっていた金髪の男は、ホルダーだった時の記憶は無いし、ヤスという人にも口止めはしていたのだが、その場の流れで、俺が仮面ライダーだという事に気付いた人が居るものだと思っていたから尚更だ。

だが現実には、俺は仮面ライダーの知り合いで、俺があの勝負に助っ人として仮面ライダーを呼び出したという事になっていたのである。

如何してそんな話になっているのか、この場でそんな情報操作が出来るのは一人しかいない。

リーゼントが激しいまでに自己主張をしているヤスという人を見てみると、約束は果たしましたよと言わんばかりの、何かを成し遂げた後に見れる、良い笑顔を俺に向けてくる。

如何やら俺はこの人に、一つ借りが出来たみたいだ。

それでは何故、彼等の中で全てを解決した、仮面ライダーとは別人になっている俺にまで、リーダーになってくれと頭を下げに来たのかというと、仮面ライダーに逃げられたという事もあるが、単純に俺がドラゴンのメンバー相手に大立ち回りした事が、原因だったらしい。

更に俺が、仮面ライダーを助っ人として、呼び寄せた事になっているのも大きな要因になっている様だ。

こんな子供に頼むのはおかしいのではと、疑問に思い聞いてみると、海鳴連合のＯＢの人から聞いた話では、過去に今の俺と殆ど年齢の

変わらない木刀を持った少年に連合を半壊させられたり、大人以上の怪力な少女に病院送りにされた等の過去があるそうなので、自分達以上に子供が強くても不思議は無いと教えを受けてきたそうな……

何か一部俺の知り合いに心当たりがある様な気もしたが、あまり詮索しても良い事は無さそうなので、俺は其処でこの話題を終わらせる事にした。

そうして最後に、何か困った事があれば、何でも言ってくれと言い、暴走族の皆さんは帰って行った……一人を除いて。

残ったのはリーゼントの長ランを着たヤスという人だった。

まだ何かあるのかと思い、話を聞いてみると、突然に再度頭を下げられて、個人的に弟子にしてくれと志願してきたのだ。

何でも俺の生き様に漢を見たとかで、俺の傍に居ながら、その生き方を学びたいと言ってきたのである。

あまりにも真剣に言ってきたので、冗談を言っている訳では無いと、理解出来たが、それならば俺は益々この人を弟子にする訳にはいかない。

俺はそんな柄では無いし、基本ヘタレだ。

一般の人よりも多少戦えるのは、必要に迫られたからであり、副産物でしかない。

本当に漢としての生き様を学びたいのであれば、俺よりもお隣さんの士郎さんに頼んだ方が良いと思い、この人ならば会わせても大丈

夫と感じた俺は、士郎さんを紹介する事にしたのだが、今になってこの選択は間違っていたのではないかと、自問自答する事になる。

士郎さんを紹介した週末、俺が翠屋のバイトに出ると、暴走族時代の姿とはまるで違う、ワイルドイケメンが居たのだ。

その一番のトレードマークだった、リーゼントはばっさりと切られて、かなり短い短髪となっていた。

今まではそのリーゼントという特徴に目が行きがちだったが、その顔は、荒々しくも、均等の取れた顔立ちをしていたのである。

容姿だけを見れば、地味な俺と比べるまでも無く、翠屋に相応しい。

というか、紹介しておいて何だが、まさかこんな事になるとは、思ってもいなかった。

「だから、その旦那って呼ぶのは止めてくれないかなヤス」

「そうは言っても、やっぱり俺にとって純の旦那は、生き方を変えてくれた恩人に代わり無いんですよ！これぱっかりは譲れません！」

「じゃあ……せめてバイト中だけでも、違う呼び方にしてくれないかな？」

「う～ん。それじゃあバイト中は、チーフとお呼びします！」

「……もう良いよそれで」

俺は取り敢えず、その呼び方で妥協する事にした。

ヤスがバイトを始めてから、まだ二週間も経っていないが、今ではすっかりここに馴染んでいる。

俺の知り合いは何故、揃いも揃って、異常な程に適応力が高いのだろうか。

それと翠屋で変わった事は、新たにヤスがバイトに来た事だけでは無く、先程ヤスが俺の事を呼んだ様に、桃子さんの指示で俺はフロアチーフに昇格したのだ。

なので新人研修も任されたので、こうやって新人のヤスに指導している訳なのだが……ヤスへの指導は、ただ単純に仕事を教えるという事とは、別ベクトルで疲れてしまう。

仕事自体は、教えればそれなりに早く覚えてくれるのだが、俺に対しての態度が何かと体育会系の後輩みたいな接し方をしてくるのである。

俺がヤスに敬語を使わないのも、最初にさん付けで呼んだら、ヤスに敬語を使わないでくれと、かなりの勢いで言われたからだ。

まあ、俺もヤスには一つ借りがあるので、それくらいはしょうがないと諦めている。

そんな訳で、今日も翠屋での俺は、大忙しだ。

「これから純の旦那は、如何するんですか？」

翠屋のバイトを終えて、店を出た俺に、ヤスが話しかけてきた。

ヤスも同じ時間に、バイトが終わったので、今は二人して私服で外を歩きながら会話をしている。

流石に翠屋で働き出した人間に、魔巣田は通用しないと思い、本名を教えたのだが、それからずっとこの調子だ。

いい加減、勘弁してもらいたいという俺の気持ちは、二週間が過ぎた今でも健在である。

だが最初の頃こそ、俺も辟易としていたが、人は環境に適応していく生物であり、最近では以前程の違和感は感じなくなってきた。

慣れというものは、本当に恐ろしいものである。

「特に予定は無いけど？」

俺はヤスを見上げながら、返事を返す。

こうも身長差があるのに、並んで話すのは首が疲れて仕方が無い。

「実はこれから新作のレースゲームが入ったそうなので、ゲーセンに行こうと思っているんですが、純の旦那も如何ですか」

ヤスは、楽しみを隠し切れないのか、笑顔で喋り始める。

余程楽しみにしていたのだろう。

言っておくが、こう見えてヤスは、高校二年生なのだ。

つまり恭也君と同い年なのである。

学ランを着ていたから、もしかしたらと思っていたが、本人から改めて聞くと、新鮮な驚きがあるものだ。

最初俺は、コスプレで着ているのかと思っていた比率が大半を占めていたので、尚更である。

何でも海鳴連合全体が、若い年齢層で構成されており、最高齢でも十代でチームを抜けるのが、決まりらしい。

普段はバイクで、練習場を走り、偶に慈善活動に勤しむ……人はそれを暴走族ではなく、サークル活動と呼ぶのでは無かろうか？

しかし本人達が、自分を暴走族だと言っているのだから、あえて指摘する事も無いだろう。

この疑念は俺の心の中に、そっとしまっておく事にした。

それにしてもゲームセンターか。

前世の頃は、良く遊びに行ったものだが、今は全く行っていないな。

何せ今の俺は見た目が小学一年生である。

ゲームセンターに一人で行くのは、用事でも無い限り、敷居が高すぎる。

だからと言って、なのはちゃん達を連れて行くのにも、抵抗があるので、行く機会が全く無くなっていたのだ。

昔を思い出すと、久しぶりに遊びに行きたくなってきた。

幸いにも、翠屋でバイトをしているお陰で、今月のお小遣いには、まだ全く手を着けていない。

タダ券に感謝である。

考えて使えば、少しくらいの出費は問題無いだろう。

「そうだな。それじゃあ俺も行くよ」

俺はヤスの提案に賛同して、二人でゲームセンターに向かった。

ゲームセンターの入り口である、自動ドアを潜ると、奥の一角に人だかりが出来ていた。

「何だろう、あれ？」

「あの場所は確か、格闘系のブースですね。少し覗いて行きましょうか」

俺とヤスは、ゲームセンターに入ってすぐに見つけた人だかりに好奇心が刺激され、野次馬となるべく、その人の山の中心を目指した。

その中心に辿り着くと、ゲームセンターの店員であろうか、派手なベストを着たお兄さんが、マイクを片手に解説&実況をしている。

周りを見渡すとその脇には、壁に貼り付けられた、トーナメント表があり、三十台と思われる男性と、小学校の高学年と思われる男の子が、格闘ゲームで、熱い戦いを繰り広げていた。

「如何やら今日は、大会のイベントがあったみたいですね」

「みたいだな」

納得がいった様に言うヤスに俺も頷きながら答える。

折角なので俺達は、そのまま二人の戦いを最後まで見守る事に決めた。

画面からは、派手な衝撃音が鳴り、終に決着が着く。

勝ったのは男の子の方で、司会をしていた店員が、男の子の右腕を持ちながら、勝利を祝福した。

如何やら今の戦いは、決勝戦だったらしく、周りのギャラリーからは、盛大な拍手が送られる。

男の子は、勝って当然とばかりに、自信満々の笑みを浮かべながら、勝利者インタビューに答えている。

「ん？」

その男の子の目を見た瞬間、何か違和感を感じた。

あの男の子を見たのは、初めての筈なのに、何処かで会った事がある様に思えたのだ。

勿論そんな記憶は何処にも無い。

それにそう感じたのは、顔と言うよりも、男の子の目に対してだ。

あの目を俺は以前にも見た事がある気がする。

「如何したんですか？」

俺がその何かを思い出そうと、思案していると、ヤスが話しかけて

きた。

俺がその声に反応して、辺りを見回すと、ギャラリーは既に居なくなっており、現在この場所に残っているのは、俺達とイベントの後片付けをしている店員だけだった。

あの男の子も、既に居なくなっている。

「いや、何でも無い。それよりも新作のレースゲームを探そうか」

俺は先程感じた妙な気持ちを、四散させながら本来の目的を達成させる為の活動をするように、ヤスを促す。

「あ！そうでしたね！早く探しましょう！」

俺の言葉で、目的を思い出したヤスは、駆け足で格闘ゲームのブースを後にした。

その姿はまるで、大きな子供である。

俺は走ると危ないぞと注意を促しながら、ヤスを追いかけた。

お目当てのレースゲームは、店内の隅に設置されている為か、あまり人が居なかった。

今日は先程までやっていたイベント等もやっていたから尚更なのだろう。

まあ、待たなくても良いのは助かったので、早速ゲームで対戦をしようという事になったのだが、其処に突如異変が生じた。

「ねえ～来人君。俺達に何か言う事は無いのかな？」

数人の中学生程の男達が、それよりも明らかに年下である男の子を囲んで、何かを話し始めたのである。

しかもその囲まれた男の子は、先程のイベントで、優勝した男の子だった。

「何の事ですか。僕には意味が分かりませんけど？」

「嘘はいけないな～。病院に入院してるあいつがうわ言みたいに呟くんだよ。来人が、来人がってな……何か知ってるんだろ？」

そう言うと中学生の男は、来人と呼ばれた男の子の胸倉を掴む。

何かを揉めている様だが、これ以上黙って見ている訳にも行かないと思い、ヤスと一緒に割って入ろうとしたのだが、ここで俺達以外に新たな乱入者が現れる。

「待て！」

割って入ってきたのは、中学生程の少年で、その顔立ちは、何処か来人と呼ばれた男の子と似ていた。

「あいつは……雅人」

以外な事に、ヤスが突然現れた少年の名前を口にする。

「知ってるのか？」

「はい。昔俺がガキの頃通っていた空手道場の息子で、照屋雅人（てるやまさと）って言います」

聞かれたヤスはスラスラと答える。

それにしてもヤスが知り合いだったとは、世間とは以外と狭いものだ。

「それじゃあ、あの男の子とも？」

「いえ、俺もあの小学生には会った事がありませんが、多分弟でしょう。以前雅人から、生まれつき身体の弱い弟が居ると聞いていましたから、確か名前は来人（くると）と言っていましたから、間違い無いでしょう」

俺達が会話をする間にも、照屋兄弟は、数人の中学生と揉め続けている。

「あんた達いい加減にしてくれよ！来人は知らないって言ってるだろ！？」

「だからそれを確認してるんだって。それに最近来人の奴も生意気言う様になったから、一度解らせないといけないと思ってたしな」

「……最低だな、あんた達」

今にも一色即発という雰囲気になってきたので、俺達は急いで、その場に割り込む。

「何やってんだよ兄ちゃん達？面白そうだから俺も混ぜてくれねえか」

ドスの効いた声で、ヤスが中学生達に睨みを利かす。

その姿は、さすが元暴走族のリーダーといった所だ。

「康則さん！？」

ヤスの姿を見た、雅人君が驚きの声を上げる。

「康則って、もしかしてあの海鳴連合のリーダーの！？」

続いて雅人君の発言に反応した中学生達に動揺が走る。

「それで、俺の同門に何か文句でもあるのか？」

「ひ！？」

更に睨みを利かすヤスに、中学生達は竦み上がり、早々に退散して行った。

それとほぼ同時に、来人君も何処かへ走り去ってしまう。

「あ、来人！」

雅人君が急いで追いかけようとするが、人込みに紛れて、その姿を見失ってしまう。

「さっきのは、お前の弟か？」

ヤスが落胆する雅人君に質問する。

「……はい。それとさっきはありがとうございます。おかげで助かりました」

雅人君は深々とお辞儀をしながら、礼の言葉を述べる。

「それにしても随分と雰囲気が変わりましたね。声を聞くまで誰だか分かりませんでしたよ」

「まあ、今の俺があるのは純の旦那のおかげだけどな！」

雅人君の質問に答えながら、ヤスは俺の肩を軽く叩く。

その様子を見た、雅人君が、一瞬キョトンとした顔をするが、次の瞬間には相変わらずですねと苦笑いした。

如何やらヤスのこういった性格は、筋金入りらしい。

「えっと、俺急いでますんでもう行きますけど、本当にありがとうございました！」

そう言って、雅人君は、来人君が走り去った方向に向けて、走って行ってしまった。

一体何があったのだろうと思うが、如何やら俺にはそれを考える時間も無い様である。

『キンキュウケイホウキンキュウケイホウキンキュウ……』

突如鳴り響く、タッチノートの警報。

【『聞こえるかマスター』】

続いて聞こえて来たのは、メカ犬の通信音声だった。

【『今マスターが居る場所のすぐ近くで、ホルダー反応があった！すぐに行くからマスターは先に現場に向かってくれ』】

「分かった！」

俺はメカ犬との会話を手早く済ませてから、タッチノートで、場所を確認する。

確かにメカ犬が言っていた通り、ホルダーの出現場所は、このゲームセンターの目と鼻の先だった。

「お供します！純の旦那！」

ヤスが俺にそう進言して来る。

出来れば危ないので、来て欲しくは無いが、ヤスはそれを言っても聞き入れないだろう。

取り敢えず着いたら、避難誘導に協力する様に言い聞かせた俺は、現場に向けてヤスを連れて走り出した。

「た、助けてくれ！！！！」

俺達が現場であるゲームセンターを出た道の先の裏通りに辿り着いた時、ホルダーは数人の中学生を襲っていた。

しかもその中学生は、先程ゲームセンターで照屋兄弟と揉めていた中学生集団である。

それに襲い掛かるホルダーは赤い毛並みをしており、最も近い表現をするのであれば、大きな熊が、柔道着を着ている様な姿をしてい

た。

まだメカ犬は着ていない。

だがここで指を銜えて見ている事も出来ないので、如何にかしてホルダーの気を引こうとした時、突如タッチノートが、反応を示したのである。

『キンキュウケイホウキンキュウケイホウ……』

その反応を察知したその次の瞬間に、目の前に新たなホルダーが現れた。

そのホルダーの姿は、赤毛のホルダーと酷似していた。

一番の違いを上げるのであれば、それはその毛色だろう。

先程まで暴れていた赤い毛並みのホルダーに対して、新たに現れたホルダーは青い毛並みをしている。

まだメカ犬も着ていないこの状況で、更に事態が悪化した事を、如何するべきか、俺は必死に考えるが、ここで新たに現れた青い毛並みのホルダーは、俺の予想とは違う行動に出た。

青い毛並みのホルダーは、赤い毛並みのホルダーを背中から羽交い絞めにすると、その動きを阻害し始めたのである。

何が起こっているのか分からない。

だがこれはチャンスだ。

「ヤス！今の内にあの人達を逃がすぞ！」

「はい！」

俺はヤスに指示を出しながら、突然の恐怖に見舞われて動けない彼等に、逃げる様に促す。

『マスター！』

全員を無事に逃がした頃に、やっとメカ犬が現場に到着した。

「遅いぞメカ犬！」

『すまないマスター。それよりも途中から反応が増えたのだが、この状況は何なのだ？』

「俺にもさっぱりだ！兎に角今は急いで変身するぞ！」

『うむ！』

俺は急いで、タッチノートを開きボタンを押す。

『バックルモード』

銀色のベルトに変形したメカ犬が、俺の腹部に自動的に巻きつく。

「変身」

俺は音声コードを入力して、タッチノートをバックルの溝に差し込

む。

『アップロード』

音声が流れると同時に、白銀の光が、俺の全身を包み込み、その姿を一人の戦士へ変えていく。

光が飛散した際に現れたその姿は、メタルブラックのボディーと、その四肢に流れる銀のラインが光る仮面ライダーである。

「行くぞ！」

『うむ！』

俺達が気合を入れて走り出そうとしたその時、突如俺達の足元の地面に銃弾が撃ち込まれる。

「何だ！？」

その銃弾の打ち込まれた先を見据えると其処に居たのは、銃を構えて、何時でも引き金を引ける事を主張する灰色の怪人が居た。

『メルト！』

メカ犬がその怪人の名を叫ぶ。

その叫びにメルトは答える事も無く、再び引き金を引き絞る。

「くそ！？」

俺は急ぎ次弾を回避する為の行動を開始した。

## 第十五話　自分らしい強さ【前編】（後書き）

現在５０万ＰＶ記念の企画を何にするのか、幾つか案があります。

今の所は、

○新たな原作ライダーとのコラボ物

○キャラクター人気投票

○映画版第二弾

○サイドストーリーを数本

○読者企画で、ストーリーと新キャラ募集

全てを実現するのは無理そうなので、この中から一つ、多くても二つやってみようと思うのですが、迷う所です。

何か他にやって欲しい案等が御座いましたら、お気軽に感想に書いてくだされば嬉しいです。

実現出来るかは分かりませんが、出来るだけ検討はさせて貰いますので。

それではまた次回でお会い致しましょう。

## 第十五話　自分らしい強さ【後編】（前書き）

それでは続きになります。

それと後編ではお知らせがありますので宜しければどうぞ。

それでは後編も楽しんで頂ければ幸いです。

# 第十五話　自分らしい強さ【後編】

銃の引き金を絞るメルトに対して、俺はベルトの右側をスライドさせて緑のボタンを押した。

『スピードフォルム』

音声が流れると同時に、メルトが引き金を引いた銃口から、弾丸射出される。

俺の周りには、暴煙がたち込めて、辺りの様子が確認出来ない程だ。

「……今のを避けきるとは中々の速さだな」

メルトは呟きながら、煙が舞う方向とは、逆に銃身を向ける。

「そりゃどうも」

その先に居るのは、ライトグリーンに輝くボディーの仮面ライダー、つまりスピードフォルムの俺だ。

何とか間一髪で、フォルムチェンジに成功した俺は、スピードフォルムの特性である身軽さを駆使して、如何にか難を逃れた訳である。

軽口を叩いてはいるが、内心かなり焦った。

俺はそれを悟らせない様に注意しつつ、右側のベルトを再度スライドさせて、黄色いボタンを押す。

『スピードロッド』

音声が流れると同時に、ベルトから発生した光が、このスピードフォルムの専用武器であるスピードロッドへと、その姿を変えていく。

「お前が来てるって事は、あのホルダー達もオーバーが言っていた【作戦】に関係あるんだな？」

スピードロッドを構えながら、俺はメルトに質問する。

「ふん。私が素直に話すとでも思っているのか」

『ならば無理矢理にでも、聞きだすまでだ！』

メカ犬が啖呵を切る事で、俺とメルトの戦いが開始される。

「やれるものならば、やって見せるがいい！」

そう言いながら、メルトは連続で弾丸を撃ち出して、俺との距離を取ろうとする戦法を取ってきた。

俺はその弾丸を避けながら、時にはロッドを使い、薙ぎ払いつつ、何とか接近を試みる。

以前戦ったオーバーとは反対に、メルトは距離を取った戦いを得意としているみたいだ。

これは一度に両者と戦う事になったら、不味いかもしれない。

出来るならば、ここで奴だけでも倒したい所だ。

「はあああああ！！！」

俺は強引に突っ込み、何とかメルトの懐に飛び込む。

「甘い！」

だが今度は、メルトの拳が、俺に牙を向く。

「ぐっ！？」

咄嗟にロッドを盾にして、直撃だけは回避するが、折角縮めた距離が、再び離されてしまう。

「私を遠距離だけと侮ると痛い目を見る事になるぞ？」

「御忠告どうも……」

メルトが俺に再び銃口を突付けながら、言ってくる。

俺はそれに冗談交じりに答えながら、ロッドを構え直すが、正直な所かなり動揺していた。

流石に一筋縄では行かないと思ってはいたけれど、予想以上だ。

直撃では無かったとはいえ、ロッド越しに衝撃を受けた腕に、いまだダメージが残っている。

距離を取って戦えば、あの高威力の銃を如何にかしなければいけないし、距離を詰めて接近戦を仕掛ければ、先程の拳と一戦交える事

になる……本当に厄介な相手だな。

「ふん。取り敢えずここまでのようだな」

「何？」

臨戦態勢で、何時戦いが再会されてもおかしく無いこの状況下で、メルトが意外な事を呟く。

「うがあああああ！！！！」

メルトが呟いた直後、赤い毛並みのホルダーがもう一体のホルダーの拘束を解き、何処かに走り去ってしまう。

それに一瞬でも気を取られたのがいけなかった。

もう一度メルトに目を向けると、先程までいた筈の場所から、その姿を消していた。

「居ない！？」

『奴等はとんでもなく逃げ足が速いな』

俺は驚きの声を上げ、メカ犬は悔しげに言葉を漏らす。

「純の旦那！後ろです！！！」

ヤスが突如叫び声を上げる。

何事かと振り返ると、青い毛並みのホルダーが、ゆっくりと俺に近

づいてきていた。

咄嗟にロッドを構えて、戦闘態勢を整えるが、何処か様子がおかしい事に気付く。

如何にも戦闘の意思が感じられないのである。

一体如何いう事かと、ホルダーの動きを、注意深く観察していると、ホルダーの全身から、くすんだ銀色の光が、発せられて、その姿を元の人間の姿に戻した。

「雅人!?」

ホルダーから元の人間に戻ったその姿を見たヤスが、その人物の名前を呼ぶ。

そう。

青い毛並みのホルダーの正体は、先程ゲームセンターに居た来人君の兄、照屋雅人だったのである。

「それじゃあ、もう一体のホルダーの正体は、来人君だったんですね」

「はい。如何かお願いします！弟を……来人を止めるのに協力して下さい！」

俺の質問に答えた雅人君は、深く頭を下げながら、懇願してきた。

「しかし兄弟揃って、何でそんな事になったんだ？」

俺と雅人君の会話を聞きながら、ヤスが疑問を口にする。

「……実は来人は、二ヶ月程前から酷いイジメを受けていたみたいなんです」

少しだけ躊躇いを見せつつも、雅人君は、俺達にゆっくりと説明をし始めた。

来人君は、先程までいた中学生達に、イジメ受けていそうだ。

最近までそれを来人君本人が、隠していた為、家族の誰も気が付かなかったそうなのだが、一週間程前から急に来人君の様子が変わったらしい。

今まで気の弱かった来人君が、暴力的になったのである。

ご両親は反抗期だろうという事で、片付けたらしいのだが、雅人君は如何しても納得出来ず、個人的に調べて回った。

イジメの件は、その調べる過程で知ったらしい。

その事を本人に問い質した所、来人君が灰色の怪人、メルトから暴走プログラムを譲り受けた事を聞いた。

勿論すぐにそれを捨てる様に、雅人君は言ったのだが、それを来人君が聞き入れる事は無かった。

何度も説得したが、その答えは変わらず、やがて事態は急変する。

来人君の性格だけで無く、その肉体にも、急激な変化が訪れたのだ。

つまりホルダー化である。

ホルダー化により、来人君の考えは、今までイジメを受けた事への復讐をすることへとシフトしていった。

そして数日前、ついに一人目の被害者が出る事になる。

その時は、雅人君が必死に止めたという事もあり、被害者はホルダー化した来人君に驚き、階段から足を踏み外した為の怪我が元で、入院を余儀無くされた。

結果的には来人君が、直接手を下す事にはならなかったが、次は無い……

このままでは弟である来人君が、過ちを犯す事になってしまう。

そんな思い悩む雅人君の前に現れたのが、来人君に暴走プログラム

を授けた灰色の怪人メルトだった。

メルトは、来人君を止めたいのであれば、同じ力を持てば良いと言って、雅人君にも同じ物を渡したのである。

最初こそ戸惑いを見せた雅人君だったが、確かにそれ以外今の来人君を止める術は無いと、思い至り暴走プログラムをその手に取った……

『解析が完了したぞマスター』

雅人君が話終えたのとほぼ同時に、メカ犬が声を上げる。

メカ犬は、雅人君が話している間、雅人君の持っていた灰色の球体である、暴走プログラムの解析を続けていたのだ。

「それで如何だったんだメカ犬？」

『うむ。それなのだが……少年、確か雅人と言ったな』

「は、はい」

メカ犬は、視線を雅人君に向けて話しかけ、それに戸惑いながらも雅人君は何とか返事を返す。

『雅人は今回初めてホルダー化したのではないか？』

「……そうです」

『最初に言っておく。これ以上ホルダー化するな。このままホルダ

ー化し続ければ、すぐに正気を失う事になるぞ』

「如何いう事だよ？」

俺はメカ犬の発言に、疑問を持ち、解説を求める。

確かにホルダー化を続ければ、その人の理性が失われていくと、以前言ってはいたが、それは個人差があるものの、それなりの時間が掛かった筈だ。

『マスター。このプログラムを解析して分かったのだが、これは従来のプログラムとは、明らかに違う性質を有している』

「違う性質？」

『うむ。今までのプログラムは、時間をかける事で、保持者との最適化をしてきたのだが、これはその過程を無視して、強制的にホルダー化を図るものだ。それと同時に使用した者の意識をも、短時間で崩壊させる』

今までのプログラムとは違う、即効性が高められたシステム……奴等はこれを使って、何をしようとしているんだ？

「……それでも俺は、弟を、来人を助けたいんです。その為なら、俺は如何なっても構いません！」

「弟が大事だっていうのは分かるが何で其処までして？」

メカ犬の忠告を聞き、それでも尚、来人君を救いたいという雅人君の覚悟を聞き、ヤスが疑問を口にする。

「今の俺があるのは、来人のおかげなんです。俺は道場主の息子なのに、あんまり強くなくて、負け続けて落ち込んでいた時、自分は身体が弱くてあまり激しい運動が出来なくて、見てるだけでも辛い筈なのに、何度も俺を励ましてくれたんです……凄いねって、お兄ちゃんは凄く強いから次は絶対勝てるからって」

雅人君は、強い意志と覚悟を秘めた瞳で、俺達に話し続ける。

「俺はその言葉に、何度も勇気付けられました。だから今度は俺が、来人を助けたいんです！あの優しかった来人に戻って貰いたいから！」

『……覚悟は変わらないのだな？』

メカ犬が雅人君を見詰めながら、一言だけ確認する。

それに対して、雅人君は一度だけ力強く頷いた。

『一回だ。後一回だけならば、ホルダー化しても、暴走する事は無いだろう。そして弟を助けた後は、すぐに暴走プログラムをワタシに渡せ。良いな？』

雅人君の熱意に負けたのか、メカ犬は溜息交じりに告げて暴走プログラムを雅人君に渡した。

「話は纏まったみたいですけど、どうやって奴等の居場所を特定するんですか？」

大体の話が纏まった所で、ヤスが俺に質問してきた。

確かにタッチノートで、ホルダー反応を察知する事は出来るが、結局は後手に回る事になってしまう。

恐らく辿り着いたとしても、メルトが待ち構えているだろうから、一筋縄に行くとは、到底思えない。

何とかして先手を打ちたいが、如何にかならないものだろうか？

「あの……俺に一つ、提案があるんですけど」

俺がこれから如何動くべきか、悩んでいた所で、雅人君が控えめに手を上げた。

夕方の海鳴公園に、一人の小学生の男の子がやって来る。

そして公園内の奥に、目的の人物達を視認した男の子は、其処に向かおうと歩みを進めようとしたその時、

「悪いけどそれ以上は先に進ませないぞ」

「来人！もう止めるんだ！」

公園にやってきた男の子、来人君の進行方向に、俺と雅人君が立ち塞がる。

「……如何して僕がここに来るって分かったの？」

俺と雅人君を見た来人君が、不思議そうに聞いてきた。

『それは彼等に聞いたのさ』

遅れて俺の隣に来たメカ犬が、説明を開始する。

メカ犬が向けた視線の先に居るのは、ヤスの指示でこの場から避難している、来人君をイジメていた中学生達だ。

俺達は雅人君の提案で、必ず狙われるであろう、彼等を見つける事に目的を絞ったのである。

ここ最近まで、来人君の周辺を独自に調べていた、雅人君が居たからこそ、実行出来た作戦だ。

「邪魔しないでよお兄ちゃん」

「駄目だ来人！今お前がしようとしている事は、今までお前をイジメて来た奴等がしていた事と同じなんだぞ！」

「だから何？お兄ちゃんはあいつ等を許せって言うの？僕は嫌だよ

！それに僕は何も悪くない！全部あいつ等が悪いんだ！だから僕はあいつ等を絶対に許さない！！！」

雅人君が何とか来人君を説得しようと試みるが、その思いは届かない。

「……如何しても止めないって言うのなら、俺を倒してから行け！」

「お兄ちゃんがその気なら、僕も容赦しないよ！」

照屋兄弟は、互いに灰色の球体を取り出して、全身をくすんだ銀色の光で包み込む。

光が飛散して、その場に居たのは、姿の酷似した、色違いの二体のホルダーだった。

二体のホルダーは、互いの意志を貫く為に相手に攻撃を仕掛ける。

『マスター。ワタシ達がやるべき事は……』

「ああ、分かってる」

俺は二人の兄弟の互いに賭けた意志を貫く為の戦いから、視線を逸らしてタッチノートのボタンを押す。

『バックルモード』

音声が流れると同時に、ベルトに変形するメカ犬を腹部に巻きつけながら、俺は辺り一体に聞こえる様に叫ぶ。

「おい！居るんだろメルト！」

俺の声は、夕暮れの公園に虚しく鳴り響く。

「ふん。如何やらばれていたらしいな」

何の前触れも無く、脇の木陰から灰色の怪人メルトが、その姿を現す。

「お前の相手は俺だ！あの二人の邪魔は絶対にさせない」

俺は雅人君に頼まれていた。

もしも戦う事になったその時は、自分自身の手で、大切な弟を止めさせてほしいと。

だから俺は、その邪魔をする奴を足止めする。

「変身」

変身の為のキーワードを言いながら俺は、タッチノートをバックルに差し込む。

『アップロード』

音声と共に白銀の光が俺の全身を包み込み、その姿をメタルブラックの仮面ライダーへと変える。

「メルト！お前の相手は俺だ！」

変身を完了させた俺は、何時でも戦える様に身構える。
あの二人の邪魔は絶対にさせない！
「ふん。その必要は無い」
メルトは、俺の言葉を一蹴すると、左手を広げて、ホルダー化して戦い続けている照屋兄弟に向けた。
その行為を止める間も無く、唐突に異変が訪れる。
「うあ！？」
「が！ぐ！？」
左手を突き出されたその瞬間に、ホルダー化した二人が苦しみ出したのだ。
「一体何をしたんだ！？」
俺にはメルトが手を広げただけにしか見えなかったが、奴が何かをしたのは間違い無いだろう。
その広げた左手を下げさせる為に、俺は叫びながら攻撃を仕掛ける。
だがその攻撃は、メルトに届く事は無かった。
俺とメルトの間に割って入り、攻撃を妨げる者が現れたからだ。
「「ぐるるるる……」」

野獣の様な唸り声を上げながら、先程まで苦しんでいた筈の二体のホルダーが、俺の前に立ち塞がる。

『馬鹿な!?暴走状態に入っている上に、それを外部から制御しているだと!?』

ホルダーの豹変に対して、メカ犬が驚愕の声を上げる。

「オーバーが言っていただろう。私達はホルダーを超えた存在。全てのホルダーは私達の意のままに操る事が出来る」

二体のホルダーに守られながら、メルトがとんでもない事実を俺達に告げた。

「さあ行け!仮面ライダーを倒して見せろ!」

メルトの号令と共に、二体のホルダーが、襲い掛かる。

赤い毛並みのホルダーは、地面に落ちている木の枝を拾うと、その拳に力を込めた。

するとその小枝が、突如変化を起こし、巨大な斧へと変わった。

「何だって!?」

『物質変換か!?』

先に突っ込んできた青い毛並みのホルダーの攻撃を裁きながら、後ろで武器を生成するその姿に、俺とメカ犬は驚きを隠せない。

青い毛並みのホルダーと交互に、今度は赤い毛並みのホルダーが斧を片手に、驚異的な斬撃を繰り出す。

「ぐう！？」

あまりにも突然な事態に、俺はその波状攻撃を避けきる事が出来ず、吹き飛ばされる。

「ははははは！！！脆いな。人の心とは本当に脆い！！！」

その光景を見ながら、メルトが嘲笑う。

人の心が脆い？

それは……

「違う！！！！！」

俺は立ち上がりながら、メルトの言った言葉を否定する。

「人の心は確かに脆いと思える時があるかもしれない……だけど人は！大切な何かを守ろうと心に決めた時、何処までも強くなれる！！！」

俺は自分が初めて変身した時の事を思い出す。

その脳裏に蘇るのは、大切な絆。

俺はその絆を守りたいと願ったからこそ、この力を受け入れた。

そして今この場には、もう一人、大切絆を守るために、己の全てを賭けた人が居る。

「くだらんな」

俺の言葉を一蹴して、メルトはホルダー達に、俺の息の根を止めるように指示を出す。

その指示に従い襲い掛かる二体のホルダー。

俺は信じてる。

誰かを守りたいと願うその心が、何にも負けない奇跡を生むという事を……

「馬鹿な!?」

次の瞬間メルトが驚愕する。

それもその筈だ。

今俺の目前では、青い毛並みのホルダーが、赤い毛並みのホルダーが振り上げた斧を受け止めていたのだから。

「……助ける……俺が、来人を……」

雅人君が、途切れながらではあるが、己の覚悟を口にする。

「そんな馬鹿な事が起こる訳が無い！私の制御は完璧だった筈だ！

？」

「人の強さを甘く見たからだ！」

信じられないという感じで叫ぶメルトに対して、俺は確信する。

「何だと！？」

「これも人の強さなんだよ！」

強さは単純な力だけじゃない。

誰かを思う、その心だって、確かな強さなんだ！

「心の強さ……ははははは！！！！！！！面白い！！！！面白いぞ！！！！これは研究のしがいがある！！！！！」

急に感情を表に出したメルトは、歓喜の叫びを上げると、そのままこの場から去っていく。

『このまま行かせて良いのかマスター？』

「本当は良くないけど、今俺達がするべきなのは、あの兄弟を助ける事だろ」

俺はメカ犬に返事を返しながら、ベルトの右側をスライドさせて、黄色いボタンを押す。

『ベーシックファントム』

音声が流れると同時に大量の光が発生して、もう一人のシードを作り上げた。

俺は作り出したメカ犬が操る分身体に背中を向かせて、その背部のベルトに設けられた溝に引き抜いたタッチノートをスライドさせる。

『ロード』

俺は音声が鳴るのを確認しながら、再びタッチノートをバックルに差し込む。

『アタックチャージ』

俺と分身体の右足に光が集約する。

俺は一度だけ、ホルダー化した照屋兄弟を見つめながら呟く。

「悪夢はここで終わらせる」

次に俺と分身体を操作するメカ犬は、同時に構えをとる。

『「こいつで決めるぜ」』

その言葉を言った直後、二人同時に跳躍した。

光の集約された右足を其々の狙いに定めて、必殺の一撃を繰り出す。

『「ツインシードスマッシュ」』

必殺の一撃は、二体のホルダーを強襲して、爆発を引き起こした。

爆発が収まり、その場に居たのは、俺達と気絶した照屋兄弟だけだ。
ただの偶然なのか、気絶した照屋兄弟は互いの手を取りあっていた。
まるで二人の絆を確かめるかの様に……

「そう言えば、あの兄弟は如何してるんだ？」

「ええ、今は仲良く二人で空手道場に通ってますよ」

俺とヤスはゲームセンターで新作のレースゲームで対戦しながら、会話する。

結局先週は、ホルダーのせいで新作のレースゲームが出来なかった俺達は、改めて休日にこうしてゲームセンターにやって来た。

あの後、記憶が無くなったとはいえ、来人君がイジメを受けていた事までは覚えていた、雅人君が色々と動いたらしい。

ヤスも協力したそうで、加害者である中学生達は、その根性を叩き直す為にと、強制的に空手道場の門下に入ったそうだ。

親御さん達も反対する所か、喜んで入れさせてくれたので、もう同じ事を繰り返したりはしないだろう。

「あ！」

俺は唐突に、一つ疑問に思っていた事を思い出した。

ホルダー化していた時の来人君のあの目の事である。

あの目は、以前戦った、あの人の目と同じなのだ。

でも心配する事は無いだろう。

来人君には、雅人君という頼りになるお兄さんが居る。

あの兄弟ならこれからどんな事があっても、如何にかしていくに違いない。

「如何したんですか純の旦那？」

俺の表情が緩んでいる事に気付いたのか、ヤスが質問してくる。

「いや、何でも無いさ」

俺は軽く答えながら、レースゲームの続きに興じた。

『マスターらしいな』

それを傍で見ていたメカ犬が呟くが、俺は照れ隠しから、あえて聞かなかった事にした。

ゲームセンターからヤスとメカ犬を、一緒に連れて帰って来て我が家が見えた頃、俺の家の前に四人の女の子が居た。

「あれ？如何したの、なのはちゃん達」

それは俺の友達でもある美少女四人組だった。

「如何したのじゃないよ！」

「うん！」

「最近純は付き合いが悪いのよ！」

「せやから、これから私達の遊ぼうな！」

開口一番にそう言うと、なのはちゃん達が、俺の腕を引っ張って、家の中に引き摺り込んでくる。

「純の旦那も大変ですね。メカ犬さん」

『うむ。だがあれも、マスターが言う所の絆なのだろうな』

他人事だと思って、好き勝手に言うヤスとメカ犬。

微笑ましそうに見てないで、助けてくれ！

今の俺は本気で腕が折れそうだ！

特にすずかちゃんなんて、手加減してくれているのかすら怪しい。

「痛い！痛いって！引っ張らなくても着いて行くから！」

俺は放してくれと叫ぶが、その要求は聞き入れられる事は無く引き摺られて行くばかりである。

今日の海鳴は、様々な絆に溢れて……やっぱり平和だ。

# 第十五話　自分らしい強さ【後編】（後書き）

アクセス数５０万ＰＶ突破記念企画。

今二つの世界が一つに重なる

「とても興味深いね」

「ホルダー？ドーパントとは違うのか？」

「二つの世界が融合を果たそうとしている……」

「聞いてないよ～」

一つの世界に変化が訪れる

「マスター。あれも仮面ライダーなのか？」

「何で風都がこの世界に……」

「二つの世界が完全に一つになったその時、全てがリセットされる！」

それはもう一つの世界と混じり合い、全てを変えて行く

「させないさ！」

「ハーフボイルドだね」

「世界を救ってみせるさ。柄じゃ無いけどね」

『それが仮面ライダーか……』

二つの世界を救う為、其々の世界の仮面ライダーが立ち上がる！

「「変身」」

『サイクロン』

『ジョーカー』

「変身」

『アップロード』

「「さあ、お前の罪を数えろ」」

「悪夢はここで終わらせる」

特別編！仮面ライダーシード＆仮面ライダーＷ
ミックスワールド・クライシス

２０１１年春更新予定

# 第十六話　仮面ライダーＶＳ仮面ライダー？【前編】（前書き）

どうも作者のＧ－３Ｘです。

今回のホルダーは、月光閃火さんのコスチュームホルダーを原案に使わせて頂きました。

その上で月光閃火さんに、謝らなければなりません。

応募して頂いた中で、一番細かく設定を考えて頂いたのに、私の執筆力では、そのままの状態で登場させる事が出来ませんでした。

なので申し訳無いのですが、設定が変わっています。

改めまして本当に申し訳御座いません。

それでも読んで頂けるのであれば、嬉しいです。

さて、今回のホルダーで、募集したホルダーは、全部出し切ったのですが、また自分が考えたホルダーを作品上で出して欲しいという要望があれば、お気軽に感想欄に載せてくださいね。

何時でも検討はしますので。

それでは本編も楽しんで頂ければ幸いです。

# 第十六話　仮面ライダーＶＳ仮面ライダー？【前編】

風が冷たくなってきた１１月半ばの日中。

１０人の女性に聞けば、三分の一程が格好良いと言うであろう、二十代前半の男性が海鳴公園のベンチで、項垂れていた。

「はあ……また不合格か」

重い溜息を吐きながら、男性は呟く。

男性の手には、一枚の書類があり、そこには一際大きな文字で、不合格と書かれていた。

彼の名前は成桐円射（なりきりえんじゃ）。

将来は役者になる事を夢見る若者であり、先週も新しいドラマのオーディションを受けたばかりの、現在フリーターである。

彼が手に持っている書類と、現状の彼を見ればそのオーディションの結果は明らかであろう。

このまま家に居ると、際限無く落ち込んでしまうだろうと考えて、外に出て来た訳だが、尚も気分は晴れずにいる。

いまだ落ち込みながら、何となく自身の視線をベンチ脇の、網目状のゴミ箱に向けると、その一番上に普段から愛読している雑誌が、乱雑に捨てられていた。

海鳴ジャーナルが毎月発刊している、月刊海鳴である。

そういえばまだ今月号は読んでいなかったと思い、彼は捨てられていた月刊海鳴を拾い上げて、ページを捲り始めた。

一番に目に飛び込んできたのは、最近この海鳴市でも、有名になってきたメタルブラックのボディーを持つ、超人の姿である。

「仮面ライダーか……」

特集ページを流し読みしながら、彼は独り言を呟く。

「芸能人でも何でも無いのに、特集が組まれる位に有名になれるなら、俺もヒーローになってみたいぜ」

「ふ～ん。君ってヒーローになりたいんだ？」

「へ！？」

独り言で口にした筈の言葉に、返事が返ってきた事に驚いた、彼は思わず驚きの声を上げながら、その返事が聞こえた方向に振り向く。

そこに居たのは、藍色の怪人だった。

「良いよ。君のその願い、僕が叶えてあげる」

藍色の怪人は、軽い口調でそう口にした。

「えっと……確かこの道の突き当たりを、右に曲がった先のマンションだったよな？」

俺はうろ覚えの道を思い出しながら、手書きの地図を片手に、歩みを続ける。

『しかし恵理殿の頼み事自体は良くある事だが、話す場所に自分の家を指定してくるとは、珍しい事だな』

「まあな」

背中に背負ったオレンジのショルダーバックから、頭だけを覗かせたメカ犬の問いに答えながら、俺は目的地である恵理さんの自宅を目指す。

話は前日の翌屋でバイトをしていた時間にまで遡るのだが、何時もの様に訪ねて来た恵理さんが、またしても俺達に頼み事をしてきたのである。

普段から何かと厄介な頼み事をしてくる恵理さんだが、今回はどうも様子が違っていた。

何時もなら翠屋で、直接用件を言うのだが、今回は休みの日に、家にまで訪ねて来て欲しいと言うのだ。

出来ればお断りしたいと思うのも、最早何時も通りの事なのだが、恵理さんの頼み事は放っておくのも危険な割合が、かなり高いので、俺は仕方なく承諾して、こうして休日に足を運んでいるという訳である。

その時に渡して貰った、地図を片手に俺とメカ犬は、絵里さんの住んでいるマンションを探す。

以前に一度だけ、今年の9月の頭に、訪ねたというか、来た事はあるのだが、その時は緊急事態だったので、どういう道筋だったのかは、全く覚えていない。

それでも何とか探そうと、地図に視線を集中させながら歩いていたその時、

「きゃ！？」

という声と共に、何か柔らかい物体にぶつかる感触が俺を襲った。

その衝撃によって、バランスを崩してしまい、倒れそうになるが、俺は何とか踏み止まる。

一体何があったのかと思い、急いで視線を前に向けると、そこに居たのは、尻餅をついているセーラー服を着た中学生程の美少女だった。

ちなみに後ろに束ねられた髪、所謂ポニーテールから覗くうなじは、

男性の永遠のロマンだと前世の友人が、口がすっぱくなる程言っていた。

「痛いわね……何なのよ突然！？」

勝気な瞳に、痛みの為か、涙を溜めて、美少女が此方を睨みつける。

「ちょっとそこの子供！ちゃんと前を向いて歩きなさい！危ないじゃないのよ！！！」

自分がこうなった原因を、俺と断定したのだろう。

美少女は立ち上がって、埃を払いながら、注意をしてくる。

確かに俺の前方不注意というのもあるが、美少女の右手を見ると、俺と同じ様に、手書きの地図が描かれたメモ用紙を持っていた。

恐らくこの美少女も、俺と同じ事をしていたのだろう。

自分を棚に上げて相手を注意するというのは、如何なのだろうか？

「はあ、どうもすいませんでした。これからは気をつけます」

だがここはあえて謝る事で、俺はこの場を納める事に尽力する。

俺の勘が、この美少女に関われば、厄介事に巻き込まれるぞと、警報を鳴らすのだ。

ただでさえこれから、自ら厄介事に向かわなければならないというのに、これ以上は許容量オーバーである。

「分かれば良いのよ。それと君の罪滅ぼしに、私の手伝いをさせてあげるわ！」

だが俺の思惑は外れてしまい、美少女は俺様主義な自論の基に、俺を巻き込んできた。

この強引さは、どこぞの雑誌記者にそっくりである。

「いや、俺も今から用事があるんですけど……」

「何が用事よ！あんたみたいな子供の用事なんて、たかが知れてるでしょう！私の用事はね、結果次第で兆のお金が動くのよ！！！」

見た目だけで言えば、確かにこの美少女の言う通りではあるが、それを言ったらセーラー服の女子中学生が国家予算並みの金額を動かすとは、到底思えないと考えてしまうのは、俺だけなのだろうか？

「理解出来たかしら？出来たのならありがたく私の道案内を『キンキュウケイホウキンキュウケイホウキン……』何よこの音！？」

美少女中学生の言葉を遮るかの様に、俺のポケットに入っているタッチノートが、警報を響かせる。

『マスター！反応場所はすぐ近くだ！』

「え！今あんたの背中から、変な声が聞こえなかった！？」

メカ犬が知らせてくれるのだが、その声が目の前にいる、美少女中学生にも聞こえてしまった様で、驚愕の声を上げる。

「あ～えっと、俺急用が出来たんで、これで失礼します！！！」

言い訳するのも面倒なので、俺は全てを有耶無耶にする為に、早口でそう告げると、この場から走り始めた。

「あ！ちょっと！？」

俺はその声にすいませんと、叫び返しながら、路地を曲がり、誰も居ない所で、チェイサーさんを呼び出そうとしたのだが、

「待ちなさいよー！！！」

なんと、先程の美少女中学生が全速力で追いかけて来たのだ。

「げ！？」

『仕方ないマスター。そんなに距離も離れていないし、このまま走って現場に向かうぞ』

俺はチェイサーさんを呼ぶのを諦めて、再び走りだす。

「待ちなさいって言ってるでしょう！！！ちゃんとどういう事か、説明しなさい！！！」

何でそこまでしつこく追われねばならないのか、理解に苦しむが、説得している時間も無いので、俺は急いで逃走しながら、ホルダー反応を捉えた現場に向かった。

現場に到着した俺は、そのホルダーの姿を見て、言葉を失ってしまった。

全体的にメタルブラックのボディー。

腹部に巻かれた銀色のベルトと、そこから四肢へと伸びる同色のライン。

顔には二つの赤い大きな複眼に、額にはV字の角飾り。

その姿は何処から如何見ても、俺とメカ犬が変身した姿である筈の、仮面ライダーシードそのものである。

「はあ……はあ……はあ、待ちなさいって言ってるでしょ……」

先に到着した俺に少し遅れて、ずっと俺を追いかけて来た、美少女中学生が息を切らしながら、隣までやって来る。

「ん、あんたってば何で呆けてるのよ?目の前に何かある訳……」

俺の様子を見て、疑問を抱いた美少女中学生が、前に視線を移すと、当然の事ながら、俺が見たものと同じ光景が目に映った。

だが次の瞬間のリアクションは、全く違うものだった。

「……見つけたわ！！！！！」

美少女中学生は、歓喜の声を上げた。

「最初はお姉ちゃんを頼ろうと思ってたけど、私って本当に運が良いわ！いえ！きっとこれは運命ね！神様が私の願いを叶えてくれたに違いないわ！！！！」

そう早口で捲くし立てると、美少女中学生は先程まで息切れしていた事等、無かったかの様に、勢い良く俺そっくりの仮面ライダーに駆け寄って行く。

『ん！マスター不味いぞ！？あれは確かに仮面ライダーの姿をしているが、反応はホルダーだ！！！」

「……何だって！？」

俺はメカ犬の言葉で、如何にか硬直していた身体を、再び動かす事に成功して、急いでタッチノートを取り出して、ボタンを押す。

『バックルモード』

ショルダーバックから飛び出て来たメカ犬は、そのままベルトに変形すると、俺の腹部に巻きつく。

「変身」

音声キーワードを入力した俺は、素早くタッチノートをバックルに差し込んだ。

『アップロード』

白銀の光が俺を包み込んで、その姿を一人の戦士に変える。

変身を無事に完了させた俺は、急いで俺と同じ姿をしているホルダーのもとに駆け出した。

だが俺はここでも驚愕する事になる。

先に駆け寄って行った美少女中学生が、仮面ライダーの姿をしたホルダーに、何やら話しかけていたのだ。

「ねえ！貴方が仮面ライダーなんでしょう？悪いんだけど少しだけ協力してくれないかしら。決して損はさせないわよ！報酬だって用意しちゃうんだから！！！」

早口でホルダーに捲くし立てる美少女中学生。

だが目の前の少女は、喋る事に夢中で気付いていない。

目の前でホルダーが、拳を握り締めながら、振り被っている事を。

「やばい！？」

俺は更に急いで、駆け抜けて、美少女中学生の頬に拳が直撃する直

前に、その射程距離から、抱きかかえながら、離脱する事に成功する。

「え？え？え？仮面ライダーが二人？」

仮面ライダーの俺に、お姫様抱っこされた状態で、美少女中学生が、俺とホルダーを見て、頭上に疑問符を浮かべる。

「あれは偽者です。お嬢さんは下がっていてください」

俺は美少女中学生を地面に下ろしながら、そう告げると、ホルダーに向けて走り出す。

相手も既に走り出していた様で、互いの拳が届く距離に達すると、すぐさま戦闘が開始される。

「は！」

拳を突き出すが、ホルダーはそれを、紙一重で避けて、カウンターの蹴りを放つ。

俺はその出始めに腕を下から潜り込ませる事によって、軌道を逸らすと、バランスを崩した相手に拳を叩き込んで、後ろに下がらせる。

更に追撃を仕掛ける事によって、相手が態勢を整える事を許さない。

「うをおおおりゃあああ！」

最後に気合の入った叫びと共に、俺はホルダーに渾身の蹴りを浴びせて、吹き飛ばす。

偽者に負けてやる程、本物の敷居は低く無い。

そしてここで止めを刺そうと、タッチノートを引き抜こうとした、その時である。

『マスター！ホルダーの様子がおかしいぞ！？』

突如メカ犬が声を上げる。

「ん？」

メカ犬の声に反応して、視線をホルダーに向けると、一冊の雑誌を取り出して、その内の一ページを凝視し始めた。

その瞬間、ありえない現象が起こる。

先程までメタルブラックだった身体がクリムゾンレッドに変わり、その手には赤い刀身の剣が握られていたのだ。

「あれってまさか……」

『奴はフォルムチェンジまで出来るというのか！？』

俺とメカ犬は驚きを隠せない。

それはまさに、俺達の能力であるフォルムチェンジそのものだったのだから。

「でも変わったのは見た目だけって可能性もある訳だよな？」

『うむ』

俺はそれを確かめる為に、再び攻撃を仕掛ける。

様子見の為に繰り出した拳だが、ホルダーは避けもせずに、俺の一撃を受ける。

その瞬間俺は確信した。

何でも無かったかの様に、赤い刀身の剣を振り下ろすホルダーに対して、俺はバックステップで、如何にか難を逃れて、先程繰り出した拳を労わる様に擦る。

間違い無い。

あのホルダーの能力は、俺達のフォルムチェンジと同じ様に、その能力値を変化させている。

痛めた俺の拳が、その事実を物語っていた。

『来るぞマスター！』

メカ犬の言葉で、俺は再び身構えて、襲い掛かる剣の斬撃を回避する。

「どう？面白いホルダーでしょ」

必死に回避し続ける俺の耳に、何度か聞いた覚えのある声が響く。

この状況下で、あの軽い口調で話す奴を俺は一人しか知らない。

「オーバー！」

俺は避け続けながら、向けた視線の先に居た、藍色の怪人の名前を叫ぶ。

「まさか僕もこのホルダーが、こんな能力になるとは思ってもいなかったんだよね～」

何処までも軽い口調で、俺達の戦いを見ながら、喋るオーバー。

能力？

仮面ライダーの姿をしている事が、何か関係しているのか？

『マスター！ここは悔しいが、分が悪い。一旦引くぞ』

メカ犬が珍しい事に、撤退の指示を出す。

だが今の状況を考えれば、仕方ないかもしれない。

今は傍観しているだけだが、何時オーバーが、戦いに参戦してくるのか分からないし、後ろに居る美少女中学生も、何故か逃げずに俺達の戦いを観察し続けている。

正直言って、今誰かを守りながら、これ以上戦うのは、かなりの危険が伴う。

「分かった！」

俺はメカ犬の提案に賛成して、逃亡を図る事に決めた。

ホルダーの斬撃を避けて、後ろに下がった俺は、ベルトから、タッチノートを開き、ボタンを押す。

『チェイサー』

続いて俺は、ベルトの右側をスライドさせて、緑のボタンを押して、そのまま走り出す。

『スピードフォルム』

走りながらメタルブラックのボディーを、ライトグリーンに染め上げた俺は、更なる加速で、後ろに居た美少女中学生を片手で、脇に抱える。

「きゃ!?ちょっと何処触ってんのよ!?」

そんな声が聞こえるが、今は無視だ。

緊急事態なので、犬に噛まれたと思って、忘れてもらいたい。

『お待たせマスター』

そこにやって来る全身ブラックの乙女口調なオッサンボイスのライダーバイクなチェイサーさん。

あの暴走族の一件以来呼んでなかったので、今でもオレサマ口調だったらどうしようと思ったが、それは杞憂だったみたいだ。

「彼女をお願いしますチェイサーさん！」

俺はそう言いながら、チェイサーさんに美少女中学生を投げ放つ。

「ちょ！？ま、えええええ！？」

何やら叫んでいるが気にしない。

チェイサーさんに美少女中学生を投げ放った俺は、更にタッチノートのボタンを二回押す。

『リミットオフ』

『ホバーチェイサー』

音声が流れると同時に、全身黒かったチェイサーさんのボディーに赤いカラーリングと銀色のラインが追加される。

更に空を自由に飛べる、ホバーモードに変形したチェイサーさんは、俺が投げ放った美少女中学生を、その座席シートの部分に見事にキャッチした。

『ホルダーが来るぞマスター！』

「ああ！」

俺はメカ犬の声に頷きながら、スピードフォルムの身軽さを生かして、限界まで飛び上がる。

俺は飛び上がりながら、再びベルトの右側をスライドさせて、青いボタンと、黄色いボタンを連続で押していく。

『サーチフォルム』

『サーチバレット』

ライトグリーンのボディーは音声と共にスカイブルーへと変わり、俺の右手には、専用武器であるサーチバレットが握られる。

俺は左手に持ち続けていた、タッチノートをそのまま、サーチバレットの溝にスライドさせた。

『ロード』

そして音声を確認しながら、俺はタッチノートをバックルに差し込む。

『アタックチャージ』

ベルトから発生する光が、右腕のラインを通って、サーチバレットの銃身に集約される。

更に俺は回転運動を加えて、狙いをホルダーとオーバーが居る周辺に絞る。

「サーチバレット」

そして俺は引き金を引く。

「シューティングサークル」

サーチバレットの銃口から、数珠繋ぎに繋がれた光弾が、広範囲に撃ち出されて、まるで流星の様に降り注ぐ。

撃ち終えて、自然落下を開始した俺の真下に、美少女中学生を乗せたチェイサーさんが、やって来ており、俺はその上に、美少女中学生を踏まない様に、着地すると、シューティングサークルによって出来た、煙幕を目暗ましに、俺達は一旦この場から撤退した。

「しかしあのホルダーの能力って何なんだろうな？」

『……今の時点では、何も確証を得られんな』

俺とメカ犬は、住宅街を歩きながら、悩み続けていた。

何とかあの場を切り抜けた俺達は、一緒に乗せていた美少女中学生を、チェイサーさんに、安全な所で降ろす様に頼んで、一足先に降りて変身を解くと、ずっとこの話題を引き摺りながら、恵理さんの

住んでいるマンションに向かっていた。

ホルダーが現れた今、後回しにしても良いかと思ったが、現時点では相手の攻略法も見えないし、俺達の事情を知っている恵理さんに相談すれば、何かしら攻略の糸口が掴めるかも知れないと思ったからである。

それにオーバーは分からないが、ホルダーは倒すまでいかなくても、多少のダメージを受けただろう。

暫くは大人しくしている筈だ。

出来ればその間に、何らかの打開策を見出したい。

「ん！ここみたいだな」

『うむ。その様だな』

考えながら移動していたら、何時の間にか着いていた様で、俺達は恵理さんの部屋に行く為に、マンションに足を踏み入れる。

「あ！あんたあの時の子供じゃない！？」

何故か恵理さんの部屋の前で、俺は予想外の再会を果たす事になった。

「もしかしてあんたってば、このマンションに住んでる訳？」

「いえ、そういう訳じゃないんですけど……」

俺と美少女中学生が、恵理さんの部屋のドアの前で、会話をしていると、急に扉が開かれた。

中から現れた人物は、勿論この部屋の住人であり、俺をこの場所に呼び出した張本人である。

「ちょっと人の家の前で何騒いで……あら、純君いらっしゃい。悪いわね、休日に呼び出しちゃって」

「本当ですよ……」

ドアを開けて現れた恵理さんは、俺と目が合うと、軽く挨拶をしてきた。

それに対して俺は、辟易しながら挨拶を返す。

「え!?あんたって……嘘……知り合いだったの?」

俺と恵理さんのやり取りを見ながら、特大の疑問符を浮かべる美少女中学生。

如何やらこの美少女中学生も、その話し振りからして、恵理さんの関係者らしい。

「ちょっと!ちゃんと説明してよね!お姉ちゃん!!!」

「『は?』」

美少女中学生の言葉を聞き、思わず俺とメカ犬の声が重なる。

「あはははは……ごめん、ごめん。取り敢えず自己紹介しましょっか。この男の子は純君。子供だけど、色々と凄いんだから」

何か滅茶苦茶な紹介だな俺って……

それに背中のショルダーバックから、小声でメカ犬が、ワタシの紹介は無いのかと呟いているのだが、今お前が出てくると、纏まる物も、粉砕されるから、暫く出て来ないでくれ。

「それでこっちが私の妹の……」

恵理さんがそこまで言うと、続きは自分で言うと言って、美少女中学生が言葉を遮る。

というか今、何気に凄いフレーズが聞こえた気がしたんだけど?

「私の名前は風間恵美（かざまえみ）。風間恵理の妹よ！」

如何やら俺の耳は聞き違いでは無かったらしい。

そう言われて見ればこの姉妹、性格も似ているな、と思わず苦笑いが出てしまったのも、致し方無い事だろう。

# 第十六話　仮面ライダーＶＳ仮面ライダー？【前編】（後書き）

【突発的な募集】

今回５０万ＰＶ記念で作るＷ編で、緊急募集を致します。

募集内容は、Ｗ編に出てくる悪役のオリジナルライダーのネーミング募集です。

採用された方の名前は、作品内で紹介させて頂きますので、宜しければ、感想欄にお気軽に書き込んでくださいね。

それでは！

## 第十六話　仮面ライダーＶＳ仮面ライダー？【後編】（前書き）

後編になります。

楽しんで頂けると幸いです。

# 第十六話　仮面ライダーＶＳ仮面ライダー？【後編】

『初めましてと言うべきかな、恵美嬢。ワタシはメカ犬だ。オモチャ会社の新製品で（以下略）』

「は！嘘を言うんじゃ無いわよ！何処にあんたみたいな、高性能なオモチャがある訳？信じられ無いわね」

『それは恵美嬢の、認識が狭いだけなのではないか？』

「あら、言ってくれるじゃない。でもおあいにくさま！私はとっても、博識なのよ。そんな私が知らないって言ってるんだから、あんたはオモチャなんかじゃ無いわよ！」

『目の前に存在する、事実を認めず、あまつさえ否定するとは、嘆かわしい事だな……ワタシは恵美嬢のその脆弱なる精神に同情するぞ』

「何ですって！？」

恵理さんの部屋のリビングの真ん中で、恵美さんとメカ犬による、あまりにも熱いトークバトル聞きながら、俺は静かに溜息を吐いた。

何故恵美さんとメカ犬が、こんなガチンコトークを繰り広げているのかというと、その答えは至ってシンプルである。

恵理さん家の玄関前で、簡単な自己紹介を済ませた俺達は、外で話すのも何だから上がってと言う恵理さんのお言葉に甘えて、リビングにやってきたのだが、そこで恵美さんが、いきなり予想外の行動

に出たのだ。

何と恵美さんは、道で会った時に聞こえたメカ犬の声をいまだに気にしていた様で、リビングに入るなり、俺の背負っていたメカ犬入りショルダーバックを強奪して、中身を開けてしまったのである。

そして当然恵美さんの視界に入ってくるのは、中身であるメカ犬。

もうそこからは、二人の独壇場である。

どうも恵美さんと、メカ犬は相性が宜しくなかった様で、ずっと互いの意見と主張を言い合いながら、討論を止めようとしない。

まあ、メカ犬はわざとやっている節が見え隠れしているが……

俺と恵理さんは、その光景を苦笑いしながら眺めるばかりである。

「何かごめんね。恵美が迷惑かけたみたいで」

一人と一匹の討論をＢＧＭに、恵理さんが言う。

「いえ、お気になさらず、それより俺に頼みたい事って何なんですか？」

迷惑は普段から、姉である恵理さんのお陰で慣れてますという皮肉は、胸の内にそっと置いておいて、俺はここに来た目的を完遂させる為に、話を進める様に促す。

「実はその頼みたい事っていうのが、恵美についてなのよ」

恵理さんは、視線を目の前で激論を続ける、実妹である恵美さんに向けながら、話し始める。

恵美さんの話を聞いて、俺は驚きの連続だった。

まず恵美さん自身についてなのだが、恵美さんは既に大学を卒業しているそうなのだ。

なんでも、生まれながらにしての、生粋の天才だそうで、幼くして海外に留学。

9歳にして、あの有名な鳥的な名前の有名大学を主席で、卒業したというのだから、その天才振りは相当なものだろう。

ちなみに何故大学を卒業しているのに、セーラー服を着用しているのかというと、単なる趣味だそうだ。

まあ、そんな事は如何でも良いので、話を本題に戻すが、現在は日本のある研究機関で、極秘のプロジェクトに参加しているのだとか……

もうここまでの時点で、俺とは住む世界が違うと思うのだが、恵美さん自身についての話はただの前菜であり、メインはここからになる。

話によると恵美さんの研究しているプロジェクトの原型は、現状ほぼ完成しており、後は実地テストを行う段階にまで、来たらしいのだが、最大の問題が一つ発覚したらしい。

そのプロジェクトの概要も、発覚したという問題も、機密になるら

しいので、恵理さんは知らないらしいのだが、恵美さんの話だと、仮面ライダー、つまり俺の協力が必要らしいのだ。

つまり恵理さんが、俺にしたい頼み事というのは……

「という訳で、恵美に協力してくれないかな純君？」

説明を終えた恵理さんは、俺を拝み倒してくる。

如何やら姉である恵理さんが、雑誌で仮面ライダーの独占インタビューをした事を知っていた恵美さんが、会える様に、アポを取ってくれる様に、頼んできたそうなのだ。

そういえば、さっき恵美さんが、ホルダーを仮面ライダーと間違えた時も、協力がどうとか言っていた気がする。

一体何をされるのかは、分からないが、解剖させろとか、マッドな要求で無ければ、別に俺は構わない。

問題はメカ犬だが、まあ……あの様子を見れば、心配する事も無いだろう。

「中々やるじゃないのあんた」

『恵美嬢こそ、その論理は賞賛に値するぞ』

本気でぶつかった事により、友情が芽生えたのか、今この時人種どころか、人と機械を越えた、確かな絆が生まれた。

恵理さんは、仮面ライダーが俺だという事は、恵美さんに黙ってく

れていた様だ。

確かに恵美さんの様子を見ていると、正体がばれると、姉である恵理さん以上に厄介な事になりかねない気がする。

改めて黙っていてくれた、恵理さんに感謝だ。

その恵理さんが頼んできた用件は、頃合を見て、仮面ライダーに変身して、恵美さんの前に出れば、良いだろう。

一つの用事が、取り敢えず片付き、少しだけ肩が軽くなる感じがしたが、俺はそこで思い出す。

「あの、俺も一つ相談事があるんですけど……」

俺はここに来るまでに、新たに発生した相談事である、ホルダーの事を恵理さんに話した。

「……なるほどね」

話を聞いた恵理さんが、顎に指を添えて、考え込む。

「その相手の能力なんだけど、何か変わった動きとか、道具とか使ってたりしてたかな？」

考え込んだ後、恵理さんは、更なる情報を求めて、俺に質問する。

「えっと……あ！そういえば、パワーフォルムになる時に、雑誌を取り出してましたね」

俺はその時の事を思い出しながら、恵理さんに、新たな情報を提供した。

言われてみれば、確かにあのホルダーの行動は不可解だ。

もしかしたら、其処にあのホルダーの能力を解き明かすヒントが、隠されているのかもしれない。

「まあ、私も専門家じゃ無いから、きっとこれだ！何て無責任には言えないけど、戦っていた純君自身が、疑問に思ったって言うのなら、何らかの関係があるかも知れないわね」

「相談に乗ってくれて、ありがとうございます」

俺は恵理さんにお礼の言葉を述べる。

確かにここから先は、当事者である俺が、如何にかしなければいけない問題だ。

寧ろ話した事で、攻略のヒントになるかもしれない何かを掴めたのだから、相談して正解だったと言えるだろう。

『キンキュウケイホウキンキュウケイホウキンキュウケイホウ……』

俺がヒントを得た矢先に、タッチノートから、警報が鳴り響く。

「え！？何よこの音！？さっきも鳴ってなかった！？」

『む！』

警報を聴いた恵美さんが、辺りを見回しながら、驚きの声を上げ、それと対象的に、メカ犬は冷静に、何が起きたのかを静かに察した。

「あ、俺達お使いを頼まれていましたんで、そろそろ行きますね」

俺は既に常套句となっている言葉を言いながら、メカ犬を拾い上げて、ショルダーバックに入れると、なるべく自然に、恵理さんの部屋を出て行く。

何やら恵美さんの待ちなさいという声が聞こえて来たが、恵理さんが押さえ込んでくれている様で、追ってはこないみたいだ。

この隙にさっさと、退散させてもらおう。

「それじゃあ行くぞメカ犬！」

『うむ！』

玄関を出た俺は、メカ犬と短く言葉を交わすと、ホルダー反応を追って、現場へと走り出した。

ホルダー反応があったのは、少し前に戦った場所と同じ場所で、俺達が辿り着いた其処には、クリムゾンレッドのライダーモドキなホルダーに、藍色の怪人、オーバーが待ち受けていた。

「待ってたよ仮面ライダー。途中で帰っちゃうから、もう来ないかと心配しちゃったよ」

「そりゃあ待たせたみたいで、悪かったな」

既にベーシックフォルムに変身している俺は、何処までも軽い口調で、言葉を吐き出すオーバーに対して、対抗するかの様に、軽口で返す。

『マスター。対峙したは良いが、何か対策はあるのか？』

俺とオーバーの会話に、メカ犬が割り込む。

「……いや、糸口は掴めたかも知れないけど、攻略法は全く、そっちはどうだ」

『ワタシも似たようなものだ。強いて言えば……』

「ん、何かあるのか？」

途中で言い淀むメカ犬に、俺は先を促す様に、言葉をかける。

『……何でも無い。今は無いものねだりをしていても始まらないからな』

メカ犬は自身の内だけで、自己完結させると、気合を入れ直す様に、一声叫ぶ。

『今は全力で戦おうマスター！！！』

「ああ！！！」

もとより、そのつもりだ。

俺はメカ犬の叫びに呼応して叫び、そのまま攻撃を仕掛ける為、ホルダー達に向かって走り出す。

今度はオーバーも戦いに参加してきて、二振りの刃が、俺に猛威を振るう。

「くっ！？」

俺はその攻撃を紙一重で裁きながら、頭の中で打開策を思案し続ける。

相手が二体以上で来るならば、スピードフォルムが最適かもしれないが、パワーフォルと同等の能力を持つホルダーに、ブレイクインパクトを防ぎきるオーバーに対して、決定打を決められるとは思えない。

考え方を変えるのであれば、サーチフォルムで、遠距離から仕掛けるというのも、一つの答えかもしれないが、距離を詰められたら、そこで終わりだ。

後はホルダーが現在真似ているパワーフォルムだが、これは多数を相手にするには、あまりにも不向きだ。

「なら俺が選ぶ手段はこれだ！」

俺はベルトの右側をスライドさせて、黄色いボタンを押した。

『ベーシックファントム』

音声が流れると同時に、ベルトから大量の光が発生して、メカ犬が操る分身体が形成される。

「暫くオーバーの足止めを頼む」

『うむ。ホルダーは任せたぞマスター』

俺とメカ犬は、会話を交わしながら、其々の相手と一対一に持ち込む為、行動を開始する。

メカ犬にオーバーの相手を任せた俺は、パワーフォルムに瓜二つのホルダーに突っ込む。

今のホルダーが、パワーフォルムと同じ能力を有しているのならば、相当に高い攻撃力と防御力を備えているだろう。

だがそれは逆に言えば、パワーフォルムの弱点である機動力の無さをも反映しているという事である。

そこを攻めない手は無い。

スピードフォルム程では無いが、ベーシックフォルムも、全フォルム中では、素早さは高い方だ。

勿論その速さは、パワーフォルムを大きく上回る。

「は！」

俺は打撃による攻撃は全て蹴りだけに絞り、当てたら即時距離を取る、もしも近づかれて、攻撃を受けた時は、相手の力を利用して、投げ飛ばすという戦法に切り替えた。

確かに能力は同じかもしれない。

だが俺とこのホルダーでは、決定的な差がある。

それは今まで戦ってきた経験だ。

今まで命懸けで戦ってきたからこそ、俺自身の能力の長所と短所は、嫌という程に把握している。

「おりゃ！」

何度目かの蹴りを喰らわせた後、ホルダーが再び例の動作を開始した。

雑誌を取り出して、その一ページを凝視し始めたのだ。

俺はその雑誌に注目する。

その雑誌は、この近隣の書店であれば、良く目にする、海鳴市住民

には馴染み深い雑誌。

恵理さんが勤める海鳴ジャーナルが毎月販売している情報雑誌、月刊海鳴だった。

しかもホルダーが凝視しているページには、ライトグリーンの仮面ライダー、スピードフォルムの俺が大きく見出しを飾っている。

そしてホルダーの姿は再び変化を始めた。

クリムゾンレッドのボディーは、ライトグリーンに染まって行き、右手のパワーブレードの模造品も、スピードロッドの模造品へとその姿を変えていく。

「やっぱり、あの雑誌が怪しいな」

俺が呟く間に、スピードフォルムになったホルダーが、今までとは比べ物にならない程の速さで迫り来る。

ロッドを斜に構えて、そのまま打撃を放つが、それは俺の予想範囲内の行動だ。

「ふん！」

俺はあえて避けず、ロッドを掴む事だけに全神経を注ぎ、見事ロッドを捉える事に成功した。

パワーフォルムとは逆に、スピードフォルムは素早さが高くなる反面に他の力が低下する。

つまり単純な力技に持ち込む事が出来れば、必ず勝機があるのだ。

俺は力任せに、ホルダーのロッドを奪い取り、そのロッドで反対に連続の打撃をホルダーに喰らわせる。

そして吹き飛ばす際に、俺はホルダーの背中に収納されたある物を掠め取った。

俺の手に握られているのは、一冊の雑誌、先程までホルダーが凝視していた月刊海鳴だ。

ホルダーから奪い取ったロッドを投げ捨てた俺は、月刊海鳴を思い切り破りまくる。

どういった原理になっているのかは知らないが、ホルダーはこの雑誌を使って、フォルムチェンジをしていたのは間違い無いだろう。

ならその雑誌が無ければ、あのホルダーはこれ以上姿を変えられない筈だ。

雑誌を破った瞬間、仮面ライダーの姿をしていたホルダーの身体が、更なる変化を開始した。

だがそれは、今までのフォルムチェンジでは無く、全体的な姿そのものが変化したのである。

変化の収まったホルダーの姿は、仮面ライダーとは似ても似つかない姿をしていた。

ピエロの様な仮面の頭部に、全身は灰色の全身タイツの様な姿をし

ている。

その様子を見て、俺は何となくだが、ホルダーの能力に察しがついた。

恐らくメカ犬ならば、奴の能力はモノマネだとでも言うだろう。

そしてホルダーの姿が変わったのは、多分雑誌が無くなると、変身そのものが出来なくなるから、といったところだろうか。

兎にも角にも、これで心置きなく戦える。

戸惑うホルダーに更なる追撃を仕掛けようとしたその時である。

「あああああああ！！！居たわね仮面ライダー！！！」

少し前まで恵理さんの部屋でＢＧＭ代わりに聴いていた声が、辺り一体に響き渡った。

声のした方に振り向くと、そこに居たのは、美少女中学生改め、超天才コスプレ美少女の恵美さんである。

「やっぱり私って運が良いわ。あの子供を追って来たら、また仮面ライダーに出会えたんだもの！！！」

恵美さんはそう言いながら、戦闘中だというのにも関わらず、仮面ライダーである俺に近づいてくる。

姉妹揃ってはた迷惑というか、辺りの状況を確認しない辺り、姉よりも性質が悪い。

『すまないマスター。時間稼ぎはここまでの様だ』

しかも最悪な事にベルトから聴こえるのはメカ犬の声。

どうやら分身体を出していられるタイムリミットを越えてしまったらしい。

タイミングが悪いにも、程があるだろう!?

前方を見れば、恵美さんの後ろから迫り来るオーバーとホルダー。

「くそ!?」

「え?きゃあ!?」

俺は咄嗟に間に居た恵美さんを背中で庇い、ホルダーの突進をまともに喰らって吹き飛ばされる。

『大丈夫かマスター!?』

「ああ……それよりも恵美さんは?」

何とか致命傷は免れた様で、俺は問題無く立ち上がるが、恵美さんが動かないのだ。

『大丈夫だ生命反応に支障は無い。恐らく気絶しているだけだろう』

メカ犬の答えを聞いて、俺はホッと胸を撫で下ろす。

「取り敢えずチェイサーさんを呼んで、恵美さんを安全な場所に運んでもらおう」

俺は言いながらタッチノートを引き抜きボタンを押す。

『チェイサー』

音声が流れると同時に、エンジン音が唸りを上げて、チェイサーさんがやって来る。

『お待たせマスター』

「チェイサーさん。恵美さんを安全な場所までお願いします」

俺はそう言って、気絶している恵美さんを、チェイサーさんの座席シートに乗せる。

『良いわよ～。所でマスターは、今ピンチなんじゃないの？』

余裕からなのか、後ろから歩いて近づいてくる、オーバーとホルダーを見て、チェイサーさんが俺に質問してきた。

「まあ、そうなんですけど、何か良い手があったりしますかね」

せめてもの強がりに、俺は冗談交じりに、質問返しをしてみた。

『あるわよ』

しかしチェイサーさんから帰ってきた返事は、予想外にも、希望溢れるものだった。

「あるんですか！？」

『ええ。あの子を呼べば良いじゃないの。ほらマスターがメカ竜って呼んでたあの子』

「いや、呼べれば最初から呼んでるんですけど、あいつあれから何処かに行っちゃって、連絡も寄越さないんですよ」

『だ・か・ら・呼べば良いのよ。あの子は私と同じサポートシステムに分類されてるから、同じ要領で呼べるわよ』

驚愕する俺に対して、チェイサーさんは、衝撃の事実を淡々と告げていく。

「……知ってたかメカ犬？」

『……いや、ワタシも知らなかった』

俺達と、チェイサーさんの間に、確かな温度差が生まれる。

『兎に角頑張ってね～』

チェイサーさんは、そんな空気等ものともせず、気絶した恵美さんを乗せて、走り去ってしまった。

「……取り敢えず呼んでみるか？」

『……うむ』

何かやるせない気持ちになりながらも、俺はタッチノートを開き、以前使ったガイアシステムを起動させる。

映し出された画面に表示されている【ガイア・コール】という文字。

俺は色んな感情を内に秘めながらも、その文字をタッチした。

『ガイア・コール』

タッチノートから音声が流れると、以前にも聞いた事のある声が聞こえてきた。

『お呼びですかマスターへぶ!?」

当たり前の様に現れたフルメタル恐竜に、俺は無言で手刀を振り下ろした。

来てくれたんだという喜びよりも先に、行く前にちゃんと説明しろやテメエ、という怒りがこみ上げてきたのだから仕方ない。

「何するんですかマスター!?」

メカ竜が何か抗議してくるが、そんなのは無視だ。

『今は非常時なのだ。急ぐぞ!』

『は、はい!』

メカ犬が抗議の声を急かす事により黙らせる。

その通りだ。

メカ犬の言う通り、言いたい事は後で話せば良い。

後でタップリとな……

『何か悪寒がしたのですが！？』

俺はメカ竜の言葉など無視して、タッチノートのボタンを押す。

『スタンディングモード』

レバー付きのアタッチメントパーツに姿を変えるメカ竜を握り締め、俺はタッチノートをベルトに差し込んだ後、ベルトの左側をスライドさせて、溝の部分へとスタンディングモードのメカ竜を差し込んだ。

『ベーシック・ガイア』

音声と共に、俺の周りにはメタルレッドのパーツが複数生成されて、それが新たなる装備としてベーシックフォルムに追加されていく。

その瞬間、今まで以上に力が全身に漲るのを感じた。

「へ～それが噂の……確かに凄そうだね！！！」

ベーシック・ガイアへのフォルムチェンジを見たオーバーが、歩く速度から、駆け足へと変えて、一気に距離を詰めにかかる。

俊足の下に、刃を振り下ろすが、俺はその刀身が振り下ろされる前

に、その刃を受け止めて、蹴りを喰らわせた。
倒れはしなかったものの、オーバーの身体はかなり後方に飛ばされる。
「悪夢はここで終わらせる」
俺はその様子を見ながら呟く。
「……へ～。凄いねそれ。僕も本気で行かなくちゃ不味いかな？」
あまり堪えた様子は無い様で、そう言うとオーバーは、やはり何処までも軽い口調で、今度はホルダーと一緒に、俺を強襲する。
『マスター！相手が複数で来るのでしたら、こっちは武器を使いましょう！』
「え、このフォルムってベーシックフォルムが基準だけど、武器があるの？」
『はい。ボクのレバーになっている下部分が、生成する為の起動ボタンになっているので、押してみて下さい」
俺はメカ竜の説明を受けながら、言われた通りボタンを押してみる。
『ガイアブレイガン』
音声と共に、メタルレッドを基調とした剣の柄と、トリガーが付いた物体が生成された。

『剣の柄部分を真横にスライドさせて引き金を引いてくださいマスター』

「ああ！」

俺はメカ竜の指示通りの動作を行い、オーバーとホルダーに狙いを定めて、引き金を引く。

すると散弾銃の様に、光弾が射出されて、狙いを定めたオーバー達に襲い掛かる。

「これは？」

『それがガイアブレイガンの第一形態、ガンモードです』

撃った本人である俺が驚いていると、あの弾幕を潜り抜けてきたのか、オーバーが剣を片手に、駆け上がって来た。

『マスター！次は柄の部分を上にスライドさせてから、もう一度引き金を引いて下さい！』

メカ竜から続いて指示が飛び、俺はオーバーが此方に辿り着く前に全速力で、全ての動作を完了させる。

「うを！？」

俺は引き金を引いた瞬間驚愕した。

何と引き金を引くと、柄の部分から、赤い光が伸びて、剣状の形を形成したのだから。

そして俺は驚きながらも、その剣でオーバーの一撃を受け止める。

『それがガイアブレイガンの第二形態、ブレイドモードです！』

オーバーの一撃を受け止めた俺は、メカ竜の説明を聴きながら、何時かの様に刃同士で鍔迫り合いを起こす。

だが以前と今回では、大きな違いがある。

「はあああああ！！！」

今の俺は、パワーフォルムを越える力を引き出す事が出来るという事だ。

「ぐっ！？」

力でオーバーを完全に吹き飛ばすと、続いてホルダーが俺に飛び込んでくるが、俺は冷静に飛び掛るホルダーに、ガイアブレイガンの一閃を命中させてから蹴り飛ばす。

『今がチャンスですマスター！』

メカ竜の声が聞こえると同時に、俺の視界に以前とは違う内容が書かれたウインドウが表示される。

「任せろ！」

俺はその内容を読んだ後、メカ竜に答えながら、ベルトの左にあるレバーを傾けた。

『マックスチャージ』

音声が流れると、ガイアブレイガンの刀身に光が集約されて、俺の前方には、同じ状態の四体の分身が生成された。

「こいつで決めるぜ」

そして本体である俺を一番後ろに、五人の仮面ライダーが、一列に並び、ホルダーに駆け寄り、通り過ぎざまに、一閃ずつ一撃を喰らわせて行く。

そして一番最後尾の俺は、ホルダーの目の前で立ち止まり、まるで野球のバットを振るかの様に回転斬りをお見舞いする。

「ガイアチェーンスラッシュ」

幾多の斬撃を受けたホルダーは、その場で倒れながら、爆発を引き起こした。

爆発後に残されたのは、気絶した若いお兄さん一人だけである。

辺りには、俺とその人を抜かせば、もう誰も居ない。

『どうやらオーバーには逃げられた様だな』

「ああ……さてと、それはそうと、やるか？」

『うむ』

真面目な空気は置き去りに、俺とメカ犬は言葉少なくも、互いの意思疎通を図り、同意する。

『何の話ですか？』

それを聴いていたメカ竜が、頭に疑問符を浮かべるが、そんな態度はもう取れない事だろう。

何故ならば……

「『今からお前のお仕置きタイムだ』」

俺とメカ犬の声が重なり、続いてメカ竜の悲鳴が上がるが、それはまた別の機会に話すとしよう。

俺は頑丈な荒縄を準備しながら思う。

ああ、今日の海鳴も平和だなあと……

『ぎゃあああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！？』

「今まで何処に行っていたんですか主任!?」

とある研究施設で、白衣を着たメガネの男が、セーラー服を着た女の子を主任と呼ぶ。

「ごめんごめん!でも私だって、このプロジェクトを完成させる為に、頑張っていたんだから許してよ」

女の子は、自慢のポニーテールを揺らしながら、言葉だけの謝罪をする。

「本当でしょうね?」

そのふざけた態度に、白衣の男は、疑いの眼差しを向けた。

「あ!疑ってるでしょ!!!」

セーラー服の女の子は、疑いの眼差しを向けられた事を、不満を感じたのか、懐からある物を取り出して、某時代劇の世直し副将軍の印籠の様に見せ付ける。

「そ、それってもしかして!?」

それを見た白衣の男は、驚きの声を上げる。

「ふふ～ん！どうよ？私だってちゃんと仕事はするんだからね！！！」

白衣の男の反応に満足したのか、女の子は胸を張って自らを褒め称える。

「ついに完成するんですね……」

「ええ、そうよ」

先程までの軽い雰囲気はなりを潜め、真剣な口調で語り合う二人。

その二人の視線の先には、自分達の研究成果であるそれが、映し出されていた。

「後の問題は、これの装着者だけという事ですね」

「それに関しては、私に心当たりがあるわ」

白衣の男の言葉に、女の子は再び、軽く答える。

「ＥＳシステム……本当のプロジェクトはここから始まるのよ」

セーラー服の女の子、風間恵美は、心から嬉しそうに笑顔で言葉を零した。

## 第十六話　仮面ライダーＶＳ仮面ライダー？【後編】（後書き）

今回は珍しい事に、次回に話がもつれ込みます。

そして次回はついに第二の……が登場予定ですので。

## 第十七話　ミッドナイト・ミッション【前編】（前書き）

少し早めに出来たので、更新します。

それとこの第十七話の後編を更新した後は、外伝を一つ載せる予定です。

それでは楽しんで頂けると幸いです。

# 第十七話　ミッドナイト・ミッション【前編】

煌びやかな、パーティーホールを彩る豪華な装飾の数々と、それに劣らない豪勢な幾多の料理。

一般的なサラリーマンの平均年収を軽く超えるであろう、ドレスを身に纏うセレブなご婦人方。

女性の様に、人目を引くデザインではないが、この場に居る紳士達も、見ただけで理解出来るだろう、高級感溢れる、タキシードを袖に通して、各々談笑、立食しながら、パーティーを楽しんでいる。

俺はその光景をパーティーホールの隅で眺めながら、やはり自分には場違いな場所だなと、改めて確信した。

「『此方コードネームドッグ。首尾はどうなっているマスター……ではなく、コードネームボーイ』」

誰に言うでもなく、一人納得しながら、頷いていると、ポケットに忍ばせておいた、タッチノートから、メカ犬……じゃなくて、コードネームドックから、通信が入る。

「此方コードネームボーイ。今の所は問題無し。ターゲットにも現状変化は無い」

「『うむ。了解した。引き続き監視を続行する様にとの、リーダーからのお達しだ』」

「了解、引き続き監視を続行する……あのさ、メカ犬」

［『何だマスター……ではなく、コードネームボーイ。それとワタシのことはドックと呼べ』］

「これさ、やってて恥ずかしく無いか？」

［『……気にしたら負けだ』］

その言葉を最後に、俺の返事も待たず、メカ犬……じゃなくて、コードネームドックは通信を勝手に切ってしまった。

「逃げたな……」

俺は無言のタッチノートを睨みながら、呪詛とも言える程の念を込めて呟く。

暫く睨みつけてはみたものの、俺にはそんな特殊能力は無いので、溜息を一つ吐き、気持ちを切り替えると、再びターゲットの監視を再会した。

俺の視線の先に居るのは、大人達に囲まれながらも、雄雄しく立ち振る舞い、長い金髪を優雅に揺らすドレスを身に纏う一人の可憐な少女。

俺と仲の良い友達の一人であるアリサちゃんだ。

何故アリサちゃんが、この場に居るのか、それは聞くだけ野暮というものである。

このパーティーの主催者は、バニングス系列の最高責任者。

アリサちゃんの父親なのだから、アリサちゃんが居たとしても、何もおかしな事は無いだろう。

寧ろ俺がこの場に居る事の方が、よっぽど異質である。

そして俺の今回のターゲットが、アリサちゃんという事なのだが、正確にはアリサちゃんが身に着けている、ある物が狙いだ。

というか、そもそも何で俺が、こんなセレブレティーなパーティーに来ているのかとか、ターゲットだの、コードネームだのと、言っているのかというと、海よりも深いわけでは無いが、それなりに深い訳が有ったりもする。

あれは今から二時間程前。

俺が翠屋のバイトを終えて、同じシフトで入っていたヤスに、別れの挨拶を済ませてから、店を出た直後の事だった。

「待ってたわよ純君」

俺の目の前に何の前触れも無く現れたのは、まさに大和撫子。

ただし街の往来で、メイド服を着用しているが……

「何か用ですか、瞳さん？」

一般生活において、リアルなメイドさんと知り合う機会など、そうそう無いものだが、幸か不幸か、俺にはそんな知り合いがいたりする。

翠屋を出た直後の俺に話しかけてきた、このメイドさんの名前は、葉山瞳さん。

バニングス邸で、最近働き始めた新人メイド……というのは仮の姿で、その正体は世間を騒がす、謎の怪盗レディーマウスだ。

以前に、海鳴市で偽者が闊歩した事があり、その正体を探るため、極秘の潜入捜査として、バニングス邸のメイドをしていたそうなのだが、何故か今でもメイド職を続けている。

そして成り行き上ではあるが、俺が仮面ライダーだという事を知る、数少ない人物の一人でもある。

「実はね、今日は葉山瞳としてじゃなくて、レディーマウスとして、仮面ライダーに依頼したい仕事があるのよ」

何事かと聞いた俺に、瞳さんは真剣な眼差しで言い放つ。

瞳さんのその言葉を聞き、俺は普段から恵理さんがしてくる厄介な頼み事以上の、嫌な予感を感じ取った。

「まさか瞳さんの依頼が、こんな事だったなんてな……」

俺は今、自分がここに居る理由を思い出しながら、深い溜息を吐いた。

現在の俺は、表上臨時の執事として、アリサちゃんの付き添いをしている。

その格好は勿論、何時かの執事服だ。

またこの服を着る事になるとは、はっきり言って、夢にも思っていなかった。

だが瞳さんが俺に、依頼してきた仕事の本当の内容は、其処ではない。

「ふ～。挨拶のし過ぎで、少し喉が渇いちゃったわ」

一通りの挨拶が済んだのか、普段の勝気な雰囲気と、社交界においての、お嬢様毅然とした態度を織り交ぜながら、アリサちゃんがやって来た。

「お疲れ、アリサちゃん」

俺はやって来たアリサちゃんに、オレンジジュースの入ったグラスを手渡しながら、労いの言葉をかける。

「ありがとう純」

アリサちゃんは、余程喉が渇いていたのか、グラスを受け取ると、上品にではあるが、素早く飲み干す。

「それにしても凄い人の数だね」

グラスに入ったジュースを、アリサちゃんが飲み干した頃を見計らい、俺は周りを見渡しながら、アリサちゃんに話しかけた。

辺りには人、人、人と人の群れ。

しかも、俺の様な立場で来ている人達以外は、ほぼ全員が、財界等で名の知れた著名人ばかりなのだ。

それだけで、このパーティーの規模が伺い知れる。

「そうかしら、何時もこんなものよ？」

俺の言葉に対して、アリサちゃんが、当然とばかりに返事を返す。

そりゃあ場慣れしているアリサちゃんからしてみれば、当たり前の光景かもしれないが、一般庶民である俺からしてみれば、物凄い盛大なパーティーだ。

「それじゃあ私は、次の人達に挨拶して来るから、今度はミルクティーを用意しておいてね」

喉を充分に潤したアリサちゃんは、残りの挨拶のノルマを消化するべく、俺にそう言うと、再び大人達の人垣に向かって歩き始める。

お嬢様というのも、楽じゃない様だ。

「頑張ってね」

「ええ、これが終わったら、表で少し話しでもしましょう」

取り敢えず励ましのエールを送った俺に対して、アリサちゃんは、一旦此方に振り向くと、ドレスの胸元に付けられている、空色の宝石で出来たブローチを揺らしながら、笑顔で言った。

「うん」

俺の返事を聞くと、アリサちゃんは、再び振り向く事無く、挨拶周りに向かうために、歩き出した。

……先程アリサちゃんの胸元で揺れていた空色のブローチ。

あれが今回のターゲットである。

そのブローチになっている宝石の名称は、風の囁き。

宝石としての価値は勿論、文化的遺産としても、かなりの価値を持つ宝石だ。

何でも今は無き、古い王国のお姫様が、代々身に着けてきた由緒ある物らしく、数日前まで博物館で展示されていた物だそうだが、そこで盗まれそうになった物だとか。

このブローチは、昔から子供が大きな催し内で、身に着けていると、奇跡を起こすというジンクスがあり、祝い事や、大きな行事等では、誰が最初に言い始めたのか知らないが、特別に貸し出す許可が出されている。

そして今回は、バニングス系列がその風の囁きをレンタルして、アリサちゃんがその使用者として選ばれた訳なのだが、ここで問題が発生したのだ。

先程も言ったが、このブローチ、風の囁きは一度盗まれそうになったのである。

先に瞳さんの名誉を守る為に言っておくが、盗もうとしたのは、レディーマウスではない。

だが、全くの無関係と言う事も出来ないのだ。

それというのも、盗みを働こうとした犯人は、瞳さんにとっての兄弟子の様な存在なんだとか。

瞳さんは、同じ人を師と仰いだ者同士であり、後輩である自分に様々な事を教えてくれた人を、今やっている盗み方は、師の教えに背くものだということで、止めたいのだそうだ。

一度失敗したその人は、風の囁きが、博物館の外に持ち出された今を好機とみて、再び現れるだろうとは、瞳さんの推測である。

そこで何故、仮面ライダーに協力を申し出たのか。

どうも、未確認情報ではあるが、その瞳さんの兄弟子にあたる人は、ホルダーの可能性が高いらしい。

つまり今回の俺の本当の目的は、ブローチ及び、それを身に着けているアリサちゃんの護衛という事である。

レディーマウスと違い、予告状も出さないので、そういう意味では、この付き人の執事は、最適な選択だったかもしれない。

「あれ？君って確か、前に会った……」

俺がアリサちゃんの動向に、気を配りながら、周囲を警戒していると、聞き覚えのある男性の声が、背後から聞こえてきた。

「あ、もしかして長谷川さん」

声に反応して振り向いてみると、其処に居たのは、以前デンライナー署に配属されていた新米刑事の長谷川さんだったのである。

同じ海鳴市内に住んでいるのだから、偶然会う確率だって無い訳では無いが、まさかこんな場所で再会する事になるとは、想像もして

いなかった。

「確か板橋君だったよね。どうしてこんな場所に君が？それにその格好は……」

俺の姿を見ながら、長谷川さんが、質問してくる。

「ええと、友達の付き添いで来てるんですけど、それだけじゃ中に入れないって事なんで、こうしてお手伝いをしてるんですよ」

「へ～板橋君は偉いな」

なるべく自然に言ったわけだが、どうやら信じてくれた様だ。

もしもの為と思い、事前に用意しておいた建前が役に立って本当に良かった。

「ん？」

安心した事で、余裕が出来たのか、目の前の長谷川さんを見ていて、俺は自身の視線に、見慣れない物を捉える。

長谷川さんは以前にデンライナー署で出会った時と同じ、フォーマルなスーツを着ていたのだが、その左腕にはやけに数字や、英単語の描かれたボタン数が多い、大きめな腕時計らしき黄色い物体を、身に着けていた。

「あの、その腕時計みたいのって何なんですか？」

俺は興味本位で聞いてみる。

「え！？あ～これはね……」

その質問は長谷川さんにとって、話しづらい事だったのか、如何にも歯切れ悪く言いよどむ。

「答え難い事でしたら、無理に答えなくても……」

俺はそこまで言って沈黙する。

それもそうだろう。

先程まで、高い天井から降り注いでいた大量の光源が、突如消え去り、この場にいた全ての人の視界を闇に塗り潰してしまったのだから。

「きゃあああああああああああ！！！！！？」

視界を奪われた闇の中で、続いて俺の耳に聴こえてきたのは、幾つもの窓が、何かの強い衝撃により、連続して割られていく音と、聞き覚えのある女の子の悲鳴だった。

「アリサちゃん！？」

俺はその声の主の名前を叫ぶ。

会場中は突然の事態に、パニック状態だ。

アリサちゃん以外にも、数々の悲鳴が聞こえてくる

この状況では、誰もアリサちゃんの動向は掴めないだろう。

［『コードネームドッグ』］

混乱が極限に達しつつある会場内で、タッチノートから、通信が入る。

「どうしたメカ犬!?」

［『だからコードネームで呼べと……いや、今は良いだろう。マスター!会場から移動する存在を捉えたぞ!如何やらアリサ嬢も一緒の様だ!』］

「何だって!?」

［『今は瞳殿が、足止めする為に向かっている!この会場を出て、北に向かったすぐの場所だ!マスターも急いで此方に来てくれ!』］

「分かった!」

俺はメカ犬との通信を終わらせて、急いで会場を後にする。

［「さあ!今度こそ親玉を捕まえるわよ!長谷川君!」］

「はい!今度こそ逃がしません!!!」

その際に、長谷川さんも、何か電話越しに話をしていた様だ。

その電話越しの声が、最近何処かで聴いた覚えのある声だった気がしたのだが、今はそれどころでは無いので、俺はあまり深く考える

事無く、会場を出て、メカ犬が通信で言っていた北を目指して、全力疾走した。

「メカ犬！瞳さん！」

北を目指して走り出してから、程無くして、俺は目的地へと辿り着く。

メカ犬と、瞳さんの前には、気を失っているのか、動かないでいるアリサちゃんを脇に抱えている、黒尽くめで人相は確認出来ないが、その体格から、はっきりと男性だと分かる人物が居た。

『マスター！』

「遅くなって悪い……あいつが瞳さんが言っていた例の？」

『うむ。今まで瞳殿が説得を試みていたのだが、説得を聞き入れる様な輩では無い様でな』

俺とメカ犬が会話をしていると、その瞳さんの兄弟子の身体に異変が起きる。

『キンキュウケイホウキンキュウケイホウキンキュウケイホウ……』

それと同時にタッチノートの警報が辺りに響き渡る。

タッチノートの警報が響く中、緑の光に包まれた男は、その姿を異形の姿へと変えていく。

『やはりホルダーだったのだな』

反応するタッチノートと、大きくその姿を変貌させていく様子を目の当たりにして、メカ犬が確信する。

ホルダーの姿は、一言で表すのであれば、蝙蝠（こうもり）だ。

尖った耳と、二本の牙、腕と一体化した蝙蝠特有の羽が、特徴的だ。

「純君……」

その光景を見て、瞳さんが何かを言いたげに、こちらを見る。

俺は無言で頷き、タッチノートを取り出す。

言葉にしなくても、瞳さんが何を言いたいのか、今の俺には解っていたから。

だから今は、陳腐な言葉では無く、行動を持って示す。

「行くぞメカ犬！」

『うむ』

俺はメカ犬に合図を送りながら、タッチノートのボタンを押す。

『バックルモード』

音声が流れると同時に、傍に居たメカ犬が、ベルトに変形して、俺の腹部に自動的に巻きつく。

「変身」

音声キーワードと言うと、俺はタッチノートを、ベルトの溝に差し込む。

『アップロード』

白銀の光が、全身を包み込み、俺の姿を一人の戦士へと変えていく。

仮面ライダーへの変身を完了させた俺は、続いてベルトの右側をスライドさせて、緑色のボタンを押す。

『スピードフォルム』

メタルブラックのボディーは、ライトグリーンへと染め上がり、俺はそのまま全速力で走り出した。

俺はホルダーの腕に、打撃を与えて、その腕の力が緩んだ際に、抱えられていたアリサちゃんを助け出すと、一旦距離を取って、瞳さ

んの隣まで移動する。

「アリサちゃんは返してもらったぞ」

ホルダーに言いながら、俺は気絶したアリサちゃんを、瞳さんに任せて、この場から離れる様に促すと、再びホルダーに駆け寄る。

俺は駆け寄りながら、ベルトの右側をスライドさせて、黄色いボタンを押す。

『スピードロッド』

ベルトから発生した光が、形を成して行き、スピードフォルムの専用武器である、スピードロッドへと、その形を変える。

「は！」

ホルダーに隣接した俺は、ロッドによる連撃を容赦無く叩き込む。

ロッドによる連撃を逃れて、空へと逃れようとするホルダーだが、そう簡単に逃す訳には行かない。

「させるか！」

俺は大きく飛び上がり、逃走を図るホルダーの脳天に、ロッドの一撃を喰らわせて、再度地面に押し戻す。

『今だマスター！』

「ああ！」

メカ犬の声に答えて、ベルトからタッチノートを引き抜こうとした瞬間、俺の足元に、銃弾の嵐が降り注いだ。

「何だ！？」

咄嗟に身構えて、俺は叫ぶ。

「ふふ…何か楽しそうな事してるね？僕達も混ぜてよ」

「また会ったな、仮面ライダー」

夜の闇から出て来たのは、藍色の怪人オーバーと、灰色の怪人メルトである。

「また嫌なタイミングで来たなこいつ等……」

「そんな事言わないでよ。折角新しいオモチャを持って来たんだからさ」

思い切り邪険にする俺に対して、何時も通りの軽い口調で返すと、オーバーは複数の藍色の球体を取り出して、地面に投げ捨てる。

『あれはまさか！？』

それを見たメカ犬が、何か驚愕の声を上げるが、それ以上に驚愕する事態が発生した。

オーバーが投げ捨てた藍色の球体が、淡く光り出すと、それは人型の光を成して、やがて藍色の怪人オーバーと良く似た何かになる。

「何だこれは!?」

『マスター！奴等からも微弱だが、ホルダー反応がするぞ！』

「ふふふ……面白いでしょこれ?普通のホルダーには劣るけど、一杯居るからきっと楽しめるよ」

驚愕する俺とメカ犬に対して、オーバーは心底、嬉しそうに言う。

そしてその言葉を合図に、新たに複数現れたホルダーモドキ達が、俺に襲い掛かってくる。

「ちっ！」

俺は舌打ちしながら、ロッドを振るい、ホルダーモドキ達を薙ぎ払う。

「そいつ等の相手をしている所悪いが、先程まで相手をしていたホルダーが逃げようとしている様だぞ?」

ホルダーモドキと戦う俺に、メルトが淡々と言い放つ。

「く!?」

確かに俺が戦っている間に、ホルダーが空中に飛び上がり、この場から逃走しようとしている。

逃がしたくは無いが、食い止めようにも、ホルダーモドキの数が多くて、それすらも叶わない。

このままでは逃がしてしまう。

逃げていくホルダーの背を見て、俺の焦りばかりが募っていく。

だが現実は、意外な展開を見せる事となる。

突如として、空を飛ぶホルダーに、弾幕が降り注ぎ、逃走をは図るホルダーを撃ち落したのだ。

『む？』

「一体何だ！？」

そのあまりにも突飛な事態に驚きながら、俺は先程の弾幕が撃ち出されたであろう地点に、視線を向ける。

「あれって……」

そこに居たのは、人の形をしながらも、人とは言えない異形の姿だった。

メタリックイエローのボディーに、まるでロボットを思わせる造形に、仮面ライダーを思わせる、青い複眼の様な大きな瞳を持つ、何者かが、右手に自身と同色の見た事も無い形の銃を片手に、此方にゆっくりと歩いてくる。

その姿は確かに仮面ライダーに酷似しているが、俺は原作にこんな仮面ライダーが居たなんて事は知らない。

だけど何となく、これだけは解った。

突如として登場した彼が、この戦いの流れを大きく変えていくだろうという事を……

## 第十七話　ミッドナイト・ミッション【前編】（後書き）

次回は新たに出て来た、彼が活躍する予定です。

## 第十七話　ミッドナイト・ミッション【後編】（前書き）

お久しぶりです。

やっと後編になりますので、楽しんで頂けたら幸いです。

# 第十七話　ミッドナイト・ミッション【後編】

「何だろうね、あれって？」

突如として現れた、謎の介入者を見ても、藍色の怪人オーバーは、相変わらずの軽い口調を止めはしない。

「ふん。何であれ私達の邪魔をするのならば、容赦する必要もあるまい」

それに対して、灰色の怪人メルトは、淡々と言い放つ。

二人の怪人の会話を合図とした様に、俺と戦っていたホルダーモドキの何割かが、メタルイエローの身体を持つ介入者に狙いを変更して、襲い掛かる。

これがただの通りすがりの通行人だったのならば、是が非でも助けなければいけない所だが、この介入者に対して、そんな心配は無用だった。

「はっ！」

掛け声と共に、自身と同色の銃を構えて、躊躇い無く引き金を引く。

撃ち出された弾丸は、淡い銀色の光を纏っており、ホルダーモドキの付近に到達すると、まるで弾ける様に分裂して、多量の弾幕と化しながら、猛威を振るう。

その弾幕を潜り抜けてきた奴等に対しては、相手の攻撃をいなす様

に、避けて、時に裁きながら、近距離で銃弾を撃ち吹き飛ばすといった対応を見せる。

「……あれってメカ犬の知り合いか？」

『……いや、あんな知り合いが居たら、既に紹介している筈だぞ』

俺は、突如として現れた介入者の戦い振りに、困惑しながらもメカ犬と、会話を試みるが、メカ犬の返答を聴いてみるも、知り合いという訳では無いらしい。

「ふん！……あの、仮面ライダーさん！」

呆けていた俺達に対して、先程から目の前で戦い続けていた、メタリックイエローの介入者が、話しかけて来た。

「はい！？」

俺は思わず声を上げる。

しかしここで、同時に新たな疑問が生まれる。

この介入者の声が、何処かで聴いた事のある声に思えたからだ。

「ここを貴方に任せても良いでしょうか？僕はあいつに用があるんで！」

そう言うと介入者は、ある一点に向けて、指を示す。

介入者が指し示した指の、その先にあるものは、先程の弾幕の直撃

を受けて、落下して、いまだ倒れているホルダーだった。

「あ、ああ」

何とか俺は頷きながら、答えを返す。

「ありがとうございます！」

介入者は俺の答えを聞くと、早々にこの場を離れて、ホルダーの下へと駆け出す。

『マスター！取り敢えずホルダーは彼に任せて、ワタシ達は、奴等を蹴散らすぞ！』

「分かった！」

いまいち現状が把握出来ないが、話してみた感じでは、敵というわけでは無さそうなので、俺とメカ犬は目の前の敵に集中する事にした。

俺はベルトからタッチノートを引き抜き、開くと、スクリーン上に、ガイアシステムを起動させて、メカ竜を呼び出す。

『ガイア・コール』

音声が流れると同時に、何処からともなく、メタルレッドの手乗り恐竜が、俺達の目の前にやって来る。

『お待たせしましたマスター！！！先輩！！！』

やって来たメカ竜は、まるで軍の上官に挨拶をするかの様な、気合の入った敬礼をした。

どうやらこの前のお仕置きが、メカ竜にトラウマ的な何かを、植えつけてしまったのかもしれない。

そのお仕置きをしながら、色々と情報を聞き出した訳だが、今はその話は置いておく事にしよう。

「行くぞメカ竜！」

『はい！』

俺はメカ竜に声をかけながら、タッチノートの操作を続行する。

『スタンディングモード』

タッチノートから流れる音声と共に、首がレバー部分となる、アタッチメントパーツに変形したメカ竜を握り締めた俺は、タッチノートをベルトに差し込んだ後、続いてベルトの左側をスライドさせて、アタッチメントとなったメカ竜を差し込む。

『スピード・ガイア』

差し込んだ瞬間に、俺の周りには、メタルレッドの追加装甲が生成されて、ライトグリーンのボディーの上に、装着されていく。

その瞬間俺の身体には、スピードフォルムの際に感じる身軽さはそのままに、ベーシックフォルムの状態をも超える力を感じた。

ベーシック・ガイアの時とはまた違う、強化を果たした俺は、続いてベルトの左側のレバー下にある、ボタンを押す。

『ガイアブレイガン』

ガイア状態特有の武器である、遠近両用武器のガイアブレイガンを生成した俺は、スピードロッドの普段タッチノートをスライドさせる溝に、差し込んだ。

『ジョイントアップ・ガイアロッド』

ガイアブレイガンを差し込んだ事により、スピードロッドに、メタルレッドのパーツが追加され、新たな武器へと生まれ変わる。

「悪夢はここで終わらせる」

俺は新たな武器、ガイアロッドを構えて、ホルダーモドキ達へと駆け出す。

ホルダーモドキ達が、密集している地点に、一気に飛び込んだ俺は、ガイアロッドを振り回し、怒涛の勢いで薙ぎ払う。

「……必要なデータは取れた。それに、どうやらここが潮時の様だな」

「みたいだね」

俺の戦いを見ていた、オーバーとメルトはそう言うと、夜の闇に紛れて、消えて行く。

何故ここで、奴等が引くのか理解出来ないが、奴等が居なくなった今が、この戦いを終わらせる好機だ。

『マスター！』

「ああ！」

俺はメカ竜の声に、頷きながら、ガイアロッドを一旦肩に担ぎ、ベルトの左側のレバーを引く。

『マックスチャージ』

ベルトから発生する稲妻の様な光が、右腕のラインを通じて、ガイアロッドに集約されていく。

「こいつで決めるぜ」

肩に担いでいた、光を放つガイアロッドを構え直した俺は、ホルダーモドキ達に向かって疾走する。

そしてホルダーモドキ達の中心部に到達した俺は、そこで思い切りガイアロッドを振り回す。

「ガイアツイスター」

俺を軸として、振り回したガイアロッドから巨大な竜巻が発生し、ホルダーモドキ達は、一人残らずその暴風に巻き込まれ、内部で真空の刃に刻まれながら、連鎖的に爆発を巻き起こす。

「……ふぅ」

やがて爆発と暴風は収まり、ホルダーモドキ達が、塵に帰るのを確認した俺は、一息吐いた。

『マスターどうやら、あちらも決着が着きそうだぞ』

一息吐いていると、メカ犬が話しかけて来た。

俺も気になっていたので、視線を先程の介入者とホルダーの戦いに向ける。

「ふん！」

介入者は一定の距離を保ちながら、銃撃戦を仕掛けて、ホルダーを追い詰めていく。

場合によっては助太刀しようかと、考えていたのだが、その戦い振りを見る限り、その必要は無さそうである。

［「さあ！これで終わらせるわよ！」］

「はい！」

先程俺に話しかけてきた男性の声とは別の、女性の声が介入者から聴こえてくる。

ロボットの様な造形をしているが、通信機でも搭載しているのだろうか。

それにしても、さっきの男性の声といい、今聴こえてきた女性の声

も、何処かで聴いた事のある声なのだが……

俺が疑問に思う間も、現状は常に変化していく。

介入者は腰の左部分辺りに、取り付けてあった、銃のマガジンと思わしき物を、手に取ると、自身が使用している銃の底に設けられている溝から、差し込んだ。

『ブレイクチャージ』

その瞬間、機械的な音声が流れる。

介入者がその状態の銃を、ホルダーに向けて引き金を引くと、銃口から黄色い光弾が射出されて、その光弾が網目状に広がりながら、ホルダーに命中した。

その光は、ホルダーの全身に絡みつき、動きを阻害する。

次に介入者は、銃を右腰部分に設けられている溝、恐らくあの銃のホルスターと思わしき場所に差し込む。

すると介入者の右足は、まるで俺がポイントチャージをした時の様に、ホルスターに収めた際に、銃から発生した黄色い光が、集約して行き、その輝きを増していく。

「はあ！」

気合の掛け声と共に、介入者はホルダーに向けて駆け出し、その輝く右足を、動けないホルダーに対して、回し蹴りという形で繰り出す。

全身の動きを阻害されているホルダーに、その一撃を対処する事など出来る筈も無く、ホルダーはされるがままに、介入者による必殺の一撃を受ける。

介入者が放つ、必殺の回し蹴りがホルダーに直撃した瞬間、大きな爆発を引き起こす。

やがて爆煙が収まり、爆発地点に居たのは、メタルイエローの装甲を身に纏った介入者と、気絶した黒尽くめの男のみだった。

「任務……完了しました」

［「お疲れ様。今すぐパトカーを手配するから、そのまま待機していて」］

黒尽くめの男が気絶している事を確認してから、先程も通信していた女性の声と短い会話を交わした、介入者は今度は俺達に視線を向けると、ゆっくりと近づいてくる。

俺は一瞬身構えて、張り詰めた空気を形成したが、次に発した介入者の言葉により、その空気は一気に緩和してしまう。

「仮面ライダーさんも、お疲れ様です。いや～それにしても大変でしたね」

やけに朗らかな口調で、喋り始める介入者。

俺はその態度により、完全に沈黙してしまい、どういう事なのかと、思考を巡らす。

「実際にお会いするのは、二回目ですけど……あ！この格好だと分からないですよね？」

なおも話続ける介入者が、俺に直接会った事があると口にしたその瞬間、俺の脳内で、この介入者とある人物の声が見事に合致する。

更に介入者は、一度自分の左腕に取り付けられている、幾つものボタンがついた腕輪状の物体を操作すると、頭部から蒸気の様な気体が、勢い良く飛び出す。

介入者はそのまま頭部に手をかけると、ヘルメットを外す要領で、青い複眼が特徴的な、その頭部を外してしまう。

そして中から現れた、素顔は先程俺の脳内で合致した顔そのものだった。

「どうもお久しぶりです。デンライナー署に居た時は、捜査に御協力していただき、ありがとうございます」

介入者の正体は、以前に海鳴警察署に設置されていた、デンライナー署に派遣されていた新米刑事の長谷川さんだった。

でも何で長谷川さんが？

俺が更なる疑問に直面していると、長谷川さんは、一枚の名刺を俺に手渡して来た。

「海鳴警察署ホルダー対策特務課。実戦対応試験型タイプ２。ＥＳシステム搭載強化ユニットＥ２。装着者、長谷川啓太……ですか？」

取り敢えず俺は、名刺に書かれた文面をそのまま読み上げてみる。

「はい。これからは現場でも良く会う事になると思いますんで、これからも御協力、お願いします」

「はあ……」

色々と聞きたい事は、あったが、いまだ脳内処理が追いついていない俺に出来る事は、相槌をうつ事ぐらいだった。

「結局あれって何だったんだろうね？」

「さあな……」

暗闇の中で二人の怪人が、言葉を交わす。

オーバーは何時も様に軽い口調で。

メルトもそれに対し、抑揚の少ない、淡々とした物言いで答える。

「あれも仮面ライダーの同種って事かな？」

「ふん。だとしても私達のやる事に変わりは無い……それに実験は次の段階に移る。今更止める事も出来まい」

「まあ、そうだよね」

質問したオーバーに対して、メルトはなおも淡々と呟く様にして答えを返す。

その答えを予測していたのだろう。

オーバーも当たり前の様に軽く流しながら、話を続ける。

「それに邪魔になって来る様ならば、仮面ライダー共々始末すれば、済むことだ」

「そう簡単に行くかな？」

「無理でもやらなければならないだろう。あの方の願いを叶えるためにも……」

「……それが僕達の生まれた意味だから？」

「ふん」

二人の怪人は会話を交わしながら、深い闇へと消えて行く。

一筋の光すら無い闇の中へと……

「う～ん？」

「あ！起きたかな？アリサちゃん」

背中から聴こえる声に対して、俺は声を掛けてみる。

「……純？」

「うん」

まだ寝ぼけているのか、寝ぼけた人特有の、気だるさを感じさせる

声で、アリサちゃんが、俺を呼ぶ。

「……ここ……何処？それに何で、純が私をおんぶしてるのよ！？」

漸く意識が浮上したのか、アリサちゃんが俺の背中でわめき始める。

俺は戦いを終えた後、警察が到着する前に、長谷川さんと別れると、先に気を失っていたアリサちゃんを連れて避難していた、瞳さんと合流した。

本来は瞳さんが、そのままアリサちゃんをバニングス邸に連れて行くか、鮫島さんを呼んで、連れ帰ってもらうのが、良いと思うのだが、瞳さんは、これからけじめを着けなければいけない大事な用事があると言い残して、アリサちゃんを俺に引き渡すと、何処かに行ってしまい、ならば鮫島さんにと、連絡してみたら、今日は俺に一任するから、その大役を見事果たして見せろと、鮫島さんは獅子を谷底に突き落とすライオンの様な使命を俺に与えたのである。

なので俺は、アリサちゃんを背中に背負いながら、何時かのなのはちゃんにした様に、おんぶでバニングス邸を目指しているという訳だ。

それにしても、夜中に二人の子供が、出歩いて歩道されないのが、不思議である。

もしくはバニングスお抱えのSでもってPな人達が、周りを囲んでいるとでもいうのだろうか？

周りを見回して、M○Bみたいな格好の人と目が合っても気まずいので、俺はなるべく早くアリサちゃんを、バニングス邸に返そうと、

自然と足早になっていた。

もしかしたら、その振動のせいで、アリサちゃんを起こしてしまったのかも知れない。

「気がついたなら降りる？」

俺の背中で暴れるアリサちゃんを宥めながら、大丈夫そうならば、降りるかと、質問してみる。

「……良いわ。もうちょっと……このままでも」

降りるかと質問した瞬間、何故かアリサちゃんは、借りてきた猫の様に大人しくなり、おんぶを続行する様に言ってきた。

「はい。かしこまりました。アリサお嬢様」

折角執事服を着ているので、俺は前世で見ていたアニメの借金執事的なノリで言ってみる。

「……これも奇跡に入るのかな？」

「え、何か言った？」

「な、何でも無いわよ！？」

背中で何かを呟いたアリサちゃんに質問してみたのだが、何故か怒られてしまった。

女の子というのは、改めて不思議だなと実感してしまう。

「……ねえ、家に着くまで何か話しましょう？」

先程の怒りは何処へやら、アリサちゃんは俺の耳元で、囁く様に話しかけてくる。

「うん、良いよ。パーティーの時に約束もしたしね」

俺とアリサちゃんは、バニングス邸に到着するまで、他愛も無い話から始まり、色んな事を話した。

月の光だけが輝く夜の中で、それは何処か現実とは違う幻想的な一時の様に思えた。

その時アリサちゃんが俺の背中で、胸元のブローチ風の囁きが、月の光に照らされて、微笑んでいる様に見えたという話を聞いたのは、随分後になってからの事だ。



「いらっしゃいま……せ」

瞳さんの依頼が無事に終わった翌日の事である。

今日も翠屋でバイトに勤しんでいる俺が、何時もの様に、店内に入るお客さんに挨拶をしようとした所、そのお客さんの顔を見て、一瞬の内に意識がフリーズしてしまう。

そのお客さんは二人組みであり、どちらも俺の知っている顔だったりする。

一人はフォーマルなスーツを着た若い男性と、もう一人はセーラー服姿の見た目だけを言えば美少女中学生だ。

「あれ？君って板橋君だよね」

若い男性の方、長谷川さんが俺に話しかけてくる。

「お姉ちゃんが言ってた美味しいお店で働いてる知り合いって、もしかしてあんたなの？」

続いて美少女中学生こと、超天才コスプレイヤーであり、傍迷惑姉妹の、特に俺の脳内ブラックリストにも掲載されている妹の方、恵美さんが、質問してくる。

もう何がどうなっているのか、俺にはさっぱりである。

「ここでも働いている何て……まさか！？」

「え、何がまさかなのよ？長谷川君」

「実は板橋君は、昨日もパーティー会場で働いていたし、それ以前は僕が居た部署にもお手伝いで来ていて、今日はこの喫茶店で……」

「そういえばこの子ってお姉ちゃんのお仕事も手伝ってるって聴いたわね……それって!?」

漸く俺の脳内フリーズが解けて、正気を取り戻すと、何やらずっと会話を続けていた恵美さんと、長谷川さんが、何か尊いものを見る様な眼差しを俺に向けながら、肩に手を置いてくる。

「苦労してるんだね……」

「あんた、純っていったわね。人生に負けんじゃないわよ!」

「はい!?」

口々に何故か応援の言葉を浴びせかける二人に対して、俺は驚きの声を上げる。

何か知らない間に、妙な誤解がうまれてる!?

「よ～し!今日は一杯食べて、ここの売り上げに貢献するわよ!!!」

「はい!!!」

何故か話題の中心に上げられた筈の俺は置き去りに、二人はテンションを加速させていく。

「取り敢えず、そこのワイルド系な店員!!!メニューの上から順

に五つ持ってきて！」

「僕は取り敢えず、このランチセットのBをお願いします」

同じくバイトに出ていたヤスに注文をすると、恵美さんが俺の頭を乱暴に掻き回す。

「さあ！今日は私が奢ってあげるから、純も一杯食べなさい！！！」

絶対何か誤解してるよね、この人達！？

「あ！？ちょっとお客さん！純の旦那に何やってるんすか！？」

そこへ、メニューを士郎さんに伝え終えて、戻ってきたヤスが加わり、更なる誤解を生む。

『この店は何時もこんなに、賑やかなんですか？』

『うむ。大体これ位のものだな』

その片隅で傍観者に徹しているメカーズが、淡々と会話をする。

お前等も見ているだけじゃなくて……いや、やっぱり其処に居てくれ。

この状況でこいつ等が入ってくると、更に変な状況を作り出しそうで怖い。

「純君。もうそろそろバイト終わるんだよね」

「今日はタップリと付き合ってもらうんだからね！」

「ふふふ、そうだね」

「こんな美少女達に囲まれて遊べるやなんて、純君は幸せ者やな！」

更にこのタイミングで、新たに店に入ってきた美少女四人組が、俺に遊びの誘いを持ちかけてきた。

もうこの現状は、はっきり言って、何だこのカオスはといった具合である。

結局この翠屋での騒動は、俺のバイトが終わるまで続いた。

今日の海鳴は、一つの新たな風が舞い降り、とても平和だ。

## 第十七話　ミッドナイト・ミッション【後編】（後書き）

次回は外伝になります。

丁度第十六話と第十七話の間のお話になりますので。

そして主役は長谷川さんです。

## シード外伝　第十六・五話　仮面ライダーＥ２ストーリー（前書き）

今回は本編の主役である純とメカ犬の出番が一切無い番外編となります。

それでも楽しんで頂けたら幸いです。

# シード外伝　第十六・五話　仮面ライダーE2ストーリー

「君！パンツはブリーフ派？それともトランクス派？」

青年は、出会って開口一番に、セーラー服を着た女の子にそんな事を質問された。

この言葉がキッカケとなり、新たなる物語が紡がれる事となる……

ちなみに青年は、ブリーフ派だ。

「はあ……」

海鳴市の平和を日夜守り続ける、海鳴警察署。

周りでは忙しなく同僚達が働いているのを尻目に、青年は朝から盛大な溜息を吐いていた。

青年の名前は、長谷川啓太。

今年の春から、晴れて念願の刑事となった、正義感溢れる若者である。

しかしこの青年、長谷川は、刑事になってから、何かと不思議な事件に巻き込まれる事が多い。

先ず始まりは刑事になりたての春だった。

突如として街に現れて、破壊活動を行う謎の怪人ホルダーの出現。

それに呼応するかの様に現れた、仮面ライダーを名乗る超人。

普段から扱う事件だけでも、忙しいというのに、新人刑事である長谷川は、日々の対応に追われて、毎日がてんてこ舞いだった。

漸くそんな忙しさも慣れて来たと思っていた秋頃、上から異動のお達しが届く。

何でも、新設される、デンライナー署と呼ばれる部署に行けとの事である。

この街で、不思議な事件には随分と慣れたと思っていたのだが、長谷川はここで更なる不思議と遭遇する事となる。

同僚はその殆どが、着ぐるみを来ているのか、素顔が解らず、素顔を晒しているメンバーはどう見ても中学生。

更に途中から加入された、協力者は小学生……

おまけに電車が飛ぶし、仮面ライダーと思わしき人物が何人も出て

くるし、世界の危機だとか、もう自分とは全てがかけ離れたファンタジーだった。

その後デンライナー署は無事に事件を解決して、長谷川も元居た部署に異動となったのだが、寒さが際立つ冬になる頃、再び異動の辞令が下ったのである。

「ホルダー対策特務課か……」

事務的に受け渡された書類に、目を通しながら、長谷川は呟く。

ホルダーとは、今年の春から現れた怪人の総称である。

にわかには信じられない話であるが、この街で発売されている月刊海鳴という雑誌で、仮面ライダーの特集及び、独占インタビューが、掲載されて、その記事の中で、怪人の名称も記載されていたのだ。

海鳴警内でも愛読者は多く、気付けばこの名称が、正式採用される事になっていた。

それにしても何故自分はこういった類と、縁があるのかと、自らに起こる事象に疑問を覚える。

赴任直後に始まったホルダーが起こす事件に始まり、デンライナー署への異動。

やっと元の部署に戻ってきたと思った矢先に、このあからさまな名称の部署への異動である。

この名前からして、これから自分が今まで以上に、ホルダーと関わ

りあう事になるのは間違い無いだろう。

そう考えると、常人であれば、溜息の一つも零したくなるのは、当然の権利と言える。

長谷川は重い足取りで、署内の廊下を移動して、これから自分が働く事となる部署が設立されている部屋の扉へと到着した。

「失礼します」

三回程扉をノックした長谷川は、部屋に入る際の、お決まりとも言える言葉を口にしながら、部屋へと入室する。

最初に視界に飛び込んできたのは、セーラー服を着た、ポニーテールの美少女。

そして長谷川と、セーラー服を着た美少女が最初に交わした言葉は、冒頭へと遡る。

「はい？」

「だからパンツよ！トランクス？それともブリーフ？」

思わず声を漏らす長谷川だったが、セーラー服姿の美少女は、気にした様子も無く、再度長谷川に質問をぶつける。

「えっと、ブリーフ派ですけど……」

このままでは話が進まないと思った長谷川は、取り敢えず、答える事にした。

「それなら大丈夫ね！はい！これを履きなさい」

一体何が大丈夫なのだろうか。

長谷川の答えを聞いた美少女は、嬉々とした様子で、ビキニタイプのパンツを手渡して、身に着けるように催促し始める。

「あ、あの君は誰なんだい？それにどうして学生が署内に！？」

美少女の勢いにたじたじになりながらも、長谷川はどうにかまともな質問をする事を成功させた。

「うん？そういえば自己紹介がまだだったわね」

神が奇跡を起こしたのか、美少女はその怒涛のパンツ布教活動を一時中断して、やや小さめな胸を張りながら、自己紹介を開始する。

「私の名前は、風間恵美。今日からこのホルダー対策特務課の特別

主任になったの。つまり長谷川君！私は君の上司ってわけよ！」

最後によろしくねと言いながら、ウインクをする。

その辺りのアイドルよりも、魅力的であろうその笑顔は、世の多くの男性を虜にする事、間違い無しだが、生憎と長谷川は虜になる所か、困惑の極みへと到達しようとしていた。

「僕の上司！？それに何で学生が！？」

「あ～パニックになってる所悪いんだけど、さっそくお仕事よ。取り敢えずこのパンツを履いたら、第三倉庫に来なさい。そこで全部説明してあげるから」

風間恵美と名乗った美少女は、困惑する長谷川に、パンツを手渡しながら、そう告げると、部屋を出て行ってしまう。

ろくな説明も無いままに、一人放置された長谷川は、その手に持ったパンツを見つめながら。

「……一応履くかな」

そう呟いて着替え始めた。

着替えを終えた長谷川は、風間恵美の言う通りに、第三倉庫にやって来た。

「来たわね。ちゃんとパンツは履いた？」

「ええ、まあ一応は」

「そう！なら良いのよ！」

やって来て早々に、仁王立ちで待ち受けていた恵美が、長谷川に確認を取る。

今のところ、長谷川の中で、彼女の印象は、外見的な特徴を除けば、重度のパンツマニアでしかない。

「あの、風間さんで良いですか？」

「あら、フランクに名前で呼んでくれれば良いわよ！」

「……それじゃあ、恵美さん。どういう事なのか、納得のいく説明をお願いしたいんですけど」

「じゃあ次は、左腕にこれを付けてね」

漸くパンツ以外の話題に突入出来たと長谷川が思った矢先、恵美は

新たなる布教品を取り出してきた。

それは数字とアルファベットが、幾つも取り付けられた腕輪状の機械で、黄色を基調とした、メタリックな色彩を放っている。

「これは？」

「ふふん。これはＥブレスって言って、私達ホルダー対策特務課の切り札よ！」

そもそも長谷川は、この特務課が、具体的にホルダーに対して、どういった対策をとろうというのか、理解出来ていないのに、そのＥブレスを切り札だと言われても、どう反応して良いのか解らない。

だが興奮しだした恵美は止まる事を知らず、説明する口調は早口な上に、テンションも一気にトップギアへと押し上げていく。

「更にこのＥブレスが、その真価を発揮させる為に用意したのがこれよ！！！」

テンションが最高潮まで、上り詰めた恵美は、倉庫の後ろにあったブルーシートを、勢い良く引き剥がす。

「……バイク？」

恵美が満を持して見せたそれは、長谷川の呟きの通り、一台のバイクだった。

恐らく恵美が、第三倉庫にやって来る様に指示を出したのも、長谷川にこれを見せるのが、目的だったのだろう。

バイクは警察の使う物に相応しく、白と黒が基調とされている。
ただしバイクとしてはかなり大きい。
その大きさは、通常の大型バイクの1．5倍はありそうだ。
「名前はＥＳシステム搬送用二輪車両。通称マシンドレッサー！はっきり言って、最高傑作と言っても過言じゃ無いわ！！！」
恵美は声高らかに、バイクの名を告げる。
「そうなんですか」
説明してくれると言っていたのに、何一つ理解出来ない長谷川は、そう答える以外なかった。
そもそも恵美の説明は、長谷川が聞きたい事を、飛び越しての説明である為、全くと言って良い程に、要領を得ない。
「そうなんですかじゃないわよ！長谷川君！早くＥブレスを付けなさい！！！」
「は、はい！」
しかし恵美にはそんな長谷川の事情を察する事が出来る筈も無く、問答無用で自分のペースを貫き、長谷川にＥブレスを装着させる。
「付けたわね！それじゃあ次はこれよ！！！」

長谷川がEブレスを付けた事を確認した恵美は、続いてバイク用のヘルメットを、長谷川に投げ渡す。

「え！？」

「昨日の夜、匿名で警察に、ある情報が届いたわ」

突発的に進んでいく事態に困惑する長谷川に対し、恵美はなおも自分ペースで、話を続ける。

「本日の午前十一時に、海鳴美術館にホルダーが現れるかもしれないってね」

「え！？ちょ！？」

「ホルダーの狙いは、宝石としても、文化的にも価値が高いとされる、風の囁きと呼ばれるブローチよ！」

「さっきから一体何を！？」

「これは私達、特務課の初めての任務よ！何としてもホルダーから風の囁きを守り抜きなさい！！！」

「だから話が全く見えないんですけど！？」

恵美の大切な部分を飛ばした説明に、長谷川が抗議の声を張り上げるが、恵美には通用する筈も無くヘルメットを装着した長谷川は、強引にマシンドレッサーに乗せられる。

「Eブレスは、通信機にもなってるから、美術館についてからの指

示は、任せなさいね！」

こうして長谷川は、その場の成り行きにより、マシンドレッサーで、海鳴美術館へと向かう事になった。

マシンドレッサーを走らせ、長谷川が間も無く海鳴美術館に到着しようとしたその時、美術館の在る方角から、爆発音が鳴り響き、続いて絹を裂く様な悲鳴が聞こえてきた。

「何だ！？」

［「長谷川君、聴こえてる？」］

爆発音に驚愕する長谷川に、Ｅブレスから恵美の通信が入る。

「恵美さん？」

［「今さっき海鳴署に、美術館にホルダーが現れたと、通報が届いたわ」］

「あの、それで僕は何をしたら良いんですか？」

ここまで来てその質問もどうかと思うが、長谷川は何も聞いていないのだから、仕方が無い。

［「戦うのよ」］

「へ？戦うって、もしかして僕が！？」

［「当然でしょ！！！」］

「む、無理ですよ！戦えるわけ無いじゃないですか！？」

あまりにも予想外な恵美の発言に、長谷川は否定の言葉を全力で唱える。

［「無理じゃないわよ！なんたってその為の特務課なんだから！」］

声だけなので長谷川には確認できないが、恵美が良い顔をしながら、ウインクをしたのは、間違い無いだろう。

「……その為の特務課？」

［「取り敢えず美術館に到着したら、指示を出すから、それに従って！」］

「は、はい！」

長谷川は半ばヤケクソで、恵美の指示に従い、美術館に到着すると、

マシンドレッサーを停車させて、再び恵美に連絡する。

「海鳴美術館に到着しました！」

［「分かったわ。まずはマシンドレッサーから降りて、私の言う通りに、Ｅブレスを操作しなさい」］

「はい！」

長谷川は言われた通り、マシンドレッサーから降りて、何時でもＥブレスを操作出来る様に、態勢を整える。

［「準備は良い？まずはＥブレスのコードで、Ｅ・０・２を押しなさい」］

言われた通り長谷川は、Ｅブレスの操作を開始する。

そして恵美の指示通り、コードを押した瞬間、長谷川の目の前で、信じられない現象が発生した。

『ドレッサーモード』

すぐ隣に停車させていたバイク、マシンドレッサーから、機械的な音声が聞こえたかと思うと、何と変形し始めたのである。

「はい！？」

その光景に心底驚く長谷川をよそに、マシンドレッサーは、変形を続け、成人男性一人が、余裕で入れそうな、ボックス状の何かに、その姿を変えた。

更にボックスは開閉が可能であり、変形を終えたマシンドレッサーは、誰かが中へと入るのを待ち望むかの様に、入り口を開き続けている。

「何ですかこれ!?」

「「それはマシンドレッサーのもう一つの姿!ドレッサーモードよ!それよりも早く中に入るのよ長谷川君!!!」」

「入るって……もしかしてこの中にですか!?」

「「もしかも、カモシカでも無くそうよ!男の子でしょう?根性見せなさい!!!」」

今度の上司は、余程無茶振りが好きなのだろうか。

長谷川は内心でもうどうにでもなれと、勢いだけで、マシンドレッサーの中へと飛び込む。

その勢いは、まるで京都の清水の舞台から飛び降りるかの様な姿だった。

長谷川がマシンドレッサーに飛び込むと、入り口は待っていたと言わんばかりに、まるで獲物を逃すまいとする、食虫植物の様に、唯一の出入り口を閉じてしまう。

「へ!?」

出入り口が閉ざされた瞬間、一筋の光すら差さない闇が、長谷川を

包み込むが、それは本当に一瞬の事であり、長谷川が、驚きの声を上げた直後には、内部がライトで照らされ、闇を払拭してくれた。

［「長谷川君。ドレッサーの中に入ったら、Ｅブレスを出入り口を正面にした左側の壁の窪みに押し当てて、後ろの壁に背中を着けるのよ」］

再び聴こえてきた恵美の指示に従い、長谷川は言われた通りの行動を行う。

「次は何をすれば良いんですか？」

［「これが最後だから安心して。最後に音声コマンドを入力すれば、完了よ」］

「音声コマンド？」

［「ええ。今から私が言う言葉を繰り返してその言葉は……」］

長谷川は、恵美の言葉を聴き、その言葉を自身の言葉として、発する。

その言葉は戦士の戦う覚悟を示した言葉。

力ある言葉。

長谷川がその言葉を発した瞬間、一人の青年が、新たな運命を背負う戦士へと変わる。

「変身」

『音声コマンド認証。ＳＥシステム起動』

音声コマンドを入力した直後に、機械的な音声が、ドレッサー内に響き、壁のいたる場所に穴が開いたと思うと、其処から無数のロボットアームが飛び出す。

「へ？あ！ちょ！？やめて！！！」

しかもそのロボットアームは、あろう事か長谷川が着ている衣服を剥ぎ取りに掛かる。

抵抗する間も無く衣服を剥ぎ取られた長谷川が、現在身に着けているのは、先程恵美から渡された、ビキニタイプのパンツと、Ｅブレスのみだ。

全裸にされなかっただけありがたいと、現状に混乱しながらも、安堵の息を吐き出す長谷川だったが、予想外の出来事は、休む間も無く長谷川に降り注ぐ。

続いてロボットアームが引っ込むと、それと入れ替わる様に、ノズルの付いた筒状の機材が飛び出して、ノズルから、謎の黒い液体を長谷川の身体へと吹きかけ始める。

「な、何なんですかこれ！？」

謎の黒い液体を吹き掛けられながら、長谷川は思わず恐怖と、困惑が入り混じった声を上げてしまう。

［「安心しなさい。それは身体に害なんて無いから」］

長谷川の悲鳴を聞きながらも、恵美はマイペースな声で答える。

確かにこれでこの液体が有害物質ならば、この行為はただの拷問だが、それにしてもやられる身としては、あんまりな対応と説明である。

「あれ？何かこの液体凄い勢いで乾いてません！？」

液体を浴びせ続けられている長谷川が、自身の状態を見て、疑問を口にする。

長谷川が言った通り、液体は凄まじい勢いで、乾き始めてまるで全身ゴム製のスーツを着ている様な、状態となっていく。

「「それは空気中の酸素と結合する事で、瞬時に固形化する特殊素材よ。耐熱、耐寒、耐刃、耐弾、耐ショック性に優れてるんだから！凄いでしょ？」」

恵美の説明を聴きながら、己の身についている特殊素材を、眺めていると、吹き掛けられていた液体が止まりノズルが収納されると、再びロボットアームが飛び出す。

「今度は何が……」

しかもロボットアームは、Eブレスと同色の、メタルイエローに輝く人型ロボットの様なパーツを掴んでいる。

ロボットアームは、そのパーツの一つ一つを丁寧に長谷川の全身へと、装着させていく。

そして最後に、仮面ライダーに似た形の青い複眼状のバイザーが目を引く、フルフェイスタイプの頭部パーツが装着される。

「この姿は……」

［「それが私達、ホルダー対策特務課が誇る、対ホルダー迎撃ユニットＥ２よ！」］

「Ｅ２……」

長谷川が今の己の姿を呟いた瞬間、閉ざされていたドレッサーの扉が開かれる。

［「取り敢えず装備は、標準のＡ型を初期装備にしてあるから、それで戦ってみて」］

「これで本当に戦えるんですか？」

［「大丈夫！私を信じなさい！！！」］

出会ってから数時間しか経っていない相手を信じて、命懸けの戦いをしろというのは、些か乱暴な話である。

「……はい！」

しかし長谷川は、覚悟を決めて、ゆっくりと頷く。

確かにこの破天荒娘は、出会ってから、好き放題に自分の意見も無視して、先へ先へと進んでいく。

だが、彼女の言う事は正しかった。

本来ならば、人知を超えたホルダーという存在に、自分は手も足も出ないだろう。

でも彼女は、風間恵美というセーラー服を着た美少女は、その道を長谷川に示して見せた。

だから一度だけ信じてみようと思う。

自分が刑事を目指したのは、周りの小さな幸せをこの手で守る手助けをしたいと願ったからだ。

そして今この瞬間に、その大切な思いが、壊されようとしている。

迷えばその守りたいものは、己の手から、簡単に零れ落ちていく。

覚悟を決めるのならば、今しかないだろう。

「行きます！」

長谷川は覚悟の言葉を叫び、飛び出した。

「現場に到着しました。前方約２０メートル先に、ホルダーを二体確認。戦闘行動に移行します！」

［「分かったわ！頼むわよ長谷川君！」］

「はい！！！」

現場に到着したＥ２は、すぐに二体のホルダーを目視で確認した。

一体は蝙蝠を模した姿をしており、もう一体は、背中に大量の大きな針を持つ、ハリネズミに似ている。

突如として現れた、邪魔者であるＥ２に対して、ホルダー達が襲い掛かる。

「ふん！」

Ｅ２は先制攻撃を仕掛けてきた蝙蝠型ホルダーの拳を受け止めて、逆に側面から、腹部への強烈な蹴りを叩き込む。

更に時間差で襲い掛かるハリネズミ型のホルダーに対しては、先程の攻撃により、蹲る蝙蝠型ホルダーを振り回して、投げつける事により、牽制を図る。

「凄い……まるで自分の身体じゃないみたいに身体が動く！」

Ｅ２は自らの一連の動きに、驚きを覚える。

［「当然よ！強化式外骨格に、柔軟性に優れた人工筋肉、まだ現代科学では一般化してない最新技術を惜しみなく使ってるんだからね」］

「良く分からないですけど、兎に角凄いという事は理解しました」

珍しく聞きたい事を答えてくれた恵美には悪いが、さっぱり意味が理解出来ないので、Ｅ２はそのまま戦闘を続行する。

なおも接近戦を仕掛ける蝙蝠型ホルダーに対して、ハリネズミ型ホルダーが、不自然に距離を取り、背中をＥ２に向けると、その背中を小刻みに震わせ始めた。

何を始めたのかと思うと、突如として、蝙蝠型ホルダーが、翼を広げて上空に飛び上がる。

「何！？」

それに気を取られ、Ｅ２が叫ぶ。

しかしこの時、ハリネズミ型ホルダーから、視線を外してしまったのがいけなかった。

「ぐっ！？」

視線を外した瞬間に、Ｅ２を鋭い衝撃が襲う。

メタルイエローのボディーからは、所々衝撃による煙が立ち上がり、装着者である長谷川にも、幾らかのダメージが届く。

よろけながらも、辺りを見渡すと、巨大な針が幾つも落ちている。

正面を見据えれば、ハリネズミ型ホルダーが再び背中を震わせて、第二射を射出してきた。

「くっ！」

今度はしっかりと視界に捉えていたので、Ｅ２は転がりながら、その攻撃を何とか回避する。

［「あの遠距離攻撃は厄介ね……長谷川君！こっちも遠距離攻撃を仕掛けましょう」］

Ｅ２の頭部には、小型カメラが設置されており、恵美はそのカメラを通じて、Ｅ２が見ている光景と同じ物を見る事が出来る。

だからこそ、恵美は確実なアドバイスをリアルタイムで提示する事が出来るのだ。

「遠距離……何か武器があるんですか！？」

［「そうよ。右側のホルスターに、Ｅ２専用対ホルダー銃、ＥＳＭ０１があるわ。使い方の基本は普通の銃と大差無いから、長谷川君でも使いこなせる筈よ」］

「分かりました。やってみます！」

Ｅ２は頷きながら、右手を腰のホルスターに合わせると、確かに恵美の言った通り、一丁の銃が在った。

所在を確認したＥ２はそれを素早く引き抜くと、ホルダーに標準を合わせて、引き金を引く。

すると銀の淡い光を纏った弾丸が射出され、更にある程度の距離で、炸裂すると、ハリネズミ型ホルダーの飛ばす針を全て相殺して、残りはハリネズミ型ホルダーに直撃して、確実にダメージを与える。

「凄いなこれ……」

その威力に驚きを隠せず、Ｅ２は自らの専用武器である、ＥＳＭ０１をまじまじと見詰める。

［「今がチャンスよ長谷川君！ホルダーブレイクを決めるのよ！」］

「ホルダーブレイク？」

恵美が言った新たな単語に、Ｅ２は疑問の声を上げた。

［「ホルダーは元々人間なのよ。それでホルダー化した人を元に戻すのが、ホルダーブレイクってわけ」］

「良くそんな事が出来る様になりましたね……」

［「まあね！それに仮面ライダーに頼んでサンプル採取させてもらったから、確実よ！！！」］

「ははは……」

あまりにもアグレッシブな発言をする上司に対して、Ｅ２はもう苦笑いをする事しか出来ない。

［「それじゃあやり方を教えるから、その通りにお願いね」］

「はい！」

二人は気持ちを切り替えて、ホルダーを倒す事にのみ、意識を集中させる。

［「まずは左側の腰に、ＥＳＭ０１用のマガジンパーツがあるから、それをセットして」］

恵美の指示を聴きながら、Ｅ２は自らの左腰に取り付けていたマガジンパーツを手に取り、ＥＳＭ０１の底部分にセットする。

『ブレイクチャージ』

機械的な音声響くと銃口の中が、薄っすらと黄色い輝きを放つ。

［「次はホルダーに狙いを定めて、引き金を引くのよ！」］

「は！」

Ｅ２はそのままホルダーに狙いを定めて引き金を引く。

銃口からは黄色い光弾が放たれ、網目状に広がると、ホルダーの全身に纏わりつき、その動きを阻害する。

［「最後はＥＳＭ０１をホルスターに戻して、右足で思い切り蹴るのよ！！！」］

ＥＳＭ０１をホルスターに戻すと、黄色い光が右足に集約して、輝きだす。

「はあああああ！！！」

Ｅ２は一気に駆け出すと、ホルダーの目の前に来ると同時に、輝く右足による回し蹴りを喰らわせた。

その一撃を受けたホルダーは、爆発を起こしその身体を四散させる。

爆発地点に残ったのは、Ｅ２と気絶した二十代前半の男性のみだった。

「良くやったわね。長谷川君」

「でも、ホルダーを一体取り逃がしてしまいましたし……」

「何言ってるのよ！初陣としては上出来なんだから！」

「そうでしょうか？」

「ええ！でもまあ、確かにもう一体のホルダーをこのままにしておく訳には行かないわね」

「はい……」

ホルダーとの戦闘を終えた長谷川は、一度署に戻り、恵美と美術館に居た、もう一体のホルダー対しての対策を練っていた。

「あの……一つ良いですか？」

ホルダーについて考えてる最中に、長谷川は今更ながらに思った事を口にする。

「何？」

「どうして僕がＥ２の装着者に選ばれたんですか。普通ならもっと格闘技が得意な人とかが選ばれると思うんですけど？」

これは長谷川が、純粋に思った事である。

自分よりも、Ｅ２の力を最大限に引き出せそうな人材は大勢居るだろう。

この質問は戦うのが怖いという訳ではなく、実際にシステムを使ったからこその意見だ。

「……E2はね長谷川君が装着するからこそ意味があるの」

「僕が……ですか？」

「私にはこのESシステムの先に夢がある。その為には長谷川君の協力がどうしても必要だったのよ」

今日初めて会ってずっと続いていた高いテンションはなりを潜め、恵美は真剣な眼差しで語る。

「それって……」

「今は言えない。でもきっと、何時か話す時が来るから……長谷川君。改めてお願いするわ。私と一緒にこれからも戦ってくれる？」

その瞳は何処までも透き通り、純粋で穢れを知らず、何より強い意志を秘めていた。

「……はい。これから宜しくお願いします」

長谷川は目の前の少女にこれ以上何も聞かず、ただ肯定の言葉を返す。

何故自分がそんな事をしたのか？

答えは簡単だ。

恵美と出会ってからまだ一日も経っていないが、これだけは分かる。

彼女は何時だって真っ直ぐなのだ。

その言葉も行動も……そして生き方さえも。

だから彼女が何時か話すと言ったならば、何時か必ず話してくれる時が来る。

ならば今無理に聞き出そうとしなくても、その時を待っていればそれで良い。

それに長谷川は、恵美に不思議と興味を持った。

勿論恋愛感情などと呼べるものではないが、ただ単純にもう少し彼女と一緒に、この仕事を続けて行きたいと思えたからだ。

「……ありがとう」

その時の恵美の笑顔は、長谷川にとって、どんな宝石よりも輝いて見えた気がした。

「ところで、もう一つ質問何ですけど、E2って誰が作ったんですか？」

長谷川にとっては恵美が自分の上司である以上に、E2の存在自体が謎なのだ。

「あら、言ってなかったかしら？開発者は私よ」

「は？」

「だから、E2を設計開発したのは、超天才の私なんだってば！」

恵美のカミングアウトにより、長谷川の脳内処理は追いつかず、不具合を起こしたのか、ただただ沈黙が、この場を支配する。

「はあああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！？？？？」

暫くの沈黙の後、本日海鳴市一の絶叫が、海鳴警察署から聴こえてきたのは言うまでも無い。

第十七話　ミッドナイト・ミッションに続く？

## シード外伝　第十六．五話　仮面ライダーＥ２ストーリー（後書き）

次は本編か、キャラクターファイルの第三弾を載せると思います。

## キャラクターファイル第三弾（前書き）

前回の後書きに書いた通り、三回目になる登場人物紹介になります。

以前にも書きましたがこの作品のオリキャラは何処まで増えるのか、作者の私にも、想像出来なくなって来ました……

そんなわけで、ただのキャラ紹介ですが、楽しんで頂けたら幸いです

## キャラクターファイル第三弾

登場人物

○お笑いコンテストの司会者　　初登場　年末福袋

どんな状況でも司会を遂行する真のプロフェッショナル。

この人が居たからこそ、お笑いコンテストは無事に進行する事が出来た。

○人口天然ドッグズ　　初登場　年末福袋

メカ犬とジャックが結成した、前代未聞のお笑いユニット。

あえて工では無く、口の漢字を使っているのは、二匹の茶目っ気らしい。

漫才のネタが、何処かで見た事のある方式に思えるのはきっと気のせいです。

ちなみに熱烈なファンが、海鳴市に二人程いる。

○呟きの魔女チェイ姉さん　　初登場　年末福袋

チェイサーさんの裏の姿。

果たして需要は存在するのだろうか？

○外人ホルダー　　初登場　年末福袋

無駄におめでたいホルダー。

出てくる時期とタイミングさえ間違わなければ、もう少しまともな対応で、相手をしてもらえたかもしれない、何だか報われない人。

取り敢えず能力は、お正月に出来る事が、何でも出来る。

○アリサオンステージ　　初登場　年末福袋

本編とは一切関係ございません。

ただ……かなりの信者が居るそうだという噂を良く耳にします。

○空鍋とお玉にとある漫画　　初登場　年末福袋

……健やかに育って欲しいものです。

○野上幸太郎／仮面ライダーＮＥＷ電王　　初登場　２０１１年特別編への序章

電王の映画三作目で初登場を果たした、野上良太郎のお孫さん。

その血を強く受け継いだ為なのか、凄まじいまでの不幸体質を誇る。

この作品では、序盤が一番の見せ場に。

○テディ　　初登場　２０１１年特別編への序章

幸太郎と契約している、ターミナルで生まれた人工のイマジン。

エピソードブルーで実は派遣だった事が判明した。

この作品では、あまり出番が無かったが、作者的には好きなキャラクターの一人。

○スパイダーイマジン　　初登場　２０１１年特別編への序章

原作でも見事なやられ役であり、それはこの作品でも変わらない。

公式設定ですと、個体によって能力が違う様なのですが、今回は蜘蛛という事で、糸を吐く能力とさせて頂きました。

○ローブの人物／ネガタロス／ネガ電王／クライマックスネガ電王

初登場　２０１１年特別編への序章

原作では電王映画二作目のラスボス。

そしてこの作品でも、やっぱりラスボスです。

作者的には複雑な設定の敵キャラも勿論好きですが、こういうベタな敵も大好きなのですよ。

○封印の鍵　　初登場　２０１１年特別編への序章

全部で三つある、まさにこの特別編の鍵を握るキーパーソン。

○宅急便のお兄さん　　初登場　電王編

一時期には一歩前的なロゴが入っていたが、今は落ち着いている様です。

○デンライナー　　初登場　電王編

時を駆ける列車。

それ以上の説明はもはや不要だと思う。

○野上良太郎／仮面ライダー電王　　初登場　電王編

皆さんご存知！

電王の主人公であり、今回の特別編でのもう一人の主役。

でも変身中は殆どイマジンが喋るので、出番は少し控えめかも。

○モモタロス　　初登場　電王編

良太郎に憑いた最初のイマジン。

乱暴な性格をしているが、意外と常識的な考えも持っており、人情に熱い一面もある。

犬が苦手で、泳げないと何気に弱点も多いが、俺参上の決め台詞は、ライダーファンならずとも認知される程の出世頭。

○ウラタロス　　初登場　電王編

この人を一言で表すのならば、嘘吐きな釣り好きナンパ師さん。

ＴＶ編の初期はモモタロスのライバルキャラ的な位置付けだったのに、一作目の映画が終わった辺りからは、随分と性格が丸くなったかも……

主にメンバー内では、オーナーに続き、解説役になる場合が多い気がします。

○キンタロス　　初登場　電王編

良太郎に憑いているイマジンの中では、唯一別の人のイメージで実体化している。

力持ちで気が付くと居眠りしているという、何処かで聴いた事がある様な……

そこは華麗にスルーして、その強さはまさに泣けるで！

○リュウタロス　　初登場　電王編

ダンスとお姉ちゃんが大好きな、性格は何処までもお子様なイマジン。

ＴＶ編の話数が進む毎に、どんどん子供化が進んだと思うのは、私だけでしょうか？

ちなみに無類の動物好きでもある。

○コハナ　　初登場　電王編

大人の都合があるんですよ……色々と。

○ナオミ　　初登場　電王編

デンライナーの食堂車で働いている？お姉さん。

彼女の淹れたコーヒーを人間が飲むには、それなりの覚悟が必要。

○オーナー　　初登場　電王編

この人を見ていると、あの番組の映像が、頭から離れなくなります。

○長谷川啓太　　初登場　電王編

急遽デンライナー署に配属された新米刑事さん。

最近本編の準レギュラーに昇格して、仮面ライダーになった。

○ネガデンライナー　　初登場　電王編

説明はデンライナーと同じです！

○ゼロライナー　　初登場　電王編

だから同じなんだってば！（ツンデレ風に）

○桜井侑斗／仮面ライダーゼロノス　　初登場　電王編

電王の二号ライダー。

椎茸が苦手という事を、過剰な程に原作本編で説明されている人。

ＴＶ編終了後のカードの残り残数を気にするのは、ライダーファンとしては、黙認するべき事なのかもしれません。

○デネブ　　初登場　電王編

通称は侑斗のお母さん。

日々侑斗に、椎茸を食べさせようと、機会を窺っている。

手作りのデネブキャンディーは一度食べてみたいです。

○アリシア・テスタロッサ　　初登場　電王編

リリカルサイドの原作キャラの一人。

今後出番が来るかどうかはいずれ分かる日が来るでしょう。

別れ際に純から貰ったお守りも、関係してくるかも……

○リニス　　初登場　電王編

アリシアが可愛がっている山猫。

猫耳は良いね……文化の極みだよ。（タンビ）

○アリシアのお母さん

電気は大切にね！

○お医者さん　　初登場　電王編

実はカエル顔という裏設定が……

え、あの人なわけ無いじゃないですか？

ハハハハハハ！

○空を飛んでいる三人　　初登場　電王編

状況を一言で説明するならば、

待てえ！ル○ン！！！的な状況ですね。

○ジーク　　初登場　電王編

他のイマジンに比べて、出番が圧倒的に少ないのに、やけに目立つのは身体が白いから、というだけではない筈。

この作品でも降臨しちゃってます。

○メカ竜　　初登場　電王編

ついに出て来たシードのパワーアップツール。
ボクです口調で頑張ります。
ガイアシステムの活躍はこれからですよ！

○仮面ライダーシードベーシック・ガイア　初登場　電王編
攻撃力が特化されたシードの強化形態。
分身体も四体出せる様になる等、確実に強くなっている。
必殺技もその特性を生かした、分身体を使った連携技が得意。
基本的な必殺技は、分身体を推力に利用したガイアチェーンスマッシュ。

○白紙のカード　初登場　電王編
純がオーナーから貰った謎のカード。

○メルト　初登場　第十三話【前編】
灰色の怪人。
恰幅の良い体格をしていて、射撃が得意だが、同時にパワーに物を

言わせた接近戦も出来る。

何か大きな企みがある様なのだが、今の所その全貌は一切不明。

○オーバー　初登場　第十三話【前編】

藍色の怪人。

幼声で何処までも軽い口調で喋る。

剣を生成して、接近戦を仕掛ける事が多い。

メルト同様現在の目的は一切不明。

○田中さん　初登場　第十三話【前編】

一言で表すのならば、不幸な人。

何時か幸せになって欲しいものです。

ホルダー時の能力は、蚊を自由に操れる事。

○海鳴連合　初登場　第十四話【前編】

海鳴市に古くからある暴走族。

実際にやっている事は、サークル活動。

○ドラゴン　　初登場　第十四話【前編】

最近出来た暴走族のチームで、此方は本当の不良集団。

現在は解散して、海鳴連合に吸収され、元メンバーも改心し、日夜真面目な?活動に励んでおります。

○金髪の男　　初登場　第十四話【前編】

チームドラゴンのリーダー。

この作品で一番の理不尽キャラである、チェイサーさんに喧嘩を売った命知らず。

ホルダー時の能力はバイクへの変形。

最後はチェイサーさんの怒りを買って爆発しました。

○ヤス　　初登場　第十四話【前編】

本名は高木康則。

海鳴連合のリーダーをしていたが、現在は引退して翠屋でバイトに励んでいる。

純を心の師匠と慕っており、旦那と呼ぶ。

純が仮面ライダーという事を知る数少ない一人でもある。
実は現役高校生です。

○ドライブチェイサー　　初登場　第十四話【後編】

怒りによってチェイサーさんがパワーアップした姿。
最高時速は、音速を超えます。
この状態になると、性格もオレサマ口調に豹変する等、ネタに溢れております。
特にジェットドライブモードは、反則も良い所……
シードとの連携必殺技で、ジェット・ドライブ・スマッシュが使えます。

○照屋雅人　　初登場　第十五話【前編】

空手道場の息子で、来人の兄。
心配症な所がありますが、良いお兄さんです。
ホルダーになりながらも、正気を保ち続けた希有な人。
本編では出なかったが、ホルダー時の能力は、触れた物質を防具に

変える事が出来る。

○照屋来人　　初登場　第十五話【前編】

弱い自分を変えたいと願った少年。

メルトから貰った試作型の暴走プログラムにより、ホルダー化してしまう。

ホルダー時の能力は、触れた物質を武器に変換出来る。

本編では、斧に変換したのみだったが、他の武器も変換可能。

ただし複雑な構造の武器は不可能。

○不良中学生達　　初登場　第十五話【前編】

来人をイジメていた不良達。

現在は空手道場で、腐った根性を叩き直されています。

○新作のレースゲーム　　初登場　第十五話【前編】

ヤスが心待ちにしていたゲーム。

結構本格派ですよ?

○成桐円射　　初登場　第十六話【前編】

役者志望のフリーター。

オーディションに落ちてしまい、気持ちが沈んでいる所を、オーバーにホルダー化されてしまう。

ホルダー時の能力は、記録として存在するものを能力ごと模写する事が出来る。

ただし形としてある物でなければ不可能。

本編では仮面ライダーシードの姿を模写して、フォルムチェンジまでしています。

○風間恵美　　初登場　第十六話【前編】

恵理の妹で、超の付く天才。

ただし何かに集中すると、他が全く見えなくなるし、話も聞きはしない。

唯我独尊とは彼女の為にある言葉かもしれないです。

更にＥＳシステムの開発設計者でもある。

本来は研究員なのだが現在は、海鳴署のホルダー対策特務課で、特別主任の役職を勤めている。

何故セーラー服を着ているのか……それは趣味なんです！！！

○ガイアブレイガン　　初登場　第十六話【後編】

ガイアモードの時にだけ使える遠近両用武器。

ガンモードとブレイドモードを使い分ける事で、多彩な戦法を可能にしている。

ブレイドモード時のベーシックガイアの必殺技は、分身体で連携して斬りつけるガイアチェーンスラッシュ。

○ＥＳシステム　　初登場　第十六話【後編】

風間恵美が新たに開発したシステム。

その全貌はこれから明かされていく予定です。

○白衣の男　　初登場　第十六話【後編】

恵美の助手。

恵美の性格からも伺い知れる、かなりの苦労人。

現在は恵美が、警察に特別主任として出向しているので、今まで以上に苦労している。

裏設定では常に胃薬を常備しています。

○セレブな人達　　初登場　第十七話【前編】

私も一度で良いので、セレブな生活を送ってみたいものです……

○コードネームボーイ&ドッグ　　初登場　第十七話【前編】

ただの悪ノリです。

特に深い意味はございません。

○風の囁き　　初登場　第十七話【前編】

奇跡を起こすと古くから噂される空色の宝石が埋め込まれたブローチ。

アリサが密かに願ったお願いが叶ったらしい？

○黒尽くめの男　　初登場　第十七話【前編】

レディーマウスである瞳の兄弟子。

ホルダー時の能力は、飛行能力と、本編未登場だが、破壊音波によ

る物質破壊。

○仮面ライダーＥ２　　初登場　第十七話【前編】

漸く出す事が出来ました、本作二号ライダーで銃使いです。

以前に映画版でデビルが出ましたが、あれは敵ライダーにカウントという事で、一つお願い致します。

そして今回のライダーは作者名がもろに反映されておりますが、これからの活躍に期待してもらえると個人的に嬉しいです。

装着者は、まさかの長谷川さん。

○ホルダーモドキ　　初登場　第十七話【前編】

人間を素体としていない、新しいタイプのホルダー。

通常のホルダー程の強さは無く、個人的な意思も持たない為、オーバーとメルトの命令を聞く事で、初めて行動を起こす。

○仮面ライダーシードスピード・ガイア　　初登場　第十七話【後編】

ガイアモードの強化形態の一つ。

速さと力に特化している。

更にスピードロッドに、ガイアブレイガンをジョイントする事で、新たな武器、ガイアロッドを生み出す。

必殺技はガイアロッドを振り回す事で、暴風を巻き起こす、ガイアツイスター。

○マシンドレッサー　　シード外伝　仮面ライダーＥ２ストーリー

Ｅ２専用バイク。

ＥＳシステム換装機構を搭載している為、通常のバイクよりも大きな車体となっている。

ボックス状のドレッサーモードへの変形が可能。

○Ｅブレス　　シード外伝　仮面ライダーＥ２ストーリー

Ｅ２の専用多目的ツール。

その機能は多岐に渡る。

○ＥＳＭ０１　　シード外伝　仮面ライダーＥ２ストーリー

対ホルダー用のＥ２専用銃。

必殺技である、ホルダーブレイクにも使用される。

〇二十代前半の男　　シード外伝　仮面ライダーＥ２ストーリー

黒尽くめの男の部下。

ホルダー時の能力は、背中の針を連続で射出する。

本編では未登場だが、設定上では、丸まって体当たりするという案も存在していた。

## キャラクターファイル第三弾（後書き）

もうそろそろ、本格的に記念企画を完成させねばと思う、今日この頃です。

## 第十八話　ズバリ解決！海鳴美少女探偵団？【前編】（前書き）

随分と早く出来たので、更新しますね。

楽しんで頂けると幸いです。

# 第十八話　ズバリ解決！海鳴美少女探偵団？【前編】

それは海鳴図書館で、本を借りた翌日の出来事だった……

「ねえ純君」

「ちょっと聞いて欲しい事があるんやけど」

俺が相変わらず翠屋でバイトをしていると、美少女四人組の内の二人。

すずかちゃんと、はやてちゃんが、何やら真剣な表情で、俺に話しかけてきた。

こんなに真剣な表情で話し掛けてくるなんて、余程大事な話があるのだろうと感じた俺は、店内の仕事を一旦ヤスに任せて、二人の席へと近づいて行く。

「どうしたの二人とも？何か思いつめた様な顔をしてるけど」

俺は話しかけながら、二人に向き合う形で、空いている席に座る。

本当にどうしたというのだろうか？

「私達は今、大きな謎に直面してるんだよ……」

「そうなんよ。この謎が解けない限り、ろくに寝る事も出来んのや……」

重々しく口を開く、すずかちゃんとはやてちゃん。

その様子はまるで何処かで見たドラマの名探偵が、犯人を突き止める為に、推理をしている様である。

「一体何があったのさ二人とも。俺で良かったら相談に乗るよ」

俺はこの時、善意から今の言葉を発した訳だが、後にこの発言を心底後悔する事になる。

先程の言葉を俺が口にした後の、二人の反応は、まさに迅速の二文字に尽きた。

「ありがとう純君！純君ならそう言ってくれると、思ってたんだよ！」

「それじゃあ、さっそく調査開始や！！！」

「はい！？」

困惑する俺を、放置したまま、先程の重々しい空気は何処かへ吹き飛び、二人は嬉々として話を進めて行く。

「あ、あのさ、調査って何を調査するのさ？」

俺はこの場の空気に流されそうになりながらも、何とか確信に迫る質問をする事に成功する。

「何って……」

「そんなん、決まってるやろ……」

しかし、やけにテンションが高くなっている二人は、俺の会心の質問に対して、最大級に嫌な予感を感じさせる含み笑いを浮かべた。

何故だろう……

この二人の笑顔は、どういうわけか、あの人の笑顔を連想させる。

「今から私達は、名探偵なんだよ！」

「そうや！そして私達は、海鳴市の住民の誰もが知りたがっとる、奴の正体を見事に突き止めるんやで！」

「えっと……その……奴って誰の事？」

「「ズバリ仮面ライダー！！！」」

俺は完全にユニゾンさせたすずかちゃんと、はやてちゃんの声で、己の耳の鼓膜を震わせながら、二つの事を思い出す。

一つ目は二人の笑顔で連想したとある人物である。

定期的に俺に厄介な頼み事をしてくる、あの雑誌記者にそっくりなのだ。

どうりで嫌な予感が、全身を駆け抜けていく筈である。

そしてもう一つ思い出した事。

二人が昨日図書館で借りた本。

あれは確か、ロンドンを舞台に主人公の名探偵が活躍する、名作の推理小説だったという事を……

だが今は取り敢えず、冷静に……

「えええええええええええええええ！！！！！？」

驚きの声を張り上げてみる事にした俺だった。

街の雑踏を高層ビルの屋上から見下ろして、二人の異形の存在が佇んでいる。

「次の実験はどうするの？メルト」

「兎に角今は、より多くのサンプルが必要だ。それに……」

「それに？」

「あの日の夜に出てきた、奴の存在も気になる」

藍色の怪人オーバーと、灰色の怪人メルトは、強い風圧に煽られながらも、全く気にした様子も見せず、平然と会話を続けている。

「ああ、あの仮面ライダーに似た黄色い奴か」

「確実に作戦を遂行させる為にも、奴の戦闘データを集める必要があるだろう」

「ふ～ん……それじゃあ、これでもう少し様子を見てみようよ」

メルトの言葉を聞いたオーバーは、そう言うと、無数の藍色の球体を、辺りにばら撒く。

ばら撒いた藍色の球体は、地面に落ちると、急速な変化を始めて、成人男性台の大きさを誇る人型へと変貌する。

「ふん。しかし数だけ居ても、仕方ないだろう」

大量のホルダーモドキを生成したオーバーに、メルトは淡々と言い放つと、銀色の球体を一つ取り出して、ビルの屋上から眼下の雑踏へと、放り投げる。

銀色の球体、暴走プログラムは、地球の重力に逆らう事無く落下を続け、交差点を足早に歩く、ビジネススーツに身を包んだ、一人の男性へと直撃して、そのまま男性の体内へと吸収されていく。

「う！？」

その身体に暴走プログラムを吸収した男性は、その場で苦しみ始めて、その身を急速に変質させる。

「きゃあああああああ！？」

男性の変化に逸早く気付いた、通行人の女性が、その異形を目の当たりにして、悲鳴を上げる。

女性の悲鳴を皮切りに、他の通行人もその異常事態に気付き、先程までの日常は、脆くも崩れ去っていく。

その異形は、大きく飛び上がると、目の前の高層ビルに張り付き、壁を軽くよじ登り、オーバーとメルトが居る屋上へと辿り着いてしまう。

「相手の実力を測るのならば、これくらいしなければ、失礼というものだろう？」

屋上によじ登って来たホルダーを眺めながら、メルトはなおも淡々とした口調で語る。

「……なるほどね」

メルトの言葉に耳を傾けながら、オーバーは、納得した様に呟きを零した。

『……それで、どうするつもりなのだマスター？』

俺が愛用しているオレンジのショルダーバックの中から、頭だけ覗かせたメカ犬が、俺の耳にだけ聞こえる小さな声で話しかけてくる。

「どうするもこうするも、何とかして二人には諦めてもらう様にしないと駄目だろ」

ご機嫌な様子で前を歩くすずかちゃんと、車椅子を爽快に転がすはやてちゃんを視界に捉えながら、俺は小声でメカ犬に返答を返す。

翠屋で二人が、仮面ライダーの正体を暴くぞ宣言をしたすぐ後に、俺は名探偵には優秀な助手が必要だという事で、外に引っ張り出された。

幸いにも残りの時間は、ヤスが引き継いでくれたし、士郎さん達も、子供の本分は遊ぶ事にあるのだから、遠慮無く、行って来て構わないと、お墨付きを貰ったので、問題は無いだろう。

ちなみにメカ犬は、準備があるからと言って、翠屋の奥に引っ込んだ際に、タッチノートで連絡して、急遽駆けつけてもらった。

『しかし、何故すずか嬢とはやて嬢は、突然仮面ライダーの正体を暴くなどと、言い出したのだ？』

メカ犬が再び、小声で俺に質問してくる。

「ああ、それは多分昨日図書館で借りた小説が原因だろうな」

『小説が？』

「昨日は俺とすずかちゃんにはやてちゃんの三人で、図書館に本を借りに行ったんだけどな、そこで二人は有名な探偵小説を借りたんだよ」

『つまり今の二人は……』

俺がそこまで言った所で、メカ犬もおおよその予測が出来たのだろう。

「そう、どうも二人して、その小説にすっかり感化されたみたいなんだよな」

苦笑いを浮かべながら、俺はメカ犬に回答を告げる。

『マスターの言いたい事は分かるのだが、それが何故仮面ライダーの正体を暴く事に結びつくのだ？』

「二人が借りた小説はな、丁度正体不明の怪盗を追うっていう、推理とアクションが合わさった様な、内容だったんだ」

『うむ』

「その物語にドップリと浸かった後は、人にもよるけど、自分も似たような体験をしてみたいと思う訳だ」

『……まさか』

「自分達の住む街に頻繁に現れる、正体不明の超人……好奇心を存分に刺激する事間違い無いよな？」

俺は一つ一つ、丁寧にメカ犬に対して、ヒントを提示していく。

もう、ここまで言えば答えに辿り着いてもおかしくないだろう。

『厄介な事になったな』

「ああ、本当にな」

俺とメカ犬は静かに溜息を吐いた。

すずかちゃんもはやてちゃんも、決してバカじゃない。

寧ろ良く考えた上で、楽しめると判断したからこそ、仮面ライダーという結果に行き着いたのだと思う。

こういった場合、普通ならば、自分も事件に巻き込まれて、本格的な推理をしてみたい何て考える人が居るかもしれないが、実際にそんな場面に陥ったら、殆どの人がまともな思考で、推理をしている心の余裕など無い筈だ。

だがこれが正義の味方相手ならどうだろうか？

相手が悪人であれば、自分に危害を加える危険性がある為、近づきたいとも思わないだろうが、正義の味方ならば、そんな心配はしなくて済む。

それに二人のスタンスは、あくまでも遊びのレベルだろう。

見つからなかったら、見つからなかったで、探検ゴッコという形で楽しめる訳だし、もしも偶然に偶然が重なり、仮面ライダーの正体を知ったとしても、周りに言い触らす様な真似をする心配も無い。

ならば何が問題か。

それは二人の現在のベクトルと、俺が助手として、二人の近くに居るという事だ。

もしもこんな状況で、ホルダーが現れたとしたら、本当に正体がばれる可能性は高くなるし、俺としては出来るだけ自分が仮面ライダーだという事実は、すずかちゃんとはやてちゃんは勿論、この場に居ないなのはちゃんと、アリサちゃんにも隠し通したい。

『所で今ワタシ達は、何処へ向かっているのだ？』

取り敢えずの現状を理解したメカ犬が、更なる質問を俺にぶつけてくる。

「今は恵理さんの住んでるマンションに向かってる最中だ。恵理さんが仮面ライダーの独占インタビューに成功したって事は、二人とも本人から以前に聞いてたらしくて、これから情報収集するらしい」

『恵理殿か……大丈夫だと思うか？』

「何がだよ」

『……本当に聴きたいのか？』

「……遠慮しとく」

『賢明な判断だな』

何というか、今日は厄日という奴なのかもしれない。

せめて今日はホルダーが現れません様にと、普段は年明け位にしか神様にお祈りしない俺が、珍しく本気で祈りを捧げたのだが、神様はそんな俺の願いを叶えてくれる事は無かった。

『キンキュウケイホウキンキュウケイホウキンキュウケイホウ……』

無情にも、俺のズボンに忍ばせたタッチノートが、過剰なまでに警報を辺りに響かせる。

「は！？」

俺はタッチノートが警報音を上げ始めた直後に、突き刺さる様な視線に気付き、正面に視線を向けた。

その視線の正体は、今や美少女名探偵と化した、すずかちゃんとはやてちゃんである。

怒りとか、そういう激しい感情では決して無い。

どちらかと言えば、こうネットリと絡みつく様な、爬虫類系の生き物に見られているみたいな感覚が、俺の五感を支配する。

「ねぇ、純君」

「たま～にそのアラームが鳴るけど、実際の所、それって何なん？」

現在探偵モードとなっている二人は、いわば好奇心に足が生えて、辺り一体を闊歩している様なものだ。

一度興味を示せば、スッポンの如く、簡単には放してくれないだろう。

「えっと、これは、その……」

「これは？」

「その？」

背中に冷や汗が張り付き、気持ち悪いと思う暇も無い程に、狼狽する俺に対して、にじり寄って来るすずかちゃんとはやてちゃん。

『マスター。急がないと不味いぞ』

更に背中からメカ犬が急かしてくる。

「こうなったら……」

ある意味追い詰められた俺は、そう呟いた後、最終手段を発動させ

る事にした。

「あああああああ！！！！！！！！あれは何だ！！！！！！！？」

俺は腹の底から、声を張り上げ、空を指差す。

「「え？」」

今だ！！！

二人の視線が一瞬だけ俺から離れた隙を突き、一気に駆け出す。

「「あああ！？」」

少し後ろの方で、すずかちゃんとはやてちゃんの声が聞こえるが、俺は振り返る事無く、全速力で駆け抜ける。

しかしこんな古典的な手に掛かるとは、やっておいてなんだが全く思ってもいなかった。

「メカ犬！ホルダー反応は何処から出てる？」

『うむ。反応はかなり近いぞ。ここから北に３００ｍ程だ！』

「本当に近いな！？」

『急ぐぞマスター！』

全力で走り抜けながら、俺はメカ犬と短く会話を交わして、現場へと急ぐ。

先程のメカ犬の言葉の通り、ホルダー反応はすぐ近くで、走り始めてから、数分程で辿り着いた。

『これは……』

「前に出てきたホルダーモドキか？」

俺達の視界には、以前にオーバーが作り出していた、人間を素体としていない藍色の身体を持つ、数十体は居るであろうホルダーモドキ達が、街の真ん中で破壊活動を行っている。

『行くぞマスター！』

「ああ！」

メカ犬の声に頷きながら、俺がズボンに忍ばせていた、タッチノートを取り出した瞬間、あまりにも聞き覚えのある声が、耳に入って来た。

「待ってよ純君！」

「私達からそう簡単に逃げられると思うんやないでえ！」

その声の主は、先程まで一緒に居た、すずかちゃんとはやてちゃんである。

俺は自分の浅はかさに、後悔する。

あの場に居たのは、すずかちゃんなのだ。

何故か通常の小学生の身体能力を遥かに凌駕するすずかちゃんを、少し隙を突いただけで、出し抜けるなんて、あまりにも考えが甘かったのである。

俺だって同年代では、かなり高い身体能力を誇っているが、所詮は常識の範疇なのだ。

はやてちゃんの車椅子を押しながらという、ハンデを背負ったとしても、充分なお釣りが来る事だろう。

だが今はそんな事で、感心している場合じゃない。

こちらに走ってくるすずかちゃんとはやてちゃんに対して、一体のホルダーモドキが狙いを定めて、襲い掛かろうとしているのだ。

「逃げろおおおおおお！！！！」

俺はそう叫びながら、全力で走り出すが、無情にもホルダーモドキの拳は、俺の大切な二人の友達へと、その猛威を振るう。

そしてもうどんなに急いでも、間に合わないそう実感した瞬間、奇跡が起きた。

俺の後方から銃声が聞こえると同時に、二人に猛威を振るおうとした、ホルダーモドキが、明後日の方向に、火花を上げながら吹き飛んだのである。

後ろを向けば、そこにはメタルイエローのボディーに青い複眼を輝かせる、一人の戦士が、右手に構えた銃の銃口から、煙を立ち上ら

せながら、白と黒の巨大なバイクに乗ってやって来た。

あれは恵美さんが、開発したＥＳシステムを搭載した、対ホルダー撃退用ユニットＥ２。

装着者は長谷川さんだ。

以前翠屋に来た、恵美さんがこれからは極秘じゃないから好きなだけ喋れるわと言って、俺に呪詛の如く、四時間もぶっ続けで説明するので、すっかりと脳裏にこびり付いてしまったのである。

「二人とも！安全な場所まで運ぶから乗って！！！」

Ｅ２がそう言いながら、すずかちゃんと、はやてちゃんを、マシンドレッサーに強引に載せて行く。

取り敢えずこれで一安心だろう。

俺は二人がＥ２に保護される様子を見て、ホッと胸を撫で下ろした。

「板橋君！君も早くこっちへ！」

すずかちゃんとはやてちゃんを乗せたＥ２が、続いて俺に声を掛ける。

「俺は反対側から自力で逃げますんで、先に二人をお願いします！」

俺はＥ２の言葉に断りの返答を返す。

実際に俺と、Ｅ２達の間には、複数のホルダーモドキが居る。

俺がマシンドレッサーに乗り込もうとしたら、すずかちゃんとはやてちゃんを乗せた状態で、戦う事になってしまう。

だからこそ、この選択は正しいと言える。

「……分かった！すぐに戻ってくるから、絶対に無事で居てくれよ！」

「はい！」

苦渋の選択の末に、俺を置いて行く事を決めたE2は、一旦この場を離れるべく、俺に声を掛けた後、マシンドレッサーのエンジンを唸らせて、走り出す。

その姿が完全に見えなくなった事を確認した俺は、改めてタッチノートを開く。

「さっきは良くも、二人を襲おうとしてくれたな！」

『許さんぞ！』

俺とメカ犬は、怒りの感情を剥き出しに叫ぶ。

そして俺は、ショルダーバッグから、メカ犬が飛び出すのを確認しながら、タッチノートのボタンを押す。

『バックルモード』

音声が流れると同時に、銀のベルトに変形したメカ犬は、そのまま

自動的に俺の腹部へと巻きつく。

「変身」

続いて音声キーワードを入力した俺は、バックルの溝にタッチノートを差し込む。

『アップロード』

差し込んだ瞬間に、白銀の光が俺の全身を包み込み、一人の戦士へと変えていく。

俺を包む光が飛散した時、中から現れたその姿は、メタルブラックのボディーに、腹部の銀のベルトから四肢へと伸びる同色のラインに、額に輝く?字の角飾り。

そして二つの赤い複眼が、存在感をより一層高めている。

まさにその姿は、仮面ライダーだ。

「それじゃあ行くぞメカ犬!」

『うむ!』

俺とメカ犬は互いに気合を入れると、ホルダーモドキ目掛けて、一気に駆け出す。

通常のホルダーと比べると、随分と動きの鈍い奴等に対して、俺は容赦無く拳と蹴りを叩き込んで行く。

その状態を何分か続けていると、俺から少し離れた位置に居たホルダーモドキが、火花を上げながら吹き飛んでいく。

原因は明らかだ。

ホルダーモドキが吹き飛んでいった方向の反対側からは、金属が擦れる様な音を響かせながら、銃を構えたE2が走ってくる。

「仮面ライダーさん！この場に男の子は居ませんでしたか？」

俺の存在に気付いたE2が、ホルダーに攻撃を加えながら訪ねてくる。

間違い無く俺の事を言っているのだろう。

「安心してくれ！その少年は俺が逃がした！」

ホルダーモドキに拳を叩き込みながら、俺はE2の質問に答える。

「良かった！」

心底安心した様に安堵の声を漏らすE2は、ホルダーモドキを掻い潜りながら、俺の背後に背を着ける距離までやって来る。

「それにしても……強くは無いが数が多いな」

「そうですね……」

互いを背に会話をしながら、俺が一気に蹴散らす為に、フォルムチェンジをしようかと考えたその時、この状況に変化が起こる。

『マスター！強いホルダー反応を近くで感知したぞ！気を付けてくれ！』

「「な！！」」

メカ犬の忠告が聴こえた直後、俺とＥ２は同時に空を見て驚愕する。

まるで森に生息する野生動物の様に、ビルの谷間を飛び移りながら、深緑の毛並みを持った、異常に腕の長いサルの様なホルダーが目の前に現れたのである。

「く！？」

そのホルダーに逸早く反応したＥ２が銃で応戦するが、ホルダーは素早い動きで、それを尽く避けていく。

「うぃきゃあああああああ！！！！」

そしてホルダーは奇声を上げながら、俺達に飛び掛ってきた。

## 第十八話　ズバリ解決！海鳴美少女探偵団？【前編】（後書き）

来週は、恐らく一話分しか更新出来ないかも知れません。

## 第十八話　ズバリ解決！海鳴美少女探偵団？【後編】（前書き）

続きになります。

楽しんで頂けると幸いです。

# 第十八話　ズバリ解決！海鳴美少女探偵団？【後編】

奇声を上げながら飛び掛ってきたホルダーは、その自身の身長程もありそうな、両腕を鞭の様に撓らせながら、振り被る。

そしてその腕を一気に振り下ろすと、ホルダーの腕はゴムの様に伸びて、俺とＥ２の胴体に巻きつく。

それはあまりにも唐突だった為、俺達は対応が追いつかず、いとも簡単にホルダーの腕に拘束されてしまう。

「な！？」

「ぐう！？」

俺とＥ２はその腕を何とか振り解こうともがくが、絡みついた腕は中々離れない。

「うぃきゃあああ！！！」

再びホルダーが奇声を上げると、俺達を腕に絡めた状態のままで、持ち上げて、そのまま一気に地面へと叩き落すという動作を何度も繰り返す。

突然に襲われる全身へのショックに、俺は声を発する事すらも忘れる。

「この！！！」

数回叩きつけられて、再度ホルダーが俺達を持ち上げた瞬間、Ｅ２が右手に持った銃の標準をホルダーに合わせて、引き金を引く。

放たれた弾丸は、見事にホルダーに命中して、確かなダメージを与える。

それと同時に、俺に絡み付いていた、ホルダーの腕の力が若干ではあるが緩む。

『今だマスター』

俺はメカ犬の声に頷きながら、力が弱まったホルダーの腕を強引に振り解き、地面に着地する。

「早さには早さで対抗だ！」

俺はそう言いながら、ベルトの右側をスライドさせて、緑色のボタンと、黄色いボタンを続け様に押していく。

『スピードフォルム』

『スピードロッド』

音声が流れると同時に、メタルブラックのボディーはライトグリーンに染め上がり、俺の右手にはこのフォルムの専用武器であるスピードロッドが握られる。

「はあああああ！！！」

俺は一気に駆け上がり、先程のＥ２の攻撃でよろけるホルダーに肉

薄すると、ロッドによる連撃を叩き込んでいく。

最後にロッドに回転を加えながら突きを喰らわせると、ホルダーはもう片方の腕に捕らえていたＥ２を放して、そのまま後方へと吹き飛ぶ。

ここで更に追撃をかけようとしたのだが、俺達の行き先を、多数のホルダーモドキ達が遮る。

後ろに視線を送ると、先程ホルダーの腕から開放されたＥ２も同様に、ホルダーモドキ達に囲まれており、戦闘を開始していた。

向こうもホルダーに追撃をかけるのは、無理そうである。

「くそ！本当に邪魔な奴等だな！」

『だが放っておく訳にも行かないだろう。今はこいつ等を倒す事に集中するぞマスター！』

「そうだな……」

俺はメカ犬との会話を簡潔に纏めると、改めてロッドを構えなおして、目の前のホルダーモドキ達に、攻撃を開始する。

俺とＥ２は数十体のホルダーモドキを相手に、乱戦を繰り広げるが、どうにも数が多い。

こいつ等を倒すならば、一度に纏めて仕留めるのが、最も効率的だろう。

……それならあの技がこの状況に、最も適している。

「俺が纏めて奴等に止めを刺す！君は奴等を俺の周りに集めてくれないか！！！」

戦いながら頭の中で一つの作戦を立案した俺は、それを実践するべく、Ｅ２に協力を仰ぐ。

「解りました！何とかやってみます！！！」

俺の声を聴いたＥ２は、周囲のホルダーモドキ達を蹴散らしながら、提示した案に承諾し、すぐさま実行に移す。

Ｅ２はホルダーモドキ達を銃で牽制しつつ、俺の周囲を旋回して、俺を中心にホルダーモドキが集まる様に誘導する。

そしてこの場に居る全てのホルダーモドキが、俺の技の射程圏内に足を踏み入れた。

『マスター！』

「ああ！」

このチャンスを逃すまいと、俺は合図を送るメカ犬の声に、呼応する様に答えて、ベルトからタッチノートを引き抜く。

俺は引き抜いたタッチノートを、スピードロッドの溝にスライドさせる。

『ロード』

音声が流れるのを確認しながら、俺はスライドさせたタッチノートを、再びベルトに差し込んだ。

『アタックチャージ』

ベルトから発生した光が、右腕のラインを通じて、スピードロッドへと集約されていく。

「こいつで決めるぜ」

輝くスピードロッドを構えた俺は、自分自身を軸として、スピードロッドを回転させる。

「スピードロッド」

回転を続けるスピードロッドから、波打つ様な真空の刃が造り出されて、その刃は、波紋の如く広がっていく。

「ウインドテイスティング」

E2の誘導によって、ウインドテイスティングの射程圏内と入っていたホルダーモドキ達は、回避する事も出来ず、真空の刃に飲み込まれて、次々と爆発を引き起こす。

俺が回転を止める頃には、周囲に居た全てのホルダーが、無へと帰っていた。

『……どうやらホルダーには逃げられた様だな』

「そうみたいだな」

ホルダーモドキを倒した事を確認した俺が、辺り一体を見回す中、メカ犬が俺に声を掛けてくる。

俺はその言葉に答えを返しつつ、一度だけ深く静かに、肺の中に吸い込んだ息を吐き出した。

「それで私のところまで来たってわけね？」

「はい！」

「そうやで！」

恵理さんの言葉に対して、すずかちゃんと、はやてちゃんは、元気に答える。

俺はその少しで、哀愁を漂わせつつ、その光景を眺めていた。

あの戦いの後、逃げたホルダーを追跡するE2に別れを告げた俺は、二人が気になったので、合流したわけなのだが……

「それじゃあ私が仮面ライダーについて、色々と教えてあげるから、何でも聞いてね」

「「お願いします！」」

どうやら何も心配する事は無かった様だ。

ほんの少し前に、あんな目に遭ったので、落ち込んでいるのではと、心配していたのだが、実際に二人に再会してみれば寧ろ、直接会ってお礼を言わなければ気がすまないと、更なる闘志を燃やして、その勢いのままに、当初の予定通り、恵理さんの自宅に突撃する事となったのである。

取り敢えず逃げたホルダーの捜索は、現在別行動を取っているメカ犬に任せて、俺は引き続き二人の助手を務めているのだが、現状で問題は何一つ解決していない。

後は質問されている恵理さんが、上手く二人の好奇心を違う場所へと誘導してくれるのを願うばかりなのだが……

「恵美から話は聞いてたけど、何か凄そうね……」

「はい。普段雑誌で紹介されている仮面ライダーさんに似ている人が、私達を助けてくれたんですよ」

「何やかメカっぽくて、黄色かったんやで」

ミイラ取りがミイラになるという言葉は、こういう時に使う言葉なのかと、俺は一つの真理へと辿り着く。

最初は二人の質問を聞いていた恵理さんだったのだが、何時の間にか話題は先程の戦いの話になり、その時の状況を詳しく聞いた恵理さんは、どうやらＥ２に強い興味を覚えたの様なのである。

その結果……

「さあ！これから独占インタビューに行くわよ！！！」

「「おー！！！」」

仮面ライダー捜索メンバーに、己の欲望に忠実な雑誌記者という、新メンバーが加わった。



「どうだい、メルト。データは充分に集まった？」

強い突風が、吹く高層ビルの屋上で、藍色の怪人オーバーが、その

突風を全く気にしない軽い口調で、隣に鎮座する相手へと話しかける。

「いや、まだ足りないな……」

話しかけられた相手、灰色の怪人メルトが、何時もの様に、淡々とした口調で、返答を返す。

「ふ～ん。それじゃあもう一回やってみる？」

オーバーはその手に、数十個にも及ぶ藍色の球体を握り込み、メルトに見せながら近所に買い物にでも行く様な調子で話す。

「同じ事をやったとしても、得られるデータに違いは無いだろう。次はアプローチを変える必要がある」

「そっか。まあ好きにやってみなよ」

「ふん。言われなくてもそうするさ……」

メルトが呟いた直後、ビルの屋上に一際強い突風が吹き荒れる。

その風が緩やかになった時、屋上には誰も居なくなっていた……

俺とすずかちゃんにはやてちゃん、そして新メンバーに迎えられた恵理さんが、目的地へと向けて街中を進んでいく。

今俺達が向かっているのは、この街の治安を日夜守っている海鳴署である。

探している仮面ライダー本人は俺なわけで、目の前に居る俺が突然消えるのも不自然だと感じた俺と恵理さんは、それとなく、所在地の判明しているＥ２を優先する様に、二人を誘導したのだ。

恵理さんの場合は、一刻も早くＥ２のインタビューに行きたいだけな気もするが……

まあ、そういう俺も、海鳴署に行けば、何かホルダーの情報が掴めるかも知れないという、下心が無いわけでは無いので、あまり人の事を言えないかもしれない。

「もうすぐ到着やな」

はやてちゃんが、興奮を隠しきれない様で、車椅子を押す俺に、顔を向けながら嬉しそうに言う。

「そうだね」

その隣ではすずかちゃんも、微笑みながらはやてちゃんに、同意を

示す。

「もうすぐだからね皆！」

談笑する俺達に、恵理さんが目的地である海鳴署に、間も無く辿り着く事を宣言した直後である。

『キンキュウケイホウキンキュウケイホウキンキュウケイホウ……』

タッチノートから警報が鳴り響く。

このタイミングで鳴れば、すずかちゃんとはやてちゃんに、また疑われる事となるのは、間違い無いが、現状はそんな余裕すらも与えてはくれなかった。

「きゃあ！？」

「な、何やの！？」

俺と恵理さんの目の前で、上空から突如深緑の体毛に覆われた人としては有り得ない長さを誇る腕が現れて、あろう事か、すずかちゃんと、はやてちゃんを絡め取ったのである。

「これは！？」

俺は突然の事態に驚愕しながらも、この腕の持ち主本体がいるであろう方向へ、視線を向けた。

「この娘達は人質だ。返して欲しければ、奴を連れて一時間以内に、船着場に来い」

すずかちゃんとはやてちゃんを絡め取ったホルダーの隣にいた灰色の怪人、メルトが俺達に淡々と要求だけを告げると、足元に構えた銃の引き金を引き、地面に着弾すると同時に発生した煙に紛れて、その姿を消してしまう。

ここまでの一連の流れは、あまりにも唐突で、俺はどうする事も出来なかった。

「奴って……誰の事なの？」

恵理さんがメルトの言葉に疑問を抱いたのか、独り言の様に呟く。

「分からないですけど、今は二人を助ける事が先決です！」

確かに俺も気にはなるが、それを考えている暇は無い。

「俺はこれからメカ犬と合流して、そのまま船着場に向かいます！」

「分かったわ。私はすぐに警察に行って、恵美にこの事を伝えるから！」

「お願いします！」

俺はタッチノートを取り出しながら、恵理さんと短く言葉を交わして、メカ犬と合流する為に、その場から急ぎ走り出した。

「ちょっと！この縄解いてくれへん！？」

「……何なんですか貴方達は？」

潮の香りが漂う海鳴の船着場の倉庫で、縄で腕と共に胴回りを縛られた二人の少女が、自分達をここへ連れてきた人外の者達に抗議の声を上げた。

倉庫は現在は使われていない、巨大な物品の保管庫の様で、少女達の声が虚しく、倉庫内全体へと響き渡る。

「ふん。お前達はただの餌だ。目的さえ果たせれば、お前達がどうなろうと構わん」

深緑と灰色の人外の内、灰色の人外、メルトが鬱陶しげにだが、律義に返答する。

「目的？」

「それに何で私達が関係あるんや！？」

「関係か……あると言えば有るし、無いといえば無い……思えば私

達がやろうとしている事は……何処か滑稽であるかもしれないな……」

普段から淡々と話すメルトだが、自分の発した言葉により、ほんの少しだけ感情の篭った声色を乗せる。

「何を言ってるんや？」

「それって……」

縛られている少女の一人。

すずかがメルトに対して、何かを質問しようとしたその時、警察のサイレン音が、倉庫内にまでその音を響かせた。

「来たか」

メルトの呟きを他所に、その音は確実に倉庫に近づき、ついにはその音源が、倉庫内へと進入する。

サイレン音を響かせながら、マシンドレッサーを駆り、倉庫内へと突入して来たのは、メタルイエローの装甲と、青い複眼型のバイザーが目を引く、ホルダー対策特務課が誇る切り札である、ＥＳシステム搭載強化ユニット、通称Ｅ２だ。

［「人質が居る状況で、銃撃戦を仕掛けるわけには行かないわ。ちゃんとＣ型装備にしてある？長谷川君」］

Ｅ２に搭載されたカメラを通して、現場をリアルタイムで確認している、恵美が通信機越しに、確認を取る。

「はい！」

Ｅ２は恵美の言葉に頷きながら、マシンドレッサーから降りて、側面部分に設けられている格納庫から、恵美が言っていた装備を取り出して両腕に装着していく。

「行け」

その様子を見ながら、メルトは一言だけホルダーに命令を下す。

「うぃきゃあああああああ！」

ホルダーはその命令に従い、奇声を上げると、Ｅ２に襲い掛かるべく飛び出した。

飛び掛るホルダーはその腕を最大限に伸ばし、倉庫の天井付近の鉄骨を掴むと、まるでターザンの様にその勢いを増して、Ｅ２へと迫り来る。

「はあ！」

しかしＥ２はホルダーの攻撃をある程度予測していたのか、直線的なホルダーの攻撃を避けきると、右腕に先程装備した新たな武器ＥＳＭ０２で斬りかかる。

ＥＳＭ０２は、両刃の剣となっており、握りの部分は小型の盾が設けられている上に、その切れ味は常に高熱を帯びている為、凄まじい威力を実現している、攻防一体を可能とした、Ｅ２の近接用専用武器だ。

高熱を帯びたＥＳＭ０２の一撃を受けたホルダーは、その身体から火花を散らして、天井近くの鉄骨から手を放してしまい、Ｅ２の付近にもがきながら転がりこむ。

それを確認したＥ２は、一旦ホルダーをその場に捨て置き、左腕に装備したＥＳＭ０４を天井に向けると、その先端部分を天井に向けて射出する。

ＥＳＭ０４は腕にはめ込むタイプの装備で、先端には小型のマシンアームが付いている特殊合金製のワイヤーを撃ち出す事が出来る、様々な場面で、多用な用途に使用出来る変幻自在な装備だ。

Ｅ２は天井にマシンアームが取り付いた事を確認すると、そのままワイヤーを巻き取りながら勢いをつけて飛び出す。

先程のホルダーがやった様に、高速で移動したＥ２は、メルトに近づいた辺りで、天井に取り付けたマシンアームを取り外すと、その勢いのままメルトへと斬りかかっていく。

「ふん！」

メルトもそれは予想の範囲内だったのだろう。

己の銃の銃身で、Ｅ２の一撃を受け止めると、メルトは大きく腕を振り被り、その力に任せた拳をＥ２の胴体へと叩き込む。

「ぐあ！？」

メルトの放った拳は狙い通り、Ｅ２の胴体を捉えて、その一撃を受

けたＥ２は後方へと吹き飛ばされる。

［「長谷川君！？」］

通信機から、恵美の不安を滲ませた声が響く。

「だ、大丈夫です！」

それなりのダメージを受けて、よろけながら立ち上がるＥ２だったが、すぐに態勢を立て直すと、通信機越しの恵美に一言だけ返答を返して、再び目の前で銃を構えるメルトに向けて走り出す。

Ｅ２はメルトの銃撃を裁きながら、接近してＥＳＭ０２による近接戦を試みる。

「うぃきゃあああ！！！」

緊迫した戦いを繰り広げる両者の耳に、奇声が届く。

先程のＥ２の一撃で昏倒していたホルダーが、そのダメージから立ち直り、この戦いに参戦するべく、Ｅ２とメルトに接近して来たのである。

「さあ、ここからどうする？現状でも分が良いとは、言い難い状態で二対一だぞ？」

メルトがＥ２を試す様な、思わせ振りな口調で話しかける。

「二対一？いや……」

メルトの発言に対して、Ｅ２が言葉を紡ごうとしたその瞬間、この現状に大きな変化が訪れる。

近づいて来るホルダーが、予想外の方向から撃ち出された数発の光弾によって吹き飛ばされたのだ。

「何だと!?」

予想外の出来事に対して、メルトが驚愕の声を上げる。

「……だから言ったでしょ？」

それに対してＥ２は仮面の下で余裕の笑みを浮かべながら、続きの言葉を口にする。

「こっちも二人居るんだって」

光弾を放った張本人、スカイブルーのボディーの上に、メタルレッドの装甲を纏った存在は、先程までメルトとホルダーが居た場所で、両腕に武器を構えて佇んでいた。

人質として捕らえていた二人の少女を、解放して後ろに匿いながら。

「二人とも！ここは危ないから早く逃げるんだ！」

「「はい」」

俺の言葉に素直に頷いた、すずかちゃんとはやてちゃんは、素直に返事を返す。

力持ちなすずかちゃんが、はやてちゃんを背負ってこの場から離れるのを見送った俺は、視線をホルダー達へと向ける。

『長谷川殿のお陰で、二人を救い出す事が出来て良かったなマスター』

「ああ」

長谷川さん、E2がメルトとホルダーの気を引いていたお陰で、俺は難なく二人を助ける事が出来た。

『それにしても、メルトの奴は最初から執拗にE2を狙っていた様に見えたのだが……マスターから聞いた奴というのは、彼の事だったのだろうか？』

『先輩！今は考えるよりも先に、この戦いを終わらせましょう！』

「そうだな」

メカーズの会話を聞きながら、俺は再びサーチバレットと、ガンモードのガイアブレイガンを構えて、ホルダーに光弾の嵐を浴びせかける。

メルトの相手を引き続きE2に任せる事にして、こっちはホルダーの相手に集中だ。

サーチ・ガイアの状態となった今の俺は、遠距離における戦闘力が格段と向上していた。

他のモードで使っていたガイアブレイガンのガンモードも、この状態が最も手に馴染む。

「そろそろ決着を着けるぞマスター！」

光弾を受け続けながら、後退していくホルダーを見て、メカ犬が合図を送る。

「悪夢はここで終わらせる」

俺は頷き、答えながら、サーチバレットの溝にガイアブレイガンを差し込んだ。

『ジョイントアップ・ガイアバレット』

新たな武器を手にした俺は、そのまま左の腰にあるレバーを引く。

『マックスチャージ』

音声と共にベルトから発生した稲妻の様な光が、右腕のラインを通

り、ガイアバレットへと集約される。

「こいつで決めるぜ」

ガイアバレットを構えた俺は、その標準をホルダーに定めて、引き金を引く。

「ガイアシューター」

引き金を引いた瞬間、ガイアバレットから発射されたエネルギーを凝縮された光線が、ホルダーを貫き爆発を引き起こす。

爆発後に居たのは、気絶したビジネススーツを着た男性だけだった。

一つの問題が解決したわけだが、もう一つの問題は、全く解決していなかった。

「さっきは危ないところを助けてもらって、ありがとうございます」

「それとは別に聞きたい事があるんですけど……」

戦いが終わった後、俺は逃げるタイミングを逃してしまい、こうして二人の美少女名探偵に、お礼を言われた後、質問攻めにされているのだ。

その後ろでは何時の間にやって来たのか、恵理さんが興奮した様子で写真を取り捲っている。

……この人に助けを期待するのは無理な話だろう。

「仮面ライダーさん！」

質問攻めとカメラのフラッシュに晒される俺に、メタルイエローのボディーを持った人物、Ｅ２が話しかけてきた。

「すいません、もう一体は取り逃がしてしまいました……」

「いや、気にする事は無い。奴は特別だ。そう簡単に決着をつけられるとは思っていないさ」

メルトを逃がしてしまった事を、申し訳無さそうに謝るＥ２に俺はフォローの言葉を投げかける。

あ！

俺はＥ２を見ていて、ある一つの妙案を思いつく。

これをやると、Ｅ２の装着者である長谷川さんに、多少の迷惑がかかるとは思ったが、この危機を乗り越える為の、尊い犠牲は仕方な

いだろうと、断腸の思いで、作戦を実行に移す。

「それよりもＥ２は、俺の代わりに彼女達のインタビューに答えてくれないか」

「はい？」

「少女達よ。彼は俺の後輩で、仮面ライダーＥ２だ。俺はこれから急ぎの用事があるから、聞きたい事は彼に聞くと良い」

「「そうなんですか！？」」

俺の説明にすずかちゃんとはやてちゃんは、瞳を輝かせる。

「え！？何言ってるんですか仮面ライダーさ「おいおい。お前も仮面ライダー何だから、俺の事は名前の方のシードで呼べって何時も言ってるだろ？」

状況が全く分からず、説明を求めるＥ２の言葉の上に、俺は有無も言わさず、新たな設定を付け加える。

「あら面白そうな話ね」

俺の話に便乗してきたのは、言うまでも無く先程から写真を撮り続けている恵理さんだ。

今回の特集は海鳴の街を守るダブルライダーよ！と叫びながら俺とＥ２にポーズを取らせて、更なる勢いでシャッターを切る。

Ｅ２の通信機越しに恵美さんの、これは良い宣伝になるわ、という

声が聞こえる事から考えると、どうやら俺はこの場で最強の姉妹の力を借りる事が出来たらしい。

悪魔に魂を売ったという言葉が、俺の脳内を一瞬だけ流れるが、俺は今だけその言葉を己の心の辞書から抹消して忘れる事にした。

人は何時だって、失くしたくない何かを守る為に、何かを捨てなくてはいけない悲しい定めを背負っているのだ。

「それじゃあ俺は、この辺で失礼するんで、後はよろしく！」

俺はＥ２の肩を一度だけ軽く叩くと、ベルトからタッチノートを取り出して、ホバーモードのチェイサーさんを呼び出す。

抗議の声が聞こえる前に、やって来たチェイサーさんに飛び乗った俺は、この騒動の原因となった小説の怪盗の様に、この場を華麗に去っていった。

長谷川さんの叫び声が地上から聴こえた気がするが、多分気のせいだろう。

あれからも暫く、二人の美少女探偵は、騒動巻き起こす事になるのだが、これは全く別の機会に話そうと思う。

取り敢えず興味は仮面ライダーから、赤毛の少女を探す事へと移動したのが、せめてもの救いだ。

ちなみに後日、二人の仮面ライダーが雑誌の表紙を飾る事となるのだが、それはもっと別の話である。

まあ、何だかんだ言って……今日の海鳴も、小さな名探偵が活躍する程に平和だ。

## 第十八話　ズバリ解決！海鳴美少女探偵団？【後編】（後書き）

次回は、執筆時間が仕事の為、確保出来ないので来週になるか、短編連作をお送りするかもしれません。

知り合いにメカ犬が主役の連続短編が見たいと言われたのですが、皆さんはどうでしょうか？

されではまた次回で！

## 第十九話　コミックヒロインデート【前編】（前書き）

お久しぶりです。

約一週間振りの更新となりますが、楽しんで頂ければ幸いです。

# 第十九話　コミックヒロインデート【前編】

何処までも広がる漆黒の闇の中で、二人の異形の存在が対峙する。

「それで、どうだったのさ」

異形の一人、藍色の怪人オーバーが幼い声で、言葉を紡ぐ。

「何のことだ？」

その言葉にもう一人の異形の存在、灰色の怪人メルトが、淡々とした口調で疑問の言葉を返す。

「ふふ、とぼけないでよ。例の黄色い奴と戦って、データを集めてたんでしょ」

感情の篭らないメルトの返答にも、気にした素振りを見せず、オーバーは自ら核心部分へと触れる。

「……ああ、その事か。確かに邪魔な存在ではあるが、あの程度であれば、脅威にはなるまい」

「それじゃあ、例の実験は予定通り進めるんだね」

「計画に変更は無い。これから行う実験は、私達の本願となる作戦にも、大きく関わってくる。失敗は許されないぞ」

「分かってるさ」

メルトの重々しい言葉とは対照的に、オーバーは軽い口調で生返事を返すと、その場から立ち去る為に移動を始める。

「何処へ行く気だ？」

「まだその実験までには、時間が掛かるんだよね？その間は暇だからさ。僕はちょっと遊びに行って来るよ」

呼び止めたメルトに振り向いてからオーバーは、そう一言だけ告げると、再び踵を返して歩き始めた。

「程々にしておけよ……」

メルトが発したその言葉は、言葉を掛けた相手に対してというよりも、この後に控えた実験に影響を及ぼすなという意味合いに聴こえる。

言葉を掛けられた相手、オーバーもそれを分かってか、振り向く事無く、軽く右腕を頭上まで上げて、ひらつかせる事で、その言葉に対しての答えとした。

漆黒の闇の中で、オーバーの立ち去っていく足音だけが、漆黒の闇が支配する静寂の中で、まるで自己主張するかの様に響き渡った。

「漫画のネタが湧かないのよ……」

「あらあら」

我が家のリビングで、一人の女性がこの世の終わりとでも言いそうな、壮絶な顔をして呟いた。

その様子を見ながらも朗らかな対応を見せる母さんは、実はかなりの大物なのではないかと、俺は内心尊敬していたりもする。

この一人で世紀末的な表情をしている女性は、澤田燐子（さわだりんこ）さん。

母さんの学生時代の同級生で、現在はプロの漫画家をしている。

腰まで届きそうな長く綺麗な黒髪に、牛乳瓶の底の様な、分厚いメガネが見事なアンバランスを形成しているが、燐子さんに限っては、やけに似合っている様に見えてしまうから不思議だ。

俺は目の前で仲良く愉快な会話を繰り広げる二人を、苦笑いを浮かべつつ眺めながら、せめて此方には話が飛び火しません様にと、中々俺の願いを聞き入れてはくれない神様に、祈りを捧げる。

というか、幾ら昔馴染みの間柄とはいえ、プロの漫画家が、自称一般的な主婦である母さんに、この様な相談事をしているのか。

昔は母さんもアシスタントとして、活動していたそうなのだ。

だが、つい最近までは、その手の事からは離れていたらしい。

そして最近になってから、燐子さんは縁あって、家で漫画を泊り込みで描いたのだが、それ以降頻繁に母さんを訪ねて来るようになったのである。

「ねえ、メー君も何か良いアイデアとか無いかしら？」

燐子さんは、母さんと話していても新たな漫画のネタは浮かばないと、早々に見切りをつけて、今度はリビングで寛いでいたメカ犬へと、その質問の矛先を向けた。

『む！漫画のアイデアか……生憎とワタシも畑違いなのでな。急に言われても思いつかないぞ』

「そっかあ……」

傍から見れば、今の一連の一人と一匹のやり取りが、既に漫画の世界を垣間見ている様に感じられるのだが、残念な事に、メカ犬はもう燐子さんの漫画のキャラクターに組み込まれているので、新鮮な情報とは言い難い。

それにしても、燐子さんはここ最近、漫画のネタに悩むと、良く我が家に訪ねてくる。

今の様に存在自体が、不思議生物である筈のメカ犬と、自然にナチュラルトークが出来る所を見れば、その頻度も窺い知れる事だろう。

それから暫く、悩み続ける燐子さんを眺めていると、玄関のチャイムを鳴らす音が聞こえて来た。

「あら、お客さんかしら？」

「多分なのはちゃんだよ。これから宿題を一緒にやろうって約束してたから」

チャイムに反応した母さんに、俺が恐らくこのチャイムを押したであろう人物の名を上げる。

その証拠に、チャイムがなった直後に、玄関の扉が開く音と、毎日の様に聴いている幼馴染の声が聞こえて来た。

「おじゃましま〜す」

もはや勝手知ったる他人の家。

なのはちゃんは、チャイムを鳴らした後、足早に玄関を通って、俺達が集まっているリビングへと入ってくる。

「純君。一緒に宿題やろ」

リビングに入った直後、俺を見つけたなのはちゃんが、今日ここに来た目的を告げる。

「うん。それじゃあ俺の部屋に「きたあああああああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！」……燐子さん？」

俺がなのはちゃんに返事を返そうとした所で、燐子さんが俺の言葉を遮り絶叫した。

「にゃあ！？」

咄嗟に俺と母さんは、その絶叫という名の音波攻撃に対して、耳を塞ぐ事で防御を図る。

燐子さんはテンションが最高潮に達すると、色々とアレな感じになったりするのだ。

板橋家の面々は、それを嫌というほどに熟知しているので、臨機応変な対応策を取る事が出来るのだが……

燐子さんとはファーストコントクトとなる、なのはちゃんは、防御が間に合わなかった様で、猫の様な悲鳴を上げた。

鼓膜が破れる様な惨事にはならないだろうが、大丈夫だろうか？

「……それで、何がきたの？燐ちゃん」

母さんが燐子さんの絶叫が終わるのを待ってから、叫んだ張本人に当然の質問をする。

ちなみに燐ちゃんというのは、燐子さんの愛称で、母さんは学生時代からずっとこの呼び方を続けているらしい。

「きたのよ！！！きたの！！！私の頭の中に、強烈なイマジネーションがビビビときたのよ！！！！！」

「だから、何がきたの？」

興奮しすぎて思考回路の一部が、別世界へ大冒険中な燐子さんを前にして、母さんはなおも朗らかに対応する。

この様な時程、母さんのマイペースが頼もしいと思えたのは、何時頃だっただろうか。

「そこの女の子！！！」

母さんの声は一切耳に届いていないのであろう。

虎がモチーフの野球チームが優勝した時の地元民並に、最高潮のテンションで、燐子さんがなのはちゃんに詰め寄る。

「私の漫画のモデルになってくれない！！！！！！！！」

「ふえ！？」

未だに鼓膜へのダメージが残る、なのはちゃんの両肩を掴みながら、燐子さんが吼えた。

今自分に何が起こっているのか、把握しきれていないでいるなのはちゃんが、驚きの声を上げるが、燐子さんのテンションボルテージは、止まる事を知らない。

もう自分が言葉を掛けた相手に対しての考慮等、考えてすらもいないだろう。

「ていうか！もうこの子に決めた！この子しか有り得ない！素敵な

出会いをありがとう！！！！！私のマイエンジェルウウウウウウウウ！！！！！！！！！！！」

最近の徹夜続きと、ストレス及び疲労の蓄積の為だろうか……

今の燐子さんは、ある意味で、輝いて見える。

……文面の一番上に、痛々しいという言葉が入る程に。

『マスターよ』

「どうした？」

なのはちゃんに抱きつく燐子さんを見ながら、メカ犬が俺に話しかけてきた。

『何かを極めるというのは、壮絶なのだな』

「いや、あれは極めるというよりも、決まっちゃってるって感じだな」

『そうか。人生とは奥が深い……』

「人類の尊厳を守る為に、言っておくが、あれはかなり特殊な部類だと思うぞ」

長谷川さんと同職の人を呼ばなければいけなさそうな、危ない表情でなのはちゃんに抱きつく燐子さんを眺めながら、俺とメカ犬は人が生きるという意味を、真剣に考えた。

「あらあら」

こんなカオスな状況でも、一人マイペースを貫く母さんは、本当に凄いと思う。

凍えるような冷たい風が吹き荒ぶ冬の海岸で、一人の青年が叫んでいた。

「海のバカヤロオオオオオオオオオ！！！！」

年の頃は二十代半ばといったところだろうか。

平均的な日本人男性の身長に、中肉中背で、短く切りそろえられた髪の毛が、見た者に清潔感を感じさせる。

特に人目を引く特徴は無いが、薄い青のフレームをしたメガネが、彼の小さなオシャレと言えるかもしれない。

街を探せば、自然と似た様な人物をすぐに見つけられる事だろう。

そんな青年が何故、こんな場所に居るのか？

そして青年は何故、海で叫んだりしたのか？

はっきり言って、昭和世代のテレビドラマなどでは、稀に見れたかもしれない場面ではあるが、現実にやっている人物は中々居ない事だろう。

大空を舞う渡り鳥の鳴き声が、更なる哀愁を漂わせている。

何故青年がこんな場所で、こんな一銭の得にもなるとも思えない珍行動を行っているのか？

それにはこの視界に広がる大海原の海底程の深さ！には到底及ばないが、それなりに深い理由がある。

彼にはもう付き合い始めてから、五年以上にもなる彼女、つまり愛するべき恋人が居た。

将来は結婚をしようと、約束した仲であり、実は今日、彼は長年連添ってきた最愛の恋人にプロポーズをした……いや、する筈だったというのが正解だろう。

彼がプロポーズをしようとした直前、彼女から、別れようと、先に話を切り出されたのである。

どうやら彼女は、青年と付き合っていながら、他の男性とも関係を持っていたらしい。

所謂二股という奴だ。

しかし青年を、一人海で叫ぶ痛い人と成らしめた理由は其処ではない。

青年は本命の彼氏では無く、俗に言うところの二号君だったのである。

この事実は、流石の青年も予想だにしていなかったのだろう。

更に話を聞けば、そのもう一人の男性とは、幼馴染であり、何度も付き合ったり別れたりを繰り返した仲らしい。

実際に青年と付き合っている間、そのもう一人の男性とは、一切の連絡すらも取っていなかった時期も確かに存在すると彼女は青年に言っていた。

そして、そんな関係を長年繰り返した果てに、青年がプロポーズを決行しようとした、丁度前日にもう一人の男性が先に彼女にプロポーズをした。

この時になって彼女は、己の本当の気持ちに初めて気付いたのである。

その幼馴染の男性が何よりも愛しいという事に。

だから彼女は、今の気持ちを正直に、青年に告げた。

彼女は真実を告げると同時に、一つの決意を決めていた。

青年からのどんな罵倒も甘んじて受けようと、自分はそれだけの事をしてしまったのだ。

それで全てが丸く収まらないかもしれないが、それが今の彼女に出来る唯一の事だった。

だが青年は、彼女を罵倒したりなどしなかった……

彼女から視線を外して、背を向けてたった一言。

「幸せになれよ」

青年はその言葉を最後に、彼女に再び振り返る事無く、その足でこの海岸までやって来たのである。

後悔は無い。

青年にとって、彼女が幸せになる事、それが一番嬉しい。

彼女と出会えた事、一緒に作ってきた思い出は、何ものにも代え難い……青年の宝物だ。

それでもやはり、何処かでやり切れない思いが確かにある。

大声で叫べば、少しは楽になるかもしれないと、ずっと海に向かって叫び続けるが、どんなに叫んでも青年の心が満たされる事は無かった。

やがて己の体力が尽きるまで叫び続けた青年は、服が汚れる事も構わずに、砂浜に大の字で寝転ぶ。

青年は緩やかに目蓋を閉じて、潮の香りを鼻腔に感じながら、枯れた声で一言だけ己自身の本音を呟いた。

その声は実際に言葉として放った青年が思うよりも、弱々しく掠れており、独り言としても認識出来ないレベルだ。

だがそれでも構わないと、青年は己の発した声に無頓着な感情を抱く。

元々誰に言うつもりは無く、無意識の内に、自然と口から零れ落ちた言葉だったからだ。

寧ろ誰にも聴かれなくて助かった。

「それが、君の夢？」

青年が一人、胸中で胸を撫で下ろした瞬間、頭上から言葉として成り立ってすら居なかった独り言に、返事が返って来た。

その声はやけに幼く高めで、男女の判断すら青年には判別できない。

何事かと閉じた目蓋を持ち上げて、青年が視界に捉えた声の主は、藍色をした異形の存在だった。

「その夢……僕が叶えてあげようか？」

突然の事態により冷静な思考が出来ない青年は、藍色の異形の問いに対して、深く考える事無く、首を一度だけ縦に振った。

「それで……どうしてこんな事になるんだ？」

日曜日の昼下がり。

季節的に冬という寒い事に変わりないが、穏やかな日差しが照らす、海鳴公園に設けられたベンチに座りながら、俺は小さな疑問を、今更ながらに呟いた。

『仕方ないだろうマスター。これも人助けと思って、協力するのが、人情ではないか』

俺の小さな呟きに対して、隣の地位位置で待機しているメカ犬が、尤もらしい言葉を返してくる。

「いや、ビジュアル的に、メカ犬が人情を説くのはどうなんだよ？」

存在が既にファンタジーなメカ犬に、常識的な意見を説かれるのが、何となく納得出来ず、俺は現在の心境も手伝い、半ば八つ当たりで反論を試みる。

『それこそ偏見というものではないかマスター。何事も目の前にある真実を、己の現実として認める事から始めるべきだと、ワタシは思うぞ』

「……最大限考慮してみるよ」

『うむ。それでこそマスターだ』

しかし敢え無く論破されてしまった。

相変わらず、俺の相棒のナチュラルトークには、頭が下がる。

「それにしても、なのはちゃん遅いな。もう待ち合わせの時間も過ぎてるのに」

俺は公園の中央に立てられている時計を見ながら、待ち合わせの時間が、既に過ぎている事を確認した。

『マスター。女性とは、常に用事の際の準備に時間を掛けるものなのだ。それぐらいは察してやらねば、なのは嬢に失礼ではないか？』

「メカ犬が言いたい事は、俺も分かるけどこれは……」

俺がメカ犬との会話を続けようとした所で、普段から聞きなれた声が、公園の出入り口付近から聞こえて来た。

「お待たせ。純君！」

聴き慣れているのは当然である。

声の主は普段から毎日の様に顔を見ている、俺の家の隣に住んでいる幼馴染の女の子なのだから。

「大丈夫だよなのはちゃん。そんなに待ってはいないからさ」

俺は急いで此方に手を振りながらやって来るなのはちゃんに、手を振り返しながら、無難なフォローを入れておく。

「本当にごめんね！今日の事をお姉ちゃんに言ったら、無理矢理こうされちゃって……」

なのはちゃんは、遅れた事を謝りながら、自分自身を見る。

今のなのはちゃんの姿を一言で表すのであれば、可愛いの一言に尽きる。

常日頃から美少女なのは、変わらないのだが、今日は何時もの三割り増しで美少女なのだ。

シンプルでありながら、本人にとても似合っていると感じさせる、白を基調とした冬服は、そのまま雑誌のモデルが出来そうな程だし、何よりも驚くべき事は、薄っすらとではあるのだが、今日のなのはちゃんは、お化粧をしている様なのである。

なのはちゃんという最高の素材を殺す事無く、薄く施されたファンデーションと、明るい色のアイシャドウに、唇に塗られたピンクの色付きリップクリームが、無限の相乗効果を生み出して、なのはちゃんの魅力を最大限に引き出していた。

「その服とお化粧って美由希さんが？」

「うん。お姉ちゃんがやってくれたの。でも……子供がお化粧するなんてやっぱり変だよね」

「そんな事無いよ。なのはちゃん、何時も以上に可愛いから」

俺の質問に対して、自信無さげな答えを返すなのはちゃんに、俺は見たままに思った真実を告げる。

確かに小学一年生にお化粧というのは、早い気もするが、美由希さんがなのはちゃんに施した化粧は、素人意見ではあるが、自然な感じで好感が持てる出来だと思う。

「そ、そうかな」

俺の言葉に照れたのか、なのはちゃんは頬を赤く染めながらも、嬉しそうに微笑む。

やはりなのはちゃんも、女の子だからだろう。

嬉しそうなその表情見ると、お化粧というものに、興味があったのかもしれないと思わずにはいられない。

「でも、ごめんねこんな事させちゃって。燐子さんは、一度ああなると、誰にも止められないからさ」

俺は今この場には居ない母さんの親友兼、今回の首謀者に代わり、謝罪の言葉をなのはちゃんに言う。

「い、良いよ！純君は気にしないで！漫画のお仕事を手伝えるなんて機会滅多に無いし！……それに私も楽しみにしてたし……」

「そっか！ありがとうなのはちゃん。所で最後辺りが、聞き取れなかったんだけど何て言ったの？」

「な、何でも無いよ！？」

ただ単に、聴き取れなかったから、聞いてみただけなのだが、なのはちゃんは、慌てた様子で、走り出して公園の出口へと向かってしまった。

何か気に障る様な言い方でも、してしまったのだろうか？

前世の頃からも含めて、やはり俺にとって女性という生命体は、多くの神秘と謎に包まれているらしい。

そんな俺が、これから世間一般で言う所の、所謂デートという事をするのだから、人生とは本当に分からないものだ。

何故俺となのはちゃんが、デートをする事になったのか。

それは我が母親である、何ともマイペースな母さんと、その親友である燐子さんの言葉が、発端となる。

燐子さんが、なのはちゃんを見つけた後、最高潮に達していたテンションを幾分下げて、ネーム作りを始めた所で、とある一つの問題が浮上したのだ。

漫画の内容の中で、なのはちゃんがモデルとなっているヒロインと、

主人公がデートをする場面が作中にあるそうなのだが、そのイメージがどうしても掴めないらしい。

漫画家ならば、妄想と出来るだけの資料を集めて、其処からは自分でどうにかしろと言いたいが、其処で思い悩む燐子さんに、俺の母さんがある助言をした。

【良い資料を作れば良いわ】

その一言に天啓を受けたかの様に、牛乳瓶程の厚さがあるレンズの下で、目を見開いた燐子さんは、再びなのはちゃんと、そして今度は俺の手まで握り締めて、危ないテンションで、お願いしてきたのである。

……まあ、それが今回のデートという訳だ。

燐子さんのお願いというのは、俺となのはちゃんのデートする風景を記録して、漫画の資料に提供して欲しいという事だった。

ちなみにその風景の記録方法とは……

『マスター。早く行かなければ、なのは嬢が行ってしまうぞ？』

考え事をしていた俺に、メカ犬が急かすように言葉を投げかける。

その背中に現在録画中となった、ビデオカメラを背中に括り付けた状態で。

途轍もなく厄介な事に、動画での資料を提出してくる様に、要求して来たのである。

恐らく燐子さんには、他意はないのだろうが、この状況まで誘導したのは、間違い無く母さんだ。

出来ればこの様な見世物的な事は、お断りしたかったのだが、板橋家にとって男性と女性には超えられないヒエラルキー的な絶壁とも言える壁が存在している。

母さんがやれと言えば、その言葉は板橋家の男性である、俺と父さんにとっては、神の言葉に等しい。

逆らう事なんて、考えるまでも無いのだ。

「はあ……分かってるよ」

俺は溜息交じりに、メカ犬に答えながら、前を走るなのはちゃんを追いかける為に、移動を開始する。

その際に俺は、ズボンのポケットから、一枚のメモを取り出して、そこに書かれた内容に目を通す。

このメモは母さんが、デートの当日に女の子をちゃんとエスコート出来る様にと渡してくれたデートプランだ。

今日はここに記された内容を、順番に撮影していく手筈となっている。

はっきり言って、断りたい事この上ないが、ヒエラルキー問題と、元よりデート経験皆無な俺にとっては、無いよりは在った方が、何かと都合が良いので、使わせてもらう事とした。

そしてデートの最初に記されていた内容は……

【駅前の喫茶店で、ラブラブカップルじゅ～ちゅを注文して二人で仲良く飲みなさい】

……最初から難易度マックスだった。

その場だけの事ならばまだしも、これを記録に残すなど、考えただけでも、頭から火を噴出しそうである。

しかし、時間と現実は残酷なものであり、なのはちゃんに追いついた俺の足は、自らある種の死刑決行場所へと、その歩を進ませて行く事となったのは、覆しようのない事実だった。

## 第十九話　コミックヒロインデート【前編】（後書き）

恐らく今回の話の後編を更新した後は、記念企画の執筆を本格的に始めるので、暫く本編をお休みして、短編を御贈り擦る事になると思います。

それではまた次回で。

## 第十九話　コミックヒロインデート【後編】（前書き）

続きになります。

そして次回以降は、暫くの間短編の更新となると思います。

それでは楽しんでいただければ幸いです。

# 第十九話　コミックヒロインデート【後編】

ラブラブカップルじゅ～ちゅ。

それは駅前の喫茶店のメニューに載っている品の一つなのだが、これを注文するには、ある一つの条件が求められる。

その条件とは、これを注文するのは、恋人同士でなければいけないという事だ。

丸みを帯びた全長約２０ｃｍ程の透明なグラスの中に、大量の細かく砕かれた氷が投入されて、それがオレンジ色の液体で満たされている。

鼻を擽る柑橘系の香りから推測すると、恐らくはオレンジジュースか、それに類するものだろう。

飾り付けに先端に添えられたカットオレンジが、その推測の信憑性を確固足るものとしている。

だが、今この場で問題となっているのは、飲み物そのものではない。

一番の懸念事項は、そのラブラブカップルじゅ～ちゅという、名付けたであろう人物のネーミングセンスを疑いたくなる飲料に、伝説の剣の如く、直立に突き立てられた、一本のストローだ。

細かく砕かれた氷の中へと、雄々しくつき立てられた底部分は、通常のストローと何も変わらないのだが、上部からは管が二股に分かれており、管はハートの形を描きながら、己を使いこなす事が出来

る使い手を今か遅しと待ち構えている。

それは無機物である筈なのに、異様な重圧を放っていた。

認めたくない事だが、その様な飲料が、現在俺の目の前で、存在している。

母さんから渡されたメモに従い、駅前の喫茶店にやって来た俺達は、ラブラブカップルじゅ～ちゅを注文して、席に座って待っていた訳だが、予想通りの、いや……ある意味ではそれ以上の代物が現れてしまったのだ。

窓際の席に座った俺と、その向かい側に同じ様に腰掛けているなのはちゃん。

なのはちゃんは、このラブラブカップルじゅ～ちゅという伝説級の代物を見た瞬間に、顔全体を真っ赤にして、固まってしまった。

それを少し離れた距離から、背中に括り付けたビデオカメラで、容赦無く撮影するメカ犬と、この伝説クラスの武器を持ってきた、アルバイトの女子高生と思われる店員さん、それ以外にも店内に居るお客さん達が、興味深そうに、此方の様子を窺っている。

見世物じゃないと、声を大にして叫びたい所だが、それをすれば、更なる見世物となるであろう事は、考えるまでも無く、分かりきっている事なので、今はこの現状の沈黙を守り続けるしかない。

だが何時までも、このままという訳には行かないという事も、重々理解している。

ここはやはり、男である俺から話を切り出すべきであろうと、覚悟を決めて口を開きかけたその時だ。

「そ、それじゃあ、折角だし飲もうよ純君」

以外な事に、硬直状態となっていた現状の沈黙を打ち破ったのは、俺の目の前に座っているなのはちゃんだった。

言葉にした内容自体はやる気に満ち溢れているのだが、その顔は衆人観衆の眼に晒されている為か、羞恥で真っ赤である。

「な、なのはちゃん。無理はしなくて良いと思うよ？」

流石にこれは無理をしているだろうと思った俺は、助け舟を出す為に、言葉を発したわけなのだが。

「無理じゃないよ！」

「え！？そ、それなら良いんだけど……」

予想外にもなのはちゃんは、俺の助け舟に対して、殆ど叫びと言えるであろう、否定の言葉を返してきた。

「じゃあ飲むよ！純君！」

しかもなのはちゃんは、その勢いに任せて、ラブラブカップルじゅ～ちゅにつき立てられたストローの二股に分かれた片方の管に口を付けると、俺にも早くするようにと、急かしてくる。

先程のなのはちゃんの声の為か、更に周りのギャラリーが俺達に注

目しているのだが、どうやら今のなのはちゃんには、俺以外の姿が映っていないようだ。

「はやふしへよ」

なのはちゃんが、ストローをくわえた状態で、何やら喋っている。

恐らくは、はやくしてとでも言っているのだろう。

周囲のギャラリーも、俺がどういった行動に出るのか、興味深そうに見詰めている。

……これは覚悟を決めねばなるまい。

「俺も男だ！」

決死の覚悟を決めた俺は、そう啖呵を切り、目の前の伝説の武器へと、真っ向から挑んで行った。

『次は何処へ行くのだマスター』

俺となのはちゃんが手を繋いで歩く中、その少し後ろから、現在カメラマンとして活躍中のメカ犬が、次のプランを聞いてくる。

「……」

『聴いているのかマスター？』

「聞いてるから、少しの間だけ黙っててくれよ……」

振り絞る様な声で、俺は何とかその一言だけを口にして、メカ犬を黙らせる。

俺となのはちゃんの顔は、先程まで居た喫茶店での出来事のせいで、いまだ顔面から炎を噴出しそうな程に耳まで真っ赤になっていた。

二人で何とかラブラブカップルじゅ～ちゅを飲み終えた俺達は、急いで店を出たのだが、この火照った顔面をクールダウンする為の時間は必要だろう。

移動の際は、デート中ずっと手を繋いでいなくてはいけない、という事なので、手を繋いで歩いているのだが、これ以上の事を今やれと言われても、現在羞恥心が限界突破してしまっている俺達には、到底無理な話である。

それから暫く、駅前の喫茶店から離れる様に歩き続けて、取り敢えずのクールダウンを果たした、俺となのはちゃんは、次のデートプランを確認するべく、母さんから手渡されたメモの二行目を読む。

【デパートのショッピングモールでお買い物】

俺は二行目の内容を読んで、心から安心した。

最初の内容が、あまりにもアレな内容だったので、次はどんな無茶振りな事が書いてあるのかと、内心不安だったのだが、案外普通の内容だったので、本当に良かった。

「あれ？これって三行目の内容に続いてるのかな？」

心底安心しきった俺の隣で、同様にメモを見ていたなのはちゃんが、疑問の声を口にする。

「え？」

その瞬間、俺の脳内に有る、危険感知センサーが見るんじゃないと、全力で訴えかけているのだが、なのはちゃんが、その三行目の内容を間髪入れずに読み上げてしまう。

「【その買い物で、彼女に恋人らしいプレゼントをすること（もしくはホッペにちゅうでも可）】だって……」

内容を口にしたなのはちゃんが、何やら恥ずかしさと期待を含んだ眼差しで俺を見てくる。

そりゃあプレゼントが貰えると分かれば、誰だって嬉しいだろう……

しかし何なんだ！？

このカッコの中に書かれている、もしくはホッペにちゅうでも可と

いうのは!?

途轍もないある種の悪意を、これを書いたであろう、自分の母親に感じた。

……まあ、これは見なかった事にして、実際の所は、デパートに行ってなのはちゃんに似合いそうなプレゼントを買えばそれで良いという事だ。

先程の喫茶店での羞恥プレイを思えば、これぐらいは許容範囲内である。

「それじゃあ、取り敢えずデパートで、買い物って事で良いかな?」

「うん」

これからの行き先を告げた俺に、二つ返事で了承したなのはちゃん。

『ちょっと待ってくれマスター』

話が纏まった所で、次の目的地に行こうとした矢先に、メカ犬が待ったの声を掛ける。

「どうしたんだよ?」

「何かあったのメー君?」

俺となのはちゃんは、突如として後方から待ったを掛けたメカ犬に、疑問の声を口にする。

『後で編集するので、マスターとなのは嬢の横顔をアップで撮らせてくれないか』

何時の間にかカメラアングルにまで、気を使い始めたメカ犬。

今の言葉はまるで、親バカなどこぞのパパさんが、子供の運動会で全力で撮る様に良く似ている気がした。

デパート内は、休日という事もあってか、多くの人込みで賑わっていた。

俺となのはちゃんも、現在はその人込みの一部となっている。

「何処か見たい所とかあるかな？なのはちゃん」

「えっと、この二階にある雑貨屋さんが見たいかな」

俺の質問に対して、なのはちゃんは案内板の一点を指差して答える。

現在俺達はデパート一階のインフォメーションコーナーで、これから行く場所を決めていた。

今俺達が来ているデパートは、海鳴市内でも大型の売り場で、とても一日で全てを見て回る事は不可能だ。

なので一階の中央出入り口付近にある、インフォメーションコーナーに設置された巨大な案内板で、これから行きたい場所を決めようという話になったのだが、なのはちゃんは見て回りたい場所があったらしく、思っていたよりも早く行き先が決定した。

俺は過去に何度か家族で、このデパートに買い物に来た事があるのだが、なのはちゃんが行きたいと言った雑貨屋に納得である。

あの雑貨屋は、女の子向けの小物が多く売られており、確かになのはちゃんでも楽しめるだろう。

ちなみに現在の俺が良く行く場所と言えば、大抵書店等だが、前世の今頃は、真っ先にオモチャ売り場へと走り、ライダーグッズを目に穴が開きそうな程眺めていた気がする。

それに比べると……まあ、性別の差というのも、多少は存在するのだろうが、なのはちゃんを含め、俺の同年代の多くは、思考が早熟だなと改めて思う。

「じゃあ、早速行こうか」

「うん」

目的地も決まった所で、俺達は再び手を繋ぐと、二階の雑貨屋へと

向かう為に、エレベーターの設置されている場所へと移動を開始する。

俺達と同様に二階を目指す他のお客さん達に混じりながら、エレベーターで二階へと無事に到着した俺達は、その足で雑貨屋へと歩を進めて行く。

「わあ……」

目的の雑貨屋に到着したと同時に、なのはちゃんが感嘆の声を上げる。

雑貨屋の外装は、ピンクを基調とした女の子向けなデザインで統一されており、店舗の入り口に設置された木製ラックの上には、安値な装飾品が、丁寧に並べられていた。

「ねえ、純君……」

「良いよ見てきて。その為にここに来たんだしさ」

宝物を見つけた時の様な輝く瞳で、見られればなのはちゃんが何を言いたいのか、言葉にしなくても大体想像が付く。

俺がなのはちゃんが言おうとしている言葉を、読んで見てくる様に言うとなのはちゃんは、他のお客さんに混じって、雑貨屋へと飛び込んで行った。

『マスター。ここで【俺の彼女はあわてんぼさんだな】と呟いてくれるか』

「うるさいんだよ。そこのカメラマン」

ついには台詞付けまで、要求してきたカメラマンなメカ犬を一言で一蹴した俺は、なのはちゃんを追って、雑貨屋の店内へと、足を踏み入れる。

なのはちゃんの姿は、店内に入ってすぐに確認出来た。

レジ前に並べられているケース内に陳列されている、小さな赤い宝石が付けられたブローチを熱心に見詰めている。

俺の個人的な意見ではあるが、なのはちゃんにとても似合いそうだ。

その様子を見ながら、俺はある事を思いつき、なのはちゃんに声を掛けようとした瞬間、この日常は突如として終わりを告げる。

最初に聞こえて来たのは、大きな爆発音。

更にその音と連動するかの様に、俺達が立っているデパート内に地震が起きた際に発生するであろう強烈な揺れが巻き起こる。

それとほぼ同時に、デパート全域に緊急事態を知らせる警報が鳴り響く。

『キンキュウケイホウキンキュウケイホウキンキュウケイホウ……』

そして周りの大きな音に掻き消されて、殆ど耳に入って来ないが、俺のズボンの中に忍ばせたタッチノートが同じく警報を鳴らしている。

『マスター！』

メカ犬の慌てた声に、俺は無言で頷く。

今このデパートで何が起こっているのかまでは、分からないが、これは間違い無くホルダーの仕業だ。

「純君！」

なのはちゃんが俺を呼びながら、すぐ隣までやって来る。

「大丈夫！？なのはちゃん！」

「う、うん。だけどこれって何が……」

最後までなのはちゃんが言葉を言い終わる前に、再び爆発音が響き、先程以上の大きな揺れが、容赦無く俺達に襲い掛かる。

「兎に角ここは危ない！安全な所に避難しよう！」

揺れが収まるのを見計らってから、俺はすぐさまこの場から離れることを提案する。

「そ、そうだね！」

なのはちゃんはこの状況下で、少々混乱状態になりながらも、力強く頷いてくれた。

俺となのはちゃんは、しっかりと手を繋ぐと、他の避難誘導により、避難を開始した人達に混じって、デパートの出口を目指す。

当然の事ながら、俺達が乗ってきたエレベーターは使う事が出来ない為、デパート隅にある下り階段を目指して歩いていたのだが、その途中にある窓から、異様に巨大な触手の様な物体が蠢いているのが見えた。

しかもその触手は、あろう事か、真っ直ぐに此方へと向かって来る。

「危ない！？」

咄嗟にそう叫んだ俺は、なのはちゃんを抱きかかえながら、がむしゃらに後ろへと飛ぶ。

その直後、先程まで俺達が居た場所には、成人男性程の太さを有した触手が、デパートの窓と壁を粉砕して深々と突き刺さった。

不幸中の幸いと言うべきか、最後尾を歩いていた俺達以外は、この触手の被害を被る事は無く、全員無事に、一階へと避難していった様だ。

「う……」

俺の胸の中でなのはちゃんが呻き声を上げる。

「なのはちゃん大丈夫！？怪我は無い！？」

気を失っているのか、微かな声を上げるだけで、それ以外の反応を示さないなのはちゃんに、俺は必死で呼びかける。

『落ち着けマスター。なのは嬢はショックで意識を失っているだけ

だ。生体反応にも何も異常は無いから安心しろ』

メカ犬が掛けてくれた言葉により、俺の全身を強張らせていた力が一気に抜けていく。

「そうか……」

俺は全身の筋肉が弛緩したのを感じた後、一言だけそう呟き、一度深呼吸してから、気絶しているなのはちゃんに、出来る限り優しい声色で、話しかける。

「なのはちゃんは、俺が絶対に守るから……」

そして俺は、気絶したなのはちゃんに告げた後、ゆっくりとメカ犬を見る。

『うむ』

俺の言いたい事を理解してくれたのだろう。

メカ犬は自身に括りつけられていたビデオカメラを取り外すと、器用に前足で録画中となっていたビデオカメラの電源を切る。

それを確認した俺は、タッチノートを取り出して、数回ボタンを押した。

『ホバーチェイサー』

タッチノートから流れる音が聞こえるとほぼ同時に、先程の触手が開けた穴から、エンジン音と、新宿二丁目的なオッサンボイスが聞

こえて来た。

『お待たせマスター』

「チェイサーさん。なのはちゃんを安全な場所まで、お願いします」

『任せといて～』

俺の要求に快く答えてくれたチェイサーさん。

そのまま俺は、気絶したなのはちゃんを、出来るだけ負荷を掛けない様にして、チェイサーさんの上に乗せて、チェイサーさんが、デパートから無事に離れていくのを見送った。

「それじゃあ行くか……メカ犬」

『うむ！』

俺はなのはちゃんを乗せたチェイサーさんを見送った後、静かな怒りを心中で燃え上がらせながら、メカ犬に問い掛けつつ、タッチノートを開き、ボタンを押した。

『バックルモード』

隣に居たメカ犬は、銀色のベルトに変形すると、自動的に俺の腹部へと巻きつく。

「変身」

続いて音声キーワードを言いながら俺は、タッチノートをベルトの

中央に設けられた溝へと差し込んだ。

『アッププロード』

ベルトから音声が流れると共に、俺の全身を白銀の光が包み込み、その姿を一人の戦士へと変えていく。

メタルブラックのボディーが輝く、仮面ライダーシードとなった俺は、すぐさまベルトの右側をスライドさせて、緑色のボタンを押す。

『スピードフォルム』

その音声が流れると同時に、メタルブラックのボディーはライトグリーンへと染め上がる。

「メカ犬。ホルダー反応は何処から来てる？」

『このデパートの屋上からだ』

「なるほどね……」

フォルムチェンジを終えた俺は、メカ犬にホルダーの現在地を確認した後、先程の触手が開けた穴から飛び出して、外壁の窪みを足場にしながら、一気に屋上へと飛び上がった。

「何だよこれ……」

屋上へと辿り着いた俺は、恐らくはホルダーであろう存在を前にして、驚愕の声を漏らす。

そのホルダーは体長が１０mを超える巨大な植物の様だった。

デパートの屋上に根を張り、胴体から伸びる触手の様なツタが、辺り一体を無差別に壊し続けている。

『来るぞマスター！！！』

突然のメカ犬の声に反応した俺は、急いで元居た場所から、転がる様に回避行動を取る。

避けた直後には、デパートの屋上に大きな音と衝撃が襲い掛かって来た。

俺が先程まで居た場所に、視線を向けると、大きな触手状のツタが、突き刺さっている。

『次が来る！』

「くっ！？」

次々と迫り来る触手状のツタを、俺は何とか辛うじて避け続けていく。

「このままじゃ埒があかないぞ！？」

『マスター。逃げているだけではどうにもならない。此方も正面から迎え撃つぞ』

「ああ！」

俺とメカ犬は攻撃を避けながら、一つの作戦を組み立て、それを実行するべく行動へと移す。

再びベルトの右側をスライドさせた俺は、赤いボタンと黄色いボタンを続け様に押していく。

『パワーフォルム』

『パワーブレード』

例の如く音声が流れると、ライトグリーンのボディーは鮮やかなクリムゾンレッドへと変化し、更にベルトから発生した光が、一つの形を形成して、赤い刀身の剣となり、俺の右手に納まる。

「はあ！」

パワーフォルムへとフォルムチェンジを果たした俺は、その右手に握られた専用武器であるパワーブレードで、迫り来る触手状のツタを斬り飛ばす。

先刻まで避けるだけだった筈の俺の反撃が意外だったのか、ホルダーの執拗なまでの攻撃が急に収まる。

これを好機と見て、一気に反撃をしようとしたのだが、そこにこの状況で最も来て欲しく無い相手の一人が姿を現した。

「困るんだよね。折角面白くなって来たんだからさ」

相変わらずの軽い口調で、喋りながら、藍色の怪人オーバーが、俺とホルダーを挟む形で、横から飛び出して来た。

「オーバー!?」

『やはり今回のホルダーも貴様の仕業か!!!』

俺はパワーブレードを構えて、臨戦態勢を取る。

「正直僕も驚いてるんだよね……ホルダーがこんなになるなんて思わなかったからさ!!!」

オーバーは己の右手に、両刃の剣を生成すると、一気に俺との間合いを詰めてきた。

「ふん!」

予め身構えていた俺は、何とかオーバーの斬撃をパワーブレードで受けきる。

『どういう事だ?』

「僕にも良く分からないけど、多分素体にした人間が言ってた事が、思っていたよりも、本気だったからじゃないかな」

メカ犬の言葉に、オーバーは俺に攻撃の手を緩める事無く答える。

「素体の人間が言っていた?」

「うん。【何もかも壊れれば良い】ってね!」

その言葉を発したオーバーは、何がおかしいというのか、無邪気な

笑い声を上げながら、更なる追撃を開始してきた。

あまりの手数に徐々に防戦一方となっていく俺だったが、ここで戦いの流れが大きく変わる。

一旦俺から距離を取ったオーバーが、再び俺に詰め寄ろうと行動を開始しようとしたその時、側面から淡い銀色の光を纏った数発の弾丸が、オーバーに命中して吹き飛ばした。

弾丸が放たれたであろう先に視線を向けると、銃を構えたメタルイエローの装甲を持つ、最近もう一人の仮面ライダーと海鳴市民に認知され始めた仮面ライダーＥ２が居た。

「シードさん！ここは僕に任せて、あのホルダーの対処をお願いします！」

Ｅ２はそう言うと、俺の元まで駆けつけた後、オーバーへと追撃を開始する。

律義にもあの雑誌が発売された後に、呼び方が仮面ライダーから、シードに変えるのは、長谷川さんらしいと、俺は内心で感心してしまう。

『マスター。ここはＥ２に任せて、ワタシ達はホルダーを！』

「分かってる！」

俺はメカ犬の言葉に、返事を返しつつベルトからタッチノートを引き抜くと、ガイアシステムを起動させる。

『ガイア・コール』

タッチノートから音声が流れると、何処からとも無く、機械的な足音が近づいて来た。

『お持たせしましたマスター！』

その足音の正体は、メタルレッドのボディーを持つ、ガイアユニットのメカ竜である。

『うわ！？今度のホルダーは随分と大きいですね～』

巨大なホルダーを視界に捉えたメカ竜が、何処か他人事の様な調子の声を上げるが、今は切羽詰った状況なのだ。

「話は後だ。メカ竜。例のアレで一気に行くぞ」

『アレですか……確かにこの状況なら、それが一番ですね。了解しました！』

俺はメカ竜と短く言葉を交わすと、一旦右手に持っていたパワーブレードを、床に突きさしてから、更にタッチノートの操作を続ける。

『スタンディングモード』

メカ竜は、音声が流れると共に、アタッチメントパーツに変形すると、俺の左手に収まる。

それから操作を終えたタッチノートを、ベルトに再び差し込んだ俺は、続けてベルトの左側をスライドさせて、アタッチメントパーツ

に変形したメカ竜を差し込んだ。

『パワー・ガイア』

差し込んだ瞬間に、俺の周りにメタルレッドの追加装甲が生成されて、クリムゾンレッドのボディーへと、次々に装着されていく。

強化されて俺に流れ込んで来るのは、今までと比べ物にならない、凄まじいまでの力だ。

俺の変化に危機感を抱いたのか、ホルダーが触手で攻撃を仕掛けてくるが、俺は床からパワーブレードを引き抜くと、ただの力任せに振るった一振りによって、襲い掛かって来た全ての触手を薙ぎ払う。

「悪夢はここで終わらせる」

ゆっくりと左腕を動かしながら、俺はベルトの左側にあるレバー下のボタンを押す。

『ガイアブレイガン』

ガイア状態特有の武器である、遠近両用武器のガイアブレイガンを生成した俺は、パワーブレードの溝へと、ガイアブレイガンを差し込んだ。

『ジョイントアップ・ガイアブレード』

ガイアブレイガンを差し込んだ事により、メタルレッドのパーツが、パワーブレードに追加されて、ここにガイアモード中最強の威力を誇る剣が誕生した。

『『マスター！』』

同時に放たれるメカーズの言葉に頷きながら、俺はベルトの左側のレバーを下に引く。

『マックスチャージ』

ベルトから発生した稲妻を彷彿とさせる光が、右腕のラインを通り、ガイアブレードへと集約される。

「こいつで決めるぜ」

俺はエネルギーが集約されたガイアブレードを構えながら、静かに腰を落とす。

ホルダーが最後の悪足掻きとばかりに、全ての触手を俺に向けて放つが、俺はそれを気に止める事無く、一気にガイアブレードを振り切る。

「ガイアブレイカー」

振り抜いた一撃から放たれるのは、凄まじいの一言に尽きる、純然たる破壊の力。

その衝撃は、ホルダーが放った触手を全て飲み込み、それだけでは飽き足らず、ホルダー本体までも飲み込むと、大きな爆発を引き起こした。

爆発後には、ホルダーの素体となったであろう、メガネの男性が気

絶していた。

「どうもこの辺りが潮時みたいだね……」

ホルダーが倒された事を、E2と戦い続けながらも確認したオーバーは、そう言うとデパートの屋上から飛び降りて逃走した。

「待て！！！」

その逃走に対して、叫んだE2は急いでオーバーを追う為に、デパートの階段を下りて行った。

『取り敢えず脅威は去った様だな……』

「ああ」

その光景を見ながら、メカ犬が声を掛けてくる。

『それでは、ワタシ達はなのは嬢の所に戻るとしようか』

「……良いのか？俺達もオーバーを追わなくて」

『今のマスターは心配で、それどころでは無いだろ』

「……ありがとうな。メカ犬」

『気にするな』

メカ犬の気遣いに俺は心から感謝した。

「あ！」

少しだけ落ち着いたところで、俺はある事を思い出す。

『どうしたマスター？』

「いや、ちょっと一つだけ用事を思い出してさ。なのはちゃんを迎えに行く前に、その用事を済ましたいんだけど」

『早く済ませるんだぞマスター』

「悪いな……」

俺はメカ犬に再び感謝の言葉を述べてから、変身を解くと、その用事を済ませる為に、デパートの中へと入って行った。



「ただいまメルト」

藍色の怪人オーバーが、暗闇が広がる空間で、先に其処に居た灰色の怪人メルトへと、軽い口調で挨拶をした。

「私は程々にしておけと言った筈なのだがな……」

それに対して、メルトは何処か呆れた感じで返答を返す。

「まあ、そう言わないでよ！面白いデータが取れたんだしさ……それはそうと、実験の方はどうなの？」

「ふん。此方は既に準備完了だ」

「そっか。これで僕達の作戦が一歩成功に近付くんだね」

「ああ。この力があれば、この世界は一瞬にして塗り変わる……」

「楽しみだね……本当に」

二人の怪人の静かに邪悪な笑い声が、暗闇の中に響き渡った。

「今日は大変な目に遭っちゃったね純君」

「う、うん。そうだね」

デパートでの戦いを終えて、用事を済ませた俺は、すぐになのはちゃんと合流したのだが、その時には既に日が暮れかけており、今は手を繋ぎながら、夕暮れの中家路に着く為、歩き続けている。

「あのさ、なのはちゃんに渡したい物があるんだけど……」

「え？」

俺はポケットからプレゼント用にラッピングされた、手のひらサイズの箱を取り出して、なのはちゃんに手渡した。

「何これ？」

「開けてみてよ」

「うん」

俺の勧めになのはちゃんは、素直に頷くと早速ラッピングを外して、箱を開けた。

「あ……これって」

箱の中身を見たなのはちゃんは、驚きの声を上げる。

「なのはちゃん。それを気にしてたみたいだからさ。俺からのプレ

ゼントって事で……貰ってくれるかな？」

なのはちゃんにあげた箱の中身は雑貨屋に売っていた、小さな赤い宝石が付けられたブローチ。

半壊して営業は停止していたのだが、雑貨屋の店員さんに無理を言って買わせて貰ったのだ。

「ありがとう純君！とっても嬉しいよ……」

そう言ってなのはちゃんは、俺がプレゼントしたブローチを、大切そうに両手で握り締めた。

良かった。

どうやらこのプレゼントは、正解だったらしい。

「それじゃあ、もう遅くなるし帰ろうか」

俺はそう言って、少し先行して歩き出す。

「ねえ純君。私のプレゼントも受け取ってくれるかな？」

横から聞こえて来たなのはちゃんの予想外の言葉に、振り返ろうとした時、俺の頬に以前にも感じた事のある、感触が蘇った。

振り向くと夕焼けの中に居ても赤くなっている顔を隠しきれないなのはちゃんの笑顔。

「い、今のって……」

「これが私からのプレゼントだよ！」

そう言ってなのはちゃんは家の在る方向へと全速力で走り出す。

『青春だなマスター』

追いかけようとしたその時、俺の足元でしみじみと呟くメカ犬の声が聞こえる。

足元では何処か含む笑いを称えながら、メカ犬が何度も頷いている……録画中のビデオカメラを背中に括り付けた状態で……

「そこのカメラマン君。大人しくその背中の物を渡して貰えるかな？」

『うむ？これは今日のワタシに母殿が与えた至上命令なのだが』

俺とメカ犬は互いの間合いを計りながら、無駄に爽やかな笑いの二重奏を奏でる。

『去らばだマスター！！！』

先に動いたのはメカ犬だった。

「待てよメカ犬！！！」

こうして俺とメカ犬による、全力全開の鬼ごっこが開始された。

結局俺はメカ犬を捕まえる事が出来ず、恥ずかしい画像データの全ては母さんの手に渡ってしまった……

まあ、このデータのお陰で燐子さんの漫画は無事に完成したのだが、俺が支払った代償があまりにも大きいと思うのは、気のせいでは無い筈だ。

そしてこの動画は、新たな騒動の火種となるのだが、それはまた別の話としか、今は言い様が無い。

取り敢えず今日の海鳴も、もうすぐクリスマスなんだなと、季節の変わり目を感じられる程には平和だ。

## 第十九話　コミックヒロインデート【後編】（後書き）

それではこれから、記念企画の執筆を本格的に開始しますので。

# プレイバックアフターストーリー【第０話編】（前書き）

どうも作者のＧ－３Ｘです。

これから暫くの間、大体一話辺りの長さが１０００文字～２０００文字に収まる短編集を御贈りさせていただきます。

基本一話完結となる短いお話になると思いますが、楽しんで頂ければ幸いです。

# プレイバックアフターストーリー【第0話編】

自室の窓から顔を出して、外の景色を眺めながら、俺は小さく息を吐き出した。

今の俺は少々ナーバスになっている。

それというのも、最近のなのはちゃん達を見ていると、あの女の子の泣き顔を時々だが思い出すからだ。

前世の俺が、その命と引き換えに助けた外国人の小さな女の子。

丁度今頃のなのはちゃん達と、同年代だからだろうか……

二度と会うことは無いのだろうが、出来れば元気でやっていて欲しいと願う。

最後に見た顔が、泣き顔だったから、余計に気になるのかもしれない。

その女の子の事も気になるのは確かだが、それ以外にも気になる事が幾つかある。

前世の友人達は今頃どうしているのかとか、一話目しか観ていない最新の仮面ライダーシリーズはどうなったのか等、考える事は何気に多い。

「はあ……」

俺はどうにもならない事に悩んでいると解りながらも、大きな溜息を吐く。

『どうしたのだマスター。外を見ながら黄昏たりして』

俺の姿を見てなのか、部屋に入って来たメカ犬が話しかけてきた。

「いや、ちょっと色々と考える事があってな……」

「うむ。何か悩みでもあるのかマスター」

「悩みって程じゃないんだけどな……まあ、似たようなもんか」

俺は背筋を伸ばしながら、気分転換しようと思い、大きく伸びをする。

伸びをする俺の隣までやって来たメカ犬は、その場に腰を下ろして、話を続けていく。

『誰にでも気落ちする時というのは、あるものだ。あまり気にしすぎていても、疲れるだけだぞ』

「そういうもんなのかね？」

メカ犬の助言とも取れる台詞に、俺は伸びをした状態で、半信半疑に答える。

『答えの出ない問いというものは、生きていれば誰にでも訪れるものだ。大切なのはその悩みを当人がどの様に受け止めて、己の何を信じて、行動していくのかではないかと、ワタシは個人的に思うぞ』

「メカ犬……」

『マスターが何を思い、何に対して悩んでいるのかは、ワタシには理解が及ぶ所ではないが、話せる事ならば話せば良い。誰かに話すだけでも自分の内にある何かに気付くキッカケ程度にはなる筈だ』

「もしかして元気付けてくれてるのか？」

俺はメカ犬に不躾な質問をする。

『ワタシはただ、真実を口にしただけだ。それにワタシが心配せずとも、マスターを心から心配する者達は、マスターの周りに大勢居るぞ。マスターが考えている以上にな……』

メカ犬はそう言うと、腰を持ち上げて、部屋を後にした。

「悪いな相棒……お陰で元気が出たよ」

直接言うのは何か恥ずかしいので、俺はメカ犬が出て行った扉に向かって、感謝の言葉を口にした。

それは何でも無い一日の、小さな出来事である。

## プレイバックアフターストーリー【第０話編】（後書き）

恐らくこの調子で進んでいくと思いますので。

## プレイバックアフターストーリー【第1話編】（前書き）

この調子で毎日更新出来たら良いなと思います。

それでは楽しんで頂けたら幸いです。

# プレイバックアフターストーリー【第1話編】

「ただいま～」

俺が学校から帰り、玄関に入り挨拶をするが、全く返事が返ってこない。

鍵も掛かっていなかったし、誰も居ないという事は無い筈なのだがと、疑問に思いながら俺は、玄関を上がってリビングに行くと、そこでは、母さんとメカ犬が、何かの大きな本らしき物を楽しそうに眺めていた。

「何やってるんだ二人して？」

「あら、お帰りなさい純」

『お勤めご苦労だったなマスター』

漸く俺が帰って来た事に気付いたのか、母さんとメカ犬は、俺に挨拶を返す。

「それで、二人してさっきから何を見てるんだよ？」

「ふふふ。メー君とお掃除してたら、懐かしい物を見つけちゃってね。一緒に見てたのよ」

『マスターの赤子時代のアルバムを、母殿と拝見していたところだ』

良く見てみれば、確かにそれはメカ犬の言う通り、本では無く、幾

つもの写真が貼り付けられた所謂アルバムという物だった。

「へ～どんなのが写ってるんだろう？」

父さんと母さんが良く写真を撮っていたのは、覚えているのだが、その現像された現物を目にする機会は無かったので、どんな写真なのか、興味が出た俺は、二人に混じって、アルバムの鑑賞会に参加する事にした。

「やっぱり、なのはちゃんと一緒に写ってる写真が多いな」

生まれた頃から、殆ど一緒に居ただけあってか、俺が中心に写ってる写真には、当然の様に赤ちゃん時代のなのはちゃんも写っている。

『そう言えば、なのは嬢はマスターの幼馴染だったな』

「そうよ。今もそうだけど、昔のなのはちゃんは、今以上に純にベッタリだったんだから」

『ほう……』

何やらメカ犬が含みのある言い方をしながら、俺を見て来るが、ここで突っ込みを入れれば、更に面倒な事になりそうな予感がしたので、俺はあえてスルーする事にして、アルバム観賞を続ける事にした。

それから数分後、板橋家の玄関からチャイム音が鳴る。

「は～い！」

母さんが、その来客に対して対応する為に、玄関先に向かう。

誰が来たのだろうと、思ったが次の瞬間、誰が来たのか、その来客の声で瞬時に理解した。

「おじゃましま～す」

来客の正体は、先程までの話題に上がっていたお隣さんの幼馴染のなのはちゃんである。

「純君！アルバムを見てるって聞いたんだけど、私も一緒に見て良いかな？」

母さんと一緒に、リビングへとやって来た、なのはちゃんが、俺が返答する前に、すぐさまアルバムを見ていた俺の隣に腰を下ろす。

その素早さは、普段から運動を苦手としている筈のなのはちゃんからは、想像出来ない程だ。

「こうして見てると、少し前の事を思い出すわ」

『どういう事だ？母殿』

「うん。二人が喋り始めた頃は、なのはちゃんってば良く純君のお嫁さんになるんだ～って言ってたからね」

『なるほど……』

俺となのはちゃんの様子を見詰めながら、母さんが少しだけ昔の事を思い出した様に、メカ犬へと語り出す。

「そういう事を言うのは止めてくれよ母さん！物心つく前の事を言われたって、なのはちゃんが困るだろ！？」

語りモードへと入った我が母親の暴走を止めるべく、俺は声を張り上げた。

何処の世界においても、母親という生き物は、こういった話題が大好きな様で、困りものである。

「……そんな事無いよ」

俺が母さんとメカ犬に抗議を続けていると、隣でなのはちゃんが、小さな声で何かを囁いた。

「え、何か言った？なのはちゃん」

「ううん。何でも無いよ！」

俺の質問に対して、なのはちゃんは首を横に振りながら、何でも無いと言う。

それにしてはなのはちゃんの頬が、何だか赤く染まっている様な気がするのは、気のせいだろうか？

『青春だな』

「青春ねえ」

何やら俺となのはちゃんを、母さんとメカ犬が生暖かい視線で見詰

めてくるが、俺は例の如く、それをスルーする事に全神経を費やして、平静を保つ事に勤める作業を全力で開始した。

それは何でも無い一日の、小さな出来事である。

## プレイバックアフターストーリー【第1話編】（後書き）

次回も短編になります。

## プレイバックアフターストーリー【第2話編】（前書き）

このまま毎日更新が続けて行ければ良いなと思います……

それでは楽しんで頂ければ幸いです。

「は！」

俺は拳に力を込めて、ホルダーを吹き飛ばす。

『今だマスター！』

ホルダーが随分と弱った事を確認したからなのか、メカ犬が俺に対して合図を送る。

「分かった！」

俺はそのメカ犬の声に答えながら、ベルトのタッチノートを引き抜き、全体図を表示させて右足部分をタッチしてから、再びタッチノートをベルトへ差し込む。

『ポイントチャージ』

ベルトから発生した光が、右足のラインを通り、俺の右足へとその光を集約させる。

「こいつで決めるぜ」

俺は腰を一旦屈めてから、反動をつけて飛び上がり、光り輝く右足をホルダーへと向けて、必殺の一撃を放つ。

「ライダーキック」

必殺の一撃は見事にホルダーを捉えて、爆発を引き起こす。
爆発後には、ホルダーの素体となっていた人が、気絶しているだけだった。

『終わったなマスター』

「ああ」

俺とメカ犬は、今回の戦いに決着が着いた事を、確認してから何時もの様に、互いに言葉を掛け合う。

『しかし運命とは解らないものだな』

「どうしたんだよ突然？」

メカ犬が、いきなり思い出したかの様に、喋り始めたので、俺は取り敢えず質問で返してみる。

『マスターは最初、あんなにも戦う事を躊躇していたというのに、今でも戦い続けているのだからな』

「……そういう事か」

メカ犬の言葉を聴き、俺はメカ犬と出合ったばかりの事を思い出してみる。

いきなり拾ったオモチャが動いたと思ったら、到底信じられない様な、話をされて、挙句の果てには、出合った初日に、命懸けで一緒に戦えだもんな……

「今だって正直に言えば、戦うのは怖いさ。俺はあの時から何も変わってない。ただのヘタレだからな」

『マスター……』

「でもな、そんな俺にだって守りたいものがあるし、目の前で誰かが苦しんでいるのなら、助けたいって思ってる」

だがそれ以上に俺が今を戦い続ける事が出来る理由、それは……

「それに俺には、何時だって一緒に戦ってくれる相棒が居るからな。そうだろ？メカ犬」

俺が今でも戦い続けられる理由は、とてもシンプルで、至って単純なのである。

共に戦ってくれる相棒が何時だって傍に居る。

だから俺は仮面ライダーとして戦えるんだ。

「まあ、そういう訳で、これからも宜しく頼むぜ相棒」

『うむ。任せろ！何せワタシは、マスターの相棒だからな！』

「そりゃあ心強いや」

俺とメカ犬は互いに軽口を言い合いながら、歩いて行く。

この出会いは偶然だったかも知れないが、今俺とメカ犬が共に戦っ

ている事を決めたのは、誰でもない俺達自身だ。

この戦いの先に、何が待っているのかは、まだ想像すら出来ないが、俺達ならば何処までも歩いていけるだろう……

何故なら俺達は、最高のコンビなのだから。

それは何でも無い一日という訳ではないが、改めて覚悟を決めた大切な日だった。

## プレイバックアフターストーリー【第2話編】（後書き）

まだまだ短編は続きますので。

## プレイバックアフターストーリー【第3話編】（前書き）

今回はあの人？の謎に迫るかもしれません。

それでは楽しんで頂ければ幸いです。

「そう言えば、チェイサーさんって、普段は何処で何をやってるんだろうな？」

俺は自室で趣味のジグソーパズルをやりながら、何となく頭の中に浮かんだ疑問を口にした。

『唐突にどうしたのだマスター？』

その隣で本物の犬以上に寛いでいたメカ犬が、俺の言葉に反応して、返答して来る。

「いや、だって気にならないか？」

普段から呼べば必ず来るから、海鳴市内の何処かに居るとは思うのだが、初めて会った時が、既に何処からとも無くやって来るというスタンスだったので、中々聞けずにいた。

『うむ。つまりマスターは、チェイサーの日常生活について、知りたいわけだな』

「もしかしてその言い方だと、メカ犬はチェイサーさんが普段何処で何をしているのか知ってるのか！？」

やれやれといった感じのメカ犬の態度には、正直言ってムカつく部分も多々あるが、俺の知りたい事を教えてくれるのであれば、その怒りも水に綺麗さっぱり流す事も可能である。

『チェイサーが普段はどうしているか。それは……』

「それは？」

無駄に溜めを作るメカ犬。

喋るのならば、焦らさずに早く話して欲しい。

『……ワタシが知るわけ無いだろう』

期待していた分の反動があまりにも大きかった為だろう。

俺はメカ犬の、あんまりにも酷い発言に対して、バラエティー番組の雛壇に居る若手芸人の様な、古典的なリアクションでズッコケてしまった。

『マスターは将来、お笑いを目指すのか？』

「……誰のせいで、こうなったと思ってんだお前は！？」

更に失礼な発言をして来るメカ犬に対して、俺は流石に怒りを剥き出しにして、文句を言う。

『まあ、それはさて置き、どうしてもチェイサーの日常が知りたいのであれば、良い方法があるぞ』

俺の怒りなど、何処吹く風という具合に話を進めて行くメカ犬。

そのあまりにもナチュラルに話を進めて行く様子に、何だか怒っている自分が馬鹿らしくなってきた。

ん？

今メカ犬があまりにも自然に、とんでもない事を言った気がするんだが……

「なあ。俺の聞き違いでなければ、今チェイサーさんの日常生活を知る良い方法があるって言わなかったか？」

俺は念の為、メカ犬に確認を取ってみる。

『うむ。確かにワタシはそう言ったぞ』

そしてメカ犬から帰って来た答えは、先程の質問を肯定する二つ返事の言葉。

「そ、それってどんな方法何なんだよ！？」

『何を言っているのだマスター？知りたいのであれば、直接本人から聞けば良いではないか』

「……それが出来ないから、気になってるんだけどな」

メカ犬の発言で、一気に上がった俺のテンションは、同様にメカ犬の発言で一気にクールダウンした。

『マスターが聴き難いと言うのであれば、ワタシが代わりに聞いても良いぞ』

「本当か！？」

だがここでまたしても、メカ犬の発言により、俺のテンションは急浮上する。

鉄は熱いうちに打てという事もあり、この会話をした次の日には、メカ犬が直接チェイサーさんに聞いてくれるという事になった。

そして翌日、メカ犬は俺との約束を守り、チェイサーさんに、例の質問を聞いてくれたのだが、帰って来た答えはこの様な内容だった。

『秘密は女を、より美しくするのよ』

の一言だったらしい。

結局の所、謎は謎のままという事で……この件は見事に迷宮入りしたのである。

それは何でも無い一日の、小さな出来事である。

## プレイバックアフターストーリー【第3話編】（後書き）

短編はまだまだ続きます

## プレイバックアフターストーリー【第４話編】（前書き）

今回は出オチというものです。

それでは楽しんでいただければ幸いです。

『着いたぞマスター』

「ああ」

俺とメカ犬は、人気の無い裏通りを抜けて、昼でもなお薄暗い空き地へとやって来ていた。

『例の物は持ってきたか？』

「心配するな。例の物は、十分な量を確保してある」

『奴の機嫌を損ねるのは、得策ではないからな』

「分かってるさ」

確かにメカ犬の言う通り、ここで奴の機嫌を損ねるのは、俺達にとって不利な状況にしかならない。

奴はこの海鳴市で一番の情報屋だ。

迂闊な事をすれば、これから先何かとやり難くなるのは明らかである。

今から俺達が行おうとしているのは、ギブアンドテイクであるビジネスだ。

そこに私情を挟む訳には行かない。

相手はプロであり、俺達は報酬を用意した依頼主。
それ以上でもそれ以下でも無いのだから……

『来たか』

奴がここに来た事に、逸早く気付いたメカ犬が呟く。
その言葉で俺にも僅かだが、この場に俺達以外の気配が、近づいてくる事を、肌で感じる事が出来た。
徐々に此方へと近づいて来る、地面の砂利を踏みつける足音。
その音は近づく度に大きさを増して行き、奴は俺達の前に姿を現す。

『早速だが、仕事の話をさせてもらおう。マスター。』

「ああ、俺達が欲しい情報は、これについてだ』

俺はメカ犬に促されながら、一枚の写真を取り出して、奴に見せる。

『ワタシ達が知りたいのは、この写真に写っている者の所在だ……分かるか？』

メカ犬の問いに奴は、何時もと何ら変わらぬ調子で、スラスラと答える。

もしかしたら、内心では焦っている時等もあるのかもしれないが、少なくても俺には、奴の顔を見ただけでその判断を下す事は出来な

い。

『流石だな。相変わらず情報が早い。マスター。報酬の準備を頼む』

「ああ」

俺はメカ犬の言葉に短く答えながら頷き、奴への報酬を懐から取り出す。

「今回は急な依頼だったからな。此方で普段の二倍の報酬を用意させてもらった……これからも頼むぞ」

懐から取り出した報酬を、俺は奴に渡した。

『急ぐぞマスター。あまり時間が無い』

「そうだな」

欲しい情報を得た俺達は、報酬を奴に渡して、今回の契約が完了した事を、確認した後、急いでこの場を離れる為に、移動を開始する。

メカ犬の言う通り、今の俺達にはあまり時間は残されていない。

目的を果たす為には急がなければならないのである。

「きゃんきゃんきゃん」

俺達の後ろから声が聞こえる。

それは奴の声援だった。

身体全体を覆う、ふわふわの白い毛並みと、つぶらな瞳。

見る愛犬家全ての心を掴んで放さないその姿は、何処からどう見ても、立派なチワワである。

その口に一本のビーフジャーキーを銜え、前足にも数本のビーフジャーキーをストックさせてはいるが。

『何時も済まないなジャック』

「それより急ぐぞメカ犬！アリサちゃんの飼い犬の一匹が迷子になってるんだから、少しでも早く見つけてやらないと」

『うむ』

俺とメカ犬は、この場にチワワのジャックのみを残して、急ぎその場を去っていった。

それは何でも無い一日の、小さな出来事である。

## プレイバックアフターストーリー【第４話編】（後書き）

まだまだまだ、短編は続きます。

# プレイバックアフターストーリー【第5話編】（前書き）

今日は普段は出番の無いあの人のお話？

それでは楽しんで頂ければ幸いです。

「ねえ、ハーレム君。ちょっと君に話したい事があるんだけど、時間良いかな？」

「保奈美さん……いい加減、その不名誉極まりない上に、周囲に誤解を招く呼び方は、止めてくれませんか」

今日はすずかちゃんに、はやてちゃんも、用事があるという事で、珍しく俺は図書館で、一人でのんびりと本を読んでいたのだが、其処へこの海鳴図書館で勤めている司書のお姉さん、保奈美さんが出会い頭に、もう俺達の間では不本意ながら、挨拶代わりとなっている言葉を吐きながらやって来た。

折角一人で読書を楽しんでいたというのに、とんでもない人に絡まれたものである。

「え、だって事実でしょう？」

俺の反論に対して、別段ふざける事も無く、素のリアクションで保奈美さんは返答して来た。

ここまで来ると、終いには出る所に出るべきかと、一瞬だが本気で考えてしまう。

「……もう良いです。そんな事より、俺に何か話しがあったんじゃ無いんですか？」

負の感情を何とか心の奥底へと押し込めた俺は、話題を変える為に、

保奈美さんに話しを振る。

「あ、そうだったわ。実は君に、お願いしたい事があるのよ」

「俺にですか？」

「ええ。この図書館で、来週から始まる予定の企画なんだけど、もっと低年齢の子供達に本を読んでもらえる様にって事で、その年代の子達にオススメする専用ブースを設置するのよ。それで同年代の君にどんな本が、読んでもらえそうか、アドバイスが欲しいの」

「はあ。まあ、それ位なら別に構いませんけど、何で俺なんですか？」

保奈美さんの頼みは別に難しい事では無いので、俺としては構わないのだが、何故それを俺に頼むのか、良く分からなかったので、聞いてみた。

「あはは……。実は君に相談する前に、すずかちゃんと、はやてちゃんにも、同じ事を言ったんだけどね……何て言うか、彼女達は、読む本のジャンルが偏ってるのよね……」

苦笑いを浮かべながら、保奈美さんが言葉を濁しつつ答えた。

俺は現在二人がご執心になっている、ジャンルの本に当たりをつける。

最近は推理系の小説を読んでいたが、これは問題無いだろう。

他にと言えば……

「風景画集に哲学書……それに何故かドロドロの恋愛小説は、小さい子向けにするっていうのわねえ……」

全てのとまでは言わないが、大抵の小学生低学年の子達が、積極的に読まないであろうラインナップの数々を口にする保奈美さん。

このラインナップは確かに、お世辞にも子供向けとは言えないかもしれない。

風景画集と哲学書はまだあの二人を見ていると、辛うじて理解も出来るのだが、ドロドロの恋愛小説まで読んでいたというのは、俺も初めて知った新事実である。

「……分かりました。俺の出来る範囲になりますが、協力しますよ」

話しを聞いていたら、何かやるせない気持ちになって来たので、俺は保奈美さんのお願いに、快く協力する事に決めた。

「本当にありがとう。助かるわ～」

「それじゃあ、今分かる範囲でタイトルを書き出しますんで、紙とペンを貸してもらえますか？」

「ええ、良いわよ」

保奈美さんから、黒のボールペンと、メモ帳を借りた俺は、自分で面白いと思った内容で、なるべく低年齢層向けな本や、クラスメイトの何人かが、良く読んでいるという本のタイトルを書き込んでいく。

粗方思いつく限りのタイトルを書き終えた後、他に良さそうな本は無いかと考えながら、何となく図書館内を見回していた俺は、童話コーナーを視線に捉えた瞬間、ある事を思い出した。

それは優しい少女と、森の妖精の穏やかで優しくも、切ない物語。

俺は幾つもの本のタイトルが書かれたメモ帳の一番下に、新たなタイトルを一つだけ追加で書き足す。

決して万人受けする内容とは言い難い内容の本かも知れないが、俺はこの本を色んな人の目に触れて欲しいと思った。

それから数日後。

保奈美さんの言う通り、海鳴図書館の一角に、低年齢者向けの、オススメ本の貸し出しブースが設置され、そのブースは連日、それなりの賑わいを見せている様である。

俺は其処に賑わう子供達を眺めながら、ほんの一瞬だけ、全てを包み込む様な優しい笑顔で微笑む、妖精が見えた様な気がした。

それは何でも無い一日の、小さな出来事である。

## プレイバックアフターストーリー【第5話編】（後書き）

アフター話で、主役にして欲しいキャラクターがいる、もしくはこの人を出してとリクエストがありましたら、お気軽にどうぞ。

修正可能な短さであれば、すぐに実現出来るかもしれませんので。

それではまた次回でお会い致しましょう。

## プレイバックアフターストーリー【第6話編】（前書き）

今回も楽しんで頂けたら幸いです。

# プレイバックアフターストーリー【第6話編】

男には覚悟を決めなければ成らない時がある。

子供だろうが老人だろうが、逃げてはいけない、逃げ場など無い、あるのは己の大切な誰かを守る為に、前へと進む勇気。

今まさに俺は、その勇気を試されようとしている。

翠屋のテーブルの一つに座る俺の、目の前に置かれたのは、食べれば極楽へと上れそうな、優しく甘い香りを漂わせる、美味しそうなシュークリーム。

普段ならば、何の問題も無い。

寧ろ食べて良いのかと聞きながらも食べてしまうという悪食さを発揮してしまいそうだ。

……これが普通のシュークリームならばの話しではあるが。

使われている材料は、至って普通、寧ろ質の良い材料を使っている。

ならば何処に問題があるのか？

それはこのシュークリームを創造した者の名を言えば、知る人は理解出来る事だろう。

高町美由希。

俺のお隣さんであり、幼馴染でもある、なのはちゃんのお姉さん。

正しく意味を理解する者ならば、戦々恐々とする言葉だ。

だが理解出来ない者も、居るかも知れない。

この言葉を理解するには、途轍もない犠牲を被る事となるのだから。

そして俺の隣には、既に一人の犠牲者が……

何時も俺の事を、純の旦那と呼んでくれる、ワイルド系なイケメン高校生アルバイターのヤスが、口から泡を吹いて、危ない痙攣を起こしている。

そして俺の目の前には、その原因となった特殊兵器。

美由希さん作のシュークリームが、次の生贄を今か遅しと待ち受けているのである。

何故この様な事態に陥ってしまったのか、順を追って説明して行こうと思う。

始まりは唐突だった。

今日も普段通り、バイトへとやって来た俺だったのだが、店の玄関前で、ある異変に気付いた。

営業時間となっている時間なので、何時もならば、誰かしらの声が漏れ聴こえる筈なのに、その音が一切聞こえなかったのだ。

その上に、妙なプレッシャーが店内から外にまで漏れ出ており、俺の本能が緊急警報を脳内に響かせる。

今思えば、ここで踵を返していれば助かったのにと、後悔するが、過ぎ去った時間は、デンライナーにでも乗らない限り、帰って来る事は無い。

俺は店内に何かの異常が起こったのだと、肌で感じつつも、その原因を知りたいという知的探究心に負けて、魔窟への扉を開いてしまった。

店内には普段通り、十数名の常連客のお客さん達が居たが、どうにも様子がおかしい。

あえて言うのであれば、バスジャックされて、凶器を犯人におちらつかせられながら、怯えている一般の乗客者といった所だろうか。

そしてその奥には、俺よりも二時間程早いシフトで、バイトに来ていた筈の、自称俺の弟子と豪語している元海鳴連合のリーダーである、現在高校生アルバイトのヤスが、白目を向いて、口から泡を吹きながら、客席の一つにもたれかかっている。

すぐ傍には、食べかけのシュークリーム。

更にお店のお客さん達の反応を見て、俺は一つの考えへと辿り着く。

俺は次の瞬間扉を閉めて、全てを無かった事にしようとしたのだが、それは途中である人物によって遮られる事となったのである。

その人物はメガネを掛けた美人の、お隣のお姉さんで、優しい笑顔

を向けて俺に微笑みかけているのだが、俺にとってその笑顔は、癒しとは程遠い物であり、後ろに禍々しい悪魔の姿すら幻視してしまった。

話しを簡潔に纏めるのであれば、美由希さんは、受験勉強の息抜きに、お菓子作りをしていたらしい。

しかも前日は、翠屋は定休日であり、美由希さんが、お菓子作りを始めたのは、桃子さんが、今日の分の仕込みをする前で、店には誰も居なかった状態だったので、止める事すら出来なかったそうだ。

運悪く士郎さんも、買出しの為に、お店を出ていたりと、偶然が偶然を呼び、美由希さんに調理する場所と時間を与えてしまったのである。

更に間が悪い事に、今回は恭也君の為ではなく、日頃から受験勉強であまり自分がお店に出られない為に、バイトを頑張ってくれている、俺とヤスに、感謝を込めて作ったというのだ。

何も知らずに食したヤスは御覧の通り、一撃で昇天である。

場の雰囲気的に、食べないという選択をすれば、美由希さんの好意を無視する事になってしまう。

もうこの時点で、恩を仇で返している様に見えてしまうかもしれないが、決してそうではない。

美由希さん自身は、自分の作った料理を美味しいと思っているし、実際に本人だけは食べても平気なのである。

だから美由希さんは、己の料理は食べた者の意識を刈り取る程の美味なのだと、信じて疑わない。

……これは試練だ。

今俺は自分の男気を試されている……というか、無理矢理にでも、そう思っていないと、心が折れそうなんです。

一度だけ深く息を吸い込み、身体全体に酸素を循環させるかの様に、ゆっくりと深く吐いた俺は、決死の覚悟を決める。

「いただきます！」

そう高らかに宣言して、目の前に置かれたシュークリームを咀嚼した俺は、頭を鈍器で殴られた衝撃を感じると共に意識を手放した。

俺がその後意識を取り戻したのは、二日後の事だった……

それは何でも無い一日の、小さな出来事である。

## プレイバックアフターストーリー【第6話編】（後書き）

現在記念作品執筆中です……

# プレイバックアフターストーリー【第7話編】（前書き）

今回も短編になりますが、楽しんで頂けたら幸いです。

「実は、また頼みたい事があるんだけど、良いかな？」

「……何だかこのやり取りも、随分と慣れた気がするのは、俺の気のせいですかね……」

翠屋で俺がバイトをしていると、定期的にやって来る、雑誌記者の恵理さん。

もう二人の間では、恒例行事となっているやり取りをしながら、恵理さんは俺の意志等無視して話を進めて行く。

まあ、恵理さんの頼み事の大半は、断ったら断ったらで、何かしら大きな被害が出る事も珍しく無いので、話を切り出された時点で、俺に拒否権などは存在しないと言える気もするが……

俺はせめてもの反抗として、大きな溜息を吐きながら、恵理さんの話に耳を傾ける。

「覚えてるとは思うんだけど、以前に月刊海鳴で、仮面ライダーの特集を組んだじゃない」

「ええ、そうですね」

恵理さんは、そう言って話を切り出す。

忘れる訳も無い。

カメラのフラッシュを浴びながら、公園のベンチで何時間も独占インタビューに答えたのだ。

その記憶は今でも、昨日の事の様に思い出せる。

「実はね。今年の購読者アンケートで、その時の特集記事が、今年の人気一位に選ばれたのよ」

「はあ……それはおめでとうございます」

どれ位の規模でアンケートを集計したのかは、良く解らないが、海鳴市内では、有名な雑誌なので、とても名誉な事には間違い無いだろう。

俺は素直に、一位に選ばれた記事の製作者である、恵理さんに祝いの言葉を送る。

「ありがとう。これも純君のお陰よ。それでここからが、本題なんだけどね。私の直接の上司から、純君にって言うか、仮面ライダーに、その記念の特別雑誌への出演依頼が来ているのよ」

「はい？」

恵理さんの予想外の発言に、俺は思わず疑問の声を上げた。

「月刊海鳴はね。年末になると毎年その年の記事のＭＶＰをアンケートで決めて、一位に選ばれる、その記事を元に、更に特集を組んだ特別版の雑誌を発刊するのよ。だから今回の頼みたい事って言うのは、私個人と言うよりも、海鳴ジャーナルからの正式な出演依頼になるんだけど、お願い出来るかな？」

説明を終えた恵理さんは、俺に対して深々と頭を下げる。

「いや、突然そんな事言われても……」

予想外の頼み事に、俺が返答を困っていると、この話しに新たな乱入者が、割り込んで来る。

『良いではないかマスター。その出演依頼、ワタシは出ても構わないぞ』

翠屋の店内の隅で、寛いでいた筈のメカ犬が、何時の間にか俺の足元までやって来ており、勝手に出演依頼を承諾してしまう。

「本当に!?」

メカ犬の言葉に、恵理さんは喜びの声を上げる。

「おいメカ犬。良いのか?そんな手軽に引き受けて……」

普段はホルダー絡みの事が多いので、拒否権すら無いが、今回は恵理さん個人ではなく、一つの会社からの正式な依頼なのである。

そんな安請け合いをして大丈夫なのだろうか?

『大丈夫だマスター。ワタシに考えがある』

ニヒルな口調で、俺の疑問に回答するメカ犬。

何を考えているのか知らないが、俺には嫌な予感しかしない……

こうして俺達は、仮面ライダーとして、雑誌を発売する事が決定してしまった。

それは何でも無い一日の、小さな出来事である。

## プレイバックアフターストーリー【第7話編】（後書き）

このお話は、後日本編で続きを公開する予定です。（多分）

# プレイバックアフターストーリー【第8話編】（前書き）

今回も短編となりますが、楽しんで頂けたら幸いです。

「「いただきます」」

俺とはやてちゃんは両手を合わせて、今俺達の目の前にある食事に対して、共に感謝の言葉を贈る。

ここは八神家の食卓であり、俺は本日はやてちゃんの夕飯に御呼ばれをした。

夏休みにはやてちゃんと知り合って以来、週の半分は、俺がはやてちゃんの家で、夕飯を食べるか、もしくは、はやてちゃんが板橋家に来るかという生活がすっかりと日常化している。

今日は俺がはやてちゃんの家に御呼ばれする日となっていたので、こうして共に食卓を囲んでいる訳だ。

「さあ、腕によりを掛けて作ったから、一杯食べてな」

「うん」

俺は、はやてちゃんの言葉に頷きながら、握った箸を、目の前のおかずへと伸ばしていく。

先程の言葉で分かると思うが、目の前にある料理は全て、はやてちゃんの手作りである。

はやてちゃんは、元々料理には興味があり、自分なりに勉強していたそうなのだが、俺の母さんに出会ってから、料理の教えを請い、

加速度的に腕を上げて、今では小学生が作ったとは思えない程のレベルに達していた。

今日の料理は、ご飯にお味噌汁と焼き魚。

根野菜の煮物にキュウリの浅漬けと、純和風のラインナップであるが、そのどれもが、とても美味しくて、箸が止まらなくなる。

「ふふ……」

俺が何度も美味しいと言いながら食事を続けていると、向かい側に座って同じく食事に興じていた、はやてちゃんが、小さな笑い声を出しながら、俺を見て微笑む。

「ん、どうかしたの？はやてちゃん」

それに気付いた俺は、一旦食事を中断して、口の中の魚の身を味わいながらも飲み込んだ後、はやてちゃんに話し掛けた。

「何かこうしてるとな……今の私は幸せなんやなって思うたんよ」

そう言ったはやてちゃんの表情は、何時もの悪戯っ子な笑顔では無く、歳不相応な儚さを含ませた笑顔だった。

「……はやてちゃん。俺はどれだけ時間が経ったとしても、何があったとしても、友達だよ」

「純君？」

「俺だけじゃなくて、なのはちゃんも、アリサちゃんに、すずかち

ゃん。それに俺の母さんや、他にもはやてちゃんを大切に思っている人は一杯居る」

だからはやてちゃんには明るく笑って欲しい。

これは何時か終わってしまう儚い幻なんかじゃなくて、これからも広がり続けていく絆だから……

「……ありがとう」

はやてちゃんが発したその声は、聴こえるかどうかの、とても小さな声音だったが、確かに俺の耳に届いた。

「ご飯冷めちゃうから、食べようよ？」

俺はそう言って再び、箸を目の前のおかずへ伸ばす。

「……全く純君は、食いしん坊なんやから」

「俺のせいじゃなくて、こんなに美味しいご飯を作る料理人がいけないんだよ」

互いにわざとらしく言った言葉に、次の瞬間、何だか笑いが込み上げて来て、食事中に行儀が悪いが、同時に二人して大きな声で笑ってしまった。

その時のはやてちゃんの笑顔は、先程の笑顔とは比べ物に成らない位に、輝きを放っていたのは、言うまでも無いだろう。

それは何でも無い一日の、小さな出来事である。

## プレイバックアフターストーリー【第8話編】（後書き）

あまり食事風景等は書く機会が無いので、書いていて新鮮でした…

…

## プレイバックアフターストーリー【第9話編】（前書き）

今回は久しぶりのあのキャラクターが……

それでは楽しんで頂けると幸いです。

## プレイバックアフターストーリー【第9話編】

【「さあ！テレビの前の皆！今日はマジカルナノネから嬉しいお知らせがあるわよ！」】

テレビ画面に、アップで映り込んだ、看護士とメイドと煌びやかなドレスを融合させたコテコテ過ぎて、逆に斬新とも言える衣装に身を包んだ、アニメ画の女の子が、不思議なポーズを決めつつ喋っている。

【「何時も応援してくれる皆も私達と一緒に、テレビに出てみませんか？」】

本編が終わりエンディングが終わった後、何の前触れも無く、画面に出て来て、そう言ったマジカルナノネは、次に耳に手を当てて、何度も頷くという仕草をした。

【「そうだよね！私も同じ気持ちだよ！だから今回は何時も応援してくれる皆から抽選で一名様に、特別収録の招待券をプレゼントしちゃいます！」】

どうやら、これもファンの参加企画の一環らしい。

マジカルナノネの下に出てきたテロップを読んでみると、抽選で選ばれた一名はマジカルナノネの収録現場に招待されて、そこでゲストキャラとしての出演もあるそうだ。

つまりこれは、ファンの人とアテレコしようという、番組側からの粋な計らいとも言えるだろう。

テロップの下には、勿論宛先も書かれている。

俺はやれやれと、背筋を伸ばしながら、マジカルナノネが次回予告に移り変わり、番組そのものが終わるのを見届けた。

「純君！！！」

先程まで俺と一緒にこの番組を見ていた、お隣の幼馴染である、なのはちゃんが、凄まじい気迫で、俺に話しかけてきた。

例の如く、高町家のリビングで、マジカルナースメイドプリンセスを仲良く、観賞していた訳なのだが、今のなのはちゃんには、普段の様子から想像出来ない程の覇気が感じられる。

それはまるで、獲物を狙う狩人。

「何を言いたいのか、大体予想が着くけど、一応聞いておくよ……どうしたの？なのはちゃん」

「葉書を書くのを手伝って！！！」

間髪いれずに帰って来た答えは、俺の予想通りのものだった。

なのはちゃんを含め、美少女四人組は、絶賛放送中の、マジカルナノネを主役とした、マジカルナースメイドプリンセスに御執心なのである。

今回の様な、またと無いチャンスを逃すとは、到底思えない。

俺は逃れない事を悟りつつ、頷くとなのはちゃんがそれを了承と受け取り、ちょっと待っててと言い残して、リビングから小走りで、出て行ってしまう。

数分と経たない間に戻ってきたなのはちゃんが、両手に抱えていたのは、大量の葉書である。

今年の夏も、心の片隅で思った事なのだが、この家にはどれだけの葉書が常備されているというのだろうか？

その日、俺に課せられたノルマは、二百枚という、過去に懸賞生活をしていたお笑い芸人さんもビックリな内容だった。

ちなみにその後日、結果はどうなったかというと、翠屋で項垂れながら落ち込む四人の美少女が居たという事で理解してもらいたい。

それは何でも無い一日の、小さな出来事である。

## プレイバックアフターストーリー【第9話編】（後書き）

華麗にスルーして頂いた方が……

# プレイバックアフターストーリー【第１０話編】（前書き）

まだまだ続く短編ですが、楽しんで頂けたら幸いです。

# プレイバックアフターストーリー【第１０話編】

「相変わらずここのコーヒーは美味しいわね」

翠屋で一人の美女が、優雅にコーヒーを飲んでいる。

その姿は何処かの名の有る絵描きが描いた芸術性に溢れた一枚の絵画の様だ。

……メイド服で無ければという言葉が、文面の一番上に書かれる事となるが。

「ちょっとお喋りしない？純君」

メイド服を着用した大和撫子、バニングス邸で働く新人メイドの瞳さんが、バイト中の俺を呼ぶ。

周りを見れば、今は喫茶店の忙しい時間帯ではなく、まばらに来ているお客さんも、普段からここに通ってくれている常連さんばかりなので、追加注文で呼ばれる心配もさほど無い。

瞳さんもそれを分かった上で、話し掛けてきたのかもしれない。

店内のカウンターで、コーヒー豆を炒っている士郎さんに、視線を向けると、笑顔で頷いた。

それは休憩にしても良いという合図だったので、俺は士郎さんの好意に甘える事にして、瞳さんが座っている席の向かい側に、お店のエプロンを外してから、腰を下ろす。

「ふふふ。ありがとう。純君」

柔らかい微笑みで、瞳さんが言葉を紡ぐ。

「いえいえ……」

取り敢えず座ってみたものの、彼女居ない暦年齢イコールプラス前世分な俺に、午後の優雅なお茶会で、大人の女性を満足させる様な話術は、当然の事ながら、持ち合わせていない。

このまま黙っている訳にもいかないので、どうしたものかと、考えを巡らせていたら、一つだけ話題に出来そうな内容が、俺の脳内にピックアップされる。

女性とお茶をしながら話す内容では無いが、他に話題も思いつかないので、俺は思いついたその話題を口にする事にした。

「あの、以前聞きそびれていた事なんですけど、瞳さんは俺の目が【あの人】に似てるって言っていましたよね。それって誰の事なんですか？」

俺の質問を聞いた瞳さんの動きが、ほんの一瞬だが彫刻の様に止まる。

其処にある感情が、動揺なのか、驚きなのか、それとも俺が考えの及ばない複雑な感情なのかは、窺い知れないが、瞳さんがこの時、何かしらの考え事をしていたのは、間違い無いだろう。

「……その人はね。私のとても大切な人」

瞳さんが硬直していたのは、本当に数瞬の間だけであり、再び動き出した時には、既に何時もの調子で優雅な雰囲気を纏いながら、語り出していた。

「大切な人？」

「ええ。私に生きる意味を教えてくれた、恩人とも言える人よ」

俺の疑問の声に対しても、瞳さんは穏やかな微笑みを浮かべながら答える。

大切な宝物を誰かに自慢する子供の様に、【あの人】の事を語る瞳さんは本当に嬉しそうだった。

「その人ってもしかして……」

俺はその言葉の続きを言う事が出来なかった。

向かいに座る瞳さんが、俺の口元に、そっと人差し指を押し当てたからである。

「このお話はここまで。折角だからもっと違うお話をしましょう」

優しい口調で諭す様な言い方をする瞳さんに、俺はそれ以上この話題を続ける事は出来ず、其処から先は、他愛も無い世間話に華を咲かせた。

それは何でも無い一日の、小さな出来事である。

## プレイバックアフターストーリー【第１０話編】（後書き）

短編形式のお話って書きやすいですね。

連続で書いていると、そう思えてなりません。

# プレイバックアフターストーリー【第１１話編】（前書き）

どうも、お久しぶりです。

作者のＧ－３Ｘです。

退院予定よりも一週間早いのですが、無事に戻ってきました。

……正直なお話をすれば、病院の受け入れ人数が既に許容量を超えていたので、自宅療養に切り替わっただけなのですけどね……

何は兎も角、本日から連載を再開致します！

それでは今回も楽しんでいただけたら幸いです。

# プレイバックアフターストーリー【第１１話編】

『何をやっているのだ？マスター』

「見て分からないか？」

背後から唐突に質問を投げ掛けてきたメカ犬に対して、俺は振り向きながら、現状の己の全身を見せて、回答とした。

まず俺が今立っている場所は、我が家の台所だ。

次に俺が現在している格好だが、頭に青いスカーフを巻き付け、それと同色の、子供用サイズに大きさを合わせた、エプロンを装着し、右手には調理用の菜箸が握られており、反対の左手には、溶き卵が流し込まれたフライパンが、ガスコンロの火に熱せられて、食欲をそそる音と匂いのハーモニーを奏でている。

この姿を見れば、大抵の人は理解出来るであろう。

足りない身長を補う為に、木製の台に乗っているのは、ご愛嬌だ。

『いや、ワタシが聞きたいのは、何故マスターが、料理をしているのかということなのだが』

「ちょっと、色々あってな・・・・・・」

俺はメカ犬の質問に対して、フライパンで熱している卵の焼き加減に注意しながら、言葉を濁しつつ答える。

メカ犬の言う通り、俺は現在料理中だ。

より正確に言うのであれば、お弁当作りの真っ最中なのである。

台所の作業台に置かれた、数々の食材に、四つの可愛いらしいデザインをたお弁当箱。

俺が作るのは、都合四人分のお弁当なのだ。

勿論このお弁当を食べるのは、お馴染みの美少女四人組である、なのはちゃん達。

何故俺がこんな事をしているのかというと、話は昨日の昼頃にまで遡る。

午前中の授業を全て終えた昼下がり、なのはちゃん、すずかちゃん、アリサちゃん、そして俺と何時ものメンバーで、屋上に集まって昼食を摂っていたのだが、其処で一つの問題が起きたのだ。

その問題を答える前に、一つ言っておきたい、普段は母さんが、俺と父さんのお弁当を作ってくれるのだが、最近続いた燐子さんの手伝いで徹夜が増えていた為か、体調を崩してしまい寝込んでしまったのである。

幸いにも医者の話では、軽い疲労と、睡眠不足が原因らしいので、数日の間ゆっくり休めば、何も問題は無いらしい。

そんな状態の母さんに、家事をさせる訳にもいかないので、医者から動いても良いと、許可が出るまでの間、俺が代わりに家事を代行する事に決めたのである。

ここまでは、偶に聞くこともある話かもしれない。

そう、ここまでは何も問題は無いのである。

問題はここからだ。

その日の昼に俺が持参したお弁当は、勿論の事ながら、俺の手作り弁当になる。

皆でお弁当を広げて食べている最中に、このメンバーの中で、唯一俺が作った弁当を食べた事のある人物、すずかちゃんが、俺の弁当を見た瞬間、口を滑らせてしまったのだ。

それを聞いたなのはちゃんとアリサちゃん対応は、素早かった……

あれよという間に、その場に居なかったはやてちゃんの分も含めて、お弁当を作る事になったのである。

次の日は土曜日で、授業も午前中だけなので、放課後すぐに八神宅に集合して昼食という事になった。

多く作るのは、面倒だと思いもするが、やはり誰かに食べてもらえると思うと、不思議と作り我意が出てくる。

俺は何だかんだ言いながらも、こうしてお弁当作りに没頭していたりするのだ。

『マスター。一つ聞いておくのだが、それは人数分作っているという認識で良いんだな？』

「ん？そうに決まってるだろ。他に頼まれている分なんて無いしな」

大体の説明を終えた俺に、メカ犬が妙な質問をぶつけてくる。

『いや、マスターが認識しているのならば、ワタシからいう事は何も無い』

俺の返答を聞いたメカ犬は、そう言った後、踵を返し台所から立ち去って行ってしまった。

「変な奴だな……」

メカ犬の背中を見つつ、そう呟いた俺は、再び調理へと集中する。

そして俺は本日の昼食時、メカ犬の質問の真意を知る事となった……

「俺の分の弁当、作り忘れた……」

消え入りそうなまでに悲痛な声が、昼の八神宅のリビングに響き渡った。

それは何でも無い一日の、小さな出来事である。

## プレイバックアフターストーリー【第１１話編】（後書き）

まだまだ続きますね。

# プレイバックアフターストーリー【第１２話編】（前書き）

本日は復帰記念という事で、二本目を連続投稿致します。

それでは楽しんでいただけたら幸いです。

# プレイバックアフターストーリー【第１２話編】

鼻腔を刺激する消毒液の薬品臭に、全体的に白を基調とした、この建物の独特の雰囲気。

やはり俺は、何度来ても慣れる事は無さそうである。

平日の午後三時を回る頃、現在俺が居るのは、ここ海鳴市でも大きな部類に入る病院。

海鳴大学病院だ。

別に俺が怪我や病気をしたという訳ではなく、ようはただの付き添いである。

数日前に体調を崩して、母さんがこの病院のお医者さんに診てもらったのだが、本人が大分身体も楽になったと言っているので、学校が終わった後、こうして一緒に再検診にやって来た訳だ。

肝心の母さんは、先程の内線放送で名前を呼ばれて、現在診察室に居る

今頃は先週も診てもらったお医者さんによる、検診を受けている頃だろう。

素人目ではあるが、顔色も良くなっていたし、何処か無理をしているという感じも無かったので、問題無いと思うのだが、やはりちゃんとしたプロの診断結果を聞くまでは、何処か不安に思う部分がある事は否めない。

俺は病院の中央受付の付近に隣接されている、外来用の待合スペースで、早く診断が終わる事を祈りながら、暇を持て余していた。

「あ！もしかして、じゅんおにいちゃん！？」

そんな折である。

聞き覚えのある女の子の声が、通路側から聞こえてきた。

しかもその声は、俺の名前を呼んできたのである。

もしかしたら、おれと同じ名前の人が居ただけ、という可能性も決してゼロでは無い。

だがその可能性は、俺が声のした方向に振り向き、その声の主を確認した瞬間、完全に砕け散った。

声の主は、その声相応な小さな女の子である。

肩に掛かる程に切り揃えられた髪を揺らし、まだ小学生にも満たないであろう、小さな女の子は、此方に近づきながら、再度俺の名前を呼ぶ。

「やっぱり、じゅんおにいちゃんです！」

「こんにちは、みかんちゃん」

俺は再度声を掛けてきた女の子、みかんちゃんに、挨拶を返した。

この女の子はみかんちゃん。

以前はやてちゃんが、検査入院をした時に、知り合った女の子で、俺もお見舞いに来た時に知り合った。

「こんにちわです」

俺の挨拶に対して、律儀にお辞儀をしながら、挨拶を返すみかんちゃん。

この場に母さんが居たら、間違い無く、その愛くるしさのあまり、容赦無く抱きしめていた事だろう。

「今日は何をしてたの？」

「はい！きょうのみかんは、びょういんのおばあちゃんたちといっしょにあそんでました！」

何気ない俺の質問に、みかんちゃんは元気一杯に答える。

見て分かるとは思うが、みかんちゃんは、特に身体が弱いとか、何かしらの病気だとか、そういう事ではない。

この病院の院長が、みかんちゃんのおじいちゃんに当たる、つまりみかんちゃんは、この病院の最高責任者の実のお孫さんなのだ。

しかも親までが両親揃って、生粋のお医者さんである為、みかんちゃんは、常日頃から病院内に居る事が多いらしい。

「じゅんおにいちゃんは、なんでびょういんにいるんですか？かの

じょのはやておねえちゃんは、いまはにゅういんしてなかったとおもいますけど？」

そう言えば、みかんちゃんは、以前にはやてちゃんが勢いで吐いた嘘を鵜呑みにしてしまい、未だにそれを真実だと、疑っていないのである。

つまりみかんちゃんの頭の中では、現在でも俺とはやてちゃんが恋人同士という事になっているのだ。

「……あのね、みかんちゃん。この前はやてちゃんが言っていた事には、色々と誤解があるんだよ」

「ごかいですか？」

流石に、このままではいけないと感じた俺は、心を鬼にして、みかんちゃんに真実を告げようとしたその時である。

「お待たせ純。待たせちゃってごめんね」

何時の間にか診察を終えた母さんが、俺に話し掛けてきた。

「あ、母さん。終わったんだ。結果はどうだったの？」

「お医者さんのお話だと、もう大丈夫だって」

一旦みかんちゃんとの会話を切り上げて、俺がした質問に対して、母さんは期待通りの言葉を返してくれた。

俺はその答えを聞いて、胸につかえていた不安が取り除かれていく

のを安堵と共に感じる。

「所で純は何をしてたの？」

「え、ああ。紹介するよ。この子はみか……あれ？」

先程まで話していた筈のみかんちゃんは、忽然とその姿を消してしまっていた。

「さっきまで其処に誰か居たの？私が向こうの通路から来た時は、純しか居なかったように見えたけど」

しかも母さんは、混乱する俺に対して、更なる追い討ちをかける様な言葉を、投下してくる。

混乱する俺の頭の中で、非科学的ではあるが、とある一つの単語が、脳裏に浮かぶ。

「……まさかね」

だが俺は、その単語をあえて言葉にする事はせずに、母さんを促し、帰路に着く事とした。

人生知らない方が、何かと幸せな事もあるものなのだと、必死に脳内で言い訳を続けながら……

それは何でも無い一日の、小さな出来事である。

## プレイバックアフターストーリー【第１２話編】（後書き）

プレイバックはまだまだ行きますよ。

## プレイバックアフターストーリー【第１３話編】（前書き）

毎日更新になります。

楽しんでいただけたら幸いです。

「はあ……何時もので」

翠屋の店内に入ってきた、幸薄そうな二十台前半の男性は、バイト中の俺にそう溜息混じりに言うと、脇目も振らずカウンター席に座った。

「かしこまりました」

俺はその一言を正式な注文として受け取り、士郎さんにオーダーを伝えてから、再びホールの仕事へと舞い戻る。

「ちょ、ちょっと純の旦那!?」

俺と同じ様に、ホールでウェイターの仕事をこなしていたヤスが、何やら慌てた様子で俺に話し掛けてきた。

「今はバイト中なんだから、その呼び方は勘弁してくれよ」

「ああ、すいません純の……じゃなくてチーフ」

慌てているヤスを宥める意味合いも込めて、なるべく緩やかに言ったのだが、それでもまだ若干の興奮状態にあるのか、ヤスは鼻息荒く俺に質問をぶつけてくる。

「さっきのやりとりって何だったんすか!?お客さんもチーフも、店長すら気持ち悪いぐらいに淡々と行動してましたけど……」

ただ単に何時もの事だから、普段通りに行動しただけなんだが、酷い言われようである。

そんな小さい事ばかり気にしていたら、この店でバイトを始めて一年が過ぎる頃には全ての毛髪が、無残に抜け落ちる事になるぞ？

「……ああ、そう言えば、ヤスがバイトに入ってる日に、田中さんがここに来るのは今日が初めてか」

「田中さん？」

俺はヤスに頷き返す。

「田中さんは普段からこの翠屋に来てくれる常連さんの一人で、何時も決まって同じ内容の注文をするから、ここの馴染みの店員には何時ものと一言しか言わないし、実際にその一言で通用するのさ」

「……そうなんですか。喫茶店って色んなお客さんが来るもんなんですね」

「まあ、田中さんの場合は、それだけじゃ無いんだけどな」

感心した様に何度も頷きながら話を俺の聞くヤスに対して、俺は苦笑いを浮かべながら最後を締めくくる。

俺とヤスの会話が一段落するのと、時を同じくして士郎さんの料理が完成した。

「それじゃあヤス。このメニューを例の田中さんの所まで、大至急で頼むぞ」

キッチンで完成された料理をトレーに乗せた俺は、そのままそれをヤスに託す。

トレーに乗っているメニューは、勿論フレンチトーストとコーヒーである。

「はい！」

俺の指示を受けたヤスは、元気良く返事をして、何の疑いもせずに、田中さんの座るカウンター席へとメニューを運んで行く。

「……何事も経験だからな」

ヤスの背中を見ながら呟いた俺の言葉に、他の常連客の人達が、皆してしみじみと頷いていたが、とうの本人であるヤスは全く気付かなかった。

それから約三十分後であろうか。

表情にも色濃く疲れが見て取れるヤスが、俺の元へと何とか無事に帰還を果たした。

「どうだった？田中さんの洗礼は」

「……あれはもう、愚痴というレベルを超えた精神攻撃の一種だと俺は思いますよ」

余程堪えたのか、ヤスは肩を落としながら、呟く様にして答える。

どうやらヤスも、これで田中さんの恐ろしさを、肌で感じる事が出来た様だ。

最近は聞き役は俺が専門となりつつあったので、この辺りでヤスにも対応出来る様になって欲しいと思っていた所だったのである。

取り敢えず初めての田中さんの相手で、根を上げなかったヤスならば、これからも田中さんの対応を任せても大丈夫だろうと、俺は一人納得した。

まあ、その直後、田中さんが例の如く……

「失礼しましたあああああああ！！！！！！！！！」

と叫びながら、フレンチトーストとコーヒーの代金である８４０円を置いて翠屋から走り去ってしまったのも、もはや慣れ親しんだ光景と言って遜色無いだろう。

それは何でも無い一日の、小さな出来事である。

## プレイバックアフターストーリー【第１３話編】（後書き）

まだまだ続きます。

## プレイバックアフターストーリー【第１４話編】（前書き）

今日も更新です。

楽しんでいただけたら幸いです。

# プレイバックアフターストーリー【第１４話編】

光があるならば、必ず影が存在する……

世界とは何時だって、バランスの上に成り立っていると、昔の偉い人が言っていたが、俺も何となくそう言いたい気持ちは分かる様な気がする。

それは何にでも言える事で、この基本的に治安の安定している海鳴市においても、例外ではない。

治安の良い表街道を一つ外れれば、裏の顔がひょっこりとその輪郭を覗かせるのだ。

俺は今現在、この海鳴市の裏の顔とも言える街道において、重要な任務を遂行中なのである。

『本当にやる気なのかマスター……』

「ああ。もう、これ以外に手は無いんだ」

物陰に隠れている俺の足元で、最終確認するメカ犬に対して、俺は己の覚悟を言葉にした。

正直言えば、俺だってこんな事はしたくは無かったが、これ以外に、もう手段は残されていないのである。

これは必要悪だと自身に言い聞かせながら、俺はメカ犬を引き連れて、尾行を開始した。

「チェイサーさんの謎は、俺が必ず解き明かしてみせる」

前世の頃にお隣に住んでいた、お爺ちゃんの名に懸けて！

『ワタシには、マスターがノリで行動している様にしか見えないのだがな……』

メカ犬の突っ込みを無視しつつ、俺はチェイサーさんを見失わない様に、追いかける。

幸いにもチェイサーさんは、人通りのある街道を徐行しながら進んでいる為、徒歩の俺達でも見失わずに済んでいた。

だが今回の相手は、あのチェイサーさんである。

一瞬の油断が命取りとなるかもしれない。

いざという時は、シードのスピードフォルムとサーチフォルムを使う事も辞さない覚悟だ。

メカ犬は大袈裟だと呆れるが、それだけの覚悟と本気を見せなければ、チェイサーさんの相手は、到底務まらないだろう。

ターゲットであるチェイサーさんにばれる事無く、尾行は順調に進んでいく。

「ここは……」

そして辿り着いた場所を見て、俺は自然と声を零す。

其処は以前、海鳴連合が集まるのに良く使っていたクラブハウス。
店名は確か、パラレルと言った筈だ。

通常の入り口とは別に、少し横道を行くと、建物の側面には、大型バイクのチェイサーさんでも余裕で入っていける通用口が設けられていた。

チェイサーさんも、其処から入っていったのである。

「俺達も行くぞ！」

『……今更止める気も無いがな』

突入宣言をする俺に対して、メカ犬が溜息混じりに答えてくるが、俺はそんな事はどこ吹く風とばかりに、一つの真実を解き明かす為、未知への扉へと突き進む。

『あら、マスターじゃない』

通用口に入った瞬間、俺達を出迎えてくれたのは、全身が黒いボディーカラーのライダーバイク、チェイサーさんだった。

俺達が通用口を入った目の前には、数台のバイクが駐車されており、チェイサーさんもその内の一台として、並んでいたのである。

「こ、ここで何やってるんですか？チェイサーさん」

突然のチェイサーさん登場により、面食らってしまい、俺が考えて

いた計画とは違ってしまったが、俺は何とか質問をする事に成功する。

『ちょっと散歩中に疲れたから、この駐車場で休憩していたのよ』

「はい？」

チェイサーさんの予想外な返答に、俺は思わず声を上げてしまう。

良く周りを見渡せば、確かにここはクラブハウスの駐車場であり、車両用の休憩場所と言えなくは無いかもしれないが……

『それじゃあマスター。アタシはまたお散歩に行くわね』

呆ける俺にそう挨拶すると、チェイサーさんが、エンジンを起動させて、爆音を唸らせながら出入り口に向けて進んでいく。

『……ああ、それとマスター。乙女の秘密を暴こうなんて、あんまり良い趣味じゃないわよ』

最後にオッサンボイスでそう締めくくると、チェイサーさんはこの場から、走り去って行ってしまった。

『どうやらワタシ達の尾行は、始めから気付かれていた様だな』

「……ああ」

こうして今回の尾行作戦は見事失敗に終わり、真実はまたしても闇の中へと消えていく……

それは何でも無い一日の、小さな出来事である。

## プレイバックアフターストーリー【第１４話編】（後書き）

まだまだ続きます。

## プレイバックアフターストーリー【第１５話編】（前書き）

そろそろ終わりが見えてきましたプレイバック編ですが、楽しんでいただけたら幸いです。

「なあ、ガキ。人様にぶつかったら、まずそれなりの対応をするってのが、筋じゃねえか？」

「……だから、さっきから何度も謝ってるでしょう。ぶつかってしまってすいませんて」

休日の平和な昼下がり、今日はバイトも午前中だけという事もあり、午後からはなのはちゃん達と遊ぶ約束をしていたので、俺はバニングス邸へと急いでいたのだが、何やら妙な事に巻き込まれてしまった様である。

俺を取り囲む数人の中学生程の男子達。

事の経緯はこうだ。

俺がバニングス邸に向かって歩いていた際、反対側から歩いてきた彼らの一人が、何やらふざけながら歩いていたのだが、丁度俺とすれ違う寸前に、自身の足を引っ掛けて、バランスを崩してしまい、倒れそうな所を反対側を歩いていた俺が当たってしまい、因縁を吹っかけられたのである。

明らかに相手の不注意が原因だと思うが、特にこの場で波風立てる事も無いと考えた俺は、何か言われる前に、此方から、謝罪の言葉を一言述べて、その場を歩き出そうとした。

だが、相手の男子とその連れの方達には、どうにも俺の態度が気に食わなかったらしく、こうして囲まれている訳だ。

しかもこの男子達。

良く見れば、以前会った事のある、来人君に酷いイジメを行っていた中学生達である。

以前会った時とは違い、全員の髪型が丸坊主となっているが、間違い無い。

現在は照屋道場の門下生として、性根を鍛え直されている筈なのだが、どうにもその成果は現れていない様である。

俺は溜息を吐きながら、どう対処したものかと、考えを巡らせていると、この場に新たな介入者達がやって来た。

「あれ？魔巣田さんじゃないですか。どうしたんですかこんな所で？」

此方に数人の強面達が近づいて来る。

しかも俺の事を見て、その名前で呼ぶのは、海鳴市でもある特定のグループだけだ。

彼等はこの海鳴市が誇る、最大規模の暴走族チーム、海鳴連合。

だが実際にやっている事は、その強面名な面構えとは裏腹に、完璧にただのサークル活動ではあるが……

「何だよ、この怖い人達は……」

しかしそのビジュアルは、俺の目の前に居る中学生達を、恐怖させるには十分だった様で、海鳴連合の彼等を見て、驚き恐怖している。

「し、失礼しました！！！」

そして脱兎の如く、この場から逃げ出していく中学生達。

「何かあったんですか？」

「いや、何でも無いよ。俺は急ぐんでこれで」

話し掛けてきた海鳴連合の一人に、俺はそう返すと挨拶もそこそこにして、目的地へと急ぐ事にした。

その後日中学生達が、俺が今日の事をヤスに話した事がきっかけで、更なるしごきを受ける事となったのは、また別の話だ。

それは何でも無い一日の、小さな出来事である。

## プレイバックアフターストーリー【第１５話編】（後書き）

もう少し続きます。

## プレイバックアフターストーリー【第１６話編】（前書き）

今回は次回に続くお話になります。

それでは楽しんでいただけると幸いです。

## プレイバックアフターストーリー【第１６話編】

「お待たせ致しました。此方がクラブサンドとブレンドコーヒー。それと日替わりのＢランチになりますね」

俺は翠屋のウェイターとして、流れるような動作で、テーブルに注文された料理を置いて行き、淀み無く持ってきた料理の品名を述べて、実際の注文と差異が無いか、確認していく。

席に着く二人のお客様の反応から見ても、間違いが無い事を確認した俺は、読み上げた伝票を、食事の邪魔にならない様に、テーブル脇の指定箇所に置くと、他のホールの仕事をする為に、その場を後に……する事が出来なかった。

唐突にお二人の客様の内の一人により肩を掴まれた俺は、そのまま強引に椅子へと座らされてしまう。

「ちょっと、お話でもしましょうよ？」

「あの……お客様。当店はそういったタイプのお店ではないので、こういったサービスは行っていないのですが」

つまりお客様が言っている事は、乱暴な解釈をしてしまうのであれば、俺にホストの真似事をしろと命令している訳である。

俺はこの暴君とも言えるお客様に対して、一店員として出来る、最大の抗戦を試みたのだが……

「そんな事はどうでも良いから、私の話し相手をすれば良いのよ」

小さな抵抗は、情け容赦無いお客様の一言により、一蹴されてしまう。

先程からこのアグレッシブに暴挙を繰り返すこのお客様は、一見すればセーラー服に身を包んだ美少女。

しかしその実態は、実の姉以上に、迷惑を巻き起こすおてんば美少女コスプレイヤー？

風間恵美その人である。

そしてその向かい側の席では、フォーマルなスーツを着こなす新米刑事の長谷川さんが、苦笑いを浮かべながら、Ｂランチのデミグラスハンバーグをフォークで一口大に切り分けている。

恵美さんを止める事は、恐らく部下である長谷川さんには荷が重いであろう。

俺が知っている人材で彼女の暴走を、どうにか出来そうなのは、実の姉である恵理さんと、何故か相性が良いのか、メカ犬ぐらいのものである。

だが、現在この場には、運の悪い事に両者とも居ない。

この一人と一匹は、普段は頼まれなくても、店内で仕事中の俺に対して、ちょっかいを出してくるというのに、こういう必要な時に限って姿を現さないという……新手の嫌がらせなのかと感じてしまうのは、俺の被害妄想だと思いたい……

「……はあ、分かりましたよ。でも俺にも仕事があるんで少しだけですよ」

何時までも脳内で現実逃避をしている訳にも行かないので、俺は現実へと立ち返り、一度だけ諦めの溜息を吐いてから、譲歩案を恵美さんに提示する事にした。

「ええ良いわよ」

交渉は見事に成立したらしく、恵美さんは俺の条件に対して、満足満足気に頷き返す。

こうして俺と恵美さん、そしてついでに長谷川さんも交えた、普段あまり日常では会話する機会の何気に少ない座談会の場が設けられる事と相成ったのである。

次話に続く

## プレイバックアフターストーリー【第１６話編】（後書き）

もう少し続きますね。

## プレイバックアフターストーリー【第17話編】（前書き）

続きのお話になりますので、楽しんでいただけたら幸いです。

「そう言えば、最近月刊海鳴でも話題に出されている、仮面ライダーE2って恵美さんが、設計開発したんですよね？」

「ええ、そうよ」

お昼時の喫茶翠屋において、見た目だけを上げれば、アルバイト姿の小学生にセーラー服に身を包んだ美少女と、フォーマルなスーツを着こなした青年という、一見しただけでは、どういった集まりなのか、判断に困る集団の座談会は、他者の意を介する事無く、順調に進行されていく。

俺は取り敢えず世間話から話を切り出していたのだが、何時の間にか話題はE2の話へと移り変わっていた。

以前に恵美さんから散々話をされて、耳にたこが出来る程となった話題ではあるが、個人的にまだ聞いてない事があったのを思い出したので、折角だからこの場で聞いてみようと思ったのである。

「そのE2なんですけど、以前から恵美さんが言っていた搭載されているっていうESシステムは、一体何の略称なんですか？」

「あ、それは僕も気になってたんですよ。いい加減に教えてくれても良いんじゃないんですか」

俺の質問に便乗する様にして、長谷川さんも言葉を被せてくる。

何やら話を聞く所、長谷川さんも以前に、今俺がした質問と似た様

な事を言ったらしいのだが、その時は話をはぐらかされてしまった様だ。

「……ＥＳシステムの意味ねえ。二人とも、そんな事が知りたいの？」

恵美さんは俺と長谷川さんの様子を伺いながら、そう尋ねてくる。

「「はい！」」

その質問に対して、俺と長谷川さんは、同時に頷きながら答えを返す。

「……良いわ。そこまで知りたいのなら、教えてあげる。良い？ＥＳシステムはね」

「「ＥＳシステムは？」」

言動にタメを作りながら話し始める恵美さんの話し方に釣られてしまい、俺と長谷川さんは同時に同じ言葉を零してしまう。

「ＥＳシステムはね、恵美ちゃんスペシャルの略よ」

「「……はい？」」

あまりにも真面目な顔で語る恵美さんと、その口から出た単語のギャップに、俺と長谷川さんの反応がワンテンポ遅れてしまった。

「だから、Ｅは恵美ちゃん。Ｓはスペシャルの略なのよ」

鳩が機関銃を乱射された様な表情をしていた俺と、長谷川さんに対して、恵美さんが再び懇切丁寧に説明してくる。

「……それって本当なんですか？」

長谷川さんが、衝撃の告白にうろたえながらも、辛うじて質問を返す。

しかし質問をした長谷川さんの顔色は、恐ろしい程に蒼白だ。

E2の装着者として、こんな事実は認めたく無いのだろう。

その気持ちは痛い程に分かる。

俺と長谷川さんが、恵美さんの動向に注目すると、恵美さんは笑顔で再び語り出した。

「ふふ、冗談よ。冗談。本当の理由は今はひ・み・つ！」

はにかんだ笑顔を浮かべて、右手の人差し指をタクトの様に振りながら、恵美さんが悪戯の成功した子供のみたいな振る舞いをしてみせる。

俺と長谷川さんは、ホッと胸を撫で下ろすと同時に、果てしない脱力感に苛まれて、テーブルに肘をつけて項垂れた。

もう俺達には、この暴君に突っ込みを入れる気力は残って居なかったのである。

まあ、大体終始こんな感じで、今日の座談会は、過ぎて行った……

それは何でも無い一日の、小さな出来事である。

## プレイバックアフターストーリー【第17話編】（後書き）

もうそろそろこのプレイバックシリーズも、終わりが見えて来ました。

## プレイバックアフターストーリー【第１８話編】（前書き）

今回は都合により次話の部分も少し混ざっていますが、楽しんでいただけたら幸いです。

「犯人はこの中に居るんやで！」

海鳴図書館の一角において、俺の左側に車椅子で座っているはやてちゃんが、高らかに宣言した。

「はやてちゃん。図書館では、静かにしようね」

あえて犯人を挙げるとするのであれば、この場で騒いでいるはやてちゃんだろう。

そのはやてちゃんに対して、俺は注意を促す。

「ええ、その通りだね、はやてちゃん。犯人は確かにこの中に居るわ」

しかし俺の右側に座って読書に勤しんでいた筈のすずかちゃんが、はやてちゃんの話に便乗する様に話を繋げる。

これは俺も話しに乗らなければ、いけないのだろうか？

はっきり言って、両脇から俺へと注がれる期待の視線が、物凄く痛い。

「あ～犯人は一体誰なんでしょうかね？」

結局俺は、二人の期待の視線を裏切る事が出来る筈も無く、かなりの棒読みではあるが、この場で妥当といえるであろう台詞を口にし

た。

そもそも、何の事件が起きて、どういったタイプの犯人が居るのかすらも分からないのだが、二人はここからどうやって話を持っていこうとしているのだろうか……

取り敢えず現場を検証するのであれば、この場に居るのは俺と、すずかちゃんにはやてちゃんの三人。

少し離れたカウンターには司書の仕事をしている保奈美さんが居るだけである。

他のお客さんも別のフロアに何人か居る様だが、普通に話しに参加出来る範囲に居る人間は、この四人だけだ。

次に現場だが、図書館というだけあり、数々の本棚があり、大量の本が収納されている。

目の前にはこの周囲に陳列されている本の中から、其々が選んだ三冊の本がテーブルの上に置かれているだけだ。

「犯人は純君！君やで！」

考え事をしていたら、はやてちゃんにいきなり名指しで犯人扱いされた。

其処までに至る推理を何一つ聞いていなかった俺は、取り敢えず否定してみる。

「何を証拠に俺が犯人だなんて言うんだ？」

そもそも俺は、何の事件の容疑者なのか、まずは其処から知りたい。

「言い逃れは見苦しいよ。純君」

俺とはやてちゃんの会話に、すずかちゃんが合わせる様に、言葉を紡ぐ。

「そうやで純君。こっちには動かぬ証拠があるんや」

「動かぬ証拠？」

更にはやてちゃんが、あるものを取り出して、テーブルの上に置いた。

それはハンディカムタイプの動画が撮れるカメラだ。

しかも何処かで見た事がある様な……まさか！？

俺の考えがある一点に行き着くのとほぼ時を同じくして、すずかちゃんが動画の再生を行い始める。

このタイプは録画してある動画をカメラに内臓されているディスプレイに再生出来るのだ。

そのすずかちゃんの行動を止める間も無く、動画が再生され始める。

画面に映る景色は夕方。

小学生程の男女が映っており、何やら何処かで物凄く見覚えのある

やり取りを交わした後、女の子が男の子の頬に……

「……何か言う事はあるかな？」

「私達はとっても慈悲深いんやで……純君」

動画の再生を終えた後、すずかちゃんとはやてちゃんが、笑顔で俺に語り掛けてくる。

……だがしかし、表情は確かに笑みを浮かべているのだが、その目は一切笑ってなどいないのだ。

それどころか、凍てつく様な冷気すら放っている様な気がしてならない。

何故こんな状況となっているのか、訳が分からないが、俺の脳内危険感知センサーが、一刻も早くこの場から逃げろと緊急警報を発令し続けている。

俺は苦笑いを浮かべながら、ゆっくりと席を立つ為に、腰を浮かすのだが、俺の逃げの一手は、予想外の新たな登場人物の手により、阻まれてしまう。

「何処に行く気かな……純？」

その人物は立ち上がろうとした俺の両肩を後ろから掴んで、再び席へと座らせた。

「や、やあ、アリサちゃん。奇遇だね。アリサちゃんも、本を読みに来たの？」

俺は振り向きながら、その人物、やはり何故か俺の両脇を固める二人と同様に、凍てつく様な微笑みを称えるアリサちゃんに、無難な会話を試みる。

そして俺は見た。

その少し後ろに、苦笑いを浮かべながら、此方の様子を伺う我が幼馴染の姿と、全身フルメタルな犬の存在を。

あの一人と一匹が、彼女達の情報ソースと見て、まず間違い無いだろう。

しかしそれが分かった所で、今の俺に出来る事は何一つ無い。

唯一できる事と言えば……

「「「ちょっとお話しよっか？」」」

この時が少しでも早く過ぎ去るのを、天に祈るのみだ。

それは何でも無い一日の、小さな出来事である。

## プレイバックアフターストーリー【第１８話編】（後書き）

次回でプレイバック編もひとまず終わりです。

## プレイバックアフターストーリー【第１９話編】（前書き）

今回は少し毛色の違う展開ですが、楽しんでいただけたら幸いです。

「今になって何の話があるって言うんだ？」

昼下がりの翠屋の席の一角において、男女一組でやって来たお客さんの内、男性の方が女性に対して、静かに怒りを露にした発言をする。

「勝手だっていうのは私も分かってるつもり……だけど私は、もう一度、貴方とやり直したいの」

「……何だよそれ。振ったのは君の方だろ？なのに今更なんて」

男性は苦虫を噛み潰した様な苦悶の表情と、複雑な心情の折り重なった瞳で、女性を見つめる。

「私ね、気付いたの。貴方がどれ程、私を大切に想ってくれていたか……だから私は！」

女性が其処まで言ったところで、男性がテーブルを強く叩いた。

その音は、店内に響き渡り、店に居た人間の多くが、彼に視線を集中させる。

「……それ以上は言わないでくれ。頼む」

男性は俯きながら話している為、その表情は窺い知れないが、搾り出す様に紡ぎ出されたその声は何処か哀愁を漂わせていた。

「君は彼を選んだんだ。もうこれ以上、自分の幸せを迷うな。何も気にせず、自分の信じる道を向いていろ……」

俯いていた顔を上げて、男性は尚も女性に語り続ける。

その顔は全てを包み込む様な優しさ溢れる笑顔だった。

「……良いのかな？……私、貴方の事一杯傷つけたのに、私だけが彼の所に行っても……」

女性は男性の言葉を聞きながら、大粒の涙を零す。

その涙は止め処無く流れ落ち、止まるところを知らないでいる。

「良いんだよ。君は自分の幸せを考えろ。それに俺と一緒に居たんじゃ、君はもう笑えないだろ」

そう言いながら、男性は泣いている女性の顔に、そっと手のひらを乗せて、まるで愛の言葉を囁く様に彼にとっての別れの言葉を紡ぐ。

「俺は君の笑顔が一番好きだからさ。好きになった人には、何時だって笑顔でいて欲しい……だからこれで、本当にお別れだ」

女性の涙を己の指で拭いながら、男性は幼子をあやすかの様に、頭を撫でて落ち着くのを待つ。

「……ありがとう……私行くね」

涙が止まり、幾分か落ち着いてきた女性はそう言ってから、席を立って男性に告げる。

「ああ……」

それに対して男性は、言葉少なに答えを返す。

「私ね……絶対に彼と幸せになるから！」

最後に女性は、ありったけの笑顔でそう返すと、店の出口へと向かって行く。

扉を出た後、ガラス越しに一度だけお辞儀をして、女性はもうそれ以降一度も振り返る事無く、この場を後にした。

ここまでの様子を一部始終見ていた俺の肩を誰かが、軽く叩く。

誰かと思い振り返ってみると、其処には士郎さんが居た。

俺がどうしたんですかと聞くと、士郎さんはウインク一つした後、俺に一つ頼みごとをしたのである。

その意図に気付いた俺は、頷きながら快く士郎さんの頼みを了承した。

全ての準備を整えた俺は、その士郎さんの頼みごとを果たす為に、店内のある場所を目指す。

「少々宜しいでしょうか？お客様」

俺が辿り着いた先は、翠屋の席の一つ。

先程まで店内で注目を集めていた男性の座っているテーブルである。

「……あ、すいませんでした店員さん。店内で騒がしくしてしまって……」

俺に声を掛けられた男性は、申し訳無さそうに、言葉を返す。

「いいえ、それは構いません。それと失礼でなければ、お客様にはこれを」

店員として会話をし続ける俺は、男性にそう返すと、トレーに乗せていたコーヒーをテーブルに置いた。

「これは？」

「当店からのサービスで御座います」

頼んでいない筈のコーヒーを持ってきた俺に対して男性が、疑問の声を口にするが、俺はすぐさま事前に用意していた常套句で返事を返す。

そして何を隠そう、このコーヒーこそが、俺が士郎さんに頼まれた事なのである。

「……それじゃあ、遠慮なく」

やがて男性は、コーヒーの注がれたカップを手に取り、砂糖もミルクすら入れずに、一口だけ口にする。

「苦いですね……でも、こんなに美味しいコーヒーを飲んだのは…

…初めてですよ」

男性はそう言って俺に笑顔を向けた。

でも俺には、その男性の笑顔が、何処か泣いている様に思えてならなかった……

それは何でも無い一日の、小さな出来事である。

## プレイバックアフターストーリー【第１９話編】（後書き）

これでひとまずプレイバック編は終了となりますが、また本編の話数が増えたらやってみようかなと考えています。

# ５０万ＰＶ突破記念作品　仮面ライダーシード＆仮面ライダーＷ　ミックスワールド

どうも、お待たせ致しました。

ついにこのシリーズを始める事が出来ました。

既にアクセス数が、５０万よりも、１００万アクセスに近い状態となってきているので、このタイトルはどうかと思ったのですが、あえてつける事にしました。

それではようやく始まるＷ編。

楽しんでいただけたら幸いです。

# ５０万ＰＶ突破記念作品　仮面ライダーシード＆仮面ライダーＷ　ミックスワールド

世間はクリスマスも間近となり、何処と無く浮き足立っていた。

日本では本来の風習とは少々違い、一つのイベントとして捉えられているが、こういった行事は楽しんだ方が得であろう事は明らかだ。

海鳴市の住人達も、例に漏れる事無く、クリスマス当日を楽しみにしていた。

だがその街全体に流れていたクリスマスムードは、突然に終わりを告げる事となる。

「きゃあああああああああああああ！！！！！！！！！？」

それは一人の女性の悲鳴から始まった。

女性の悲鳴に気付いた、他の海鳴市民達が、悲鳴を上げた女性に視線を向ける。

其処から第二、第三の悲鳴が上がり、それは周囲へと際限無く伝染していく。

悲鳴の中心に居たのは、人では無い、異形の存在。

辺り一体に藍色の球体が幾つもばら撒かれ、その一つ一つが光を纏いながら、藍色の怪人を模した異形へと変貌を遂げる。

異形達は恐怖と混乱で逃げ惑う海鳴市民の意思など、省みる事無く

街を蹂躙していく。

異形の者達により、街が混沌を極めようとしたその時、大型の白と黒のツートンカラーのバイクが、サイレンを響かせ、エンジン音を唸らせながらこの場へと駆けつける。

そのバイクに搭乗しているのは、メタルイエローのボディーが輝く、一見して人型のロボットの様な存在だった。

メタルイエローのロボットは、右腰のホルスターに納められている、変わった形状の銃、ＥＳＭ０１を抜き放つと、突如として街に現れた異形の者達に向けて発砲を開始する。

放たれた光を纏う弾丸は、異形の者達を次々と捉えて、地に伏せさせていく。

「ここは危険です！一般市民の方達は、誘導員の指示に従って、この場から速やかに避難してください！」

辺り一体の異形、ホルダーモドキ達を倒したメタイエローの彼、ホルダー対策特務課が誇るＥＳシステム、仮面ライダーＥ２は専用バイク、マシンドレッサーを止めると、周りの人達に避難するように呼びかける。

Ｅ２がホルダーモドキ達を倒した事により、若干の余裕が生まれた市民達は、指示に従い避難行動に移っていく。

［「長谷川君。ここはもう大丈夫みたいだから、商店街の方に向かってくれる？さっき通報があって、其処にも例の藍色のホルダー達が複数出現したそうなの！」］

E２に内臓された通信機から、Ｅ２の装着者、長谷川啓太の直接の上司であり、このＥ２を開発した天才美少女の風間恵美の声が聞こえてきた。

「分かりました！」

通信を聴いたＥ２は、すぐさまマシンドレッサーを走らせて、指示された現場へと急行する。

「一体何が起こっているって言うんだよ！？」

『分からない。だが今この海鳴市で、途轍もない何かが、起ころうとしているのは間違い無いだろう』

俺は人々が混乱する海鳴の街をメカ犬と共に駆け抜ける。

始まりは本当に唐突だった。

突如として、街中に現れたホルダーモドキが、暴れ始めたのである。
近場に居た連中は倒したのだが、その数はあまりにも多くて、焼け石に水といった程の成果しか出ない。
そこで俺達は考えた。
このホルダーモドキ達の異常なまでの大量発生に何かの意味があると仮定するのであれば、この街の何処かにこの混乱に乗じて何かをしようとしている奴等が居る筈なのだと。
だから俺達は、この大量のホルダー反応がする近辺でも、特に大きな反応が示す地点に向けて、走っているのである。
『見えてきたぞ！マスター！』
メカ犬の声に反応して前を向けば、其処に居たのは藍色と灰色の二人の怪人、オーバーとメルトである。
しかもその後方には、何か見慣れない建造物が聳え立っていた。
それは通常の成人男性の背丈の倍程はある高さを有した、金属製の杭の様に見える。
しかもその杭の一番上には、拳大の大きさを誇る緑色の球体がはめ込まれており、怪しげな光を放ち続けていた。
あれが何なのか分からないが、俺でも何か良くないものだという事は一目で理解出来る。

「メカ犬！あの杭みたいな奴。何だか分かるか？」

『いや……しかしあの杭からは、何故か一際大きなホルダー反応が感知出来る。何としても破壊するぞ！』

「ああ！」

俺とメカ犬が会話しながら走る間に、数体のホルダーモドキが、俺達の進行を妨害するべく、立ち塞がる。

「行くぞメカ犬！」

『うむ！』

走りながらも俺は、タッチノートを取り出して開くと、ボタンを押す。

『バックルモード』

音声が流れると同時に、俺の隣を走っていたメカ犬は、ジャンプしながらベルトに変形して、俺の腹部へと自動的に巻きつく。

「変身」

俺は音声キーワードである言葉を言いながら、タッチノートをベルトの中央に設けられている溝へと差し込んだ。

『アップロード』

ベルトからは白銀の光が発生して、尚も走り続ける俺の全身を包ん

でいく。

そして光が飛散して現れたその姿は、メタルブラックのボディーを持つ一人の戦士である。

「はあ！」

シードへと変身した俺は、走る勢いはそのままに、進行方向に数体佇んでいるホルダーモドキの内の一体に狙いを定めて拳を振るう。

それを皮切りにして、他のホルダーモドキが、俺に襲い掛かるが、俺はその攻撃を裁き、時には受け流して、カウンターの一撃を放り込みながら、前へと前進する。

ホルダーモドキの相手よりも、今はあの謎の杭をどうにかしなければいけない。

何故かは分からないのだが、俺の勘がそう告げているのだ。

「オーバー！メルト！今度は何を企んでいるんだ！？」

ホルダーモドキ達を蹴散らして、どうにか二人と謎の杭が突き立てられた場所にまで辿り着いた俺は、二人の怪人に対して言い放つ。

「ふん。やっと来たか、仮面ライダー」

「来てくれた所で悪いんだけど、もう時間切れなんだよね」

俺の姿を捉えたメルトが淡々と言い、オーバーは何時もの様に軽い口調で、意味不明な事を言い始める。

『それは一体……む!?』

「な、じ、地震か!?」

メカ犬が言いかけた所で、突如として大地が震え出す。

「始まった……ついにこの時が来た……」

震える大地の上にありながら、メルトが珍しく感情を乗せた言葉を呟き始める。

『始まった?お前達!一体何を始めたと言うのだ!?』

メルトの発言に対して、メカ犬が吠えた。

「ふふふ。これは実験なんだよ」

「実験?」

「そう。これは今まで以上の大きな実験。これが成功したら、世界の壁が一気に崩れるんだよ!凄いでしょ!!!」

吠えたメカ犬に対して、オーバーが嬉しそう喋りだす。

実験……世界の壁を崩す……やけに物騒な単語が入っているが、先程からのこの地震も、それが原因なのだろうか。

「何をやろうとしているのか分からないが、絶対に止める!」

俺は叫びながら、今も震え続ける大地をものともせずに駆け出した。

「ふん。貴様の相手はこいつだ」

一気に距離を詰める俺に対してメルトはそう言い放つと、右手を振りかぶる。

それを合図としてなのか、上空に明らかに雲とは違う影が発生した。

何かと思い、視線を上に向けると、そこに居た影の正体は、翼をはためかせながら空を飛ぶ異形の存在。

茶色い羽毛を身に纏う鷲に良く似たホルダーだった。

「モドキだけじゃなかったのか」

俺がホルダーを目の辺りにして言葉を零すのと、ほぼ時を同じくして、ホルダーが口から無数の炎弾を、此方に向けて射出してきた。

『来るぞマスター！』

メカ犬の声を聴きながら、俺は炎弾を避ける為に、回避行動を試みる。

「くそ！？」

空中からのホルダーによる攻撃を、何とか回避する事には成功するが、このままでは一向にして、オーバー達に近づく事すら出来ない。

『マスター！チェイサーを呼ぶぞ。まずはあのホルダーを倒さなく

ては、どうにもならん』

「分かった！」

俺はメカ犬の助言に頷きながら、ベルトの溝にはめ込まれているタッチノートを引き抜き、開いてからボタンを数回押した。

『ホバーチェイサー』

タッチノートから音声が流れると、程なくして、上空からホルダーの羽ばたき音とは違う、エンジン音が辺りに響き渡る。

『お待たせマスター』

やって来たのは、乙女口調のオッサンボイスなライダーバイク、チェイサーさんである。

「チェイサーさん！力を貸してください！」

『ＯＫマスター！飛ばすからアタシの上に乗ってねん』

俺の頼みにチェイサーさんは、快く答えを返してくれた。

『行くぞマスター！』

「ああ！」

ベルトから発せられるメカ犬の言葉に頷きながら、俺はチェイサーさんの上に飛び乗った。

それを確認したチェイサーさんは、ホルダーが放つ炎弾を回避しながら、ホルダーに接近していく。

際限無く撃ち出され続ける炎弾を避けながら、俺達は空を自在に飛ぶホルダーに対して逆に上を制する。

『今よマスター！』

チェイサーさんの合図を聞きながら、ホルダーの頭上を取った俺は、ベルトからタッチノートを引き抜き、全体図を表示させて、右足をタッチしてから、再びベルトに差し込んだ。

『ポイントチャージ』

ベルトから発生した光は、銀のラインを通り、右足へと集約されていく。

「こいつで決めるぜ」

俺はチェイサーさんを足場に跳躍すると、真下のホルダーに向けて、右足を突き出す。

それを見たホルダーが此方に向けて、炎弾を発射しようとするが、チェイサーさんが、頭上からの体当たりをホルダーに喰らわした為に、不意打ち気味に攻撃を受けたホルダーは完全に、反撃のタイミングを逃す。

チェイサーさんが作ってくれた一瞬の隙を逃さない為に、俺は全力の一撃をホルダーに向けて、解き放つ。

「ライダーキック」

輝く右足は凄まじい勢いと共に、ホルダーに直撃し、大きな爆発を引き起こす。

爆発の中から、ホルダーの素体となっていた気絶した青年を抱きかかえながら、地上に着地した俺は、気絶した青年をチェイサーさんに任せて、再びあの謎の杭がある場所を目指して走り出した。

いまだに揺れ続ける地面に危機感を覚えながらも、俺は当初の目的通りに、謎の杭が突き立てられた場所に辿り着く。

だがおかしな事に、俺の予想では、この場所を死守してくるであろうと考えていた、オーバーとメルトの姿が何処にも見えない。

『考えるのは後だマスター。今は早くあの杭を破壊するぞ』

「ああ、そうだな」

俺はメカ犬の声に、一旦考える事を中断して、ベルトからタッチノートを引き抜いて全体図を表示させて、右腕部分をタッチしてから、再度タッチノートをベルトに差し込んだ。

『ポイントチャージ』

音声と共にベルトから発生した光は、四肢に伸びる銀のラインを流れて、右腕へと集約される。

「ライダーパンチ」

俺は輝く右拳を、力の限り振り被って、謎の杭に叩きつける。

拳は謎の杭を貫き、全体に亀裂が走り、やがて埋め込まれていた緑に輝く球体もその光を失う。

『その杭からのホルダー反応は消えたぞマスター』

「……そうか」

安堵の溜息を吐きながら、俺は杭に突き刺さった己の拳を引き抜いて、改めてもの言わぬ杭を眺めてみる。

確かに先程まで、揺れていた地面も、この杭を破壊すると同時に、嘘の様に治まったし、今この杭自体からは、何の力も感じられない。

でも何故か、得体の知れない胸騒ぎが、俺を襲い続ける。

その胸騒ぎが、ただの思い過ごしならば、それで良いと思うのだが、どうにも嫌な感覚は拭えない。

『どうやら奴等は、引き上げた様だな』

メカ犬が言うには、俺達がこの杭を破壊した直後に、この辺りに無数に居たホルダーモドキを含めて、反応が消失したのだそうだ。

「……あいつ等は何をしようとしていたんだろうな？メカ犬」

『分からない。だが一度この杭を、調べてみた方が良いかもしれん』

俺はメカ犬と今回のあまりにも謎の行動が多い、奴等の動向につい

て話し合いながら、再びその動きを止めてただのオブジェと化している謎の杭を見上げた。

「今回の作戦、上手くいったみたいだね。メルト」

「ふん。ここまではただの序章に過ぎん。本当に成果が出るのはここからだ」

深い闇の中で、二人の怪人が言葉を交わす。

「……そうだね。でも良かったの？あれって作るのにかなり苦労したのに、あっさり壊されちゃったしさ」

「所詮あれは実験用の試作品だ。完成には程遠い……それに」

「それに？」

「あれは壊されたからこそ、中に内包されていたエネルギーを地球に放出する事が出来たのだ」

「ふ～ん。それじゃあ仮面ライダーには、感謝しなくちゃね」

「ふん。そうだな」

軽い口調で会話を続けるオーバーに対して、相変わらず淡々と喋るメルトだが、その口数は普段以上に多い。

「それで、次の実験はどうするのさ？」

「今は時を待てば良い。やがて変化は訪れる筈だ。この世界を大きく動かす変化がな……」

何処までも続く深い闇の中で、二人の怪人の怪しい笑い声が、何処までも響き渡った。

## ５０万ＰＶ突破記念作品　仮面ライダーシード＆仮面ライダーＷ　ミックスワールド

本格的なＷ陣営の出番は次話以降になりますね。

## ５０万ＰＶ突破記念作品　仮面ライダーシード＆仮面ライダーＷ　ミックスワールド

このシリーズも出来るだけ毎日更新出来たら良いなと、考えています。

それでは楽しんでいただけたら幸いです。

「明日は皆で、風都に行くわよ！」

あの謎の杭を破壊した翌日、二学期の終業式が無事に終わり、教室で担任の真理子先生の話を聞き終えた俺が、帰り支度をしていると、俺の目の前にやって来たアリサちゃんが仁王立ちで、そう高らかに宣言した。

「はい？」

俺は自身の耳を疑ってしまい、思わず声を上げてしまう。

突然話し掛けられて驚いたという部分もあるのだが、一番の理由は、先程アリサちゃんの口から、出る筈の無い単語が聞こえた気がした為である。

「今、何て言ったの？」

「ん、聞こえなかったの純？明日は前から皆で行こうって決めてた、隣町の風都に最近出来た遊園地の風都ランドパークに遊びに行こうって前から話してたでしょ」

どうやら俺の聞き間違いでは無いらしい。

アリサちゃんは確かに今、風都と言った。

しかもそれが隣町だとも……

はっきり言おう。

そんな事は有り得ない。

俺は転生してから、この海鳴市を始めとして、様々な文献を読んで情報を集めてきたが、今日この日まで、風都という言葉を聞いた事は、この世界では一度も無かったのである。

それに隣町が風都の筈が無いのだ。

確かになのはちゃん達と、冬休みに入ったらすぐに皆で遊びに行こうと、計画を立てており、隣町に新しくオープンした遊園地に遊びに行く事にはなっていたが、それは断じて、風都という街にある風都ランドパーク等という場所では無かった筈なのである。

「楽しみだねすずかちゃん」

「うん。今からワクワクするね」

しかもアリサちゃんだけじゃなく、すずかちゃんになのはちゃんまでもが、風都を常識として捉えている様な言動をしている。

何だこれは？

朝から俺は皆とずっと一緒に居たが、特に何かが変わった様な現象は、何も見受けられなかった。

だが、現状としてこれは異常だ。

俺は最近の記憶を掘り返して、何か糸口になる様な情報は無いかと、

思考を巡らせる。

そこで俺は、昨日耳にした、一つの単語を思い出す。

「……世界の壁を崩す」

無意識に俺はその単語を呟いた。

それは昨日の戦いで、オーバーが言っていた言葉。

今までも物騒な単語だとは思っていたが、その意味が理解出来ず、頭の片隅へと追いやっていたのだが、今この瞬間にその言葉の本当の意味に俺は気付いてしまった。

「これが奴の言っていた言葉の意味だったのか……」

目の前でこれからの予定を、楽しげに話し合っているなのはちゃん達を眺めながら、俺は言い知れぬ不安を感じ始めていた。

鳴海探偵事務所。

風都の風花町一丁目、二番地二号に建つ古びた玉屋、かもめビリヤード場の二階に居を構えている。

ここには様々な理由で警察等には頼る事の出来ない事情を持つ風都の住民達が、彼を頼りにこの場を訪れるのだ。

一人の青年が、事務所のロビーとなっている一番奥の机に座り、タイプライターを操作して業務を行っている。

彼の名前は左翔太郎（ひだりしょうたろう）。

この鳴海探偵事務所の元々の持ち主である鳴海荘吉の遺志を継ぎ、ハードボイルドを目指し続ける一人の探偵だ。

「翔太郎！翔太郎！」

部屋の奥の扉の向こうから、彼を呼ぶ少年の声が聞こえてくる。

声を掛けられた本人である翔太郎は、またかという感じで溜息を一つ吐くと、少年の声に答える為に、声を上げた。

「どうしたフィリップ。また何か気になるものでも見つけたのか？」

翔太郎が声を掛けるのと、ほぼ時を同じくして、先程の声の主、フィリップが、部屋の奥から姿を現す。

「そうなんだ。聞いてくれよ翔太郎。さっきテレビで、面白いニュースを見たんだ」

「面白いニュース？」

楽しそうに語り始めるフィリップに対して、翔太郎は面倒くさそうにしながらも、話しに耳を傾ける。

「最近この風都にオープンした風都ランドパークは、翔太郎も知っているだろ？」

「ああ、オープン前から、結構な宣伝をしていたしな。クイーンとエリザベスも、オープン初日に遊びに行ったって話してたぞ。それがどうかしたのか？」

「其処のアトラクションで、風都ホラーハウスというものがあるんだが、何と其処には作り物じゃ無い、本物の幽霊が出るらしい！」

「は！？」

「本物の幽霊だよ……実に興味深い！」

呆れた声を出す翔太郎を無視して、尚もフィリップは語り続ける。

「……あのな、フィリップ。仮に本物の幽霊がいたとしても、出来立てのテーマパークに居る訳がな……」

幽霊について語り続けるフィリップに、翔太郎が無駄と分かりつつも諭そうとしたところで、来客のチャイムが鳴った。

「フィリップ。話しは取り敢えず後だ」

翔太郎はそう言って椅子から立ち上がると、玄関を目指して歩き出す。

「初めまして、探偵さん」

扉を開けると、其処に居たのは見た目二十台後半から、三十台前半に見える黒髪の美女だった。

「仕事の依頼をしたいのだけど、良いかしら？」

妖艶な微笑みを浮かべながら、美女は翔太郎に語りかける。

「……」

翔太郎は、美女の不思議とさえ思える魅力にあてられたのか、言葉を失う。

「探偵さん？」

「……は！？ああ、すいません。仕事の依頼ですよね！！！」

何とか現実に復帰した翔太郎は、美女を事務所の中に案内すると、ソファに座る様に促した。

「ところで貴女の、お名前は？」

襟を正して、美女の向かい側に座り、今更ながらに真顔で決めた翔太郎は、仕事の話しというよりも、お見合い始めの常套句の様な台詞で会話を開始する。

「申し遅れました。私はこういう者です」

一度お辞儀をした美女はそう言って、一枚の名刺を差し出す。

「沢渡登紀子さんですか？」

「ええ、そうよ」

名刺に書かれていた名前を読み上げた翔太郎に、美女改め登紀子は肯定の返事を返す。

更に翔太郎が、名刺を読み続けると、其処には最近良く耳にする単語が、書かれていた。

「登紀子さん。貴女は……」

驚く翔太郎に対して、登紀子は再び妖艶な微笑みを浮かべた。

青年は静かに、毎日の日常を過ごしていた。

傍らにはいつも、最愛の歳の離れた妹が、それだけで青年は満ち足

りていたのである。

しかし青年の日常は、突如として終わりを迎えた。

それは逆らう事の出来ない理不尽。

ただ一人の最愛なる家族すらも、青年は守る事が出来なかった。

そして青年と、その妹は自らの命すらも落としてしまう。

青年の人生は、そこで全てが終わった。

いや、終わる筈だったのである。

青年は再び目覚めた。

……全ての記憶を失ったまま。

己が何者なのかすらも分からぬまま、青年は幾多の戦場を駆け抜けた。

命令に背けば、再び死が訪れる。

一度死んでいる青年は、それでも良いと心の奥底で感じては居たが、それでも青年は、命令に従い戦い続けた。

何処かで死の恐怖を感じていたのかもしれない。

或いはそれ以外の感情を持っていたのかもしれない。

だが根本的な部分で、青年はそんな事はどうでも良いと結論付けていた。

今の青年が思う事は一つだけ。

ここに居るという証。

それがあれば、他に何もいらないのだ。

青年は今の自分を生きても死んでもいないと考えている。

自分が誰だったのか、それすらも思い出せない。

だからこそ、今ここに己が居るという証を何よりも渇望した。

だから戦う事に彼は躊躇しない。

たとえ命令だったとしても、それが青年にとっての存在の証となるのであれば、むしろ喜ばしい事だったのだから。

しかしそんな青年に転機が訪れる。

何時もの様に、戦場で戦い続け、己以外に誰一人として、立っている状態ではない惨状を作り上げた直後の事だ。

異形の姿をした二人組みが、青年を訪ねて来たのである。

「……何だお前達は？」

青年は身構えながらも口を開いた。

「そんなに身構えないでよ。僕達は君と話しがしたいだけなんだからさ」

「……話しだと？」

異形の二人組みの内の一人。

全身が藍色をした異形がそう言った。

その言葉を聞いて、僅かだが青年は自身の緊張を解き、言葉を零す。

「私達は、お前に力を与えに来た。お前は絶対的な力が欲しいとは思わないか？」

続いてもう一人の異形、全身灰色をした恰幅の良い怪人が、青年に対して淡々と語りかける。

青年は突然の異形達からの誘いに、特に動揺する事無く、ただただ考えを巡らせ続けた。

そして、答えを出す為に、青年は今の己にとっての根幹とも言える質問を一つだけする。

「……その力は、俺の証になるか？」

その質問に対して、灰色の異形は、淡々とした口調で、一言返した。

「それをお前が望むのならな」

この瞬間、青年の答えは決まった。

「良いだろう。その力……俺に寄越せ」

際限無く死が訪れる大地の上で、青年は三度目となる産声を上げた。

終業式が終わった翌日、俺達は風の街、風都へとやって来ていた。

「本当に風都だよ……」

俺は目の前の現実に驚きを隠せず、今でも夢を見ているのではないかと、自身の頭を疑う。

『うむ。やはりマスターの言う通り、本来ワタシ達が居た世界と、もう一つの世界が、融合を果たしたと考えるのが、最も妥当と言えるかも知れないな……』

俺が背負っているお気に入りのショルダーバックから、顔を覗かせたメカ犬が、俺の考えを肯定する発言をした。

幸いにも、メカ犬だけは記憶が変わらず、話しが通じた。

その事で、余計にあの時破壊した謎の杭が、今回の事象に深く関わっている可能性があるという事が、判明した訳だが……

『それでこれから、どうするつもりなのだ？マスター』

「う～ん。それなんだよな……」

取り敢えず今は、なのはちゃん達と行動を共にしており、風都ランドパークへと、足を運んでいる訳だが、はっきり言って、現状遊んでいる場合では無いのではないかと、切実に思う。

取り敢えず引率兼保護者として、今回は恵理さんに同行してもらっているので、簡単に事情を話せば、皆と別行動をする事は可能だ。

それに今回はある意味運が良いと言えるかも知れない。

ここが本当に、俺の知っている、あの風都だとするのであれば、あの人達の力を借りる事が出来るかも知れないからだ。

結局メカ犬があの謎の杭を調べた結果分かった事は、あの杭自体にはあまり意味が無く、埋め込まれていた緑の球体に蓄積されていたエネルギーを放出する役割を持っていたという事だけだった。

恐らくはその流し込まれたエネルギーで、こうなったとは思うのだが、それ以上は現状お手上げなのである。

これが一時的な現象なのか、永続的に続くのか、それすらも分から

ない。

だからこそ、俺は彼等の協力を得たいと考えている。

「着いたよ純君！」

俺がメカ犬とこれからの行動指針について考えていると、少し前を歩いていた、なのはちゃんの声が聞こえた。

改めて前を向くと、其処にはカラフルな色付けがされた大きな扉。

その先に見えるのは、幾つもの、大きな風車が取り付けられた建物である。

流石、風の街、風都と言ったところだろうか。

風をイメージした様子がパーク内の至る所に見受けられる。

「それじゃあ行くで皆！！！」

はやてちゃんが、もう我慢できないといった感情を爆発させて、右拳を突き上げる。

「「「おー！！！」」」

それに呼応するかの様に、なのはちゃんに、アリサちゃん、すずかちゃんまでもが、拳を天に突き上げた。

皆余程楽しみにしていたのだろう。

何気に恵理さんまでもが、混ざっているのはどうかと思うが……

「ほら、純君も早く行こうよ！！！」

俺はなのはちゃんに腕を掴まれて、引きずられる様にして、パーク内へと入っていく。

取り敢えず、現状では別行動をする事も難しそうなので、現状は一緒に遊びに興じた方が、得策かもしれない。

俺は現状の心配の種を、取り敢えず頭の片隅に追いやり、どうせならば、楽しむだけ楽しもうと、パーク内に足を踏み入れた。

私は歳の離れた兄さんが大好きだった。

厳しいけど優しくて、そんな暖かい兄さんが、誰よりも好きだったのに……

兄さんは突然私の前から、姿を消してしまった。

もう一度会いたいのに、私はこの場から動く事が出来ない。

会いたいよ……

もしもこの世界に、本当に神様が居るのなら、一度だけで良い。

私の願いを叶えてください……

兄さんにもう一度だけ会いたいんです。

そして、ちゃんとお別れを言いたいの。

私は兄さんと居て、毎日が幸せだったよって。

だからもう何も悩まなくて良いんだよって、私の口から兄さんに伝えたいの……

それが我侭だって事は分かってる。

本当は、私はここに居ちゃいけない存在だって事も。

だけど、それでも私は諦めたくない。

だからこの願いが叶うと信じて、今は待ち続けたいんです。

私は今日も、祈りを捧げながら待ち続けます……

希望をその胸に宿しながら。

**５０万ＰＶ突破記念作品　仮面ライダーシード＆仮面ライダーＷ　ミックスワールド**

次回はやっとＷも……

## ５０万ＰＶ突破記念作品　仮面ライダーシード＆仮面ライダーＷ　ミックスワールド

今回は結構な急展開と言えるかも知れません。

それでは楽しんでいただけたら幸いです。

「ここが噂のホラーハウスやな……」

幾つかのアトラクションを巡り、この風都ホラーハウスという、簡単に言えばお化け屋敷なアトラクションに辿り着くと、はやてちゃんが、妙に真剣な表情で呟いた。

「ここってそんなに怖いの？」

記憶が変換されなかった俺は、この風都ランドパークの前情報が何一つ無いので、素直に質問をぶつけてみる。

「純……あんたはそんな事も知らないの？」

それに対して、アリサちゃんが、呆れながら返答してくる。

「……ここはね、出るんだよ」

続いてすずかちゃんが、怪しげに言葉を紡ぐ。

「出るって、何が？」

何となく答えは分かったが、ここまで聞いたら最後まで質問し続けるのが、礼儀だと思い、俺は質問を続ける。

「決まってるやろ……本物の、幽霊や」

「にゃあああああああああああああ！？」

最後にはやてちゃんが、締めくくるのと同時に、なのはちゃんが叫び声を上げて、俺の腰に背後からしがみ付いてきた。

「ごめんな、なのはちゃんがそんなに怖がるとは思わなかったんや」

震えるなのはちゃんを見ながら、はやてちゃんは苦笑いを浮かべつつ、謝罪の言葉を口にする。

どちらかと言えば、幽霊そのものよりも、皆の話し方のせいで、恐怖感が煽られた様に思えるのは、気のせいでは無い筈だ。

次の予定は、このホラーハウスを回る事になっていたのだが、なのはちゃんのこの様子を見て、無理そうなら止めておこうかと、俺が提案したのだが、なのはちゃんは俺の腰にしがみ付いて震えながらも、行くと言って意見を変える事はしなかった。

このアトラクションは、最大二人組みになり、徒歩でコース内を進んでいくというタイプのものなのだが、なのはちゃんが、俺の腰を離さない為、自動的に俺となのはちゃんが、ペアで行く事に決まったのである。

ここで入る順番だが、俺となのはちゃんが、一番手となる事に決定した。

それというのも、なのはちゃんの強い要望で、順番が後になると、余計な恐怖心が高まりそうになるからだそうだ。

「それじゃあ行こう。なのはちゃん」

俺は腰にしがみ付くなのはちゃんを、取り敢えず引き離して手を繋いだ状態にした後、アトラクションの係員さんに、促されながら、ホラーハウスの内部へと進んで行く。

ホラーハウスは、怖いというよりも、幻想的な作りになっており、お化け屋敷に入ったというよりは、妖精が出てくる様な異世界に迷い込んだという方が、しっくりする感じである。

なのはちゃんも、暫くは恐怖に、表情を歪めていたが、歩き続けるにつれて、この幻想的な雰囲気を楽しみ始めるまでになっていた。

この幻想的な場所を歩きながら、改めて思うが、何故こんな場所で、幽霊が出るなんて噂になったのだろうか？

内装や演出が、入った人達を恐怖させる仕様になっているのであれば、まだ納得も出来るのだが、今の所そんな様子は見受けられない。

火のない場所に煙はたたない、なんて言葉があるが、他に何かの要因があるとでもいうのだろうか？

「ねえ、純君」

「ん、どうしたの？なのはちゃん」

もう少しで出口という所で、なのはちゃんが、何処か不安げな顔で、俺に話しかけてくる。

「今、何か聞こえなかった？」

「……声が？」

俺はなのはちゃんに言われるがまま、耳をすませてみるが、スピーカーから流れる幻想的なＢＧＭ以外には、特に聞こえてこなかった。

「ほら！また聞こえたよ！？」

しかしなのはちゃんには、確かに声が聞こえ続けているらしく、更にその表情に不安を募らせる。

「兎に角ここを出よう。なのはちゃん」

俺も言い知れない不安を覚え始めたので、なのはちゃんの手を握り直すと、急いでこのホラーハウスを出る為に走り始めた。

走り続けて出口に辿り着いた瞬間、握っていたなのはちゃんの手が、異常な震え方をした様な気がしたのだが、その次に起きた出来事の、あまりのインパクトで、その事を気にする余裕は何処にも無くなってしまう。

俺となのはちゃんが、ホラーハウスから出た直後、すぐ近くから、大きな爆発音が周囲に響き渡ったのである。

「な！？」

突然の爆発に驚きながら、俺が爆発のあった方向に視線を向けると、其処には異形の存在が居た。

『何だあれは！？ホルダーではないのか！？』

ショルダーバックからメカ犬の声が響く。

メカ犬の言う通り、あれはホルダーなんかじゃない。

実際に目にするのは、俺だって勿論初めてだが、その存在だけは、良く知っている。

魚と虫を合わせた様な姿。

それは遥か古代を生きた生物、アノマロカリスという生き物に酷似していた。

当然だろう。

何せ奴は、この地球の記憶から、アノマロカリスの記憶を引き出しているのだから。

「ドーパント……」

それがこの異形の名前だ。

ホルダーとは違うが、奴もまた脅威となる存在である。

ドーパントは此方に振り向くと、口から何かを吐き出す。

「やばい！？」

俺はなのはちゃんの手を引きながら、この場から飛び退く。

その直後、ドーパントが吐き出した何かが、凄まじい勢いで、先程まで俺達が居た場所の、後方にあるベンチを跡形も無く破壊した。

何故かは分からないが、このドーパントは、俺達を標的に定めた様である。

『どうするマスター』

俺は恐怖の為に、一言も喋れずにいるのか、沈黙し続けるなのはちゃんを背中に庇いながら、この先どうするべきか思案する。

「……迷ってる場合じゃないよな！！！」

一度だけなのはちゃんに視線を向けてから、俺はタッチノートを取り出す。

『良いのかマスター？』

「ああ、正体とか以前に、守れなかったら、何にもならないだろ！！！」

俺はメカ犬に答えながら、なのはちゃんを後ろに下がらせて、タッチノートを開き、ボタンを押す。

『バックルモード』

音声が流れると同時に、ショルダーバックから飛び出したメカ犬は、ベルトに変形して、俺の腹部に巻きつく。

「変身」

音声キーワードを入力した俺は、タッチノートをベルトの溝に差し

込んだ。

『アップロード』

白銀の光が俺の全身を包み込み、メタルブラックのボディーを持つ、一人の戦士へと、その姿を変える。

「行くぞ！」

シードへの変身を無事に完了させた俺は、そのままドーパントに突っ込む。

ドーパントは先程と同じものを口から何発も吐き出して、迎撃を試みて来るが、俺はその全てを拳で弾き飛ばしながら、構わず突っ込み続ける。

「はあ！」

攻撃の届く範囲内に接近を果たした俺は、ドーパントに対して、容赦無く拳と蹴りを連続で叩き込んでいく。

「たあああああ！」

最後に俺はドーパントの背中に蹴りを叩き込み吹き飛ばす。

『マスター！』

「分かってる！」

メカ犬が言おうとしている事を理解した俺は、ベルトからタッチノ

ートを引き抜こうとするが、ここで予想外の出来事が起こる。
突如として無数の銃弾が、俺の足元に撃ち込まれたのだ。
「何でお前がここに!?」
俺は銃弾の飛んで来た方向に視線を向けて、その銃弾を撃った人物を目撃して、驚愕する。
其処に居たのは、海鳴市で、何度も戦ってきた灰色の怪人。
『何故貴様がこの風都に居るのだ!?メルト!!!』
メカ犬はその名を高らかに呼ぶ。
「ふん。まさか私も、ここでお前達に会うとは思っても居なかったぞ」
メルトはそう言いながら、銃を構えると、再び俺に狙いを定める。
「ちょっと待った!!!」
臨戦態勢を取る俺達の間に、一際大きな声が響く。
今度は何かと思い、声のした方向に再び視線を移すが、俺はその声の主を見て、先程以上の衝撃を受けた。
黒いソフト帽を目深にに被り、ドラマに出てくる様な探偵ルックな服装に身を包んだ一人の青年。

俺はその人を画面越しから、何度も見てきた。

左翔太郎。

それが俺の知る青年の名前だ。

「行くぜフィリップ」

赤と黒と銀を基調とした物体、ダブルドライバーを取り出した翔太郎さんは、この場には居ない相棒の名前を言いながら、自身の腹部へと宛がう。

ダブルドライバーが一瞬の内にベルトとして装着されたのを確認すると、続いてＪのイニシャルが刻まれたＵＳＢメモリに良く似た物体、切り札の記憶が内包された、御馴染みのガイアメモリを取り出してボタンを押した。

『ジョーカー』

辺り一体にあの音声が響き、更に翔太郎さんは、ジョーカーメモリを持った手を引きながら、ポーズを取る。

「変身」

その言葉を口にした直後、ダブルドライバーの中央に二箇所設けられている差込口の右側に、Ｃのイニシャルが刻まれた疾風の記憶を内包するガイアメモリ、サイクロンが装填される。

翔太郎さんは、サイクロンメモリを、深く押し込むと、続いてジョーカーメモリを差し込んで、両腕をクロスさせる様にしながら、ダ

ブルドライバーを展開させた。

『サイクロン』

『ジョーカー』

再び鳴り響く音声と共に、翔太郎さんの周りを、細かい粒子が取り囲む様に纏わりつき、二人で一人の戦士へとその姿を変えていく。

緑色の右半身と、黒色の左半身に、額に輝くW型の角飾り。

両目の赤い複眼に、首に巻かれた銀のマフラー、ウィンディスタビライザーが、風都の風を受けて揺らめく。

その姿は見間違う筈も無い。

風の街、風都を守る二人で一人の仮面ライダー。

仮面ライダーW。

それが今の彼等の姿である。

「「さあ、お前の罪を数えろ」」

翔太郎さんとフィリップ君の声が重なり、あの台詞を口にした。

「……どうやらこの場には、厄介な奴等が集まって来る様だな」

Wを見ながら、メルトは淡々と呟く。

此方に駆け出すWに対して、銃を構えるメルトを見た俺は、我に返って、急いで行動を開始する。

「させるか！」

俺は一気にメルトとの距離を詰めて、メルトの銃の弾道からWを外す為に、拳を振るう。

「くっ！？」

メルトの舌打ちとほぼ同時に、Wはこの場を走り抜けて、ドーパントの元へと向かって走り続ける。

「邪魔をするな！」

近距離で振るわれる拳を避けながら、俺は一旦距離を取り様子を窺う。

『答えてもらおうかメルト！あの杭は何だったのだ！貴様達の本当の狙いは何だ！？』

「言った筈だろう。これは実験だと」

メカ犬の質問に、メルトは、銃を此方に乱射しながら答える。

「やっぱりこの現象は、あの時の杭が原因だったんだな！？」

俺はメルトが撃ち出す銃弾の嵐を避けながら、自らの確信を口にした。

「今この世界は不安定なバランスの中に成り立っている。だからこそ私達は新たなる実験に、着手するのさ」

休み無く銃弾の雨を俺に降らせながら、メルトは饒舌に語り続ける。

続けて俺が避けながらも、新たな質問をしようとしたところで、メルト目掛けて、ドーパントが吹き飛ばされてきた。

「ふん。どうやら話しはここまでにしておいた方が良いらしいな……」

吹き飛ばされてきたドーパントを一瞥したメルトは、ドーパントを庇う様に、一歩前に踏み出す。

それと時をほぼ同じくして、俺の隣にWがやって来た。

「よう、話してる所を、邪魔して悪かったな」

「君も仮面ライダーみたいだけど、あれは何なんだい？もう片方の灰色はドーパントでは無い様だけど……」

翔太郎さんが喋るのに続き、フィリップ君も、俺に話し掛けてくる。

「いえ、気にしないでください。それとあいつはメルト。俺にも良く分からないんですが、本人はホルダーの上位存在だと言っていました」

俺は目の前のメルトとドーパントの動きに注意を払いながらも、Wの質問に答えた。

「聞け！仮面ライダー！」

メルトが突如として声を張り上げ、俺達に宣言してくる。

「これから、この街は大きな実験場になる！止めたいならば、精々足掻いてみる事だな！」

そう言いながら、メルトは俺達の足元に銃弾を乱射した。

止め処無く撃ち出された数々の銃弾は、視界を奪う白い煙を大量に巻き上げ、その煙が晴れると、メルトもドーパントも、共にその姿を忽然と消してしまう。

「……逃げられたみたいだな」

Wは煙が晴れて辺りを見回してから、そう呟いた後、変身を解いて翔太郎の姿へと戻る。

それに続いて、俺もシードの変身を解いて、元の姿に戻った。

「子供！？」

変身を解いた俺を見て、翔太郎さんが、驚きの声を上げる。

考えてみれば驚くのは当然かも知れない。

変身している間は、大人サイズになってる訳だし、普通に考えれば、変身を解いたら子供だと考える人間は、殆どいないだろう。

「色々と話したい事はあるんですが、今は少し待ってもらって良い

ですか？」

驚く翔太郎さんに対して、そう言った後、俺はなのはちゃんの下に駆け寄る。

取り敢えず、今の翔太郎さんと同等か、それ以上に驚いたであろうなのはちゃんに、簡単な事情だけでも説明しようと思ったのだ。

「ごめん。なのはちゃん。今まで黙っていて……」

俺は今も沈黙を守り続けるなのはちゃんに、まずは今まで仮面ライダーとして黙っていた事を、正直に謝る事にした。

「……」

しかしなのはちゃんからの反応は、何も返ってこない。

「……なのはちゃん？」

幾ら怖かったとはいえ、ここまで何も反応が無いのは、おかしいと思い、俺は再度なのはちゃんに呼びかける。

「あ……だ……れ……」

耳を澄ますと小さな声だが、確かになのはちゃんの声が聞こえた。

俺は再度、聞き逃すまいとして、なのはちゃんの声に耳を澄ませる。

「あなた、誰なの？」

「え！？」

しかしなのはちゃんが発した言葉は、俺が予想すらしていなかった言葉だった……

## ５０万ＰＶ突破記念作品　仮面ライダーシード＆仮面ライダーＷ　ミックスワールド

次回はあまり大きな動きは無いかもです。

# ５０万ＰＶ突破記念作品　仮面ライダーシード＆仮面ライダーＷ　ミックスワールド

本日はオリジナル設定が満載です。

出来れば映画とＶシネマを視てからと思っていたんですけどね……

後から公式の設定で違っていたらすいません。

それと今回は一つ発表があります。

以前に急遽として募集した今回の記念作品に出てくる悪役ライダーの名前ですが、見事！紅月下さんが、当選致しました。

他にも沢山魅力的なお名前と、ライダーを考えて頂けたのですが、今回は既にストーリーの本筋が決定していたので、純粋に名前を書いてもらった上で、イメージにもっとも合っていたという経緯があり、紅月下さんの考えていただいたお名前を採用しました。

今回の応募にご協力していただけたのに、採用出来なかった他の読者様には、頭を下げる事しか出来ません。

そしてこの回では、その仮面ライダーがついに登場しますので、楽しんでいただけたら幸いです。

「実に興味深いね……」

メカ犬を手に取り、フィリップ君が、興味津々に細部を観察する。

『うむ。ワタシを観察するのは良いのだが、その蛙や、カタツムリの様なマシンは何なのだ？』

フィリップ君と同様に、メカ犬にとっても興味深いものが多いらしく、先程から一人と一匹の間で、質問合戦が続いている。

今俺達は、前世で画面越しに見ていた風都でも、多く登場していた場所。

鳴海探偵事務所の奥、劇中でＷが良く使っていた高速移送装甲車、リボルギャリーが置かれている、秘密のガレージに居た。

「なるほどな。つまり本来は繋がらない筈の世界が、奴等の実験で繋がったと……」

俺が知りうる限りの情報を聞いた、翔太郎さんは、眉間にしわを寄せながら、考えを巡らせる。

自分で言っていても、現実味が無い事は、重々承知だ。

それを実際に見ていない上に、記憶が改ざんされているという状態で、いきなり言われても、すぐには信じる事等出来ないだろう。

これればかりは、彼等に信じてもらう他にない。

しかし今の俺には、それと同等、いや、それ以上に気になる事がある。

先程から、フィリップ君とメカ犬のやり取りを、不思議そうに見つめる、一人の少女。

俺のお隣さんで幼馴染でもある、なのはちゃんの事だ。

風都ランドパークで様子がおかしかった事もあり、恵理さんに適当な理由を作ってもらって、この場に連れて来た訳だが、本当にどうしたというのだろうか？

話し掛けても、あの一言以来、何も返事を返してくれないし……

何か心配事が後を尽きなくて、俺は思わず溜息を吐いてしまう。

「そう言えば、翔太郎さんは、どうしてあんな場所に居たんですか？」

俺は気持ちを切り替えて、翔太郎さんに質問をしてみる事にした。

思えば、あの場所に偶然居たというのは、幾らなんでも話が出来過ぎている。

ドーパントが居た事も含めて、何かしらの理由があると考えた方が、妥当だろう。

「ああ、俺があそこに居たのは仕事の依頼だ。クライアントのプラ

イバシーに関わるから、これ以上は話せないがな」

俺の質問に対して、翔太郎さんは、淀み無く答える。

仕事の依頼……

確かに風都全域を仕事場にしている探偵業の翔太郎さんが、そう言うのであれば、違和感も無いのだが、何故か俺は得体の知れない大きな意思が、介入している様に感じてならない。

これはただの勘だ。

でも俺はこの勘が、当たっていると思えてならない。

それは翔太郎さんも同じなのか。

先程から思案顔を崩さずにいる。

「ところで、この探偵事務所には、二人しか居ないんですか？」

再度頭を切り替えて、俺は別の話題を振る事にした。

この事務所の翔太郎さん達が、どの辺りの時系列に存在するのかは、分からないが、Wに変身していた事を考えると、少なくても映画のビギンズナイトより後の時系列で間違い無い筈だ。

ここで鳴海亜樹子（なるみあきこ）の存在の有無が確認出来れば、かなりの精度で、現在の時間軸を確認出来る事だろう。

「あ～もう一人居ると言えば居るんだがな……」

翔太郎さんは、何処か言い辛そうに、顔を歪める。

「この探偵事務所の所長で、アキちゃんって言うんだけどね……」

言い辛そうにしている翔太郎さんに代わり、メカ犬と質問合戦を繰り広げていたフィリップ君が、会話を引き継いだ。

「……今は海外に行ってる」

「彼女は、つい最近結婚式を挙げたばかりでね。今は旦那さんと新婚旅行の真っ最中さ」

二人の言葉を聞いて、俺は声を出す事すら忘れて驚いた。

時系列どころじゃない。

この世界の翔太郎さん達は、俺が知っているＴＶの最終回よりも、もっと先の未来に居る人達だ。

可能性としては、ゼロではない。

実際にＴＶシリーズが終わった電王も、毎年新しい映画に出ていたし、実際に俺が会った電王メンバーも、エピソードイエローが終わった後の時系列から来ていた……

俺が前世で最後に視たのは、オーズの一話目だったが、後に出た映画で共演して、続編が描かれていたなんて可能性は極めて高い事だろう。

「……そ、そうなんですか」

多大なショックを受けながらも、俺は出来るだけ平静を装って、返事を返す。

結婚した相手が誰なのかも、気になるところではあるが、大体の予想はつくし、多分当たっているだろうから、あえてこれ以上は聞かない事にした。

それに俺が前世の記憶で、彼等を知っていたとしても、今目の前に居る人達はフィクションではなく、現実に存在している人格を持った本物である。

全てを混同して、考えるべきでは無いだろう。

「それで、これからどうするかだな」

この話題は色々と鬼門となっているのか、翔太郎さんが、当初の話題に戻す。

「ええ、それが問題なんですよね。メルトが言っていた言葉は抽象的過ぎて、俺達から動こうにも……」

こっちには、劇中でも大活躍していた、フィリップ君の地球（ほし）の本棚という凄い裏技があるが、それも答えに辿り着くキーワードを揃えないと、何の意味も成さない。

現在持っている情報はあまりにも少なすぎて、現状では地球の本棚は使えないだろう。

「取り敢えず俺は、仕事の調査を続けるぜ。ドーパントと、そのメルトって奴が、一緒に行動しているなら、何かの糸口になるかも知れねえからな」

翔太郎さんが、そう言ってガレージを出ようとしたその時である。

「……探してほしい人がいます」

今まで沈黙を守り続けていた、なのはちゃんが言葉を発した。

「これがお前達が言っていた力か……」

「ふふ、どうだい？これが君の新しい力だよ」

声の主である、青年と藍色の怪人以外には、人の気配が一切感じられない、廃墟となったビルの一室で、青年は自身の力の確認作業を行っていた。

「悪くは無いな」

「気に入ってもらえたみたいで嬉しいよ」

青年の回答に対して、藍色の怪人、オーバーは満足そうに頷く。

「それで、お前達はこれを使って、俺に何をさせたいんだ?」

自身の事である筈なのに、青年はまるで他人事の様に振舞いながら、今更な質問をオーバーにぶつける。

「簡単な事だよ。君はその力を使って戦ってくれれば良いんだ」

「誰と戦えば良い?」

「まあ、そう急がないでよ。物事には、順序があるんだし……まずはもっとその力に慣れてもらわなくちゃ……」

オーバーがそう言うと、藍色の球体、暴走プログラムの一種を三つ程、地面に放り投げる。

放り投げられた暴走プログラムは、地面に転がると同時に、発光現象を引き起こして、徐々に人型へとその姿を変えて行く。

やがて発光現象が終わりを迎える。

今、彼等の前に佇むのは、人と似て異なる異形の存在。

「取り敢えず、今の君が戦うのは、こいつ等さ」

オーバーは両手を広げながら、軽い口調で青年に今自分がこの場で

作り上げた、ホルダーモドキ達と戦えと強要する。

「……良いだろう」

しかし青年は、オーバーの突然の要求に対しても、眉一つ動かさずに淡々と己のすべき事を実行に移す。

何処から取り出したのか、赤と黒に銀を基調とした、青年の片手に納まる程度の大きさをした、金属製と思われる物体を手に取り、それを青年は自身の腹部へと宛がう。

宛がわれた瞬間、その物体ロストドライバーは瞬時にベルトの形状へとその姿を変化させる。

続いて青年が右手に握り込みながら取り出したのは、紫色をした、一本のガイアメモリ。

本来ならば内包された地球の記憶の一部のイニシャルが刻まれている筈だが、青年が持つガイアメモリには、数字の【0】が表記されていた。

『サイファー』

青年がガイアメモリのボタンを押すと、電子音声が流れる。

音声が流れるのを確認した青年は、ガイアメモリを頭上に回転を加えながら放り投げて、呟く様に力ある言葉を紡ぐ。

「……変身」

言葉が紡がれた次の瞬間、空中に放り投げられたガイアメモリが、ロストドライバーの右側に設けられたスリット部分に、吸い込まれる様に装填される。

『サイファー』

そなまま青年が右手で、ドライバーを展開させると、再び電子音声が流れて、青年の身体を金属片が覆う様にして、その姿を人ならざる存在へと、その姿を変えていく。

全体的に鮮やかな紫のボディーに、四肢に螺旋状に伸びた緑色のライン。

その緑のラインは、肘と膝の部分で鋭い突起を形成し、鬼を彷彿とさせる額の赤い角飾りに、闇の様に黒い二つの複眼が、見た者に底知れない恐怖を刻み付ける事だろう。

「それじゃあ、早速戦ってもらおうかな」

青年が変身を完了させたのを見届けたオーバーは、片手で合図を送り、ホルダーモドキ達を、青年、改めサイファーにけしかける。

「ふん！」

サイファーは、迫り来るホルダーモドキ達の攻撃を避ける事無く、その身に受けた。

「……足りないな」

しかしホルダーモドキ達の攻撃では、サイファーにダメージを負わ

せる事は叶わなかった。

回避行動すらせずに、攻撃を受けながら呟いたサイファーは、一度面倒臭そうに首を回してから、ホルダーモドキ達に、容赦無く拳を叩き込んでいく。

吹き飛ばしたホルダーモドキとは別の個体が背後から強襲を仕掛けてくるが、サイファーは振り返りもせずに、垂直の蹴りを繰り出して、相手を沈黙させる。

「……お前達程度じゃ、俺の証にはならない」

自身が吹き飛ばしたホルダーモドキ達を見ながら、吐き捨てる様に呟いたサイファーは、ロストドライバーに装填されていたガイアメモリを引き抜くと、ベルトの右腰部分に設けられている差込口に装填し直す。

『サイファーマキシマムドライブ』

ベルトから放たれる光は両腕に集約されていき、肘の突起が光を帯びて更に鋭く長く研ぎ澄まされる。

其処へ最後の抵抗とばかりに、ホルダーモドキ達が、サイファー目掛けて突進して来るが、そんな事もお構い無しに、サイファーは肘の突起を外側に向けて、自身を軸として凄まじい勢いで回転しホルダーモドキ達を、容赦無く切り刻んだ。

切り刻まれたホルダーモドキ達は、連鎖反応を起こすかの如く、次々と爆発を起こして、その全てが塵に返って行った。

「凄いね。もうその力を使いこなすなんてさ。やっぱり君を選んで正解だったよ」

先程までの戦いを、終始観戦していたオーバーは、サイファーに軽い口調の賛辞の言葉に気の無い拍手を送る。

「もう茶番は良いだろう。早く本当の戦い場に、俺を連れて行け」

オーバーの賛辞に対してサイファーは溜息を吐きながら、次の戦いの場を求めて言及した。

「良いよ。その調子なら期待出来そうだし、今から連れて行ってあげるよ」

「最初からそうすれば良い」

「随分な自信家だね君は。それとも……」

「何が言いたい？」

「……いや、何でも無いさ。君が僕達の言う事を聞いて、戦ってくれるのなら、個人的な感情には興味無いしね」

オーバーはサイファーと言葉を交わしながら、部屋の出口に向けて歩き始める。

「……」

それに対しサイファーは数歩遅れて、無言でオーバーの後ろについて歩き出す。

「ああ！一つ言い忘れてた」

部屋を出る直前に、オーバーが思い出す様に言葉を発して、サイファーに振り向く。

「……何だ？」

「君のその姿だよ。それは仮面ライダーって言うから、これからはそう名乗る様にしてね」

オーバーはこの場で取って付けた様な言い回しで、サイファーに言い聞かせ始めた。

「俺に名前は必要無い」

「そう言わないでよ。仮にも今は僕達仲間な訳なんだし、名前位無いと困るでしょ？」

「……好きに呼べ」

「ふふ。それじゃあ君は、今日から仮面ライダー。仮面ライダーサイファーで決まりだね」

オーバーは相変わらずの軽い口調で、青年の名前を半ば無理矢理に、決定してしまう。

「……一つだけ聞いておきたい」

「何かな？」

「お前が言う仮面ライダーとは何だ？」

サイファーは先程から聞き慣れない単語について聞いてみる。

興味は無かったが、仮にも自分の名前だと言うのならば、最低限の意味だけは、理解しようとした為かもしれない。

「……ああ。仮面ライダーの意味か。実は僕も良く分かって無いんだけどね」

この質問に対して、名付け親とは思えない言葉をオーバーは吐き出した。

その様子に、サイファーは仮面の下で、呆れた様子の溜息を吐く。

「……でも、一つだけ僕にも分かる事があるよ」

サイファーが溜息を吐いた直後、オーバーがその身に纏う雰囲気を僅かばかり変えながら、続きを口にする。

「その名前は、君が今から戦う敵の名前さ」

オーバーの様子を見て、サイファーは安堵した。

それと同時に、暗い歓喜の感情が身体の奥底から湧き上がるのを感じる。

やはりこの異形の存在達に着いて来たのは間違いじゃなかったと。

これで己の願いが果たされるかも知れない。

常人には理解し難い屈折した感情ではあったが、それは唯一青年を今現在に至って正気に繋ぎ止めている、人としての最後の感情だった……

**５０万ＰＶ突破記念作品　仮面ライダーシード＆仮面ライダーＷ　ミックスワールド**

なのは？の事情は次回以降に持ち越しです。

## ５０万ＰＶ突破記念作品　仮面ライダーシード＆仮面ライダーＷ　ミックスワールド

まだまだ導入部分ですが、楽しんでいただけたら幸いです。

「探して欲しい人が居るんです」

なのはちゃんが、真剣な表情で、このガレージに集まっている俺達に訴えかけてきた。

『先程から気になっていたのだが、今日のなのは嬢は、普段と随分雰囲気が違わないだろうか？」

普段から接する機会の多いメカ犬が、先程から俺もずっと気になっていた事を口にした。

「どういう事だい？」

全く事情を知らないフィリップ君が、俺達に説明を求めてくる。

「この子は、なのはちゃんと言って、俺の幼馴染なんですが、ドーパントに襲われた辺りから、どうも様子が変なんですよ……」

俺は自分で分かる範囲内で、翔太郎さんとフィリップ君に、何があったのかを説明した。

「最初は襲われた時のショックで、一時的に混乱しているのかと思っていたんですけど……」

説明の最後をそう締め括った俺は、改めてなのはちゃんに視線を向ける。

見慣れた顔の筈なのに、何故か今のなのはちゃんの表情は、全く別人の様に思えてならない。

「まあ、色々と込み入った事情があるみたいだが、俺はさっきも言った通り、調査に行って来るぜ。どっちにしても、今は出来るだけ情報が必要だからな」

翔太郎さんは頭に被った帽子の位置を直しながらそう言うと、今度こそガレージを後にする。

この場に残った俺達は改めて、なのはちゃんが先程言った言葉の意味を問い質す事にした。

「話しを戻すけど、誰を探して欲しいの？それに君は……なのはちゃんじゃ無いよね？」

『何を言っているのだマスター！？』

俺がした質問に対して、メカ犬が驚愕の声を上げる。

確かに今のなのはちゃんは、何処か何時もと違う部分が見受けられるが、その容姿は間違い無く、なのはちゃん本人だ。

それはほぼ毎日顔を見ている俺が言うのだから、間違い無いだろう。

だからこそ、先程の俺の発言に対して、メカ犬があれ程の反応を示したのである。

ならば何故俺は、こんな質問をしたのか。

俺は少し前に、ホラーハウスでした、なのはちゃんとのやり取りを思い出す。

以前から騒がれていた幽霊の噂に、俺には聞こえなかった声が、なのはちゃんにはずっと聞こえ続けていたという事実。

そして今目の前に居るなのはちゃんの、まるで別人と思える言動……

非科学的ではあるし、何の根拠も有りはしない推論だが、俺はそれを一つの真実だと仮定して、話しを続ける。

「なのはちゃん……いや、君は最近あのホラーハウスで有名になっていたっていう幽霊なんじゃないかな？」

『マスター！？』

「それは興味深い話だね……」

俺の発言に、メカ犬とフィリップ君が、其々に反応を見せる。

「……」

この場に居る全員の注目を浴びながら、暫く無言で何かを考える様な表情をしていた彼女だが、やがてその重たい沈黙に終止符を討つ。

「……私は気付いたら、あの場所に居ました。私自身が誰なのか、どうしてこの女の子の身体に入ってるのか、残念ですが、説明する事も出来ません……ただ」

「ただ？」

「一つだけ覚えている事があります。私にはもう一度だけ、会わなければいけない人がいるんです」

彼女は胸の前に両手を持って握り込むと、まるで天に祈りを捧げる様な仕草で、俺達に語りかけてくる。

「無理を承知で、お願いします。私をもう一度あの人に……兄さんにもう一度会わせてほしいんです……」

「君はそれ以外に、何も覚えていないんだね？」

「……はい」

フィリップ君が現状を確認する為に質問をして、なのはちゃんに憑いた幽霊の彼女は、その質問に対して肯定の返事を返す。

「俺も聞きたいんだけど、今の君が動かしている身体の本来の持ち主……なのはちゃんはどういう状態になってるのか分かるかな？」

俺は一番の懸念事項を目の前にいる、なのはちゃんの身体を借りた幽霊に聞く。

「あの子は今……眠ってます」

「眠ってる？」

「はい。多分ですけど、私とこの女の子の波長が完全に合わさったから、私はこの身体に引き寄せられたんじゃないかと思います……気付いたらこうなっていたんで、これ以上は上手く説明出来ません

けど」

「なのはちゃんは大丈夫か分かる？」

たどたどしくも質問に答えてくれる幽霊に対して、俺は更に質問を続ける。

「今の所はこの子の意識は眠っているだけなので、大丈夫だと思います。ただ、どうやってこの子の身体から出れば良いのか分からないので……」

そこまで言うと、なのはちゃんの表情を曇らせて、幽霊は言葉を濁してしまう。

『俄かに信じ難い話ではあるが、本当になのは嬢に、幽霊が憑いているという事か』

俺と幽霊のやり取りを聞きながら、メカ犬がなのはちゃんを観察する。

ここではあえて言葉にする事はしないが、俺にとっては、メカ犬だって俄かには信じられない未知の物体Ｘだ。

はっきり言ってしまえば、異世界からやって来た超技術を搭載した犬型ロボットも、現代知識を有した一般人の理解を超えた存在だという意味では、幽霊と対して変わりはしないだろうと俺は思う。

「検索してみよう」

更にメカ犬の隣では、フィリップ君が、地球の本棚で、幽霊につい

ての検索を始めてるし……

これは俺が翔太郎さんの代わりに突っ込んだ方が良いんだろうか？

俺はこの場には居ない、鳴海探偵事務所の若き所長が持つ、緑のスリッパに想いを馳せる。

「……あの」

我が道を行くフリーダムな一人と一匹を見ながら溜息を吐いていると、なのはちゃんに憑いた幽霊が、遠慮しがちに、俺の服の裾を引っ張ってくる。

「やっぱりこんな身勝手なお願いは、聞いて貰えませんか？」

そう聞いてきた幽霊の表情は、俺が見たくない幼馴染の泣き顔へと変わりつつある。

最初から選択の余地は無かったが、こんな顔を見せられたら、もう迷う事も出来ない。

「協力するよ。俺に何が出来るか分からないけど、君のお兄さんを、一緒に探そう」

「……本当ですか」

俺が返した言葉を聞き、幽霊の表情は一転して華やぐ。

自分でもつくづく思うが、俺は本当にこの表情には弱いみたいだ。

一度だけ溜息を吐いて、気持ちを切り替えた俺は、話を再開する。

「それで君は、さっき何も覚えていないって言ったけど、せめて何か手掛かりになる様な事は覚えてないかな？」

「……手掛かりですか」

その言葉に幽霊は、考え込みながら首を捻る。

「検索が終了した！」

暫く幽霊が何かを思い出すのを待っていると、突然フィリップ君が、叫び声を上げる。

何時の間にかホワイトボードには、幽霊についての情報を幾つも書き上げられており、それでは足りなかったのか、床にまで文字が綴られていた。

「ん？」

所狭しと書き殴られたメモを見ていた俺は、其処に気になる一文を見つけた。

その文章について、フィリップ君に確認をしようとしたのだが、その直前で事態は急速な変化を向かえる。

「どうやら、何か翔太郎に進展があったみたいだね……」

フィリップ君の腹部には、浮かび上がってきたダブルドライバーが装着されている。

「僕の身体を頼むよ」

俺にそう言うと、フィリップ君は、Cのイニシャルが刻まれたガイアメモリ、疾風の記憶を宿すサイクロンメモリを取り出して、メモリに付いたボタンを押す。

『サイクロン』

音声が流れるのを確認しながら、フィリップ君は腕を回してポーズを決める。

「変身」

力強くそれを言葉にしたフィリップ君は、ダブルドライバーの右側のスロットに、サイクロンメモリを差し込んだ。

すると差し込んだ筈のサイクロンメモリは、光に包まれながら、忽然としてその姿を消してしまう。

「よいしょ！」

それと同時に意識を手放して倒れていくフィリップ君を、事前に頼まれていた俺は、身長差があるので、倒れていくフィリップ君の腰を支えながら、頭をぶつけない様にして、出来るだけ慎重に床へと下げていく。

『マスター。彼は一体どうしたのだ？』

事の一部始終を見ていたメカ犬が、俺に質問する。

出会って間もないが、メカ犬なりにフィリップ君を心配しているのだろう。

「大丈夫だメカ犬。フィリップ君は戦いに行ったんだよ」

『戦いに？』

「ああ」

俺はメカ犬の質問に答えながら、今頃は激しい戦いを繰り広げているであろう、二人の無事を心から願った。

「計画は順調に進んでいる様ですね」

「ふん。多大な支援を感謝していると、感謝の言葉を送れば満足か？」

何処かの研究組織と思わしき場所で、ビジネススーツに身を包んだ

無表情な女性と、灰色の身体を持つ、異形の怪人が対峙して会話をしているという、異常な光景が繰り広げられていた。

「その必要はありません。これは双方の利害が一致した事により、正式に行われたビジネスによるものですので」

女性はその無表情を崩す事無く、抑揚の無い声で返答する。

「それならば、それで構わん。お前達が提供してくれたガイアメモリという物は、仮面ライダー達の意識を背けるには絶好の餌だからな。精々利用させてもらうさ」

「私達は試験開発段階の物と、廃棄が決定していた不良品を渡したに過ぎません。データを取らせて貰えるのであれば、別にどう使っていただいても問題はありません」

「ふん。ならばもう一つ、用意して貰いたいものがある」

「何ですか？」

灰色の怪人と無表情な女性が繰り広げる淡々とした会話の中で、一つの新たな提案が出される。

「……分かりました。此方で準備致します」

「頼むぞ」

これで全ての会話が終了したのか、女性は踵を返すと、灰色の怪人に背を向けて歩き始めた。

「……一つお聞きしますが、これで一体何を始めようとしているのですか？」

無表情な女性は、途中で振り向き、灰色の怪人に対して、去り際に疑問の言葉を口にした。

「ただの実験だ。それ以上でも、それ以下でもない」

その問いに対して、灰色の怪人は淡々と返答する。

「……そうですか」

女性の声と表情からは、感情が読み取れないが、その答えを聞くと、再び背を向けて今度こそこの場を後にした。

それを見送ってから、灰色の怪人は、己の暗い歓喜の感情を押し殺しながら呟く。

「……もうすぐだ。次の段階の実験が成功すれば、また一つ目標に近づく事が出来る」

灰色の怪人は、己の欲望が満たされるその瞬間を待ち侘びながら、一人静かに歓喜の声を上げた。

「ここがウォッチャマンが、言っていた場所か……」

少し時間は遡り、鳴海探偵事務所のガレージを出て、調査に向かった翔太郎は、少し前まで居た風都ランドパークの園内にある、管制塔の前に立っていた。

この管制塔では、風都ランドパーク内の監視及び、電気系統の管理がされている、何処の遊園地にでもある様な、珍しくも無い建物なのだが、ウォッチャマンの情報によると、この管制塔の中に明らかにここのスタッフでは無い、怪しい人物が入っていったという。

普通ならば警察に連絡等をするのが、妥当なのだが、それはある理由で出来ないでいた。

それは今回引き受けた依頼にも、大きく関係している。

「見た所、怪しい場所じゃないけどな」

そう言いながら翔太郎は、カタツムリを模した形をしたゴーグルを取り出す。

そのゴーグルの正式名称はデンデンセンサー。

主に鳴海探偵事務所のメンバーが使う、ガイアメモリの技術を組み込んだ特殊ツール、メモリガジェットと呼ばれるシリーズの一つで、

様々な用途に使用されるのだ。

更にこのメモリガジェットは、同色のガイアメモリを元に作られた、ギジメモリを差し込む事で、更に特殊な力を発揮する。

例を挙げるとすれば、先程翔太郎が取り出した、デンデンセンサー。

これは、そのまま使えば普段は目に見えない物を捕捉出来る上に、ギジメモリを差し込めば、ライブモードという完全な自律行動が可能となって、カタツムリの形をとりながら、頭部のセンサーを使い、あらゆる光や波長をキャッチして、使用者に伝える事が出来るのである。

「ビンゴだな」

ゴーグル越しに、建物内部を見た翔太郎は、素早く次の行動に移す。

取り敢えず出入り口と思われるドアを開けようと試みるが、内側から鍵が掛かっており、開かない。

続いて翔太郎は、五階建てとなっている管制塔の外付けされた階段を上がって行き、その途中のドアが開いていないかを全てチェックする。

しかし結果は、全てのドアに鍵が掛かっていて、内部に侵入する事は叶わなかった。

だが、翔太郎は外の階段を上る最中に、三階の窓が開いていた事を確認していた。

「あそこから行くしかないか……」

翔太郎は覚悟を決めて、左腕に装着している腕時計型のメモリガジェット、スパイダーショックを先程窓が開いているのを確認した所に目掛けて、ワイヤーを射出する。

付近に見ている人間がいない事を確認してから、翔太郎は開いていた窓の先に引っ掛けたワイヤーを命綱にして、飛び移る。

何とか無事に管制塔内部へと辿り着いた翔太郎は、伸ばしたワイヤーを元に戻してから、帽子の位置を正して、気合を入れ直すと、先程デンデンセンサーで確認した、目的の場所へと歩き出して行った。

## ５０万ＰＶ突破記念作品　仮面ライダーシード＆仮面ライダーＷ　ミックスワールド

次回はＷが活躍する予定です。

## ５０万ＰＶ突破記念作品　仮面ライダーシード＆仮面ライダーＷ　ミックスワールド

今回は一話丸々Ｗが主役な回ですが、楽しんでいただけたら幸いです。

「やっと見つけたぜ」

管制塔の奥で、翔太郎は目の前に居る男性に宣言した。

翔太郎の目の前に居る男性は、見た目は十代後半という所で、男性というよりは、少年と言った方が適切かも知れないし、もしかしたら学生なのかも知れない。

「……何でここが分かった？」

少年は翔太郎が、ここに居る事を不思議に思い、警戒しつつも疑問を口にした。

「明らかに、ここのスタッフじゃない人間が、関係者以外立ち入り禁止の施設に入って行くんだ。誰かが見ていたとしても、不思議じゃないだろ」

質問に答えた翔太郎に対して、少年は悔しげに舌打ちをする。

「お前！あの女の差し金だろ！？」

半ば自暴自棄なりながら、少年は叫ぶ。

「おいおい。実の姉をあの女は無いだろ？沢渡和也（さわたりかずや）」

今回の依頼主、沢渡登紀子と、今現在、翔太郎の目の前に居る少年、沢渡和也は実の姉弟である。

鳴海探偵事務所に依頼した内容はこういったものだった。

家出した弟を連れ戻してほしい。

原因は両親との、些細な意見の行き違いだった。

しかし和也は売り言葉に買い言葉で、勢いのまま、家を飛び出して行ってしまった。

登紀子と和也の父親は、社会でも目立つ立場の人間であり、あまりこの事を表沙汰にはしたくない。

最初の頃は、一人暮らしをしている登紀子が和也を庇い、家に居候させていたのだが、最近になって和也の様子が何処か変に思うようになり、問い質そうとする直前に、再び家を飛び出してしまったのである。

しかし他に行き場所が無かったのだろう。

和也はある理由から、この風都ランドパークを根城にし始めた。

何故一介の少年にそんな事が出来たのか。

それはこの風都ランドパークの経営者が、沢渡登紀子その人だったからである。

登紀子の実の弟である和也は、登紀子の家を飛び出す少し前まで、この風都ランドパークで、アルバイトをしていた。

どうもその間に、パーク内施設の鍵を幾つかコピーしていた様なのである。

アルバイトを止めたのも、それが発覚したからだ。

身内という事もあり、警察には突き出さなかったのだが、登紀子が和也からコピーされた鍵を取り戻す前に、和也は第二の逃亡をしてしまった。

ここまでの話を聞けば、何て支離滅裂で恩知らずな奴だと思われるが、和也を良く知る人達は、揃えて首を横に振る。

本来の彼は、繊細な性格をしており、そんな事が平気で出来るとは到底思えない。

沢渡和也という人間を良く知る人達は、そう声を揃えて言う。

突然人が変わったとしか言い様の無い行動をする和也だが、翔太郎には一つの心当たりがあった。

「く、来るな！来るなよ！！！」

一歩ずつ近づいてくる翔太郎に、和也は半狂乱になりながら、叫び続ける。

そして恐怖心が、最高に達したのか、和也はポケットからある物を取り出す。

「やっぱり持っていやがったな」

それを見て翔太郎は、自分の予想が当たった事への喜びと、和也に持っていてほしくなかったという二つの感情を心に秘めながらも、更に一歩ずつ近づいていく。

和也が取り出したのは、一本のガイアメモリ。

恐竜の化石を彷彿とさせるフォルムに、Aのイニシャルが刻まれている。

「やってやる……やってやるんだ……」

そう何度も呟きながら、ガイアメモリのボタンを押す。

『アノマロカリス』

音声を辺りに響かせた和也は、首の襟元を開き、首の側面に刻まれた黒いコネクタ部分に、メモリを差し込んだ。

メモリはコネクタを通して、和也の体内へと吸収されて、和也自身の身体にも大きな変化をもたらす。

その姿はまさに異形。

ガイアメモリに内包された、古代に生きた生物、アノマロカリスの姿を色濃く反映させた、ドーパントへと自身の姿を変質させる。

ドーパントは翔太郎に狙いを定めて、口から圧縮された水弾を発射した。

「危ねえ!?」

迫り来る水弾を辛うじて避けた翔太郎だが、常人を遥かに超えた力で、発射された水弾は、後ろの壁を跡形も無く破壊する。

「ちょっと、お灸を据えないと駄目みたいだな」

後ろに開いた大穴を見ながら、翔太郎はドーパントを見据えつつダブルドライバーを腹部にかざす。

『ジョーカー』

続いて取り出したジョーカーメモリのボタンを押して、翔太郎は振りかぶり、ポーズを決める。

「変身」

ダブルドライバーの右側のスロットに、サイクロンメモリが転送され、翔太郎はそれを更に奥へと押し込みながら、左側のスロットにジョーカーメモリを装填して、ドライバーを展開させる。

『サイクロン』

『ジョーカー』

疾風と切り札の音声が再び流れると同時に、翔太郎は周囲に風を巻き起こしながら、風の街、風都を守る二人で一人の仮面ライダー。

仮面ライダーWへと変身を果たす。

「「さあ、お前の罪を数えろ」」

サイクロンメモリと共に転送された、フィリップと同時に、Wは目の前のドーパントに己の過ちを問う。

「くそおおお！！！」

既に理性が崩壊しつつあるドーパントは、形振り構わずにWへ突進を試みる。

「「は！」」

しかしWはドーパントの突進の威力を上手く受け流して、先程ドーパント自身が開けた大穴目掛けて、ドーパントを外に投げ飛ばす。

ドーパントを投げ飛ばしたWもすぐに、穴へと飛び込んで、追撃を仕掛ける。

投げ飛ばされてまだ態勢を整えられずにいるドーパントに対して、Wは拳と蹴りの連打を叩き込んでいく。

「うあああああああ！！！！！」

最後に強烈な蹴りを喰らって吹き飛ばされたドーパントだったが、雄叫びを上げながら、すぐさま立ち上がり、口からの水弾を連続でWへと撃ち出す。

「追い込まれて完全に理性が飛んでやがるな」

がむしゃらとも言えるドーパントの連続攻撃を避けながら、翔太郎は今の相手の心理状態を観察する。

「翔太郎。このままじゃ近づくのも難しい。僕の方のメモリを変えよう」

それに対して、フィリップが一つの提案をする。

「ああ！」

相棒の意図を瞬時に読んだ翔太郎は、展開されていたドライバーを一旦閉じて、サイクロンメモリを引き抜くと、代わりに別のガイアメモリを取り出した。

『ルナ』

三日月を模したＬのイニシャルが刻まれたガイアメモリ。

それをサイクロンメモリと同様にスロットに装填して再び展開させる。

『ルナ』

『ジョーカー』

すると先程までのＷに変化が起こり、右半身のカラーリングが緑から黄色へと変更される。

変化が完了した直後、ドーパントの放つ無数の水弾が、Ｗへと降り注ぐ。

「うおおおお！！！」

しかしその直前に、Wは右腕を鞭の様に振り回す。

するとその腕は、伸縮自在に伸び縮みしながら人体の稼動限界を軽く凌駕して、迫り来る水弾を次々と叩き落して行く。

ルナメモリに内包された記憶は幻想。

その効果はまさに変幻自在と言える。

「「せやああ！！！」」

Wがその場で右足による回し蹴りを繰り出す。

本来ならば当たる筈の無い距離だ。

しかしWの右足はゴムの様に伸びて、見事にドーパントの頭部に一撃をお見舞いした。

「もう一丁！」

続いてWは右腕を足と同様に伸ばして、連続攻撃を叩き込む。

「一気に行くよ翔太郎」

「分かってるさ」

フィリップの声に答えながら、翔太郎は先程と同じ様に、展開していたドライバーを閉じて、ルナメモリを引き抜くと、更にジョーカーメモリも引き抜いて新たなガイアメモリを二本取り出してボタン

を押す。

『メタル』

『ヒート』

他のメモリと同じ要領で、メタルメモリを左側に、ヒートメモリを右側のスロットに差し込むと、Wはまたしてもドライバーを展開させた。

『ヒート』

『メタル』

音声が流れると同時に、Wの右半身は燃える様な赤に、反対の左半身は金属の重厚感が漂うメタリックカラーへと変化を見せる。

そして背中には、闘士の記憶を秘めたメタルメモリの専用武器、メタルシャフトが生成される。

メタルシャフトを引き抜いたWは、先程の攻撃で弱っているドーパントに肉薄して畳み掛ける。

更に熱の記憶を宿したヒートメモリの効果により、右拳に炎を纏うと、その拳を何度も叩きつけて吹き飛ばす。

「翔太郎。メモリブレイクだ」

かなり弱っているドーパントを見て、フィリップがトドメの合図を送る。

「これで決まりだ」

翔太郎はフィリップの合図に促されながら、ドライバーのメタルメモリを引き抜いて、メタルシャフトのスロットに差し込む。

『メタルマキシマムドライブ』

凄まじいエネルギーが、メタルシャフトに注がれて、シャフトの両端からは、激しい炎が噴出される。

よろけながらも何とか立ち上がろうとするドーパントに対して、Wは炎を宿すメタルシャフトを構えて一気に駆け出した。

「「メタルブランディング」」

必殺の一撃が、ドーパントに直撃して、大きな爆発を引き起こす。

爆発が晴れると其処に居たのは、メモリブレイクによって、ガイアメモリが破壊されて元の姿に戻って気絶している和也と、メタルシャフトを背中に戻しているWだった。

これで今回の依頼は終わったと、翔太郎とフィリップが思った、その時である。

少し離れた位置から、拍手が聞こえて来た。

「強いね君。さっきの戦いを見ていたら、僕もワクワクしてきたよ」

拍手がする方向から、軽い口調の声も一緒に聞こえてくる。

その方向に居るのは、藍色の身体を持つ異形の存在だった。

「お前は……」

「初めまして。違う世界の仮面ライダー。僕の名前はオーバーだよ。メルトの仲間って言えば少しは伝わるかな？」

警戒するWに対して、オーバーは何時も通りのマイペースで、話を進めていく。

「どうやら君も、純君が言っていたホルダーとやらの上位存在って奴で間違い無いみたいだね」

オーバーの話を聞いて、フィリップが最も高いと思える可能性を口にする。

「ふふ。話が早くて助かるよ。実はね、今日は僕のお友達を紹介しに来たんだ」

そう言ってオーバーは横手に手を振りながら、出て来て良いよと声を管制塔の方向に上げる。

すると建物の影から、一人の青年が、ゆっくりと此方に向かって歩いて来た。

見た目は黒髪黒目の、純日本人。

正確な所は定かでは無いが、恐らく年齢は翔太郎とさほど変わらない様に見える。

パッと見は、日本の何処にでも居る様な普通の青年に見えなくも無い。

しかし翔太郎とフィリップは、出会った一瞬で気付いてしまった。

この青年が纏う、異常なまでの殺気を……

それは先程まで話していたオーバーの比では無い。

しかもその殺気は、明らかにWへと向けられている。

「気を付けるんだ翔太郎。彼からは得体の知れない何かを感じる」

「……ああ」

二人は互いに警戒を更に強めて身構える。

「お前は俺の証になるか？」

青年は殺気を放ち続けながら、口を開きそれだけを言葉にした。

それは質問だったのか、ただの独り言だったのか、判断に困る程に、青年の言葉にはその身から放つ殺気とは裏腹に全く覇気が感じられない。

そして青年は、自身が紡いだ言葉に対しての返答を待たずに、次の行動へと移行する。

ロストドライバーを取り出した青年は、自身の腹部へとそれを宛が

いベルトの形状にした。

続いて【０】の表記が施された紫のガイアメモリを取り出してボタンを押す。

『サイファー』

音声が流れるのを確認した青年は、ガイアメモリを頭上に放り投げる。

「……変身」

小さく言葉を紡いだ直後に、放り投げたメモリが、地球の重力に従って落下して、ロストドライバーのスロットへと装填される。

青年はそのままドライバーを展開させて、変身は完了した。

「その姿は！？」

変身した青年の姿を見た翔太郎が驚愕の声を上げる。

「ふふ、驚いてくれたみたいで、嬉しいよ。わざわざ紹介した甲斐があったね」

翔太郎の反応を見て、オーバーが楽しそうな声で笑う。

「……俺の名前は、仮面ライダーサイファー。お前の敵だ」

全身を覆う紫のボディーに、鬼を彷彿とさせる二本の角飾りに、漆黒の複眼。

四肢に伸びる螺旋を描いた緑のラインと、その先の肘と膝に突き出した鋭利な突起が、底知れない重圧を見る者全てに与えている。

サイファーは一気に駆け出して、Wへ強襲を仕掛けてきた。

「くっ！？」

咄嗟に反応したWはメタルシャフトで、何とかサイファーの拳を受け止めるが、その一撃は凄まじく重い。

「ヒートメタルのパワーですら、ここまでの衝撃を受けるとは……相当な力があるみたいだね」

サイファーの一撃を受け止めたメタルシャフトを握っていた腕が、かなり痺れている事を確認しながら、フィリップは、目の前の強敵を分析し続ける。

「僕を忘れてもらっちゃ困るよ」

「なに！？」

サイファーが攻撃した続け様に、オーバーが自ら生成した剣で、Wへと追撃を仕掛ける。

「くそ！二対一は辛いな……」

相手が通常のドーパントならばまだしも、今戦っているのは、ホルダーの上位存在だという未知の敵に、ロストドライバーを使って変身した仮面ライダーを名乗る奴だ。

かなりの強さを誇るこの二人を相手に、Wだけで戦い続けるのは、正直に言ってかなり厳しいだろう。

「翔太郎。こっちも増援を呼ぼう」

何とかオーバーとサイファーの攻撃を裁きながら、フィリップが新たな提案を出す。

「増援って誰を呼ぶつもりだフィリップ！？今は照井の奴も風都にいないんだぞ」

フィリップの提案に、翔太郎はそもそもの問題点を問い質す。

「翔太郎。今はもう一人だけ居るじゃないか。この風都に僕達以外の仮面ライダーが」

抗議の言葉を言い続ける翔太郎に対して、フィリップは余裕の笑みを浮かべながら答えを返すと、ヒートメタルから、サイクロンジョーカーにメモリチェンジして、一旦後ろに跳躍する事で、一時的にではあるが、サイファーとオーバーの連続攻撃から逃れる事に成功する。

「それじゃあ、早速呼ぶよ」

フィリップはそう言って、右手にスタッグフォンを取り出して、操作をし始めた。

この難局を乗り切る為の、逆転の一手と信じて。

1968

**５０万ＰＶ突破記念作品　仮面ライダーシード＆仮面ライダーＷ　ミックスワールド**

次回はあのマシンが動きます。

多分……

# ５０万ＰＶ突破記念作品　仮面ライダーシード＆仮面ライダーＷ　ミックスワールド

もうそろそろ、物語は核心部分に入って来ますので、楽しんでいただけたら幸いです。

「突然倒れましたけど、この人は大丈夫なんでしょうか？」

なのはちゃんの身体に憑いた幽霊が、Ｗに変身した事により、現在は意識を手放して一見すると、気絶している様に見えるフィリップ君を、心配そうに見詰めている。

「フィリップ君は心配しなくても大丈夫だよ。なのはちゃん……じゃなくて、え～と」

安心させようとして俺は声を掛けるが、この幽霊を何と呼べば良いのか咄嗟には思いつかず、言葉を途中で濁す。

『うむ。兄がいるという以外の記憶が無いとは言っていたが、自分の名前も覚えていないのか？』

俺と幽霊のやり取りを見ていたメカ犬が、意見を挟む。

メカ犬の意見に対して幽霊は、なのはちゃんの眉を寄せて、目を瞑り考え込む仕草を見せた。

暫くその表情を続けていた幽霊だったが、やがて諦めたのか、目を開けてメカ犬と俺に向き直る。

「ごめんなさい。申し訳ないんですが、何も思い出せないんです……」

幽霊は本当に申し訳なさそうに、俺とメカ犬に謝罪の言葉を口にし

た。

出来れば色々と思い出してほしいとは思うが、とてもそんな事を言える雰囲気ではない。

「あまり気に病まない方が良いよ……あ！そうだ！取り敢えずだけど、君の名前を考えよう。何時までも呼び名が無いっていうのもなんだからね」

俺はこの雰囲気を払拭する為に、新たな提案を出す。

「私の名前ですか？」

『それは良い考えだなマスター』

その場の空気を読んだメカ犬も、俺の提案に賛同して、雰囲気を幾分かではあるが、軟化させる事に成功した。

さて、問題はここからだ。

この話題の言いだしっぺである俺が、名前を決めなくては、この場を完全に上手く収める事は出来ないだろう。

名前を考えること自体は良いのだが、はっきり言って俺に名前のネーミングセンスは皆無である。

それは我が相棒の名前からして理解してもらえると思う。

正直に言えば、今でこそ完全に定着してしまって、俺も含めて皆がメカ犬と自然に呼んでいるが、普通の感性を有しているならば、こ

んな名前をつける奴はいない。

直球勝負で潔いと言われる事もあるが、それは明らかに褒め言葉ではないし、大抵の人達からは幾度と無くメカ犬の名前を改名する様にと、言われたものだ。

しかし今はそれを言い訳に逃れる事も出来ない。

何気に期待を込めたなのはちゃんの表情と瞳で、幽霊が俺を見ているし、メカ犬は介入してくる気が無いのか、無言でこの場の成り行きを見守っている。

味方は誰もいない……

俺は必死に考える。

取り敢えず変な名前じゃなくて、この幽霊のイメージに合いそうな名前を。

そしてある意味で、ホルダーと戦ってる時以上に思考を巡らした俺に、一つの名前が思い浮かぶ。

「ユイ……ユイでどうかな？」

「ユイですか……」

俺の考えた名前を聞いて、幽霊は何度もその言葉を繰り返す。

「気に入らなかったかな？」

その様子を見て、もしかしたら気に食わなかったのではないかと思い、俺は恐る恐る感想を聞いてみる。

「いいえ。とても気に入りました。私は今この瞬間からユイです。宜しくお願いしますね」

幽霊、改めユイは笑顔でそう答えると、俺に握手を求めてきた。

「こっちこそ宜しく。俺は板橋純。それで隣にいるフルメタルな犬が、俺の相棒のメカ犬だ」

『マスターから紹介されたメカ犬だ。改めて挨拶をさせてもらおう』

俺は差し出された手を握り返して、メカ犬も含めた簡単な自己紹介をした。

今思えば、ここまで一緒に話を続けていて、自己紹介すらもしていなかったのだから、気づいた瞬間に何だか笑えてくる。

……それにしても幽霊、じゃなくて、ユイがこの名前を気に入ってくれて本当に良かった。

正直に白状すると、この名前もメカ犬に勝るとも劣らない程の捻り無しなど真中の剛速球なのである。

聡明な人達はすぐに気づいたかもしれないが、このユイという名前は、幽霊という単語の一番上と下の一文字を取って付けただけなのだ。

「言えないよな……」

俺は自分の名前が出来た事により、嬉しそうにメカ犬と会話を楽しむユイを見ながら、誰にも聞こえない様な小さな音量で呟いた。

一気に気の抜けたその瞬間。

このガレージに突如として、大きな変化が巻き起こった。

「どうしたのさ仮面ライダー！もっと僕を楽しませてよ！！！」

「くっ！？」

歓喜の叫びを上げながら、オーバーがWに剣を振り下ろす。

サイクロンジョーカーで、素早さが高められているおかげで、Wか何とかその一撃をギリギリで回避する。

「……遅い」

しかしその直後、避けた位置にサイファーが肉薄して、Wの左脇腹に強烈な蹴りを叩き込む。

「「ぐあ！？」」

避けた直後の隙を突かれたWは、防御が間に合わずに、後方へと吹き飛ばされてしまう。

「大丈夫かい？翔太郎」

「ああ。まだまだ行けるさ」

迫り来るオーバーと、サイファーを迎え撃つ為に、Wは先程のダメージがあるのか、足元をふらつかせながらも、何とか立ち上がる。

「そろそろ終わりにしようかな？」

「お前も俺の証になれ……」

ふらつくWを見て、この戦いに決着をつける好機とみたのか、オーバーとサイファーは更なる攻撃を仕掛けようと、Wに駆け寄る速度を増していく。

Wにその凶刃が届こうとしたその時、何処からか、風都ランドパークのアトラクションの音とは明らかに違う、爆音が周囲に木霊した。

その音はこの戦いの場所から少し離れた位置から聞こえてくるが、この一瞬毎に凄まじい勢いで近づいて来る事が感じられる。

「何の音だろうね？」

突然の爆音を不審に思いながら、オーバーは音が近づいて来る方向へと、視線を向けた。

その先にはこの音の正体が凄まじい勢いで此方へと接近してくる様子が見て取れる。

やって来たのは一言で表すのであれば、巨大な装甲車だ。

どれ程巨大なのかと言うと、二車線の道路を目一杯に使わなければ、走行出来そうにない程である。

この装甲車の名称は、リボルギャリー。

W専用の高速移送装甲車で、同じくW専用のバイクであるハードボイルダーの格納にも使われている。

「やっと来たみたいだね」

リボルギャリーの到着を確認して、フィリップが呟いた。

このリボルギャリーには、オートパイロットシステムが搭載されている上に、メモリガジェットの一つである、スタッグフォンで遠隔操作する事も出来る。

先程Wが戦闘中にも係わらず、スタッグフォンを操作していたのは、このリボルギャリーを呼び出す為、より正確に言うのであれば、この中に居るある人物を、この場に連れて来る為だった。

Wの横に到着したリボルギャリーは、停止するとその装甲の一部を

開く。

そしてその中から、一人の幼い少年が顔を出した。

前世の頃、ＴＶで何度も見ていたし、俺達が先程まで居たガレージがどういう意味を持っているのか、良く理解していた筈なのだが、実際に目の前で経験するのは、当然の事ながら初めてだったので、かなり驚いた。

俺達がガレージで話していたら、突如として、二つに割れていたリボルギャリーが動き出したと思ったら、その場に居た俺達全員を内部に格納して、走り出したのである。

驚きはかなり凄かったが、それと同時に俺は感動してしまった。

まさか本物のリボルギャリーに乗れる日が来るとは、思ってもいなかったからだ。

隣でユイとメカ犬が驚愕しているのを見ながら、俺は一人感動に身

を震わせていたのだが、暫くしてリボルギャリーが停車したかと思うと、装甲の一部が開いた。

多分其処が、出入り口になっているのだろう。

俺はユイにこの場所で待っている様に言い聞かせてから、メカ犬と共に、外の様子を窺ってみる事にした。

「待ってたよ」

リボルギャリーから顔を出した直後、斜め下に居るWから声を掛けられた。

声からして、フィリップ君に間違い無さそうだ。

いや、問題は其処じゃない。

リボルギャリーが呼ばれたという事は、今も戦闘中という事だ。

俺は慌てて、現在の状況を確認する為に、辺りを見渡す。

『オーバーも居るのか！？』

メカ犬が俺の肩に飛び乗ると同時に、目の前に居た藍色の怪人の名前を叫ぶ。

メルトがこの風都ランドパークに現れた事から考えて、オーバーがこの場に居たとしても、充分予測の範囲内ではあるが、問題はもう一体、オーバーの隣にいる奴だ。

腹部のロストドライバーと、その風貌からして、厄介な奴だという事は、すぐに分かった。

「……昨日からずっと、分からない事だらけで、本当にまいっちゃうよな」

そう言いながら、俺は肩にメカ犬を乗せた状態で、リボルギャリーから降りて、Wの隣に並ぶ。

「なるほど。フィリップが言っていた増援か……確かにな」

俺を見ながらWが囁く。

この声からして恐らく、翔太郎さんで間違いない筈だ。

喋った時に同時で、左腕をスナップさせてたし。

二人の間でどんな話の流れがあったのかは分からないが、俺にも一つだけ理解出来る事がある。

「行くぞメカ犬」

『うむ』

それは……今は戦うべき時だという事だ！

俺はポケットからタッチノートを取り出して開き、ボタンを押す。

『バックルモード』

肩に乗っていたメカ犬は飛び降りると同時に、ベルトに変形して俺の腹部へと自動的にまきつく。

「変身」

音声キーワードを入力した俺は、素早くタッチノートを、ベルト中央の溝へと差し込んだ。

『アップロード』

白銀の光が俺の全身を包み込んでいき、その姿を一人の戦う戦士へと変えていく。

全体を覆うメタルブラックのボディーに、ベルトを中心として四肢へと伸びる銀のライン。

同じく銀に輝く額の角飾りと、赤い二つの複眼が強烈な存在感を生み出す。

シードへの変身を完了させた俺は、隣に居るWに視線を向けて、互いに無言で一度だけ頷いた後、オーバー達目掛けて、一気に駆け出した。

俺はオーバーに駆け寄り、Wはあの謎のライダーを相手にする為に駆け寄って行く。

『オーバー！貴様達は一体何を企んでいる！？』

俺がオーバーに対して攻撃を加える中で、メカ犬が叫ぶ。

質問に正直に答えるとは到底思えないが、それでも問い質さずにはいられない。

一昨日に始まったホルダーモドキを大量に使ってまで行った、海鳴市への謎の杭の設置。

その翌日には周囲の人達の記憶が改竄された状態で、俺達が居た世界と、翔太郎さん達の世界が融合を果たした。

しかも今度は海鳴市ではなく、この風都に現れて、ドーパントや俺も見た事が無いライダーと行動を共にしている。

幾ら考えてもやはり答えは出ない。

だから少しでも何かヒントになるかも知れないと、たとえ敵であったとしても事情を知る相手に聞くメカ犬の気持ちは、痛いほどに理解出来る。

「何度も言ってるでしょ。これは実験だって」

「だから何の実験だっていうんだよ!?」

押し問答の様に繰り返されるこの言葉に対して、俺もオーバーの剣に拳を放ちながら叫んでしまう。

「今のこの混じり合った世界は、とても不安定なのさ。だから何もせずに放置しておけば、後一日くらいで何もかも元に戻るんだよ」

俺達にとって衝撃とも言える事実を、オーバーは普段通りの軽い口調で告げた。

勿論俺はその言葉に驚愕するが、同時に一つの疑問が生まれる。

奴らの実験が何を示すのか。

最初はこの現象そのものが、実験の目的と考えていたが、先程のオーバーの発言と、ここまでの一連の行動からして、目的は別の所にある様に思えてならない。

「だから僕達は、もう一度楔を打ち込むのさ」

『楔？』

「ふふ、この風都からもう一度大きなエネルギーを注ぎ込むんだ。そうすればこの世界は……いやそんな小さな規模じゃないよ！！！この地球がリセットの時を迎えるのさ！！！」

オーバーは俺達に剣を振るいながらも、歓喜の笑いを上げながら喋り続ける。

「喋りすぎだぞオーバー」

俺がオーバーの剣から繰り出される一撃をどうにか避けた直後に、突如として灰色の怪人、メルトが姿を現した。

「ごめんよメルト。でもさこんなに楽しい事を、皆に内緒にするのもつまらないじゃない？仮面ライダーもせっかく僕達の実験に付き合ってくれてるんだから、少しくらいはサービスしてあげないとさ」

「ふん」

メルトが現れた事により、一旦俺と距離を取ったオーバーが、メルトの近くまで行くと、何か会話をし始める。

「取り敢えず遊びはここまでにしておけ。これから実験の最終段階の準備に入るぞ」

「ふふ、分かったよ。それじゃあ残念だけどここは、退きますか」

『待て！お前達には、まだ聞かなくてはならない事が山ほどある！！！』

ここで逃がす訳には行かないと、俺が二体の怪人に駆け寄ろうとしたその時だ。

「きゃあああ！？」

俺がいた後方から悲鳴が聞こえて来たのである。

急いで振り向くと、其処には認めたくない光景が展開されていた。

リボルギャリーの装甲の一部開放された場所から、ユイが落下して来たのだ。

1985

**５０万ＰＶ突破記念作品　仮面ライダーシード＆仮面ライダーＷ　ミックスワールド**

次回は更に急展開……になったら良いなあ……

**５０万ＰＶ突破記念作品　仮面ライダーシード＆仮面ライダーＷ　ミックスワールド**

やっと話が後半に突入して来ました……

それでは楽しんでいただけたら幸いです。

私は危ないから、ここで動かないで待っている様にと純に言われたので、大人しく待つ事にした。

純は優しい。

今現在私が動かしているこの身体も、純の大切な人の身体だというのに、純は私を一度も責めはしなかった。

本当ならどんなに酷い罵倒を浴びせられたとしても、償えない事をしている私を責めないどころか、私の身勝手なわがままを、快く聞いてくれると言ってくれたのである。

純に心から感謝して、私は瞳を閉じる。

思い出すのは、本当の名前すら忘れた私の記憶に残っている、唯一の思い出。

顔も思い出せないけど、その優しい温もりだけは覚えている。

「……兄さん」

その人の事を言葉にした瞬間。

私は確かに感じた。

それは唯一覚えている、懐かしい感覚。

純にはここで待っている様に言われたけれど、それでも私は自分自身の目で、その感覚を確かめずにはいられなかった。

私は急いで、さっき純が出て行った場所から、顔を出す。

そして外の様子を確かめ様としたその時、大きな振動が私に襲い掛かった。

最初は私に何が起こったのか、理解する事しか出来なかった。

周りの景色が緩やかに流れるのを肌で感じる事で、私は初めて理解する。

……ああ、私は今下に落ちてるんだ。

その高さからして、打ちどころが余程悪くなければ、死ぬ事は無いと思うけど、怪我は免れないだろう。

怖いという気持ちよりも先に、私には申し訳ないという気持ちが、胸に込み上げる。

この身体は、私の身体じゃない。

純の大切な人のものだから、私の身勝手で傷つけてしまう事が嫌だった。

心の中で何度も謝りながら、もうすぐこの身に降りかかるであろう衝撃に備えたけど、その衝撃は何時まで経ってもやってこない。

その代わりに、私はその身体に、とても懐かしい暖かさを感じた。

俺は自分の目を疑った。

悲鳴が聞こえると同時に、その方向に視線を向けると、ユイがリボルギャリーから、落下している最中だったのだ。

リボルギャリーのすぐ近くでは、Wと謎のライダーが戦っている。

何故ユイが、俺の注意を無視して、リボルギャリーから出てこようとしたのかは、理解出来ないが、恐らくはあの二人の戦いで生じた余波で、足を滑らせたのだろう。

俺の今いる距離からでは、ユイが地面に激突する前に辿り着く事が出来ないと分かりつつも、俺は全力で走る。

しかしここで、俺は予想外の光景を目にする事になった。

リボルギャリーに背を向けて戦っていたので、Wはユイに気付くのが、一瞬遅れていたのだが、Wを相手に戦っていた謎のライダーが

逸早く気付いて、ユイが地面に激突する直前に抱き止めたのだ。

「何やってるのさ！サイファー！残念だけど、もう帰るよ！！！」

俺の後方からオーバーの声が聞こえて来た。

恐らくは、サイファーというのが、あのライダーの名前なのだろう。

抱きかかえていたユイを地面に降ろしたサイファーは、オーバー達の居る場所まで、一気に跳躍する。

「仮面ライダー！」

サイファーが、オーバー達の隣に辿り着いたのを確認した後、メルトが俺とWに向かって叫ぶ。

「これからこの風都で、面白い事が起きるだろう。止めたければ精々足掻いてみせろ」

その直後に、オーバーが大量の藍色の球体、暴走プログラムをばら撒き、この場に多くのホルダーモドキ達が生まれる。

「ふふふ。これは僕からのプレゼントだよ」

大量のホルダーモドキを出してきたオーバーは俺達に、軽い口調でそう言い放つと、三人揃ってこの場を後にする。

追いかけたいところだが、このホルダーモドキ達を放置しておく訳にもいかないし、何よりもこのホルダーモドキ達の妨害を突破して、奴等を追うのは難しいだろう。

『来るぞマスター』

メカ犬の声に反応して、俺は襲い掛かってきたホルダーモドキの拳を避けて、カウンターの一撃をお見舞いする。

すぐ近くに目をやれば、Wもホルダーモドキに攻撃を加えていた。

続いてユイに視線を移すと、リボルギャリーの影に隠れている。

これならば戦闘に巻き込まれる心配は無いだろう。

「今はやるしかないか……」

俺は現状を打破する為に、ベルトの右側をスライドさせて、緑色のボタンを押す。

『スピードフォルム』

音声が流れると同時に、メタルブラックのボディーが、鮮やかなライトグリーンへと変化する。

俺は素早さを主体とするこのフォルムで、近くにいたホルダーモドキ達に、連続攻撃を叩き込んでいく。

『マスター！』

「一気に行くぞ！」

メカ犬の声に応え、俺はホルダーモドキの攻撃を捌きながら、再び

ベルトの右側をスライドさせて、黄色のボタンを押す。

『スピードロッド』

光と共に生成されるのは、スピードフォルムの専用武器である、棒状の武器スピードロッド。

この武器はフォルムの特性とも合わさって、多数の敵と戦う事に適している。

俺がロッドを振り回して、ホルダーモドキ達に打撃を叩き込む中で、Wも大きな動きを見せた。

「翔太郎。僕達も戦い方を変えるよ」

「ああ、纏めて蹴散らすぜ」

翔太郎さんとフィリップ君は、そう短く会話を交わすと、展開していたダブルドライバーを閉じて、装填されていた、ジョーカーメモリと、サイクロンメモリを引き抜くと、新たに二本のガイアメモリを取り出してボタンを押した。

『トリガー』

『ルナ』

メモリから音声が流れた事を確認すると、Wは素早くメモリをスロットに装填して、再びダブルドライバーを展開させる。

『ルナ』

『トリガー』

再び流れる音声と共に、狙撃者の記憶と幻想の記憶が刻まれた、ガイアメモリの力がWに宿る。

更に左胸部に固定されている、Wがトリガーメモリを使用した際の専用武器であるトリガーマグナムを抜き放つと、次々に辺りにいるホルダーモドキ達に光弾を撃ち当てていく。

『マスター！』

「翔太郎！」

「「分かってる！」」

互いの相棒が俺達の名前を呼ぶ声に応えて、俺と翔太郎さんは、短く答えを返して、次の行動へと移す。

俺はベルトからタッチノートを取り出して、スピードロッドにスライドさせる。

『ロード』

そして俺は、再びタッチノートをベルトに差し込む。

『アタックチャージ』

ベルトから発生した光が、右腕のラインを通り、スピードロッドへと集約される。

俺が必殺の一撃を準備する間に、Wも必殺の一撃を繰り出す為に、同じく準備を始めていた。

「これで決まりだ」

翔太郎さんは、そう言いながらダブルドライバーから、トリガーメモリを引き抜いて、トリガーマグナムのスロットへと装填して、ノーマルモードからマキシマムモードへと手動で変形させる。

『トリガーマキシマムドライブ』

変形させると同時に、凄まじいエネルギーが、マキシマムモードとなった、トリガーマグナムに集約されていく。

「こいつで決めるぜ」

俺は輝くスピードロッドを構えて、ホルダーモドキ達が密集している場所へと駆け出す。

Wは銃身をホルダーモドキ達に向けて何時でも撃てる体勢を整える。

「スピードロッド」

ホルダーモドキ達が、密集している地点に、辿り着いた俺は、自分自身の身体を軸として、スピードロッドを振り回す。

「ウインドテイスティング」

俺を中心として周囲に発生した、風の刃が次々と近くにいた、ホル

ダーモドキ達を切り刻む。

「「トリガーフルバースト」」

時をほぼ同じくして、Wがトリガーマグナムの引き金を引く事で、変幻自在な青と黄色の光弾が、無数に撃ち出されて、ホルダーモドキ達に猛威を振るう。

俺達の必殺の一撃を喰らったホルダーモドキ達は、その場で一体残らず爆発して、戦いの後には二人の仮面ライダーだけが残った。

青年は自分自身の感情に、疑問を抱いていた。

先程の戦いの最中、今の自分にとっては、戦いこそがもっとも尊ぶべき行為の筈なのに、その戦いを放棄してまで、何故見知らぬ少女を救ったのか。

ただの気まぐれだったのかと、己の心に問いかけてみるが、青年はそんな心を自分が持ち合わせていない事を良く理解していた。

ならば何故？

青年は何度も、同じ考えを繰り返す。

少女を見た時、何かを思うよりも先に、身体が自然と動いていた。

その小さな身体を抱きとめた時、忘れた筈の何かを思い出しそうになった気がする。

どんなに考えても、思い出そうとしても、その忘れた筈の何かを、青年が思い出す事は叶わない。

だが青年は一つだけ確信していた。

それは青年が自分自身を無くす前に持っていた、大切な何か。

感情なのか、物だったのか、或いは人だったのか……

それすらも思い出す事は出来ないが、この狂気に染まる以前の自分が、何よりも大切にしていたものだった事を、青年は本能で悟ったのである。

「それで、メルト。僕とサイファーを迎えに来たって事は、準備が整ったの？」

青年が自己の意識の中で、一つの考えに至り、思考を外側に向けると、そんな声が聞こえて来た。

現在オーバーとメルト、そしてサイファーに変身する青年は、何処

かの研究室と思わしき場所で、会談を行っている。

そうは言ったものの、主に会話をしているのは、先程意識を外側に向けた際に、聞こえて来たオーバーともう一人の怪人メルトの二人なので、青年は会話に参加する事無く、自らの思考に意識を傾けていた訳だが。

「そうだ。間も無く楔の準備が整う」

オーバーの言葉に対して、メルトが淡々と返答を返す。

「それで、楔は何処に打ち込むのさ？」

オーバーの続けざまの質問に、メルトは黙って、右手の人差し指を上に向けると、静かに言葉を紡ぐ。

「最初の楔は大地に打ち込んだ。ならば次の楔は天に打ち込むのが、道理だろう」

「ふ～ん。天にねえ……それは良いんだけど、何処かめぼしい場所はあるの？」

メルトの言葉を聞いて、オーバーは再度新たな質問をぶつける。

「楔を打ち込むのに相応しい場所は用意してある。次の実験を行う場所は……風都タワーだ」

今ここに人知れず、風の街、風都を象徴するシンボルに、暗い影が忍び寄ろうとしていた。

「何か思い出せるかな？」

「……もう少し頑張ってみます」

俺は今ユイと二人で、風都ランドパークのホラーハウスに来ている。

先程の戦いで、他のお客さんは誰もいないので、文字通り今は俺とユイの二人だけだ。

一応ここの経営者の方にも、翔太郎さん経由で許可は貰っているので、問題は無いだろう。

その翔太郎さんなのだが、現在はフィリップ君と一緒に、鳴海探偵事務所に戻っている。

どうやら依頼を無事に終えた事を、依頼主に報告する為らしい。

それと依頼の最中にWが倒したドーパントなのだが、今回の依頼の件とはまた別に、メルト達とも何らかの繋がりがある可能性が少な

からずあるそうなので、可能ならば情報を引き出してみると言っていた。

あとメカ犬も今は、俺達とは別行動を取っている。

どうしてかと言えば、俺がメカ犬にある頼みごとをしたからだ。

現在メカ犬は、俺の頼みごとを引き受けて、確認に行っている事だろう。

そして俺とユイが、このホラーハウスに来ている理由だが、俺が探偵事務所のガレージで、フィリップ君が書いていた文章に起因する。

俺の目に留まった文字にはこう書いてあった。

自縛霊と。

一般的には、特定の場所や人物等に強い未練を持っていて、その場所から動けなくなった霊の事を示す言葉なのだが、俺はユイが、その自縛霊なのではないかと考えた。

本当にユイが自縛霊ならば、本来ならは、その場所から動けない筈だろう。

しかし例外は存在する。

だから俺は、ここで一つの仮説を立ててみた。

ユイには二つの未練が存在していたのでは無いかと考えたのである。

一つはユイが探してほしいと頼んできたお兄さん。

だがこれだけでは、なのはちゃんにユイが憑くまでの間、このホラーハウスに居続けた理由が分からなくなる。

外的な力で束縛されているならば別として、ユイの未練が自分の兄に対してだけならば、直接その人に憑くか、あても無く探し続けるだろう。

しかしユイはこの場所に留まり続けた。

それが意味する事は、この場所自体に、ユイにとって残らなければいけない、何かしらの理由が存在した筈なのではと、考えたからだ。

他にも今はなのはちゃんの身体という実体を得た事で、自由に動ける事と、ユイ自身がお兄さんの存在以外の記憶を失っているからこの場所を離れる事が出来るんじゃないかとか、俺なりに色々と考えてはいるが、正直なところを言えば、幽霊の知識なんて、どれが本当で嘘なのかは曖昧だし、俺が思いつく幽霊に関する事だって、前世の友達の受け売りが殆どである。

俺自身も一度死んだ経験はあるが、幽霊をやった経験は無い。

あったのだとしても覚えていないので、これ以上参考に出来そうな考えは全く思い浮かばないのだ。

だからこそ確実では無いが、一つの可能性として、ユイをこの場所に連れてきて、何か思い出さないか、試している。

「……あの、純」

思考の海に深く潜っていた俺を、ユイの声が現実へと引き戻す。

「うん、何か思い出した？」

「ううん。ここでは思い出せなかったけど……」

俺の問い掛けに、ユイは申し訳無さそうに、言葉を濁すが、何かの決意を秘めた瞳で俺を見据えて、再び語りかけてくる。

「……私ね。兄さんに会ったかもしれない」

ユイの口から出てきた言葉は、またしても俺の予想を遥かに上回った……

**５０万ＰＶ突破記念作品　仮面ライダーシード＆仮面ライダーＷ　ミックスワールド**

次回はあの人達が少しだけ出るかもしれません。

2003

# ５０万ＰＶ突破記念作品　仮面ライダーシード＆仮面ライダーＷ　ミックスワールド

今回はあまり動きが少ないですが、楽しんでいただけたら幸いです。

2004

**５０万ＰＶ突破記念作品　仮面ライダーシード＆仮面ライダーＷ　ミックスワールド**

「予定よりも早く帰って来れたね！」

「ああ」

「きっと私達がいきなり帰ってきたら、翔太郎君達ビックリするわよ」

「……ああ」

国籍も様々な人々が、雑多に行き交う空港で、一組の男女が、中睦まじく会話を交わす。

女性の方は、最低限の手荷物程度しか持っていないので快活に喋り続けているが、男性は幾つもの旅行用のトランクを運んでいるせいか、先程から簡単な相槌をうつのが精一杯の様だ。

その風貌と今いる空港という場所を考えると、この男女は海外旅行に行って来た帰りと考えるのが、妥当である。

「早く帰って風都の皆にお土産を渡さなくっちゃ！」

「……なあ、所長」

機嫌良くこれからの予定を話していた、女性だったが、男性の一言により、表情を怒りの形相に変えた。

「もう！私達は結婚したんだから、その言い方は止めてよね！」

これが一度目では無いのか、女性は怒りの感情に、呆れの感情も若干混ぜながら、男性を叱りつける。

しかも何処からか緑色のビニール製と思わしき、スリッパを取り出して、男性の頭を叩く。

「す、すまん」

女性から結構理不尽な攻撃を受けたと思われるが、これには男性も自分の非を認めてなのか、素直に謝罪の言葉を口にした。

「うんうん。分かれば良いのよ。それじゃあ前に決めた呼び方でもう一度呼んでみてね！私も呼ぶから！！！」

謝罪の言葉を聞き、幾らか機嫌を良くした女性は一つの提案を出した。

「……分かった」

男性は女性の出した提案に、表情を引き攣らせつつも、愛する妻の為だと、自らの心に言い聞かせながら、承諾の返事を返す。

スリッパで頭を叩かれながらも、妻の提案を承諾するこの男性は、人としての器が大きいのか、ただ単に妻の尻に敷かれているだけなのか、この判断の違いによっては、随分と印象が変わる事だろう。

「ダーリン！」

「は、はは、ハニー……」

臆面も無く言う女性に対して、男性は恥ずかしさのあまり、噛みながらも、何とかして言葉にする。

その光景を見ている周囲の視線は、とても生暖かいものだった。

「検索を始めよう」

鳴海探偵事務所のガレージに、翔太郎さんとフィリップ君、それにメカ犬とユイに俺が揃った事を確認した後、フィリップ君はそう言って、何も書かれていないハードカバーの本を、手に持ちながら、意識を集中させる。

地球（ほし）の本棚。

この地球の全ての記憶を閲覧する事が出来る、現在ではフィリップ君だけが、入る事を許された精神世界だ。

「最初のキーワードは【ホルダー】だ」

フィリップ君が、完全に精神世界に入った事を確認した翔太郎さんは、地球の本棚から、新たな情報を引き出す為に、最初のキーワードを口にした。

地球の本棚に入ったフィリップ君は、ある種のトランス状態になって、その視界には何処までも広がる白い空間と、数え切れない数の本と棚だけの世界が見える様になる。

だが聴覚は常に現実の世界にも通じているので、フィリップ君は、現在俺達が居る鳴海探偵事務のガレージを視認する事は出来ないが、所此方の声を聞く事は可能だ。

だから先程の翔太郎さんが先程言った言葉も、当然フィリップ君には届いている。

「最初のキーワードは【ホルダー】」

フィリップ君が、翔太郎君が口にしたキーワードを最初の足掛かりにして、検索を開始した。

地球の本棚には、古今東西全ての情報が存在、蓄積されていると言っても過言ではない。

全てを閲覧しようとすれば、人の一生を費やしたとしても時間が足りないだろう。

だからこその検索である。

俺の視界からは、ガレージの中でフィリップ君が立っている姿しか、

視認する事が出来ないが、フィリップ君が認識する、精神世界の中では今頃、目まぐるしく本棚が整理されている筈だ。

この地球の本棚の検索は、俺達の生活で馴染み深い物で表すのであれば、パソコンの検索と良く似ている気がする。

知りたい情報に関する言葉を入力して、探す辺りは同じ概念の様に思える気がしてならない。

「……これでもまだ絞りきれないか」

検索を始めて、暫くして、フィリップ君の表情に影が射す。

これまでの検索に掛けたキーワードは、順番に【ホルダー】【世界】【壁】【崩す】【実験】【楔】だが、これだけでは答えに辿り着けないらしい。

時間は待ってはくれないし、戻っても来ない。

こうして悩んでいる間にも、オーバー達はこの風都で、何かをしようとしている。

多分今度の実験とやらが、成功すれば、この現象を凌駕するだろう。

それだけは絶対に、阻止しなくてはならない。

だから俺は考える。

きっと答えに繋がる、言葉がある筈だ。

俺は改めて、この一連の事件で、オーバーと、メルトが言っていた言葉で特徴的な言葉を他に言っていなかったか、思い出してみる。

考えるが何も思い出せない。

頭の使い過ぎで、何だか頭痛がしてくるし、不謹慎ではあるが、俺は全てを無かった事にしたいと……

「そうだよ！」

俺はそこまで思考した所で、オーバーが言っていた一言を思い出して、思わず声を出してしまった。

だがそんな事は、今はどうでも良い。

俺はフィリップ君に新たなキーワードを提示する。

「次のキーワードは【リセット】でお願いします」

この言葉が、俺達の求めている答えに、導いてくれるかどうかは分からないが、今は信じるしかない。

「次のキーワードは【リセット】」

フィリップ君は、俺の言葉に頷くと、地球の本棚の検索に新たなキーワードを追加する。

今頃フィリップ君の視点では、大量の本と棚が縦横無尽に動いている事だろう。

歯痒いが今の俺達には、その結果の果てに得られる答えを期待して、祈り続けるしか出来ない。

「……ビンゴだ」

どうやら祈りは通じた様だ。

「それでフィリップ。奴等は何をしようとしてるんだ？」

検索を終了したフィリップ君に、翔太郎さんが質問する。

それに対して、フィリップ君は頷きながら、持っていた何も書かれていないハードカバーの分厚い本のページを開く。

その本には確かに何も書かれていないが、地球の本棚と繋がっているフィリップ君の視点では、幾多に存在する本棚の中から検索して導き出した、答えを記す一冊の本なのである。

「奴等の狙いは、ワールドクライシス」

ワールドクライシス……ワールドは世界で、確かクライシスは危機という意味だった筈だ。

何も考えずに直訳するのであれば、世界の危機。

……ある程度予測していた部分はあるが、随分と物騒な言葉が飛び出してきたものである。

「奴等の狙いは、多次元に存在する世界を融合させる事だね。僕や翔太郎には自覚出来ないが、今のこの世界も二つの異なる世界が、

微妙なバランスで重なり合っているみたいだ」

フィリップ君は、更に本のページをめくりながら、話を続ける。

「でも一度目の計画は、不完全だったみたいだ。原因は単純なエネルギー不足。なら次に奴等がする事は……」

「もう一度エネルギーを、地球に打ち込むって事か」

翔太郎さんが、話の流れから、推理した答えを口にする。

その答えにフィリップ君が頷く。

どうやらその答えで間違い無いらしい。

だが俺は、ここで一つの疑問を覚える。

「でもそれって、意味があるのかな？」

確かに若干の混乱はあるが、一応は皆がその違和感に気付きもせずに、日常を過ごしているのだ。

ここまでの説明では、どうにも世界の危機という物騒な言葉とは、結びつける事が出来ない。

「これには大きな意味がある」

俺の独り言とも取れる言葉に対して、フィリップ君が答える。

「さっきも言った通り、この地球は不足したエネルギーが注がれた

状態でありながらも、二つの異なる世界がとても不安定なバランスの上で、混ざり合っているんだ。この地球に生きる人の記憶すらも、違和感を感じない様に改竄されてね。そこに不足されていた分のエネルギーが、補填されればどうなると思う？」

「どうなるって……」

突然問われた質問は、あまりにもスケールが大きくて、想像する事すら出来ない。

「それがされれば、二つの世界は完全に一つになる。その世界は二つの世界のどちらでもない、全く新しい世界だ。その世界には、今この世界を生きている全ての生命は存在出来なくなる。まさに全てのリセット……ワールドクライシスとは良く言ったものだね」

フィリップ君の言葉は、衝撃の一言に尽きた。

「おいおい……奴等は何を考えて、そんな事をしようとしてるんだよ」

話を聞いた翔太郎さんが、その事実に戦慄する。

「その結果から、奴等が何を得ようとしているのかは分からないが、これを放っておく訳には行かない」

持っていた本のページを閉じたフィリップ君は、そう言いながら俺達のすぐ近くまで歩いてくる。

「僕達で阻止するんだ」

フィリップ君は、まっすぐな眼差しで、翔太郎さんと、俺を見ながら言い放つ。

「ああ。この風都で、そんな勝手な真似をさせる訳にはいかねえからな」

『うむ。奴等の好きにさせておく訳には行かん。ワタシ達で、必ず阻止するんだ』

「メカ犬と翔太郎さんの言う通りだけど、奴等は風都の一体何処で、実験を始めようとしているんだ？」

翔太郎さんと、メカ犬、そして俺は、ワールドクライシスを阻止する事を改めて覚悟するが、肝心な場所が分からない。

これでは止めるにしても、対策すら立てられない。

「フィリップ……」

何か知っているかもしれないフィリップ君に、俺達が視線を集めるが、残念な事に、首を横に数回振るだけで、望ましい答えは返ってこなかった。

「あの……少し良いですか？」

俺達が頭を悩ませていると、ここまで会話に参加しないでいたユイが、初めてこの会話に参加してきた。

思いのほかガレージにその声は響き、その場に居た全員が、ユイへと視線を向ける。

「もしかしたら私、その場所が分かるかも知れません」

ユイは俺達に告げた。

その言葉の本当の意味に、俺だけが気付く。

「……良いのか、ユイ？」

俺はその意味を知るからこそ、ユイの真意を聞く為に、質問をする。

「うん。ありがとう純。心配してくれて、でも大丈夫だよ。私は大丈夫だから。やっぱり私は兄さんに会いたいから、行かなくちゃいけないの」

ユイもまた、自分なりの覚悟を決めたのか、真っ直ぐな眼差しで俺を見つめた。

「はあ。ユイが良いのなら、俺はこれ以上何も言わないよ……」

俺は溜息を一つ吐き、ユイの覚悟を認めた。

これはユイにとっては、辛い現実かもしれない。

でもユイは選んだのだ。

逃げずに向き合う事を……

それならば俺に止める事は出来ない。

「ありがとう。純」

「お礼の言葉は要らないさ。でも一つだけ、俺はユイを全力で守る。それだけは譲らないからな」

だから俺は、自分に誓いを立てる。

変え様の無い事実があるのなら、止める事が出来ない宿命ならば、せめて俺は全てが終わるその時まで、傍らに居よう。

ユイの覚悟を無駄にしない為にも、俺は全身全霊で、彼女を守る。

それが今の俺に唯一、ユイにしてあげられる事だから……

俺の言葉にユイは、一度だけ頷くと、この場の全員に聞こえる様に告げる。

「今の私は、兄さんの居場所を感じる事が出来ます。ですからその場所に行けばきっと、目的の場所まで辿り着けると思うんです」

私は感じていた。

いえ、きっと何処かで覚えていたんだと思うんです。

私は逃げていただけ……

自分の記憶から、私と兄さんに起こった現実から……

あの時私を助けてくれた、黒い瞳の仮面をつけた人は、兄さんで間違い無い。

近くに感じた時、そして直接触れた時に、私はそれを理解したんです。

理屈じゃなくて、心がそう訴えるのです。

その事を私は純に話しました。

最初は突然に色々な事を思い出して、混乱していたから、兄さんの事だけを話していたけれど、何時の間にか私は泣きながら、思い出した全てを話していました。

認めたくなかった。

自分自身の死を改めて自覚したのも、私にとっては大きな衝撃だったけど、それ以上に兄さんまでもが既に亡くなっていた事実に。

兄さんは、私の目の前で……

だから私は理解した。

どうして全ての記憶を無くしながら、兄さんの事を覚えていたのか。

お礼を言いたいだけじゃなかった。

私は兄さんに、謝らなければいけない事がある。

これは私のわがまま。

私が果たさなきゃいけない、最後のわがままなんです。

今は眠っているこの身体の本来の持ち主である、女の子と純に一杯迷惑を掛けて申し訳無いと思うけど、それでも私は止まる事が出来ない。

だから私はこれで終わらせようと思います。

私も兄さんも、この場所に居てはいけない存在だから……

2018

## ５０万ＰＶ突破記念作品　仮面ライダーシード＆仮面ライダーＷ　ミックスワールド

このＷ編も、ようやく終わりが見えて来ました。

出来れば毎日更新でこのまま駆け抜けたいですがそろそろ話数のストックが尽きてきたので、厳しいかも知れません……

2019

## ５０万ＰＶ突破記念作品　仮面ライダーシード＆仮面ライダーＷ　ミックスワールド

これでストックは全て使い切ってしまったので、毎日更新が少し怪しくなってきましたが、出来るだけ頑張ってみようと思います。

それでは楽しんでいただけたら幸いです。

2020

「次の交差点を右に曲がってください」

『ＯＫよ～！』

ユイの言葉に、チェイサーさんが、肯定の返事を返しながら、その指示に従う。

俺とユイは、チェイサーさんの座席に固定された状態で、メカ犬は俺の肩にしがみ付いたまま、ユイが示す場所を目指して走り抜ける。

そしてその後ろを、翔太郎さんがハードボイルダーで追走する。

「その次は左に曲がって、後は直進です」

「あれは……」

再びユイの指示が飛び、チェイサーさんが、左に曲がった所で、俺の視界の遥か先に、特徴的な建造物が見えてきた。

それは風の街をテーマに、大きな風車が回る、この風都の象徴とも言えるシンボル。

「もしかして、奴等は風都タワーに居るのか？」

『マスター！』

俺が一つの仮定を口にしたその時、メカ犬が声を上げる。

更にメカ犬が声を上げるとほぼ同時に、チェイサーさんが急停止したのだ。

何事かと思い、視線を正面に見据えると、そこに居たのは一人の青年だった。

黒髪黒目で、顔の造形は日本人そのものである。

年齢は見た目通りであるのならば、恐らく翔太郎さんとあまり変わらないだろう。

「……降りろ」

突如として俺達の目の前に現れた青年は、痛みを覚えそうな程の、鋭い殺気を放ちながら、言い放つ。

「気をつけろ。あいつはまともじゃない」

ハードボイルダーから降りながら、翔太郎さんが俺に注意を促してくる。

「ええ……」

俺もチェイサーさんから降りながら、警戒を強めた。

この場所は今から戦場になる。

戦いの場特有の空気、とでも言えば良いのだろうか。

俺の人としての、生存本能がそう訴えかけている。

しかしここで、戦いとは無縁ともいえる、人物が言葉を発した。

「兄さん！」

チェイサーさんから降りながら、ユイが目の前に立ち塞がる、青年に向かって叫ぶ。

いや、この場で俺は予測出来ていた筈だ。

だってそうだろう。

「あなたは私の兄さんなんですよね！？」

俺はユイの口から直接、この事を聞いていたのだから。

風都ランドパークで戦った、サイファーと呼ばれていた仮面ライダーの変身前の姿は、俺は見た事が無かったのだが、翔太郎さんから事前に聞いていた特徴と照らし合わせても間違い無いだろう。

そしてユイから聞いた、ユイ自身の兄かも知れないという人物……

それが現在俺達の目の前に居る、青年である。

「兄さん！私よ！」

ユイは訴える様に叫び、続いてあまり聞き覚えの無い名前を言う。

それは生前のユイの本名だった。

全ての記憶を思い出したユイは、当然ながら自分自身の本来の名前も、既に思い出している。

しかしユイは、俺達には今まで通り、ユイと呼んでほしいと言われた。

どういった意図があって、俺達にそう言ったのかは分からないが、ユイにも何か思うところがあったのかもしれない。

その理由を知りたいとは思ったが、そう言った時のユイの表情を見た俺は、それ以上何も聞く事が出来なかった。

「兄さん……」

「……俺はお前の兄じゃない。例えその話が本当だったとしても、今の俺には関係の無い話だ」

ユイの声は、目の前の青年の心には、何も届いていないのか、それ以上青年はユイとの会話に、取り合おうとはしなかった。

「今の俺に必要なのは、絶対的な証だ。戦いだけが俺を、俺自身として、この世に繋ぎ止めてくれる」

青年はユイから視線を外して、俺と翔太郎さんに視線を移すと、狂気を含んだ笑みを浮かべた。

「どうして……兄さん」

悪鬼ともいえるであろう、その青年の姿を見たユイが、その表情を

絶望に染めながら膝を着く。

それは明らかな拒絶だった。

ユイのただ一つの望みであった筈の、兄との再会は、伝えたい言葉を伝える事無く、否定され深い絶望へと落とされる。

まるで全てが終わったかの様に、崩れ落ちるユイの光景を見た瞬間、俺の中にある一つの感情が一気に高ぶるのを確かに感じた。

「話はもう終わりだ。お前達は俺の証になれば良い」

「ふざけるなよ……」

「ん？」

戦いを促そうとする青年に対して、俺は一歩を踏み出して、拳を強く握り締める。

「ふざけるなよ……あんたは今、自分が何て言ったのか、本当に分かってるのか？」

俺は爆発しそうな感情を、無理やり押さえつけて、目の前の青年に己のした事の意味を、分かっているのかを問い質す。

「意味の分からない事を聞くな。言っただろう今の俺には、関係の無い事だと」

改めて答えた青年に、ついに俺の感情は爆発した。

「ユイがどんな気持ちで、お兄さんに、あんたに会おうとしたのか本当に考えたのかよ！」

その感情は怒りだ。

でもそれ以上に、大切な人に拒絶されたユイの悲しさを、絶望を、言葉に表せない程に傷つけられた心を思うと、やるせない気持ちが、俺の思考を支配していく。

「あんたに何があったのか俺は知らない！ユイと同じ様に記憶が無いのかも知れない！でもな、今目の前にあんたを兄だと慕う妹が現れたんだぞ！」

この人の過去を俺は知らない。

ユイと生前何があったのかは、聞いている以上の事は俺の知るよしも無いだろう。

でも俺はあえて言う、言わなくちゃいけないんだと、心が雄たけびを上げる。

「戦う事があんたの証だと！？本当にそうなのかよ！？それなら何で、リボルギャリーからユイが落ちたあの時、あんたは自分が一番大切だと言った、戦いを放棄してまで助けたんだ！？例え忘れていたとしても、自分自身にとって何にも代え難い、大切なものだって心の何処かで気付いていたからじゃないのかよ！！！」

ユイは言っていた。

助けられて抱きとめられたその時に、懐かしい暖かな温もりを、確

かに感じたと。

だからこそユイは気付いたんだ。

自分の兄に、自分の失った筈の生前の記憶に。

「そんなあんたなら分かるだろ！思い出せよ！自分が誰なのかを！本当に大切にしていたものを！あんたなら思い出す事が出来る筈だ！生前とは姿も何もかも違っていたユイを、無意識だったとしても助けたんなら、あんたの心の奥底には、絶対にあんたの本当の心が、残っている筈だろう！！！！！」

俺は信じて叫び続ける。

この二人には確かな深い絆がある。

たとえ死が二人を引き裂いたとしても、覚えていなくても、それでも奥底に眠った心の中に存在し続ける絆は揺るぎはしない。

記憶が無くても、姿が違おうとも、そんな事は関係ないんだ。

理屈じゃない。

俺はただこんな現実を認めたくないから信じて叫ぶ。

感動の再会の筈がこんな、バッドエンドで終わって良い筈が無いんだ。

どうにもならない現実は確かにある。

でも今は、まだ終わっていない。

この二人の再会の物語は、まだ始まってすらいないんだ。

だから信じて叫ぶ。

本人が否定しようが、俺は認めない。

忘れているのなら、殴ってでも思い出させる！

「……戦え」

青年は静かに呟いた。

「俺にも分からない。俺の中で生まれたこの感情が何なのか、俺が本当に大切にしていたものは何なのか……」

呟きながら青年はロストドライバーを取り出して、腹部に宛がう。

瞬時にベルトとなった事を確認した、青年は、続いて一本のガイアメモリを取り出した。

そこに刻まれた文字はアルファベットでは無く、数字のゼロ。

数字の刻まれたガイアメモリなんて、俺は初めて見た。

つくづくこの世界は、俺の知っているWの世界とは何処か違っている。

『サイファー』

ガイアメモリのボタンを押した青年は、すぐさまメモリを、頭上に放り投げた。

「……変身」

言葉を紡ぐと同時に、ガイアメモリはロストドライバーのスロットに装填され、青年はそのままドライバーを展開させる。

『サイファー』

ドライバーから音声が響き渡り、青年の姿を、戦う為の戦士へと変えていく。

身体全体を覆う紫の装甲に、四肢に伸びる螺旋を描くラインにその進行方向となる肘と膝には、鋭い突起が形成されている。

頭には鬼を彷彿とさせる二本の角飾りと黒い二つの複眼。

その姿は認めたくは無いがまさしく、経緯は違えど、仮面ライダーと呼ぶに相応しいだろう。

「俺の名前は仮面ライダーサイファー。もしもそれが違うと言うのならば、戦って証明してみせろ。戦う事が俺の証では無いのだと、理解させてみせろ！本当に……俺に心があるというのならば、その拳で救ってみせろ！仮面ライダー！！！」

青年、サイファーは俺に言い放つ。

それは戦いへの宣戦布告だ。

でも俺にはせいファーが、何かを思い悩む様に見えてならない。

だから救いたいと思う。

こんな俺に、本当に救えるのかは、実際のところは分かりはしない。

だけど俺は今、この兄妹を繋ぐ事が出来る、架け橋になる存在に一番近い場所にいる。

「ああ、それしかないなら、俺は戦うさ。思い出すまで、認めるまで、殴り倒してでもあんたに分からせる！」

だから俺は、そう言い切って、己の覚悟を確かなものにする。

失敗を恐れて尻込みしている場合じゃないんだ。

俺は静かにもう一歩を踏み出した。

「翔太郎さん。ここは俺に任せて、先に行ってくれませんか？多分奴等は風都タワーで実験を行おうとしている筈ですから」

振り向いた俺は翔太郎さんに言う。

それに対して、翔太郎さんは、無言で頷いて見せた。

この戦いは、俺にとって避けられない戦いだが、それと同時に今は、この世界を左右する事象が起きようとしている。

それは絶対に阻止しなければいけない。

俺がここに留まるのに、翔太郎さんを付き合わせる訳には行かないし、何よりそれでタイムオーバーとなったら、目も当てられないだろう。

「面白い余興が見れそうで、ワクワクするんだけど、それは困っちゃうな～」

翔太郎さんが、ハードボイルダーに乗ろうとしたその時、聞き覚えのある軽い口調の声が周囲に木霊する。

建物の影から出てきたのは、その声の主である藍色の怪人オーバーとその横には、同じく灰色の怪人であるメルトだった。

しかも後ろには、先程の戦いの時以上に多くのホルダーモドキ達を引き連れている。

「ふん。ここから先に行かせる訳には行かないな」

メルトがそう言うと、数体のホルダーモドキ達が、一斉に俺達に飛び掛ってきた。

まだ変身すらしていない俺達は、咄嗟に身構えるが、何時までも予想していた筈の衝撃はやって来なかった。

突如として耳に響く轟音と、視界を埋め尽くす黒い影。

それがリボルギャリーだと気付くまで、そう多くの時間は掛からなかった。

どうやら間一髪のところで、リボルギャリーが間に入って、飛び掛ってきたホルダーモドキ達を吹き飛ばしてくれたらしい。

「翔太郎。どうやら大変な事になっていたみたいだね」

リボルギャリーの装甲が中心から二つに分かれて、フィリップ君が出てきた。

「私聞いてないよ～」

その後ろからは一人の女性が、大きな紙袋を手に持って、ふらつきながらも、聞き覚えのあるフレーズを口にしながらやって来る。

「あ、亜樹子!?お前今は照井と新婚旅行中じゃなかったのかよ!?」

フィリップ君の後ろからやって来た女性を見て、翔太郎さんが驚愕した。

この女性の名前は、鳴海亜樹子（なるみあきこ）さん。

鳴海探偵事務所の現所長であり、俺が前世で視ていた仮面ライダーWでは外せない重要な登場人物だった人だ。

「いや～それがね。安いと思って予約してた飛行機の往復チケットの日にちがね……」

簡単に話を纏めると、安いから買った飛行機の往復チケットは、予定していた滞在日数とは違うチケットだったという余程の人では起こしようの無い、天然を発揮したのだそうで、お金も勿体無いから

と、泊まっていたホテルを早々にチェックアウトして、間違えて買ったチケットの日程通りに、戻ってきたのだそうだ。

「あとこれ、旅行先のお土産だからね」

大体の説明を終えた亜樹子さんはそう言って、手に持っていた紙袋から、お土産の品を取り出そうとするが、そこで翔太郎さんが、待ったをかける。

「あ～今は取り込み中だから、また後でな」

その声に反応して、亜樹子さんは周囲の状況を確認する。

「どどどどど、ど、ど、ドーパント！？」

そして辺り一体のホルダーモドキ達を見て、驚愕の声を上げた。

ドーパントでは無く、ホルダーなのだが、仮面ライダーが戦う怪人という捉え方で考えれば、あながち間違いとも言えないかもしれない。

「僕の身体を頼むよ。アキちゃん」

そう言ってフィリップ君が、翔太郎さんと一緒に俺の横に並ぶ。

「この街を泣かせる奴は、誰であろうと俺が……いや、俺達が許さねえ」

翔太郎さんが、目の前のホルダー達に、啖呵を切る。

一瞬だけフィリップ君を、そして俺を、見た様な気がするが、俺も翔太郎さんの言う【俺達】に入っているのだろうか。

『マスター。今は全てを賭けて戦う時だ。そして皆で守ろう。私達の大切な世界を！』

何時の間にか俺の隣へとやって来たメカ犬が、壮大な言葉を口にした。

「世界を救うか。はっきり言って、柄じゃないけど……やってやるさ！」

そしてたった二人の兄妹の絆だって救ってみせる！

俺は勢い良く取り出したタッチノートを開いてボタンを押す。

『バックルモード』

隣に居たメカ犬がベルトに変形して、俺の腹部に自動的に巻きつく。

『ジョーカー』

『サイクロン』

その隣では、ダブルドライバーを腹部に巻きつけた、翔太郎さんと、フィリップ君が、ジョーカーメモリとサイクロンメモリのボタンを押している。

そして俺達は己の大切なものを、そしてこの世界の全てを守る事を誓って、力ある言葉を口にした。

「「変身」」

俺はタッチノートをベルトの溝に差込み、フィリップ君はサイクロンメモリをスロットに差し込むと、その意識を手放す。

後ろからは、この感覚も久しぶりねと亜樹子さんの声が聞こえてきた。

そしてフィリップ君の意識と共に、翔太郎さんのダブルドライバーに転送されてきたサイクロンメモリを、翔太郎さんは、更に深く押し込んで、続いてジョーカーメモリをスロットに差し込むと一気にドライバーを展開させる。

『アップロード』

『サイクロン』

『ジョーカー』

俺の全身を白銀の光が包み込み、翔太郎さんは、渦巻く風を纏いながら、その姿を戦う戦士へと変えていく。

仮面ライダーシード。

仮面ライダーW。

それがこの戦士達の誇り高い名前だ。

「悪夢はここで終わらせる」

「「さあ、お前の罪を数えろ」」

二人の戦士は、大地を蹴って、己の全てを賭けて、戦いの場へと駆け出した。

**５０万ＰＶ突破記念作品　仮面ライダーシード＆仮面ライダーＷ　ミックスワールド**

次回以降はバトルの連続です……きっと。

## ５０万ＰＶ突破記念作品　仮面ライダーシード＆仮面ライダーＷ　ミックスワールド

何とか更新が間に合いました。

それでは楽しんでいただけたら幸いです。

「はあああ！！！」

俺はホルダーモドキ達に容赦無く拳を振るう。

「たあ！」

そのすぐ近くでは、Ｗが回し蹴りで、ホルダーモドキ達を文字通り、蹴散らしている。

しかし敵の数は、あまりにも多い。

サイファーに自分と戦えとまで言われたのに、いまだに奴の居る場所まで辿り着けずにいる。

Ｗも余裕は無い様で、突破する隙を窺う事すら出来そうにない。

歯痒い気持ちを胸に抱きながらも戦い続けていた最中、後方からエンジン音を唸らせて、二台のバイクがやって来た。

それはどちらも見覚えのあるバイクだ。

特にその内の一台は最近馴染み深い、白と黒のツートンカラーで、サイレンを鳴らし続けている。

「照井！？」

「長谷川さん！？」

この戦いの場にやって来た二台のバイクが止まり、被っていたヘルメットを取るのと同時に、俺と翔太郎さんは、そのバイクの所有者の名を呼んだ。

「遅くなってすまなかったな左。急な呼び出しで、署に行っていたんでな」

「ホルダーが風都で大量に目撃されたという情報があり、出動要請が来ていたんですが、シードさんも既に此方に来ていたんですね」

到着した二人は俺達にそう言いながら、戦う為の準備を整えて行く。

まずは長谷川さんが、左腕につけたEブレスのボタンを幾つか押すと、乗ってきたバイクが、箱状に変化して、長谷川さんはその正面に設けられている入り口に躊躇い無く飛び込んでいった。

「変身」

外からは全く見えないが、長谷川さんがそう言うと、同時に入り口が閉まり、機械的な音声が中から響いてくる。

続いて隣に居た赤いジャケットを着た青年、風の街、風都を守るもう一人の仮面ライダーその人が、行動に移ろうとしていた。

彼の名前は照井竜（てるいりゅう）。

風都警察署の超常犯罪捜査課に配属され、若くして警視という役職を務める、とても優秀な人だ。

翔太郎さん達がしていた話の流れで、何となく理解出来たが、やはり照井さんが、亜樹子さんの結婚相手なのだろう。

後ろで亜樹子さんが頑張れと、エールを送っているし……

『アクセル』

照井さんは、バイクのハンドルグリップスロットルを模した、アクセルドライバーを取り出して腹部に宛がう事でベルト状態にした後、一本の赤いガイアメモリを握り締めながら、ボタンを押す。

そのメモリに刻まれたイニシャルはＡ。

加速の記憶を内包していて、専用のアクセルドライバーを使う事で、Ｗのサイクロンメモリのスピードとヒートメモリの熱風を超える力引き出す、強力なガイアメモリである。

「変……身！」

そして照井さんは力ある言葉を叫び、アクセルメモリを、アクセルドライバーに差し込んだ。

『アクセル』

アクセルメモリが差し込まれた瞬間に、バイクの排気口を彷彿とさせる筒が幾重にも、赤い光を纏いながら大きな円を照井さんの正面に展開させて、その姿を変えていく。

全体的なボディーは赤が基調とされており、頭部にはＡの文字と良く似た形の突起が形成されている。

フルフェイスマスク状に形成された、その顔の奥には、円を描かれた青い複眼が、眩しく輝きを放つ。

仮面ライダーを深く知る人ならば分かるだろう……今照井さんが変身したこの姿こそ、風都を守るもう一人の仮面ライダー。

その名も、仮面ライダーアクセルである。

そして照井さんが変身を完了させた直後に、長谷川さんが入っていた、箱状に変形したバイクの扉が開く。

中から現れたのは、メタルイエローの装甲に、青い二つの複眼が特徴的な、俺と同じ海鳴市でホルダーと戦い続ける仮面ライダー。

風間恵美さんという一人の天才が、設計開発を行い、警察が試験的に実戦投入した、科学の結晶、その名は仮面ライダーＥ２だ。

アクセルは乗ってきたバイクから、エンジンブレードを引き抜き、Ｅ２は右腰のホルスターから専用武器の銃、ＥＳＭ０１を抜き放つと、二人はホルダーモドキ達に攻撃しながら、俺とＷのすぐ近くまでやって来た。

「左。詳しい事は後で聞くが、今はこいつ等を倒せば良いんだろ？」

「ここは僕達に任せてください。シードさん」

アクセルとＥ２は、そう言うと、其々の武器を携えて突貫していく。

「純。俺達が道を作ってやる。あいつと決着をつけてこい」

二人が先行してホルダーモドキ達に向かって行く中で、翔太郎さんが、俺に話し掛けながら、ある一点を指差す。

その指差す方向にいるのは、紫のボディーを持つ、仮面ライダーサイファーだった。

「はい！」

俺は短い返事と共に頷く。

「それじゃあ行くよ。君は何も考えずに、あそこまで走り抜ければ良い」

続いてフィリップ君が出してくれた指示に従って、俺は全力で駆け出した。

「ふん。易々と通すと思うか？」

「残念だけど、ここで通行止めだよ」

しかし、その前にオーバーとメルトが立ち塞がる。

俺はこいつ等が一筋縄では行かないという事を良く知っている。

だからこそ一瞬だけ、己の足を止めそうになるが、そこで俺に対して尊敬する、そして今は共に戦う、彼等の叫び声が聞こえてきた。

「止まるな！走れ！」

「言っただろう?君は何も考えずに走れば良いって」

目の前には、Wが陣取っており、メルトとオーバーを俺から遠ざける様に、戦いを繰り広げていた。

「ありがとうございます！」

俺は一瞬止まりそうになった足に、再び力を込めて走りだす。

本当ならばもっと、感謝の言葉を送りたい。

でもそれは今俺がするべき事じゃないだろう。

俺が今するべき事は……

「……来たか」

目の前に居る、この人を救う事だ。

「悪いですね。遅くなって」

俺はサイファーの前で立ち止まり、何時でも戦える様に構えを取る。

「は！」

もう俺達の間に、それ以上の会話は無かった。

俺が構えると同時に、サイファーは怒涛の攻撃を開始する。

その一撃は一つ一つがとても重い。

それを肌で感じる事で、この人がどれだけ長い間を戦い続けてきたのか、その片鱗に気付く。

だが、それでも、俺にだって譲れないものがある。

『マスター！一旦距離を取って、遠距離攻撃を仕掛けよう！』

サイファーの鬼気迫る格闘戦に、このままでは不利だと分析したのか、メカ犬が俺に指示を飛ばす。

確かにこの連続攻撃は厄介だ。

「分かった！」

俺はメカ犬の指示に、肯定の返事を返してから、すぐさま実行に移す。

「はああ！」

サイファーの連続攻撃の隙間を縫うように、俺は正面から蹴りを繰り出す。

だがその攻撃は、サイファーも読んでいたのだろう。

身体に直撃する前に、右腕を斜めに滑り込ませて、俺の繰り出した蹴りの威力を軽減させてしまった。

だが、ここまでは俺の予想範囲内である。

こんな単純な攻撃が通用する相手だとは、最初から思っていない。

俺の本当の狙いは、防御の為に、滑り込ませた腕である。

蹴り上げた足をそのまま右腕に添えてから、俺は其処を足場として、後方へと跳躍した。

後方に飛びながら俺は、空中でベルトの右側をスライドさせて、青いボタンと黄色いボタンを同時に押した。

『サーチフォルム』

『サーチバレット』

音声が流れると同時に、メタルブラックのボディーは、スカイブルーへと染め上がり、俺の右手には、サーチフォルムの専用武器である、サーチバレットが握られる。

サイファーから少し後ろに離れた位置に着地した俺は、すぐさまサーチバレットの銃口の標準を合わせて、光弾を撃ち出す。

しかしサイファーはその光弾を冷静に回避していく。

更になんと、肘の突起を鞭の様に伸ばして、俺が連続で撃ち出す光弾を弾き始めたのである。

最初はそれを片手で行っていたが、サイファーはもう一方の腕も、同じ様に鞭状にすると、俺に直接攻撃を仕掛けてきた。

「くそ！？」

俺はサーチバレットの標準を、外さない様にしながらも、側転で何とか鞭を回避して、再び光弾を連続で撃ち込む。

めまぐるしく攻守が入れ替わるが、それもすぐに終わりを告げる。

「くう！？」

避けた直後に狙いを定めたのだろう。

サイファーは防御を捨てて、サーチバレットの光弾の直撃を喰らいながらも、その瞬間に狙いを絞って、俺の首に鞭を巻き付けたのである。

すぐさまサーチバレットで、サイファーを攻撃しようとはしたが、撃とうとした瞬間に、もう片方の鞭で、手から叩き落とされてしまった。

『マスター！』

俺は徐々にきつく絞まり続ける鞭に耐えながらも、ベルトの右側をスライドさせて、この状況の打破を試みる。

『パワーフォルム』

『パワーブレード』

スカイブルーのボディーは、クリムゾンレッドへと変化して、俺の身体に力が漲ってくる。

更に右手に生成されたパワーフォルムの専用武器であるパワーブレードで、俺の首を締め上げる鞭を、力任せに切断した。

「はあ、はあ、はあ、はあ……」

鞭の呪縛から開放された俺は、久しく吸う事が可能となった新鮮な空気を、勢い良く肺に送り込む。

『大丈夫か!?マスター』

「ああ、なんとかな」

『む!来るぞ!!!』

呼吸を整える俺に、メカ犬が注意を促してきた。

前を見据えれば、サイファーが、鞭状にしていた肘の突起を元の状態に戻した後、此方へと駆け出してきたのである。

俺は急いでパワーブレードを構えて、再び接近戦へと戦いの場を移していく。

サイファーは、肘の突起を武器に俺のパワーブレードと何度も切り結ぶ。

一撃、二撃、三撃と、互いに拮抗した力がぶつかり合うその中で、不意にサイファーが語り掛けてきた。

「……何故だ。お前は何の為に戦う?」

俺はその質問に、少しだけ答えを言うのに躊躇う。
その質問は以前にも、戦いの中でされた質問だった。
だから俺は逆に問い返す。
「何でそんな事を聞くんだ?」
「俺には理解出来ない。お前が言った言葉の意味も、そこにあったであろう感情も……お前は何故、誰かの為に戦おうとする?何故この大きな力を、他人を守る為に使う?俺はそれが知りたい」
「……俺の戦う理由は、単純だ。それは誰もが持っていて、あんただって、手に入れたいと願ってるものだ」
そうさ……
俺の戦う理由は何時だって、笑ってしまう程に単純なんだよ。
「それが俺の証だからだ」
「戦う事がお前の証だというのならば、俺とお前では何が違うというのだ?俺もお前も、戦う事を己の証と言うのならば、何も変わらないだろう」
「いいや。俺とあんたは違う。あんたは戦う事に、戦いそのものに自分を求めようとして逃げてるだけだ」
俺は首を横に振りながら否定する。

「俺が戦う事で得られる証は、自分の大切な誰かを守りたいっていう想いそのものなんだよ」

どんなに力があったとしても、助ける事が出来ない人だっているだろう。

どんなに大切に想っていたとしても、零れ落ちてしまう何かがあるかも知れない。

だけど、たとえそうだとしても、俺はこの力で大切な人達を、守りたいんだ。

俺が思い出すのは、今までに出会った沢山の人達。

その出会いがあって、幾つもの絆が生まれたからこそ、今の俺がいる。

俺はその人達の笑顔を守りたい。

大切な絆を俺にくれた皆が、笑顔でいてくれたならば、俺も笑顔になれるから、だから……

「戦いが証になるんじゃない。戦いの先に得られる、大切に想う何かが、自分の証になるんだ!!!」

俺が叫ぶのと同時に、切り結んでいた状態の俺とサイファーは互いに後ろへと飛び退いた。

「ならば証明してみせろ!お前の証を!!!そして俺の証を否定してみせろ!!!」

サイファーは、そう叫ぶと、ロストドライバーから、メモリを抜き出して、腰のスロットに装填し直して、勢い良く上から手のひらで叩いた。

『サイファーマキシマムドライブ』

すると同時に、サイファーの肘の突起が眩い光を発し始める。

「……相棒。俺に力を貸してくれるか？」

『何を言っているマスター。当然だろう』

「……だよな」

次の一撃で、きっとこの勝負に決着がつくだろう。

だからこそ、俺は自分の証と言える、最高の一撃を繰り出さなければならない。

『ベーシックフォルム』

俺はベルトの右側をスライドさせて、黒いボタンを押して、パワーフォルムから、ベーシックフォルムへとその姿を変える。

今から放つ一撃は絆の力だから、俺の……いや、俺達の気持ちをぶつけなければいけないんだ。

『ベーシックファントム』

続けて押した黄色いボタンにより、ベーシックフォルムの特殊能力である分身体が生成される。

『マスター』

「ああ」

生成された分身体から聞こえるメカ犬の声に応えて、俺はベルトからタッチノートを引き抜いて、分身体のベルトの後ろに設けられた溝にスライドさせた。

『ロード』

そして俺は再び、タッチノートをベルトに差し込む。

『アタックチャージ』

音声が流れるのと共に発生した光が、俺と分身体の右足へと集約されていく。

「『こいつで決めるぜ！！！』」

俺とメカ犬は同時に叫びながら構えを取り、跳躍して、光を放つ右足を此方へと駆け込んで来るサイファーへと向ける。

「『ツインシードスマッシュ！！！』」

放たれた両者の必殺の一撃が火花を散らす。

俺とメカ犬が操作する分身体が繰り出したキックを、サイファーは

その輝く肘の突起で受け止めているのである。

しかもその力は徐々に強まりつつあり、俺達を押し戻そうとさえしていた。

『気合を入れろマスター！！！』

「分かってる！！！」

俺達は押し戻されそうになるのを耐えながら、今の自分達に出来る最高の力を一気に引き出す為に叫ぶ。

「『うおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！！！！』」

守りたい人達がいるから、だからこの勝負には、絶対に負けられない。

その想いが俺とメカ犬に、何処までも力を与えてくれる。

拮抗していた力はそこで、亀裂を生んだ。

サイファーの力は段々と弱まり、それを好機と見た俺達は一気に押し切り、その一撃を見事にお見舞いして、吹き飛ばしたのである。

つまり俺達は、この互いの証を賭けた戦いに、勝利したと言う事だ。

勝利の喜びよりも、疲労感が勝る俺が、大きなダメージを受けて倒れているサイファーに視線を送ると、そこには一人の少女、ユイが佇んでいた。

## ５０万ＰＶ突破記念作品　仮面ライダーシード＆仮面ライダーＷ　ミックスワールド

もうすぐＷ編もクライマックスです。

## ５０万ＰＶ突破記念作品　仮面ライダーシード＆仮面ライダーＷ　ミックスワールド

後数話程で、Ｗのお話も完結する予定ですが、今回も楽しんでいただけたら幸いです。

「……兄さん」

私は一歩ずつ、仮面でその素顔を隠した兄さんに、近づいていく。

一度は兄さんの言葉に絶望した。

もうこのまま消えてしまいたい、という気持ちに駆られたけれど、だけどそんな時に、純の声が聞こえてきたの。

そして兄さんの声も……

悩んでいるのは私だけじゃなかった。

兄さんも悩んでいた。

苦しんでいた。

そこからどうにか抜け出そうとしていたんだって事を、私は二人の会話と聴いて、戦いを見届ける事でやっと気付いたんだ。

兄さん……私は駄目な妹だよね。

本当は私が兄さんを助けなきゃいけなかった筈なのに、少し悲しくなったぐらいで、全てを純に任せちゃったんだから……

だからね、もう遅いかも知れないけど、私は今から兄さんに伝えます。

私の罪を、そして兄さんの罪を……

純との戦いで倒れた兄さんに、声が聞こえる程に近づいてから、私が声を掛けようとしたその時、横合いから、怪物が飛び出してきました。

確か純は、ホルダーモドキと呼んでいたと思います。

そのホルダーモドキが、私に一歩ずつ近づいて来るのでです。

十中八九、恐らく狙いは私でしょう。

これは私の油断。

本当は動くべきじゃなかった。

でも頭では理解出来ていても、私は待つ事が出来なかった。

それは正体不明の、焦燥感と言えるかもしれない。

何でそう思ったのか、私自身にも上手く説明出来ないが、今動かなければ二度と兄さんと話をする事が出来なくなると、何故か私の脳裏に、そんな考えがよぎってしまったからに他ならないでしょう。

でもそれは私の大きな間違いだったんです。

私は今こうして、命の危機に瀕している。

それだけなら私のただの自業自得だけど、この身体は私の身体じゃ

ないから、傷つける訳には行かないから、私は一度目の死に際に紡いだ言葉を、それが私の罪だと言うのに、もう一度口にしてしまった。

「……助けて兄さん」

迫り来る恐怖に晒されて、身動きの出来ない私に対して、ホルダーモドキが、右手を手刀にして振り被る。

次の瞬間に再び訪れるかも知れない死の恐怖に、私は目を閉じるが、それは私に訪れる事はありませんでした。

「……大丈夫か？」

その代わりに、とても懐かしい、優しかったあの頃の兄さんの声が聞こえてきた。

私は戸惑いながらも、閉じた目を開ける。

そして気付いたのです。

何故私が無事だったのか、その訳に……

「どうして……」

辛うじて私はその言葉を口から吐き出す事に成功する。

兄さんは私を庇う様に背中を楯にして、ホルダーモドキの攻撃を受けていた。

「少し待っててくれよ……」

再び優しげな声で私に話しかけてきた兄さんは、最後に私の本当の名前を呼んでから、後ろのホルダーモドキに振り返って、拳を叩きつけて、遠くに吹き飛ばしてしまいました。

でもその直後に、兄さんは地面に崩れ落ちてしまい、その仮面も塵の様に何処かへ飛散して、私の良く知る兄さんの顔が露になったのです。

「兄さん！！！」

私は叫びながら、兄さんに駆け寄りました。

その私に兄さんは、もう一度名前を呼ぶと、穏やかな口調で話し掛けてきました。

「良かった。今度は守る事が出来たんだな」

「兄さん。やっぱり記憶が……」

「ああ、全部思い出したよ。悪かったな。ずっと寂しい想いをさせて……」

そう言うと兄さんは、私の頭に右手を持ってきて、昔と同じ様に、優しく微笑みながら、撫でてきました。

私は自分自身の中で高ぶる感情を抑える事が出来ず、涙で視界が滲んできましたが、それでも兄さんから目を逸らさない様にしながら、兄さんの左手を、強く握ります。

「私も兄さんに、謝らなければいけない事があるんです。聞いてくれますか？」

涙に頬を濡らしながらも私は語りだす。

私達、兄妹の犯した罪を……

「……もう良いんだよ」

全てを聴いた兄さんは、もう一度微笑むと、そう言って笑ってくれた。

それは私の心を、ずっと囚われ続けていた罪と解放するのと同時に、喪失感を覚える。

本当は気付いてる。

今私と兄さんは、最後の会話を交わしているんだって。

でも私はそれを分かっているのに、認めたくないんだ。

「……兄さん」

「俺はもう行くよ。もしもあの世があるのなら、もう一度……いや、きっと俺は地獄行きだから、どっちにしても二度と会える事は無いかな」

兄さんは、そう言いながら、力無く笑って見せた。

「……兄さん」

これが最後なのだから、もっと話したい事が沢山ある筈なのに、私は止め処無く涙を流しながら、壊れたレコーダーみたいに、同じ言葉を繰り返す事しか出来ない。

「最後に頼みがあるんだ。彼に、俺達、兄妹をもう一度本当の意味で巡り合わせてくれた彼に、お礼を言っておいてくれないか？」

「……そんなの、自分の口で……言えば良いじゃ……ないですか」

私はもうまともに喋り続ける事すら出来ない。

既に人としての温もりが消えている兄さんの手を、更に強く握り締めながら、私は何とか言葉を紡ぎ出そうと努力する。

でもやっぱり上手く声に出す事が出来なくて……

「……ごめんな。最後まで妹を泣かせる様な兄でさ……」

それが私の聴いた、兄さんの最後の言葉だった。

それは一瞬の出来事だった。

倒れたサイファーに、ユイが近づいて行った直後、建物の影になって気付くのが遅れたのだろう。

ホルダーモドキの一体が、突如として飛び出してきたのである。

しかも事もあろうに、ホルダーモドキはユイに狙いを定めたのだ。

俺は急いで、助けに向かおうとしたのだが、先程まで倒れていたサイファーが、勢い良く立ち上がり、自ら背中を楯にする事で、そのホルダーモドキの攻撃を防いで見せたのである。

そしてすぐさま反撃に転じて、ホルダーモドキを吹き飛ばしたのだが、その直後に変身が解けて、倒れてしまう。

俺もすぐに、その場に行こうとしたのだが、青年の表情を見た瞬間に、その行動は躊躇われた。

青年は今までの殺気を放つ他人を威圧する様な、鋭い表情から一転して、ユイに優しい微笑を浮かべていたからだ。

この場に俺が、割って入る訳には行かない。

俺は長い時を経て、本当の再会を果たした二人の兄妹を、ただ遠くから見守る。

ユイは倒れた青年の横に座り込んで、強く右手を握り締めた。

その姿が俺には、青年とユイの間にある絆なのかと感じた。

幾つかの会話を交わした後、青年の様子が、少しずつ変化していく。

俺はその変化に見覚えがあった。

それは前世で俺が視た映画の彼等に起こった現象と同一のものである。

ネクロオーバー。

映画の劇中で、死者を化学薬品やクローニングなどの特殊な技術で蘇生させた兵士を略して、ネバーと呼ばれていた存在だ。

今青年には、そのネバーが倒された時に起こる現象が、起こっている。

彼は……ユイのお兄さんは、ユイと同様に、既に亡くなっていた。

メカ犬に頼んで、恵理さんと連絡を取り、急いで風都ランドパークのホラーハウスが建てられた場所が、以前誰が持ち主だったのかを調べてもらったら、すぐに判明したのである。

ユイが言っていた本名とも、一致していたので、間違い無いだろう。

調べてすぐに判明したのは、その兄妹がある事件と関係していたという部分も大きかった。

それは常に何処かで起こっているであろう、不幸であり理不尽な事件……

ある日仲睦まじく平和に暮らしていた兄妹の家に、強盗が押し入って、命を奪われた。

……ただそれだけの事件なのである。

ＴＶのニュースや、新聞の一覧を見れば、自然と目に入るであろう、被害者への同情と、加害者への怒りを覚える、不幸な事件だ。

この兄妹は天涯孤独だったという事もあったので、遺体の処理は国の管轄となる。

俺の勝手な推測ではあるが、恐らくはそこで、ユイのお兄さんの遺体は、ネバーの実験体として、利用されたのかもしれない。

涙を流すユイの目の前で、青年は徐々にその存在を薄めていく。

……そして程なくして、青年はこの世界から完全にその姿を消してしまった。

ネバーの戦いの末路は、その亡骸すらも残す事が叶わない、完全な消滅。

再び訪れる、本当の死だ。

俺は二人の兄妹の最後の別れを、その目に焼き付けながら、仮面の下で唇を噛み締めた。

「……なあ、メカ犬。これで本当に良かったのかな？」

俺は自分の中で、答えの出ない問いを、メカ犬に求める。

『……正直に言えば、ワタシにも答えは分からない。だがな、マスター』

メカ犬は一度そこで言葉を区切ると、分身体の手で、俺の肩を軽く叩いた。

『彼は最後まで穏やかな笑顔をしていた。彼にその笑顔を取り戻させたのは、他の誰でもない。間違い無くマスターだ』

その言葉を聞いて、俺の中に先程まであった言い様の無い、心の暗雲が晴れていくのを感じた。

俺は何かをしては、後悔するばかりだ。

でも、それでも今の俺にだって、出来る事がある。

「行こうメカ犬。俺達はやるべき事をやろう！」

『うむ！』

今の俺にはユイに何と声を掛けて良いのか分からない。

だが自分のした事を間違いだったと、自分自身を非難したりも絶対にしない。

全てが終わった後に、納得出来るまで話し合おう。

その為にも、俺は今の世界を守る為に走り出した。

『ジョーカーマキシマムドライブ』

Wは腰のスロットにジョーカーメモリを装填して、手を打ち付ける事で、サイクロンジョーカーが誇る、必殺の一撃を発動させる。

吹き荒れる風を纏いながら、浮かび上がり、目の前の二体の怪人、オーバーとメルトに、向けて左右の足を突き出す。

「「ジョーカーエクストリーム」」

翔太郎とフィリップの両名が、互いの呼吸を合わせる為に叫ぶ。

Wの身体は中心から二つに分割されて、其々が必殺の一撃を叩き込む。

「甘いよ！」

「ふん！」

だがその一撃を予期していたのか、オーバーとメルトは、Ｗの繰り出したジョーカーエクストリームを受け止めて、弾き返してしまった。

「くそっ！？厄介な奴等だな……」

「まさかこの攻撃も通用しないとはね」

弾き返された後、再び通常状態のＷに戻った翔太郎とフィリップは、苦々しく相手の手強さを再認識する。

「ふふ。君も普段戦ってる仮面ライダーとは違った意味で面白いよ！」

Ｗの攻撃を退けたオーバーは軽い口調で、言いながら、右手に剣を構えて、Ｗへと迫る。

それに対して、迎撃する態勢を整えるＷだったが、オーバーの剣が、攻撃圏内に入るよりも早く、後方から銃撃音が聞こえてきた。

その銃撃は、Ｗの横を通り過ぎて、見事にオーバーへと命中して吹き飛ばす。

Ｗが後ろに振り向くと、そこに居たのは、ＥＳＭ０１を構えたＥ２が走ってくる姿があった。

「はあ！」

更にその傍らではメルトに対して、アクセルがエンジンブレードで果敢に斬撃を連続で浴びせている。

辺りを見れば、既に他の敵の姿は無く、少し離れた位置では、サイファーとの戦いに勝利したシードが、専用バイクであるチェイサーに跨り、風都タワーへと向かおうとしていた。

「左！」

戦いの最中、アクセルがWに叫ぶ。

「ここは俺達に任せて、お前達は先に行け！」

「この先に奴等の狙いがあるんですよね？だったら急いでください！」

アクセルとE2は先程までWが戦っていたオーバーと、メルトを相手にしながら、先に行く様に促す。

「恩にきるぜ。照井」

「感謝するよ。黄色い人」

翔太郎とフィリップは、其々に感謝の言葉を述べた後に、この場をアクセルとE2に任せて、ハードボイルダーに跨り、シードの後を追い走り去る。

「ふん。貴様等……仮面ライダーは余程、私達の邪魔をするのが好きな様だな」

「僕は戦ってる方が、楽しいから良いんだけど、ちょっとやり過ぎって思うかもね～」

「そんな憎むべき者達へ、私達から、ささやかな贈り物をしよう」

一旦隣に並んだ、オーバーとメルトは、そう言いながら互いにあるものを取り出す。

オーバーは藍色の球体暴走プログラムを一つだけ取り出すと、それを地面に放り投げて、新たなホルダーモドキを一体生成する。

続いてメルトが取り出したのは一本のガイアメモリだった。

化石の様なフォルムに、イニシャルのHが刻まれたそれを、何とメルトは、起動スイッチを押してからすぐに、オーバーが新たに作り出したホルダーモドキの背中に、突き刺したのである。

『ホルダー』

背中に突きつけられたガイアメモリは、そのままホルダーモドキの体内へと、吸収されていく。

「「な！？」」

驚くアクセルとE2に構う事無く、ホルダーモドキは劇的な変化を開始する。

全身は藍色から、様々な色が混じった極彩色へと変質していき、身体そのものも、全体的に大きく逞しい状態へと変化していく。

「ふふ、言ってみれば、ホルダードーパントってところかな？」

劇的な変化を見せたホルダーに、オーバーは軽い口調でそう命名した。

## ５０万ＰＶ突破記念作品　仮面ライダーシード＆仮面ライダーＷ　ミックスワールド

次回は意外な友情出演があるかもしれません……

## ５０万ＰＶ突破記念作品　仮面ライダーシード＆仮面ライダーＷ　ミックスワールド

取り敢えず戦いは今回と次回で大体の決着がつく予定です。

それでは楽しんでいただけたら幸いです。

「ぐっ！？」

アクセルがエンジンブレードで斬りかかるが、その凄まじい斬撃を、ホルダードーパントは意図も容易く刀身を素手で受け止めてしまう。

「その手を離せ！」

そこにＥ２がＥＳＭ０１を乱射しながら、接近するが、ホルダードーパントは、一片の戸惑いすら見せる事無く、エンジンブレードと一緒に、アクセルまでをも巻き込んで放り投げる。

ホルダードーパントの狙いは的確であり、Ｅ２は放り投げられたアクセルと、正面衝突を起こしてしまった。

「何て強さだ！？」

「何時ものホルダーとは格が違う……」

立ち上がり態勢を整えながら、アクセルとＥ２は、ホルダードーパントの強さに驚愕しながら言葉を零す。

だが相手は、そんな二人に対して、立て直す時間を惜しんでか、更なる追撃を開始する。

このホルダードーパントの最も恐ろしい部分は、単純ではあるが、純粋に高められたその力だった。

人の身体を素体とした、ホルダーを使っていたとしたのであれば、また結果は違っていたかもしれないが、実際は抜け殻とも言える、ホルダーモドキである。

しかしだからこそ、余分な思考を一切せずに、常に全力で、目的を果たすまで標的と戦い続ける、脅威の存在となっていた。

「気に入ってもらえたみたいで僕も嬉しいよ！」

「私達からの心ばかりの贈り物だ。精々頑張ってくれ」

ホルダードーパントと戦うアクセルとE2に対して、オーバーとメルトは、そう捨て台詞を一つ残すと、この場から立ち去って行く。

「でも良いの？メルト。折角ここまで実験を進めたのに、途中で放置しちゃってさ」

「ふん。確かに惜しくはあるが、これはあくまで実験だ。全てを円滑に行えるとは、最初から思ってはいないさ」

「まあ、僕は面白ければどっちでも良いんだけどね」

「それにもう片方にも、置き土産を置かせてもらったからな。それが上手く行けば、まだこの実験が成功する可能性も残っているだろう」

「そっか。メルトは色々考えていて偉いな～」

「お前が全く考えないで行動するからだろうが……」

戦いの場を去りながら交わされる、怪人達の会話を耳にする者は、誰も居なかった。

この場から二体の怪人の姿が消えたとしても、激しい戦いは尚も続いている。

「は！」

「たあ！」

アクセルとＥ２は果敢に、ホルダードーパントへの攻撃を何度も試みるが、その攻撃は中々届かない。

「なんてタフな奴なんだ」

「こっちの攻撃にこれだけ耐えるなんて……」

二人の仮面ライダーは、一旦ホルダードーパントから距離を取り、呼吸を整える。

「あの、一つ僕から提案があるんですけど、良いですか？」

不意にＥ２が、アクセルに言葉を投げかけた。

「何だ？良い案があるなら、早く言ってくれ」

アクセルの同意を得たＥ２は、自身の考えを述べ始める。

「僕達が単体で向かっていっても、あまり効果的なダメージが与えられませんでした。それなら……」

そこまで言った所で、アクセルもＥ２が言おうとしていた真意に気付く。

「つまり俺達で連携攻撃を仕掛けようという事か」

「はい！」

二人は互いに頷きながら、今までとは明らかに違う戦い方を実践する。

まずはアクセルがエンジンブレードで、ホルダーゴーパントに対して前衛を勤めながら、Ｅ２は後方からＥＳＭ０１で援護射撃を行う。

しかしこの戦法では、先程とさほどの違いは無い。

違うのはここからだ。

アクセルは、再びエンジンブレードを、ホルダードーパントに掴まれると同時にその手を離して、バックステップで距離を取る。

その隙にＥ２はアクセルの援護射撃を続けながらも、マシンドレッサーにまで近寄り、マシンドレッサーの収納スペースから、新たな専用装備を取り出す。

「お願いします！」

「任せろ！」

Ｅ２の声に呼応する様に、アクセルが返事を返しながら、アクセル

ドライバーを外してから、自身をバイクフォームへと変形させた後、一気にＥ２の元へと駆けつける。

「乗れ！」

「分かりました！」

アクセルの声に、Ｅ２は頷きながら、素早く跨ると、アクセルはＥ２を乗せた状態で、ホルダードーパントの周りを一定の距離を保ちつつ、走り続ける。

「これでも喰らえ！」

バイクフォームのアクセルに跨った状態のままＥ２は、マシンドレッサーから取り出した装備をホルダードーパントに向けて発射する。

Ｅ２がマシンドレッサーの収納スペースから持ち出した武器はＥＳＭ０４。

この武器には先端にマシンアームが取り付けられており、発射すると同時に特殊合金製のワイヤーが射出される仕組みとなっている。

そのマシンアームは見事に、ホルダードーパントの腕を掴む。

「今です！」

Ｅ２の声を合図に、バイクフォームのアクセルは、ホルダードーパントを中心に周囲を回る様に走り続ける。

それに伴い、ＥＳＭ０４から伸びるワイヤーが、複雑にホルダード

ーパントの全身へと巻き付き、その動きを大きく阻害していく。

ホルダードーパントが身動き出来なくなった事を確認したＥ２は、装備していた用済みとなったＥＳＭ０４を手放して、アクセルから飛び降りると、アクセルもほぼ同時に、バイクフォームを解除する。

「これで終わりにしましょう！」

「ああ！」

二人の仮面ライダーはこの戦いを終わらせる、最後の一撃を放つ為に準備を開始する。

『ブレイクチャージ』

Ｅ２は左腰に取り付けたマガジンをＥＳＭ０１に装填して、標準をホルダードーパントに合わせて、引き金を引いた。

射出された黄色い光弾は、網目状に広がりながら、ホルダードーパントに覆い被さる事で、全身に絡まるワイヤーに伴い、更に身体の動きを束縛する。

それを確認したＥ２が、ＥＳＭ０１を右腰のホルスターに収めると、黄色い光が右足へと集約していく。

『アクセルマキシマムドライブ』

アクセルはドライバーの右側のグリップ部分、パワースロットルを捻ることで、メモリの力を、極限まで引き出す。

「振り切るぜ！」

その言葉を合図にして、二人の仮面ライダーは、一気に駆け出した。

ホルダードーパントの目前まで走ってきたアクセルとＥ２は大きく跳躍する。

アクセルは、炎を纏い、タイヤの跡の様な軌跡を描きながら、後ろ回し蹴りを、同じくＥ２も右足に黄色い光を纏いながら、同時に回し蹴りを繰り出す。

「「はあああああああああ！！！！！！」」

同時に放たれた必殺の一撃は、ホルダードーパントに直撃して、大きな爆発を引き起こした。

塵となって跡形も無く消え去った、ホルダードーパントを確認したアクセルとＥ２は、お互いの右拳を軽く打ち合わせながら、この戦いで自分達が勝利を収めた事を、改めて確信した。

風都タワーに着いた俺とWは、すぐに急いでバイクから降りると、目的の物を探し始めていた。

前回は謎の杭が地面に突き立てられていた訳なのだが、地球の本棚で検索をしたフィリップ君の話によると、今回は違う形で、エネルギーの放射を行うのだそうだ。

だから俺達は、この風都タワーで見慣れないものが無いかを重点的に探し始める。

『妙だな……』

「何が妙なんだよ？」

探している最中にそんな呟きを漏らしたメカ犬に、俺は意味が理解出来ず質問した。

『気付かないかマスター。この建物の付近に来てから、周囲に人の気配を全く感じないのだぞ』

「……確かに。ここは風都のシンボルとも言える場所だからね。常に誰かが居たとしてもおかしくない筈だ」

「寧ろ誰も居ない今が、異常だって事か？フィリップ」

メカ犬が口にした疑問に、翔太郎さんと、フィリップ君も、頭を悩ませる。

『マスター上だ！！！』

突如としてメカ犬が声を上げる。

その声に逸早く反応した俺とWが上空を見上げると、空を飛ぶ一体の異形が此方に、凄まじいスピードで急降下しながら、突っ込んできたのだ。

俺達はそれをどうにかギリギリのところで、回避する事に成功した。

「一体なんだっていうんだよ！？」

あまりにも唐突な事態に戸惑いながらも、俺は前を見据える。

その異形は俺の見た事の無い容姿をしていた。

太古の時代を生きた翼竜、プテラノドンに良く似た姿をした人型である。

何かしら怪人だという事は分かるのだが、俺は今までこんな怪人は今まで視聴してきた仮面ライダーのどのシリーズでも、見た事が無いのだ。

もしかしたらホルダーという可能性もあるが、それにしては、ホルダーの存在を感知出来る筈のメカ犬の反応が遅過ぎた。

だからその可能性は限り無く低いだろう。

そして何よりも、今問題とすべき事は、目の前の怪人が、明らかに俺達への敵意を持っている事だ。

「こいつを倒さないと、先に進めないって事か……」

もうあまり時間にも余裕が無いというのに、ここまで来て足止めを食うのは、かなり不味いかもしれない。

「ん？最近あれと似た様な奴を見た気が……」

戦闘態勢を整える最中に翔太郎さんが、何かを言おうとしたその時である。

横から黒いカラーリングが施された一台のバイクが突然飛び出してきて、謎の怪人を跳ね飛ばした。

しかも跳ね飛ばされた怪人は何枚もの銀色に輝くメダルを辺りに撒き散らす。

その光景を見て、俺は一つの答えに辿り着いた。

メダルの怪人……それを俺は、知っている。

怪人を跳ね飛ばしたバイクは急停車して、バイクから降りると、すぐさまヘルメットを外した。

その人物は、何処かの民族衣装を彷彿とさせる服を身に纏っている青年。

忘れよう筈も無い。

間違い無くあの人だ。

「よう。また会ったなオーズ」

翔太郎さんは、青年を見て、軽く挨拶を交わす。

「ええ、俺達って何気に縁があるのかもしれませんね」

それに対して、オーズと呼ばれた青年は、朗らかに挨拶を返す。

「ところで何か急いでるみたいですけど、この先に何かあるんですか？」

「ああ。何処かの馬鹿な連中が、とんでもないものを置いていったらしくてな」

「そういう事なら、ここは俺に任せて先に行ってください」

「良いのか？」

「ええ。俺は元々あいつに用があって来ましたから」

翔太郎さんとの会話を最後にそう言って締め括ると、オーズと呼ばれた青年は、怪人と俺達の間を遮る様に立ち塞がった。

「悪いな」

翔太郎さんはそう言った後、俺達に先に行こうと促してくる。

「前にも言ったでしょ。ライダーは助け合いだって」

急ぎこの場を離れる俺達の耳に、青年の言葉は俺の脳裏に、深く印

象的に残り続けた。

シードとWが、この場から離れるのと、時をほぼ同じくして、先程の青年が乗っていたのと同型のバイクがやって来た。

「映司！勝手に先に行くな！」

バイクから降りた柄の悪い金髪の青年は、着いて早々怒鳴り声を上げる。

その怒りの矛先である青年の名は火野映司（ひのえいじ）。

元々は世界各国を旅していたのだが、ある理由から暫くの間、一時的に旅を中断して、日本に残り続けている。

そしてもう一人、映司に怒りをぶつけていた、柄の悪い青年の名はアンク。

明らかに日本人な顔立ちをしているが、これには色々と複雑な事情

がある。

右手だけが人外な形状をしているのも、その複雑な事情の一つと言えるだろう。

「悪かったって。それよりもメダル！早くしないとヤミーが何処かに行っちゃうって！」

アンクが怒鳴るのは既に日常茶飯事となっている為か、映司は飄々とした態度で受け流す。

一瞬だけヤミーに視線を向けて、何かを考えるアンクだったが、すぐに舌打ちをして、映司に三枚のメダルを投げ渡した。

その間に丸い窪みが三つ設けられた物体、オーズドライバーを腹部に巻き付け、ベルト状にしており、アンクが投げ渡した三枚のメダルを受け取ると、そのオーズドライバーの窪みの部分に、一枚ずつ差し込んでいく。

向かって左側から順番に、赤、黄、緑と全てのメダルを差し込み終わって、平行だったそれを斜めにずらしてから、映司は次に、腹部に巻きつけたオーズドライバーの、右腰部に取り付けられている丸い物体、オースキャナーを手に取る。

その先端を先程メダルを入れて斜めにずらしたオーズドライバーに、上からスライドさせていくと、淡い光を発した。

最後に映司は、両腕を斜めにクロスさせて力ある言葉を口にする。

「変身」

映司がその言葉を口にした次の瞬間、通常ではありえない現象が巻き起こる。

幾重にも出現した、様々な色のメダルを模した光が、映司を覆い、最後に上から順に三つの一際大きなメダルを模した光が正面に映し出される。

それと同時に、謎の声も聞こえてきた。

『タカ・トラ・バッタ』

そうすると、映司の全身が光に包まれてその肉体を変化させていく上に、何処からか不思議な歌と音楽が流れ出す。

鷹を彷彿とさせる頭部に、虎に類似した腕部と、飛蝗をモチーフとしているのであろう脚部。

様々な姿がそこには内包されている。

いまここに立っているのは一人の戦う戦士。

仮面ライダーオーズ。

それがこの戦士の名前である。

**５０万ＰＶ突破記念作品　仮面ライダーシード＆仮面ライダーＷ　ミックスワールド**

ゲストの活躍は次回に続きます。

## ５０万ＰＶ突破記念作品　仮面ライダーシード＆仮面ライダーＷ　ミックスワールド

今回で取り敢えず戦いは終結となります。

それでは楽しんでいただけたら幸いです。

「はあ！」

オーズの拳が連続で目の前の敵へと降り注ぐ。

敵の怪人はその拳を喰らう度に、辺り一体に銀色のメダルを何枚も落とす。

この怪人の名前はヤミー。

人が持つ欲望を糧に生まれたモンスターである。

そして辺りに散らばるメダルはセルメダルと呼ばれていて、このヤミーの身体を構成しているのだ。

ヤミーはグリードと呼ばれる、セルメダルよりも大きな価値があるコアメダルを核とした上位に存在するグリードが、人間の欲望を開放させる事により、その人間を宿主として成長する。

強い欲望を持つ人間が宿主となれば、それだけ多くのセルメダルが生まれるのだが、人の欲望とは何処までも歯止めが利かず、大抵の場合は大きな厄災を招く事となる。

オーズとなった火野映司は、このメダルを巡る戦いに、巻き込まれながらも戦い続けている。

自分が戦う事で、目の前で理不尽に傷つく人々を助けられるかもしれないと思ったから、自分に出来る事があるのに放っておく事は出

来ないという意思を、映司は持っていたのが何よりの戦う理由だ。

「はあああ！」

オーズはヤミーの反撃を受け止めながら、それ以上に攻撃を加え続ける。

この猛攻に耐え切れなかったのか、ヤミーはオーズの攻撃で吹き飛ばされるのと同時に、空中で翼をはためかせて、空へと逃走を試みる。

「あ！待て！！！」

その様子にオーズは、慌てて声を荒げるが、そんな言葉にヤミーが従う筈も無い。

みるみる内に、オーズの視界から遠ざかっていくヤミーを前に、このままでは逃走を許してしまうと思われたその時である。

「逃がすな映司！こいつを使って仕留めろ！」

アンクが叫びながら、二枚のコアメダルを取り出して、オーズに投げ渡す。

「おっと！」

多少投げる位置が上にずれたその二枚のコアメダルを、オーズは跳びあがりながらキャッチする。

「そうか。これなら……」

キャッチした二枚のメダルを見たオーズは、納得した様に言葉を零す。

オーズが受け取った二枚のメダルは、現在の頭部であるタカヘッドを司るメダルと同様である、赤い色をしていた。

メダルを確認したオーズは、すぐに己が次にするべき行動を実行に移す。

オーズドライバーに現在収められている、三枚のメダルの内の、向かって左から中央と一番右のメダルを平行にしてから抜き取り、代わりに先程アンクから受け取った二枚の赤いメダルを入れて変身した時と同じ様に、ドライバーを再び斜めに傾けて、オースキャナーをスライドさせる。

『タカ・クジャク・コンドル』

変身した時とは違う音声が流れて、オーズの正面に縦一列で現れる三枚のメダルを模した、オーラプレートも、一番上以外は先程とは違う、赤い色である。

それと同時にオーズの姿が変化を起こす。

頭部は先程とあまり形状は変わらないのだが、若干の細部が変化して、緑色だった複眼が真紅に染まる。

腕部も赤く染まり、左腕には円形の盾タジャスピナーが装備され、背中には大空を舞う為の翼が出現した。

更に脚部の部分も赤くなり、形状も若干だが鋭さの増した形へとなる。

この一連の変化に伴いながら、オーズは全身に炎を纏い、周囲には変身時とは別の、独特な音楽と歌が、奏でられた。

これがオーズの能力、コンボチェンジである。

グリードの核となるコアメダルで、特定の三枚を特定の箇所に使用する事で、オーズは変身を可能とするのだが、このコアメダルには、様々な種類が存在しており、その種類によって、司る力が全く違うのだ。

その中でも、かなり特異な部類に入るのが、このコンボチェンジだ。

同じタイプのメダルを三枚使用する事で、オーズは急激な肉体的ダメージを伴う代わりに、通常以上の能力を発揮する事が出来る。

先程オーズがなった、このタジャドルコンボもその一つだ。

「は！」

タジャドルコンボとなったオーズは背中の翼を広げ、大空へと舞い上がる。

凄まじい高速飛行により、逃走するヤミーに追いついたオーズは、タジャスピナーから、炎弾を発射してヤミーの動きを鈍らせる。

連続で撃ち出される炎弾に、最初は回避をしていた、ヤミーだったが、それも長くは続かず、直撃を受けて地面へと落下していく。

それを好機とみたオーズは、この戦いを終わらせる為の一撃を放つ為の準備を開始する。

『スキャニングチャージ』

オースキャナーをドライバーにスライドさせる事で、一気にメダルの力を解放したオーズは、両足を地面に落下したヤミーに向けて、急降下する。

その際に両足へと蓄積されたエネルギーが、鳥類の足の様な状態へと形状変化を起こす。

「せいやあああああ！！！！！」

オーズの掛け声と共に、必殺の一撃はヤミーに大きなダメージを与えて、大きな爆発を引き起こした。

雨が降るかの如く、大量のセルメダルが降り注ぐ中、地面へと舞い降りたオーズはすぐに変身を解くと、力尽きて倒れこんでしまう。

コンボチェンジは大きな力を使う事が出来るが、その代わりに支払う事となる代償も大きいのである。

戦いが終わった事と、コンボを使った事により、一気に緊張の糸が切れた映司は、仰向けになって、荒くなった呼吸を整えていたのだが、何となく見上げていた空に不思議な光景を見た。

「何だあれ？」

風都タワーの辺りから、淡い緑色の光の柱が、空へと向かって伸びていくのを、映司はその視界に捉えたのである。

「まずいね」

突如として風都タワーの上から空へと発射された謎の光の柱を見て、フィリップ君が呟きを漏らす。

『何がまずいのだ？』

「あのエネルギーの先にあるのは、特殊な人工衛星だ。そこにあの凝縮されたエネルギーが照射されれば、地球全土を覆う様にエネルギーが充満して、地上に降り注ぐ事になる。それがされたら、もうワールドクライシスを止める事は出来ないだろう」

メカ犬の質問に対してフィリップ君が、地球の本棚で知ったであろう知識を俺達に説明してくれる。

「おいおい。めちゃくちゃやりやがるな……」

「どうすれば阻止出来るんですか？」

それを聞いて翔太郎さんは、スケールの大きい話に嘆息し、俺はそれを阻止する為の説明を要求した。

「これを阻止するには、あのエネルギーが人工衛星に届く前に分散させるしかない」

「つまりどうすれば良いんだよ？」

フィリップ君の説明に、翔太郎さんがもう少し、簡潔に話す様に促す。

「ようは、僕達の全力の一撃を、あのエネルギーに当てれば良い」

説明をかなり端折った感があるのは否めないが、確かにこの方が圧倒的に解り易い。

だが俺はここで一つの疑問を覚える。

「でもそんな事をしなくても、あの光を出している根元の装置を破壊すれば良いんじゃないんですか？」

「あの光が発射される前なら、エネルギーの供給さえ切れば、良かったんだけどね。今それをすれば、余剰なエネルギーが、地球の中に全て流れ込んで、また違う世界が取り込まれる可能性が高い。確実に阻止するなら、上空で全てのエネルギーを飛散させて無効化する必要があるんだよ」

それを聞いた俺達は、戦慄しながらも、この実験を阻止する為に、今するべき事を開始する。

『お待たせですマスター！』

ガイア・コールでメカ竜を呼んだ訳だが、何故かその声は上空から聞こえてきた。

疑問に思いながらも上に視線を向けると、どうしてそうなったのか分からないが、メカ竜はなんとバードモードのエクストリームメモリに乗ってやって来たのである。

一体全体何があって、その様な状況になったのか、非常に気になるが、今は時間が無いので、タッチノートの操作を続けてスタンディングモードに変形させて掴み取った。

隣ではWも、エクストリームメモリを掴み取っている。

『ベーシック・ガイア』

『エクストリーム』

俺が左腰部分をスライドさせてメカ竜を差込み、Wがエクストリームメモリを、ダブルドライバーに装填して展開させると同時に音声が鳴り響くが鳴り響き、俺のメタルブラックのボディーには、メタルレッドの追加装甲が施され、Wはセントラルパーテーションが左右に分離した後にクリスタルサーバーが出現して、共に強化変身が完了する。

更にベーシック・ガイアになった俺はタッチノートを操作して、同

じくサイクロンジョーカー・エクストリームとなったWもスタッグフォンの操作を始めた。

『オレサマを呼ぶとは、とんでもねえ事が起こってるんだな！！！』

操作をした直後に、ドライブジェットに変形したチェイサーさんと、ハードボイルダーをタービュラーユニットに換装させた、ハードタービュラーが飛来する。

「チェイサーさん！あの光を追ってくれますか？」

『へへ！オレサマに任せときなマスター！！！！』

ブッチギってやるぜと啖呵を切ったチェイサーさんは、俺を乗せて空へと伸び進んでいく光に向かって高速で飛行し、Wも後ろからハードタービュラーで追走する。

もう間もなく成層圏に届きそうな高度に達する頃に、俺達はどうにか人工衛星を目指して伸び続ける光を追い越す事に成功した。

後少しでも遅れてしまい、光が宇宙にまで伸びていたとしたら、俺達にはもう打つ手は残されていなかっただろう。

間に合った事に、俺は心の底から喜んだ。

「それじゃあ、行きましょう！」

『うむ！』

「これで全部終わらせるぜ」

「皆！呼吸を合わせて同時に強力な一撃を叩き込むんだ」

光の進路に立ち塞がった俺達は、互いを鼓舞しながら、最高の一撃を繰り出す為に其々、チェイサーさんと、ハードタービュラーから飛び出す。

『マックスチャージ』

『プリズムマキシマムドライブ』

二人の仮面ライダーの両足に凄まじい力が眩い輝きとなって集約されていく。

更に出現したベーシック・ガイアの四体の分身体が、二体ずつ俺とWの背中を蹴り飛ばして、その推進力を大幅に増す。

「「「『ガイアエクストリーム』」」」

四人の声が重なり、最大級の一撃が光の柱と衝突する。

鬩ぎ合う力が、俺達の身体を軋ませて、絶え間なく苦痛を生み続けるが、それでも俺達はここから退かない。

退く事が出来る筈が無いのである。

今この一撃には地球に生きる人達の命が懸かっているのだ。

ここに辿り着くまでの、道を切り開いて今も戦い続けている仲間達の為にも、目の前で涙を流した少女の涙に報いる為にも、ここで退

くなどという事は絶対に出来ないのである。

「「「『うをおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！！！』」」」

その想いはこの場にいる全員が、一緒なのは間違い無いだろう。

俺達は全員で叫びながら、己の全てを賭けて、限界を超えた力を込め続ける。

絶対に諦めないという信念が、大切なものを命を賭してでも守りたいという想いが、俺達に何処までも力をくれる。

ここで負ける訳にはいかない。

俺達は誰かを守る為の戦いで、負ける事は絶対に許されはしないのである。

「……だってそうだろう。俺達は……」

俺は、いや、俺達は言葉を紡ぐ。

たった一言。

それは絶対不変の永遠のヒーローの名前だ。

「「「『仮面ライダーだああああああああああああああああ！！！！！！！！』」」」

この瞬間に更なる限界を超える。

拮抗していた力はそのバランスを崩して、俺達の一撃は、天へと伸びる光の柱を刺し貫きながら、一気に急降下していく。

引き裂かれた光は飛散しながら、空へと溶け込んでいった。

この瞬間……俺達はこの世界の危機を、確かに救ったのである。

「終わりましたね……全部」

「ああ。そうだな」

全てを終えた俺達は、変身を解いて風都タワーから、空の上で飛散し続ける光を眺めていた。

『あの光の残滓は放っておいても大丈夫なのか？』

「大丈夫さ。あの光には、もう世界を改変するだけの力は残されていない。あの光自体ももう少しすれば、跡形も無く消えてしまうさ」

俺と翔太郎さんが会話をしている少し後ろでは、メカ犬とフィリップ君が空を見上げながらいまだに空に残る光について討論をしている。

改めてこれで全てが終わったのだと俺は実感した。

思えば世界が改変されてから、あまりにも色々な事が連続で起こって状況に流され続けていたので、リラックスして物事を考えるという事を、忘れていた気がする。

「あ！そうだった！」

何か久しぶりにリラックスした状態で、考え事をしていたら、俺は一つの重要事項を一つ思い出した。

はっきり言って、この状況で今までこの一言を言葉にしなかったなんて、余程俺は余裕が無かったんだなと、改めて実感してしまう。

「あの」

俺は意を決して、その一言を言う為に、翔太郎さんに話しかける。

「うん？」

呼ばれて振り向いた翔太郎さんに、俺は例の言葉を口にする。

「サインを書いてもらっても良いですか？」

俺はやっとその一言を伝える事に成功した。

**５０万ＰＶ突破記念作品　仮面ライダーシード＆仮面ライダーＷ　ミックスワールド**

次回はＷ編最終章となります。

ここまで本当に長かったです……

## ５０万ＰＶ突破記念作品　仮面ライダーシード＆仮面ライダーＷ　ミックスワールド

これでやっと、このお話しも、終わりを迎えられる事が出来ます。

それと何気に今回で、連載部数１００回目となりました。

振り返るとまだ連載を始めてから、一年も経っていないのに随分と書いたものだと、私自身が驚愕です。

それではＷ編の最終章、楽しんでいただけたら幸いです。

「メリークリスマース！！！！」

全てを終えた俺達が、やっと帰ってくる事が出来た、鳴海探偵事務所の玄関の扉を開けると同時に、クラッカーを持った中年のサンタルックなおじさんが、クラッカーでカラフルな紙吹雪と火薬の匂いを撒き散らしながら叫んだ。

最初はあまりの出来事に驚愕していたが、この人物には物凄く見覚えがあった事を思い出す。

この中年のサンタコスをしたおじさんは、Ｗ製作スタッフの間で通称となっていた、風都イレギュラーズの一人、サンタちゃんで間違い無い。

しかも後ろに視線をやると、サンタちゃんだけではなく、ウォッチャマンやクイーンとエリザベスまで居る。

「あ、皆お帰り～」

「遅かったな」

「どうも。僕まで呼んでいただいて、ありがとうございます」

俺達の帰宅に気づいた他の人達が話し掛けてくる。

亜樹子さんと照井さんがいるのは理解できるのだが、何故か長谷川さんまで居たのだ。

だが想定外の出来事はこれだけでは終わらなかった。

「何処行ってたのよ純！」

「こんな面白そうな場所があるんなら、最初から私達にも教えてくれたっても良かったのになあ～」

「うん。なのはちゃんと一緒に、知り合いの家に行くって聞いてたけど、探偵事務所だったんだね」

どうしてなのか、アリサちゃんに、すずかちゃんと、はやてちゃんが俺を出迎えてくれたのである。

「ちょっとお姉ちゃん！その唐揚げは、私が先に目をつけてたんだからね！」

「あら、この唐揚げには、恵美の名前が入ってるのかしら？」

しかも風都イレギュラーズの皆さんの中に、さりげなく風間姉妹が溶け込んでいるし……

事務所内を良く観察してみると、幅を利かせていた大きなソファーは隅に片付けられており、何処から調達してきたのか、大きなテーブルが二つ並んで設置されている。

そのテーブルの上には、大量の料理が所狭しと占領しているのだ。

この状況を一言で表すのであれば、立食パーティーというのが妥当だろうか。

「あの、これは一体何の集まりなんですか？」

「何の集まりって……純。今日が何日なのか、覚えてないの？」

俺は亜樹子さんに聞いたつもりだったのだが、何故かアリサちゃんが、俺の質問に対して、質問で返す。

今日が何日か……俺は頭を捻らせながら必死に考える。

「あ！」

そこで思い出す。

昨日は確か、十二月二十三日。

つまり今日は……

「変な事言うんやな、純君は」

「今日はクリスマスイブなんだよ」

やっと気づいたのかと、アリサちゃんに続き、すずかちゃんとはやてちゃんも苦笑いを浮かべながら言う。

暫くして、俺が落ち着いてから、皆にどうしてこうなったのかの経緯を聞くと、念の為に恵理さんに教えておいたこの探偵事務所に、俺達の帰りが遅いという事で直接向かえに来たらしい。

そこで亜樹子さんと会って、俺の知り合いだと言ったら、人数が多

い方が楽しいからと、このパーティーに招かれたのだそうだ。

そもそも何故この鳴海探偵事務所で、クリスマスパーティーが行われているのかというと、隣で話している翔太郎さんと亜樹子さんの会話を聞く事で理解する事が出来た。

かいつまんで説明すると、戦いが終わった後に、亜樹子さんが祝勝会をしようと言い出したそうなのだが、ちょうど今日がクリスマスイブだったという事で、他にも今から参加出来る人達を集めて、パーティーをしようという事になったらしい。

ちなみに長谷川さんと恵美さんが居るのは、戦いが終わった後に、直接招待したのだそうだ。

それにしても思うのは、二つの世界の暦についてだ。

どうやら俺達が居た世界の方が、基本ベースとなっているらしいのだが、翔太郎さん達の世界は、照井さんと亜樹子さんの結婚と新婚旅行の時期や、本来は忙しい時期の筈なのに、すぐに集まれた風都イレギュラーズの
事を考えると、彼等にとっては本当の暦とは違うのではないかと考える。

元々違う世界が不安定な形で一つとなっているのだから、何処かで歪みや世界の修正力というものが働いているのかもしれない。

まあ、幾ら考えても俺に答えを出す事は出来ないし、フィリップ君の話しでは、明日の朝には全てが元通りになるというのだ。

悩むのはこれ位にして、俺もこの一時を楽しんだ方が得かもしれな

い。

そう決断した俺が、皆のパーティーの輪に加わろうとしたその時だ。

「……純」

この祝いの場には似合わない、小さな声が俺の耳に聞こえてきた。

「なのはちゃん……じゃなくてユイか？」

なのはちゃんが普段から見せる雰囲気とは違う事で、俺はこの見知った少女がユイだという事に気づく。

そしてユイは俺が呟いた言葉に対して、静かに首を縦に振り、俺の考えが間違いでは無かった事を証明してくれる。

「少しだけ二人で話したいの」

「話しって？」

「ここじゃ話しづらいから、外で良いかな……」

俺はユイのこの申し出を承諾して、皆に外の空気を吸ってくると言って、二人で探偵事務所の外に出た。

既に太陽も沈み、夜の闇を月明かりが優しく照らしている。

もう少し歩けば、綺麗なクリスマスのイルミネーションが見える場所に行けそうではあるが、今の俺とユイがいる場所は、そういった装飾は施されては居ないので、明かりは所々に設置された電灯と空から降り注ぐ月明かりのみだ。

「……最後に兄さんが純にありがとうって言ってたんだ」

月明かりに照らされながら、暫くの沈黙の後、ユイは優しく微笑みながら言った。

「……そっか」

何を言うべきなのか、考え付かなくて、俺は辛うじてそう返す事しか出来なかった。

「ありがとう」

何故かユイはもう一度その言葉を口にする。

「さっきのは、兄さんに頼まれた分で、これは私から。純には何度言っても言い足りないんだけどね」

「ユイ……」

ユイの言葉に、俺は戸惑う。

俺に出来た事は何だったのか。

メカ犬は俺がユイのお兄さんに、笑顔を取り戻させたと言ってくれたが、何処か後悔の念が拭いきれない。

もしかしたら他に何か方法があったんじゃないかと、未練がましい考えが何度も脳裏を過ぎる。

「これが最後なんだから、そんな悲しい顔をしないでよ」

ユイはそう言うと、俺を抱き寄せて、耳元で語りかけてくる。

「私の中に眠ってるあの子が教えてくれるんだ。純は優しすぎるから……だからね。もう私達、兄妹の事で迷わなくて良いんだよ」

まるで春の微風の様に、ユイの言葉が、俺の心を癒していく。

だけど、それでも俺の心の中から、消えてくれない後悔の気持ちが残り続ける。

「もう全部終わった事だったんだよ。誰も悪くないの」

「……だけど俺は」

「きっとね。神様が私のお願いを叶えてくれたんじゃないかなって思うんだ」

言いかけた俺の言葉に被せる様に、ユイは語り続ける。

「私も兄さんも、本当は言えない筈だったお別れの言葉を言う事が出来たんだよ。それに最後を笑って終わりに出来るから……ううん。きっと私はこれから始まるのかも」

「ユイ……もしかして」

「私も今から兄さんの居る場所に行くね。それで全部最初から始めるんだ」

お互いの吐息すら感じ取れる様な距離で見た、ユイの笑顔には一片の曇りも見えなかった。

「最後にもう一度ありがとう……この子と何時までも仲良くしなくちゃ駄目だよ」

ユイは俺にそう言った後、目を閉じて全身の体重を預けてきた。

「……ユイ？」

俺がユイに言葉を投げかけると、暫くしてゆっくりと、閉じていた目を開ける。

「……純……君？」

その言葉を口にした少女の表情は、俺が良く知る幼馴染のものだった。

そしてこの事象が、俺に一つの別れを理解させる。

「……ここって何処なの？何か外も真っ暗だし？」

完全に覚醒したなのはちゃんが辺りを見回しながら、現状を把握出来ずにあたふたしている。

何時ものなのはちゃんだ。

一連の動作を見て、この子はユイではなく、俺が昔から知っている、幼馴染のお隣さんの同い年の女の子なんだと、改めて実感する。

「なのはちゃん！！！」

「え！？ふわ！？じゅ、純君！？」

俺は湧き上がるこの感情を抑える事が出来ずに、思い切りなのはちゃんに抱きついてしまう。

この感情が再会の喜びなのか、永遠の別れを実感した事への悲しみなのか、様々な考えと自分でも理解出来ない感情が俺の中で混ざり合い、整理する事が出来ずに、今はただ目の前に居るなのはちゃんを抱きしめる事しか出来なかった。

最初は俺に抱きつかれて、慌てていたなのはちゃんだったが、暫くするとただ優しく俺の頭を撫でていた。

不思議と撫でられる度に、俺の中に湧き上がった感情は、落ち着きを取り戻していく。

「……ごめんなのはちゃん」

どうにか落ち着いた俺は、謝罪の言葉を口にする。

「大丈夫だよ。少し驚いただけだし。ところでここって……あ！」

なのはちゃんが言い掛けたその時だ。

空から小さく白い結晶が俺達の目の前に舞い降りた。

「雪だね」

「ああ」

静かに少しづつ降り積もる雪を、なのはちゃんは小さな手を広げて掬い取る。

何処と無くこの語呂と幻想的な雰囲気は、先程別れを告げた、彼女を連想させた。

まだ少し心の整理はつかないが、最後に微笑んで自分のこれからやりたい夢を語ってくれた彼女に、俺も笑顔でさよならを言おうと思う。

ありがとう。

そして、さよなら……ユイ。

静かに降り積もるこの雪達が、俺には今頃再会しているであろう、仲の良い兄妹を祝福している様に思えた。

『しかし不思議なものだなマスター』

「そうだな」

次の日の夕方。

俺とメカ犬は自宅の部屋で、ここ二日で我が身に降り注いだ体験について話していた。

結局はフィリップ君が言った通り、クリスマスパーティーが終わり、自宅に帰って、今日の朝を迎えると、全てが元通りになっていた。

しかもメカ犬が先程言ったように、不思議な事なのだが、過ぎ去った筈の二日という時間までもが、巻き戻されていたのである。

つまり今日は、十二月二十三日の夕方で、学校の終了式があり、明日は皆で隣町の遊園地に遊びに行く約束をしているのだ。

俺とメカ犬以外の人達の記憶も、その日以前の状態にまで、改竄されていた。

『今にして思うが、あれはワタシとマスターが見た夢だったのではないかと思えてくるぞ』

「夢か……」

メカ犬の言葉を聞きながら、俺は部屋の一点を見る。

「いや、あれはきっと本当にあった事さ」

そこには俺の憧れる人達が書いてくれたサイン色紙が置いてある。

その存在が、これは夢なんかじゃなくて、本当に起こった一つの現実だのだと教えてくれるのだ。

だけどきっと、それは誰にも語られる事の無い、忘れられた物語。

皆が忘れてしまったとしても、俺は覚えている。

世界の危機を救った仮面ライダー達と、深い絆で結ばれた兄妹の物語を……

今日の海鳴は、何も変わらず、平和である。

W編　完

おまけ

「のう、サバスチャン。例の手紙は日本の皆に届いたかのう？」

「はい。確かに届いている筈でございますよ姫様」

「それなら良いのじゃ。我は今から楽しみなのじゃ！」

「姫様。慌てなくても、きっと大丈夫ですよ」

「うむ！」

これは、とある国のお姫様と、老執事の会話である。

次回の本編に続く？

どうも、作者のＧ－３Ｘです。

Ｗ編の約半月にも及ぶ毎日更新という状況……

プレイバック編も合わせると、入院していた時以外は、殆ど毎日書いていた様に思います。

合わせて約１０万文字……

さて、これからのシードなのですけど、久しぶりに本編を書いていく訳ですが、執筆速度が元に戻ります。

流石に毎日更新は出来なくなるので、また週に一度か二度の更新に落ち着くでしょう。

恐らく次回は早ければ今週中に、一話位更新するとおもいますので。

それと約束通り、頼まれていた短編も一つ近々更新するので、宜しければそちらも見ていただけたら嬉しいです。

それでは次は少し日が空いてしまうと思いますが、またお会い致しましょう。

# 特別短編　仮面ライダーアスラ　　Ｒ１５指定（前書き）

どうもＧ－３Ｘです。

このタイトルを見て、何なんだと思った方も多いと思うので、先に説明をさせて頂こうかと思います。

この作品の原案は、私ではなく月光閃火さんが、考えてくれたお話しが元となっているのですが、本来はシードの番外編としてという形を取る筈でしたが、シードのコンセプトとはどうしても合わず、完全オリジナルの短編として書く事になった作品です。

最初は別枠で短編に載せようかとも考えていたのですが、やはりせっかく考えていただいた案という事もあり、此方にこのお話だけは、残酷描写等Ｒ１５指定の注意書きを付け足す事で掲載する事に決定致しました。

世界観も完全に別の、オリジナル短編となっていますので、シード本編での登場予定等は、現在考えてはいませんが、楽しんでいただけたら幸いです。

原案：月光閃火

著者：Ｇ－３Ｘ

# 特別短編　仮面ライダーアスラ　　R15指定

「これで終わりにするぞ！」

良く通る低い声の男性の声が、辺りに響き渡る。

「しつこいんだよお前は！」

それに対して、締まりの無い下卑た男性の声は、その調子を荒げながら、答えを返す。

二人の声の主の居る場所は、地面も空も無く、ただどこまでも広がり続ける空間が広がり続けるだけである。

その声の主達も人の姿をしておらず、辛うじて言葉として表すのであれば、光の集合体と言えるだろう。

何処までも続く、無の空間と対峙する、白い光と黒い光。

それだけがこの世界の全てだった。

「これ以上、貴様の好きにさせるわけには行かない！まだ現実世界に干渉しようと考えているのなら、ここで貴様を消去する！」

「へ！俺はただ自分のやりてえ事をやるだけさ！てめえの事なんか知ったこっちゃあねえんだよ！」

白い光の言葉に対して、黒い光は己の欲望に忠実となり、激しい抵抗を開始する。

何度もぶつかり、鬩ぎ合う二つの光だったが、その度重なる凄まじい衝撃によって、空間に大きな亀裂が発生した。

「これは!?」

「しめたぜ!!!」

生じた亀裂に驚愕する白い光に対して、黒い光は、素早い動きでその亀裂へと飛び込んでしまう。

「しまった!?」

亀裂へと飛び込む黒い光を見て、白い光は己自身の迂闊さを悔やむ。

「これは、現実の世界へと通じる世界の亀裂……奴が現実世界に行けば、必ず修正が出来ない程の捻じれを生むだろう」

白い光は数瞬だけ悩み、一つの決断を下す。

「このままにしておく訳には行かない。奴の後を追わなくては……」

硬い決意を決めた白い光は、黒い光が飛び込んだ亀裂へと自らも飛び込んで行った。

俺は今人生の岐路に立たされている。

手に握っているのは一枚の閉じられた用紙。

この用紙に書かれている内容によって、俺の人生は大きく二つに分かれるのだ。

心臓の鼓動が早くなるのを感じながら、俺は天に祈りを捧げつつ、用紙を開き、中に書かれた一文を確認した。

【不合格】

俺の視界一杯にその一文が容赦無く入り込み、プロボクサー顔負けのアッパー並の衝撃が俺に襲い掛かる。

その一撃はあまりにも致命的であり、俺の体は築二十年のアパートの畳の上に沈みこんだ。

完全なＫＯ負けと言えるだろう。

「……また不合格か」

不合格。

日本人にとって、これ程までに堪える言葉は中々無いだろう。

受験にしろ、就職面接にしろ、何かしらの資格試験にしろ、その合否は否応無く、その人物のこれからを左右してしまうものだ。

俺だってその例外に漏れる筈も無く、今をもってその事実を再認識した、純正なる日本男児である。

落ち込みまくりの現状を打破する為に、ここで突然だが、自己紹介でもしておこうと思う。

俺の名前は、成桐円射（なりきりえんじゃ）。

築二十年のボロアパートで一人暮らしをしているフリーターだ。

最初に言っておくが、俺は断じて浪人生ではない！

高校だけは卒業しているが、それ以上進学する気は無いからな。

つまり俺が今握り締めている、この不合格という忌々しい単語が記された用紙は、国が認めた法的な学習機関から送られたものでは無いのである。

ならば残るは資格試験か、就職活動の結果報告といったところだが、どちらかと言えば後者の方に該当するだろう。

俺には小さい頃からの夢がある。

いつか絶対に役者になる事だ！

そして最初の仕事は特撮ヒーローの主役だと、心に決めている。

切欠は幼少時に観た仮面ライダーという特撮番組だ。

幼心にブラウン管越しに活躍した彼等に俺は心底惚れた。

何時か必ず俺も絶対に肩を並べるんだと、誓いを立てたものだ。

つまりこの用紙は、ヒーロー番組のオーデションの結果通知なのである……

「くうおおおおおおおお……」

気分を変えようと努力をしていたにも関わらず、俺は自ら心の地雷を踏んでしまい、六畳一間の畳の上を悶絶しながら、これでもかと言う程に転がりまくった。

暫く転がり続けて、溜飲が下がった後、俺は今も心を抉り続ける非情な現実に立ち向かいながら、出かける準備を始める。

百円ショップで買った掛け時計で時間を確認すると、間も無く午前十時を回ろうと言う時間だ。

これでも俺はフリーターの端くれな為、これからアルバイトに行かなければならない。

気分が乗らないのは仕方ないが、だからと言って休みたいです等と、口が裂けても言えはしないのだ。

学生時代から寝巻きとして愛用している黒のスウェットを脱ぎ、良

く分からない英語の羅列がプリントされた長袖のシャツと使い古しのジーンズを装備して、ケータイと財布をポケットに突っ込めば準備完了である。

バイトまではまだ幾らか余裕があるので、気晴らしにコンビニに寄ってから行こうと玄関に立った所で、来客の存在を告げる、インターホンの電子音が鳴り響く。

「一体誰だよ？こんな出かける間際に……」

俺は文句を口にしながら、玄関の扉を開けた訳だが、尋ねてきた人物を確認した直後に一瞬前の自分自身に説教したい気持ちに駆られた。

「ごめんください円射君」

俺の目の前に佇む女性の美貌は、まさに可憐。

清楚な美人という言葉は彼女の為に存在しているのでは無いかと、本気で思えてしまうそんな美しさを放っていた。

その美しさは何度見ても、俺の眼球を焼き尽くしてしまいそうだ。

彼女の名前は鳴海綾香（なるみあやか）さん。

俺の隣に住んでいる同じアパートの住人で、現役の女子大生。

このアパートに住む俺を含む、未婚男性全員のマドンナと言える存在だ。

そんな高嶺の花とも言える綾香さんが、お隣さんとはいえ、どうして一介のフリーターである俺の家を普通に訪ねてくるのかというとそれなりの理由がある。

俺は日々役者を目指している訳だが、なんと驚く事に綾香さんも、芸能界入りを目指しているのだ。

それを知ったのは、あるオーディション会場での事である。

同じ会場でその時俺達は、別々のオーディションに参加する為に来た訳だが、その二つのオーディションが、同じ系列グループの主催であり、待合室が同室となっていたのだ。

それまではまともに会話をした事などは、引越しの挨拶でしたぐらいだったが、お隣さんということもあり、顔は覚えていた。

そこでお互いを知り、似た夢を追っているという親近感からか、何時の間にか、以前よりも親しい付き合いとなったのである。

「これ私が作った肉じゃがなんだけど、作りすぎちゃったから、円射君にも御裾分け」

そう言った綾香さんの手を見てみると、大きめのお皿に、文字通りの料理が、ラップに包まれた状態で収まっていた。

あのオーディション会場での会話以来、俺が料理が苦手で、普段からコンビニ弁当やスーパーの惣菜ばかり食べていると知った綾香さんは、こうして俺の部屋を定期的に訪ねては、手料理を持ってきてくれる様になったのである。

その容姿の可憐さも驚愕に値するが、その澄み渡った青空の様な優しさも、彼女がこのアパートのマドンナだと言われる理由かもしれない。

「いつもありがとう綾香さん。食べ終わったら洗って返すからね」

「ふふ、良いのよ。今更遠慮しなくても。作りすぎちゃっただけなんだから」

俺が言ったお礼の言葉に、綾香さんは天使を思わせる笑顔で答えてくれる。

その笑顔は俺にとって、いやこのアパートに住む全男性の清涼剤だ。

普段ならばここでもう少し、世間話をしたら、自然と解散となるのだが、今日は少し様子が違っていた。

「あのね、迷惑じゃ無かったら、円射君に相談したい事があるんだけど良いかな？」

綾香さんが普段の笑顔を曇らせて、遠慮しがちに聞いてきたのである。

勿論俺は綾香さんの相談を断る気など、微塵も無いので即答で了承した。

しかし俺はこれからアルバイトに行かなければならない。

綾香さんもその事は知っていたので、アルバイトが終わって帰ってきてから話したいと言ってくれたので、俺は必ず行くと、絶対の誓

いを立ててアパートを後にした。

『臨時ニュースをお伝え致します』

アルバイトが終わってアパートに帰ると途中の事だ。

大型ビルに設置されたスクリーンから流れるニュース番組の速報を、俺は何となく視界に捉えた。

『……市の二丁目付近の河原で、二十台前半の女性の遺体が発見されました』

「おいおい。それって俺が住んでるアパートのすぐ近くじゃないかよ……」

毎日の様に流れる、誰かが死んだ、殺されたというニュース。

その加害者に怒りを感じないと言えば、嘘になるが、それは俺の生きる現実とは何処か違う世界の様に感じてしまい、中々身近に死と

いう恐怖を実感する事は出来ない。

しかしその場所が、俺が普段から生活するテリトリーの中で起こった出来事だと言われれば、それは途端に現実味を帯びてくる。

「早く帰ろう。綾香さんとの約束もあるしな」

俺は身近に感じた恐怖感を出来るだけ早く忘れる事が出来る様にと、歩調を速めた。

『遺体の首には、人間の力では不可能と思われる力で絞められた傷跡があり……』

俺はこの時、まだ知らなかった。

本物の死の恐怖が、すぐ近くまで迫って来ているという変え様の無い事実に……

「最近誰かに見られている気がするんです」

足早にアパートへと帰ってきた俺は、約束通り綾香さんの部屋を訪ねた。

そして綾香さんの部屋に通されて、相談されたのが、先程の言葉である。

「つまり綾香ちゃんのストーカーって事だね～」

真剣に相談をする綾香さんの目の前で、その空気をぶち壊す間延びした女性の声が聞こえて来た。

「ストーカーですか？」

俺は綾香さんと、先程のおっとりとした声の主に確認を取る。

今綾香さんの部屋には、三人の人間が存在している。

一人目はこの部屋の住人である、綾香さん本人。

二人目はその綾香さんに、部屋へ来るのを招待された俺。

そして三人目は……

「最近のストーカーは凄いから、男の子の円射ちゃんが守ってあげないと駄目だよ～」

このまったりとした雰囲気を全身から全力で放出する女性は、このアパートの大家さんである、来瀬美亜（くるせみあ）さん。

何故かこのアパートに住む皆は、名前では呼ばずに大家さんと呼んでいるので、俺もそう呼んでいる。

話しに聞くと、既にこの呼び方が親しみを込めた昔からの愛称らしいのだが、真実は定かでは無い。

普段からマイペースなおっとりした人だが、風の噂によると、学生時代は地元の学校で本人いわくやんちゃをしていたそうで、大家さんが学生だった頃を知る、昔からここに住んでいる気の良いおじさんも、この話を聞くと呼吸困難に陥る程だ。

だからこのアパートではある暗黙のルールとして、大家さんを怒らしてはいけないという鉄の掟が存在している。

実際俺の上の階に住んでいたヤンキー色高めなお兄さんも、近隣住民の苦情を聞きつけた大家さんが尋ねた翌日には、金髪だった髪が黒の七三カットになり、パンクファッションだった服装がビジネススーツへと変貌してしまったのだ。

その光景を見た時、俺はこの人にだけは逆らわない様に心掛けようと、己の魂に誓った。

「あの、どうして大家さんがここにいるんですか？」

俺はなるべく機嫌を損ねない様に、大家さんがこの場にいる理由を聞いてみる。

「私が無理を言って、来てもらったんです。一人で居るのが心細かったので」

「そうだよ円射ちゃん。ちゃんと乙女心を理解してあげないと～。それとも私が居たら何か不都合な事があるのかな～」

申し訳無さそうに答える綾香さんに、何処か含んだ言い方をする大家さんを前にして、俺はそれ以上言い返す事が出来なかった。

それに実際綾香さんと二人きりで、しかも綾香さんの部屋に居るなんて状況になったとしたら、俺の理性が何処まで耐えられるのか、自信が無いので、結果的にはこれで良かったのかもしれない。

「……話しを戻すんですけど、誰かに見られている気がすると感じたのは何時頃なんですか？」

はっきり言ってこれは重要な質問だ。

自慢じゃないが、俺を含めて、このアパートに住む未婚男性の全員が綾香さんを常に暖かく影から見守っている。

その視線を綾香さんが感じ取っていたとしたのであれば、早急に対策本部を設置して、原因を明確にしてから、皆で改善策を練らなければならない。

「あの、上手く言えないんですけど、悪寒を感じるという感じでしょうか……何か胸騒ぎを覚えるんです」

「もしかしたらそのストーカーの正体ってこういう人かもね～」

若干その時の恐怖を思い出しながら語る綾香さんに対して、大家さんはおもむろにテレビのリモコンを操作して、電源を入れると、現在やっているニュース番組にチャンネルを合わせた。

数分の間、政界に関するニュースが流れていたが、それが終わると、俺がバイト帰りに見たニュースとほぼ同じ内容の報道が、移り変わる画像と共に、ニュースキャスターの声で報道される。

俺が聞いた時から何か進展があったのか、先程のニュースに続いて、一枚の顔写真が画面に映し出された。

何処か爬虫類を彷彿とさせる顔をした男の写真なのだが、何故かその目を見ていると、男の俺ですら生理的な悪寒を感じた。

その写真の男の名前が、画面に表示される。

外道闇慈（そとみちあんじ）。

性犯罪の常習者で、先程流れたニュースの容疑者らしい。

好みの女性を見つけては、暴行を加えた後に、性的な陵辱をした上で、最後にその首を締め上げて殺害する事に喜びを覚えるという、異常な性癖を持つ犯罪者だ。

他にも過去何度も軽犯罪も犯しており、最近まで服役していたらしいのだが、最近になって出所してきたらしい。

軽犯罪は兎も角として、殺人を犯しているのであれば、死刑にならなかったとしても無期懲役か良い所だと思うのだが、この男は狡猾であり、証拠が殺人については証拠が不十分だった為に、警察側も短い刑期しか勝ち取る事しか出来なかったのだと、ニュースでは流れている。

今回の事件も凶器は未だに不明らしいのだが、その犯行方法と、周囲の目撃情報から、この男が容疑者として浮上したのだそうだ。

更に遺体の殺害時刻を前後して行方不明となっている事からも、警察は高い可能性があると睨んだのだろう。

そんな男がこの近隣に、今も潜んでいる可能性があるのだというのだから、否応無く恐怖は募っていく。

「……もしもこんな人が、ストーカーだったら大変な事になるよね～」

俺は今気づいた。

大家さんは、俺に怒っている。

幾ら仕事があるからといって、相談があると言った本人がアルバイトが終わってからで良いと妥協したとしても、それで手遅れになったとしたら、目も当てられないだろう。

実際に綾香さんに悪質なストーカーが居たとして、大家さんが、綾香さんと一緒に居なかったら……

そしてその間に、このニュースの男か、それに近い悪意を持つ人間が、綾香さんにその魔の手を伸ばしたとしたら、きっと俺も周りの人達も、悔やんでも悔やみ切れない後悔の念に襲われていた筈だ。

大家さんはこのニュースを俺に見せる事で、暗にそれを伝え様としたのだろう。

ここで謝るのは筋違いだ。

それならば俺はこれからの行動で示そう。

綾香さんはこのアパートにとって、そして何より俺個人にとっても大切な人だ。

俺が新たな決意を静かに胸に潜めて、その守るべき綾香さんに視線を移した時である。

綾香さんはテレビの画面に視線を向けたままで、まるで彫刻の様に固まっていた。

「綾香さん。どうかしたんですか？」

「綾香ちゃん？」

俺と大家さんは何があったのかと思い、声を掛ける。

「え、あ、ご、ごめんなさい。テレビのニュースを見てたら、怖くなってしまって……」

硬直が解けた綾香さんは、慌てながらそう早口に説明した。

確かにあんな凄惨な事件をニュースの報道とはいえ、耳にすれば日常を生きる人にとっては思う所があるのは、当たり前かもしれない。

「兎に角俺、明日から頑張って綾香さんを護衛してみせますから！」

俺は綾香さんを元気付ける為に、わざとらしい程に、元気良く宣言

した。

「あ、ありがとうございます。宜しくお願いしますね、円射さん」

きっと俺は綾香さんの応援があれば、空だって飛べる気がする！

「頑張れ男の子～」

しかし大家さんの声で、きっと地面に垂直落下するのだろうな、という気も確かにするのは何かの間違いであってほしいのだが……

男は常に狂気を宿していた。

誰かを傷つける事に、何かを奪う事に、自分以外の心を踏みにじる事に、至高の喜びを見出していた。

でもまだ足りない。

幾ら飲んでも、骨までしゃぶり尽しても、この渇きは満たされはし

ないのである。

そんな狂気は新たな狂気を引き寄せる。

まるで光に群がる羽虫の様に……

その狂気は形となって、災厄を世に撒き散らす。

男は満面の笑みで一枚の写真を見た。

そこに写っていたのは、一人の清楚な女性である。

男は己の渇きを癒す為に、新たな獲物に狙いを定めた。

綾香さんの護衛を始めてから、三日が過ぎた。

その間にも綾香さんは、例の視線を感じ続けたそうだ。

実際俺も、何度か妙な寒気を感じたりしたので、誰かが悪意を持っ

て、綾香さんを見ているのは間違い無さそうである。

これから大学に向かう綾香さんから少し後ろに控えて、何時でも飛び出せる様に身構えながら、護衛するおれだったが、今の所はそれが役に立つ事等無く、平穏に日々が過ぎていた。

出来る事ならば、犯人にはここで大人しく引き下がって貰いたいと思うのだが、そうは行かなかったらしい。

突如として現れた黒いパーカーを着た男が、綾香さん目掛けて走ってきたのである。

俺は咄嗟に飛び出して、綾香さんを守る為の壁になった。

黒いパーカーの男はそれを不利だと感じたのか、踵を返して逃走を図る。

「待てえええええええええええ！！！！！」

ここで逃がしてなるかと、俺は叫びながら全速力で追いかける。

逃走時間にして、約一分。

追いついた俺は、黒いフードの男を蹴飛ばして、昏倒させると、マウントポジションを取って、完全に制圧した。

俺は幼い頃からヒーローに憧れて育った男だ。

小さい頃から実践的な格闘技を意欲的に長年に渡り学んだ俺は、近場の不良に囲まれたとしても、不意を突かれない限りは、負けはし

ないだろう。

「お前が綾香さんのストーカーだな！？」

「ち、違うって！誤解だ！俺はただ頼まれてやっただけなんだよ！！！」

襟首を掴んで、白状させようとしたが、ここで犯人と思われる男が、予想外の言葉を口にする。

「一体どおいう事だよ！？」

「俺も良くわからねえけど、仲介屋に頼まれたんだ！さっきの女に近づいてから、全力で何処かに走れば五万くれるって！！！！」

男はこれが証拠だと言って、前金で貰ったと必死の形相を浮かべながら、俺に札束を見せる。

俺はこの時、自分がとんでもないミスを犯したのだと気付く。

「……これは罠だ！」

男はただのダミー。

だとすれば綾香さんが危ない！？

俺は男を放り出して、急いで来た道を戻る為に、間に合えと祈りながら、全速力で走り出した。

男は裏路地に誘い込んだ女性に、右手に持ったナイフを突き立てる。

左手には荒縄を、爬虫類の様な顔を紅葉させて、これから始まる己にとっての最高の瞬間を、目の前の恐怖に怯える女性の表情を前菜として、楽しむ。

だがここで男にとって予想外の出来事が起こる。

女性が悲鳴を上げたのだ。

いや、悲鳴を上げる事自体は、男も充分予想していたのだ。

だからこそ、本来人通りの無い、裏路地まで引きずり込んでから、事に及ぼうとした。

しかしこれは誤算だった。

女性の悲鳴は、常人では有り得ない程の大音量で周囲に木霊したのである。

そしてそれが更なる呼び水となって、新たな想定外の事態を生む。

男は腹部に強い鈍痛を覚える。

何者かの突進を喰らった為だ。

その突進を喰らわせた人物は、成桐円射その人である。

「間に合って良かった！」

俺は荒い息を吐きながら、綾香さんを守る様にして、立ち塞がる。

はっきり言って、綾香さんの悲鳴が聞こえてこなかったら、この場所を特定する事は、もっと時間がかかっただろう。

綾香さんは俺と同じ様に芸能界を目指す人だ。

しかもそのジャンルは、声優だ。

更に綾香さん本人の話しでは、幼少の頃は本格的にオペラを習っていたらしく、同期のレッスン生の中では、肺活量が？1だそうな。

その清楚な見た目からは想像も出来ない脅威の肺活量をこの男は知らなかった訳である。

「……邪魔するんじゃねえよ小僧」

俺が体当たりで倒した男は、何かを呟きながら幽鬼の様に立ち上がる。

「お前は！？」

その顔には確かな見覚えがあった。

爬虫類の様な顔に、寒気を覚える眼光。

間違い無く、最近テレビで報道されている容疑者、外道闇慈だ。

どうやら大家さんの言葉は、最大級に嫌な意味で当たってしまっていたらしい。

「俺の最高の時間を邪魔してんじゃねえぞクソガキ風情がよお。俺は乾いてんだよ。食わせろよ飲ませろよやらせろよきはきけ、きやははははっはははははははっは！！！！！！！！！！！」

外道は呂律が回っていないのか、後半からはただの奇声にしか聞こえてこなかった。

だが、ここまではまだ良かったと言える状況だった。

幾ら相手が狂っていたとしても、人間だという事には、変わり無かったからだ。

しかし外道は人間である事すら捨ててしまった。

外道が呂律の回らない奇声を発しながら全身から黒い煙を噴出していく。

全身が深い緑の鱗に覆われて、上半身が辛うじて人の形を保ちながら、下半身は完全に蛇の様な尻尾となってしまう。

その姿は完全な化け物だ。

「嫌あああああああ！？」

その姿を見た綾香さんは、悲鳴を上げた直後、恐怖のあまり気絶してしまう。

それに気を取られたのがいけなかったのか。

俺は怪物と化した外道に、道端に転がる石を跳ね除ける様に吹き飛ばされる。

混濁する意識の中で、見た物は、蛇の尻尾となった下半身を綾香さんの全身に這わせる外道の姿。

頭では止めなくてはいけないと分かっているのに、身体が言う事を聞いてくれない。

いや、たとえ動いてくれたとしても、俺は綾香さんを見捨てて逃げているかもしれないのだ。

吹き飛ばされて理解したのである。

俺がどんなに頑張ったとしても、逆立ちしたって勝てないと言う事実に……

その瞬間、俺がこの人生で積み上げて来た、全てが音を立てて崩れ去った。

何がヒーローになりたいだ？

誰が将来彼等と肩を並べるだと？

こんな訳の分からない状況に追い込まれたら、すぐに臆病風を吹かせる自分に何が出来る？

目の前で大切に想っている人が傷つけられようとしているのに、一人で腐っている俺に何が出来るって言うんだよ！？

俺が自問自答しながら、全てに絶望しそうになったその時だ。

俺以外の全てが止まり、声が聞こえた。

「それで良いのか？青年よ」

誰だよあんた？

「私は闘神アスラ」

闘神アスラ？

「君達人間が言う神様とでも考えてくれれば良い」

神様か……それなら助けてくれよ。

今目の前で大事な人が殺されそうなんだ。

「それは出来ない」

何でだよ？

あんた神様なんだろ。

一つくらい願いを叶えてくれたって良いだろうが。

「私は実体の無い存在だ。だから実体の存在するこの世界では、悔しいが何もしてやる事が出来ない」

何だよそれ？

それなら何で俺に声なんか掛けて来たんだよ？

何も出来ないなら、最初から期待させる様な事するんじゃねえよな……

「確かに私には、この状況を打破する事は出来ない。しかし君に選択肢を与える事は出来る」

選択肢？

「そうだ。今君達に牙を向いているあの存在も、元を辿れば、私と同じ神の力の一部」

だからなんだよ？

「話しは最後まで聞け。神の力を宿した者には、同じく神の力を宿した者しか滅する事は出来ない」

……

「だから君が望むならば、私の力の一端を君に授けよう。君があの者と同一の存在となれば、君は大切な人を守る事が出来るかもしれない」

……俺にあの化け物と同じ存在になれって事か？

「そうだ」

嫌だね。

「何故だ？」

俺はもう全部諦めたからな。

今更出てきて、化け物になれなんて言われても、どうしようも無いんだよ。

「それは本気で言っているのか？」

ああ……駄目だ……俺にはそんな力は……重荷は背負えない。

今のこんな……醜い俺には化け物になる価値すらないんだよ……

「本当にそうか？」

何が言いたい……

「【自分がこうだから】という理由で逃げるな！【自分がこうしたい】という想いでぶつかってみろ！！」

俺に出来ると思うか？

「自分をもう一度信じて見せろ。それが出来るならば、君は変われるさ」

やるよ……やってやる！

こんな俺にでも、まだ出来る事があるのなら、それで救える人がいるのなら、俺はもう一度自分の足で立ってやるさ！

「良く言った青年。名は？」

成桐円射。

「……良い名だ。円射よ。今から私の力の一端をお前に託す。その力、お前の心が赴くままに使いこなして見せろ」

声はそこで聞こえなくなった……

俺は静かに立ち上がる。

右手の甲が焼ける様に熱い。

そこに目を向ければ、何かの文字だろうか、見た事も無い形の痣がはっきりと刻まれている。

俺が立ち上がると同時に、止まっていた時が、また動き出す。

先程までの出来事は俺が見た幻だったのか、現実だったのか定かではないが、これだけは分かる。

頭が今までに無い程の爽快感に包まれているのだ。

今の俺にはやるべき事がはっきりしている。

だから始めよう。

俺が大好きな言葉と共に、新しい自分を……

右拳を前方に突き出しながら俺は思い切り叫ぶ。

「変身！」

不思議な痣のある右拳を中心にして、白い光が俺の全身を包んでいく。

熱い。

身体中が焼ける様だ。

でもそれ以上に、全身へと力が漲ってくるのを感じる。

これがアスラの力……

「ん、なんだよお前？」

外道が俺に振り向くと、何かを感じ取ったのか、警戒する仕草を見せた。

それも当然だろう。

今の俺は、こいつと同じ、ただの怪物だからな。

俺と外道は一触即発の緊張感漂うこの空間で、睨み合いを続ける。

最初に動いたのは俺の方だった。

戦うよりも前に、俺にはやらなければいけない事があるからだ。

「貴様……何時の間に！？」

俺が動いた次の瞬間、外道は驚愕の声を上げた。

それもそうだろう。

先程まで外道の蛇の尾に絡め取られていた綾香さんが、俺の腕の中に居たのだ。

奴はそこまでのプロセスを、認識する事が出来なかった。

だからこその驚きである。

俺は既に外道から十数メートル程離れた位置に居た。

気絶した綾香さんに、危害が及ばない様に、建物の影にそっと下ろした後、俺は改めて外道と向き合う。

「何をしたかしらねえけど返せよ！それは俺の獲物だぜえええええ！！！！」

外道は綾香さんを獲物扱いするという汚い暴言を吐きながら、蛇の尾を這わせて、此方に向かってくる。

俺は到底人では再現不可能であろう動きで迫り来る外道に対して、右拳を握り締めながら叫ぶ。

「これでお前を思う存分殴り倒せる！！！」

自動車の様な勢いで迫る、外道の突進を無駄の無い動きで回避して、

俺はその拳を全力で叩き込む。

「かは！？」

余程効いたのだろう。

外道は俺の拳が叩き込まれた脇腹を、苦悶の表情で押さえながら、後退していく。

「これで終わりと思うなよ！」

俺は更に拳を連続で叩き込み追撃する。

「ま、待ってくれ！お、俺の負けだ！これ以上やられたら、本当に死んじまう！？」

何度も拳を叩き込んだ事により、既に満身創痍となっていた外道は、俺に命乞いをしてきた。

「……今までそう言って命乞いをした被害者に、お前は何をしてきた？」

「悪かったと思ってる！！俺が犯した罪は、一生を掛けて償うから！だから殺さないでくれ！！！！！」

俺は未だに熱く痛みすら覚える振り上げた拳を、残る全ての理性を総動員して、何とか収める。

「……本当だな？」

「あ、ああ。誓うよ！これから自首するから！だから命だけは勘弁してくれよ！！！」

俺は踵を返して歩き出す。

正直に言えば怒りで腸が煮えくり返りそうではあるが、本当に罪を償おうというのならば、俺にこんなどうしようも無い奴とはいえ、命を奪おうとは思えない。

「次は無いぞ」

「は、はい……な～んてな！！！！」

俺の言葉に外道が返事を返す途中、急激に膨れ上がった殺気が、俺の背後から接近してくる。

「ぎゃはははははは！！！！！馬鹿だろてめえ！！！！俺がこれぐらいで改心するかってんだよ！！！！！男は趣味じゃねえが、てめえは特別に俺が絞め殺してやるよ！！！！！！！！！！」

下卑た笑い声を上げながら、早口に捲くし立てた外道を下半身の蛇の尾を俺の首に巻きつける為に、勢い良く振り被った。

救い様の無い奴だ。

そして何より……

「遅い」

俺は外道の背後から呟いた。

「な、何で俺の後ろに!?さっきまで目の前に居た筈じゃ……」

俺の呟きに対して、外道はまるで、俺を怪物を見る様な目で見てくる。

「言ったよな?次は無いってさ」

再び腹の底から湧き上がる怒りに呼応するかの様に、右拳に刻まれた痣が白い光を帯びて、先程からも焼ける様な熱さ持っていた拳が、更に燃えていると錯覚しそうになる程にその熱を増す。

「ま、待ってくれ!今度こそ本当に……」

「消えろ!」

俺は一切の哀れみを覚える事無く、外道の言葉を遮りながら、右拳叩き込む。

次の瞬間には、俺の目の前に居た筈の怪物は跡形も無く吹き飛び、この世からその姿を完全に消滅させていた。

あの現実とは到底信じ難い日から数日が経ち、俺は元の平穏な日々を謳歌していた。

綾香さんも気絶したせいか、記憶が若干混乱気味だったが、幸いな事に、外道の蛇みたいな姿の部分は夢だと思ってくれたらしい。

確かに実際に人があんなになるなんて、夢だと言われた方が、信憑性が高いだろう。

結局は俺が凶器を所持していた外道から綾香さんを助けて、外道はそのまま逃走。

今も容疑者として指名手配という事になっている。

その際に綾香さんからお礼を言われて、抱きしめられたのは、役得と思っても良いと、俺は誇りに思う。

何だか甘い香りがしたなと、人様にはお見せ出来ない程に崩れた顔で、その時の事を思い出していると、ふと自分の右手に視線がいく。

右手には手の全体を覆う様に包帯が巻かれている。

別に怪我をしている訳では無い。

あの時、闘神アスラと名乗っていた白い光がくれた力の証。

その痣が今も消えずに残っているからだ。

流石にこれをそのままにして置く訳にも行かないので、応急処置として、包帯を巻いているのだが、これでは周囲に怪我をしていると思われるか、下手をすれば痛い人と思われるかもしれないので、早急に新たな対策を講じなければいけないかもしれない……

俺がアパートの自室で一人、思い悩んでいると、玄関近くに足音が聞こえて来た。

すると、扉と一体型となっているポストに、一通の封筒が放り込まれる。

どうやら今の足音は郵便屋さんだった様だ。

早速俺はポストに入れられた封筒の宛先を確認すると、一気にテンションが振り切れた。

「おおおおおお！！！！！！これは二日前に受けたオーデションの結果報告！！！！！！」

予想以上にスピーディーな結果発表に俺はもしかしたらという、期待を胸に抱きながら書いてある文章を確認する。

【不合格】

「またかあああああああああああ！！！！！！！！！！」

俺は心の底から魂の雄叫びを上げた。

……まあ、これが俺の日常なのかもな？

完

## 特別短編　仮面ライダーアスラ　　Ｒ１５指定（後書き）

それでは次回からは、今度こそ本編となりますので。

## 第２０話　真冬のサマーバケーション【前編】（前書き）

久しぶりの本編となります。

今回はあのキャラが再登場しますので、楽しんでいただけたら幸いです。

# 第２０話　真冬のサマーバケーション【前編】

青い空！

白い雲！

そんな大空の中にあり、眩しくも光り輝く太陽に照らされて、宝石と見紛う程の美しい輝きを放つ珊瑚礁から成る砂浜と、目の前に何処までも広がる日本の海では滅多に拝めないであろう透明度を誇る、マリンブルーの大海原！

クリスマスが過ぎ、間も無く新年を迎えようとしているこの時期に、俺は現在真夏街道を爆進している。

既にお気付きだと思うが、説明しておいた方が良いだろう。

ここは日本では無い。

俺の前世では存在していなかった大陸。

常夏の島、シルバーライト島なのである。

しかも俺達は今、この国の王家専用のプライベートビーチにいるのだ。

「純君もこっちに来て、一緒に遊ぼうよ！」

オレンジのワンピースタイプの水着に身を包んだ、幼馴染のなのはちゃんが波打ち際から、砂浜に敷いたビニールシートの上で、日光

浴している俺に、此方に来る様に大きく腕を振りながら、アピールしてくる。

「そうだよ純君！」

「早く来なさいよ！」

更になのはちゃんのすぐ近くで、ビーチボールを手にした、青いセパレートの水着を着たすずかちゃんと、緑の上がビキニで下がトランクスタイプの水着姿のアリサちゃんが、揃って遊びの誘いを持ち掛けてくる。

「トロピカルやな～」

そんな折、俺の耳に入ってきた声の方を振り向けば、はやてちゃんが、俺が今座っている場所から少し離れた位置で、大型チェアーに寝そべりながら、ガラスのコップに入れられた極彩色のジュースを満足そうに啜っていた。

別に注意をするつもりは無いのだが、黒いビキニと黒いサングラスというあの格好は、何かを意識しての事なのだろうか？

『すまないな恵理殿。サビ止めのオイルを挿してもらってしまって』

「ふふ、良いのよ」

トロピカル気分を満喫しているはやてちゃんのすぐ近くではメカ犬が、はやてちゃん以上に際どい赤のビキニを着た上に、水色の半袖のパーカーを羽織った恵理さんに、サビ止め用のオイルを挿してもらっている。

その光景を見て、何かが確実に間違っていると誰かが訴えている気がするのだが、俺には何がどう間違っているのか理解出来そうにない。

そもそもメカ犬は、錆びるのだろうか……

普段から行動する事が多い割には、未だに生態?が謎な相棒である。

まあ、それはさて置き、取り敢えず辺り全体を見渡してみれば、皆思い思いに楽しんでいる様だ。

俺もなのはちゃん達に誘われたので、そろそろ参加しようかと立ち上がると、暖かい風が吹き、それと同時に後ろから声を掛けられる。

「遅くなってすまぬな。我もすぐに行きたかったのじゃが、中々サバスチャンを説得するのに戸惑ってしまってのう」

風に流れる綺麗な長い銀髪に、強い意志を秘めた勝気な瞳、全身から滲み出る高貴な雰囲気は、純白のセパレーツタイプの水着を着ていようと、相変わらずらしい。

「そんなに待ってないから大丈夫だよ。エミリー様」

俺は声の主に振り返って笑顔で答える。

「む!もう純は我の家来ではないのじゃぞ!その呼び方は止めぬか!」

「あ、そうだった……つい癖で、咄嗟にでちゃうんだよね」

咄嗟に様付けで呼んでしまった俺に、エミリー様……じゃなくて、エミリーちゃんが不機嫌な表情で訂正を要求してくる。

それに対して俺は苦笑いを浮かべながら、何とか言い繕う。

以前は様を付けない度に、姫様チョップを受け続けた俺としては、今でも条件反射で口から出てしまうのは、出来れば容認してもらいたいと思うのだが……

「ほれ！やり直しじゃ！」

「え、エミリーちゃん」

「うむ。それで良いのじゃ」

言い直しを要求された俺は、素直に従って呼び方を改めた。

どうやらエミリーちゃんはそれで満足いったらしく、何度も頷いている。

「ところでの……」

「うん？」

先程まで納得しながら何度も頷いていたエミリーちゃんが、今度は何処か言い辛そうに、モジモジしだした。

「その……なんじゃ……わ、我の水着は純から見て……似合っておると思うかの？」

エミリーちゃんは視線を斜め上に泳がせつつ、俺にそんな事を質問してきた。

心なしか頬も赤くしている様に見える。

エミリーちゃんも、普段から気丈に振舞っているとはいえど、やはり女の子なのだろう。

自分の格好が他人からどの様に映るのか、気になるお年頃らしい。

「うん。似合ってる。今のエミリーちゃん、凄く可愛いと思うよ！」

男として、この手の質問を女性にされた時は、余程の事が無い限り、褒め言葉以外を口にする機会は無いと思うが、これは俺の素直な感想だ。

「そ、そうか。似合っておるか！な、ならば良いのじゃ……」

エミリーちゃんはそう言いながら、照れ笑いを浮かべる。

久しぶりの再会ではあるが、元気そうで何よりだ。

「それと、久しぶりだね」

「……うむ」

俺とエミリーちゃんは、改めて再会の挨拶を交わした。

ところで、俺達が何故このシルバーライト島に居るのか。

その理由を説明する為には、話しが昨日のクリスマス当日まで遡る。

クリスマス当日の朝、自称其々のお宅のサンタさんからのクリスマスプレゼントに加えて、俺を含め、このプライベートビーチに居るなのはちゃんと、すずかちゃんに、アリサちゃん、そしてはやてちゃん宛てに、エミリーちゃんからの一通の封筒が届いた。

中には手紙と招待状、更に日本とシルバーライト島に行く為の、飛行機の往復チケットが同封されていたのである。

手紙の内容には、最近の近況報告と、今回手紙と同封されていた、招待状についての事が書かれていた。

その内容は今から一週間後に城で行われる、パーティー参加の誘いだったのである。

ただ、それに付属されていた航空チケットの行きの便の時間指定が、この手紙が届いた当日の夜になっていたのでだ。

元々クリスマスに日中は集まる約束をしていた俺達は、全員集合して、話し合いの結果今回の参加を決定した。

そこからは、大忙しだ。

何せ約一週間の長旅な上に、出発がその日の夜なのだから、普通に考えたら、一日で全てを準備するなど不可能に近い。

……そう思っていたのだが、どうも事態は俺達の知らない場所で、常に動いていた様なのである。

慌てて家に帰ってきた俺に、常日頃からマイペースを貫く母さんが、その調子を崩す事無く、大きめの旅行鞄を持ってきた。

中に入っているのは、俺の一週間分の着替えに、旅行に必要であろう道具が一式。

更に御丁寧にも、パスポートまで、完備されていた。

異常な程の用意の良さに、俺はそこで数分程だが、完全に思考を停止してしまったのは、しょうがないだろう。

そして数分後に、正常に思考が働き始めてから、母さんに問い質してみると、何でも俺達に例の封筒が届く一月前に、保護者宛で手紙が届いており、今回のパーティー参加が可能かどうかという質問内容が書かれていたのだそうだ。

だが悪質なのはここからである。

今回のパーティーを、直前まで秘密にして、クリスマスのサプライズにしようと、保護者達が画策し始めたのだ。

シルバーライト島へと返信された手紙にはその旨が記され、こうして俺達の知らない場所で計画は順調に進行して、俺達は見事にクリスマス当日に、盛大に驚いたわけである。

ちなみに、驚かされた俺達の中には一人だけ、スパイが潜んでいた。

それは最近俺に対しての悪戯が、カリスマ化してきた悪戯の天才児、はやてちゃんである。

考えてみれば、はやてちゃんは一人暮らしなので、必然的に届いた手紙の類には、全て目を通すことになるのだ。

今から思い返して見れば……俺達の最近の予定や、行動パターンの幾つかは、はやてちゃんに誘導されていた節すら感じられる。

まあ、そんな経緯の上、全員が取り敢えず集合場所に決めていた翠屋に、既に自分の知らない所で準備されていた旅行の支度を持って集まると、俺達同様に、旅支度を整えた恵理さんが待っていた訳だ。

どうやらこのサプライズ計画には、予想以上に多くの人間が関与しているのかもしれない。

最初は急な話だったと思ったので、アリサちゃんの執事である鮫島さんに、保護者役を頼もうと思っていたのだが、その辺りも、事前に折込済みという事らしかった。

確かに恵理さんならば、向こうにサバスチャンという知り合いも居る訳だし、好都合と言えるかもしれないが……

恵理さんの話によると、何か仕事も兼ねて行くらしいので、今回の旅費は会社の経費で落ちるんだとか。

それを聞いて何かこれだけでは終わらない様な、胸騒ぎを感じるが、現状ではどうしようもないので、既に諦めている。

少なくても取って食われる心配は、しなくても良さそうなので……というか、それくらいは信じさせてもらいたいと、切実に思う。

まあ、そんな訳で慌しくもシルバーライト島にやって来た俺達を、最初に出迎えてくれたのは、サバスチャンだった。

ちなみにメカ犬が、空港での金属探知機に引っかからなかったのは、奇跡だと俺は思う。

さて、話しを元に戻すのだが、サバスチャンに迎えに来てもらった俺達は、そのまま今居るプライベートビーチに黒塗りのリムジンで案内された。

もう既にアリサちゃんや、すずかちゃんの存在のお陰で、お金を持っている人達の行動には、随分と耐性が出来ているから、色々とスルーして、話しを進めるが、俺達の滞在中に泊まる場所はなんと、今回のパーティー会場にもなっているお城らしい。

何でも、俺達はエミリーちゃんが招待状を送った、つまり王族が直接招待した客人として迎えられる特別待遇なのだそうだ。

ただこの中で恵理さんだけは、会社の経費で来ているのだが、サバスチャンの個人的な知り合いという事で、お城で働いている人達の住んでいる宿舎の空いている部屋を借りられるらしい。

それと俺達がこのプライベートビーチに連れて来られた理由なのだが、その理由は複数存在する。

まず第一に、俺達が泊まる部屋の準備がまだ終わっていないという事だ。

俺達が招待されたパーティーは結構な規模で、その準備が忙しいという事と、俺達以外にも王族の人から招待状を受け取った客人達の

準備が優先されている為でもある。

その客人達は、王族との深い縁があるというだけあって、その殆どが世界の大富豪ランキングで上位に入る様な人達なのだ。

優先されるのは当然と言えるだろう。

つまり準備が出来るそれまで、ここで時間を潰してほしいという事である。

次に二つ目だが、これはエミリーちゃんの立場が関係しているのだ。

エミリーちゃんはこの国のお姫様な為、特別な許可が出なければ、王族の私有地以外には、中々自由に行動出来ないのである。

しかし出来るだけ早く俺達と会いたいというエミリーちゃんの希望があり、俺達は王家の私有地である、このプライベートビーチに連れて来られたのだ。

そう……ここは王族の私有地。

つまりお姫様であるエミリーちゃんが、特に許可を申請する必要が無く、自由に来れる数少ない場所の一つなのである。

それが無ければ、お城に入れない間は、城下町を観光したり等、旅行先で時間を楽しく潰す方法は山ほどあるのだから、こうする意味が無い。

専用のコテージを、サバスチャンが開放してくれたので、俺達はそこで、ちゃっかりと保護者達が荷物に詰めてくれていた水着に着替

えてから、エミリーちゃんを此方に連れてくる為に、一旦お城に戻るサバスチャンを見送った俺達は、こうして他に人も居ない常夏の海で、予想外のサマーバカンスをする事になったのだ。

そして俺が日光浴をしていた所で、サバスチャンが連れてきたのであろう、エミリーちゃんと、久しぶりの再会を果たしたのである。

「ところでエミリーちゃん、何でサバスチャンの説得に時間が掛かったの？」

迎えに行った筈のサバスチャンが、妨害しようとするなんて変な話である。

「うむ。それがの「姫様あああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」来おったか……」

先程エミリーちゃんが来た方向を覗き込むと、サバスチャンが何かを抱えながら、物凄いスピードで走ってくるのが見えた。

「海に行くのであればこの水着を着てくだされえええええええええええ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

サバスチャンが掲げた水着？を見て、エミリーちゃんが、怒りの叫びをその元凶にぶつける。

「戯けが！そんなものは水着とは言わんのじゃ！サバスチャンは、我を深海にでも潜らせる気か！！！！！！」

エミリーちゃんの怒りも、もっともだろう。

あれは世間一般で言う、水着とは絶対に違う別物だ。

一番近いニュアンスで例えるのなら……そう！宇宙服が一番近い。

完全密閉された分厚い生地の全身スーツに、背中の巨大な酸素ボンベ。

頭部を全て覆う事を可能とした、楕円を描くフルフェイス型ヘルメット。

確かにあれでは、宇宙遊泳か、深海探索する以外に使い道は無さそうだ。

「姫様！！！！！この老い先短い私の頼みを聞いてくだされえええええええ！！！！！！！」

「嫌じゃと言っておろうが！！！」

老人とは到底思えない速さで、叫びながらこっちに近づいて来るサバスチャンに対して、エミリーちゃんは、断固拒否の姿勢を貫きながら、右手の指を鳴らす。

すると俺とエミリーちゃんの目の前に、二学期初日に見た、あの屈強な戦士達が一国の姫君を守る、鉄壁の壁となる為に現れた。

戦士の皆さんも相変わらず、鍛え込まれた肉体美を誇っており、これならばどんな戦場においても生き残れる事だろう。

「皆の者！作戦αで、サバスチャンを仕留めるのじゃあ！！！」

いや！進化している！？

彼等のチームとしての統率力が以前よりも、明らかに強化されていた。

エミリーちゃんの指揮の下で、彼等は陣形を組み、相手の出鼻を挫く攻防一体とも言える、隙の無い動きでサバスチャンを待ち構える。

「ぬう！この青二才どもが！！！私をその程度で止められると思うなよ！！！！私は必ず有害な紫外線から姫様を守り抜いてみせる！！！！！！！！」

言っている事は凄く小さい筈なのに、何故かサバスチャンが格好良く見えてしまう俺は、最近疲れが溜まっているのかもしれない……

「A班とB班は左右に分かれて突撃じゃ！C班は追撃準備！D班は各自の判断で援護を！相手は老いぼれとはいえど、サバスチャンじゃ！全力で掛からねば痛い目を見る事になるかも知れぬ！心して行くのじゃぞ！！！」

そして何故かエミリーちゃんには、以前とは違う、戦う為の戦略が身に付いている様なのだが、あれから何があったのだろうか……

こうして始まった史上稀にみる、大人達による本気の馬鹿な戦いは、数分に及ぶ死闘の末に、屈強な戦士達の勝利で幕を閉じたのである。

そしてこの戦いに敗北を喫したサバスチャンは、敵国で捕まった兵士の様に縛り上げられ、屈強な男達に連れられて、俺達の視界からフェードアウトして行った。

「さて、何処まで話したかのう？」

先程までの出来事はまるで、無かった事の様に、エミリーちゃんが話を再会する。

そんな事をされても、先程の戦いの印象が脳裏に焼き付いて離れなくなっている俺は、直前の会話部分が全く思い出せなかったので、他の話題に移る事にした。

「そう言えばまだ今回のパーティーに招待してもらったお礼を言って無かったよね。改めて呼んでくれてありがとう。エミリーちゃん」

「そ、そう言えばそうじゃったかのう……」

お礼を言った俺に対して、何故かエミリーちゃんの視線が一瞬泳いだ気がする。

俺は何となくそれが気になったので、追求しようかと考えたのだが、そこで此方に近づく声を耳にした。

「エミリーちゃん！久しぶりだね！」

「元気にしてた？」

「何だか少し、背が伸びたんじゃないのエミリー」

浜辺の方から、なのはちゃん達がやって来て、久しぶりの再会に其々が嬉しそうに挨拶を交わす。

「久しぶりじゃのう皆」

「私を忘れてもらっちゃ困るで。エミリーちゃん」

エミリーちゃんがなのはちゃん達と和やかに会話する中に、はやてちゃんもやって来て声を掛けてきた。

砂浜を横回転で転がりながら……

全身砂だらけとなった、はやてちゃんだが、そんな事には気にも留めず、ガールズトークに参加して、皆で花を咲かせ始める。

こうなると肩身が狭いのが、このメンバー内で唯一男な俺だ。

一応メカ犬が居るが、今は間接部分にオイルを塗ってもらうのに忙しいらしく宛てにならない。

いっそこの場から、ひっそりと退散して、一泳ぎしてこようかと考えたところで、場の空気が一変する。

「そう言えば純君は、私の水着を見て、まだ何も言ってくれてなかったよね？」

「あら！そう言えば私もまだだったわ！」

「エミリーちゃんだけに感想を言うのは、ズルイんじゃないかな純君？」

「ここは男の見せ所やで」

何処からそんな話になったのか、何時の間にか話題が水着の話に突

入していた様で、突如として俺にその矛先が伸びる。

男にとって、この手の質問は結構されるものではあるが、その答え易さというものは、実は質問そのものよりも、その時の状況が大きく左右されるものだと、俺は個人的に思う。

聞いてきた相手が一人のだったり、答える側も複数人居れば、注意力も分散されるのだが、現状は俺一人に対して、複数の女の子に、感想を言うという状況なのである。

下手な事を言えば、俺の命は無いかもしれない……

女性とは何時だってそういう生き物なんだ。

あの普段から、マイペースで全ての出来事に物怖じする事が無さそうな母さんですら、髪を切った事に気付かなかった父さんに対して、無言で揚げたての唐揚げを投下する程なのだ。

何をされても不思議じゃない……

俺は全ての経験と、思考を総動員して、一つの答えを導き出す。

「……皆凄く似合ってると思うよ」

無難な答え！

それが俺の導き出した答えだ！！！

この解答ならば、大喜びする人はそう多くないだろうが、不機嫌になる人は殆どいないだろう。

可も無く不可も無く、ヘタレだと笑ってくれて結構！

それで守れる大切なものがあるのなら、俺は喜んでその称号をこの胸に刻むさ。

「それじゃあこの中で、純君は誰の水着が一番好みなんや？」

全てを乗り越えた……そう思った瞬間に、俺は奈落の底へと突き落とされた。

俺はこの即死系の呪文を唐突に唱えた張本人である、はやてちゃんに視線を向ける。

その視線に気付いてか、はやてちゃんも俺に視線を合わせてきたのだが……物凄いどや顔だった。

はやてちゃんのどや顔で、俺は全てを悟った。

俺は今まではやてちゃんの計画通りに動かされてきていたのだという事実を……

わざわざ砂だらけになってまで、自力で急いで来たはやてちゃんを何処か怪しいと思っていたのだが、それは全て俺をこの状況に持ってくる為の布石。

はやてちゃんは自力では、海に入って泳ぐ事が出来ないので、基本的に砂浜がテリトリーだ。

だから全員が自分の射程距離に入るのを、虎視眈々と狙っていたの

である。

全ては悪戯の為に、しかも今回は、俺を弄り倒す事に焦点を絞ってくるという徹底振りだ。

正直完敗である。

だが俺はこのままでは終わらない。

せめて一矢報いる為に俺は、ある一点に指を向けて答える。

「あれが俺の好みかな」

俺の声に皆の視線が指し示される方向に視線を向けた。

その先に居る人物……それが俺の最後の切り札だ。

『うむ？どうしたマスター』

「まさかメー君なの！？」

「いや、違うからね！」

まさかと呟くなのはちゃん達に、俺は思わず突っ込みを入れる。

冗談でも勘弁してもらいたい。

俺が指差したのは、メカ犬ではなく、メカ犬と一緒に居る人物だ。

「やっぱり恵理さんが、この中では一番水着が映える……か……な

って……」

この中では唯一の大人である恵理さんを押しておけば、角が立たずに済むだろうと、思ったのだが、それは俺の思い違いだったらしい。

一体何がいけなかったのか、仕掛け人である筈のはやてちゃんからさえも、まさかの怒りを買ってしまい、俺は首以外の全身を砂浜に埋められて三十分程放置され続けた。

そして自由の利かないこの身体で、考えて悩み、行き着いた答えは……

「俺には乙女心が分からない」

という一つの真理だった。

プライベートビーチから一キロ程離れた場所で、一人の男性が、電話を掛け始める。

［「計画は順調か？」］

「はい。しかし一つだけ想定外の事態が起きています」

［「何だ？」］

「エミリー姫が今回特別に留学先で知り合ったという友人を客人として招待していたのです」

［「……その中に男はいるか？」］

「はい。一名だけですが、姫と同い年と思われる少年が一人」

［「問題無いとは思うが、万が一という場合もある。注意を怠るなよ。邪魔になるようならば、処理は全て任せる」］

「はい」

その会話を最後に、男は電話での通話を終わらせた。

## 第２０話　真冬のサマーバケーション【前編】（後書き）

次回はまさかの新キャラ登場予定？

## 第２０話　真冬のサマーバケーション【後編】（前書き）

少し間を置きまして、お久しぶりです。

今回は新キャラも登場で、少し話が長くなってしまいましたが、楽しんでいただけたら幸いです。

ＰＳ　やっと念願の水落……

# 第２０話　真冬のサマーバケーション【後編】

「「「「「人魚の入江？」」」」」

俺と、なのはちゃんに、すずかちゃんと、アリサちゃん、そしてはやてちゃんが揃って声に出す。

「うむ。その通りじゃ」

五人揃って発せられた俺達の声に、エミリーちゃんが頷く。

何故か皆の怒りを買ってしまい、俺が砂浜に生き埋めにされたり、救助されたり等、心行くまで遊んだ後、既に時間も正午になるという頃に、サバスチャンがコテージの方に、全員分の昼食を用意しているというので、俺達はお言葉に甘えて、ご馳走して貰う事にした。

シルバーライト島は、全体が海に囲まれた小さな島国という事もあってか、漁業が盛んであり、俺達が御呼ばれした昼食にも、新鮮な海の幸が、多く使われていた。

日本の船盛りにも似た、お刺身の飾りつけや、伊勢海老のボイルに、何故かパエリアの様な、お米を使った変わった料理等、素材の良さを活かしたシンプルなものに始まり、料亭で頼んだら一瞬で諭吉さんが束で飛んで行ってしまいそうな、高級食材に、今まで見た事も無い様な、不思議な料理の数々が、俺達の舌の上で何度も革命を起こし続けたのである。

そんな楽しい昼食も、全員が満腹になった事で終わりを告げて、食休みをしていた際に、皆で他愛なく世間話をしていたのだが、その

中でエミリーちゃんが先程の冒頭で言った単語を一つの話題として口にしたのだ。

「その人魚の入江って何なのよ？エミリー」

皆が気になっている中で、アリサちゃんが代表して、エミリーちゃんに質問する。

「うむ。それを話すには、まずこの国に古くから伝わる、伝説を話さねばならぬのじゃ」

アリサちゃんの質問に対して、そう答えたエミリーちゃんは、ゆっくりとその伝説について語りだした。

その伝説は、全てを語ると、中々に長い物語なので、話しを簡潔に纏めると、こういった内容だ。

今から遠い昔の事である。

このシルバーライト島の民が、まだ世界との外交も持たず、国すらも建国していなかった頃。

人々は生きる為の糧を得る為に、必然的に食糧が豊富である海辺に住処を作り、海へと漁に出る者が殆どであった。

そうして平和に長い時を過ごしていたある日の事だ。

このシルバーライト島は突如として、誰も経験した事が無いほどの大きな嵐に見舞われる。

海辺で暮らしていた島民達は住む場所を、長年に渡り連れ添ってきた筈の波に呑まれてしまい内陸の森へと、逃げていった。

その嵐は一日では静まる事無く、一週間が経ってもその猛威を振るい続け、最初は嵐が過ぎ去るのを耐え忍んでいた彼等も、限界を迎えつつあったのである。

もうこれ以上は耐えられない。

誰もがそう思ったその時に奇跡は起きた。

暗雲により何日も、太陽が見えなかった筈の空から、一筋の光が射し込んだのだ。

それと同時に、周囲の音を全て掻き消す嵐の中だというのにも関わらず、島民達の耳にこの世の物とは思えない程の澄んだ歌声が聞こえてきたのである。

その歌は島の全土に届き、全ての島民がこの歌声に感動した。

歌の聞こえてくる方向には、突如として空から射し込んだ一筋の光が見える。

もう動く事も困難となりつつあった島民達だが、最後の力を振り絞り、まるで光と歌に導かれるかの様にして、嵐の中に救いを求めながら、その場所を目指した。

そして導かれるままに辿り着いた島民達が目にしたのは、嵐の中とは思えない程に、穏やかな光な光が射し込む、周りを洞窟に囲まれた入江だったのである。

酷い嵐の中を潜り抜けてやって来た彼等にとって、そこはまさに楽園だった。

しかし島民達が目にしたものは、それだけでは無かったのである。

入江の中には美しいとしか表現しようの無い女性が一人、聴く者全てを穏やかにさせてくれる様な、澄んだ声で歌っていた。

入江へとやって来た島民達はその美しい女性の容姿と美声に、誰もが酔いしれ、暫し時が経つのも忘れてしまう。

だがその光景を眺めていた島民の一人がある事に気付く。

今も歌い続けている女性は、人間では無かったのだ。

上半身は確かに人間なのだが、下半身は虹色の鱗に覆われ、その先端には陽射しを反射しながら、白く輝く尾びれだった。

この女性は、人間ではなく、人魚と呼ばれる存在だったのである。

やがて島民達が人魚に近づいて行くと、人魚は歌う事を止めると、島民達に微笑みながら語りかけた。

ここは神聖なる聖域。

本来ならば、人間が立ち入る事は赦されない場所ではあるが、この嵐が過ぎるまで、ここに滞在する事を許そう……

人魚の言葉に、島民達の命は救われた。

その後島民達は、この聖域に滞在する間に、人魚から様々な知識を授かったと言われており、その時に得た知識を元に、現在の国の源流を作ったのだそうだ。

最後に島から嵐が過ぎ去り、島民達が聖域を離れる際に、人魚は親愛の証として、島民達に海の力を封じ込めたという青い宝石を譲ったのだという。

「……その宝石の名前はマーメイドブルーという名前でのう。この話しが真実かどうかは別として、今もその宝石自体は、城の宝物庫に保管されておって、毎年国の行事には一般公開されておるのじゃ」

長い語りを終えて、エミリーちゃんは一息ついた。

「人魚の伝説か～何だか、ロマンチックなお話しやなあ」

「本当だね」

話しを聞き終えた、なのはちゃんとはやてちゃんが、先程の話を振り返り感慨に耽っている。

「ねえ、エミリーちゃん。そのマーメイドブルーが実際にあるって事はもしかして、人魚がいる聖域も実在してるの？」

続いてすずかちゃんが、エミリーちゃんに話しの中で気になったらしい質問をする。

「うむ。すずかの言う通り、実際に人魚が住んでいるかは別として、聖域は存在しておるぞ。この国では、その聖域が人魚の入江と呼ば

れておるのじゃ」

「ふうん……その人魚の入江って何処にあるのよ？」

エミリーちゃんの話に興味が湧いたのか、アリサちゃんもこの話題に積極的に参加してきた。

「ふふん。なんと人魚の入江は、このプライベートビーチの奥にある洞窟から行く事が出来るのじゃ！」

アリサちゃんの質問にエミリーちゃんは誇らしげに答える。

どうやらその人魚の入江とは、予想以上に近い場所に存在していた様だ。

その話しを聞いて、もう少ししたらその場所に探検に言ってみないかと、誰が最初だったか提案をして来たのだが、エミリーちゃんはその提案に対して申し訳無さそうに言う。

「うむ。我も出来る事であれば、皆を案内してやりたいのじゃが、残念な事に人魚の入江は、神聖な場所として崇められておるのでのう、王族以外はその国に大きな貢献を齎した者以外、立ち入りが禁止されておるのじゃ。本当にすまぬな」

まあ、そんな伝説がある様な場所ならば、そういった扱いを受けるか、観光名所にでもなっている筈だなと思うので、仕方が無いだろう。

なのはちゃん達も、残念には思っている様だが、特に不満は無さそうだ。

人魚の入江の話題はそこで終わり、また別の話題に移り変わりながら、時間は過ぎていった。

『マスター。起きているか？マスター』

「……ん、何だよ？メカ犬』

食後に一休みした後、飛行機での長旅と、午前中の海で遊んだ疲れにプラスして、食後の満腹感も手伝ってか、俺達は全員コテージの中で昼寝をしていたのだが、ちょうど俺も意識がうとうととし始めたところだったのだが、メカ犬の声により、強制的に夢の世界の入り口から、現実世界へと、召喚されてしまった。

『起きたかマスター』

「何だよメカ犬？せっかく後少しで、寝られそうだったのにさ」

「うむ。それに対してはすまないと思うが、ワタシにも気になる事

があってな」

「気になる事って、何がだよ？」

俺は欠伸をしながら、メカ犬との会話を続ける。

『先程のエミリー嬢の話でも出たのだが、マスターは人魚の入江の話しを覚えているか？」

「ああ、まあな」

『実はその話しを聞きながら試しに、その付近を一度サーチしてみたら、妙な反応が二つあってな」

「妙な反応？」

「うむ。二つの内の片方は、ワタシにも正体不明だが、もう一方はその反応位置が近づいたり離れたりする上に、一つだけ心当たりがあるのだ」

メカ犬が言う心当たり。

俺は直感的にではあるが、それが何なのか、予測出来た。

「もしかしてその反応って、前にメカ竜が言ってた事か？」

『うむ。まだ離れた位置からで、確証は得ないが、可能性としては高い』

どうやら俺の直感は当たっていた様で、メカ犬は頷きながら肯定の

返事をする。

そしてメカ犬が言った事が、全て事実であるならば、俺達はこれからある事をやらなければならない。

「どうする気だ？」

メカ犬の答えは決まっているのだろうが、俺は取り敢えず確認の意味も込めて、これから何をやろうとしているのか、聞いてみる。

『うむ。これからその反応の正体を突き止める為に、捜査に向かうぞマスター』

「はあ……やっぱりな」

完全に予想通りの返答をしてくれたメカ犬に対して、俺は諦めの溜息を吐いた。

こうなったらメカ犬は止まらないだろうし、何よりその二つの反応が俺も気になるのは確かだ。

どの道無視出来る問題でもないので、俺とメカ犬は、寝ているなのはちゃん達を起こさない様に移動してから、起きている大人の人達に、眠れないから、浜辺を散歩してくると言い残して、コテージを出た。

そして暫く浜辺を歩き、エミリーちゃんが言っていた、立ち入り禁止となっている、洞窟の入り口に辿り着いたのだが……

『この先が人魚の入江だな』

「早く行くのじゃ」

「……何でエミリーちゃんが、ここにいるのさ？」

洞窟の前には、俺とメカ犬、そして何故かエミリーちゃんが居たのである。

「うむ。何やらおぬし等が、隣で面白そうな話しをしておったのでのう。悪いが後を追わせてもらったのじゃ」

どうやらあの中で、エミリーちゃんだけはまだ起きていたらしく、狸寝入りをしながら俺とメカ犬の会話を盗み聞きしていたらしい。

「あのさ、エミリーちゃん。ここが立ち入り禁止だって事は知ってるんだけど、どうしても調べたい事があるんだ」

「うむ。分かっておる。その辺りは気にせんで良い」

洞窟に入る為に説得を試みようとした所で、エミリーちゃんから、意外な答えが返ってくる。

「言ったであろう？ここに入って良いのは、王族の者か、この国に大きな貢献を齎した者のみじゃとな」

『つまりどういう事だ？エミリー嬢』

「その事実を知る者は少なくとも、純はこの国の危機を救ってくれた英雄じゃ。充分に聖域に立ち入る許可を有しておる」

何か面と向かって言われると、かなり恥ずかしいが、あの時の戦いを振り返ると、そう解釈する事も不可能ではないのかもしれない。

『なるほど。それならばワタシ達が中に入っても何も問題無いのだな』

「それに念の為に、我も一緒に行くのじゃ。そうすれば何も心配する事は無かろう？」

メカ犬がその説明に納得し、エミリーちゃんも既に行く気満々である。

「だけどさ。メカ犬と俺はこれから遊びじゃ無くて、調査に行く訳だから危ないかも知れないよ」

メカ犬の様子を見る限り、大丈夫だとは思うのだが、万が一エミリーちゃんが危険な目に遭うとも限らないので、俺はエミリーちゃんに帰る様に話しを促す。

「大丈夫じゃよ。ここには何度も来ておるし、我の庭の様なものじゃ。案内役がいた方が良いと思うがの。それにもしも危なくなったのならば、絶対に純が守ってくれるのじゃろ？」

一緒に行く事を反対する俺に対して、エミリーちゃんは笑顔でそう言いながら、限界まで俺に顔を近づけてきた。

その距離は後少しでもどちらかが、前に動いてしまえば、触れてしまいそうな程に近い距離である。

「……分かったよ」

根負けした俺は、溜息を吐き出しながら、諦めと共に、了承の言葉を口にした。

俺の返答に喜ぶエミリーちゃんを見て、俺はもう一度溜息を吐き出してから、ここに二人と一匹で結成された、人魚の入江調査団の一員として、洞窟の入り口へと足を踏み入れたのである。

男は見ていた。

一人の少年と少女が、洞窟へと足を踏み入れる様子の一部始終を……

厄介な事になってきたと、男は舌打ちをしながら、携帯電話を取り出して、ある方へと連絡を取る。

［「どうした？」］

「お忙しい所を失礼します。実は早急にご連絡しなければいけない事がありまして」

［「……言ってみろ」］

「はい、実は例の姫様が招いた客人の少年が、姫様と一緒に人魚の入江に向かいました」

［「……どうやら、その少年は、計画の障害となる存在とみて、間違い無いかもしれないな」］

「如何致しますか？」

［「お前は取り敢えず、気付かれない様に後を追え。子供の好奇心で少し中を覗いて帰って来る様ならば、何もするな。だが万が一にでも、あれが見つかった場合は、例の力を使って構わん。少々きついお仕置きをしてやれ」］

「分かりました」

［「だからと言って、くれぐれも姫様には怪我をさせるなよ。少年の方は……場合によっては処理して良い。その辺りの裁量は、全て任せる」］

「はい」

その会話を最後に、携帯電話の通話を切った男は、本来立ち入り禁止となっている聖域に、土足で足を踏み入れた。

「……凄い景色だな」

俺は今、目の前に広がる光景に感動を覚えていた。

洞窟に囲まれた中で、上から降り注ぐ太陽光が、全体を照らしており、その光に反射した全ての自然が天然輝きを放ち、幻想的な雰囲気を醸し出している。

これならば確かに、聖域と呼ばれていても、何も不思議は無いと思う。

「やはりこの入江は何時来ても良いのう。ここならばサバスチャンも入ってはこれないし、羽を伸ばすには絶好の場所じゃ！」

どうやらエミリーちゃんは、ここには何度か足を運んだ事があるらしく、嬉しそうに辺りの景色を眺めている。

サバスチャンが入り込めない場所……何か別の意味での聖域としての凄さが感じられるのは気のせいだろうか？

『う～む……』

暫くはこの幻想的な景色を素直に観賞していた俺だが、本来の目的を思い出して、先程から首を左右に捻って、何か考え事をしているメカ犬に話しかけてみた。

「何か分かったか？メカ犬」

『片方の反応は今はここから少し離れた位置に居る様で何とも言えないが、最初は良く分からなかった方の反応は、間違い無く、この入江の内部にありそうだぞ』

メカ犬は俺にそう言うと、奥の方を目指して歩き出す。

「うむ。確かその先は、行き止まりじゃったと思うがのう？」

エミリーちゃんは、メカ犬が歩いていく方向を見て、以前来た時の記憶を思い出しながら呟く。

しかしメカ犬は、それも気に止めず奥へと歩き続けて、俺達の視界から見えないところまで行ってしまった。

エミリーちゃんが、この先は行き止まりだと言っていたので、暫くすれば戻ってくるだろうと思って待っていたのだが、十分以上時間が経過しているのにも関わらず、戻ってくる気配が無い。

「ねえ、エミリーちゃん。この先は行き止まりだって行っていたけど、結構長い道が続いてるの？」

「……いや、一番奥は目視で確認出来る距離じゃし、往復しても時

間は二分と掛からん筈なんじゃがのう」

もしかしたらと思い質問したが、エミリーちゃんからは、俺が想像したのとは別の答えが返ってきた。

こうなると謎は深まるばかりである。

流石に心配になってきたので、俺とエミリーちゃんが二人で、メカ犬が進んでいった入江の奥へと迎えに行ったのだが……

「居ないな……」

「居ないのじゃ……」

入江の奥は、エミリーちゃんが先程言った通りの景色が広がっていただけであり、メカ犬の姿は何処にもなかったのである。

取り敢えず俺とエミリーちゃんは、メカ犬を呼びながら、奥まで歩き続けてはみたが、返事が返ってくる事は無かった。

「一体何処に行ったのじゃろうな？」

「確かにこの道は、ここで行き止まりだしな……」

人間に比べて、かなり身体が小さいメカ犬の事だから、もしかしたら近くの岩陰にでも潜んで、俺達驚かそうとしているのかと、勘繰りながら、俺は行き止まり付近の下部分を重点的に探し始める。

「うん？」

其処で俺はある違和感を覚えた。

行き止まりの部分の右隅の砂が、何故か微妙に盛り上がって、小さな山を形成していたのだ。

良く目を凝らして、地面を見てみると、若干だが砂の色が違っており、それを見た俺は誰かがごく最近に、この場所で、何かを引き摺ったりしたのではないかと思った。

誰が？

何の為に？

目的は分からないが、それをやったのは、恐らくここに入っていったメカ犬で間違い無いだろう。

でも何でそんな事をしたのか？

それがメカ犬がここから消えた事と、関係しているのかもしれない。

俺は他に何か手掛かりになるものは無いかと、辺りを調べる。

すると行き止まりとなっている壁の側面に、不自然な岩を見つけた。

岩の大きさは一般的なティッシュ箱程度の大きさなのだが、明らかに動かされた跡があり、その真横には、大人の足の先が辛うじて入りそうな、小さな穴がある。

他にはこれと言って、不自然なものも見当たらないので、俺はしゃがみ込んで、穴の中を確認して見た。

「何だこれ……」

「うむ？何か見つけたのかのう」

「いや……何故かこんな場所にスイッチみたいなものがあるんだけど」

それは長い年月を経て自然が作り出した筈である、この聖域にはもっとも無縁と言えるであろう、明らかな人工物だった。

「どうするのじゃ？」

多分だが、メカ犬が消えたのはこれが原因なのだろう。

元々何かがあるという事を前提にして、ここに調査しに来た訳だが、いきなり話しがきな臭くなってきた気がする。

「……押してみるしかないでしょ」

正直に言えば、このまま何もせずにコテージに帰りたいと、心の底から思うが、メカ犬がこの先に居るかもしれないのに、放っておく訳にも行かないし、何より普段人が近づかない様な場所に、こんな仕掛けを作るなんて、碌な奴が考える事じゃ無さそうだ。

「そ、それじゃあ、押してみるよ」

「う、うむ」

俺は何が起きたら、何時でも動ける様に身構えながら、スイッチを

押した。

「……あれ？」

「……何も起こらんみたいっ！？」

押した瞬間には、何も変わらなかったのだが、エミリーちゃんが、何かに驚いた様で、言葉の途中が驚きの声に変わってしまう。

その声に反応して、ボタンを押す為に、しゃがみ込んでいた俺も、顔を上げたのだが、エミリーちゃん同様に驚きの声を上げてしまった。

何せ行き止まりだった筈の巨大な壁が、ゆっくりと横に移動し始めたのである。

今まで自然物の壁だと思っていたものが、突然何かの映画のワンシーンを見ているかの様に、動き始めたのだ。

驚くなという方が無理な話しだろう。

しかもその奥には、明らかに人の手で整備された道が続いている。

「……行こうエミリーちゃん。多分メカ犬はこの先に居ると思う」

「う、うむ。わ、我は何時でも準備ＯＫなのじゃ！」

エミリーちゃんは気丈にも、この先に行く覚悟を、逸早く言葉で示す。

俺の腕を雑巾を絞るかの様な力で、締め付けながらではあるが……

兎に角俺達は、この隠されていた道へとただ前進して行った。

少し歩くと今度は地下へと続く階段があり、俺とエミリーちゃんは他に進む道が無い事を確認してから、その階段を慎重に下って行く。

階段を下りた其処には、人気は無いものの、洞窟とは到底思えない人口の建造物となっていたのである。

しかも電気が使われているのか、天井には蛍光灯らしき明かりまで灯っていた。

辺りを見渡せば、用途不明な機材の数々に、棚には様々な薬品が、瓶詰めでラベルを貼った状態で並べられている。

他にも鉄製と思われる大きな台の上には、複雑な機構を持つ何かの設計図らしき紙が広げられていたりと、ここはまるで何かの……

『ここは差し詰め研究室といった所だろうな』

「メカ犬！？」

横から聞き覚えのある声が聞こえて来たので、振り向いて見ると、確かにメカ犬が居たのだが、何か紙の束を背中に背負っていた。

「全く何処行ってたのかと思って心配したんだぞ。何か見つけたなら、一旦戻ってくれれば良いだろうが」

『すまないなマスター。ここの位置と安全を確認してから、すぐに

呼びに行こうと思っていたのだが、予想以上のものを見つけてしまってな』

「予想以上のもの？」

『うむ。これなのだがな』

メカ犬はそう言ってから、背中に背負っていた紙の束を降ろすとその内の一枚を広げて見せた。

「これって！？」

俺はその広げられた紙の内容を見て、驚愕する。

それは俺達がホルダーと戦い続ける中で、良く目にするものの形が描かれていた。

『うむ。これは間違い無く、暴走プログラムの設計図だ』

そこで俺の頭の中で一つの可能性が浮かび上がってくる。

「それじゃあ、ここってガルドの研究施設なのか？」

「良く話しは見えぬのじゃが、ガルドの奴は純達が倒して、Tが二度と悪さをせぬように連行したのじゃぞ。その上シルバーライト島に戻った後も、Tはガルドの所有物は全て処分していた筈じゃが、何故今更にしてこんな場所に、ガルドの研究施設があるというのじゃ？」

「……多分ここはTさんにも見つけられなかった場所で、今も生き

残っていた設備が稼動し続けていたって事じゃないのかな」

エミリーちゃんの意見に対して、確実では無いと思うが俺自身の意見を補足してみる。

『……ワタシも最初はそう思っていたのだがな。マスター、この設計図の右端にこれが書かれた日付が書かれているのだが、これを見てどう思う？』

「この日付って今年の……え！？」

「何を驚いておるのじゃ……なんと！？」

メカ犬に言われるがまま確認した俺と、それを覗き見たエミリーちゃんは揃って言葉が出なくなる程に驚いてしまった。

「なあ、メカ犬。これって普通なら有り得ない話しだよな？」

『うむ。確かにそうだが、現にこれは目の前に存在しているぞ』

「何かの間違い……とは、やはり考え難いのかのう」

設計図には書かれていた日付は今年の十一月と記されていた。

これが意味する事が、何なのかを、俺達は悟ったのである。

これは本来ならば有り得ない事なのだ。

エミリーちゃんが日本に短期留学生として転校してきたのが、二学期の初日であり、そのすぐ後に俺達はガルドと戦ったのである。

つまりどんなにガルドが、この場所に頻繁に訪れていたとしても、日付を新たに書き込めるのは、九月の初日だけなのだ。

つまりこの設計図が意味するのは……

「誰かがこの研究室で、ガルドの研究を引き継いでいる！？」

『……その可能性が一番高いだろうな』

一番最初にこの研究室に入って設計図をメカ犬も、俺と同じ事を思ったのだろう。

俺達にわざわざ見せたのも、きっと他の意見も聞き、再確認する為だったに違いない。

「じゃが一体誰がそんな事を？」

やろうとした所で、並の人間に出来る事じゃないのは確かだ。

「取り敢えず一旦戻ってから考えよう」

『うむ。ここがまだ誰かに使われているとするならば、その相手と鉢合わせする可能性が高い。エミリー嬢が居る以上は、戦闘はなるべく避ける方が得策だろう』

「……すまぬのじゃ」

こうして俺達は、予想外の謎と直面しながらも、答えが出ないまま、この研究施設を出て、人魚の入江まで戻ってきた。

戻ってきたのだが……

「誰じゃおぬしは？」

エミリーちゃんが質問する。

入江まで戻ってきた俺達の目の前には、一人の男性が待ち構えていた。

見た目としては、黒いスーツに黒のネクタイと、その上黒いサングラスという、どこぞの映画に出てきそうな黒人男性だったという、何処までも黒に拘った人だったのである。

「何も見ていなければ、俺もこんな事しなくて済んだんですけどね……」

入江で佇んでいた黒人男性は、エミリーちゃんの質問が聞こえていないのか、面倒くさそうに喋り出す。

それにしても見た目に反して、流暢な日本語で喋り出したのは意外だ。

「一つ聞いておきたいんですけど、あの奥にある研究施設を使用しているのは、あなたですか？」

見た目は思いっきり外人さんだが、取り敢えず日本語が通用しそうなので、俺はこの場で一番可能性が高いと思われる質問を試みる。

「……残念だが、それは不正解だよサムライボーイ。俺はただクラ

イアントの指示に従っているだけで、詳しい事は何も知らないんでね」

再び見た目とはかなりのギャップが伴う流暢な日本語を使い、俺の質問に答える黒人男性だが、何処までが本当で、何処からが嘘だというのか、イマイチ判断がし難い。

だがこの人の様子からして、これが単独ではなく協力者かもしくは、組織だった存在と繋がりがあるのでは無いかと予想が出来る。

この人が仮に戦いのプロだったとしても、妙に落ち着き過ぎているのだ。

もしもこの人が俺達に嘘を言っていて、この人こそが黒幕だったとしたら、冷静に対処しようと試みているとしても、多少の殺気や怒気、焦り等の感情の揺れが感じられる筈なのに、この人は何処までも自然体なのである。

もしもそれをこの人が、連日恭也君の手によって、死線に晒されている俺に悟られないレベルで、狙ってやっているのだとしたら、間違い無く士郎さんクラスの猛者だ。

だけどそんな人外魔境な住人がそんなに大勢居るとは、あまり思いたく無いので、ただ単に上から命令されて子供の相手をするのが、面倒くさいと考えているのだと解釈しておきたい。

だからあの余裕は大きな後ろ盾があってこそと、この人自体には現在の状況への、責任意識が無いのではないかと俺は予想する。

「さてと……そろそろお悪いお子様への、仕置きのタイムと行きま

すか」

黒人の男性はそう言うと、上着のポケットからあるものを取り出した。

それは何処か見覚えのある、黒い球体だったのである。

「まさかガルドが作った暴走システム！？」

『違うぞマスター。良く見てみろ』

黒人の男性が取り出した暴走プログラムに思わず驚愕してしまった俺だったが、メカ犬の言う通り、良く見てみると、それは黒単色ではなく、白いラインが二重に描かれていた。

確かにそれは下手をすれば見逃してしまいそうな、若干の違いではあったが、それをガルドの暴走プログラムと全くの同一だと考えてしまうのは、危険かもしれない。

俺がそう考えた時、黒人の男性の姿に変化が訪れる。

握り込んだ暴走プログラムから、黒い光が発せられて、全身を覆い尽くしたのだ。

だがその黒い光は一瞬で弾け飛び、黒い光に覆われていた黒人の男性は、異形の姿となって再び俺達の前に現れる。

全身が深緑の鱗に覆われて、口元には黄色いクチバシと、手足の水掻きに、鋭い眼光を放つ瞳、そして頭部は陶器の様な形状となっている、背中に甲羅は背負っていないが、その姿は日本でも古くから

伝わる妖怪、河童に酷似していた。

『ホルダーという事は、あの研究室について、少なからず情報を持っている可能性が高いな』

「やっぱり、ガルドの暴走プログラムとは別物なのか!?」

ガルドの暴走プログラムは、誰が使っても同じ形状の姿になる筈なのだ。

だけど今目の前で、ホルダー化したこの人の姿は明らかに俺の知っている姿じゃない。

つまりあの暴走プログラムは、別の誰かがガルドの設計図を元に、新しく設計した物だという可能性が極めて高いと思う。

オーバーとメルトの仕業って可能性も少なからずあるが、それにしては手口が違いすぎる。

「……さてと、それじゃあ、少し怖い目に遭ってもらおうかな?」

ホルダーはそう言って、ゆっくりと此方に向かって歩き始める。

「エミリーちゃんは下がってて!」

「わ、分かったのじゃ。……気をつけるのじゃぞ?」

「ああ」

俺はエミリーちゃんに危害が及ばない様に、後ろに下がらせる。

「へえ……小さくても、立派なナイト様ってところかな？」

その様子がホルダーには微笑ましく見えたのか、愉快そうに笑う。

「行くぞメカ犬！」

『うむ！』

後ろに下がったエミリーちゃんとは逆に、俺の隣に歩み出たメカ犬と、短く会話を交わした俺は、タッチノートを取り出して開いてから、ボタンを押した。

『バックルモード』

音声が流れると同時に、メカ犬がベルトに変形して、俺の腹部に巻きつく。

「変身」

音声キーワードを素早く入力した俺は、素早くタッチノートを、ベルト中央の溝へと差し込んだ。

『アッププロード』

白銀の光が俺を包み込み、一人の戦士へと変える。

光が飛散して現れたその姿は、メタルブラックのボディーに四肢へと伸びる銀のラインと額に輝くＶ字型の角飾り。

赤い二つの眼球が、凄まじい存在感を放っている。

「悪夢はここで終わらせる」

変身を完了させた俺は、ホルダーに向かって一気に駆け出した。

「おいおい……こんな厄介な相手だなんて聞いてないぞ!?」

先程までの余裕は何処へやら、仮面ライダーに変身した俺を見たホルダーは、唐突な事態に動揺している。

だが俺はそんなホルダーの様子を好機と見て、何度も拳を叩きつけていく。

「はああ!」

ホルダーも俺の拳を喰らいながら、右からのサイドキックで反撃を試みるが、、俺はその攻撃をバックステップで回避して、キックが目の前を通過した直後にカウンターの一撃を放って吹き飛ばす。

ホルダーはそのまま海の方向に吹き飛んで行ったのだが、ここで予想外の出来事が起こる。

吹き飛ばされながらも、ホルダーはクチバシ状となっている口を開くと、其処から異常な程に舌を伸ばして、俺の足首に巻きつけたのだ。

「おわ!?」

『しまった!?』

咄嗟の事に対応出来ず、俺はホルダー諸共、海の中へと引き摺り込まれてしまう。

水中に潜った直後、すぐにホルダーの舌を足から引き剥がしたのだが、またしても次の瞬間俺はとんでもないものを目にする。

「ははははははははは!!!!陸地では此方に分が悪い様だが、水中ではどうかな!?」

なんとホルダーが水中を高速で移動しているのだ。

しかもそのスピードを保ちつつ、連続で体当たりを仕掛けてくる。

「ぐは!?」

陸上とは違い、上下左右の何処から来るか分からない連続攻撃に、対処が追いつかない。

「くそ!何とか対応しないと、このままじゃ……」

『マスター!!!』

「ん、何だメカ犬。良い手段でも思いついたのか?」

『いや、それはまだなのだが、コテージで言っていたもう一つの反応が、此方に急接近してくるぞ!』

「はい!?」

予想外なメカ犬の言葉に驚いた直後、俺の耳に何処からか歌声が届いた。

『アタイは～海の～妖精さ～ん♪』

何か歌詞は残念な感じだが、綺麗な女性特有の高いキーの声で歌うその存在がいるであろう方向に、視線を向けた俺は思わずそのシルエットを見て呟いてしまう。

「……人魚？」

だがそう見えたのは一瞬の事で、此方へと近づくにつれて、その正体が明らかになる。

その形状はまさにイルカ。

だけどただのイルカでは無く、メタルブルーの光沢を放つメカニカルなイルカだ。

更に俺達の目の前に来ると、そのメカイルカの大きさが、手乗りサイズだという事が、明らかになる。

『アロハ～マスター！初めましてなのだわさ～』

しかもそれは、やけに特徴的な口調で、俺達に喋り掛けてきた。

『やはりあの反応は、メカ竜と同じサポートシステムの反応だったか……』

「まさかと思ったけど、メカ竜と同様に外国に居たんだな」

以前メカ竜に拷問……じゃなくて、優しく丁寧に質問して聞いていた話なのだが、博士はガイアシステム意外にも別シリーズを同時に製作して、此方に送り込んだそうなのだ。

メカ竜は今も、普段は他のシリーズの所在を確認する為に、色々と調べているのだが、その一体がまさかシルバーライト島付近の海に居るとは思いもしなかった。

『ところでマスター。マスターはホルダーと戦ってたんじゃないんだわさ～』

「あ！」

そう言えばそうである。

今は突然歌いながら現れた謎のイルカを警戒してか、手を出してこないが、その内攻撃を再開する事だろう。

『困ってるんなら、アタイが力を貸すんだわさ～』

「へ？」

『その前にアタイの名前を決めるんだわさ～可愛い名前を希望～』

突如として名前を決めろと言われても、そう簡単に思い浮かぶものじゃない。

今までがかなり適当に名付けていた節もあるので、改めて言われるとかなりハードルが高いのではないだろうか？

普段なら速攻でメカイルカにでもするのだが、それじゃあ可愛いという要望に沿わない……

……良し、これに決めた！

「じゃあ、お前は今日からメカ海！通称はウミちゃんだ！」

イルカは確か感じで書くと海に豚と書いた筈だ。

流石に豚は無いだろうと思い、海を選択してみた。

『……ウミちゃんか～センスはあれだけど～響きが可愛いからそれで良いだわさ～』

メカ海はそう言うと、イルカ特有の尖った口を開いて、中から赤い光をタッチノートへと放射する。

光が放射されたタッチノートを取り出して開いてみると、画面にはダイバーシステムという新たな項目が追加されていた。

『それじゃあ行くんだわさ～』

「ああ！」

俺はメカ海の言葉に頷きながら、タッチノートの操作を続ける。

『スタンディングモード』

タッチノートから流れる音声と同時に、メカ海のボディーが変形し

て、メカ竜と同様のアタッチメントパーツになった。

基本的にメカ竜と、形状に違いは無いのだが、唯一違う点を挙げるとするのなら、尾びれがレバーになっているという事ぐらいだろう。

俺は変形したメカ海を手に取り、ベルトの左側をスライドさせて、差し込んだ。

『ベーシック・ダイバー』

肩と胴体、足の部分に重厚なメタルブラックの追加装甲が展開されて行き、続いて背中にも大きなバックパックと思われる装備が追加される。

そして最後に両腕にメタルブルーの大きなメカニカルなパンチンググローブが追加された。

顔の部分は自分では確認出来ないが、恐らくここにも何かしらの変化が生じているのだろう。

更にこの追加されたメタルブルーのボディーには、至る場所に小型のスクリューが設けられている。

「これがダイバーモード……」

新たなフォルムになった事に驚く俺に対して、ずっと黙って様子を窺っていたホルダーが動きをみせた。

「姿が変わったところで、このスピードに敵うかな!?」

そう叫びを上げながら、例の高速体当たりを再会させて来た。

『右に避けるんだわさ～』

ホルダーの接近に合わせて、メカ海がそう言うと、左半身のスクリューが唸りを上げて、ホルダーの体当たりを回避する。

「な！？」

俺が避けた事にホルダーは驚愕しながらも体当たりを続けるが、俺はその体当たりの全てをメカ海の気の抜けそうな語尾と共に、華麗に避け続けた。

『そろそろこっちからも仕掛けるんだわさ～』

「ああ！」

メカ海の声に頷き、俺は反撃を開始する。

尚も体当たりを仕掛けてきたホルダーの一撃を避け様に、俺はそのまま通過しようとするホルダーの足首を掴んで、捕縛に成功する。

「うおおおおりゃあああああ！！！！！」

俺はホルダーを掴んだ状態のまま、水中であるにも関わらず全力で、空いている拳を連続で叩きつける。

『『マスター！！！』』

「応！！！」

二人のメカーズの声に答えながら、俺はホルダーを放り投げて、ベルトの左側のレバーを引く。

『マックスチャージ』

ベルトから発生した光が、右拳へと集約して行き、四体の分身体が生成される。

その分身体は四方に散り、本体である、俺と同様に構えを取り、ボディーの全スクリューを高速回転させていく。

「こいつで決めるぜ」

俺と全ての分身体は回転させたスクリューを推進力にして、輝く右拳をホルダーに向けて叩き込む。

「ダイバーチェーンブロー」

四方から放たれた拳が、ホルダーに直撃して大きな爆発を引き起こした。

爆発が晴れた後に、ホルダー化が解けて、気絶した黒人男性を、抱えて海から上がった事で、取り敢えずこの戦いは終息を向かえたのである。

「結局情報無しか……」

『そうだな』

あの戦いの後、気絶した黒人男性は案の定、記憶を失っていたので、情報は得られず、一度エミリーちゃんをコテージに送ってから、改めて人魚の入江にある研究施設の方も調べてはみたのだが、それ以上の情報は分からなかった。

取り敢えずあの研究施設は、徹底的に破壊してきたので、これ以上の研究はあそこでは出来ないと思うが、どうにも腑に落ちない事ばかりである。

俺とメカ犬が悩みながら、コテージに戻ってくると、何故かサバスチャンが待ち構えていた。

「お待ちしておりましたよ純殿。姫様達は既にお城に出迎える準備が整ったので、先にお向かいになりました」

「は、はあ」

そう言えば俺って、サバスチャンと面と向かって会話した事無かったけれど、エミリーちゃん抜きだと、正統派のベテラン執事ってイ

メージなんだな……

何か多くの変体振りを目にした後だと、余計に思う部分が出来てしまう。

「それでは純殿は、此方のお召し物にお着替え下さいませ」

色々と複雑な想いを胸に秘めながら、サバスチャンを見ていると、不意にそう言われて、一着のスーツが差し出された。

「……何ですかこれ？」

「スーツでございます」

「いや……それは分かってるんですけど」

「後は着替え終えた後に、左胸の見える位置に、お付けくださいませ」

更にサバスチャンがそう言って、俺に渡してきたのは、二つの西洋剣が描かれたブローチだった。

「……改めて聞くんですけど、何ですかこれは？」

「それは今回のパーティーに必要なものですので、必ずお付けになってくださいませ」

「へえ～参加証みたいなものですか？」

流石はお城のパーティーなだけあって、やる事が洒落ているなと、

思っていたら、サバスチャンは更に俺の予想斜め上を行く言葉を言い放ったのである。

「それは今回の姫様の婿を決める婿候補がお付けになる証となっております」

「……」

俺は一瞬だが、完全に思考停止してしまう。

サバスチャンが何気なく言ったその言葉は、それ程までの威力を有していたのだ。

……一度落ち着こう。

そしてこういう時にこそ、冷静な判断というものが求められているものなのである。

だから取り敢えず、俺は冷静に……叫ぶ。

「はあああああああああああああああああああ!?」

王家専用のプライベートビーチに、俺の叫びが木霊した。

今日の海鳴は多分平和だと思うが、俺が今居るシルバーライト島は、色々と波乱に満ちている様である。

# 第２０話　真冬のサマーバケーション【後編】（後書き）

シルバーライト島では、普段から裏で動いている彼等は出てこないのです……はい。

# 第２１話　姫を守るはナイトの務め【前編】（前書き）

どうもお久しぶりです。

多分今回のお話の後編が終われば、シルバーライト島から海鳴市に戻る事になると思います。

それでは楽しんでいただけたら幸いです。

# 第２１話　姫を守るはナイトの務め【前編】

正直に言えば、最初はサバスチャンの小粋なジョークなのかなと、心の何処かで思っていた。

だけど渡されたスーツに着替えて、テレビでしか見た事の無い様な、大きなお城に案内された後、この国の王様とお妃様、つまりエミリーちゃんのご両親に挨拶をした辺りから、これは変え様の無い現実か、とても性質の悪いドッキリのどちらかではないかと、真剣に考える域に達してしまった自分がいる。

本当にサバスチャンの小粋なジョークだったら、せめて性質の悪いドッキリだと、ハンドマイクと看板を持って芸人さんが出て来てくれたのであれば、どれだけ気持ちが楽になっただろう。

俺は何か粗相をすれば、地下の牢獄にでもぶち込まれるのではないかというプレッシャーを、内心で抱きながら、この国のトップとの挨拶を、どうにか無難に乗り切り、パーティーが開始されるまでの一週間の間、俺がお世話になる部屋へと、サバスチャンとは別の、若い執事さんに案内されて現在に至る。

「……これからどうするべきなんだろう」

一人部屋としてはかなり広い、恐らく二十畳程はありそうな部屋の中で、これまたキングサイズな巨大ベッドに寝そべりながら、俺は頭を抱えた。

俺が王様達に挨拶をしている間に、サバスチャンか、もしくは他の使用人の人が既にこの部屋へと運び込んだのであろう俺の荷物から

取り出しておいた、愛用の丸みを帯びた青いシンプルな形の目覚まし時計で、時間を確認してみると、既に夜の九時を回っている。

挨拶の後に、食事をどうするのか聞かれたが、正直なところ、いきなりな展開に着いて行けなかったので、とても食事を摂る気にはなれず、失礼とは思ったがお断りして、こうして部屋に案内してもらったのだ。

食欲が無かったのは本当の事だし、フランス料理も食べた事の無い俺は、当然ながら正式なテーブルマナーも知らない。

この国の食事作法がどういった基準用いているのかは知らないが、その国のトップとの食事で何か仕出かしでもしたら、それこそ大きな外交問題の切欠となるかも知れないのだ。

エミリーちゃんが食事しているところを見ると、特に変わった食べ方はしていなかったが、用心に越した事はないだろう。

……まあ、このエミリーちゃんの婚約者を決める為のパーティーに、何故か招待客としてでは無く、当事者の一人になってしまったというのも大きな問題ではあるが、それ以上に気になる事がある。

今日の昼間に人魚の入り江で見つけた、暴走プログラムの研究施設。

更に俺とメカ犬が知らない未知の暴走プログラムを使って、明らかに口封じを狙ってきた男……

戦う前に嘘か本当か、自身を雇われの身だと言っていたが、もしもそれが嘘偽りの無い真実ならば、少なくとも、まだあの研究施設を利用していた首謀者が一人はいる筈だ。

もしかしたら雇われた人間が他にも居て、敵は複数なのかもしれない。

情報があまりにも少ない現状では、もしかしたらという仮定の話が尽きないので、余計に考えが纏まらずに、頭が痛くなってくる。

俺は中々の難題に、頭痛を覚えながらも、取り敢えず今後どうやって情報を得れば良いのか、方針だけでも決めておこうと思ったその時、ベッドの脇から声を掛けられた。

『マスター』

声を掛けて来たのは、何気にずっと俺と、一緒に着いて来ていたメカ犬である。

お城の人達は、メカ犬が一言も喋らなかったので、おもちゃだと思ったのか、特に聞いてくる人は居なかったし、王様達のとの挨拶の際も、背景に完全に溶け込んで、やり過ごしていた。

流石にこの部屋に案内してくれた執事さんは、気になってか、頻繁にメカ犬を見ていたが、それだけである。

これも一つの隠密行動と言えるのだろうか？

「どうしたんだよ？」

『現状マスターの立場が、物凄い事になっているのは分かるのだが、ワタシはどうしても昼に戦ったホルダーを倒した事と、研究施設を破壊しただけで、全てが終わったとは思えないのだ』

どうやらメカ犬も、俺と同じ事を考えていたらしい。

「分かってるさ。こっちの件は、何とか自分で対処してみるから、メカ犬は情報収集を頼むぞ」

俺は溜息を一つ吐いた後に、恐らくメカ犬がこれから、提案しようとしていたであろう言葉を先に告げる。

『うむ。マスターがそう言うならば、ワタシはビーチ周辺を調査して来よう。森に住んでいる動物達ならば、研究施設に出入りしていた人物を目撃している可能性が高い』

「俺も出来るだけ、このお城で探りを入れてみる。あの研究を引き継げるだけの知識に、人を動かせる財力がある人間なんて言ったら、かなり絞られる筈だしな」

こうして今後の方針が決まった俺とメカ犬は、早速それぞれの行動に移っていく。

メカ犬はこのまま夜の闇に紛れて、お城を出て夜行性の動物達に聞いてみると言って、部屋を出て行った。

俺も寝るまでにはまだ少し時間があるので、廊下に出て誰かに話を聞いてみようと思い、天国の様な柔らかさを持つベッドから降りる。

幸いにも、城内で働いている人達は、友好国でもっとも近い国という事で、日本語を必修科目で学生時代に習う為、全員がある程度日本語を話せるらしい。

言葉が通じるのであれば、今回のパーティーの詳細に、あわよくば、暴走プログラムの研究を引き継げそうな人物を教えてもらえるかもしれないのだ。

そう考えながら、俺がドアノブに手を掛けると同時に、扉が数回ノックされた。

俺はこんな時間に誰だろうと思いながら、そのままドアノブを捻り、ゆっくりとドアを引いて、先ほどこのドアをノックした人物を招き入れる事にした。

「はい……」

そう言いながらドアを開けて、俺が最初に視界に捉えたのは、綺麗に風に靡く銀色の髪だった。

俺と同じくらいの小さな女の子で、この国のお姫様でもある、お昼には一緒に人魚の入江に向かい、今も俺の頭痛の原因の一部となっている異国の友達……

「夜分遅くにすまぬのう」

エミリーちゃんがそこに居た。

「……いや、それは良いんだけど、何か用事？」

まだ夜の九時過ぎではあるが、何か用事があっても、大抵は次の日に持ち越す事だろう。

態々ここまで訪ねて来たという事は、もしかしたら急ぎの用事なの

かと思い、質問してみた。

「うむ。しかし廊下で話すのも何じゃから、出来れば部屋に入れてもらっても良いかの？」

「あ、ごめんね。気が利かなくて」

俺はエミリーちゃんの話が何なのか、予測を立てながら、部屋へと招き入れる。

最初は向かい合う形で、最初から備え付けられていた椅子に腰掛けて話し合おうとしたのだが、大人用に作られたそれらは、俺達のサイズに合わず、最終的には先程まで俺が寝そべっていたキングサイズのベッドに腰掛ける事で落ち着いた。

「改めて言わせて欲しいのじゃ、純！今回は本当にすまぬ事をした！！！」

さてこれから何を話すのかと思いながら、向かい側に座っているエミリーちゃんを見ていたら、開口一番で俺に頭を下げながら謝ってきたのである。

「取り敢えず頭を上げて、エミリーちゃん。俺も色々と聞きたい事はあるけど、何で突然俺に謝ったの？まずはそこから説明して欲しいんだ」

慌ててエミリーちゃんの頭を上げさせた俺は、改めてエミリーちゃんに質問をした。

「そうじゃのう……まずは何から話すべきか……」

俺の言葉に顔を上げたエミリーちゃんは、一度咳払いをする事で、気を取り直したのか、静かに語り始めたのである。

エミリーちゃんの話を要約すると、今回の婚約パーティーは、ガルドの一件が発端となっているらしい。

国王を含む国の上層部が操られていたとはいえ、元大臣のテロとも言える所業に、肝を冷やしたこの国で大きな権利を持つ者達が、自分達の世代は勿論、次の世代に同じ事が繰り返されない様に、早急に信頼の置ける人物に次代の国王となってもらおうと考えたのだそうだ。

そこで逸早く次代の国王候補を決めるのに、手っ取り早いと考えられたのが、エミリーちゃんの婿を今の内に決めてしまおうという事である。

幾ら王国とは言っても今は現代社会であり、あまり生まれた頃から、結婚相手を決める等という事は、事実上廃止となっていたが、今回の件を重く見た重鎮達が、言葉巧みにエミリーちゃんのお父さんである、この国の国王様を説得してしまったのだ。

現在はエミリーちゃんは兄と姉、弟に妹もいない、所謂一人っ子ではあるが、エミリーちゃんの年齢から分かる通り、この国の国王様とお妃様は充分に若い。

数年内にエミリーちゃんに弟でも出来れば、即座に継承権は移るのだそうだが、話はそれで終わるものでは無かったのだ。

この婿選びは表向きには、次期国王を決める為というものになって

いるが、様は信頼出来る上に、優秀な人材を確保しておくという上層部の目的が見え隠れしている。

しかもこの国には、基本的に結婚する際、日本の様な法的に定められた年齢は存在していない様なのだ。

以前ガルドが無理やりに、エミリーちゃんを連れ去って、婚姻を結ぼうとしたのも、それが大きな要因となっているのだろう。

この国での大人か子供かの基準は、基本的に年齢ではなく、何かしらの職業を持つか、確かな肩書きを持っているかで判断されており、それが無ければ結婚は出来ないのだそうだ。

ちなみに何かしらの職種における、見習いはこの肩書きにも該当するが、学生等の直接的な価値を見出せない類には適応されない。

もっと細かく分類すれば、他にも例外等が存在するらしいのだが、その部分ばかりを話すと、物凄く長い話になってしまう上に、俺自身もエミリーちゃんから話を聞いただけで、全てを把握出来ていないから、この辺りは必要な部分以外の説明は割愛させていただこう。

まあ、先程言った肩書きにおいて、例外に含まれる存在の一つが、エミリーちゃんの持つ肩書き。

この国のお姫様だという事だ。

その為エミリーちゃんは、生まれながらにして、この国ではたとえ赤ん坊だったとしても、大人という分類に入れられてしまうのである。

だからこの国で婿を決めるパーティーが催されて、相手が決まってしまえば、エミリーちゃんの成長を待たずに、即挙式が挙げられてしまう。

ここまで長々とこの国の上層部の思惑と、結婚制度について説明した訳だが、ここからが本題である。

先程も説明したが、このまま全てが上層部の目論見通りに進行していけば、エミリーちゃんはパーティー終了後に即結婚という運命が待ち受けている訳だ。

しかしそれには、一つだけ抜け道があった。

それが俺という存在な訳である。

正確に言えば、俺が日本人だという事が重要なのだ。

一週間後のパーティーに参加する婚約者候補は、俺も含めて三名。

俺以外の二人は、どちらもこの国の名家の生まれで、年齢も二十歳を超えており、結婚に必要な肩書きを有している。

その中で俺だけが異端なのだ。

俺の国籍は日本であり、結婚するには十八歳以上の年齢に達さなければならないと、法的に定められている。

この国は諸外国と有効な外交活動を行いながら発展を遂げた国であり、友好国である日本人を、無碍には出来ない。

それは国を統べる王族だったとしても例外ではないのである。

つまり俺が婿候補の中で、エミリーちゃんの結婚相手に相応しいと認められた上で、国籍を変える事を突っぱねれば、即挙式という強引な事は、事実上不可能になる訳だ。

他にも手段はあったのかも知れないが、この話を画策した人達も強引とは言え、国の未来を案じてこういった手段を取ったのだという事もあり、彼等を失墜させる様な過激なやり方を取らずに、納得させようと思ったら、実現可能だったのが、この方法のみな上に、先程の条件に当て嵌まり、尚且つ対等に他の婿候補と渡り合えそうな人物が、俺しか思い浮かばなかったらしい。

話を聞けば、俺はエミリーちゃんと、サバスチャン、それに日本に来ていた元護衛隊員達からの特別推薦によるもので、他の二人は数百人という候補者達から選りすぐられて勝ち上がった、エリート中のエリートなのだそうな……

普通に考えれば、日本に住んでいる一般的な小学生が、そんな面子を相手に勝負する事自体が間違っている。

それが分かっていたから、こそなのだろう。

もし全てを説明すれば、俺に断られるのではないかと危惧して、先に保護者名義で話を持ちかけてから、相談しようとした所で、俺達の親からの申し出だったとは言え、サプライズプレゼントとして進行させていくという案が出た事で、それに便乗して、勢いでなのはちゃん達を含めて、俺をこの国に連れてきた。

今だからこそ話すが、俺の家にだけ最初の手紙が、届くのが数日早

かったらしいので、後からなのはちゃん達もパーティーに誘うという展開に切り替えたのだろう。

部屋に入ってきて、初めににエミリーちゃんが謝ったのは、俺に最初から何の説明もしないまま、騙す様な形で巻き込んでしまった事に対してだった様だ。

「……改めて言わせて欲しいのじゃ。一度ならず二度までも、我は勝手な都合で、純を巻き込もうとしておる。本当にすまぬ……」

大体の説明を終えたエミリーちゃんが、再び俺に頭を下げて謝る。

俺はその様子見ながら、一度頭の中で先程エミリーちゃんが話してくれた内容を、自分なりに整理してから、肺一杯に吸い込んだ空気を溜息として吐き出した。

「エミリーちゃん……」

「本当にすまぬと思っておるのじゃ……我もこんな、騙す真似はしたく無かったのじゃ……」

俺が呼びかけても、エミリーちゃんは頭を下げたまま謝罪を続ける。

「もしも純が拒むのであれば、今回の事は無視してくれて構わぬ！元々はこの国の問題で、こういった事態も我の生まれを考えれば、逃れられぬ運命と言えよう……」

「エミリーちゃん。ちょっと顔を上げてくれる？」

尚も頭を下げながら、謝罪の言葉を言い続けるエミリーちゃんに、

俺は一言だけ、言葉を投げかける。

その言葉に戸惑いながらも顔を上げたエミリーちゃんに俺は……

「あ痛っ！？」

エミリーちゃんの額にデコピンを食らわせた。

「い、痛いのじゃ……」

不意打ち気味にヒットしたデコピンが相当効いたのか、エミリーちゃんは右手で額を擦りながら、涙目になっている。

「これはエミリーちゃんが、俺に何も話してくれなかった事へのお仕置き！」

俺は涙目で此方を見ている、エミリーちゃんに言い放つ。

「……純？」

「……だからこれで、俺に謝る必要は無いんだよ」

続いて俺はエミリーちゃんの綺麗な銀髪を、少しだけ触れながら、梳かす様に撫でる。

「わ、我を怒ってるのでは無いのか？」

無抵抗で俺に撫でられながら、エミリーちゃんが俺に恐る恐るそう聞いてきた。

「怒ってたけど、さっきお仕置きしたから、もう怒ってないよ。それよりも、これからの事を考えよう」

結婚ていうのは俺自身は経験が無いが、人生の上でかなり重要な出来事だと思う。

絶対とまでは言わないが、結婚をすればその大半の人生を伴侶と共に過ごす可能性が高いのだ。

理由は聞かないが、エミリーちゃんは、それを決めるのは今では無いと判断したのだろう。

今から俺がしようとしている事は、この国全体から見れば、決して良い事とは言えないかも知れない。

だけどそれが何だと言うのだろうか。

無責任で結構だ。

誰が文句を言おうと関係無い。

今目の前で、友達が困っていて、怒られる事を覚悟した上で、結果的にかも知れないが、無理やりとも言える強引な手段に出てまで、助けを求めて俺をここに呼び寄せたのである。

だから俺がするべき事はただ一つ。

友達を助けるのに、理由は要らない。

「……協力してくれるのか？」

「うん。俺に何が出来るか、分からないけどね」

「……すまぬ」

「こういう時は、謝るんじゃなくて、お礼の言葉を言って欲しいかな？」

「あ、ありがとう……なのじゃ」

この小さなお姫様の為に、俺は出来るだけの事をしよう。

それが友達ってものなのだから。

方法の一つとしては、エミリーちゃんの両親、つまり王様が認めてくれれば、今回の婿決めを画策した上層部も文句は言えない筈だ。

まあ、その方法をどうするのかが、今後の課題なのだが、それが上手くいってもしも仮に、俺が婚約者になったとしても、実際に結婚しろと言われるのは、十年以上先の事ではあるし、その間にエミリーちゃんに弟が出来れば、婚約は解消出来るだろう。

そうでなくても、最低でも数年の時を稼げれば、エミリーちゃん自身が気に入る男性と巡り合う事だって、不可能では無い筈なのである。

つまり俺は、エミリーちゃんが成長するまでと、取り巻く環境が変化するまでの、防波堤的な役割を担えば良いのだ。

かなり楽観的な考えだという事は、俺も理解しているが、今はそれ

以外に講じる事が出来る手段が無いのだから、仕方が無いだろう。

「……のう、純」

これからするべき事への覚悟が決まったので、色々と考え事をしていたのだが、どうやら無意識に俺はエミリーちゃんの頭を撫で続けていたらしい。

「あ、ごめん」

エミリーちゃんの声で我に返った俺は、慌ててエミリーちゃんの頭から手を退けた。

「あ！い、いやもっと我の頭を撫でてくれて構わんのじゃぞ。それに最近はこの事で頭が一杯になっておってのう。色々と不安だったのじゃが、純のおかげで少し気が抜けての……」

そう言ったエミリーちゃんは、少し遠慮しがちに、おれの胸に顔を埋める形で抱きついてきた。

「え、エミリーちゃん！？」

「……少しだけこのままでいさせてはくれぬか？」

突然の抱きつきに、慌てた俺だったが、呟く様に言ったエミリーちゃんの言葉に、俺は静かに頷くしかなかった。

暫くはその格好のままで、俺がエミリーちゃんの頭を撫で続けるといった状況が静寂の中で続いていたのだが、エミリーちゃんが口を開いた事で、その静寂は終わりを告げる。

「のう、純」

「うん」

「人を好きになるというのは、どういう事なのじゃろうな？」

いきなり難解なテーマを問われた気がする……

エミリーちゃんが言った好きの意味は、多分家族に対してや、友人に対しての好きではなく、恋人やそういった恋愛感情に対しての好きという意味だろう

はっきり言って、前世を含めても経験皆無な俺には答える事が出来そうに無い、かなりハイレベルな質問である。

「う～ん……俺も良くは分からないけど、やっぱり相手を愛しいって思う事何じゃないかな？」

以前にプロの漫画家である燐子さんが、恋愛漫画を描く時の参考にと、母さんに相談していた時に、母さんが答えていた言葉の受け売りではあるが、経験者の言葉なので、はずれではないだろう。

そもそもこういう事は、人其々なのだから、一つの答えに絞る事等出来ないのかもしれないが……

「相手を愛しいと思うか……それならば我の、この気持ちも……恋なのかのう？」

俺の答えに何か呟いていたエミリーちゃんが顔を上げて、俺を見上

げてくる。

心なしか部屋全体の空気が変わった様な気がするのと同時に、少しずつエミリーちゃんの顔が、俺の顔に近づいて来てるんじゃないかと思ったその時……

「なりませぬぞおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！！姫様ああああああああああああああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！」

部屋のドアが勢い良く開け放たれて、エミリーちゃん専属の老執事、サバスチャンが叫びながら登場した。

そして老人とは到底思えない、現役アスリートの様な走りで、ベッドまで辿り着くと、抱き合った状態にあった俺とエミリーちゃんを引っぺがして、エミリーちゃんを担ぎ上げる。

「どうも夜分に失礼いたしましたな純殿」

サバスチャンは俺にそう一言だけ述べて、再び部屋の扉へと、エミリーちゃんを担ぎ上げた状態で歩いていく。

「放すのじゃ！サバスチャン！もう少しで我は……」

「なりませぬぞ姫様！幾ら幼いといえど、夜も遅い時間に、男性の部屋に行き、あまつさえ抱擁を交わす等と！！！その様な破廉恥な真似はこのサバスチャンの目が黒い内は、決して許しはしませぬ！！！！！！！」

「そう言うサバスチャンは、何かあるとすぐに我に抱きつこうとするではないか！？」

「私の場合は、仕えるべき主君を想う愛ゆえにでございますから」

「不公平じゃあああああああああああああああ！？」

何かを喚き合いながら、二人はこの部屋を出て行ってしまった。

他にもまだ色々と聞きたい事があったのだが、目覚まし時計で時間を確認すると、メカ犬と話していた時間から二時間程経過していた。

「……今日はもう寝よう」

俺は明日聞けば良いと判断して、部屋の明かりを消して、ベッドに潜り込んで暫くして眠りについた。

そして次の日から、俺に出来る事をし続けて、一週間という時は瞬く間に過ぎ去り、パーティー当日の朝を迎えたのである。

## 第２１話　姫を守るはナイトの務め【前編】（後書き）

後書きでひっそりと募集するのですが、実験的にこの小説とのコラボを募集してみます。

募集に対しての注意事項なのですが、最低でも話数が１５話以上という事（あまり話数が少ないと、お話自体が進んでいない可能性があるので）

一応は仮面ライダー以外でも構わないのですが、仮面ライダーが出てきてくれるとやっぱり書きやすいかな？

後は書き手をどちらがやるのかと、作品名に、思いついたのであれば簡単なあらすじ等を明記の上で、小説家になろうのメールボックスか、感想に聞き込んで頂ければと思います。

応募して貰えた方が多かった場合は抽選で一名様とのコラボとなる予定です、よろしければお気軽にご応募して貰えると、とても嬉しいです。

何かご不明な点がありました場合もどうかお気軽にご質問くださいね。

それでは……

# 第２１話　姫を守るはナイトの務め【後編】（前書き）

お久しぶりです。

急に更新が止まってしまい申し訳ありませんでした。

実は急に職場での転勤が決まり、色々と慌しかったもので……

少しずつケータイで書き続けてはいたのですが、パソコンを起動させたのは、一週間振りになります。

これからまた研修に行くので、一週間程更新に期間が開いてしまうかも知れませんが、出来るだけ、更新は続けて行きたいと考えておりますので、今回も楽しんでいただけたら幸いです。

# 第２１話　姫を守るはナイトの務め【後編】

エミリーちゃんのお父さん、つまりこの国の王様が、城内の豪華絢爛なパーティー会場の高台から、俺達を見下ろしている。

その右脇にはお妃様と、左側にはこの国のお姫様であり、今回のパーティーの主役でもあるエミリーちゃんが控えていた

それを俺は、横に並ぶ二十台半ば頃と思われる、二人のイケメン男性と共に見上げていた。

何を隠そうこの二人こそが、俺以外の婿候補さん達である。

この一週間で俺達が集めた情報によると、彼等は共に文武両道であり、比の打ち所の無い昨今の日本で行われている大規模な婚約パーティーで女性達が、理想にしていそうな殆どのプロフィールを有していた。

まあ、調べていく上でそれだけではないという事も分かってきたが……

小学生が楽に野球が出来そうな大きなパーティー会場に、埋め尽くされる程やって来た来客者達が、そんな俺達を興味深げに見つめている。

本日はエミリーちゃんの婿を決めるというこの国を左右する大切な日であり、ここはその盛大なるイベントが催される城内のパーティー会場。

周りに大勢居るギャラリーは、このパーティーに招待されたお客さん達だ。

多分だがこの中に、なのはちゃん達もこの会場内の何処かに居る筈だろう。

ちなみになのはちゃん達は、このパーティーの本当の意味は知らない。

パーティー会場では、殆ど日本語は使われていないし、文字もこの国で使われている独自のものだ。

日本語かアリサちゃんを含めれば英語で答えられない限りは、ばれる心配は無いだろう。

その辺りの根回しは、エミリーちゃんとサバスチャン、そして恵理さんがやってくれている。

更に俺が注目されているのは、このパーティーを盛り上げるイベントの参加者だと伝えてあるので、周囲から注目を浴びていたとしても、何とか誤魔化せる筈だ。

友達を騙すというのは忍びないが、これもエミリーちゃんの頼みで、なのはちゃん達を必要以上に、国のごたごたに巻き込みたくないという意見の為である。

確かにこんな大人の事情なんて、出来れば知らない方が良いに越した事はないだろう。

これから一体何をさせられるのか。

どうやら正式な婿を決める為に、何か変わった事をやろうとしている事は分かったのだが、それ以上の情報は結局分からないままだった。

どちらにしても、平穏無事に終わるとは思っていないが……

俺が会場の雰囲気に飲まれない様に、様々な考えを巡らしていると、ファンファーレが鳴り響く。

それと同時に王様が立ち上がり、王様が立ち上がって、俺達に向かって何かを喋り始める。

勿論王様の言葉は、この国の言語であり、日本人の俺には何を言っているのか、全く理解できない。

「メカ犬。翻訳頼むぞ」

『うむ』

俺は肩に乗せたメカ犬に通訳を頼んだ。

どうやらメカ犬は、動物の言葉に加えて、この国の言語も理解出来る様なのである。

日本語を喋れるは海外の言葉に加え、人外との意思疎通までこなせるメカ犬は、今すぐにでも、超一流の翻訳家として就職する事が出来そうだ。

そう思いながら俺は、王様の言葉とほぼ同時に、耳元でメカ犬が翻

訳する声に耳を傾ける。

全ての内容を話すと、あまり関係の無い部分も多く出てくる為、要点を絞って説明しようと思う。

今回の婿を決める方法なのだが、かなり特殊な方法を取る様だ。

お姫様の結婚相手とは、問答無用で決められてしまうものなのかと思っていたが、この国は内部で全てが完結している訳では無く、様々な国と横に様々な繋がりを持っている。

現代であまり表立ってそういった行動に出れば、要らぬ悪評が立つ危険性がある為に、上も慎重に成らざるを得ないのだろう。

だからと言って人数を絞ってから、本人にお見合いでもさせて本人に決めさせるとしたら、本人が推薦してきた俺が勝つ事は確定だ。

それでは態々候補者を激選した意味が無い。

だからこその手段なのだろう。

その手段……というかこれは本当にゲームと言える内容なのだが、この城内の宝物庫に保管されている宝石、マーメイドブルー。

これを一番早く王様に献上した者が勝利するという、何かの番組企画みたいな勝負内容だった。

その宝物庫を開ける鍵が、この城内の何処かに隠されている。

最も早くそれを探し出した者が、事実上の勝者となるのだろう。

これは明らかに俺を勝者にさせないという重鎮達の意思を感じる。

何せルール上では、自分が使える全てを駆使して探し出せという事なのだ。

つまり自分の部下や家臣に、使用人等に協力を仰ぐのも許されるのである。

俺以外の二人は名家の出身であり、多くの人間を使っての人海戦術が可能だ。

しかも王様はルール説明では母国語を使用している等、ただでさえメカ犬という翻訳者が居なければ、こんな不利な状況下な上に、何をすれば良いのか分からないままに始まる事になって、かなり出遅れる事となっていただろう。

大体のルールをメカ犬の同時通訳で俺が理解するのと同時に、もう一度ファンファーレが会場内に鳴り響く。

それと同時に、多くの人間が会場から外へと流れていく。

どうやら俺以外の二人は、この勝負の内容まで事前に把握していたらしい。

幾らお城のパーティーだと言っても、明らかに会場内で働いている人が多いと思っていたのだが、どうやらこの為に、パーティー運営の手伝いという名目を付けて、使用人を大勢連れて来ていた様だ。

「俺達も行くか」

確かに不利だが、このまま何もせずに終わる訳には行かない。
俺も自分に出来る事を開始する為に、行動を開始する。
『マスター。何か心当たりはあるのか？』
会場から走り出そうとしたところで、メカ犬が話しかけてきた。
「いや、何も情報は無いけど、兎に角探さなくちゃ先を越されるかもしれないだろ」
『それについてだが、ワタシに一つ妙案がある』
「妙案？」
『うむ。だがその為には事前に幾つかの準備が必要だ。その鍵の形状と材質等を出来るだけ詳しく確認したら、人気の無い外に出るぞ。話はそれからだ』
「あ、ああ」
俺は取り敢えずメカ犬の指示に従い、会場内に居たサバスチャンに、宝物庫の鍵について出来るだけ詳しく聞いた後に、一旦城内から外に出て、人気の無い裏庭の木陰に向かった。
「それでこれからどうすれば良い？」
『うむ。次はタッチノートを出して、チェイサーにメカ竜と、メカ海も呼んでくれ』

「へ？何でタッチノートを？それに皆を呼び出してどうするつもりだよ？」

メカ犬の以外過ぎる提案に、俺の頭上にはイメージとして、大量のクエスチョンマークが浮かぶが、どちらにしても、この不利な状況では、何もやらないよりはやった方がましかもしれない。

『早くするんだマスター』

「……分かった」

俺は何をするつもりなのか分からなかったが、メカ犬を信じて皆をタッチノートで呼び出す。

『『『お待たせマスター』』』

暫くすると、呼び出した皆が、俺達の目の前へとやって来た。

日本を越えてやって来たにしては、異常なスピードで来たジェットモードのチェイサーさんに驚きを隠せないが、メカ海が水中を泳いでいない時は、常に飛んでいるという状況にも、結構な衝撃を覚える。

『揃ったな皆！』

一列に並ぶ助っ人達にメカ犬が指示を出す。

『今から皆に、ある特定の物質をこの付近の何処にあるのか、サーチして貰いたい。材質は……』

高らかに言い放ったメカ犬は、俺がサバスチャンから教えてもらった鍵の情報を一から十まで余す事無く伝える。

『了解よん』

『任せてください先輩』

『泥舟に乗ったつもりでいるのだわさ～』

メカ犬からの情報を聞いた彼等は口々に言いながら、四方に散って行く。

ちなみにメカ海のあの言い方では、全く安心出来ずに不安ばかりが扇がれる。

「なあメカ犬。これって……」

『うむ。ワタシ達のサーチ能力を特定の一つの条件に絞って、捜索をしているのだ。自分が使える物を利用出来るのならば、使用人を使っても構わないという条件なのであれば、これもルール違反には含まれないであろう？』

まあ、確かに向こうは事前にルールも把握していた様だし、これぐらいはばれなければ大丈夫と思っても良いかも知れない。

『マスター！先輩！ここから１００ｍ程先に行った、薔薇園の中に、鍵がありましたよ！』

探し始めてから数分と経たない間に、捜索に向かっていたメカ竜が、

鍵を咥えて持ってきた。

俺はその鍵を受け取り、サバスチャンが言っていた情報と一致しているかどうかを確認する。

「うん！これで間違い無い筈だ！」

全ての情報が一致した事を確認した事を確認した後、俺達が宝物庫へ向かおうとしたその時である。

二人の男性が俺達の前へと立ちはだかった。

その男性の顔は良く覚えている。

何せ少し前まで、隣に並んでいた婿候補の二人だったからだ。

『やはり来たな。マスター！』

「ああ、予想はしてたけど、思ったよりも早く本性を見せてきたみたいだ。意外と向こうは焦ってるのかもな？」

俺はメカ犬と会話を交わしながら、婿候補達の動きに注意する。

婿候補の二人は突如として、叫びだしその姿を黒い光を発しながら、異形の存在へと変えていく。

黒い光が飛散すると、赤い表皮のカブトムシに似たホルダーに、青い表皮のクワガタを模したホルダーが目の前に並び立つ。

「やっぱり、メカ犬の言う通りだったか……」

この二人が最近になって、人魚の入江に頻繁に出入りしていた事は、ここ一週間メカ犬が入江近くに住んでいる動物達から集めた情報で知っていた。

彼等が首謀者かどうかは置いておくとしても、全くの無関係と考えるのは難しい。

流石にそれだけでは、確信まで持つ事が出来なかったが、彼等から仕掛けてきてくれるとは、こっちにとっては好都合である。

『マスター！』

「ああ！」

俺はメカ犬の掛け声に答えながら、タッチノートを取り出し開き、ボタンを押す。

『バックルモード』

流れる音声と同時に、メカ犬がベルトに変形して、俺の腹部に巻きつく。

「変身」

音声キーワードを入力して、素早くタッチノートを、ベルト中央の溝へと差し込む。

『アップロード』

俺の全身は白銀の光に包み込まれて、その姿を一人の戦士に変える。
シードへの変身を完了させるのとほぼ同時に、二体のホルダーが攻撃を仕掛けて来た。

『来るぞマスター！』

メカ犬の注意を聴きながら、俺はクワガタ型のホルダーが振るう拳を右に手を添えながら軌道をずらして、回避して、後方から追撃しようとしているもう一体のカブトムシ型のホルダーに対して、逆に此方から拳を専攻して叩き込む。

拳を叩き込む事で、カブトムシ型ホルダーを後ろに下がらせた俺は、そのまま軽く腰を捻りながら回し蹴りを繰り出して、真後ろにいるクワガタ型ホルダーにも攻撃を喰らわせる。

接近戦が不利だと判断したのか、二体のホルダーは、一旦俺から距離を離すと、二体して空中に手を翳し、その腕から黒い光を稲妻の様に発生させた。

「あれって！？」

その次の瞬間、二体のホルダーの腕には其々に、カブトムシ型ホルダーには、全体が銀の西洋剣が、クワガタ型ホルダーの方には同じデザインの西洋風な槍が握られていた。

しかもホルダーが生成した武器からは、何かパチパチと発電現象が発生している。

『避けろマスター！？』

咄嗟に聞こえたメカ犬の声に、俺は考えるよりも早く、今居る地点から、右横に側転する。

その直後に二体のホルダーが、その手に握る武器を振り切ると同時に、黒い稲妻が先程まで俺の居た場所に猛威を振るう。

黒い稲妻が薙いだ場所を見れば、其処は無残にも黒焦げた大地が広がっていた。

もしもまともに喰らっていたならば、ただでは済まなさそうな威力である。

『次が来るぞ！』

その光景に旋律を覚える間も無く、ホルダー達の次なる攻撃が、襲い掛かる。

「く！？」

俺はメカ犬の声に再び反応して、回避行動を取りながら、ベルトの右腰をスライドさせて、緑のボタンを押す。

『スピードフォルム』

メタルブラックからライトグリーンにボディーの色を染め上げながら、飛躍的に上昇して素早さを駆使して、ホルダー達が放つ連続攻撃を回避し続ける。

『あの稲妻は厄介だな』

「ああ……こうなったらスピード・ガイアで『ここはアタイに任せるだわさ～』ウミちゃん！？」

前回同様に、戦闘中の緊張感を崩壊させる独特な喋り方で、空中から俺の手元へとメカ海がやって来た。

『ちょっと！ここはボクの出番ですよ！！！』

『うっさいだわさ～』

突然の乱入に、傍に居たメカ竜が抗議を申し立てるが、その言葉はメカ海のドルフィンキックで、文字通り一蹴されてしまう。

『……誰でも良いから、早くしてくれ』

メカ犬がその光景に対して、諦めがちな催促を試みる。

俺も今は攻撃を避けるのに精一杯なので、出来れば早くして欲しい。

『はいは～い！アタイに決まったんだわさ～』

どうやら決まったらしく、メカ海が声高らかに宣言する。

その少し後ろで、メカ竜のすすり泣く声が聞こえた気もするが、残念な事に今の俺にはそれを確認するだけの余裕が無い。

「良し！」

俺はその声を聞きながら、ベルトの右側をスライドさせて黄色いボ

タンを押す。

『スピードロッド』

生成されるスピードフィルムの専用武器である、スピードロッドを握り締めて、ホルダーの稲妻攻撃を避けた次の瞬間を狙って、ロッドを振り被る。

「飛んでけえええええ！！！」

俺の掛け声と同時に投げ放たれたロッドは横に回転しながら飛んで行き、ホルダー達に直撃する事で、僅かだが隙を作り出す事に成功した。

『今だマスター！』

「ＯＫ！」

メカ犬の合図で俺はタッチノートを引き抜いて操作する。

『スタンディングモード』

タッチノートから流れる音声と共に、此方に飛んでくるメカ海が、アタッチメントパーツに変形して俺の手の中に納まった。

俺はそのままベルトの左側をスライドさせて、アタッチメントパーツに変形した、メカ海を装填する。

『スピード・ダイバー』

俺の周囲に展開されたメタルブルーの強化装甲が、ライトグリーンのボディーへと装着されていくのだが……

「……お、重い」

身体全体が、パワーフォルムの比じゃない程に重いのだ。

それこそ、ただ動くのにも支障が出る程に……

『それは当然だわさ～。だってアタイは元々水中戦専用に設計されているのだから、地上ではこんなものなのだわさ～』

『だからボクの出番だと言ったのに……』

「分かってるなら、やる前に言ってくれよ！？」

上手く動けない身体に四苦八苦しながらも、俺はメカ竜とメカ海の会話に、渾身の突っ込みを叩き込む。

『ふざけている場合じゃないぞマスター！』

其処にメカ犬からの焦りが混じる声が聞こえる。

前を見やれば、ホルダー達が攻撃準備を整えて、例の黒い雷撃を放とうとしていた。

避けようにも、今からでは到底間に合わないだろう。

「く！？」

俺は回避を諦めて、防御する為に身を竦めるのと同時に、ホルダー達が放った黒い雷撃が衝突する。

「……あれ？」

確かに直撃したのだが、少しだけ痺れただけで、思っていた程のダメージが無かったのだ。

『アタイの防御力を舐めてもらっちゃあ困るんだわさ～。深海の水圧にだって耐えられるんだから、この位は朝飯前だわさ～』

驚く俺にメカ海が誇らしげに説明してくるが、改めて突っ込んでおこう。

「だから先に説明してくれよ！」

『そんな些細な事は気にしないで、今度はこっちから行くんだわさ～』

しかし俺の突っ込みを華麗にスルーしながら、メカ海は俺に戦う様に促してくる。

他にもまだ色々と突っ込みたいところではあるが、確かに言っている事は正論なので、俺はメカ海への突っ込みを切り上げて、目の前の戦いに意識を集中させて、次なる手を打つべく、行動に移す。

俺は左腰に装填されているメカ海の、アタッチメントパーツのレバー部分下に、設けられているボタンを押した。

『スピードアンカー』

メカ竜の時と同じ位置に置かれたボタンを押す事で、俺の両腕の甲に、フック状になった突起が先端に付いており、その先には長いチェーンが繋がっている一風変わった武器が生成される。

最も近い形状を一つだけ挙げるとするならば、船の碇が一番近いだろうか。

「はあああ！！！」

俺は右腕側のスピードアンカーを勢い良く振り回しながら、フックの部分をホルダー達に投擲した。

先程の雷撃を受けて、無傷でいた俺に驚愕していたホルダー達だったが、逸早く俺の反撃に気づいたカブトムシ型のホルダーが、そのフックを剣で薙いで軌道を変えてしまう。

しかし俺が手元から微調整を行う事で、フックは弧を描きながら、二体のホルダーを囲む様に旋回していく。

「今だ！」

飛ばした先端のフックに取り付けられたチェーンが、完全に二体のホルダーを囲んだ事を確認した俺は、タイミングを見計らいながら、思い切り引っ張る。

その動作によって、急速にホルダーを囲んでいたチェーンの幅が狭まり、二体のホルダーを捕縛する。

『このまま行っちゃうだわさ～』

メカ海の声に頷きながら俺は、アタッチメントパーツのレバーを引く。

『マックスチャージ』

音声が鳴り響くと同時にベルトから発生した光が、銀のラインを伝い、左腕側のスピードアンカーへと集約される。

「こいつで決めるぜ」

俺は右側に捕縛した二体のホルダーを、力任せに上空に放り投げてから、成す術無く宙を舞う所に狙いを定めて、光り輝くスピードアンカーを振り回しながら全力で投げ込む。

「ダイバーウィップショット」

投げ込まれたアンカーは身動きの出来ないホルダーを見事に捉えて、大きな爆発を引き起こす。

爆発した地点に気絶した二人の婿候補を確認した俺は、一度大きく吸い込んだ息を吐き出してから、一言だけ呟く。

「後はあれを持って行って……エミリーちゃんの悪夢を終わらせる」

俺は本来の目的である宝物庫を目指して、変身を解いて歩き始めた。

「純に救われたのはこれで二回目じゃな」

パーティーがあった次の日の正午、シルバーライト島内の空港で、エミリーちゃんが俺に感謝の言葉を述べた。

「いや、俺が出来た事なんて結局は全部の話を無かった事にしただけで、最終的には何の解決にもなってない様な気もするし……」

「それで良いのじゃ。ここから先は他人の力を借りずに、己の力で切り開いてみせなければならぬからのう」

「エミリーちゃん……」

結果から言えばエミリーちゃんの婿を決めるという話は、全て白紙に戻った。

それというのも……

「おかげで俺も、今回は仕事がやりやすかったよ」

エミリーちゃんの隣で朗らかに笑顔を浮かべる一人の青年、Tさんの活躍の賜物と言えるであろう。

何故Tさんがここに居るのか。

それを説明するには、話が一週間前に遡る。

俺とTさんが再会したのはエミリーちゃんが俺の部屋を訪ねて来た翌日の夕方の事だった。

ここでTさんとまさかの再会をしただけでも驚きだというのに、情報収集に行くと言って、夜の森に入っていった筈のメカ犬と、一緒にやって来たものだったから、二重の意味で驚きだ。

だが二重の驚きだと思っていたそれには、更にもう一段仕掛けが施されている、三重の驚きだったのである。

それはTさんの口から語られた衝撃の事実だった。

なんとガルドには、同じ出身の仲間が居たというのである。

しかもその正体が、最初に俺を城内の部屋に案内してくれた執事の青年だというのだ。

Tさんが言うには、その青年はガルドがこの国に来る前から、この場所に潜伏していたらしく、ガルドが頭角を現した辺りから、裏で独自に接触して、助手の様な役割を担っていたそうなのである。

ガルドから押収した大量のデータを解析するのにTさんが所属する組織が手こずったそうで、最近になってあの時の事件に、黒澤さん以外の個人的な意思を持ちながら協力する存在に気づいたそうだ。

そこで調査と捕縛を目的として、ここでの潜伏調査を経験しているTさんが、抜擢されてやって来たらしい。

メカ犬と出会ったのは、Tさんが組織で解析されたデータを基に研究施設を探していたのと、入江付近で情報収集を行っていたという一人と一匹とも近い場所で行動をしていた為だろう。

そして久しぶりの再会を果たした俺達は、お互いの情報を交換して、共同で一つの作戦立案して実行に移す事にした。

それというのも今回のエミリーちゃんの婿を決める為のパーティーは、その執事が裏で企てていた可能性が出てきたからである。

メカ犬の情報によれば、俺以外の二人の婚約者が、人魚の入江に頻繁に出入りしていたという事と、Tさんの見立てによれば、その二人が以前この国の重鎮達に掛けられていた催眠と同じ状態にあると判断した為だ。

恐らくはガルドがやろうとした、この国の乗っ取りを、自分が表舞台に出る事無く達成しようと企てたのだろう。

そこで俺達はこの黒幕である、執事の青年を炙り出す事にしたのである。

作戦は至ってシンプルだ。

まずは俺が普通にこのイベントに参加して場を掻き乱す。

まあ、その前に向こうから、勝手に焦って妨害しに来てくれたおかげで、その部分は実行に移す必要も無かったが……

でもそれだけじゃあ、相手は表舞台に出てくる事は無いだろう。

だから俺達は、餌を撒く事にした。

その内容はTさんに全て任せていたのだが、どうやら例のマーメイドブルーについて、何かの嘘情報をイベント内容が告知された後すぐに、特別な手法で流したそうだ。

専門的な用語が多くて、その辺りは良く理解出来なかったが、確かロストロギアが何とかと言っていた気がする。

まあ、其処で俺が会場にマーメイドブルーを持ってきた事により、まんまと誘き出された執事を、Tさんが捕縛した事で、今回の騒動は一応の解決をみせたのだ。

その後は俺とTさん。

それにサバスチャンに恵理さんと、エミリーちゃんで事の顛末を王様を初めとする上層部に、説明した。

全てを話せる訳ではないので、概要部分を話すだけに留まったのだが、以前のガルドの件と今回の事に加えて、全てが仕組まれていた罠だと理解した彼等は、事実上エミリーちゃんの婿を探す事を断念してくれた。

確かに将来を見据える事も大切だが、今に目を向けなければ本当に大切な何かが零れ落ちてしまう事もあるかもしれない。

この選択が後にどういう結末を招くのかは、俺の知る由もないが、

俺が出来る事は全てやって、この婿騒動は一応無事に解決したのだ。
今はその事実だけで充分だろう。
特別に許可を取ってまで、見送りに来てくれたエミリーちゃんに其々に別れを告げてから、俺達は日本行きの飛行機に乗り込んだ。
俺達が飛行機が離陸してから、二時間ほどが経過して、隣に座っていたなのはちゃんが、静かに寝息を立て始めた頃。
『マスター』
俺の座席の隅に置物の様に座り続けていたメカ犬が話しかけてきた。
「何だよメカ犬」
『うむ。実はエミリー嬢から言伝(ことづて)を頼まれていたのでな』
「言伝？」
鸚鵡返しに聞き返した俺に対して、メカ犬が話を続ける。
『【三学期を楽しみにしておるのじゃぞ】だそうだ』
「何だよそれ？」
この数週間後。
俺はこの言葉の本当の意味を知る事になるのだが、それはまた別の話である。

取り敢えず今日の海鳴がどうなっているのか分からないが、シルバーライト島はそれなりに平和だ。

## 第２１話　姫を守るはナイトの務め【後編】（後書き）

コラボ先の件ですが沢山のご要望をありがとうございますね。

コラボ先は正式に決定し次第にご連絡致しますので。

# 第２２話　新年・元旦・初バトル【前編】（前書き）

どうもお久しぶりです。

一週間以上も間を空けてしまい申し訳ありませんでした。

最近は休みが取れなかったというのもあるのですが、少し私の中で執筆意欲が減退する事が起こり、予定よりも更新が遅れてしまいました。

それとコラボの件ですが、現在検討中ですので、もう少々お待ちくださいね。

それでは今回も楽しんでいただけたら幸いです。

# 第２２話　新年・元旦・初バトル【前編】

「明けましておめでとうございます」

早朝の板橋家、起き抜けにリビングにやって来た俺は、先に起床してリビングに来ていた父さんと母さん、そしてメカ犬に深々とお辞儀をしながら、新年の挨拶をした。

最近は妙に疲れが溜まっていた上に、慣れない飛行機に乗った為だろうか。

今朝は俺が一番遅い起床となった。

クリスマスの当日にシルバーライト島に旅立ってから一週間。

何とか年が明ける直前に海鳴市に戻る事が出来た俺は、どうにか無事に、家族と正月を迎える事が出来た。

「明けましておめでとう。純」

俺の新年の挨拶に、父さんが読んでいた新聞から目線を上げて返事を返す。

「おはよう純。明けましておめでとう。もうすぐお雑煮が出来るから、座って待っててね」

続いてキッチンからは、醤油ベースの、何とも食欲を掻き立てる香りと共に、母さんの声が聞こえてくる。

俺は分かったと一言返事を返してから、父さんの向かい側の椅子に腰を下ろした。

『明けましておめでとうマスター』

最後に父さんが読んでいる新聞に挟まっていた、正月特有の大量のチラシを読んでいたメカ犬が、俺に声を掛ける。

その横にはゴールドメッキの塗装がされた乾電池が二本置いてあった。

どうやら今日のメカ犬の朝食も、特別正月仕様らしい。

「ああ、今年も宜しくな」

年が明けても相変わらずマイペース相棒と、言葉を交わしてから暫くして、お雑煮を完成させた母さんが、俺とメカ犬を呼んできたので、一緒に食卓の準備を整えた後、板橋家の年が明けて最初の朝食が幕を開けた。

「そう言えば純。今年の初詣はどうする？」

カツオの出汁と醤油の風味に彩られたお雑煮の餅に舌鼓を打ちながら、俺がこれぞ日本の正月だと実感していたところで、父さんが話しかけてきた。

喉を詰まらせない様に、充分に租借してから、口の中の餅を飲み込んだ俺は、父さんの質問に答える為に口を開く。

「今年はなのはちゃん達と約束してるから、何時もの神社まで行っ

たら、父さん達とは別行動をするよ」

昨日の帰りの飛行機の中で、なのはちゃん達と話し合って決めた事なのだが、皆で時間帯を合わせて同じ神社に初詣に行く事を計画したのである。

家に帰ってから寝る前に、一応は父さん達にも説明はしておいたので、先程の質問は確認の為に聞いてきたのであろう。

板橋家と高町家は毎年お正月の初詣には、海鳴市内にある八束神社という場所に行くので、そこで集合する事になっている。

他の三人もそれで問題無いと言っていたので、時間に遅れなければ大丈夫な筈だ。

初詣は人も多いので、時間も掛かるだろう事も考慮して、大体朝の九時半から、十一時頃までを予定している。

周辺には結構な数の出店も出ている筈なので、そのお店を回る時間も考慮した上だ。

「それじゃあ、純にはこれをあげるわね」

今日のこれからの予定を、俺が脳内で思い出していると、父さんに続き母さんがそう言いながら、小さな封筒を俺に渡してくる。

「もう純も小学生だからね。心配はしてないけど、無駄遣いしない様にね」

俺が手渡された封筒の正体。

それは所謂お年玉というものだった。

今更ではあるが、転生してからこれまで、お年玉を貰った事が無かったので、恥ずかしながら俺は、その存在をすっかり忘れてしまっていたのである。

それに加えて、去年のゴールデンウィークが明けた辺りから、何かと忙しい日々を送っていた事もあり、余計に自分自身から離れていた習慣に対して、意識が向かっていなかったのだろう。

「ありがとう大切に使うよ。父さん。母さん」

俺は貰ったお年玉を、上着のポケットに入れながら、感謝の言葉を述べた。

ちなみに後で確認したら、新作のゲームソフトが一本買える程の、小学一年生にしては、かなりの金額が入っていた。

海鳴警察署の一室、ホルダー対策特務課で、一見すると場違いなセーラー服に身を包んだ少女だが、実はこの部署で最も高い地位の特別顧問を務める、風間恵美が一枚のＢ５サイズのコピー用紙に書かれた内容を確認していた。

「これで三日連続の犯行ね……」

書かれていた文章を読み終えた恵美は、苦々しい表情で呟いく。

「そうですね」

その隣ではもう一人の特務課勤務である長谷川が、恵美と同じ文面の書かれたコピー用紙に視線を合わせながら答えた。

今二人が見ている用紙はここ数日で連続して発生している、ホルダーが原因だと思われる事件の報告書である。

報告書に書かれている内容はこういったものだ。

海鳴市には幾つかの神社が存在しているのだが、その神社で樹齢数百年にも及ぶと言われている大木が、次々と薙ぎ倒されているのである。

その犯人の外的特徴は目撃情報によると、どれもが人外の怪物。

しかも薙ぎ倒した後はすぐに何処かに走り去ってしまうというので、警察側も対処が追いつかないでいた。

警察はこの目撃証言と現場の検証を経て、この一連の事件をホルダー対策特務課に持ってきたのである。

「しかしこのホルダーは、何で神社の大きな木だけを狙って倒しているんですかね？」

「それは私が聞きたいわよ。でもこの報告書を読んでみて、気づいた事が一つだけあるわ」

長谷川の疑問に対して、報告書を読み終えた恵美は、その手に持っていた報告書を机に投げ放つと、壁に貼り付けられた大きく拡大コピーされた海鳴市の地図の目の前まで歩いて行き、スカートから一本のマジックペンを取り出して、要所に書き込んでいく。

「……これって大木が折られた神社の場所ですか？」

恵美が全ての書き込みを終えた後、長谷川が印の書き込まれた地点を見ながら言う。

「ええ、その通りよ。そしてこの犯行にはある法則性があるのよ」

長谷川の言葉に恵美は頷きながら、更に印と印を線で繋ぐ。

「もしかしてこの犯行は……」

その線は海鳴市の外れから中心地に向けて、若干の偏りはあるものの、ほぼ一直線で伸び続けている。

「そしてこの犯行は、三日連続で起こっている。もし今日も同じようにホルダーが犯行に及ぶとするなら……」

恵美は新たに一つの印を地図に書き込んだ。

「次に狙われるとしたら、この神社の可能性が高いわね」

地図に新たに書き込まれた印の場所には、八束神社と記されていた。

「「「「明けましておめでとうございます」」」」

八束神社で合流した俺達は、改めて新年の挨拶を交わした。

「それにしても、皆は気合が入ってるね」

俺は新年の挨拶を交わした後に、改めてなのはちゃん達を眺めて、その皆の艶やかな振袖姿に正直な感想を零す。

既に去年からなのはちゃん達は振袖の準備をしていたのか、全員が同じデザインの色違いを着ている。

デザインは梅ノ木と中々に渋いチョイスではあるが、上手く若者向けにアレンジされており、なのはちゃん達が着ていても何ら違和感は無い。

なのはちゃんは桃色、すずかちゃんは群青色に、アリサちゃんは明るい黄色と、最後にはやてちゃんが緑色の振袖である。

何か皆して回りとは明らかに違う、凄まじいまでのオーラを放っていた。

ちなみに俺は特に代わり映えしない私服の上に防寒の為、厚手のジャンバーを羽織っているだけである。

傍から見れば、俺はなのはちゃん達の連れに見える事は無いだろう。

良くて通行人Aがのエキストラが妥当だなと思う……

そう考えたところで多少の虚しさを覚えるが、それが現実なのだから仕方が無い。

こんな考えをするのも今更だ。

『マスター』

「何だよメカ犬」

皆から振袖姿の感想を求められて、その返答をしていたら、足元のメカ犬が話しかけてきた。

『先日までのエミリー嬢の事もあるのだが、マスターは誰が本命な

のだ？』

「ん、誰が本命って、何の話だよ突然？」

いきなり訳の分からない質問をしてきたメカ犬に、俺は更に質問で返答する。

『……いや、分からないなら良い。だがマスター。何時か決断しなければいけない日が来るという事だけは、その胸に留めて置いてくれ』

「はあ？」

しかしメカ犬は更に意味不明な発言を俺にした後、この話題を終わらせてしまう。

俺はどういう意味で言ったのか、メカ犬に追求しようとしたのだが、人込みの中で離れてはいけないと、なのはちゃん達に両腕を掴まれて引き摺られて、参拝へと向かう事になった。

その後無事に参拝も終わり、帰る時間までの間、皆で出店巡りをしていた時である。

『キンキュウケイホウキンキュウケイホウキンキュウケイホウ……』

人込みの雑踏に混じりながらも、俺のズボンのポケットに忍ばせたタッチノートから警報が鳴り響く。

『マスター。この神社内にホルダー反応だ』

俺がそれに気づくのとほぼ同時に、足元に居たメカ犬が、俺だけに聞こえる音量で話しかけてくる。

というかこの神社内にホルダーって、かなり近いな。

「どの辺りか分かるか」

俺も出店の金魚すくいに夢中となっている、なのはちゃん達に聞こえない様に、出来るだけ小声で話す。

『ここから北に約４００mだ。急ぐぞマスター！』

「ああ！」

「どうしたんや純君？」

メカ犬との会話を交わして、俺がこの場から走り去ろうとした直前に、はやてちゃんが車椅子を移動させながら此方にやって来た。

「な、何でも無いよ。ちょっとメカ犬と話してただけだからさ」

俺は出来るだけ自然に、取り繕いながら何でも無いと、はやてちゃんにアピールする。

「ふ～ん。何や怪しいなあ……」

しかし俺の演技力では、到底納得させる事は出来ず、はやてちゃんは悪戯する時に良く見せる小悪魔チックな笑顔で此方を見た。

このままでは不味いと、半ば本能的に感じた俺は、この場を逃れる

為に、あまり使いたくは無かったが、確実に成功する手段を用いる事にした。

「実はちょっとお腹の調子が良くなくてさ。メカ犬にトイレの混み具合がどうなってるか聞いてたんだよ」

「な！？」

はやてちゃんは俺の言葉を聞いて、一瞬驚いた後に頬を少しだけ赤らめながら俯いてしまう。

「な、何や。それなら私達の事は良いから、早くトイレに行って来た方がええよ」

続いてはやてちゃんは早口でそう捲くし立てると、金魚すくいをしているなのはちゃん達の元に、逃げる様に車椅子を移動させた。

はやてちゃん相手だと、この手段が成功するかはちょっとした賭けだったが、どうやら成功した様である。

他の三人なら、絶対に恥ずかしがると確信していたが、はやてちゃんだけはこういうネタで、恥ずかしがるかは分からなかったからな。

「それじゃあ急ぐぞメカ犬！」

『うむ！』

後ではやてちゃんに何かフォローを入れておかなければ、と考えつつ俺はメカ犬と共に、ホルダー反応が出た地点を目指して、初詣に来た人達の雑踏を掻き分けながら、走り出した。

「な、何だ!?」

ホルダー反応が出た地点に近づいた所で、轟音が辺りに響き渡る。

『あれが原因だマスター』

轟音に驚く俺に対して、メカ犬が冷静に言い放つと、前を見る様に俺を促す。

メカ犬の言う通りに、前方に視線を向けると、其処には異形の存在が居た。

その異形は一番近い表現をするのであれば、罷に特徴が酷似している。

こげ茶色のゴワゴワとした、全身を覆う体毛に、手には短いが鋭そうな鍵詰め。

更に首から下の胴回りには、西洋の甲冑を思わせる銀色のプレートが身体の一部かと思われる程に張り付いている。

タッチノートの反応を見ても分かる通り、あれがホルダーで間違い無いだろう。

「……それで、あのホルダーは何をやってるんだ？」

ホルダーは俺達が来た事にも気づかず、恐らくこの八束神社で御神木とされているであろう、樹齢数百年に及ぶ大木に、一心不乱に張り手を繰り出している。

先程の轟音の正体は、この張り手だったのは言うまでも無い。

『何をしようとしているのかは分からないが、被害が出る前に止めるぞマスター』

「ああ、そうだな」

確かに今は、人気の少ない場所で、罰当たりな張り手の稽古をしているだけに見えるホルダーだが、元旦で参拝客が多いこの場所で、何時大きな被害を出すか、分かったものじゃない。

俺はメカ犬の言葉に頷きながら、タッチノートを開き、ボタンを押す。

『バックルモード』

音声が流れると同時に、俺の隣に居たメカ犬がベルトに変形して、俺の腹部に巻きつく。

「変身」

俺は音声キーワードを入力して、素早くタッチノートをベルトの溝に差し込む。

『アップロード』

白銀の光が俺の全身を包み込み、その姿を戦う戦士へと変えていく。

光が飛散して現れたその姿は、メタルブラックのボディーに、ベルトから四肢へと伸びる銀のラインと、額に輝くV字型の角飾り。

そして赤い二つの眼球が、凄まじい存在感を放つ。

「はあああああ！！！」

シードへの変身を完了させた俺は、飛躍的に強化された脚力で、一気にホルダーへ肉薄して拳を叩き込む。

繰り出した俺の拳は、見事にホルダーの左頬を捉えて、先程まで張り手を続けていた大木から、多少なりとも引き剥がす事に成功した。

「がああああああああああああああ！！！！！！！！！」

俺という乱入者に邪魔されたのが、気に食わなかったのか、ホルダーは雄たけびを上げながら、標的を大木から俺に変えて、突進して来る。

『来るぞマスター！』

「分かってる」

メカ犬の指摘に俺は短く返事を返しながら、ホルダーの突進をぶつかる直前に側転する事で避ける。

本来は俺に当たる筈だったホルダーの突進は、その進行方向上に鎮座していた大岩にぶつかり、跡形も無く粉砕されてしまう。

『あの攻撃はまともに受けると不味いぞマスター』

「……みたいだな」

一歩間違えば、先程の突進が俺にぶつかっていたのだと思うと、背筋に寒気が走る。

「があああああああああああ！！！！！！！！！！！！！」

粉砕する為の攻撃が、本来の目標に届かなかった事が悔しかったのか、ホルダーは再び雄たけびを上げて、俺に突進して来る。

その突進に対して、俺が再び身構えると、突進して来るホルダーの全身に突如として銃撃が連続で撃ち込まれて、火花を上げながら、バランスを崩して倒れてしまう。

銃撃が飛んできた方向の先に、俺が視線を向けると、メタルイエローのボディーに青い複眼を持つ、この海鳴市のもう一人の仮面ライダーであるＥ２が、専用の銃を倒れているホルダーに標準を合わせながら、此方に向かって走って来るのが見えた。

「やっぱり恵美さんの言う通り、ホルダーはここを狙って来たか」

E2は俺の横に辿り着くと、未だに倒れているホルダーを見ながら呟く。

その言い方から恵美さんがどうやってか、このホルダーの行動を予測して長谷川さんを近くに来させていた事が分かった。

それがどんな方法だったのか個人的にとても気になるが、今は素直に強力な増援が来た事に感謝である。

並び立つ俺とE2に対して、漸く立ち上がったホルダーが三度目の雄たけびを上げて、此方に突進して来るのを、俺とE2は左右に側転する事で避けつつ、俺はベルトの右側をスライドさせて、青いボタンと黄色いボタンを押す。

『サーチフォルム』

『サーチバレット』

メタルブラックからスカイブルーへと、自身のボディーカラーを染め上げ、新たに生成したサーチフォルムの専用武器であるサーチバレットを右手に握り込む。

「「は！」」

俺とE2は同時に其々が持つ銃の標準をホルダーの背中に合わせて、容赦無く引き金を引く。

同時に放たれる青い光弾と白い光を纏った弾丸が、ホルダーの背中

で弾けて火花を散らす。

『今だマスター！』

メカ犬が今がホルダーを倒す勝機と見て、俺に指示を出す。

俺がその言葉に頷き、タッチノートをベルトから引き抜こうとしたところで、予想外の事態が発生する。

「ぎあああああああああああああ！！！！！！！！！！」

突如として俺とE2の死角から、目の前でダメージを受けているホルダーとは色違いの黒い体毛を持ったホルダーが凄まじい勢いで、俺達に突進して来たのである。

「がっ！？」

「ぐっ！？」

突然の出来事に対処が追い着かなかった俺達は、その突進をまともに喰らってしまい、後方に吹き飛ばされてしまう。

『大丈夫かマスター！？』

「……ああ、何とかな」

ベルトから聞こえる、俺を心配するメカ犬の声に対して、俺は全身に伝わる痛みに耐えながらも、なるべく元気そうに答えて、立ち上がる。

その隣ではＥ２も大丈夫だと言いながら、立ち上がろうとしていた。

恐らくは通信機越しに、恵美さんと連絡を取り合っているのだろう。

多大なダメージを受けながらも、俺とＥ２は立ち上がり、目の前に居る色違いの二体のホルダーを見据えた。

先程とは逆に、此方が攻める番だと主張するかの如く、ホルダー達はゆっくりと此方に歩き始める。

未だに二人とも先程の突進のダメージが抜け切らず、自由に動けないこの状態で、もう一度先程の攻撃を受ければ本気で不味いかもしれない。

一歩ずつゆっくりとだが、確実に近づいてくる確かな危機をどうやって乗り切るべきか、俺が必死に思考を巡らしていると、再び唐突として乱入者がその姿を現す。

何やら黒い塊が二体のホルダーに、猛スピードで突っ込み、吹き飛ばしてしまったのである。

『うふふ。アタシの十八番を奪うなんて十年早いのよ』

その黒い塊の正体は、乙女口調なオッサンボイスが特徴的な、新宿二丁目系ライダーバイクのチェイサーさんだった。

どうして呼んでもいないのに、チェイサーさんがタイミング良く駆けつけたのか聞こうとしたところ、俺はチェイサーさんの座席の上にもう一人の乱入者が居た事に気づく。

それはメタルブルーに輝く手のリサイズなイルカ型ロボットのメカ海。

通称ウミちゃんである。

『ありがとうだわさサッちゃん。ここまで運んでくれて』

『あら、良いのよ御礼なんて。アタシとウミちゃんの仲じゃない』

何やら仲良さげに話している二人?の様子を見て、俺はこの場の戦いの緊張感が一気に削がれていくのを感じてしまう。

「……何でここに居るんですか?チェイサーさん」

結果的には助かったので、あまり追求する気は無いが、俺は取り敢えず理由を聞いておく事にした。

『あらマスター。居たのね』

チェイサーさんは、今やっと俺の存在に気づいた様に、此方にヘッドライトを向ける。

その言い方からして、俺達のピンチを知って駆けつけてくれた訳では無いらしい。

『あ!マスターなのだわさ。ちょうど良かったんだわさ』

チェイサーさんに続いてメカ海が、俺に気づくと、嬉々として話し始める。

『サッちゃんに頼んで、ここまで連れて来てもらっただけど、人が多すぎてお守りの売ってる場所が分からなかったんだわさ』

メカ海はそう言ってから俺に案内しろと言ってきた。

最早正月初日に何処から突っ込んで良いのか、俺は頭痛を起こす程に頭を悩ませたが、取り敢えずこの一言だけは言っておく。

「……取り敢えずあれをどうにかしてからな」

そう言って俺が視線を向けた先に居るのは、二体のホルダーである。

突然の出来事に、忘れている人も居るかもしれないが、今は本来緊張感が漂う戦闘中なのだ……

## 第２２話　新年・元旦・初バトル【前編】（後書き）

コラボ先の発表は恐らく次回か、その次の更新には発表する予定ですので。

## 第２２話　新年・元旦・初バトル【後編】（前書き）

お久しぶりです。

ちょっとゴールデンウィークでお休みが取れたので、一年振りに東京見物に行って来ました。

以前にあるお昼のバラエティー番組で紹介されていた、アフレコ体験が出来るというメイド喫茶に初めて友人達と入って、促されるままにアフレコ体験をしたのは良い思い出です。

ちなみにお土産は、何故か日暮里で買った、限定桃プリンです。

それではあまり関係無いお話をしてしまいましたが、今回も楽しんでいただけたら幸いです。

# 第２２話　新年・元旦・初バトル【後編】

『スタンディングモード』

俺がタッチノートを操作する事で、チェイサーさんの上に鎮座していたメカ海が、飛び上がりながらアタッチメントパーツに変形して、俺の左手の中に納まる。

メカ海を握った俺は、操作していたタッチノートを閉じて、ベルトの溝に戻した後、ベルトの左側をスライドさせて、アタッチメントパーツに変形したメカ海を差し込んだ。

『サーチ・ダイバー』

音声が鳴り響くと同時に、俺の周囲にメタルブルーの装甲が展開して、次々と全身に装着されていく。

重厚な装甲と、全身に取り付けられたスクリューに、パンチンググローブを彷彿とさせる腕部。

後から一度、鏡でこのフォルムの頭部も確認したのだが、赤い複眼はそのままなのだが、全体的に何処かイルカの様な形状になっている事が分かった。

……そして相変わらず非常に重い。

全く動けないという訳ではないが、かなり動きが制限されてしまうのは明らかだ。

「ぎあああああああああああああ！！！！！」

其処へ新たに現れた、黒い体毛のホルダーが俺目掛けて、再び突進を仕掛けてくる。

現状動きがかなり制限されている俺には、その突進を避ける術は無く、真正面からホルダーの突進を受け止めた。

「ぎ、ぎあ！？」

しかし俺は吹き飛ばされる事は無く、代わりに聞こえてきたのは、ホルダーの困惑する声だった。

はっきり言って、デメリットがあるにも関わらず、このフォルムに変形したのはそれなりの意味がある。

確かに本来水中戦に特化したダイバーは、地上戦では著しく動きが鈍くなるのだが、それを覆す程のメリットを、一つ有していのだ。

それは深海の水圧でも、自由に動く事を可能としている防御力である。

「はあ！」

ホルダーの突進を受け止めた俺は、いまだに困惑し続けているホルダーに拳を何度も叩きつけていく。

その合間にもホルダーが、反撃に拳や蹴りを繰り出してくるが、俺は避ける事無く、攻撃に集中する。

このままでは分が悪いと判断したのか、俺と近距離でインファイトを続けていたホルダーが距離を取った。

『マスター。奴は何かを仕掛けてくる気だ』

その様子を見て、メカ犬が俺に注意を促す。

「ああ。分かってるさ」

俺はメカ犬の注意に頷きながら、目の前のホルダーの行動に対して、警戒を強める。

距離を取ったホルダーは、何処から取り出したのか、金属製と思われる、蜂の巣に良く似た形状の物体を俺に向けた。

それを見て何だこれはと、俺は思考を巡らせたのだが、その答えはすぐに身をもって理解する事となる。

「何だよあれ！？」

蜂の巣の形状に良く似た物体には、本物の蜂の巣と同様に、複数の穴が開いていたのだが、その穴から大量の機械で出来た蜂が飛び出してきたのだ。

その総数を数えるには、あまりにも多すぎる機械蜂は、大群で俺に襲い掛かって来る。

「くそ！？」

俺は何とか纏わり付いてくる機械蜂の大群を振り払おうと拳を振る

うが、機械蜂の大群はそれ自体が一つの個体かと思わせる動きを見せて、まるで嘲笑うかの様に、俺の拳を回避していく。

「……これじゃあきりが無いな」

何度攻撃を加えても、全く手応えを感じない相手に対して、俺は焦燥感を覚える。

『マスター。打撃が効かないなら、攻撃手段を変えてみるんだわさ～』

この状況を打開する良いアイデアはないかと、俺が頭を悩ませていると、メカ海が俺に助言してくる。

「攻撃方法を……そうか！」

俺はメカ海の助言に、ある考えが閃き、早速それを行動に移す。

まず俺が最初にした事はベルトの左側にあるアタッチメントパーツのレバー部分下に、設けられているボタンを押す事だった。

『サーチランチャー』

ボタンを押す事により、音声が流れて、俺の両肩にはミサイルポットが生成され、複眼の上には、薄い青のバイザーが装着される。

「一度の攻撃で倒しきれないなら、全部纏めて吹き飛ばす！」

俺は続け様に、ベルトの左に取り付けられているアタッチメントパーツのレバーを引く。

『マックスチャージ』

ベルトから発生した光は両腕のラインを通じて肩まで伸び、両肩のサーチランチャーへと集約される。

それと同時に複眼を覆うバイザーには、幾つもの光る点が浮かびあがってきた。

『ターゲットロック。命中精度補正、全システムオールクリアだわさ～』

メカ海の高い声が普段とは違い、まじめに聞こえてくる。

最後の語尾だけは蛇足だと思うが……

そして俺はその声を合図に、必殺の一撃を放つ。

「ダイバーフルバーニング」

俺の声と同時に、両肩のサーチランチャーから大量の小型ミサイルが発射されて、全ての機械蜂と、ホルダーがその手に持っていた、機械蜂の発生源を捉える。

神社では、大量の小爆発が発生して、それにより周囲は爆煙に包まれた。

少しの間を得て、風に爆煙が流されると、周りには機械蜂の残骸に、その発生源を破壊されて先程の攻撃でダメージを負ったホルダーが立ち上がろうとしていた。

『これで邪魔な蜂は全て倒したぞマスター。後はあのホルダーだけだ！」

「そうだな」

俺はメカ犬の言葉に肯定の言葉を返しながら、この戦いに決着をつけるべく、ベルトの右側をスライドさせて、赤いボタンを押す。

『パワー・ダイバー』

スカイブルーだったサーチフォルムのボディーは、クリムゾンレッドに染め上がり、肩のサーチランチャーはその役目を終えて光に返る事で、俺を新たなフォルムへと変化させる。

パワー・ダイバーになった俺は続けて、ベルトの左側のアタッチメントパーツのレバー下のボタンを押した。

『パワーアックス』

青い掴みに、赤い刃を携えた、巨大な斧が生成されて、俺の右手に握られる。

俺は握り締めたパワーアックスを、立ち上がろうとするホルダーに突きつけながら言い放つ。

「悪夢はここで終わらせる」

そして俺は大地を蹴り、ホルダー目掛けて突進していく。

皮肉な事だが、本来は機動力の一番低い筈であるパワーフォルムが素体となっているダイバーが地上では一番早く動ける様だ。

どうやら力が他のフォルムよりも飛躍的に上がっている分、その補正が掛かっているらしい。

「うおりゃあああ！」

俺は立ち上がったばかりのホルダーに、何度もパワーアックスで斬りかかる。

その一撃が当たる度に、ホルダーからは盛大に火花が発生して、その巨体を何度も仰け反らせた。

『マスター決めるなら今だわさ～』

気の抜けそうな口調で、メカ海が進言する。

俺は何とか脱力する事だけはせずに、ベルトの左側のレバーを引く。

『マックスチャージ』

サーチ・ダイバーと同様に、再びベルトから発生した光が、右腕のラインを通じて、パワーアックスの赤い刃に集約される。

「こいつで決めるぜ」

俺はパワーアックスを両手で握りながら、上段に構えを取る。

最後の力を振り絞ってなのか、今まで以上の素早さで、真正面から

突進を仕掛けてくるホルダーに対して、俺は上段に構えたパワーアックスを、渾身の力で振り下ろす。

「ダイバークラッシュ」

振り下ろされたパワーアックスは、突進してきたホルダーを一刀両断にすると同時に、大きな爆発を引き起こした。

爆発が晴れると、地面には五十台半ばと思われる、立派な髭を蓄えた男性が気絶して倒れていた。

「あれ？この人って何処かで見覚えがある様な……」

俺はホルダーの素体となっていた男性の顔を見て、思い悩んでいると、メカ犬がこのもやもや感を解消させてくれる言葉を言ってくれた。

『見覚えがあるのは当然だろう。彼はこの海鳴市でも有名な炭職人の平田辰樹（ひらたたつき）殿だ。彼は月刊海鳴で、炭のある生活というコーナーを持っている。マスターが見覚えがあるのはその為だろう』

「……ああ」

必要以上に説明的な解説をしてくれたメカ犬のおかげで、俺の胸に痞えていたもやもやが解消した。

しかしそれと同時に、もう一つの謎が浮上してくる。

「でも、平田さんは何で木を切り倒そうとしていたんだろうな？」

『うむ。予測でしかないが、ワタシに一つだけ心当たりがある』

「何だよそれ？」

『マスター。基本的に炭の原料は何だか知っているか』

「唐突に何だよ？そんなの木に決まって……もしかしてそういう事なのか？」

『恐らくな』

俺は改めて気絶している平田さんと、先程ホルダーに倒されそうになっていた大木を交互に見る。

そして一言だけ口にした。

「なんて罰当たりな……」

「ぐっ！？」

Ｅ２は迫り来る茶色い体毛のホルダー突進を、ダメージが残り続ける身体で、何とか避け続けていた。

突如として現れたもう一体の黒い体毛を持つホルダーは、シードが引き受けてくれているので、何とか持ち堪えているが、やはり先程の突進によるダメージが抜け切らず、何度も荒い息を吐き出し続ける。

［「大丈夫！？長谷川君」］

通信機越しからは、恵美のＥ２を心配する声が聞こえてくる。

「はい！今のところは何とか……」

しかし今の所とはというだけであり、Ｅ２装着員である長谷川は、シードとは違い中身はあくまで普通の人間なのである。

Ｅ２自体は大丈夫だったとしても、生身の人間には体力の限界が当然ながら存在するのだ。

先程の不意を突かれた一撃は、その体力を長谷川から著しく奪っていた。

「……こうなったら、一気に決める！」

自身の体力が限界に近い事を自覚したＥ２は勝負を急ぎ、ホルダーの何度目になるか、最早数えてすらいない突進を避けると同時に、左腰からマガジンを抜き放ち、ＥＳＭ０１に装填する。

『ブレイクチャージ』

マガジンを装填した瞬間に、ＥＳＭ０１から機械的な音声が鳴り響く。

「は！」

Ｅ２は音声を聞くと、すぐにＥＳＭ０１の標準をホルダーに向けて引き金を引いた。

射出された黄色い光弾はネット状に広がりながら、ホルダーの動きを阻害する様にして覆い被さる。

それを確認しながら、Ｅ２はＥＳＭ０１を右腰のホルスターに収めた。

するとＥＳＭ０１から黄色い光が、Ｅ２の右足へと流れて行き、集約されていく。

「はあああああああああ！！！！」

Ｅ２は残りの体力を振り絞り、必殺の回し蹴りをホルダーに向けて繰り出す。

しかしここで予想外の出来事が発生した。

何とネット状に広がり、動きを阻害していた黄色い光弾を、ホルダーが自力で引き裂いてしまったのである。

「な！？」

既に回し蹴りを繰り出したＥ２はそれに驚きながらも、今更攻撃を止める事も出来ずに、輝く右足をホルダーにぶつけるが、身体の自由を取り戻したホルダーは両腕で、Ｅ２が繰り出した必殺の一撃を受け止めてしまう。

万全の状態であったのであれば、このまま力で押し切る事が出来たかもしれない。

だが既に、殆どの体力を使い切っていたＥ２にその力は残されておらず、必殺の一撃は無残な事にホルダーに押し返される事で、不発に終わってしまった。

「ぐは！？」

そのまま地面に投げつけられたＥ２から、荒い呼吸と共に、咳き込む声も聞こえてくる。

更にこれを好機と見たホルダーが、何とか立ち上がろうとするＥ２に対して、鋭い爪で容赦無く追撃を仕掛けてくる。

鋭い爪による攻撃で、Ｅ２の装甲からは何度も火花が上がり続けた。

「「長谷川君！急いでこの戦闘から離脱して！これ以上攻撃を受けたら君の命が危ないわよ！」」

通信機からは恵美の焦りを含む声が聞こえて来た。

しかしＥ２は立ち上がり、自身の限界を悟りながらも、まだ戦意を失う事無く、目の前に佇むホルダーに戦う構えを取った。

「……まだです……恵美さん……まだ、引くには早過ぎます……」

E2はそう言いながら腕に装着したEブレスを操作し始める。

すると少し離れた場所からエンジン音が鳴り響き、白と黒のツートンカラーであるE2の専用バイク、マシンドレッサーがE2の目の前に走って来た。

［「遠隔操作でマシンドレッサーを呼んで……まさか長谷川君!?」］

恵美は今からE2が、何をしようとしているのか気づいたらしく、更に声を荒立てる。

「……多分体力的にこの一撃が……限界だと思いますんで……一気に攻めます!」

［「無理は止めなさい!長谷川君!!!」］

しかしE2は荒い息を何度も吐き出しながら、恵美の忠告を無視してEブレスの操作を続けていく。

そしてE2がEブレスに【E・0・3】と入力した事により、マシンドレッサーが劇的な変化を遂げる。

『カタパルトモード』

機械的な音声が流れると同時にマシンドレッサーは、人間一人を飛ばす事が出来るであろう程の大きさを誇る発射台へとその変形を果

たす。

「……行きます！！！」

マシンドレッサーが自身の意図する形態に変わった事を確認したＥ２は、本当に最後に残った全てを力を振り絞り、真っ向からホルダーに接近戦を仕掛ける。

「うをおおおおおおおおおおおおおお！！！」

それを正面から迎え撃つホルダーだったが、Ｅ２の目的は別の所にあった。

ある程度の距離を詰めたＥ２は飛び上がり両足でドロップキックを繰り出す。

しかしそんな大技を真正面から放って、まともにダメージを与えられる程、ホルダーも甘くは無い。

ホルダーは突き出した両腕で、Ｅ２の渾身の一撃を押し返してしまう。

反動により、ホルダーもよろけるが、Ｅ２はそれ以上の勢いで後ろに吹き飛ばされてしまった。

だがそれもＥ２の狙い通りだったのである。

Ｅ２の本来の目的は、ホルダーの動きを一瞬でも足止めする事にあったのだ。

空中に投げ出されたＥ２は再びＥＳＭ０１を抜き放ち、マガジンを再装填する。

『ブレイクチャージ』

動きの止まったホルダーに対して、Ｅ２は再度ＥＳＭ０１の引き金を引き、黄色い光弾をホルダーに命中させた。

バランスを崩しよろけた隙を、ネット状の光弾で捕らえられたホルダーを他所にして、Ｅ２はカタパルトモードに変形したマシンドレッサーの上に、見事に着地した。

そしてＥＳＭ０１を、もう一度右腰のホルスターに収める事により、黄色い光がＥ２の右足へと集約されていく。

「「……こうなったら、私から言う事は一つだけよ！長谷川君！！！必ず勝ちなさい！それでこの事件が片付いたら一緒に初詣よ！！！」」

「はい！」

カタパルトに着地したＥ２に、通信機から恵美の応援する声が聞こえて来た。

Ｅ２はその声に、僅かばかりの元気を貰ったのか、体力の限界が近いとは到底思えない、覇気の篭った返事を返す。

『スリー・ツー・ワン・スタート』

マシンドレッサーから機械的な音声がカウントを開始され、スター

トという言葉が聞こえると同時に、マシンドレッサーの上に乗ったE2が凄まじい勢いで、弾丸の如く射出される。

「うおおおおおおりゃあああああああああああああ！！！！！」

もはや一発の黄色い弾丸と化したE2の蹴りが、ホルダーを捉えて大きな爆発を引き起こした。

爆発した後には、二十台半ばと思われる男性が気絶して倒れていた。

この人の名前は平田虎紀（ひらたとらのり）。

炭職人である平田辰樹の実の息子であり、同時に炭作りの弟子でもある。

「……お、終わった」

ホルダーを倒した事により、緊張の糸が切れたのだろう。

E2はその場で膝を地面に着き、脱力してしまった。

［「お疲れ様……長谷川君」］

そんなE2に通信機越しから、聞こえるかどうかの小さな声で、恵美の労いの言葉が聞こえて来た。

「サルも木から落ちる」

「貰った！！！」

「甘いでアリサちゃん！私の腕前を見せたるわ！！！」

ホルダーが出てきて一騒動あったものの、何とか無事に初詣を終わらせた俺達は、現在何故か皆で俺の家に集まり、カルタ大会を開催していた。

読み手は母さんがしてくれているので、参加者は何時もの仲良し美少女四人組プラス俺である。

特に勝負事となった為なのか、アリサちゃんが一番にヒートアップして、それに続く様にして、はやてちゃんもテンションを上げていた。

ちなみにメカ犬はまだ八束神社に居る。

何でも折角の正月なのだから、あの場に居なかったメカ竜も呼んで、彼等独自の親睦会を兼ねた初詣を執り行うのだそうだ。

俺も一応は誘われたのだが、丁重にお断りさせてもらった。

ただでさえホルダーと戦った直後で疲れているというのに、新年早々に想像するまでも無く、精神が磨り減らされそうな行事に参加したいと思う属性は俺には無い。

取り敢えず神社の神主さん達や、他の参拝客に迷惑を掛けるなと、釘は刺しておいたのだが、最近メンバーに加入したメカ海辺りが、何かを仕出かしそうで、結構な不安が残るのだが、折角の正月なので、俺はあまり深く考え込まない様にして、皆とのんびりカルタ大会を続行する事にした。

「これはこれで面白いんやけど、何か物足りへんわ～」

先程アリサちゃんとの激闘の果てに、見事カードの奪取に成功したはやてちゃんが、カードを指で弾きながら、不満を口にした。

「そうかな？今のままでも面白いと思うけど」

「私もなのはちゃんと同じかな」

はやてちゃんの発言に対して、俺と同じスタンスでゆっくりと、このカルタ大会を楽しんでいたなのはちゃんとすずかちゃんが、今のままで良いのではないかと、意見を言う。

「なら、どうしたら面白くなるって言うのよ？」

それに対してすっかりヒートアップしているアリサちゃんは、早く勝負を再会させろと、目で訴えながら会話に参加してくる。

「俺も今のままで充分だと思うけどなあ」

何かこれ以上この話題を広げるのは、これまでの経験から判断して、何かが起こると本能的に結論を出した俺は、なのはちゃんとすずかちゃんの意見に賛同して、流れをこのまま勝負を続行させる方向に持っていこうとした。

「あら、それなら良い方法があるわよ」

本来ならば、それで全てが平和に解決する筈だった。

しかしこの場には、もう一つのイレギュラー。

俺の母さんが存在していたのである。

「「「「良い方法？」」」」

なのはちゃん達は四人揃って、母さんに視線を向ける。

そんな中俺は、あまり願いを聞いてはくれない神様に対して、今日くらいは賽銭を入れたのだから、小さい奇跡を起こしてくれと、必死に心の其処から拝み倒す。

「こういう勝負にはね。何かを賭けたりすると白熱するものなのよ」

一児の母とは思えない、純真な小学生達に対する賭け事を進めてくる母さん。

俺の中で、嫌な予感は加速度的に、その勢力を伸ばしていく。

「何を賭けるん？」

無垢な瞳で、場合によっては物凄い小学生の低学年が口走ってはいけない言葉を吐き出すはやてちゃん。

「そうね……それじゃあ私の権限で、勝った人は息子の純を一日好きに出来るって言うのはどうかしら？」

母さんが何気なく言ったその一言が、この空気を一変させた。

それがどうしてなのかは、俺にも分からない。

割と普段から俺は、なのはちゃん達の言う事を聞いてあげたりしていたので、それくらいなら良いかなと、一瞬思ったのだが、瞬時にこの場の空気を変えてしまった四人の気迫が、それは大きな間違いだという事を教えてくれた。

「それじゃあ、この勝負は最初からという事にして仕切り直しだね」

「そうだね。このまま続けると、アリサちゃんとはやてちゃんが有利過ぎるし……」

「良いわよ。全力を出して勝つ。私がやる事に変わり無いから」

「甘いで皆……私の新の力を見せたるわ……」

……皆笑顔で会話している。

だけど全員目が笑っていない。

そして俺は次の瞬間に、一瞬だけ向けられた視線を浴びて、確かな身の危険を感じた。

勝たなくてはならない……

俺の生存本能が、この戦いに必ず勝利しろと、訴えかけてくる。

そうしなければ生き残れないと、昭和の少年漫画のキャッチフレーズの如く、何度も頭の中を駆け巡る。

「じゃあ始めからいくわよ。皆準備は良い？」

母さんはこんな空気を作り出した張本人の筈なのに、一人だけ相変わらずなマイペースで、のほほんと仕切り直しとなったカルタ大会を進行させて行く。

その母さんの性格が恨めしいと思うと同時に、俺は心から尊敬の念を抱いた。

俺を含めた皆が、極度の緊張感を伴いながら、無言で頷く。

それを合図に母さんが一枚目の札を読み始めた事により、ある意味俺の正月最初の真剣勝負の幕が開いた。

今日の海鳴はめでたくも新年を向かえ、平和であるが初日から真剣勝負をする事になってしまった……

## 第２２話　新年・元旦・初バトル【後編】（後書き）

次回は一応本編のお話になるのですが、ハイパーバトルＤＶＤっぽい作りになる予定をしています。

そしてコラボの件なのですが、今の時点で二作品のどちらかにするかまで絞り込みました。

既存のライダーと、オリジナルライダー……

どちらにするか、迷うところです。

次の更新には、後書きか前書きのどちらかで、発表致しますので。

## 第２３話　仮面ライダーシード・ハイパー解説タイム【前編】（前書き）

一応は本編扱いなのですが、限り無く番外編に近い仕様となっています。

今回も楽しんでいただけたら幸いです。

コラボの件は後書きに記載させていただきました。

# 第２３話　仮面ライダーシード・ハイパー解説タイム【前編】

年が明けて、何事も無くとまでは言えないが、どうにか無事に正月を迎える事が出来た今日この頃。

世間も少しずつ正月気分から抜け出して、普段の生活へと戻り始めている。

俺もそんな現代日本を代表する一般市民の一人であり、残り数日となった冬休みを自分なりに満喫していた。

今日は珍しく、店員としてでは無く、翠屋にお客の一人として来店していた俺は、普段からバイトの報酬として稼いでいるただ券を使い、優雅に紅茶とケーキのセットで静かな午後のティータイムを演出しつつ、自前で持ち込んだ一冊の雑誌を読んでいたのである。

「何を読んでるんですか？純の旦那」

俺が雑誌に目を通していると、横から俺の名前を呼ぶ男性の声が聞こえて来た。

それが誰なのかは、視線を向けるまでも無く理解できる。

何故なら俺を純の旦那なんて呼ぶ人物は、一人しかいないからだ。

「お疲れ様ヤス。今日のバイトは終わりなの？」

振り向けば予想通りの人物が、俺の目の前に居た。

日本人にしては長身と言えるであろう、１８０センチを超える短髪で鋭い眼つきが特徴的な、ワイルド系なイケメン男子。

まだ冬休み中という事で、シンプルな白地のトレーナーにブルーのジーンズという、私服を着ていて分かり難いかも知れないが、こう見えても彼は正真正銘の現役高校生である。

ヤス本人も、見た目が二十台半ばに見える事を何気に気にしているそうなので、本人には言わない様にしているが……

「はい。今日のバイトは朝からでしたんで、さっき上がったばかりなんですよ。そんな事よりも純の旦那が読んでいるその本は？」

どうやらヤスは俺が読んでいる雑誌が気になるらしく、俺の質問に答えた後に、改めて聞き直してくる。

「ああ、これね……」

俺はヤスから視線を再び雑誌に移して、苦笑いを浮かべてしまう。

雑誌のタイトルはこうだ。

【月刊海鳴別冊新年特別号・仮面ライダー編】

タイトル通り、表紙を飾っている写真は、俺が変身した姿であるメタルブラックの身体を持つ、仮面ライダーシードである。

この雑誌は、去年の月刊海鳴の人気アンケートで一位を獲得した記事が、新年に特集を組んで発刊する別冊となっているのだが、去年の記事では、恵理さんが書いた仮面ライダーの記事が、見事一位に

輝き、今年の特集が仮面ライダーに選ばれたのだ。

正直な話、その事実を恵理さんから聞き、特集記事の取材を正式に依頼された時は、断ろうかと思ったのだが、その時一緒に話を聞いていたメカ犬が何故か乗り気で、取材は俺の意思とは無関係に進んで行った。

「それって月刊海鳴が毎年新年に出してる別冊号ですよね。でも確かその雑誌の発売日って後一週間は先じゃありませんでしたか？」

「ヤスの言う通り、まだこの雑誌は発売されて無いよ」

「じゃあ何で純の旦那がその雑誌を？」

「この雑誌は今朝早くに、俺の家に郵送されてきたんだよ」

ヤスもこの雑誌の購読者だったのか、発売日等にやけに精通していた。

これは説明しておかないと、雑誌の続きを読むのも難しいと判断した俺は、雑誌を一度テーブルの隅に置いてから、説明を開始する。

先程も言った通り、本来は発売日まで、後一週間はある筈の、この雑誌が俺の手元までやって来たのは、今朝の出来事だ。

配達のお兄さんから、荷物を受け取り、その中身がこの雑誌だという事を確認した俺は、すぐに恵理さんに連絡をしたのである。

そしたら恵理さんいわく、この雑誌は協力してくれた俺に対しての、御礼の一つなのだそうだ。

発売日を前にして、自分が参加した雑誌を手に取れるとは思ってもいなかったので、それについては素直に感謝した。

しかし話は、ここで終わった訳では無かったのである。

実は今俺が、翠屋にこの雑誌を持ち込んで、一人寂しくお茶会しているのも、原因はその話の内容に起因しているのだ。

それと言うのも、この郵送されてきた雑誌の他にも、直接俺に渡したいものがあるそうなので、恵理さんとここで待ち合わせをする事になったからである。

俺がこの雑誌を持ち込んだのは、折角届いた世間では発売前の雑誌なので、待っている間に、暇潰しに読もうと考えたからだ。

「へ～純の旦那も色々大変なんですね……」

ヤスは俺の説明を聞きながらも、何時の間にかテーブルの隅に置いていた筈の雑誌を手に取り、ページを一枚一枚流し読みしている。

どうやらヤスは、俺が思っている以上に、月刊海鳴を読み込んでいるらしい。

「お待たせ純君」

俺がヤスと雑誌の経緯について会話をしていると、後ろからとても聞き覚えのある女性の声がした。

「そんなに待ってないですから、大丈夫ですよ」

声のした方向に振り向きながら、俺はその声の主に言う。

振り向けば其処に居たのは、俺にこの雑誌を郵送した人物であり、ここで待ち合わせをしていた俺の待ち人でもある。

雑誌記者という職業の為か、普段から撮影用のカメラ等を持ち歩いていたりと、持ち物の多い恵理さんだが、今日はそれに加えて、背中に肩幅程ある大きさの女性が普段から使うには、シンプルデザインの黒いバッグを背負っていた。

「良かったわ」

俺の言葉を聴き、恵理さんは笑顔を浮かべながら、俺の向かいの席に腰を下ろした。

「どうもっす」

俺の隣ではヤスが、恵理さんに挨拶をしている。

そう言えばこの二人は、直接会った事はあっても、会話をしている所は見た事は無いな。

心なしかヤスの表情には、緊張の色が見えている。

「それで、俺に直接渡したい物って、何なんですか？」

ウェイターとして此方のテーブルにやって来た恭也君に、恵理さんがコーヒーを注文したのを確認した後、俺は早速ここに呼び出された用件について聞いてみた。

「ええとね……」

俺の質問に対して、恵理さんは何処か言い辛そうにヤスを見ながら、俺にも視線だけで合図を何度か送ってくる。

その視線の意味に気づいた俺は、朗らかに笑いながら、周りのお客さんに聞こえない様に、少し声を抑えながら答える。

「ああ、大丈夫ですよ。ヤスは知ってますから」

「そうなの？」

恵理さんは俺の言葉を聞き、僅かに目を見開いて、絵に描いた様な、驚きの表情を浮かべた。

俺が仮面ライダーだという事を秘密にしている事を、恵理さんは知っていた為か、ヤスがその事を知っているのが意外だったのだろう。

恵理さんのこういった表情は、滅多に見れるものでは無いので、中々に新鮮である。

暫くして恵理さんが注文したコーヒーを、恭也君が運んで来た後、改めて話は再開された。

「……それじゃあ、話しを戻すわね。私が純君に渡したかったのはこれよ」

恵理さんはそう言うと、コーヒーを一口飲んでから、俺に何処にでも売っている様な、何の変哲も無い透明のＣＤケースを差し出して

くる。

「これは？」

そのＣＤケースを手を受け取り、良く確認してみるが、表面は何も書かれていない白い状態になっているので、それが何なのか、見た目だけでは判断がつかない。

「ふふん。ちょっと待っててね」

俺の様子を見ながら、恵理さんは得意そうに笑みを浮かべると、普段は持ち歩かないバックから見覚えのある機材を取り出してテーブルの上に置いた。

それは白を基調とした、小型のノートパソコンに形状が似ているが、恵理さんがディスプレイの部分を開くと、それがノートパソコンでは無い事が良く分かる。

「ＤＶＤプレイヤーですか？」

俺に代わりヤスが、恵理さんの取り出した機材の正体を言い当てた。

恵理さんがこのタイミングで、ＤＶＤプレイヤーを出したという事は、俺が今手に持っている物の正体は……

「そのＤＶＤをこれで再生して、皆で見てみましょう」

「あ！やっぱりこれって、ＤＶＤだったんですか」

どうやらこのＣＤケースの中身の正体は、俺の予想通りＤＶＤだっ

た様だ。

俺は頷きながら、ＣＤケースの中身であるＤＶＤを取り出して、再び恵理さんに手渡すと、恵理さんはＤＶＤプレイヤーにセットして再生ボタンを押した。

先程まで待機画面となっており、画面全体に青い絵が表示されていたのだが、一瞬だけ画面が暗くなると、動画が再生され始める。

するとアップテンポなＢＧＭと共に、メタルブラックのボディーを持つ超人、仮面ライダーシードの姿が映し出された。

「このＤＶＤってもしかして……」

ＤＶＤプレイヤーの画面から映し出されるシードの動画を見ながら、俺は思わず呟きを零してしまう。

「編集するのに苦労したのよ。このＤＶＤ」

先程とは逆に、俺が驚きを一段上回る、驚愕の表情を浮かべていると、向かい側に座っていた恵理さんが、良い仕事をしたと、言わんばかりの、爽やかな笑顔で語っていた。

「あの……これって一体どういう事なんですか！？」

俺は声量を抑えながらも、慌てて恵理さんに説明を要求する。

確かに俺は、恵理さんの取材に協力したので、雑誌が存在する事は納得出来るのだが、その際に動画を撮った記憶は一片も無いのだ。

なのに今流れている映像には、恵理さんの有無に関わらず、今まで戦ってきた多くのホルダーとの戦闘シーンが、ダイジェストで流れている。

その中には恵理さんと出会う前に戦ったホルダーとの戦いまで流れていた。

はっきり言って、こんな映像を恵理さんが独自に入手するのは、物理的に不可能である。

だとしたらこの映像集を恵理さんに提供した協力者が居る筈だ。

……というかこんな事が可能な奴は、あいつしか居ない。

「……出て来いメカ犬。お前がここに来ているって事は分かってるんだよ」

『ばれていたか』

俺がそう呟くと、何とテーブルの下から、全身銀色のフルメタルボディーを持つもう一人の首謀者であるメカ犬が、這い出てきた。

「朝から用事があるとか言って、随分早くに家を出たと思っていたら、こういう事だったんだな」

『どうだマスター。恵理殿に提供した映像データを編集してもらったのだが、中々に良い出来だろう?」

「良いも悪いも、どうやって撮ったんだよこんな映像……」

もはや突っ込む気力さえ無くなりつつある俺は、溜息を吐きながらも質問を続ける。

『うむ。この映像は主にチェイサーが記録していた映像データでな。去年システムを最適化する際に出たマスターの映像データで、直接マスターとワタシの正体がばれる心配の無い範囲を、此方の映像再生機器にも対応出来る状態にしておいて保存しておいたのだが、丁度タイミング良く恵理殿が、取材を申し込んできたのでな。雑誌のオマケにでもどうかと勧めてみたのだ』

取材を受けた時に、何か含みのある言い方をしていたメカ犬だが、今にしてその正体が判明した。

「何を考えてるんだよお前は……」

『うむ。今では海鳴市でも、仮面ライダーは有名になっただろう』

俺がメカ犬の説明に対して、呆れ混じりに溜息を吐き出していると、突如としてメカ犬が真面目な口調で語り出す。

『今まではホルダー事件の殆どが海鳴市内のみで起きていた。だがこれからはどうなると思う。シルバーライト島で戦ったホルダーは例外だとしても、最初のホルダー事件が起きてから、時間は経ち過ぎた。今は事件を起こしていなくても、暴走プログラムを所持した状態で、海鳴市外に出ている者も居るかもしれない』

「……確かにな」

『それに加えて、ワタシ達にもその正体を諮りかねる存在。オーバーとメルトが現れた』

メカ犬の独白に、俺だけでなく恵理さんとヤスも黙って耳を傾ける。

『だからワタシは考えたのだ。少しでも多くの人達に、最低限の情報を持っていてもらいたいと。もしかしたら別の土地でホルダーが現れるという可能性も、これからは考慮しなければならないかもしれない。その際に情報の有無は、その事件に巻き込まれた人物の生死を別ける事となるかもしれない』

其処までメカ犬が語ったところで、俺もメカ犬が何を言おうとしているのかを理解する。

メカ犬は出来るだけ多くの人達に知って欲しいのだ。

俺達仮面ライダーというよりも、ホルダーの危険性を……

その為に、地域の域を出ないとはいえ、メディアを利用して広めるのは確かに効率が良い。

特に映像として残っていれば、この地域の外を出て、より多くの人達の目に触れる機会も、確実に増える事だろう。

「……悪かったなメカ犬。そんな理由がある何て、俺は気付きもしなくて」

『いや。ワタシこそマスターに説明もせずに、話を進めてしまって悪かった。マスターは目立つのがあまり好きでは無いと思い、何より反対されると考えてしまい、独断で決定してしまったが、やはり事前に説明しておくべきだったな』

俺とメカ犬はお互いに、謝りながら相手の意見を尊重する事にした。

ただ一つだけ、言っておきたい事がある。

確かに俺は目立つのが好きな性格ではないが、それは俺の周囲が濃すぎる面々の為に、空気にされがちだというだけで、別に自ら望んで地味になっている訳ではない……

それだけは正しく理解してもらいたいと、切実に心の底から願う。

「……あの、ちょっと良いですか。メカ犬さんに、純の旦那」

予想外に突如として始まったメカ犬の語りのせいで、何処かしんみりとした空気を醸し出していたところで、今まで黙っていたヤスが、右手を上げながら、遠慮しがちに聞いてきた。

『どうしたのだヤス』

「何が聞きたいんだ？」

俺とメカ犬は、揃ってヤスに聞き返した。

「いや……俺も仮面ライダーの記事は以前から、何度も見ているんですが、折角本人が居るんですから、いっそ直接聞いてみたいと思いまして」

そう言うとヤスは、上げた右手をそのまま後頭部に廻して、苦笑いを浮かべつつ短髪を掻いた。

これはヤスなりの、気を使い方なのだろう。

実際この質問をされた事により、先程までの何処かしんみりとした空気が、四散していくのを肌で感じた。

ならばその気づかいをありがたく受け取るのが、礼儀というものだろう。

俺は視線を一度メカ犬に移してから、頷くのを確認して、わざとらしく一度大きな咳を吐いてから、周りに声が漏れない様に音量に気を付けつつ、大げさな説明口調で、シードについての説明を開始する事にした。

「それじゃあまずは、ベーシックフォルムの説明をしようかな」

DVDプレイヤーに流れる映像に目をやれば、丁度ベーシックフォルムのシードが、植物を模したホルダーによる鞭の連続攻撃を回避しているところだった。

「あ！それなら俺も知ってますよ。純の旦那とメカ犬さんが、何時も一番最初に、変わる姿ですよね？」

『うむ。この姿は、シードの基本形態となっているのでな。最初の変身時は必ずこの姿と決まっている』

「へえ～。それは私も初めて知ったわ」

俺とメカ犬が始めた説明に対して、恵理さんが納得した様に、頷いてみせる。

「このベーシックフォルムは、素手の格闘戦に向いているんだ」

『全フォルムでも、最も基本能力値が安定しており、様々な戦い方に適応する事が出来る』

再び俺が、ＤＶＤプレイヤーの映像に視線を向けると、今度は港で初めてこのベーシックフォルムの能力を使う映像が映し出されていた。

「それでこのフォルムの特殊能力は、ベーシックファントム」

『一時的ではあるが、発生させたエネルギーをシードと同等に生成してワタシが遠隔操作するのが、この能力の大きな特徴だな』

「まあ、簡単に言えば、限定的な分身って言えるかも」

俺はそう言ってメカ犬の説明を締め括る。

「そう言えば、純君って何時も最後は何か白い光を身体に纏ってるけど、あれって所謂必殺技なのよね？」

続いて恵理さんが、確認する様に会話に入ってきた。

流れている映像にも、丁度シードがライダーキックを放つ場面が映し出されているので、先程の言葉が出たのだろう。

「あれは幾つかの種類があるけど、ベーシックフォルムの時は、ポイントチャージって言うんだ」

『エネルギーを集約させるのと同時に、ホルダーとなってしまった人間と暴走プログラムを、強制的に分離させる効果を持っているぞ』

「足に集めればライダーキック。腕に集めたら、ライダーパンチって所かな」

「確か記事の情報通りなら、手足に集めて連続攻撃をするライダーラッシュなんて技もあるんですよね？」

説明の最後に、ヤスが少年の様に、瞳を輝かせながら、聞いて来る。

その瞳は何故か、前世で俺が初めて仮面ライダーを知った時の思い出を呼び起こした。

俺もきっと初めて仮面ライダーを知った時は、あんな瞳でライダーが活躍するＴＶの映像を見ていたに違いない。

「さてと、ベーシックフォルムはこれぐらいにしておいて次は……」

次に視線を画面に向けると、ベーシックフォルムの映像が終わったのか、今度はシードのボディーがライトグリーンに変わり、二体の猿型ホルダーと戦っている場面が映し出されている。

「これは確か、スカイモンキーの事件を追っていた時の映像ね」

恵理さんが少し懐かしそうに言う。

そう言われてみれば、その通りだ。

思えばこの事件が、恵理さんに正体を知られる切欠になった訳で、今回の事も含めて、無茶な頼み事の始まりだったのかもしれない……

「このフォルムはスピードフォルム。その名前の通り、シードの素早さを飛躍的に上昇させてくれるんだ」

『そして特殊能力は、専用武器のスピードロッドだ。ベーシックに比べて、格闘戦に不向きな部分を補ってくれる上に、多数との近接戦闘に優れているぞ』

「必殺技は周囲に風の刃を撃ち出すウインドテイスティングに、一点集中の突きを繰り出すダッシュ・エア・プッシュかな」

其処まで俺とメカ犬が説明すると、今度は続け様にスカイブルーのボディーと、クリムゾンレッドのシードの映像が続け様に、画面に流れる。

こうなったら一気に説明してしまおう。

「それでスカイブルーのシードが、サーチフォルムに、クリムゾンレッドの方がパワーフォルム」

『どちらもスピードフォルムと同様に、局地戦を想定したフォルムだ』

「サーチフォルムは他のフォルムに比べて、身体能力が下がるけど、代わりに視力や聴覚なんかの感覚を最大限に上げてくれる」

『それを言えばパワーフォルムは、サーチフォルムの逆の能力特化と言えるだろうな。パワーフォルム最大の特徴は大幅な戦闘能力の強化にあるな。他のフォルムよりも機動力が大幅に下がってしまうが、純粋な戦闘力だけで言えば、間違い無くこのフォルムが一番だな』

「専用武器は其々、サーチバレットにパワーブレード。名前の通り遠距離の銃に、接近用の剣。メカ犬もさっき言っていたけど、この二つのフォルムは戦い方まで真逆に位置してるって言えると思う」

ここまで一気に説明したところで、画面の映像が二分割されて、サーチとパワー其々の必殺技が同時に映し出される。

恵理さんがこの映像を編集したって言っていたけど、随分凝った編集をしたものだ……

「あら、仮面ライダーって、黒と緑以外にも色々とあるんですね？」

ここまで説明し終えて、次は必殺技について解説しようとしたところで、この場に新たな介入者が現れた。

流れる様な長い黒髪が、生粋の大和撫子を彷彿とさせる、和風美人という言葉を現実に体現した、文句無しの美女が其処に居たのである。

「瞳さん？」

ただしその大和撫子は、普段からメイド服を着用しているが……

俺の反応を見ながら、先程まで俺とメカ犬の説明を聞いていた恵理さんとヤスが、突如として現れたメイドさんである瞳さんを探る様にしながら、会釈した。

そう言えばこの二人と瞳さんが直接顔を会わせるのは、これが初めてかもしれない。

寧ろ三人とも頻繁にこの翠屋に訪れる上、俺が仮面ライダーだという事を知っている数少ない人間である筈なのに、今まで殆ど面識が無かったという事が、不思議に思えてくる。

「良かったら瞳さんも、聞いて行きますか？この場に居る二人も、瞳さんと同じですから、問題無いですよ」

ここまで来れば、説明する人間の一人や二人増えたところで関係無いと考えた俺は、時間が空いていればという一言を付け加えた上で、瞳さんに聞いてみた。

俺の言った言葉の意味を察した恵理さんとヤスは、瞳さんへの警戒心を緩める。

「じゃあ……純君が良いなら、私も聞いていこうかな？」

瞳さんはそう言って微笑むと、空いていた恵理さんの隣の席に腰を下ろした。

俺は瞳さんが話しを聞く準備を整え終えたところで、解説の続きを再開する。

「え～と、それでサーチフォルムの必殺技が、連続射撃を一点集中させて、相手に撃ち出すガトリングブーストに、空中から範囲攻撃をするシューティングサークル」

『そしてパワーフォルムの必殺技は、相手に強力な衝撃波を当てるブレイクインパクトに、全ての攻撃を防御した上で繰り出すカウンタースティングだな』

ここまで説明したところで、シードについて大体の解説を終えた俺は、ここまで話しを聞いてくれた三人に視線を向けた。

「あれ、このバイクさんも、純君達のお仲間さん何ですよね？」

瞳さんがそう言いながら、ＤＶＤプレイヤーの画面を指差す。

その画像には、風を受けながら疾走する黒いライダーバイク、チェイサーさんの姿が映し出されていた。

……と言うか、今までの映像データってチェイサーさんが提供してくれた筈なのに、何で本人の映像が映っているんだ？

俺が不思議に思い、眉間に皺を寄せていると、メカ犬が俺の様子に気付いたらしく、解説を開始した。

『その映像についてなのだが、チェイサーも映りたいと言っていたのでな。メカ竜やワタシのデータの一部も提供させて貰ったぞ』

「……ああ。そうなんだ」

俺はもう説明だけで今日は疲れた。

悪いと思うがこれ以上の、細かい部分の突っ込みは、今日はもう遠慮させて頂きたい。

『チェイサーはワタシ事、コンタクトフュージョンのサポートシステムの一部だ。主に地上の高速移動とホバーチェイサーという飛行能力を有しているぞ』

疲れきった俺の代わりに、メカ犬が解説の続きをしてくれた。

今度こそこれで大体の説明を終えたと、一息吐こうとしたが、何かを忘れている様な気がしてならない。

『ちょっと待ってください！』

『サポートシステムと言えば、アタイ等を忘れてもらっちゃ困るんだわさ～』

……最近は急なエンカウント行為が流行っているとでもいうのだろうか？

残念な事だが非常に聞き覚えのある二匹？の声が、俺の耳の鼓膜を容赦無く振るわせたのだ。

気が向かないが、このまま無視をすれば、更に困った事態に発展する可能性があるかもしれない。

本意では無いが、ゆっくりと視線を声が聞こえて来た足元に向けると、予想通り手乗りサイズなメタルレッドの恐竜と、メタルブルーのイルカの姿が見えた。

「……何でお前等が居るんだよ？」

この状況で更に俺の疲労感を増大させる存在……

メカ竜とメカ海がその姿を現したのである。

# 第２３話　仮面ライダーシード・ハイパー解説タイム【前編】（後書き）

さて……

コラボの件についてなのですが、一応は誰の作品とさせていただくか決定させていただきました……

それを発表する前に、一つアンケートを取りたいと思います。

実はこの件について、友人に相談したところ、誰か一人を選ぶのであれば、いっその事ストーリーを少々分かりやすく簡潔にして、複数の作品のライダーを同時に出演させてみたらどうかと提案されたのです。

私としても出来れば多くの方と作品を共有したいと考えたのですが……

何か相談したら新たな選択肢が生まれてしまい、更に悩む結果となってしまいました。

そんな訳で試しに簡単なストーリーの概要を説明しますと、こんな感じになりますね。

〇シードがホルダーと戦っている際に、突如として現れた謎のオーロラ。

そのオーロラに飲み込まれると同時に、シードは見たことも無い謎

の空間に飛ばされてしまう。

辺りを見渡すと其処には他の世界の数人のライダーが、その空間にいたのである。

状況を確認するライダー達に突然響く謎の声。

その声に導かれるままに、謎の空間から抜け出して、本来居た世界に帰るべく、異なる世界から来た仮面ライダーライダー達は、力を合わせて謎に挑戦していく……

といった具合ですね。

あまり人気が無いようでしたら、本来の予定通り、コラボ先の作品を発表したいと思います。

急なアンケートでコラボを楽しみにしていただけている読者様の方々には心苦しい限りなのですが、良い意見を頂けると嬉しい限りです。

それでは、今度こそ正式な発表は次回で！

# 第２３話　仮面ライダーシード・ハイパー解説タイム【後編】（前書き）

どうもお久しぶりです。

何とか時間が出来たので、思ったよりも早めに続きを投稿する事が出来ました。

そして例のコラボの件なのですが、急なアンケートにお答えいただきありがとう御座いました。

現在のところ出演予定は、

蒼き星先生の仮面ライダーアクエリアス。

断空我先生の仮面ライダーファイズ。

善宗先生の仮面ライダー刃鬼。

鳴神ソラ先生の仮面ライダーキバ。

を予定しております。

作品の公開予定は今のところ今年の夏を予定しております。

今回のコラボは普段よりも短めなお話を予定しておりますが、楽しみにしていただけたら、嬉しい限りです。

何かご質問や、提案等御座いましたら、何時でもお気軽に感想やメッセージボックスに送ってくださいね。

それでは今回も楽しんでいただけたら幸いです。

# 第２３話　仮面ライダーシード・ハイパー解説タイム【後編】

『マスター。ボク達の説明も、勿論してくれるんですよね』

足元に居たメカ竜はそう言うと、店内で俺達の席を誰も見ていない瞬間を瞬間を見計らい、テーブルの上に飛び乗ってきた。

ＤＶＤプレイヤーの画面に映し出されている映像も、それに呼応するかの様に、場面が切り替わる。

そのあまりのタイミングの良さに、俺は何か大きな意思でも働いているのではないかと、勘ぐってしまう。

「はあ……しょうがないな」

この状況で説明しない訳にもいかないと思い、俺は溜息を一つ吐き出してから、メカ竜の要望に従い、解説の続きを再開する。

「メカ竜は、一言で言うならシードの強化ツールになるんだ」

『その通りです！ボクをアタッチメントパーツとして使用する事で、大幅な攻撃力増加が出来るガイアシステムは、シードの切り札と言っても過言じゃありません！！！』

俺の説明に続き、メカ竜本人が自慢げにガイアシステムについての説明をする。

ＤＶＤプレイヤーの画面に流れる映像に目をやれば、丁度ベーシックフォルムのシードが、自身の周囲に展開させたメタルレッドの装

甲を纏う瞬間が流れていた。

『このガイアシステムの特徴は、先程説明した各種フォルムの攻撃面の特化を目的としている。今流れている映像は、ベーシックフォルムを素体にしたベーシック・ガイアという具合だな』

更にメカ犬が流れている映像を教材にして、ガイアシステムを説明していく。

「専用武器は、遠近両用武器のガイアブレイガン。戦う状況に合わせて、接近戦用のブレイドモードと、遠距離用のガンモードに切り替える変形機構を持っている上に、他のフォルムの専用武器に組み込む事で、新しい武器にする事が出来るんだ」

『スピード・ガイアなら、ガイアロッド。サーチ・ガイアならばガイアバレットに、パワー・ガイアになればガイア・ブレードと言った具合にな』

「必殺技は四体の分身体を推進力に利用した、ガイアチェーンスマッシュや、強化した武器を使用した強力なものが多いかな」

『どうですか？ボクはまさに、シード最大の切り札なんですよ！！！』

俺とメカ犬が説明を終えた後に、メカ竜がそう言って締め括った。

その声は何処か誇らしげであったが、メカ竜の天下はその直後、同じ同郷の者の下克上により、呆気無く終わりを告げる事となる。

『何時までも自慢げに話してるんじゃ無いんだわさ～』

『べぶ!?』

誇らしげに自分の優秀さを皆に披露するメカ竜に対して、メカ海が飛び込み様にボディープレスを喰らわせて、メカ竜を吹き飛ばしてしまったのだ。

『そういう訳で、今度はアタイの番なんだわさ～』

メカ竜という邪魔者の排除に成功したメカ海は、今度は自分の番だと、意気揚々に鼻歌を口ずさむ。

「あれ?私が編集した映像には、確か竜君までしか映ってなかったと思うんだけど……」

しかしここで恵理さんが、衝撃の事実を口にした。

言われてみればそれも当然だろう。

この話が出て、製作を開始したのが去年のクリスマス前の話なのだから、その後に出会ったメカ海の情報が無いのは当然と言える。

『無問題なんだわさ～』

しかしメカ海は何故か嬉々として、口を開くと、赤い光を全て映像再生を終えて、再び青い画面に戻っていたＤＶＤプレイヤーに照射したのだ。

するとまるで息を吹き返した様に、青い画面だった筈のディスプレイに映像が流れ始める。

其処に流れる映像は、周囲に展開させたメタルブルーの装甲を装着していくシードの姿だった。

『やっぱりアタイの方が、何処かの赤い恐竜よりも、ずっと格好良いんだわさ～』

『……』

『それじゃあマスター。続きをお願いするんだわさ～』

そしてメカ海は、吹き飛ばされてテーブルの下で、沈黙しているメカ竜を一瞥した後に、この一連の流れ等最初から無かったかの様に振る舞いつつ、俺に続きの解説をする様に促してきた。

何時もの俺であれば、ここで突っ込みの一つでもしているところだろう。

だが俺はここで心を鬼にして、この出来事を華麗にスルーしようと考えた。

正直に言えば、既に突っ込む気力も無かったのである。

「……それで最後はダイバーシステム。一応ガイアシステムと同じ系統になるんだけど、こっちはかなり特殊な仕様になるかな？」

『……』

俺はメカ海の態度に便乗して、沈黙し続けるメカ竜を無視しながら、解説を再開させる。

『ダイバーは水中戦を想定された特性を持っている為に、深海の水圧にも耐えられる装甲を有している』

『……』

解説を再開させた俺に続いて、メカ犬も同じように補足説明を付け足してくるが、その間も翠屋の床で、静かに沈黙を保っているメカ竜を見ていると、とても居た堪れない気持ちが込み上げてくる。

まあ、だからと言って、それをどうする気も無いので、俺は構わず説明を続行する事にしようと思う。

画面に映るダイバーは丁度、シルバーライト島で戦っていた時の水中戦が映し出されていた。

今更に思うのだが、この映像は誰が映した映像なのだろうか？

他の映像はチェイサーさんや、メカ竜がその場に居合わせていたので、まだ分かるのだが、確か初めてダイバーになった時は、周囲に俺達とホルダー意外には居なかった気がするんだが……

『マスター』

俺のそんな疑問を理解してなのか、メカ海が俺にある種の魔法の言葉と言えるであろう、一言を口にする。

『それは乙女のナ・イ・ショ！なんだわさ～』

「……」

その言葉を聞いて俺は一瞬全てを忘れて、大声で叫びたい衝動に駆られたが、どうにか限界ギリギリのところで堪え切った自分を、素直に褒めてやりたいと思った。

『ダイバーシステムもガイアシステムと同じ様に、其々にベーシックを始めとするシードの全フォルムへの対応が出来る設計となっているぞ。ちなみに専用武器には、スピードアンカー、サーチランチャー、パワーアックス等の多彩な装備が充実している。無論の事ダイバーの真価を発揮出来るのは水中だが、地上でもその多彩な装備と硬い装甲を活かして、充分な戦闘能力を発揮する事が可能だ』

俺がそんな事を思っている間に、メカ犬が俺に代わって殆どの説明を終えてしまった。

『必殺技も華麗に優雅に決まってるんだわさ～』

そしてメカ海が、画面に流れる映像を皆に見せながら、ホルダー達を倒す瞬間を自我自賛していた。

もう何が何やら収拾がつかなくなってきたが、取り敢えずこの話題は、これで終わりという事で良いのだろうか？

「あれ、純君にメー君？」

俺が漸くこの場から開放されるのだと安堵した直後である。

店の扉が開くのと、ほぼ時を同じくして、俺とメカ犬を呼ぶ、とても聞き慣れた女の子の声が聞こえて来た。

その声が誰なのか。

あまりにも普段から常日頃聴き慣れているその声を、俺が分からない訳が無い。

「なのはちゃん！？」

俺は後ろに振り向くと同時に、床に沈黙しているメカ竜を、なのはちゃんの視界に映らない様に蹴り飛ばし、奇跡的にも瞬時に場の空気を読んでくれたメカ海も、咄嗟にその身をテーブルの影に隠した。

「何なの？そのＤＶＤプレイヤー」

更になのはちゃんの後ろからは、アリサちゃんが俺達の座る席に置かれたプレイヤーに興味を持ったのか指差してきた。

「皆で映画か何か見てたんですか？」

続いてすずかちゃんもアリサちゃん同様に、ＤＶＤプレイヤーに興味を持った様である。

「何や面白そうやな！私達にも見せてくれへん？」

そして何時の間にかテーブルの前にまで接近していたはやてちゃんが、ＤＶＤプレイヤーの再生ボタンを勝手に押そうとしている。

何時もの美少女四人組の登場に、内心焦りまくる俺だったが、今回の乱入者はそれだけではなかった。

「約束通り持ってきたわよ。お姉ちゃん」

「……何か人が沢山来てませんか？」

その人物達は二名。

セーラー服に身を包んだ、一見すると女子中学生に見えるであろう女子に、ビジネススーツ姿の男性。

その正体は、海鳴警察署のホルダー対策特務課に勤務している恵美さんと、長谷川さんである。

しかも恵美さんの手には、俺が先程まで持っていたＣＤケースと同様のものを持っていた。

「ありがとう。待ってたわよ恵美」

其処で恵美さんの実のお姉さんである恵理さんが、何か意味ありげな言葉を口走る。

その言葉が何を意味しているのか……

ここまでの話の流れから恵美さんが持っているＣＤケースの正体を、何となく想像出来るが、己の精神的な安定を求め、俺はあえて考えない様に心掛ける。

しかしそんな俺の意思は他所に、恵美さんが持っていたＣＤケースを受け取った恵理さんは、先程まで挿入されていたＤＶＤをプレイヤーから取り出して、代わりに受け取ったＣＤケースの中身を挿入してから、再生ボタンを押した。

次の瞬間ディスプレイに映されたのは、白と黒のツートンカラーのバイクに跨り、海鳴の街を疾走するメタルイエローのボディーを持つ、仮面ライダーＥ２の姿……

その映像を見て、Ｅ２の装着員である長谷川さんの顔が、文字通り驚愕していますという形に変わった。

どうやら俺と同様長谷川さんも、恵美さんから何も説明をされずに、ここまで連れて来られたらしい。

「あ！これって仮面ライダーや！？」

Ｅ２の映像が流れた直後、ＤＶＤプレイヤーの一番近くに陣取っていたはやてちゃんが声を上げる。

「それって本当に！？」

「ちょっと！！私にも見せなさいよ！！！」

「ちょ、ちょっと、すずかちゃんにアリサちゃん！少し落ち着いてよ！私も見たいんだから！」

はやてちゃんの声に反応した他の三人も、一斉にしてＤＶＤプレイヤーの前に群がり出す。

「はいはい！皆少し画面から離れなさい！あんまり近くで見ると目が悪くなるわよ？」

「そうですよ皆さん」

「ははははは。やっぱり子供は元気なのが一番だな」

その光景を見て、恵理さんと瞳さんが、なのはちゃん達を窘めて、それを横目に見ながらヤスが豪快に笑う。

この三人の声を聞き、我に返ったのか、なのはちゃん達は四人とも、恥ずかしそうにしながら、一歩後ろに下がった。

「ふふ。皆Ｅ２に興味があるみたいね」

なのはちゃん達の反応を見て、恵美さんが得意満面の笑みを浮かべる。

そう言えば恵美さんは、常に着ているセーラー服という見た目からは、全く想像出来ないが、世界屈指の天才であり、このＥ２の開発設計者でもあるのだ。

自分が作ったものに、目の前で興味を持たれた事が嬉しかったのだろう。

恵美さんは誰に頼まれるでもなく、画面に映像として流れるＥ２についての解説を始めた。

「Ｅ２は私が設計開発した特殊強化服よ。従来のパワードスーツとは、根本から違う多目的用途に柔軟に対応可能な上に、強靭な人工外骨格と人工筋肉が、装着者の限界を大幅に超えた力を発揮してくれるわ。勿論ホルダー何て人外の相手と戦っても引けを取らないわよ」

Ｅ２について雄弁と語った恵美さんは、今尚唖然と佇んでいる長谷

川さんの脇腹を小突き、正気に戻すと、装着者の長谷川君からも、何か言いなさいと言って、発言を促す。

「は、はい！？え～と、Ｅ２には対ホルダー用に幾つもの特殊な装備が存在しています。その中でも一番僕が使っている装備は、やっぱり標準装備とされている、ＥＳＭ０１というＥ２専用銃ですね」

年下でありながらも、直接の上司である恵美さんに小突かれて、何とか正気を取り戻した長谷川さんは、慌てながらも俺達に聞こえる様に説明をしてくれた。

丁度ＤＶＤプレイヤーから流れている映像にも、Ｅ２が先程長谷川さんの言っていたＥＳＭ０１を射撃場で構えて、射撃練習に打ち込んでいる姿が映っている。

「Ｅ２の装備はこれだけじゃないわよ！常に高温を帯びて硬い鉄板だって問答無用で切り裂く近接装備のＥＳＭ０２に、先端にマシンアームを取り付けた強化ワイヤーを射出する多目的装備のＥＳＭ０４。まだ実践配備していないけど、他にも多数の装備があるんだからね！」

「まだまだ僕には使いこなせない装備も多いんですけどね」

自慢げに語る恵美さんの横で、長谷川さんは申し訳無さそうに呟く。

幸いにもその声は、恵美さんの語りとＤＶＤプレイヤーに流れる映像に、皆して集中していたので、俺以外の人には聞こえなかった様である。

……長谷川さんも、俺とは別の苦労が多いらしい。

「そしてこれがＥ２がホルダー対策特務課に、起用された最大の特徴！ホルダーブレイクよ！！！」

俺がそんな長谷川さんに何処か共感を覚えている間に、恵美さんの解説は更に白熱していく。

「ホルダーブレイクは、Ｅ２の対ホルダー用の必殺技よ！この海鳴市に現れた最初の仮面ライダー、シードに協力してもらって、ホルダーに対抗出来る特殊なプログラムを解析する事で、Ｅ２は本当の完成に至る事が出来たわ」

恵美さんの説明を聞きながら、俺はそう言えばそんな事もあったなと、感慨に耽る。

最初はダイヤモンド製のカッターを持ち出してきて、身体の一部を削り取らせろと、かなり猟奇的な発言をしてきたものだから、かなり焦ったのは、今となっては良い思い出と……言えたら良いな。

結局はホルダーを倒す手段を入手する事が目的だという事が、話し合いの結果明らかとなったので、その場でポイントチャージして、その光を採取してもらい、研究資料として渡してあげたのである。

『まさかあの恵美嬢が、この短期間でワタシのプログラムの一部を解析して、完成させるとは思ってもいなかったがな』

Ｅ２が必殺技である回し蹴りを放つ瞬間の映像を眺めながら、メカ犬が呟いていた。

初めて出会った日から、何処か変わった人だと思ってはいたが、恵

美さんが正真正銘の天才だと言う事は嫌でも理解する事が出来た気がする。

「そして最後に、私が設計開発したＥ２に並ぶ超自信作のマシンドレッサーを紹介するわ！！！！」

「……今日の恵美さんは何時も以上に輝いてますね」

高々と宣言する恵美さんを見ながら、長谷川さんが苦笑いを浮かべながら言う。

その恵美さんのハッスル振りを見た俺は、数秒前にこの人を正真正銘の天才だと、思ってしまった自分自身に対して疑問を覚えてしまう。

『マスター』

そんな俺に対してメカ犬が話しかけてくる。

その声が何処か震えている様な気がするのは、俺の気のせいだろうか……

「何だ？メカ犬」

『先程ワタシが呟いた言葉なのだが……』

「……何か言っていたのか？俺には全く聞こえなかったけど」

俺は嘘をついた。

でもこの嘘は何よりも優しい嘘だと俺は思う。

偽善でも構わない。

それが今のメカ犬にとって必要な事ならば、俺は喜んで偽善者となってやる。

『……すまないな。マスター』

「良いって事よ」

この瞬間俺とメカ犬の間に、新たな絆が生まれた様な気がした。

そうして俺とメカ犬が静かに友情を育む間にも、恵美さんの解説は進んでいく。

「マシンドレッサーは、ＥＳシステム換装機構を搭載した、Ｅ２のサポートバイクよ！通常のバイクモードに、Ｅ２をその場で装着する為のドレッサーモード。更にホルダーブレイクを強化アシストするカタパルトモード。この変形の全てを、Ｅブレスから遠隔操作出来るんだから！！！」

恵美さんの解説が終わるのと、ほぼ時を同じくして、ＤＶＤに流れていた映像も終了する。

「仮面ライダーって凄いんですね」

全ての解説を聞き終えた、なのはちゃんが拍手を送る。

それに続いて、すずかちゃんに、ありさちゃんと、はやてちゃん。

恵理さん、瞳さん、ヤスに、長谷川さん。

それだけではない。

翠屋に居た他のお客さん達も、何時の間にか恵美さんの熱弁を聞いていた様で、店内に居る全ての人から盛大な拍手が送られたのだ。

『キンキュウケイホウキンキュウケイホウキンキュウケイホウ……』

しかしその拍手の中、俺の耳にタッチノートから発せられる警告音が確かに聞こえて来た。

幸いにもタッチノートから発せられた警告音は、店内で今尚行われている盛大な拍手のおかげで、俺以外には聞こえていない様だ。

『『『マスター！』』』

メカ犬達もホルダーの反応を感知したのだろう。

テーブルの上に居たメカ犬に、足元に先程まで隠れていたメカ竜とメカ海までもが、俺に呼び掛ける。

「ホルダーが出たんだな？」

『うむ！』

『急ぎましょうマスター』

『ホルダー何てアタイがいれば、モーニングコーヒー前に片付けら

れるんだわさ～』

俺の言葉にメカ犬達が肯定の返事を返す。

「それじゃあ、行くぞ！」

頼もしい仲間達を連れて、俺は拍手で溢れかえる店内を、出来るだけ目立たない様に移動して、翠屋の外に出た。

翠屋を後にした俺は人通りの少ない路地まで走ると、周囲に誰も居ない事を確認してから、タッチノートを取り出して開いて、ボタンを押す。

『チェイサー』

タッチノートから音声が響いた直後に、何処からかエンジン音が唸りを上げて、此方へと接近して来る。

『お待たせマスター！！！』

そう言いながらやって来たのは、全身黒いボディーの乙女口調なオッサンボイスの、新宿二丁目系ライダーバイクのチェイサーさんだ。

「お願いします！チェイサーさん！！！」

『ＯＫマスター。アタシが超特急で運んであげるわよん』

チェイサーさんは俺の頼みに快く返事を返してくれた。

「それじゃあ何時もの行くぞ！メカ犬！」

『うむ！』

続いて俺はメカ犬の了解を取りながら、タッチノートのボタンを押す。

『バックルモード』

タッチノートから流れる音声と共に、俺の隣に居たメカ犬が、ベルトに変形して、自動的に俺の腹部へと巻きつく。

其処までの過程を確認した俺は、タッチノートを閉じて、音声キーワードを口にする。

「変身」

その言葉は俺にとって特別な言葉。

その言葉は何時だって俺に勇気を与えてくれた。

昔も今も……そしてこれから先の未来でも、きっとそれは変わらないだろう。

俺はタッチノートを閉じて、ベルトの溝に差し込む。

『アップロード』

タッチノートを差し込むと同時に、白銀の光が俺の全身を包み込んで、その姿を一人の戦士へと変えていく。

そして白銀の光が、飛散する事で現れたのは、メタルブラックにその身体を輝かせる、一人の戦士の姿だった。

ベルトから四肢へと伸びる銀のラインと、同色の額に取り付けられたV字型の角飾り。

そして二つの赤く大きな複眼が、絶大な存在感を放つ。

この海鳴市に住む人達は、俺のこの姿をこう呼ぶ。

仮面ライダー……

仮面ライダーシード！！！

それがこの姿の俺の……いや、俺達の名前である。

『準備が出来たなら乗ってねん！マスター！』

『今日はボクが活躍する日ですよね』

『何言ってるんだわさ～。何時だってアタイのオンステージなんだわさ～』

シードへと変身した俺に、チェイサーさんを始めとして、メカ竜とメカ海までもが口々に言ってくる。

俺は何時だって一人で戦ってきた訳じゃない。

支えてくれる仲間達が居たから、どんな相手とでも戦ってこれたんだ……

そしてその中でも、一番俺の身近で共に戦ってくれたのは、異世界からやって来たフルメタルボディーの犬型ロボットだった。

「今日も頼むぜ相棒！」

『うむ！』

そして俺はチェイサーさんに跨り、風の如く駆け抜ける。

今日も海鳴市の平和を守る為に、誰かにとって大切な何かを守るとその心に誓いを立てて……

だって俺は……俺達は仮面ライダーなのだから！！！！

## 第２３話　仮面ライダーシード・ハイパー解説タイム【後編】（後書き）

次回からはしっかりと本編に戻る予定です。

もしかしたら久々にキャラクターファイルという場合もあるかもしれませんが……

## 第２４話　真冬の空はミステリー？【前編】（前書き）

今回は以前なっぺさんから頂いたホルダーを参考として作成致しました。

多少設定が変わっている部分もございますが、本当にありがとうございます。

それでは今回も楽しんでいただけたら幸いです。

# 第２４話　真冬の空はミステリー？【前編】

今は使われなくなった古い、廃ビルの一室。

其処には本来、よっぽどの理由が無い限り、人が立ち入る事は無いだろう。

事実全体的に壁等も罅割れを起こし、素人でも理解出来る程に、老朽化したこの廃ビルを訪れる者は皆無だった。

しかしそんな廃ビルの一室に、確かに存在する二つの影。

その影の正体は、藍色と灰色の怪人だった。

確かにこの廃ビルには人間は寄り付こうともしない。

だがその代わりに、人とは異なる異形が、この廃墟と呼べるビルに潜伏していたのである。

「ねえ、メルト」

藍色の怪人オーバーが、もう一人の灰色の怪人メルトに、話し掛けた。

「……何だ？」

何処か無邪気さを漂わせるオーバーの声とは対照的に、メルトは抑揚の無い平坦な音質で答えた。

世間一般からすれば、メルトの態度は、相手の話を聞く状態とはとても思えないが、この二人にとっては何時もの事なのだろう。

オーバーはそんなメルトの態度に、構う事無く自分の用件を告げる。

「あの実験以来ずっと研究ばっかりしてて、何だか僕つまらないんだよね～」

「何が言いたい？」

「だからさ。研究はメルトがやってくれてるんだから、僕はちょっと外で遊んできたいんだけど……良いかな？」

自身の願望を言い終えたオーバーは、メルトに向かって両手を合わせながら、その様子を盗み見た。

相方の無責任な言動に呆れたのか、メルトは一度大きく肩を下にずらした後、研究を進める為に、手を休める事無く、オーバーに答えを返す。

「どちらにしても、この研究を次の段階に持っていくまで、私はここを動く事が出来ない。その間はライダー達の相手でも適当にしていろ……」

「へへ。そうこなくちゃね」

メルトの許しを貰い、気分を良くしたオーバーは、意気揚々と部屋を出て行った。

その姿を視線だけで見送ったメルトが呟く。

「……まだ完成には、遠いか。場合によっては、新たなサンプルが必要かもしれないな」

その呟きを耳にした者は、この廃ビルの中には、メルト本人を除き、誰一人として居なかった。

「未確認飛行生物？」

現在冬休みの真っ最中であり、多くの学生達を、平日の日中から外で見かけても何もおかしくはない。

当然の事ながら俺も、その学生の一人である。

まあ、多少他の小学生と変わっている部分といえば、現在進行系でお隣の幼馴染である、なのはちゃんの親御さんが経営する喫茶店、翠屋でアルバイトをしているという事ぐらいだろうか。

そして結構な頻度で、翠屋のアルバイトに精を出す俺に対して、何

時も難題を持ってくる一人の女性雑誌記者が居る。

俺が冒頭で発した言葉は、その女性雑誌記者、恵理さんの話を聞いた事により、口にした台詞だった。

「ええ。去年から目撃情報はあったんだけど、今年に入ってからその目撃情報が激増したのよ」

恵理さんはそう言って、コーヒーを一口飲んだ後、俺に数枚の写真を手渡した。

「これは？」

「その未確認飛行生物を目撃した人達が撮った写真よ。まあ殆どが遠くからの撮影だったり、ケータイのカメラで撮ったものだから、画像の質が良いとは言えないけどね」

俺は恵理さんの説明を聞きながら、数枚の写真に目を通していく。

写真はどれも一見すると、海鳴市の風景を映した何の変哲も無い写真に見えるが、良く目を凝らして見てみると、空に黒い点の様な物体が写っている。

しかもそれは、全ての写真に共通してだ。

「まあ、このままじゃ良く分からないから、手に入れた画像の中で、一番画質が良かったものを拡大したのがこれよ」

俺が渡された写真全てに目を通した事を確認した恵理さんは、そう言って新たな一枚の写真を俺に見せた。

「な！？」

恵理さんから新たに渡された一枚の写真を見て、俺は思わず声を上げてしまう。

「……凄いわよねそれ。私も最初は、合成写真じゃないかって疑ったもの」

驚く俺を見ながら、恵理さんは満足出来るリアクションが見れたとでも言うかの様に、何度も頷いた。

確かにこの拡大された画像に写っているものは、もしも本当だとしたならば、結構な衝撃映像な事は間違い無いだろう。

「これって……どう見ても人間ですよね？」

俺は確認の為に、改めて恵理さんに問い質す。

そう……

この写真に写って居るのは、紛れも無く人間だ。

別にスカイダイビングをしている訳でも無ければ、ハンググライダー等の人間単体で飛ぶ為の特殊な装備をしている訳では無い。

画質のせいか、人相までは確認出来ないが、黒い短髪の髪に、緑のマフラーを首に巻き、寒さ対策の為か、ブラウンのロングコートを羽織っている。

その下から辛うじて見えるのは黒いズボンに白のスニーカーという、日本の冬では特に珍しくも無い、私服を着た成人男性の姿だった。

確かにこの写真を見れば、恵理さんが合成写真だと思うのも納得出来る。

普通の人間が、特に何の装備もせずに、私服だけで空中遊泳している姿など、この世界ではありえない話だ。

アリシアちゃんの居る世界ミッドチルダの住人ならば、可能かも知れないが、何処ににあるかも分からない異世界の住人がそう簡単に、姿を晒すとは到底思えない。

「それで今回のお願いなんだけど……」

「嫌です」

俺は恵理さんが用件を言い終える前に、きっぱりと断った。

「あら、何でかしら？」

断られるとは露程にも思っていなかったのか、恵理さんが素で聞いてきた。

「当たり前です。まだ怪物が出たとかなら、ホルダーの可能性もあるでしょうけど、今回は空中浮遊してる人間が本当に居るかどうか調査しろとかその辺りの事を言うんつもりだったんでしょう？」

「流石純君。大当たりよ」

俺の返しに、恵理さんがおめでとうと言いながら、小さな拍手を送るが、正解して褒められる事で、ここまで虚しさを覚えるのは生まれて初めてかもしれない。

「はあ……あのですね。俺は普通の小学生で、メカ犬と出会ってなかったら、ホルダーと戦う何て事もしなかった筈の一般人なんですから、恵理さんは俺を便利屋か何かと、勘違いしてるんじゃないですか？」

この際はっきり言っておくべきだと思い、俺は少し強い口調で、恵理さんに抗議する。

「でも……純君」

先程まで俺の反論を黙っていた恵理さんが、申し訳無さそうに口を開く。

「ん？何ですか恵理さん。まだ俺の言いたい事は終わって無いんですけど」

「……まあ、純君の意見もそれなりに尊重したいんだけど、ちょっと後ろを向いてみて」

「え？後ろを……」

現在の位置を表すと、丁度恵理さんがカウンター席の一番隅に座っている形であり、俺はその横に陣取っているという図式だ。

俺は取り敢えず、恵理さんの言う通り、後ろに振り向く。

『恵理殿。その依頼。確かにワタシ達が引き受けた』

其処に居たのは、フルメタルボディーの犬だった……

しかも何か、とんでもない台詞を、口走った様な気もする。

「純君の相棒君は、乗り気みたいよ？」

『うむ！』

俺を間に挟んで、恵理さんと唐突に背後から登場して、勝手に話しを進めていくメカ犬が、人間とメカという種族どころか、有機物と無機物の垣根すら越えたアイコンタクト交わす。

心の何処かで、今回は厄介な事件に巻き込まれずに済むと考えていたのだが、どうやらそれは甘い考えだったらしい。

盛大な溜息を一つ吐き、俺は一時的にでも心の平穏を獲得する為に、仕事に戻る事にした。

丁度俺が仕事に戻ると、翠屋の扉が開き、新たなお客さんが入店する。

「いらっしゃいませ」

「すいません何時ものを一つ」

ただでさえブルーな気分の時に、訪れた常連客の一人、田中さん……

彼に何の罪も無いという事を、頭では理解していても、俺は心の底

から溢れ出る憎悪を押し止める事は出来なかった。

ちなみに数十分後、田中さんが泣きながら、翠屋を飛び出していったのは、何時もの事である。

「なあメカ犬。本当にここで良いのか？」

『うむ。恵理殿の情報が正しければ、この地点が最も目撃率が高いとされている場所なのだそうだ』

冷たい風がダイレクトに吹く河川敷に、俺とメカ犬は佇んでいた。

翠屋で恵理さんの話しを聞き終えた俺達は、アルバイトが終了すると、その足で先程メカ犬が言っていた、今回の目的でもある未確認飛行生物が多く目撃されているという河川敷にやって来たのである。

「それにしても意外だな」

『む、何がだ？マスター』

「いや、今回の件ってさ、ホルダーの可能性かどうかも凄く怪しいのに、て思ったからさ」

『そう言えばマスターにはまだ言っていなかったな』

俺がの質問に対して、メカ犬が思い出したとばかりに、返答する。

「どういう事だよ？」

『うむ。確かに人間の間で流れている情報だけでは、確証を得る事は出来なかったが、ワタシの情報網はそれだけではないからな』

「ジャックか……」

メカ犬の言葉を聞き、俺は一匹のチワワを思い出す。

俺がジャックに直接会う機会は、何か事件が起こった時ぐらいのものだが、メカ犬は個人的に馬があうのか、友人として接しているらしい。

シルバーライト島でも、お土産の限定犬用ジャーキーを買っていたので、相当仲が良いのだろうと推測出来る。

まあ、その話はさて置き、ジャックは小型犬でチワワだが、驚く事に情報屋としての腕は確かだ。

そのジャックの情報で、メカ犬が今回の未確認飛行生物を、ホルダーだと判断したのならば、その可能性は飛躍的に跳ね上がる。

「じゃあ、今回の件もホルダーが関係してる可能性が高いんだな？」

『いや、今回の件は、ホルダーとは関係無いだろう』

「……何だよそれ？」

メカ犬の言動に、俺は疑問を覚える。

『すまんマスター。今の言い方では確かに、要領を得ないな。正確に言うのであれば今のところはと言うのが正しい』

「今のところは？」

『以前にもマスターには説明したが、暴走プログラムを手に入れた人間は、多種多様な能力に目覚める』

そう言えばそんな事を出会った初日に、メカ犬が言っていた。

最近ではオーバー達が使う様な、違うタイプの暴走プログラムが出てきたし、今まで戦ってきた相手も、全員ホルダー化した後だったので、あまり深く考えた事も無かったけど……

『恐らく今回は、まだ完全にホルダー化していないのだろう。その状況化で相手を発見出来る可能性は皆無と言えるレベルだが、今回は運が良い』

ホルダー化する前の人か……ホルダー化した後も、それなりに正気を保っていた人間は過去に、何人か見てきたが、完全にホルダー化する前に接触する事が出来る可能性が出てきたのは、これが初めてである。

『マスター。今のところ特に実害が出ていない事を考えると、相手は話が通じる可能性が高い』

「上手く交渉すれば、戦わずに済むって事か」

『うむ。そう上手く行くかは分からないが、相手が正気を保っているのであれば、マスターの言う事も現実となるかもしれないな』

今までに例をみない、今回の珍しいケースに、俺は多少だがやる気を取り戻した。

「あれ？もしかして、其処にいるのって、純君とメー君やないか？」

「二人共こんな場所で、どうしたの？」

やる気を出したおかげか、少しだけ寒さが和らいだ様な気がしたところで、河川敷に陣取る俺とメカ犬に声が掛けられた。

「すずかちゃんに、はやてちゃん！？」

振り向けば其処には、先程の声の主である二人と……

「そんなところで何やってるんですか？純の旦那」

何故かヤスも居た。

俺とメカ犬を呼び止めたすずかちゃん達は、歩いていた道を外れて、こちら側に歩いてくる。

「まだ川遊びするには、早すぎると私は思うんやけど？」

「でもはやてちゃん。純君は普通に服を着てるし、川遊びは無いんじゃないかな」

「……釣りって訳でも無さそうですよね。そもそも純の旦那が釣りをするなんて話は聞いた事が無いですし」

近づいてきた三人は口々に、己の推理を言っていく。

まあ、夏ならばまだしも、真冬のこの時期に、何の目的も持たずに冷たい風が、容赦無く吹き荒ぶ河川敷に、やってくる物好きは殆どいないだろう。

実際この辺りには、ボートに乗って釣りをしている、近所のおじさん達と、飼い犬の赤坊を散歩させている三丁目の犬おばさんぐらいしか見当たらない。

だからこそ俺は、この三人にどう説明するべきなのか、頭を悩ませるのだが、俺が口を開くよりも早く、メカ犬が説明を開始した。

『実はワタシ達は恵理殿の取材の手伝いをしている最中なのだ』

「な！？」

メカ犬の事だから、何か適当な理由を言うものとばかり思っていたのだが、俺の予想を裏切り、メカ犬は真実を語り出す。

俺は突然の事態に、対処が追いつかず、その間にもメカ犬は、三人に話しを進めていく。

『最近この近辺で噂になっている未確認浮遊生物は知っているか？』

「当たり前や。昨日家に来たヘルパーさんも、この河川敷の近くで見たって言ってたんよ」

「本当にこの辺りに出るのかな？確かに皆噂してるけど……」

「海鳴連合の連中も、結構な数の奴らが見たって話しですからね」

思っていた以上にこの噂が有名だった為か、三人共メカ犬の話しに食いついてきた。

そして話は俺を抜きにして、あらぬ方向へと進み、この調査に新たなメンバーが三名程加わる事になってしまった。



「どうするんだよメカ犬！？」

俺は新たに今回の調査に加わった、すずかちゃんとはやてちゃんか

ら、一旦距離を置き、その直接の原因であるメカ犬に、抗議を開始した。

「まあまあ、落ち着いてくださいよ。純の旦那」

メカ犬を睨み付ける俺の横では、ヤスが苦笑いを浮かべている。

「ヤスだけならまだ良いけど、ホルダーと戦う事になったら、二人はどうするんだよ！？」

確かに今回は戦わないで終わる可能性もあるが、それはあくまで可能性の話だ。

世の中に絶対などと言う事は無い。

避けられる危険は避けるべきだと、俺は思う。

『まあ待てマスター。マスターが二人を心配する気持ちも分かるが、下手な嘘をついても、あの二人に通用しない事は、良く分かるだろ？』

「う……確かに」

メカ犬の反論に、俺は否定する事が出来なかった。

ただでさえ最近は、この場に居ない、なのはちゃんとアリサちゃんも含めて、妙に疑いを持たれている事を、俺自身自覚している。

流石に俺が仮面ライダーだという事は、知られていないだろうが、何かを隠しているというのは、勘付かれているに違いない。

『ここで下手な言い訳をしたところで、二人は納得しないだろうし、下手をすれば尾行される危険性もあるだろう。特にあの二人は、一度仮面ライダーの正体を探ろうと行動に移した事がある程だからな』

「……それは」

否定したいところではあるが、メカ犬の言う通り、あの二人ならば、それくらいの行動力を発揮しそうだ。

恐らく少しでも不振に感じたと二人が思えば、また何時かの探偵魂を呼び起こしてしまう危険性は充分に有り得る話しである。

『だからこそ目の届く場所に最初から居てくれた方が、安心だとワタシは判断したのだ。それに幸いにもこの場にはヤスがいる。いざとなれば、二人をヤスに任せておけば、最低限の安全は確保出来る筈だ』

「任せてください純の旦那！嬢ちゃん達は、俺が必ず守りますから！」

メカ犬が俺にそう諭したところで、ヤスが爽やかな笑顔で言った。

「そう言えば、何でヤスがすずかちゃん達と一緒にいたんだ？」

普段から翠屋でアルバイトをしているし、俺と親しく会話している事から、二人と面識自体はある事を、俺も知っていたが、それでは一緒にいた理由にはならない。

「……実は図書館に行っていたんです」

俺の疑問に対して、ヤスが小声で答える。

何故其処で小声になるのだろうか？

そもそも更生したとはいえ、元暴走族のリーダーが、図書館に本を読みに行くという発想は、中々思いつかないのは、俺の偏見の為だけなのか……

「そ、その二人には帰りに相談に乗って貰ってたんですよ……」

俺がそんな失礼な事を考えている間にもヤスは話しを続ける。

しかも何処か恥ずかしそうに、頬を赤く染めながらだ。

その姿は、悪いとは思いつつも、男の俺から見たら、正直気色悪く見えてしまった。

恥ずかしそうに頬を赤らめながら悩みを打ち明け始める、ワイルド系のイケメン男子……

女性の視点で見たら、この姿を可愛いと思う人もいるのだろうか？

「あの、純の旦那も知り合いなんですよね？そ、その柿崎さんと……」

「柿崎さん……ああ！保奈美さんの事か！」

柿崎保奈美さん。

海鳴図書館で司書を務めるお姉さんで、俺達とは良く話す気の良い人である。

多少人の話しを聞かない、暴走癖があるのが厄介な人でもあるが……

「その保奈美さんがどうかしたのか……まさか！？」

俺はヤスの先程から繰り返される挙動不振な言動を見て、一つの結論に辿り着く。

「……そう言う事です」

「春はまだ先だと思ってたけど、ヤスには一足早く来ていたんだな」

『まさに青春という名の春だな』

俺とメカ犬は、図らずも親父くさい言い方で、ヤスを見ながら言った。

「実は妹に頼まれまして、代わりに本を返しに行ったんですけど、恥ずかしながら其処で一目惚れしまして……」

ヤスは照れながらも、出会いの経緯を俺達に説明する。

というか、ヤスに妹が居たというのも、初めて知った新事実だ。

「ねえ！何か空に浮かんでるみたいだよ！！！」

「あれが未確認飛行生物なんやないか！？」

すっかり話題が、ヤスの恋愛談義に移行していた所で、すずかちゃんとはやてちゃんの声が、俺の耳に聞こえてきた。

俺は本来の目的を思い出して、急ぎ視線を上空へと向ける。

距離が離れている上に雲に隠れたりして、偶に視界から消えてしまったりするが、其処には確かに存在していた。

それは確かに未確認浮遊生物……

空を飛ぶ人間だったのである。

## 第２４話　真冬の空はミステリー？【前編】（後書き）

気付けばもうすぐ１００万ＰＶを超えそうになっていて驚くばかりです……

これはついにあの企画を立ち上げるべきかなと最近良く思います。

具体的に言えば、人気キャラクター投票……皆さんはどう思いますか？

## 第２４話　真冬の空はミステリー？【後編】（前書き）

長らくお待たせ致しました。

約一週間振りとなりますが、今回も楽しんでいただけたら幸いです。

# 第２４話　真冬の空はミステリー？【後編】

「ほ、本当に人が浮いてるん！？」

「……凄い」

はやてちゃんとすずかちゃんが、上空に浮かぶ人間を見て驚愕している。

それは俺も同じだが、何よりもまず確かめなければいけない事があった。

「メカ犬。あれが暴走プログラムを使ってるかどうか分かるか？」

『可能性は高いが、こう距離が離れていては、分析する事が出来ないな』

俺の質問に対して、メカ犬が返してきた答えは、酷く曖昧なものだった。

「どちらにしても、このまま逃がす訳には行かないよな……」

そう言いながら俺は、未だに上空に浮遊している謎の人物を見て驚き続けている、はやてちゃんとすずかちゃんに視線を移す。

続いて上空に視線を向けると、空中に浮き続ける謎の人物は、緩やかにではあるが、移動を始めている。

このまま後を追いたいところではあるが、今それを行動に移せば、

間違い無く二人も着いて来るだろう。

相手の正体に確証が持てない今、危険かもしれない場所に、あの二人を連れて行く訳にはいかない。

「ここは任せてください。純の旦那。俺が二人の注意を引き付けときますんで、二人は隙を見てあれを追いかけてください」

これからどう動くべきか、俺とメカ犬が話し合っていると、ヤスがそう言って、二人の下へと走り出す。

『マスター。ここはヤスの言う通り、ワタシ達は上空を浮遊している奴を追跡しよう』

「ああ」

俺とメカ犬は、ヤスがはやてちゃんとすずかちゃんの注意を引いている瞬間を見計らい、一気にその場から駆け出した。

上空を見上げながら、追跡を続けると、暫くして人気の無い空き地へと辿り着く。

「確かこの辺りに降りてきたと思ったんだけど……」

『うむ。ワタシの目にもそう見えた。探すぞマスター』

メカ犬も俺の言葉に頷きながら、辺りを見渡す。

空き地と一言に言っても、河川敷沿いに存在している為か、その範囲は広い上に、近々何かの工事が始まるのか、ドラム缶等の遮蔽物

もあるので、発見は容易ではない。

「うわあああああああああ!?」

其処に聞こえて来たのは、男性の悲鳴だった。

『マスター!』

「分かってる!この先だな!」

俺はメカ犬と共に、悲鳴の聞こえた場所へと走り出す。

悲鳴はさほど離れた位置から聞こえた訳ではなく、俺達の視界を遮っていた目の前のブルーシートを横切ると、すぐに目的の場所へと辿り着く。

「……お前は!?」

『何故ここに居る!?』

そして俺達は、その場に居る筈の無い人物が居た事で、驚愕の声を上げる。

「何だ……君達も来てたんだ?」

目の前に居たその人物は、先程まで空中浮遊していた見知らぬ男性ともう一人。

藍色の怪人オーバーが居た。

「すぐにその人から離れろオーバー！！！」

俺はその光景を見た瞬間に叫ぶ。

それもそうだろう。

悲鳴を上げた男性は、オーバーの姿を見た事により、その顔を恐怖に慄かせて、尻餅をついている。

恐らくこの人が、未確認飛行生物の正体に違いない。

その証拠に男性は、写真で見たのと同じ格好をしていた。

更にこの場にオーバーが居るという事は……

「少し待っててくれるかな？すぐに終わるからさ」

俺の叫びに対して、オーバーはまるで友達を少し待たせるかの様な、軽い口調で話すと、俺達が止める間も無く、右手を、いまだ尻餅をついて動けないでいる男性の頭に向けた。

「う、うわあああああああ！？」

それと同時に男性は、何故か苦しみ始める。

『一体何をした！？』

突然苦しみ出した男性を見て、メカ犬も叫ぶ。

「ふふふ。別に対した事じゃないよ。僕は少しだけ彼の夢を後押し

してあげただけなんだからさ」

メカ犬の叫びとは逆に、オーバーは何処までも軽い感じで言葉を紡ぐ。

出来ればすぐにでも苦しみ続ける男性を助けたいが、オーバーの現在居る距離が、男性に近すぎる為、どう動くべきか、内心で焦りを覚えるが、その現状は次の瞬間には、杞憂のものとなる。

「あああああああああああああ！！！！！！」

苦しみもがいていた男性が、一際大きな悲鳴を上げるのと同時に、全身が緑色の光に包まれたのだ。

『キンキュウケイホウキンキュウケイホウキンキュウケイホウ……』

そして時を同じくして鳴り響く、タッチノートの警告音。

次々と重なる要素に、俺は一つの結論に辿り着き、静かに呟きを零す。

「……メカ犬の予想は正しかったって事か」

全身を包んでいた緑色の光が飛散すると、男性の姿は、人とは明らかに違う、異形の姿へと劇的な変化を果たす。

その姿を一言で表すとするならば、昆虫のトンボに酷似していた。

まるでヘルメットの様に顔の半分以上を覆う白い複眼と、背中に生えた四枚の透明な羽。

全身を覆う緑色の甲殻は薄っすらと鈍い輝きを放っている。

今俺の目の前で男性が変化した、その異形の姿は、間違い無くホルダーだ。

メカ犬の話しでは、まだホルダー化はしていない可能性が高いという事だったが、実際は目の前でホルダーへと変化を果たした。

メカ犬の予想が最初から外れていたという可能性もあるが、恐らく原因は目の前にもう一人いる、藍色の異形の存在が、大きく関わっているに違いない。

「僕は少しだけ、彼の夢を後押ししただけさ。」

ホルダーを眺めながら、オーバーは愉快そうに笑い声を上げる。

その言葉から、オーバーがあの男性に何かをしたという事は理解出来るが、一体何をしたというのだろうか……

『先程オーバーから、特殊なエネルギーが発せられているのを感知した。推測の域を出ないが、そのエネルギーが彼の持っていた暴走プログラムに反応して、ホルダー化を促進したのかもしれん』

「ホルダー化の促進？」

『うむ』

俺が思わず鸚鵡返しに聞き返した言葉に、メカ犬が頷く。

「良いのかな？お喋り何てしてる暇は無いと思うけど？」

俺とメカ犬の会話に、オーバーが割って入るのとほぼ同時に、一陣の風が吹き荒れる。

その風の発生源は、ホルダーだった。

ホルダーの全身から、まるで暴風の様な、強い風が発生して、周囲の大気を蹂躙する。

空中を浮遊していたという事から、幾つかの予測はしていたが、この風がホルダーの能力という事だろうか？

『行くぞマスター！』

「ああ！」

俺はホルダーの動きに警戒しながらも、メカ犬の言葉に返事を返し、タッチノートを取り出した。

もしかしたら今回は戦いを避ける事が出来たかも知れないと考えていたが、現実はそう甘くは無いらしい。

その事実を、俺の肌にホルダーが巻き起こす風と、同時に触れる、強烈な殺気が物語っている。

男性がホルダー化した後の、この態度の変わりようを見ると、オーバーが他にも何かしたのではないかと、考えてしまう。

そうで無ければ、先程の男性との態度のあまりの違いに、説明が着

かない。

『右に飛べ！マスター！』

それは一瞬の出来事だった。

俺がタッチノートのボタンを押そうとしたその時、ホルダーの右腕が僅かに動き、それとほぼ同時にメカ犬がすぐ横で叫び声を上げる。

その叫びを聞いた俺は、考えるよりも先に、その場から言われた通り、右側に飛び退く。

飛び退いた直後、見えない何かが、先程まで俺の居た地点の地面を容赦無く抉った。

後一秒でも反応が遅れていれば、俺は間違い無く、その何かに巻き込まれて、ただでは済まなかっただろう。

「危なかった……」

一筋の冷や汗を額から流しながら呟いた俺は、心の中でメカ犬に感謝しつつ、次の攻撃が来る前に、急いでタッチノートのボタンを押した。

『バックルモード』

タッチノートから流れる音声と同時に、メカ犬がベルトに変形して、俺の腹部に自動的に巻きつく。

それを確認してから俺はタッチノートを閉じて、力ある言葉を口に

する。

「変身」

音声キーワードを入力して、俺は素早くタッチノートを、ベルトの溝に差し込む。

『アップロード』

ベルトにタッチノートを差し込んだ事により、ベルトから白銀の光が発生して、俺の全身を包み込み、その姿を一人の戦士へと変える。

俺の全身を包む白銀の光が飛散すると、其処に一人の仮面ライダーが存在していた。

メタルブラックのボディーに、ベルトを中心に四肢へと伸びる、銀色のライン。

それと同色の額に輝くV字型の角飾りに、赤く大きな複眼が大きな存在感を放っている。

『あのホルダーの能力は、どうやら風を操る様だ。目視出来ない攻撃に注意した方が良いぞマスター』

シードへの変身を完了した俺に、ベルト状態となったメカ犬が助言を呈す。

「分かった！」

俺はメカ犬に、そう短く返事を返すと、オーバーとホルダー目掛け

て駆け出した。

最初に俺が狙うのはホルダーだ。

オーバーの戦い方は、基本的に剣を振るう接近戦。

つまり距離を取れば、それでけで攻撃を受けずに済む。

それに対して、ホルダーは不可視の風を操るという遠距離攻撃を仕掛けてくる。

オーバーの援護に回られて、遠近同時に攻撃を仕掛けられたら、かなり厄介な事になるだろう。

だからまずは、ホルダーを倒す！

「させないよ！」

しかしオーバーもその考えを読んでいたのか、右手に剣を生成して、俺とホルダーの直線上に立ち塞がる。

だが俺だって、その位は想定済みだ！

「メカ犬！」

『うむ！』

俺とメカ犬は互いに声を掛け合う。

直接言葉にしなくても、お互いに何をするべきなのか、その答えが

自然と導き出される。

俺はそのまま減速する事も無く、全速力で駆け続けながら、ベルトの右側をスライドさせて、黄色いボタンを押した。

『ベーシックファントム』

ベルトから流れる音声と共に、発生する大量の光が、メカ犬の遠隔操作で動く分身体となる。

『はあああああああ！』

そして分身体の操作を開始したメカ犬は、俺の前に躍り出て、立ち塞がるオーバーに、不意打ち気味のミドルキックをお見舞いした。

「うわ！？」

流石にこれにはオーバーも驚いたのか、剣の腹で防御して直撃こそは防ぐが、俺とホルダーを結ぶ直線状から退ける事に成功した。

『ここはワタシに任せて、先に行けマスター！』

分身体を操るメカ犬は、更にオーバーに追撃を仕掛けながら、高らかに叫ぶ。

「頼むぞメカ犬！」

それに対して俺は、振り向く事無く、メカ犬にオーバーの相手を任せて、ホルダーへと肉薄する。

しかしホルダーも、ただ其処に立っている訳では無く、当然の事ながら迎撃を開始してきた。

先程と同じ様に、ホルダーが腕を振り下ろすと、再び不可視の風が轟音と共に、俺目掛けて放たれる。

「喰らうか！！！」

だが俺も来ると分かっている敵の攻撃を、態々受けるほど優しく無い。

ホルダーが腕を振り下ろすのを見計らい、俺は大きく跳躍した。

その場から俺が飛び上がった事により、ホルダーが放った風は、目標を失い俺の足元を虚しく通り過ぎる。

「たあああああ！！！」

そして俺が咄嗟に取った行動に驚くホルダーに、俺は容赦無く踵落しを、ホルダーの脳天に命中させた。

頭部にダメージを負い、後ろへ下がったホルダーを逃すまいと、俺は更に接近戦で畳み掛けていく。

距離を取られれば、目に見えない厄介な攻撃がやって来る。

だからこのホルダーに対しては、常に接近戦で戦う事で、能力を発動させる時間を与えない様に、注意しなければならない。

「はあ！！！」

俺は気合と共に拳をホルダーの腹部に叩き込み、その動きを封じると、俺は今がチャンスだと判断して、すぐさまベルトからタッチノートを引き抜き、全体図を表示させて、右拳の部分をタッチしてから、再びタッチノートをベルトに差し込んだ。

『ポイントチャージ』

ベルトから発生した光が、右腕のラインを通じて、右拳に集約する。

「こいつで決めるぜ」

俺は光が集約された右拳を振り被り、重心を低く身構えて、一気に駆け出した。

「ライダーパンチ」

右拳を振り抜き、必殺の一撃が、ホルダーを捉えようとしたその時、突如として横から大きな影が、俺とホルダーの間に割り込んで来た。

その影の正体は、オーバーと良く似た色合いの身体を持つ量産型のホルダーモドキである。

「くっ!?」

既に振り抜いた拳の軌道を変える事も叶わず、俺は右拳をそのままホルダーモドキに叩き込む。

その一撃をまともに喰らい爆発するホルダーモドキに、俺は脇目も振らず、再び拳を振り被って本来の目的だったホルダーに叩き込も

うとするが、それを実現する事は出来なかった。

ホルダーモドキが間に割り込む事で、一瞬だが致命的な時間を、ホルダーに与えてしまったのである。

既に能力を発動させていたホルダーは、俺の拳が届くよりも早く、風の衝撃波を俺の身体に命中させて吹き飛ばした。

「うわ！？」

カウンター気味にその一撃を受けた俺は、予想以上に後ろへと飛ばされてしまう。

何とか受身を取りながら、地面に落ちた後に、間を置かずすぐさま立ち上がるが、ホルダーの追撃は止む事を知らない。

俺が吹き飛ばされている間に、上空へと飛び上がったホルダーが、連続で風の衝撃波を、俺目掛けて放ち続ける。

「危ない！？」

目に見えないその連続攻撃を、俺は感じ取れる風の流れと、勘だけを頼りに、何とか避けるが、何時直撃を受けたとしても、おかしくは無いだろう。

そして俺が何度目なのか、もはや数えてすらいないホルダーの衝撃波を避けた直後、数体のホルダーモドキが、俺の行く手を阻む。

しかしその間にも、ホルダーは次の攻撃を放つ体勢を整えている。

どうやらこのホルダーモドキ達共々、俺を狙い撃つつもりの様だ。

『マスター！』

このままでは不味いと、俺が現在の状況を理解したその時、メカ犬の声が聞こえてくると同時に、俺の前に立ち塞がっていたホルダーモドキの内の一体を、分身体が殴り飛ばした。

それにより出来た隙間目掛けて俺は、全力で飛び込んだ。

ほぼそれと時を同じくして、背中に強烈な風を感じた。

「この！！！」

俺は後ろで巻き起こった風により、空中でバランスを崩しながらも、身体を反転させて、何とか着地に成功する。

すると其処には小さなクレーターが出来上がっていた。

『大丈夫かマスター？』

クレーターを目にしてすぐに、ベルトからメカ犬の声が聞こえて来た。

どうやら先程の攻撃で、分身体の効果が終わってしまったらしい。

「ああ、助かった。流石に今のをまともに受けてたら、危なかったからな」

『すまないなマスター。オーバーに逃げられた上に、余計な置き土

産まで残されてしまった』

周りを見渡せば、後五体程のホルダーモドキが、この空き地居るのが分かった。

「気にするなよ。あいつの逃げ足が速いのは、今に始まった事じゃないだろ？」

別にメカ犬の失態ではないので、俺は気にするなと、フォローを入れておく。

「それより今は、この状況をどうするかだろ？」

『……うむ。ここはチェイサーを呼んで、空中戦に持ち込むべきだとワタシは思うが、一つ問題があるな』

「確かにな……」

俺はメカ犬が言おうとしている事に気付き、空を飛ぶホルダーと周囲のホルダーモドキ達に気を配りつつ、思考を巡らし始める。

ホルダーモドキ達の相手はもう一度分身体を生成して、メカ犬にでも任せておけば良いが、一番のネックはやはりあの見えない風の衝撃波になるだろう。

何の対策もせずに、チェイサーさんを呼んで、空中戦を仕掛けたとしても、恰好の的となってしまうのは、明らかだ。

地上とは違い、上下左右３６０度何処から来るのか分からない攻撃を避けて、此方の攻撃を当てるのは至難の業である。

『見えないとしても、せめて何処から攻撃が来るのか分かっていれば対策の仕様があるんだが……』

「何処から来るのか分かれば……そうか！」

メカ犬の呟きを聞き、俺はこの状況を打開する一つのアイデアを思いつく。

『マスター？』

「俺に作戦がある。協力してくれよ相棒」

俺はメカ犬にそう言ってから、ベルトのタッチノートを引き抜き、素早く操作を開始していく。

『ホバーチェイサー』

『ガイア・コール』

タッチノートから音声が流れると、すぐに頼れる二人の増援が駆けつけて来た。

『お待たせマスター』

『やっとボクの出番なんですね先輩』

ホバーモードで空中から飛来したチェイサーさんに、その上のシートにちゃっかり乗ってきたメカ竜が、俺とメカ犬に声を掛けてくる。

「それじゃあ行くぞ！メカ犬、メカ竜」

俺はまず二人に確認を取ってから、ベルトの右側をスライドさせて、黄色いボタンを押した。

『ベーシックファントム』

そしてベルトから発生した大量の光が、再び分身体を生成する。

「まだまだ！」

更に俺はベルトの右側の青いボタンを押す。

『サーチフォルム』

そして俺のメタルブラックのボディーは、音声が流れると同時に、スカイブルーへと染め上がる。

「そんでもってラスト！」

サーチフォルムへのフォルムチェンジを完了させた俺は、タッチノートを操作する。

『スタンディングモード』

スタンディングモードを発動させた事により、メカ竜がチェイサーさんから飛び降りながら、アタッチメントパーツへの変形を果たし、俺の手に収まった。

メカ竜が変形したアタッチメントパーツを、握りながら俺はタッチ

ノートを、ベルトに差込そのままベルトの左側をスライドさせて、アタッチメントパーツを其処に差し込んだ。

『サーチ・ガイア』

アタッチメントパーツを差し込んだ直後、音声が流れると共に、俺の周囲にメタルレッドの装甲が展開されて、全身に装着されていく。

「それじゃあ、ホルダーモドキ達の相手は頼んだぞメカ犬」

『うむ。任された』

サーチガイアへの強化変身を完了させた俺が、そうメカ犬に言うと、分身体の首を縦に一度振って、ホルダーモドキ達の居る方向に駆け出して行った。

それを見送った俺は、続いてホバーモードで空中に待機しているチェイサーさんに飛び乗った。

「俺達も行きましょう。チェイサーさん」

『ＯＫよん！』

俺の声に快く答えてくれたチェイサーさんは、ホルダー目掛けて飛び上がる。

しかしそれをホルダーが、見逃す事も無く、不可視の攻撃、風の衝撃波を俺とチェイサーさんに向けて放つ。

その攻撃は確かに見えない……だけど！

「チェイサーさん！右に回避！！！」

『了解よん！！！』

チェイサーさんは俺の指示に従って、右に急速旋回する。

それを追う様にして、ホルダーが俺達の背後を取り、再び腕を振り下ろす。

「今度は左へ！！！その後すぐに上昇してください！！！」

俺を乗せたチェイサーさんは、縦横無尽の動きで、次々とホルダーの攻撃を回避していく。

ここで何故見えない筈の攻撃を、俺が予測出来たのか、説明しておこうと思う。

確かに風は目に見えないが、物理的に存在している事は紛れも無い事実だ。

だから例えそれ自体が、見えなかったとしても、周囲の物や、風自体が作り出す様々な音という様に、風は多くの現象を引き起こす。

それを見越してのサーチフォルムだ。

サーチフォルムは、全ての感覚を飛躍的に高めてくれる。

俺はその能力をフル活用する事で、ホルダーの攻撃全てを予測したのだ。

そしてサーチフォルムになって、気付いた事がもう一つ……

「悪夢はここで終わらせる！」

俺はホルダーの攻撃を避け切り、上空へと急上昇するチェイサーさんの上で叫びながら、ベルトの両サイドのボタンを押す。

『サーチバレット』

『ガイアブレイガン』

ベルトから光が放たれて俺の両手に生成された武器を、俺は更に一つに重ねた。

『ジョイントアップ・ガイアバレット』

二つの武器を組み合わせる事で、新たに強力な武器が誕生する。

「あのホルダーが纏う風は、自分の頭上に作り出す事は出来ない！！！」

サーチフォルムとなる事で、気付いた事がそれだ。

それはまるで台風の目の様に、其処だけが、風の通り道になっていた。

『行きましょうマスター！！！』

メカ竜の掛け声を合図に、俺はチェイサーさんから飛び出して、左

腰のレバーを引く。

『マックスチャージ』

ベルトから発生する眩い光が、腕のラインを通じて、ガイアバレットの銃身へと集約される。

「こいつで決めるぜ」

俺は狙いをホルダーの頭上一点にのみ絞込み、引き金を引いた。

「ガイアシューター」

限界まで収束された光線が、見事にホルダーを貫き、爆発を引き起こした。

「チェイサーさん！」

『任せてマスター！！！』

俺がチェイサーさんを呼ぶと即座に飛んできて俺を拾って、そのままホルダーの爆発地点に飛び込んだ。

その煙から出てくると、俺の手の中には、ホルダーの素体となっていた一人の男性が気絶している。

怪我をさせない様に、慎重に地面に降下していくと、分身体を操っているメカ犬が、大きく手を振っていた。

どうやら向こうも、無事に片付いたらしい。

こうしてこの日から、未確認飛行生物の目撃が噂される事は無くなった。

「ふふふん。やっぱり私の勘は当たっていたみたいね！」

翠屋のカウンター席で、恵理さんが胸を張りながら主張した。

今回の未確認飛行生物についてのあらましを説明したら、この態度である。

「……そうですね」

心の中ではただの偶然だろと、思うが俺は苦笑いを浮かべつつ、社交辞令を述べるだけに止めておく。

どうせこの人に何を言った所で、聞く耳なんて持っていないのだから、まともに対応するだけ体力の無駄という事は分かりきっている。

今は少し忙しいので、あまり長く相手をしてあげられないというのもあるが……

「保奈美さん……」

それというのも、本日同じシフトで働いているヤスがずっと心ここにあらず、所謂上の空とでも言うべき状態になってしまっているからだ。

河川敷で会った時は、まだ軽い症状だったのだが、日が経つにつれて、何処かのベタな恋愛少女漫画みたいな感じになってしまったのだ。

ヤスの話しによると、これが初恋なのだそうだが、これは思いのほか重症である……

「恋だね」

「恋やな」

そんなヤスを眺めながら、事情を知っているすずかちゃんと、はやてちゃんは、テーブルで紅茶を飲みながら乙女の顔をしていた……

「はあ……」

俺はそんなヤス達の様子を見て、溜息を一つ吐いてから、現在戦力外となっている同僚の分まで、仕事に精を出す事にした。

本日の海鳴は、まだまだ寒い風が肌を刺激するが、俺の周りには少し速い恋の春が到来している様で、取り敢えずは平和である。

# 第２４話　真冬の空はミステリー？【後編】（後書き）

１００万ＰＶ突破記念は何をやろうかな……

# 第２５話　山猫と少年と……【前編】（前書き）

お久しぶりです。

作者のＧ－３Ｘです。

前回の更新の後、遂にこのヘタレ転生者も、総アクセス数１００万ＰＶを突破する事が出来ました。

これも全て、ありがたくもこの作品を読んでいただける読者様達のおかげです。

そんな訳でまた懲りずに、何か企画をやろうかなと……考えてはいますが、少し前にW編をやったばかりですので、どうしようか悩んでおります。

後書きに実行するかどうかは別として、思いついたネタを載せてみますので、そちらもよろしければ、みていただけると嬉しい限りです。

それでは今回のお話も楽しんでいただけたら幸いです。

# 第２５話　山猫と少年と……【前編】

「……これで今週に入って五件目ね」

「そうですね」

冬の澄んだ空気の中、朝日が眩しいとある早朝の、海鳴警察署内の一室。

ホルダー対策特務課のデスクで、セーラー服を着た美少女と、スーツ姿の男性が、コピー用紙の束に書かれた内容に目を通しながら、頭を悩ませていた。

「例の神社のホルダー事件が解決したと思ったら、またこの騒ぎなんだから……」

セーラー服を着た美少女中学生という見た目からはとても想像出来ないが、この特務課で最も高い役職である恵美が、溜息を零す。

「まあ、そうですね……」

そしてもう一人の特務課に配属されている恵美の直接の部下でもある、去年の春に刑事となり、そろそろ新米という言葉が取れそうになっている、スーツ姿の青年、長谷川が恵美の言葉に同意しながら、苦笑いを浮かべ先程と同じ様に相槌を打つ。

二人がこの様な悩みの表情を浮かべているのは、全て今現在二人が目を通している、コピー用紙に書かれている内容が原因だった。

「ここ最近になって、海鳴市内の公園各地で、怪物を目撃したって証言が続いてるけど、何も被害が出てない分、前の木を切り倒していたホルダー以上に、目的が意味不明だわ」

「ええ。でもこの目撃証言が一件だけなら、見間違いという事もあるかも知れないですけど、連日目撃証言が増えている上に、その怪物を見たと証言している人達も大勢居る様ですし、何かがあるのは間違い無いんじゃありませんかね？」

長谷川の意見に、恵美は少しの間、考えてから一つの決定を下す。

「取り敢えず今のままじゃ、情報が少なすぎてどうしようもないわ。長谷川君は、この五件目の目撃証言があった公園で、他に何か情報が無いか、聞き込みをして来て。私はその間にやる事があるから、そうね……お昼過ぎに一度、その公園に近いし、翠屋で合流しましょう！」

恵美は早口にそう捲くし立てると、長谷川の返事も待たず、一目散にホルダー特務課から飛び出して行ってしまった。

「……は、はい」

そして恵美が飛び出してから数秒後、長谷川の返事が、虚しく部屋の中に響き渡った……

「それじゃあ皆に、今日から一緒にお勉強をする事になるお友達を紹介するわね」

小学生になって、初めての冬休みが明けた、初日の早朝のＨＲ。

私立聖祥大附属小学校の一教室内で、俺を含むクラスメイト全員が、教卓に立つ我らが担任、真理子先生の言葉に注目していた。

「入って来て良いわよ！」

俺達が話しを聞いている事を確認した真理子先生が、教室の出入り口に向かって言葉を投げかける。

その声を合図に、扉が勢い良く開かれるのと同時に、投げ込まれる赤いカーペットと、最早騒音とも呼べる音量を誇る壮大なファンファーレ。

去年の夏休み明けにも、これと似た様な光景を見た事があるなと思ったのは、俺だけでは無い筈だ。

その証拠に、周りを見渡せば、なのはちゃん達を含む他のクラスメイト達も、またかと言った具合の表情を浮かべていた。

こんなプロ野球が行われる球場で、虎的モチーフのチームの中に、一人だけ大きな人的チームのファンが紛れ込んでしまったかの様なアウェーな空気を一切読まず、一人の猛者が堂々と教室に広げられたカーペットの上を歩いて、此方へと進んで来る。

執事服に身を包む一人の老人が、バスケットを片手に、中に入った白い花弁を散らしながら……

最初に断っておくが、ここは小学校の教室であり、基本的に大人は教師及び、設備等の関係者しか居ないは筈だ。

勿論世の中には例外が常にあるので、もしかしたらという事も可能性として、存在するかもしれないが、断じて彼が真理子先生が言っていた転校生という事は有り得ない。

……というか真理子先生が、筆舌にし難い、凄い顔になっている。

それこそまともに目を合わせたら、トラウマになりそうなレベルだ。

しかし老執事は、そんな刺さる様な視線に晒されながらも、歩みを止める事無く、教壇の前まで辿り着いてしまった。

そして今も聞こえ続けるファンファーレの音量をも凌ぐ、大声量で高らかに声を張り上げる。

「姫様のおなああああああああああああああああありいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

変態老執事サバスチャンはそう叫んだ後、ポケットから手の平に収まる程度の板状の装置を取り出して、ボタンを押した。

サバスチャンがそうした事により、先程まで鳴っていたファンファーレが、ピタリと鳴り止む。

……もしかして今回は、録音した音を、流していただけなのだろうか？

今更だが護衛隊員の彼等が入ってくる様な様子は一切無い。

「全く……あれほど止めろと言ったのに、本当やりおったのじゃ」

サバスチャンの魂のシャウトを聞いた直後、銀髪の少女が右手で軽く頭を抱えながら、入ってきた。

「いいえ！成りませんぞ姫様！！！例え文化は違えど、姫様が姫様であるという事実は変わらないのです！！！成ればこそ、その威厳を大衆の者達に理解させなければいけません！！！」

サバスチャンは自身が仕えるべき主、シルバーライト島のお姫様、エミリーちゃんに、熱弁を振るい続ける。

だがその度に、このクラス全体の体感温度が、急激に下がっているという事実を、サバスチャンは正しく理解出来ているのだろうか？

「それを言うのであれば、この日本には、郷に入っては郷に従えという言葉があるのじゃ！第一こんなに散らかしおって、周りの迷惑も考えぬか！！！」

そんなサバスチャンに対して、エミリーちゃんが日本古来のことわざで打って出る。

去年の夏の頃よりも、日本においての、多くの常識を学んだのだろう。

あの登場の仕方が、シルバーライト島での正式な作法なのかどうかは知らないが、少なくても日本の学校でやるには恥ずかしい行為なのだと、認識したらしい。

「し、しかし姫様……」

「お話中のところ、失礼しますね？」

主であるエミリーちゃんに叱られながらも、サバスチャンは尚も抗議しようとするが、その言葉は我らがクラスの担任教師である真理子先生の言葉によって遮られる。

その表情は先程の筆舌にし難い顔ではなく、笑顔を浮かべているが、サバスチャンを見詰めるその瞳は、凍てつく様な寒さすら感じられた。

「それじゃあ改めて説明するわね。皆も知っているだろうけど、去年の九月に交換留学生として、クラスで一緒にお勉強をしたエミリーさんです」

ほんの数分前に、強制的にこの教室から排除されたサバスチャンの存在など、最初から無かったかの様に、真理子先生は、改めてエミリーちゃんの紹介を始めた。

いまだに教室の外から、変態老執事の咽び泣く声が聞こえてくる様な気がするが、きっと幻聴に違いない。

「去年の九月以来じゃな皆。中には何人か年末に会った者もおるが、また宜しく頼むのじゃ」

真理子先生に紹介されたエミリーちゃんが、クラス全体を見渡しながら挨拶をする。

最後に俺と目が会って、ウインクした様に見えたのは、気のせい……じゃ無さそうだ。

以前にメカ犬が帰国の際に、飛行機の中でエミリーちゃんから預かったという言伝を聞いていたので、近い内に日本に来るとは思っていたが、まさか三学期の初日に、転校生としてやってくるとまでは考えていなかった。

俺は思わず、苦笑いを浮かべてしまう。

「じゃあ、エミリーさんの席は、純君の隣で良いわね？」

二度目の自己紹介を終えたエミリーちゃんに続き、真理子先生が口火を切り、俺以外のクラスメイト達が、速やかに机と椅子の移動を開始する。

「ち、ちょっと！？」

その迅速な対応と、エミリーちゃんが俺の隣の席になるのが、俺以外の共通認識かの様な皆の振る舞いに、どういう事なのかと、俺は動揺の声を上げる。

しかし俺はここで、自分を見詰める一つの視線に気付き、その視線の感じる先、教室の扉に振り向く。

其処には約三十センチ程扉を開けた事で出来た隙間から、サバスチャンが顔を覗かせており、目が合った俺に対して、口パクで何かを訴え掛けようとしていた。

その口パクを何とか素人でも出来る範囲で、読み取ってみると、大体こんな感じだろうか……

【ひ・め・さ・ま・を・よ・ろ・し・く・た・の・み・ま・し・た・ぞ】

その内容を不本意ながらも理解した俺は、一つの真実を悟った。

「……これはクラスでエミリーちゃんのお世話をするのが、俺の役目だと、全員が認知しているって事なのか？」

俺は周りが忙しなく机と椅子を移動させる中、ポツリと呟くが、誰もその答えを返してくれる事は無かった。

やがて席の移動も無事に終わり、エミリーちゃんが俺の右隣の席へと歩いて来る。

「そういう訳じゃから、また宜しく頼むのじゃ！」

指定された席に座りながら、エミリーちゃんは、満面の笑みで俺に言った。

その笑顔を見て、それも悪く無いかという考えが、一瞬脳裏を過ぎった俺を、誰が責められるだろうか？

こうして朝に、多少のゴタゴタはあったものの、新たなクラスメイトを迎えた俺の、三学期初日の授業は、何の問題も無く進行していった。



「「「「日本にようこそ！！！」」」」

昼過ぎの緑屋のテーブルの一角で、なのはちゃんと、すずかちゃんに、アリサちゃん、それとはやてちゃんがそう言って、本日の主役でもあるエミリーちゃんに、盛大な拍手を送る。

何せこの集まりは、三学期初日という事で、午前中で終了した授業によって、普段より早く放課後を迎えた時間を有効利用した、転校生であるエミリーちゃんの為の歓迎会なのだから。

「み、皆ありがとうなのじゃ。……それにすまぬの。転校の話しを何もせんかったのに」

「まあ、確かに驚いたけどね」

エミリーちゃんの言葉に対して、アリサちゃんが、笑顔で皮肉を口にする。

「まあまあ、アリサちゃん」

「確かに私達もビックリしたけど、もう許してあげても良いんじゃないかな」

「クリスマスのシルバーライト島招待に続いて、今回の転校サプライズ……エミリーちゃんも、中々の策士やな！」

アリサちゃんの発言に、なのはちゃんとすずかちゃんがフォローを入れて、はやてちゃんが一人、何処かずれた感想を口にする。

どうやら皆、この歓迎会を早速楽しんでいる様だ。

「純の旦那は、一緒に参加しなくて良いんですか？」

俺がその光景を、見守っていると、隣に居たヤスが話し掛けてきた。

「まあ、今はバイト中だし、ああやって女の子達の集まりに参加するのも、ちょっとな……」

「ははは。嬢ちゃん達に遠慮するのは、今更って気もしますけどね」

ヤスは俺の台詞を聞くと、そのワイルド系なイケメン顔を笑顔に歪ませて、意見して来た。

……ほんの数日前まで、保奈美さんと呟き続ける抜け殻状態から、大分回復はした様ではあるが、どうも今尚後遺症が残っているらしい。

「……あのなあ」

誤解の無い様に説明しておくが、俺はいつももなのはちゃん達に囲まれて日常生活している訳では無く、ちゃんと男友達もちゃんと大切にしているのだ。

それと同時に、なのはちゃん達だって、女の子同士、同姓だけでの付き合いがある。

まだ小学一年生ではあるが、皆して考えが早熟なのか、その辺りの意識ははっきりとしている様なのだ。

「……兎に角俺は、今日はあの輪の中に混ざる気は無いんだよ」

俺は溜息混じりに、最後にヤスへの説明をそう締め括ると、なのはちゃん達のテーブルに人数分のオレンジジュースを運んで行く事にした。

「はい皆。これは俺の奢りだから、遠慮無く飲んでね」

そう言って俺は、運んで来たオレンジジュースを、なのはちゃん達に配る。

この輪の中に、直接参加するつもりは毛頭無いが、せっかくの歓迎会だ。

先程ヤスにはああ言った手前であるが、これぐらいのサービスは別に構わないだろう。

「ありがとう純君」

「どういたしまして」

代表して御礼を言ってくれたなのはちゃんに、俺がテンプレートな返事を返した直後、翠屋の来客用の扉が開かれる。

「いらっしゃいませ」

既に脊髄反射の域に達しつつある反応速度で、俺は扉が開かれると同時に、ウェイターとしての接客スマイルで、振り向き様に挨拶をした。

「こんにちは。板橋君」

そして扉を開けた人物は、俺が挨拶をした直後に、左手を軽く上げながら俺個人に挨拶をしてきた。

俺の名前を呼んだという事は、常連のお客さんの可能性が高い。

そう考えながら、振り向き様に最初に見えたその左腕の袖からは、メタルイエローのメカニカルな腕輪が、チラリと顔を覗かせている。

俺の知り合いの中で、この様な腕輪をしている人物は、今のところ一人しかいない。

「長谷川さんも、こんにちわ」

フォーマルなスーツに身を包んだ知り合いの刑事さんである、長谷川さんに俺は改めて挨拶した。

「あれ？今日は確か平日だった筈だけど、学校はどうしたんだい？」

挨拶もそこそこに、長谷川さんは、店員をしている俺や、お店の一角でエミリーちゃんの歓迎会を開いているなのはちゃん達を見て、降って沸いた様に、疑問を投げかける。

「俺達の学校は、今日が三学期初日の始業式で、午前中で終わりだったんですよ」

「ああ、そういう事か」

どうやら俺の説明に、長谷川さんも納得してくれたらしい。

「ところで長谷川さんは、今日はお一人なんですか？いつもは恵美

さんと一緒に来店する事が多いですけど」

店員として、何名での来店なのかの確認もかねて、今度は俺が長谷川さんに質問をしてみる。

「板橋君がそう言うって事は、恵美さんはまだ来ていないんだね」

「待ち合わせでも、していたんですか？」

「うん。お昼過ぎに、翠屋でって話しだったんだけど、ちょっと早く着きすぎたかな」

長谷川さんはそう言いながら、照れくさそうに後頭部を軽く左手で掻いた。

「それじゃあ取り敢えず、お席にご案内しますね。こちらの空いているお席にどうぞ」

「ありがとう」

俺はこのまま長谷川さんを、入り口付近に立たせて置く訳にも行かないと思い、空いているテーブルに案内して、座ってもらった。

長谷川さんを席に案内した俺は、すぐにグラスに注いだ水を用意して、再び長谷川さんの座る席に舞い戻る。

「恵美さんと待ち合わせという事でしたけど、今の内に何か注文しておきますか？」

俺は長谷川さんの前に、水の注がれたグラスを置きながら、何か注

文がないか伺った。

「そうだね……お昼もまだ食べてなかったし、このサンドイッチとコーヒーの軽食セットをお願いしようかな」

「かしこまりました」

ご注文がお決まりになりましたらお呼びくださいと言おうとしたのだが、長谷川さんは、メニューをその場で流し読みしながら、即決した様なので、俺はその場で注文を受けて、そのまま厨房の方に伝えに行く。

『キンキュウケイホウキンキュウケイホウキンキュウケイホウ……』

丁度フロアを出て、カウンターで、俺が士郎さんに注文を伝えた直後である。

ズボンのポケットに忍ばせたタッチノートが、ホルダーの出現を知らせる警報を鳴らした。

「純の旦那。後は俺が何とかしますんで行ってください」

その時丁度近くに居たヤスが俺に声を掛けて来た。

「ありがとうヤス」

俺はヤスに礼を言いながら、急いでエプロンを剥ぎ取って、翠屋の裏口へと向かう。

「え！！！ホルダーが例の公園付近で目撃された！？詳しい場所は

……」

裏口に向かう際に、フロアの方から、長谷川さんの驚く声が聞こえた様な気がしたが、俺は構わず裏口から外に飛び出した。

穏やかに晴れた午後の公園。

冬という事もあり、風は中々に冷たいが、小さい子供が遊ぶには充分な条件を満たしている。

しかし現在其処に居るのは、無邪気に公園の遊具で遊ぶ子供の姿では無く、異形の姿をした怪物だった。

『飛ばすわよ！！！！』

その異形に一台の乙女口調なオッサンボイスなライダーバイクである、チェイサーさんが、情け容赦ないバイクタックルをお見舞いする。

突然の事態に咄嗟の対応が間に合わなかった異形の存在、ホルダーモドキは、成す術無く吹き飛ばされた。

「何でこんな場所に、ホルダーモドキが一体だけ居るんだ？」

既にメカ犬と合流してシードへと変身していた俺は、一仕事終えたチェイサーさんから降りながら、疑問を口にする。

『どうやら一体だけ、という訳では無さそうだぞマスター』

しかしここでベルト状態になっているメカ犬が、俺とは違う意見を口にした。

すると先程のメカ犬の言葉を合図としたかの様に、公園内に十数体のホルダーモドキが、その姿を現す。

「そうみたいだな……」

俺は辺りを見渡しながら、溜息混じりに返事を返す。

『何が目的かは知らないが、放って置く訳にも行かないな』

「分かってるって！！！」

他にホルダーの姿も見えないし、オーバーやメルトが居るという気配も感じないのは、正直不気味だと思うが、メカ犬の言う通り、このままホルダーモドキ達を野放しにする訳にも行かないのは事実だ。

「行くぞ！」

『うむ！』

俺とメカ犬は、互いに短く声を掛け合ってから、ホルダーモドキ達に突っ込んで行った。

「はあ！」

ホルダーモドキは、通常のホルダーに比べて、思考能力が低いのか、単調な攻撃しかしてこないので、その攻撃を捌くのは左程難しい事でもない。

お世辞にも素早いとは言えない攻撃を掻い潜りながら、俺はホルダーモドキ達に、拳と蹴りによる打撃を与えていく。

そんな攻防が暫く続くと、道路側から聞き覚えのあるサイレンが聞こえて来た。

俺の耳にその音が届くのと、ほぼ時を同じくして、少し離れた位置に居たホルダーモドキ数体から、火花が上がる。

視線をその先に向けると、メタルイエローのボディーに、青い複眼を持つ仮面ライダー、Ｅ２が普段は右腰のホルスターに収められている専用銃、ＥＳＭ０１を抜き放ちながら、こちらへと走って来るのが見えた。

「は！」

俺達の近くまでやって来たＥ２は、次々とホルダーモドキ達に、銃弾を放ち続ける。

『ここは一気に片付けるぞマスター』

それを見ていた俺にメカ犬が合図を送ってきた。

「ああ！」

俺はその言葉に頷きながら、タッチノートを引き抜こうとしたのだが、その時予想外な出来事が起こった。

「きしゃあああああああああ！！！！」

謎の影が突如として、公園の茂みから飛び出して、俺に襲い掛かって来たのである。

「うわ！？」

その予想外の攻撃を喰らった俺は、驚きの声を上げながら、衝撃で地面に転がった。

『大丈夫かマスター！？』

「ああ、問題無い……」

予想外の出来事に驚きはしたものの、さしてダメージも受けて居なかったので、俺は心配するメカ犬に、安心する様に言いながらすぐさま立ち上がり、俺を襲った影の正体へと視線を向ける。

その正体は一言で表すとするのであれば、山猫という言葉が適切な気がする。

正確に言えば山猫に良く似た異形の存在、つまりホルダーだが。

飼い猫とは違う野性味溢れた茶色い毛並みに、長い尻尾と細長い瞳孔を持つ金色の目。

体毛に覆われた手から出し入れされる鋭い爪など、その姿はまさに山猫と言えるだろう。

『先程のホルダー反応の正体は、こちらだったという事か……』

俺と同じ様にホルダーを観察していたのか、ベルトからメカ犬が呟く声が聞こえてくる。

「きしゃあああああああああ！！！！」

そんな間にもホルダーが奇声を上げて、再び襲い掛かって来た。

『来るぞマスター！』

「そう何度も喰らうか！！」

俺はホルダーが飛び掛るよりも早く、ベルトの右側をスライドさせて、赤いボタンを押す。

『パワーフォルム』

流れる音声と同時に、メタルブラックのボディーが、クリムゾンレッドへと染め上がる。

「きしゃあ！？」

俺がフォルムチェンジしたその直後、ホルダーの鋭い爪の一撃が、俺の肩に叩き込まれるが、先程とは違い、微動だにしない俺を見て、今度はホルダーが驚愕の声を上げる。

「おりゃあ！」

自分の攻撃が効かなかった事に驚くホルダーに対して、俺は右拳を思い切りホルダーの鳩尾に叩き込んで吹き飛ばした。

『畳み掛けるぞマスター』

「良し！」

俺はメカ犬の言葉に頷きながら、ベルトからタッチノートを引き抜いて、操作を開始した。

『ダイバー・コール』

タッチノートから音声が流れてから、殆ど時間を置かず、空から例の歌が聞こえて来た。

『アタイは～海の～妖精さ～ん♪』

メタルブルーのボディーを持つ手乗りイルカこと、メカ海である。

『マスターに呼ばれたから、急いで来たんだわさ～』

メカ海は相変わらず、戦闘の緊張感を奪う間延びした声で、話し掛けてくる。

「頼むよウミちゃん！」

俺は何とかその脱力感を防ぐ為に、出来るだけ気合を入れながら、メカ海に言いつつ、タッチノートの操作を続行する。

『りょうか～い』

……だが多少緊張感が削がれてしまうのは、どうしようも無いと、半ば諦めてもいたりする自分が確かに存在していた。

『スタンディングモード』

そんな微妙な空気を醸し出しつつも、タッチノートの操作を終えて、メカ海がアタッチメントパーツへの変形を果たして、俺の手の中に納まった。

俺は急いでタッチノートを再びベルト差込み、続いてベルトの左側をスライドさせて、アタッチメントパーツを差し込んだ。

『パワー・ダイバー』

俺の周囲に展開したメタルブルーの追加装甲が、瞬く間にクリムゾンレッドのボディーへと、装着されていく。

シードの強化形態の一つでもあるパワーダイバーになった俺は、すぐさまアタッチメントパーツのレバー下にあるボタンを押す。

『パワーアックス』

ベルトから発生した光で生成された、パワーダイバーの斧型の専用

武器パワーアックスを握り締めながら、俺はホルダーに追撃を仕掛ける。

「きしゃあああああ！！！」

吹き飛ばされたダメージから幾らか回復したのか、ホルダーも俺に反撃してくるが、俺はその攻撃をものともせずに、パワーアックスによる連撃を叩き込んでいく。

『マスター今だ！！！』

「ああ！！！」

パワーアックスによる連撃を喰らわせて、怯んだホルダーにメカ犬が、今がチャンスだと教えてくれる。

俺もそう考えて、アタッチメントのレバーを引こうとしたその時。

「待って！！！！！」

公園内に幼い少年の声が響き渡った。

その声に振り向くと、小学二年生から、三年生程であろうか。

やけに線の細い、薄幸の美少年とで言う様な男の子が、叫びながらこっちに走って来る。

「ミケは……ミケは何も悪く無いんです！！！！！」

「はい！？」

俺は走りながら叫んだ少年の、思わぬ言葉に、驚きの声を上げた。

その一瞬が、不味かったのだろう。

突然現れた美少年にミケと呼ばれたホルダーの居た場所に再び視線を戻した時には、既にその姿は何処にも無かった。

# 第２５話　山猫と少年と……【前編】（後書き）

仮面ライダーシード１００万ＰＶ記念スピンオフ作品

「これが本当のＥＳシステム……」

「君にＥ２は相応しくない」

「前から気になっていたんですけど、Ｅ２にはプロトタイプが存在しているんですか？」

「あなたは……」

ＥＳシステムを中心に、新たな物語が始まろうとしている

「これがＥＳシステムの本当の目的？」

「そう……彼は確かにプロトタイプの装着者だったわ」

「もう僕は、Ｅ２にはなれません」

一人の青年は、悩み苦しみながらも、答えを探し続ける

「私は信じてる。彼だからＥ２は本当の力を発揮出来るって！」

「もうお前は終わりだ」

「僕にだって覚悟があります！」

そして相反する意思は、戦いの戦火を広げる事となる……

「戦って……長谷川君。誰の為でもない！あなた自身の為に！！！」

「僕はあなたとは違う！！！」

「ならば証明して見せろ！その鋼の拳で！！！」

そして青年は一つの答えを導きだす

「これが僕ですから……」

第一弾　仮面ライダーＥ２　ロストプロジェクト

「私は誰だ？ここは一体……」

「死んだおじさんが言ってたんだ。人を顔で判断しちゃいけないんだって」

「これがあの、伝説とまで呼ばれた傭兵の成れの果てか」

「私には記憶が無い。だが大切な家族がいる」

傷付き倒れた一人の男と、心優しい少年が出会い、新たな絆が生まれる

「奴らは本当の悪党だよ！」

「大丈夫だよ僕達がついてるから」

「腑抜けたお前に用は無いんでな」

「守りたいと思っても、何も出来なかったら同じじゃないか！！！」

しかし新たな家族には様々な脅威が降り掛かる

「もう全部終わりだよ……」

「思い出した。私の全てを」

「今更お前に何が出来る？」

「彼は私に言った……絆が強さなのだと。私にそんな絆は無いが、それを守る力がある！！！」

今ここに地獄から、一人の戦士が再び舞い戻る……

「これがお前の地獄だ……」

第二弾　仮面ライダーデビル　カオスオブロード

近日更新予定……

なんちゃって！

## 第２５話　山猫と少年と……【後編】（前書き）

どうもＧ－３Ｘです。

前回ネタとして後書きに書いたスピンオフ企画が、割と好評だった様なので、これで進めてみようかなと考えております。

両方やるか、どちらか片方だけになるかは、現在考え中ではありますが……

もしくは電王、Ｗに続き原作ライダーとのコラボを見たいという方がいれば、お気軽にご意見を言ってくださいね。

もしかしたら、今回では無理でも、次回に実現するという可能性もあるかもですので……

それでは今回のお話しも、楽しんでいただけたら幸いです。

# 第２５話　山猫と少年と……【後編】

「え～と、それで、君の名前は？」

翠屋の客席の内の一席で長谷川さんが、向かい側に座る美少年に名前を聞いた。

「僕の名前は、橘歩（たちばなあゆむ）と言います。私立聖祥大附属小学校の三年生です。」

長谷川さんの問いかけに、美少年改め、橘君が簡単な自己紹介をする。

取り敢えず先程の自己紹介で分かった事は、橘君が俺やなのはちゃん達の二つ年上の先輩になるという事ぐらいだろうか。

「じゃあ橘君。早速色々と聞きたいんだけど、良いかしら？」

続いて長谷川さんの隣の席に座っていた恵美さんが、橘君に話し掛ける。

「はい」

橘君は恵美さんの言葉に対して、頷きながら、肯定の意を示す。

その様子を見て、橘君に質問しても問題無いと結論を出したのか、恵美さんと長谷川さんは、お互いに一度だけ、視線を交わしてから、恵美さんが口を開く。

「長谷川君から聞いた話だと、橘君は公園でホルダーの事を、ミケって呼んでいたらしいけど、どういう事なのか、教えてもらえる？」

「は、はい。実は……」

恵美さんの質問に橘君は、戸惑いながら答え始める。

あの公園での戦いの最中に現れた、ホルダーをミケと呼んだ少年、橘君。

その橘君の声に一瞬だけだが、気を取られた隙に、ホルダーに逃げられてしまった訳だが、その後公園に残っていたホルダーモドキ達を俺とＥ２で全て倒し終えてから、橘君はＥ２にその場で保護された。

あの場ではこれ以上俺に出来る事は無いと判断して、俺は変身を解いて翠屋に戻ってきたのだが、再び裏口から入ってフロアを覗いてみると、待ち合わせをしていると言っていた恵美さんと合流していた、長谷川さんと橘君の姿が見えた。

しかもそのまま警察署に行く訳でもなく、二人はこの翠屋で、橘君の話を聞き始めたのである。

まあ、考えてみれば公園から警察署に行くまでには、翠屋と比べると多少距離が離れ過ぎているし、犯罪者でもない子供である橘君に、無用なプレッシャーを与えない様に考えた結果、話しをするには手頃な場所。

つまりこの喫茶店である、翠屋で話しをする事になったのかも知れない。

本当は盗み聞きなんて、趣味の悪い真似はしたくないのだが、ホルダーが関わっているという事もあり、俺はメカ犬と共に、聞き耳を立てる事にした。

「ミケは今はあんな姿ですけど、本当は僕の家で飼っている普通の山猫なんです」

「あのホルダーの正体って、人間じゃなくて本物の猫だったのか……」

橘君の言葉に対して、長谷川さんがそんな呟きを零す。

ホルダーの素体が人間以外だというのは、オーバーが作るホルダーモドキと、以前にネガタロスが作った複製以外には、俺も初めて聞く話しだが……そして何故に山猫？

「ホルダーの正体が山猫だって事は分かったけれど、何で橘君の家で飼われていたミケがそんな事になったって言うの？」

長谷川さんが呟く中、恵美さんが冷静に次の質問を促す。

「あれは一週間程前の事です。家の近くの公園で、ミケと遊んでいたら、突然藍色の怪物がやって来て、僕にこう言ったんです。【君の夢を叶えてあげようか？】って……」

橘君が言っている藍色の怪物というのは、恐らくオーバーの事だろう。

「僕はその時、怖くて逃げる事も出来なくて……怪物が何か銀色の

玉みたいなのを取り出して、僕に近づいて来るのを見ている事しか出来ませんでした」

そこまで話すと、橘君はその時の恐怖が蘇ったのか、小さく肩を震わせる。

「……それで、その後はどうなったんだい？」

長谷川さんは、橘君の震える肩を、落ち着かせる様に、軽く手のひらで二、三度叩いてから、橘君が話せる状態になるのを見計らい、話しを再開させる様に促した。

「その怪物の手が僕に触れようとした時に、ミケが怪物に飛び掛っていったんです……それで何か眩しく光ったと思ったら、ミケがあんな姿になっていて、そのままミケは何処かに行ってしまいました。怪物の方もミケをそんなミケを見て、何か呟いた後に、ミケを追って……」

そう言うと橘君は、何か思うところがあるのか、俯いてしまった。

「どう思うメカ犬？」

俺は盗み聞きを一時中断して、メカ犬に意見を聞いてみる事にした。

『うむ……先程の少年の話しが真実だとすると、これは奴等にとって、イレギュラーな事態と言えるのかもしれないな』

「イレギュラー？」

『少年の話しから推測するに、オーバーがホルダー化させようとし

たのは、山猫のミケではなく、少年の方だろう』

「それが、ミケが飛び出した事で、橘君に使う筈だった暴走プログラムに、代わりにミケが反応してホルダー化したって事か？」

『その通りだ。ここからはワタシの予測になるが、これはワタシ達が思っている以上に、奴等にとって予想外の出来事だったのかもしれない』

「じゃあさっきの公園で、オーバーもメルトの姿も無いのに、大量のホルダーモドキが居たのはもしかして……」

『奴等はあのホルダーを捕獲して、何かをしようと考えている可能性が高い』

「そん「それは一大事なのじゃ！？」……え？」

俺が言おうとしたのと同じ内容に、若干個性的とも言える語尾が追加された、やけに聞き覚えのある声が、聞こえてきた。

「何やら純達は、また大変な事件に関わろうとしているようじゃの」

後ろを振り向けば、其処に居るのは、本日の転校生であり、少し前までなのはちゃん達と、歓迎会でガールズトークをしていた筈の、シルバーライト島のお姫様、エミリーちゃんであった。

「……エミリーちゃん。確かなのはちゃん達と歓迎会をしてた筈じゃなかった？」

「なのは達なら、これから習い事があるといって帰ったのじゃ。は

やても今日は図書館で新作の本が並ぶとかで、行ってしまったのでのう」

どうやら俺が、橘君の話しに気を取られている間に、歓迎会は終わってしまっていたらしい。

「それより良いのか？またあの少年達が会話を再開した様じゃが」

「え！？」

俺はエミリーちゃんが、歓迎会が終わったからといって、何で俺の後ろに居たのかという質問を心の中に飲み込み、再び橘君の話しに聞き耳を立てる。

「……最初は警察に相談しようと考えていたんですけど、話せばあんな姿になったミケがどんな対応をされるかと思うと言い出せなくなって……今まで黙っていて、本当にごめんなさい」

顔を上げて、再び説明を始めた橘君は、目頭に涙を溜めながら、恵美さんと長谷川さんに謝罪の言葉を口にする。

ホルダーに関しての情報は、素体の事を含めて、仮面ライダー程には世間には出回っていないので、橘君の考え方が間違っているとも一概には言えない。

それと言うのも何かしらの悪事を働くホルダーは、暴走プログラムの影響で、正常な判断能力が出来ない上に、俺とメカ犬が変身するシードか、Ｅ２に倒されれば、その間の記憶は全て失われるのだ。

元々の素体が犯罪者だった場合は別として、そんな人間を罪に問え

るのかと、質問されれば難しい話しである。

例え警察が無罪放免にしたとしても、ホルダーだった時にやった事を、全員が果たして許すと二つ返事で答えてくれるだろうか。

情報とは現代人が生きる上で、大切な存在ではあるが、それと同時に、あまりにも大量の情報が整理されない状態で流れれば、混乱や疑心暗鬼を招き、下手をすれば争いの火種となる可能性も、孕んでいるものだと俺は思う。

俺と似た様な事を考えているののか、雑誌記者の恵理さんも、ホルダーの情報は現在最低限流すだけに、止めているし警察でも外部に必要以上の情報が漏れない様に、出来るだけ気を使っているらしい。

だからホルダーが暴走プログラムと人間が融合した存在だという、事実を知っているのは、俺達の様に普段から密接に関わっている人達と一部の警察関係者を除けば、ヤスや瞳さん等のシードの正体が俺だと知っている人物や、目の前に居るエミリーちゃんの様に、過去にホルダー絡みで深く事件に関わった人物ぐらいのものである。

今回の様な橘君のケースは、こういった情報を隠す事で得られる、メリットに対しての弊害だと言えるだろう。

この判断が本当に正しかったか、それはその時の状況にも左右されるだろうし、一概には何も言えないと俺は思うが、今回の件に関してだけ言えば、その配慮が裏目に出てしまった。

きっと橘君は自分が得られる情報を基に、最悪の結果を想像してしまったのだろう。

もしも俺が今の橘君と、全く同じ立場だったとしたら、似た様な考えに至っていたかもしれない。

涙ぐみながら謝り続ける橘君に対して、恵美さんと長谷川さんは、橘君に、ホルダー化したミケは倒せば元の姿に戻って無事に帰ってくるという事を、必死に伝えている。

熱意ある二人の説明が、功を奏したのか、橘君も何とか無くのを止めて、話しを再開する運びとなった。

「目撃証言だと、海鳴市内の公園で、目撃証言が多数寄せられているけど、何か心当たりは無いかしら？」

橘君が会話が出来るレベルに落ち着いた事を確認しながら、恵美さんが新たな質問をぶつける。

「……多分ミケはおじいちゃんを探しているんだと思います」

「「おじいちゃん？」」

橘君の答えに、恵美さんと長谷川さんは、揃って首を捻る。

「はい。ミケは元々野生の山猫だったんですけど、二年前におじいちゃんが怪我したミケを連れて帰って来て、手当てをしたんです。本当は怪我が治ったら、野生に返す筈だったんですけど、その頃には僕も含めて家族は皆情が湧いてしまって、ミケもここでの生活に馴染んでいたので、特別に許可を申請して家で飼う事になったんです。飼い猫になってからも、助けてもらった恩を感じているのか、おじいちゃんには一番なついていました」

昔を懐かしむ様に、目を細めながら橘君は、ミケとそのおじいさんの事を話した。

「ミケが橘君のおじいさんになついているという事は、分かったけど、何でそれが公園での目撃証言に繋がると思うんだい？仮に橘君の予想が当たっていたとしても、ミケはおじいさんの居る君の自宅に現れると思うのが普通じゃないかな？」

橘君の話を聞き、長谷川さんが、俺も疑問に思った部分を口にする。

「それはありえません。おじいちゃんは、先月亡くなったので……」

長谷川さんの疑問に答える橘君だったが、その答えは予想外のものだった。

「おじいちゃんの趣味は散歩だったんですけど、ミケは猫のくせに、おじいちゃんと同じで、散歩好きなのか、生前はいつも一緒に、その日の気分で散歩のコースを変えて、散歩に行っていました。その時決まって公園で休憩してから帰って来るんだと、良くおじいちゃんは話してくれていました」

こんどは先程とは別の理由で、再び目頭に浮かんだ涙を、服の袖で拭いながら、橘君は話しを続ける。

「多分ミケは、おじいちゃんがまだ散歩から、帰っていないと思って、休憩に使っていた公園を中心に探してるんだと思ったんです」

其処まで聞いた俺は、一旦盗み聞きを中断する事にして、メカ犬に質問をしようと、後ろを向いたのだが……

「う……うう……何と健気なのじゃ……ミケよ……」

同じく盗み聞きをしていたエミリーちゃんが、盛大な貰い泣きをしていた。

「……なあ、メカ犬。今の話しが本当だったとして、猫がホルダー化する程の夢が、おじいさんを探し出す為って事、あると思うか？」

俺は号泣するエミリーちゃんに驚きながらも、取り敢えずメカ犬に質問をした。

『そもそも猫がホルダー化するという事例は、ワタシも初めて聞くが、そのミケとやらが、余程今は無き主人に、もう一度会いたいと願ったのであれば、可能性はあるかもしれないな』

「そうか。なら俺達が……」

「今すぐミケを探しに行くのじゃ！！！このままではミケが、あまりにミケが不憫ではないか！！！！！」

俺とメカ犬の話しが纏まろうとしたところで、先程まで号泣していたエミリーちゃんが、凄まじい気迫を放ちながら、俺に詰め寄ってきた。

「ちょ、ちょっとエミリーちゃん！？少し落ち着いて……」

エミリーちゃんに押し倒されそうになりながらも、俺は何とか詰め寄るエミリーちゃんを宥めようと、穏便に声を掛ける。

「何じゃ！？純は先程の話しを聞いて、何も思わなかったとでも言

うつもりか！？」

しかし俺が落ち着かせようとした態度が、エミリーちゃんには気に食わなかったらしく、既にお互いの額がぶつかる様な至近距離で、エミリーちゃんが俺に対して睨みを利かす。

俺の考えとしても、ミケをこのままにしておく訳には行かないと考えている。

その上、オーバー達もミケを狙っている可能性があるのだから、出来るだけ早く行動に移したい。

しかしそれには一つだけ、大きな問題があるのだ。

「エミリーちゃんの気持ちは良く分かるけど、ミケが何処に居るのか、分からなきゃ動きようが無いでしょ」

「あ！」

俺の言葉に対して、エミリーちゃんが目を、そう言えばというほどに大きく見開いた。

今のところ、ミケを確実に見つけるには、ホルダー反応を待つしかないだろう。

しかしそれでも確実じゃない。

さっきの様に、オーバーがまた、町中にホルダーモドキを放てば、場所を特定するのは、かなり困難になる。

『心配無いぞマスター』

何かミケを少しでも早く見つける手段ないかと、考えていたところで、メカ犬が自信満々に俺に言う。

『ワタシ達にはジャックが居るだろう』

「あ！」

メカ犬の言葉で、今度は俺が先程のエミリーちゃんの様に目を見開いてしまった……

若干のタイムラグを伴いつつ、その後俺達は、ビーフジャーキーを片手に急いで白い毛並みの野良チワワが出没する空き地に走った。

「やっと見つけたよ」

夕方になり人気の少なくなった公園の、更に奥の林の中で、明るい声ではあるが、何処か冷たさを感じさせる幼さを残す声が聞こえて

来た。

「ふうううううううううううううう！！！！！！！！！！！！！」

その言葉に続いて、敵意剥き出しの威嚇とも取れる唸り声が木霊する。

今この場には人間の姿は無い。

居るのは二体の異形のみである。

「随分と手こずらせてくれたけど、もう逃がさないよ？」

異形の内の片方、藍色の怪人オーバーがゆっくりと、もう一体の異形である、山猫型のホルダーに詰め寄る。

オーバーは相変わらずの軽い口調で、余裕の雰囲気を醸し出しているが、内心そうでは無かった。

本来は猫と公園で戯れていた少年を、ホルダーにしようとしていた筈なのに、何の手違いか猫の方をホルダー化してしまったのである。

しかも人間用に開発した筈の暴走プログラムが、猫に反応したという異常事態なのだ。

オーバーは目的を変更して、目の前のホルダーを研究用のサンプルにしようと捕獲に乗り出したのである。

最初は自分が命令すれば、ホルダーならばすぐに従うと思っていたが、その思惑は大きく外れてしまった。

ホルダーはオーバーの命令に従わなかったのである。

元々その存在自体がイレギュラーな為、この事態を半ば予測していたオーバーは、街中にホルダーモドキを放ち、本格的な捕獲作戦を展開した。

一度は発見したものの、ホルダーモドキの反応を辿って来てみれば、仮面ライダー達に倒されているという現実。

おかげで無駄な時間を過ごしてしまったという事もあり、オーバーは内心若干のストレスを感じていたのである。

しかしその努力も報われて、目的のホルダーをこれで捕獲出来ると、手を伸ばそうとしたその時。

「待て！」

この場に予想外の、待ったの声が聞こえて来た。

オーバーがその声に反応して振り向くと、数メートル先に見知った顔の一人の少年に、フルメタル製の機械仕掛けの犬と、オーバーの知らない顔ではあるが、銀髪の少女が立っていた。

「待て！」

急いで情報屋のジャックに、ミケがこの時間帯に居そうな場所の情報を教えてもらった俺達は、最初にホルダーを見つけた公園とは、反対側にある自然公園にやって来た。

更にその先の茂みの奥が、ミケの縄張りとなっている場所だというので、来てみた訳なのだが、其処にはホルダー化したミケだけではなく、オーバーの姿もあったのである。

しかもオーバーが、ホルダーとなったミケに手を伸ばそうとしているのを、俺は視界に捉えたので、その場で大声を張り上げて、待ったを掛けた。

「……今は忙しいから、相手にしたく無いんだけどな」

オーバーは、俺の声に反応して動きを止めると、こちらに振り向き、皮肉を言う。

『悪いがワタシ達も、そのホルダーに用がある。嫌でも相手をしてもらうぞ』

メカ犬も負けじと、オーバーに対して皮肉を返す。

「危ないからエミリーちゃんは下がってて」

「分かったのじゃ……負けるでないぞ純」

「うん！」

俺は勢いでこの場に着いて来てしまったエミリーちゃんを下がらせる。

下がる際にエミリーちゃんは、心配そうに俺に言葉を掛けてきたので、出来るだけ明るく返事を返しておく事にした。

「行くぞメカ犬！」

エミリーちゃんが後ろに下がった事を確認した俺は、タッチノートを取り出して開きながら、メカ犬に声を掛けた。

『うむ！』

そのメカ犬の返事を合図に、俺はタッチノートのボタンを押す。

『バックルモード』

タッチノートを押した瞬間、メカ犬はベルトに変形して、自動的に俺の腹部へと巻きつく。

「変身」

そして俺は音声キーワードを入力して、ベルトの中央に設けられた溝に、タッチノートを素早く差し込んだ。

『アップロード』

音声が流れると同時に、白銀の光が俺の全身を包み込み、その姿を一人の戦士へと変えていく。

白銀の光が飛散すると、其処に居るのは、板橋純ではなく、この海鳴市を守る為に戦う一人の仮面ライダーだった。

「しょうがないから相手をしてあげるよ！」

俺とメカ犬がシードへの変身を完了させるのと、ほぼ同時にオーバーが右手に剣を生成しながら襲い掛かって来る。

『来るぞマスター！』

「わかってるさ！」

オーバーの強襲を伝えるメカ犬の声に短く返事を返しつつ、俺はベルトの右側をスライドさせて、緑色のボタンと黄色のボタンを続け様に押していく。

『スピードフォルム』

『スピードロッド』

変身した直後の基本フォルムであるメタルブラックのボディーカラーが、ライトグリーンに染まり、俺の手にはこのスピードフォルムの専用武器のスピードロッドが生成される。

「はあ！」

スピードフォルムへのフォルムチェンジを果たした俺は、その手に持ったスピードロッドで、オーバーが放った斬撃を受け止めた。

「まだまだ行くよ！！！」

しかしオーバーの攻撃がたったの一撃で終わる訳も無く、初撃を受け止めた後も、流れる様な剣による連続攻撃を、俺に浴びせ掛けてくる。

「この！」

俺もそれに負けじとスピードロッドを使った応戦を試みる。

お互いにその速さを主軸とした攻防を繰り広げる俺とオーバーだったが、其処に突如として、新たな戦いへの参加者が、横槍を入れてきた。

「しゃあああああああああああうううううううう！！！！」

なんとホルダー化したミケが、俺とオーバーに飛び掛ってきたのだ。

「おわ！？」

「ん！？」

その野性味溢れるがむしゃらな攻撃に、俺とオーバーは思わず距離を取る為に数歩後退してしまう。

結果として二手に分かれた形となった俺とオーバーを見て、ホルダーは、オーバーに狙いを定めたのか、一直線にオーバーへと飛び掛っていく。

「一体何が起こってるんだよこれ？」

俺はオーバーが、ホルダーに攻撃されるという現象を初めて目撃した驚きの為か、思わず行動に移す事も忘れて呟いてしまった。

『これは恐らく、野生の部分が強く出てしまっているのだろう』

俺の呟きに対して、メカ犬が答える。

「どういう事だよ？」

『本来の用途とは違う使い方をされた暴走プログラムのせいだろうが、今のミケはホルダー化に伴い、長く飼い猫を続けて薄まっていた猫としての野生の本能が、色濃く出てしまっているのではないか？」

「本当なのかそれって……」

『マスターも前の公園で、ホルダー化したミケに攻撃されたのは覚えているだろう。あの公園にもミケの縄張りがあり、其処に足を踏み入れてしまった為に、攻撃を受けたのだと考えれば合点がいく。どちらも戦っている最中に、攻撃されたという事実を踏まえると、ミケは自分の縄張りが荒らされていると、判断したのではないか』

「……なるほど」

俺はメカ犬の説明に素直に納得してしまった。

「どうも今回は僕に分が悪いみたいだね……残念だけど、ここは退かせてもらうよ」

そうやって俺がメカ犬の説明を聞いている間も、ホルダーに執拗なまでの攻撃を受け続けていたオーバーは、負け惜しみとも取れる捨て台詞と共に、この場から、飛び去ってしまった。

「しゃあああああああああああ！！！！！！！！！」

オーバーがこの場から居なくなった事で、突如として攻撃する目標を失ったホルダーは、今度は目標を俺に絞り、突撃して来る。

その攻撃に対して、俺が身構えると、少し離れた位置から銃声が鳴り響き、目前まで迫っていたホルダーが火花を上げた。

銃声の聞こえた方に、視線を向けると、メタルイエローと青い複眼が特徴的な仮面ライダー、Ｅ２がこちらへ走って来るのが見えた。

「遅くなってすいません。シードさん。僕も加勢しますんで」

俺の隣までやって来たＥ２はそう言うと、目の前のホルダーに対して、臨戦態勢の構えを取る。

俺はＥ２の言葉に頷きながら、静かに呟いた。

「ああ。ミケの悪夢はここで終わらせる」

もう一度おじいさんに会いたいという願いを、叶えてやりたいが、

それは無理だという事も分かっている。

だからせめてこの戦いを、早く終わらせて橘君の元に返してやる事が、今の俺に出来る唯一の事だ。

「行くぞ！」

「はい！」

俺はスピードロッドを構え直して、Ｅ２と共にホルダーに攻撃を仕掛ける。

「きしゃあああああああ！！！！！」

ホルダーは鋭い爪で牽制を兼ねた攻撃を仕掛けて来るが、その攻撃を俺がスピードロッドで受け止めて、その隙を突く様に、Ｅ２がＥＳＭ０１で、的確に銃撃をホルダーにお見舞いしていく。

『そろそろ終わらせるぞマスター！』

「ああ！！！」

俺はメカ犬の合図を受けて、一旦下がると、ベルトの右側をスライドさせて、黒いボタンを押す。

『ベーシックフォルム』

ベルトから聞こえる音声と共に、ライトグリーンのボディーは再びメタルブラックのボディーカラーへとその色を変えていく。

その間に、Ｅ２も左腰からマガジンを抜き出して、ＥＳＭ０１に装填しようとしているのが見えた。

「俺も行きますか！」

Ｅ２の行動を観察しながら、俺も準備を整える為に、ベルトからタッチノートを引き抜き、全体図を表示させてから右足部分をタッチして、再びベルトにタッチノートを差し込んだ。

『ポイントチャージ』

『ブレイクチャージ』

すると殆ど同時に、二人の仮面ライダーから電子音声が鳴り響く。

「は！」

まずはＥ２が、ＥＳＭ０１の銃身が黄色い光を放つのを確認しつつ、ホルダーに標準を合わせて引き金を引き、一発の弾丸を発射する。

放たれた黄色い光を纏うその弾丸は、網目状のネットに広がり、ホルダーに当たる事で、その動きを大きく制限した。

ホルダーの動きを制限した事を確認したＥ２は、そのままＥＳＭ０１を右腰のホルスターに収める。

するとＥ２の右足に、黄色い光が集約していく。

その様子を観察していた俺自身も、その間にベルトから発生した光が、四肢に伸びる銀のラインを通じて、右足へと集約される。

「こいつで決めるぜ」

俺は重心を低く構えながら、一気に飛び上がった。

そして光が集約された右足を突き出して、狙いをホルダーに合わせる。

俺が飛び上がるのと時を同じくして、ホルダー目掛けて駆け出したE2も、既に飛び蹴りへの体勢に入っていた。

「ライダーキック」

それを踏まえた上で、俺は急加速でホルダー目掛けて落下を開始する。

シードとE2。

二人の仮面ライダーの必殺の一撃が、見事にホルダーに炸裂して、夕方の公園で大きな爆発が巻き起こった。

爆発が治まった後、その地点に視線を移すと、一匹の山猫が暢気に寝息を立てている姿が見えた……

「結局あれからミケはどうなったんだ？」

『うむ。ミケはあの後無事に、警察から橘少年に返されて、以前と同じ生活を送っている様だぞ』

「そうか……」

数日前に起こった猫がホルダー化するという、今までに例をみないケースに、事件が解決した今も、少しだけ心配していたのだが、メカ犬の言葉を聞いて、俺は何だか安心した。

「本当に良かったのじゃ……」

それを聞いて、エミリーちゃんが、何度も良かった良かったと、俺の隣で呟き続けている。

「……あのさ、エミリーちゃん。一つ聞きたい事があるんだけど」

「うむ？どうしたのじゃ純？遠慮せずに何でも聞くが良いぞ」

「……じゃあ、お言葉に甘えて」

エミリーちゃんのその言葉を、了承とみなして、俺は一呼吸置いてから、一つの疑問を投げかけた。

「何でエミリーちゃんが、夕飯時の俺の家に居るのさ!?」

そうなのだ。

何故かエミリーちゃんが、招待した訳でも無いのに、夕食時の我が家に当然の様に居たのである。

「別に良いではないか。我と純の仲じゃろ？」

俺の質問を何でも無い些細な事だとでも言う様に、答えにもなっていない返事を返すと、エミリーちゃんは、夕飯はまだかのうと言って、台所で夕飯を作っている母さんの元へと行ってしまった。

「はあ……」

俺はそんなお転婆なお姫様の背中を見ながら、小さな溜息を零す。

「せめて父さんが帰って来て、男性率が増えれば……何も変わらないか」

自分の発言に虚しさを感じて、俺はもう一度溜息を吐き出した。

ちなみにリビングの掛け時計を見ると、父さんが帰ってくるまで、あと三十分は余裕である様だった。

『その内良い事があるさ。マスター』

俺の気持ちを察してか、メカ犬が暖かなエールを送ってきたが、俺の本日の気力ゲージは既に底をついていた……

今日の海鳴も、お転婆なお姫様の一般家庭の食卓に襲来するという事態が発生していたりするが、概ね平和である。

## 第２５話　山猫と少年と……【後編】（後書き）

次回は多分久しぶりの、キャラクターファイルをやると思います…

…

## キャラクターファイル第四弾（前書き）

何か久しぶりに載せるキャラクターファイルですが、楽しんでいただけたら幸いです。

## キャラクターファイル第四弾

登場人物

○ビジネススーツを着た男性　　初登場　第十八話【前編】

通勤途中に、メルトがビルの屋上から落とした暴走プログラムに当たってホルダー化してしまった、本当にただひたすら被害者なお人……

その後は無断欠勤で上司に怒られたそうな……

ホルダー時の能力は、軽い身のこなしと、伸縮自在の両腕。

間違ってもゴ○ゴ○の～と言ってはいけません！！！

○図書館で借りた推理小説　　初登場　第十八話【前編】

すずかとはやてが、探偵魂に目覚める程にのめり込んだ、有名過ぎる推理小説。

小説を読む人ならば、誰でも一度は手に取ったであろう本なので、内容については説明を省かせていただきます。

○ＥＳＭ０２　　初登場　第十八話【後編】

ＥＳＭ０１に続く、仮面ライダーＥ２の第二の専用武器。

両刃の剣となっており、握りの部分は小型の盾が設けられている上に、その切れ味は常に高熱を帯びている為、凄まじい威力を実現している、攻防一体を可能とした、Ｅ２の近接用専用武器なのだが、基本的にＥ２は銃撃戦がメインなので、使用頻度は他の武器に比べて低い。

ＥＳＭ０４との間に位置している、今の時点で一度も使用されていないＥＳＭ０３と比べれば、使われただけマシかも知れないが……

個人的には、今後の活躍に期待したいと思います。

○ＥＳＭ０４　　初登場　第十八話【後編】

ＥＳＭ０４は腕にはめ込むタイプの装備で、先端には小型のマシンアームが付いている特殊合金製のワイヤーを撃ち出す事が出来る、様々な場面で、多用な用途に使用出来る変幻自在なサポート専門の装備。

他の装備とは違い、これ自体には攻撃力は皆無だが、様々な場面で意外な活躍を見せた。

Ｗ編では、この装備が勝負の決め手となったと言っても過言ではないだろう。

作者的にも、中々のお気に入り！

○仮面ライダーシードサーチ・ガイア　初登場　第十八話【後編】

ガイアモードの強化形態の一つ。

感覚強化と力に特化している。

更にサーチバレットに、ガイアブレイガンをジョイントする事で、新たな武器、ガイアバレットを生み出す。

必殺技は収束させたエネルギーを撃ち出すガイアシューター。

○澤田燐子　初登場　第十九話【前編】

前回のキャラクターファイルで多少存在に触れているが、本格的な出番はここからだったので、こちらにも記載。

腰まで届きそうな長く綺麗な黒髪に、牛乳瓶の底の様な、分厚いメガネが見事なアンバランスを形成しているプロの漫画家で、純の母の幼馴染。

最近までスランプに陥っていたそうなのだが、板橋家に来て、それが解消されたらしい。

彼女本人が言うには、ここはネタの倉庫だとか……

○「海のバカヤロオオオオオオオオオ！！！！」と叫んだ青年
初登場　第十九話【前編】

彼は悪くないんです。

ただ少し運が悪かった……

それだけなんです。

固有名詞は無いですが、プレイバック編で漢気を見せた為か、意外と人気があったり。

この作品の男性キャラは、海と関わりを持たせると人気が出るのでしょうか？

そしてホルダー時の能力は、自身の肉体の成長促進による巨大化と蔓を自在に操れる事。

ただし蔓を自在に操れる量や操作率は、成長度に比例している。

○メカ犬（ビデオカメラ装備バージョン）　初登場　第十九話【前編】

最初は漫画作りの資料作成の為に背中にカメラを背負っていただけだったのだが、途中から何かに目覚めたらしく、純となのはのカメラアングルに始まり、台詞の後付を要求するという徹底振りを見せた。

○ラブラブカップルじゅ～ちゅ　　初登場　第十九話【後編】

駅前の喫茶店のメニューに載っている品の一つで、恋人専用のとても痛いメニュー。

これを平気で注文出来る猛者は、文句無しのバカップルだ！！！

○小さな赤い宝石が付けられたブローチ　　初登場　第十九話【後編】

純がデートの最後に、なのはにプレゼントとして送った品。

この場面を書いている時、あまりにも甘くて、どうにかなるかと思いました。

名カメラマンメカ犬は、最後の良心です。

○仮面ライダーシードパワー・ガイア　　初登場　第十九話【後編】

ガイアモードの強化形態の一つ。

力に超特化している。

更にパワーブレードに、ガイアブレイガンをジョイントする事で、新たな武器、ガイアブレードを生み出す。

必殺技は全フォルム中最強の威力を誇る衝撃波を相手に叩き込むガイアブレイカー。

○翠屋に来た女性　　初登場　プレイバックアフターストーリー【第１９話編】

プレイバック編では珍しく、台詞付きの初登場を果たした女性。

大人の恋愛……

難しいものです。

○鷲型ホルダー　　初登場　W編

W編オープニングのバトル要員。

ホルダーで偶に出てくる飛行タイプだったのですが、最後はチェイサーさんとの連携ライダーキックでやられております。

ホルダー時の能力には、空を飛ぶ以外に、口から炎弾を吐き出す事が出来る。

○左翔太郎　　初登場　W編

仮面ライダーファンならば、誰もが知っている！！！

新世代の二人で一人の仮面ライダーWに変身する主人公の一人。

ハードボイルドを目指す私立探偵であり、風の街風都で、日々ドーパント絡みの事件を追っている。

探偵としての腕は、それなりにあるのだが、仲間からは頻繁にハーフボイルドと、言われる事が多いが、それも一つの魅力なのかも知れない。

○フィリップ　　初登場　W編

仮面ライダーWのもう一人の主人公。

地球の本棚という特殊な能力を持つ少年で、一度興味を持ったら事柄に対して、その全てを知り尽くすまで、調べ続けてしまうという、驚異的な好奇心の持ち主。

探偵業においての翔太郎の相棒でもあり、基本的に翔太郎が情報を集めて、フィリップが答えを導き出すのが、通常のスタイルとなっている。

実際に事件を追いかけるのは、殆どの場合翔太郎だが状況によっては、フィリップも現場に駆けつける事がある。

○仮面ライダーW　　初登場　W編

翔太郎とフィリップが変身する。

風の街、風都を守り続ける二人で一人の仮面ライダー。

「さあ、お前の罪を数えろ」という決め台詞は、あまりにも有名である。

作中でファングジョーカーも出したかったですが、結局出番が無いまま終わってしまったので、機会があれば、また書いてみたいライダーです。

○沢渡登紀子　　初登場　W編

鳴海探偵事務所に、仕事の依頼をしにやって来た女性。

最近オープンした遊園地、風都ランドパークの最高責任者でもある。

○アノマロカリスドーパント　　初登場　W編

ガイアメモリの力で、使用者が地球の記憶から、アノマロカリスの記憶を引き出した存在。

この作品内では、沢渡登紀子の弟である、沢渡和也がメモリを所有していた。

○ユイ　　初登場　W編

なのはの身体に憑依していた幽霊の女の子。
生前から兄を、心の底より慕っていた。
最後はクリスマスの夜に、純の胸の中で、静かに永遠の眠りについた。

○ビジネススーツに身を包んだ無表情な女性　初登場　W編
Wの最終回近くから出てきたあの組織……

○仮面ライダーサイファー　初登場　W編
急遽として名前を募集したW編のダークライダー。
採用させてもらいました紅月下さん及び、応募していただいた全ての読者様に、感謝の言葉をお送りいたします。
全ての記憶を失い、ネバーとして蘇ったユイの実の兄である青年が、ロストドライバーと、開発途中の試作品のガイアメモリを使用して変身した姿。
激闘の末にシードとの戦いに敗れ、傷ついた身体で、妹のユイを守り、二度目の死を迎えた。

○ハードボイルダー　　初登場　W編

Wの専用バイク。

車体の後ろ半分を換装する事で、陸・海・空での移動を可能にしている。

交換用のユニットは、普段はリボルギャリーに収納されている。

○リボルギャリー　　初登場　W編

普段は鳴海探偵事務所の、秘密の格納庫に収納されている、特殊移送装甲車。

スタッグフォンを使う事で遠隔操作する事も可能。

○鳴海亜樹子　　初登場　W編

鳴海探偵事務所の二代目所長。

最近結婚したばかりの若奥様でもある。

父親が仮面ライダーで、旦那も仮面ライダー、それに友達も仮面ライダーな上に、偶然知り合った人まで仮面ライダーだったという、本人の意思とは裏腹に、仮面ライダーと関わり続ける人生を送る、ある意味凄い人物。

今回のW編では出番が終盤になってしまったが、個人的には好きなキャラの一人です。

出来ればスリッパを使うシーンが、書きたかったです……

○照井竜／仮面ライダーアクセル　初登場　W編

風都警察署の超常犯罪捜査課に配属され、若くして警視という役職を務める。

最初は殺された家族の復讐を誓い、仮面ライダーとなるが、翔太郎達と行動していく中で、復讐よりも大切なものがあるという事に気づいた。

現在は亜樹子と結婚して、新たな家族を得るまでに至った。

この作品がVシネマ発売前に書いたものなので、極端に出番が減ってしまったり、所長呼びのネタが使えなかったのが、本当に悔しいところです。

○ホルダードーパント　初登場　W編

ホルダーモドキにガイアメモリを使用した事で生まれたW編のみの、オリジナル怪人。

特殊な能力は持たないが、純粋な強さでアクセルとE2を圧倒したが、最後はアクセルとE2の同時攻撃で倒された。

○プテラノドン型ヤミー　　初登場　W編

友情出演その一。

なので詳しい設定は設けていないので、誰が作ったヤミーなの？とは聞かないでくださいね。

○火野映司／仮面ライダーオーズ　　初登場　W編

友情出演その二。

２０１１年現在の絶賛放送中の最新仮面ライダーです。

詳しく知りたい人は、日曜朝８時のテレ朝をチェックしよう！！！

○アンク　　初登場　W編

友情出演その三。
オーズの相棒的ポジションなお方。
詳しくは以下同文。

○ガイアエクストリーム　初登場　W編
シードとWが力を合わせて放った、一度限りの合体技。

○風都イレギュラーズ　初登場　W編
サンタちゃん、ウォッチャマン、クイーン&エリザベスといった風都で翔太郎達に力を貸してくれていた住人達
尚この呼び方はWの製作スタッフが現場で呼んでいた言葉であり、本編の劇中では使用されてはいません。

○黒人の男性　初登場　第二十話【前編】
仕事として雇われて、ホルダーをやっていた珍しいタイプの人。
見た目は生粋の外人さんだが、流暢な日本語を喋る。
ホルダー時の能力は、水中戦闘での高速移動。

○マーメイドブルー　　初登場　第二十話【後編】

人魚の入り江の伝説と共に、シルバーライト島の王家で保管されてきた宝玉。

一般の人達が見る事が出来るのは、年に一度だけという、ありがたいお宝。

○メカ海　　初登場　第二十話【後編】

メカ竜に続く、シードのパワーアップツール第二弾！

初登場から、何故か高い人気を誇る彼女？ですが、基本的に水中仕様なので、普段の出番はある程度制限されるかもしれません。

ただ書いていると勝手に何処かへ突っ走っていく自由奔放なキャラなので、もしかしたらな出番は来るかもしれません。

○仮面ライダーシードベーシック・ダイバー　　初登場　第二十話【後編】

ダイバーモードの強化形態の一つ。

水中戦を想定された設計をされており、全身に取り付けられたスクリューと、イルカをモチーフにしたメタルブルーのボディーが特徴。

格闘戦と防御力に特化している。

ベーシック・ガイア同様四体の分身体を作り出す事ができるのが強味。

必殺技は四体の分身体と共に回転させたスクリューを推進力にして、輝く右拳をホルダーに向けて叩き込むダイバーチェーンブロー。

○若い執事さん　　初登場　第二十一話【前編】

執事は仮の姿であり、その正体はガルドの研究を引き継いだ雇われの研究者だった。

影の黒幕という事もあり、プロット上では色々と設定が出来ていたが、話しの展開の都合上、大幅に出番がなくなってしまった、ある意味この作品に登場した悪役史上最も報われない人……

最後は全てTさんに横から出番ごと奪われてしまった。

○王国の重鎮達　　初登場　第二十一話【前編】

お爺ちゃん達は何かと心配性なのです。

○婿候補さん達　　初登場　第二十一話【後編】

エミリーのお婿さん候補として登場した二人だったが、結局一言も無く出番を終えた、悲しく宿命を背負った方達。

仮に純が居なくて、どちらかがエミリーと結婚出来たとしても、きっとロリコンだと周囲から蔑まされたであろう、何処までも報われない人達である。

ホルダー時の能力は、特定の専用武器の生成と、二人が協力する事で撃ち出す事が可能な黒い雷撃。

○仮面ライダーシードスピード・ダイバー　　初登場　第二十一話【後編】

ダイバーモードの強化形態の一つ。

水中においての素早さと防御力に特化している。

その代わり地上では、その自重の為、早く動く事は出来ない。

専用武器はメカ竜の時と同じ位置に置かれたボタンを押す事で、両腕の甲に、フック状になった突起が先端に付いており、その先には長いチェーンが繋がっている一風変わった武器のスピードアンカー。

必殺技は光り輝くスピードアンカーを振り回しながら、全力で投げ

込むダイバーウィップショット。

○八束神社　　初登場　第二十二話【前編】

最強の巫女さんは……残念ながら出てきません。

○平田辰樹　　初登場　第二十二話【前編】

月刊海鳴で、炭のある生活というコーナーを持っている、海鳴市でも有名な炭職人。

どうやら御神木を使った炭を製作しようとしていたらしい。

ホルダー時の能力は、蜂型の小型ロボットを大量に操作して敵を撹乱する事が出来る。

○平田虎紀　　初登場　第二十二話【前編】

平田辰樹の実の息子であり、炭作りの弟子でもある。

ホルダー時の能力も平田辰樹と同様であるが、本編では未使用。

○マシンドレッサーカタパルトモード　初登場　第二十二話【後編】

バイクモード、ドレッサーモードに続く第三形態。

E2を乗せて射出する事が出来るが、使用するとかなりの負担がかかるので、E2の奥の手の一つと使用される事が殆どである。

○仮面ライダーシードサーチ・ダイバー　初登場　第二十二話【後編】

ダイバーモードの強化形態の一つ。

感覚強化と防御力に特化している。

専用武器はメカ竜の時と同じ位置に置かれたボタンを押す事で、両肩にミサイルポットが生成され、複眼の上には、薄い青のバイザーが装着されるサーチランチャー。

必殺技は両肩のサーチランチャーから大量の小型ミサイルが発射されるダイバーフルバーニング。

○仮面ライダーシードパワー・ダイバー　初登場　第二十二話【後編】

ダイバーモードの強化形態の一つ。
力と防御力に特化している。

専用武器はメカ竜の時と同じ位置に置かれたボタンを押す事で生成される青い掴みに、赤い刃を携えた、巨大な斧パワーアックス。

必殺技は上段に構えたパワーアックスを、渾身の力で振り下ろすダイバークラッシュ。

○月刊海鳴新年特別号　初登場　第二十三話【前編】

今回の特集は仮面ライダー！

これを読めば君も今日から、ライダー博士だ！！！

（予告帯より抜粋）

○未確認飛行生物　初登場　第二十四話【前編】

最近海鳴市で目撃されていた謎の飛行生物。

その正体はホルダー化する前に能力を使用していた男性だったが、結局はオーバーの手でホルダー化を促進された上に、その後操られてしまった。

ホルダー時の能力は、風を自身の周囲に発生させてコントロールする事。

○ミケ　　初登場　第二十五話【前編】

橘家で飼われている山猫。

猫なのに、人間と散歩するのが好きらしい。

元々は野生だったが、今ではすっかりと飼い猫暮らしが板についている様子。

元々ホルダー化する事自体が特殊な例なので、能力は不明だが、ホルダー化によって、野生の本能が強く刺激された様である。

○橘歩　　第二十五話【前編】

純達の先輩に当たる小学三年生で、ミケの飼い主。

亡くなったおじいちゃんに代わり、良くミケの面倒を見ている見た目薄幸の美少年。

## キャラクターファイル第四弾（後書き）

番外扱いとなっている仮面ライダーアスラも、折角なので、後書きでメインキャスト名だけでも入れておこうと思います。

○成桐円射／仮面ライダーアスラ

○闘神アスラ

○邪神（本編では名無し）

○鳴海綾香

○来瀬美亜

○外道闇慈

以上です。

## 第２６話　バレンタインデーｏｒパニックデー【前編】（前書き）

今回は少々ネタに走った回となっておりますが、楽しんでいただけたら幸いです。

# 第２６話　バレンタインデーｏｒパニックデー【前編】

二月十四日。

この日は、世界で多くの恋人が誕生する記念日。

所謂セントバレンタインデーだ。

日本でこの言葉が一般的に使われ出したのは、歴史的にみて最近の話しであるが、その起源は意外と古いもので、一説には、２６９年のローマ皇帝の時代まで遡ると言われている。

ただ、国によって風習などかなり異なるので、今も明確な答えは出ていないのだとか……

その中でも日本は独特の風習で、他の国とは違い、女性が好きな男性にチョコを贈るのが、慣わしとなっていたりする。

その一ヶ月後に、女性からチョコを貰った男性が、お返しをするホワイトデーという日は、日本だけの変わった風習だ。

日本では一部の人が某菓子メーカーの陰謀だなどと言う言葉を耳にした事があるが、正確にはバレンタインデーでは無く後から独自に日本だけで設けられたホワイトデーこそが、その最たる存在なのではないかと、個人的に推測する。

まあ、日本人の場合は、ハロウィンや、クリスマスと言った様に、本来の宗教的な意味合いを、度外視して、基本的に楽しむ為の行事だと、捉えている人達が殆どかもしれない。

それはこの海鳴市内に住む住人達にも言える事で、この二月十四日という特別な日が近づくにつれて、多くの女性は当日の準備に追われ、それ以上に多くの男性は、何処か落ち着かない様子を見せ始める。

しかしそれは毎年恒例の、出来事であり、俺にとっては精々母さんと、お隣さんのなのはちゃんから、義理チョコを貰うぐらいの行事に過ぎなかったので、特に意識する事は無かった。

まあ、小学生になってから、急激に知り合いが増えたという事もあり、多少は義理チョコの貰える個数が増えるかもしれないと、暢気な事を思ったりもしたが……

まさか今年のバレンタインが、あんな事態になるなんて、俺は夢にも思っていなかった。

【この文章は、二月十四日の板橋純の日記の一部を抜粋したものである】

『マスター後ろだ！！！』

「分かってる！！！」

メカ犬の声に呼応する様に、俺は後ろに回し蹴りを繰り出す。

その一撃を受けて、俺の後ろに居たホルダーモドキが、勢い良く吹き飛ぶ。

俺はそれを確認した後に、既に両脇から、新たに肉薄する敵に、拳を振るう。

『敵の数が多い！戦い方を変えるぞマスター！！！』

「ああ！」

目の前に迫り来るホルダーモドキの一撃を避けてから、俺は一旦バックステップで、ホルダーモドキ達の包囲網抜けつつ、ベルトの右側をスライドさせて、緑色と黄色のボタンを押す。

『スピードフォルム』

『スピードロッド』

メタルブラックのボディーは、ライトグリーンに染まり、俺の右手には、ベルトから発生した光が、専用武器であるスピードロッドが生成される。

「行くぜメカ犬！」

『うむ！』

フォルムチェンジを終えた俺は、スピードロッドを構えて、ホルダーモドキの群れの中に、特攻を仕掛ける。

スピードロッドを縦横無尽に振り回しながら、俺はホルダーモドキ達を薙ぎ倒していく。

「しかし、今日は大量だな。ホルダー主催のパーティー会場でも近くにあるのか！？」

『言い得て妙ではあるが、それは無いだろう。しかし何かしらの意図はある筈だ』

俺は戦いながらも、メカ犬とこの状況を軽い冗談を交えつつ、考察する。

いつもの様に、タッチノートがホルダー反応を感知して、メカ犬と合流した俺は、急いで現場である、ビジネス街の中にあるビルの建設現場に向かった訳だが、到着した途端に、大量のホルダーモドキ達が、何処からか沸いて出て来たのだ。

「なあ、メカ犬。これって、やっぱり……」

『うむ。普通に考えれば、ワタシ達を誘き寄せる罠だと考えるのが、妥当だろうな』

俺とメカ犬の考えが一致したところで、建設途中のビルの上から、聞き慣れた声が聞こえてきた。

「正解だよ」

その声のする方に振り向くと、藍色の怪人、オーバーが軽く手を叩きながら、俺達を見ていた。

『一体どういうつもりだオーバー！？』

メカ犬の叫びが、建設現場の中で鳴り響く。

「君達がさっき自分で言っていたでしょ？これは君達を誘き寄せる為の餌だよ」

「どういう事だ？」

「ふふ。別にどうって事は無いさ。ただちょっとした実験に協力してもらいたくて、君達を呼んだんだ」

オーバーはそう言うと、右手の親指と人差し指を弾かせて、音を鳴らす。

それが合図となっていたのか、オーバーの頭上の鉄骨から、新たな異形の存在が姿を現して、俺の居る近くの地面に飛び降りた。

「ホルダー？」

異形の存在は間違い無くホルダーだった。

見た目は、何だか箱状で、プレゼント用の、可愛らしいピンクのリボンにしか見えない装飾が、あしらわれていたりと、中々に奇抜な

格好では、あるが確かにホルダーである。

『何なのだそのホルダーは？』

「正直僕も困ってるんだよね。道端で適当な人間をホルダーにしてみたんだけど、この子の能力が何なのか、さっぱり分からなくてさ」

オーバーはそう言うと、自らの肩を竦めて見せた。

「もしかして、このホルダーの能力が分からないから、俺と戦わせてみようとして、ここに俺達を誘い出したのか？」

「まあ、そういう事だね」

俺の投げかけた質問に、オーバーはあっさりと肯定した。

正直なところ、ふざけるなと叫んでやりたいが、既に話し合いの時間は終わっている様で、例のホルダーが、こちらに突進して来るのが見える。

『来るぞマスター！』

「ああ！」

俺はスピードロッドを身構えて、ホルダーの攻撃に備えるが、ここで予想外の出来事が起こった。

「ふぎゃ！？」

俺の眼前まで迫っ来たホルダーが、何の前触れも無く、盛大に転倒

したのである。

その予想外の事態に、敵味方関係無く、この場に居た全員の視線が、転倒したホルダーに集中した。

「あ～いたた……転んじゃったよ。お～マジで痛いわこりゃ……」

何かブツブツと呟きながら立ち上がったホルダーは、身体に付いた砂埃を掃い終わると、再び俺の居る方向に向き直る。

「がああああああ！！！！！！」

「やかましいわ！！！！！！！」

わざとらしい叫びを上げて突進してくるホルダーに、俺は思わず突っ込みの声を上げながら、ホルダーの脳天に、スピードロッドの一撃を叩き込んだ。

「うをおおおおお！！！いてえ！？マジでいてえよこれ！？」

それに対してホルダーは、スピードロッドによる一撃を喰らった頭を押さえながら、痛みに悶え苦しんでいる。

その反応を一瞥した後、俺はどういう事なのかと、建設中のビルの上に居るオーバーに、説明を求めようと視線を向けるが、どうやらこの状況は、首謀者であるオーバーも予想していなかったらしく、失敗作だったのかな、などと呟いていた。

「よくも俺を怒らせたな！！！！こうなったら俺の奥の手を見せてやる！！！！」

ここまでの一連の流れにより、先程までの戦いの緊張感が、敵味方の双方、著しく削られたこの場で、その空気を作った張本人であるホルダーが雄たけびを上げる。

「喰らえええええええええええええいいいいいいいいいいいいいいい！！！！！！！！！！！」

そう叫びながらホルダーが、両手を前に突き出すと、何やらピンク色のハート型の光が発射される。

『危ないマスター！！！！』

「え！？」

俺はその時、このグダグダ感が漂う空気の中で居た為に、メカ犬の声に一瞬だが反応が遅れてしまった。

気付いた時には、既にホルダーの放った光を避ける事は不可能な距離まで迫っており、俺は成す術無く、その一撃を受けてしまう。

「うわああああああああああああああ……あ、あれ？」

ホルダーの一撃を確かに受けたのだが、俺の身体には、何一つ異常が見受けられなかった。

試しに各関節を動かしてみたり、軽い柔軟をしてみたりと、確認作業をしてみるが、何処にも問題は無さそうである。

一通りの確認を終えて、俺がホルダーに向き直ると……

「失礼しましたあああああ！！！！！！」

と叫びながら脱兎の如く、その場から走り出してしまった。

本来ならば絶対に逃がすべきでは無いのだが、俺は呆気に取られてしまい、追いかける事すら忘れて、逃げるホルダーをただ見送る事しか出来なかった。

「……今のは、何の意味があったんだろうな？」

『……分からん』

その後、数秒間の沈黙が、この場を支配するが、その空気をある一人の勇気ある人物が打破してくれた。

少し離れた距離から聞こえて来るサイレンの音。

更にこちらに近付いて来るにつれて、共に聞こえて来るエンジン音が、この静寂に終焉をもたらしてくれたのである。

「遅くなってすいません！」

その二つの音を放っていた正体、マシンドレッサーから舞い降りた、この街のもう一人の仮面ライダーである、Ｅ２が、俺の近くへとやって来た。

「……ふ、ふん。どうも邪魔が入ったみたいだけど、これで面白くなってきたかな」

ここで先程までの空気を、一新しようと考えたのだろう。

いつもより多少、演劇くさい口調で、オーバーがそう言うと、俺達の周囲に居たホルダーモドキ達が、一斉に襲い掛かって来る。

「行くぞ！」

「はい！」

俺とE2はそのまま二手に分かれて、其々襲い掛かって来るホルダーモドキ達と、戦闘を開始する。

『マスター。メカ竜を呼んで一気に決めるぞ！』

「OK！！！」

メカ犬の判断に、俺は頷きながら、ベルトからタッチノートを取り出して、操作を始めた。

『ガイア・コール』

タッチノートから音声が鳴り響いた後、鉄骨の上からメタルレッドのボディーを持つ手乗り恐竜である、メカ竜が飛び降りて来た。

『お待たせしました！マスター！』

『頼むぞメカ竜』

『はい！任せてください先輩！！！』

メカーズの二人が話している間に、俺は一旦スピードロッドを地面に突き刺して、タッチノートの操作を続けていく。

『スタンディングモード』

メカ竜はタッチノートから流れる音声と同時に、アタッチメントパーツに変形して、俺の左手の中に納まる。

俺はタッチノートを、再びベルトに差し込んでから、続いてベルトの左側をスライドさせて、アタッチメントパーツとなったメカ竜を差し込む。

『スピード・ガイア』

すると俺の周囲に展開したメタルレッドの装甲が、次々と全身に装着されていき、新たな姿へと進化する。

ガイアモードへの変身を無事に完了させた俺は、アタッチメントパーツのレバー下のボタンを押して、この姿の時にだけ扱う事が出来る武器を生成する。

『ガイアブレイガン』

ガイアブレイガンが生成された事を確認した俺は、続いて地面に突き刺していたスピードロッドを引き抜いて、ガイアブレイガンを、スピードロッドの溝部分に差し込んだ。

『ジョイントアップ・ガイアロッド』

そうする事により、スピードロッドに、メタルレッドの新たなパー

ツが追加されて、更に強力な武器、ガイアロッドに生まれ変わる。

「はあ！！！」

ガイアロッドを生成した俺は、その武器の威力を存分に発揮して、周囲のホルダーモドキ達に攻撃を加えていく。

『そろそろ決めましょうマスター！』

「そうだな！」

俺はガイアロッドを振り回しながら、メカ竜の提案に頷いた。

周囲を見渡せば、都合の良い事に、ホルダーモドキ達が俺を中心に囲む様にして、歪な円を描いている。

確かにこの位置取りならば、一気に決めるチャンスだ。

俺は今の状況を確認しつつ、ベルトの左側に取り付けたアタッチメントパーツのレバーを勢い良く引いた。

『マックスチャージ』

そうする事で、ベルトから発生した光は、右腕のラインを通じて、ガイアロッドへと集約される。

「こいつで決めるぜ」

重心を低く身構えた俺は、下半身全体に、力を込めてから、全力で光輝くガイアロッドを振り回す。

「ガイアツイスター」

俺を軸として、振り回したガイアロッドから巨大な竜巻が発生して、俺を取り囲んでいたホルダーモドキ達はその暴風に巻き込まれ、内部で真空の刃に刻まれながら、連鎖的に爆発を巻き起こす。

自分の周囲に居たホルダーモドキ達を倒し終えた俺が、Ｅ２の方に視線を向けると、向こう側も殆ど倒し終えたのか、俺の居る方向に走って来る姿が見えた。

「あ～あ。今日は大失敗だね」

ずっと鉄骨の上から高みの見物をしていたオーバーは、そう言いながら、溜息を一つ零した後、追いかける間も無く、何処かに飛び去ってしまった。

「……帰るか」

『……うむ』

何か途中が凄いグダグダになってしまったが、無事に戦いを終えた俺達は、そのまま帰路に着くことにした。

その日は二月十三日の夜。

バレンタインデー当日まで、残り、数時間を切った時間帯に起こった事件だったのだが、この事件がまだ終わっていなかった事に俺が気付くのは、翌日のバレンタインデー当日の事だった……

「いってきます」

バレンタインデー当日の朝。

俺は普段通り家を出て、お隣のなのはちゃんの家に向かった。

普段と違うところをあえて挙げるのであれば、朝起きた時に、母さんからバレンタインチョコを手渡されたぐらいだが、毎年の事なので、あまり気にもならなかった。

そんな事を考えている間に、俺は高町家の庭先へと、足を踏み入れる。

流石にお隣さんというだけあって、子供の足でも十歩程で着いてしまうという近さだ。

「ごめんください」

俺がいつもの通りに、玄関でインターホンを押すと、桃子さんが出

迎えてくれた。

お互いに朝の挨拶を済ませてから、なのはちゃんの所在を聞くと、どうやらまだ寝ているらしい。

小学校に入学してから、登校日の殆どの朝は、この会話を高町家でなのはちゃん以外の誰かと繰り返している気がするが、それも既に日常茶飯事なので、俺はその桃子さんに、俺が起こしてきますと言って、二階のなのはちゃんの部屋に向かう事にした。

「なのはちゃん。朝だよ。早く起きないと遅刻するよ」

朝の第一フェイズ。

部屋の扉を叩きながら、なのはちゃんに呼びかけてみる。

比較的に目覚めつつある時は、この後返事が返って来て、顔を見せて来るのだが、その確率は高くても３０％といったところだろう。

案の定、今日もそれで返事が返って来る様子は無かった。

こうなると作戦は、第二フェイズへと移行する。

「入るよ。なのはちゃん」

第二の作戦は、部屋に潜入しての強行手段だ。

部屋の外から呼んでも聞こえないというのであれば、直接訴えかける以外、道は残されていない。

俺が部屋に入り、その部屋の家主が居るであろう、ベッドの上に視線を向けると、予想通り、なのはちゃんが毛布を被り、幸せそうな寝顔をしていた。

冬の朝のベッドの中は、さぞかし居心地が良いのだろう。

その気持ちは、少なからず分かるのだが、だからと言って、このまま放って置く訳にも行かないので、俺は気持ち良さそうに寝息をたてる、なのはちゃんの肩を軽く揺らしながら、再び起きる様に呼びかける。

「ほら。朝だよなのはちゃん。そろそろ起きないと、遅刻するよ！」

「……う～ん？」

すると今日は、寝覚めが良い方なのか、以外とすぐに反応が返ってきた。

これが酷い時は、数分は目覚めないままだし、更に酷い時などは、使い古された漫画の様に、寝言で後五分と言ってきたりもするのだから、困ったものである。

「おはよう……純君」

まだ完全には目が覚めていないのか、なのはちゃんは、目をての甲で擦りながら、俺に朝の挨拶をしてきた。

「おはようなのはちゃん。起きたなら早く着替えて下に着てね。リビングで待ってるから」

まだ寝ぼけているみたいだが、この程度ならば心配無いだろうと、俺は判断して、部屋を出る為になのはちゃんに背中を向けて部屋を出ようとすると、

「あ！ちょっと待って。純君に渡したい物があるの」

なのはちゃんから、待ったの声が掛かり、俺はその場で足を止めた。

何か後ろで物音が聞こえるので振り向くと、なのはちゃんが、赤いリボンでラッピングされたハート型の箱を手に持って立っていた。

「はい！純君に、バレンタインデーのチョコだよ！」

なのはちゃんは、笑顔でそう言うと、ハート型の箱を俺に手渡してくれた。

「ありがとう。なのはちゃん。後でゆっくり食べるね」

「うん！……あ、あれ？」

幼稚園時代から続く恒例行事を終えたところで、今度こそ部屋を出ようとしたのだが、俺はそこである異変に気付く。

「だ、大丈夫！？なのはちゃん！？」

何やらなのはちゃんの顔全体が赤くなっているのだ。

しかも、目を潤ませて、何処か足取りも不安定になっている様な気がしたので、季節が冬という事もあり、風邪でも引いたのでは無いかと思った俺は、なのはちゃんが倒れない様にする為に、肩の下か

ら腕を通して、支えたのだが、次の瞬間に、なのはちゃんが、とんでもない行動を開始したのである。

「……純君。大好きだよ」

「はい！？」

その言動に、虚を突かれたのが、大きな敗因だろうか。

俺はバランスを崩して、先程までなのはちゃんが寝ていたベッドに、訳が分からない内に、仰向けに倒されてしまった。

「……な、なのはちゃん！？」

更に仰向けに倒れた俺に、覆いかぶさる様に、なのはちゃんが、馬乗りになって、完全なマウントポジションを形成する。

「大好きだよ……純君」

顔を赤くしながらも、なのはちゃんは俺を見詰めながら、まるで呪詛の様に、何度も同じ言葉を繰り返す。

突然の事態に、何がどうなっているのか、混乱している俺に、なのはちゃんが、顔を近付けて来る。

「もう我慢出来ないよ……もっと純君と、一緒に居たい……もっと近くに……」

そして俺が混乱している間にも、目の前でなのはちゃんは、更に突飛な行動を開始する。

「私と一緒に……ねぇ……良いよね？」

何の確認かは知らないが、なのはちゃんは俺に、そう問い掛けると、答えを返す間も無く、パジャマの上着の第一ボタンを外し始めた。

## 第２６話　バレンタインデーｏｒパニックデー【前編】（後書き）

次回は他のヒロイン達も……の予定です。

## 第２６話　バレンタインデーｏｒパニックデー【後編】（前書き）

後編始まります。

今回はネタ回なのに、普段より少し長くなってしまいましたが、楽しんでいただけたら幸いです。

それでは……

# 第２６話　バレンタインデーｏｒパニックデー【後編】

「う……うをおおおおおおおおおおおお！！！」

俺は叫ぶと同時に、マウントポジションで、俺の上に乗っていたなのはちゃんを怪我させない様に持ち上げてから、己の自由を得る事で、この部屋から脱兎の如く逃げ出した。

後ろから何やらなのはちゃんの声が聞こえたが、立ち止まれば、取り返しのつかない事になってしまう予感がした俺は、高町家の玄関で、お邪魔しましたと叫びつつ、全力でこの場を離脱したのである。

「……何だったんだ今のは……」

暫く走り続けて、俺の家と高町家が見えなくなった頃、ここまで来れば安心だと判断して、移動を徒歩に切り替えながら呟いた。

朝起きるまでは、普段の様子と何も変わらなかったのに、起きて顔を合わせて、チョコを受け取った直後から、いきなりなのはちゃんの態度が、急変したのである。

普通に考えれば俺は、なのはちゃんから、熱烈な告白をされたと受け止めるべきなんだろうが、それにしては不自然な点が多い……

「もしかして、美由希さんが、なのはちゃんを上手く言い包めて、俺に悪戯を仕掛けたのか！？」

あの人なら、何気にありえるかも知れない。

基本的に優しい人だけど、意外にお茶目な一面もあるからな……

もしかしたら受験で、ストレスでも溜まっていたのだろうか？

何にせよ、不確定だが、何となく先程の、なのはちゃんが行った寄行の正体の一端が見えた気がしたので、少しだけ気分が落ち着いてきた。

その時、丁度コンビニの前を通りかかったので、時計に目をやると、いつもより随分早い時間に家を出て来た事に、今更ながら気付く。

「今からバス停に行っても、早すぎるしな……」

だからと言って、今から高町家に戻る気にも、到底なれない。

「久しぶりに、歩いて学校に行くか」

今までは、なのはちゃんが学校を休んだ日で、比較的早くに家を出た時しか、学校まで歩いて行く機会は無かったのだが、流石にあの状態から、なのはちゃんが二度寝するとは考え難いし、もしもバス停で再び二人きりになって、なのはちゃんが先程と、同じ事を繰り返してきたら、色々な意味で厄介だ。

だが学校に着いてしまえば、人目が多い分、悪い冗談を仕掛けてくるという事も無いだろう。

俺は一つの結論を出して、普段なのはちゃんと、待っているバス停を通り過ぎ、そのまま学校に向かい歩き出した。

徒歩で学校の校門まで、辿り着いた俺は、そのまま門を潜りながら、周囲を確認する。

普段のバスではなく、今日の交通手段は歩きだった訳だが、やはり家を出た時間が早かったのか、既に学校に来ていた生徒は、スポーツ系のクラブに所属している上級生が、朝練している姿と、他に極少数の生徒が登校しているぐらいのものだった。

その中に特に知り合いが居た訳でもないので、取り敢えず教室に向かおうとしたその時、先程俺が潜り抜けた校門の方向から、車のエンジン音が鳴り響くのが、確かに聞こえた。

まだバスが到着するには、早すぎる筈だと思いながら、俺が校門の方に、視線を向けると、其処には見覚えのある、黒塗りの高級車が陣取っていた……

学校の校門前で停車した高級車の運転席から出て来たのは、これまた見覚えのある執事服に身を包んだ老執事。

その老執事が、後ろに回り後部車両のドアを開けると、俺の予想通

り、一人の銀髪の少女が、車から優雅に舞い降りた。

「それでは行って来るのじゃ。サバスチャン」

「はい。行ってらっしゃいませ姫様。どうかお気をつけて」

「うむ」

其処に広がるのは、先月にこの私立聖祥大附属小学校へ転校してきた、シルバーライト島のお姫様である、エミリーちゃんと、その執事、サバスチャンとの朝の日常風景だった。

相変わらず目立っている事には変わり無いのだが、去年の九月と、先月から続く、毎日の習慣の為か、学校内で彼女達に、特別意識を向ける人間は今や皆無となっている。

試しにグラウンドのトラックに目を向けてみても、長距離走の練習に励んでいる生徒は、脇目も振らず、自身の研鑽を積む事に、没頭していた。

その真面目に練習に打ち込む上級生の姿を見て、俺は改めて人間とは、慣れる生き物なんだなという事を実感する。

「お！純ではないか。どうしたのじゃ？この時間じゃと、まだバスが来ていない筈じゃが……」

俺が校庭で練習に励む上級生を見ながら、そんな感慨に耽っていると、すぐ後ろから、エミリーちゃんの声が聞こえてきた。

「おはよう。エミリーちゃん。ちょっと色々あってさ。今日は早め

に来たんだ」

後ろに振り向きながら、俺はエミリーちゃんに朝の挨拶をしつつ、簡単に経緯を説明する。

詳しく話そうにも、体験した俺自身が、良く分かっていないので、どちらにしろこの位の説明しか出来はしないが……

「おはようなのじゃ。まあ、良く分からぬが、純はいつも……あ！」

エミリーちゃんは俺に朝の挨拶を返した直後、突然、喋る事を止めて、俺を無言で、ただひたすら見詰めてくる。

「え、エミリーちゃん？」

「……実は純に渡したい物があるのじゃ」

暫く無言で俺を見詰め続けていたエミリーちゃんだったが、俺がその圧迫感漂う空気の中、辛うじてエミリーちゃんに声を掛けると、無表情のまま、手持ちの学校指定の鞄から、緑のフリル付きリボンで可愛らしくラッピングされた箱を取り出した。

「これって……」

「今日は……バレンタインじゃからの。日頃の感謝の印じゃ。ありがたく受け取るのじゃぞ」

「あ、ありがとう」

何故、無表情になってしまったのか、気になるところではあるが、

言っている事は、普段と特に変わり無かったので、俺は取り敢えずエミリーちゃんからチョコを受け取ろうと、手を伸ばす。

「もう少し待つのじゃ」

「え？」

しかし、俺が貰う筈のチョコは、俺の手の中には納まらず、エミリーちゃんが、目の前で箱のラッピングを解いて、中のチョコレートを取り出してしまったのである。

そのチョコレートは、テレビでも紹介されていた一口サイズで一ダース分入った高級チョコで、一箱買うだけでも、諭○さんが数人飛んで行くという超高額な代物だった。

エミリーちゃんはそのチョコの一つを無造作に掴むと、何故か己の口に銜える。

「ん……」

「へ？ちょ、ちょっと！？」

その一連の行動に呆気に取られていた俺は、いつの間にか、エミリーちゃんに両肩を掴まれて、引き寄せられていた。

訳も分からないまま、俺とエミリーちゃんの、互いの距離が、みるみる内に縮み、エミリーちゃんの銜えた高級チョコが、俺の口に触れようとしたその時……

「なりませぬぞおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！

！！！！！！！！！姫さまああああああああああああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！」

「おわ！？」

「ひゃ！？」

特大の雄叫びを上げながら、サバスチャンが、鬼神の如き勢いで、俺とエミリーちゃんを引き剥がした。

「な、何をするのじゃ！？サバスチャン！！！」

「いけませぬ！！！いけませぬぞ！！！不肖ながら、このサバスチャン！！！祖国を離れ、姫様のお世話を、仰せ付かっている身なれど！！！その様なふしだらな真似は、私の目の黒い内は、決して許しませぬぞおおおおおおおおおおおお！！！！！！！！！！」

「は、放さぬか！もう少しで、純にチョコを渡す事が出来たのじゃぞ！！！」

「その様な渡し方をせずとも、普通に渡せば宜しいでしょう！？」

「嫌なのじゃ！！！我の心の底より溢れ出るこの愛を、純にぶつけなければ、どうにかなってしまいそうなのじゃ！！！」

「またその様な発言を……」

まるでマシンガンの様に、会話のキャッチボールを繰り広げる二人

を、目の前にして、俺は暫くの間、その場に呆然と立ち尽くしていたが、サバスチャンがエミリーちゃんを担ぎ上げた状態で、この場から離れて行くのを見て、何とか正気を取り戻した。

「……教室に行こう」

何か朝から驚きの連続で、俺は精神的に疲れていたのかもしれない。

今はただ、朝のなのはちゃんのドッキリや、エミリーちゃんとサバスチャンによるマシンガントークなど、について考察するよりも、早く教室の机に突っ伏したいという思いが、俺の心の中で渦巻いている。

いまだ聞こえ続けるエミリーちゃんと、サバスチャンのマシンガントークバトルをＢＧＭに、俺は、校舎に向けて、歩き出した。

教室まで無事に辿り着いた俺は、その欲望のままに、朝のＨＲが始まるまで、机に突っ伏し続けた。

流石に授業中は、そんな訳にも行かず、真面目に授業を受けたが、休み時間の度に、俺は頑なに机に突っ伏し続けたのである。

朝の騒動で精神的に疲れていたというのもあるが、俺がそうなった一番の原因は、なのはちゃんと、エミリーちゃんの二人から、見なくても分かる程に、俺に注げられる、やけに熱い視線の為だ。

一体どういうつもりなのか知らないが、朝の騒動はまだ終わっていなかった様なのである。

幸いにも、俺が机に突っ伏している間は、二人は話しかけてこないし、教室にという人目の多い場所なので、朝の様な事態に発展する事は無いが、途轍もなく居心地が悪い事には変わり無い。

そして時間は無情にも過ぎ去り、午前中の授業の終わりを告げるチャイムが、校舎内に鳴り響く。

今までは休み時間が十分足らずという事もあり、机に突っ伏して、やり過ごす事も可能だったが、昼休みはそういう訳にも行かない。

幸いにも今日は、なのはちゃん達とではなく、クラスの男友達と、昼食を食べる約束をしていたので、すぐに弁当を持って、移動しようと試みたのだが……

「純君。今日はずっと、元気が無いみたいだけど、何かあったの？」

後ろからすずかちゃんの、俺を心配する声が聞こえてきた。

朝の内に机に突っ伏したまま、挨拶だけはしておいたのだが、俺の午前中の様子を見て、心配して声を掛けてくれたのだろう。

何だか俺は、今日一番の優しさに触れた気がした。

「ああ……えっと、少し疲れてた、だけだから、心配無いよ」

すずかちゃんの真摯な優しさに応える為にも、俺は心配させまいと、後ろに振り向きながら、笑顔で答えた。

「それなら良いん……あ！」

その答えに、すずかちゃんが胸を撫で下ろす姿が見えたのだが……

何故だろう？

その後、一瞬だけ、すずかちゃんの目線が、凄まじいデジャブを俺の脳裏に呼び起こした気がする。

「あの……純君。ちょっとお願いがあるんだけど、一緒に来てもらって良いかな？」

しかしその考えは俺の杞憂だったのか。

すずかちゃんは普段通りの態度で、俺に接してきた。

「お願い？ここで話しちゃ駄目なのかな」

「うん。出来れば他の人には聞かれたくないんだ……」

すずかちゃんがそう言うという事は、余程の事なのかもしれない。

もしかしたら、何か俺に相談事でもあるのではと考えた俺は、一緒に昼食を摂る筈だった、男友達のグループに視線を向けると、その内の一人、秋川君と目が合う。

秋川君は、俺とすずかちゃんに何度か視線を交互に向けた後、何故か良い笑顔でサムズアップを披露して、口パクで気にしないで行ってこいよと、俺に伝えてくる。

この瞬間、何か取り返しのつかない、大きな誤解を生んだ様な気もするが、一応の了承は下りたと考えるべきだろう。

「うん。分かったよ」

秋川君の了承を得た俺は、机から立ち上がり、すずかちゃんと一緒に教室を出た。

教室を出て暫く歩き、俺とすずかちゃんは、校舎裏にまでやって来た。

他の季節には、外で食事をする生徒も見かけるのだが、冬場の寒いこの時期に、外で食事をする物好きは居ない様で、辺りに人気は、全くと言って良い程に感じられない。

「それで、お願いって何なのかな？」

「うん……えっとね。純君にこれを受け取ってもらいたかったんだ……」

俺とすずかちゃん以外、誰も居ない校舎裏で、俺が話を切り出すと、すずかちゃんが俯きながら、青いリボンで飾り付けられた手のひら

に収まるサイズの小さな袋をポケットから取り出して、俺の前に差し出した。

その可愛らしい包装紙を見て、俺は今日が何の日だったのか、改めて思い出す。

朝から何かと騒動の連続だった為、頭からその単語が、すっかりと抜け落ちていたが、今日はバレンタインデーなのだ。

恐らくすずかちゃんは、人前で渡すのが恥ずかしくて、俺をこんな人気の無い場所まで連れて来たのだろう。

ここまでのすずかちゃんの、一連の行動に納得した俺は、差し出されたチョコを、ありがたく頂く事にした。

「ありがとうすずかちゃん。後でゆっくり食べるね」

「う、うん……それとね……」

ありがたくチョコを受け取った後、すずかちゃんは、まだ何か言いた気に、俺を見詰める。

「どうしたの？ここなら誰も居ないし、遠慮しなくても俺以外、誰も聞いてないから大丈夫だよ」

何か言い辛そうにしていたので、俺は話しやすい様に、助け舟を出してみる。

「……私……純君が食べたの！！！」

「へ！？」

良かれと思い、俺が発言した直後、すずかちゃんが、聞き違いでなければ、途轍もない発言を発しながら、俺に抱きついてきた。

あまりにも唐突だった為、俺は成す統べ無く、すずかちゃんにガッチリとホールドされてしまった訳だが、それ以上に、見た目とは裏腹に遺憾無く怪力を発揮するすずかちゃんの腕が、俺の力では振り解く事が出来ないという事が、一番の問題かもしれない。

「す、すずかちゃん！？」

「……ごめんね。我慢してたんだけど……もう無理みたい……」

「な、何を言っていひゃああ！？」

耳元で熱い吐息を混じらせながら、囁くすずかちゃんに、抗議を申し立てようとしたところで、すずかちゃんが、俺の耳を舐め上げた。

その行き成りの、言い様の無い感覚に、俺は思わず身を捩じらせる。

「ど、どうしたの！？何かおかしいよ！？」

「おかしくなっちゃうよ……だって純君……こんなに美味しいんだもん……」

どうにかして止めてもらおうと、俺は更なる抗議の声を上げようとするのだが、すずかちゃんは、俺の声が聞こえていないのか、執拗に俺の耳を舐め続ける。

「「ちょっと待ったあああああああ！！！」」

意味不明な出来事の連続で、このままではどうにかなってしまいそうだと思ったその瞬間、天の助けなのか、俺とすずかちゃん意外に、誰も居なかった筈の校舎裏に、二人の少女の声が木霊した。

「何やってるのすずかちゃん！？純君は私だけの幼馴染なんだよ！！！」

「我の大切な世話係に、随分な事をしてくれたようじゃの！！！」

言っている事は意味不明だが、この場に颯爽と現れたなのはちゃんと、エミリーちゃんが、すずかちゃんを引き剥がしに掛かる。

勿論すずかちゃんの力は、この二人でどうにかなる程、生易しいものではないが、すずかちゃんの意識を逸らすには充分だった様で、僅かにだが俺を掴んでいた腕の力が緩む。

「今だ！」

俺はその隙に、勢い良く身を屈めて、すずかちゃんの拘束から抜け出す事に成功した。

「こっちよ純！」

その直後、俺を呼ぶ声の方向に、脇目も振らずに走ると、曲がり角まで走ったところで、一人の女の子が、俺の手を引き、安全な場所へと誘導してくれた。

「ありがとう。おかげで助かったよ。アリサちゃん」

俺は校舎の中の空き教室の一室で、あの異空間から助け出してくれた少女、アリサちゃんに御礼の言葉を述べた。

「別に良いわよ。御礼なんて」

アリサちゃんは、廊下側の様子を気にしているのか、ドアの付近に視線を固定したまま答える。

「でも、何でアリサちゃんがあの場に居たの？」

「なのはとエミリーが、二人が教室を出た後に、後を追おうって騒ぎ立てたからよ。最初は私も止めたんだけど、二人して何だか妙に殺気立ってたから、仕方なく私も一緒に着いて行って、廊下を歩いてる人達に、純とすずかが何処に行ったのか、聞きながら校舎裏にまで来たんだけど、行き成り二人が叫びながら走り出したもんだか

ら、本当に驚いたわ」

アリサちゃんも、今日は余程、苦労したのか、校舎裏に来るまでの経緯を早口で一気に捲くし立てると、溜息を吐き出しながら、両手を広げて見せた。

「大変だったみたいだね」

「おかげで今日はまだ、お昼も食べてないんだから、勘弁してほしいわよ……それにしてもバレンタインだからって、皆して積極的過ぎるんじゃないかしら……」

後半部分は声が小さくて、俺の耳には聞こえてこなかったが、アリサちゃんが苦労した事だけは、痛いほどに伝わった。

「お昼か……今から食べに行きたいけど、今のなのはちゃん達と、鉢合わせたら、それどころじゃ無くなりそうだよね……」

「そうよね。不本意だけど、このまま授業直前まで、ここに居た方が得策かもしれないわ」

俺とアリサちゃんの意見は、議論を交わすまでも無く、一致したが、やはりこの育ち盛りの身体で昼を抜くというのは、正直なところ、かなり辛かったりする。

お互いに何か無いかと、ポケットの中を探ってみるが、俺のポケットには、小さい財布と、タッチノートが入っているのみで、食べられそうなものは皆無だった。

先程すずかちゃんから貰ったチョコがあれば良かったのだが、残念

な事に、あの騒動の中で、落としてしまったらしい。

「……あの……純」

食べ物の確保に失敗して、俺が肩を落としていると、アリサちゃんが、話しかけてきた。

「ん、何かあったの？」

「これ……バレンタインのチョコ。言っとくけど、義理だから、か、勘違いしないでね」

地獄に仏とは、まさにこの事だろう。

この食料難という切実な局面で、俺は初めてバレンタインデーという日に心から感謝した。

「ありがとう。アリサちゃん。本当は後でゆっくり食べたいけど、今から一緒に食べよう」

元々アリサちゃんが、俺にくれるつもりの物だったとしても、この状況で一人で食べる訳には行かないし、そして何よりもアリサちゃんに申し訳無い。

俺はありがたく受け取ったチョコ入りの箱の包装紙を、さっそく開けて、中に入っていた大量の金貨型のチョコの半分を取り出してから、それをアリサちゃんに渡す。

「はい。これはアリサちゃんの分ね」

「……あ！」

チョコを渡す時に、一瞬アリサちゃんと目が合ったその時、僅かだがアリサちゃんの雰囲気が変わった様に感じられたが、何か気になる事でもあったのだろうか？

もしかしたらこの大量のチョコを食べた後の、体重変化を気にしているのかもしれない。

そうだったとしたら、俺は迷わず気にしなくても大丈夫だよと、発言するところだが、女の子というのは、とてもデリケートな存在である。

特に男は、女性がするこの手の話題に触れるのは、なるべく関わらない様にしておくのが、マナーというものだろう。

ならば俺が、この場で起こす行動はただ一つ。

「それじゃあ、いただきます」

こういう時は、下手に意識するよりも、自然に振舞う方が、相手を傷つけずに済むものである。

俺はなるべく、先程の考えを頭から追い出す様にして、アリサちゃんから貰ったチョコを食べ始める事にした。

それを見たアリサちゃんも、やはりお腹が減っていたのだろう。

程なくして、俺の隣でチョコを食べ始めた。

「……ねえ。そのチョコ、美味しかった？」

暫く無言で食べ続けていた俺達だったが、お互いに殆どのチョコを食べ終わった頃に、アリサちゃんがそんな質問を投げかける。

「うん。美味しかったよ」

「そう……あ、純の指にチョコが付いてる」

そう言われて、俺自身の指を確認してみると、確かに指の熱で、溶け出したのであろう、チョコが多少ながら付着していた。

「……勿体無いわよね？」

俺がそのチョコを拭い取ろうとしたその時、アリサちゃんはそう呟くと。俺の手を掴みながら、俺の正面に回り込んで、しゃがみ込む。

そして何を思ったのか……あろう事に俺の指をその口に含んだのである。

「ア、アリサちゃん！？」

俺が驚きの声を上げても、アリサちゃんは止める様子も無く、上目使いで俺を見詰めながら、時には軽く甘噛みしたり、舌を指に絡ませたり、口に含んだまま、上下左右に首を軽く動かしたりと、俺の指を蹂躙していく。

「あ……あう、えと……」

何故か途轍もなく、いけない事をしている感覚に陥り、身動きが出

来ずにいると、漸く満足したのか、アリサちゃんがチョコの代わりに唾液で濡れた俺の指を開放する。

その様子を見て、これで終わったのかと俺の心の中に、小さな心の余裕が生まれるが、それはどうやら甘い考えだった様だ。

「……純のここにも、まだ付いてる……」

アリサちゃんは、潤んだ瞳で、そう言いながら、俺の頬に手を這わせて、あろう事か、顔を近づけてきたのである。

「「「こらあああああああああああああああああ！！！」」」

もう少しで、アリサちゃんの唇が、俺の頬に触れようとしたその時、空き教室の扉が開かれると同時に、凄く聞き覚えのある、三人の少女の怒号が、俺の耳の鼓膜を振るわせた。

その後の昼休みは、今まで以上のカオスだったとだけ、言っておく事にする。

他にただ一つ言える事は、俺が女性に口喧嘩で勝てる日は、一生来ないであろうという事を、改めて確認出来たという事ぐらいだろうか……

放課後になり、俺は全速力で逃げた。

昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴ると同時に、俺は何とかあのカオス空間を抜け出して、五時間目の授業以降、休み時間は再び机に突っ伏すという作戦を繰り返した。

俺に降り注ぐ熱い視線の数が、午後からは二倍に増えたが、俺は何とかその苦行を乗り越えて、放課後を迎え、俺に近づく四人の気配を逸早く察して、戦術的撤退を選択したのである。

廊下を走るなと叫ぶ、教師の声に脇目も振らず、俺は校舎を全速力で駆け抜けて、校門を出た後も、数分間はがむしゃらに走り続けた。

「……ていう事が、学校であってさ」

「だから純君は、あんなに汗だくで走ってたんやな」

そして俺は現在、八神宅のお茶の間で、この家の主であるはやてちゃんと、お茶を飲みながら、学校で起こった騒動を話していた。

放課後になってからすぐに、走り続けていた俺は、偶然にも、図書館帰りのはやてちゃんと遭遇したのである。

最初は、なのはちゃん達の例もある上に、この一連の騒動が全員グルの壮大なバレンタインドッキリだとしたら、間違い無く、悪戯の

総本山とも言えるはやてちゃんが、無関係な訳が無いと、警戒したのだが、話してみるとそんな様子も見受けられなかったので、お茶に誘われた俺は、そのまま御呼ばれする事にしたのだ。

その際に俺には多少の算段があった。

まずこのまま家に帰ったとしても、待ち伏せされる可能性が極めて高い。

向こうには、サバスチャンや、鮫島さんという、呼べばいつでも車という文明の利器を使用する手段があるのだ。

どう転んでも、徒歩の俺には勝ち目が無い。

仮に待ち伏せされなかったとしても、お隣には、なのはちゃんが住んでいるのである。

早い時間に帰れば、間違い無く我が家に突入して来るだろう。

つまり、早い時間に帰宅するのは、現状リスクが高すぎるのである。

それを踏まえれば、はやてちゃんの家に行けば、多少なりとも、時間を稼げる筈だ。

たとえそれが罠だったとしても、闇雲に逃げ続けるよりも、知っている場所の方が、何かと対策は立てやすい。

そんな打算も頭で考えつつ、俺は八神宅にお邪魔する事を決定した。

無論はやてちゃんがそんな事をする訳が無いと、信じたい心も充分

にある訳だが……

「あ、そうや！バレンタインで思い出したわ。私も純君にプレゼントがあるんよ」

今日、学校で起こった例の騒動をはやてちゃんと話していると、思い出した様に、はやてちゃんがそう言って、ポケットから何かを取り出した。

「へ？」

俺はその取り出された物体を見て、思わず声を上げる。

定番のチョコを取り出すものだとばかり思っていたのだが、実際にはやてちゃんが取り出したものは、そのラッピングに多く使われるであろう、赤いリボンだった為だ。

そしてその取り出したリボンを、はやてちゃんが自分自身の頭に飾りつけるのを見て、俺の中で過去の出来事に裏打ちされた、根拠ある嫌な予感が俺の全身系を刺激し始める。

「私が……バレンタインのプレゼントや……受け取ってな……純君……」

リボンを付けたはやてちゃんは、頬を赤らめながら、俺にそう言うと、おもむろに着ていた服を脱ぎ始めた。

「そういう事だと思ったよおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！」

俺はその瞬間、今朝の高町家や放課後に出した以上の速度で、脱兎の如く八神宅から飛び出した。

「はあ、はあ……本当に今日はどうなってるんだよ!?」

近くの公園まで猛ダッシュした俺は、水飲み場で、水をがぶ飲みして、喉の渇きを癒しつつ、流石に悪戯にしては手が込みすぎているのではないかと、考えを巡らせる。

［『マスター。聞こえるか?』］

俺が考えをめぐらせていると、タッチノートから、メカ犬の通信が入った。

「どうしたんだ?メカ犬」

［『うむ。それなのだが、今日は何か、マスターの身に、変わった出来事が起こったりしなかったか?』］

「変わった事って……あ！」

［『その様子だと、やはりマスターにも影響が出ていた様だな……』］

メカ犬が、俺の反応で、何かを確信したらしく、通信越しに呟きを零す。

［『タッチノートに反応しない程の微弱な反応なのだが、現在あちこちで、ホルダー反応が出ているのだ。確認をする為に、幾つかの現場を回ったのだが、どうも住人の様子が何処かおかしくてな……』］

「きゃあああああああ！？怪物よおおおおおおおお！！！！！！」

メカ犬がその次に何かを言おうとした矢先に、甲高い悲鳴が公園内に木霊した。

急いで悲鳴の上がった方向に視線を向けると、昨日の夜、オーバーに失敗作だと言われていたホルダーが、公園の中心に現れて、公園に陣取っている姿が見えた。

「はっはあ！俺の怖さを思い知らせてやるぜ！！！」

ホルダーは誰に言うでも無く、そう叫ぶと、昨日と同じ様に両手を前に突き出して、逃げ遅れた見た目八十台程の老夫婦に、俺にも浴びせた、ハート型のピンク光線を発射したのである。

当然の事ながら、それ自体には、外的被害は何も無く、光線を浴び

た老夫婦も無傷だったのだが、異変はここから始まった。

「……婆さんや」

「……お爺さん」

光線を浴びた後、お互いに視線を合わせた老夫婦の瞳は、情熱的な眼差しに変わり、ご老体とは思えないほどの熱い抱擁を交わすと、これまた情熱的な言葉を囁き始めたのである。

「はっはあああ！！！見たか愚民どもが！！！！！！これが俺の本当の実力だあああああああああ！！！！！」

ホルダーはその様子を見て、満足気に高笑いを上げる。

一体何が目的なのか、皆目見当もつかない。

しかし、一つだけ分かった事もある。

今日の朝から、今までに続く、これまでの騒動の原因は、全てあのホルダーせいだという事だ。

そう思った直後、俺の心の中で、怒りという感情が、急激な勢いで成長を遂げていく。

「メカ犬……今何処に居る？」

「『うむ。今はチェイサーと共に、市内を捜索中だが……』」

「分かった。それじゃあチェイサーさんを呼べばすぐだな。後さ…

…チェイサーさんに、着いたら取り敢えずホルダーに突っ込んでくれって伝えておいてくれ」

俺は伝える事だけ伝えた後、メカ犬の答えを聞く間も惜しみ、通信を終わらせて、タッチノートを操作した。

『チェイサー』

タッチノートから音声が鳴り響くと、少しの間を置いて、黒い一台のバイクが、公園内にエンジン音を唸らせながら、突入して来た。

「はっはあああぐぶべら!?」

そして高笑いを上げ続けていたホルダーに、強烈なタックルを喰らわして、吹き飛ばした後、俺の目の前に、停車した。

『マスターの言う通り、取り敢えず突っ込んでおいたわよ』

期待通りの活躍をしてくれた、乙女口調のおっさんボイスなライダーバイクの、チェイサーさんが、俺に報告して来た。

「ありがとうございます。チェイサーさん」

おかげで、少しだけ気分が晴れました。

『マスター。ホルダーが現れたのならば一言……何かあったのか？いつもより殺気立っている様に見えるが……』

「なんでも無いさ。それよりも変身するぞ」

『う、うむ』

チェイサーさんから飛び降りて、俺の隣にやって来たメカ犬が何か言っているが、今はそれどころじゃない。

早くこの衝動をどうにかしないと、俺は理性を完全に失ってしまうかもしれないのだ。

俺はメカ犬が隣に来た事を確認してから、タッチノートを開き、ボタンを押す。

『バックルモード』

メカ犬がベルトに変形して、俺の腹部に巻きつくのと同時に、俺はタッチノートを閉じながら、音声キーワードを入力する。

「変身」

音声キーワードを入力してから、ベルトの中央部の溝に、タッチノートを素早く差し込む。

『アップロード』

ベルトから音声が流れた瞬間、ベルトから発生した白銀の光が、俺の全身を包み込み、その姿を一人の戦士へと変えていく。

「悪夢はここで終わらせる……」

メタルブラックのボディーが際立つ、シードへの変身を完了させた俺は、呟きながら首を一度捻り、今もチェイサーさんのバイクタッ

クルのダメージにより、倒れているホルダーに向かって歩き出す。

ある程度近づいたところで、俺の接近に気が付いたホルダーが、慌てて立ち上がり、逃走を図ろうとするが、ここで逃がすつもりは、毛頭無い。

「逃げるな！」

俺は一気に駆け寄り、ホルダーの肩を掴み、無理やりこちら側に振り向かせてから、拳に連打を浴びせかける。

「はあああああああ！！！！！」

充分な量の打撃を加えた俺は、気合の雄叫びと共に、渾身の前蹴りをホルダーにお見舞いした。

『今日のマスターは、容赦が無いな……』

後方へと吹き飛ぶホルダーを見ながら、ベルト状態のメカ犬の声が何か言っているのが聞こえたが、今はそんな事どうでも良い。

今肝心なのは、あのホルダーを完膚なきまでに倒す。

……ただそれだけだ。

「行くぞ……」

俺は倒れているホルダーに一瞥してから、ベルトに差し込まれていたタッチノートを抜き出して、全体図を表示させた後、四肢をタッチして、再びタッチノートをベルトに差し込んだ。

『ポイントチャージ』

『ポイントチャージ』

『ポイントチャージ』

『ポイントチャージ』

ベルトから発生した光が、両手両足に、ラインを通りながら、順次に集約して、俺の四肢は膨大なエネルギーとも言える光に包まれる。

「こいつで決めるぜ」

俺は四肢に光を纏いながら、ホルダーの元へと駆け抜けて、思うままに左拳をホルダーに叩き付けた。

続いて左右の足で蹴り上げて、ホルダーの姿勢が崩れた瞬間を見計らい、俺は可能な限り、状態を低く屈ませて、狙いを一点に集中させる。

「ライダーラッシュ」

集中させた一点、ホルダーの顎に目掛けて、俺は真下から、全力の右拳による、必殺の一撃を突き上げた。

「ぎやあああああああああ！！！！！？」

その一撃を決定打に、ホルダーは断末魔の悲鳴を上げながら、爆発を起こした。

その後、このホルダーの素体となった人物が、どんな人間だったのかと思い、ホルダーが爆発した地点に視線を向けると、黒のサングラスに、大きめなマスクと、長めのトレンチコートに、その下は全裸という……絵に描いた様な、不振人物の男性が気絶していた……

その後、気絶した男性を海鳴警察署に、簀巻きで置いておく事で、今回のホルダー事件と、解決するつもりが無かったのだが、結果的に、警察が受け持っていたもう一つの事件を無事に解決する事が出来た。

ちなみにそれから数日間は、バレンタインの一件で、なのはちゃん達と多少ギクシャクした関係が続いたのだが、それはまた別の機会に語ろうと思う。

取り敢えず今日の海鳴は、概ね平和と言えるかもしれない……

# 第２６話　バレンタインデーｏｒパニックデー【後編】（後書き）

アクセス数１００万ＰＶ突破企画　本格始動

「この世界に、究極の闇を呼び寄せる」

「この人な、私の家の前で、倒れてたんよ」

「もしかしてこの人は！？」

今海鳴の街に、かつて大きな戦いと使命を終えて、旅に出た一人の青年が来訪する。

「２０００の技を持つ男？」

「辛い事も沢山あるだろうけど、それでも俺は頑張ろうと思うよ」

『彼も、仮面ライダーだという事か……』

時空を超えた新たな出会いが、誰も見た事の無い、物語を紡ぎ出す。

「あれは……未確認生命体とは、違うのか！？」

「俺も同じかも知れません。守りたい人達がいるから、だから戦えるんです」

「別の世界の仮面ライダーか。実験には丁度良い」

しかしその物語は、同時に一つの戦いの幕開けでもあった。

「このままじゃ、皆が……」

「これで貴様達も終わりだ！まもなく全てを無に返す。究極の闇が復活するのだからな！！！」

そして青年は、この物語の中で、新たな使命と、再び戦う力を取り戻す。

「俺は誰かの笑顔を守りたい。もしもそれを曇らすなら、俺はもう一度……」

「一緒に戦ってくれますか？」

『マスターの言う、仮面ライダーとは、きっと彼の様な人物を言うのだろうな……』

今ここに、人々の笑顔を守る為に、二人の仮面ライダーが立ち上が

る。

「「変身！！！」」

１００万ＰＶ突破企画作品

仮面ライダーシード＆仮面ライダークウガ　繋がる絆

近日更新予定。

これは本当ですよ……

## 第２７話　駆け抜けるは獣の如く【前編】（前書き）

どうも約一週間振りになります。

作者のＧ－３Ｘです。

少し更新が遅れてしまいましたが、最新話を更新いたしますので、楽しんでいただけたら幸いです。

# 第27話　駆け抜けるは獣の如く【前編】

「どうだいメルト。研究は進んでる？」

様々な機材が持ち込まれ、元々の内装とはかけ離れてしまっている廃ビルの一室で、藍色の怪人、オーバーが、この部屋の原型を留めぬ程に改造して、研究に没頭する張本人である灰色の怪人、メルトに話しかける。

「オーバーか。そうだな……もうすぐだ……前回の実験で、世界を融合一時的に融合させる事には成功した。ならば次は……」

相変わらず強弱の無い平坦な声で喋り続けるメルトだが、普段から同じ時間を過ごす事の多い、オーバーから見れば、今日のメルトはいつもよりも、饒舌だと思えた。

それはメルトの研究が、完成に近づいているのだという事実を実感させる。

「まあ、無理せず頑張ってよ……」

このまま居ても、メルトの研究の妨げにしかならないと判断したオーバーは、再び研究に没頭するメルトに踵を返して、この場から立ち去る事にした。

部屋を出て、人気の無い廃墟と化した廊下を歩きながら、オーバーは呟く。

「本当に頑張ってよメルト……道が開けば僕達の計画は、大きく前

に進む事になるんだからさ……」

この人気の無い廃墟と化したビルで、オーバーの呟きは、誰に聞こえる事も無く、静寂の中へと掻き消されてしまった。

それはまだ肌寒さを感じる冬の、昼過ぎの出来事だった。

美由希さんの受験も無事に終わり、翠屋での労働力に、余裕が出て来たので、今までは基本的にアルバイトに出ていた休日が、今日は本当の意味での休日となったのだ。

他に約束もしていなかった事もあり、久しぶりに、何も予定の無い一日を手に入れた俺は、この一日を有意義に過ごそうと思い、取り敢えず途中で作るのが遅れていた、立体型ジグソーパズルの完成に着手しようと、部屋の棚に閉まっていたパズルの入った箱を、取り出したところまでは良かったのだが……

『マスターに、電話だぞ』

いざ作り始めようとしたところで、メカ犬が電話の子機を背中に乗せて、俺の部屋にやって来た。

「ん、誰からだよ？」

この時間帯だと、友達の可能性が一番高いが、恵理さんの無茶な依頼という可能性も否定できないので、注意が必要だ。

今日は折角の休日なのである。

もしもこの電話の相手が恵理さんであれば、メカ犬には居ないと言ってもらうとしよう。

ホルダー絡みの事だったとしたら、メカ犬がこんなにのんびりとした対応はしないだろうし、俺の考え過ぎだとは思うのだが、念には念を入れておいた方が何かと安心だ。

『電話の相手なのだがな……』

そして俺はメカ犬の口から、その電話の主の名前を聞く事になる。

『長谷川殿からだ』

「長谷川さん？」

予想外の人物の名前が挙がったので、俺は思わず鸚鵡返しに、聞き返してしまう。

確かに俺と長谷川さんは、面識もあるし、今では仮面ライダーとして、一緒に戦っているという事も含めて、仲間意識も存在するのだ

が、それは俺の一方的な認識であり、長谷川さんは、シードの正体が俺だという事を知らないので、俺は近隣の小学校に通う、子供ぐらいにしか、思っていない筈である。

「一体何の用事があるっていうんだろうな？」

シードとE2としてならばまだしも、その中身である板橋純と長谷川啓太としての接点は、顔見知りレベルである為、個人的な用事があるとは、どうしても考えつかない。

『取り敢えず話を聞いてみたらどうだ？』

「……そうだな」

メカ犬の言う通り、考えていても答えは出そうに無いし、風間姉妹と違って、長谷川さんならば、無茶な事も言わないだろう。

そう考えた俺は、メカ犬が背中に乗せていた、家の電話の子機を受け取り、保留状態を解除して、電話に出た。

「もしもし、板橋です」

［「ああ！板橋君。ごめんよ。休日に電話を掛けたりして」］

俺が電話に出ると、その電話越しから、確かに長谷川さんの声が聞こえてきた。

「いえ、それは大丈夫何ですけど、長谷川さんが、俺に電話をして来るなんて、初めての事だったので驚きました」

［「はは……それも含めてごめんよ。実は板橋君に協力して貰いたい事があるんだ」］

「協力ですか？」

［「うん。詳しい話は電話ですると、少し不都合があるから、出来れば海鳴警察署に来てほしいんだけど、これから来てもらっても大丈夫かな」］

「……取り敢えず話しを聞くだけでしたら、それでも大丈夫ですけど」

［「良かった。署に着いたら受付で、名前とホルダー特務課を言えば、通して貰える筈だから」］

「はい。分かりました」

［「それじゃあ、また後で」］

長谷川さんはその台詞を最後に、電話を切った様で、既に子機のスピーカーからは、先程まで聞こえていた長谷川の声に代わり、通話状態以外に流れる、独特の電子音が流れていた。

「……ふう」

俺は軽く息を吐きながら、子機の通話状態を解除して、メカ犬の背中に再び戻す。

『これから出かけるのか？』

長谷川さんとの会話を聞いていたのであろう、メカ犬が俺に質問を投げかける。

「ああ……何の話か分からないけど、俺に協力してもらいたい事があるんだってさ」

『協力？』

「警察に出向く時点で、何か怪しい気もするけど、取り敢えず行ってくるな」

別に長谷川さんを疑う訳ではないのだが、刑事が一般人、しかも一時的に同じ職場で、仕事をしたとは言え、実質は顔見知り程度の俺を、警察署に呼んでまで話したいというのは、普通では有り得ない話だと思う。

先程もメカ犬に言ったが、明らかに怪しい……

それでも俺が行こうと思ったのは、長谷川さんには何度も助けてもらっている借りがあったからに、他ならなかった。

「……これは、どういう事なんですか？」

海鳴警察署に行き、長谷川さんに言われた通り、名前と部署を受付の婦警さんに告げると、すんなりと案内してもらう事が出来た俺は、現在、ホルダー対策特務課と書かれたプレートが付けられている部屋の扉を開けた訳なのだが、部屋の中に居る人物を見て、俺は思わず声を上げてしまった。

この部屋に居たのは、俺を呼び寄せた張本人でもある、長谷川さんと、その直接の上司である恵美さん。

ここまでは別に構わない。

俺の予想の範囲内の出来事だ。

しかしこの場には、もう一人……俺の予想を超えた存在が……カウント数を一人として良いのだろうか？

兎に角、存在していたのである。

『あ！あんたがオレッチのぶきゅう！？』

俺はその存在に何かを言われる前に、踏み潰して、その軽そうな口を回らない様にする。

その存在は、手のひらサイズの大きさをしており、メタルグリーンのボディーが輝く身体を持った、一言で例えるとするのであれば機械仕掛けの虎という表現が、一番分かりやすいかも知れない。

その存在は、俺の予想が正しければ、以前メカ竜から聞いた内の一体で間違い無い筈だ……

「ど、どうしたんだい！？」

部屋に入った直後に俺が行った行動に驚いたのか、長谷川さんが慌てて止めに入ってくる。

「あ、す、すいません。急に取り乱してしまって……」

俺は長谷川さんに、出来るだけ笑顔で対応しながらも、踏み潰していた緑の虎を、余計な事を喋らせない様に注意しながら、片手で持ち上げた。

「そのオモチャというには、疑わしい位に高性能に見える、それって板橋君の家に居るメカ犬と同じメーカーの試作品なんですってね？」

俺と長谷川さんのやり取りをしている最中、恵美さんの声に反応して、俺が視線を向けると、恵美さんがこれでもかと言わんばかりの、疑いの眼差しで、俺と、その手の中で沈黙している緑の虎を凝視していた。

「え、ええ……まあ」

どんな経緯で、そんな話に行き着いたのかは知らないが、ここは話を合わせておいた方が、得策だと思い、俺は恵美さんに愛想笑いを浮かべるのだが、恵美さんの疑惑の眼差しは、少しも衰えるという事を知らない。

「怪しい……やっぱりどう考えても怪しいわ……」

「まだ、そんな事を言ってるんですか？」

恐ろしい呪詛を唱えるかの様に、俺を見ながら呟き続ける恵美さんに、長谷川さんが、溜息を吐きながら両肩を軽く落として、苦笑いした。

「えっと……恵美さんは、一体どうしたんですか？」

このままでは俺も状況がイマイチ理解出来ないので、この場で最も話を聞けそうな、長谷川さんにそれとなく話を振ってみる事にした。

「うん。実は昨日の話なんだけどね。今板橋君が持っているそのオモチャが、落し物として、署に届けられたんだけど、その受け渡しを、恵美さんが偶然見つけたんだよ」

「はあ……」

「それで何か分からないけど、研究魂に火が着いたらしくて、開発ラボに持ち帰って、分解しようとしたらしいんだ」

落し物を勝手に持ち出して分解するとか、やる事が相変わらず凄まじい人だとは思うが、俺は恵美さんがというよりも、風間姉妹が一度走り出すと止まる事を知らない暴走特急だという事を、嫌という程に理解しているので、今更その辺りに、突っ込みを入れ様とは思わない。

心なしか、長谷川さんが、ラボで分解と発言した辺りで、俺の手の

中で沈黙し続けている緑の虎が、小刻みに震えた様な気もするが、気にするのは後にしておこう。

「それで分解作業を始めようとしたら、起動させてしまったらしくてね。板橋君の名前を呼んでいたから、何か知ってるんじゃ無いかと思って、呼んだんだよ」

「そうなんですか。でも、それなら態々呼び出さなくても、電話で話してくれれば良かったんじゃ……」

俺と長谷川さんが、会話をしていると、急に恵美さんが、勢い良く立ち上がった。

「それは私が説明するわ！」

先程まで一人で、呪詛を唱え続けていた恵美さんは、勢い良く立ち上がると、高々に宣言し始める。

「その虎にも、個人的に凄く興味があるけど、今回はただのついでよ。本題はここから……板橋純君！！！君に捜査協力を、正式にお願いするわ！！！」

「はい！？」

俺に向けて指差す恵美さんの、何故か自信に満ち溢れた笑顔を見ながら、俺は思わず驚きの声を上げた。

小学生に何を言っているのだろうかと、思わないでもないが、恵美さん自身も本来ならば中学生で、外部からの協力者だというし、この部署そのものが、かなりの異端なのだという事は、一時的にデン

ライナー署が設立された前例から、何処となく察しがつくが、それにしても突然である。

そこで俺を呼び出した張本人でもある、長谷川さんに、視線を向けると、後頭部を右手で掻きながら、苦笑いをしつつ、俺にごめんねと、謝罪の言葉を言ってきた。

どうやら俺は、恵美さんに嵌められたらしい……

今にして思えば、電話の後に感じた嫌な予感とは、珍しく神様が俺に手を差し伸べようとしてくれた虫の知らせだったのではないかと考えてしまう。

『酷いぜマスびみゅう！？』

俺がここまでの話の流れを多少は理解したところで、先程まで俺の手の中で、沈黙を守っていた緑の虎が、再び喋りだしたので、俺は取り敢えず黙らせておく事にした。

第一この緑の虎が、この場所に居るという時点で、色々と不都合が多い。

特に恵美さんは、今でもメカ犬に疑念を抱いている人物の代表格だ。

メカ犬の話術ならば、切り抜けられるだろうが、俺がこの部屋に入った時の、様子を見る限り、恵美さんの疑いの視線は、今までで、最高潮な状態へと昇華していた。

現状では唯一ストッパーとなれるメカ犬も、事情を知っていて、上手くフォローに回ってくれる恵理さんも、居ないと言うのに、これ

以上この緑の虎を迂闊に喋らせておく訳には行かないのである。

「取り敢えずこれは、俺が預かりますんで……それで、俺に捜査依頼って、何をすれば良いんですか？」

兎に角俺は、何かボロを出さない内に一秒でも早く、この場を緑の虎を連れて立ち去りたかったので、話を進める為に、恵美さんに質問する事で話を促す。

「長谷川君に聞いたんだけど、君って前にも警察で捜査協力をしていたのよね？」

「え、ええ……まあ、そうですけど」

「その実績を見込んで、今回は囮捜査に協力してもらうわ！」

恵美さんの中では、既に決定事項なのだろう。

その自信に満ちた顔からは、俺が断るという可能性があるとは微塵も考えていない様に思えた。

しかしそれ以前に、気になる事がある。

「……あの、囮捜査って何をするんですか？」

それは一体俺に何をさせ様としているのかという、人として誰もが疑問に思う事であり、誰かにお願いがあると言われれば、大抵はその内容を確認するものだろう。

だが俺はこの時、選択肢を間違えたと、本能的に悟った。

会話をしていたのが普通の感性の持ち主であれば何も問題は無いのである。

しかし……今、俺が会話をしているのは、あの恵美さんなのだ。

少なくても何も聞かずに、無理ですと言って、この場を逃げれば、まだ少しは違った未来を手にする事が出来たかもしれない。

せめて長谷川さんに質問をしていれば、心に余裕も持てていた……

しかしそれに俺が気付いた時には、既に手遅れだったのだ……

恵美さんは、獲物を狩る獣の様な瞳を俺に向けて、放っている。

強者と弱者、狩る者と狩られる者……

今この署内の一室で、弱肉強食という自然界の厳しい掟が、刹那的に展開される。

だが、俺もただ黙って狩られるだけの、子羊ではないのだ。

「き、急用を思い出したんで、俺はこれで失礼しますね！！！」

俺は一縷の望みを託して、早口で捲くし立てながら、この部屋の唯一の出入り口である扉に向かって走り出すが……

「良くぞ聞いてくれたわ！！！」

自分にとって都合の良い部分だけは、はっきりと聞こえていたのだ

ろう。

恵美さんの手が、俺の肩を掴み、最後の悪足掻きは、失敗に終わり……俺という哀れな子羊は、恵美さんという獰猛な獣に、無残に狩られたのである。

「……はあ」

夕方の並木道を歩きながら、俺は大きな溜息を吐いた。

「ごめんね。板橋君」

そしてその隣には、普段のフォーマルなスーツ姿ではなく、カジュアルな私服に身を包んだ長谷川さんが、俺の溜息を見る度に、律儀に謝罪を口にする。

「……別に気にしてないんで、大丈夫ですよ。それよりも、今は囮捜査の途中なんですから、しっかり演技しましょう……父さん」

俺と長谷川さんが、現在この並木道を歩いているのは、昼過ぎに署に呼び出されて、説明された囮捜査を実行している最中だからだ。

事件の始まりは、今から五日前にまで遡る。

何でも、小学生程の息子を連れた父親が、連続して何者かに襲われるという事件が、多発しているそうなのだ。

不幸中の幸いとでも言うべきか、被害者は全て父親の方で、今の所、その襲われた人達も、怪我をして入院しているが、命に別状は無いらしい。

ここまで聞くと、ただの通り魔の犯行にも思えるが、それは被害者の証言で、普通の事件とは、逸脱したものだという事が理解出来た。

被害者は声を揃えて言っていたのである。

【目に見えない速さで動く何者かに跳ね飛ばされた】のだと……

最初は自転車やバイクという可能性も考慮に入っていたが、一緒に居た子供達の証言からも、事件直後に自転車やバイクが近くを走っていなかったとあり、実際に現場検証した結果からも、そういったタイヤの跡は検出されなかった。

だがその代わりに、奇妙な痕跡が発見されたのだそうだ。

それはまるで、巨大な爬虫類の足跡だったという……

しかもその足跡は、驚くべき事に、アスファルトの上に、大きな摩擦で焦げた様な状態で残っていたのだそうだ。

この事から、犯行を行った犯人は、普通の人間では無い可能性が高いと判断され、ホルダー特務課に事件が回ってきたらしい。

そして事件を早期に解決するのならば、襲われているのが親子連れの父親という事から、思い切って囮調査に踏み込もうと、恵美さんが決定したのである。

……ここまで言えば、分かってもらえると思うのだが、その囮捜査の子供役に選ばれたのが、俺だった訳だ。

普通ならば、そんな危険な目に遭うかもしれない囮捜査に、子供を使うなんて有り得ない話だが、このまま放っておけば、いずれ新たな被害者が出るのは必然なのである。

しかも確定ではないとはいえ、ホルダーが関係しているかもしれないとなれば、俺としても全くの無関係ではない。

その事から、俺は結局この囮捜査への協力を承諾したのだが、その俺の決断に驚いたのが、現在、隣を歩いている長谷川さんだった。

恵美さんが無茶な事を言ってくるのは、いつもの事だという認識を、長谷川さんも持っていた様だが、その無茶な要求を俺が承諾するとは、思っていなかった様なのである。

まあ、常識的に考えれば、それが正しいとは思うし、俺自身、最初の頃と比べれば戦いに慣れたとはいえ、やっぱり自分から危険に飛び込むのは今でも怖い。

でも最近は、俺の戦う理由に、少しずつ変化が出てきた。

メカ犬と出会って、訳の分からない内に、戦いに巻き込まれて、がむしゃらにやってきたが、最近は良く思うのである。

俺とメカ犬が出会ったのは、偶然じゃなくて、何か意味があったんじゃないだろうか。

デンライナーが突如として来訪したのを皮切りに、オーバーとメルトの出現。

更に実験と称して、別の世界を融合させて、一時的にだが、Wと同じ世界になった……

思えばこの世界で、今起こっている不可思議な現象は、俺の前世の記憶で知っている仮面ライダーと密接に関わっている様に思えてならない。

もしも仮に、何か大きな意思が、俺を選んだとしたのならば、一体何の為に？

その大きな意思は、俺に何をさせようとしているのだろうか。

今はただ、大切な人達を守りたいから、俺は戦い続けている。

だけど近い未来に、それだけではいけない、大切な選択の時が来る様な……

『キンキュウケイホウキンキュウケイホウキンキュウケイホウ……』

そんな事を考えていたからなのだろうか。

ポケットの中に忍ばせたタッチノートが、警告音を響かせる。

「長谷川さん！！！」

「うわ！？」

俺は咄嗟の判断で、長谷川さんの腰に体当たりして、その場から押し倒す。

その直後、自動車でも通り過ぎた様な突風が、俺達の背中を襲う。

急いで後ろを振り向けば、焼け焦げたアスファルトに、焦げ臭い空気が周囲に漂っている。

「板橋君はここに居て！」

現状を確認した長谷川さんは、俺にそう言うと、腕に付けたEブレスを操作して、白と黒の大型バイク、マシンドレッサーを呼び出して、急いで跨ると、風が通り抜けた方向に走り去っていく。

「俺も後を追わなくちゃな……」

マシンドレッサーで走り去る長谷川さんを視線に捉えながら、俺はタッチノートを取り出して、操作を始めた。

## 第２７話　駆け抜けるは獣の如く【前編】（後書き）

次回はついに新フォル……

## 第２７話　駆け抜けるは獣の如く【後編】（前書き）

どうもＧ－３Ｘです。

更新が少し遅れてしまい申し訳ありません。

それでは今回も楽しんでいただけたら幸いです。

# 第27話　駆け抜けるは獣の如く【後編】

冬の閑散とした並木道を異形が、視覚する事すら難しい速さで駆け抜けていく。

その異形の表皮は、並木道に植えられた木と同系色の、茶色の皮膚に覆われており、爬虫類特有の突起した頭部をしていた。

例えるのならば、その姿はＲＰＧに出てくる、多少の差異はあるものの、リザードマンに酷似していた。

その異形の正体は、先程のタッチノートの反応から分かる通り、ホルダーである。

その後ろからはサイレンを響かせながら、長谷川がマシンドレッサーで追いかけるが、距離は縮まるどころか、段々と離されていくばかりだ。

「くそっ！このままじゃ……」

長谷川はホルダーに追いつけない現状に、苦虫を噛む様な声で呟く。

［「長谷川君！」］

そんな中、通信機から恵美の声が、長谷川の耳に届く。

「恵美さん！？」

［「大丈夫よ長谷川君。今長谷川君が走っている道沿いの先は、一

本道な上に、行き止まりになっている筈だから、相手がどれだけ早かろうが、逃げ場は無い筈よ」」

「分かりました！」

恵美の通信を聞いた長谷川は、先程とは違い、覇気の篭った返事を返しながら、ホルダーを追いかける為に、限界までスピードを上げる。

追跡を開始してから数分としない内に、ホルダーと長谷川はこの一本道の終点となる空き地に辿り着く。

「しゅうううううううううう！！！」

空き地に辿り着いたホルダーは、空き地の壁を背にして、長谷川に威嚇の咆哮を上げる。

［「今よ長谷川君！」］

「はい！」

通信機から聞こえる恵美の声を合図にして、長谷川は、マシンドレッサーのハンドルグリップ脇に取り付けられているボタンを押した。

すると、マシンドレッサーの前方部分に存在する直系十五センチ程の射出口から、ＥＳＭ０３にも使用されている、特殊ワイヤーと同じ材質で作られた捕獲用のキャプチャーネットが、ホルダーに向けて放たれる。

「きしゃあ！？」

これはホルダーも予想外だったのか、突然マシンドレッサーから放たれたネットは、慌てて避けようとしたホルダーの両足に絡みつき、その動きを阻害した。

［「急いで長谷川君。そのネットの強度じゃ、長い時間はホルダーを押さえつけておく事は出来ないと思うから！」］

「了解です！」

長谷川は、通信機から聞こえる恵美の指示に返事を返しながら、マシンドレッサーを降りて、自身の腕に着けたメタルイエローのメカニカルな腕輪、Eブレスの操作を始める。

『ドレッサーモード』

Eブレスのボタンを E・0・2 の順番で押していく事により、マシンドレッサーから、機械的な音声が流れ、バイクの形状から、ボックス状の形態、ドレッサーモードへと変形して行く。

マシンドレッサーがバイクモードから、ドレッサーモードへと変形を完了したのを確認した長谷川は、すぐに入り口を開き、中へと飛び込んだ。

中には丁度一箇所だけ、Eブレスが収まるサイズの窪みが設けられており、長谷川は迷う事無く、その窪みにEブレスを押し当てると、戦う為の力ある言葉を紡ぐ。

「変身」

『音声コマンド認証。ＳＥシステム起動』

その直後、機械的な音声が、ドレッサー内に響き、入り口が閉まると同時に、壁のいたる場所に穴が開き、其処から無数のロボットアームが飛び出して、長谷川が着ていた服を剥ぎ取っていく。

服が剥ぎ取られると、今度は入れ替わる様に、ノズルの付いた筒状の機材が飛び出して、ノズルから特殊な黒い液体が噴出されて、長谷川の全身を覆い、瞬時に乾いて、即席の防護スーツとなる。

それが完了すると再びロボットアームが飛び出して、メタルイエローの装甲を、長谷川の全身へと装着させていき、ここに科学の力が生んだ一人の戦士が誕生する。

［「気をつけてね。長谷川君！」］

「はい！」

ＥＳシステムを搭載した強化ユニットを装着して、Ｅ２となった長谷川に恵美がエールを送り、Ｅ２は返事を返しながら、マシンドレッサーから飛び出す。

マシンドレッサーからＥ２が飛び出して、ホルダーに視線を向けると、恵美が言っていた通り、動きを阻害していたネットは、辛うじて片足に絡みつく状態となっており、既にいつ引き剥がされてもおかしくない。

［「あのネットが無くなったら、追いつけなくなる可能性が高いわ。攻撃するなら今よ」］

「分かりました。」

E2は頷くと、マシンドレッサーの格納庫から、近接武器となる両刃の剣、ESM02を装備して斬り掛かる。

「はあ！」

「しゃあ！？」

足にネットが絡み付いて、動きが鈍くなっていたホルダーだったが、元々の動きが素早い為か、決して遅くは無い筈のE2の斬撃を紙一重で避けてしまう。

「まだまだ！」

しかしE2も、そのままで終わる訳ではなく、間髪入れずに、連続でESM02を振るい、連続攻撃を仕掛けていく。

果敢に攻撃を仕掛け続けていくE2の攻撃が、少しずつホルダーを追い詰め始めたその時、一対一だったこの戦いの舞台に、新たな介入者が現れる。

「楽しそうだね。僕も混ぜてよ？」

その声は行き止まりとなっている空き地の壁の上から聞こえてきた。

「その声は！？」

何処かで聞き覚えがあるその声に反応したE2が、ホルダーの退路に立ち塞がり逃げられない様に、注意を払いながら、一旦距離を取

って、その壁の上を見上げると、E2の予想通りの人物が立っていた。

藍色の異形の怪人オーバー。

それが壁の上から聞こえてきた声の正体である。

「さあ、お楽しみはこれからだよ！！！」

オーバーは声高らかに、そう言い放つと、無造作に幾えもの藍色の小さな球体、暴走プログラムを空き地の地面に投げ放つ。

地面に落ちた十数個にも及ぶ暴走プログラムは、急激な変化を始め、さして間を置く事も無く、オーバーと良く似た藍色の異形、俗に呼ばれるホルダーモドキへと変貌する。

「またそれか！」

E2はホルダーモドキを見て、叫ぶがその原因となったホルダーモドキ達は、そんな事にはお構いなしといった風情で、E2とホルダーの戦いに乱入してくる。

「ほらほら、何か言うよりも、身体を動かした方が良いんじゃないの？」

オーバーはその様子を、文字通り上から高みの見物とばかりに、笑いながら言う。

「この！！！」

大変憎らしいが、確かにオーバーの言っている事は、Ｅ２にとって正しかった。

Ｅ２はオーバーの言葉に多少の憤りを覚えながらも、ホルダーに加えて、襲い掛かるホルダーモドキ達にも、ＥＳＭ０２による斬撃をお見舞いする。

しかし一対一から多数へと戦局が変化した事により、Ｅ２の集中力は分散されてしまう。

その結果Ｅ２は、一つの大きな失敗を犯してしまう事となった。

「しまった！？」

連続でホルダーモドキ達に斬撃を浴びせる最中に、背後に気配を感じたＥ２が、振り向き様に上から斜め横にＥＳＭ０２を牽制として振り斬ったのだが、その斬撃がホルダーの足に絡み付いていたネットを切り裂いてしまったのである。

「しゃあああ！」

思わぬ偶然の産物で、自身の動きを詐害していたネットから開放されたホルダーは、Ｅ２とは反対方向である空き地の出入り口に向き直り、逃走を図る。

「逃がすか！」

このままでは逃げられてしまうと感じたＥ２は、走り出す前に、ホルダーを止めようとするが、その前に十数体のホルダーモドキ達が立ち塞がる。

「くっ……」

完全にホルダーモドキ達に包囲されてしまったＥ２は、それ以上ホルダーに近づく事が出来なかった。

その隙をホルダーが見逃す筈も無く、Ｅ２が動けない内に、ホルダーは常軌を逸した速度で、この場から走りだす。

そしてホルダーは、走りだしてから数秒もしない間に、Ｅ２の視界から、完全に消え失せてしまったのである。

「逃げられた！？」

［「長谷川君！今は目の前の敵に集中するのよ！」］

目の前でホルダー逃亡を許してしまった事に、憤りを覚えるＥ２に、恵美が冷静に次の指示を送る。

確かにホルダーはこの場から逃げ去ってしまったが、Ｅ２の前には依然として、多数のホルダーモドキ達が、その猛威を振るおうとしているのだ。

「……はい！今は僕に出来る事をやります！！！」

Ｅ２も現状では、逃げたホルダーにのみ、意識を払っていても仕方が無いと、意識を切り替えて、目の前の敵に集中する。

「たあ！」

四方八方から襲い掛かるホルダーモドキに対して、Ｅ２はＥＳＭ０２を駆使して応戦するが、ホルダーモドキ達の執拗な攻撃は止む事を知らない。

［「長谷川君！一気に決めるわよ！！！」］

ホルダーモドキ達に果敢に斬撃を喰らわせ続けるＥ２に、通信機から恵美の声が響く。

「一気にって……もしかしてあれをですか！？」

通信機から聞こえてきた恵美の声に、Ｅ２は驚きの声を上げた。

「あれはまだ、実戦で使った事が無いんですけど……」

［「大丈夫よ。最終調整はもう終わってるし、長谷川君だって使い方はマニュアルを読んで分かってるでしょ？」］

不安そうに言うＥ２に対して、恵美は自分自身と、それを使うＥ２に絶対の自信を持っているのか、威風堂々と告げる。

「……分かりました。兎に角やってみます！」

恵美の自信満々な声に励まされたのか、覚悟を決めたＥ２は、ホルダーモドキ達の包囲網を強引に突っ切り、マシンドレッサー目掛けて走り出す。

多少の攻撃を受けながらも、何とか無事にマシンドレッサーの前にまで辿り着いたＥ２は、装備していたＥＳＭ０２を手放して、再びマシンドレッサーの格納庫から、新たな装備を取り出した。

Ｅ２が取り出した装備は、大きな丸い筒状の物体であり、前方部分と思われる方向には、多数の小さな穴が開き、逆に反対方向には、大きめの穴が一箇所だけ開いている。

その新装備を取り出したＥ２は、迷う事無くホルスターから、ＥＳＭ０１を抜き放ち、銃口を筒の後ろの穴に差し込んだ。

そうする事で、ＥＳＭ０１はサブマシンガンの状態から、ガトリング式機銃のＥＳＭ０３へとその姿を変える。

「ふん！」

連結を終えたＥ２は、すぐにＥＳＭ０３を構えて、ホルダーモドキ達に標準を合わせて引き金を引く。

すると引き金を引いた状態のまま、筒の前方部分が高速回転しながら、幾多の白銀の光を纏った弾丸が発射され、その直撃を喰らったホルダーモドキ達に、多大なダメージを与える。

「凄い威力だな……」

説明としては理解していたが、実際に使ってみた事で、その威力を目の当たりにしたＥ２は、煙を上げながら身動き出来ないでいるホルダーモドキ達と、自身の手元にあるＥＳＭ０３を何度も見比べながら呟く。

［「さあ！本番はここからよ！！！」］

「は、はい！！！」

其処に通信機から恵美の急かす声が聞こえた事で、正気に戻ったＥ２は、急いでこれからやるべき作業を開始する。

左腰に取り付けたマガジンを取り出したＥ２は、普段からＥＳＭ０１にするのと同じ様に、グリップの底からセットした。

『ブレイクチャージ』

そうする事により、機械的な音声響くとＥＳＭ０３の銃口が、黄色い輝きを放ち始める。

それを確認したＥ２は、再度ホルダーモドキ達に標準を合わせて引き金を引く。

今度は先程とは違い、黄色い光を放つ幾多の弾丸がＥＳＭ０３から放たれ、その銃撃の嵐をまともに浴びたホルダーモドキ達は、跡形も無く吹き飛んだ。

「ははははははは！面白いものを見せてくれてありがとう！」

目の前の敵を倒した直後、間髪入れずに空き地の壁の上からオーバーの笑い声がＥ２の耳に聞こえてきた。

その笑い声に反応して、Ｅ２は瞬時にＥＳＭ０３の銃口を壁の上に向けるのだが……

「……居ない」

既にその場所には、オーバーの姿は何処にも見当たら無かった。

『マスター！先程まで空き地で停止していたホルダー反応が、凄まじい速度で移動を開始したぞ』

リミットオフした状態のチェイサーさんに跨り、ホルダーを追跡する俺に対して、既にシードへの変身を完了させた事により、ベルトの形状になっているメカ犬が、現状を報告してくる。

「何処に向かってるんだ？」

『この並木道は一本道だ。この移動速度から計算すると、後七秒でワタシ達の目の前に現れる筈だ』

メカ犬が言った通り、約七秒後に俺達の目の前に、風を巻き上げながら、凄まじい勢いで走ってくるホルダーの姿が見えた。

「チェイサーさん！」

『任せなさい！』

俺の叫びに応える様に、チェイサーさんは、車体を横に反転させて、ホルダーの進行方向を塞ぐ。

普通に考えるのであれば、これでホルダーは足を止める筈だが、ホルダーは立ち塞がる俺達の前で、予想外の行動をしたのである。

『跳んだ!?』

ホルダー予想外の行動にメカ犬が叫ぶ。

メカ犬が叫んだ通り、ホルダーは立ち止まるどころか、更に加速した上に、俺達の頭上を大きく跳躍したのだ。

「逃がすか!」

俺はすぐにチェイサーさんを反転させて、ホルダーを追うが、追い着くよりも先に、並木道を抜けてしまい、ホルダーは、道から外れて森の中へと逃げ込んでしまう。

「くそ!?」

単純なスピードだけならば、チェイサーさんのドライブモードで追い着けそうだが、森の中に入られてしまうと、バイクであるチェイサーさんでは、その障害物の多さの為、どうしても不利である。

「こうなったら、スピードフォルムで追いかけるか……」

『どうやらここは、オレッチの出番みたいじゃん!』

ホルダーが逃げ込んだ森を見ながら、俺が今後の指針を呟いていると、背後からメカ犬でもチェイサーさんでもない、声が聞こえてきた。

振り返って背後の後部座席を見てみると、海鳴警察署で俺が預かった緑の虎が、いつの間にか陣取っていたのである。

「……そう言えば、警察署を出てから、ずっと連れていたんだよな」

あまりに静かだったので、忘れ去って居たのだが、この緑の虎……まあ、メカ虎は俺が二度に渡り黙らせた後、目を覚ます事も無かったので、取り敢えず囮捜査の時も、連れ歩いていたのだが、どうやら目を覚ました様だ。

『酷いじゃんマスター。出会い頭にオレッチを二回も踏み潰すなんてよ!!!』

メカ権の侵害だとか、抗議を申し立てるなど、目を覚ましたメカ虎は、前足を上げながら俺の背中を引っ掻き始める。

「あの時は悪かったよ。ああでもしないと、恵美さんに何か勘付かれそうだったしさ……それよりもさっき、出番って言っていたけど、どういう意味なんだ？」

『おっとそうだった！マスター。素早いホルダーが相手なら、オレッチに任せるのが一番じゃん！！！』

メカ虎はそう言って、胸を張ると、メカ竜やメカ海と同じ様に、タッチノートを取り出せと要求してきた。

俺はその要求に従い、タッチノートを取り出して、開くとメカ虎が口の部分から赤い光をタッチノートに照射する。

そうする事により、タッチノートに、新たな項目が追加された。

「ライガーシステム……これがお前、メカ虎のシステムなんだな」

『おうさ！マスターの様子を見る限り、オレッチ以外の奴から、詳しい説明はうけてんじゃん？早くしないとホルダーに逃げられちまう』

「ああ！」

俺はメカ虎の尤もな言葉に頷きながら、新たに加わったライガーシステムを起動させる為に、タッチノートの捜査を始める。

『スタンディングモード』

『あらよっと！』

タッチノートから音声が響くと同時に、メカ虎が掛け声を上げて飛び上がりながら、アタッチメントパーツへと変形して、俺の手の中に納まる。

俺はチェイサーさんから降りて、タッチノートをベルトの溝に差し込んでから、ベルトの左側をスライドさせて、アタッチメントパーツとなったメカ虎を差し込む。

『ベーシック・ライガー』

音声が鳴り響くのと同時に、俺の周囲に、メタルグリーンの装甲が展開されて次々と装着されていく。

ガイアやダイバーに比べて、薄いとも言えるその装甲は装着される毎に、何故か俺の身体が軽くなっていくのを感じた。

装着が完了してから、自身の全身を確認してみると、装甲の形状は虎を模しているのが一目で分かったのだが、何処か忍者の様なテイストが入っている様にも思える。

『ライガーモードは、スピードを極限まで引き上げるじゃん。今のマスターなら、あの足の速いホルダーにだって追い着ける筈じゃん！』

「良し！！！」

俺はメカ虎の説明に頷きながら、ホルダーを追う為に、森の中へと駆け出す。

メカ虎の言う通り、このフォルムはスピードフォルム以上の身軽な動きを可能にした。

「凄いなこれ……」

最初はその反応速度の速さにに戸惑っていたが、動いている内に感覚が分かってきたので、俺は森の木々を潜り抜けながら、ホルダーの後を全速力で追いかける。

『見つけたぞマスター！』

メカ犬の声を聞き、前方に目を凝らすと、ついにホルダーの姿を視界に捉えた。

『行くじゃん！』

「分かってるさ！」

更に急かすメカ虎の声に、肯定の返事を返しながら、俺は一気にホルダーとの距離を縮める。

「はあ！」

ライガーモードで飛躍的に強化された脚力で、俺は前を走り続けるホルダーの上空まで跳躍して不意打ちを喰らわせる。

「しゃああ！？」

流石にこの森の中を、追い着いてくるとはホルダーも思っていなかったのだろう。

不意打ちを受けてホルダーは、驚愕の声を上げながら、自身のスピードを殺しきれずに、地面を転がる。

俺はホルダーが倒れている隙に、他のシリーズ同様に、アタッチメントパーツのレバー下に設置されているボタンを押す。

『ライガーファング』

ベルトから発生した光が両手両足に絡まり、虎の顔を模した形のプロテクターになり、それぞれのプロテクターからは、鋭い三本の刃

が伸びる。

「行くぜ！」

俺はホルダーが体勢を立て直す前に、ライガーファングで連続攻撃を仕掛ける。

基本的に戦い方は格闘戦と変わり無いが、ライガーファングのおかげで、実際素手で戦うよりも長いリーチで、ホルダーに攻撃する事が出来るのだ。

更にスピードフォルムを大きく上回る身体能力が、ホルダーに反撃の暇を与えるさえ与えない程の、連続攻撃を可能にしている。

「悪夢はここで終わらせる！」

ホルダーがかなりのダメージを負ったのを見計らい、俺はアタッチメントパーツのレバーを下に倒す。

『マックスチャージ』

ベルトから稲妻の様な光が発生して、俺の右足へと集約していく。

「こいつで決めるぜ」

俺は自分自身の右足にエネルギーが集まるのを確認して、大きく跳躍して身体を反転させる。

すると同時に、ホルダーを円状に囲む様にして、四体の分身体が上空で生成されて俺と同じ様に身体を反転させてから、本体である俺

と一緒に右足を大きく掲げた。

「ライガーチェーンストライク」

俺は四体の分身体と共に、右足を踵落としの要領で振り下ろして、ライガーファングの刃でホルダーを切り裂いた。

切り裂かれたホルダーは大きな爆発を巻き起こし、その爆発跡には、気絶した二十台後半に見える女性が気絶していた……

今回は囮捜査に協力したという事もあり、事件の詳細を少しだけ、恵美さんから聞く事が出来たのだが、今回の事件でホルダー化していた女性は、先月の頭に性格の不一致から離婚していたのだそうだ。

話の本題はここからで、その女性と元旦那の間には、丁度今の俺と同じ位の年齢の子供が居たらしく、その子供の親権が、元旦那に取られそうになっていたらしい。

もしかしたら今回の親子連れの父親だけが襲われていたというのは、

そういった部分が関係していたのだろうか……

「そう言えばメカ虎は、何で海鳴警察署に、落し物として届けられてたんだ？」

今回の事件が解決てから数日後、事件のせいですっかり聞きそびれていた話題を、部屋で立体パズルを作成しながら、メカ虎に振ってみる。

『それなんだけど……良く覚えて無いんじゃん』

『覚えて無い？』

『そうじゃん。オレッチが他の奴らと一緒に転送されたまでえは覚えてるんだけどよ……その途中で、何か大きなエネルギーに干渉された感じがして……』

『気がついたら警察署に居たという事か？』

『そうじゃん！』

「大きなエネルギーね……」

メカ虎とメカ犬のやり取りを聞きながら俺は自然と呟いていた。

メカ犬達の世界の転送技術が、どういった物なのかは、以前に不安定なものだと聞かされていたが、そういった事が起きる可能性が高いものなのだろうか。

思い返せばメカ犬を見つけた時も、似た様な状態だった気がする。

不安定な状況なら、そういう事が多いとしても、不思議は無いのかも知れない。

『……それは変だな』

しかしメカ犬は、メカ虎の言葉を聞き、予想外の言葉を口にする。

「何がだよ？」

『……まだ何も確証は無いからな。変に不安を煽る言葉を、口にする事も無いだろう』

俺が質問するとメカ犬は、そう言って部屋を出て行ってしまった。

「一体何なんだ……」

『さあ？』

メカ犬が出て行った部屋の扉を見ながら、俺とメカ虎は同時に首を捻らせて、頭上に疑問符を浮かべた。

今日の海鳴は、少し気になる事が増えた一日でもあるが、概ね平和である。

## 第２７話　駆け抜けるは獣の如く【後編】（後書き）

前回の２６話でなのは達が大活躍だった半面今回の後半は、ほぼオール戦闘パートとなってしまい、気がついたらなのは達の出番が無くなってしまいましたが、次回以降は、また活躍？の場が来ると思いますので……

クウガ編はもう少々お待ち下さいませ。

# 第２８話　不思議な世界のアリサちゃん！？【前編】（前書き）

どうもお久しぶりです。

作者のＧ－３Ｘです。

少し遅くなってしまいましたが、今回も楽しんでいただけたら幸いです。

ちなみに今回のお話のみ、やけにファンタジーな要素が多いです……

ＰＳ後藤さんバース就任おめでとう御座います。

（伊達さんのバースも好きだったので、個人的には、最終回前にもう一度戻ってきてほしいですね……）

# 第２８話　不思議な世界のアリサちゃん！？【前編】

「ねえ純。この剣なんてどうかしら？」

樽の中に乱雑に入っていた内から、アリサちゃんが一本の無骨な鉄の剣を引き抜いて、俺に満面の笑みで見せて来る。

「……アリサちゃん。何だかこの状況を楽しんでない？」

そんなアリサちゃんとは対照的に俺は呆れ混じれの溜息を吐き出した。

「良いじゃない！こんな経験、普通は出来そうに無いんだし。それよりこの剣良いと思わない？」

「……まあ、不安がられるよりはずっと良いけどさ……剣なんて買っても、俺とアリサちゃんには使いこなせないでしょ」

剣を引き抜いたアリサちゃんの足元を見ればすぐに分かる。

剣の自重を支えきれず、両足が生まれたての子馬の様に震えているのだ。

そもそもアリサちゃんが持っている剣は、どう見ても大人用に作られているのである。

小学生の俺達が扱うには、サイズ違いにも程があると言うものだ。

「そうだぜお穣ちゃん。そこの坊主の言う通り、武器ってえのは、

自分に合ったものを選ばなけりゃ意味がねえ」

俺とアリサちゃんのやり取りを見ていた、この店の店主のおじさんが、カウンターから助言を呈してくる。

「ここはプロの人に見繕ってもらった方が良いと思うよ？」

「……しょうがないわね」

アリサちゃんは渋りながらそう言うと、樽に剣を戻して、おじさんが用意してくれた台座から飛び降りた。

そもそも台に登らなければ、柄すらも掴めない長さの剣を使おうとする方に無理がある様な気がするんだけど……

「そう言う訳で、お願い出来ますか？」

「がはははは！良いぜ！俺がお前達に、丁度良い武器を見繕ってやる！」

改めて俺が頼むと、おじさんは豪快な笑い声を上げながら、カウンターから出て来て、店内の武器から選別を開始した。

俺とアリサちゃんは現在この店……正式な名前は知らないが周囲の人達には、武器屋と呼ばれているその店に文字通り武器を求めてやってきた。

この武器屋の店主で、ボディービルダー並に筋肉が発達した凄い身体の持ち主でもある、ガロックさんに武器を選んでもらっている間に、俺は考える事にした。

俺が考える事はただ一つ。

何故この様な状況になってしまったのかという事だ。

俺の体感時間では、まだ数時間前の出来事になるのだが、記憶が確かならば、俺はシードに変身して海鳴で暴れていたホルダーと戦っていた筈なのである。

それで戦っている時に、偶然アリサちゃんが通り掛かって、ホルダーが妙な光を放ったと思ったら……

「気がついたらこんな格好で、アリサちゃんと二人で森の中に居たんだよな……」

俺は自分の格好と、目の前で無邪気にはしゃぐアリサちゃんを交互に見ながら呟く。

そもそも気がついたら変身が解けていたという時点でおかしいのだが、ホルダー反応をキャッチした時、俺は学校の帰宅途中で、当然ながら制服を着ていた筈なのだ。

だが実際に俺が着ていた服は、茶色いジャケットと、シンプルな同色のズボンに、皮製のブーツという、中世をイメージしたロールプレイングゲームに出てくる村人Ａの様な格好をしていた。

俺がそうだったという事は、勿論アリサちゃんも学校帰りで、制服姿だったのだが、森の中に居た時には、細かい刺繍が縫い付けられた白いローブを纏った姿になっていたのである。

森には俺とアリサちゃん以外には人気も感じなかったので、兎に角移動しようと言う事になり、移動を開始して暫く歩き続けると、森を抜ける事が出来たのだが、俺とアリサちゃんはその先にあるものを見て、驚きの声を上げる事となった。

森を抜けた草原の先には、巨大な白い洋式建築の城が建ち、その城を囲う様にして様々な建物が広がっていて、それはまさに中世の城と城下町という風情だった。

この謎の状況を少しでも理解する為に、町に入った事で気づいたのだが、半ば俺が予想していた通り、現代の日本とは大きく技術水準が異なっているという事実に気づいた。

そして更なる情報を得ようと、中央の広場まで行ってから、其処に立てられていた看板を見てみると、更に驚く事となったのである。

看板の文字は、何故か日本語で書かれていたのだ。

明らかにこの場所が日本じゃないというのにも関わらず、どうして当然の様に日本の文字が使われているのだろうか……

更に道行く人達の会話を聞いて見ると、やはりはっきりと日本語で会話をしていた。

当然の事ながら、この町の住人は見た目からして日本人には見えない。

アリサちゃんの様に、日本人じゃなくても日本語を日常的に話す人は居ると思うが、見るからに日本とは思えない土地で、日常的に日本語を使うという光景は客観的に見て、些か異常に見える。

右も左も分からないこの状況下で、言葉と文字という情報媒体を理解出来るのは、正直なところ、ありがたいのだが、だからこそ現状の把握が困難だとも言えた……

俺は現状に困惑しながらも、貴重な情報源である、看板に書かれた文章を読んで見る事にした。

日本語で書かれていたので、文章を読む事に苦は無かったのだが、その内容に俺はまたしても頭を悩ませる事となった……その内容なのだが……

【魔王討伐の勇者を求む！我こそはと思う者は城に来られたし】

と書かれていたのである。

魔王に勇者……

広場の中央に立派に立てられた看板に、途轍もなくファンタジーな単語が書かれていたら、それは驚くだろう。

だが事態はここで思わぬ展開を見せる事となった。

その原因はアリサちゃんである。

アリサちゃんも、俺と同じ様に、看板に書かれた文章を読んでいたらしく、城に行ってみようと目を期待に輝かせながら言ってきたのだ。

そのやけに高いテンションに、若干引きつつ俺が訳を聞いてみると、

即答でアリサちゃんはこう答えた。

【やっぱり冒険の王道よね！はやてから借りたゲームと内容がソックリだし！】

……どうやらアリサちゃんは、現実離れしたこの状況を夢だと解釈したらしい。

まあ、現実に訳も分からず異世界に飛ばされたと解釈するよりも、その方が現実味を帯びているし……あながちアリサちゃんの考えは間違っていないのではと、俺も考えているからだ。

まずこの世界は、色々と不自然な点が多い。

使われている言語や文字が日本基準だというのも、その違和感に拍車を掛けているのも事実なのだが、この世界が何処か見覚え……いや、あるものとソックリだというのが、一番の要因だろう。

この世界はあまりにも似すぎているからだ。

看板の文章を読んだ後にアリサちゃんも言っていたのだが、はやてちゃんが持っていたＴＶゲームに内容が酷似していたのである。

ファイナルクエストというタイトルのロールプレイングゲームで、異世界から偶然に迷い込んだ主人公が魔王を倒すという、シンプルなストーリーだったのだが、その序盤の件（くだり）と俺達のここまでの状況が、瓜二つだった事を思えば、アリサちゃんがこの世界を夢の中での出来事だと考えるのも無理は無いかもしれない。

まあ、色々と考えてみたところで、答えが出ないのも事実であり、

何の手掛かりも無い現状では、アリサちゃんの言っていた通り、城に行ってみるのも一つの手段だと考えた俺は、アリサちゃんと一緒に城に向かい、門番の兵士に看板を見て来た事を伝えると、城の中に通されて、王様と謁見する事になった。

王様と謁見した俺とアリサちゃんは、本当のゲームの様な御都合主義の元に、勇者と認定されて準備資金と、魔王の住む居城までの地図を渡されて、こうして城下町のガロックさんが営む武器屋で装備を整えている訳だ。

現実では有り得ない都合の良さと話の流れに、益々この世界が現実世界では無い様に思えてくる。

「これなんかがお勧めだぜ！」

店内の武器から選別を終えたガロックさんが、そう言ってカウンターに俺とアリサちゃんを呼び寄せた。

「まずは坊主の装備からだ」

「これって……ナイフ？」

ガロックさんが俺に渡してきた武器は、水色の柄と同色の薄い刃を持った小さなナイフだった。

「そいつはフリーズナイフって武器さ。そのナイフ自体に水魔法が掛けられていてな、意識して振れば氷を飛ばしたり、刃に氷を纏わせて攻撃する事も出来るこの店自慢の一品だぜ。魔法で出来た氷に重さは無いし、ナイフも坊主が使う分には大丈夫だろうよ」

「へえ……」

フリーズナイフの説明を聞きながら、俺が意識して柄を握ってみると、本当にフリーズナイフの刃に氷が形成された。

勇者と魔王という単語が出てきた時点で、予測はしていたのだが、魔法の概念がある事を直接この目にした事で、益々この世界がゲームの中なのではないかと思えてくる……

「凄いじゃない純！」

アリサちゃんは俺がナイフに氷を纏わせるのを見て、若干興奮気味に声を上げる。

「ねえ！私の武器はどんな武器なの！？」

「がははは！！！ちょっと待ってな。穣ちゃんの武器も今出してやるからよ」

ガロットさんは、アリサちゃんの催促に、豪快な笑い声を上げながら答えると、カウンターの下から演奏の指揮者が振るうタクトの様な物を取り出した。

「これが私の武器？」

アリサちゃんはタクトを受け取り、不思議そうに眺めている。

確かに俺が渡されたナイフと違い、タクトを渡されて武器だと言われても、すぐに納得する事は出来ないだろう。

「そいつはウインドタクトっいう坊主に渡したナイフと同じ、魔法の効果が付属した武器さ。このタクトは使用者の魔力を風に変える事が出来る、魔法使いの穣ちゃんにはぴったりの武器だろ」

「え!?私って魔法使いなの!?」

「ん?その格好を見りゃ誰だって分かるだろ。穣ちゃんが着てるのは王都の魔法学院の制服だからな」

驚くアリサちゃんに対して、ガロックさんが当然の様に告げる。

突然出てきた新たな設定に、俺も唖然とするしかない。

「まあ、試しにタクトを振ってみろ」

「そ、それじゃあ行くわよ……」

ガロックさんに促されるままに、アリサちゃんがタクトを軽く振るうと、室内にも関わらず微風が発生した。

「ほ、本当に出来た……」

部屋の中で風を感じながら、アリサちゃんが呟く。

「穣ちゃんの魔力なら、もっと思い切り振ればモンスターを吹き飛ばす事だって出来る筈だぜ」

「凄い……凄いわ!!!」

「あ!?」

気づいた時には遅かった……

実際に魔法を使った事でテンションの上がったアリサちゃんがタクトを思い切り振った事により、突風が発生して、武器屋を吹き飛ばした。

御免なさいガロックさん……

「ここが魔王の住む城なのね……」

「うん。やっと辿り着いたんだ」

魔王の居城を目指し、俺とアリサちゃんは様々な冒険を経て……という事は無く、町を出て歩いて三時間程で城の見える場所までやって来た。

この世界の元になった可能性が高いと思われるファイナルクエストも、ロールプレイングというジャンルではあるものの、比較的に短

時間でクリア出来るアクションを重視した仕様になっており、普通にプレイしていても、一日程度でクリア出来る様に作られている。

ちなみに俺が知るこのゲームの持ち主の一人であるはやてちゃんは、五時間でクリアしたという中々のゲーマーだ。

「さあ！行くわよ純！！！」

「う、うん」

アリサちゃんの先導で、俺達は魔王の居城を目指して再び歩き出す。

魔王の住む居城を目指して歩き出してから数分が経った頃だろうか……

「「「ぐけけけけえええええええええええ！！！！」」」

突如として見た目は鷲に良く似た鳥形のモンスターが奇声をはっしながら、三匹も襲い掛かってきた。

「やっぱりモンスターも居るんだな……」

魔王退治に出発してから、目的地が見えるまで、全く出てこなかったので、実は居ないのではないかと思っていたのだが、どうもそんなに都合良くは行かないらしい。

だとしても出てくるのが遅いのは、事実だけど、どうせ出て来るのが遅いなら、いっその事、最後まで出て来るんじゃないと声を大にして俺は言いたいところだ。

「やっと出てきたわねモンスター！」

完全にこの現状を夢だと思っているアリサちゃんは、モンスターに恐怖を覚えるどころか、戦いたくてうずうずしていたので、ここまでのフラストレーションを襲い掛かるモンスター達にぶつけるかの如く、思い切りタクトを振るった。

「エアストーム！！！」

ガロックさんの武器屋を吹き飛ばしたのと同じ突風が、モンスター達に襲い掛かる。

ちなみに流石に三時間以上歩いているだけというのも暇なので、俺とアリサちゃんは武器屋で買った武器を使用した技の名前を考えながらここまで来たのだが、先程アリサちゃんが叫んだ日常生活では使いそうに無い単語もその一つだ。

「今よ純！」

アリサちゃんが俺に向かって叫ぶ。

「分かったよ！」

俺も武器であるナイフを鞘から抜いて、技名を叫ぶ。

「アイスエッジ」

俺の叫びに呼応して、ナイフの刃を覆う様にして氷の刃が新たに形成されて、ショートソード程の大きさに変わる。

「たあああああああ！」

アリサちゃんの放った、ガロックさんの武器屋を吹き飛ばす程の突風をまともに受けて、空中でのコントロールを失った鷲似のモンスターに、氷の刃による斬撃をお見舞いする。

ナイフの一撃を受けたモンスター達は、切り口から氷付けになり、最後は跡形も無く砕け散った。

「やったわね純！！！」

その様子を見て、アリサちゃんがモンスターとの戦闘による初勝利に、喜びながら俺の隣までやって来る。

「う、うん。そうだね……」

「何よ浮かない顔しちゃって」

「い、いや、何でも無いよ。それより先を急ごう！」

「ふ～ん……まあ良いわ。確かに魔王の住む城はすぐそこだしね」

戦闘を終えた俺達は、再び目的地である魔王の住む居城を目指して歩き出した。

辺りを警戒しつつ歩きながら、俺はここまでの部分も含めて先程の戦いで気づいた事を考察する。

アリサちゃんには何でも無いと言ったが、この世界はやっぱり不自然だ。

確かにアリサちゃんが言っていた通り、ただの夢だと思えば一番辻褄が合う様な気がするが、それにしてはこの世界の感覚はリアル過ぎる。

だが同時に歩いて数時間以上経っているのに、息切れはしないし、さっきの戦闘でも全く疲れていないという、現実では有り得ない現象が俺達に降りかかっているのだ。

まるで映画か何かのバーチャルリアリティを見せられている様な感覚とでも言うのが、一番近いニュアンスになるだろうか。

最も高い可能性はホルダーの能力によるものだと思うのだが、その対処方法が全く思いつかない。

せめてメカ犬が居れば、何か打開策を練る事も出来たのかも知れないが、現状ではお手上げだ。

そもそも変身していた筈なのに、メカ犬と連絡が取れないというのは……

「……待てよ」

メカ犬の事を考えていた時に、俺は一つの違和感を覚えて、思わず呟いてしまう。

幸いにもアリサちゃんには聞こえていなかった様なので、俺は改めて考察を続ける。

考えてみればメカ犬がこの場に居ないのが、そもそも不自然なので

はないか俺はと思えてきた。

メカ犬もこの世界に来ていて、別の場所に居るという可能性もあるが、それならば俺はホルダーの光を浴びた時点で、確実にアリサちゃんよりもメカ犬と変身して融合していたのだ、仮に光を浴びた直後に、変身が強制的に解除されていたのだとしても、その時アリサちゃんよりもメカ犬が俺の近くに居たであろう事は確実だろう。

ならば他の理由が存在していたんじゃないのだろうか……

だとしたらそれは何なのか？

メカ犬と俺の違い……もしかしてここは！

「はあああああああああっはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっは！！！！！！！！！！！！！！！」

何処からとも無く、やけに周囲に響く馬鹿笑いが俺の耳に木霊する。

「何なのよこの笑い声は！？」

「アリサちゃん！あの丘の上だ！」

逸早く笑い声の発生箇所を捉えた俺は、目の前の丘の上を指差す。

「漸く辿り着いたか。忌々しき勇者よ！！！」

声の主は丘の上から、俺とアリサちゃんに言い放つ。

見上げるとその姿は、顔がテレビのディスプレイの様になっており、

身体の全体にはアルファベットが入った突起が付いているという、特徴的な姿をしていた。

……間違いない。

こいつは俺達がこの世界に来る直前まで戦っていたホルダーだ。

「あんたが魔王ね！！！」

ホルダーに向かってアリサちゃんが、タクトを向ける。

「その通りだ小娘！我こそがこの世界を統べる真の王だ！！！」

現在進行形でこの状況を夢だと解釈しているアリサちゃんの反応に、ホルダーもノリノリで答える。

その高いテンションに、俺は一人着いて行けないと思うが、ホルダーが俺達の前に出てきた事で、一つの確信が持てた。

「行くわよ純！」

「え！？ちょっと行くってまさか！？」

「エアロショット！」

俺が考えている間に、アリサちゃんとホルダーの話が進んでいた様で、気づいた時には、アリサちゃんがタクトを振って、魔法を放っていた。

「ふはははは！！！効かぬはこんなもの！！！！！」

アリサちゃんが放った風の球体は、凄まじい勢いでホルダーに迫っていくが、その攻撃はホルダーの高笑いと共に、拳で叩き落されてしまう。

「くそ！？」

もう少しだけ考えたところだが、時間は待ってくれそうに無い。

俺は考えを纏めるのを、一先ず諦めてナイフを取り出して、思い切り振るう。

「アイスブリッド」

ガロックさんの言っていた通り、ナイフを振るうと、俺の目の前に氷の塊が生成されて、ホルダー目掛けて飛んでいく。

それは本当にゲームで出て来る魔法の様だ。

「効かぬと言っているだろう！！！」

しかし俺の放った氷の塊は、ホルダーが叫びながら繰り出した拳によって、粉々に砕け散ってしまう。

だがここまでは想定済みである。

「アリサちゃん！！！」

「任せなさい！！！」

ここで俺とアリサちゃんは、事前に練っておいた連携技を発動させる。

「フォローウインド！」

アリサちゃんがタクトを下から上に、撫でる様に振り上げると、俺の足元から風が巻き起こり、俺の身体をホルダーの居る丘の上まで押し上げる。

「アイスブレイカー！！！」

魔法の風で、ホルダーの上まで押し上げられた俺は、ナイフを頭上に掲げて意識を集中させる事で、モンスターとの戦闘で使った倍以上の氷の刃をナイフの刀身に纏わせて、大剣にして重力で落下しながら、ホルダーに一撃を見舞う。

「ぬるい……温すぎるわあああああ！！！！」

普通のゲームに出て来る魔王ならば、これで倒せなくても、多少のダメージを負わせる事が出来る筈なのだが、ホルダーは、叫びながら拳を氷の刃にぶつける事で粉砕してしまった。

「うわあああああああああああ！？」

俺はホルダーの反撃に成す統べ無く、地面へと落下していく。

「純！？」

地面に落ちた俺に、アリサちゃんが、急いで駆け寄って来る。

「ちょっと大丈夫なの！？」

「うん。高いところから落ちて、びっくりしただけだから心配しないで」

アリサちゃんを心配させない様に、俺はすぐに立ち上がりながら、村人Ａの様な服についた土埃を払う。

いまだに心配そうにアリサちゃんが俺に声を掛けて来るが、ただの強がりではなく、実際に俺は先程の落下によるダメージを全く受けていない。

これがもしも現実ならば今頃、大怪我は免れなかっただろう。

そして俺は、このホルダーとの一連の戦闘で、益々確信を持つ事になった。

「ふん！勇者という者の力はその程度か」

丘の上から飛び降りてきたホルダーが、俺とアリサちゃんを見て、ふてぶてしい台詞を吐く。

忌々しいが、俺の予想が正しいなら、現状ではこのホルダーを倒す事は俺達には不可能だ。

正確に言うのであれば、この世界の戒律に縛られている限りはという事だが……

『……マスター……聞こえるか……マスター……』

ホルダーが此方に近づこうと歩き始めた矢先に、俺にとって待ち焦がれた声が何処からとも無く聞こえて来た。

「ど、何処だ!?何処から聞こえている!?」

その声に動揺したのか、先程までの自信に満ちた様子は何処へやら、ホルダーは慌てふためきながら、辺りを見渡す。

「この声って……」

その声を聞いたアリサちゃんは、聞き覚えのある声に、ホルダーとは別種の驚きの声を上げる。

「……待ってたぜメカ犬」

そう呟いた俺の手には、確りとタッチノートが握られていた。

## 第２８話　不思議な世界のアリサちゃん！？【前編】（後書き）

次回はまさかの仮面ライダーが登場予定となっております。

それとこの話が終わったら……

# 第２８話　不思議な世界のアリサちゃん！？【後編】（前書き）

まさかの久々連続投稿となりますが、楽しんでいただけたら幸いです。

# 第２８話　不思議な世界のアリサちゃん！？【後編】

「やっぱりその声はメー君ね！？」

アリサちゃんがメカ犬の声を聞き、嬉しそうに言う。

咄嗟にタッチノートは隠したので、何処から聞こえているのかまでは分かっては居ない筈だ。

「アリサちゃん！今から俺とメカ犬で、あの魔王を倒す秘密兵器を準備するから、少しの間だけ時間を稼いで欲しいんだ！頼めるかな？」

「ふ～んなるほど！そういう展開な訳ね。夢ながら結構ドラマチックじゃないの」

ただ単にメカ犬と俺の会話を聞かれたくないから、デタラメな事を言っただけなのだが、どうやらアリサちゃんは、都合の良い解釈をしてくれたらしく、ホルダーの前に一歩踏み出して、タクトを構えた。

「ウインドウォール！！！！！」

アリサちゃんが技名を叫びながら、タクトを回転させると、強い風がホルダーの周囲に渦を作り、その場から動かない様に押し止める。

「ここは私に任せなさい！！！」

タクトを回し続けながらアリサちゃんが俺に向かって叫んだ。

「うん！頼んだよ！！！」

俺はアリサちゃんに返事を返してから、後ろを向いてタッチノートを取り出して、メカ犬との会話を再開させた。

「多分アリサちゃんに危害が出る事は無いと思うけど、急ぐぞメカ犬」

『マスター。もしかしてこのホルダーの能力に気が付いたのか！？』

「ああ……予想通りなら、合っていると思うぞ」

メカ犬の驚き方からして、俺の予想は少なからず間違いでは無いかもしれない。

『うむ。先に結論を言ってしまえば、現在マスターとアリサ穣が認識しているこの世界は夢の中だ。

「やっぱりな……」

『正確に言うのであれば、人間の脳が睡眠時において見る夢をホルダーの能力で、意識的にコントロールして改変された擬似空間とも言える』

メカ犬が言うには、俺とアリサちゃんは、戦いの最中に浴びた光で、トランス状態になった後、ホルダーの能力で意識をこの夢の世界に、無理矢理に引っ張り込まれてしまったらしい。

どうやら俺の予想は外れていなかった様だ。

何故俺がその事に気づいたのかというと、それは前世に見た仮面ライダーWが要因である。

最近本物と会って、思い出しやすくなっていたというのもあるのだが、そのWで見たTV放映の内の話の中で、今の俺達に酷似したストーリーが展開していたのを思い出したのだ。

勿論大きく異なる部分も多々あるし、このホルダーの能力と、ドーパントの能力が、完全に一致するものだとは思えないが、ヒントとするには、十分に役立ってくれたのである。

『このホルダーは、他の人間をゲームに似せた夢の世界に取り込み自身がこの世界のゲームマスターとなる事を目論(もくろ)んでいたのだろう』

「だからそのプレイヤーである俺達が、不快に感じる痛みや疲れの感覚を、遮断したんだな。一生抜け出そうとしない様に……」

『うむ。現にアリサ穣もこの世界をただの夢と認識して、現状を楽しんでいる節があるからな。被害者が増えれば、この世界を現実だと認識して、この世界から離れなくなろうとする人間が出てきてもおかしくは無いだろう』

俺の前世の友達だったら、こんな世界に来たらさぞかし大喜びする事間違い無いだろうな……

「ああ。それでメカ犬がこっちの世界に介入出来たって事は、打開策も当然あるんだよな？」

『あのホルダーの能力は、あくまで人間の脳に対して有効な能力だ

からな。機械のワタシには効かない上に、能力的にはシステムを使用してマスターの脳と常時アクセスしているのだ。融合した状態のワタシは、奴の能力を逆に隅々まで調べさせて貰ったぞ』

「……やっぱりな。という事は現実の俺の身体は？」

『今も変身している状態だ。それに現実ではあれから数分も経ってはいない』

「それは流石に驚いた……」

ホルダーの能力が多岐に渡るのは、これまでの戦いから良く知ってはいたが、これは特殊過ぎである。

正直な話、こういったタイプの相手は、あまりしたくは無い。

『話を戻すが、ここからマスター達が出る為の方法が解析結果から一つだけ判明した』

「……予想外の相手ってところか？」

『その通りだマスター。この夢の世界は、ホルダーが全て管理している。言わばその世界の管理者とも言えるホルダーに対して、この世界のどんなに強力な武器や能力を使おうとも、ホルダーにダメージを与える事は出来ない』

「だから俺とアリサちゃんの攻撃は、一切効かなかった訳だ」

『うむ。だからマスターに今から一つ、あのホルダーと戦う為の力をイメージして欲しいのだ。マスターのイメージをワタシがこの世

界に擬似的にデータとして転送する。その力で戦えば、この世界からホルダーを追い出せる上に、管理者のホルダーがこの世界から居なくなれば、マスターとアリサ穣の目も覚める筈だ』

戦う力をイメージか……

「分かった！やってみる！」

『頼むぞマスター』

俺は目を閉じてメカ犬に言われた通り、この世界で俺が使う力を明確にイメージする。

俺がイメージする力と言えば……

『マスターのイメージをデータ化して転送したぞ。これを使えば、この世界から脱出出来る筈だ』

タッチノートからメカ犬の声が聞こえる。

身体的な変化は何も無いが、俺のイメージを本当にこの世界で実現出来ているとするのであれば、この状況を打開する事は可能な筈だ。

「お待たせアリサちゃん！」

準備を整えた俺は、今もタクトを回し続けて風でホルダーをその場に押し止めているアリサちゃんに声を掛ける。

「準備出来たのね！？」

「うん！ここからは選手交代だ！」

俺はアリサちゃんに返事を返しながら、横をハイタッチして前に出る。

そして後ろに回ったアリサちゃんが、タクトを回すのを止めると、ホルダーを包んでいた突風が止み、その中心から、やはり無傷のホルダーがゆっくりとした足取りで此方に近づいて来た。

「最後の悪あがきか？殊勝な事だな」

「悪あがきかどうか……試してみれば分かるだろ！！！」

そう言って俺が意識を集中させると、俺の手の中に、ある二つの物体が現れる。

「な、何なんだそれは！？」

見慣れない物体を見てホルダーが驚きの声を上げた。

それもその筈だろう。

少なくてもこれをこの世界で知っているのは、俺だけの筈なのだから、ホルダーが驚くのは当然と言える。

「驚くのはここからだ」

それは白を基調としたバックルと、そのバックルのデザインに合わせた収納ケースに見える物体……

正式な名称を言うのならば、ディケイドライバーとライドブッカーという、ライダーファンならば当然知っているであろうツールだ。

俺はディケイドライバーを腹部に当てて、ベルト状にして、ライドブッカーを腰に装着してから、ディケイドライバーの中央を展開さつつ一枚のカードを掲げる。

そのカードにはマゼンタを基調とした一人の戦士の顔が写されていた。

「変身！」

俺はいつもよりも少し強い口調で力ある言葉を紡ぎ、カードをドライバーに差し込んで、展開させた状態を元に戻す。

『ＫＡＭＥＮＲＩＤＥ……ＤＥＣＡＤＥ！』

音声が流れると同時に俺の全身を、モザイクの様な影が包み込み、その大きさを大人サイズに変貌させながら、頭上に六枚のプレートが展開されて俺の頭部に装着されていく。

そうするとモザイクの様な影が晴れて、マゼンタと白に黒を基調としたボディーに頭部に装着された六枚のプレートの奥から緑の複眼が覗き変身を完了させる。

「じゅ、純の姿が変わっちゃった……」

俺の変身を見て、アリサちゃんが驚く。

流石にやりすぎたかもしれないと思うが、シードにさえ変身しなけ

れば、まだ誤魔化し切れる筈だ。

「な、何者なんだお前は!?そんな奴ファイナルクエストのデータには無かったぞ!?」

偶然なのだろうが、ホルダーがお決まりの台詞を言ってきたので、ここは俺もそれに習ってこの台詞を言っておくべきだろう。

「俺か?俺は通りすがりの……仮面ライダーだ!」

本家の台詞を言った俺はそのまま走り、ホルダーを殴りつける。

「ぐあ!?そ、そんな馬鹿な!?この世界では無敵の筈なのに!?」

俺の拳を受けてダメージを受けたホルダーが困惑しているが、それに一々付き合う義理は無いので、更に追撃を仕掛けていく。

「特別サービスだ少しだけ他の力も見せてやる……変身!」

ホルダーを蹴飛ばして距離を取った俺は、先程変身した時と同様に、ドライバーを展開させて、ライドブッカーから一枚のカードを取り出して、ドライバーに差し込んで、再び元に戻す。

『ＫＡＭＥＮＲＩＤＥ……ＢＬＡＤＥ!』

ディケイドに変身した時と同じ様に音声が流れると、今度は俺の目の前に、カブトムシの様な絵柄が浮かぶ青いゲートが現れる。

そのゲートを潜り抜けると、ディケイドの姿が、トランプのスペードを彷彿とさせる頭部に、赤い複眼と銀と藍色を基調とした、古代

のコロシアムで戦うグラディエーターにも似た戦士、ブレイドの姿へと変わった。

「何だと！？」

俺は驚くホルダーを他所に、腰のライドブッカーを剣型のソードモードに切り替えて、一気に斬り掛かる。

「ぐあ！？……この！？」

困惑し続けていたホルダーも、この異常に気付いたのか反撃を仕掛けてこようとするが、それも想定済みだ。

「甘い！」

俺は更にカードを一枚取り出して展開させたドライバーに差込み元の状態の戻す。

『ＡＴＴＡＣＫＲＩＤＥ……ＭＡＣＨ！』

本家のブレイドが使うカードの力を模したアタックライドのカードを使用した事により、急速な加速を得た俺は、ホルダーの反撃を難なく避けて、逆に連続で斬撃を叩き込む。

「さてと……そろそろ現実世界に返らせてもらうぞ」

連続攻撃で弱っているホルダーから少し離れた位置で、ブレイドから最初の状態のディケイドに戻った俺は、ライドブッカーから、取っておきのカードを一枚取り出して展開させたドライバーに差し込んで使用する。

『ＦＩＮＡＬＡＴＴＡＣＫＲＩＤＥ、ＤＥ、ＤＥ、ＤＥ、ＤＥＣＡＤＥ！』

音声が流れるのと同時に俺と標的となるホルダー間に、ホログラム映像状のカード型エネルギーが十枚現れる。

それを確認した俺はその場から跳躍してホログラムを通過して、ディケイドの必殺技の一つでもあるディメンションキックをホルダーに放つ。

そしてディメンションキックがホルダーに当たるのと同時に、この世界は光に包まれた。

『……起きろ……起きろマスター！！！』

「ん！？」

俺はメカ犬の声に反応して、飛び起きた。

『どうやら無事に戻ってこれた様だな』

「ああ……そうみたいだな……」

俺が辺りを確認すると、見覚えのある海鳴市の街並みと少し離れた場所で眠っているアリサちゃんの姿が見える。

そして自分の姿を確認してみると、メカ犬の言った通り、変身した状態であり、メタルブラックのボディーだった。

「あれ!?ホルダーが何処にも居ないぞ!?」

更に周囲を見渡すが、ホルダーの姿は何処にも見当たらない。

『恐らくは一足先に現実世界に戻ってこの場から逃げ出したのだろうな』

「そんな悠長に言っている場合か!?」

あのホルダー自身の強さは別として、能力は厄介極まり無いものだ。

このまま逃がしたとしたら、多くの人間があの世界に引きずり込まれる事になるかもしれない。

『大丈夫だマスター。ホルダーが逃げてから、殆ど時間は経っていない筈だ。メカ虎を呼んで、一気に叩くぞ!』

「あ!そうか!!!」

その言葉でメカ犬の言いたい事を理解した俺は、急いでタッチノートを引き抜いて操作を始める。

『ライガー・コール』

タッチノートから音声が流れるてから少しして、素早い動きで緑の虎、改めメカ虎がやって来た。

『オレッチを呼ぶなんて、何かあったじゃん!?』

「来てくれたところ早速で悪いけど、逃げたホルダーを見つけるのに協力してくれ!」

『任せるじゃん!』

俺の頼みに快く答えてくれたメカ虎の返事を合図に、俺はタッチノートを更に操作していく。

『ホルダーをこの市内で探索するのならば、サーチフォルムが最適だぞマスター』

「分かった」

俺はメカ犬の助言に頷きながら、サーチフォルムに変形した後、アタッチメントパーツに変形したメカ虎を、ベルトの左側をスライドさせてから差し込んだ。

『サーチ・ライガー』

音声が鳴り響くのと同時に、俺の周囲に、メタルグリーンの装甲が

展開されて次々に、スカイブルーのボディーへと装着されていく。

「それじゃあ行くぞ！！」

『うむ！』

『じゃん！』

俺はそう言ってから、電柱の上に飛び上がり、全神経を周囲に集中させる。

街を行き交う人々の足音から、空を飛ぶ小鳥の羽の音に、見渡せる限りの景色を……出来るだけ多くの情報を、拾い集めていくその中で……

「居た！」

俺が居る電柱から約一キロ先の道路を、夢の世界で見たのと同一の姿をしたホルダーが走っている。

俺はベルトの右側をスライドさせて、黄色いボタンを押す。

『サーチバレット』

生成されたサーチバレットの引き金を引いて、ホルダーを狙い撃つ。

放たれた光弾は見事に命中して、ホルダーを昏倒させる事に成功した。

動きが鈍くなった隙を突き、俺は電柱伝いにホルダーの真上まで素

早く移動して、アタッチメントパーツの下に設置されたボタンを押す。

『ライガーファング』

ベルトから発生した光が両手両足に絡まり、虎の顔を模した形のプロテクターになり、それぞれのプロテクターからは、鋭い三本の刃が伸び、専用武器であるライガーファングを装備する。

「悪夢はここで終わらせる」

更に俺は続け様に、アタッチメントパーツのレバーを下に倒す。

『マックスチャージ』

ベルトから稲妻の様な光が発生して、俺の四肢に装備されたライガーファングへと集約していく。

「こいつで決めるぜ」

空中で構えた俺は、狙いを地上にいるホルダーに定めて、一気に振り切る。

「ライガークロスラッシュ」

振り切るのと同時に放たれた衝撃が無数の刃に変わり、ホルダーの頭上から雨の様に降り注ぐ。

その必殺の一撃を受けたホルダーは大きな爆発を起こした。

爆発跡には、少し小太りな青年が気絶していたのだが、多分この人がホルダーの素体となった人で間違い無いだろう。

「あっ！そう言えば！！！」

俺は気絶していた青年を見ていて、ある事を思い出す。

『どうしたのだ？マスター』

「いや……素体になった人が気絶してるのを見て思い出したんだけど、寝てるアリサちゃんをそのままにしてきちゃった……」

『迎えに行くじゃん』

「……はい」

俺は気絶した小太りの青年を、安全な場所に送り届けるついでに、途中で眠っているアリサちゃんも回収していった。

今回は色々と厄介な事があって疲れはしたが、夢の中とは言え、憧れの平成ライダーに変身出来た事は良い思い出である。

夢の世界から無事に帰ってきた翌日の、朝の登校途中のバスの中、昨日の事をやけにリアルな夢だと疑わないアリサちゃんが、同じバス通学である俺となのはちゃんにすずかちゃんの三人に対して、熱弁を振るっていた。

「兎に角凄い夢だったのよ！何だかはやてに借りたゲームに内容はソックリだし、その中では私は魔法使いだったんだから！！！」

「「へえ～」」

アリサちゃんの熱弁に、なのはちゃんとすずかちゃんがバスの振動に揺られながら、同じ返事を返す。

「あ！それと純も出てきたわよ！」

夢の中で体験した冒険を語っていたアリサちゃんが、俺を見て思い出した様に言う。

「純君は夢の中でどんな感じだったの？」

その一言を興味を示したのか、なのはちゃんがアリサちゃんに質問をぶつける。

「そうね……見た目的には、村人って感じだったわ」

覆しようの無い事実なので、訂正しようも無いが、そうはっきり言われると、正直泣きたくなってくる。

自分でも地味な奴だという自覚があるだけに、悲しさは増すばかりだ……

「でもね！純は凄かったわよ！氷の魔法で戦うし、最後は見た事も無い仮面ライダーに変身しちゃったんだから！！！」

「「へえ～」」

続いて言われた追加の説明を聞いて、なのはちゃんとすずかちゃんが、俺を見ながら再び同じ相槌を打つ。

俺は尚も続くアリサちゃんの、夢談義を聞きながら思った。

今日の海鳴は、平和だったら良いなと……

「やっと準備が出来たんだね？」

「ああ……漸くだ。漸く次の実験を行う事が出来る……」

朝日すらも届かない闇の中で、二人の異形が全長二メートル程の筒状の機械を見ながら話をしていた。

「それじゃあ早速始めようよ」

藍色の怪人オーバーが、心の底から楽しそうに言うが、その声からは何処か寒気すらも感じられる。

「少し落ち着けオーバー」

はしゃぐオーバーに対して、灰色の怪人メルトが抑揚の無い、平坦な声で制止の声を掛ける。

「何で止めるのさメルト？」

「これは前回の実験とは違い、精密な操作が必要になる。慎重に事を進めなければならないからな……」

「精密な操作ねえ……それで一体何を呼び寄せようって言うのさ？」

意外なところで、お預けの形となったオーバーは、多少の嫌がらせの意味も込めて、嫌味な笑いを浮かべながら、この筒状の機械の製作者でもあるメルトに質問した。

「何をか……そうだな強いて言えば……」

オーバーの質問に数瞬の間考えたメルトは、一時の静寂を打ち破り、一言だけ口にした。

「……究極の闇か」

その一言は静寂の中で何処までも響き渡った。

海鳴市が存在しない……ある世界のメール

五代君へ

このメールを見ていたとしたら、急いで日本に帰って来てほしいの

どうしても見て貰いたいものがあるから

桜子より

そしてこのメールには、あるデータが共に添付されていた。

そのデータは、ある古代文字の写真であり、こう訳されていたのである。

【聖地にて　究極の闇をもたらす者　狭間へと　封ずる　願わくば
この眠りが　永久であらんことを】

## 第２８話　不思議な世界のアリサちゃん！？【後編】（後書き）

そんな訳で次回からは、やっと以前から言っていたクウガ編がスタート予定なのですが、更新開始がもしかしたら少し遅れて来月からになるかも知れません……

それでは。

# １００万ＰＶ突破記念作品　仮面ライダーシード＆仮面ライダークウガ　繋がる

お待たせ致しました。

作者のＧ－３Ｘです。

以前のＷ編の様に毎日更新は無理だと思いますが、楽しんでいただけたら幸いです。

# １００万ＰＶ突破記念作品　仮面ライダーシード＆仮面ライダークウガ　繋がる

「ここが、桜子さんが言っていた遺跡か……」

長野県の九郎ヶ岳でここ最近になり発掘された、古代遺跡を目の前にして、一人の青年が呟いた。

青年の名は、五代雄介（ごだいゆうすけ）。

世界を旅する、冒険家である。

冒険家である彼が、古代遺跡に居るというのは、その職業的に、有り得ない事ではないが、五代にはそれ以外にも、この遺跡を訪れなければならない、理由が存在していた。

話は今から丁度、一年前にまで遡るのだが、この長野県の遺跡で起きた一つの事件を切欠に、未確認生命体と呼称された、謎の怪物が出現したのである。

五代はその事件の翌日、桜子の代わりに、遺跡の調査団の様子を見に来たのだが、彼は其処で不可思議な現象を体験した。

自身の記憶に存在しない筈のイメージが、頭の中に、映像として流れ込んできたのである。

何か大きな意思に導かれる様に、遺跡から持ち出された、霊石アマダムが埋め込まれたベルト、アークルを身に着けた事で五代は、古代の戦士クウガとなり、未確認生命体、グロンギと、一年にも及ぶ長い戦いを繰り広げた。

本来は拳を振るう事を嫌がる程に、五代は優しい心の持ち主だったが、それ以上に未確認生命体により、理不尽に広がる悲しみを、なくす為、皆の笑顔を守る為に、様々な人達の協力を得ながら、戦い抜いたのである。

そして全ての戦いを終えた五代は、再び冒険家として、世界を旅して回っていたのだが、日本を旅立ってから約一年が経つ頃、旅先の宿に、大学時代からの友人である、沢渡桜子（さわたりさくらこ）から、エアメールが届いたのだ。

其処に書かれた内容は、驚くべきものであった。

数日前の台風の影響で、地盤が緩んでいた為か、長野県の九郎ヶ岳の古代遺跡の近くで、土砂崩れが起きたそうだ。

驚くべきなのはここからなのだが、その土砂崩れのあった場所から、新たな遺跡が発見されたのである。

更にその古代遺跡から、リント文字と思われる、古代文字が発見された。

この連絡を受けた五代は、急いで日本に帰国して、懐かしい知り合いとの再会も惜しみ、その遺跡に向かったのである。

「ここが……」

遺跡の中に入った五代は、大人が一人、ぎりぎりで通れる程の、細い通路を抜けて、バスケットコート位の広さを誇る中央の部屋に辿り着くと、その奥にある祭壇を前にして呟いた。

祭壇には大きな扉が設けられており、その扉には古代の文字が刻まれていたのである。

「えっと……」

古代文字を確認した五代は、自身のズボンのポケットに手を突っ込み、一枚の折りたたまれたコピー用紙を取り出して閉じた用紙を開き、中に書かれた内容に目を通す。

其処には桜子が解読した文章の、一部の翻訳されたものが載っていた。

最初の一文には【聖地にて　究極の闇をもたらす者　狭間へと　封ずる　願わくば　この眠りが　永久であらんことを】と書かれている。

この文章の内容が意味する聖地とは、この遺跡でまず間違い無いだろう。

分からないのはここから先なのである。

究極の闇をもたらす者というのは、五代の知る限り、一人しかいないのだが、その可能性は極めて低いとしか言い様が無い。

それよりもある意味で気になるのは、狭間に封ずるという部分だった。

狭間という単語が、桜子の翻訳した結果なのだが、それを現代の言葉の意味に、上手く置き換える事が出来ないでいるのだ。

そして、解読を終えた文章の下には、まだ解読の終わっていない一文が書かれている。

文章の解読自体には、まだ多少の時間が掛かり、五代自身も古代文字に書かれている内容を読み取れる訳ではないのだが、最初の一文字だけは理解する事が出来た。

描かれた文字の意味するものは戦士。

それは五代が良く知る特別な言葉だったのだ。

「これって……クウガの事だよな？」

五代は呟きながら、慎重に祭壇に描かれた戦士の文字に触れる。

「え！？」

その瞬間、五代が触れた古代文字が淡く光ると、祭壇の閉ざされた扉が開き、薄暗い遺跡全体が眩い光に包まれた。

ここは何処だろうか？

僕は誰なの？

何も分からない……

唯一覚えている事は僕はずっと昔から眠り続けている……

そしてこれからも……僕は眠り続けなくちゃ駄目だって事だけだ……

僕は永遠にこの闇の中で静かに眠り続ける筈だったのに……

そんな永遠に続くと思われた眠りの中で、誰かが僕を呼んでいる様な気がした……

何処までも続く闇の中に入る筈なのに、目を開けなくても、瞼の上から強く感じる光を見つけた僕は……

ただ無心で、手を伸ばした……

あまりにも長い眠りの中で、多くの事を忘れていた僕は、光を見つけて一つだけ思い出す……

僕はかつて【闇】と呼ばれていた事を……

三月の上旬。

まだまだ寒い日が続くが、それでも少しずつ寒さも和らぎ、春の足音徐々に近づいて来る今日この頃。

俺は学校帰りの途中に、一冊の本を買ってから、海鳴大学病院にやって来ていた。

最初に断っておくが、俺は別に病気でも無いし、身近な知り合いが、現在入院している訳でも無い。

まあ、身近な知り合いでは無いけど、全く無関係という訳でも無いかもしれないが……

病院に着いた俺は、慣れた足取りで、迷わず院内の階段と廊下を突き進み、とある病室へと辿り着く。

「入るね？」

俺は扉を二、三度ノックしてから、病室への扉を開ける。

病室は大部屋では無く、一人用の個室で、室内を換気しているのか、窓に掛けられた白いカーテンが僅かに揺らいでいた。

そしてカーテンと同色の何処か無機質な印象を与える、ベットの上には、この病室の主である一人の青年が、黙々と一冊の本を読んでいる。

「相変わらず本の虫って感じ……」

俺は本を読む青年を見ながら呟く。

この光景を見るのも、既に四日間連続となるので、いつもの光景と言ってしまえば、それまでかも知れないが……

十代後半程に見える見た目と、整った顔立ちに、アルビノと言えば良いのであろうか、綺麗な耳まで掛かる程の白髪と、本の文字に視線を走らせる真紅の瞳が、この部屋を見る者に対して、何処か幻想的な雰囲気を抱かせる。

彼の読書が終了するまで、どれだけ声を掛けても反応しない事を分かってる俺は、溜息を一つ吐き、室内に設置されている椅子を一つ取り出して、彼の読書が一段落するまで、腰を下ろして待つ事にした。

俺がこのアルビノの青年と出会ったのは、今から丁度、一週間前の夕方にまで遡る。

その日の俺は、下校途中にタッチノートから鳴り響いた警報を聞き、いつも通り、一緒に帰宅していたなのはちゃん達に、適当な言い訳をしながら別行動を取って、メカ犬と合流してシードに変身した俺達は、反応元に急いで向かった。

反応元は市街地から少し外れた山間に建つ、既に廃墟となったビル

の中からしており、俺達は勿論ビルの中に踏み込んだのだが、ビルの内装は、廃墟とは掛け離れていたのである。

廊下には電気を供給しているのか、配線及び、用途不明の大小様々なパイプ等が張り巡らされており、廃墟というよりは、何かの研究施設というような様相を呈していた。

俺とメカ犬の間で、こういった事をする奴に多少の心当たりが有りながらも、兎に角反応元に徐々に近づいて行くと、辿り着いた部屋の扉越しから、何かの機械の駆動音と思える奇怪な音が聞こえてくる。

何かしらの罠かもしれないと考慮しつつ、俺達がその部屋に踏み込むと、薄暗い照明の下に、用途不明な機材が室内のあちこちに点在しており、その部屋の中央には、扉越しにも聞こえていた音の発生源であろう、全長二メートル程の謎の筒が鎮座していた。

そしてその筒の両脇には、俺達の予想通り二体の異形、オーバーとメルトが居たのである。

何を企んでいるのか知らないが、明らかに部屋の中央に鎮座する謎の筒が、ろくでも無い事を引き起こすと感じた俺は、邪魔される前に速攻でライダーパンチを謎の筒に叩き込む事で盛大な爆発を起こして、部屋ごと木端微塵に吹き飛んだ。

結局オーバーとメルトには、爆発のどさくさに紛れて逃げられてしまったのだが、以前の様にこの世界がWの世界と融合するという様な、特殊な事象は起きなかったので、安堵したのだが、この事件はそれだけでは終わらなかったのである。

爆発によって生じた大量の煙が風に流されて、辺りの景色を視界に捉える事が可能となった時、俺は見つけてしまったのだ。

謎の筒の残骸の中に倒れている一人の人間の姿を……

その人こそが、このアルビノの青年である。

爆発に巻き込まれて、大怪我をしているという訳では無かったようなのだが、素人目に見ても酷く衰弱していたのが分かったので、俺は急いで青年を病院に運んだ。

利用する機会が多い上に、個人的にも知り合いが居るという事もあり、青年を海鳴大学病院に運んだのだが、その選択は正解だったかもしれない。

この青年は、身分を証明する物を何も所持していなかったのだ。

そもそも倒れていた青年は、衣服を何も身に着けていなかったので、それも当然なのだが……

後日に改めて、廃墟のビルに赴いて、メカ犬とメカ竜、メカ海、メカ虎にも青年の衣服か何か残っていないかと、捜索したのだが、何の見つける事は出来なかった。

青年を病院に運び、その翌日に廃墟を探索した更に翌日、病院から連絡が入り、青年が目を覚ましたという知らせが、俺の下に届いた。

病院側には、俺が通りがかった道端で、偶然倒れている青年を発見して、幸いにも病院が近かったから、何とか引き摺って来たと説明してあるので、本来ならば、第一発見者というだけな子供の俺に、

こんな連絡が来る筈は無いのだが、青年の担当となったのが、はやてちゃんの主治医もしている石田先生という事もあり、目を覚ましたら連絡をしてくれる様に頼んだら快く引き受けてくれたのである。

学校から帰った後に、母さんから病院から連絡があった事を知らされた俺は急いで病院に向かったのだが、俺は其処でまたしても驚く事となった。

石田先生の話によると、青年は見た目通り、外傷は特に無く、ただ酷い衰弱状態となっていたので、しばらくは入院が必要だが、命に別状は無いらしい……

しかし一つだけ大きな問題があったのだ。

青年は一切、言葉を喋らなかったのである。

それどころか日本語すら理解していないそうなのだ。

身元も不明な上に、会話すら成立しない。

顔立ちは日本人に見えなくも無いが、アルビノの為、本当に日本人かどうかも確認するのは難しいだろう。

純粋に心配だったし、何故あんな場所に倒れていたのか知りたいと思っていたのだが、現状ではどうにもならない。

俺は石田先生との話を終えた後、この病院の院長のお孫さんでもある、みかんちゃんに遊ぼうとねだられて、絵本を読んであげる事になった。

これで五冊目となるところで、みかんちゃんが寝てしまったので、近くに居た看護士さんに後を任せる事にした俺は、みかんちゃんが持ってきた本を、院内の図書コーナーに返しに行こうと、廊下を歩いていると、偶然にも青年の居る病室の前を通りかかった。

日本語が通用しないとは石田先生から聞いていたが、全く縁が無いという訳でもないので、一言だけでも声を掛けておこうと思い、俺は病室の扉を軽く叩いてから部屋に入った。

青年は俺が入って来ても、微動だにせず、ただベットに腰を掛けて、正面を見据え続けていた。

俺が目を覚まして良かったですねと言うと、青年は僅かに反応して、視線を此方に向ける。

それからすぐ青年の視線は、俺の顔から下に向けられて、ある一点をじっと見つめ続けたので、その視線を辿ってみると、それはこれから図書コーナーに返しに行く予定だった絵本に向けられていた。

興味があるのかと思い、身振り手振りで聴いてみると、何とか意思が通じたのか、青年は僅かに首を縦に振った。

俺は何故か分からないが、青年のその仕草を見て大人の容姿をしている彼が、みかんちゃん以上の純真な子供の様に見えてしまい、ベットの脇に座ると、理解出来ないと分かっていてながらも、みかんちゃんに読み聞かせたのと同じ様に、絵本の朗読をした。

手持ちの本を全て読み終えた後、彼は意味を理解しているのかどうなのか、絵本を手に取り、真剣に読み始めたのである。

その様子に、何処か赤ん坊時代に俺の真似をしたがり、良く後ろで本を読む真似事をしていたなのはちゃんを思い出して、微笑ましくなった。

青年の絵本に向ける真紅の瞳は、それほどに無垢だと俺は感じたのだ。

その後も俺は、三日連続で病院を訪れては、青年に絵本を読み聞かせた。

そして今日、これだけ本に興味を示すのであれば、もしかしたら日本語を覚える事が出来るのではないかと考えた俺は、低学年向けの国語ドリルを買ってきたのである。

椅子に座って、彼の読書が終わるのを待ち始めてから、五分程経った頃だろうか。

絵本を閉じた青年は、視線を俺に向けてから、微笑みながら口を開いた。

「……こ、こん……に……ちは」

俺はこの日、初めて青年の声を聞く事になった。

## １００万ＰＶ突破記念作品　仮面ライダーシード＆仮面ライダークウガ　繋がる世界

前回のW編のプロローグは、最初からバトルしておりましたが、今回は静かな立ち上がりで行こうかと……

次回は五代さんが……

## １００万ＰＶ突破記念作品　仮面ライダーシード＆仮面ライダークウガ　繋がる

更新が遅れてしまい、申し訳ありません。

まだ実質的にプロローグその２という状況ですが、楽しんでいただけたら幸いです。

俺は驚きのあまり、口を馬鹿みたいに開けた状態で、体感時間では永遠にも等しい数秒間を過ごす事となった。

「やあ、純。待ってたよ」

「……」

「おいおい！返事くらい返してくれたって良いだろ？」

「……」

「もしかして、僕の声が聞こえて無いのかな？」

「……」

病院に通い始めてから、四日目のお見舞いで、俺は初めてアルビノの青年の声を聞く事が出来た。

しかしその日から、たったの二日で、日本語を話せなかった筈の人間が、ここまで流暢な日本語を操る事が可能になると、誰が予想出来ただろうか？

そうなのだ……

今現在進行形で、俺に対して流暢な日本語で、語り掛けてくるのは、何を隠そうアルビノの青年なのである。

俺は初めて青年が言葉を喋ったその日、その嬉しさのあまり、面会時間ギリギリまで、お見舞いにと買ってきた国語ドリルを使い、勉強会を行った。

簡単な言葉だが、挨拶をした青年を見て、日本語で会話が思ったよりも早く出来るかも知れないと思ったからだ。

その翌日も、俺は勉強会を兼ねてお見舞いに来たのだが、石田先生の話だと、面会時間が過ぎた後も、ずっと国語ドリルを使って一人で勉強を続けていたらしく、昼過ぎに漸く眠ったらしい。

結局俺のこの日持参した、家では使う機会が無く物置の置くで静かに眠っていた幼児用の、日本語を覚える為の単語カードを置いて帰る事にしたのである。

そしてその翌日、改めて病院にお見舞いに来てみると……

「お～い！」

やけに気さくに日本語で話し掛けてくる、アルビノ青年が目の前に居た訳だ。

「……あのさ」

いつもでも黙っている訳にも行かないと思い立った俺は、目の前で俺に呼びかけ続ける青年に声を掛けた。

「あ！やっぱり聞こえてたんだ」

俺が言葉を発した事で、朗らかに笑みを浮かべる青年は、まるで芸

術的な絵画の様に見えたが、生憎と今は芸術鑑賞よりも先に、やらなければ行けない事がある。

「日本語が分かるなら、色々と聞きたいんだけど……」

「うん。良いよ」

俺の言葉に笑顔で頷いたという事は、覚えた単語をただ言っているだけではなく、青年は正しく日本語を理解した上で喋っているという事だ。

互いの意思の疎通が可能だという事を確認した俺は、青年に対して、最初の質問をぶつける。

「取り敢えず名前を教えてくれるかな？」

「名前……」

「うん。もう知ってると思うけど、俺は純、板橋純だよ。聞きたい事は沢山あるけど、まずは自己紹介からにしよう」

言葉が通じない今まではどうしようも無かったが、やっぱり呼び名が無いのは、何かとと不便だ。

会話が出来るのであれば、自己紹介をするという行為は、挨拶と並ぶ偉大なコミュニケーションの一つである。

「……ごめん」

「え？」

先程までの快活な喋りから、即答で名前を教えてくれると予想していたのだが、青年が俺に返した答えは、俯きながら零した謝罪の言葉だった。

「……覚えていないんだ。何もね……」

青年は顔を上げて、内側に悲しみを滲ませた様な笑顔を浮かべながら、言葉を紡ぐ。

その言葉が意味するものを、俺は知っている。

彼は俗に言う記憶喪失というものなのだろう。

もしかしたら嘘を言っているのかも知れないが、俺はその考えをすぐに捨てた。

少なくても俺には、青年の真っ直ぐに俺を見詰める真紅の瞳が、嘘を言っている様には、どうしても思えなかったからだ。

「……それじゃあさ、名前を一緒に考えよう」

俺は再び顔を俯かせた青年に声を掛けた。

「名前を？」

「うん。分からないなら、新しく名前をつければ良いんだよ。何だったら俺が考えたって構わないし」

記憶喪失の人に対して安易な発言をしない方が良いのだはと思えた

が、俺はどうしてもこの白髪の青年を放っておく事が出来なかった。

それは最初に見付けた俺が勝手に感じている責任感なのかも知れないが、青年が浮かべた悲しそうな笑顔を見て、何かをしなければいけないという、衝動に駆られてたのである。

「新しく名前を？」

青年はその澄んだ眼差しで俺を見る。

俺を見る青年の表情には、その発想は無かったという言葉が、ありありと表情に浮かんでいた。

「そうだよ。何か好きな言葉とかあるなら、それを名前にしちゃえば良いんじゃないかな？」

このままこの話題を続けても大丈夫そうな雰囲気だったので、俺は更に話を先に進めて行く。

「好きな言葉……」

青年は俺が言った言葉を、何度も呟きながら考え始める。

そして考え始めてから、暫く時間が経った後、青年はおもむろにベットから腰を上げて、窓の方に歩き出すと、カーテンを開けて窓から見える外の景色に視線を向けた。

「何か見えたの？」

「……空」

外の景色を眺める青年に、俺が言葉を投げかけると、青年は窓の外の上に手をかざしながら呟いた。

「空って……もしかしてそれが、考えた名前？」

「うん。やっぱり変だったかな……」

俺の反応を窺いながら、青年は不安そうな声を零す。

「ううん。そんな事無い。俺は良い名前だと思うよ」

首を横に振りながら、俺は名前を支持する。

それに空という名前は、この捉え所の無い青年を表すのに、何処と無く似合ってると感じたのも、事実なのだ。

「……うん。僕の名前は、今日から空……僕は空だ」

俺の返答に、青年改め空は、笑顔で再び自身の名前を口にした。

「宜しく。空」

「宜しく」

夕方の病室で、俺達は笑いあいながら互いに声を掛ける。

窓から差し込む、青空の中に少しの赤みを含む夕暮れを背にして、俺は新しく出来た友達と挨拶を交わした。

「五代さん。今日も調べ物探しに行くんか？」

「うん。まあね」

玄関を出ようとしたところで、声を掛けられた五代は、振り向きながら答えた。

その声の主は一人の少女だ。

一見すると、小学生低学年の関西弁を喋る女の子だが、少女には一つ大きな特徴が存在していた。

「その探し物って何やの？何度聞いても教えてくれへんし！言ってくれれば私だって何か協力出来るかも知れないんよ？」

それは少女が、車椅子に座っているという事である。

しかし少女は、その事を今では特に気にしては居なかった。

物心ついた頃から、車椅子での生活を強いられてはいるおかげで、

学校に自由に行けないのは、非常に残念に思っているが、少女には大切な友達が何人も居る。

少女は多くの優しい人々に支えられて、今を生きていると、その幼さで既に知っていた。

だから少女は日々を笑顔で過ごし、今もこの様に人と深く接しようとしている。

「ごめんね。はやてちゃん」

五代は苦笑しながら、謝りながら少女の名前を口にする。

「一週間前から【俺にも何なのか分からない】の一点張りやな、五代さんは……」

はやては五代が先の言葉を言う前に、自らこの一週間で良く聞く事になったフレーズを先に言いながら、呆れ交じりの溜息を吐いた。

「あははは……」

五代はもはや、はやてに対して、苦笑いを浮かべるしかない。

思い返してみれば、確かにはやての言う通りなのだから、反論のしようもないだろう。

「確かにそれが本当やったら、探しようもないんやろうけど、何か漠然と思うところとか無いん？」

このまま言い合いを続けていても、いつも通り平行線を辿るだけだ

と分かっているはやては、一つの妥協案を提示する。

「う～ん……俺も分かるならすぐにでも教えてあげたいんだけど、一週間前にも言った通り、俺自身が良く分かって無いんだよね……」

「それも毎日聞いてるんやけど……」

五代の返答に、はやては先程の呆れに加えて、少々の諦めをブレンドした溜息を盛大に吐き出した。

「兎に角行って来るよ！それじゃ！」

「あ！？ちょ、五代さん！？」

一瞬の隙を突いて、五代は足早に玄関から飛び出して行った。

「まだ話は終わってへんのに……」

五代が飛び出して行った玄関を恨めしげに見据えながら、はやては三度目の溜息を吐き出す。

「初めて会ってからもう一週間経つけど、ほんまに不思議な人やな。五代さんは……」

はやてはそう言いながら、一週間前の夜の事を思い出す。

五代との出会いは、はやてにとって、とても衝撃的なものだった。

その日、はやてはいつもの様に、就寝前にベットで、読書をしていたのだが、何の前触れも無く、突如として目の前が眩い光に包まれ

たのである。

突然の事態な上に光の眩しさもあり、はやては思わず目を閉じてしまった。

暫くそのままで固まっていると、数秒程で光は急速にその眩しさを失ったいったので、はやてが恐る恐る目を開けてみると、見知らぬ青年が目の前に佇んでいたのである。

この寝室には、本来ならば、はやてしか居ない筈だ。

それどころかこの家には、現在はやて以外は誰も居ない筈なのだが、現実として目の前には見知らぬ男性が存在していた。

それは、はやての理解出来る許容範囲を、軽く超えていたのである。

その結果としてはやては……その場で気を失ってしまったのだ。

これが五代とはやての、最初の出会いだった。

「結局あの後、五代さんが、気絶した私を介抱してくれたんやけどなあ……」

目を覚ました後、突然現れた男性、五代が自分に危害を加える様子が無い事を分かったはやては、色々と質問をしてみる事にした。

取り敢えず名前を聞いてみたら、一枚の名刺を渡された。

名刺には【２０００の技を持つ男　五代雄介】と書かれており、本来は円滑に自身の紹介をする為に存在する筈のアイテムである名刺

は、更にはやてを混乱させる結果となってしまったのである。

その後も様々な質問をした後に、最も気になる部分である、何故はやての家に五代が光と共に現れたのかを聞いてみると、何でも長崎の古代遺跡に居たらしいのだが、突如としてその遺跡の祭壇に彫られた古代文字に触れて光に包まれたと思ったら、気付いた時には、はやての寝室に居たというのだ。

信じ難い話ではあったが、はやての目の前に、五代が光と共に現れたのは確かであり、その話を信じでもしない限りは、他に説明のしようも無かった。

結果としてはやては、五代を信じる事にしたのである。

本当ならば納得は行かなくても、互いの状況を理解した事で、五代がはやての家を出て行けば、それで終わりだった筈なのだが、話はそう簡単に終わらなかった。

出て行く前に知り合いに連絡したいから、電話を貸してほしいと五代が言ってきたので、はやては快く電話を貸したのだ。

五代ありがとうと、感謝の言葉を述べてから、早速電話を掛けたのだが、一向に繋がらなかったのである。

その後も何箇所にも電話を掛けたが、それは殆どが現在使われていないというメッセージが流れるのみであり、唯一繋がったとのは喫茶ポレポレだったという喫茶店の番号だったそうなのだが、実際に電話に出た人物は、五代の知る人物とは、全く別人だったのだそうだ。

予定変更となり、今度は五代がはやてに様々な質問をする事となった。

そして全ての質問に答えた後、二人が行き着いた結論は、ここは五代の居る世界とは別の世界。

パラレルワールドなのではないかという事だった。

とても俄かには信じられない物語に出てくる様な設定に思えるが、今のところそれ以上に説得力のある答えを導き出す事は出来なかった。

まだ仮定ではあるが、一応の答えが出た後に、これからどうするつもりなのか、はやてが聞くと、五代は探し物があるからこの辺りを調べてみると言った。

何でも、遺跡で光に包まれた時に、一瞬だけ頭の中に、良く分からないイメージが浮かんだらしい。

ほんの一瞬の事だったので、それが何なのかは、五代自身にも良く分からなかったそうなのだが、五代はその何かが、この五代の世界には存在しない筈の街、海鳴市の何処かにあるのだと感じたのだそうだ。

行動指針があるのは良いのだが、その内容を聞く限り、その目的がいつ頃に、達成出来るのか、はっきり言って、想像すら出来ない。

だからはやては、一つの提案をしたのである。

【その何かが見つかるまで家に居ればええよ】

それは初対面の男性な上に、非科学的な現象と共に現れた五代に対して、あまりにも無防備な提案だった。

しかし事情を聞いたはやては、五代を放っては置けなかったのである。

訳も分からないままに、ただ一人、知り合いも居ない場所に来てしまった五代に、少しだけ以前のはやて自身が重なった様に思えてしまったのだ。

最初は五代も迷惑になると、その提案を断ったのだがその後、紆余曲折を経て、結果的に五代は一時的に八神宅の居候となったのである。

五代とはやては、この時にはまだ気付いてすらいなかった。

この出会いは偶然ではなく、必然という名の運命だったという事に……

## １００万ＰＶ突破記念作品　仮面ライダーシード＆仮面ライダークウガ　繋がる世界

物語は次回から本格的に動いていく予定となっておりますので……

## １００万ＰＶ突破記念作品　仮面ライダーシード＆仮面ライダークウガ　繋がる世界

思ったよりも更新が遅れてしまって、申し訳ありませんでした。

それでは今回のお話も楽しんでいただけたら幸いです。

今回は純と……

「メカ犬！」

『待っていたぞマスター』

駆け寄る俺に、メカ犬が声を掛ける。

空と友達として挨拶を交わした帰り道の途中、タッチノートからホルダー反応を知らせる警報が発せられるのを聞いた俺は、現場が病院近くだったので、先に現場である、海鳴商店街に駆けつけていたメカ犬と、急いで合流した俺は、眼前に広がる惨状を見て思わず叫んでしまう。

「ホルダーモドキが、こんなに！？」

夕暮れの海鳴商店街には異形の姿をした藍色の十数体の怪人、ホルダーモドキが周囲の建物を乱暴に破壊していた。

ホルダーモドキは確かに集団で現れる事が殆どだが、大抵そういった場合は、すぐ近くにオーバー、もしくはメルトが居る筈なのである。

しかし周囲を見回しても、商店街には暴れまわるホルダーモドキ達と、逃げ惑う海鳴市民の姿のみで、近くに二人が居る様子は全く無い。

『マスター……何かおかしくないか？』

俺の隣で同様に周囲を見回していたメカ犬が、商店街で暴れている、ホルダーモドキ達を見ながら、そんな事を言ってきた。

「確かにオーバーとメルトが近くに居ないみたいなのに、この数は異常だな」

『いや、マスターの言っている通り、それも気にはなっているのだが、ワタシはどうも奴らの行動が不可解に思えてな……』

「奴らの行動が不可解？」

『うむ。どうも奴らの目的は、この街の破壊活動では無い様に見える……』

メカ犬の言葉に耳を傾けながら、改めてホルダーモドキ達の行動を見てみると、街を破壊しているのには変わり無いのだが、やたらと首を左右上下に振ったり、破壊した建物を覗き込んでいるという様な仕草がやたらと目につく。

その行動はまるで……

「何かを探してる？」

俺がホルダーモドキ達の行動を見て、思った事を呟いたその直後。

『後ろだマスター！』

突如として隣で叫んだメカ犬の声に反応して後ろを振り向く。

すると街で暴れていたホルダーモドキ達の内の一体が、何時の間に

か、俺の背後に回り込んでいたらしく、俺に対して大きく拳を振り上げていた。

「くっ！？」

この状況は物凄く不味いという事を認識した俺は、これから振り下ろされるであろう、ホルダーモドキの拳を回避するべく、咄嗟に後ろに飛ぼうとした。

しかしその行動は実行される事は無かった。

それは俺が後ろに飛ぼうとした直前に、その必要が無くなった為である。

「危ない！！！」

後ろに飛ぶ為に、足に力を込めたその時、横から一人の男性が飛び出してきて、ホルダーモドキに体当たりを喰らわせて、その場から吹き飛ばしたのだ。

「あ、あの、ありがとうござっ！？」

俺は危ないところを助けてくれた背を向けた男性に、お礼を言おうとしたのだが、俺の方に振り向いた男性の素顔を見た瞬間、言葉を失ってしまった。

その男性は、俺の憧れの人物と瓜二つの顔をしていたのである。

世界には同じ顔の人間が、三人は居ると、何処かで聞いた事があるが、それにしても似すぎているのだ。

「もう大丈夫だ」

ただ無言で立ち尽くす俺を、恐怖で動けなくなったと、勘違いしたのだろう。

男性は優しさを称えた瞳で、俺を見ながら笑顔で頭を二回程、軽く撫でた。

その声と笑顔は、紛れも無く俺の知っている人物、そのものである。

「早く逃げるんだ！」

男性は俺にそう言うと、再び後ろを向き、既に起き上がって此方に近づいてきていたホルダーモドキと対峙した。

「未確認……じゃないのか？」

体当たりを浴びせて吹き飛ばしたホルダーモドキを正面から見据えて、男性が驚きの声を上げる。

「今……未確認って言ったって事は、もしかして……」

男性の発した言葉に、俺の中に存在していた疑惑が、確信へと変わっていく。

「うをおおお！！！」

男性は叫びながら、目の前のホルダーモドキに突進を始めた。

「ふん！」

突進と同時に思い切り振り上げた男性の右拳が、ホルダーモドキの胸に当たるが、然程のダメージを受ける事無く、ホルダーモドキは平然と佇みながら、男性に視線を送る。

「はあ！」

先程の攻撃で逆に拳を痛めたであろう男性は、その様な仕草を微塵も見せずに、続け様にハイキックを、ホルダーモドキに放つ。

その一撃は見事にホルダーモドキを捉えるが、その攻撃を喰らった当人である、ホルダーモドキは、何のリアクションもせずに、ただ男性に視線を送り続ける。

二度目の攻撃も効果が無かった事を理解したのか、男性が三度目の攻撃を加えようと左拳を放ったところで、ホルダーモドキが動いた。

「うわ！？」

ホルダーモドキは、男性が放った左拳を受け止めて、男性を俺の居る方向とは反対側に、放り投げたのである。

『何を呆けているのだマスター！？』

男性の容姿に気を取られて、ただこの状況を見るだけになっていた俺の耳に、メカ犬の声が轟いた。

俺はその声で、正気に立ち返り、急いでタッチノートを取り出す。

「行くぞメ！？」

そのまま急いで変身しようとしたその時、予想外の出来事が起こった。

「うをおおおおおお！！！」

先程ホルダーモドキに吹き飛ばされた男性が、後ろから俺の目の前に居るホルダーモドキの腰にしがみ付いたのである。

それを振り解こうとして、ホルダーモドキが身体を大きく揺さぶるが、男性はしがみ付いたその腕を決して離そうとはせずに、がむしゃらに喰らい着く。

「早く逃げるんだ！！！」

ホルダーモドキにしがみ付いた男性は、俺に向かってそう叫ぶと、しがみ付いたホルダーモドキに振り回されながら、俺の視界の外へと向かって行ってしまう。

『マスター。彼をあのままにしては危険だ。ワタシ達も行くぞ！』

「あ、ああ……分かってる」

俺は決して出会える筈の無いあの人と、そっくりな姿の男性の言動に動揺しつつも、メカ犬の言う通り男性とホルダーモドキが向かった瓦礫の向こう側に走りだそうとしたのだが、その進行方向には多くのホルダーモドキ達が行く手を遮るかの様に、立ち塞がっていた。

『どうやら奴らを倒さないと、この先には行けそうにないな』

「そうみたいだな……」

『一気に蹴散らすぞマスター！』

「ＯＫ！」

メカ犬の掛け声に答えながら、俺はタッチノートを開いてボタンを押す。

『バックルモード』

音声が流れると同時に隣に居たメカ犬がベルトに変形して、自動的に俺の腹部へと巻きつく。

「変身」

俺はホルダーモドキ達を見据えながら、音声キーワードを入力して、タッチノートをベルト中央の窪みへと差し込んだ。

『アッププロード』

差し込んだ瞬間に、白銀の光が俺の全身を包み込んで、一人の戦士を誕生させる。

光が飛散する事で現れたその姿は、メタルブラックのボディーに、四肢に伸びる銀のラインとその同色に輝くＶ字型の額飾り。

赤く大きな二つの複眼が、確かなまでの存在感を放っている。

仮面ライダーシード。

それがこの姿の名称だ。

『来るぞマスター！』

ベルトから聞こえるメカ犬の言う通り、変身した直後、目の前のホルダーモドキ達が、一斉に襲い掛かってきた。

「はあ！」

最初に此方へと飛び込んできたホルダーの拳を避けた俺は、カウンターに右拳を喰らわせてから、後ろから追撃を仕掛けよう走ってくる二体目に向かって投げ飛ばす。

更に三体目、四体目と同時に攻め込んで来るのが、後ろから視界に入って来る。

『相手が数で来るのならば、此方はスピードで勝負するぞマスター！』

「分かった！」

戦況を把握しながら助言するメカ犬の言葉に頷きながら、俺はベルトの右側をスライドさせて、緑のボタンと黄色のボタンを連続で押していく。

『スピードフォルム』

『スピードロッド』

ベルトから音声が流れると、メタルブラックのボディーがライトグリーンへと染まり、それと同時に放たれた光が俺の右手に集約されて、このスピードフォルムの専用武器であるスピードロッドへと生成される。

「たあああああ！！！」

俺はスピードロッドを、弧を描く様に振り回す事で、俺を囲もうと四方から迫るホルダーモドキ達に、打撃を浴びせていく。

「今は急いでるんだ！一気に片を着けさせてもらうぞ！」

この辺りに居たほぼ全てのホルダーモドキが、俺を中心とする事で周囲に集まって来ているのを一瞥して、確認した俺は、ベルトからタッチノートを引き抜いて、スピードロッドの溝部分へとスライドさせる。

『ロード』

音声が聞こえた事を確認した俺は、すぐさまタッチノートを再びベルトに差し込んだ。

『アタックチャージ』

ベルトから発生した光は、右腕のラインを通過して、スピードロッドへと集約されていく。

「こいつで決めるぜ」

光が集約するスピードロッドを構えてから俺は右足を軸にして、その場で自らも回転しながら、スピードロッドを一気に振り切った。

「ウインドテイスティング」

その瞬間に、俺を中心として、円状に風の刃が放たれる。

俺を囲む様に周りに居たホルダーモドキ達は、その攻撃を避ける事が出来ずに、次々と爆発を引き起こし無へと帰って行った。

「これでこの辺りは、片付いたかな……」

回転を終えた俺は、目に見える範囲でホルダーモドキが全て居なくなった事を確認してから呟いた。

『マスター。ここが片付いたのならば、急いで先程ホルダーモドキと共に、瓦礫の向こうに行った彼を追いかけるぞ』

「ああ！」

俺は短く頷いてから、急いでこの場から走り出した。

「があ！？」

商店街で怪物に襲われそうになっていた少年を、怪物から引き剥がす事に成功した男性、五代は瓦礫の先にまで引き摺ったまでは良かったのだが、其処で一瞬だけ気が緩んでしまったのか、腰に回していた腕を引き剥がされた上に、投げ出されてしまった。

アスファルトに背中から受身も出来ずに着地する結果となってしまった為に、肺から空気が強制的に排出されると同時に、短時間ではあるが、まともに呼吸が出来なくなってしまう。

「……く……う……」

差して間を開ける事無く、呼吸が出来る様になった五代は、痛む全身に鞭打ちながら、素早く立ち上がる。

「未確認じゃないみたいだけど……何なんだこいつは！？」

五代は間合いを取りながら、目の前の怪物、ホルダーモドキを警戒しながら考察していく。

そうしながら五代は、ゆっくりと自身の腹部へと手を添えた。

「あれから一年か……もう一度やるしかないのか……」

忘れ様も無い、一年前のあの日。

それ以来、五代は世界中を旅しながらも、一度としてその力を使う事は無かった。

そもそも今でもその力が、現在の自分に宿っているのかすら、疑わしいのである。

「それでも俺は……」

五代は、決意と共に、かつての様に、両手を腹部へと宛がう。

すると五代の腹部には、超古代の技術で作られた霊石アマダムが埋め込まれたベルト、アークルが出現した。

左手を腰に添えながら、右手を前にゆっくりと押し出す事で、集中力を高めつつ、五代はもう一度、その力で誰かの笑顔を守る為に、自身を戦士へと変える言葉を口にする。

「……変身！」

その言葉を紡ぎながら、腰に添えた手に右手を上から押し込んだ後に、一気に両腕を広げる。

そうする事により、五代の身体は急激なまでの変化を遂げて行く。

身体の上半身は、筋肉を模した造形の鎧に覆われて、頭部は二股に分かれた金の角と、赤い大きな複眼という、人間とは明らかに違った形状へと変化する。

それは五代の居た世界では、未確認生命体第二号と呼ばれていた存在。

その本当の意味を知る者は、彼をクウガと呼んでいた。

「……どうして、白いクウガに！？」

変身を終えたクウガは、自身の白い姿を見て、驚愕した。

本人の意思としては、赤い姿を望んだ筈なのに、実際に変わったその姿は本来の力を出し切れない状態だった為だ。

驚くのも無理は無いだろう。

この姿になる時の条件は、大きく分けて二つ存在する。

一つはクウガへと変身する者が、その力を上手く引き出せていない場合だ。

霊石アマダムは使う者の意識によって、その力を発揮する。

使用者の意思、覚悟とでも言うべきものが、不足しているのであれば、当然の結果としてクウガの力を十分に引き出す事が出来ないのだ。

そして二つ目は、そうならざるをえない場合である。

戦士クウガとして戦うには、大きな力を必要とするのだ。

その力が使用者、もしくはそれを司るアマダムが原因で使う事が出来ない時も、この姿となってしまうのである。

「やっぱりまだ……」

クウガは自身の腹部を見ながら、一つの確信を得た。

原因は後者にあったのだ。

あの壮絶な戦いから一年という月日を経ても尚、アマダムはその傷の全てを癒すには至っていなかったのである。

しかし敵のホルダーモドキは、そんな事情を分かる訳も無く、目の前で突如として姿を変えた敵へと、猛然と飛び掛ってきた。

**１００万ＰＶ突破記念作品　仮面ライダーシード＆仮面ライダークウガ　繋がる世界**

次回はクウガのバトルと……な予定です。

## １００万ＰＶ突破記念作品　仮面ライダーシード＆仮面ライダークウガ　繋がる

更新が遅れてしまい申し訳ありませんでした。

本当はもう少し早く投稿出来る予定だったのですが、書いたデータが保存されずに、全て消えてしまったので、新しく書き直す事になってしまいました……

それでは今回も楽しんでいただけたら幸いです。

クウガは飛び掛ってきたホルダーモドキを、側転で避けると、起き様に鳩尾へと蹴りを叩き込む。

生身の時よりは多少の効果があり、仰け反るが本来の力をクウガが出し切れていない為か、思った以上のダメージを与える事が出来なかった。

「うをおおおお！」

それを理解したクウガは一撃の弱さを補う為に、ホルダーモドキが態勢を整え直す前に、気合の篭った叫びと共に、拳の連打を叩き込んでいく。

確かに今のクウガは、全力を出せずにいるが、相手のホルダーモドキは、過去にクウガが戦ってきた未確認生命体に比べて動きも鈍く、明確な意思が存在しない為か動きは単調であり、今のクウガでも戦えない相手ではなかった。

「ふん！」

横から繰り出されるホルダーモドキの拳の逆襲に対して、間に腕を割り込ませる事で、防御したクウガは逆にカウンターとなる一撃をホルダーモドキの胸に喰らわせる。

クウガの攻撃は確実に通るのだが……

ホルダーモドキはクウガの攻撃を受けて、仰け反りはするものの、

すぐに態勢を整えて反撃に転じてくる。

「くっ！？」

クウガはその思ったよりも早く繰り出された反撃を何とか裁きながら、更に拳と蹴りによる打撃をホルダーモドキに何度も浴びせかけるのだが、現在の本来持っている力を出し切れていない地力が低い攻撃の為か、ホルダーモドキに対して、決定打となるダメージを与えられない。

「こうなったら……」

このままでは埒が明かないと判断したクウガは、一旦ホルダーモドキとの距離を取る為に、右拳を繰り出してきたホルダーの腕を掴み、自身を軸に時計回りに回転させて、その反動を利用する事により、約十メートル程の距離にある瓦礫へと、投げ飛ばす。

「いまだ！」

ホルダーモドキが、瓦礫の中に突っ込んで行ったのを確認したクウガは、腰を低く構えながら両腕を開き、右足に力を収束させていく。

瓦礫の中からホルダーモドキが這い出てくるのを見計らい、クウガは右足に炎の様なエネルギーを纏った状態で走り出した。

通常の一撃が効かないのであれば、それ以上の威力を持つ攻撃を繰り出さなければならない。

そう判断したクウガは、今の力で出来る最大威力の攻撃を相手に叩き込もうと考えたのである。

ホルダーモドキに駆け寄るクウガは、十メートル程開いていた距離を、半分程に狭めた辺りで、思い切り跳躍して、五代雄介の１０７番目の技である空中回転を加えて、その回転エネルギーを推進力としながら、右足を突き出し、跳び蹴りを放つ。

「うをおうりゃあああ！！！」

気合の込められた叫びと共に繰り出された必殺の一撃は、見事にホルダーモドキの胸の中央を捉えて、様々な未確認に刻んできたものよりも、多少造形の欠けた刻印を刻み付ける。

その刻印を中心に、ホルダーモドキに皹が入りだし、その皹が全身に到達すると同時に小爆発を引き起こして、粉々に砕け散ってしまった。

「……はあ～」

ホルダーモドキの爆発を見届けたクウガは、一年振りとなる戦いが無事に終わった事を確信して、安堵の溜息を吐く。

しかしクウガに訪れた安息の時は、すぐに終わり全身に緊張が走る事となった。

クウガとホルダーモドキが来た方角から、ライトグリーンのボディーと赤い複眼を持つ、何処かクウガと共通した容姿を持つ人物が、目の前に突如として現れた為だ。

俺は何処かで、確信していたのかもしれない。

そして目の前に起こった現実により、その確信は揺るぎ無い真実へと変わった。

商店街で暴れていたホルダーモドキ達を倒した後、変身前の俺を助ける為に、一人で戦いを挑んでいった男性が一体のホルダーモドキにしがみ付きながら消えていった方向に走り、行き着いた先に居たのは、俺が良く知る一人の偉大な戦士だった。

クワガタを模した、小さな金色の二本角に、赤く大きな複眼と、筋肉の形に似た白いプロテクターを思わせるボディーは見間違う筈も無い。

「……クウガ」

俺は彼を目の前に、その名を呟いた。

仮面ライダークウガ。

前世の俺が今の俺と同じ年齢の時に、リアルタイムで初めて見たラ

イダー番組の主人公。

つまり俺が初めて知る事となった、仮面ライダーである。

周囲を見渡してもクウガ以外の姿は見当たらない。

クウガのすぐ傍の地面が焦げている事から、クウガがホルダーモドキを倒したと考えるのが自然に思える。

どうしてクウガがこの世界に居るのか気になるが、俺にはまずやらなければいけない事がある様だ。

シードに変身している俺を見たクウガが、警戒して戦う構えを取っているのである。

これまでに起こった流れから推測すると、あのグローイングフォームのクウガの正体は先程の男性である可能性が高い。

そうするとあの男性は、俺の知る五代雄介本人だと考えるのが妥当だ。

彼……五代さんは平成ライダーの中ではかなり珍しく、番組本編で警察等の力を借りる事はあっても、他の仮面ライダーと共闘する事無く、単身で戦い続けた存在なのである。

もしも考えている通り、目の前にいるクウガが、俺の知る五代さん本人であるのだとしたら、俺に限らず自分以外の仮面ライダーの姿を見たら、警戒してしまうと考えてもおかしく無いだろう。

だから俺が最初にしなければ行けない事は、警戒体勢で俺に対して

身構えているクウガをどうにかして落ち着かせて、自分が敵では無いと理解してもらうのが先決だ。

「あの……」

その為にはまず話をして説得してみるのが確実だと考えた俺が、警戒し続けるクウガに離し掛けようとしたその時である。

「み～つけた！」

俺とメカ犬、勿論クウガでもない、陽気な男の声が、俺の耳に届いた。

その声は俺とクウガを挟んだ位置の瓦礫の裏から聞こえて来る。

俺とクウガ、二人の仮面ライダーがその瓦礫に意識を向けると、瓦礫の裏側から十代後半と思われる青年が姿を現した。

青年は茶色に染まった短い髪を、ワックスか何かを付けて乱雑に固めたツンツンヘアーをしており、黒い白地のシャツの上に、黒のジャケットとを羽織り、下は同色のジーンズと靴という服装で、指や胸元にはシルバー製のアクセサリーを身に着けているという、一言で表すのであれば、自分のファッションに独特な拘りを持つ、最近の若者の様に見える姿だった。

だが、その見た目とは裏腹に、ホルダーモドキ達が破壊した商店街の瓦礫の中を、悠然と笑いながら、此方に向かって歩いて来る。

仮にこの青年が、逃げ遅れた一般人だとしてこの様な行動を取るだろうか？

それに先程、青年が瓦礫の裏から俺達の前に姿を現す直前に言った言葉……

何故か妙に引っ掛かる。

青年の動向を探ろうとする俺の視線に気付いたのか、青年は立ち止まり、俺を指差して口元に笑みを浮かべながら喋りだした。

「俺さ。あんたを知ってるぜ。仮面ライダーって言えば、この街じゃ有名だからな」

「……仮面ライダー？」

青年の言葉を聞き、クウガが俺を見ながら呟く。

「確か二人居る内の、あんたの名前はシードで良いんだよな？雑誌の特集記事に載ってたぜ」

青年が言う仮面ライダーは、恐らくシードである俺と、もう一人は今この場に居ない、長谷川さんが装着するＥＳシステム、Ｅ２の事を言っているのだろう。

「それとさ。あんたも……仮面ライダーって事で良いのか？」

俺からクウガへと視線を移した青年は、続けて世間話をするかの様にして質問をする。

仮面ライダーという言葉を初めて聞いたのであろうか。

クウガは、俺と青年を交互に見やりながら、若干の動揺を見せる。

「まあ……二人だろうが三人だろうが、やる事に変わりは無いから、別に良いんだけどさ……」

青年は俺とクウガをまるで値踏みする様に見ながら、質問の答えを待つ事無く自己完結させると、中心に野球ボール程大きさをした丸い窪みが存在する、黒いバックルを取り出して腹部に宛がう。

するとバックルの両脇から、白い光が青年の腹部を包む様に紐状に伸びて、ベルトへと変わってしまった。

更に青年はバックルの窪みと同程度の大きさをした、黄色い球体を取り出して胸元で握りこみながら叫ぶ。

「変身！」

叫びと共に、青年は黄色い球体をバックルの窪みへと嵌め込む。

『マスター！あの青年からホルダー反応だ！！！』

「なに！？」

「ぐっ！？」

メカ犬が叫んだ直後、青年の全身はベルトを中心に黄色い光に包み込まれた。

俺とクウガは突然放たれた眩い光に、ほんの数秒程ではあったが視界を奪われてしまう。

数秒後、光が晴れて、視界を取り戻した俺達が見た先に居たのは、先程までの茶髪の青年ではなく、一人の異形の戦士だった。

全身がブラウンを基調としたカラーリングに対して、上半身を覆う肩に丸みを帯びた銀のプロテクター。

頭部には顔よりも大きいと思われる燃え盛る炎を彷彿とさせる赤茶けた角飾りに、その下で楕円の複眼が二つ、ベルトに嵌め込まれた球体と同じ、黄色い光を放っている。

「仮面ライダー……なのか？」

俺は青年が姿を変えた、その異形を見て無意識に呟いてしまう。

俺が前世で見た原作にはいなかったが、その姿の特徴は、まさに仮面ライダーという名を冠する事を良しとしていたのである。

『マスター。奴はホルダーではない』

しかし俺の呟いた言葉に対して、メカ犬が否定の言葉を口にした。

そう言えば、メカ犬はあの茶髪の青年が変身する瞬間、ホルダー反応がすると叫んでいた事を思い出す。

「あれは仮面ライダーとは、違うのか？」

『うむ。奴は多少の差異はあるが、確かにホルダー反応を発している。マスターも奴と近い存在と、過去に二回は戦っている筈だぞ』

俺はメカ犬の言葉をヒントに、過去の戦いを思い出す。

思考を巡らせた果てに、俺は過去に戦った中で、その存在は確かに居た事を思い出した。

「……もしかして、デビルとサイファーか？」

『うむ。奴からは通常のホルダー反応に加えて、過去にワタシ達が戦った彼等のエネルギー反応を蓄積した様な、混ざり気を感じる』

俺の行き着いた答えに、メカ犬が頷き肯定しながら、説明をした。

「それじゃあ、早速お仕事開始と行きますかね！」

青年が変身した異形の戦士は、肩を揺らしながらそう言うと、一気に俺の方向に走り出しで拳を繰り出してきた。

『マスター！！！』

「ふん！？」

俺はメカ犬の声に反応して、考えるよりも早く動いた。

手にしたスピードロッドを、眼前に迫る拳の間に、防御用の盾として割り込ませる。

「うわっ！？」

その拳は目論見通り、スピードロッドで防ぐ事で、直撃を免れる事に成功するのだが、その力は予想以上に強く、俺は相手の繰り出し

た拳による、単純な力のみで身体ごと後ろに吹き飛ばされてしまう。

俺が後ろに吹き飛ばされるのを一瞥した後、異形の戦士はすぐさま踵を返して、今度はクウガへと襲い掛かる。

「あんたは俺の仕事に含まれてなかったが、特別サービスだ！」

「ぐっ！？」

叫びと共に、俺に繰り出されたのと同じ、驚異的な攻撃力を秘めた拳が、クウガを襲うが、その攻撃をクウガは最小限の動きで裁き切る。

単純な動きだけを見れば、異形の戦士とクウガでは、前者の力任せな戦い方に対して、後者の方が戦いを経験した者と分かる洗練された無駄の少ない動きを見せているのだが、徐々にクウガの方が、防戦一方となって行く。

俺は漸く拳の反動が弱まった事により、足が地に着く。

「メカ犬！あの白い方の仮面ライダーを助けるぞ！！！」

『了解した！』

更にスピードロッドを地面に押し付ける事によって何とか、勢いを完全に相殺した俺は、メカ犬にクウガの助っ人に行く事を明言しながら、開いてしまった距離を、スピードフォルムの素早さを駆使して、一気に詰める。

しかし俺がクウガの助けに入るには、少しだけ遅かった。

「これでフェニッシュだあああ！！！」

異形の戦士の叫びと共に繰り出された蹴りが、クウガの防御の上から容赦無く叩き込まれてしまったのだ。

「ぐうあああ！？」

防御の上からではあったが、本来の力を半分も発揮出来ない、グローイングフォームでは、その攻撃を受け切る事が出来ず、吹き飛ばされてしまい、クウガは瓦礫となった建物の壁にぶつかり、地面に崩れ落ちるのと同時に、変身が解けて、五代さんの姿へと戻ってしまった。

「大丈夫ですか！？」

俺はすぐに五代さんに駆け寄り、その安否を確認する。

『マスター。この男性は、強い衝撃を後頭部に受けて気絶している様だが、命に別状は無いぞ』

「そうか……良かった……本当に」

メカ犬の言葉に俺は心から安堵した。

だが命に別状は無いとは言っても、頭に強い衝撃を受けているというのならば、少しでも早く、病院に運んで診てもらった方が良い事には変わり無い。

出来ればすぐにでも、この場を離れたいが、それは目の前に居るあ

の存在が許しはしないだろう。

『お前は一体、何者だ!?』

気絶した五代さんを、戦いに巻き込まれない様に瓦礫の影に、置いてから立ち上がると、メカ犬が目の前に立ち塞がる異形の戦士へと問い掛けた。

「ははは。そう言えば自己紹介もしてなかったか？」

メカ犬の質問に対して、異形の戦士は思い出した様に笑い出してから、暫くして若干笑いを抑えながら、揚々と答え始める。

「俺は仮面ライダーを倒す為に雇われたのさ。そうだな……仮面ライダーハンターとでも呼んでくれ」

俺に自身の名を告げた異形の戦士、ハンターは自己紹介はここまでとばかりに、再びその拳を振るう為に、猛然と俺に向かって駆け出した。

## １００万ＰＶ突破記念作品　仮面ライダーシード＆仮面ライダークウガ　繋がる世界

今回に続き、次回もバトルと……な予定となっております。

## １００万ＰＶ突破記念作品　仮面ライダーシード＆仮面ライダークウガ　繋がる世界

少し今回は進みが遅くて申し訳無いですが、これからも頑張って行こうと思います。

それでは今回も楽しんでいただけたら幸いです。

『ベーシックフォルム』

俺はハンターの拳をスピードロッドを斜めに構えて、先端から滑らせる様にして、その衝撃を逃がしてから、そのままロッドを手放して、すぐさまベルトの右側をスライドさせて、黒いボタンを押す事で、ライトグリーンのボディーがメタルブラックに染め上がり、シードの基本形態であるベーシックフォルムへと変わる。

「ははは！それが噂のフォルムチェンジって奴かあ！！！」

フォルムチェンジを見たハンターは、陽気な笑い声を上げながらも、力任せにその拳を振るい続ける。

『マスター。この場所では……』

「分かってる！」

ハンターの攻撃を受けきるには、スピードフォルムでは力不足と判断して、肉弾戦に適したベーシックフォルムにフォルムチェンジした俺は、気絶した五代さんに危害が及ばない様にメカ犬と算段を立てて、ハンターの攻撃を捌きながら、少しずつこの場から移動させる。

「さっきの白い奴といい、ライダーってのはちょこまかと、鬱陶しい奴ばかりだな！」

ホルダーの連続攻撃を回避し続ける俺にイラついたのか、ハンター

が吼える。

直接戦ってみて分かったのだが、ハンターは戦い慣れていない。

力と速さは、今まで戦ってきた相手の中でも、かなりの上位に位置する事は間違い無いのだが、攻撃が単調で先の動きが容易に予測出来る。

恐らくは手に入れた力を、制御しきれていないのだろう。

その証拠に倒されたとは言え、本来の力を出しきれていない筈の、グローイングフォームのクウガでさえ、全ての攻撃を防いでいた。

止めの一撃もマイティーフォームか、タイタンフォームになっていれば、完全に防御しきる事が出来ていた筈だ。

どういった経緯で、茶髪の青年がハンターの力を手に入れたのかは知らないが、悪戯に戦いを長引かせて、ハンターが自分の戦闘スタイルを確立してきたら、厄介な相手になる事は間違いない。

確実に倒すのならば、まだ戦い慣れていない今が、最大のチャンスだ。

「メカ犬。ハンターからもホルダー反応がしていたって事は、俺が倒せば元の姿に戻せるんだよな？」

『うむ。奴の力はシステムに差異は見られるが、ホルダーと同質のシステムと見て間違い無い。ホルダーと同様に倒せば良い』

「ＯＫ！」

『メルト達が作った試作品という可能性もある。暴走には注意しろマスター！』

十分に場所を移動した事を確認してから、ハンターの攻撃を捌きつつ、俺はメカ犬に質問をしていく。

「ごちゃごちゃと五月蝿いんだよ！」

ハンターは攻撃を避け続けながら、目の前でメカ犬と会話を交わす俺に痺れを切らせたのか、叫びながら両手をベルトの中央に嵌め込まれた黄色い球体に翳すと、淡い光がハンターの両手を包み、その光は大振りで無骨な二本の銀色のナイフへと生成された。

二本のナイフを逆手に構えたハンターは、容赦無くナイフの切先を俺に向ける。

「刃物は危ないだろ！？」

先程の拳と同様に、連続で放たれるナイフの斬撃を回避しながら、俺は反撃の狼煙を上げる為に、ベルトの右側をスライドさせて、黄色いボタンを押す。

『ベーシックファントム』

音声が流れると同時に、ベルトから大量の光が発生して、本来赤い複眼が、灰色となっているシードの分身体が生成される。

俺はハンターの右腕を、そしてメカ犬が遠隔操作する分身体が左腕を掴む事で、ナイフによる攻撃を含め、かなりの動きを制限させる

事に成功した。

「ぐはっ！？」

その状態から俺と分身体が放った膝蹴りが、ハンターの腹部に決まり、苦悶の声を上げる。

「このまま押し切るぞ！」

『うむ！』

膝蹴りの衝撃により、後ろへと後退したハンターに対して、俺とメカ犬は、左右から畳み掛ける様に同時攻撃を加えていく。

「この！」

ハンターも時折ナイフで反撃を試みては来るが、俺とメカ犬が操る分身体を同時に相手にする事で、狙いが定まっていないのか、攻撃が今まで以上に単調となって来たので、更に避けやすくなった。

「『たあああ！！！』」

俺とメカ犬は、ハンターのナイフから繰り出される斬撃を掻い潜り、懐に飛び込み、同時に蹴り込み吹き飛ばす。

『行くぞマスター！』

「ああ！」

吹き飛ばされたハンターを見ながら、俺はメカ犬の言葉に頷きつつ、

ベルトからタッチノート引き抜こうとするとその直前に、突如として俺達とハンターの間に爆発音が響くと同時に、大量の砂埃が空中を舞う。

『気を付けろマスター！奴と同系統のホルダー反応が二つ付近に現れた！』

砂埃で視界が遮られる中で、メカ犬の声が風に乗って俺の耳へと届く。

時間にして一分も掛からない内に、砂埃は風に乗り目の前の視界がクリアになる。

「あれは！？」

俺は視界が開けた直後、目の前に映った光景に驚愕した。

「ちょっと大丈夫なの？雄太（ゆうた）？」

「一人で……突っ走るからそうなる……」

砂埃が晴れた事で俺が見た光景は、ハンターの両脇に悠然と佇む二人の仮面ライダーの姿だった。

その姿は殆どハンターと同じブラウンを基調とした身体に、上半身を覆う銀のプロテクターという容姿であり、違いは頭部の角飾りの形状が若干異なる事と、ベルトに嵌め込まれた球体と複眼の色が、其々に赤と青だといったところだろうか。

赤い複眼のライダーは、その声からして、若い女性なのだろう。

俺とメカ犬の攻撃のダメージにより、ふらついているハンターに肩を貸して支えていた。

その隣では、声の調子が平坦で、年齢までは良く分からなかったが、男性とだけは分かる、青い複眼のライダーが、何か筒状の物体を手にして俺とメカ犬の動きを警戒している素振りを見せてくる。

「……余計な事しやがって！」

「何を言ってるんだか！あんたボロボロにやられてるじゃないのよ！」

「……ぐっ！」

見た感じが明らかにハンターと同系統の二人のライダーは、ハンターを助けに来た増援なのだろう。

ハンターとそれを助け起こしている、女性ライダーの会話を聞く限り、間違い無いと断言出来る。

「メカ犬。あの二人もやっぱり……」

『うむ。先程も言った通り、奴らからもハンターと同じ、ホルダー反応している』

俺とメカ犬は警戒を強めながら、突如として現れた二人のライダーを見据えていると、新たな動きが発生する。

「兎に角ここは、一旦引くわよ」

「はあ!?何言ってんだよ!?俺はまだ戦えるぜ!」

「……人数では此方が勝っているけど……向こうは確実に、僕達より戦い慣れしている。……それに君は弱ってるし、これだけ派手に暴れていたら、何時もう一人が現れてもおかしくない。戦うなら、少なくても此方の戦力を整えてからの方が良いよ……」

「ほら、大地(だいち)もそう言ってるんだから、大人しく言う事を聞きなさいよね。怪我人君?」

「チッ!分かったよ……」

どうやらハンターを含め、三人のライダーはこの場から退散する算段をつけているらしい。

『逃がすと後々厄介だぞマスター』

メカ犬に言われるまでも無く、そんな事は分かりきっている。

「逃がすか!」

俺は分身体のメカ犬と共に、三人のライダー目掛けて駆け出した。

「……させない……」

しかし俺とメカ犬が、三人の前に辿り着くよりも先に、青い複眼のライダーが呟くのと同時に、手にしていた筒状の物体を俺とメカ犬が操る分身体の足元に放り投げてきた。

咄嗟にバックステップで、後ろに下がるのとほぼ同時に地面に落下した筒状の物体は、一瞬だけ膨張したと思うと、そのまま大きな爆発を引き起こして、周囲が爆煙に包まれる。

『これは先程と同じ爆発か！？』

再び視界を奪われ何も見えない中で、俺の耳にメカ犬の声だけが届く。

メカ犬が言った通り、この爆発はさっきの砂埃を巻き上げたものと同じ様だ。

「今日はこれ位にしといてやるけどな！次に会った時が、お前の最後だぜ！！！」

爆煙の中で、徐々に遠ざかって行くハンターの声が聞こえてから暫くすると、爆煙は風に流され再び俺に視界が帰ってきたので、周囲を見渡したが、既にハンターと、新たに現れた二人のライダーの姿は、影も形も無くなっていた。

『反応も完全に見失った。残念だが追跡も不可能だな……』

「逃げられたのは痛いけど、あいつ等の目的は俺やＥ２と戦う事みたいだし、その内に向こうからやって来るだろ？」

探し出そうにも、何の手掛かりも無い今は、悔しいが出来る手段は、今の現状では少ないと言わざるおえない。

突然出てきたハンターを名乗る仮面ライダーとその仲間に、この商店街で暴れながら、不可思議な行動を取っていたホルダーモドキの

集団……

俺達の知らない場所で、何かが起こっているのは間違い無いが、それを調べるよりも先に、今は先にやらなければいけない事がある。

「メカ犬。急いで五代さんを病院に運ぶぞ！」

『マスターはその男性と知り合いなのか？』

「悪いけどその話は、また後でな」

瓦礫の影で未だ気絶している五代さんを担ぎ上げた俺は、メカ犬からの質問を後回しにしながら、海鳴大学病院へと急いだ。

「オーバー。例のものは見つかったのか？」

「まだ駄目みたいだね。取り敢えずめぼしい場所に探しに行かせて見たんだけど、見つける前に、皆やられちゃったみたい」

一筋の光すら届かない、暗闇と静けさのみが支配する、今は使われていない海鳴市の地下深い、旧地下水道の開けた空間で、異形の怪人である、オーバーとメルトの会話だけが虚しく響き渡っていた。

「私が新しく開発した、試作のシステムを持たせた三人もか？」

「ああ、あの子達は大丈夫だったみたいだよ。一人だけ先走っちゃって、怪我しちゃったみたいだけどね」

メルトの質問に、オーバーは手をわざとらしく振って、手を傷めた様なリアクションを取りながら、オーバーに説明する。

「既にあれから一週間が過ぎている。儀式までにあと三日しか残されていないからな……」

「それは分かってるよ。扉に封じられた闇を解き放つ為の【鍵】と【巫女】。その両方がこの海鳴市にあるって言うんでしょ？」

「そうだ。私達は既に器と鍵を手にしている筈だったが、実際に今、私達の手の中にあるのは器のみだ。急がなくてはならない」

「本当に良いタイミングで、仮面ライダーが邪魔してくれちゃったからねえ……」

「だからこそ、今回はその邪魔を排除して、計画を先に進める為に、試作段階の新システムを、動員したのだからな。存分に役に立って貰わなければならん」

「捨て駒だとしても？」

何時も通りの抑揚の無い喋りで、淡々と語るメルトに対して、今度はオーバーが、静かに問い質した。

「捨て駒だからこそ、それなりの働きをして貰わなければ困る」

「人使いが荒いんだよメルトは！まあ、いざとなったら僕も出て行くよ。そん時はメルトに儀式の準備を全部お願いしちゃうからね？」

「……好きにしろ」

メルトとは逆に、無邪気な声で質問の答えに対して返答するオーバーだったが、その声色には何処か、メルト以上の寒気すら感じさせる。

「あ！そう言えば、もう一つ報告しとかなきゃ行けない事があったんだよ」

「……何だ？」

「帰ってきたあの三人の内の、先走って怪我した子が言ってたんだけどね。シードとＥ２以外にも、もう一人見た事の無い仮面ライダーが居たらしいんだよ」

「……そうか」

オーバーの報告に、数秒だけ間を置いたメルトは、一言だけそう呟いた。

「あれ？以外とそっけない反応だね。もう少し驚いてくれると思ったんだけど？」

事前に予想していた反応が帰って来なかったのが面白く無かったのか、オーバーは少しだけ気分を害した様な仕草を見せる。

「私達がこれからしようとしている事を考慮に入れれば、それは想定の範囲内だからな。それに……」

「それに？」

メルトは淡々と語りながら後ろを向き、それに釣られてオーバーも後ろを振り向く。

「究極の闇と凄まじき闇は、対を成す存在だからな……」

光すら届かない暗闇の更にその奥。

二人の異形の瞳が見詰める更なる深い闇を纏う空間のその先から、それを心の底から渇望するかの様に、声が聞こえて来た。

「……クウガ」

その言葉は声を発した本人に残された、本能と理性が生み出した唯一の言葉……

「……クウガ……クウガ……クウガ……クウガ……クウガ……クウガ……クウガ……クウガ……クウガ……クウガ……クウガ……クウガ……クウガ……クウガ……クウガ……クウガ……クウガ……クウガ……クウガ……クウガ……クウガ……クウガ……クウガ……クウガ……クウガ……クウガ……クウガ……クウガ……クウガ……クウガ……クウガ……クウガ……クウガ……クウガ……クウガ……クウガ……クウガ……クウガ……クウガ……クウガ……」

最初に発したその言葉を皮切りに、まるで念仏の様にその言葉だけを呟き続け……

【殺す】

最後に何処の世界の言語にも当て嵌まらない言語で、その意味となる言葉を静かに呟いた。

## １００万ＰＶ突破記念作品　仮面ライダーシード＆仮面ライダークウガ　繋がる

次回は物語の中心人物達が……という予定となっております。

それと宣伝となってしまいますが、こんな状況にも関わらず、新しくオリジナルで連載を一本増やしましたので、不定期更新とはなりますが、宜しかったら箸休めに読んでいただけたらなあと思います。

もう一本の連載も、そろそろ最終回を書かないとです……

## １００万ＰＶ突破記念作品　仮面ライダーシード＆仮面ライダークウガ　繋がる

更新が思ったよりも遅れてしまい、申し訳ありませんでした。

それでは今回も楽しんでいただけたら幸いです。

茶髪が目立つ、一見すると不良に見られがちな高校一年生、沢渡雄太。

姉御肌で勝気な女子高生、桐崎沙耶。

青く細いフレームの眼鏡が、知的なイメージを漂わせる二人の同級生、黒谷大地。

二人の男子高校生と一人の女子高校生は海鳴市内の県立高校に通うクラスメートであり、何処にでも居る様な、一般的な学生だった。

しかしそんな彼らの日常は、高校生になって初めて迎える、冬休みに終わりを告げる。

それは異形の怪人達との邂逅から始まった……

藍色の怪人と灰色の怪人は、其々に自身の事をオーバーとメルトと名乗り、彼らにこう告げたのである。

【私達に協力してくれるのならば、お前達の夢を叶えてやる】

その言葉は三人にとって、悪魔の囁きの様にも聞こえた。

しかしそれ以上にメルトが彼らに告げたその言葉は、絶大な魅力を放っていたのである。

オーバーとメルトが、最近話題になっているホルダーという未知の

怪物と、何かしらの関係性がある事を、彼らも雑誌を見て多少は一つの情報として知っていたが、彼らにはそれを理解した上で、協力したいと思える理由があった。

そして三人は悩み抜いた上で、協力する事を承諾したのである。

目の前に居る怪人達に協力するという事が何を意味するのか、薄々と感じ取っていた。

様々な人達に対して、多大な迷惑を掛ける事になるのは間違い無い。

それは今まで、一介の学生だったに過ぎない自分達が、悪事に加担するという事である。

だが三人は、それを承知した。

雄太、沙耶、大地の三人は日常を生きながら、非日常に憧れを抱いていたのだ。

図らずもその非日常が、自分達を招き入れようとしている。

三人は退屈な日常を捨て去り、特別な力を手に入れた……

「畜生！」

ホルダーモドキ達が暴れ周った事で、瓦礫の山と化した海鳴商店街から離れた住宅街の裏路地で、茶髪の青年、雄太は苛立ちを隠そうともせずに、道端に落ちていた小石を蹴り上げた。

「ちょっとは落ち着きなさいよ雄太」

その様子を見て、肩まで伸びた自身の黒髪の端を指先で弄りながら、少し吊り目気味な女性、沙耶が宥める様に声を掛ける。

「俺の方が強い筈なんだぜ！？あの野郎、突然二人に増えやがるし、反則だっての！一対一で戦ってれば、今度は絶対に俺が勝つ！！！」

「どっちが強いだとかさ……倒せればそれで良いじゃないのよ」

「五月蝿いんだよ沙耶はさっきから！」

「はいはい……分かったわよ」

落ち着かせようと発した言葉が、逆効果となってしまい、更に暑苦しくなった雄太に対して、沙耶はまともに会話をする事を諦めて、軽く受け流す方針へと変えた。

「……お待たせ」

雄太と沙耶しか居なかった筈の裏路地に第三の声が静かに響く。

その声の主は二人が居る裏路地の曲り角から、声と共にやって来た。

二人と同年代と思われる青年は、短く切り揃えられた黒髪と、ブルーフレームの薄型眼鏡が、知的な印象を与えている。

「あら、意外と早かったわね大地」

沙耶はそう言って、曲り角から現れた青年、大地を迎え入れた。

「……まだ怒ってたの？」

大地はいまだに怒鳴り散らしている雄太を見ながら、沙耶に問い掛ける。

「ええ、そうなのよ。さっきからずっとあの調子で、本当に嫌になっちゃうわ」

ゲンナリとしながら、沙耶は雄太に視線を合わせつつ、大地の質問に答えた。

「……しょうがないね」

一度小さな溜息を吐いてから、大地はそう言うと、怒りを露にし続ける雄太に声を掛けた。

「……雄太君。君の怒る気持ちも分かるけど、少し僕の話も聞いてくれるかな」

決して大きな声ではなかったが、大地の声は良く通る低い声で、シードに対しての怒りで、暴走し続けている雄太の耳にも、確実に届いた。

「ああ！？何だよ大地」

雄太は自身の怒りを隠そうともせず、仲間である筈の大地に対しても、その苛立ちを容赦無く、言葉にしてぶつけて見せる。

「……大事な話があるから、ちゃんと聞いてほしいんだ。沙耶さんも良いね？」

雄太を宥めながら大地は、沙耶にもそう言って、視線を向ける。

「オーバーさんに報告しに行った時に、何かあったの？」

やけに神妙な面持ちの大地に対して、今度は沙耶が問い掛ける。

「……だったら、早く話せよな」

先程からずっと苛立っていた雄太も、多少は落ち着いたのか、路地裏の壁を背もたれにしながら、次の言葉を促す様に大地に話し掛けた。

「……うん。それじゃあ話すよ」

雄太と沙耶の両名が、自分の話を聞く準備を整えた事を確認した大地は、ゆっくりと話し始める。

「……今の任務を引き続き継続しながら、追加の任務も入ったんだよ」

大地は一拍の間を置いて、雄太と沙耶に話し始めた。

「う……ん……ここは？」

「あ！目が覚めたんですね！？」

掠れた声を僅かに上げながら、徐々に目を覚まして瞼を開いていく五代さんに、傍らに居た俺は声を掛ける。

「君は……あの時の……」

「まだ寝ててください。病院の先生が言うには、大丈夫らしいですけど、頭を強くぶつけてるんですから」

俺はベットから立ち上がろうする五代さんを制止して、再びベットに横になる様に言った。

「……君に聞きたいんだけど、ここが何処か分かるかな？それに君は？」

五代さんは寝ぼけているのか、ベットの上から周囲を見渡しつつ、俺に質問をして来る。

商店街での戦いの後、俺は気絶した五代さんを急いで病院へと運んだ。

ここは海鳴大学病院の一室である。

五代さんが気絶してから、まだ二時間も経っていない内に目覚める辺り、流石としか言い様が無い。

暫くして五代さんが完全に目を覚ましたのを見計らい、俺と五代さんは、お互いに簡単な自己紹介を済ませた。

その自己紹介を聞いて、彼は俺の知る五代さん本人であり、しかも驚くべきことに、今現在、俺の目の前に居る五代さんは前世の世界で放映していたクウガ本編が、最終回を迎えた世界の一年後からやってきたらしい事が分かったのである。

「えっと……純が気絶した俺をここに運んでくれたのかな？」

先程の自己紹介で内心、物凄く驚いている俺に対して、五代さんが、話題を新たな話題を振ってくる。

「は、はい。でも商店街では、俺も助けてもらった側ですから、お互い様という事で……」

「そっか。……ところでさ。純が気絶してた俺を見つけてくれたって事はもしかして……全部見てた？」

五代さんは何処か聞き辛そうに、主題を抜いた状態でぼかしながら、質問を投げかけてきた。

その意図は、何となくだが、大体の予想が着く。

「もしかして、変身してホルダーモドキと戦っていた事ですか？」

「ああ、やっぱり見てたんだ……それにしてはリアクションが薄い

みたいだけれど……」

どうやら俺があの戦いの場にいた筈なのに、五代さんに対して普通に接していたので、クウガになったのを見ていたのかどうか聞きたかった様である。

「まあ、この街には、ホルダーや仮面ライダーが居ますからね」

「そう。それ！そのホルダーとか、仮面ライダーってどういった奴らなのか、教えてもらっても良いかな？」

咄嗟に上手い返しが思い浮かばず、当たり障りの無い言い回しを心掛けたつもりだったのだが、五代さんは俺の答えに予想外の食い付きを見せた。

「えっとですね……」

其処で取り敢えず、俺がこの街の仮面ライダーの一人であるシードだという事を説明しようとしたその時、病室の扉から、軽くノックする音が聞こえてきた。

「失礼するわね」

そう言って入って来たのは、白衣を纏った、この病院の医師の一人であり俺の良く知る知り合いでもあった。

「「石田先生……え？」」

俺と五代さんは同時に、病室へと入って来た人物の名前を呼んだ後に、またしても同時に視線を合わせて言葉を重ねてしまった。

「空君に続いて、純君が気絶した五代君を運んで来た時には、流石に驚いたわよ」

石田先生は、俺と五代さんに微笑みながら言うが、俺としては二人が知り合いだったという方が驚きである。

だがその驚きはこれから起こる出来事への、ほんの序章に過ぎなかったのだ。

「五代さん。病院に運び込まれたって連絡があったから急いで来たんやけど、大丈夫なん？」

石田先生から少し送れて、もう一人この病室に人が訪れたのだが、その人物も俺が良く知る知り合いの一人だったのである。

「「はやてちゃん！」」

はやてちゃんの登場により、またしても俺と五代さんの声は、再び見事なシンクロをした。

「仮面ライダーの事なら、この海鳴美少女探偵団である私に任したら良いんよ」

石田先生が、次の診察があるからと言って、病室を出てからすぐの出来事である。

先程の話題に戻った直後、はやてちゃんが、自信満々に告げた。

本当ならば五代さんには、俺が先程の仮面ライダーという事も含めて、色々と説明したかったのだが、はやてちゃんが居たのでは、それも出来そうに無い。

「うん。その、仮面ライダーって何なのかなと思ってさ」

「僕も気になるな～」

はやてちゃんの言葉に、五代さんと空が……

「……いつの間に居たの？空」

俺はいつの間にか五代さんの隣で、当たり前の様に、会話に参加していたアルビノの青年、空に声を掛けた。

「うん。石田先生と入れ替わりに入って来たんだけど、何だか面白そうな事になってたみたいだから、大人しく見てたんだよね～」

どうやら空は、俺達が驚いているドサクサに紛れて、石田先生と入れ替わりにして、この病室に侵入した様だが、全く気配を感じなか

った。

「僕は空って言うんだ。宜しくね。はやてちゃん」

困惑している俺を他所にして、空は笑顔を振り撒きながら、はやてちゃんと握手している。

「もしかして、なのはちゃん達が言ってた。純君の新しい友達ってこの人なん？」

「……まあね」

空に手を掴まれて、少し激しいシェイクハンドをされながら聞いてきたはやてちゃんに、俺は肯定の言葉を送った。

「えっと……五代さん……で良いんだよね。宜しく～」

はやてちゃんの次は、標的を五代さんに変えたらしく、空は、五代さんに右手を差し出す。

「ああ、宜しく！」

五代さんも、それに笑顔で答えて、差し出された空の右手を握ったのだが、其処で僅かな変化が起こる。

「「「！？」」」

ほんの一瞬の出来事だったのだが、五代さんと空が握手を交わした次の瞬間に、五代さんの腹部が僅かに光を発したのだ。

「どうしたんや？皆して鳩が豆鉄砲を喰らったみたいな顔して？」

この病室の中で、はやてちゃんだけが、空の背中が壁となったせいで、五代さんの腹部が光った瞬間を見逃したのだろう。

俺達の様子を見て、正直な意見を口にする。

「……ああ！そうだ！そう言えば仮面ライダーの話をまだ何も聞いて無かったんだっけ」

この空気の中で、一番最初に発言をしたのは、五代さんだった。

「そ、そうだね！僕も知りたいな！」

続け様に空が、畳み掛ける。

「はやてちゃん。二人もそう言ってるし、説明してあげたら？」

遅ればせながら、俺も二人に続いて、はやてちゃんに説明を促す。

「な、何やの！？皆して行き成り……」

俺達の多少強引とも思える話題の振り方に、はやてちゃんは若干の戸惑いを見せながらも、やはり話したいという気持ちが大きかったのか、俺達の態度への追求は程々にして、仮面ライダーへの説明を開始し始めた。

それから暫く、はやてちゃんによる、海鳴病院主催の第一回仮面ライダー講座が終了する頃には、病院の面会時間が終わる時刻になろうとしていた。

予め家に電話をして、事情を説明しておいたので、大丈夫だとは思うが、あまり遅くなるのも考えものだろう。

五代さんも意識が回復したのならば、そのまま帰っても良いと言われていたので、空以外は帰り支度を開始した。

そしてはやてちゃんと、五代さんが病室を出るのに続いて、俺と空も病室を出ようとしたその時……

「純……明日も来てくれ。大事な話がある。出来れば五代さんも連れて来て」

先に前を行く二人に聞こえない様に、俺の耳元で言った空に、俺が振り向くと、笑顔で頼んだよとだけ告げて、そのまま自分の病室へと戻っていってしまった。

大切な話とは、十中八九、先程の五代さんの腹部から発した光に対しての事で間違い無いだろう。

一週間前に、オーバー達が何かしらの実験を行っていた現場で倒れていた事から、空自身に、何か特別な事情があるのではないかと思ってはいたのだが、この一連の流れを経てその考えは疑惑から確信に変わった。

「空……君は何者なんだ？」

俺は既に空が居なくなった病院の廊下を見詰めながら、消え入りそうな声で心の内に燻っている疑問を呟いた。

## １００万ＰＶ突破記念作品　仮面ライダーシード＆仮面ライダークウガ　繋がる世界

次回からは本格的にライダーバトル？もしくは……な予定となっております。

# １００万ＰＶ突破記念作品　仮面ライダーシード＆仮面ライダークウガ　繋がる

更新がかなり遅れてしまって申し訳ありませんでした。

書いていた続きのデータが全て消えてしまった為に……しばらく執筆する気力が薄くなっていましたが、ようやく復活出来ました。

それでは遅くなりましたが、今回も楽しんでいただけたら幸いです。

「それにしても五代さんの怪我が、たいした事なかったみたいで、ほんまに安心したわ」

「何か心配掛けちゃったみたいで、ごめんね。はやてちゃん」

海鳴病院からの帰り道。

街灯が照らす夜道を、五代に車椅子を押して貰いながら、はやてが朗らかに言う。

それに対して、五代もはやてに笑顔で返事を返す。

しかし五代は、その笑顔の裏で、幾つもの懸念を抱いていた。

夕方の海鳴商店街に現れた、以前戦った未確認生命体とは別の、ホルダーという怪物の存在。

病院ではやてから聞いた話によると、更にに加えて、そのホルダーを倒すというこの街を守る仮面ライダーが居るというのだ。

ただ五代は其処で疑問を抱く。

クウガに変身した五代に、襲い掛かってきた謎の人物。

彼もまた自身を仮面ライダーと名乗っていた事についてだ。

病院で聞いた、はやてと純の話を統合すると、その直前に会った緑

の奴が話しに出てきた仮面ライダーだという事は、五代にも理解出来たのだが、五代に襲い掛かって来た仮面ライダーの姿は、はやてが話してくれたもう一人居るという仮面ライダーの姿とは随分違っていた。

その事を五代ははやてに聞いてみたのだが、答えは当然ながら知らないと帰ってきたのは言うまでもない。

その答えにより、五代はこの街に仮面ライダーを名乗る人物が少なくとも三人は存在する事を知った訳だが、明らかにその内の一人は、はやてが言う様な平和の為に戦っているとは言い難い存在だという事を確信するに至った。

この街に出没するホルダー及び、仮面ライダーという存在に、大きな関心を抱いた五代ではあったが、考えさせられる事象はそれだけでは終わらない。

病院で空という白髪の青年と握手を交わした際に、自身の体内に存在する古代のベルト、アークルに嵌め込まれた霊石アマダムが強い光を放ったこと。

その光はほんの一瞬で収まったが、その光が収まった後も、アマダムに急激な変化が起こり続けている事を、他の誰でもない五代自身が自覚していた。

その証拠に、意識を向ける事無く、腹部の中心が熱くなるのを、五代は確かに感じ続けている。

はやてはその瞬間を目撃していないので、変に心配させたくもないという思いから、五代はこの事を積極的に話そうとは当然思わない。

直接的な原因である空ならば、何かを知っているかもしれないと五代は考えたが、ある意味それ以上に分からないと感じたのは純の存在だった。

空と握手をした瞬間にアマダムが発光したのを、純も目撃した筈だし、その光景を驚愕とも言える表情でみていたのは確かなのだが、それを騒ぎ立てるような事を一切しなかったのである。

そのおかげで、はやてに余計な心配をさせる事が無くて済んだのは確かなのだが、はやてと同じ年だという、一人の少年がどうして咄嗟に其処までの気遣いが出来たのだろうか。

早熟な子供だと言ってしまえば、それまでの話かもしれないが、五代がそう考えるにはどうしても抵抗を覚えてしまう事柄が病院から出る際に起こっていた。

病院を出た帰り際に、純に呼び止められた五代は、はやてに聞こえない様にする為なのか、小声で明日の夕方にもう一度、病院に一人で来てくださいと言われたのである。

そう言った純の瞳には、強い意志が込められている事を、五代は感じ取った。

はやてがその場に居た事もあり、五代は事情を聞くこと無く、頷くだけに留めたが、アマダムを発光させた空と同様に、純という少年が五代を取り巻くこの現状に対して、何かしらの答えを持っている特別な存在なのではないかと考えさせられるには、充分過ぎる要因と言えた。

どういった経緯があるにせよ、五代は空と純、両名に詳しい話を聞く必要があるということだけは、理解するに至った。

そんな事を考えながら五代が車椅子を押して、八神宅を目指して歩いていると、反対側の道から、コツコツというアスファルトを叩く軽い靴音と共に一人の人影が見えてきたのである。

夜とはいえども、まだ決して真夜中という時間帯ではないので、人が歩いていたとしても、おかしい事は無いだろう。

道を歩いていれば、どの様な時間帯でも、人とすれ違う可能性は存在する。

しかしそのすれ違うと思われていた人物が目の前で立ち止まり、値踏みする様な視線で見詰めてくる可能性はどれだけあるというだろうか。

「ふ～ん。あなたが雄太の言ってた白いライダーなのかしら?」

十代後半に見える赤を基調としたカジュアルなパーカーを着た、吊り目がちな女性は、五代とはやての進行方向を塞ぐかのようにして立ち止まると、五代を一瞥した後に、その視線をはやてへと向ける。

「車椅子の女の子……間違い無いみたいね」

訝しげに女性を見る五代とはやてを他所に、女性は一人納得して、唇の両端を上にあげて笑顔を形成する。

その光景を、理由も分からないまま見ていた五代だったが、女性がパーカーのポケットからあるものを取り出した事により、一気に緊

張感が増していく。

それはクウガとシード、両名の間に突如として現れた、茶髪の青年が持っていた黄色い玉と同形の赤い玉に、まったく同じタイプの黒いバックルだったからである。

「それは！？」

五代は咄嗟にはやての前に移動して、いつでも自身の身体を盾に出来る様にしながら身構えた。

「ふふ……良いわね……その顔。ぞくぞくしちゃうわ」

女性はからかう様に言いながら黒いバックルを腹部に宛がうと、その形状が瞬時にベルトへと変わる。

「変……身」

妖艶とも言える笑みを浮かべながら女性が呟きながら、赤い玉を黒いベルトの中央に存在している窪みにはめ込むと、バックルを中心に赤い光が、女性の全身を包み込み、異形の戦士へとその姿を変えていく。

その姿は、五代が夕方に戦ったハンターと名乗るライダーと同様に、ブラウンを基調とした全体に、上半身を覆う若干にデザインの差がある丸みを帯びた銀のプロテクター。

大きな違いを挙げるとするならば、ベルトに嵌め込まれた赤い玉とその色と同色の二つの複眼に、炎を表している様に見える角飾りにおける、細部の形状といったところだろうか。

「な、なんなんや！？」

「他にも居たのか！？」

目の前でその女性、桐崎沙耶の変身する光景を目撃した五代とはやては、其々に驚愕の声を上げる。

「一応、私も自己紹介してあげるわね。私は……そうね。仮面ライダーガンナーって呼んでくれれば良いわよ」

五代とはやてが驚く姿を、意に介す事無く自己紹介を終えたガンナーは、そのままバックルの赤い玉へと両手を翳す。

すると淡い光がガンナーの両腕を包み込み、肘間接付近まで覆う長さの銀の細長い手甲が生成された。

しかもそれはただの手甲ではなく、手の付近にはグリップらしきものがあり、手甲の外側の部分には銃口と思われる穴が開いていたのである。

ガンナーはその手甲を無造作に、目の前の二人へと向けた。

「危ない！」

五代はその動作を見た直後に、車椅子に座っていたはやてを抱きかかえて、その場から飛び退く。

それは五代が数々の冒険と、一年にも及ぶ未確認生命体との戦いの中で培われてきた勘だった。

そしてその予感は残念なことに、見事的中したのである。

五代がはやてを抱きかかえて飛び退いてから、数秒と経たない間に、ガンナーの手甲の銃口から大量の小さく細かい赤い光弾が、マシンガンの様に連続で射出され、その場に残る事となったはやての車椅子を、文字通り蜂の巣へと変えてしまったのだ。

「今のは警告よ。私も手荒なことはしたくないの。だから怪我をしたくなかったら、大人しく言うことを聞いておいた方が身のためよ？」

ガンナーは再び両腕の手甲を、五代とはやてに向けながら言い放つ。

その動作には、次は外さないという明確な意思が窺える。

「……要求はなんだ？」

胸の中で恐怖に震えるはやてを抱えながら、五代はガンナーの動きに警戒しつつ、質問をぶつけた。

「ふふ……簡単なことよ。渡してくれれば良いだけの事なんだから」

「渡す？何を渡せって言うんだ？」

その問いに対してガンナーは、緩やかな動きで、人差し指を、五代の胸元に、正確に表すのであれば、五代の胸元で抱きかかえられている人物へと向けられる。

「え！？わ、私？なんでや！？」

それに驚いたのは、他の誰でもない。

五代に抱きかかえられている少女、はやてだった。

「どうしてはやてちゃんを!?」

突如として現れたガンナーに、自分の事が目的だと、身に覚えの無い要求を聞かされて驚くはやてを抱きかかえた状態で五代が当然の疑問をぶつける。

「さあ?私は頼まれただけだもの。だから目的を聞かれたところで答えようも無いし、その女の子をどうするかなんて、興味も無いわ」

ガンナーは興味無さげに、肩を軽くあげながら五代の質問に答えた。

「……なら、君はどうしてこんな事をするんだ?」

その答えが嘘かどうか、見極める事は出来ないが、本人が知らないと答えている以上、これ以上同じ質問をしても、話は平行線だと考えた五代は、質問の内容を変えた。

「そんなの決まってるじゃない……」

新たな五代の質問に対して、ガンナーは軽い口調で含み笑いをしながら言い放つ。

「楽しいからに決まってるでしょ?」

そう言い放ったガンナーはそう言い放つと、今度は含み笑いではな

く、楽しそうに大きな笑い声を上げる。

「楽しい……こんな事が……本当に楽しいって言うのか！？」

「ええ。楽しいわよ！こんなに面白い事が他にあるかしら？」

五代の二度に渡る質問に対して、ガンナーは心から楽しそうに答えを返す。

決して己とは相容れない考えを口にするその様子に、五代は憤る自らの感情を、自身の拳を強く握り締める事で示した。

「さあ。分かったなら、大人しくその女の子を此方に渡しなさい。そうすれば見逃してあげるから」

ガンナーは、話はここまでと言わんばかりに、再度はやてを引き渡す事を、五代へと要求する。

「はやてちゃんは、絶対に渡さない」

しかし五代はその要求に対して、首を横に振りながら即答した。

「あら？どうやら痛い目を見ないと、分からないみたいね？」

「……五代さん」

五代のの下した決断に、この場の当事者である、はやてとガンナーの両名が、其々の反応を示す。

「大丈夫」

自身の胸元で不安に怯える少女に、五代は笑顔で答える。

その笑顔は似ていない筈なのに、はやての脳裏に、良く知る一人の少の面影を垣間見せた。

「でも……」

しかしそれでも、はやての心から、全ての不安が拭い去られて訳ではない。

五代により、街道の隅に下ろされながら、はやてはもう一度、自らの不安を口にしようとする。

「俺が絶対に守る！だから大丈夫！」

はやてがその言葉を全て口にする前に、五代は笑顔でそう言うと、右手を握り親指を立てる仕草を見せた。

サムズアップ。

それは五代が幼少の頃に、恩師から教えを受けた特別な仕草。

その仕草が持つ数ある意味の中で、五代はこの仕草を、古代ローマで、満足できる、納得できる行動をした者にだけ与えられる仕草という意味合いとして使用している。

つまりこれは、五代の意思の表れだ。

今……この瞬間を、一人の少女の笑顔を守る為に、五代はもう一度、

強い決意と共に、自ら戦う事を選択する。

「それに俺。クウガだから」

最後にそう言って締めくくった五代は、まだ何か言いたそうにしているはやてに背を向けて、ガンナーと対峙しながら、自らの両手を自身の腹部へとかざした。

すると五代の腹部には、その強い意志に呼応する様に、体内に存在する超古代の技術で作られた霊石アマダムが埋め込まれたベルト、アークルを出現させる。

意識を高めるようにして、左手を腰に添えながら、右手を前にゆっくりと押し出す事で、更に集中力を高めつつ、五代は硬い決意を胸に宿しながら、一人の戦士へと変わる為の言葉を口にする。

「……変身！」

腰に添えた手に右手を上から押し込んだ後に、五代は勢い良く一気に両腕を広げる。

その瞬間に五代の身体が、大きな変貌を遂げる。

身体の上半身は、筋肉を模した造形の鎧に覆われて、頭部は二股に分かれた金の角と、赤い大きな複眼という、人間とは明らかに違った形状へと変化するその様子は、夕方の時と同じだったが、今回はその変化に大きな違いが生まれた。

頭部に輝く金の二本の角は更に大きさを増して、上半身の筋肉を模した造形の鎧も白ではなく赤となり、その大きさすら一回り大きさ

を増している。

それは戦士の本来あるべき姿……

一人の青年が人々の笑顔を守る為に戦い抜いた、赤い戦士の姿だった。

彼を知る者はきっと、こう呼ぶのであろう。

仮面ライダークウガ

……と！

## １００万ＰＶ突破記念作品　仮面ライダーシード＆仮面ライダークウガ　繋がる

執筆意欲が減少している時に、こえ部というサイトの部員になって、生放送ラジオをやったら、中々に楽しかったので、またいずれ機会があったらやってみようかなと思います……

興味のある方は、また覗きに来てくださいね。

それではまた次回で。

## １００万ＰＶ突破記念作品　仮面ライダーシード＆仮面ライダークウガ　繋がる

今回は少し早めに仕上がりました。

それでは楽しんでいただけたら幸いです。

変身を終えたクウガは、両足を肩幅程に広げ、右手を突き出し、左手を胸の内側へと宛がうという、独特の構えで目の前に対峙するガンナーと身構える。

「五代さんが……変わった？」

それを後ろの街道の隅に座った状態で見ていたはやてが、表情を驚愕の色に染めながら呟く。

「あら？雄太の話と違うみたいだけど……私としてはこっちの方が楽しめそうね……それに赤い色なのも私好みよ！」

はやての至極当然とも言える反応に続き、ガンナーは今度はクウガを値踏みする様に、見定めてから、自身が戦うに相応しい相手と判断を下し、クウガ目掛けて駆け出した。

ガンナーの手甲はただ遠距離用の装備を内臓させているだけではない。

本来の用途である防御の強化、そして肉弾戦における、拳の威力の倍増にも一役かっているのである。

「ふん！」

交互に繰り出されるガンナー拳を、クウガは見事に捌いていく。

「ちょこまかとウザッタイわね！」

己の拳を避け続けるクウガに、業を煮やしたガンナーは怒声をあげながら、一旦距離を置いて、手甲に設けられた銃口をクウガへと向ける。

「喰らいなさい！」

手甲の先にあるグリップを握り込むのと同時に、赤い光弾が連続で連続で放たれて、クウガへと襲い掛かる。

「くっ！？」

クウガは襲い掛かる光弾を側転で回避していく。

「これじゃあ簡単には近づけない……ん、これは？」

光弾を避け続ける内にクウガは、はやての乗っていた車椅子の残骸の傍へと行き着いていた。

「……そうか！これを使えば！」

残骸から一つの閃き得たクウガは、その中から車椅子の骨格の一部となっていた長いパイプを拾い上げる。

「あはは！そんなガラクタでどうするつもりかしら？」

パイプを拾い上げたクウガに対して、ガンナーが嘲笑の言葉を投げかけるが、その笑いを気にする事無く、クウガは意識を集中させるべく、構えを取りながら叫ぶ。

「超変身！」

その叫びと共に、クウガの赤い身体は、青く染まり筋肉を模した鎧の形状も、より洗練されたフォルムとなり、複眼の色も同色の青へと変わる。

「五代さんが……また変わった！？」

クウガの変化を目の当たりにして、はやてが再び驚愕の声を上げるが、変化はそれで終わる事は無かった。

握り閉められていたパイプにまで、大きな変化がもたらされたのである。

パイプはその形状を変化させていき、全体的に青い棒状で、クウガの鎧に刻まれたものと同様の古代文字が刻まれた武器、ドラゴンロッドへとその存在を昇華させたのだ。

「なんですって！？」

その様子を見て、はやてに続き驚愕の声を上げるガンナーをよそに、クウガがその手に生み出したドラゴンロッドを回転させると、両端が突き出して、ドラゴンロッドは更にその長さを増す。

「形が変わったぐらい！何だって言うのよ！」

ガンナーはクウガの変化に驚きながらも、手甲から光弾をクウガに向けて撃ち出す。

その攻撃はクウガが全ての変化を終えた直後に撃ち出されており、

先程までのクウガの動きでは、対応するには遅すぎた。

確実にこの攻撃は当たる。

他の誰でもない、攻撃を仕掛けたガンナーはそう確信するが、結果は予想通りとはならなかった。

「はっ！」

なんとクウガは、その攻撃に反応したどころか、先程とは比べ物にならない驚異的な素早い跳躍で、ガンナーの放った光弾を避けたのである。

赤いクウガ、マイティーフォームが格闘戦に優れた状態とするならば、この青いクウガ、ドラゴンフォームは、俊敏さと跳躍力に秀でた状態だと言えるだろう。

単純な格闘時の攻撃力・防御力はマイティーフォームに比べて、著しく低下してしまうという弱点はあるが、その代わりに動きはより俊敏となり、特にドラゴンフォーム時のジャンプ力には目を見張るものがある。

更に攻撃力の不足も、専用武器のドラゴンロッドがカバーしてくれるのだ。

「うをおおお！」

ドラゴンフォームの特性を上手く活かして、ガンナーの攻撃を避けたクウガは、気合を込めた叫びと共に、ドラゴンロッドを頭上から勢い良く振り下ろす。

「きゃあああ！？」

その反撃を予測していなかったガンナーは対応が間に合わず、迎撃する事を諦めて、手甲を頭上で交差させて防御に徹するが、思った以上の衝撃がドラゴンロッドを受けた手甲に伝わり、踏鞴を踏む。

クウガはその隙を逃がす事無く、ドラゴンロッドを巧みに操り、ガンナーが体勢を立て直すよりも早く、連続攻撃で畳み掛けていく。

「はああ！」

そしてクウガがドラゴンロッドの連続攻撃により、ガンナーが完全に防御を崩したところで、裂ぱくの気合と同時に繰り出された蹴りが、ガンナーの腹部を捉えて、後方へと弾き飛ばす。

「く……うっ……」

蹴りの衝撃が残っている為に、多くの戦いから、後もう一押しすれば、この勝負に決着が着く事を感じ取ったクウガが、そのもう一押しとなる攻撃を仕掛ける為、ガンナー目掛けて駆け出すが、その攻撃がガンナーに通る事は無かった。

「五代さん！？」

それは、はやてが叫ぶのとほぼ同時に起こった出来事である。

「ぐっ！？が……ああ！？」

ガンナーへと駆け寄るクウガの目の前で突如として爆発が起こり、

その爆風でクウガをガンナーから遠ざけたのだ。

それはクウガにとって、まさに不意打ちとなり、ただでさえ防御力の低下するドラゴンフォームには、その攻撃は最も爆発地点に近かった右の脇腹を焦がし、かなりのダメージとして残って、クウガに苦痛を与える。

「あの攻撃は……」

痛みに苦しむクウガとは逆に、腹部の痛みが若干ながらも和らいだガンナーが、爆発の起こった場所の先に視線を送ると、ガンナーとハンター同様に、ブラウンの基本カラーの全体と、上半身を覆う銀のプロテクター。

黒いベルトの中央に嵌め込まれた青い球体に、それと同色の複眼と、炎を模した角飾りを持つ仮面ライダーが、爆発で生じた残り火の中を、歩いてくる。

「……どうも苦戦していたみたいなんで、加勢しに来ました。沙耶さん……」

「余計なお世話って言いたいけど……正直助かったわ。ありがとうね。大地」

ガンナーはその勝気な態度は崩さないが、助けてもらった事実に対しては、素直に感謝の言葉を述べながら立ち上がった。

「でも良いの大地。助けて貰ってなんだけど、あんたがここに居るって事は、折角の作戦が無駄になるんじゃない？」

「……ああ。それなら大丈夫だよ。僕の相手は……」

立ち上がったガンナーの質問に答えている最中に、その声が街道の奥から鳴り響くサイレンの音によって掻き消される。

「……どうやら来たみたいだね。僕の相手……仮面ライダーボマーの相手が……」

呟くボマーの視線の先には、闇夜を赤いランプの光で照らしながら、白と黒のツートンカラーの大型バイクに跨り走って来る、海鳴市の平和を守る、一人のメタルイエローのボディーと青い複眼を持つ、仮面ライダーが映し出されていた。

『マスター。後約一キロメートル程で、目的地に到着するぞ』

チェイサーさんに跨り、夜の海鳴市の街道を爆走する俺に、既にシードに変身している状態の為、ベルト状態となっているメカ犬が、報告を入れてくる。

「分かった。それにしても……」

『あら？どうしたのマスター。何か悩み事かしら？』

メカ犬に返事を返しながら、考え込む俺を不思議に思ったのか、チェイサーさんが、会話を挟んできた。

「いや……今日はやけにホルダーが出没すると思いまして……」

今日の夕方に続き、病院帰りに突如として大量のホルダー反応を察知した俺は、メカ犬と合流して反応元へと急行している最中なのだが、どうにも考える事が多くて、頭の中の整理が追いつかないでいるのだ。

以前にもこういった一日に何度もホルダーが出没する事が、無かった訳ではないが、そういった時、大抵は必ずと言って良い程に、何か大きな事件が巻き起こる前触れだったのである……

そうでなくても、五代さんと空の存在。

俺の知らない三人の仮面ライダーなど、明らかに何かが起こっていますと、宣言されている事態のオンパレードなのだ。

仮面ライダーに対しては、下手に知識があると、余計に混乱してしまう。

『うむ。確かに今日はマスターの言う通り、ホルダーの出現する数が異常な程に多い。その上に仮面ライダーを名乗る三人組が現れたりと、ワタシ達の知らないところで何かが始まっていると見て、まず間違い無いだろうな……』

チェイサーさんからの質問に答えた俺に続き、メカ犬も自身の考察を述べる。

「……そうだな」

『それにマスター。ワタシ達とは別に戦っていたあの男性……確かマスターは彼をクウガと呼んでいたが、彼も別世界に居た赤い者やフィリップ達と同様の仮面ライダーなのか？』

「ああ。あの人は……」

『お話中のところお邪魔して悪いけど、そろそろ目的地に到着するわよ。二人とも』

俺とメカ犬の話に割り込む様にチェイサーさんが言葉を潜り込ませて来たので、俺とメカ犬はそこで会話を一旦止めて、辺りに意識を集中させる。

辿り着いた場所は、市街から離れた港。

以前にガルドの船が停船していたすぐ近くだ。

俺はチェイサーさんから降りて、薄っすらと月明かりが照らす港の中を歩き始める。

「思ったよりも静かだな？」

『用心した方が良いぞマスター。ホルダー反応が少なくても十体以上は出ていた。何処に潜んでいたとしても、おかしくは無い』

注意深く俺達が辺りを探っていたその時である。

「待ってたぜ。仮面ライダー」

夜の闇の中から、一人の男の声が、俺の耳に届いた。

声のした方向に振り向くと、其処には夕方にも会った、変身して仮面ライダーハンターと名乗った茶髪の青年と、その後ろに大量のホルダーモドキを従わせているという光景が飛び込んできた。

「これって……」

『ホルダーモドキ達を従わせているという事は、オーバー達と関連していると見て確実だな』

「ああ。しかも……こんなあからさまな場所に、さっきの待っていたって台詞は……」

『うむ』

俺は夜の闇の中から次々と現れるホルダーモドキ達を警戒する為に、構えを取りながら、メカ犬と短い会話を交わして、同一の答えへと行き着く。

ホルダー反応を追ってやって来た、夜の人気が無い港に、大量のホルダーモドキ……

これは間違い無く、俺達を誘き出す為の罠だ。

「夕方は世話になったな……だが今度はどうかな？」

茶髪の青年は、ぎらついた瞳で俺を睨み付けながら、黒いバックルと黄色い玉を取り出す。

そしてバックルを腹部へと宛がい、ベルト状に変形させると、唇の両端を上げて、ぎらついた瞳に笑顔の唇という、中々に迫力のある表情を作り出す。

「行くぜ……変身！」

その表情のまま、言葉を紡いだ茶髪の青年が、バックルの窪みに黄色い玉を嵌め込むと、全身が黄色い光に包まれて、今日の夕方にも見た、仮面ライダーハンターへとその姿を変化させる。

「さあ。始めようぜ……パーティーの時間だ！」

変身を完了させたハンターが、軽く首を一回ししてから、そう言って右手を無造作に俺へと向けると、ハンターの後ろに待機していた十体以上のホルダーモドキ達が、一斉に走り出して、その全てが俺を目指して襲い掛かる。

『来るぞ！』

「そんなの見れば分かる！」

メカ犬の注意を促す言葉に軽く返事を返しながら、俺はまず一番最初に拳の射程圏内へと侵入してきたホルダーモドキに対して、先制攻撃を仕掛けて殴り飛ばす。

続けて迫り来る二体のホルダーモドキには、回し蹴りを叩き込んで、更に後ろから来る後続に対しての防波堤にして、その進行を遅らせると同時に、ハンターの動きを探る為の時間稼ぎとして有効活用する。

そして戦いの中でほんの少しだけ出来たホルダーモドキ達との間合いの中で、ハンターの動きを探ろうと、視線を少し先へと向けるが、既にその場所にハンターの姿は無かった。

『右だマスター！』

何処に行ったのか探そうとした、その矢先にベルトからメカ犬の声が響く。

俺はその言葉を信じて、振り向く間を惜しんで、無理やりに上体を捻ると、その直後に頬を、鋭い音をさせながら一迅の風が通り過ぎる。

そのまま大体の目安を想定して、捻った身体を更に移動させて、右足をその場所に繰り出すと、確かな手応えが俺の右足へと伝わった。

「ぐわっ！？」

振り抜いた右足を地面につけてから、バックステップで、一旦距離を置くと、其処には二本の銀のナイフを逆手に持ったハンターが、数歩ほど下がりながら、よろけている姿が飛び込んで来た。

「ちっ！ムカつくが……やっぱりあんたは強いな……でも今回は……これで良い……」

ハンターは再び、ナイフを構えながら、静かに呟いた。

「何を言ってるんだ？」

『マスター！もう二つ反応が別の場所に反応が出た！この反応は…目の前に居るハンターと同質のものだ！』

俺がハンターに対して質問をするよりも早く、メカ犬が俺にそう叫んだ。

そしてメカ犬の言葉を耳にしたハンターもまた、盛大な笑い声を上げ始めた……

## １００万ＰＶ突破記念作品　仮面ライダーシード＆仮面ライダークウガ　繋がる世界

この次辺りからやっとお話も本筋に入ると思います。

それではまた次回で。

## １００万ＰＶ突破記念作品　仮面ライダーシード＆仮面ライダークウガ　繋がる世界

今回は何か久しぶりにシードのバトルを書いて様な気がします……

それでは楽しんでいただけたら幸いです。

「何だって？」

夜の港で響き渡るハンターの盛大な笑い声の中で、メカ犬が俺に伝えた言葉を耳にして、思わず呟いてしまった。

『ワタシ達を誘き出すだけが目的ではなかったという事か……一体何を企んでいる！？』

メカ犬はハンターの笑い声を掻き消す程の、大きな怒声を上げる。

その声はハンターの耳にも届いたらしく、笑うことを止めたハンターは、首を軽く時計回りに一回してから、律儀にもメカ犬の怒声に対して返答してきた。

「さあな？俺はあんたを誘き出すのが役目なだけで、作戦の概容なんて知らなねえ。唯一俺が知ってるのはな……」

期待していた答えとは違う言葉がハンターから放たれるが、何処か含む言い方をした後に数秒の間を置いてから、もう一言だけ呟いた。

「【八神はやて】って女の子を連れ去れって事だけだぜ」

その言葉を聴いた瞬間に、俺は全身に稲妻を浴びた様な衝撃に襲われる。

『……はやて嬢が目的だと！？』

「……どうしてはやてちゃんの話が、こんなところで出てくるって言うんだよ！？」

メカ犬と俺は、その予想外の言葉に対して、動揺を隠す事が出来ない。

「だから……俺が知るかよ。俺はただ派手に戦いたい。それさえ出来れば、細かい事はどうだって良いんでな！」

衝撃的な言葉に対して、自然と呟く様に紡ぎだされた俺とメカ犬の質問に、面倒くさそうに答えたハンターは、再びホルダーモドキを引き連れて、俺に襲い掛かる。

「つまり俺達は……はやてちゃんを攫う為の時間稼ぎに、誘き出されたって事か！？」

逸早く襲い掛かってきたホルダーモドキを右拳で迎撃しながら、俺はメカ犬に先程のハンターの言葉から考えた予測を口にする。

『最終的に奴らが何をしようとしているのかは、現状の情報だけでは判断しかねるが、碌な事ではないだろう……』

「だったら俺達が、今するべき事は……」

『一刻も早く目の前の敵を倒して、はやて嬢の元へと向かう事が最善だ！』

「ああ！一気に勝負を仕掛けるぞメカ犬！」

『うむ！』

メカ犬も俺と同じ考えに行き着いたらしく、早くこの場を離れて、はやてちゃんの元へと向かう事を提案した。

しかし現在、この場に居るハンターとホルダーモドキ達を放って置く訳にも行かないのも、純然たる事実に相違無い。

だから俺は一秒でも早く決着を急ぐ為に、多少強引とも言える戦法へと切り替える事を決断した。

正面から迫りくるホルダーモドキに対して、俺は回し蹴りを放った直後にベルトの右側をスライドさせ、緑のボタンを押す。

『スピードフォルム』

そうする事により、変身した最初の状態であるメタルブラックのボディーが、ライトグリーンへと染まり、総合的なバランスを重視したベーシックフォルムから機動性を主体とするスピードフォルムへと、変貌を果たす。

「はっ！」

スピードフォルムへの変化を完了した俺は、逆手に持ったナイフを手に攻撃を仕掛けようとするハンターの肩を足場にして、掛け声と共に飛び上がり、港に数多く点在する大型コンテナの内の一つに飛び乗り、無事に着地した直後、すぐさまベルトからタッチノートを引き抜き開く事で、画面にある項目を呼び出す。

『マスター。まさか……あれをここで試すのか！？』

ここまでの一連の行動で、俺が今から何をしようとしているのか、勘付いたのだろう。

メカ犬が俺に、質問を投げかける。

「実戦で使うのはこれが初めてだけど、急ぐならこれが一番だろ！」

俺はメカ犬の質問に答えながら、タッチノートのディスプレイに表示された項目部分に指を押し当てた。

『コール・ライガー』

タッチノートから鳴り響く音声から、さして間を置く事も無く、闇を切り裂き機械仕掛けの緑の虎が、俺達の目の前にその姿を現す。

『お待たせじゃん！マスター！』

俺達の目の前に現れた緑の虎、メカ虎が右前足を上げながら、戦いの場にはあまり似つかわしくない、フランクな挨拶を交わしてくる。

「メカ虎……詳しい説明はしてる時間が無い！例のあれをやるぞ！」

『例のって……マスター本気じゃん！？』

俺の宣言にメカ虎が、先程のメカ犬と似たようなリアクションで俺に聞き返すが、その反応も無理は無いだろう。

何せ今から俺がやろうとしている事は、メカ虎が備えている能力の中でも、かなり特殊な分類に属する上に、制御がかなり難しい。

俺も何度か練習をしてはいるが、未だに完璧に使いこなせているとは言えないのが、正直な現状なのだ。

「確かに不確定要素は多いけど、今はこの手段に頼るしかないんだ！協力してくれよメカ虎！」

『……分かったじゃん！オレッチはマスターの心意気を信じるじゃん！』

「ありがとうメカ虎……行くぞ！！！」

『ＯＫじゃん！！！』

今から俺が行おうとしている行動に最も必要となる、メカ虎の了承を得て、俺はタッチノートの操作を再開させる。

『スタンディングモード』

再びタッチノートから鳴り響く音声と同時に、メカ虎が変形を始めて、頭部がレバーとなっているアタッチメントパーツとなり、俺の手の内に納まった。

『ここまで来てワタシは野暮な事を言うつもりは無い……だから必ず成功させろマスター！！！』

「ああ！やってみせるさ！」

俺はメカ犬の激励に励まされながら、ベルトの左側をスライドさせて、アタッチメントパーツとなったメカ虎を差し込む。

『スピード・ライガー』

音声が鳴り響いたその瞬間に、ライトグリーンの追加パーツが、ベルトから発せられる光から生成されて、次々と俺の身体に装着されていく。

そして全てのパーツを装着した俺は、まるで自分自身の身体そのものが、羽毛となってしまったのではないかという、浮遊感に包まれる。

ライガーモードの特徴は、俊敏性の強化だ。

それはスピードフォルムの特性ろも相まって、全フォルム中でも随一の速さを誇る。

しかしこのスピード・ライガーの特性はそれだけに留まらない。

『ライガーファング』

俺は続けて、アタッチメントパーツのレバー下に設けられているボタンを押す事で音声が流れ、ベルトから発生した光が両手両足に絡まり、虎の顔を模した形のプロテクターになり、それぞれのプロテクターからは、鋭い三本の刃が伸び、専用武器であるライガーファングとなる。

『マスター。今のマスターがあれを完全に制御しきるのは、どんなに多く見積もっても１０秒が限界じゃん。それ以上は多分マスターの身体が耐えられないから、絶対に１０秒で決着を着けるじゃん！』

全ての準備を整えた俺に対してメカ虎が、最近は何度も練習時に聞

いているアドバイスを送る。

「ああ……一秒でも早くはやてちゃんのところに行く為だ！絶対に成功させる！！！」

俺はメカ虎にと言うよりも、己を鼓舞する為に叫びながら、アタッチメントのレバーを下に動かす。

『マックスチャージ』

ベルトから流れる音声と同時に、発生した光が、俺の四肢へと集約されていく。

「こいつで決めるぜ」

光が四肢に集約した事を確認した俺は、コンテナの上から、下に居るハンターとホルダーモドキ達を見据えてから、一気に飛び降りた。

その速さはこの場に居る誰も、目で追う事すら不可能だ。

俺はただ一人、この場でたった１０秒という名の、本来であれば短い筈の時間を、長い時間と錯覚してしまう程の超スピードで駆け抜ける。

スピード・ライガーの特性は完全にスピードへと特化しているが、それは本来他のフォルムで必殺技であるマックスチャージを発動させた際に、更なる飛躍を果たす。

技に使うエネルギーを更に身体能力の向上へと変換する事で、このフォルムは、通常では決して辿り着ける事の無い、スピードの高み

へと至る事が出来るのだ。

この能力は、歴代の仮面ライダーの何人かが使っていた特徴と、酷似してはいるが、俺の場合はそんなに多様する事の出来る能力とは言えないのである。

第一に制御がかなり難しい。

この力を発動している間は、メカ犬とメカ虎が全力でサポートしてくれているのだが、それだけでは足りず、その足りない処理を、俺自身が上手く身体を動かす事で対応しなければならないので、精神的にかなりの負担が来る。

それと同時に、本当であれば技として放出する筈のエネルギーを、体内に蓄積した状態で戦う事となるので、精神以上に、肉体を酷使するのだ。

これらの要素を合わせた状態で、俺が完全に制御した状態で戦う事が出来るのが、先程メカ虎が俺に言った１０秒という時間である。

メカ虎の言う通り、それ以上の使用は、今の俺には無理だという自覚はある……

……だからこそ、この１０秒という時間で、この場に居る全員を倒さなければならない。

『９』

メカ虎が口にする残りのカウントを聞きながら、俺はライガーファングで、目の前のホルダーモドキを切り裂く。

二体、三体と切り裂き続ける内にも、残りのカウント数は、確実に減っていく。

『5』

残り時間の半分を切るところで辺りを見れば、まだハンターに加えて、数体のホルダーモドキが残っているが、俺はただひたすらに、目前の敵へと猛然と突っ込み、ライガーファングによる攻撃を仕掛ける。

『3』

俺はひたすらに攻撃を続ける。

『2』

軋みだす身体に鞭を打ちながら、怒涛に仕掛けた連続攻撃により、俺は全てのホルダーモドキを切り裂いた。

『1』

全てのホルダーモドキが、俺の攻撃によって爆散しようとしているその中で、残り一人となったハンターに向けて、俺はライガーファングを突き立てながら特攻する。

流石に他のホルダーモドキと違い、俺の動きに僅かながらの反応を示して、ハンターは二本のナイフを十字に構えて防御の姿勢を取るが、最早俺にもその防御を突き崩している時間的な余裕は残されていない。

だから俺は防御するハンターに対して、全速力のスピードを出して真っ向勝負を仕掛ける。

俺のライガーファングと、ハンターの銀のナイフが、爆発を始めたホルダーモドキ達の中で一際激しい火花を発生させるが、その勝負は一瞬で決まった。

限界を超えた俺のスピードで発生した力は、流石のハンターでも防ぎ切るには至らなかったのである。

ライガーファングの一撃により吹き飛ばされたハンターは、そのまま海へと落ちて豪快な水飛沫を上げた。

『０』

その直後にメカ虎のカウントが終わりを向かえて、周囲のホルダーモドキ達が盛大な爆発を引き起こして、俺の視界は爆煙一色に包まれてしまう。

「……ぎりぎり……間に合った……」

俺が爆煙の中で、上がった息を整えながら、今までの人生で最も長い、１０秒振りの言葉を発したその時だ。

『ベーシック・ライガー』

フォルムチェンジを実行しようとしていないのに、ライトグリーンのボディーはメタルブラックへと強制的に変換された。

どうやら俺が先程呟いた言葉の通り、本当にぎりぎりだったらしい。

この話もメカ虎から聞いた話なのだが、このフォルムはその特性上、使用者の俺に大きな負担を強いるらしく、限界値を超えた時点で強制的に他のフォルムへと移行する様に設計されているのだ。

『マスター。残念だが一息つくのはもう少し後だ。ハンターと同質の二つの反応に新たな動きがあった』

戦いの後の余韻に浸る間も無く、ベルトからメカ犬の声が、俺に新たな情報を告げる。

「新たな動き？一体何があったんだ？」

『うむ。先程まで別の位置にあった二つの反応が、合流した様なのだ。もしかしたら其処で何かが起こっているのかもしれない……急いで現場に向かうぞマスター』

俺は二つ返事でメカ犬の提案に頷きたいところであったが、一つだけ懸念するところがあり、その申し出に待ったを掛けた。

「すぐに行きたいけど、海に落ちたハンターを放って置く訳にもいかないだろ？変身が解けて気絶してたとしたら、すぐにでも助けないと……」

恐らくは五代さんが、はやてちゃんの傍に居てくれるとは思うが、そうそう楽観視してもいられないので、一刻でも早くこの場を後にしたい気持ちはあるが、このまま溺れているかも知れない人間を見捨てるなんて、とんでも無い話だ。

『ならここはオレッチに任せるじゃん！マスターは急いで行くと良いじゃん！』

俺が海に向かって駆け出そうとしたその時、メカ虎が自分が代わりに行くと進言した。

「悪いなメカ虎……頼むぞ」

『大船に乗ったつもりで任せるじゃん！』

この場をメカ虎に任せる事にした俺は、アタッチメントパーツとなっていたメカ虎を元の状態に戻して、急いでチェイサーさんに跨り、夜の港を後にした。

したのだが……

「……くそっ！今度は……今度こそは……絶対にまけねえ！！！」

後日、俺はメカ虎の証言からハンターが今も尚、健在だという事を知った……

**１００万ＰＶ突破記念作品　仮面ライダーシード＆仮面ライダークウガ　繋がる世界**

次回はやっとメタルイエローの彼の出番が来ると思います……

それでは。

## １００万ＰＶ突破記念作品　仮面ライダーシード＆仮面ライダークウガ　繋がる

少し遅れてしまいましたが更新致します。

今回も楽しんでいただけたら幸いです。

「あれは！？」

近隣の住民の通報を聞き、現場へと駆けつけたＥ２は、驚愕の声を上げた。

［「あれって……」］

Ｅ２に内臓されたカメラを通して、同じ映像を別の場所から見ている恵美も、同様に驚愕の声を通信機越しから上げた。

Ｅ２である長谷川と、恵美が共に驚愕するのも無理は無い。

目前に広がるその光景は、既に幾度と無く経験してきた、異形の者達が繰り広げる戦いの場。

しかしその場には、今までとは決定的に違う要素が含まれていたのである。

この場に居るのは三人の異形の姿をした者達と、個人的な知り合いでもある一人の少女だったのだが、その異形の者達の姿は、今までに見てきたこの街を何度と無く脅かし続けてきたホルダーとは一線を画す姿だったのだ。

その内の二人は、全体的にブラウンのカラーリングと上半身を覆う銀のプロテクターという、酷似した形状をしており、残りの一人は全体的に黒く、頭部に金の二本角と、上半身には、青いプロテクターという、先に述べた二人とは別系統の姿ではあったが、その三人

の姿、それに加えＥ２も含めて、一言で表す事が出来る、共通の認識用語が存在していた。

「……彼らは、仮面ライダーなのか？」

そしてＥ２は、この海鳴市において、己自身と、この場にはいない、もう一人を指し示す言葉を口にした。

更に青いプロテクターをしたライダーの方は、ダメージを負っているのか、右脇腹にあたる部分から、白い煙が上がってもがき苦しんでいるようだ。

その様子を目にして、Ｅ２は二人のライダーともう一人のライダーは、敵対関係にあるのではないかという、考えへと辿り着く。

［「詮索は後よ！長谷川君！まずは要救助者の安全を確保して！」］

「は、はい！」

逸早く、現状をその雰囲気から察知した恵美が、通信機からＥ２に指示を送る。

Ｅ２もまた、その指示に返事をすると、現状を理解する事よりも、二人のライダー、ガンナーとボマーの向かい側に居るもう一人のライダー、クウガの後ろに居る一人の少女、八神はやてを安全な場所に移動させる事を第一の優先として行動を開始した。

［「標準装備のＥＳＭ０１は、はやてちゃんに流れ弾が当たる可能性があるから、近接装備のＥＳＭ０２を使ってちょうだい」］

「了解しました！」

再び恵美の指示に返事をしたＥ２は、マシンドレッサーの側面部分に設けられている格納庫から、近接戦闘用の両刃の剣、ＥＳＭ０２を取り出して右腕に装備する。

［「長谷川君！高熱のエネルギーを発している物体が、後方から接近しているわ！注意して！」］

ＥＳＭ０２を装備した直後に、通信機から焦りを含んだ恵美の声がＥ２の鼓膜を振るわせた。

その声に従い後ろを振り向くと、Ｅ２の目前にまで、小さな細い筒状の物体が迫っていた。

「くっ！？」

Ｅ２には、その正体が何なのかは分からないが、これまでの戦いの勘からか、嫌な気配を感じ取り、装備したばかりのＥＳＭ０２で、その筒を斬るのではなく、明後日の方向へと弾き飛ばす。

結果として、Ｅ２の下した判断は正しかった。

弾き飛ばした筒の正体は、ボマーの放った爆弾であり、Ｅ２のすぐ横で小さな爆発を起こしたのである。

「爆発した！？」

［「気をつけて長谷川君！同じのが大量に来るわよ！」］

すぐ横で起こった爆発に対して、驚愕するＥ２に、通信機から恵美の注意を促す声が木霊する。

恵美の言葉通り、Ｅ２が正面見据えると、先程と同じ筒状の爆弾が、空を舞いながら、Ｅ２の元へと接近していた。

Ｅ２は先程と同じ手段では、全ての爆弾を爆発させる前に捌き切るのは不可能と判断して、すぐさま回避行動へと移る。

「ぐう！？」

更にそれに追い討ちを掛ける様に、ガンナーが手甲の銃口から放つ光玉により被弾して、小さな呻き声を上げるＥ２だったが、何とか大きなダメージを受ける事だけは避ける事が出来た。

しかしＥ２が爆弾を避けた直後には、既にボマーが次に投擲する爆弾を生成させていた。

「これじゃあ、近づく事も出来ない……」

Ｅ２はその光景を見て、呟きながら今一度、回避行動へと移る為の予備動作を開始する。

出来る事であれば、一刻も早くこの爆撃地帯から、要救助者である、はやてを引き離したいが、現在ボマーとガンナー、両名の標的となっているＥ２が不用意に接近すれば、余計な危険を招く結果となってしまうだろう。

この場にはやてが居なければ、この距離からのＥＳＭ０１による射撃が可能ではあるが、流れ弾が行く事を考えると、易々とその手段

に出る訳にも行かない。

ならば、Ｅ２が現在の所、用いる事が出来る手段は、自然と限られてくる。

Ｅ２は回避行動を中断して、大地を蹴り走り出す。

［「無茶は止めなさい！？」］

突如として行動指針を変更したＥ２に対して、その光景をカメラ越しに見ていた恵美は、通信機から制止の声を掛けるが、Ｅ２は構わずに、ガンナーとボマー目掛けて走り続ける。

「確かに危険ですけど……僕に狙いが集中すれば、その分、周りへの被害が減りますから！」

Ｅ２は走る速度を更に上げながら、自身の考えを言葉にした。

己が下した行動に対して、恐れが無いという訳では無い。

しかし彼は、あえてその方法を選んだ。

それは他の誰でも無い……己の為である。

はやてを、海鳴市で日々を生きる人々の安全を、守りたいと願うその意思が、Ｅ２を駆り立てたのだ。

ガンナーが放ち続ける光弾の嵐を駆け抜ける最中に、新たに投げられたボマーの爆弾が、Ｅ２の視界へと入る。

このまま前へと走り続ければ、間違い無くＥ２を爆発の衝撃が襲う事となるだろう。

Ｅ２はその爆発の衝撃に耐える為に、身体全体を強張らせて目を閉じてしまったのだが、最初に耳に入ってくる筈の爆発音よりも先に、Ｅ２自身でも恵美でもない別の人の声が聞こえて来たのである。

「超変身！！！」

その声を耳にしたＥ２が目を開くと、目の前に佇むのは、一人の仮面ライダーだった。

Ｅ２に対して攻撃を仕掛けるガンナーとボマー同様に、この場に居たもう一人のライダー、クウガである。

ボマーの爆弾によってダメージを受けたクウガだったが、Ｅ２の登場により、標的が移った間にある程度動けるまでに回復した事で、Ｅ２のピンチに駆けつける事が出来たのである。

「……紫の身体？」

目の前に佇み、己の背中を見せるクウガを見て、Ｅ２が呟いた。

Ｅ２の呟いた通り、クウガの身体は、超変身によって、俊敏な動きが特徴のドラゴンフォームから、騎士の様な重厚な紫の鎧を纏う、タイタンフォームへと変わっていたのである。

そしてＥ２が呟いた直後に、ボマーの投げた爆弾が、クウガの身体に当たり、小規模な爆発を起こす。

「バカじゃないの？態々自分から当たりに来るなんてさ！」

クウガが爆発に巻き込まれる様子を見ながら、ガンナーが笑いながら言うが、その笑いは爆煙の晴れた瞬間に終わりを告げる。

「……効いて無い？」

爆煙が晴れて、クウガを視界に捉えたボマーが、静かに言葉を紡ぐ。

タイタンフォームの能力は、先程までのドラゴンフォームの特性とは、真逆に位置していると言えるかもしれない。

ドラゴンフォームが力を犠牲にして、早さを特化させているのに対して、このタイタンフォームは、機動力を犠牲にして、高い攻撃力と防御力を得ているのだ。

クウガは過去にこのフォームで、幾多の未確認生命体の強力な攻撃を正面から受け止めてきたのである。

「大丈夫でしたか？」

爆発を凌ぎ切ったクウガは振り向きながら、Ｅ２へと喋りかける。

「え！？ま、まあ……おかげさまで……」

突然に話し掛けられたＥ２は、戸惑いながらも、何とか返事を返す。

「さっきは俺も助かりました。もしあのタイミングで貴方が来てくれていなかったら、結構危なかったかも知れないんで！」

饒舌にそう言い放ったクウガは、Ｅ２の空いている左手を掴み、半ば強引に握手を交わす。

「貴方がはやてちゃんの話に出てきた、警察に勤めているっていう、仮面ライダーなんですよね？」

「え、ええ……一応は……」

クウガの認識に、細かい経緯に差異は見受けられるが、言いたい事は理解出来たので、Ｅ２は取り敢えず首を縦に振って肯定する。

「それとこの剣、ちょっと借ります！」

「え！？」

二人が握手をしていたのも束の間であり、クウガは話の脈絡を無視して、Ｅ２の持つＥＳＭ０２を掻っ攫う。

「ち、ちょっと、突然に何をす……これって！？」

「「……興味深い現象ね」」

傍から見ても強引と言える手段に驚きながらも、Ｅ２は抗議の声を上げようとするが、その声は途中で驚愕の声へと変わる。

それに続き、Ｅ２と同じ光景をカメラを通じて見ていた恵美が、驚くＥ２とは違った反応を示す。

なんとクウガがＥＳＭ０２を手にした瞬間に、メカニカルな形状から、紫と銀の西洋剣を思わせる形へと変化したのである。

「また姿が変わったと思ったら今度は剣を出すなんて……あんた一体何なのよ！？」

クウガのタイタンフォームへの変化と、タイタンソードの形成を目の当たりにしたガンナーは、叫びながら手甲を前に構えて銃口から光弾をクウガへと連続で射出していく。

「もう一人の方を、お願いします！」

ガンナーの攻撃をノーガードで受け止めながら、前進するクウガは、Ｅ２にそう言いながらボマーを指差す。

「ええ！？」

［「良く分からないけど、今はあのライダーが敵じゃない事を信じて協力しておいた方が良さそうね……右から来るわよ！！！」］

クウガの発言に戸惑うＥ２に対して、恵美が説得を試みる最中に、声を張り上げた。

その声に反応してＥ２が右に視線を向けると、先程と同じ形状をした筒状の爆弾が、目前へと迫っていた。

「うわっ！？」

Ｅ２は驚きながらも、元居た場所から飛退いて、辛くも爆発の直撃から逃れる。

「……喋ってる暇は無いと思うよ？」

投擲した爆弾を避けるＥ２を、冷静に観察しながら、ボマーは新たな爆弾を生成しながら呟く。

「……やるしか無いみたいですね！」

［「取り敢えずＥＳＭ０１が使えないから、装備を整えるわよ長谷川君。」］

「はい！」

Ｅ２は恵美の提案に了承して、すぐさまＥブレスの操作を始める。

「何をしようとしてるかは知らないけど……無駄だよ！」

Ｅブレスを操作するＥ２を放って置く筈も無く、ボマーは間髪入れずに爆弾を投げつける。

［「また来るわよ！」］

「くっ！？」

恵美の声に反応したＥ２は、Ｅブレスの操作を一旦中止して、側転で爆発を回避していく。

「……避けてるだけじゃ勝てないよ？」

爆発を避け続けるＥ２に、ボマーが攻撃を緩める事無く、連続で生成した爆弾を次々と投げつけながら言い放つ。

［「それはどうかしらね……長谷川君！」］

ボマーの発言に対して恵美が、不適な微笑みを浮かべながら、Ｅ２に指示を出す。

「了解です！」

恵美の指示に答えたＥ２が、回避行動を続けながら、Ｅブレスのボタンを押した。

「一体何を……ぐっ！？」

Ｅ２の行動を訝しげに見ていたボマーの背中に衝撃が走ると同時に吹き飛ばされる。

ボマーを強襲した正体は、Ｅ２の専用バイクであるマシンドレッサーだったのだ。

Ｅ２はＥブレスから遠隔操作で、マシンドレッサーをここに呼び寄せたのである。

［「長谷川君。相手が爆弾を使った中距離戦を得意としているなら、うってつけの装備があるわよ」］

「うってつけの装備ですか？」

［ええ。格納庫のＥＳＭ０５を使うのよ」］

「やってみます！」

遠隔操作で呼び出したマシンドレッサーの格納庫を開けたＥ２は、恵美の指示に従って、言われた通りの装備を取り出した。

ＥＳＭ０５は、棒状の先端に取り付けられた取っ手がある武器。

一言で表すのであれば、その形状はトンファーに近いと言える代物だった。

しかしＥＳＭ０５は、勿論ただのトンファーではない。

ＥＳＭ０５は間違い無く、恵美が開発した特殊装備の一つである。

「さっきのは……流石に予想外だったよ！」

Ｅ２が装備を取り出している間に、マシンドレッサーに跳ね飛ばされたダメージから回復したボマーは、立ち上がりながら、新たに生成した爆弾を投げつけた。

［「早速出番よ長谷川君！」］

「はい！」

投げつけられた爆弾に対して、Ｅ２がＥＳＭ０５を装備した状態で、身構えるとほぼ同時に、爆発が巻き起こる。

「これは流石に効いたかな……え！？」

確かな手応えを感じたボマーだったが、爆煙が晴れた瞬間に目にした光景は、ボマーの想像とは違う光景が広がっていた。

トンファーの形状をしていた筈のＥＳＭ０５の棒状の部分が、大きく展開されて盾の形状を形成しており、爆発の衝撃を受け切ったのである。

## １００万ＰＶ突破記念作品　仮面ライダーシード＆仮面ライダークウガ　繋がる

このペースの更新だとクウガ編は、９月に縺れ込むかもしれません。

出来るだけ更新を頑張ろうと思います……

## １００万ＰＶ突破記念作品　仮面ライダーシード＆仮面ライダークウガ　繋がる

まさかの連日更新が出来ました。

多分オーズの映画を観た直後で、テンションが仮面ライダーよりになっていたからかも知れません。

それでは今回も楽しんでいただけたら幸いです。

ＥＳＭ０５は、近接格闘戦と防御力の強化を図った特殊装備である。

素手による攻撃よりも、打撃力を増す為の、トンファーとしての形状。

そしてそのトンファーの取っ手の部分に、設けられているスイッチを押す事で、棒状の部分を展開させる事により、形状は盾へと変わり相手の攻撃を防ぐ防御壁となる。

「……凄い装備ですね……これ」

ＥＳＭ０５を使用して、爆発を防ぎ切ったＥ２本人が、驚きの声を上げた。

［「そうでしょう！私の自信作なんだから当然よ！」］

Ｅ２の言葉に対して、恵美は自信満々に言い放つ。

「……また、面倒なものを出してきたね！」

爆発の衝撃を防ぎ切ったＥ２の姿に対して、ボマーは仮面の下で苦笑いを浮かべながら、先程以上の数の爆弾の生成を開始する。

［「次が来るわよ！長谷川君！」］

「はい！！！」

爆弾を生成し始めたボマーの姿を、カメラ越しに捉えた恵美が、通信機から注意を促す。

Ｅ２は恵美の声に返事を返しながら、ＥＳＭ０５を構えて、ボマー目指して駆け出した。

「近付かせない！」

駆け出したＥ２に目掛けて、ボマーが叫びと共に、自らが生成した爆弾を放る。

［「長谷川君！！！」］

「分かってます！！！」

恵美の言わんとする理由を逸早く察したＥ２は、すぐさま楯状のＥＳＭ０５を、爆弾の投げられた方向に構えると、走る速度を緩める事無く、寧ろその速さを上げて、自ら突っ込んで行く。

盾に触れた爆弾が、その衝撃により、小規模の爆発を引き起こすが、Ｅ２はその爆風を盾で遮りながら走り続け、ボマーの眼前へと辿り着いた。

「あの爆風を、掻い潜った！？」

爆煙の中から現れたＥ２に対して、ボマーは驚愕の声を上げる。

そして爆弾の嵐を駆け抜けて、敵であるボマーの眼前へと辿り着いたＥ２は、もう一度、取っ手部分のボタンを押す事で、ＥＳＭ０５の盾状に広がっていた部分が、元の棒状に戻り、トンファー形態へ

と戻る。

「はあああああああああ！！！」

更にＥ２は、トンファー状になったＥＳＭ０５を振り被り、強烈な一撃をボマーの顔面へと繰り出す。

その攻撃を回避しようと試みるボマーではあったが、自身が生成した爆弾の爆発によって発生した、爆煙によりＥ２の接近を知る事が遅れた為に、行動がワンテンポ遅れてしまう。

「ぐわっ！？」

トンファータイプのＥＳＭ０５により、素手の一撃よりも多少だがリーチの伸びた一撃が、ボマーの顔面を捉えて、後方へと吹き飛ばす。

［「さっきのは、中々良い一撃だったわよ！」］

ＥＳＭ０５と共に、拳を振り抜いたＥ２に、恵美が賞賛の言葉を送る。

「畳み掛けます！！！」

恵美の賞賛に対して、Ｅ２は答える間も惜しんで、ボマーへと追撃を仕掛ける為に、再び駆け出した。

「何で攻撃が効かないのよ!?」

E2とボマーが戦っている一方で、ガンナーがタイタンフォームとなったクウガに対して、光弾の嵐を浴びせ掛けながら叫ぶ。

ガンナーの叫び通り、クウガは大地を踏締めるが如く、ゆっくりではあるが、確実に一歩一歩、その足を進めていく。

「小手先の技が駄目なら……これでどうかしら!!!」

今のクウガに対して、多少の威力では足止めにすらならないと判断ガンナーは、遠距離戦から格闘戦へと切り替える為に、射撃を止めてクウガへと急接近する。

「私のパンチは凄いわよ!!!」

「ん!!!」

そう宣言すると同時に、手甲を装備して威力を増しているガンナーの右拳が、クウガの胸部へと叩き込まれるが、クウガは、その一撃をノーガードで迎え撃つ。

「まだまだ終わりじゃないわよ！！！」

クウガの対応に気分を良くしたガンナーは、更に二撃、三撃と拳を容赦無く叩き込んで行くが、それが彼女の驕りだったという事に、未だ気付いていない。

「はぁぁぁぁぁぁぁぁ……」

クウガはガンナーの拳の連打を浴びせ掛けられながらも、これから繰り出す一撃の為に、全身の力を上段に構えた、ＥＳＭ０２を変換して作り出した、タイタンソードへと注ぎ込む。

「さっさと倒れなさいよねえええ！！！」

自身の繰り出す連続攻撃に対しても、退く様子を見せない事に、業を煮やしたガンナーは、今まで以上に大降りに腕を振り被り、大きな威力を誇る一撃を繰り出そうとする。

しかしその一撃が、クウガに届く事は無かった。

「うをおおおおおりゃあああああ！！！」

クウガが最大級に溜め込んだ力を乗せて、タイタンソードを振り下ろしたのである。

「甘いわよ！」

しかしガンナーも、この攻撃は予め予測しており、笑い混じりに言いながら、繰り出した拳止めると同時に、もう片方の拳を交差させて、下半身の重心を低く構え見事な防御姿勢を取った。

ガンナーの考えとしては、クウガの一撃を防ぎ切り、その隙にカウンターとなる一撃を叩き込む手筈でいた。

そして予想通り、頭上から振り下ろされたタイタンソードが、ガンナーの構えた手甲へと吸い込まれて行く。

「これを防げば私の勝ちよ！！！」

その瞬間に勝利を確信したガンナーが宣言するが、ここで彼女にとって予想外の事態が発生する。

「な、何なのよ！？この力！？」

クウガの一撃を受け止めたガンナーに対して、その一撃を直接受け止めた手甲部分を伝い、予想していた以上の衝撃が全身へと駆け抜けたのだ。

ガンナーはクウガの攻撃を、決して軽んじていた訳ではない。

それなりの高い威力と、自身の防御に自信を持っていたからこそ、この作戦に踏み切ったのだ。

ただクウガの繰り出した一撃が、その予想を大きく上回っていた。

それだけなのである。

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおりゃあああああああああ！！！！！！！！！」

そしてクウガは、ガンナーの防御に構う事無く、無心で更なる力を、その叫びと共に、己の信じる一撃へと込める。

「……もう……これ以上は……きゃあああああ！？」

その攻撃は、ガンナーの耐えられる限界を超えて弾き飛ばし、渾身の力で振り下ろされたタイタンソードは、コンクリートで固められた地面に突き刺さり、新たに大きな亀裂を生み出した。

「……な、なんて馬鹿力よ……ちょっと、嘘でしょ！？」

クウガの放った予想外の威力を持つ一撃で弾き飛ばされたガンナーが、クウガに対して驚愕の言葉を口にするが、その途中である異変に気付き、更なる驚愕に、その声色を染める。

タイタンソードによる一撃を受け止めたガンナーの手甲に、大きな亀裂が走っており、その亀裂は加速度的に広がって、終には手甲そのものが、粉々に砕け散ってしまったのだ。

「……嘘でしょ……」

その瞬間にガンナーは、放心気味に呟くのと同時に、自身が現在戦っている相手が、己よりも格上の戦士である事を思い知った。

クウガとE2が其々の戦いを優位に進める最中、車椅子を壊されて、移動手段を失ってしまったはやては、その戦いの推移を見守っていた。

「五代さん!!!長谷川さん!!!負けたらあかんよお!!!」

はやては自分を守る為に戦ってくれている、二人の仮面ライダーへと、精一杯の声援を送る。

五代が目の前で変身した事に、心から驚いたはやてではあったが、はやてにとっては、ただそれだけの話だった。

確かに五代が、普通の人間とは言えない存在なのかも知れないという事を、はやても理解はしているが、五代とはやての出会いの経緯を考えれば、今更という感想しか抱くだけだったのである。

何よりもはやては、この一週間という時間の中で、五代が優しい心の持ち主だという事を知っていた。

その五代が、自分を守ると言ってくれたのである。

だからはやては、自分の為に戦ってくれている五代、仮面ライダークウガに、そして後から駆け着けてくれた、もう一人のライダー、仮面ライダーE2に、精一杯の応援をするのが今の自分が出来る事だと信じて、声を張り上げ続ける。

「頑張ってえええ！！って……きゃあああああああ！？」

しかしはやての声援は、次の瞬間には悲鳴へと変わってしまう。

それはクウガとＥ２が劣勢に追い込まれたからという訳ではない。

「は、離して……」

声援を送り続けるはやてを、後ろから羽交い絞めにした、ガンナーとボマーに続く、第三のはやてを狙う者の仕業であった。

その者は、灰色の包帯を全身に巻き付けており、ミイラを彷彿とさせた姿で、頭部の瞳は血の様な、真紅の色で輝いているホルダーである。

更に付け加えて、このホルダーが唯一ミイラと、決定的に違う部分を挙げるとすれば、それは背中から生えた二枚のコウモリに近い黒い翼ぐらいのものだ。

しかもその翼は、はやてを羽交い絞めにすると同時に、大きく羽ばたかせて、その身体を闇が支配する空へと浮ばせ始める。

「あれは……ホルダー！？」

はやての悲鳴に反応したＥ２が、ボマーに追撃する手を止めて視線を上に向けながら叫ぶ。

「はやてちゃん！？」

それに続き、クウガも振り向き様に叫ぶと同時に、はやてを助ける為にこの場を離れて、はやてとホルダーの後を追おうとするのだが……

「私が簡単に、ここを通すと思ってるのかしら？」

クウガの一瞬の隙を突いて、劣勢となっていたガンナーが、クウガの進行方向に回り込み、行く手を塞いでしまう。

「……この先は通さない！」

E２の方も同様に、ボマーがはやてとの間に回り込んで、ガンナーとほぼ同じ内容の言葉を言いながら、その進路を遮る。

「五代さーん！長谷川さーん！」

二人のライダーが、はやての元に辿り着けないで居る間にも、はやての助けを求める声が段々と遠く、小さくなっていく。

このままでは、はやてを連れ去られてしまう。

クウガとE２の脳裏に同じ考えがよぎったその時、夜の闇を一迅の光が駆け抜けて、はやてとホルダーの元へと向かっていった。

港での戦いを終えて、俺達がハンターと同様の二つの反応が確認された地点に、急ぎ向かっていたその時である。

『マスター！現在向かってる地点に、新たなホルダー反応だ！』

ベルトの形状をしているメカ犬から、更なる混乱をもたらす報告をされてしまう。

「本当かメカ犬！？」

『うむ！間違い無い！更にこの反応は少しずつ遠ざかっている……この周囲の建築物を無視した移動方法は……恐らくだが空を飛んで移動しているな』

「空を飛んで……」

はやてちゃんが狙われているという事実を考慮すると、この状況はかなり拙いかも知れない。

『それでマスター、このまま目的地を目指すの？それとも、新しいホルダー反応を追った方が良いのかしら？』

俺とメカ犬の話を聞いていたチェイサーさんが、俺にこの先の行動指針を求めて来た。

チェイサーさんの言う通り、俺はどちらに向かうかを、今すぐに選ばなければ行けない。

恐らくは、どちらに向かったとしても、戦いになる事に変わりは無いだろうが、現状の流れによって、この選択はかなり大きな意味をもたらす事になるかもしれないのである。

「なあ、メカ犬」

『どうした？マスター』

俺はメカ犬に一つだけ、確認を取る事にした。

「ホルダー反応が、俺達の向かっていた方向から離れて行ってるって言っていたけど、最初にあったハンターと同質の反応は、二つともまだその場所に残っているのか？」

『……うむ。マスターの言った通りだ。離脱して行くのは、ホルダー反応が一つのみで、残りの二つは今も同じ場所に留まり続けているぞ』

メカ犬は、俺の質問に淀み無く、事実を俺にも分かり易く説明してくれた。

「それなら……俺達が追うべきなのは、多分だけど移動を続けているホルダー反応の方だ」

『あら、何でそう思うのマスター？』

『うむ……』

俺の決断に対して、チェイサーさんが、質問を投げ掛け、メカ犬はその場で考え込む。

「確信がある訳じゃないんだけど、多分今も動かずに居る二つの反応は、足止めだと思うんだ」

メカ犬の言っている事が、全て正しいのであれば、あの二つの反応は、ハンターと一緒に居た仮面ライダーに違い無い筈である。

はやてちゃんには、全力で戦えない状態かもしれないとは言え、クウガに変身出来る五代さんが付いているのだ。

更に其処へ、E2が駆け着けて居れば、並みのホルダーではどうにもならないだろう。

足止め出来る力量があるとすれば、余程強力な能力を秘めたホルダーでない限り、オーバーとメルト位の筈である。

その二人が出て来ていないという事は、その役目をハンターと一緒に居た二人の仮面ライダーが勤めていると考えるのが最も合理的な判断だと言える。

「奴らがあの場に留まって、足止めをしているとしたら、その場所を離れて行くホルダーは、重要な役目を担っている可能性が高いと思うんだ」

『……そうか。マスターの読みが正しいとすれば、今ワタシ達が追わなければならないのは、確かにホルダーの方で間違い無いな』

俺の言葉から全ての考えを察したのであろう。

メカ犬が俺の意見に賛同する。

『目的地が決まったなら、飛ばすわよん?』

「お願いしますチェイサーさん!!!」

急遽として目的地を変更した、俺達は夜の海鳴市を駆け抜けて行く。

そして俺の予測は……

夜空を飛ぶホルダーを、目視で確認出来る場所にまで辿り着く事で、

正しかったのだと証明されたのである。

## １００万ＰＶ突破記念作品　仮面ライダーシード＆仮面ライダークウガ　繋がる世界

映画の内容は詳しく言えませんが、まさかのという展開が多々ある事だけは確かです。

それではまた次回でお会い致しましょう。

## １００万ＰＶ突破記念作品　仮面ライダーシード＆仮面ライダークウガ　繋がる世界

まさかの連続更新再びです。

そんな訳で今回も楽しんでいただけたら幸いです。

『見えたぞマスター！』

メカ犬の声が俺の耳に届くと同時に、夜空を見上げると、まるでホラー映画に出てくる様なミイラ男にしか見えないホルダーが、背中からコウモリに似た翼を生やして、空を飛んでいた。

しかもそのホルダーが腕に抱えているのは、俺の良く知る女の子だったのである。

「はやてちゃん！？」

『どうやらマスターの選択は、残念だが正しかったようだな』

はやてちゃんが連れ去られようとしている事は、半ば予測をしていたのが、いざそれを目撃してしまうと、驚愕の声を出さずにはいられなかった。

メカ犬の言う通り、出来る事なら外れていて欲しかったというのが、俺の正直な本音である。

しかし、最悪な事態を想定したからこそ、今ここで俺達は、希望を掴むチャンスを手にしているとも言えるのは、皮肉以外の何者でもない。

「頼みます！チェイサーさん！」

『任せておいてマスター！』

俺はチェイサーさんと互いに合図を送りながら、ベルトからタッチノートを引き抜き、ボタンを押してから、すぐさまチェイサーさんの座席シートを足場に跳躍する。

『ホバーチェイサー』

その直後、音声が聞こえると同時に、チェイサーさんのボディーが、地を駆けるバイクモードから、大空を自在に飛ぶ事の出来る、ホバーモードへと変形を果たす。

空中へと跳躍した俺がタッチノートをベルトに差込み、再びチェイサーさんのシートに着地するのと時を同じくして、チェイサーさんは一気に上空へと舞い上がる。

『さあ、飛ばすわよん！』

「はい！」

チェイサーさんは俺の了解を得ると、更に加速してホルダーの飛んで行く方向へと爆進する。

俺達とホルダーの距離は、瞬く間に縮まっていく。

『はやて嬢をホルダーから、奪い返すぞ！』

『このまま突っ込むわよマスター！』

「え！？ちょっとま……」

ホルダーを背後に捉えると同時に、メカ犬が合図を送り、チェイサーさんがその言葉通りに、俺が止める暇も無く、凄まじい勢いで特攻を仕掛ける。

不意打ち気味に背中を強襲されたホルダーは、その手からはやてちゃんを取り零した。

「きゃあああああああああああああああああああああああああ落ちるううううううううううううううううううううううううう！！！！！！！！！！！？」

そのおかげで、ホルダーの呪縛から逃れる事が出来たはやてちゃんだったが、今度は重力の法則に縛られて、悲鳴を上げながら、地面に向かって落下していく。

「だからちょっと待てって言っただろおおおおおおおおおおおお！！！！！」

メカ犬とチェイサーさんによる、強行手段によってもたらされた結果に、不満をぶつけるのも惜しんで、俺は叫びながらチェイサーさんから飛び降りて、落下していくはやてちゃんを追いかける。

『マスター！このままでは、間に合わないかもしれないぞ！？』

「分かってるなら、最初からもう少し、ましな作戦を考えてくれよ……」

必死で追いかけるが、どんなに心の中で急ごうと念じても、実際に俺の落下スピードが速くなる訳ではない。

だが時間は待ってくれない上に、このままでは、メカ犬の言った通り、間に合わないという最悪な結果となってしまう。

ホルダーに特攻を仕掛けたチェイサーさんが、追い着いてくれれば話は早いのだが、地面に落下するまでにあまり余裕が無い以上は、過度な期待はするべきじゃない。

そして何よりも、今はこれ以上愚痴を言うより、はやてちゃんを救う手段を考えた方が建設的である。

「何か……何か方法は無いか！？」

『落下スピードを増す推進力があればあるいは……』

「推進力って……俺はチェイサーさんみたいにジェット噴射は……そうか！！！」

メカ犬との会話から、俺は一つの作戦を思いつく。

「メカ犬！サーチフォルムだ！」

『うむ？何故ここでサーチフォルムを？』

「説明してる暇は無いから、ぶっつけ本番で行くぞ！」

俺はメカ犬にサーチフォルムになる事を伝えると、返事を聞く時間も惜しんで、ベルトの右側をスライドさせて、青いボタンと黄色いボタンを順番に押していく。

『サーチフォルム』

『サーチバレット』

ベルトから流れる音声に呼応して、メタルブラックのボディーが、スカイブルーに染まり、右手にはサーチフォルムの専用銃、サーチバレットが生成される。

サーチフォルムは、俺の五感を最大限に高めるのが特徴なのだが、今はその能力よりも、右手に持ったサーチバレットに大きな意味があった。

『サーチフォルムになったのは良いが、ここから何をする気なのだマスター？』

「こうするんだよ！！！」

メカ犬の言葉に対して、俺は行動で指し示す。

タッチノートをベルトから引き抜き、そのタッチノートを、サーチバレットの溝部分へとスライドさせる。

『ロード』

音声が鳴り響く事を確認した俺は、タッチノートを再びベルトへと差し込む。

『アタックチャージ』

ベルトから発生した稲妻の様な光は、右腕のラインを伝いサーチバレットの銃口へと集約していく。

そして俺は光の集約したサーチバレットの銃口を、上空へと向ける。

『……そうか！マスターの考えはこれだったのか！』

俺の一連の行動を見て、これから何をしようとしているのか、メカ犬も察したらしい。

「こいつで決めるぜ」

サーチバレットの引き金を引くと銃口から、数珠繋ぎとなっている光弾が連続で射出される。

俺はその反動を大きく受けて、落下速度を急激に加速させていく。

ヒントになったのは、メカ犬の言った推進力という言葉だった。

俺はその言葉で、サーチバレットによる技の一つ、ガトリングブーストを推進力に利用する事を思いついたのである。

ガトリングブーストによって得たスピードは、一気にはやてちゃんとの距離をゼロにしてくれた。

「もう大丈夫だよ……」

ホルダーの手から離れた後の悲鳴以降、やけに大人しいと思ったら、はやてちゃんは途中で気絶していたらしい。

怖い思いをさせてしまったのは申し訳ないが、変にパニックを起こされるよりは安全だろう。

推進力に利用していたサーチバレットを投げ捨てて、はやてちゃんを抱きかかえた俺は、着地の衝撃に備える。

『気張れよマスター！！！』

「はやてちゃんは、絶対に守る！！！」

俺とメカ犬が言葉を交わしたその直後に、俺達は命懸けの空中遊泳を終えて、再び地面にその足を踏みしめた。

相当の負荷が、俺の全身を駆け抜けるが、変身している俺はその衝撃にも、何とか耐え切る。

着地した足元には、亀裂が走っており、これがもしも生身だったとしたら、まず命は無かった事だろう。

「……何とか間に合った」

無事に着地する事に成功した俺は、大きく深呼吸しながら、安堵の言葉を呟いた。

安全が確保出来た事を確認した俺は、街灯も無い暗闇に包まれた周囲を観察する。

そしてサーチフォルムで強化された俺の聴覚が、微かな水音を察知した。

その水音は、川を流れる水の音だったのである。

更に聴力と同様に強化されている感覚の一つで見渡せば、大きな川がすぐそばにある事が分かった。

どうやら俺達が現在居る場所は、近くの河川敷の様である。

この場所が河川敷である事を確認したのも束の間、先程の小さな水音とは違う、大きな水音が聞こえてきた。

それはチェイサーさんの特攻によって、飛行バランスを失ったホルダーが、川の中に落ちる音だったのだが、その音に気を取られた一瞬が、決定的な隙を作ってしまう事となってしまう。

『マスター！もう一つホルダー反応がすぐ近くにあるぞ！』

メカ犬の注意を促す声が、河川敷に響くと同時に、俺の背中に衝撃が走る。

「がはっ！？」

俺は気付いた時には、その衝撃で、吹き飛ばされてしまっていた。

辛うじてはやてちゃんだけは、怪我をさせない様に、庇いながら倒れる事は出来たが、俺の背中を襲った衝撃は、先程の着地以上の威力を誇っており、呼吸をする事すら苦しい。

『大丈夫かマスター！？』

「な、何とかな……」

心配するメカ犬の声に答えながら俺は、気絶したはやてちゃんを、

静かに地面に寝かせた状態で立ち上がる。

「あれ？ちょっと用心し過ぎて威力が弱かったかな……やっぱり僕には、こういう地味なやり方は似合わないかもね？」

立ち上がった俺の目の前で悠然と佇む、俺の背中に衝撃を与えて吹き飛ばした張本人である奴が、相変わらずの軽い口調で言い放つ。

それは藍色の怪人、オーバーだった……

「……丁度あんた達に、聞きたい事があったんだ。どうして、はやてちゃんを狙うんだ！？」

俺は闇討ちを仕掛けてきたオーバーを見据えながら、ずっと疑問に思っていた質問を投げかける。

「別に君に言う義務は無いんだけどね。まあ……知らない仲じゃないし、ちょっとだけ教えてあげようかな」

『もったいぶってないで、早く答えてもらおうか！？』

相変わらずの軽い口調で、ふざけた言い回しをするオーバーに対して、メカ犬が怒気を強めた言葉で続きを催促する。

「気が短いなあ。まあ、別に良いんだけどね……彼女は僕達に必要な、選ばれた巫女なんだよ」

「選ばれた巫女？」

『一体どういう意味だ？』

オーバーの発言に俺とメカ犬は、ただただ疑問符を浮かべた。

「サービスはここまでだよ」

俺とメカ犬の反応を、楽しむかのように観察していたオーバーは、そう言うと同時に右手の親指と人差し指を弾いて、乾いた音を発生させる。

その直後、突如として川の中から、無数の帯状の何かが飛び出して、俺の四肢へと巻きつく。

「何だと!?」

オーバーに気を取られていた上で仕掛けられた不意打ちとは言え、サーチフォルムの反応速度を上回るその速度は、凄まじいものがある。

「この……」

俺はその帯状の物体を何とか引き剥がそうともがくが、いっこうとして、緩む気配すら見えない。

「凄いでしょ?そのホルダー。なんたって特別製だからね～」

完全に動きを封じられた俺に、オーバーが間延びした言い方で話しかけてくる。

そしてオーバーの言葉から察するに、この川から伸びている帯状の物体の正体は、ホルダーの様だ。

だが俺が気になるのは、それだけではない。

『……特別製だと？』

メカ犬も俺と同じ疑問を持ったのか、俺が聞こうとした質問を、オーバーに対して言い放つ。

「そのホルダーはね……特別な夢を糧にして生まれたんだよ」

「特別な夢？」

「それ以外は素体の人間すら使ってないのに、こんな上質のホルダーが出来るんだもん。凄いよね～」

『素体も無しに、これだけの力を持ったホルダーを生み出しただと……それは一体何者だ！？』

オーバーの言葉に、俺達に動揺が走る。

そんな状態の中でも、メカ犬は更なる質問を、オーバーに対して投げかけるのだが、オーバーは両肩をわざとらしく、一度だけ上下に揺らすと、笑いを含めながら言う。

「サービスはここまでって言ったでしょ？後は自分達で調べてみなよ」

オーバーは俺達にそう言い放つと、最後に君達に後があったらねと付け加えて、先程と同じ動作で、再び指から音を鳴らす。

それを合図にしたのだろうか。

四肢を束縛していたホルダーの帯が力を一気に増して、俺の身体を水中へと引きずり込もうとしてくる。

「うわ！？」

『マスター！？』

俺は何とかその力に抗おうと試みるが、帯の力は緩む事はおろか、更にその力を増していき、ついには力負けして、俺は川の中へと引きずり込まれてしまったのである。

「はやてちゃん…・・・」

水中へと沈む直前に、最後に俺が発しようとした言葉は、水泡の中へと溶けて消えた……

ホルダーによって、川の中へと引きずり込まれたシードを見送りながら、オーバーは未だ気絶して眠り続けているはやての元へと、ゆっくりと移動する。

「さてと、それじゃあ僕は、あのホルダーが時間稼ぎをしてる間に、お仕事をしましょうかね」

気絶したはやての前にまでやって来たオーバーは、そう言いながらはやてを抱きかかえた。

「それじゃあ参りましょうか。闇を復活させる為の巫女様？」

オーバーからその言葉送られた、はやてではあるが、意識が無い故に返事は無い。

そして返事が無いと分かっていながらもオーバーは、更に気絶しているはやてに話し掛ける。

「こんな小さな女の子に……あんな怪物を蘇らせる力があるなんて……分からないもんだよね」

オーバーは気絶しているはやてを観察しながら、感慨深く呟くと、この場を後にする為に、足に力を込めて、一気に跳躍した。

「これで巫女は確保出来たし……残るは【器】だけか……」

闇夜の中を飛びながらオーバーの放った言葉は、共に流れる風に乗って、静かに漆黒の闇へと消えていった。

## １００万ＰＶ突破記念作品　仮面ライダーシード＆仮面ライダークウガ　繋がる

次回で取り敢えず中盤のバトルは、一段落すると思います。

そしてそのバトルの締めを飾るのは、久々に水中で本領発揮する彼女？の出番かも知れません。

## １００万ＰＶ突破記念作品　仮面ライダーシード＆仮面ライダークウガ　繋がる

少し間が開いてしまい申し訳ありませんでした。

パソコンのプログラムがいつの間にか変わってしまいエラーでインターネットに繋げなかったもので……

そんな訳で今回は、久しぶりのメカ海大活躍な回となっております。

楽しんでいただけたら幸いです。

ホルダーによって水中に引きずり込まれた俺は、何とかして四肢の拘束を外そうともがくが、いっこうとして緩む気配すらない。

ちなみに俺の四肢を拘束している帯状の物体についてなのだが、これはホルダーの全身に巻きついている、包帯の様な部分が本体から伸びている事が、水中に入った事により分かった。

しかし相手の能力に気づいても、現状を打破出来なければ意味が無い。

それに今は、このホルダーの相手をする時間すら惜しいのが現状だ。

「早く陸に上がらないと、はやてちゃんが危ないっていうのに……」

俺がこうしている間にも陸には、はやてちゃんを連れて行くと公言したオーバーが居るのだ。

戦いの中において、冷静でいなければならないとは分かっていても、どうしても気持ちばかりが焦ってしまう。

『少し落ち着けマスター！』

ただがむしゃらに、四肢を動かそうとしてもがく俺に対して、メカ犬が叫ぶ。

「……メカ犬？」

『焦る気持ちはワタシも理解出来る……しかし今は目の前に迫る脅威を排除しなくては、誰も助ける事など出来ないぞ！』

メカ犬は焦る俺に、諭す様に語り掛けてくる。

でも俺は……

「分かってる……分かってるけど俺は！」

メカ犬の言いたい事は、俺にだって分かっているのだ。

しかし分かっているという事と、納得しているという事は別の話なのである。

ここでホルダーと戦う事に集中すれば、勝つ可能性は飛躍的に跳ね上がるだろう。

でもそれを選択すれば、その間にオーバーがはやてちゃんを連れ攫うという暴挙を、黙認してしまう事に他ならない。

『マスターの言いたい事は分かる。だがここでマスターが戦いに敗北する様な事があれば、はやて嬢を救い出せる可能性も確実に低下するのだぞ！？』

「……」

『オーバーは、はやて嬢の事を【巫女】と言っていた。それがどういう意味を持つかは分からないが、態々そんな言い回しをすると言う事と、ここまでの強い能力有したホルダーを素体無しで作り出したという特別な夢……今までの奴らの行動からワタシが推測する限

りでは、未だ憶測の域を出ないが、何かしらの特殊な段階を踏む可能性が高い』

「それって……」

『少なくても奴らの計画には時間的なインターバルが発生する筈だ。残念だが既にオーバーの反応がワタシのレーダーからも消えている事から考えて、はやて嬢は連れ去られたと断定するしかないだろう。ならばワタシ達がすべき事は決まっているのではないか！？』

メカ犬から出た言葉は、半ば俺も予想していた言葉だった。

既にはやてちゃんが連れ去られてしまっているという可能性が高い事は、気づいていたが認めたくなかったのである。

その可能性を認めてしまえば、俺は友達を助けられなかったという事実を肯定してしまう事に他ならなかったから……

もしかしたら俺は、その事実に心が耐えられないかもしれない。

だから俺は無意識の内に、気づかない振りをする為に、ただがむしゃらに動こうとして、自身の思考を曖昧な状態にしようとしていたのではないだろうか……

でもそんな俺に、メカ犬事実を告げた。

……そして同時に、はやてちゃんを救い出せるかもしれないという希望も同時に示してくれたのである。

それは根拠の無い、そうであって欲しいという、楽観的な考え方だ。

だけど……それを誰が言ったのか、俺にとってそれが最も大切な事だった。

メカ犬が……俺の信じる相棒がそう言うのであれば、例えそれを他の誰が否定したとしても、相棒の言葉を俺だけは最後まで信じられる。

俺は手足に無理やり加え続けていた力を一旦緩めて、熱く火照った頭を、水の流れを感じる事で、冷やすと同時に研ぎ澄ませていく。

「……そうだな。今は……はやてちゃんを助ける為にも、ホルダーを倒す事に集中しよう！」

そうする事で冷静さを取り戻した俺は、ゆっくりとした口調で言葉を紡いだ。

『それでこそマスターだ』

今の自分の状態を、当然とでも言う様な、メカ犬の少し砕けた言い方が、今の俺にとっては何よりも心強い。

「それでどうする？このままじゃ、何も出来ない事に変わり無いだろ？」

『うむ……』

適度に冷却された頭で、俺とメカ犬は現状をもう一度現状見直す。

今の俺は完全に四肢の動きを封じられている上に、どれだけ力を入

れても、多少動く事は出来ても、振り解く事が出来そうに無いという事だ。

水中に引きずり込まれてホルダーとの距離が縮まり、その際に生まれた包帯の様な帯の余裕分で、腕をベルトの辺りまで持ってこれる程度には、動かす事が出来る。

「パワーフォルムになれば、この拘束から脱出出来そうだけど、また近づく前に捕まっての繰り返しになりそうだし……」

『……ならば、元となる部分を根絶するのが、手っ取り早いのではないか？』

「……そうか。なら一度に、広範囲を攻撃して全部潰してみるか！」

『うむ！』

これからの行動指針を決定した俺は、拘束されて不自由な腕を、少しずつ動かしてベルトからタッチノートを取り出して、操作を開始する。

『ダイバー・コール』

タッチノートから音声が流れると、僅かな間を置いて、水中に戦場とは場違いな陽気な歌が聞こえてきた。

『アタイは～海の～妖精さ～ん♪』

女性特有の高い声質の歌の聞こえる方向を振り向けば、其処には水中を優雅に泳ぐメタルブルーのボディーを持つイルカ的な物体が、

俺の視界へと飛び込んで来る。

『アタイを呼ぶってことは～マスターはピンチなのだわさ～？』

俺に近づくなり、メカ海は相変わらずの緊張感を無視した、のほほんとした口調でマイペースに周りを回転する様に泳ぎ回る。

『ふざけるのは後だ！』

『了解だわさ～』

メカ犬の注意にも、メカ海はそのマイペースな態度を崩す素振りを、一欠けらとして見せようとしないが、一応は肯定の返事を返す。

「それじゃあ……行くぞ！」

俺はメカ犬とメカ海の掛け合いを聞きながらも、タッチノートの操作を進めていく。

『スタンディングモード』

再びタッチノートから、音声が流れると同時に、メカ海がアタッチメントパーツへと変形する。

その間に俺は、タッチノートをベルトに差込んでから、続いてベルトの左側をスライドさせて、逆転への布石を準備していった。

『超ファンタスチック☆合体なんだわさ～』

其処にアタッチメントパーツへと変形したメカ海が、どういった原

理で水中を泳いでいるのか、頭の部分に昭和の魔法少女みたいな台詞を付けた言葉を、その独特なのほほんボイスで言いながら、直接ベルトの左側の差込み口へと突っ込んだ。

『サーチ・ダイバー』

その経緯はどうあれ、無事にアタッチメントパーツが差し込まれた事により、サーチフォルムのスカイブルーのボディーに、メタルブルーの装甲が展開して、次々と全身に装着されていく。

何処となく、イルカを彷彿とさせる頭部に、重厚な装甲と、全身に取り付けられたスクリュー、それにパンチンググローブを彷彿とさせる腕部という、水中戦を想定されたダイバーモードとなった俺は、自身も回転しながら全身のスクリューを全開で回す事で、俺を拘束するホルダーの包帯をスクリューへと巻き込んで引き千切り、身体の自由を取り戻す。

『反撃が来る前に、此方から攻めるぞマスター！』

「ＯＫ！」

ホルダーの能力から逃れた俺は、メカ犬の指示に頷きながら、アタッチメントパーツのレバー下に存在するボタンを押した。

『サーチランチャー』

ボタンを押すと即座に、俺の両肩にはミサイルポットが生成され、複眼の上には、薄い青のバイザーが装着される。

そして急いで攻撃準備を整えた俺は続けざまに、先程押したアタッ

チメントパーツの、ボタン上にあるレバーを下に引く。

『マックスチャージ』

ベルトから発生した光は両腕のラインを通じて肩まで伸び、両肩のサーチランチャーへと集約される。

「狙いはホルダーの全身から触手みたいに伸びている、包帯部分全部で頼むよウミちゃん！！！」

『合点承知だわさ～』

俺の言葉にメカ海は意気揚々と答えた。

『ターゲット指定ロック。命中精度補正、全システムオールクリアだわさ～』

メカ海の語尾を抜かしては真面目となった口調を聞きながら、バイザーに次々と映し出される光の点が、これ以上増えない事を確認して、俺は必殺の一撃を放つ。

「ダイバーフルバーニング」

俺の声を合図に、両肩のサーチランチャーから大量の小型ミサイルが発射されて、ホルダーの触手状に伸びる包帯を、次々と爆撃していく。

「うをおおおおおおおおおおおおおお！！！！！」

更に俺は、サーチランチャーからミサイルを発射し続けた状態で自

らを鼓舞するために叫びながら、背部のスクリューを全力で回転させつつ、ホルダーへと一気に接近する。

最初から俺の狙いは、ホルダーへと近付く事にあった。

遠距離からの攻撃だけでは、あの自在に操る触手の様な包帯が邪魔で、決定的なダメージを与えられるか分からなかった事と、そのまま近付こうにも、ダイバーモードの機動力だけでは、やはりあの包帯の突破は無理だと考えたのである。

だから俺は、その邪魔な包帯全てを攻撃しながら、一気に距離を縮めるという作戦を取ったのだ。

その作戦は見事に成功して、俺はホルダーが放つ大量の包帯が、ミサイルによって次々と爆ぜていく爆発地点を掻い潜り、ホルダーの懐へと飛び込んだのである。

「この距離なら確実に行ける！！！」

俺は絶対なる確信を持ちながら、ベルトの右側をスライドさせて、黒いボタンを押す。

『ベーシック・ダイバー』

ボタンを押した直後、スカイブルーのボディーはメタルブラックへと染まり、両肩のサーチランチャーと複眼の上に装着されていたバイザーが光に戻り消えていく。

「はあああ！！！」

ベーシック・ダイバーへとフォルムチェンジした俺は、気合を込めた叫びと共に、四肢のスクリューを回転させながら威力の上乗せされた拳と蹴りの嵐を叩き込む。

スクリューの恩恵によって繰り出される連続攻撃に怯むホルダーを目にして、俺は決着をつける為に、再びアタッチメントパーツのレバーを下に引いた。

『マックスチャージ』

サーチ・ダイバーと同じように、ベルトから発生した光が、今度は右拳へと集約して行き、ベーシック・ダイバーの分身体が、四体が生成される。

「こいつで決めるぜ」

四体の分身体が四方に散った事を確認した俺は、全てのスクリューを回転させて、光が集約された右拳を強く握り込む。

「ダイバーチェーンブロー」

次々と分身体が右拳をホルダーに叩き込み、最後に俺の右拳が、ホルダーの胸部を貫き、大きな爆発を引き起こした。

オーバーが素体が無いと言っていた事から、ホルダーが爆発して無へと帰った事を確認した俺は、川の中から上がる為に、薄っすらと月明かりが照らす水面を目指して、上昇を始めた……

『やはりはやて嬢は、オーバーに連れ去られた様だな』

「……ああ」

ホルダーとの戦いを終えた俺達は、川から出てすぐに周囲を捜索したのだが、はやてちゃんが連れ去られたという事実を確認する事しか出来なかった。

『アタイも、水辺を中心に探してみるんだわさ～』

ある程度の捜索を終えて、俺とメカ犬が話し合っていると、アタッチメントパーツとして装備され続けていたメカ海がそう言って、分離して通常のイルカ形態に戻ると、川へと潜って行った。

『探そうにも現状では、情報が少なすぎるからな……今はメカ海に任せて、マスターは少し休んだ方が良いだろう』

川の中に潜って行くメカ海を見送った後に、メカ犬がそんな事を口にする。

「はやてちゃんが危ないかもしれないのに、休んでられないだろ！

俺も……」

其処まで言ったところで、俺は急に立ち眩みを起こして、地面に片膝を着いてしまう。

「……あれ？」

今もまだ、ベーシックフォルムに変身している状態だというのにも関わらず、身体に力が入らなくなっている事に、俺は今更ながらに気づく。

『今日の夕方からここまで続く連戦もそうだが、スピード・ライガーの反動が、マスターの予想以上に、身体に残っている筈だ。メカ海だけでなく、ワタシ達も捜索するから、マスターは身体を休めておけ。肝心な時にマスターがそんな状態では、はやて嬢を助ける事など出来ないぞ？』

俺の身体の疲労と比べれば、はやてちゃんを探したいと思う気持ちが上回るのが、正直なところではあるが、確かにメカ犬の言っている事の方が正しいし、変身している状態で立ち眩みを起こす今の状態では、逆に足手まといになりかねないのがおちである。

「……分かった。今は休む事にするよ」

一度大きく深呼吸をして、身体の疲労を押して先走ろうとする気持ちを落ち着けながら、メカ犬の提案を受け入れると、タッチノートをベルトから外して、変身を解除した。

『……む！待てマスター今変身を解除するのは……』

変身を解除する途中にメカ犬が、何かを言おうとするが、その言葉は間に合わず俺は変身を解除してしまう。

その直後に背後から、河川敷に落ちている砂利を踏みつける靴の音が、俺の耳に届き急いで音のした方向に振り返ると、一人の人物が驚愕の表情を浮かべながら、俺とメカ犬をその視界に映していた。

「……五代さん」

数瞬の沈黙の後、俺はその人物の名前を、静かに呟いた。

**１００万ＰＶ突破記念作品　仮面ライダーシード＆仮面ライダークウガ　繋がる世界**

次回のお話からは、またオリジナルな解釈が一部入って来ると思いますので御注意くださいね。

それでは。

## １００万ＰＶ突破記念作品　仮面ライダーシード＆仮面ライダークウガ　繋がる

今回のお話から、かなり原作のクウガに無いと思われる解釈が入ると思いますがご容赦をお願い致します。

それでは今回も楽しんでいただけたら幸いです。

一人の少女を巡る激しい戦いから、半日程の時間が過ぎた頃。

夜の闇を静かに照らす月が沈み、全てを暖かく照らす太陽が空に輝いているというのに、その光が一筋すら届かない、海鳴市の地下に広がる今は使われていない旧時代の産物である、地下水道の開けた場所において、三人の若者と、藍色の怪人が対峙していた。

「……それじゃあ、あのホルダーは、オーバーさんが？」

「うん。君達の実力を疑ってる訳じゃないんだけど、保険を掛けておくのに越した事はないからね」

三人の若者の内の一人、この場では唯一、眼鏡をかけている青年、黒谷大地が藍色の怪人、オーバーに話しかけオーバーもまた、その話に耳を傾けて、時には質問に答えるといった対応をする。

「まあ、正直な話を言うと、私と大地だけじゃ、あの【八神はやて】って女の子を連れてくるのは無理だったと思うし、オーバーさんには感謝してるわ」

オーバーと大地の会話に割り込む様に、この場にいる三人の若者の中で、ただ一人の女性である、桐崎沙耶が右手の人差し指を、タクトを振るう指揮者の真似事をしながら、オーバーに感謝の言葉を述べた。

「はあ……結局は沙耶も大地も、途中で逃げ出したんだろ？情けねえ話だぜ」

新たに会話へと参加した沙耶に続き、頭髪を茶色に染めている、見るからに不良と分かる容姿をした青年、沢渡雄太が、大きな溜息を吐いた後に、辛辣な言葉を告げる。

「何よその言い方！」

「文句でもあるのかよ！？」

雄太の言葉に逸早く反応して、沙耶が元から吊り目気味であるその目を、怒りで更に吊り上らせる。

怒りを露にする沙耶に対して、雄太も反省するどころか、威嚇するかの様に睨み付けた。

「大体ね！雄太が言ってたたいして強くない白いライダーって何よ！？は赤かったし、青くなったり、紫になったりもするし、私の武器を砕いちゃう位、メチャクチャ強かったんだからね！！！」

「そんなの俺が知るか！？大体なあ……沙耶が舐めて掛かるから、そんな目に遭うんだっつうの！」

「あら？責任転嫁する気かしら？」

「責任転嫁してるのは、お前だろうが！」

「どう考えたって、私に嘘を教えた雄太の方が悪いのが原因で間違い無いでしょ！！！」

「俺は見たまんまを言っただけだろうが！其処まで面倒みきれるか

よ！？」

「何よ偉そうにしてさ～雄太だって、【今度は俺が勝つ！】とか息巻いてたくせに、オーバーさんから、沢山ホルダーの援軍を借りて、集団で襲いかかったのに、返り討ちにされて、ボロボロにされて海に突き落とされたんでしょ？そっちの方がよっぽど情けないんじゃないのかな～？」

「……女だと思って、甘くしてたらつけあがりやがって……」

「あ～ら？何だか茶色い毛並みの負け犬が、キャンキャン吠えてるわ」

「沙耶……それ以上言ったら、テメエの口に大地の爆弾突っ込んで、一生その軽い口を塞いでやるからな！！！」

「私みたいな可憐な女の子に、何て破廉恥な事言ってるのよ！この不良！！！」

「五月蝿いんだっつんだよ！誰が可憐だ！？この馬鹿女があ！！！」

雄太と沙耶の罵倒は、何時までも終わる事無く、延々と続いていく。

「……もうその辺りにしておきなよ二人とも」

両名の言い争いに割って入ったのは、大地だった。

「でもよ大地。沙耶が……」

「そうよ大地。大体ね。雄太が……」

不毛とも言える罵倒合戦の間に、仲裁するべく声を発した大地に対して、当事者である雄太と沙耶が、其々に相手への不安を口にする。

「あっはははははは！君達は何時も楽しそうで良いね！僕も見てるだけで、何だか楽しくなっちゃうよ！」

三人の様子を見ていたオーバーが、腹を抱えながら、盛大に笑い声を上げる。

「……ほら。このままじゃオーバーさんの腹筋が、笑い過ぎで痙攣するよ？」

オーバーの笑い声をＢＧＭにして大地がもう一度、仲裁の言葉を雄太と沙耶に送る。

大地の言葉と、オーバーの笑い声によって、すっかり毒気を抜かれてしまった二人は、無言で頷くと、そのまま罰の悪そうな顔をして、そっぽを向いてしまった。

「全く……この二人は……」

そうして取り敢えず言い争いを止めた二人を交互に見て、大地は中間管理職で悩む企業戦士の様な顔をしながら呟いた。

「はあ……笑った、笑った」

雄太と沙耶が言い争いを止めた事により、笑いの波が過ぎ去ったオーバーは、満足そうに胸を撫で下ろす。

「……それで話を戻すんですけど……」

オーバーの笑いが治まった事を確認した大地は、脱線した話題を元に戻す為に、再びオーバーに話し掛けた。

「うん？まだ何か聞きたい事があるのかな？」

「はい……」

問い掛けたオーバーに対して、大地は首を縦に振る。

「何かな？」

「あの……今回の僕達の任務だった、はやてという女の子の事何ですけど、【巫女】ってどういう意味なんですか？」

大地がオーバーにした質問に、多少の興味が湧いたのか、無言でそっぽを向き続けていた雄太と沙耶も、視線を大地とオーバーに向ける。

「……ああ。そう言えば君達には、連れて来て欲しいって事しか言ってなかったっけ」

思い出した様に、オーバーが言った。

「……はい。教えられないんでしたら、聞きませんけど、やっぱり気になるんで」

そんな様子を見せるオーバーに対して、大地は頷きながら自身の感じた疑問を素直に言った。

「う～ん……別にそんな大袈裟に隠す事じゃ無いんだけどね。いずれは分かる事だしさ」

「いずれは分かる？」

「あ！そうだ！」

大地の疑問にオーバーは相変わらずの軽い口調で、意味深な言い方をして大地の反応を楽しんだ後に、今思い出した様な言い方をして、両手を軽く叩いた。

「何ですか？」

「うんとね。今から僕が要求するものを連れて来てくれたら、【巫女】の事を説明してあげるよ。その方が説明し易いしね」

「……それは何ですか？」

「ふふ……それは【器】だよ」

大地達に教える交換条件として、新たな任務を伝えたオーバーの発したその言葉は、先程と変わらない軽い口調の筈なのに、何処か背筋を凍らす寒気を含んでいる感覚を、この場に居るオーバー以外の三人は覚えた……

「純。昨日の約束通りに来てくれて、本当にありがとう」

空の病室に入ると同時に、病室のベットに腰掛けながら、空が俺に対して開口一番に感謝の言葉を口にした。

はやてちゃんがオーバーに連れ去られた、その翌日の昼過ぎ、俺は昨日の夕方に交わした空との約束を守り、海鳴病院を訪れていた。

「それで……俺達に話したい事って何かな？」

「まあ、長い話になると思うから、二人とも座ってよ」

俺と一緒に病室に入って来た、五代さんが発した、当然と言える質問に対して、空はやんわりとした口調で俺と五代さんに、この病室に常備されている来客用の椅子に座る事を進めて来る。

予め俺達が来る事を想定して、準備しておいたのだろう。

空と向かい合う形で置かれていた二つの椅子に、俺と五代さんは空が促されるままに腰を下ろした。

隣に座る五代さんを見ながら、俺は昨日の夜の事を思い出す。

昨日の夜、俺は変身を解除する瞬間を、五代さんに目撃された。

元々は昨日の時点で話すつもりでいたのだが、この様な形で俺が仮面ライダーである事を明かすとは、思っても居なかった……

その経緯や本質が異なっているとはいえ、同じ様にクウガへの変身能力を持つ五代さんがパニックを起こす事は無く、俺は自分が仮面ライダーだという事実も含めて、はやてちゃんの事も順を追って説明していった。

大体の説明を終えた俺に五代さんは、これ以上の話は今日までにして、明日になったら改めて話そうと言って話を其処で切り上げて解散となったのだが、その時俺の目には、何処か五代さんが苛立ちを我慢している様に見えた気がする。

ただの予測でしかないのだが、五代さんは怒っていたのだと思う。

はやてちゃんが連れ去られたという事実もそうだが、その怒りの矛先の何割かが、俺にも向けられていると感じたのだ。

今俺の目の前に居る五代さんが、俺が前世でテレビ越しに視ながら憧れていた、フィクションの五代雄介では無く、現実を生きている一人の人間だと分かっているのだが、その考え方が俺の良く知る五代雄介と同じだと仮定すれば、先程感じた俺に対しての怒りの理由も、少しだけ納得出来る。

人は誰もが生きる上で其々に大きな責任を持ち、時には命を賭さなければ行けなくなる瞬間が来るかもしれない……

それは大切で尊い事かも知れないけれど、その人が命を賭す事で、

誰かが悲しむ事になる。

命を賭した本人から、笑顔が消えてしまう事だってあるかもしれない。

誰よりも皆の笑顔が好きな五代さんは、きっとそれを知っているから怒っているのではないだろうか。

きっと俺が戦う事で、俺の身近な人達は心配するだろう。

だからこそ俺は、余計な心配をさせない為に、一部の例外を別として、普段から接する身近な人の殆どに、自分が仮面ライダーとして、戦い続けている事実を隠して戦い続けている。

それがただの自己満足でしかない、偽善だと分かっていたとしてもだ。

そして何よりも俺はこの戦いで、いつか自分自身の笑顔を……その命を失うかもしれない。

恐らく五代さんはこれ以上、俺に仮面ライダーとして戦って欲しく無いのだろう。

ただの自惚れかも知れないが五代さんは、俺の笑顔も守りたいと思ってくれている……

昨日の様に、自分自身の身を削りながら、戦いを続けようとする俺に対して、苛立ちを覚えたのかもしれない。

俺が知っている五代雄介という人物は、誰よりも優しくて強い人だ

から……

だから俺は彼に示さなければならない。

己の覚悟と信念を……

そうしなければ、俺は五代さんと肩を並べて戦う事は出来ないだろう。

俺は其処まで考えた所で、五代さんから視線を外して、正面に居を向き、今の状況を作った張本人である空の、真紅の瞳を見詰める。

五代さんと話す事も俺にとって大切な事ではあるが、今はそれ以上に空の話を聞かなくてはならない。

昨日の夜に、五代さんと別れて俺が休んでいた間も、メカ犬達が調査を続けてくれているのだが、有益な情報は何も得られなかった。

唯一情報と言えるかも知れないのは、メカ虎が言っていた、港で発見出来なかった事から、ハンターが今も健在の可能性が高いという事だけである。

これも大切な情報には違いないのだが、今一番知りたい情報という訳では無い……

だから俺は、少しでも情報を得る為にここに来た。

新たな情報は得られなかったが、休んでいる間にも、昨日の戦いの中で何か、重要なヒントが出ていたのではないかと、考え続けていく内に、今回の様々な出来事が、一つの線で繋がって居るのではな

いかと思えて来たのである。

まずは今から一週間前に、大きなホルダー反応を察知して、俺達がやってきた廃ビルの中で倒れていた空。

更にはやてちゃんの話によると、それと時を同じくして、はやてちゃんの目の前に現れた五代さん。

その五代さんと空が触れた際に、五代さんの腹部で輝きを放った霊石アマダム。

その直後に、俺と五代さんに話があると言って来た空の言動と、五代さんの傍に居たはやてちゃんを【巫女】と称して連れ去ったオーバー。

ハンター達三人のライダーの経緯は別かもしれないが、ここまでの大まかな部分には、何かしらの関連があるのでは無いかという、奇妙な接点が多々として存在している。

これで疑うなという方が、無理な話だと言えるだろう。

だから俺は妙な小細工をせずに、空に対して素直な質問をぶつけてみる事にした。

「空……昨日の夜に、はやてちゃんが連れ去られたんだ。【巫女】って言葉に何か心当たりは無いか？」

空が話を始める前に、俺がこんな事を質問するとは思って居なかったのだろう。

俺の質問を聞いた空の表情が僅かながら、強張った様に見えた。
隣に座っていた五代さんも、昨日の河川敷で、俺が変身を解除した時の様な顔をしている。

「……どうも事態は、僕が思った以上に進行してるみたいだね」

空は俺の質問から数秒の間を置いた後、この場に流れる緊張感を解きほぐす様な、柔らかな口調で告げた。

「やっぱり……記憶が戻ったんだ？」

「うん。昨日の夕方に、アマダムが全てを思い出させてくれた」

続く俺の質問に、空は肯定の返事を返す。

「……アマダムを知ってるって事は、君はやっぱり……」

本来ならば、この世界には存在しない筈の言葉を耳にした五代さんの反応に、空はゆっくりとした動作で頷く。

「何か知ってるなら話して欲しいんだ空。今この海鳴市で、何が起きようとしているのかを」

「分かってるよ純。僕は元々その話をする為に、今日のこの場に二人を呼んだんだからね」

俺の出した申し出に笑顔で答えた空は、一度だけ深呼吸をした後に、俺と五代さんが話を聞く準備が出来ているのかを確認してから、先程からの朗らかな雰囲気を一転させて、軽い痺れを起こしていると

身体が錯覚しそうな、真剣な雰囲気を、全身から滲ませつつ喋り始めた。

「僕はこの世界の住人じゃない」

始めにそう言った空は続けて右手を上げて、人差し指を五代さんへ、正確に言うのであれば五代さんの腹部に存在している筈のベルト、アークルへと向ける。

「僕は五代さんの持つ、霊石アマダムの埋め込まれたベルト。アークルの前の持ち主、先代の戦士クウガの息子なんだよ」

## １００万ＰＶ突破記念作品　仮面ライダーシード＆仮面ライダークウガ　繋がる世界

次回は更に無茶な解釈が広がると思います……

## １００万ＰＶ突破記念作品　仮面ライダーシード＆仮面ライダークウガ　繋がる

今回はかなり設定が、あれな上に説明回となっておりますが、御容赦いただけると嬉しい限りです。

それでは今回も楽しんでいただけたら幸いです。

今は使われていない、海鳴市の地下を迷路の様に延びる地下水道の奥で、その場には似合わない仰々しい機械の山が、幾つものケーブルに繋がれていた。

その一つには全長一メートルを超える、大きな黒い卵型のカプセルがあり、その中には一人の幼い少女が意識を失っているのか、あどけない寝顔を浮かべている。

その横には、同色のコンソールが設けられており、人間とは似て異なる異質な外見をした灰色の怪人が、コンソールのパネルを操作して、何かしらの作業を行っていた。

「もうすぐだ。この解析が終わり、例の器が私達の元に届けば、究極の闇がこの世界に復活する筈だ」

灰色の怪人、メルトは抑揚の無い声を発しながら、淡々と作業を続けて行く。

「そっちの調子はどうかなメルト？」

作業に集中するメルトの背後から、突如として声が掛かる。

その声はメルトの意思が希薄に思える淡々とした口調とは真逆で、感受性にとんだ軽い口調だ。

「……オーバーか。もうすぐ巫女の解析は終わる。後は器の準備だが……そっちは順調か？」

一旦作業を中断したメルトは、振り返りながら、先程声を掛けてきた声の持ち主である、メルトと同様に人外の異形の姿をした藍色の怪人、オーバーの質問に答えつつ、逆に質問をぶつけた。

「まあ、順調って言えば順調かな？あの三人も頑張ってくれてるし、前に使ってたサイファーと比べちゃうと、ちょっと実力不足だけど、並みのホルダーと比べたら十分使えるよ。見てて飽きないしね」

メルトの質問に対して、オーバーは思い出した様に笑いながら、メルトに話して聞かせる。

「お前の感想はどうでも良い……ところで例の物は、あの三人に持たせたか？」

溜息を吐きつつ、オーバーの返事を一蹴したメルトは、改めて違う質問をした。

「うん。メルトの言う通り、使い方を説明した後に渡してあげたけどさ。あんな便利な物を作ってあるなら、最初かケチケチしないで、出せば良いじゃないのさ」

「……あれはそんな便利な物ではない。精々使えても二回が限度というところだからな。使い捨ての駒とは言え、簡単に手放すには惜しい戦力だから、今まで使わずに来たというだけだ」

「ああ～メルトってばそんな事考えてたんだ。悪どいなあ～」

オーバーのふざけ半分な指摘に、メルトは作業の邪魔だと言うと、再びコンソールの操作を再開させた……

「「先代のクウガの息子！？」」

俺と五代さんは、空の予想外の発言に対して、同時に驚愕の声を上げた。

空の話が俺の想像を超えるという事は、最初から想定してはいたけれど、流石にこんな話だとは、予測出来なかった。

それは五代さんにも、言える事なのだろう。

先程から空と自身の腹部を、交互に何度も見ながら、何か感慨深く唸っている。

「そっか……君が、空があの人の息子さんなのか。桜子さんが知ったら驚くだろうな～」

驚いてから暫くすると、五代さんは自身の腹部のヘソ辺りに、軽く手を当てながら、この場には居ないクウガを良く知る人物の一人に

思いを馳せた。

確かに五代さんの言う通り、劇中内で最もリントを理解しようとしていたのは、桜子さんである。

研究している文字を実際に使っていた人物に直接話を聞けると分かれば、驚くと同時に凄く喜ぶ事だろう。

ちなみに五代さんの言うあの人とは、劇中で何度もアマダムが見せた映像に出てきたり、遺跡からアークルを身に着けて、生きた状態で発見された先代のクウガ、空の父親の事で間違い無い筈だ。

「そろそろ、話を戻しても良いかな？」

俺と五代さんのリアクションが、大分落ち着いた頃に、空が再び話を再開させる為に話し掛けてきた。

何とか冷静さを取り戻した俺と五代さんは、空の問いに対して、頷く事で肯定の意思を示す。

「さっきも言ったとおり、僕は先代のクウガの息子……それが何を意味するか分かるかな？」

再び話を再開させた空は、俺達に謎掛けの様な言い方をして来た。

先代のクウガは、確かグロンギに対抗する為に、古代の種族リントが生み出した戦士という話だった訳だから、空も当然、古代のリントという事になる筈だ。

「空が先代のクウガの息子って事は、空自身も古代リント族って考

え方で良いのかな？」

空の謎掛けに、五代さんが俺の考えていた事と、ほぼ同じ回答を口にする。

「……その答えは半分正解で、半分ハズレだね」

俺と五代さんが、共通して行き着いた答えだったが、それに対しての、空の返答は予想外のものだった。

「半分正解って……どういう事さ？」

別にクイズ番組をやっている訳ではないので、俺は今回の問題の出題者である空に、直接的に真相を問い質す。

「そのままの意味だよ。僕は五代さんが言った通り、リント族の戦士だった父親の息子で、リントの血が流れている……それと同時にグロンギ族だった母親の血もね」

空の更なる衝撃的な発言に、俺は息を呑んだ。

先程の五代さんの回答に対しての、半分正解というのは、何かの比喩では無く、そのままを意味していたのである。

「……母親が……グロンギ？」

空の言葉に戸惑いながらも、辛うじて五代さんが反応を返す。

「うん。僕は……リントである父親と、グロンギである母親の間に生まれた混ざり者なんだよ」

淀み無く頷いた空は、まるで世間話をするかの様な、柔らかな口調で、自身の出生を淡々と語りだす。

「クウガとして戦ってきた五代さんは、多分知っていると思うけど、本来リントには相手を倒す事を目的とした、殺人という概念が存在していなかったんだ」

空の言っている事には、俺も心当たりがある。

確かクウガの劇中でも、リントの文字を解読していた桜子さんが、リントは戦いを好むグロンギとは逆に、敵対意識を持つ相手を殺すという概念すら持たない平和的な種族で、クウガを表す戦士の文字も、リントの文字ではなく、グロンギの文字から生まれたのでは無いかと説明していた筈だ。

つまり空が口にした言葉が表す意味はもしかしたら……

「戦士クウガに変身する技術は、この世界の言葉で表すと、グロンギの神官と言えば良いのかな？それに近い役割を担っていた僕の母が、グロンギのベルトの情報をリントに渡して、共同で製作した産物なんだよ」

「……そうか。元々は同じ技術を使っていたから、クウガとダグバが等しいなんて記述が残ってたんだ」

空の話を聞きながら五代さんが、何度も頷きながら納得する。

「母はグロンギだったけれど、無益な戦いを嫌う誇り高い人だった。だからゲゲルと称して一方的な殺戮を続けるグロンギに対して、嫌

気のさした母さんは、戦う力を持たないリントに、抗う為の力を貸したってって聞いてる……そうして完成した戦う為の力を扱う戦士に選ばれたのが、当時のクウガ。つまり僕の父で、やがて長く続いた戦いの中で、父と母は恋をして、僕が生まれる事になる」

淡々と空が自身とクウガの出生の話を語る中で、俺は幾つかの、拭い切れない疑問を覚えていく。

そして俺の頭の中に増え続けていく疑問の幾らかは、更に続く空の話の内容によって、紐解かれると同時に、新たな謎を誕生させる。

「殺人という概念を持たないリントは、クウガが倒した事で、力を失ったグロンギを、次々と聖地に封印していったんだ。そして戦いは究極の闇の闇を倒す事で、一度は長い戦いに終焉を迎えたんだけど、それは終わりじゃなくて、僕達家族を永遠に引き裂く事になる戦いへの始まりだったんだ」

空は其処まで話してから、一度だけ大きく深呼吸をして、改めて話を再開した。

「聖地の封印は完全じゃ無かったんだよ。数年の歳月の間に、封印されたグロンギ達の邪念が聖地を汚して、新たな怪物がこの世に誕生したんだ……それは実態を持たない闇そのものだったんだよ。闇は聖地に封印されていた究極の闇ダグバを復活させて、その身体を依り代にして世界に、絶望をばら撒いた……死闘の果てに、闇を討ち払い、再び究極の闇を封印する事には成功したんだけど、大きな問題が発生したんだ」

「……大きな問題？」

「それが空が今回の事と、関係してるって事？」

空の話に、五代さんが頭を捻らせながら呟き、俺は空に話の続きを促しつつ、疑問を投げ掛ける。

俺の投げ掛けた疑問は、どうやら当たっていたらしく、空は一度頷いてから、先程の話の続きを語りだす。

「聖地に施された封印は、当時のリントが持てる全ての技術を費やした、最高の物だったんだけど、完全にグロンギの力を押さえ込む事は出来なかったんだ。討ち消された闇は、また時間が経てば、封印されたグロンギの邪念で成長を果たす事になる。これじゃあ戦いは永遠に終わらない。其処でリントは悩んだ末に一つの解決策を実行する事を決定したんだよ」

「もしかして……」

五代さんは何かに気づいた様に、呟きながら空を見詰める。

俺も言葉にこそしなかったが、その解決策に対して、一つの可能性が脳裏を過ぎった。

「リントはグロンギの邪念の集合体とも言える、闇の器になる依り代を用意して、僕達が居た世界とは別次元の狭間に封印する事で、闇を永久的に封印する事を思いついたんだ。そして……その器に選ばれたのが僕だったんだよ。僕が選ばれた理由は、リントとグロンギ、両方の血を受け継いでいたから……純粋なグロンギじゃ、完全にその意識を闇に乗っ取られる。逆に純粋なリントだと、闇を拒絶してしまって、器になる事が出来ない。僕だけがグロンギの血で、闇を身体に受け居れると同時に、リントの血でその力を封じる事が

出来たんだよ」

「……空が闇を封印する為の特別な存在だっていう事は分かったけど、それじゃあ何ではやてちゃんが狙われたんだ？」

「確かに……奴らの目的が、何なのか分からないけど、その話が今回の件に大きく関わっているとしたら、まず第一に狙われるのは、はやてちゃんじゃ無くて、空だと俺は思うけれど」

俺が投げ掛けた疑問の後に、五代さんが補足説明を加える。

先程の空の話を聞く限り、オーバー達の狙いは空の言う、闇の完全復活という可能性が最も高い。

だからこそ分からないのだ。

狙いが闇の復活と言うのであれば、其処に辿り着くまでのプロセスはこの際置いておくとして、封印に関わった空を狙うのが、妥当ではないのだろうか。

オーバーは、はやてちゃんを【巫女】と呼んでいたけれど、其処に空とは別に、何か重要な意味があるのかもしれない。

「はやてちゃんが狙われたのは、恐らく彼女が僕の母が持っていた力と、同質の力を秘めていたからかも知れない」

「……同質の力？」

「うん。僕の母は元々はグロンギの神官的な立場の人だった。それはリントやグロンギが持つ技術とは別に、不思議な力を扱う事が出

来たからなんだよ」

その話を聞いてオウム返しに呟きながら、俺は去年の初夏に遭遇した出来事を思い出していた。

突如として、俺の目の前に現れて、はやてちゃんに近づくなと警告してきた、一匹の喋る猫……

空の言うはやてちゃんが持っているかもしれない不思議な力というのは、それと何か関係しているとでも言うのだろうか？

「その……はやてちゃんが持っているっているかも知れないっていう、空の母親が持っていた同質の力が、何か封印に関係しているって事？」

隣に座っていた五代さんが、考えを巡らす俺をよそに、空へ質問をした。

「僕の身体が半分はグロンギだと言っても、完全な器になるのには、到底無理があったんだ。其処で母さんの力を借りて、闇を僕の身体に定着させた。多分はやてちゃんを連れ去った奴らの目的は、その力を今度は反対に利用して、封印では無く、闇を完全復活させるつもりなんだと僕は考えてる……」

そんな事が本当に有り得るというのだろうか……

いや、今はそんな事実確認の問題では無い。

実際にはやてちゃんは、オーバーに連れ去られて居る上に、荒唐無稽な話ではあるが、俺は空が嘘を言っている様には到底思えなかっ

た。

「更なる封印は内と外、二重に掛けられたんだ。僕が邪念の復活を依り代となって、空間の狭間でその力を押さえつけて、先代のクウガだった父が、聖地でグロンギそのものの封印を強固なものとして、母と他のリント達が、それを永久に封印する筈だったんだけど……今その封印は、意味を成さなくなってしまっている」

「じゃあ俺がこの世界に来て、はやてちゃんと出会ったのは、もしかして……」

「うん。五代さんのアマダムには、一種の安全装置が仕掛けられていたんだ。次元の狭間に封印されていた僕が、何らかの理由で、別の時空にやって来る可能性は否定出来ない。だから僕の中に居た闇を討ち事が出来るクウガを呼び出して、封印を完全に解き放つ可能性を持つかもしれない、母と同質の力を持った人を守れる近い場所に、飛ばされる様にしてあったんだよ」

五代さんの質問に答える空の話を聞き、俺は一つだけ何となくだが、引っかかる言い回しを見つけた。

「空……さっき僕の中に居たって言っていたけど、もしかして今は、その闇は空の中に居ないの？」

俺の投げ掛けた疑問に対して、空が口を開こうとしたその時である。

『マスター！！！ハンターと同じ三つの反応が、この場所に近づいて来るぞ！！！』

突如としてメカ犬が、病室に転がり込んで来ると同時に叫んだ。

その直後……大きな爆発音が、この病室内に木霊した。

**１００万ＰＶ突破記念作品　仮面ライダーシード＆仮面ライダークウガ　繋がる世界**

次回からはお話が……な予定となっております。

ではでは。

## １００万ＰＶ突破記念作品　仮面ライダーシード＆仮面ライダークウガ　繋がる

気付けばこの小説の連載を開始してから、来月で一周年を迎える事に気付きました。

そんな訳で記念アンケートを行おうと思いますので、御協力いただけたらとても嬉しいです。

アンケートの詳細は、あとがきに記載いたしますので。

それでは今回も楽しんでいただけたら幸いです。

大きな爆発によって、一室が瓦礫と化した海鳴病院へと、三人の異形が足を踏み入れる。

三人とも共に、全体的にブラウンを基調としたカラーリングに上半身を覆う、銀色のプロテクター。

炎を模した角飾りに、大きな二つの複眼。

野球ボール程の大きさの玉が埋め込まれたベルトという、酷似した姿をしていた。

大きな違いを挙げるとするのであれば、角飾り細部の形状に、其々に赤、青、黄色の複眼とその色に合わされているベルトに填め込まれた同色の玉ぐらいのものである。

その姿を知る者は、誰もが彼らをこう呼ぶ筈でろう……仮面ライダーと。

先程の爆発による混乱により、逃げ惑う病院内の人達を尻目にハンター、ガンナー、ボマーの三名は、爆発によって大量に発生した煙が覆う病院の廊下を悠然と進んで行く。

「……ちょっと派手にやりすぎたかな？」

三人のライダーの内の一人、青い複眼を持つボマーが、病院内に入った自分達とは逆に、外へ出ようと逃げる人達に何度も廊下ですれ違うのを見ながら呟いた。

「大地ってば、意外と過激よね～」

「流石に俺でも、ここまでやろうとは思わないぜ……」

普段から弄りがいの無い、友人をからかおうと、赤い複眼を持つライダー、ガンナーの軽口に、黄色の複眼を持つライダーのハンターも便乗する。

「……少し前まで君達二人が、口喧嘩していたとは思えないチームワークだよ……」

自分自身でも、流石にこれはやり過ぎてしまったと、反省していたボマーは、精一杯の皮肉を口にした。

海鳴病院の一室が、爆発した原因を作ったのは、ボマーである。

ボマーが持つ爆弾を生成する能力で、ある程度の威力を持った爆弾を作り出して、目的の場所である海鳴病院の一室へと、外から投げ込んだのだが、予想よりも威力を高くし過ぎたらしく、威嚇の為に小規模の爆発を起こすつもりが、病院の一室を丸ごと爆発させてしまったのだ。

「どうするのよ?もしもあの中に、オーバーさんが言ってた【器】が居たりしたら、一緒に吹き飛んでるんじゃないの?」

「そうなりゃあ、任務失敗って奴だろうな」

「それは確かにそうだけど……そもそも、この場所を突き止めたのは沙耶さんだし、僕の爆弾で奇襲を仕掛けようって言い出したのは、

雄太君じゃないか！？」

更に責任を追及しようと弄ってくる、ガンナーとハンターに、流石に理不尽だと思ったボマーが反撃の狼煙を上げる。

元を正せば、何故この三名が海鳴病院に訪れて、この様なテロ紛いの暴挙に及んだのか、それはこの三名のライダーの内の一人、ガンナーの能力が大きく関係していた。

ガンナーの能力は、光弾を発射する機構を備えた手甲を生成する事なのだが、それだけでは無いのである。

手甲から射出される光弾には、相手に攻撃する殺傷能力を有するタイプともう一つ、相手に当てる事でマーカーとなり、２４時間という制限が課せられるが、その間だけはマーカーを当てた相手に感知される事無く、居場所は把握出来るという、追尾能力を持っているのだ。

ガンナーは昨夜の戦いでクウガに対して、攻撃用の光弾以外にも、保険としてこのマーカー弾を撃ち込んでいた。

「実際にやって失敗したのは、結局は大地でしょ！もう……あのライダーが一箇所に留まっている場所に行けば、何かしら器の情報が手に入ると思ったのに！私の考えた完璧過ぎる作戦がこれでパーになったら、どうする気よ！？」

ボマーの反論を一蹴したボマーは、自身の作り出したチャンスが、味方の失敗によって、水泡と帰すかもしれないという、今の状況に対して憤慨し続ける。

「でもよ……あいつが沙耶の言ってた通りに、そんなに強いライダーなら、あれ位の爆発なんてどうとでもなるんじゃねえか」

だがここでガンナーと共に、今までボマーを糾弾していた筈のハンターが、ボマーを擁護する言動を放つ。

それと時を同じくして、会話を続けながら、病院内を歩き続けていた三人は目的地でもある、病室の前へと辿り着く。

爆発により辛うじて扉としての形を保っていたそれを、ハンターは無造作に蹴破り、病室内へと進入を果たす。

「何だよこれ？」

ただの瓦礫となり掛けた扉を蹴破り、病室へと一番に入ったハンターが、自身の目の前に広がる光景を見て、驚愕の声を上げた。

それはハンターの想像していた光景とは、違うものだったのである。

ハンターが想像していたのは、誰も居なくなった部屋、もしくは爆発する前に変身を果たしたであろうライダーの姿だったのだが、実際の光景はそのどちらにも当て嵌まらなかった。

病室に鎮座していたのは、一台の巨大なバイクだったのである。

その巨大なバイクは全体的に黒いカラーリングをしていると共に、前方部分が野生動物の巨大な牙を彷彿とさせる形状をしていた。

突如として、病室に飛び込んで来たメカ犬が叫んだ直後である。

何かが窓ガラスを突き破った。

病室の窓ガラスを突き破ったそれは、筒状の物体だったのだが、俺はその物体に見覚えがあった……

それも当然の話である。

蘇るのは昨日の夕方に、ハンターと戦った際の記憶。

俺は昨日の夕方のハンターとの戦いの最中に、それを見ていた。

そして同時に、思い出したのだ。

筒状の物体の正体と、それがもたらすであろう、未来の惨劇を……

「これは爆弾……」

五代さんもこの爆弾に見覚えがあったのか、言葉を紡いだ。

突如としてこの病室の中に飛び込んで来た爆弾に、戦々恐々とする中で、逸早く行動に出たのは空だった。

「ちょっと痛いかもしれないけど、ごめんね五代さん！！！」

空はそう叫びながら、ベットから飛び起きて、五代さんの腹部に、右手を叩き付けた。

次の瞬間に五代さんの腹部が、昨日の夜に見た時とは、比較にならない程の眩い光を放つ。

「……これって！？」

眩い光はほんの一瞬で治まり、視界を取り戻した俺は、目の前に広がる光景を目にして驚愕した。

俺の視界に飛び込んで来たのは、過去に見た覚えのある一台のバイク。

それは俺以上に、五代さんもだろう。

俺と五代さんは、唐突とも言えるそのバイクの出現に、驚きを隠す事が出来ない。

「純も早くこっちに！！！」

五代さんと一緒にバイクの後ろに隠れた空が、俺を呼び寄せようと叫ぶ。

「急ぐぞメカ犬！！！」

『うむ！！！』

空の叫びに対して、俺は一旦考える事を放棄して、メカ犬と共にバイクの裏に回ってしゃがみ込む。

その直後に先程の眩い光とは別種の、熱量を含んだ光と、激しい爆風が病室全体を包んだ。

まともに直撃すれば、生身の状態ではまず命は無いであろう衝撃が、俺達の居る病室内に巻き起こるが、爆発の直前にこの部屋に現れたバイクが、鉄壁の防御壁となって、全ての衝撃から俺達を守ってくれる。

普通のバイクでは、そんな事は出来ないであろう。

しかしこのバイクは、普通のバイクでは無かった。

俺はそのバイクの名を知っている。

ただ名前を知っているというだけで、本物をこの目で見る事になったのは、勿論だが俺がそのバイクを見紛う筈が無い。

そのバイクの名は、ビートゴウラム。

仮面ライダークウガの劇中において、クウガが乗る専用のバイク、ビートチェイサーに、クウガのベルト、アークルに埋め込まれた霊石アマダムと同様のものが内臓された、リントがクウガを支援する為に作られた、巨大なクワガタムシ型の遺産、装甲機ゴウラム　が合体した姿が、このビートゴウラムである。

その装甲は絶大な防御力を誇っており、劇中でもビートチェイサー以前に使っていたトライチェイサーと合体した、トライゴウラムの状態でさえ、劇中で大型トラックの激突に対しても無傷だった程だ。

多少の爆発ではびくともしないだろう……

「どうして……ゴウラムがここに？」

爆風が治まった後に、五代さんが、ビートゴウラムに手を置きながら呟いた。

それは俺も気になるところであり、その回答を知っているであろう空に、この場に居る全員の視線が集まる。

「ゴウラムはクウガの意思と繋がっているからね。僕が外部から五代さんのアマダムに、強制的にリンクして呼び出したんだけど……ゴウラムの姿も昔と随分変わったみたいだね……」

俺達の視線に気付いた空が、ビートゴウラムがここにある理由を説明しながら、呼び出した本人であるにも関わらず、ビートゴウラムの姿に対して驚愕の表情を浮かべていた。

まあ、空が生きていた時代にバイクは無かった筈だし、ゴウラムももっと別の形状をしていたに違いない。

空が昔とは違うゴウラムに驚いていると、病室の入り口の方から、大きな衝撃音が聞こえた。

「何だよこれ？」

それは壊れかけた病室の扉が吹き飛ばされる音であり、続いて昨日から二回は聞いた覚えのある声が聞こえて来る。

『マスター』

其処でメカ犬が、俺に呼び掛ける。

メカ犬が何を言いたいのかは、言葉にせずとも理解出来た。

俺は頷きながら、タッチノートを取り出してボタンを押す。

『バックルモード』

タッチノートから流れる音声と共に、傍に居たメカ犬がベルトに変形して、俺の腹部に自動的に巻きつく。

その隣では五代さんが、腹部に両手を添える事で、霊石アマダムが埋め込まれたベルト、アークルが出現する。

俺と五代さんは、お互いに一瞬だけ視線を交わす。

五代さんが、俺に戦って欲しく無いと思っているかもしれないが、事態は待ってくれない……

病室に飛び込んで来てメカ犬が叫んだ言葉と、直後に病室がこんな状態になってしまったという事実。

更に前後して、俺達の目の前に現れた奴らが、器である空を目的としているのなら、今は言い争うよりも協力して、奴らの手に、空を

渡さない事が最優先である。

「五代さん……」

「……うん。残念だけど、話はもう少し後にしよう」

俺と五代さんは、一言だけ会話を交わしてから、ビートゴウラムの影から、同時に飛び出した。

俺達がビートゴウラムから飛び出した瞬間に、予想通りハンターとその後ろに居る二人のライダーが、子供の外見をしている俺を見て驚いているが、俺と五代さんは構う事無く、戦う為に力ある言葉を紡ぐ。

「「変身！」」

俺は五代さんと同時に叫びながら、タッチノートをベルトの中央の窪みへと差し込む。

隣に居る五代さんも、腰に添えた手に右手を上から押し込んだ後に、勢い良く一気に両腕を広げる。

『アップロード』

ベルトにタッチノートを差し込んだ直後に流れる音声と共に、俺の全身が白銀の光に包まれて、俺の姿を戦うメタルブラックの戦士へと変えていく。

五代さんの身体も上半身は、筋肉を模した造形の赤い鎧に覆われて、頭部は二股に分かれた金の角と、赤い大きな複眼という、前世の俺

がテレビ越しに憧れ続けた、何時だって誰かの笑顔を守る為に戦い続ける赤い戦士の姿へとなる。

仮面ライダーシード、そして仮面ライダークウガ。

今ここに……二人の仮面ライダーが並び立った。

「あんなガキが……仮面ライダーだと！？」

俺の変身を見て、一番驚いているのはハンターだった。

「ここは俺が食い止めるから、純は空を頼む！」

クウガは右腕を突き出した構えを取りながら、俺に空をここから連れ出す様に指示を出す。

『今はそれが一番妥当な判断だと、ワタシも思うぞマスター！』

ベルトから聞こえるメカ犬の声も、クウガの言葉を肯定していた。

確かにこの場所で戦えば、空に被害が及ぶ可能性が高い。

どちらかが相手を引き付けて置いて、その間にもう一人が、空を安全な場所に運ぶのが、妥当な判断だろう。

「分かりました・この場は五代さんにお願いします！」

恐らく五代さんは俺がここに残って、足止めをするという選択を、良しとする事は無い筈だ。

ならばここは素直に指示に従うべきだと判断して、俺は後ろのビートゴウラムの影に隠れている空を、ここから連れ出すべく、後ろ向けて駆け出そうとしたのだが、それを一人のライダーに遮られた。

「認めねえ……こんなガキに……俺が二回も負けたなんて……絶対に認めてたまるかよ！！！！！」

俺の進行方向に回り込んだハンターが、怒号と共に拳を振り上げる。

「危ない！？」

俺は咄嗟に、振り下ろされたハンター拳に腕を差し入れて、軌道を逸らす。

力の限り拳を放ったのだろう。

少しだけ軌道を逸らしたにも関わらず、大きくバランスを崩すが、すぐに体勢を整え直して、再び俺に殴り掛かってくる。

その攻撃もただ感情に任せた大振りな攻撃であり、簡単に避ける事は出来るのだが、間髪入れずに次の攻撃を放って来るせいで、安易に空へと近付く事が出来そうに無い。

「こうなったら……」

次々と繰り返される攻撃を避けながら、俺は一つの決断をする。

「五代さん！！！ここは俺が食い止めますから、空をお願いします！！！！」

俺はハンターの攻撃を避けながら、声を大にして叫んだ。

**１００万ＰＶ突破記念作品　仮面ライダーシード＆仮面ライダークウガ　繋がる世界**

アンケート下のアドレスからとなっておりますので、宜しければお願い致しますね。

ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｄｏｕｎａｎｏ．ｎｅｔ／ａｎｓｗｅｒ／ｎＮｗＷＵ４７８１．ｈｔｍｌ

## １００万ＰＶ突破記念作品　仮面ライダーシード＆仮面ライダークウガ　繋がる

昨日から行っているアンケートに、沢山のお答えいただき本当にありがとうございます。

今はまだ集計までに時間があるので、どんな話をメインになるのか読めないですが、出来るだけ一周年記念に相応しいお話になれば良いなと思っております。

そしてアンケートと一緒に、数々のコメントもいただき、改めてありがとうございます。

それでは今回のお話も楽しんでいただけたら幸いです。

沢渡雄太には、昔から癖となっている仕草があった。

それは首を時計回しに一回しするという仕草なのだが、別にこれを普段から行っている訳では無い。

物心もつく前の出来事である。

生前に仲の良かった、今は亡き雄太の祖父が、教えてくれた一つのジンクスだった。

何かを本気でする前に、この行動をすると、必ず上手くいく。

他の誰が考えた訳でも無い、祖父が個人的に行っていたジンクスだったのだが、幼い頃の雄太は自分の祖父が稀に行う、この動作に興味を持ち、教えてもらってからは、祖父が亡くなるその日まで、毎日の様に行っていた。

幼かった事もあり、今ではその仕草の理由を覚えてすらいないが、それでも雄太は稀にこの仕草を無意識に行ってしまう時がある。

それは何時だって、本気で何かをしようとする時だった……

「駄目だ！ここは俺が食い止める！だから純は、早く空を連れてここから離れろ！」

俺の叫びに返された五代さんの返答は、否定の言葉だった。

今は猛然と俺に襲い掛かってきたハンターに加えて、赤い複眼のライダー、先日の夜に五代さんから聞いた話だと、ガンナーという名前らしいが、ハンター一人で俺を相手にするのは不利と踏んだのか、遠距離から赤い光弾を、連続で射出して来る。

残りの一人、青い複眼のライダーは、五代さんと先程の爆弾は使う様子を見せず、激しい格闘戦を繰り広げていた。

恐らく病院内でこれ以上爆弾を使えば、この建物自体が倒壊する可能性があると予想しての判断だろう。

現在の現状は、俺が二人のライダーを相手にして、五代さんが残りの一人を相手にしながら、空を守っているという構図が出来上がっている。

可能であれば、五代さんの意思を汲み、俺が空をここから連れ出したいが、状況がそれを許そうとしない。

ハンターとの接近戦に加えて、離れた距離から支援攻撃を仕掛けて

来るガンナーを、同時に相手している俺が、不用意に接近すれば、空を危険に晒してしまうのは考えるまでも無いだろう。

だがこの役割を、反対にしてみればどうだろうか？

五代さんが現在相手にしている相手は、爆弾を使った戦法を得意としているのか、クウガの攻撃に押され気味の様に見える。

本来の土俵で戦っていない相手に、クウガが遅れを取る事は決して無いだろう。

五代さんなら一瞬の隙さえあれば、必ず空をここから連れ出す活路を作れる筈だ。

更にこの場には、空が呼び出したビートゴウラムがある。

ビートゴウラムで壁を突き破れば、ここから空を連れて脱出するのも容易となる筈だ。

そして駄目押しとして、クウガには無い、シードの俺が持つ能力を使えば、確実にこの脱出計画を成功させる事が出来る！

そして今は、迷っている時間も無い！

例え憧れの人に、認められ無かったとしても、俺は空やはやてちゃん……俺にとって掛け替えの無い、大切な人達を守る為に自分が出来る最大限の事をしたい！

「五代さん！俺が一瞬だけ、隙を作ります！その間に空を連れてここから離れてください！」

「それは……」

再び叫ぶ俺に対して、五代さんはまたしても否定の言葉を返そうつるのが分かったが、俺がある動作をした事によって、五代さんはその言葉の続きを言う事を止めてしまった。

俺の取った動作とは、右手を握り込み、親指を立てるという行為……サムズアップである。

それは五代さんに取って、特別な意味を持つ仕草だ。

本当は俺なんかが、この人の眼前でするべきじゃ無いのかもしれない。

今までを全力をで戦って来なかったなんて言うつもりは無いが、俺は今まで何処か曖昧な気持ちを抱えながら戦い続けていた様な気がする……

今だって戦う事は怖いと感じるし、痛いのは当然嫌だ。

出来る事なら戦いを捨てて、平和な日常に戻りたいと思った事は、一度や二度では収まり切らないし、これから先も、同じ事を何度も思うだろう。

……だけど俺は知ってしまった。

日常とは掛け離れた存在が、俺の日常の裏側に常に潜んでいるという事を……

それが俺の日常を……大切な人を……ただ平和に日々を送る人達を傷つけるなら、俺は守りたい。

誰かに強制された訳じゃない！

誰かの想いを汲んだ訳じゃない！

誰かに答える為なんかじゃ決してない！！！

自分の為に、俺はこの気持ちを全部抱え込んだ上で、これからも戦い続けてみせる！！！

世界の誰もが俺を否定しても構わない。

例えそれが、今まで共に戦い続けて来た相棒だったとしても……それが俺の戦う覚悟だ！！！

俺の半端な、俺だけの覚悟だが、その想いが憧れの人に届いたのかもしれない。

一瞬ではあるが、五代さんが……仮面ライダークウガが俺に対して、サムズアップで答えてくれたのだから……

俺はその期待に応える為に、何より自分自身の覚悟を貫く為に、行動を開始する。

「さっきから訳わかんねえ合図を送ってんじゃねえよ！この糞ガキがあああああ！！！！」

そんな俺に対して、怒りの感情を剥き出しにして、ハンターがベルトから光を放ち生成された銀のナイフを、逆手に構えて向かって来るが、その攻撃が届くよりも早く、俺は右腕をベルトに走らせて右側をスライドさせて、黄色いボタンを押した。

『ベーシックファントム』

俺のベルトからは、大量の光が溢れて、もう一人の戦士を形作る。

其処にはシードのベーシックフォルムと同様に、メタルブラックのボディーに、灰色の複眼を持つ分身体が生成された。

そして生成された分身体が、ハンターと俺の間に立ち塞がり、今にもその手に持って斬り掛かろうとするハンターの両腕を掴んで押し留める。

『今だマスター！』

メカ犬の声が、俺の腹部のベルトからでは無く、ハンターの攻撃を押し止めている分身体から発せられた。

「ああ！」

その声に頷きながら、俺は再びベルトの右側をスライドさせて、青いボタンを押してから、間髪入れずに黄色のボタンを押していく。

『サーチフォルム』

『サーチバレット』

ベルトから音声が流れるのと同時に、メタルブラックのボディーはスカイブルーに染め上がり、右手にはこのフォルムの専用武器の銃、サーチバレットが握られる。

俺は生成されたサーチバレットの銃口を、素早く離れた位置に手甲を構えるガンナーへと向けて、引き金を引く。

引き金を引いた瞬間に、サーチバレットの銃口から、青い光弾が発射されて、見事にガンナーへと命中してその衝撃が、ガンナーを後方へと吹き飛ばす。

当然これだけで、倒せたとは思っていないが、一時的にガンナーを無力化する事に成功した俺は、三度〈みたび〉ベルトの右側をスライドさせて赤いボタンを押してから、もう一つの戦いに介入する為に歩き出す。

『パワーフォルム』

歩く最中に、ベルトから音声が流れて、スカイブルーのボディーがクリムゾンレッドへと染め上がると同時に、俺は右手に握っていたサーチバレットを手放して、その右拳にありったけの力を込める様に握り込む。

俺が向かっていた、もう一つの戦いの場所。

それは今も激しい格闘戦を繰り広げる、二人のライダーの下である。

俺はその戦いの間に割り込み、クウガに繰り出されようとしていた相手の拳を、代わりにその身体一つで受け止めた。

「何だって!?」

青い複眼のライダーは、俺の取った突然の行動に一瞬の驚きを見せるが、すぐざま態勢を立て直して二撃、三撃と再び攻撃を再開させるが、俺は完全に防御を捨てて、ただひたすらに握り込んだ右拳に力お込め続けて、タイミングを図り続ける。

そしてそのタイミングが、ついに訪れた。

先程から続く連続攻撃よりも、大きな威力の攻撃を放とうとしたのか、今までボクサーのジャブの様にして、小さく細かく振り回していた腕の回転を、倍以上のモーションで大きく腕を振り上げたのだ。

俺は今まで溜めに溜めた拳の一撃を叩き込む為に、右拳を相手と同様に振り被った。

若干上向きから放たれた相手の拳に対して、重心を低く構えていた俺の拳が、下から上へと打ち出される。

狙いは最初からたった一つ……

俺が繰り出した拳はその狙い通り、同時に繰り出された相手の拳を、正面から捉えて相手の一撃を自らが放つ力のみで押し返して、その身体ごと吹き飛ばす。

「今です五代さん!!!」

吹き飛ばした相手を確認する事無く、俺は後ろを向いて叫んだ。

其処にはビートゴウラムに跨り、空を後ろに乗せたクウガの姿があ

った。

「空を……俺の友達をお願いします」

「……うん。必ず守るよ！」

俺の言葉に五代さん……皆の笑顔を守る為に戦い続けた戦士クウガが、サムズアップをして誓いを立ててくれた。

「純！気をつけて！何故か分からないけど、彼らから嫌な気配を感じるんだ！！！」

走り出すゴウラムから、この場に残って戦う為に、背を向けた俺に対して、空が叫んだ。

俺は振り返る事無く背を向けたまま、サムズアップでその声に応えて、既に半分瓦礫と成りつつある、海鳴病院の壁を突き破り、この場を後にする友達を送り出した。

「畜生！ガキが舐めた真似してくれやがって……」

メカ犬が操る分身体の拘束を振り解いたハンターが、一旦距離を取って、更に言葉の怒気を強める。

その後ろからは、先程俺が吹き飛ばした二人のライダーが、立ち上がってハンターを中央に、横一列へと並んだ。

「僕達とは自力の差があると思ってたけど……まさかここまで良い様にやられるなんてね……」

「本当に……どうしてくれようかしらね……」

怒りを露にし続けるハンターの横に立った、青い複眼のライダーが、感慨深く呟いた言葉に続いて、ハンターを間に挟んだガンナーが皮肉を口にする。

「……大地、沙耶。ここは俺一人に任せてくれねえか？」

俺は三人が何かしらの算段を立てると思っていたのだが、その予想は外れてしまった。

「本気なのかい……雄太くん！？」

「確かにオーバーさんから、切り札を貰って来たけど……あれは最後の手段って言っていたでしょう！？」

ハンターの放った言葉は、俺だけでは無く、仲間である筈の二人のライダーにとっても、同じ事だった様で、其々に驚きの反応を示していた。

それにしても、オーバーから貰った最後の切り札……一体何の事だと言うのだろうか？

ハンター達が言う最後の手段が、何を意味している事なのか、分からないが、あのオーバーが持たせたものならば、碌な事に成らないのは確かである。

『気をつけろマスター。空が去り際に言っていた言葉が、何か関係しているかも知れない……』

遅れて俺の隣に並び立った、分身体を操るメカ犬が、俺に注意の言葉を投げ掛ける。

俺と同様の事を、メカ犬も考えたのだろう。

「俺は許せねえんだよ……糞憎たらしいガキが我がもの顔で、正義の味方するのがよお……」

警戒する俺とメカ犬を前にして、ハンターが先程までの怒気を抑えて、まるで其処に佇む幽鬼の様に呟くという表現が妥当な口調で、静かに語りだした。

「……それに何より……そんなガキの遊びにすら勝てない俺が……情けなくてしょうがねえんだよ……」

ハンターはそう言うと、両手に持っていたナイフを手放して、ベルトに手を添えた。

『ハンターのホルダー反応の質が変わった!?気をつけろマスター!奴の……ハンターの本質が変わろうとしている!!!』

ベルトに手を添えたハンターを見て、メカ犬が先程以上の声量で俺に注意を促して来た。

メカ犬の言葉に耳を傾けながら、ハンターの動きに注目すると、ベルトに嵌っていた黄色い玉が、闇の様な漆黒へと染まり出したのである。

「これって!?」

俺が驚きの声を上げたところで、ハンターの変化は止まる事は無く、寧ろ変化は加速度的に上がって行く。

ハンターの上半身を覆っていた銀のプロテクターと、黄色い複眼もベルトの玉と同じ様に漆黒へと染まる。

その姿はまるで……

「……これがオーバーさんが言っていた……切り札を使った状態か」

「ベルトに組み込むだけで後は武器を作る時と、同じやり方で良いって言ってたけど、こんな機能だったのね！？」

ハンターの急激な変化を見るのは、仲間の二人も目にするのは初めてだったのだろうか？

そして先程の発言から推測すると、ハンターと同じ機能が、後の二人にも搭載されていると見て間違い無い。

俺の予想が当たっているとしたら、それは本来ならば使ってはいけない筈の力だ。

その力の根源は……

「……あれはクウガと同じ……凄まじき戦士の力なのか？」

俺は思った事を、そのままに呟いていた。

「さあ、糞ガキ……始めようぜ？俺が絶望って悪夢を見せてやるからよ！」

急激な変貌を遂げて、全身を漆黒に染めたハンターは、俺にそう告げると、その首を昨日の夜に見せた時と同じ様にして、時計回りに一回転させた。

## １００万ＰＶ突破記念作品　仮面ライダーシード＆仮面ライダークウガ　繋がる世界

次回はバトルと見せかけて……な予定かもしれません。

## １００万ＰＶ突破記念作品　仮面ライダーシード＆仮面ライダークウガ　繋がる

更新がおくれてしまって申し訳ありませんでした。

出来れば８月中にクウガ編を完結出来る様に頑張っているのですが、

もしかしたら完結は来月になってしまうかも……

そんな訳で今回も楽しんでいただけたら幸いです。

白衣を着た一人の女性は、普段から自身の仕事で使っている資料室で、この場に呼び出したとある人物の到着を今か遅しと待っていた。

呼び出してから時間にして２０分程が経過した頃に、資料室の扉を叩く音が聞こえて来た。

「どうぞ入って」

その音を聞いた女性が、入室を許可すると同時に、資料室の扉が開かれる。

「ビートチェイサーとゴウラムが消えたというのは、本当ですか榎田さん！？」

扉を開けて入ってきたのは、一人の男性だった。

端整の顔立ちに、きっちりと着こなしたスーツが、彼の元から備わっていた誠実なイメージを、より如実に強調している。

「早かったわね一条君」

「はい。桜子さんから、五代の話を聞いて、一度東京の方に来ていたんですが……」

榎田（えのきだ）ひかり。

一条薫（いちじょうかおる）。

榎田は以前に、通常兵器では殆ど効かなかった未確認生命体に対抗し得る武器の開発を行ったり、クウガやゴウラムを科学的な観点から研究していた、科学警察研究所の責任者である。

そして一条は榎田と同様に、警察に所属する、長野県警警備課の刑事なのだが、未確認生命体が現れた際に、警視庁に設置された未確認生命体合同捜査本部に参加していた一人だ。

二人とも五代雄介がクウガという事を知り、未確認生命体との戦いで深い関わりを持っていた人物である。

「私も彼が、長野県九郎ヶ岳の遺跡で新しく発見されたっていう、別の遺跡に向かってから、行方不明になって驚いたんだけど、その後に保管していた科警研で保管していた、ビートチェイサーとゴウラムが合体したって聞いて、もっと驚いたわよ」

「はい。私もその状態のゴウラムを見てきたんですが……まさかそれが消えるなんて」

「でも一条君は、何処かで予感してたんでしょ？彼が消えた後に、保管されてたゴウラムとビートチェイサーが突然合体したって聞いてから、急いで警視庁にあんな申請をしてたくらいだし」

「いえ……正直な話を言えば、こんな事になるとまでは想像もしていなかったんですけど、五代の消息を絶った事と、ゴウラムの話を聞いて、少しでも彼の力になればと思いまして……」

一条は榎田との会話から、当時の未確認生命体と繰り広げた、長い戦いを思い出し、共に戦い抜いた一人の冒険家に思いを馳せる。

「……大丈夫よ。一条君がした事はきっと彼の力になるわ。それに彼はクウガなんだしね」

榎田はそう言うと、一条が思い出している冒険家が普段からしていた仕草である、サムズアップをして見せた。

「そうですね。彼なら……あの五代雄介なら、どんな困難にも打ち克てますね」

五代雄介が居るべき世界で、彼を大切に思う人達は、笑顔で彼の帰還を待ち続けている……

「があっ！？」

『ぐっ！？』

俺とメカ犬は、呻き声を上げた。

急激な変貌を遂げたハンターの手により、首を絞められた状態で、宙吊り状態となっていた為である。

ハンターの行動は、迅速の一言に尽きた。

この状態以前にも相当な素早さを誇っていたのは、三度に渡り、直接戦ったからこそ分かっていたが、今のハンターの動きは、その比では無い。

予想外の事態を目の当たりにした事で、隙が生じていたとしても、その速さは脅威と言える程のレベルになっている。

それに加えて、ハンターの力自体も、急激な強化がされているのが、俺とメカ犬が操る分身体を締め上げる腕力から、充分に理解する事が出来た。

「……大地、沙耶。ここは俺だけで良い……お前達は逃げたライダーと白頭を追いかけろ……」

首を締め上げる力を更に強めながら、ハンターが後方に控える二人のライダーに言い放ち、ハンターの言葉に頷くと、この場所から駆け出して行く。

「……さ、させるか！」

このまま行かせる訳には行かないと感じた俺は、首を締め上げる手を、自らの両手で掴み、引き剥がしに掛かる。

このままあの二人を行かせてしまったら、俺がここに残った意味が希薄なものとなってしまう。

「……うをおおおおおおおおおお！」

ありったけの力を込める事で僅かではあるが、俺の首を絞めるハンターの手の拘束が徐々に、その効力を失っていく。

現在のパワーフォルムだからこそ、成し得る事が出来た、力押しの解決策である。

「……つまんねえ事しようとしてんじゃねえよ！」

「がはっ！？」

もう少しでハンターの拘束が解けようとしたその時、ハンターの怒気の篭った声が聞こえるのと同時に、俺の腹部に重い衝撃が走る。

その衝撃によって肺の空気が、強制的に排出される苦しみに耐えながら、俺は自分の腹部に視線を送り、突如として襲い掛かった謎の衝撃が何であるのかを知った。

正体は俺の首を拘束する腕とは逆方向の腕から繰り出された拳による一撃だったのだ。

予想すらしていなかったハンターの一撃により、拘束からの脱出には失敗してしまったが、ハンターがその一撃を繰り出した事によって、新たなチャンスが生まれる。

『だあああああああ！！！』

分身体を操るメカ犬が渾身の踵落としを、真横からハンターが俺を

拘束している腕へと喰らわせた。

俺に対してもう片方の腕を使って攻撃を仕掛けた時点で、メカ犬の拘束は解かれていたのである。

先程からのハンターが繰り返す言動から、どういった経緯のせいなのか、俺に対して妙な敵対心と嫌悪感を持っているのは気付いていた。

だからこそハンターは、俺への攻撃を優先させた様だ。

そしてその結果が、メカ犬の繰り出した一撃を、現実のものとしたのである。

「ぐうう！？」

メカ犬の放った踵落としを、腕に喰らったハンターが、その痛みにより苦痛の声を漏らす。

その一撃によって、若干だが緩んだハンターの腕を、俺は再び掴み一気に引き剥がして、その拘束から逃れる事に成功し、更に追撃として痛みにもがくハンターを、俺と分身体が蹴り飛ばした。

『大丈夫かマスター！？』

「ああ、俺は大丈夫だけど……」

メカ犬の言葉に頷きながら、俺は二人のライダーが駆け出した先に視線を向けるが、既にその姿は何処にも無かった。

『マスター。奴らを足止め出来なかったのは残念だが、今は目の前の相手に集中した方が良いぞ！』

「……そうみたいだな」

メカ犬の言う通り、今はあの二人のライダーを行かせてしまった事を悔やむよりも、ハンターをどうにかする事に集中しなければならないのは明白だ。

それにハンターのあの姿……

俺はメカ犬の言葉に対して視線を、前方へと向ける。

其処には悠然と立ち上がる、漆黒の鎧を身に纏ったハンターの姿があった。

見れば見るほど、クウガのアルティメットフォームに……いや、それよりはアメイジングマイティーに近いだろうか？

どちらにしても、クウガの力と近い何かが、ハンターにも施されているとしか思えない。

「やってくれたじゃねえかよおおおおおおおおおお！！！！！」

立ち上がったハンターは、然したるダメージを負っている様子も無く、怒りの咆哮を上げながら、此方へと凄まじい勢いで駆けてくる。

『来るぞマスター！』

「ああ！」

メカ犬の注意を促す声に、応えながら俺は、目の前に迫り来るハンターに対して身構えた。

シードが時間を稼いでいる間に、海鳴病院を後にしたクウガは、空を乗せてビートチェイサーを走らせていた。

ビートゴウラムはパワー、スピード共に優れてはいるのだが、その形状から、クウガ以外に人を乗せて道を走る際の機動性に、少々不都合があるので、ゴウラムとの合体を解除したのである。

「これから五代君に、向かって欲しい場所があるんだ」

海鳴病院から、数キロ程離れたところで、クウガの後ろにしがみ付いた状態の空が、口を開いた。

「向かって欲しい場所？」

空の言葉に対して、クウガはビートチェイサーを走らせながら、オウム返しに聞き返す。

「ここから距離にして約２０ｋｍ、北に進んだ先の地下に……そこにはやてちゃんが捕まってると思う」

「はやてちゃんの場所が分かるのか！？」

更に続く空の発言にクウガは驚きの声を上げる。

「正確には僕の母と似ている力が其処から感じ取れるんだ。もしかしたら奴らは、はやてちゃんの中に眠ってる力を無理矢理引き出そうとしてるのかもしれない」

「何だって！？それは本当の話なのか！？」

「うん。僕が捕まらなければ、今すぐ病院で話していた【闇】が復活する事は無いと思うけど、それは時間稼ぎにしかならないし……だから五代さんには、奴らに捕まっているはやてちゃんを助け出して欲しいだよ」

「はやてちゃんを助けたいのは、俺も同じだけど……はやてちゃんを助けた後に、何をするつもりなんだ？それに【闇】の復活って一体……」

五代は空の出した提案に、肯定の意思を示しつつ、疑問を覚えた。

捕らわれているはやてを一刻も早く救い出す事は、五代は勿論、この場には居ない純にとっても、最上級の目的である。

しかしこの状況で助け出したとしても、再び狙われる可能性が高いし、実行に移すにしても、作戦を練ってからの方が良いのではないか？

他にも五代が思いつく問題点は幾つかあるのだが、一番気になるのはこの一点に尽きた。

空は何かを焦っている様に見える。

はやてが何かしらの、危害を加えられているかもしれないという以上、五代としても一刻も早く助け出さなければという焦燥感に襲われるが、空の言動から僅かに洩れる焦りは、それとはまた別の意味を含めた焦りに見えたのだ。

何か根拠がある訳ではなかったが、五代は感じた直感をそのままに問質していた。

「……多分だけど、はやてちゃんを攫った奴らは、僕達……リントが闇に対して行った封印を、逆に利用しようとしてるんだと思う」

僅かばかり沈黙の後、空は一度だけ深呼吸をして、静かに語りだす。

「封印を逆に？それは……」

「病院でも言ったと思うけど、僕はリントでありグロンギでもある。だからこそグロンギの思念の集合体と言える、闇の存在を受け入れる器になりながら、その支配を受けずに済んでいるんだ。そして制御し切れない、不完全な部分を母の力で補っていた。でもそれは……言葉を返せば、僕の意思をその力で押さえ込んで、闇を完全復活させる為の依り代にする事も出来るという事なんだ」

「奴らがはやてちゃんを攫ったのは、【闇】を復活させる為の鍵だったからって事か……分かった。はやてちゃんは俺が必ず助け出すから、空はその間、何処か安全な場所に隠れててくれないか？」

「ううん。僕も一緒に行くよ。行かなきゃ意味が無いんだ」

空の話を聞き、はやてを助ける事を誓ったクウガは、その間何処かに身を隠れている様に、空に対して進言するが、その当人である空は首を横に振りながら、自ら危険な場所に赴く事を宣言する。

「意味が無い？」

クウガの疑問の声に、空は再び頷きながら口を開く。

「相手が封印と逆の事をして、【闇】の復活を目論んでいるのなら、それを逆手に取って、再封印を行うんだ。実体の存在しない【闇】を完全に消滅させる方法は存在しない。だから完全に無力化する為には、もう一度誰かが封印しなくちゃ駄目だ……そしてそれが可能なのは僕だけだからね」

「空……もしかして君は……」

「皮肉な事だけど、奴らがはやてちゃんの中に眠っている力を無理矢理引き出そうとしている今なら、それを正しい方向に利用する事で、【闇】を完全に封じ込める事が出来る」

「……そんな事をしたら、空はどうなるんだ？」

【闇】を完全に封印するという事が、何を意味するのか……

クウガは、五代雄介は理解した。

しかし、それを事実として認める事は、あまりにも残酷だと、心が訴え続けている。

「僕がこの世界に来た時……自分が誰なのかという事すら忘れていた。僕自身の使命を思い出したのだって昨日の出来事だけど……僕はこの世界が好きなんだ。だから僕は、この世界を……大切な友達が居るこの世界を守る為に、自分の出来る事をしたい！」

「空……」

空は微笑みながら、自身の想いを吐露した。

それが自分に課せられた使命だという部分もあるが、彼は心からこの世界を守りたいと願っていた。

大切な友達が、小さな身体で傷つきながら、誰かを守ろうと戦い続ける少年が生きる、この世界を……

「……そんな事はさせないよ！」

その時である。

ビートチェイサーで走り続けるクウガと空の上に、影が掛かると同時に、クウガにとって聞き覚えのある声が上空から降り注いだ。

「あれは！？」

上空を見上げて、自分達を影に包んだ正体を眼にした空は、驚愕の声を上げた。

其処には、コウモリの様な黒い翼を羽ばたかせて宙を舞う、一人の漆黒の仮面ライダーが存在していたのである。

## １００万ＰＶ突破記念作品　仮面ライダーシード＆仮面ライダークウガ　繋がる

やっとクウガ編も後編に突入してきたので、次回も頑張りたいと思います。

## １００万ＰＶ突破記念作品　仮面ライダーシード＆仮面ライダークウガ　繋がる

少し遅れてしまいましたが更新いたします。

それでは今回も楽しんでいただけたら幸いです。

クウガ達が上空からの襲撃を受けた時間から数刻ほど遡る。

海鳴病院の一室で起こった大きな爆発と、その事態を引き起こしたであろう異形の存在の情報は、すぐに海鳴警察署へと届いていた。

そして今、その通報を受けて、海鳴警察署から一台のバイクが出動したのである。

［「長谷川君。そろそろ病院に着くわ」］

「はい」

海鳴病院へ向かう一台のバイク、マシンドレッサーを駆る、メタルイエローのボディーを持つ仮面ライダーＥ２に搭載された通信機から、このＥ２の開発者であり、その装着者である長谷川啓太の直属の上司である、風間恵美の声が聞こえて来る。

病院で大きな爆発が起こったとなれば、本来ならば爆発による火災を消す為の消防車や、その爆発及び火災などで、身動きが出来なくなっている人達を救助する為の、レスキュー隊に御呼びが掛かるのが世の常だ。

勿論病院にはその両者に加えて、他の病院へ患者を搬送する為の、救急車も向かっているが、Ｅ２が先だって出動しているのには意味がある。

病院で確認された爆発を起こしたと思われる、異形の存在……

通報者から聞いた情報からすると、それは昨日の夜に戦った謎の仮面ライダー達で間違い無かった。

［「注意してね長谷川君。奴らは明らかに今までのホルダーとは違う、異質な存在よ」］

「それは僕も分かってます」

［「まあ、昨日の戦闘のデータを解析して、Ｅ２で勝てない相手じゃ無いとは思うけど、厄介な相手な事に変わり無いわ。それに相手は同質の戦闘力を有した存在が二人以上居る上に、今回の情報では更に一人増えてるって話だから、なるべく相手を引き離して、一対一に持ち込んだ方が無難ね……どうしたの長谷川君？」］

海鳴病院についてからの行動指針を話す恵美に対して、Ｅ２からの返答が帰ってこない事に気付いた恵美はＥ２に呼び掛けた。

「……昨日の夜に一緒に戦ったシードとは違うあの仮面ライダー。彼も海鳴病院に居るんでしょうか？」

恵美の呼び掛けから、暫くの間を置き、Ｅ２が一つの疑問を口にする。

［「そうね……結局昨日は、あいつ等が逃走した後に、別々に追いかけて行ってそのままになったけれど、あの仮面ライダーも気になる存在ではある事に変わり無いのは確かかね」］

「はい。敵対意識があるとは思えませんけど、シードと同様に謎が多い事には……あれは！？」

そこまで言い掛けたＥ２は、マシンドレッサーを急停止させた。

［「どうしたの！？何が……あれって！？」］

Ｅ２がマシンドレッサーを急停止させた事により驚いた恵美だったが、通信機と同様にＥ２に内臓されたカメラを通して、Ｅ２と同じ光景を目の当たりにした恵美は更に驚愕する。

目の前に居たのは此方に向かって走って来た、二人の異形の存在。

全体的にブラウンのボディーと、上半身を覆う銀色のプロテクターと腹部の黒いベルトに嵌め込まれた、其々の赤と青の玉に、同色の複眼と燃え盛る炎を模した様な角飾り。

間違い無く昨日戦った相手である、仮面ライダー達である。

反対方向からマシンドレッサーで走って来たＥ２を目撃した彼らも、走る足を止めて、その場に立ち止まった。

「こんな急いでる時に、面倒な奴と会っちゃったわね」

マシンドレッサーから降りるＥ２を見て、赤い複眼を持つ方のライダー、ガンナーが仮面の下で苦笑いを浮かべながら、隣に並ぶガンナーと似た風貌をしている青い複眼を持つボマーに話し掛けた。

「……確かに厄介だね。僕と沙耶さんで組んで戦えば勝てない事は無いかも知れないけど、確実に追いつけなくなると思うし」

ガンナーに話し掛けられたボマーは、冷静に現状を分析して、今の

自分達が何を優先して行動するべきか、脳内でシュミレートしていく。

「大地は先に行って。ここは私が戦うから……」

「……沙耶さん？」

ボマーの脳内シュミレートが終わる前に、ガンナーがそう言うと、一歩前に足を踏み出す。

「折角さ。雄太の奴が私達を先に行かせてくれたんだし、このまま二人して足止めされちゃったら、申し訳ないじゃない」

「それなら僕が残るから、沙耶さんが先に行けば良いよ」

ここに残ると言うガンナーに対して、ボマーが代わりに残る事を主張するが、ガンナーは首を横に振りながら言葉を紡ぐ。

「正直に言うとね。私があの仮面ライダーに追い着いても、勝てる自信が無いのよね。だから美味しいところは、大地に譲って上げるわ」

朗らかとした口調で言葉を紡いだガンナーは、海鳴病院でハンターがしたのと同様に、黒いベルトに嵌った赤い玉に手を翳して意識を集中させる。

彼女が求めていたものは、今の自分を包む日常では決して得られないであろう、生きていると実感させてくれる適度な刺激だった。

彼女は別に誰かを傷付けたいと願っている訳では無かったし、今こ

こに居るのも、偶然と気まぐれとただの付き合いの結果でしか無かったのは、本人も認めている。

そんな薄い理由で他者を虐げる事が許されるのだろうかと、心の片隅で感じる事もあったが、沙耶はそれでもガンナーとして闘う事を止めることは出来なかった。

……楽しかったのである。

歪んではいたかもしれないが、友達と他の人には出来ない何かを共有しながら、同じ目標を達成させる事が何よりも沙耶にとって楽しかったのだ。

自分が今やろうとしている事は、誰かを不幸にするかも知れないが、そんな事情は今の沙耶には小さな事だった。

沙耶にとって、今のこの状況すらも、友達と本気で取り組むゲームに過ぎない。

そしてゲームと認識しているからこそ、沙耶はこの難しいゲームを、本気でクリアしたいと考えていた。

自分には大局を動かす実力は無い。

だからこそこの場は、自分よりも頭の切れるもう一人の仲間を先に行かせる方が、より多くの可能性を見出せる筈だと確信して、自分からこの場に残る事を告げたのである。

「沙耶さん。君は……」

「早く行きなさいよ大地。私にここまでお膳立てさせて置いて、簡単にやられたりしたら、承知しないんだからね！」

ボマーの呟く様な言葉に、ガンナーは楽しそうに笑いながら答える。

「「何かしようとしてるみたいだけど、待ってやる謂れは無いわ！長谷川君！相手が何かを仕掛けて来る前に、こっちから仕掛けるわよ！！！」」

「了解しました！」

ガンナーとボマーの動向を探る様に観察していたＥ２が、通信機越しから届いた恵美の指示に応えて、右腰のホルスターから、Ｅ２専用銃であるＥＳＭ０１を抜き放ち、ガンナーとボマーに其々白い光を纏った弾丸を放つ。

しかしその攻撃は二人に届く事は叶わなかった。

ＥＳＭ０１から放たれた二発の弾丸は、目標に到達する事無く、反対側から放たれた黒い光弾によって、撃ち落されていたのである。

その光弾を放ったのは、一人の漆黒の身体を持つ、仮面ライダーだった。

漆黒のライダーはその両腕にも、同色の黒い手甲を装備して、それを前方に突き出し、その先端から小さな経口の穴が開いており、穴の中からは白色の煙が風に流され宙に舞っている。

「……沙耶さんも……変わったんだね」

漆黒のライダーの後ろに控えていたボマーが、感歎の声で呼び掛ける。

ハンターと同様の姿をした漆黒のライダーの正体は、ガンナーの変化した姿だったのだ。

「姿が変わった!?」

攻撃を防がれた事よりも、急激な変化を果たしたガンナーに対して、E2が驚愕の声を上げる。

「……正義の味方が不意打ちするなんて、ちょっとルール違反なんじゃないかしら?」

漆黒と共に、大きな力をその身に宿したガンナーは、E2に対して余裕の笑みを零しながら、銀から黒へとその色を変えた、手甲の先端に設けられた銃口を、自身の戦うべき相手であるE2へと向けた。

「「避けて長谷川君!!!」」

その動作に逸早く声を上げたのは、その光景を別の場所からカメラ越しに、客観的に観察していた恵美だった。

「は、はい!?」

その声に反応して、E2は訳も分からないままに、その場から転がる様にして退避行動を取る。

E2が恵美の声に反応して回避行動を取ったその直後、ガンナーの手甲から放たれた黒い光弾が、先程までE2の立っていた場所に着

弾して、その大地に大きな風穴を開けた。

［「明らかに昨日よりも、威力が上がっているわね……」］

「あれを正面から受けたら、流石に……」

ガンナーの光弾が抉った大地を目の前にして、Ｅ２と恵美はその威力の高さに戦々恐々となる。

「ほら大地。行くなら今の内よ？」

「……分かった。この場は頼むよ。沙耶さん」

先を急ぐ様に急かすガンナーの声に、ボマーは頷きながら、意識をハンターとガンナーが、先に実践していたのと、同じ様に意識を集中させていく。

ボマー……黒谷大地もまた、ハンターやガンナーとは別に、今までの自分を取り巻いていた環境に大きな不満を抱えていた。

なまじ勉強が出来ていた為に、親や教師……それに世間での肩書きを重要視する親しくも無い同年代から寄せられる過度な期待。

彼は毎日楽しくも無い勉強を続けて、周囲の期待に応え続けてきた。

楽しくは無いが、勉強を苦痛だとは思わなかったが、その勉強の向き合い方に、自身と周囲に生じているギャップの大きさが、大地は何よりも苦痛だったのである。

決して気の強い性質では無かった大地は、その苦痛に耐えながらも、

勉強を続けてた。

その行為が自分の心を、更に苦しく締め付けると知っていながらもだ。

だから大地は、雄太と沙耶に出会いを、友達となれた事を、何よりも感謝している。

それまで周囲と見えない壁で阻まれた様なな世界で生きて来た大地に対して、雄太と沙耶はその壁の内側へと入り込んで来た。

三人の出会いは、寧ろその性格の違いから、良好とは言い難いものではあったが、それでも大地にとっては、周囲から期待をされないというだけで、今まで心の中に重荷となっていた何かが、少しだけ軽くなった様に感じられたのだ。

その感動を教えてくれた一人が、今自分に一つの期待を寄せている。

大地にとって、今まではあんなにも苦痛だと感じていた筈の他者からの期待だというのに、何故か大地の心は晴れ晴れとしていた。

これまでの大地が生きて来た人生において、ここまで他者の期待に応えたいと思えたのは初めてだった。

イメージするのは、何者にも縛られない自由。

大地のイメージは漆黒に染まる身体と共に、誰にも邪魔されない世界へと飛び立つ大きな漆黒の翼を、その背中に現出させて大空へと舞い上がった。

「あの三人がメルトの精製した、例の力を使ったみたいだね」

「……それを私に言う為だけに、ここまで来たのかオーバー？」

海鳴市の地下に広がる旧地下水道の一部を改造した場所で、藍色の怪人オーバーと、灰色の怪人メルトが、互いに言葉を交わす。

今も意識を失っている一人の少女が、閉じ込められた黒い卵型のカプセルに繋がったコンソールを操作する手を止めないまま、メルトは再びこの場所へと赴いたオーバーの言葉に対して、抑揚の無い声で答える。

「あの力ってさ……あの【闇】を技術的に転用して作ったんだよね？そんな事して何も影響が出ないで済むのかなって思ってさ……」

「少し前にも言った筈だが？あの力は所詮は試作段階……使えても二回が限界だ。まあ、精々一回も使えれば上出来な事に変わり無いがな」

「僕が言いたい事はそういうことじゃ無いんだけどね」

「……どういう事だ？」

オーバーの言い方に対して、メルトはほんの一瞬だけ、コンソールを動かす手を止めるが、再び操作を再開させて、相変わらずの抑揚の無い声で、オーバーの言葉の真意を問い質す。

「あれが試作品だって事は分かるし、何か不具合が起こってもそれはしょうがないと思うんだけどさ……」

「言いたい事があるのならば、はっきり言えばどうだ？」

「メルトの言う通り、あの子達はただの使い捨ての駒だけど、僕は結構気に言ってるんだよ。だから率直に聞く。何であんな余計なものまで取り付けたんだい？」

オーバーの問い掛けに、数瞬の間を置いて、メルトが小さく肩を震わせながら、小さな笑い声を零す。

「……奴らは使い捨ての駒であり、私の大切な実験のサンプルだ。しかしそれだけでは芸が無いだろ？だから面白いサプライズを準備させて貰った」

「サプライズねえ……僕が言えた義理じゃないけど、そんなプレゼントを渡されたら僕は堪ったものじゃないね」

メルトの返答に対して、オーバーは両肩を竦めながら、聞きたい事はそれで全てとばかりに、踵を返して歩き出してこの場を後にする。

「もう、あのおもちゃで遊ぶのは無理っぽいね……」

去り際に零したオーバーの言葉に返事を返す者は、この場には誰も居なかった。

**１００万ＰＶ突破記念作品　仮面ライダーシード＆仮面ライダークウガ　繋がる世界**

次回からは三人のライダーの……な予定となっております。

それでは。

## １００万ＰＶ突破記念作品　仮面ライダーシード＆仮面ライダークウガ　繋がる運命

何かクウガ編……プロットの時よりも、だいぶ長くなってしまっていますが、やっと後半に突入してきたかなと思います。

それでは今回も楽しんでいただけたら幸いです。

［「逃がしちゃ駄目よ長谷川君！！！」］

「はい！！！」

漆黒に染めた身体の背中に、同色のコウモリに似た翼を生やしたボマーは空へと飛び立つのを見て、Ｅ２が恵美の指示の下に、ＥＳＭ０１の銃口を、この場から飛び去ろうとするボマーに向ける。

しかしＥ２の攻撃は、この場から飛び去ろうとするボマーに、届く事は無かった。

「させないわよ！」

「ぐっ！？」

Ｅ２がボマーを攻撃するよりも早く、駆け寄って来たガンナーが繰り出した拳が、ＥＳＭ０１を握るＥ２の右腕に命中して、弾道を逸らせた為である。

「行くなら今よ大地！あのライダーはここから北に移動してる！空から行けばきっとすぐに追い着く筈よ！」

攻撃を命中させた直後、ガンナーが上空のボマーに叫んだ。

その声は確かにボマーに届いたのか、返事こそは返ってこなかったが、一度だけ首を縦に振り、その場から飛び去って行った。

［「長谷川君！大丈夫！？」］

「は、はい。僕は大丈夫ですけど、逃げられたしまったみたいです……」

［「それは残念だけど、今は目の前の敵に集中した方が良いわ……来るわよ！」］

恵美の声に反応して、Ｅ２が視線を飛び去ったボマーから、地上に視点を戻すとガンナーが追撃態勢を整えているのが分かった。

「そう何度も喰らうか！」

腕を弾かれただけなのに、かなりの衝撃を受けた事から、今のガンナーの攻撃を立て続けに何度も受ければ、危ないと感じたＥ２は、バックステップで後方に下がりつつ、牽制の意味も込めて、ＥＳＭ０１で弾幕を張る。

「あはははは！！！何その攻撃？そんなんじゃ全然効かないわよ！！！！！」

だがガンナーにはＥ２の攻撃が全く効いていないのか、ＥＳＭ０１によって張られた弾幕に、自ら飛び込み、笑いながらＥ２目掛けて突進して行く。

「効いてない！？」

［「落ち着いて長谷川君。距離を置いて戦ってもらちが明かないし、逆に相手には強力な遠距離武器がある……それなら接近戦を仕掛けた方が、こっちにチャンスがあるかも！」］

「やってみます！」

恵美の新たな指示の下に、Ｅ２はＥＳＭ０１をホルスターにしまい込み、此方に向かって突進して来るガンナーを、迎え撃つ為に構えを取った。

「あら。私と踊ってくれるのかしら？」

Ｅ２が接近戦を仕掛ける構えをする様を見て、ガンナーはわざとらしい台詞を言いながら、先程と同じ様に再び拳を繰り出す。

「ぐっ！？」

繰り出された拳は、確かに重い一撃であり、その拳を受け止めたＥ２も、その威力に肺の中の空気が声と共に押し出されるが、その攻撃自体は、素人の放った一撃に変わり無い。

一介の刑事として、格闘技の経験もある程度積んでいる長谷川としては、捌く事は不可能では無かった。

「はあああ！」

ガンナーの一撃を受けきったＥ２は、お返しとばかりに、受け止めたガンナーの腕を抑え付けながら、脇腹を蹴りつける。

その蹴りは、見事にガンナーの腹部に命中した。

しかし攻撃が命中したという事実と、それによるダメージが、必ずしも反映されるとは限らない。

「……そんなリードじゃ、楽しく踊れないじゃないのよ！！！」

［「今の一撃が効いてないっていうの！？」］

昨日の夜での戦いであれば、確実に悶絶していたであろう攻撃を受けながらも、ガンナーは恵美の言葉通り、その余裕を崩す事無く、Ｅ２に掴まれていた腕を振り解き、自身の脇腹に宛がわれていた足を掴み、力任せに砲丸投げの選手の要領でＥ２を振り回した上に、最後は投げ飛ばしてしまった。

「ぐあああああああ！？」

ガンナー自身の力と、回転させた事で加えられた凄まじい力も相まって、地面に叩き付けられたＥ２の全身に、かなりの衝撃が走る。

「……くっ……うう……」

［「長谷川君！？長谷川君！？しっかりして！？」］

全身に痛みを走らせながら、地面にのたうつＥ２に、恵美が何度も呼び掛ける。

「まだまだ……これくらいじゃ終わらせないわよ？」

先程の一撃で自らの勝利を確信したガンナーは、悠々と未だ恵美に答えを返す事すら出来ず、地面に倒れるＥ２に向かって歩みを進めて行く。

［「立って長谷川君！このままじゃ……」］

「……は、はい……」

悲痛なまでの恵美の声に応える為に、Ｅ２は全身に駆け巡る痛みに耐えながら、残る力を振り絞って立ち上がる。

「……ふふ。やっぱりこの位はやってくれないと、ゲームとして面白味が無いってものよね」

満身創痍になりながらも立ち上がったＥ２に対して、ガンナーは余裕の態度を崩す事無く、その場で立ち止まり両腕に装備した手甲の先端をＥ２に向けた。

「はあ……はあ……はあ……」

［「良く立ったわ……と言いたいけど、大丈夫なの？長谷川君」］

立ち上がった後も、荒い呼吸を続けるＥ２に、恵美は心配そうに声を掛ける。

「……ええ。まだまだ……大丈夫です！」

荒くなった呼吸を整えながら、気丈に返事を返すＥ２だが、自身の限界が近い事は、他の誰でもない、Ｅ２自身が最も自覚していた。

［「……長谷川君」］

それは恵美にも良く分かっている、周知の事実であった。

本来ならばここで撤退を指示する事が、恵美が出来る最良の判断だ

と分かってはいるが、今現場で実際に戦っているＥ２の闘志は、少しも衰えていない事も理解している……

［「……本当に大丈夫なのね？」］

恵美は悩み、迷いながら、Ｅ２に問い掛ける。

「Ｅ２は恵美さんが製作したんですよね……そのＥ２がこんなところで負けると思ってるんですか？」

その問いにＥ２は、逆に問いで返す。

［「……そんなの……そんなの私の作ったＥ２が勝つに決まってるじゃない！！！」］

返された問いに、恵美は大きな声で答えた。

最初から言うべき事は、決まっていたのだ。

ここでＥ２が身を引けば、装着者の長谷川の安全は取り敢えず確保出来るかもしれない。

だがそれは、目の前の脅威を野放しにする事と、同意なのである。

強敵を目の前にして、弱気になっていたのは、実際に戦っているＥ２ではなく、Ｅ２を勝利に導く指示を出さなくてはならない筈の恵美の方だった。

しかし今の恵美には、何の迷いも無い。

製作者である彼女以上に、自身の心血を注いで作り上げたシステムを、信じてくれている人が居る。

半ば強引に装着者に仕立て上げたにも関わらず、その本当の理由すらもろくに話していない筈なのに、全てを掛けて傷付きながら、必死に立ち上がろうとしている青年がその力を信じているのだ。

そのシステムは、大切な人々を幸せにする為に生まれた、希望の力である。

人々の幸せを守る為に生まれ、行使しようとする力が、誰かを傷つける為に振るおうとする力に屈する訳が無い。

負けて良い筈が無いのだ。

「やっぱり恵美さんは、そうやっていつでも偉そうに自信満々に指示を出している方が、似合ってますよ！」

「「何よそれ！？それじゃあ私がいつもわがまま言ってる暴君みたいじゃないのよ！！！」」

何時もの調子を取り戻した恵美に、Ｅ２は軽口を叩く。

恵美もそんな軽口に対して、憤慨している状況では無いと分かっていながら、心から最高の笑顔を浮かべながら、軽いやり取りを返す。

「話てる場合じゃないと思うわよ！！！」

Ｅ２と恵美の会話に割り込む様に、ガンナーが叫ぶと、手甲に設けられた銃口から、黒い光弾が連続で射出されて、Ｅ２に対して猛威

を振るう。

「くっ！！！」

攻撃される前にガンナーが、叫んだ事が功を奏したのか、Ｅ２は素早い反応で、その場から飛び退いて難を逃れる。

［「今のは良い判断よ！長谷川君！！！」］

「任せておいてください！それと恵美さん！！！」

［「どうしたの？」］

「今までも……そしてこれからも一緒に戦って、必ず勝ちましょう！！！」

［「長谷川君……そんな事……当たり前でしょ！！！」］

二人は互いを鼓舞する様に、言葉を交わす。

「さっきまで私に歯が立たなかったくせに、余裕ぶってるんじゃないわよ！！！」

ガンナーはＥ２と恵美のやりとりが気に食わないのか、更に光弾を連続で射出し続けその攻撃をＥ２が、見事なフットワークで避け続ける。

［「このまま避け続けていても、らちが明かないわね。何か突破口を見つけなくちゃ……え！？」］

E２が全力で光弾を避け続ける間に、恵美が打開策を見つけ出そうと模索する中で、自体は急変する。

「な、何よこれ!?身体が自由に動かない!?」

ガンナーの動きが、突如として変わったのだ。

先程までは、E２のみに狙いを絞っていたガンナーの攻撃が、周囲を破壊する無差別攻撃となったのである。

「これは一体……」

「「もしかして力を制御出来なくて、暴走してるっていうの?」」

ガンナーの狙いが外れた事により、立ち止まってE２と恵美は、ガンナーの動向を観察する。

「何よ!何よ!何よ!何なのよ!!!どうなってるのよこれ!?止まりなさいよ!!!!!!」

破壊活動を続けながら、ガンナーは必死に声を荒げながら自身の動きを静止させようとするが、ガンナーの動きはその声に反比例するかの様に、激しさを増していく。

「「……どうやらあの様子だと、自分で止める事は出来そうに無いわね」」

「そんな!?それじゃあ、あれを止めるには……」

「「私達が止めるしか手は無いわね」」

「でも恵美さん。どうやって止めるって言うんですか？ただでさえ生半可な攻撃が効かない以上、あんなに無茶苦茶な攻撃を続けられたら、近付く事すら難しいですよ」

［「……あの無差別攻撃を突破して……相手を一撃で倒す強力な一撃を叩き込めば……」］

恵美は全ての情報を整理して、脳内でパズルのピースを嵌め込んでいく。

そしてそれが一つの形を成した時、恵美の中に勝利の方程式が、鮮明にイメージとして浮かび上がった。

［「そっか！この方法ならきっと！！！」］

「恵美さん？」

［「長谷川君！マシンドレッサーからＥＳＭ０５を持って来て！それとマシンドレッサーもカタパルトモードにして！！！」］

「え？ちょっと！？」

［「急いで長谷川君！！！」］

「は、はい！」

口早に指示を出す恵美に、戸惑いながらもＥ２は、Ｅブレスを操作して、マシンドレッサーを呼び寄せる。

「これで一体何をする気なんですか？」

［「ふふふ。良くぞ聞いてくれたわ！」］

指示通りマシンドレッサーを呼び出して、格納場所からＥＳＭ０５を取り出しながら、Ｅ２が投げ掛けた疑問に、恵美は悪戯が成功した子供の様な無邪気な笑みを浮かべながら、作戦の内容を話した。

「……相変わらず凄い事を考え付きますね」

作戦の概要を聞いたＥ２は、尊敬と呆れを半々で混ぜた言い方をしながら、カタパルトモードとなったマシンドレッサーの発射台へと足を乗せる。

［「当然よ！なんたって私は、天才美少女なんだから」］

「……本当に……その通りですね」

［「そうよ。だから……絶対に成功させようね……長谷川君！！！」］

「はい！！！」

どちらも失敗する事は考えていなかった。

互いを信じて行動すれば、必ず結果がついてくる。

本気でそう思えるからこそ、何の躊躇いも無く、どんな無茶な事でも出来るのだ。

『スリー・ツー・ワン・スタート』

マシンドレッサーから機械的な音声がカウントを開始され、スタートという言葉が聞こえると同時に、マシンドレッサーの上に乗ったＥ２が凄まじい勢いで、弾丸の如く射出されて、暴走し続けるガンナー目掛けて飛んで行く。

［「来るわよ長谷川君！！！」］

「了解です！！！」

恵美の指示に従い、Ｅ２はＥＳＭ０５の棒状の部分を展開させて、盾を形作る。

それと間を置く事無く、乱雑にガンナーが発射する黒い光弾が、Ｅ２を容赦なく襲う。

「くううううう！！！！」

［「頑張って長谷川君！もう少しよ！！！」］

ＥＳＭ０５を弾除けにして、強引に飛び込んで行くＥ２に、恵美がエールを送る。

恵美の考えた作戦は、至ってシンプルなものだった。

ガンナーにＥ２の最大の攻撃を当てる。

ただそれだけの事だったのだ。

弾幕を盾状のＥＳＭ０５で防御しつつ、カタパルトモードのマシン

ドレッサーで射出して、一気に接近する。

危険な方法ではあるが成功すれば、これ以上に強力な一撃は無い。

そしてこの作戦は、最高の形で実を結ぶ。

「今だ！！！」

光弾の弾幕を潜り抜けたＥ２は、全力の叫びと共に、その役目を終えたＥＳＭ０５を投げ捨てて、右腰のホルスターからＥＳＭ０１を引き抜き、同時に左腰からはマガジンを取って、そのままマガジンを、ＥＳＭ０１に装填する。

『ブレイクチャージ』

マガジンを装填した瞬間に、ＥＳＭ０１から機械的な音声が鳴り響く。

Ｅ２はすぐに引き金を引き、銃口から黄色いネット状の光弾が射出されて、ガンナーの動きを阻害する様に覆い被さる。

それを確認しながら、Ｅ２はＥＳＭ０１を右腰のホルスターに収めるとＥＳＭ０１から黄色い光が、Ｅ２の右足へと流れて行き、集約されていった。

「たあああああああああああああああ！！！」

Ｅ２は黄色い光が集約された右足を突き出して、ガンナーへと最大の一撃を放つ。

「……これで……ゲームオーバーか。クリアは出来なかったけど、面白いゲームだった……かな？」

目前に迫るＥ２を見て、ガンナーは唯一自由に動かす事が出来た口を動かし、言葉を紡いだ。

その直後、黄色い閃光が全ての視界を覆い、辺りに大きな爆発を巻き起こした。

……そして仮面ライダーガンナーは、この世界から消えて、一人の少女、桐崎沙耶となった……

**１００万ＰＶ突破記念作品　仮面ライダーシード＆仮面ライダークウガ　繋がる世界**

今回はＥ２とガンナーでしたので、次回はクウガとボマーのバトルを予定となっております。

それでは。

## １００万ＰＶ突破記念作品　仮面ライダーシード＆仮面ライダークウガ　繋がる

当初の予定ではクウガ編は二十章程で完結する予定だったのですが、何だか収まらなくなってしまいました……

そんな訳でまだまだ続くクウガ編ですが、今回も楽しんでいただけたら幸いです。

海鳴市の公道で、連鎖的に大きな爆発が何度も巻き起こる。

その爆発地点の上空からは、コウモリを模した翼で宙を舞う、一人の漆黒の身体を持つ仮面ライダー、ボマーが次々と自らの能力で生成した爆弾を投下していた。

そしてその爆発音に混じり、一台のバイクのエンジン音が唸りを上げる。

「飛ばすから、しっかり掴まってて！！！」

「うん！」

赤い鎧を纏う古代から蘇った戦士クウガが、後ろから自身にしがみ付く白髪の青年、空に注意を促しながら、ビートチェイサーを巧みに操り、次々と巻き起こる爆発を掻い潜って行く。

「中々当たりませんね……ん？あれは」

投下する爆弾を尽く避け続けるクウガに、ボマーが苛立ちを言葉にしながら、進行方向を見やると、前方に山間を掘って作られた、全長２０メートル程のトンネルが見えた。

「……良い事を思い付きました」

そのトンネルを見たボマーは仮面の下で笑いながら、一旦爆弾の生成を止めて、飛ぶ事に専念する。

ボマーが向かう先は、トンネルの出口だった。

「ここは一本道で、他にバイクで通れる道は無い……つまりここを壊せば彼らはこれ以上進めなくなる筈……」

ボマーの予想通り、少し遅れて地上の道を、クウガ達がビートチェイサーで疾走しながら、トンネル内部へと突入して行く。

「……今だ！」

クウガ達がトンネル内部に突入したのを確認したボマーは、新たに爆弾を生成すると、もう暫くすれば、クウガ達が出て来るであろうトンネルの出口へと爆弾を投げ込んで、今度はクウガ達が突入した入り口の前に飛んで行った。

その直後、大きな爆発が、トンネルの出口付近で発生する。

これに最も驚いたのが、そのトンネル内部を走っていたクウガと空だったという事は、あえて言うまでも無い。

ボマーの起こした爆発は、トンネル全体を崩壊させる程の威力ではなかったが、その爆発地点の周囲の壁などを破壊するには充分だったのだ。

爆発によりトンネルの出口付近の壁は壊されて、クウガと空が入ってくるのに使用した入り口を除けば、唯一のトンネルを抜けられる筈だった道は完全に瓦礫に埋もれてしまい、通り抜ける事が不可能となってしまったのである。

「……これじゃあ先には進めないか」

瓦礫に埋もれたを前方を視界に映しながら、ビートチェイサーを停車させて、クウガは呟く。

「そうだね。遠回りになるかも知れないけど、一旦戻って別の道を……ん、今何か聞こえなかった？」

クウガの呟きに対して、空が返答を返すその途中で、トンネルの外から声が聞こえて来た為に、話を其処で中断した空は、その声に耳を傾ける。

「君達に要求する！【器】についての情報を大人しく渡してもらいたい！この要求が呑めない場合は、容赦無くこちら側のトンネルのも破壊させて貰う！五分だけ待ってあげるよ！それまでに答えを決めて欲しい！！！」

トンネル内にボマーの声が響き渡った。

そしてこの言葉で、クウガと空は確信する。

自分達がボマーの策略によって、劣勢に追い込まれたという事に……

「……これは思った以上に不味い状況かもしれないね……それにあの力。微かだけど、【闇】の力を感じる……事態は僕が思っている事とは違う方向に向かい始めてるのか？」

逸早く現状を認識した空は、苦虫を噛んだ様な顔をしながら口を開く。

「相手は空を飛んでるって事は……要求を無視して外に出ても、先手を打たれる可能性が高すぎるか……」

クウガも自分達に不利な状況である事に、頭を悩ませる。

「……そうだね。空を飛ぶ相手なら、五代さんが邪悪を射抜く戦士に成れれば、どうにかなるかも知れないけど」

空は現状を打開する為の一つの提案を出すが、同時にそれを実行するには、大きな問題がある事も理解していた。

「緑のクウガなら成れるけど……肝心の武器が無いんだよな」

邪悪なる者あらば　その姿を彼方より知りて　疾風の如く邪悪を射抜く戦士あり。

古代リントが残した文字から解読された言葉であり、この状態、ペガサスフォームとなったクウガは、視覚、聴覚といった感覚神経が極限まで研ぎ澄まされ、遠くに居る相手の正確な場所を特定する事が出来る。

それは遥か上空も例外ではない。

そしてペガサスフォームの専用武器である、ペガサスボウガンの強力な一撃により、敵を射抜く事が出来るのだが、それをする為にはある重要なプロセスを踏まねばならないのである。

他のフォームの武器も同様なのだが、武器を生み出すには、その武器と類似した物質を変換しなければならないのである。

タイタンソードならば、同じ用途に使われる剣や、多少でも切れる部位の存在している角材など、ドラゴンロッドならば、形状の近い棒状の物体が代表に上げられ、それはペガサスボウガンにおいても例外では無い。

つまりペガサスボウガンを手に入れる為には、同じ用途で使われるボウガンやそれに類似した道具が必要になるのだが、このトンネルの中には、先程のボマーの爆弾によって辺りに散らばった瓦礫位しか見当たらないのだ。

勿論こんな瓦礫では、ペガサスボウガンを生み出す事が出来ないのは、当然の話である。

しかし他にこの場所にある物と言えば、クウガと空が乗っているビートチェイサー位しかない。

「確かにこの場所には……あれ？何かこの部分変じゃないかな」

周囲を見ても特に何も見当たらない事から、古代の時代には存在せず、病院で本を読んで得た知識としてしか知らなかったバイクである、ビートチェイサーを観察していた空が、ある一点を指で示す。

その部分は、ビートチェイサーのハンドル下部分に設けられたボックス状の物体だった。

バイクを実際に見るのは初めてであった空だが、そのボックスだけが、妙に違和感を感じさせる為に目に入ったのだ。

「え？……こんなのビートチェイサーに無かった筈だけど……」

運転していた為に、丁度死角となっていた位置にあったボックスを身を屈めて覗き込む事で、初めて視界に捉えたクウガは、驚きの声を上げる。

空が見つけて疑問を持ったのは、先程のクウガの発言が示す通り、そのボックス状の物体が後から設置された急造品だった為だ。

慎重にそのボックスにクウガが手を触れて、上下左右に動かしてみると僅かにボックスの上部がスライドした。

「……中に何か入ってる？」

動かした事で、そのボックスが何かの収納スペースである事に気付いたクウガは、僅かに動いた上部を一気に上に押し上げて、中を確認する。

「それって……手紙？」

その様子を後ろから見ていた空が、ボックスの中に入っていた物体を言葉にした。

空の言った通り、ボックスの中には白い無地の手紙が一通とその下にボックスよりも小振りな、収納ケースが入っていた。

「何で手紙が……」

クウガはボックスの中に入っていた手紙を拾い上げて、封を開けて書かれている手紙の文面に目を通す。

五代　雄介へ

君が長野の遺跡に向かってから消息を絶ったと聞いた時は、驚いたがもしかしたら君はまた、未確認生命体との戦いの渦中に飛び込んだのではないかと私は考えた。

出来れば君には戦うよりも冒険をして欲しい。

それが無理ならばせめて、私もまた君と共に戦いたいが、君の居場所が分からない現状では、それすらも難しいだろう。

だから私は、もしかしたら君の手元に届くかもしれない可能性を信じて、出来るだけの準備をする事にした。

もしもこの手紙が君に届いていたとしたならば、この手紙の下に置いてある筈の箱を開けて、必要であれば遠慮無く使ってくれ。

こんな物が必要な状況になっていて欲しくは無いが、これが君の力となる事を切に願いながら、君の無事と帰りを祈っている。

一条　薫

「……一条さん」

手紙の送り主は、五代の元居た世界に居る一条薫が、五代雄介に宛てたものだった。

手紙を読み終えたクウガは、手紙の送り主の名前を呟きながら、手の中の手紙を強く握り締める。

「……あっ！もしかしてこの箱の中身って！？」

予期せぬ手紙に想いを寄せるのも程々に、一条の手紙に書かれていた内容から、ある考えに至ったクウガは、急いで手紙と共に入っていた箱を拾い上げて、その中に納められた物体の正体を確認した。

「やっぱり……そうだ。ありがとうございます一条さん！」

箱を開けて、中身を確認したクウガは、予想通りのものが入っていた事に、感歎の声を上げて、別の世界に居ながらも、それを送り届けてくれた一条に感謝の言葉を述べる。

それは警察で一般的に使用される拳銃だった。

五代がこの世界に来るのと時を同じくして、科警研で保管されていた筈のゴウラムが、同じく保管されていたビートチェイサーと合体した事を知り、何かが起こっているのではないかという考えに至った一条は、もしかしたらゴウラムが五代の元に辿り着くかもしれない可能性に賭けて、警視庁と掛け合い、今クウガの手元にある拳銃を、ビートチェイサーに設置する許可を申請したのだ。

その申請が一条の手腕によって見事に通り、実際に設置されたのが、元居た世界での昨日の話だったのだが、その事実を知る術は、誰にも無かった。

「もしかしてそれがあれば！？」

「ああ！これがあれば緑のクウガになって、攻撃も出来る！」

バイクに続いて、本物の拳銃を初めて見た空に、クウガは肯定の返事を返す。

「それじゃあ早速……超変し……」

「はっ!?この力ってまさか!?」

拳銃を手にした状態で、クウガがマイティーフォームから、ペガサスフォームへ変わろうとしたその時、空がトンネルの外で待ち伏せているボマーに異変が起こった事に気付く。

そしてそれと同時に、連続的に大きな爆発音が、トンネル内に響き渡り、その爆発の衝撃がクウガと空の居る足元どころか、全体を何度も揺さぶる。

「な!?まだ五分は経ってない筈なのに、攻撃を始めた!?」

連鎖的に起こる爆発によって、途中で超変身を中断したクウガは、驚愕の声を上げた。

正確に時間を計った訳では無いが、明らかに三分も経っていない事を理解していた為である。

「多分だけど……彼は【闇】の力に呑まれたんだ」

爆発の衝撃が全体を揺さぶる中で、空が確信を持って口を開く。

「【闇】の力に呑まれた?」

「うん。さっきからずっと感じていたんだけれど、それは微かなも

のだったし、もしかしたら僕の勘違いかもしれないと思っていたんだけどね。その力が今はどんどん強くなってるんだ……そしてその力を外に居る彼から強く感じる！」

「……もしかして、空を【器】にするのを諦めて、あの表の奴が選ばれたんじゃ！？」

空の言葉からクウガが一つの仮説を口にするが、空はそれを首を横に振って否定する。

「それは違うと思うんだ。確かに【闇】の力を彼から感じはするし、大きくなっている様だけど、【闇】の本体はこんな程度じゃない。どうやったのか分からないけど、多分【闇】の力の一部を移植した装飾品みたいなものを身に付けてるせいだと思う」

「じゃああれは、【闇】の本体じゃないって事か？」

「うん。きっと彼は利用されてるだけなんじゃないかな？この様子を見る限りじゃ、もう【闇】を制御しきれなくなって、身体の支配権も奪われてるみたいだし……」

爆発音に混じって殆ど聞こえてこないが、耳を澄ませば僅かに、先程トンネルの外から聞こえて来た声と同一人物の声が聞こえた。

「な、何で急に身体が勝手に動くんだ！？止まって！！！お願いだから止まってよ！！！！」

それはボマーの発する、悲痛な懇願する叫びだった。

「五代さん！お願いします。彼を救ってくれませんか？」

その声を聞いて、空はクウガに頭を下げる。

「彼が悪くないなんて事は決してないと思います。だけど僕がこの世界で復活したばかりに、彼は苦しんでる。この力は僕がどんな事があっても封印し続けなきゃならなかった筈なのに……」

一時とはいえ、自分自身の存在すらも忘れ去ってしまう程に長い間【闇】と共にあったからこそ、今のボマーの苦しみを空は痛い程に理解していた。

例えそれが自分を狙う敵だったとしても、その力によって目の前で苦しんでいる姿を、空は見続けたくは無かったのである。

「大丈夫だよ」

頭を下げて一気に己の想いを吐露した空に、クウガの声が降り注いだ。

その声を聞き、空が下げていた頭を上げて、視線を前に向けると、クウガが右手の親指を立てた状態、サムズアップをしている姿が飛び込んで来た。

「……五代さん」

「俺も同じだから。助けられるなら助けたい。それは理屈じゃないんだって……」

ただ考え方を変えれば、それだけで良い筈なのに、それが出来ずに戦う事しか出来なかった。

それがあまりにも辛い事を、空の目の前に居る戦士は誰よりも知っている。

だからこそ喜んで、クウガは空の願いを迷わず承諾した。

戦う相手を救う事が出来る戦い。

それは互いに傷つけ合うしか出来ない戦いとは違い、誰もが笑顔になれる可能性を秘めているのだから……

## １００万ＰＶ突破記念作品　仮面ライダーシード＆仮面ライダークウガ　繋がる

クウガとボマーのバトルをこの回で終わらせるつもりが、何だか枠に収まらず続く事に……次回はちゃんと戦いますので。

そう言うわけで次回はクウガとボマーに、シードとハンターを立て続けに行くと思います。

それでは。

## １００万ＰＶ突破記念作品　仮面ライダーシード＆仮面ライダークウガ　繋がる世界

そんな訳で急いで書き上げました続編で連続投稿です。

今回も楽しんでいただけたら幸いです。

「超変身！」

クウガの叫びと共に、ベルトのアークルに嵌め込まれたアマダムは赤から緑へと変化を遂げて、それに呼応する様にして、複眼も緑となり、上半身を覆っていた赤い鎧も緑となって、よりシャープなデザインの形に変形した。

変化はそれで留まらず、右手に握り締めていた拳銃がその存在を変質させて、このペガサスフォームの能力を最大限に活かす事が出来る武器、ペガサスボウガンへと生まれ変わる。

「その姿であれば、確実に彼の【闇】の核となっている部分だけを撃ち抜ける筈です！」

ペガサスフォームに変身して改めて、ビートチェイサーに跨ったクウガに、空が一度説明した内容を改めて、伝える。

このフォームは、他のフォームと比べて、極端に変身していられる時間が限られている為、言葉で返答せず、サムズアップで答えたクウガは、空の返事を待つ事無く、空をトンネル内部に残して、トンネルの入り口を目指してアクセルを切り走り出す。

程無くしてトンネルの入り口を抜けたクウガは、止まる事無く意識を周囲に集中させる。

様々な音や声などの情報が、クウガの中に入り込む。

その膨大な情報の中から、クウガは意識を更に絞込み、上空へとその意識を集中させると、コウモリの様な翼を羽ばたかせる音と漆黒の身体を持つボマーの姿を捉えた。

だがボマーを攻撃するのはまだ早い。

クウガの目的は、ボマーを倒す事に変わり無いが、それはただ倒すというだけでなく、【闇】から開放する事なのである。

だからこそクウガは、その【闇】を絶つ為に、限界まで意識を研ぎ澄ます。

ボマーの身体に流れる、エネルギーの流れ……

空の言っていた事が正しいのであれば、クウガにもその流れを感じる事が出来る筈なのだ。

クウガはその言葉を信じて、ボマーの身体からその流れを感じ取る。

その集中力は今までの限界を超えて、新たな領域へと踏み込んでいく。

それまでクウガの意識にあった様々な情報が、一点に集約され、無駄なノイズが遮断されて、ボマーの中に何か黒い塊の様な部分を浮かび上がらせたのだ。

「見えた！！！」

クウガはその一点に狙いを定めて、上空のボマーに構えたペガサスボウガンの引き金を引く。

引き金を引くと同時に、高密度に圧縮された空気弾が、【闇】を封じる封印エネルギーを纏いながら、射出されてボマーの身体を撃ち抜いた。

「……え？」

それから少しの間を置き、ボマーは動きを止めて、驚きの声を発した。

「……動く？……僕の身体が自由に……動くんだ……はは……良かった……」

指の小指までゆっくりと、順序良く自らの身体を動かして、ボマーは歓喜の声に打ち震えるが、急にその動きを止めて落下を始める。

漆黒の身体は元のブラウンを基調として、上半身を覆う銀のプロテクターと青い複眼を持つ以前の状態と戻ったのだ。

それに伴い翼も消滅してしまい、飛ぶ手段を失ったのである。

更に変化はそれで終わる事は無く、ボマーは既に意識すら手放しているのか、その変身が解けて、黒谷大地の姿となって落下を続けていく。

ボマーはかなり上空に居た為に、その高度は凄まじく、そのまま地面に激突すれば、悲惨な事態となる事は確実であったが、それが実現する事は無かった。

何故ならば気絶した大地は、地面に激突する事無く、宙に浮いてい

た為である。

だからと言って、彼が自力で浮かんでいる訳ではない。

落下する大地を受け止めて、空中に浮かんでいる存在が居たのだ。

それは黒と金の色をしており、クワガタに酷似した形状をしていた。

クウガと共に、古代から現代まで共にあり続けた存在、ゴウラム。

それが大地の命を救った存在の名称である。

ゴウラムが大地を助ける場面を見届けたクウガは、制限時間が来る前に、変身を解き、五代雄介の姿となって、それに伴い元mの形状となった拳銃に自然を向けた。

「……力を貸してくれてありがとうございます。一条さん……」

五代は拳銃に向かって、その拳銃を届けてくれた一人の大切な友人に感謝の言葉を述べた。

『コール・ライガー』

分身体を操るメカ犬に、一時的にハンターの相手を任せた俺は、その間にタッチノートを操作してメカ虎を呼び出す。

タッチノートから音声が流れて、さして間を置く事も無く、メタルグリーンのボディーを持つ小さな虎が、瓦礫の数々を駆け抜けて、俺の目の前へとやって来る。

『また呼んだじゃんマスター！！！』

俺の目の前にまでやって来たメカ虎が、その場で何故か宙返りをしながら言う。

「ああ！今日も頼むぞ！！！」

メカ虎の言葉に相槌をしながら、俺はタッチノートの操作を続けていく。

『スタンディングモード』

流れる音声と共に、アタッチメントパーツへと変形したメカ虎を握り締めながら、俺はタッチノートを再びベルトに差込みつつ、左側をスライドさせて、素早くアタッチメントパーツを差し込んだ。

『パワー・ライガー』

アタッチメントパーツを差込んで、音声が鳴り響いた瞬間に、俺の

周囲にメタルグリーンの追加装甲が展開して、パワーフォルムのクリムゾンレッドのボディーへと次々に装着されて行く。

「行くぞメカ虎！」

『ＯＫじゃん！』

パワー・ライガーへの変身を完了させた俺は、分身体とハンターの戦いに参入する為に、脱兎の如く駆け出す。

本来ならばパワーフォルム特有の為に、著しく低下する機動性を、ライガーモードの特徴である、俊敏性の強化が補い、ベーシックフォルム以上の素早さを実現させる。

「たあああああああああ！」

俺はその速さを上乗せした重い拳の一撃を、ハンターへと叩き込み後退させた。

『待っていたぞマスター』

その隙にある程度の間合いを取ったメカ犬が、俺の横に並んで声を掛けて来る。

しかもその分身体を見れば、身体全体から光の粒子が漏れ出ていた。

「何とか間に合ったかな」

『うむ。これ以上は分身体が持たなかっただろうからな。しかしどうする？あのハンターの速さと力に対抗する為に、此方もパワー・

ライガーを選択したが、あまり先程の攻撃が効いた様には見えないぞ』

メカ犬の言った通り、ハンターは先程の一撃にも然程のダメージを受けた様子を見せず、ベルトに手を翳すと、その身体と同様に、漆黒に染まったナイフを生成して、此方へ向かって駆け込んで来た。

「まあ、やるだけやってみるさ！」

『そうか』

そう言った俺の言葉に返事を返した直後、分身体は完全に光に帰り、その役目を終わらせた。

『男は度胸じゃん！』

『うむ。時には真っ向から向かっていくのも、戦いには重要なファクターだ』

分身体が消えてからすぐに、アタッチメントパーツになっているメカ虎と、分身体の操作を終えたメカ犬の声がその本体となっているベルトから聞こえて来る。

「言われなくてもそうするさ！！！」

俺はメカ犬とメカ虎の励ましに答えながら、ベルトの右側をスライドさせて、黄色いボタンを押す。

『パワーブレード』

ベルトから音声と共に、光が発生してその光が赤い刀身の剣、パワーブレードへと生成されていく。

生成されたパワーブレードを握り締め、俺は黒い刃のナイフを逆手に持って、迫り来るハンターに、迎撃態勢を取る。

「「はあああああああああ！！！」」

俺とハンターは、ほぼ同時に其々の武器を振り上げて、互いの一撃をその刃で受け止める。

一回、二回、三回と切り結ぶ中で、長剣と短剣という得物の違いから、お互いに有利に戦える距離を模索していく。

短剣を扱うハンターは、その切り替えしの良さと、短いがゆえにネックとなる距離を埋める為に、何度も俺の懐に飛び込んで来ようと果敢に向かって来る。

それとは逆に俺が使うパワーブレードは長剣であり、短剣と比べると、どうしても手数が出せなくなってしまう。

だから俺はライガーモードの恩恵によって得た機動性と、長剣だからこそ放てる高い威力を活かすべく、基本はハンターの攻撃を捌く事に重点を置き、ハンターが攻撃した直後や、切り替えしの際に、稀に生まれる隙をカウンターとして突く戦法を心掛ける。

「……何でだ。何でお前みたいなガキが其処までして戦うっていうんだよ！！！」

お互いに決定的な一撃を決められないまま、何度も攻守を入れ替え

る中で、ハンターが攻撃の手を緩める事無く、叫びとも呼べる問いを俺にした。

「俺は……自分に出来る事をしてるだけだよ。守りたい大切な人達が居るから、だから戦うんだ！」

俺はハンターに対して、自分の気持ちをぶつける様に、叫びに似た言い方で返答しながら、ハンターと切り結んだナイフの刃を押し返す。

「守りたい人達ね……良い子のお手本みたいな陳腐な答えだな！！！」

ハンターは俺の答えを一蹴すると、切り結んでいた刃を下げて、一旦距離を取った。

「陳腐な答えかも知れないけど、あんたにだって、守りたい人が居るんじゃないか！？」

「俺はそんな事思わないね！どんなに大切に思ってたって、人は平気で簡単に、驚くぐらい残酷に他人を裏切るんだぜ！そんな奴らを守りたいと誰が思う！？」

「……確かにそんな人が居ないなんて言えないけど、それが人間の全部じゃないだろ！！！」

互いに間合いを計り合いながら、俺とハンターは自身の他者に思う考え方を吐露していく。

「そんな奴らが居るって分かってるだけで充分だろ？俺達は利害が

合えば一緒に居るし、気に食わない事が多けりゃ敵にだってなる。
誰だってテメエの都合で動いてるだけだ!!!おい糞ガキ!お前だって結局は自分の為に戦ってるんだろ?」

ハンターの言っている事を、間違っているなんて俺は言えなかった。
確かに俺が戦うのは、突き詰めれば、自分がそうしたいからそうしているだけで、本質的な部分では、ハンターの持っている思想と何一つ変わらないのかも知れない……

……だけど!

「言ってる事は正しいかもしれない。確かに人は何をする時だって、最期は自分の為なのかも知れないさ……でもそれが、他の誰かを傷付けて良い免罪符になる訳無いだろ!!!」

例え自分を殺そうとする相手に拳を振るったとしても、その拳を痛める以上に、相手を殴ってしまったという事実に、心の痛みを覚える人だっている。

「そんな事は俺が知ったことじゃねえんだよ!俺は俺のやりたい事を、やりたい様にやる!それで他人がどうなろうが……何だ?」

ハンターが途中まで言い掛けたところで、会話を中断して、戸惑いとも取れる声を上げた。

しかも先程までの動きとは打って変わり、何処か電池の切れ掛かったオモチャの様な動きを見せ始める。

『マスター!!!』

「どうしたメカ犬！？」

『ハンターの中のエネルギー反応が、異常な流動を繰り返している！この様な状態では……』

俺がメカ犬の話に耳を傾けていたその時、ハンター新たな動きがあった。

「か、身体が勝手に動きやがる！？」

そう言いながら、何かに抵抗する様に言い放つハンターの言動とは裏腹に、ハンターは逆手に持ったナイフで付近の瓦礫を無差別に攻撃し始める。

「どうなってるんだメカ犬！？」

『恐らくだがハンターの中で、流動的に動き続けている異質なエネルギーが原因だろうな。あの異常なまでの能力強化を可能にしたのがそのエネルギーなのは間違いなさそうだが、先程まで安定していたそのエネルギーが今は、その制御を離れている様に見える……だがこれは』

「……はは！良いぜ！俺の都合なんてどうだって良い！！！やるなら徹底的にやれよ！！！別に俺がやりたい事に変わりはねえ！！！何もしなくても俺の目の前のむかつくものを全部壊してくれるって言うんだからよ！！！！！！逆に感謝するぜ！！！！！！！！！！」

メカ犬の声を遮る様にして、何処か壊れた笑い声を上げながら、ハンターは既に粉々になってしまっている瓦礫に対して、更にナイフ

を叩きつけて粉砕しようと試みている。

『な、何かあのライダーの言ってる事やばいじゃん！？』

『うむ。身体を自由に動かす事が出来ないという状況は、時には極度なストレスとなる場合があるからな』

ハンターの暴走とも言える行為に対して、メカ虎に続きメカ犬も意見を述べる。

確かにハンターの言葉は、既に正気とは言えない様にも思えるが、俺には何故かその声が、助けを求める声に気がしてならなかった。

「なあメカ犬。あれを止めるにはハンターを倒せば良いんだよな？」

『うむ。奴の暴走も結局は暴走プログラムの一部だからな。それを元から破壊してしまうのが一番早い解決方法なのは間違いないだろう』

俺の問いに返されたメカ犬の回答は予想通りのものだった。

だから俺はもう一つ、これからやろうとしている、自分でも無謀とも思える質問をメカ犬にする。

「じゃあさ……ハンターを倒さないで暴走だけを止める手段ってあるかな？」

## １００万ＰＶ突破記念作品　仮面ライダーシード＆仮面ライダークウガ　繋がる

これで残るは、ハンターとラストの……だけとなりました。

長かったクウガ編もやっとゴールが見えてきましたが、気がつけば１００万ＰＶの記念作を書いている内に、現在のＰＶが１３０万を越えていた事実に驚愕しました。

……次の記念作をどのタイミングで出すか迷いつつもこれからも頑張りたいと思います。

それでは。

## １００万ＰＶ突破記念作品　仮面ライダーシード＆仮面ライダークウガ　繋がる

更新が遅れてしまい申し訳ありません。

出来れば八月中にクウガ編を終了させたかったのですが……ＰＣ不調の為に書く事が出来ませんでした。

何とか今月中にはクウガ編を終わらせたいと思います。

それでは今回も楽しんでいただけたら幸いです。

『マスター……それはどういう意味で言っているのだ？』

俺の発言にメカ犬は、驚愕の声を上げた。

確かに他のホルダー達と戦って来たのと、ハンターには違いが多々としてあるが、戦い倒すという事には何一つ変わらない。

ならば何故俺が、こんな事をメカ犬に対して言ったのか……

それは俺の個人的で、独りよがりな理由からだった。

「俺はこのまま……中途半端な形でハンターとの戦いに決着がつくなんて嫌だ！確かに人は、突き詰めれば自分の為だけに生きているのかも知れないけど……だけどやっぱり人は、それだけじゃ生きていけないんだよ……このままハンターを倒すだけじゃ、それを伝える事なんて出来ない……そう思うから、ただの奇麗事かも知れないけど、戦うしかないのなら俺は、その気持ちを思い切りぶつけて……ハンターの気持ちも全力で受け止めたいんだ！！！」

俺の言葉が既に廃墟と貸しつつある、海鳴病院の中心で木霊する。

これはただの理想でしかない……

それは発言者である俺が、一番理解している。

人の数だけ理想は存在して、それが必ずしも、誰にとってもの幸せだという事は、残念だが有り得ないと言わざるを得ない。

『……確かにマスターが言っている事は、ただの奇麗事だな。戦いに勝つ為には、誰かを守る為には時に何かを切り捨てなければならない事もある……マスターはその選択を迫られる度に、奇麗事を言うつもりか？』

メカ犬から返ってきた言葉は、俺にとって半ば予想していた言葉だった。

仮面ライダーの力があったって、俺は神様じゃないのだ。

この手で助けられるものなんて当然ながら限られていて、全てを助けられるなんて事は出来はしない……

現に俺は、仮面ライダーの力を手に入れながら、救えなかった人達がいる。

その人達の最後の顔は、笑顔で……だけどその目に涙を流していた……

俺が言った理想は現時点では、ただの夢物語であり、メカ犬の言う通りその理想を語っただけの奇麗事だ。

……だからこそ俺は声を大にして叫ぶ。

「……メカ犬。俺はお前が居なくちゃ、ただの無力な人間だと自分でも思う。それにこの仮面ライダーの力だって、万能な訳じゃないって事くらい分かってる……でもさ。俺はそれを分かった上で、やっぱり言うよ。そして挑戦し続ける！それが俺のやりたい事だからさ！！！」

『……どうやらワタシが何を言ったところで、意見を変える気は無い様だな……』

俺の言葉を聞いてから、一泊置いた後に、メカ犬が心底呆れた感じの声で俺に確認を取ってくる。

そしてそのメカ犬の問いに対して、俺の答えは既に決まっていた、

「当たり前だろ」

本当に身勝手な動機だと思うけど、俺はやっぱりこれからも己の理想を、実現させようと、これから先も躍起になるだろう。

もうあんな涙を、俺は見たくは無いって思い続ける限り……

『……方法が無い訳ではない。だがその方法はマスターにかなりの負担を強いる上に、確かな確証も無いぞ。それでもマスターは実行しようと思うか？』

「可能性があるって分かっただけでも充分だ。出来るかも知れないなら俺はやるよ」

『全く……本当にマスターは、呆れる程にお人好しだな……だがマスターのその考え方。ワタシは嫌いじゃ無い』

迷う事無く答えた俺に、メカ犬は再び呆れた調子ではあるが、最高の答えを俺に返してくれた。

きっと俺が今こんな考え方をしていられるのも、メカ犬と出会えた

からだろう。

他の誰でもなく、頼りになる相棒が何時も隣に居てくれるから、俺は自分の理想を言葉にして、現実のものにする為に行動する事が出来る。

「ありがとう……相棒」

『ワタシはマスターの相棒なのだろう？ならば態々こんな事で礼を言わなくても良い。ワタシは相棒として出来る事をしたまでだからな』

感謝の言葉を述べた俺に対して、メカ犬はこれ位どうという事は無い、と言わんばかりの態度で返事を返す。

『お二人とも感動的な場面で水を差す様で悪いけど、さっさとしないとこの病院全体が、瓦礫になると思うのはオレッチだけじゃん！？』

「『……あ！』」

俺とメカ犬が互いの友情を改めて確かめ合ったその時、アタッチメントパーツとなっていたメカ虎が、声を張り上げた。

そのメカ虎の声により、今も暴走しながら、病院を破壊し続けるハンターを再確認した俺とメカ犬は、同時に口を開き、メカ虎の言葉が真実だった事を確信する。

「……それでメカ犬！何か方法があるって言ってたけど、どんな方法なんだ！？」

『うむ！それは……』

『二人して清々しいまでのスルーをかましてくれるじゃん！！！！』

左腰の緑な虎的な何かが叫んでいる気がするが、俺とメカ犬はその声をあえて気にする事なく、話を核心部分へと進めて行く。

「……本当にそんな事で良いのか？」

メカ犬の話を聞き終えた俺は、一つの疑問を口にする。

何故ならばメカ犬が俺に示した方法が、かなりの力技だったからである……

あんな前振りをしておいて、そんな説明をされたのならば、疑問の一つでも言いたくなるだろう。

『論より証拠！習うより慣れろだマスター！』

「何なんだよその根性論は！？」

『最初から覚悟は出来ているのだろう？ならば疑うよりも、成功することを信じて突き進めば良い！』

「……分かったよ。信じてるからなメカ犬！！！」

そんな俺の心情を知ってか知らずか、異世界から来たくせに、やけに達者にことわざを使いこなすメカ犬に辟易しながらも、俺はメカ犬の教えてくれた方法を実行する為に、右手に持っていたパワーブ

レードを地面に突き刺して、暴走を続けるハンターへと突っ込んで行く。

「作戦会議は終わったのか？丁度良かったぜ。テメエを殴り飛ばしたいのに、身体の自由が利かねえところだったんだ。態々ご丁寧にそっちから来てくれてあんがとよ！」

「俺はただ殴られに来たんじゃない！俺の……俺達の勝負を、納得の行く形で終わらせる為に、全力を尽くすんだ！！！」

眼前に迫った俺に、ハンターが笑い声を上げながら、自虐的な台詞を吐く。

ハンターのそんな態度に対して、俺は自身の想いを叫びに乗せながら、ハンターに組み付いた。

「何のつもりだ糞ガキ！？」

「すぐに分かるさ……頼むぞメカ犬！！！」

ハンターの意思を無視して暴れ続ける両腕を無理矢理抑え付けながら、俺はメカ犬に合図を送る。

メカ犬から聞いた作戦は至ってシンプルであり、先程も述べた通りとても力任せな方法だ。

タッチノートと同様に、メカ犬にはホルダーの反応を察知する能力が備わっているのだが、どうやらそれ以外にもエネルギーの流れを察知出来るらしい。

ただしその能力も、距離が離れてしまうと、それだけ感知出来る精度が下がってしまう。

だがそれは逆を言えば、近付けば近付く程に、その精度を増していくという事である。

それこそ身体の一部を解析する対象に対して、直接接触させればその効果は、かなりのものになるという訳だ。

『任せろマスター！！！』

俺の合図に応えてメカ犬が、直接触れている俺の腕を通して、ハンターの身体の解析を開始する。

ここまでは全て作戦通りになった訳だが、本当の正念場はここからだ。

メカ犬の話では、ハンターを暴走状態にしているエネルギーの核となっている部分を破壊すれば、この暴走状態を鎮める事が出来るらしいのだが、それには一つ大きな問題がある。

ハンターを暴走に陥らせているさその部分が、ハンターと完全に一体化していたとしたら、この作戦は前提から崩れ去ってしまう。

今の俺に出来る事は、ハンターの動きを封じる事に全力を注ぎながら、メカ犬の解析が終わるのを待つしかない。

そしてその解析の結果が、俺の望むものである事を願うばかりである。

「何で……テメエはそこまでするんだよ糞ガキ？こんな事して、テメエに何の得があるってんだよ！？」

ハンターの腕を抑え付けているが、別にそれ以外の部分を抑え付けている訳ではない。

その為に、俺の妨害を免れたハンターの脚部によって、何度も蹴り付けられる俺を見て、ハンターが不思議そうに一つの問いを投げ掛けて来た。

「……そ、それが俺のやりたい事だから……本気でぶつかりあえれば、分かる事があるかも知れない……だ、だから、このまま終わらせる訳には行かないんだよ……寂しいじゃないか……何も分かり合えないまま、この戦いが終わるなんて！」

「……お前」

俺は何度も蹴り込まれる痛みに耐えながら、自身のこうする理由を正直に吐露する。

その言葉に対して、ハンターが小さな呟きを零したその時だ。

『解析が終了したぞマスター！！！』

ずっと心待ちにしていたメカ犬の声が、ベルトから響く。

だが一番重要なのは、解析が終了した事よりも、それに伴い判明したであろう結果にある。

『マスター心して聞いて欲しい』

解析を終了させたメカ犬が、重々しく口を開く。

その口調から、最悪の結果となってしまったのではないかという考えが、俺の脳裏を過ぎった。

「もしかして……」

『……喜べマスター！ハンターの身体を暴走させているエネルギーの核となる部分を特定したぞ！！！難しい事に変わり無いが、その核の部分を破壊するのは可能だ！！！』

だがその考えは、杞憂に終わった。

メカ犬の言葉によって、俺の心に新たな希望が芽生える。

「本当か！？」

『うむ。だが先程も言った通り、ハンターのシステムを停止させずに、暴走だけを止めるのは至難の業だぞ！それでもマスターは挑戦するか？』

「……当たり前だろ！それよりも暴走させてる部分の核が何処なのかを教えてくれ！！！」

俺を心配してか、再度の確認を行うメカ犬に、俺は蹴りにより連続的に襲われる痛みに耐えながら、即答で返事を返す。

『ハンターの全身にエネルギーを送り込みながら循環させる構造が、ベルトの右側に内臓されている。その部分だけを正確に破壊すれば、

ハンターを倒さずに暴走を止める事が出来る筈だ。詳細なデータをマスターが目視出来る状態で表示する！』

「サンキューメカ犬！」

メカ犬の説明を聞き終わり、俺が感謝の言葉を述べるのとほぼ同時に、俺の視界にディスプレイが出現して、ハンターの装着しているベルトのデータが幾つも詳しく表示されていく。

『どうやらこの機能は、後から無理矢理搭載させたのだろうな。だからこそ、ハンターの変身システムと不具合を起こして、暴走してしまったのだろうが、そのおかげで完全に分断出来るチャンスがある。そして私が出来る事は残念だがここまでだ！後は全てを託すぞマスター！』

「……ああ！ここまでメカ犬がお膳立てしてくれたんだ！！！絶対に決めてみせるさ！！！」

ディスプレイの内容を頭に叩き込んだ俺は、メカ犬から託されたバトンを確かに受け取り、ハンターの動きを拘束させていた両腕を離して、バックステップで後方へと下がり一旦距離を置く。

そして地面に突き刺してあったパワーブレードを引き抜き、ベルトからタッチノートを素早く取り出して、パワーブレードの溝部分へとスライドさせた。

『ロード』

音声が鳴り響いた事を確認した俺は、そのままタッチノートを、再びベルトへと差し込む。

『アタックチャージ』

ベルトから音声が聞こえてから間を置く事無く、稲妻の様な光が発生して、右腕のラインを通じて、パワーブレードの刀身へと集約されていく。

「こいつで決めるぜ」

眩い光を纏うパワーブレードを構えながら、俺はその狙いをメカ犬が教えてくれた一点に絞り、鋭く研ぎ澄まされた一撃を放つ機会を待つ。

俺の拘束から抜け出した事で、再び辺り構わずに暴れるハンターとの間合いを、僅かずつ縮めていった結果。

ついにその一撃を放つ機会が到来する。

ハンターとの間合いを徐々に狭めていった事で、暴走したハンターの攻撃対象が俺となって、強襲を仕掛けてきたのだ。

逆手に持たれた黒い刀身のナイフが、俺の肩口に猛威を振るい、俺の装甲とハンターのナイフが大きな衝撃と共に、盛大な火花を発生させる。

その痛みは尋常なものではなかったが、俺はその攻撃を敢えて避けずに受け止めた。

全てはこの一撃を確実に命中させる為の、布石なのである。

相手の攻撃を受ける事で、俺の一点に高められた一撃は、確実に命中させる事が出来る間合いへと入り込む。

「パワーブレード」

俺は至近距離のハンターのベルトの左側に、意識を集中させていく。

「カウンタースティング」

そして俺の放った一撃は、狙い通りの位置に、見事命中する。

ハンターの自由を縛っていたエネルギーは、その核を失い、漆黒の身体から元の全体的にブラウンなボディーと、上半身を覆う銀のプロテクターへとその色を染めていった。

**１００万ＰＶ突破記念作品　仮面ライダーシード＆仮面ライダークウガ　繋がる世界**

次回はハンターとの決着＆……な予定となっております。

それでは。

## １００万ＰＶ突破記念作品　仮面ライダーシード＆仮面ライダークウガ　繋がる

本日はお昼から夕方頃までサイトがシステムダウンするそうなので、午前中の内に、更新させてもらいました。

それでは今回も楽しんでいただけたら幸いです。

「……余計な事をしてくれたじゃねえかよ。この糞ガキが……」

暴走状態から開放されて、一言目にハンターが口にした言葉がこれである。

確かに台詞だけを聞けば、皮肉にしか聞こえない言葉ではあったが、俺は不思議と嫌悪感を覚える事は無かった。

だからと言ってハンターが善人とは、決して胸を張って言える事ではないだろう。

彼はそれだけの事を、自分の意思で判断しながら、行動に移しているのだから。

だけど……

「本当に……余計な事でしたか？」

「……」

俺の返答に、ハンターは何も言葉を返さない。

だから俺は、感じた事をそのまま言葉にして、ハンターへと伝える。

「俺にはあの暴走する姿が、悲しんでる様に思えてならなかったんです……それに戦うしかないって言うのなら、お互いに納得の出来る決着をつけたいでしょ」

「……本当に気に食わない糞ガキだな。ガキの癖して、分かった様な口を叩きやがる。年上から諭されてんじゃねえかと思うぜ」

続けて言った俺の言葉に対して、ハンターは沈黙を破り、溜息を吐き出しながら再び皮肉を言った。

「そんな訳……無いでしょう？」

その言葉に俺は、苦笑いを浮かべながら返答する。

前世の記憶を引き継いで、今の俺がこの場に居るのは確かだが、それをハンターに説明したところで、信じないだろうし、積極的に話す必要性も無い。

今の俺は紛れも無く、この世界に生きる一人の小学生で、間違いないのだから……

「確かにそんな訳無いよな……テメエが変な糞ガキだって事に変わりは無いんだからな」

俺の返答に対して、納得したのか疑っているのかは、予測する事しか出来ないが、少なくてもこれ以上俺を詮索する事は止めた様だ。

そしてハンターは俺を眼前に捉えながら、一振りのナイフを生成して、逆手に握り込み、臨戦態勢を整えた。

「来いよ。テメエには、さっきの借りがあるからな。お望み通り戦ってやるぜ」

その行動が、敵である俺に対しての感謝の印なのだろう。

本当ならば戦わずに、話す事で分かり合いたいと今でも思うが、それは既に叶う事は無い。

相対しているからこそ分かる。ハンターからは今も戦う意思を強く感じられるのだ。

だから俺は、その想いに全力で答える為に、ハンターとの最後の戦いに挑む。

「そう言う訳だから、協力してくれてありがとうなメカ虎。後は俺が決着をつけるからさ」

俺は昨日に続き、ここまで協力してくれたメカ虎に、感謝の言葉を述べてから、アタッチメントパーツを引き抜き、パワーフォルムだった姿もベーシックフォルムへと変えた。

『頑張るじゃんマスター！』

『負けるんじゃないぞマスター！』

ベーシックフォルムにフォルムチェンジして、ハンターに戦う準備が整った事を告げようとしたその時、アタッチメントモードから通常の虎の形へと変形したメカ虎に続き、今もベルトの状態で俺の腹部に巻きついているメカ犬から、声援の声が送られる。

「ああ！」

俺はその声援に心から感謝の念を抱きつつ一声で返答してから、改

めてハンターに勝負の準備が整った事を告げる。

「そういう訳で、こっちの準備はこれでＯＫですよ！」

「それで良いのか？さっきの姿の方が、テメエには有利なんじゃないのかよ？それともハンデのつもりとでも抜かす気か！？」

ハンターは俺のその行動を、舐めて掛かっていると考えたのか、傍から見ても分かる程に、苛立ちを正面からぶつけてきた。

確かに俺の行動はそう見える節があるかもしれないが、当然の事ながら俺はそんな考えは微塵もしていないと誓って宣言出来る。

俺はハンターの言葉に対して、首を数回左右に振りながら、心情を吐露していく。

「そんな事、俺は思っていませんよ。強いて言うなら、これはただのわがままですから」

「……わがまま？」

「あのまま戦ったとしてもフェアじゃないですしね。それにあの暴走状態でかなり体力も使い切ってるだろうし、体力の回復を待つとしても、そのベルト……このまま変身を解いたら、もう使えなくなるんじゃないですか？」

別に俺は、この戦いに手心を加えようとしている訳ではない。

ただ単に、俺は出来るだけ対等な勝負を、ハンターとしたかったのである。

それに俺は、急いで先に行った五代さんと空の後を追わなければいけないという事情がある。更に先程俺が指摘した通り、ハンターのベルト……暴走エネルギーの核となる部分だけを破壊した筈だったのだが、それでもベルトの一部を破壊した事に変わりは無かった。

今もハンターのベルトの左側には、亀裂が走っており、それは徐々に広がりを見せているのだ。最早いつその亀裂が一気に広がってベルト本体が破壊されてしまったとしても、おかしく無い状況なのである。

其々に事情があり、お互いに対等に戦おうするならば、その機会は今この時を持って他に無い。

そして俺は、傷付け合うだけの戦いを否定しながら、この勝負を対等な形で現実にしたいと望んでいた。

だからハンターにとっては侮辱とも言えるであろう条件下で戦うのは、この戦いを納得のいくものにしたいと愚考する俺のわがままなのだ。

「わがままね……そういう事にしておいてやるよ。さあ、話はここまでだ！構えな糞ガキ！！！」

俺はハンターの言葉に頷きながら、先程からハンターがしているのと同様に、戦う構えを取ると、その動作を戦いの合図にして、ハンターが此方に駆け込んで来る。

急激な加速から繰り出されたナイフの斬撃を、俺は紙一重で回避して、攻撃したハンターの腕が伸びきるのを持って、逆に懐に飛び込

みながら、胸の辺りに拳を叩き込む。

「はあああ！！！」

裂ぱくの気合と共に、俺の放った拳の衝撃が、ハンターを後方へと吹き飛ばす。

「ぐっ！？」

だが吹き飛ばされたハンターは、倒れる事無く、上空で姿勢を整えて、自身の両足で着地すると、間髪居れずに再び特攻を仕掛けて来た。

その切り替えしは俺にとっても流石に予想外だった上に、ハンターはその特攻の際に初撃にナイフを投げつけて来たのである。

そのナイフが飛んで行く軌道上に居た俺は、当然の如くそのナイフを避けたが、それは俺を所定の位置へと誘導させる為の罠だったのだ。

俺の動きを予測していたのか、飛んで来るナイフを避けた直後の俺の視界には、拳を繰り出そうと構えるハンターの姿があった。

「さっきのお返しだ！！！」

そう言ってハンターの繰り出した拳を避ける暇は無く、俺はその拳から撃ち出される衝撃を頬に受けて、盛大に頭全体が揺さぶられる。

「ぐはっ！？」

俺は嗚咽を漏らしながらも、その場に踏ん張り、お返しとばかりに、すぐさま回し蹴りをハンターの頭部に喰らわせた。

其処からは、互いに超近接の格闘戦を繰り広げて行くが、今まで戦って来た経験の差を表す様に、やがて俺の攻撃ばかりが目立つ様になり、ハンターはほぼ防御を行うのみ、という状況が作り上げられていく。

このまま押し切ればいずれ勝負は決するだろう。

しかしハンターがこのまま終わるとは、当然考えられない。

何かしらの方法を、実行に移して来る事は確実だ。

そして俺の予想は、見事に的中する。

ハンターは幾度目かの防御の後に、俺の前蹴りを掌で受けたかと思うと、自ら足を浮かせる事によって、俺の放った蹴りを利用して、後ろに下がり距離を取ったのだ。

俺も敢えて追撃はせずに、バックステップで更に互いの距離をある程度遠ざけて、一定の距離を保つ。

「や、やるじゃねえかよ！糞ガキ……」

ハンターは体力の限界が近いのか、何度も荒い呼吸を繰り返しながら、俺に話し掛けてくる。

「そっちも強いですよ……でも俺は負ける訳にはいかないので、絶対に勝たせてもらいます！」

俺も多少乱れ始めた呼吸を整えながら、ハンターに対して、必ず勝つ事を宣言した。

ハンターが何を背負い、何の為に戦って居るのか、俺には知る術も無い。

だけど俺は、この戦いを通して、ハンターの事を知りたいと思った。

そしてこの戦いの先にも、俺の守りたい人達が居る。

だから俺は負ける訳にはいかない……それが仮面ライダーとして、そして板橋純としての戦う理由なのだから……

「……か、勝つのは俺に決まってるだろうが！」

俺の言った宣言を真っ向から否定するかの様に、叫びながらハンターが自身のベルトに手を翳すと、再びナイフが生成された上に、その刀身が黄色い輝きを放ち始める。

どうやらここで、一気に勝負に出ようとしている。という事なのだろう。

ハンターのベルトに視線を向ければ、ベルトの亀裂が更に大きくなっており、何時ベルトが粉々になったとしてもおかしく無い状況だった。

体力的な問題以外にも、時間的に、これ以上は戦えないと判断したからこその決断と言えるかも知れない。

俺はハンターの誘いに乗り、タッチノートをベルトから引き抜いて、全体図を表示させてから、右腕の部分をタッチして、再びベルトに差し込み、迎え撃つ為の準備を整える。

『ポイントチャージ』

ベルトから音声鳴り響くのと同時に、稲妻の様な光がベルトを通じて、右腕の銀のラインを通り、拳へと集約されていく。

「……俺の名前は沢渡雄太だ。糞ガキ！テメエの名前も教えろよ？」

お互いにこの戦いで、最後の一撃となるであろう攻撃の準備を整えて、間合いを探っていたその時、ハンターが仮面ライダーとしてではない自身の名前を口にした上で、俺にも名前を教えろと要求して来た。

「俺は純……俺の名前は板橋純だ！」

ハンターがどんな意図で、自身の名を名乗り、さらには俺にも名前を聞いて来たのか。その真意は分からないが、俺はハンター、沢渡雄太に対して、俺自身の名前を教える。

「そうか。純……良い名前だな。絶対に忘れねえぜ……その名前を！」

俺の名前を一度だけ呟いたハンターのその声は、何処か寂しそうでもあり、少しだけ嬉しそうにも聞こえた。

だがそれも一瞬の出来事であり、ハンターはその言葉を合図にすると、全速力で俺に向かって走り出す。

先程の言葉が、俺に何を求めて発せられたものだったのか、人の心を正確に読み取るなどという芸当の出来ない俺には、一生理解出来ない事かもしれないが、それでも俺には今ひとつだけ、彼に対して出来る事がある！

「仮面ライダーハンター……沢渡雄太の悪夢は、ここで終わらせる！」

先に走り出したハンターに遅れて、俺は成すべき事を果たす為に、光を集約させた右の拳を振り翳して走り出した。

「はあああああああああああああああああああああ！！！」

先に仕掛けて来たのは、ハンターの方だった。

黄色い光が刀身に集約したナイフを、真横から振り被る。

ハンターが眼前と迫った今、下手に避けようとしても、その攻撃を喰らう事は目に見えていた。

だから俺は、敢えてその懐へと、全力で飛び込む。

更に走る速度を増した俺は、ハンターのナイフが横薙ぎに振るわれるよりも先に、俺の一撃を当てる事の出来る射程距離内に、ハンターの姿を捉えた。

「こいつで決めるぜ」

俺は右拳を振り被り、この近距離では回避不可能な最大の一撃を、

ハンターのベルトに叩き込む。

「ライダーパンチ」

光を纏った拳は、ハンターのベルトに直撃して、塵へと返す。

「……これで良かった……んだよな……大地……沙耶」

ベルトが破壊されていく中で、変身が解けていくハンターが言った言葉に、俺は……ハンター、沢渡雄太という一人の人間にも、守りたいと願う事が出来る、大切な存在が居たという事を知った。

「……準備は概ね整ったな」

「本当は儀式の為に後二日は様子を見てたかったんだけどね～まあ、何でも予定通りに動く事なんて無いし、仕方ないかもね」

「多少の不具合は仕方が無い……これも一つの実験に過ぎないのだからな。時が満ちなければ不完全な状態となる恐れはあるが、儀式

は予定を早めて決行する」

海鳴市の今は使われていない筈の地下水道で、コンソールを操作していた灰色の怪人メルトが自身のすべき作業が、全て終わった事を口にすると、その背後に何時から居たのか、藍色の怪人オーバーが現状の不備を伝えた。

しかしオーバーのその言い回しを、予め読んでいたメルトは、全てを一蹴するかの様に、抑揚の無い声で今後のタイムスケジュールを早める事を公言する。

「……まあ、僕達にはまだ【巫女】っていう切り札があるし、何とかなるかな？」

メルトから予定を早めるという旨を聞いたオーバーは、その予定を口にしたメルトが、先ほどまで操作していたコンソールと繋がっている黒い卵型のカプセルの中を覗き込みながら呟く。

そのカプセルの中では、未だに意識を失っている一人の少女が、全身から淡い光を放っていた。

その光は空いわく、古代の巫女の持つ不思議な力の発露であり、そしてこの世界とは全く違う別の世界では……その力は魔力と呼ばれている。

【闇】の復活には、必要不可欠な力だった……

**１００万ＰＶ突破記念作品　仮面ライダーシード＆仮面ライダークウガ　繋がる世界**

其々の戦いが決着して、ついに舞台は最終局面へ！

という訳ですので、次回は……が〇〇〇な展開になるかと。

それでは。

## １００万ＰＶ突破記念作品　仮面ライダーシード＆仮面ライダークウガ　繋がる世界

ついに本日で、このヘタレ転生者は仮面ライダー？も連載を始めて一周年！

振り返ってみると随分書いたなと、思う次第です。

単純に換算すると今回で１４５部目なので、一年３６５日の内の三分の一以上ですから、少なくても三日に一回の割合では確実に投稿している事になるんですね……

本当に良く書いたな私……

そして読者の皆様にはアンケートの御協力をして頂きまして、本当にありがとうございます。

この集計を元にして、近々記念話を投稿すると思いますので。

そしてクウガ編ももうすぐラストスパートとなるので、最後まで楽しんでいただけたら幸いです。

「空の言う通りなら、この地下水道の奥に、はやてちゃんが捕まってるのか？」

「うん。確かに僕の母と近い力をこの先に感じる……多分間違いないと思うよ」

外の光が殆ど届かない薄暗い水路を進みながら、五代の質問に、空は頷きつつ答えを返した。

ボマーとの戦いを終えた後、当初の予定通り、北に向かった五代と空を待っていたのが、この地下水路の入り口だったのだ。

空の話では、この水路の奥から、二つの強い力。即ち【巫女】と【闇】の力を感じたという訳で、二人はこの今は使われていない様に見える水路の内部へと、突入したのだが既に数分以上歩いているのに、全く人の居そうに無い静けさに、五代は疑問を覚えていたのである。

しかしその疑問は、すぐに終わりを告げる事となった。

「一旦止まってください。この先に……居る筈です」

「あれは……明かりか？」

先導していた空の呼び掛けに、足を止めて五代が正面を見据えると、その先に微かな光源が存在していた。

「ここから先は、慎重に進みましょう」

「ああ」

空の提案に、五代が頷く。

二人は息を潜めながら、慎重に正面に見える光源を目指して、暗い水路を進んで行った。

「「なっ！？」」

そして光源のある場所へと辿り着いた二人は、其処に広がる光景に、驚愕の声を上げる。

ここまでの水路とは違い二十畳程の、ドーム状に広がった空間の中心に、淡い光を纏った少女、はやてが虚ろな瞳で虚空を眺めていた。

その下、地面には光が複雑な紋様を描き、一見すると魔方陣と思わせる形状を作り出している。

空と五代が、水路の先に見つけた光源の正体は、この光だったのだ。

「これは……一体何なんだ？それにはやてちゃんは、大丈夫なのか！？」

五代は宙に浮かぶはやてと、地面に描かれた魔法陣の様な光の集合体を交互に見ながら、この中で唯一答えを返す事が出来るであろう空に、質問を投げ掛ける。

「はやてちゃんは多分、力を無理矢理に引き出された事で、トラン

ス状態になってるんだ。見た感じは、元々持ってる力を外部からの暗示で制御してるだけだと思うから、何か切欠を与えれば大丈夫な筈だよ。でもこの術式は……母が使っていた封印の術式と似ているけど違う。もしかしてこの術式は……」

「その通り。これは【闇】を復活させる為の術式だ」

空の言葉を遮る様に、二人の背後から抑揚の無い声が、聞こえて来た。

その声に反応して、空と五代が振り向くと、その声の主である、灰色の怪人メルトと、その隣には藍色の怪人オーバーが退路を塞ぐ形で立っていた。

「お前達が今回の黒幕か!?」

その姿を視界に捉えた五代は、何時でもクウガに変身出来る様に身構えながら、二人の怪人オーバーとメルトに質問を投げ掛ける。

「正解！大変良く出来ました！それにしても、良くこの場所が分かったね。正直凄く驚いたよ」

五代の質問に答えたのはオーバーだった。

先程のメルトとは対照的に、明るい口調で喋っているが、逆にその言い方が妙な寒気を五代と空に与える。

「待っていたぞ……お前が【器】だな。これで……この場所に【闇】【巫女】【器】の全てが揃った。これで計画を次の段階に移す事が出来る」

更に畳み掛ける様にして、メルトが空に視線を送りながら、不穏な言葉を口にする。

「……計画？一体君達は何を企んでるんだ！？それに闇を完全復活させるには、全てが揃った状態に加えて星の巡りも関係してくるから、今はその時じゃ無い筈……もしかして、この術式はその為の！？」

メルトの言葉を反芻しながら、空は疑問を投げ掛けるその途中で、脳裏にある仮定が思い浮かび、その予想が的中している可能性を想像して、戦々恐々とした表情になる。

「流石は【器】ってところだね。察しが良くて助かるよ」

「不完全な状態だとしても、【闇】を復活させる事さえ出来れば、私達にとっては充分な成果だ。多少の不具合が出たとしても構わない」

空の想像は、オーバーとメルトの言葉により、確信へと変わった。

「だから君の身体は【器】として頂くよ！！！」

最初に動いたのはオーバーである。

空を【器】として頂戴する事を宣言したオーバーが、右手を振り翳すのを合図にして、水路の方から、包帯を全身に巻いた様な姿をしたホルダー達が、続々と現れたのだ。

その数は少なくても、２０体以上は居るだろう。

「変身！」

ホルダーの大群が現れると同時に、五代は自身の腹部にアークルを出現させて、最も基本能力が安定しているマイティーフォームのクウガへと変身して、襲い掛かるホルダー達に先制攻撃を仕掛ける。

「五代さん！」

「ここは俺が時間を稼ぐから、空は早くこの場所からはやてちゃんを連れ出してくれ！」

ホルダーと戦うクウガに空が呼びかけると、クウガは何体ものホルダーを相手にしながら、はやてをこの場所から逃がす様に指示して、ホルダーを空に近付けさせない様にしつつ、はやての居るドーム状に広がった部屋の中心部への道を切り開く為に奮闘する。

空はクウガの出した指示に頷き、クウガの作り出したはやてに辿り着く為の道を一気に駆け抜けていく。

「そう簡単に行くと思ってるの？」

しかしその道の先には、オーバーが空とはやてとの間に立ち塞がっていた。

「くっ！？」

オーバーを目の前にこれ以上進むのは、危険だと判断した空は、表情を曇らせながら、その場で立ち止まる。

「悪いけど君はここで通行止めだよ。それに君には【闇】の【器】になってもらわないと僕達が困っちゃうからね」

「……それはお断りだよ。僕の使命は【闇】を永遠に封印する事だ。絶対に復活なんてさせない！」

「ふうん……随分と強気だけど、勝算でもあるのかな？一緒に来た頼りの仮面ライダーは後ろでホルダー達と遊んでるし、今君を守ってくれる人はこの場に誰も居ないと思うんだけど？」

軽い口調だが、的確に今の状況が空にとって、絶望的だという事を告げるオーバーだったが、その言葉に対して、空は筈かに笑みを浮かべて、ある物を取り出した。

「ここで罠を張ってるって事は容易に想像出来たよ。僕達がそれを知っていながら、何の対策もせずに来ると思うかい？」

空が取り出した物体は黒いベルトだった。

そしてそのベルトを自身の腹部に巻いた空は、続いて青い野球ボール大の玉を取り出して身構える。

「……なるほどね～中々強かじゃないのさ。そういうの、僕は個人的に嫌いじゃないよ」

空がベルトを取り出した瞬間こそ驚いたオーバーだったが、次の瞬間にはそのハプニングすらも、楽しみの一つに変えてしまったのか、何時もの調子で喋り出す。

「悪いけどこのベルト……遠慮無く使わせてもらうよ！」

「良いね。少しこのまま終わるのは、退屈だと思ってたんだ。精々僕を楽しませてくれたら嬉しいな！」

身構えながら空が叫んだ宣言に対して、オーバーは笑いながら、自らの右腕に西洋を思わせるデザインの剣を生成して、一気に距離を詰める。

「変身！」

オーバーの行動を合図に、空は青い玉を黒いベルト中央の窪みに嵌め込み、力ある言葉を紡ぐ。

その瞬間に空の身体が、青い光に包まれて、全体的にブラウンのボディーと上半身を銀のプロテクターが覆い、額には炎を模した角飾り、そしてベルトに嵌め込んだ青い玉と同色の複眼を持つ、戦士の姿へとその身を変える。

仮面ライダーボマー。

本来ならば黒谷大地が変身する筈の姿であるが、ボマーを無効化した後に、空はそのボマーのベルトを回収しておいたのである。

出来る事ならば、使いたくなかったというのが、空の本音ではあったのだが、敵の本拠地に行くのであれば、一つでも多くの切り札を持っておきたい。

そしてその切り札を出し惜しみしている猶予は、今の空には無かった。

今から行われようとしている儀式は、空の知る封印の儀式の逆を辿るどころか、その前提すらも覆す未知の部分が存在している事を、はやてとこの地面に描かれている魔法陣を、目の当たりにした事で、気付いてしまったのだ。

このまま放置していれば何が起こるのか、既に空の知る領域を超えつつある事態に焦燥感を覚える。

だから一刻も早く、この儀式を無力化しなくてはいけないと感じた空は、ボマーの力を使い、はやてを救出したらすぐさまこの魔法陣を破壊する算段を立てて、迫り来るオーバーを迎え撃つ。

「無駄だよ！もうすぐ全ての準備が整うんだからさ！」

「その前に僕が、この術式を絶対に壊す！」

オーバーの繰り出した斬撃を避けながら、ボマーの姿となった空が自身の覚悟を叫びにする。

「それまでに僕を倒せるとでも思ってるの？だとしたら随分と舐められたもんだよね。僕が試作品程度に負ける筈無いのにさ」

「勝てなくても、足止めする方法なら幾つもあるんだよ！」

相変わらずの軽い口調で、残酷な事実を口にするオーバーだったが、空はそれに対して余裕とも言える言葉を放つ。

「何を負け惜しみを……！？」

惑わせる為のハッタリだと高をくくり、嘲た態度を取ろうとしたオ

ーバーだったが、足元の違和感に気付き、その言葉を途中で中断して、足元の違和感を確認する為に下を向く。

其処には、筒状の物体が転がっており、その先端がオーバーの足元に接触していたのである。

「例えば落とし穴なんて、僕は良いと思うけどね？」

そんなオーバーに対して、空は子供の悪戯が成功した様な、笑い交じりの言葉を、オーバーに放つが、返答は帰ってくる事は無かった。

オーバーが答えを返すよりも早く足元の筒、ボマーの能力で生成された爆弾が、小規模の爆発を引き起こして、床に穴を開けたのである。

最初の斬撃を避けた直後に、爆弾を仕掛けると共に、そのタイミングを完全に把握していた空は、爆発と同時に、オーバーの肩を足蹴にして、自身は穴に落ちる範囲から逃れつつ、踏み台に利用したオーバーを穴の中へと叩き落す事に成功した。

「だから言ったでしょ？勝てなくても、足止めする方法はあるって」

無事に着地に成功した空は再び、穴に向かった言葉を投げ掛けるが、その答えは当然の事ながら、オーバーに届く筈は無く、穴から吹き抜ける風以外に返事を返す存在は皆無だった。

「さてと。急いではやてちゃんを助けなくちゃ！」

オーバーが穴の中から這い出して来ない事を確認した空は、当初の目的通り、はやての居る場所に向かおうと駆け出したその時、床に

光っていた魔法陣がその輝きを増した。

俺は今、海鳴病院を後にして、チェイサーさんに跨りながら、北を目指していた。

『マスター。奴の言う事を信じて良いと思うか？』

そんな折に、メカ犬が俺に語り掛けてくる。

恐らくは、先程の会話の事を言っているのだろう。

「怪しいのは分かるけど、今は信じるしか無いだろ？他に情報は無いし……それに」

『それに？』

「それにあいつは、はやてちゃんについて嘘は言ってないと思うからさ」

確信なんてものは何も無かった。

ただ俺が、そう感じたに過ぎない。

その真意が何処にあるかまでは、俺の知るよしでは無いが、少なくとも今は敵ではないと思う……

俺は複雑に絡まった様な、今の気持ちを誤魔化す為に、先程の海鳴病院で起こった事を思い出す。

……ハンターとの決着後に、何処に向かえば良いのか分からず、途方に暮れていたその時、俺達の目の前にあいつは現れた。

それは一匹の猫。

俺がはやてちゃんと初めて出会ったあの日の夜に、俺に警告をしてきた。あの猫である。

その猫が海鳴病院を北に進んだ先にある。今は使われていない地下水路の奥に、はやてちゃんが捕らわれているのだと教えてくれたのだ。

その情報だけを口にした猫は、他にろくに話もせずに、俺達から姿を消してしまった。

ただ去り際に、まだその時では無いと言ってはいたが、俺にはそれが何を意味しているのか、全く理解出来なかった……

『あの猫は以前にもマスターの前に現れて、これ以上はやて嬢に近

付くなと警告してきたが、今回ははやて嬢をマスターが助ける様に仕向けてきた……一体何を目的としているのか、見当が付かないな』

「ああ。空ははやてちゃんに【巫女】としての特別な力があるって言っていたから、その力に関係しているのか、それとも……」

俺が其処まで口にしたところで、チェイサーさんが急停止した。

「どうしたんですか？チェイサーさん」

『マスター何か知らないけど、沢山お客さんがやって来たみたいよ？』

急に停止したチェイサーさんに対して、俺が声を掛けると、チェイサーさんは、何処か冗談交じりに言いながら、俺に空を見上げる様に言って来た。

「これは！？」

『ホルダーの大群か！？』

上空を見上げて、俺とメカ犬は驚愕の声を上げた。

その時俺とメカ犬の視界が捉えたのは、昨日の夜に戦ったミイラの様なホルダーがコウモリの様な翼を羽ばたかせながら、大群で此方へとやって来る姿だったのだから……

**１００万ＰＶ突破記念作品　仮面ライダーシード＆仮面ライダークウガ　繋がる世界**

次回は闇の復活と……な予定となっております。

それでは。

# １００万ＰＶ突破記念作品　仮面ライダーシード＆仮面ライダークウガ　繋がる

一日置きな投稿となります。

やっとクウガ編も最終決戦に突入となりました……ここまで本当に長かった。

これでクウガ編が終わり、コラボと特別話をやったら、再び本編をスタートしますので、もう少々お付き合い願えたら嬉しい限りです。

それでは今回も楽しんでいただけたのであれば幸いです。

「こんなところで足止めされてる場合じゃないのに！」

『しかしこの数のホルダーを、放って置く訳には行かないだろう。それに奴らの狙いもこの行動を見る限り、ワタシ達の妨害とみて間違いない筈だ』

集団で此方へと飛んできたホルダー達は、俺の目の前にやって来ると、次々に地上へと降り立ち、俺に襲い掛かって来た。

メカ犬の言う通り、恐らくは妨害のつもりなのだろうが、数が多い上に、通常のホルダーモドキと比べても、その強さは桁違いであり、容易にはこの場を突破する事は出来そうにない。

「こんな奴らが俺達の前に現れたって事は、空と五代さんが向かった先で、何かあったのかもしれないだろ！？」

あまり考えたくは無い事だが、昨日のオーバーの発言から、このホルダー達は【闇】と密接に関わっているらしいのだ。

だからこそ、これ程の数のホルダーが居るという事は、何かが起こりつつある。

もしくは既に何かが、この先で起こっているのかもしれない。

「こうなったら強行突破するしかないか！？」

俺は周囲のホルダー達を蹴散らしながら、一つの指針を呟く。

確かにこの数を相手に、包囲網を突破するのは至難の業と言えるが、この場から脱出するだけならば、幾つかやりようはある。

脱出が容易ではないというだけであり、不可能では無いが、それを実行に移すには、一つだけ大きな問題があった。

それは時間を掛ける手段を実行する以外では、この大量のホルダー達を野放しにしてしまう事態となる事だ。

先程もメカ犬が言っていたが、何を仕出かすか分からない奴らを、この場に放置して置く訳には行かない。

『強行突破か……不安要素は残るが、確かに今のワタシ達に出来る最善の手段は、この包囲網を抜けて先に進む事かもしれないな』

「でも、それじゃあこのホルダー達は……」

『うむ。マスターの心配も分かるが、何か取り返しの付かない事が起こっているとしたら、ここで足止めをされている訳にはいかないだろう』

「……そう、だな。分かったメカ犬。このまま……」

悩んだ末に、俺が一つの決断ををしようとしたその時、遠方から銃撃音が響き、俺の側面に居たホルダー達が、一斉に爆発を起こした。

『この爆発は!?』

「こんな事が出来るのは……」

突如として巻き起こった爆発の先に視線を向ければ、其処には俺の予想した通りの人物が佇んでいた。

ライトイエローのメカニカルなボディーに、青く輝く二つの複眼。

その右手には、普段から愛用している銃に、何かのパーツを取り付けたのか、大型のガトリングの様な形状をしている。

銃口の先端から立ち上る白煙から、先程の銃撃音の正体が、その銃だと言う事は容易に想像出来た。

「大丈夫ですかシードさん!?」

その人物、この海鳴市を守るもう一人の仮面ライダーE2が、再びガトリングタイプの銃を別方向のホルダー達に乱射しながら、此方に近付きつつ呼び掛けて来る。

「どうしてこの場所に!?」

「近隣の住民の方から病院で爆発があったと通報があって、近くに来ていたんですが戦闘になりまして……その戦闘後すぐに、空に大量のホルダーが見えたんで、ここに駆けつけたんです」

俺は近付いてきたE2と背中合わせに向き合いながら質問を投げ掛け、E2もその質問に対して、律儀に返事を返してくれる。

「悪いけど、この場を任せても良いかな?その間に俺はこのホルダー達の元凶を叩きに行って来る!」

俺は周囲のホルダー達に打撃を叩き込みながら、背中を越しで反対側のホルダー達に銃撃を浴びせ掛けているＥ２に一つの提案をした。

「このホルダー達の元凶……そんな存在がこの海鳴市に居るんですか！？」

「ああ」

その提案を聞いて驚くＥ２に対して、俺は短い返事と頷く事で肯定の意思を伝えた。

「……分かりました！ここは僕に任せて、シードさんは先に行って下さい！！！」

俺の提案に対して、これまで共に共闘を続けてきた事からの信頼の賜物か、その場で即断を下したＥ２は、ホルダー達の相手を一身に引き受ける事を、快く承諾してくれた上に、俺達の居る場所からチェイサーさんが停車しているところまで、銃撃を一直線に浴びせ掛けて、道を作り出してくれた。

「……協力を感謝する！」

「はい！！！」

Ｅ２が切り開いてくれた道を、俺は短く感謝の言葉を述べると同時に、Ｅ２の返答を背中に受けながら走り出す。

一気にその道を駆け抜けた俺は、チェイサーさんに飛び乗りながら、予定通りあの猫が言っていた北を目指してくれる様にお願いする。

「お願いしますよチェイサーさん！！！」

『ＯＫよマスター！アタシに任せておきなさい！！本気で飛ばすからねん！！！！』

俺の頼みにチェイサーさんは、そう答えると、リミットオフの状態だったそのボディーを、眩い黄金色の光が包んでいく。

『ドライブチェイサー』

音声が鳴り響くと同時に、銀色のラインの脇に金のラインが走り、黒と赤を基本としたボディーカラーの上に青と、緑のカラーリングの追加ボディーが足される。

『オレサマの本気を見せてやるぜ！振り落とされるんじぇねえぜマスター！！！』

その見た目以上に、俺様口調となってしまったドライブモードのチェイサーさんは、そんな雄叫びを上げると、変身した状態の俺でもキツイと思える程の凄まじいスピードで走り出した。

「この光は……まさか！？」

足元でその輝きを増した魔法陣を目にした空は、最悪とも言える予測がその脳裏に浮かび、驚愕の声を上げた。

「……敵ながら良くやったと良い所だが、残念だったな。儀式の準備はこれで全て整った」

空の予測が現実である事を告げる様に、メルトが完成された魔法陣を見て非情な事実を告げる。

「そんな……」

ホルダーの集団と戦い続けるクウガも、メルトの放ったその言葉に、衝撃を受けて呟きを零してしまう。

「……まだ、まだだ！まだこの魔法陣からはやてちゃんという核を取り除けば、この術式は力を失う筈！！！」

だが空はすぐに解決策を模索して、その方法を実行に移そうとするが、それを実行に移す事は出来なかった。

はやての身体を纏っていた光がその輝きを増したかと思うと、その光の一部が紐状にその形を変えて、空の全身を拘束する。

「くっ！？」

空は何とかその拘束を振り解こうともがくのだが、ボマーの力では

対抗する事すら出来ないのか、一向として拘束が緩む素振りすら見えはしない。

「空！？」

その光景を見て、クウガが助けに入ろうとするが、ホルダー達が立ちはだかり、空までの道を完全に塞いでしまう。

「無駄だ。所詮は試作品のベルト……その程度の力では、この拘束を振り解くのは不可能。諦めて【器】としての使命を果たせ」

ホルダー達と戦うクウガをしげに掛ける事無く、メルトは紐状の光に完全拘束された空に、淡々と己の願望だけを要求する。

「ぼ、僕は【闇】を復活させる為の【器】なんかじゃないし、はやてちゃんが持つ【巫女】の力だって、こんな事をする為の力なんかじゃ決して無い！！！」

「【器】の意思など関係無い。必要なのはお前とこの少女が、儀式の為に必要な道具だったという事実だけだ」

必死の抵抗を試みながら己の想いを叫ぶ空に対して、メルトは一蹴すると静かに手を翳す。

それを合図に、紐状となって空に絡みついた光が、空の身体を魔法陣の中央へと運ぶ。

「さあ……儀式の始まりだ」

空が魔法陣の中心に来た事を確認したメルトは、静かな宣言と共に、

親指と人差し指を弾いて、乾いた音を発生させる。

その瞬間に【闇】の復活を告げる、儀式が開始される。

魔法陣とはやて自身が纏っていた光が、まるで見えない何かに吸い寄せられる様にして、空の身体へと吸収され始めたのだ。

更に空の身体に吸収され続ける光に加えて、魔法陣の下から湯水の様に【闇】が湧き出し、光と同様に空の体内へと吸収されていく。

「うわああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

それは驚異的なまで苦しみを生むのか、空は断末魔にも思える絶叫を上げた。

痛み、苦しみ、恐怖……様々な負の感情と事象が空の全身を駆け巡り、絶叫を上げ続ける空に追い討ちを掛けるかの様にして、ベルトが粉々に砕け散り、ボマーの変身が解けた空はそれでも尚、苦しみ続ける。

そして周囲の光と闇を吸収し続け、その影響はついにクウガと戦っていたホルダー達にまで及ぶ。

「はあああああ……えっ！？」

正面のホルダーに拳を叩き込もうとしたクウガだったが、その拳は空しく宙を切る。

確実に命中するタイミングで繰り出しただけに、その拳を繰り出した本人でもあるクウガは、この予想外の出来事に対して、驚きの声を上げた。

最初に断っておくが、クウガの攻撃を、ホルダーが避けたという訳ではない。

クウガの拳がホルダーに当たる寸前で、文字通り霞の如く、その姿を跡形も無く消してしまったのだ。

「……これは!?」

不可解な出来事に、思考を巡らせながら、クウガが周囲に視線を走らせると、先程のホルダーと同様に、周りのホルダー達も、次々にその姿を崩していき、【闇】となって空へと吸収されて行く様子が視界に映し出された。

その現象に再びクウガは驚愕の声を上げるが、すぐに空を助け出さなければいけないと思考を切り替えて、その行く手を遮っていたホルダー達が消えた場所から、広場となっている中央に向かって一気に駆け抜ける。

「……【闇】の復活を祝う儀式に無粋な真似をしないで貰おうか?」

だがクウガの行動をメルトが黙って見逃す筈も無く、愛用の銃を構えるとすぐさま引き金を引いて、弾丸をクウガの足元へと連続で発

射した。

「くそっ！？」

このまま構わずに強行突破を試みようとしたが、予想以上の弾幕に、クウガは弾幕の中に飛び込む事を中断して、一旦下がる。

しかしこのままでは、空とはやての身が危ないと感じたクウガは、超変身でマイティーフォームよりも、防御力に優れたタイタンフォームになって、突破しようと算段を立てて構えを取るのだが、実行に移す前に先程まで光と闇と爆音が支配していたこの場に、突如として静寂が訪れた。

「儀式は完了した……今ここに遥か古の【闇】が復活を果たしたのだ！」

その静寂が何を意味するのかを、メルトが声高らかに宣言する事で、この場の静寂が打ち破られる。

この部屋の中央には、魔法陣のあった位置に、先程まで断末魔の様な悲鳴を上げ続けていた空と、その足元には既に身体から光を放っておらず、気を失ったはやてが倒れていた。

「空！？はやてちゃん！？」

二人の身を案じたクウガが、近くに駆け寄ろうとするが、それを見た空が、鋭い眼光を放ちながら、右手を前に突き出して、これ以上来るなと、無言の圧力を掛ける。

明らかに今までと様子の違う空に、クウガはその場で足を止めた。

そしてクウガが足を止めて、それ以上近付いてこない事を確認した空は、表情を醜く歪めながら口を開く。

「クウガ……殺す！！！！！！！！！！！！！」

憎しみに染まった叫びと共に、空の腹部にクウガのアークルと酷似した一本のベルトが出現して、更にそのベルトから黒い光が空の全身へと迸り、その姿を異形の姿へと変貌させてしまう。

頭部に輝く黄金の四本角と漆黒に輝く二つの複眼。

全身が鋭く研ぎ澄まされた白い甲殻に覆われており、その四肢には血管の様に金のラインが走っている。

「あれが闇の正体……あれじゃあまるで……」

急激な変貌を遂げた空を目の前に、クウガは予想以上の衝撃を受けて、思わず呟きを零した。

今目の前に居る【闇】の姿は、その配色に違いこそあるものの、五代雄介の知る凄まじき戦士そのものだったからである。

「殺す！！！！クウガ！！！！殺す！！！！殺す！！！！殺す！！！！！！！！！」

まるでその言葉しか分からないと言わんばかりに、【闇】は憎しみを言葉に乗せて吐き出しながら、クウガに襲い掛かった。

「空！俺が分からないのか！？」

何とか空を正気に戻そうと、クウガは何度も【器】の名前を呼びかけるが、その声は届く事無く、うわ言の様にクウガと殺すの単語を言い続けながら、その凶悪な拳を何度も振り回す。

その間も呼びかけ続けるクウガだったが、その為に自ら隙を生み出してしまい、【闇】の一撃がクウガを捉えようとしたその時、轟音と共に水路の壁をぶち破り、一台のバイクとそれに跨った一人の黒い仮面ライダーが姿を現した。

**１００万ＰＶ突破記念作品　仮面ライダーシード＆仮面ライダークウガ　繋がる世界**

次回は復活した闇に対して、出会う筈の無かった二人の仮面ライダーの共闘と……な予定となっております。

それでは。

## １００万ＰＶ突破記念作品　仮面ライダーシード＆仮面ライダークウガ　繋がる

まさかの連日更新となります。

そして今回も楽しんでいただけたら幸いです。

駆けつけてくれたＥ２にホルダー達の相手を任せた俺達は、ドライブモードとなったチェイサーさんの常軌を逸した猛スピードで、あの猫が言っていた今は使われていない水路へと辿り着いた。

其処までは良かったのだが、俺とメカ犬はある一つの出来事を失念していたのだ。

普段から何かと謎の多いチェイサーさんではあるが、俺やメカ犬のお願いには、案外素直に答えてくれる……

しかしこのドライブモードのチェイサーさんは、最早別人とも言える性格であり、その性格は超俺様主義者。

そんな方が、お願いですから止まってくださいとお願いしたところで、素直に止まってくれるだろうか？

答えは否だ！！！

案の定チェイサーさんは、スピードを一切落とす事無く、地下水道の入り口に突っ込み、水路の壁をぶち破りながら、まっすぐに北へと駆け抜けたのである。

幾つもの壁を突き抜けた先に見えたのは、今までぶち破ってきた水路とは比較にならない程の、ドーム状に広がる広い空間だった。

「あれは！？」

俺はその空間内部で、衝撃的な光景を目撃してしまい、驚愕の声を上げてしまった。

空間内部に居て最も先に目に付いたのは、マイティーフォームのクウガが戦っている姿だったのだが、それよりも俺は、そのクウガが戦っている相手の姿に度肝を抜かれたのである。

その相手の姿もまた……クウガだったのだ。

全身が白い鎧に覆われた姿ではあったが、グローイングフォームとは違い、その形状はアルティメットフォームに酷似していた上に、瞳の色も漆黒に染まっている。

その白いクウガが、五代さんが変身しているであろうクウガに対して、猛攻を仕掛けているのだ。

俺はその光景に驚愕しながらも、その白いクウガの正体に、一つだけ心当たりがあった。

空が話していた【闇】の存在……

それが、あの白いアルティメットクウガの正体なのではないだろうか？

だが今は深く考察するよりも早く、俺の知るクウガの危機を救う事が先決だ。

「チェイサーさん！！！」

俺はありったけの叫びで、チェイサーさんに呼び掛ける。

この一言で、今のチェイサーに何処まで通じるか分からないが、恐らく俺が言おうとしている事は分かってくれるだろうと信じるしかない。

『吹き飛ばすぜえええええええええ！！！！！！！！！！』

しかし俺の心配は杞憂だったらしく、ドライブモードによって、すっかり別人格となってしまったチェイサーさんは、この水路全体にまで響くのではないかという位の雄叫びを上げながら、白いクウガにスピードの乗った強烈なバイクタックルを叩き込んで吹き飛ばす。

白いクウガを吹き飛ばした後、更に視線を前方に向けると、其処にはこの空間の中央で倒れているはやてちゃんの姿が俺の視界に飛び込んで来た。

「はやてちゃん！？」

俺はすぐさまチェイサーさんから飛び降りて、はやてちゃんの下へと駆けつけて無事を確認する。

『大丈夫だマスター。はやて嬢は意識を失ってはいるが、命に別状は無いようだ。じきに目を覚ますだろう』

「……そうか。良かった……本当に」

倒れていたはやてちゃんを助け起こしながら聞いたメカ犬の声に、俺は心から安堵した。

一番の懸念を払拭した俺は、そのまま気を失っているはやてちゃん

を持ち上げて、チェイサーさんの傍まで連れて行く。

「チェイサーさん。はやてちゃんを安全な場所までお願いします」

『オレサマに任せておきな！負けるんじゃねえぞマスター！！！』

チェイサーさんのシートの上に、はやてちゃんを乗せながらした俺の頼みに、快く返事を返してくれたチェイサーさんは、俺にエールを送ると、変身前の状態の俺を固定する為のストッパーで、気絶しているはやてちゃんが落ちない様にして、この場から走り去っていった。

「……純」

ここまで一連の流れを、黙って見守っていたクウガが、俺に話し掛けて来る。

「遅くなりました五代さん。ところで今は、どんな状況になっているんですか？」

再開の挨拶もそこそこに、俺は現状を把握する為に早速質問を投げ掛けた。

海鳴市に飛来した今もＥ２が戦ってくれている大量のホルダーに、連れ去られた筈のはやてちゃんが、この空間の中央に放置されていた事。

それに先程チェイサーさんが吹き飛ばした、白いクウガの事など……

俺がハンターと戦ってから、ここに辿り着くまでの間に何があった

のか、聞きたい事は山ほどある。

「……ごめん。俺が付いていながら【闇】の復活を止める事が出来なかった」

クウガが最初に放った質問の返答は、謝罪の言葉だった。

そしてクウガの文脈から、俺は一つの事実を確信する。

「やっぱり……あの白いクウガが【闇】なんですね？」

「……ああ。それにあの闇の本体は……空なんだ」

確認の為に聞いた俺の質問に肯定すると同時に、クウガはまたしても衝撃的な事実を口にした。

「あの白いクウガ……【闇】が空！？」

「そうなんだ。儀式を止めようとしたんだけれど、間に合わずに……」

俺にここまでの経緯を簡潔に語ったクウガは、目の前に居ながら阻止する事が出来なかった悔しさからか、強く拳を握り締める。

「今更来たところで、もう遅い。【闇】はここに完全な復活を遂げた。お前達にこの【闇】を止められるか？仮面ライダー！」

其処へ俺でもメカ犬でもなければ、クウガでもない抑揚の無い声が、この空間内部で響く。

その声の正体は、先程から俺の視界の隅に映っていた灰色の怪人、メルトの声だった。

『メルト！お前達の目的は何だ！？それに以前のフィリップ達が居た世界の事も含めて、今回の【闇】について……ワタシと同じ世界からやって来た筈のお前達が、何故別の世界の事を知っているというのだ！！！』

メカ犬がメルトに対して投げ掛けた疑問は、俺も考えていた事だ。

Wの世界との融合と、今回の【闇】の一件……もしかしたら時期的にデンライナーが来た時も、裏で暗躍してネガタロスを操っていたかもしれないという可能性すらあるのではないだろうか？

其処まで考えるのは、飛躍しすぎかもしれないが、どう見てもメルト達の行動は、仮面ライダーを知っている者の行動に思えてならない。

「それに答える義務も義理も私には無い。それに今はそんなくだらない事を考えている場合ではないと思うがな？」

メルトがメカ犬の質問を一蹴するのとほぼ同時に、瓦礫が吹き飛ばされる音と共にチェイサーさんに吹き飛ばされた【闇】が幽鬼の如く、再びその姿を現した。

「どちらにしてもお前達の命もここまでだ。もしもこの【闇】を退ける事が出来たならば、褒美にヒントの一つでも教える事を約束しよう」

【闇】と俺達を交互に見たメルトはそう言うと、この場での目的は

全て果たしたと言わんばかりに、水路の出口へ向けて歩き出しその姿を消してしまう。

『待て！！！まだ話は終わってないぞ！？』

「止めておけメカ犬。俺も気になるところだけど……今はメルトを問い詰めるよりも先に、しなくちゃいけない事があるだろ？」

この場から静かに立ち去ろうとするメルトに対して、メカ犬が待ったの声を掛けるが、俺はその声を遮って此方へと距離を詰めてくる【闇】を見据えた。

【闇】だけを無力化して、空を救い出さなければいけないという強い想いが俺の中にあるが、改めてこの【闇】と対峙する事で、俺は改めて強者だけが放つ、異様な圧力を感じ取る。

そして【闇】は、あまりにも唐突に大きな動きを見せる。

「来る！！！」

クウガがそう言った次の瞬間には、既に俺とクウガをその拳の射程距離に捉えていた【闇】が、力任せに両拳を無造作に振り回して、俺とクウガ其々に叩き込む。

その拳は、尋常では無い威力を誇っており、咄嗟に防御しても尚、凄まじい衝撃が、俺とクウガを襲った。

「空！俺が……俺達が分からないのか！？」

「……殺す！クウガ……殺す！！それを邪魔する者も……全て！！

！！」

俺は【闇】の中に居るであろう空に何度も呼びかけるが、その言葉は一切耳に入っていないのか、擦り切れたテープレコーダーの様に、憎しみの篭った言葉を吐き出し続ける。

「負けるな空！君はこんな……人を傷付ける事を、望む男じゃないだろ！！！」

更にクウガも空に必死に呼び掛けるが、どんなに想いを込めて俺達が叫んでも、その声は空の耳に届かないのか、【闇】の猛攻は少しとして収まる気配すら見せない。

「メカ犬！さっきのハンターみたいに、【闇】の核を特定したりとか出来ないか！？」

『先程から解析は行っているが……ハンターの時とは違い、空と自身と【闇】だと思われるエネルギーが完全に同化している。これでは同じ手は使えないだろう』

「それじゃあ【闇】を倒せば元に戻せるんじゃないか！？」

『最初に言っておくが、それは無理かもしれないな』

「どうしてだよ！？」

『ホルダーの技術を応用して作られたハンターならば、その力任せな方法でも可能だが、空と同化している【闇】は全く未知のエネルギーであり、ワタシの知識には存在していない専門外の領域だ。小さな範囲ならば位置を特定して物理的に分離させる事は出来ても、

今の空には……』

クウガと共に、【闇】の猛攻に耐えながら、俺はメカ犬と何とか空を助ける方法は無いかと、模索し続けるが一向に解決策が見出せない。

それどころか、このままでは俺達の命すらも……

「最後まであきらめちゃ駄目だ！！！」

俺の脳裏に、薄暗い思考が過ぎろうとしたその時、目の覚める様なクウガの声が俺の耳に届く。

「……五代さん」

「もしも納得できる結果にならなかったとしても……それは全部終わってから後悔すればいい！でも今はまだその時じゃないんだ！！まだ俺達に出来る事がきっとある！！！！！」

……俺はクウガの、五代さんの言葉で、先程までの意識を払拭して、再び空を助ける算段を模索する。

確かにまだ終わっていない。

諦めずに全力で、挑み続ければ、誰もが納得出来る最高の終わり方を迎える事だって、決して不可能ではないのだ。

それに例え俺一人では駄目だったとしても、俺にはメカ犬という相棒が居る。

隣には俺が憧れ続けた……一人の仮面ライダーが肩を並べて励ましの言葉を投げ掛けているのだ。

こんな破格の条件が揃っているというのに、どうして諦める必要がある？

……だから俺は、一人の大切な友人に、言葉では伝えきれない熱い想いを、全力でぶつける。

「……何時までも……何時までも……黙ってないで何か言って見せろそらあああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！」

【闇】の猛攻を掻い潜り、俺は想いのたけを乗せた拳を全力で叩き込む。

「空！！！其処に居るんだろ！！！！聞こえてるなら返事をしてくれ！！！！！俺が……俺達が絶対に助けてみせるから！！！！！！だから空も根性見せろおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！」

これが今の俺に、考えられた精一杯の行動だった。

俺は天才的な頭脳の持ち主でもなければ、何か一つ非凡な才能があるという訳ではない。

一言で片付けてしまうのであれば、凡人も良いところだ。

だけどそんな凡人の俺にも、自分の友人を信じ、貫く事は出来る。

この状況下で、最善の提案を出来るのは誰か？
それはこの【闇】を最も知り尽くしている空を置いて、他にいないだろう。
だから俺は、空にこの声が届く事を信じて、全力で呼び掛ける！
『危ないぞマスター！！！』
メカ犬の声が聞こえた時には、【闇】の振り翳した拳が俺の目前へと迫っていた。
最早この至近距離では、避ける事すら叶わないだろう。
俺は最後まで友人を信じて、もう一度叫ぶ。
「返事をしろおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！！！！！！！」
俺の叫びは……
……一人の友に届いた。

「……そんなに叫ばなくても……ちゃんと聞こえてるよ？」

俺の顔面に直撃する寸前に【闇】の拳が止まり、その内側からは、先程までの憎しみのみを吐き出す怨念の声ではなく、俺の良く知る友人の優しさに満ちた声が聞こえて来た。

「……そら？本当に……空なんだな！？」

その声を聞いて、一瞬だけ呆けてしまったが、俺はすぐに気を取り直して確認する。

「……ああ。僕は空だ。他の誰でもない……僕そのものだよ」

空はぎこちない動きで、拳を下ろしながら俺の言葉に、肯定の返事を返す。

「良かった……本当に心配したんだぞ……」

「ありがとう純。僕が【闇】の中に飲み込まれた後も、純の声は何度も聞こえたよ。その声が僕をここまで導いてくれたから……だから僕は……もう一度君と話をする事が出来たんだ……」

「何だよその言い方？それじゃあまるで……」

「あまり時間が無いんだ……純には……勿論五代さんにも……良く聞いて欲しい」

俺だけではなく、クウガにも問い掛ける様に空は言葉を紡いでいく。

「僕を……【闇】と一緒に封印して欲しいんだ」

**１００万ＰＶ突破記念作品　仮面ライダーシード＆仮面ライダークウガ　繋がる世界**

次回は感動のラスト……になったら良いなと個人的に思っております。

それでは。

## １００万ＰＶ突破記念作品　仮面ライダーシード＆仮面ライダークウガ　繋がる

やっとクウガ編もラストバトル……

本当にここまで長かったです。

そんな訳で今回も楽しんでいただけたら幸いです。

その発言の内容とは裏腹に、穏やかな空の声が俺達の耳に届く。

「……何を言ってるんだよ……空」

あまりにも穏やかな空の声に、俺は現実味を感じる事が出来ず、ただの聞き間違いである事を願い、改めて確認する為に空に質問を投げ掛けるが、その答えは非常なものだった。

「多分だけど本来の儀式を無視したやり方で不安定だったから、僕が一時的とは言え【闇】を制御出来てるんだ。でも……僕が今こうして話していられる時間も、そんなに……長くは続かないと思う。もう一度僕が【闇】に意識を乗っ取られたら、今度こそ僕は……だからその前に僕を……【闇】と一緒にこの場で封印して欲しい！僕が内側から全力で【闇】を制御している間にクウガの封印エネルギーを叩き込んでくれ。それでこの【闇】を僕共々封印出来る筈だから……」

自身を【闇】と共に封印してくれと懇願する空に、俺は更に質問を投げ掛ける。

「本当にそうするしか方法は無いのか！？もしも何か方法があるなら言ってくれ！！！」

例え大切な友人の頼みであったとしても、例えそれが最善の手段だとしても、俺はそんな結末を望んではいない。

いや……この場でそう思っているのは、俺だけでは無いだろう。

メカ犬も、五代さんも、誰もこんな悲しい終わり方に、納得する訳が無い筈だ！

「もう……時間が無いんだ。僕の使命は時の狭間で【闇】を永遠に封印し続ける事……ただ元の状態に戻るだけさ。純が気に病む必要は無いよ……」

俺が再び伝えた一人の友人を救いたいという想いも、空はただただ穏やかな態度で否定する。

その穏やかな態度とは裏腹に、決して揺るがない強い決意を空の言葉に俺は言葉を返す事が出来なかった……

「……空。君が言う様に、本当に何も手立ては無いのか？」

先程の空の言葉を最後に静寂が訪れるが、数瞬の間を置き俺と空の会話を聞いていたクウガが、新たに空へ問い掛ける。

「僕は……【闇】を封印する事が僕の使命だから……良いんだよ……これで」

「違う。俺はそんな事が聞きたい訳じゃない！俺が聞きたいのは、空が本心で、どうなりたいと願っているかだ！！」

「どうなりたいって……さっきも言った通り、僕は……」

「その答えは確かに空が負うべき使命なのかもしれない……でもそれは……空の本音とは違うだろう！？」

空の答えは頑なに一方通行だったが、それでもクウガは……五代さんは、空の心へと訴え掛ける。

まただ……

五代さんの言葉で、俺は先程まで固く決意していた筈なのに、早くも失いかけていた大切な気持ちを思い出す。

まだ終わっていないのだ……

俺が……俺達が絶望しない限り、俺達が未来への可能性を諦めずに、信じて前に進もうとするならば、どんな困難にだって立ち向かう事が出来る！！！

だから俺は、もう一度……いや！

この気持ちが俺の大切な友達に届くまで、俺の精一杯の気持ちを全力で何度だって伝え続ける！

「俺は……嫌なんだ！空とこんな別れ方をするなんて絶対に嫌なんだよ！！！」

「……ありがとう、純。それでも……僕は使命を果たさなくちゃならないんだ……僕はこの世界が、大切な友達が居るこの世界を守りたいから……」

「そんな言い方で誤魔化すな！！！」

俺は空の言葉を、遮る様に叫んだ。

「この世界が本当に好きだと思ってるなら！空が俺を友達だと思ってくれてるなら！最後まで諦めるなよ！！！俺は空が犠牲になる事で、この世界が救われても……俺の命が助かったって何も嬉しくない！！！終わらせるなら、皆で心から喜べる笑顔で終わりたいんだよ！！！！！」

こんな言葉はただの俺の願望だと、自分で言って分かっている。

だけど……まだ終わっていない。

この場で俺も、メカ犬も、五代さんも、誰一人として空を助ける事を諦めてはいないのだ。

それなのに助けたい筈の空が、一人で諦めてどうする？

俺一人では無理だったとしても、皆が協力して全力を尽くしたならば、未来は切り開けるかもしれない。

少なくてもその可能性を他の誰でもない。自ら閉じてしまう様な真似だけは、空にして欲しくないのである。

「純は……勝手な事を言うね？」

「ああ！俺は勝手な事を言ってる！そんな事は分かってるさ！それを分かった上で、俺はやっぱり空を助けたいんだよ！！！」

空の問いに、俺はもう一度自身の思いの丈をぶつけた。

どんなに救いたいと願って手を伸ばしても、目の前に居ながら手の届かなかったた大切な人達が居る……

ここでまた、それを繰り返すなんて真似は、絶対に嫌だ！

今ならまだ手が届くかも知れない場所に、俺は立っている。

なら最後の最後まで……俺はどんなに小さな可能性だったとしても、それを信じたい！

「……僕だって……そんな事を考えちゃいけないって分かっているのに、僕は……」

「それで良いんだよ！！！俺は……空の本音が知りたいんだ！！！」

「僕は……このまま【闇】と一緒に……封印なんてされたくない！僕はまだやりたい事が一杯ある！色んな事を覚えて、色んな場所に行って沢山の景色見て、大勢の人と話をして……そしていつか……僕達が守った世界の行く末を見たい！！！」

その言葉は紛れも無く、空の本心だったのだろう……

「言ってくれてありがとう……空」

「……純」

俺は空が今まで心の内に秘めていた本音を聞き、改めて硬い決意を心に誓った。

「空の夢。絶対に叶えよう！だから俺と空で、こんな最低な悪夢はここで終わらせるんだ！！！」

その決意を現実にする為に、俺は声高らかに宣言する。

『ワタシを居る事も忘れてしまっては困るなマスター！』

「勿論俺も協力するさ！」

俺の宣言に対して、メカ犬とクウガが其々に、協力すると声を掛けてくれた。

「メカ犬……五代さんも……空！ここに居る皆が全力で協力してくれる！何でも良い！どんなに小さな事でも構わないから、【闇】だけをどうにかする方法か、せめてヒントになる様な事は無いか！？」

「僕と【闇】を別に……もしかしたら！？」

俺の言葉に、空は【闇】を必死に抑え付けながらも考えを巡らせ始め、そして何かを思いついた様に声を上げた。

「何か方法があるのか！？」

「僕も実際にやってみないと分からない……でもこれが出来るなら僕と【闇】を分断出来るかもしれない」

空は俺の問い掛けにそう答えると、殆ど身動きが出来ない状態であろう筈の身体を、無理矢理横に動かして、地面のある一点に向けて指を示した。

その指の先に視線を向けると、破片となった黒い何かのパーツと、その脇に転がっている青い玉が落ちていた。

その玉と黒い破片には、何処か見覚えがある。

玉の色は違うが、恐らくはハンターの変身に使われていたツールと同様の物なのだろう。

それが何故この場所にあるのかは分からないが、空はこれを何かに利用しようと考えているのだろうか？

「【闇】は本来実体の無い思念の塊なんだ。それなら【闇】に身体さえあれば、僕の身体は必要なくなる筈……あれには何処までが許容範囲かは分からないけど、【闇】を制御して、直接的な力にする機能があるみたいだから。それを利用すれば……もしかしたら」

『確かに……あれもホルダーの暴走システムを採用しているのならば、【闇】の思念が持つエネルギーに反応して実体が作られる可能性は充分にある。可能ならばすぐにでも実行した方が良いのでは無いか？』

「でもそれには一つだけ問題があるんだ……」

空の言葉に、ホルダーに対しての知識を豊富に持つメカ犬が、肯定の意思を示すが、其処でまた空が声を曇らせる。

「一つの問題？」

其処にクウガが、先程の空が発した言葉の一部を、鸚鵡返しで発した。

「今の【闇】を僕以外に一つの存在として固定するには、どうしても……もう一度【巫女】の力が必要になるんです。この世界ならば

……僕を除いて、グロンギの血統を持つ人は他に誰も居ないから、完全に倒せば復活する……エネルギーを溜める事も出来ないでしょうが、仮に僕と【闇】を分離出来ても、存在を……確定出来ていない不安定な【闇】は物理的な攻撃を無効化してしまうから、クウガの封印エネルギーを……撃ち込んだとしても、その場で復活してしまうでしょう……」

そのクウガの言葉を質問と受け取った空が、途中で途切れ途切れになりながらも、丁寧に説明してくれる。

この様子から見ても、空が【闇】を押さえ込んでいられる時間は、限界を迎えつつあるのかもしれない。

「現状としては一番可能性の高い方法だけど……」

空の母と同じ、この世界でその【巫女】の力を持つ人物であるはやてちゃんが、この場に居ない以上その方法を試す事も出来ないという趣旨の言葉を、俺が発しようとしたその時である。

やけに聞き覚えのあるエンジン音が、俺の鼓膜を揺さぶったかと思うと、俺達の姿を明るい光が照らした。

「五代さん！空さん！シードさん！」

先程のエンジン音と、今も俺達を照らしているこの光の正体は、チェイサーさんのヘッドライトだったのである。

しかもチェイサーさんの上からは、はやてちゃんの俺達を呼ぶ声が聞こえて来たのだ。

「はやてちゃん!?どうしてここに……」

何故この場にはやてちゃんが居るのか、誰もが疑問に思った事を、クウガがはやてに問い質す。

クウガの質問をしている間に、チェイサーさんがはやてちゃんストッパーを外して、はやてちゃん自身もチェイサーさんのシートの上から、地面へと飛び降りる。

「ここまで私を連れて来てくれてありがとうな。恩に着るで!バイクさん!」

『良いって事よ!お嬢ちゃんは今の自分に出来る事を、精一杯頑張りな!!!』

何時の間に仲良くなったのか。

はやてちゃんは、ドライブモードで俺様状態なチェイサーさんと、軽いやり取りを交わしてから、俺達の近くまでやって来て、先程のクウガの質問に返答を返した。

「五代さん、空さんも……それにシードさん。私の事を助けてくれて、ありがとうございました。だから……助けてくれたお礼って訳や無いけど、今度は私が皆さんの手助けをしようと思います!」

「それは……どういう事なんだい?」

突如として現れたはやてちゃんの言葉に、この場の全員が疑問を持ちながら、空が訝しげに質問を投げ掛けた。

「私は捕まって……それからずっと何処か暗い場所に居て……次に気付いたら私の中から出てた光みたいなのが……空さんの中に入って行って、今の五代さんみたいな姿なってもうてな……また私の意識が無くなる前に、私を呼ぶ声が聞こえたんよ」

「声が聞こえたって……一体誰の声が？」

はやてちゃんの言葉に、俺も首を傾げながら呟く。

「その声は……女性の声でな。何やクールなお姉さんって感じの声やったけど、優しい声だったんよ。そんでその声に、私の持ってる力の使い方を少しだけ話されて……それで頼まれたんや」

其処で一拍の間を置き、はやてちゃんは空に視線を向けると、穏やかな笑顔を浮かべながら言葉を紡ぐ。

「【私の息子を使命から開放してあげて欲しい】その後は伝言も頼まれて、【息子に今までご苦労様……これからは自分の道を自由に歩いて行くのよ】だそうやで……空さん」

はやてちゃんにメッセージを送ったのは誰だったのか。

多くを語らずとも俺は……いや、きっとこの場に居る全員が理解したであろう。

例え遥か昔にその身体が滅び、世界を超えたとしても、絆は繋がり続けていた。

そしてその想いは、確かにここに届いて……新たな可能性という奇跡を生んだ。

「その声の人から、大体の話は聞いてるで！五代さん達がこれから何をしようとしてるのかも……だから私に任せて欲しいんよ！！！」

はやてちゃんはそう言うと、地面に落ちていた例の青い玉を拾い上げて、目を閉じて何か集中し始める。

するとはやてちゃんの全身を光が包み込み、その光が青い玉へと流れ込んで行く。

やがて青い玉に大量の光が注ぎ込まれると、はやてちゃんの全身から溢れ出ていた光も収まり、閉じていた瞳を開いた。

「私に出来るのはここまでや……だから、後はお任せするわ……仮面ライダー……」

余程の無理をしたのか、額に汗を流しながら、最後に力無く崩れ落ちながらそう告げたはやてちゃんを、俺は地面に倒れる前に抱き起こす。

「はやてちゃん！？」

『……大丈夫だマスター。強い疲労感で意識を失った様だが、はやて嬢の命に別状は無い』

「そうか……お疲れ様。それとありがとう……はやてちゃん」

俺はメカ犬の言葉を聞いて安堵しながら、恐らくは聞こえていない事を承知した上で、感謝の言葉をはやてちゃんに送る。

そして俺は、再びチェイサーさんに頼み、はやてちゃんを安全な場所に運んでもらうのを見届けてから、はやてちゃんが託してくれた希望を手にして、空と向き合う。

「空……これがはやてちゃんと空の大切な人が、俺達に託してくれた希望だ！」

「うん。この希望を……絶対無駄にはしたくない！」

俺の言葉に空は頷きながら答えて、青い玉を掴んだ。

その瞬間に、激しい漆黒が空の全身を包み、その漆黒が先程のはやてちゃんとは比べ物にならない勢いで、玉の中に吸収されて、玉を中心の核に人の様な形を形成していく。

それに比例して、空の姿が白いアルティメットクウガに似た容姿から、元の人の姿を取り戻す。

やがて青い玉を核として、空とは別にもう一人の【闇】が姿を表した。

「成功だ……純。それに五代さん……これで【闇】を完全に倒せる筈だよ……」

元の姿に戻った空が、俺達に告げる。

「殺す……殺す……殺す……殺す……殺す……殺す……殺す……殺す……殺す……殺す……殺す……殺す……殺す……殺す……殺す……殺す……殺す……殺す……殺す……殺す……殺す……殺す……殺す……殺す……殺す……殺す……殺す……

…殺す……殺す……殺す……殺す……殺す……殺す……殺す……殺す……殺す……殺す……殺す……殺す……殺す……殺す……殺す……殺す……殺す……」

空という抑止力が居なくなった事で、【闇】は完全にその思念だけの集合体となり、呪詛の様に同じ言葉を呟き続けていた。

「これで心置きなく戦える！一緒に戦ってくれますか？五代さん！！！」

「ああ！こんな戦いは俺達の手で終わらせよう！！！」

俺の言葉にクウガは頷きながら横に並び立ち、俺達は最高の力を持ってして、この戦いに挑む。

『ガイア・コール』

ベルトからタッチノートを引き抜き、俺は画面を操作して、メカ竜を呼び出す。

『お待たせですマスター！！！』

呼び出してから程無くして、何故か真上から、メタルレッドな手乗り恐竜の、メカ竜が降ってきた。

どうしてそんな場所から出て来たのか、突っ込みたいところではあるが今はそんな細かい事にいちいち突っ込んでいられないので、話を先に進める事にする。

「行くぞメカ竜！」

『了解です！』

俺の言葉にメカ竜は快く返事を返し、その間に俺は更にタッチノートを操作して、メカ竜をアタッチメントモードに変形させてから、タッチノートをベルトに差し込んで、アタッチメントパーツとなったメカ竜を、ベルトの左側へと押し込んだ。

『ベーシック・ガイア』

俺がアタッチメントパーツをベルトに差し込んだ瞬間に音声が鳴り響き、俺の周囲にメタルレッドの装甲が展開されて全身に装着されていく。

その隣では、クウガが意識を集中させていく。

そしてクウガの集中が最高までに高まったその時、クウガの身体が黒く染まり、全身のフォルムが刺々しくなると同時に全身に血管の如く金のラインが走る。

凄まじき戦士。

このクウガの姿は、古代リントが残した石碑に記されていたクウガの最強の姿である。

ただその姿には一箇所だけ、記されていた文面とは違った部分があった。

理性を失い暴走する筈のその姿を、五代さんは自我と優しい心を保った状態で制御している。

それを示すかの様にクウガの瞳は、マイティーフォームと同様に赤く輝いていた。

俺達が姿を変えるや否や、【闇】が猛然と襲い掛かって来る。

だが俺とクウガは、其々に繰り出された【闇】の拳を受け止めて、同時に蹴りを腹部に叩き込む。

「「はあああ！！！」」

それを皮切りにして、俺とクウガは拳と蹴りを次々に繰り出す。

だが【闇】の身体能力の高さからか、最も高い攻撃力を有するガイアモードとアルティメットフォームだというのに、少しも怯む事無く、反撃を仕掛けて来る。

「これでどうだ！！！」

このままでは埒が明かないと考えたのか、クウガが【闇】に向けて手を翳した。

それと同時に、闇の全身から、炎が噴出する。

超自然発火能力。

アルティメットフォームのクウガが、劇中のダグバとの最終決戦で一度だけ見せた特有の能力である。

「今だ純！！！」

「はい！」

俺は【闇】の全身が炎に包まれた事を確認してから発せられたクウガの声の意図を汲み、短い返事をしながらアタッチメントパーツの下のボタンを押した。

『ガイアブレイガン』

俺は専用武器であるガイアブレイガンを生成して、ブレイドモードに切り替えると、すかさず【闇】へと連続で斬りかかる。

流石に全身が発火した状態からの、この攻撃は効いたのか、【闇】が初めて後ろへと退く姿を見せた。

このチャンスを逃すまいと、俺はガイアブレイガンをガンモードに切り替えて、アタッチメントのレバーを引く。

『マックスチャージ』

音声が鳴ると同時に、ベルトから発生した光が右腕のラインを伝い、ガンモードのガイアブレイガンに集約されて、四体の分身体が新たに作り出される。

「ガイア・チェーン・ショット」

俺が【闇】に引き金を引くと、分身体も順次に引き金を引いて行き、高い威力を込められた光弾が連続で闇に命中していく。

「五代さん！！！」

「たあああああああああああ！！！！」

今度は俺の叫びに応える様にして、駆け込んだクウガが、その鋭い拳の一撃を【闇】へと叩き込んで吹き飛ばす。

『決めるぞマスター！』

『これで全部終わりにしましょう！』

その直後には俺は、クウガの隣まで来ており、其処でメカ犬とメカ竜が呼び掛けて来る。

俺とクウガは、互いに頷いてから、前方で再び立ち上がろうとしている【闇】を見据えた。

『マックスチャージ』

ガイアブレイガンを手放した俺は、もう一度アタッチメントパーツのレバーを引き、ベルトから発生した光は右足に集約されていく。

「……五代さん！」

「……ああ！」

お互いに声を掛け合った俺達は、同時に飛び上がり、右足を【闇】へと向ける。

その直後に生成された四体の分身体が、其々二体ずつ俺とクウガの背中を蹴って、その力を推進力として【闇】へと向かって凄まじい

勢いで向かっていく。

「「はああああああああああああああああああああああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」」

二人の仮面ライダーが放った最大威力を誇る一撃が、【闇】に決まり、壁に減り込んだ【闇】は巨大な爆発を引き起こす。

その巨大な爆発はこの地下水道の全体を揺るがす程であり、それを如実に表すかの様に、全体の壁に亀裂が走った。

何とか水路の崩壊だけは免れた様だが、爆発の余波が収まってから改めて辺りを見渡せば、最早瓦礫の山としか言い様の無い惨状広がっていた……だがそんな事よりも、今はこう思う。

「これで……文句無しのハッピーエンドだろ！」

かなりのご都合主義と自覚しながらも……私はハッピーエンドが大好きです。

そして次回はクウガ編最終章……ここまでお付き合いいただき、読者の皆様には何度感謝の言葉を述べても、言い足りません。

そしてクウガ編はここで終わりますが、これからも本編は続きますので、まだまだお付き合いいただけたらとても嬉しい限りです。

それでは。

# １００万ＰＶ突破記念作品　仮面ライダーシード＆仮面ライダークウガ　繋がる

三ヶ月以上続いたクウガ編もこれで最終章……

前回の二十七章で、本来此方の方に持ってくる筈だった分を書いているので、今回は短めとなっておりますが、楽しんでいただけたら幸いです。

あの戦いから一夜が明けて時間が昼に差し掛かる頃、俺はメカ犬と、そして自由を手に入れた空と一緒に、例の地下水道の入り口で、ある人物を待っていた。

「遅いな……もうすぐ約束してた時間だけど、まだ結構時間が掛かってるのかも……」

『うむ』

「まあ、しょうがないよ。これでお別れなんだし、ちゃんと話したい事だってあるだろうしね」

首を傾げながら呟いた俺の言葉に、メカ犬が相変わらずな態度を示し、それに続いて空が爽やかな笑みを浮かべながら、フォローを入れる。

それから暫く待って、予定の待ち合わせ時間が少し過ぎたところで、俺達の待ち人が目の前にその姿を現した。

「ごめん！待たせたかな？」

やって来た待ち人……五代さんは手を振りながら俺達の近くまで来ると、待ち合わせの時間に遅れた事を謝罪する。

「少し心配はしましたけど、大丈夫ですよ」

『うむ。確かにマスターは心配していたな』

「そうだね」

俺が五代さんにフォローを入れている横から、メカ犬と空がからかい混じりの発言をして来るが、俺は敢えて突っ込みを入れずに、話を進める事にした。

ここで突っ込みを入れたところで、二対一という現状では、話題を長引かせれば更にからかわれる危険性すらある。

分かっていながら、態々そんな事をしても、俺の精神衛生上喜ばしい事ではない。

「あの、はやてちゃんとはもう……」

なので俺は話題を変えて見る事にした。

五代さんが待ち合わせに遅れた理由は、十中八九はやてちゃんと話していた為だろう。

空がこの世界に来るのと同時にこの世界に来た五代さんは、はやてちゃんと少しの間とは言え、まるで本当の家族の様に過ごしていたらしい。

きっとお互いに話しておきたい事も、多かった筈だ。

「ああ、はやてちゃんとは、ちゃんと話し合ってきたよ。それで最後は【行ってらっしゃい】って見送ってもらって来た」

『なるほど……行ってらっしゃいか。はやて嬢らしいな』

五代さんの言葉にメカ犬が共感を示す。

確かに別れの言葉にそんな言葉を使うのは、はやてちゃんらしいと言えるかもしれないな、と俺も思った。

「さあ、正直名残惜しいけど、五代さんも来たし、そろそろ出発しよう」

俺が新たに振った話題が一段落したところで、空が俺達に呼び掛ける。

その言葉は……俺達の別れを意味していた。

「本当に行くんだな……もう少しだけでも、この世界に居れば良いのに」

「そうだね。出来る事なら僕もそうしたいけど、五代さんを少しでも早く元の世界に送り届けたいし、正直な話をすれば、【闇】が消滅した事で、僕の持っていた力も薄れつつある。世界を繋ぐ事が出来るのも、後一回が限度なんだ」

俺の言葉に対して、空は昨日と同じ説明を俺に話してくれた。

五代さんがこの場に居るのも、海鳴病院でビートチェイサーを呼び出したのも、空の【器】としての意思と力なのだそうだ。

ただし前者の五代さんを呼び出した際には記憶を失っていて、無意識に行ったらしい。

話を元に戻すが【器】の使命から開放された今の空は、今までであった【闇】との繋がりが絶たれた事で、その力も失いつつある。

この地下水道に俺達が来ているのも、ここがこの世界で今も唯一【闇】のエネルギーが微量ながら残留している場所であり、そのエネルギーで空の失いつつある力を多少でも補う為だ。

「そうだったな……それに五代さんの居る世界は……空が居るべき世界でもあるんだもんな」

「うん！」

「……空。また……会えるかな？」

「……会えるよ。僕達はどんなに離れていても、例え遠く離れた別の世界に居たって大切な友達に変わり無いんだからさ」

俺は空と笑顔で握手を交わし、何時の日か必ず再開する事を誓う。

そして俺と空が握手を終えると、それまで隣で見守る様に俺達を見ていた五代さんが話しかけて来た。

「純。これからも戦い続けるなら、これからも多くの困難とむきあわなくちゃいけなくなると思う。だけど忘れないで欲しいんだ。何時だって純の周りには助けてくれる人達が居る事を……純が自分の笑顔を忘れずに頑張ったなら、きっと皆の笑顔も守れるから」

五代さんは俺にそう告げると、右手を前に出しその親指を突き出して、サムズアップをする。

「……はい！」

俺は多くの言葉を憧れの人に貰いながら、何も気の利いた言葉を返す事なんて出来なかった……

だから俺は、五代さんに精一杯の笑顔で返事を返して、その教えを貫く覚悟を、サムズアップで示す。

そして別れの言葉を交わし終えた空と五代さんは、ゆっくりと俺に背を向けながら、地下水道の入り口へと歩き出して行く。

世界を超える為の力を今の空が使うには、【闇】の残留エネルギーが僅かに残っている、昨日のあの場所まで行かなければならない。

その上何処まで制御出来るのかも分からない為、俺が見送る事が出来るのはここまでだ。

だから俺は……二人の姿が見える内に、最後にこの言葉を送る。

「行ってらっしゃい！！！」

何時かまた出会える時が来る事を信じて……その願いを込めた言葉が二人に届いたのか。

俺の耳には確かに大切な友達と、憧れの人物の【行って来ます】という声が聞こえた……

『行ってしまったな』

その後、程無くして地下水道に二人の姿が消えた頃に、メカ犬が静かに言葉を紡ぐ。

「……そうだな」

俺はメカ犬の言葉に頷きながら、地下水道の入り口から視線を上へと向ける。

其処には……何処までも澄み渡る青空が広がっていた。

完

# １００万ＰＶ突破記念作品　仮面ライダーシード＆仮面ライダークウガ　繋がる世界

どうも。

作者のＧ－３Ｘです。

気付けばこのクウガ編に突入したのが今年の六月の終わり頃……

丁度オーズの当時放送時で後藤さんが二代目バースに就任した頃ですね。

その間に様々な事がありましたが、何よりも五代さんのクウガを書けた事が私個人として何より尊い経験でした。

迷走を繰り返しながらの執筆でしたが、少しでも楽しんでいただけたのであれば、とても嬉しい限りです。

……さて、クウガ編が終わって、これからの執筆予定なのですが……

長らくお待たせ致しました。

予定よりも一ヶ月近く遅くなってしまいましたが、コラボ作品の方を最優先で執筆しようかと思います。

コラボは今のところ短編での執筆を予定しておりますので。

その次にアンケートを参考にした一周年記念の短編を挟んだら、久しぶりの本編を書いていこうかと思っております。

これからもどうか御一読していただけたのであれば嬉しいです。

それでは。

# 特別コラボ番外編　ドリームライダーズ！（前書き）

どうも。

作者のＧ－３Ｘです。

今回は前回の後書きで述べた通り、短編形式ではありますが、コラボ編をお送りしたいと思います。

蒼き星先生の仮面ライダーアクエリアス。

断空我先生の仮面ライダーファイズ。

善宗先生の仮面ライダー刃鬼。

鳴神ソラ先生の仮面ライダーキバ。

先生方のご協力によって生まれたコラボ短編、ご協力頂き本当にありがとうございます。

そして掲載予定が一ヶ月も過ぎてしまい申し訳ございませんでした。

それでは今回は、かなり本編とも違ってはいます番外なお話ですが、楽しんでいただけたら幸いです。

# 特別コラボ番外編　ドリームライダーズ！

それは……突然の出来事だった。

「私はこの世界を守護する者！テムジンと申します！伝説の英雄達よ！どうかその力で、この世界をお救い下さい！！！」

俺はさっきまで海鳴市でホルダーと戦っていた筈なのに……気が付いたらゲームに出て来る様な神殿内部にある祭壇の様な場所に居て、これまたゲームに出て来る様な白い羽衣を着た一人のきめ細かい白髪を腰の辺りまで伸ばした、美術展の絵画に描かれる様な端整な顔立ちをした女性が、自らをテムジンと名乗り、三度ゲームに有りがちな言葉を紡ぐ。

何故俺がこんな場所に居るのかという疑問に始まり、色々と気になる部分は多々あるが、取り敢えず俺が考えた事は、このテムジンと名乗る女性が言った【伝説の英雄達】という言葉だった。

現状を考えて、その伝説の英雄というのに、俺が含まれているのだろうという事は推測出来たが、問題はそれが【達】という複数の人物を示す言い方をしていた事である。

俺はまさかという思いから、改めて視線を周囲へ巡らせる。

そして俺は自分の視界に映った光景を見て、先程のテムジンという女性の言った言葉が、俺だけに向けられた訳ではなかった事を知った……

俺の周囲には、このテムジンという女性以外にも、四人の人物が存

在して居たのだ。

その内の二人の姿は、俺も良く知っている姿をしていた。

一人目は黒いボディーの上に、銀の装甲、四肢には赤いラインが走り、円形を縦に二分割した様な黄色い瞳が輝いている。

前世の俺がテレビ越しに見て憧れた仮面ライダーの一人……

仮面ライダーファイズが目の前に居たのだ。

これだけでもかなりの驚きではあるが、驚くべき事はそれだけではなかった。

ファイズに続いて、二人目に視線を向ける。

此方の人物も俺の良く知る姿をしていた……

全体的に赤と銀が強調された色彩に、コウモリを彷彿とさせるフォルムと、何処か気品を感じさせる佇まい。

ファイズと同じく、ライダーファンに平成ライダーの一人として数え挙げられている、仮面ライダーキバが居たのだ。

正直な話をすれば、ここまでの二人だけでも、展開的にはお腹一杯という気分なのだが、俺は残りの二人を見て更に度肝を抜かれた。

まずはその内の一人……三人目を挙げるが、一言で表すと鬼である。

見た目は明らかに、仮面ライダー響鬼シリーズの、鬼の一人っぽい

外見だ。

その姿も仮面ライダー響鬼の全身を黒く染めた等の配色の違いと、右の角が異常に伸びている以外は、殆ど差異が見受けられない。

だが不思議な事に、俺はその鬼に対して、似た姿は知っていても、前世で彼自身を見た記憶は何処にも無かった事だ。

まあ、俺自身も今まで見てきた仮面ライダーシリーズでは見た事も無い姿をしているし、俺が知らないだけで実際には居たのかもしれない。

何しろ響鬼シリーズは公式で姿が明かされている鬼以外にも、各地に多くの鬼が居たと設定上ではあるのだ。

テレビで放映された際に出演していなかった鬼が居たとしても、何ら不思議は無い。

そして俺は、彼の事実確認は後回しにするとして、四人目である最後の一人に視線を移す。

はっきり言えば、ディエンド？らしき人物が其処に居た。

性格に言えば、先程の鬼の人と同じ様に、似ている形状をしているというだけで、細部まで細かく見てみると、その姿に、多数の差異を発見する事が出来る。

まず全体の色なのだが、ディエンド特有のシアン色だった部分が、蒼くなっており、頭部の半分以上を占めていたバーコードを彷彿とさせるパーツがコンパクトな形状をしていて、その中からは、水色

の複眼が覗いていたのだ。

後は両腕部分の装甲が、若干分厚くなっているというところだろうか。

つまり現在この神殿の祭壇みたいな場所には、テムジンと名乗る一人の女性と俺を含めた、五人の仮面ライダーが居るという事になる。

恐らくテムジンと名乗る女性が先程言った【伝説の英雄達】というのは、俺達を示しているとみて間違い無いだろう。

「……その、伝説の英雄達ってどういう事なんですか？それにこの場所は一体……」

「ああ。その黒い奴の言う通りだ。テムジン……だったか？悪いが俺にも分かる様に説明してくれ」

俺がこの場に居る全員の観察を終えたところで、響鬼に似た鬼の人が、俺も疑問に思っていた質問をテムジンにすると、それに便乗してファイズが同意見だという意思を伝えた。

俺はここで、一つの違和感に気付く。

鬼の人の場合は、俺が元々知らないのもあるので、分からないのだが、先程のファイズの声は俺が知っているファイズ、乾巧の声とは別の、聞いた事の無い男性の声だったのだ。

「そうですね。刃鬼様とファイズ様の言う通り、まずは詳しい説明をしなければなりませんね」

俺がファイズの声について思案していると、テムジンが静かにそう告げる。

先程のテムジンの言葉から、刃鬼というのがあの鬼の人の名前なのだろう。

ただ分からない事は、ファイズを含め刃鬼という人も、テムジンに名前を呼ばれた事で、多少ながら動揺を覚えているのが見て取れた。

つまりテムジンがあの二人を一方的に知っているというだけで、あの二人はテムジンとは、何の面識も無い事が分かる。

俺が静かに視線を移すと、キバとディエンドっぽい人は、俺と同じ様に周囲を観察したり、テムジンとファイズ達のやり取りを聞いて、現状把握に努めている様だ。

訳の分からないこの現状……

二人に習い、現状把握に努めた方が無難だろうと考えた俺は、無言のままテムジンの説明に耳を傾ける事にした。

「まずはこの世界について説明したいと思います。この世界はレジェンドワールド。過去・現在・未来、全ての世界の伝説が永久に保管されながら、その全ての世界と完全に隔離された世界です」

「……全ての伝説が保管された世界？」

テムジンの言葉に、キバが静かに声を零す。

先程のファイズの声で、半ば予想はしていたのだが、やはりこのキ

バの声も、俺が知っているキバ……紅渡の声とは違っていた。

「はい。この世界は完全に世界の概念から切り離された世界……そして私はこのレジェンドワールドを、始まりから終焉まで守護する者……テムジンと申します」

キバの零した言葉に、テムジンは補足を入れた後に、もう一度自身の名前を俺達に名乗り会釈をしてから説明を再開する。

「この世界に、刃鬼様、ファイズ様、キバ様、アクエリアス様、シード様を召喚したのは私です」

覚悟はしていたが、テムジンは一方的に俺の名前も知っていた。

ここで初めて聞いたアクエリアスというのは、消去法で考えてディエンドっぽい人の名前なのだろうと、何処かずれた考えが、俺の脳裏を過ぎるが、その間にもテムジンの説明は進んでいく。

「貴方様方はこのレジェンドワールドにも記録されている、正義の力を司る英雄なのです。そして私が貴方様方をこの世界に呼び出した理由はただ一つ……貴方様方のお力で、どうかこの世界をお救い願いたいのです」

「英雄か……テムジンさん。この世界を救うって、一体この世界に何が起こっているんですか？」

テムジンの説明を聞き、今度はアクエリアスが一つの疑問を、俺達をこの場に呼び出した張本人であるテムジンに投げ掛ける。

「……この世界には、あらゆる伝説が保管されているのです。それ

は貴方様方の様な素晴らしい伝説から、禍々しい伝説も……今まではその全てを問題なく管理出来ていたのですが、ある世界の邪悪な伝説がその均衡を崩し、この世界に大きなバグを発生させました」

「大きなバグ？」

「はい。このまま放置すれば、この世界はおろか、本来は隔離されている筈の世界にも多大な影響を及ぼす可能性があります」

俺の呟きにテムジンは頷きながら、予想以上にスケールの大きな言葉を口にした。

「この世界を救ってくれって……あんたは俺達を呼び出して具体的に、何をさせたいんだ？あんたが言う大きなバグを修正しろとでも言うつもりか？」

其処でファイズが、テムジンに新たな質問をする。

「いいえ。バグの修正は私の仕事です。ただ……一つだけ問題があるのです」

「「「「「問題？」」」」」

ファイズの質問に答えるテムジンの言葉を聞き、初めてこの場に居る俺達五人の声が重なった。

「バグの修正自体には何も問題は無いのです。今までにも稀に起こっている事ですし……私自身何度もバグの修正は行って来ました。ですが今回に限っては予想外の現象が起こってしまったのです」

テムジンは其処まで言うと、一度俺達全員を見てから、話の続きを再開させる。

「今回はそのバグから、幾らかの伝説が擬似的な実体化を遂げてしまったのです。更にその伝説は負の象徴……話し合いに応じてはくれませんし、私はこの場所から動く事は出来ません。このままバグを修正しようとしても、私の力ではそのバグ自体に働き掛ける事は出来ても……其処から派生して擬似的とはいえ意思を持ってしまった彼らには、何も出来ないのです。ですから私は勝手な事と知りつつ、正義を持つ英雄である貴方様方を御呼びしたのです。どうか私に、この世界にお力を御貸し下さい……」

これでテムジンの説明は終わったのか、最後に言い終わると俺達にゆっくりと頭を下げた。

ここまでの説明で、まだ色々と釈然としない部分はあったが、それでも大体の事を理解理解した俺は、一つの決断を下した。

恐らくだが他の四人も、同じ事を考えて居る事だろう。

「……それで俺達は、何処に向かえば良いんだ？」

「助けを求められてるのに、放って置く訳にはいかないですからね」

「僕も力を貸しますよ！」

「人助けも鬼の仕事ですからね」

「まあ……そういう事です。だから頭を上げて下さい」

少しの間を置きファイズが口を開くと、続いてキバ、アクエリアス、刃鬼、そして俺の順番でテムジンに言葉を投げ掛けていく。

最後に俺の言葉で、下げていた頭を上げたテムジンの表情は、見た者を心から暖かくしてくれそうな明るい笑顔だった。

「ありがとうございます。この様な勝手なお願いを引き受けて頂き……それでは早速貴方様方を彼らの元へと転送致します！」

そう言うとテムジンは、両手を前に組み、呪文の様な言葉を口にする。

そのいきなりな展開に、流石に俺達五人は同時に待ったの声を掛けようとするがその声は間に合わず、俺の視界は眩い光の中に飲み込まれた。



「あの女……碌な説明も無しにやってくれたな」

「所謂……天然って奴ですかね？」

苛立ちを隠そうともしないファイズの震えた声に、俺は苦笑いを浮かべながら、現在の話題の矢面に立たされているテムジンにフォローを入れるが、内心では少しだけファイズの怒りにも共感していた。

「まあ、落ち着いて……今は僕達に出来る事をしましょう」

其処で更にアクエリアスが、俺のフォローに援護射撃の言葉を放ち、その隣でキバと刃鬼も頷いている。

「……それもそうだな。今はこいつらをどうにかした方が良さそうだ」

俺達四人の団結が実ったのか、ファイズは大きな溜息を一つ吐き出して、視線を前方へと向ける。

それに習い俺達も改めて、視線を前方へと向けた。

其処に広がるのは、数えるのも面倒な程の敵の行列だ。

ショッカーの戦闘員に始まり、歴代の仮面ライダーに出てきた怪人に、何故か俺が以前倒した筈のホルダーまで居たのである。

そして俺達が今居るこの場所が、やけに見覚えのある採掘場に思えるのは果たして偶然なのだろうか……

「彼女の話からすると、僕達はあれを全部倒せば良いって事か？」

「……多分そうだろうね」

刃鬼の言葉に、キバが肯定の言葉を返した。

その辺りの説明を飛ばして、こんな場所に転送されてしまった訳だが、キバの言う通りテムジンの口振りから考察して、その考え方で正解だと俺も思う。

「それじゃあ……皆で大暴れといきますか！」

「「「「応！！！」」」」

気を取り直して、偶然にも中央に居た俺がそう叫ぶと、他の四人も気合の入った返事を返す。

そしてそれを合図にして、俺達五人の仮面ライダーは、敵陣に向けて駆け出して、各々で戦闘を開始する。

ファイズはファイズベルトのツールを上手く使いながら立ち回り、刃鬼も両手に持った音撃棒で、強力な打撃を敵に叩き込んで行く。

更に其処から少し離れた位置では、キバが戦っているのだが、何やら俺が見たことも無い姿になって戦っていた……

フォームチェンジで色の変わる部分が、白くなっていると思うと、背中には黒い翼が生えており、槍状の武器を片手に敵を上空からの急降下で薙ぎ払っているのだ。

そして俺の付近では、アクエリアスが、ほぼディエンドと似た様な戦闘スタイルで戦っている。

カメンライドで、擬似ライダーであろう、グランドフォームのアギ

トと、ライダーフォームのカブトが呼び出されて近接攻撃を行い、アクエリアスがディエンドライバーに良く似た銃で援護射撃を繰り返す。

他の四人のライダーの奮闘を見て、俺も負けていられないという思いから、襲い掛かるショッカー戦闘員や怪人に、拳や蹴りをお見舞いしていく。

テムジンが言っていた通り、彼らが本物ではなくて擬似的な存在だからなのか、攻撃を加えるとほぼ一撃で光の粒子となって、跡形も無く消え去ってしまうので、敵の数は瞬く間に減り、残すは怪人一体のみとなった。

「お前で最後だ！観念するんだな！」

最後に残った怪人、蜘蛛男に飛び込んで行ったのはファイズだった。

この一撃が決まればこの戦いは終わる。

俺を含めたこの場の五人は、恐らく同じ事を考えていたと思うが、ここで予想外の出来事が起こった。

ファイズの拳は見事に蜘蛛男の顔面に命中して、光の粒子へと返したのだが、その直後に異常なまでに大きな地震が発生したのである。

突如の出来事だった為に、俺達はバランスを崩し踏鞴を踏むのだが、次の瞬間に地面が隆起したかと思うと巨大な何かが地面の下から飛び出し、大きな影が俺達を包む。

何事かと思い、上空を見上げて俺は驚愕した。

頭部に巨大な角を備え、腕が四本有し、大蛇のような下半身を持つ巨大な白い怪物。

奴は間違いない……

「あれはフォーティーン……」

その姿を見た俺は、思わず奴の名を呟いてしまう。

仮面ライダーブレイドの映画、ＭＩＳＳＩＮＧＡＣＥに出てきた最大の敵が、この巨大な怪物フォーティーンである。

突如として現れたフォーティーンは、すぐさま不意打ち気味に大蛇の様な下半身で大地を薙ぎ払い、俺達に先制攻撃を仕掛けて来た。

「うわ！？」

「くっ！？」

「がっ！？」

「くそ！？」

「げっ！？」

俺達五人はその不意打ちに反応する前に、その強大で圧倒的なパワーを誇るフォーティーンの一撃によって、吹き飛ばされてしまう。

「大丈夫か皆！？」

多大なダメージを負いながら、立ち上がると俺達に呼び掛けるファイズの声が聞こえて来た。

「僕は……大丈夫です」

「普段から鍛えてるからこれ位は……何とも無いですよ」

「でもあの巨体は、正直厄介ですね」

続いてアクエリアスが返事を返し、その後に刃鬼も自身の無事を伝えると、最後にキバがフォーティーンを見上げながら苦言を述べる。

「ここは……俺達五人で力を合わせて戦いましょう」

最後に俺がそう告げると、他の四人も異論は無い様で、一斉に首を縦に振った。

「次が来る！！！」

其処でフォーティーンが新たな動きを見せ、その動きに逸早く反応したアクエリアスが、俺達に呼び掛ける。

「一気に行くぞ皆！！！」

フォーティーンの尾による、攻撃の第二波が来ると同時にファイズが叫ぶ。

俺達はその叫びを合図にして、高く跳躍して、各自フォーティーンの身体に乗り攻撃を加えていく。

攻撃を加えた部分が光の粒子となり消えていくが、その巨体を全て消し去るには、俺達の攻撃ではまだまだ時間が掛かりそうである。

その間にもフォーティーンは、俺達を振り解こうと暴れるが俺達は決して離れる事無く、攻撃を繰り返す。

そしてフォーティーンが形振り構わず、暴れ始めたと同時に、俺達五人はフォーティーンの身体を足場に更なる跳躍をして、五人横並びにフォーティーンの頭上を捉える。

ここでやるべき事はただ一つ。

最大級の攻撃を叩き込む事だ！

「こいつで決めるぜ」

俺は右足を前に突き出してフ、ォーティーン目掛けて急降下していく。

それは他の四人も同様で、横並びに俺達五人の仮面ライダーが必殺の一撃を放つ。

「「「「「うをおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！！！！！！！」」」」」

俺達五人の叫びと共に放たれたキックが、フォーティーンに命中し身体を貫き、その身体を完全に光へと返す。

無事に地面に降り立った俺達が、その溢れんばかりの光に包まれていたその時、聞き覚えのある女性の声が聞こえて来た。

「ありがとうございます。伝説の英雄達……貴方様方のおかげで、このレジェンドワールドは救われました。本当にありがとうございます……」

テムジンの声が、俺の脳内に直接響く様な形で聞こえて来たその直後、俺を含めた五人の仮面ライダーの体が温かな光に包まれたかと思うと、少しずつその身体が透けてきている事に気付く。

「……良く分からないが、ここでお別れみたいだな」

最初にそう口にしたのはファイズだった。

「少しの間だけでしたけど、皆さんと一緒に戦えて嬉しかったです」

続いて刃鬼が告げる。

「また会える時が来る事を……心から願ってます」

その次にキバが、俺達に柔らかな口調で話す。

「きっと会えますよ。そしたら……今度はゆっくりお話でもしましょう」

其処へアクエリアスが返答を返し……

「俺達は仮面ライダーです。また誰かが助けを求めたなら、どんなに離れていても……」

最後に俺が皆に離し掛けようとしたが、その言葉を最後まで言い終える事が出来たかも分からないままに、俺の意識は光の中に溶けていった……

『マスターそろそろ夕飯の時間だぞ』

聞き覚えのある声を聞き、俺は意識を急激に浮上させると同時に、目を開き辺りを見回す。

其処に広がる光景は、採掘場でも無ければ神殿でもない。

見慣れた俺の部屋であり、窓の外には夕焼け空が広がっており、俺の隣には先程の声の主でもあるメカ犬が首を傾げながら俺を見ていた。

『疲れているのは分かるが、机で寝ていると風を引くぞマスター。それに母殿の伝言でそろそろ夕飯の時間だそうだ。急いでリビングに来ないとおかずが一品減るかもしれないぞ？』

寝起きの俺にそう言うと、メカ犬は、机から降りて、一足早く先に行くと行って部屋を出て行ってしまった。

その後姿を見送りながら、俺は思った。

良く覚えていないのだが、何か大切な事を言おうとしていた気がする。

例えそれが、二度と見る事が無い夢の話だったとしても……

「……また会えるさ」

俺の口から、何故かそんな言葉が飛び出した。

理由は分からなかったが、何故かその言葉が自然と俺の脳裏に浮かび上がっており、気付いたら口にしていたのである。

だが不思議とこの言葉を口にした後、俺の心の中で先程から痞えていた小さな靄が晴れた気がした。

「……さてと！本当におかずを一品減らされでもしたら堪ったもんじゃないからな。俺も急いでリビングに行くか！」

俺は誰に告げる訳でもなく、そう言ってから、メカ犬の後を追って部屋を出てリビングへと向かった。

完?

## 特別コラボ番外編　ドリームライダーズ！（後書き）

次回は一周年記念作の特別話を書いて、その次からお話を本編に戻すよ予定となっております。

それでは。

# 一周年突破特別話　俺がワタシでワタシが俺で！？【前編】（前書き）

少し遅れ気味となっていますが、一周年突破特別話の前編をここにお送りしたいと思います。

今回のお話で何が特別かと言いますと、以前に皆様に参加していただいたアンケートの結果を元に企画させていただきました。

その配分を出来るだけ詰め込もうとしたら、こんな事になってしまいました……

中には得票数の少なさから、今回は反映出来なかった部分も多々ありますが何卒ご了承くださいませ。

それでは楽しんでいただけたら幸いです。

# 一周年突破特別話　俺がワタシでワタシが俺で！？【前編】

『良いか？絶対になのはちゃん達にばれるんじゃないぞ！』

「そう何度も言わなくても分かっている。マスターは心配性だな」

早朝自宅の玄関で俺の忠告に、メカ犬が溜息混じりの返事を返す。

正直言って激しく不安だ。

別にメカ犬を信じていない訳ではないのだが、それでも不安は尽きない。

『俺が調べてる間に、変な騒動だけは起こすなよ……』

「うむ」

俺の再三の注意に対して、メカ犬は何時も通りの、きっぱりとした返答を返す。

いや……確かに何時も通りではあるが、そのビジュアルは全く違っていた。

見た目だけを言うのであれば、無表情な俺だ……

無表情な俺が、俺の目の前で普段通りのメカ犬的な反応を示している。

ならば俺は誰だと言うのか？

俺は間違い無く【板橋純】本人だ。

ただし俺の今の格好は、全身がメタリックシルバーに輝くフルメタル犬の姿……

ここまで言えば既に殆どの人が感付いていると思われるが、念の為に説明しておこう。

俺はメカ犬の姿をしているが板橋純であり、それとは逆に俺の目の前に居る板橋純の中身はメカ犬なのだ。

つまり今の俺達はお互いの心と身体が、入れ替わってしまった状態なのである。

何を言っているんだと思われる内容だが、これが真実なのだから仕方が無い。

それにこんな事が自然に起こる筈がなく、こうなってしまったのには、それなりの理由が存在する。

『兎に角分かったな!!!』

「しつこいぞマスター……それにもうすぐなのは嬢を起こしに行かなければならない時間だろう?」

『うっ!?』

「マスターの日常生活はワタシが受け持つ。だからマスターの方もワタシの代わりに調査を頼むぞ」

メカ犬はそう述べると、行って来ると言って、足早に玄関を出て行ってしまった。

『あ！待てよメカ犬！？』

まだ言い終わっていない事があったので、俺は声を掛けるのだが、メカ犬が戻ってくる事は無かった……

『不安だ……何故か分からないけど……激しく不安だ……』

誰も居なくなった玄関で、俺は一人心中を呟いた。

そして俺は一人、昨日の夜の出来事を思い出す。

『もうすぐ到着するぞマスター！』

「分かってる！」

既にシードに変身している為ベルトの形態となっているメカ犬の声に返事を返しながら、俺は夜の海鳴市の市街地を、チェイサーさんに跨りながら疾走する。

先程メカ犬が言った通り、程なくして市街地の方から、連続的な爆発音と市民の悲鳴が俺の耳に届く。

その先に俺が視線を向けると、異形の怪物が市街地を無差別に破壊している姿が飛び込んで来る。

夜のライトに照らされた異形の姿は、一言で表すのは難しい姿をしていた。

最も分かりやすい言い方をするとすれば、コンピューター機器の集合体といったところだろうか。

身体全体の形状や大きさは成人男性と大差無いのだが、その全身は鋼に覆われて四肢には大量のコードが巻き付いており、そのコードが四肢から延びて市内を破壊していたのだ。

その異形の怪物は、間違い無くホルダーである。

逃げて行く市民の皆さんとは逆に、俺を乗せたチェイサーさんが、ホルダーに高速で突っ込む。

「ぐべらっちょ！？」

チェイサーさんのバイクタックルを受けて、ホルダーは断末魔を上げながら吹き飛び、地面を転がっていく。

リミットオフで更にその速度を増しているチェイサーさんの、バイクタックルが決まったのだ。

見て分かる程に、相当のダメージを喰らった筈である。

『行くぞマスター！』

「ああ！」

『頑張ってねんマスター』

ホルダーを吹き飛ばした直後、俺はメカ犬の掛け声に返答しつつチェイサーさんから飛び降りて、チェイサーさんの声援を背中に受けながら、地面に転がっているホルダーの近くまで駆け寄った。

「うう……一体誰がこんな事を……お、お前は仮面ライダー！？」

よろけながら立ち上がったホルダーが、俺に気付き驚きの声を上げる。

「悪さは其処までにするんだな！」

「ふん！僕の邪魔をしないで貰おうか？僕はもっと……もっと壊さないと気が済まないんだ！！！」

既に話が通じる状況では無いのか、ホルダーは俺に敵意を剥き出しにすると、四肢に絡み付いていたコードを伸ばし、鞭の様に振るいながら攻撃を仕掛けて来た。

『来るぞマスター！』

「ちいっ！？」

ホルダーが攻撃を放つと同時に、メカ犬が注意を促す叫びを上げる。

俺はメカ犬の声に返事を返す間も無く、転がりながらその攻撃を回避していく。

「このままじゃ近付けないぞ！？」

『接近戦が駄目なら遠距離から仕掛けるぞ。サーチフォルムだマスター！』

「ＯＫ！」

ホルダーの攻撃を避けながら、俺とメカ犬はすぐさま打開策を模索して、決定後すぐさま実行に移す。

俺は一旦バックステップでホルダーと距離を取り、コードの射程距離外に出てからベルトの右側をスライドさせて青いボタンを押した。

『サーチフォルム』

ベルトから音声が鳴り響くと同時に、メタルブラックのボディーが、鮮やかなスカイブルーへと変化する。

『サーチバレット』

更に同じ場所に設けられている黄色いボタンを押す事により、ベルトから光が発生して、その光がサーチフォルムの専用武器であるサ

ーチバレットを生成する。

「これでも喰らえ！」

俺は生成されたサーチバレットを握り、ホルダーが四肢から伸ばしているコードに狙いを定めて引き金を引く。

引き金を引いた瞬間にサーチバレットの銃口から、次々と光弾が射出されて、その光弾がホルダーのコードにぶつかると小規模な爆発を巻き起こす。

「痛い！？痛いよ！？」

連続的な爆発によって巻きついていたコードを失ったホルダーが、爆発によって生じた煙を両腕に纏いながら苦痛を訴える。

『今だマスター！』

「良し！」

今がチャンスと合図を送ってくるメカ犬に、頷きながら俺はもう一度ベルトの右側をスライドさせて、黒いボタンを押してからホルダー目掛けて一気に駆け出した。

『ベーシックフォルム』

俺の身体は走りながらも再びメタルブラックに染まり、今も慌てふためくホルダーに、拳と蹴りの乱打を浴びせていく。

「おりゃあああああ！」

そしてホルダーが怯んだところに叫びながら俺はミドルキックを繰り出し、その攻撃が見事に腹に命中したホルダーは後方へと吹き飛ぶ。

吹き飛ばされて地面を転がるホルダーを見ながら、俺がこのまま一気に勝負に出ようとして、ベルトのタッチノートに手を伸ばしたその時、先程まで地面を転がっていたホルダーが予想外の行動に出た。

「このまま終われるかあああああああああああああ！！！」

ホルダーは叫ぶと転んだ状態のまま、足のコードを伸ばして俺に攻撃してきたのである。

「『な！？』」

流石に足のコードも伸びてくると思っていなかった俺とメカ犬が同時に声を上げた直後、ホルダーのコードが俺の身体に巻きついて自由を奪う。

「油断したね！仮面ライダーあああああこれでも喰らえええええええ！！！！」

巻きついたコードをどうにかして引き剥がそうともがいている俺に、ホルダーが叫ぶとホルダーの全身が光り輝き、その光りがコード通じて俺の全身をも包んでいく。

「これは！？」

『不味い！恐らくこれはホルダーの能力だ！発動する前に何とか振

り解けマスター！』

メカ犬に言われるまでも無く、この光を浴び続けるのは不味いと、俺の勘が警報を鳴らしている。

俺は全力を振り絞りホルダーのコードを引き千切ってから、その引き千切ったコードの先端を掴んで、ジャイアントスイングの要領で振り回す。

「こんのおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！」

そしてそのまま俺は、全力でホルダーを投げ飛ばす。

「ぎゃあああああああ！？」

投げ飛ばされたホルダーは、悲鳴を上げながら三度地面に転がっていく。

何とか窮地を脱した俺は、改めてホルダーに止めを刺す為にタッチノートに手を伸ばそうとするのだが、ホルダーの放った光により輝いていた俺の身体がその光を弱めていくのに比例して、身体の動きに何処か違和感を覚える。

「……くそ……覚えてろ仮面ライダー！」

急な不調に俺が戸惑っている間に、立ち上がったホルダーは捨て台詞を吐くと、この場から立ち去ってしまった。

俺はホルダーを追いかける余裕も無く、何とかタッチノートをベル

トから引き抜いて、変身を解除する事に成功する。

「……どうしたのだマスター？」

『いや……何だか身体が急に動かせなくなってさ。これがホルダーの能力だったのかな？変身を解いたら自由に動ける様になったし……あ……れ？』

ホルダーを逃がしてしまったのは悔やまれるが、変身を解いた事で身体が自由に動く事を確認して安堵したのも、束の間の出来事だった。

俺の耳に届いたメカ犬の声が普段と違って聞こえた事……

そしてそれは俺の声にも言える上に、今更ながら寝転んでいる訳でもないのに、普段よりもかなり低い位置にある目線……

恐る恐る俺は、メカ犬の声が聞こえた向きに振り向き……

その光景を目の前に、俺は絶叫した。

『はあ～』

昨夜の出来事を思い出しながら、俺は溜息を吐きつつ海鳴市の街道を歩いていた。

『身体と心が入れ替わるなんて、何処の漫画の話だよ……』

溜息に続いて愚痴を零すが、そんな事をしたところで事態が進展しない事は、充分に分かっている。

だがそうだと分かった上で尚、愚痴を零さずにはいられない心境という事も、やはり存在すると俺は思う。

俺にとっては、まさに今この時がそうだった。

この現象の原因は十中八九、ホルダーの仕業とみて間違い無いだろう。

俺とメカ犬が入れ替わってしまう直前に浴びてしまった光なんて、怪しさ超特化大バーゲンお得セールと言っても過言では無い筈だ。

メカ犬が言うには、この現象がホルダーのせいであるならば、そのホルダーを倒すかその能力をホルダー自身に無効化して貰う様に頼む以外手段は無いらしい。

こんな状況でまともに戦えるか分からないが、どちらにしても俺達は昨日戦ったホルダーを見つけるしか、解決策は思いつかないのが現状だ。

更に最悪な事に、今日は学校がある……

普通に考えれば、現在は俺になっているメカ犬を休ませるのが定石なのだが、それは我が家にとって無理な話だ。

何故ならば俺の家には、あの世話好きな母さんが居る。

下手に仮病を使ったら、ただの風邪だから大丈夫だと発言しても、速攻で病院に連れて行かれるだろう。

そうすれば仮病は一発でばれてしまうし、運良く連れて行かれなかったとしても、一日中看病という名の監視下に置かれる事受け合いだ。

もしもそれが現実となってしまったら、ホルダーの所在を掴んでも何もする事が出来ない。

幸いにもこの海鳴市には俺以外にもう一人。長谷川さんこと、仮面ライダーＥ２が居るが今回のホルダーの能力が特殊すぎる事を考えると、任せきりには出来そうに無い。

下手をすれば、次の犠牲者になってしまうかも知れないのだ。

それだけは避けなければ、いけないだろう。

一応は昨日の帰りに、コンビニで今回のホルダーの情報を、ファックスで海鳴警察署に送っておいたが、悪戯と見なされて、長谷川さんと恵美さんの目に触れないという可能性も低くはない。

そう考えるとやはり、俺達の手でホルダーを見つけるのに越した事は無のだ。

せめてホルダーの正体を掴む事が出来れば、戦えなかったとしても、それだけで俺達は大分優位に立てる。

『さてと……』

考え事をしている間に、目的の場所へと辿り着いた俺は、その場で立ち止まり辺りを見回す。

街道から裏道に入り少し進んだ先に、ポツンと穴が開いた様に存在している空き地。

本来はメカ犬が、普段から情報を求めて立ち寄る場所ではあるが、今はメカ犬が俺の代わりに学校に行っているので、俺が代理としてやって来たのだ。

ちなみに俺は今、背中にビーフジャーキーを背負っている。

ここまで言えば、俺が何をしにここに来たのか、気付いた人も多い事だろう。

「こんなに朝早くに来るとは珍しいな。メカの」

辺りを見回していた俺に、正確に言えばメカ犬に何者かが声を掛けてきた。

その声はやけに渋く、一番近い例えを挙げるとすれば、世界一ダンボールを上手く使いこなす代表的な爬虫類のコードネームを持つあ

の方の声に良く似ている。

俺はその声の持ち主を見なくても、直接会った事がある筈だと直感した。

勿論この様な渋い声を聞くのは初めてではあったが、それは今の俺がメカ犬の身体を使っている事に起因する。

メカ犬は人間の言語だけでなく、あらゆる生き物の言葉を理解出来るという、やけに高性能な翻訳能力を有している為だ。

つまりこの声はメカ犬の耳が普段から聞いている声であり、人間である俺が聞いた場合には、人間以外……他の動物の鳴き声として聞こえて来るに違いない。

俺は覚悟を決めて、声のした方向に振り返る。

其処に居たのは、一匹の獣。

鋭い牙と鋭い爪を持つ以下略……

まあ、平たく言えば、チワワで情報屋なジャックである。

というか普段の俺から見たら、ジャックは可愛らしいチワワであり、ラブリーに鳴く小動物な筈なのに、メカ犬の視点から見ると、こんなにも渋いオッサンキャラだったのかという事に、俺は動揺を隠す事が出来ない。

「……何てな。あんたはメカのじゃ無くて、主人の方だろ」

ジャックと対面してから、俺が数秒間程硬直した後、チワワがニヒルな笑いを浮かべた……様な気がする。

いや、多分……確実にしたのであろう。

『わ、分かるんですか？』

俺は恐る恐る、ジャックに確認を取ってみる。

「おいおい……俺は情報屋だぜ。この街で俺が知らねえ事の方が珍しい位さ。それにメカのと、その主人って言えば、この辺りの奴らには結構有名な話だ。人気者は辛いな」

『奴らって……』

ジャックの言う奴らとは、確実に人間の事では無いだろう。

メカ犬の普段の素行が激しく気になるが、それに加えて俺までこの海鳴市周辺のアニマル達に知られているというのは、どういう了見だ！？

他にも突っ込みどころ満載ではあるが、俺はここにアニマル漫才の突っ込みをしに来た訳では断じて無い。

『えっと、仕事の依頼をしに来たんですが……』

「ああ……変に敬語で話さなくても普段の話し方で構わないぜ。あんたはメカのの主人だし、今までもそうだっただろ？」

俺の言葉を遮り、ジャックが再びニヒルな笑いと共に、キザな台詞

を吐き出した。

正直言って普段はチワワが可愛く鳴いてる様にしか見えないのに、今はやけに渋さが際立つ応対をされているという凄まじきギャップの為に、どの様に接して良いのか決め兼ねていたのだが、本人がそれで良いと言っているのであれば、そうした方が良いのだろう。

『それじゃあ改めて……実はジャックに仕事を依頼したいんだ』

「大体察しはついてるさ……昨日のホルダーの情報が欲しいんだろ？」

改めて言い直した俺の言葉に被せる様にして、ジャックが俺の依頼内容を言い当てる。

『話が早くて助かる』

「メカのはここの常連だからな。親友のよしみだ……報酬は後払いで先に情報を教えてやるよ」

ジャックはそう言うと、俺の返事を待たずに語り始めた。

「昨日の晩に主人とメカのが戦ったホルダーだがな……私立聖祥大附属小学校の関係者の可能性が極めて高い」

『え！？』

俺はジャックからもたらされた予想外の情報に、驚愕の声を上げる。

「何でも戦いの後に、そのホルダーが小学校の中に入って行くのを

見た奴が居てな……そいつは不振に思って、ほんの少し前まで、ずっと学校から出て来る奴を見張ってたんだが、結局誰も出てこなかったらしい。ただ一時的な潜伏先にあの小学校を選んだとしても、今のこの時間には、多くの人間が学校に集まっている。そんな奴が何時までも見つからずに居ると考えるよりは、そのホルダーの正体が、学校関係者だと考えた方がしっくり来るからな」

『ほ、本当にプロの情報屋みたいだ……』

今までも何度かジャックの情報には助けられているが、メカ犬を間に挟んだ通訳ではなく、その内容を直接聞くと、改めてジャックがプロの情報屋だという事を思い知ってしまう。

「そして昨日の晩から学校に残っているのは、宿直室に泊まっていた木村教諭と、警備員が二名だ」

『つまりこの三人の中に、ホルダーが居るかもしれないって訳か……』

「警備員の名前までは確認していないが、シフトの終わりは午前10時になっていた筈だ。確認するならば急いだ方が良いぞ？もう既に9時を回っている」

『それだけ絞り込めれば、後はこっちで何とかしてみる。本当にありがとうな』

「俺は報酬分の仕事をしたまでだ……礼を言われる筋合いじゃないさ」

ジャックから貴重な情報を得た俺が感謝の言葉を述べると、またし

てもチワワによるニヒルな微笑みという、面白ペット動画大賞を受賞して、賞金に三万円は貰えそうな映像が俺の視界に飛び込んで来た。

「ねえママ！あそこでいぬさんたちがおはなししてるよ？」

「そうね。どんなお話をしてるのかしら」

俺とジャックの会話が一段落した直後、空き地の目の前を、幼い子供を連れた、奥さんが通り過ぎた……

どうやら実際の俺とジャックの会話とは裏腹に、まだ幼稚園に通う年齢にも至っていないと思われる幼子の目には、子犬とオモチャが仲良くお話しているという夢のある光景に映っていたのだろう。

その幼子の母親と思われる、奥さんオーラを撒き散らす女性も、微笑ましそうに笑顔を幼子に向けている。

俺は話が通じていないと分かっていながらも、その純粋無垢な眼差しを向けられて、微動だにする事も出来なかった。

それは俺の正面に居るやけに渋いチワワも同じ様で、短い尻尾を硬直させて小刻みに全身を震わせている。

そしてあの幸せ家族オーラを撒き散らす親子が、空き地の前を通り過ぎた後、やっと身体の自由を取り戻した俺は、報酬のビーフジャーキーをジャックに渡してから急いで私立聖祥大附属小学校……今もメカ犬が俺の代わりを過ごし、ホルダーが潜伏しているかも知れない場所を目指して、全力で駆け出した。

## 一周年突破特別話　俺がワタシでワタシが俺で！？【前編】（後書き）

今回の前編で、自分の意見が反映されていないと思った方の意見は、もしかしたら後編で反映されているかもしれません。

確実とは言えませんが……

それでは。

# 一周年突破特別話　俺がワタシでワタシが俺で！？【後編】（前書き）

少し間を置いてしまいましたが後編を更新致します。

今回も楽しんでいただけたら幸いです。

# 一周年突破特別話　俺がワタシでワタシが俺で！？【後編】

『さてと……まずは何処から調べるかな？』

現在の時間にして午前９時３０分を回った頃、俺は授業の為に人気が殆ど無い学校の廊下を歩いていた。

『取り敢えずはジャックの言っていた警備員の二人を探してみるか……１０時になったら帰るみたいだし、調べるなら今しかないしな』

俺は一人廊下を歩きながら、今後の調査スケジュールを呟く。

まだその警備員がホルダーと決まった訳ではないが、ジャックの情報が正しければ、疑わしい事もまた事実である。

仮にホルダーの正体が二人の警備員のどちらかだったとしたら、このまま学校外に出してしまえば、昨日と同じ事が繰り返されてしまうかもしれない。

『この時間だとそろそろ仕事の時間も終わるだろうし……警備員さん達が今居る場所は、学校関係者が利用しているロッカールームか？』

取り敢えず最初の調査場所を決めた俺は、ロッカールームを目指して歩き出す。

外部から常勤で来る警備員さん達が使用しているロッカールームは、教職員の人達も利用している場所なので、職員室の隣に位置している。

そして職員室は校内の出入り口から一番奥になるので、隣のロッカールームを目指す為には、必ず通らなければならない廊下があるのだが、その廊下の途中には俺やなのはちゃん達、一年生のクラスが設置されていた。

つまり俺がこの廊下を歩けば、必然的にそのクラスの眼前を通る事になる。

今は授業中な筈なので、ロッカールームを調べ終わった後に、メカ犬と一旦合流しようかと俺は考えながら、そのまま通り過ぎようとした……その時である。

「じゃあ次の問題を……板橋君。解いてくれるかしら？」

我らが担任、山中先生（素敵な彼氏を絶賛募集中らしい）の声が教室の中から聞こえて来た。

当然だが現在廊下を歩いている俺が呼ばれた訳ではなく、この教室で現在は授業を受けているであろう、俺の姿をしたメカ犬が呼ばれた訳だが……

『……少しだけ……様子を見て行くか』

別にメカ犬を疑っている訳ではないし、奴のナチュラルトーク術ならば、多少の違和感ぐらいは誤魔化してしまいそうではあるが、気になってしまうのはしょうがない事だろう。

俺は自分自身の意思を、半ば無理なこじ付けで納得させて、教室の中を覗きこんだ。

「うむ……はい」

俺の姿をしたメカ犬が山中先生に返事返すと、机から立ち上がり教壇前へと歩いていく。

教壇の後ろに設置された大きな黒板には、小学校低学年で習う算数の公式が書かれていた。

そう言えば今日の時間割でこの時間は算数だったという事を思い出しながら、俺はチョークを持って黒板に公式の答えを記入していくメカ犬の姿を見て安堵する。

これが国語だったとしたら、何かおかしな発言をしてしまうかもしれないという危険性があったが、算数ならば計算をして答えを出すだけで、余計な事を言わなくて済む……

メカ犬もその辺りを弁えてくれている様で、独自の方程式を延々と書き続けるといった、ベタな事はせずに、素直に公式の答えだけを書き記した。

「うん。正解よ板橋君。良く出来ました」

山中先生がメカ犬の書いた答えを確認した後に、その答えが正解だという事を誉めると、クラスメイト達からも軽い拍手が送られる。

本当にこのクラス……というよりもこの学校の生徒達は、基本的に良い子達ばかりだなと、客観的な視点から見て改めて思う。

「それじゃあ席に戻って良いですよ」

「うむ……はい」

若干ながら不安が残るものの、先程の様子を見て暫くは大丈夫だと認識した俺は、この場をメカ犬に任せる事にして、教室から離れてロッカールームに向かう事にした。

……それが大きな間違いである事に俺が気付いたのは、今の時間から数十分後の話である。

『結局無駄足だったか……』

ロッカールームでの調査を終えた俺は、学校内の廊下を歩きながら溜息を吐き出していた。

調査の結果、警備員は完全に白……つまりどちらもホルダーでは無かったのである。

まあ……無駄足と言ってしまったが、実際には可能性の内の二つの

事実確認が出来たので、ここから先の調べる範囲を狭める事は出来るだろう。

『警備員の二人がホルダーじゃないとしたら……今のところその可能性が一番高いのは、ジャックが言っていたも三人目の木村先生か？』

木村先生は俺やなのはちゃん達の担任である山中先生と同じ、この私立聖祥大附属小学校の教員であり、俺達の学年の二つ上、三年生のクラスの担任を受け持っている人だ。

受け持つ学年は本来違っているが、学年混同した学内行事などで、良く見かけるので顔と名前だけは俺も覚えていた。

基本的に物静かな印象の男性だが、流行のゲーム一般が得意というのはこの学校では中々有名な様で、生徒の人気も高い方だった筈である。

『それじゃあ次は木村先生を調べて……』

次の調べる対象を木村先生に決めたその瞬間……学校全体にチャイムの音が鳴り響いた。

『不味い！このチャイムは、休み時間を知らせる奴か！？』

チャイムが鳴った直後に、周囲の教室が一斉にざわめく。

恐らく今は何処の教室でも、先生が授業を終える号令を掛けているに違いない。

このまま休み時間に突入して、多くの教師や生徒達が廊下に出てきてメカ犬の姿をした俺を見られる様な事態となれば、これ以上の調査がかなり難しくなるだろう。

だからと言って、現在俺が居る廊下の周囲には、隠れる場所も無ければ、誰かが廊下に出てくる前に、外に出る為の出入り口すらない。

そしてどうするべきか、必死に考えている間にも、時間は無常に過ぎ去っていき、とある教室の扉が開く。

俺はその一瞬で、大きな賭けに出る。

「あら？今何か足元を通り過ぎた様な……気のせいよね」

『た……助かった』

扉を閉めて廊下へと歩き去っていく足音を聞きながら、俺は賭けに勝った事を実感しつつ、思わず呟いてしまった。

「こんなところで何してるのメー君？」

目の前のなのはちゃんに、疑問の声を投げ掛けられながらという、状況に陥りつつではあるが……

俺が咄嗟に取った行動とは、目の前の教室の扉が開いた瞬間に、教室に飛び込むというかなり無茶な戦法だった。

この時間帯の学校で、教職員に見つかれば即刻アウトだが、生徒だけならば話しを聞いてくれれば、場合によっては騒ぎになる事も無いと咄嗟に考えての行動だったのである。

そして最初の賭けに俺は勝ったのだ。

飛び込んだ教室が、偶然にも俺達のクラスだとは思わなかったが、俺とすれ違う様に教室を出て行った山中先生は、足元を走り抜けた俺の存在に気付く事無く、廊下へと出て行ってくれた。

そして問題はここからだ……

俺は第二の賭けに挑まなくてはならない。

「どうしたの？なのはちゃん」

なのはちゃんがメカ犬な俺を発見して、首を傾げているところに逸早く気付いたのか、すずかちゃんが此方へと近付いて来る。

「どうしたのじゃ？」

「あ！メー君じゃない！！！」

それに続きエミリーちゃんが近寄って来たかと思うと、その隣を歩いていたアリサちゃんの目が、俺……つまりメカ犬の姿を捉えると同時に色めき立つ。

『えっと……うむ。これはだな……』

既に無類の犬好き少女なアリサちゃんに抱きかかえられて、頭部を撫で回されながら、俺はメカ犬の振りをしつつ何か良い口実はないかと思考を最大限に巡らせる。

「少し良いだろうか？」

俺がなのはちゃん達に囲まれて、その様子を他のクラスメイト達が何事かと遠巻きに見ていたその中で、一人の声が上がった。

その声の主にクラスの全員が視線を向ける。

視線の先に居た声の主……それは俺の姿をしたメカ犬だった。

「マスター……メカ犬はワタ……俺の忘れ物を届けてくれただけなんだ。受け取ったらすぐに帰ってもらうよ」

メカ犬の発言には苦しい部分もあったが、幸いな事にその言葉を殆どのクラスメイト達は信じてくれたらしく、興味を失った様に、視線の集中砲火が解除されて、其々の日常会話から発せられるざわめきがこの教室内を満たす。

だがその言葉で納得したのは、遠巻きから見ていたクラスメイト達だけであり、メカ犬な姿の俺を囲むなのはちゃん達は、今も疑いの眼差しを向け続けている。

「忘れ物って……メー君は何も持ってないと思うんだけど？」

「そうだね」

アリサちゃんが抱え上げているメカ犬姿の俺を観察したなのはちゃんがそう呟くと、同じ様に隣で観察していたすずかちゃんが相槌を打ち、エミリーちゃんとアリサちゃんも同意見だとばかりに首を縦に振る。

流石にこれ以上は誤魔化し切れないと、俺が思ったその時……メカ犬が新たなアクションを起こす。

「なのはちゃん……俺の言う事が信用出来ないの？」

メカ犬はなのはちゃんの目の前にまで素早く移動すると、有無を言わさずなのはちゃんを腰から抱き寄せて、自らの右手をなのはちゃんの顎に宛がい、目線を固定させると、確実にお互いの吐息が掛かるであろう、超至近距離で見詰め合いながら呟いた。

「え、え、えっと……そうだね……純君がそう言うんだもんね」

予想外の突発的な出来事に驚き、なのはちゃんも判断能力を奪われたのだろう。

顔を真っ赤にしながら、肯定の言葉を述べた。

恐らくメカ犬の考えは、メカ犬の姿である俺がこの教室に入ってきた理由よりも、皆の印象に残りそうな事象をこの場の全員に植え付けて、うやむやにしようという魂胆なのだろう。

そのやり方に少し問題がある様には思えるが、現在発生中なこの危機を脱する事が出来るのであれば、多少のリスクは許容しなければならない。

「……信じてくれてありがとう。なのはちゃん」

そう思った矢先の出来事だ……

メカ犬がお礼の言葉を言いながら、なのはちゃんの頬にキスをした。

今までも家族的な親愛の情から、なのはちゃんが俺の頬にキスをしてきた事は何度かあったが……これは不味い。

何が不味いかと言うと、まずこの場所が不味い。

教室の中でそんな事をすれば、当然の如く皆の注目を集める事となる。

実際に目線を周囲に向けてみれば、先程とは違った意味の視線が、俺の身体のメカ犬となのはちゃんに集中しているのが理解出来た。

そしてここまでのアクションを間近で見ていた、すずかちゃん、アリサちゃん、エミリーちゃんの三名は微動だにせず、その場に立ち尽くしている。

はっきり言ってこの先の展開は、手に取る様に予想出来る……しかもその予想は十中八九当たっているだろう。

だからこそ俺は、それを回避する為に先手を打つ。

『メカい……マスター！実はここに来る途中に、持ってきた忘れ物を途中で落としてしまったのだ！校内で落とした筈だから一緒に探してくれないか！？』

俺はなるべくメカ犬の口調を真似しながら早口で一気に捲くし立てて、アリサちゃんの拘束から逃れると同時に、床に着地してメカ犬に視線で合図を送る。

その意味を正しく理解したのか、メカ犬が首を縦に振る姿を確認し

た俺は、そのまま教室を飛び出した。

俺がメカ犬に対して送った視線の合図……

それは正しく伝わってくれた様で、すぐ後ろからメカ犬が追いかけて来る姿が見て取れた。

『メカ犬！お前とんでもない事をしてくれたな！！！』

「すまないマスター。だがああでもしなければ、事をうやむやに出来そうも無かったのだ」

『だからってやり過ぎだろ！？』

「そうか？普段のマスターとなのは嬢のやり取りを参考にしただけなのだが……」

『メカ犬から見て普段の俺はあんな感じなのか！？』

俺とメカ犬は廊下を走りながら、既に遠くから聞こえるクラスのカオス化したざわめきをＢＧＭに、激論を交わす。

「それよりもマスター。実際のところ何故学校に来たんだ？」

信じていた相棒が発した衝撃の告白に、俺がショックを受けていると、メカ犬が話題を変えてきたので、俺も気を取り直して話を先に進める事にした。

『そうだった！ジャックの情報で、この学校の関係者がホルダーかもしれないって情報を手に入れて俺はここに来たんだ！』

「なんだって!?」

『一番可能性が高いのは、昨日の夜から今日の朝までこの学校に残っていた二人の警備員さんと宿直だった木村先生の三人』

「それではもう、ホルダーの正体は特定出来たのか?」

『いや、まだ特定までは出来てないけど、警備員さん達はホルダーじゃない事が分かったから、これから残りの一人……木村先生を調べてみようと思う』

「うむ。ワタシもマスターの意見に賛成だ。それでこの時間だと、その木村という教師は何処に居る?」

『木村先生は三年生を受け持つ担任の先生だったから……今の休み時間だと、次の時間の教材を準備するのに職員室に居るんじゃないかな?』

「そうか。ならば取り敢えずその教師の顔を確認する為にも、一度職員室に向かおう。もしかしたらその教師の態度しだいで、ホルダーと特定出来るかも知れない」

『分かった。でも今の俺はメカ犬の格好だから、先生達に見つかると不味い。俺は隠れてるから確認はメカ犬に任せる』

「うむ」

廊下を走りながら討論を続けた結果、次の行動指針を決めた俺達は、職員室を目指す事にした。

「失礼しました」

『どうだった？』

職員室から出て来たメカ犬に、先程までその付近で身を隠していた俺が声を掛けた。

「いや、職員室には居なかった。他の教師の話によると、教材が資料が社会科の資料室にあるらしいから、恐らく其処に居るだろうとの事だ」

木村先生が職員室には既に居ない事を確認した俺達は、急いでその資料室に向かう事にした。

資料室は今俺達が居る階の一つ上にあるので、俺とメカ犬は階段を上って、上級生達の視線を浴びながら廊下を進み、資料室の前へと辿り着く。

『ここに木村先生が居るん筈なんだな？』

「うむ」

俺の質問にメカ犬が首を縦に振ると、資料室の扉に手を掛けて、その扉を開いた。

【あなたのハートにきゅんきゅん♪フォーリンラブなのら～】

資料室に入った瞬間、俺達の鼓膜を予想外の声が振るわせた……

俺の視線の先に居たのは一人の男性である。

その人物こそ、俺とメカ犬が探していた木村先生に間違いなかった。

そして木村先生なのだが……突如として資料室に踏み込んで来た俺達と視線を交わして完全に固まってしまった……その手に携帯ゲーム機を持った状態を維持したままで。

先程の声の正体は恐らく、そのゲーム機から発せられた声なのだろう。

その証拠に木村先生が持っているゲーム機のディスプレイには、やたら派手な色をした女の子の姿が映っている。

資料室に入って来た時に聞こえて来た声と、実に合いそうな容姿をしていたので間違いない筈だ。

このゲーム機のディスプレイは、他と比べても大型で見やすいタイプだったので、俺の位置からでも充分にそれが確認する事が出来た。

「……な、何だい君は!?突然入って来たりして!?」

少しの間を置いた後に、携帯ゲーム機を後手に隠した木村先生が、慌てながらメカ犬に話し掛けてくる。

メカ犬もその言葉に返答をしようと口を開くが、それよりも早く……

【あたしのラブリーボイスで～癒してあ・げ・る♪キャハ☆】

資料室に入った直後に聞こえた声と同じ系統の声が、この決して広いとは言えない資料室の中で響き渡った。

『……』

「……」

「……」

何だかやるせない空気が、この資料室全体を包み込み、この場に居る全員が沈黙という名の嵐に見舞われる。

そしてこんな空気の中で、最初にその嵐に勝負を挑んだ猛者は、この様な空気を形成するに至った原因をこの場に持ち込んだ張本人……つまり木村先生だった。

「……見たね?そして聞いてしまったんだね?僕の秘密を……」

木村先生はうわ言の様にそう呟くと、後手に持っていたゲーム機を俺達に見せて満面の笑みを浮かべる。

「僕はゲームが大好きなんだよ。ジャンルは問わず何でもね……でも僕の妻はこの手のゲームをする事だけはゆるしてくれなくて、ずっと隠れてやっていたんだ。分かるかい？好きなものを好きな時に出来ない苦しみが？確かに人間には我慢も必要だって事は分かってる。でもそれを永久的に好きな人から奪われて……何も思わずにいられるかい！？僕は無理だね。だから今もこうして僕は一人隠れてゲームをしてたんだ……だけど見つかったからそれも今日で終わりかな？」

まるで貼り付けた様な笑顔をした状態で、早口で捲くし立てた木村先生は、ゲーム機を手放すと、代わりにポケットから緑色をした球体を取り出して強く握り込んだ。

すると眩い緑の輝きが木村先生の全身を包み込み、その姿を昨日戦った例のホルダーへと変えてしまったのである。

「随分といきなりだな！？」

俺は木村先生のホルダー化を目にして、驚愕の声を上げた。

此方から何もしていない内に、勝手に喋ってくれた上に、その正体までも明かしてくれたのは正直助かるが、これは流石に急展開過ぎるだろう！？

「恐らく彼の理性の殆どは、既に暴走プログラムに侵食されていたのだろう。其処にワタシ達に秘密を目撃された事がトリガーとなって、その精神すらも完全に暴走させてしまったのかもしれない」

『隣で解説してくれるのはありがたいんだけどな……どうする？』

丁寧な解説をしてくれたメカ犬には申し訳無いのだが、今はこの状況をどうするべきなのか。その具体的な打開策を、是非とも提示していただきたい。

「それは……決まっているだろう」

俺の問いに対して、今まで無表情だったメカ犬が僅かに唇の両端を上に吊りながら言った。

『……そうか！』

その表情を見て俺は、メカ犬が何を言おうとしているのかを察する。

「随分と余裕みたいですけど、何が決まっていると言うんだい？」

この中で唯一メカ犬が言おうとしている事を理解していないホルダーが答えを求めてきた。

だから俺達は、その質問に威風堂々とした態度で答えを返す。

「そんな事は分かりきっている！」

『今の俺達がするべき事……それは！』

俺とメカ犬はホルダーに、威勢良く言い放ち……

『「全力でここから逃げる事だ！！！！！」』

素早くホルダーから背を向けて、全力で廊下を走り抜けた。

今の変身しても戦えない状況では、正直に言ってホルダーと正面からぶつかっても、勝てる見込みは全くのゼロだ。

だから俺達は全力で逃げる。

そうは言ってもこのまま逃げ続けるだけでは何も解決しないし、ホルダーとしても俺達を簡単に逃がすとは到底思えない。

案の定その予想は当たり、少し遅れて資料室から出て来たホルダーが、後ろから俺達を追いかけて来た。

そんな事になれば、当然ながら学校に居る他の生徒達や教師に目撃される訳で、この俺達とホルダーのリアル鬼ごっこが開始されてから数秒後、校内は大パニックとなる。

迅速な避難活動の賜物か、１０分程時間が経つと、校内には生徒はおろか先生の姿も見えなくなっていた。

多分今この校内に居るのは、このリアル鬼ごっこの参加者である俺とメカ犬にホルダーだけで間違い無い筈だ。

「取り敢えず時間は稼げているが、これからどうするマスター？」

今もホルダーから逃れる為に走り続けながら、メカ犬が俺に質問を投げ掛けてきた。

確かにメカ犬の言う通り、このまま逃げ続けるのにも限界がある。

だからと言って打開策がある訳でも無いし……

「危ないマスター！」

考え事をしながら俺が階段を下ろうとした時、メカ犬の注意の声を聞いて立ち止まると、まさに今足を踏み入れようとした階段の下から、コードの束が地面を貫き階段を瓦礫の山へと変えてしまったのだ。

『これじゃあ下の階に行くのは無理そうだな……仕方ない。上に行くぞ！』

瓦礫と化した下り階段を見て、俺達は下に向かうのを諦めて、無事な上り階段を上がっていく。

だがその選択は間違いだった事に、俺達はすぐ気付く事となる。

階段を上ってその階で逃げ続け、他の階に逃げようとすると、ホルダーのコードが下りの階段だけを破壊するという行動が何度も繰り返され……

「もう逃げ道は何処にも無いですよ？」

屋上のフェンスを背にした俺とメカ犬は、勝ち誇るホルダーの言葉を聞くという事態に陥っていた。

これはホルダーの仕掛けた罠だったのである。

下に行く事が出来なければ、必然的に上に逃げるかその場所に留まらなければならなくなるのだが、当然ながらその場に留まるという事は出来る筈も無く、俺達は上に逃げるという選択をする以外に道

は無かった。

留まれば上りの階段も壊されて、完全に閉じ込められてしまう危険性もあった為、間違った選択をしたろは思わないが、この選択が正解だったとは素直に言い切れない。

「どうするマスター？」

『……こうなったら変身するぞ！！！』

追い詰められた俺は一つの決断を下す。

「変身は可能だと思うが、変身しても身体を動かす事が出来なくなると、昨日マスターが自分で言っていただろう！？」

『そうだけど……生身でホルダーの攻撃を受けるよりは良いだろう』

「……うむ。確かに今はそれしかないか！」

俺の咄嗟の提案を呑んだメカ犬は、タッチノートを取り出してボタンを押した。

『バックルモード』

タッチノートから音声が鳴り響くと同時に、俺が……つまりメカ犬の身体がベルトに変形して、俺の身体……つまりメカ犬の腹部に巻き付く。

……それにしても痛みは感じなかったが、全く違う形に変形するというのは、不思議な感覚である。

ディケイドのファイナルフォームライドで変形するライダー達も、今の俺と似た様な感覚を味わったのだろうか……

「変身」

俺がそんな事を考えている間に、メカ犬は音声キーワードを入力して、タッチノートをベルトに差し込んだ。

『アップロード』

屋上に音声が鳴り響き、全身が光に包まれると同時に、俺とメカ犬の姿は一人の戦士の姿へと変わる。

メタルブラックのボディーに、四肢に伸びる銀のラインと、同色のV字型の角飾りに赤い二つの複眼。

「か、仮面ライダーだと!?」

俺とメカ犬がシードに変身した場面を目撃したホルダーは驚愕の声を上げた。

本来ならば、ここからホルダーとの戦いが始まる訳なのだが……やはり俺が身体を動かそうとしても、指一本として動かす事が出来そうに無い。

「やはり駄目かマスター?」

『……ああ。感覚はしっかりあるんだけど、動かせる気配が全くしない』

変身する事に成功したのは良いが、その身体を動かす事が出来ないのでは、戦いようが無い……

僅かにでも動かす事が出来ればと何処かで期待していた部分もあった為、俺のみならずメカ犬のショックも大きかった様だ。

「こうなったら……やられる前にこっちから！！！」

俺が何とかして身体を動かそうと悪戦苦闘していると、ホルダーが叫びながら突進攻撃を仕掛けて来た。

本当ならばここで避けるか、相手の攻撃を捌いてカウンターを喰らわせるところなのだが、今の俺にそんな事が出来る筈も無く、ホルダーの突進を正面から当てられて吹き飛ばされてしまう。

「まだまだあああああああ！！！」

この体当たりだけで、ホルダーの攻撃が終わる筈も無く、ホルダーは叫びながら拳と蹴りを何度も叩き込んで来る。

「こ、このままでは不味いぞマスター……」

『だからって、どうしたら良いんだよ！？』

ホルダーの度重なる連続攻撃により、既にかなりのダメージが蓄積されていた。

もしもこれ以上ホルダーの攻撃を無防備に受け続ければ、かなり危険な事になってしまうと自覚していながらも、それを打開する手段

が一向に思いつかない。

「これで終わりですよ！仮面ライダー！！！」

先程から俺達が無抵抗なのを良い事に、ホルダーは腕を振り被り、右拳を繰り出して来る。

隙だらけの攻撃ではあったが、今の俺にはその攻撃を凌ぐ術すらない。

ホルダーの拳が眼前に迫り、このまま吹き飛ばされると覚悟をしたが……

その一撃を俺が喰らう事は無かった。

何故ならばシードの左手がホルダーの拳を外側に弾き飛ばし、その隙に右拳が逆にホルダーに命中して吹き飛ばしていたという予想外の展開が繰り広げられた為である。

『……俺は何もしてない筈なのに何で……もしかしてメカ犬か！？』

「うむ。咄嗟にワタシが身体を動かそうとしたら……」

『……そうか！そういう事だったのか！！！』

俺はメカ犬の言葉と先程の結果で、気付いてしまった。

思えば簡単な話だったのである。

俺とメカ犬の身体と心が入れ替わっているというのならば、俺達が

本来受け持つその役目も、入れ替わっていると考えるのが自然だったのだ。

そうと分かれば話は早い！

『メカ犬！今の身体の主導権はメカ犬に有るんだ！お前の思う様に動かしてみろ！！！』

「うむ！」

メカ犬は俺の提案に、肯定の意思を示すと、早速行動に移した。

「よくもやってくれたな！？」

其処にダメージから立ち直ったホルダーが、怒号を上げながら再び飛び掛って来るが、無抵抗に攻撃を喰らうという事にはならなかった。

「動くぞマスター！」

メカ犬の言う通り、シードの身体が動きホルダーの攻撃を見事に回避する事に成功する。

『さあ！反撃はここからだ！！！』

「うむ！！！」

其処からはメカ犬がシードの身体を巧みに操り、ホルダーへと猛攻を仕掛けていく。

そして拳と蹴りの連続ラッシュの最後にホルダーの腹部を蹴って、後方へと吹き飛ばしたメカ犬が叫ぶ。

「一緒に決めるぞマスター！」

『ああ！こんな悪夢はここで終わらせる！』

メカ犬は俺の返事を受け取ると同時に、ベルトの右側をスライドさせて黄色いボタンを押した。

『ベーシックファントム』

その瞬間ベルトから大量の光りが溢れ出し、その光がもう一人のシードを作り出し、俺の意識もその作り出された分身体へと移って行く。

『ロード』

分身体を作り出すと、メカ犬はすぐさま俺の動かす分身体のベルトの裏に設けられた溝に、引き抜いたタッチノートをスライドさせて、再びベルトにスライドさせたタッチノートを差し込んだ。

『アタックチャージ』

そしてベルトにタッチノートが差し込まれると同時に、二人のシードの右足に光が集約される。

「『こいつで決めるぜ！！！』」

俺とメカ犬は、同時に叫びながら飛び上がり、ホルダー目掛けて輝

く右足を突き出す。

「『ツインシードスマッシュ！！！』」

急降下と共に繰り出された必殺の一撃がホルダーを捉え、大きな爆発を引き起こした。

無事に着地して爆発地点を見れば、粉々に砕け散る暴走プログラムと気絶した木村先生の姿……

ホルダーを倒した事を確認した後に、変身を解いた俺とメカ犬は、其々の身体を再度確認した。

俺の身体は全身メタリックシルバーの身体でも無ければ、視線が異常なまでに低い……という事は無かった！

二足歩行は当然ながら、身体も肌色だし、小学一年生としては一般的であろう視界の高さを誇っている……

「も、戻れたあああああああああああああああああああああああああ！！！！！」

俺は思わず屋上で歓喜の叫びを上げた。

『良かったなマスター』

叫び続ける俺の足元には、普段通りのメカ犬の姿……

こうして俺とメカ犬はしばしの間、元の姿に戻れた喜びを噛み締めた。

その後暫くして、屋上からチェイサーさんを呼んで、ホバーモードで下に降ろして貰ってから、校内の避難場所の一つに指定されている体育館に向かったのだが、クラスメイト達の探る様な視線と、なのはちゃんの何やら熱を含んだ視線、そしてエミリーちゃん、アリサちゃん、すずかちゃんの三人が放つ何故か寒気を感じさせる視線と……様々な視線に晒された事は、また別の話である。

ある意味今回も普段通りと言えるホルダー騒ぎだったが、明日の海鳴は平和だったら良いな……

## 一周年突破特別話　俺がワタシでワタシが俺で！？【後編】（後書き）

ここでアンケートの内訳を簡単に言ってしまうと、やはり主人公の純と、その相棒のメカ犬の活躍を見たいという意見が圧倒的に多かったです。

やっぱり主人公コンビの人気は根強いみたいです……

そしてお話の展開で希望上位が高かったのがバトルと学園にコメディーが同じくらいでしたので、上位のものを混ぜ込んだ話を作ったら、何故かこんな出来になりました。

そして番外に続く番外も一先ず終了したので、次回更新からは本編の通常更新に戻ると思います。

それと一つ皆さんにお知らせしなければならない事がありまして、もしかしたらこれから更新ペースが極端に落ちるかもしれません。

ちょっと職場の動きが変動しそうなので……

それでも出来るだけ早い更新を目指そうと思うので、出来るだけ頑張ってみます！

そういった訳で、また次回でお会い致しましょう。

それでは。

## 第２９話　謎の光と女の子？【前編】（前書き）

お久し振りな本編です。

今回から少しだけ設定が進んでいますが、楽しんでいただけたら幸いです。

……そして原作時期は、まだまだ先になるかも知れません。

# 第２９話　謎の光と女の子？【前編】

「ここが……第９７管理外世界……」

『こちらの世界では、この星を地球と呼ぶらしいぞ』

静けさが支配する筈のとある夜の公園で、この時間には似つかわしくない一人の少女の声と、機械的な老人の声が辺りに木霊する。

「それくらい私だって知ってるわよ！それよりもターゲットの反応は！？」

『ふむ。確かにターゲットはこの次元世界に来てはいる様だが、どうにも詳しい居場所が特定出来ん……』

「どういう事よ！あんた古過ぎて、ついに壊れたんじゃないでしょうね！？この骨董品デバイス！！！」

『何じゃと！？この最高級デバイスのワシに向かって骨董品じゃと！？なんという言い草じゃ！！！新人ペーペーの総合Ｃランクなお主が持つには、勿体無さ過ぎるワシを捕まえておいて！！！それを言ったらお主などただの親の七光りじゃろうが！！！！！』

「な、何ですってえええええええ！？」

その少女と老人の会話は、いつの間にかお互いの罵倒へと変わり、本題に入るまで罵倒合戦は十分以上の時間を費やした。

「……い、何時までもこんな馬鹿な事してる場合じゃ無かったわ！

？早く例のターゲットを探しに行かなくちゃ！！！」

『そ、そうじゃな……ワシのセンサーもこの付近までは正常に動いておった。きっとこの街に潜伏している筈じゃ』

「そうね。それに……これが私の初任務なんだから、絶対に成功させて見せるわ！」

『その意気じゃ！』

気を取り直して、本来するべき事を思い出した少女は、自らの意気込みを口にしながらその場を後にする。

この世界……この海鳴市で何が起こっているのか、そしてこれから彼女を巻き込んで何が起ころうとしているのか……

今の少女には、知るよしも無かった。

「こちらご注文のアイスコーヒーと、翠屋特性ミルフィーユになります」

俺は営業スマイルを浮かべながら、テーブルに注文の品を丁寧かつ素早く並べていく。

「ご注文は以上で宜しいでしょうか？」

お客様から肯定の返事を聞いた俺は、伝票を置いて一礼してから、テーブルを離れてカウンターの方へと向かって歩きながら、翠屋店内を確認する。

暖かな春の風が吹く、日曜日の昼下がり。

今日も翠屋は、常連のお客さんで賑わっている。

「純の旦那。そろそろ俺が交代入りますんで、休憩して下さい！」

「そっか。それじゃあ休憩に行って来るから、後を頼むぞヤス」

カウンターの裏から出て来たワイルド系なイケメン、翠屋で俺の後輩アルバイトにあたるヤスが、俺に休憩に入る様に促してきたので、俺はお言葉に甘えて休憩に入る事にした。

そう言えば昼食もまだ摂っていなかった事を思い出した俺は、厨房の士郎さんに直接メニューを注文してから、エプロンを脱いで店内の空いてる席に座って寛ぎながら料理が出来るのをのんびりと待つ。

何気なく窓越しに外を眺めると、春の暖かな日差しが俺を照らす。

「……あれからもう、一ヶ月も経つんだな」

俺は暖かな日差しを浴びながら瞳を閉じて、今から一ヶ月程前の出来事を思い出す。

まだ少し肌寒さの残る三月の上旬に、俺は憧れの人物と一人の優しい友人に出会い、俺は大切な事を教えてもらった……

今は二人とも本来自分が居るべき世界へと帰ってしまったが、俺はきっとまた再会出来る日が来ると信じている。

それ以外にも俺の周りでは、幾つかの変化があった。

その中でも大きく変わった事と言えば、俺自身がこの春に進級して、二年生になったという事だろうか。

まあ、肩書きが小学一年生から二年生になっても、普段からやっている事にあまり変わりは見られない。

平日の朝は、毎朝お隣のなのはちゃんを起こしてから、学校に行き授業を受ける毎日だ。

前年度の卒業生と入れ替わりに、俺達二年生の後輩となる新一年生が入学してきたが、まだ俺達の学年が学内イベントで彼らと関わる事になるのは、もう少し先の話になるだろう。

休日の殆どは、翠屋でアルバイトをしたりと、周囲の変化はあっても、相変わらず俺の日常生活は変わる事無く続いている。

「……それで、これも……ある意味日常なのかな」

「あら。何だか考え込んでる様にに見えたんだけど、私はお邪魔だったかしら？」

俺の呟きに対して、当然の如く返事が返って来た。

閉じていた瞳を開き正面を見据えると、予想通りの人物が俺の向かい側の席に座り微笑みながら俺を観察している。

「……別に邪魔って訳じゃないですよ。今は丁度休憩中でしたし、これから少し遅い昼食にしようと思ってましたから」

「そうだったんだ。それじゃあ私もここでお昼にしようかな。純君。相席しても良いかな？」

「……もう対面して座ってますよね！？」

「細かい事は良いじゃないの」

もう何度目となったか分からないこのやり取りを、何時までも続けていても無駄だと知っている俺は、諦めを多分に含んだ溜息を吐き出してから、話を先に進める事にした。

「それで……今度は何の用事だって言うんですか？恵理さん」

俺に話し掛けてきた人物……その名は【風間恵理】。

彼女は海鳴ジャーナルに勤める雑誌記者で、この海鳴では有名な雑誌である月刊海鳴の記事も任されている、中々に凄腕な女性だ。

仕事の出来る女性と言えば聞こえは良いのだが、中々困った性格の持ち主であり、俺が仮面ライダーだという事を知ってから、頻繁に不可解な事件の調査を頼みにやって来るのだ。

しかもそれが親切心からというよりも、そうした方が面白そうだからといった割合が多いので、余計に性質が悪い。

決して悪い人では無いし、ホルダーの可能性が高い情報を提供してくれるのはありがたいのだが、どうも俺は半年以上の付き合いを経た今も、恵理さんに対して強い苦手意識を持っている様だ。

「そんなに警戒しなくても良いじゃない。まずはお昼にしましょう？」

俺が明らかに疑いの眼差しで見ている事に気付いたのか、恵理さんはフレンドリーな態度で俺に接すると、頼んだメニューとは別に、俺がセルフで持って来て置いたコーヒーを俺の目の前から掠め取って口にした。

まだ一口も飲んでいなかったから、特に問題は無いが仮にも小学生低学年である俺に対して、出会い頭に飲み物を奪って飲んでしまうというのは、一人の大人として誉められた行為なのだろうか？

……まあ、今更恵理さんに何を注意しても、改める事は決して無いので、俺は溜息を一つ零してから、席を立ってカウンターへと向かい、コーヒーをもう一杯淹れなおすついでに、士郎さんに恵理さんの分の食事を注文した。

「それで、実際のところ用件は何なんですか？」

「あら？そう言えばまだ言ってなかったわね」

お互いに向き合いながらトーストを齧りつつ、俺と恵理さんの会話は今も続いていた。

「どうせ何時もの依頼でしょ……そうじゃ無いなら、本当に食事に来ただけって言うんですか？」

「分かったわよ。少しからかい過ぎたみたいだし、そろそろ本題に入りましょう」

俺の質問にウインクをしながら答えた恵理さんは、残りのトーストを頬張ると、コーヒーで胃の中へと流し込み、喋る準備を整えてから少しだけ声のトーンを落として語り始めた。

「まずは、この写真を見てくれるかな」

恵理さんはそう言うと、自身の上着のポケットから一枚の写真を取り出して、俺に手渡した。

「この写真は……」

俺はその写真を見て、静かに声を零してしまう。

写真に映っていたのは、夜の公園の風景だった。

俺にも見覚えのある遊具の配置が分かる風景であった事から察するに、この近辺の公園とみて間違い無いだろう。

驚くべき事はここからなのだが、遊具の後ろには何本もの雑木林が広がっており、その中から、明らかにライトなどが光源ではないと思われる光る被写体が写り込んでいたのである。

「その写真……どう思う？」

「どう思うって……素直に言えば心霊写真に見えるとしか言い様が無いですけど」

写真を見た俺に対して、恵理さんが質問をしてきたので、俺は率直に思った事をそのまま言葉にした。

写真に写っている光ははっきりとではないが、何処と無く人の形にも見える。

この写真を心霊写真だと言って他の人に見せれば、殆どの人は納得するだろう。

「この写真だけを見れば、確かにそう思うかもしれないわ。だけどこれを見たらどうかしら？」

俺の意見を聞いた恵理さんは、不敵な微笑みを浮かべながら、もう一枚写真を取り出して、俺に手渡してきた。

その写真を見て、俺は何故恵理さんが、態々この写真を見せたのか納得する。

「……恵理さん。この写真は、何時頃に撮られたんですか？」

「撮影されたのは両方とも三日前の夜１１時過ぎらしいわ。場所は純君も分かると思うけど、この近くの公園ね。ちなみにこの写真を撮影した人は、普段から月刊海鳴の一般投稿コーナーに投稿写真を頻繁に送ってくれてる読者さんなんだけど、自宅に帰る途中に偶然にも目撃したから手持ちのデジカメで撮影したのだそうよ」

俺は恵理さんの説明を聞きながら、改めて二枚目の写真を見直した。

一枚目の写真と同様に、二枚目の写真も雑木林の中を人型の光が写っているのだが、更にその端には人に似ながら決して人では無いと分かる異形の姿が写り込んでいる。

藍色と灰色の体色を持つ、二体の怪人……

「オーバーとメルトがこんな場所で、一体何をしていたっていうんだ？」

呟きながら二枚目の写真を食い入る様に見ると、断定は出来ないが俺には二人が、この光りを追いかけている様にも見えた。

『謎の光を、オーバーとメルトが追っていた？』

「ああ。恵理さんが見せてくれた二枚目の写真を見る限りには、そんな感じに写ってたんだ」

恵理さんと話しながら昼食を済ませて、翠屋でのアルバイトを終えた俺は、タッチノートでメカ犬と連絡を取り、近くの公園で合流してから、恵理さんから預かった写真を早速メカ犬に見せた。

『……うむ。確かにマスターの言う通り、その様にも見えるな』

「だけど、その確証は何も無いし、その光りの正体が何なのかも分からない……メカ犬。何か心当たりは無いか？」

『残念だがワタシにも、心当たりは無いな……だがマスターの読み通り、オーバーとメルトがこの謎の発光体を追っているのだとしたら、このまま放って置く訳には行かないだろう』

「……確かにな。俺達もその光について調べてみた方が良さそうだ」

『うむ。ワタシはこれからジャックのところに、何か情報が無いか聞きに言ってみる』

「そっちは任せた。その間に俺は、この公園を少し調べてみるよ。何か手掛かりが残っているかも知れないからな」

俺とメカ犬が合流した公園は、近場で合流し易かった場所であると同時に、先程まで話題となっていた写真が撮影された現場でもあった。

この周辺は基本的に治安も良い為か、日中は園内で遊ぶ子供の声や散歩を楽しむ街の人達の話し声などで賑わっているが、それとは逆に夜には殆ど人が来る様な事は無い。

夜間に偶然撮られたというこの写真も、それを考えるとかなり珍しい事だろう。

『うむ。何か見つけたら連絡してくれ。ワタシもジャックから話を聞いたらすぐに合流する』

メカ犬は俺にそう告げると、足早に公園を出て行く。

俺はその後ろ姿を見送ってから、先程メカ犬に言った通り、取り敢えずこの公園付近に、何か変わった事は無いか調べてみる事にした。

「まずは林の中でも探してみるか……」

取り敢えず最初の捜索場所として、写真にも写っていた雑木林の中を調べてみようと思い、俺はその場から離れて移動を開始する。

同じ公園内という事もあり、歩いてから数分程で目的地に辿り着いた俺が、早速調べようと雑木林に入ると、其処には既に先客が居た。

「無いわね……」

その先客とは、一人の女の子だった。

見た感じの年齢は、今の俺の見た目よりも二つから三つ上というところだろうか。

腰まで届きそうな長いライトブラウンの髪を、赤い大きなリボンで纏め上げている、所謂ポニーテールという髪型で、少し吊り目がちな瞳が印象的だ。

服装も私服というよりは、女性用ビジネススーツといった印象を強く受ける茶系色のジャケットと、タイトな同色のスカートというでたちをしている。

その女の子は先程から何かを探しているのか、無い無いと呟きながら、目を皿の様にして雑木林の周辺を観察し続けている。

「何が無いんですか？」

「うひゃあああああああ！？」

落し物をしたのなら、一緒に探してあげようと思い声を掛けたのだが、女の子は声を掛けるまで、俺の存在に全く気付いていなかったらしく、驚きの声を上げた。

「あ、何か……驚かせてしまったみたいですみません」

驚き方が過剰な気もしたが、突然声を掛けてしまったのは俺なので、取り敢えず目の前で、驚きからなのか目を白黒させている女の子に対して、俺は謝罪の言葉を口にする。

「げ、現地の男の子！？」

「はい？」

次の瞬間に女の子が口にした言葉を聞き、俺は思わず疑問の声を上げた。

俺の聞き間違いで無いならば、この女の子は俺の事を見て【現地の男の子】と言った筈だ。

女の子の見た目は日本人の様に見えるが、もしかしたら外国から来た帰国子女なのだろうか？

「こ、こんな場所で何をしてるのかな君？」

俺を見て何を慌てているのか分からないが、女の子は視線を泳がせつつ苦笑いを浮かべて俺に話し掛けてきた。

「いや……さっきから無い無いって呟きながらこの辺りを見てたみたいだから、何か落し物でもしたんじゃないかと思って話し掛けてみたんですけど……」

「お、落し物……え、ええそうね！そうよ！落し物をしたのよ！！！」

はっきり言おう。

この女の子は、俺に対して嘘をついている。

その挙動不審な態度があからさま過ぎて、思わず隠す気無いだろうと突っ込みを入れてしまいそうな程に、この女の子は嘘をつくのが下手だと、初対面の俺でも良く分かった。

だが何かを探しているのは先程の様子を見る限り、間違いなさそうだが、それが何なのかが分からない。

別に怪しい感じのする女の子にも見えなかったので、もう少しだけ話を聞いてみようとしたその時である。

『キンキュウケイホウキンキュウケイホウキンキュウケイホウキンキュウ……』

タッチノートのセンサーが反応して、警告音を発したのである。

「な、何の音!?」

その警報に女の子が驚いている中で、俺は急いでタッチノートの警報を止めて周囲を確認する。

「伏せて！」

俺は視界にあるものを捉えた直後、すぐさま女の子の頭を掴んで無理矢理その場でしゃがませると共に、俺自身もその場で身を潜めた。

「い、一体何を……」

「静かに」

何の説明も無しにこんな事をしてきた俺に対して、女の子が文句を言おうとしてきたが、俺はその口を手で塞いで強引に黙らせてから、目線を林の外に向ける様に合図を送る。

俺の意図を正しく理解したのか、女の子は俺の視線の指し示す方角を見た。

「!?」

念の為に今も口に手を添えていたおかげで助かったが、そうでなければ確実に女の子は、先程の様な叫びを上げていただろう。

俺はある程度女の子が落ち着くのを待ってから、ゆっくりと女の子の口を塞いでいた手を離す。

「な、何なのよあれは!?」

小声ではあるが、女の子の驚き具合は俺にも充分に伝わってきた。

俺達の視線の先に居たのは、異形の姿の集団……

十数体のホルダーモドキと、そのホルダーモドキ達を統率していると思われる、俺も見た事も無い一体のホルダーだった。

そのホルダーの姿は全身が黒い毛並みに覆われており、一見するとゴリラの様にも見える。

一番の違いは、より人間の形状に近付いているという事と、両肩のショルダーアーマーを彷彿とさせる装飾だろうか。

そのホルダーから、何かの指示を受けて、ホルダーモドキ達がこの場から離れて行く。

「ねえ君！私の言ってる事をちゃんと聞いてるの！？」

「聞いてるから少しだけ静かにしてて。あんまり騒ぐと、奴らに見つかるかも知れない」

ホルダーの事を全く知らない口振りからして、やはりこの女の子は海鳴市の人間では無いのだろう。

俺は取り敢えず奴らをやり過ごして安全を確保出来てから説明しようと思い、もう暫く待つ様に促したのだが、どうやらその選択は間違っていたらしい。

「君が話さないなら、私が直接本人達に聞きに行くわ！！！」

「え！？」

女の子は予想外の言葉を放ち、颯爽と茂みの中から飛び出して、ホルダー達の眼前へと踊り出してしまった。

その決断力と行動力は凄まじく、俺には止める暇も無い程だった……

「ちょっと！貴方達！！！」

女の子は仁王立ちで、ホルダー達へと話し掛ける。

しかし会話がホルダーと成立する筈も無く、女の子を視界に捉えたホルダーは、問答無用で女の子に対して、攻撃を仕掛けようと突撃を仕掛けて来た。

「危ない！」

その光景を見て咄嗟に俺も茂みの中から飛び出して、女の子を押し倒す様な形で、突撃して来たホルダーの攻撃を回避する。

「痛いなあ～もう！危ないじゃないの君！！！」

俺が飛び出して女の子を庇わなかったら、もっと悲惨な事になっていた筈なのに、俺は助けた筈の女の子からお叱りの言葉を受けてしまった。

「ここは危ないから、私に任せて君は安全な場所に逃げなさい！」

更に不敵な笑みを浮かべながら女の子は俺に言うと、右袖を少し捲り、中央に小さな青い石の嵌め込まれた金色のブレスレットを露にすると同時に、その腕輪に対して話し掛けたのである。

「行くわよプリズム！」

『ふむ。久々に腕がなるわい！』

しかもその腕輪から返事が返って来た！

「セットアップ！！！」

俺がその光景に驚いている間にも、話は進み女の子は何かの合図なのか、そんな言葉を叫んだ。

そして女の子の叫ぶと同時に、女の子の全身は光に包まれた……

## 第２９話　謎の光と女の子？【前編】（後書き）

女の子の正体は如何に！？

と言ってみても、既に殆どの方がこの女の子が、何処から来た人なのか分かると思うので、敢えて言わずにおこうと思います。

それでは。

## 第２９話　謎の光と女の子？【後編】（前書き）

少し遅れてしまいましたが後編を更新致します。

二年生に進級したこの小説の主人公の純ですが、これからも楽しんでいただけたら幸いです。

# 第２９話　謎の光と女の子？【後編】

世界には未だ解明されていない、未知の技術が幾つも存在している筈だ。

端的に言ってしまえば、俺の持っているタッチノートもその一つに入るだろう。

既に俺の周囲の現実だと受け止めている、メカ犬やホルダーもタッチノート同様、異世界に存在する技術の産物である。

しかし今この時、俺の目の前で起こっている現象は、それとは別の未知の技術が用いられた現象だった。

セットアップと叫んだ女の子が、俺やホルダー達の眼前で、光に包まれたのも一瞬の事。

次の瞬間に女の子の服装は、茶系のビジネススーツ風のものから、鮮やかな青色を基調としたチャイナドレスの様な服装へと変わり、その右腕には、先程のブレスレットと同色の青い玉が先端に埋め込まれた、全長一メートル程の金属製と思われる棒が握られている。

その姿はまるで……

「ま、魔法少女？」

俺は見たままの事実を、一人静かに口にした。

女の子の今の姿を一言で説明するならば、何処に出してもおかしく

無い立派な魔法少女である。

「さあ！ここからは管理局最強ルーキーと名高いこの私！！ミルファリア・ロックランベルがお相手するわよ！！！！！！」

恐らくその名前が、女の子の名前なのだろう。

自らをミルファリア・ロックランベルと高らかに名乗った女の子は、右手に持った魔法少女の武器と思われる長い杖？を振り回すと、最後に青い玉の付いた先端をホルダーに向けて女の子は呪文と思わしき叫び声を上げる。

「ロックシューター！」

女の子の叫びに呼応して、杖の先端が光ると、青い光が球状となってホルダーに命中するのだが……

「う、うそ！？」

『どうやらこちらの攻撃が、全く効いていない様じゃな……』

確かに女の子の放った青い光は、ホルダーに直撃したのだが、肝心のホルダーには一切効果が無かったらしく、ホルダーも命中した腹部の辺りをダルそうに指で掻いていた。

「何で効かないのよ！？」

女の子はホルダーの様子を見て再び驚愕の声を上げるが、俺としては君が何なんだと言いたい。

しかも先程の女の子の攻撃?がホルダーに対して何の効力も持たないという事が分かった今、現状は予想以上に悪い方向へと推移しているのではないだろうか……

俺の予想は残念な事に現実のものとなり、ホルダーが再び女の子に突進攻撃を仕掛ける。

『来るぞい!!!』

「え!?ち、ちょっと待って!?」

ホルダーが迫り来る事を、先程も聞こえた老人らしき声が女の子に伝えるが、ホルダーに自身の放った攻撃が効かなかった事が、思った以上に予想外だったのか動揺を隠せないでいた。

「間に合え!!!」

このままでは確実にホルダーの攻撃を女の子が喰らう事になると感じた俺は、急ぎタッチノートを取り出してボタンを押す。

『チェイサー』

タッチノートから音声が響くと同時に、遥か彼方から俺にとって聞き覚えのあるエンジン音が凄まじい勢いで接近して来る。

そして砂埃を巻き上げながら、やって来たエンジン音の正体は、女の子に突進を仕掛けようとするホルダーに横から強烈な体当たり喰らわせて吹き飛ばした。

『お待たせマスター』

そのエンジン音の正体であるチェイサーさんが、ホルダーを吹き飛ばした後に話し掛けてくる。

「ナイスタイミングですチェイサーさん！でも、今日は普段よりも呼んでから駆けつけて来るまでの時間が早かった様な気がしますけど、この近くに居たんですか？」

普段からも常軌を逸した登場スピードを誇るメカシリーズ＆チェイサーさん達ではあるが、今日のチェイサーさんの到着スピードはそれを上回る程だ。

俺が疑問を口にするのも当然の流れである。

『それはワタシが説明しよう』

しかしその謎は、チェイサーさんの上から地面に飛び降りつつ語り出した存在……メカ犬によって、あっさりと紐解かれる事となった。

「何でメカ犬がここに！？」

『うむ。ジャックに話を聞きに行く最中に、公園からホルダー反応をキャッチしたのでな。チェイサーとは現場に来る最中に偶然会って一緒に来たのだ』

メカ犬の説明によると、どうやら今回はただ偶然が重なって俺が呼んだ時には、既に近くまで来ていた様である。

「な、何！？何がどうなってるの！？」

突然のチェイサーさんとメカ犬の登場に、魔法少女な女の子が慌てふためくが、今は事情を説明している暇も無さそうである。

確かにホルダーはチェイサーさんのバイクタックルによって吹き飛ばされたが、今も健在である事には変わり無いし周囲のホルダーモドキ達は俺達を取り囲んでおり、何時襲い掛かってきたとしてもおかしく無い。

『マスター。あの個性的な服装の女児は何なのだ？』

「俺も良く分からないんだけど……今はいつも通り戦うぞメカ犬！！！」

この場に似つかわしくない女の子の存在を、メカ犬も気にして質問してくるが、俺自身もこの女の子の存在がどういう存在なのか分からないので、その質問はスルーしつつ、取り敢えずタッチノートを開いてボタンを押す事で、強制的に普段の流れに展開を持っていく。

『バックルモード』

タッチノートから流れた音声が、響くと同時にメカ犬がベルトに変形して俺の腹部に自動的に巻きつく。

「変身」

俺は音声キーワードを口にしながら、タッチノートをベルトに差し込む。

『アップロード』

タッチノートを差し込んだ直後、俺の全身は眩い光に包み込まれ、その姿を一人の戦士へと変える。

「こ、今度は男の子の姿が！？この世界って技術水準が低い管理外世界じゃなかったの！？」

俺がシードに変身する姿を目の前にして、女の子が驚愕の声を上げるが、俺からすれば目の前で魔法少女の姿になったこの子も、充分に驚愕に値するのではないかと思うのだが、現状はその部分に突っ込みを入れるよりも先に、やらなければならない事がある。

「行くぞメカ犬！」

『うむ！』

メカ犬に宣言した俺は、一気に駆け出して正面のホルダーモドキに拳を繰り出す。

俺の先制攻撃を引き金に他のホルダーモドキ達も、ターゲットを俺に定めた様で次々と襲い掛かってくる。

『数が多いな……纏めて蹴散らすぞマスター！』

「ＯＫ！」

俺はメカ犬の指示に応えるべく、ベルトの右側をスライドさせて、緑と黄色のボタンを順番に押していく。

『スピードフォルム』

『スピードロッド』

ボタンを押したその直後、メタルブラックのボディーは鮮やかなライトグリーンへと変わり、俺の右手にはこのフォルムの専用武器である棒状の武器、スピードロッドが生成される。

「もしかしてあの男の子も、私と同じ魔導師なの！？」

『いや……あの少年からは、全く魔力を感じなかった。何か別の要因があるのかもしれん』

女の子と謎の老人の声が、何かを話しているのは分かったが、今はホルダー達と戦う事が先決だと意識を切り替えて、スピードロッドによる連撃をホルダーモドキ達に叩き込む。

そして俺の周囲をホルダーモドキが囲んだ瞬間を見計らい、俺はベルトからタッチノートを引き抜いて、スピードロッドの溝部分にスライドさせる。

『ロード』

音声が流れた事を確認して俺はすぐにタッチノートを再びベルトに差し込んだ。

『アタックチャージ』

ベルトから発生した激しい光が、右腕のラインを通過して、スピードロッドの先端へと集約される。

「こいつで決めるぜ」

俺は輝くスピードロッドを斜めに構えた後、自身の右足を軸に、回転運動を開始した。

「スピードロッド」

その回転により、スピードロッドから、幾重もの風の刃が発生していく。

「ウインドテイスティング」

発生した風の刃は俺を中心として波紋の様に広がり、周囲を囲んでいたホルダーモドキ達を飲み込み連鎖的な爆発を引き起こした。

『これでホルダーモドキは全て片付いたな』

「ああ。後はあのホルダーだけだ！」

周りに居たホルダーモドキ達を全て倒した事を告げるメカ犬に、俺は頷きながら先程の攻撃を免れたホルダーに目標を定める。

「はあああああ！！！」

スピードフォルムによる恩恵で得た素早さで、一気に距離を詰めた俺は、ホルダーにスピードロッドの連撃を浴びせかける。

「凄い……私の攻撃が全然効かなかった怪物と互角以上に戦ってる」

『怪物にしろ、あの少年にしても……こんな技術が第９７管理外世界に存在しているという情報は無かった筈だが……』

謎の老人の声は、どうやら女の子の持っている棒状の武器から発せられているらしい。

女の子にとってあの謎の声は、俺にとってのメカ犬の様な存在だとでも言うのだろうか？

『余所見をするなマスター！』

戦いの最中に、少しだけ聞こえて来た女の子達の会話に耳を傾けていたら、メカ犬の注意を促す言葉が、俺の鼓膜を刺激した。

その声で我に返り、正面のホルダーに集中すると、反撃とばかりに拳を繰り出そうとしていたので、咄嗟にスピードロッドの先端をホルダーの拳に引っ掛けて、本来の軌道を逸らす事で攻撃を回避する。

「サンキュー。メカ犬！」

『気になるのは分かるが、詮索は後にした方が良いぞマスター』

俺の感謝の言葉に対して、メカ犬が呆れ交じりの返事を返す。

どうやら俺が何に気を取られていたのか、先刻承知の様だ。

「そうするよ」

そして俺が反省の言葉を述べながら、ホルダーに追撃を仕掛けようとしたその時である。

『うむ！？』

「な、何だよこれは!?」

その場で足を止めて、俺とメカ犬は驚愕の声を上げた。

突如として森の奥から、バレーボール程の謎の光が、襲来したかと思うとホルダーの周囲を旋回し始めたのである。

『あ、あれは間違いないぞ!!!』

「そんな!?どうしてこのタイミングであれが出てくるのよ!?」

その少し離れた位置では、女の子と謎の声が俺達とは違った意味で驚愕している様に見えた。

「もしかして、あの光が何なのか分かるのか?」

「君!!!何でも良いからあの光を怪物から今すぐ引き離して!!!そうしないと大変な事になるわ!!!」

俺の独り言とも言える呟きとは対照的に、女の子が叫び声を公園内に響かせる。

そして女の子が叫んだこの直後、俺が何かを実行に移す前にホルダーの周囲を旋回していた謎の光が、新たな動きを見せた。

何と謎の光は、吸い込まれる様にホルダーの身体に吸い込まれてしまったのだ。

その予想外の事象に驚く暇もなく、光を体内に吸収したホルダーの

身体に、急激な変化が訪れる。

元からゴリラの様に逞しい肉体をしていたホルダーだったが、その大きさは更に一回り大きくなり、全身が鋼の鎧に包まれた。

『ホルダーの姿が変化した!?』

「……メカ犬。一体何が起こってるんだ!?」

『ワタシにも分からない。ただ……』

「ただ?」

『ただ……あの謎の光が原因で、暴走プログラムに大きな変化をもたらした事は間違いないだろう』

急激な変化を遂げたホルダーについて、メカ犬と議論したところ、やはり先程の光が関係しているらしい。

「探す手間が省けたな」

其処に聞き覚えのある声が、公園内で木霊した。

「この声は……」

『こんな状況で出て来るのは奴らしかいないだろう』

俺とメカ犬は、声のした方角に視線を向ける。

視線の先には予想通り、灰色と藍色の身体を持つ二体の怪人の姿が

あった。

「やっぱりお前達か!?オーバーにメルト!!!」

『探す手間が省けたと言っていたが、一体何を知っている!?』

オーバーとメルトに、俺とメカ犬が質問の嵐をぶつけるが、その質問をぶつけられた当人達は、何処吹く風と言わんばかりに余裕の態度を示している。

「あはは!!!会った早々に、元気が良いね!そんなに僕達に会いたかったの?」

そして俺達の質問に対して藍色の怪人の方、オーバーが笑いながら答えた。

「敵に情報をただで提供する義理は私達には無いが……まあ良い。知らない仲では無いからな。少しだけ教えてやろう」

続いてもう一人の灰色の怪人、メルトが尊大な態度で言葉を紡ぐ。

突如として現れた二人の怪人の言動に怒りを覚えるが、現状は少しでも多くの情報が必要である。

頼まなくても、向こうから情報を提供してくれると言うのであればこの際、多少の事にも目を瞑るべきだろう。

俺とメカ犬は新たな情報を取得する為、無言を貫きオーバーとメルトの話に耳を傾ける。

「それは異世界の産物さ」

「遠い過去の時代の……別の世界で生み出されながら、忘れ去られたテクノロジー……先程ホルダーに新たな進化を促した光……あの光こそが、私達の求める力の一旦だ」

初めはオーバーの呟きに始まり、続いてメルトが、何処か抽象的な言葉を並べ立てていく……

「異世界の産物に……ホルダーの進化……一体何を言っているんだ!?」

何処か肝心な部分は濁されたままに説明された話を聞き終えた俺は、敵である二人へ更なる質問をぶつける。

「悪いけどサービスはここまでだよ！あんまり喋り過ぎて計画を邪魔されても困っちゃうからね」

「……そういう事だ。真実に辿り着きたいならば、精々足掻いて見せる事だな。まあ、其処に居る異世界から来た少女に聞けば、多少の情報は得られるかも知れないがな」

だが敵である二人が親切に教えてくれる筈も無く、止める間も無く俺達の前からその姿を消してしまう。

しかし最後にメルトは、気になる言葉を残していった……

「……何よ……何なのよさっきから！！！」

俺がメルトの残した言葉に意識を向けていたその時、その言葉の中

心となっていた女の子が、怒声を上げたかと思うと、ホルダー目掛けて駆け出したのである。

『落ち着くんじゃミルファ！お主の攻撃は、あの怪物に通用しなかったのじゃぞ！？闇雲に先走ってどうすると言うのじゃ！？』

「プリズムは黙ってて！これは私の初めて任務なのよ！だから絶対に私の手で解決してみせる！……そうしないと皆……私を認めてくれないから！！！」

杖から発せられる老人の音声が制止するのも聞かず、女の子はホルダーに対して、杖の先端に光の刃と思われる物質を形成して、一気に斬りかかる。

だがその刃は振り切られる事は無く、ホルダーの屈強な肉体に阻まれてしまう。

「嘘でしょ！？魔力刃を受け止めるなんて……」

『先程の攻撃もそうじゃが……この怪物に用いられている技術は、魔力に対して強い耐性を持っておるのかもしれん』

攻撃を受け止められたその場で、女の子と謎の声が何か討論を始めた様だが、傍から見ていてそんな場合では無い事は、誰の目からでも明らかである。

『マスター！！！』

「分かってる！！！」

俺はメカ犬が合図を送るよりも早く、全力で駆け出していた。

ホルダーが拳を振り上げ、その狂拳が女の子を捉えようとする。

「うをおおおおおおおお！！！！」

それを見た俺は、更に速度を上げるが、このままでは間に合わないと悟り、その手に持っていたスピードロッド、槍投げの要領で投擲した。

投擲されたスピードロッドは、一直線にホルダーへと飛んで行き、女の子に拳が当たる前に見事に命中した。

気を逸らす程度のダメージしか負わせる事は出来なかったが、女の子への攻撃が途中で中断されて、ホルダーの意識が俺に向いただけで充分である。

俺はそのままホルダーに肉薄すると同時に、ベルトの右側をスライドさせて赤いボタンを押す。

『パワーフォルム』

押した直後ライトグリーンのボディーは、燃える様なクリムゾンレッドへと染め上がる。

スピードフォルムの特徴である俊敏性を犠牲にする代わりに得る事が出来る、攻撃力を自身の拳に乗せて、俺はホルダーの顔面に強烈な打撃を叩き込んだ。

「な、何で……君は一体何なの？どうして君は、そんな当たり前に

戦えるの？」

ホルダーが吹き飛んでから暫くして、女の子が呟く様に問い掛ける。

その女の子の質問は、場の流れから俺に向けられたものだとは思うが、女の子の表情からは、俺を通して違う誰かに問い掛けている様にも感じられた。

「……当たり前じゃないよ。俺だって戦うのは怖いんだ」

それでも……

「確かに怖いけど……俺は戦うよ。この世界には、守りたい大切な人達が居るから。それに俺は……」

女の子が俺を通して、何を見ようとしたのかは分からない。

だから俺は、正直に自分自身の戦う理由を告げる。

「仮面ライダーだからね！」

「……仮面……ライダー？」

俺の言葉を、女の子が反芻する。

『マスター！パワーフォルムの力だけでは、まだ攻撃力が不足している様だ！』

ベルトから聞こえるメカ犬の言葉を聞き、吹き飛んだホルダーを見る。

メカ犬の言う通り、ホルダーは大したダメージも負っていない様で、既に立ち上がっており、吹き飛ばした張本人である俺に対して、反撃の狼煙を上げようとしていた。

俺は其処で女の子との会話を一旦終わらせてから、足を一歩前に踏み出す。

「一気に勝負を仕掛けるぞ！」

『うむ！』

俺はメカ犬に合図を送りながら、ベルトからタッチノートを引き抜き操作を開始する。

『ガイア・コール』

タッチノートから音声が響くと、少しの間を置いて雑木林の中から、の恐竜的なシルエットが飛び出して俺達の足元へと降り立つ。

『お待たせですマスター！』

そのシルエットの正体、先程タッチノートで呼び出したメタルレッドのボディーを持つメカ竜が、俺に元気良く挨拶の言葉を言う。

「来てもらって早々だけど、力を貸してくれメカ竜！！！」

『了解です！！！』

俺はメカ竜に協力を要請しながら、更にタッチノートを操作して、

メカ竜をアタッチメントモードに変形させ、全ての役目を果たしたタッチノートをベルトに差し込み、すぐさまベルトの左側をスライドさせて、アタッチメントパーツとなったメカ竜を接続する。

『パワー・ガイア』

音声が流れると同時に、俺の周囲にメタルレッドの装甲が展開されて、次々と俺の全身に装着されていく。

『来るぞマスター！』

「分かってるさ！」

俺がガイアモードに変わったとほぼ同時に、走り込んできたホルダーの拳が俺の目前へと迫っていた。

メカ犬の注意を促す声に答えながら、俺はホルダーの放った拳の間に、自身の腕を割り込ませる事で軌道をずらして、ホルダーの放った一撃を無効化する。

「これでも喰らえ！」

俺はその隙に乗じて、強烈な蹴りをホルダーの腹部に当てて、強制的に後ろへ下がらせる。

更にアタッチメントパーツのレバー下にあるボタンと、ベルトの右側をスライドさせた際に現れる黄色いボタンを同時に押し込む。

『パワーブレード』

『ガイアブレイガン』

生成された二本の剣を其々片手に握り込み、俺は剣による連撃をホルダーに叩き込んでいく。

先程からタフネスと思われていたホルダーにも、流石にこの攻撃は通用した様で、最後に加えたパワーブレードとガイアブレイガンの突きにより、火花を散らしながら後方へと吹き飛ぶ。

『決めるなら今ですよマスター！！！』

「ああ！悪夢はここで終わらせる」

メカ竜の言葉に答えながら、俺は一旦パワーブレードを地面に突き立て、ガイアブレイガンの形状を変形させた後、再びパワーブレードを地面から引き抜いて溝部分に、ガイアブレイガンを差し込む。

『ジョイントアップ・ガイアブレード』

ガイアブレイガンを差し込んだ事により、メタルレッドのパーツがパワーブレードに追加されて、ここにガイアモード中最強の威力を誇る剣が生成される。

『マックスチャージ』

続けざまにアタッチメントパーツのレバーを引くと、音声が流れると同時に、ベルトから激しい光が発生し、その光は右腕のラインを通り、ガイアブレードの刃へと集約されていく。

「こいつで決めるぜ」

俺はエネルギーが集約されたガイアブレードを構えながら、静かに腰を落とす。

再び立ち上がったホルダーが、またしても俺に攻撃を仕掛けようと接近して来るが俺は構う事無く、ただ純然たる力を込めて、ガイアブレードを全力で振り切る。

「ガイアブレイカー」

この一撃により、大きな衝撃のエネルギーが発生し、ホルダーはその濁流に飲み込まれると大きな爆発を引き起こした。

大きく息を吐き出してから爆発の地点を見ると、粉々に崩れていく暴走プログラム三十代半ば頃と思われるスーツ姿の男性が気絶していた。

恐らく気絶している男性が、ホルダーの素体となった人と見て間違い無いだろう。

其処まではホルダーと戦った後に良く見られる光景だったのだが、俺の目にはそれ以外の物も目に映っていた……

ホルダーの姿を急激に変化させた原因と思われる光が、先程と全く同じ状態で宙に浮いていたのである。

「これは一体……」

俺がその謎の光を見ながら、恐る恐る触れてみようとしたその時だ。

「それに触れちゃ駄目よ！！！」

女の子の静止の声が響いたかと思うと、既に女の子は俺と謎の光の間に割り込み、先程ホルダーに攻撃した時と同様に、謎の光に対してその手に持っていた杖の先に光る刃を生み出し、一刀の元に斬り伏せた。

斬り伏せられた光は、その形を保てなくなったのか、細かい粒子となり、無に帰ってしまった……

一体何が起こって居るのか、状況を理解出来ない俺は、この場でその理由の何割かは知っていると思われる女の子に話し掛けようと試みるが、それよりも先に謎の光が完全に消えるのを確認した女の子が俺の方向へと振り返る。

「……君。確か仮面ライダーって言ったよね？少しだけ話したい事があるんだ」

桜の花びらが舞う春風で、後ろ髪を靡かせながら発っせられた女の子の言葉に、俺は縦に首を動かして肯定の意思を示した。

俺はこの日、一つの事件を追っている最中に、不思議な女の子との出会いを果たした。

そしてこの出会いが、とある大きな事件の序章すぎなかったという事実に、時俺はまだ気付きもしていなかったのである。

ただ一つだけ言える事は、今日の海鳴は春の風と共に新たな始まりを運んできたという事だけだ……

## 第２９話　謎の光と女の子？【後編】（後書き）

次回は女の子の目的が明らかに！？

……まあ、あまり驚愕の展開にはならないと思いますが、新章突入という感じで、進めていこうと思います。

それでは。

# 第３０話　すれちがう思いと重なる決意【前編】（前書き）

お久しぶりです。

作者のＧ－３Ｘです。

最初に皆さんにお詫びを申し上げます。

更新が半月以上伸びてしまい申し訳ありませんでした。

リアルの事情で半月近くＰＣを起動させる事が出来なかったので本当に申し訳ないです。

次の更新は出来るだけ早くしたいと思いますが、早くても来週になってしまうかも知れません。

兎に角今回も楽しんで頂けたら幸いです。

# 第３０話　すれちがう思いと重なる決意【前編】

「折角あの光を見つけたのに手放して良かったの？」

桜の舞い散る春の海鳴市。

誰もが新たな季節に、胸を高鳴らせる。

そんな季節ではあるが、どんな場合にでも例外は存在するものだ。

日中だというのに太陽の光すら届かない街の暗い……そんな場所で藍色の怪人オーバーが、隣に居る灰色の怪人メルトに対して疑問を口にした。

「……別に構わん。あれは所詮は本体から切り離された分身の様なものだ。本体を手に入れない限り、どれだけ分身体を得たところで意味は無い」

オーバーの質問に対して、メルトは平坦な抑揚の無い声で答える。

「ふ～ん……それなら良いけどさ。これからどうするの？結局は僕達もあれの本体を逃がしちゃったし、探すにしても何の手掛かりも無いよ」

「確かに現状私達に、あれの正確な位置を知る術は無いが焦る事は無い」

「随分と余裕があるみたいだけど、メルトには何か考えでもあるのかな？」

「……オーバー。あれの分身体がホルダーと融合した際に、仮面ライダーの近くに居た少女を覚えて居るか？」

尚も質問を重ねるオーバーにメルトは新たな質問を、逆に質問をしている側である筈のオーバーに対して投げ掛ける。

「……ああ。確かに何か、その場に合わないドレスみたいなのを着た女の子なら居たけど、今の話にその女の子が関係あるの？」

「あの少女もまた、私達と同じ様にこの世界とは別の世界から来た存在だ」

「……なるほど。そういう事か」

メルトの言葉に、オーバーは納得の声を上げた。

「メルトの言いたい事は分かったけど、そう上手く事が進むかな？あの女の子、確実に仮面ライダーと接触した筈だし……そう簡単にはいかないと思うよ」

「そんな事は分かっている」

「何か考えがあるって口振りだね？」

「……いずれ分かる日が来る。それよりもオーバー。お前にはやってもらいたい事がある」

続けて発したオーバーの質問に対して、何も問題は無いと言い切ったメルトは、その話はここまでとばかりに話題を変える。

「僕にやってもらいたい事？」

「この人物に直接会って、幾つかの暴走プログラムを渡せ」

オーバーの問い掛けに答える様に、メルトは一枚の写真をオーバーに手渡す。

「……別に良いけど、こんな奴にプログラムをあげちゃって良いの？」

「構わん。私達の計画を実行するには、現状では丁度良い駒になる筈だ」

「ふ～ん。それもその内分かるって言う訳だ……良いよ。そのお使いはちゃんとやっておく。どっちに転んでも面白くなりそうだしね」

受け取った写真を眺めながらメルトの頼みを承諾したオーバーは、ゆっくりとその場から立ち去って行く。

「……この計画が成就すれば、計画は次の段階に移る……そうすればあの方の夢はまた一歩現実に近くなる筈だ」

立ち去るオーバーの背中を見詰めながら、メルトは静かに呟いた。

「それじゃあ、あの光の正体は、ホルダーとは無関係だったって事かしら？」

翠屋のカウンター席の奥の方で、俺の簡潔に纏められた話を聞いた恵理さんが、俺に質問を投げ掛ける。

昨日の戦いから一日が経った夕刻。

俺はバイト中に再び現れた、今回の事件の情報提供者である恵理さんに、事の顛末を簡単に説明していた。

先程の質問も、俺が恵理さんに光の正体はホルダーとは違っていたと話した為である。

「さっきも言った通り、直接的には関係無いと思います。ただ……」

「ただ？」

途中で言葉を濁した俺を、恵理さんが先に進める様に促す。

「直接的に関係してはいなかったんですけど、オーバーとメルトがあの光を追っていた事は事実です。もしかしなくても、奴らはあの光を利用して何かをしようとしているのは間違い無い筈だと俺は思います」

恵理さんに促されながら、俺は自身の考えを述べる。

昨日の戦いでも、あの光がホルダーの体内に入った瞬間に、劇的な変化をもたらした。

更にメルトの言っていた事が真実ならば、俺が見た光は本体では無いらしい。

つまりここから遠くない何処かに、それ以上に強力な力を秘めた光の本体が存在しているという事なのだ。

「ところで純君。その時に公園に居たって言う女の子はもうすぐ来るのかしら？」

俺が謎の光について考え込んでいるところに、恵理さんが新たな質問を投げ掛ける。

昨日の戦いの場に居た女の子。

本人はミルファと呼べと言っていたので、取り敢えず俺はミルファさんと呼んでおく事にしよう。

ホルダーとの決着が着いた後、彼女は俺に話があると言って来た。

しかし昨日の戦いが終わった時点で、既に太陽は沈み月が顔を出す時間帯となってしまった事と、誰かが通報したのか、聞き慣れた警察のサイレン音が既に近くに迫っていた為に、話し合いは後日という事になった。

場所を移して話すという手段もあったが、俺もミルファさんも中身は兎も角として、確実に夜に出歩いていれば補導されるであろう外見である。

こんな時間では子供だけで何処かのお店に入る事もままならない上に、公園の付近もこれから警察の手によって調査が行われる事を考えると、長い時間を話すには向かないだろう。

なので俺はミルファさんに、翠屋の場所を教えて夕方頃に来るよう話して、その場は解散となったのである。

「はい。そろそろ来る頃だと思いますよ」

俺は恵理さんの質問に、翠屋の壁に立て掛けられた時計の針を見ながら答えた。

時刻は丁度、午後四時を過ぎたところである。

ミルファさんが約束通りに来るとすれば、既に何時来てもおかしくは無い時間帯だ。

「それじゃあ私は、このまま別の取材に言ってくるわね」

俺の答えを聞いた恵理さんはそう言うと、手荷物を纏めてからカウンター席から腰を上げる。

「あれ……恵理さんの事だから、このまま残って話に参加すると思ってたんですけど？」

恵理さんにしては予想外とも言える対応に、俺は素直な感想を述べ

た。

「あはは、純君の言う通り。そのミルファちゃんって女の子の話に興味があるのは確かだけど、話を聞くと何か事情が有りそうだし、場合によっては記事に出来無さそうだしね。それにその例の光の目撃証言……まだあれから一日しか経ってないのに、この海鳴市内の至る場所で確認されてるらしいのよ」

「それって!?」

俺は恵理さんの発言に対して、驚愕の声を上げる。

「だから私はそっちの件をもう少し詳しく調べてみるわね。だから純君も何か分かったら私に教えて」

そう言うと恵理さんは、お会計の料金となるコーヒー代を俺に渡すと足早に翠屋を後にした。

……それから数分後。

「いらっしゃいませ」

翠屋の扉が開かれるのと同時に、俺は店員としての挨拶をしてから、視線を来店したお客様に向ける。

「約束通り来てあげたわよ」

来店したお客様は、少し釣り目勝ちな、小学三年生程に見える見た目で、腰まで届きそうな髪を、後ろに纏めている、所謂ポニーテールにしていた女の子だった。

その姿は間違い無く、昨日の戦いの場に居た不思議な力を持った女の子……ミルファさんで間違い無い。

「それでは此方の席にお座りください」

俺はミルファさんを翠屋の一番奥の席に案内してから、調理場から顔を出した士郎さんに視線で合図を送る。

士郎さんには事前に今日の夕方頃、俺の知り合いが来ると話してあったのだ。

その際に知り合いと少し込み入った話をするから、話し合いの席と、俺がバイトから抜ける事も事前に了承済みである。

「確か君……あの変な機械仕掛けの犬にマスターって呼ばれてたけど、まさかこの喫茶店ってあんたの店なの？」

「まさか。俺は何処からどう見てもただの小学生だよ。ここは知り合いのお店だから、偶にお手伝いをしているだけさ」

ミルファさんの口振りからして、本気で言った訳では無いだろう。

それが分かっているからこそ、俺も軽く返答を返す。

軽い冗談を言い合いながら、互いに対面する形で席に着いた俺とミルファさんだったが、その表面上は和やかな態度とは裏腹に、俺はどう探りを入れるべきか思案する。

その考えはミルファさんも同じ様で、席に座った後も俺に対して明

らかに不審を持った視線をぶつけ続けていたのだが、暫くするとミルファさんは、その吊り目がちな瞳を閉じて大きく息を吐き出した。

「……何時までもこうして詮索しあっていても、埒が明かないわ」

再びその瞳を開けたミルファさんは、まっすぐな眼で俺を見据えながら言い放った。

「単刀直入に聞くわ。君は何者なの？この世界の技術水準から見て、あんな事は普通の子供が出来る事じゃ無いわよね。それに君が戦ったあの怪物は何なの？」

「教えても構わないですけど……条件があります」

早口で質問を捲くし立てるミルファさんに、俺は静かに言葉を紡ぐ。

「条件？」

「今回の件に関しては、俺も正直に言って、分からない事だらけなんです。だから俺も出来るだけの情報が欲しい。まずはミルファさんが何者なのか。そして例の光について何を知っているのか……最低限でもこれだけは交換条件として提示させてもらいますよ」

ミルファさんに対して俺やホルダーの事を話すのは、既に変身する際の場面を目撃されているということもあり、話すこと自体はやぶさかでは無いのだが、そうしてしまうとミルファさんから必要な情報を聞く事が出来なくなる可能性も出て来る。

だからこそ俺はただで話すのでは無く、交換条件という手段を用いたのだ。

「……私から君に話す事は何も無いわ」

数瞬の間を置いてミルファさんから返ってきた答えは、俺の提示した交換条件には応じないという返答だった。

その答えは予想外……という程でもない。

そしてただ一つ先程のミルファさんの答えによって俺が気付いたのは、ミルファさんが今回の件に関して、個人で動いている可能性は低いという事だ。

現状ミルファさんにとって、完全とは言わずとも部外者である俺に話せない理由。

今も推測の域を出ないが、誰かから事前に口止めされていると考えるのが、最も納得出来る理由だと思われる。

そもそもそうでなければ、曲がりなりにも昨日の事で僅かばかりとは言え関わりを持ってしまった俺に、最低限の理由すら説明しようとしないのは変だ。

「話せない事情があるんですか？」

「さっきも言ったわよね？私から君に話す事は何も無いって……納得したなら早く君の知っている事を話しなさい」

もう一度俺は質問を投げ掛けてみるが、ミルファさんの答えは変わらない。

このままでは何時までも話は平行線を辿るばかりであると確信した俺は、溜息を一つ吐き出した後、話の切り口を変えてみる事にした。

「ミルファさん・・・・・で良いですよね。答えたくないのであれば、答えなくても良いんでこれだけは聞いてください」

「……」

俺の言葉に対して、ミルファさんが無言で頷いたのを肯定の意味と受け取り、俺は話を続ける。

「昨日の怪物はホルダーと呼ばれているこの世界とは別の世界から来た技術を用いる事で、この世界の人間が変貌した存在です……」

その後も黙って此方を見続けるミルファさんに、俺はメカ犬と出会ってから今日までの話を、なるべく簡潔に説明した。

「……それじゃあ君は、今までそのホルダーと戦い続けて来た訳ね？」

俺の話最後まで聞いた後、今まで無言でいたミルファさんが口を開く。

「はい。さっきも話した通り、ホルダーは危険な存在です。そして今もそのホルダーを操っている上の存在の狙いが分からない以上、野放しには出来ません」

「言いたい事は分かったは……」

「それじゃあ！」

「……君の言い分は分かったけど、やっぱり話す事は出来ないわ。この件は誰の力も借りずに私が解決しなくちゃいけないの」

全ての話を聞き終えて尚、ミルファさんの意見は変わらず、強い意志を宿した視線を俺に向けながら言い放つ。

「……そうですか」

その強い意志を、これ以上話し合ったところで変える事は出来ないと悟り、諦めの言葉を口にする。

「話はこれで終わりね？」

俺の言葉を合図に、ミルファさんはそう言って席を立ち背を向けると、俺に一瞥もくれぬまま翠屋を後にした。

『これで良かったのかマスター？』

ミルファさんが店をでてからすぐに、話し合いをしていたテーブルの下から、メカ犬が這い出てきて、俺に質問を投げ掛ける。

「良いも何も・・・・・本人があんなに頑なじゃ、ここでどれだけ時間を掛けて会話をしても事情を話してくないだろ」

『確かにそうだが……』

出来ればミルファさんが事情を話してくれれば一番良かったのだが、当の本人が話したくないと言っている以上、無理に聞き出すわけにもいかない。

少なくてもホルダーについては話しておいたので、昨日の様な無茶はしないだろうと思いたいが、どうもミルファさんは第一印象から直情的になり易そうな節が感じられるので心配はあるが……

「でもそれ以上に心配なのは、ミルファさんのあの言葉なんだよな」

俺は先程のミルファさんとの会話を思い出しながら呟く。

最後に言っていた【誰の力も借りずに】という言葉を言い放った時の表情。

俺には強い意志を宿した瞳のその裏に、何処か焦りの様なものが見えた様な気がしてならなかった。

「へえ～さっきのお姉さんのお名前……ミルファさんっていうんだ？」

深い思考の海に沈んでいた俺の背後から、突如としてメカ犬とは別の声が掛かる。

物凄く聞き覚えのある声から、誰なのかは明白であるが、確認の意味を込めて俺は振り返る事で、先程の声の主を確認する事にした。

その声の主は予想通り、赤ん坊の頃から慣れ親しんだお隣に住む幼馴染の女の子、なのはちゃんである。

見慣れた学校の制服を着たなのはちゃんなのだが……何故だろう？

笑顔を俺に向けているなのはちゃんから、俺に対して凄まじいまで

の怒りの波動を感じる。

「ど、どうしてなのはちゃんがここに？」

俺は謎の怒りの波動を放ち続けるなのはちゃんに、どもりながらも問い掛ける。

それと言うのも、この翠屋自体がなのはちゃんの両親が経営しているお店なので、その娘であるなのはちゃんがお店に来たとしても何ら不思議は無いのだが、学校が終わった後に今日は確か習い事があると言って途中で別れたので、今も習い事の時間である筈の、なのはちゃんがこの場に居る事がとても不思議に思えたのだ。

「今日は先生が急用でお休みになったから来んだよ」

俺の問い掛けに、笑顔を貼り付けながら答えるなのはちゃんだが、その瞳は一切笑っていない。

「そ、そうなんだ」

「ところで純君……さっきの女の子、ミルファさんだったけ？アルバイトしてた筈の純君がどうして女の子とお席でお喋りなんてしてたのかな？」

寒気すら感じるプレッシャーを放ちながら、今度はなのはちゃんが俺に対して質問を投げ掛ける。

『頑張れマスター』

メカ犬からの謎の声援を受けながら、なのはちゃんが納得する答え

を出すまでに、俺はそれから三十分程のの時間を費やす事となった……

『あれで良かったのかミルファ……ワシとしては、あの少年の話を聞く限り最低限此方の話をしても問題は無いと思うのじゃがの？』

空が夕焼けで赤く染まる頃。

公園のベンチに座る一人の少女ミルファから、その容姿とはそぐわない老人の声が聞こえて来る。

その声の発生源は当然ながら、ミルファの発した言葉ではなく、音源はミルファが身に付けている金色の腕輪から生じていた。

腕輪の中央に嵌め込まれた青い宝石が、薄っすらと光を放ちながら点滅する度に老人の声が、ミルファの耳に届く。

「何を言ってるのよプリズム。どんな特殊な事情があったとしても、あの男の子は一般人に変わり無いわ。無用な混乱を避ける為にも、

管理外世界の一般人に私達の情報を話す訳にはいかないじゃない」

プリズムの問いにミルファは静かに返答を返す。

傍から見れば、ミルファ一人が二種類の声を使い分けながら話しているという、奇妙な光景に思えるが、既に夕暮れ時である今の時間帯に、公園を利用する人間は少なく、ミルファとプリズムの会話を聞き取れる距離には、ミルファ以外に誰も居ない。

『そうだとしてものう・・・・・既に少年の前で一度は力を使ってしまった手前、今更な気がするのじゃがな?』

「う、うるさいわね!あの時は緊急事態だったし、小さい男の子だったから別に見られても後で誤魔化せると思ったのよ!!!」

『じゃがあの少年はミルファよりも年下の様じゃが、しっかりしていたと思うがのう?』

「そんなの関係無いでしょ!?」

プリズムの言葉に狼狽しながら、早口で答えたミルファは一拍の間を置いて小さな声で呟く。

「それに……この任務は私が一人で達成させなくちゃ意味が無いのよ。そうしなくちゃ誰も私を認めてはくれないから……」

『じゃからあの少年の力は借りないと?』

ミルファの呟いた言葉に対して、プリズムが再度として質問を投げ掛ける。

「ええ、それに私の任務はあの男の子が言っていたホルダーっていう怪物と戦う事じゃないわ。あれの本体を一刻も早く見つけて回収するのが最優先よ。だからプリズムも早くあれの本体の現在地を割り出しなさい」

その問いに頷く事で答えを返したミルファは、この話は其処までとばかりに、話題を本来自分達がこの地にやって来た理由にシフトさせてしまう。

『……ずっと探してはおるんじゃが、どうにもセンサーが上手く働かんのじゃよ』

プリズムはミルファの心情を悟ってなのか、会話の切り替えに応じて現状を簡潔に伝える。

「こっちに来てからそればっかリだけど、本当に故障したんじゃないでしょうね？」

『いや……故障では無いじゃろ。現に他の機能に支障は見られんからのう』

「プリズムの故障じゃないとしたら、外部からの要因でセンサーが使えなくなってるってこと？」

『その通りじゃ。何故かこの街全体から微弱な反応が常に感じられておる。これでは正確な位置が特定出来んぞい』

解析の結果を聞いたミルファは少しの間、眉間に人差し指を当てながら考えた後、何かを思い付いたか一つの提案を口にする。

「この街全体から微弱な反応を感じられるって言ってたけど、それって何処に居ても一定の力を感じるって事なの？」

『いや、確かに反応は街全体から感じられるが、反応にはムラがあるぞい』

「なら弱い反応は取り敢えず無視して、この近くで一番大きく反応している位置を特定して頂戴。本体なら一番強い反応を出してる可能性が高い筈だから、虱潰しに探していけば何時か見つかるかも知れないでしょ」

『了解じゃ！今すぐ解析してみるぞい』

ミルファの提案を快く聞き入れたプリズムは、早速とばかりに解析を開始する。

『解析完了じゃ！場所が特定出来たぞい』

暫くの時間を置いた後、夕焼けに染まる公園の中でプリズムの声が響き渡る。

「でかしたわプリズム！それで場所は何処なの！？」

『ふむ。ここから南西に３ｋｍの地点。どうやら大きな建物の中から反応が出ているようじゃぞ』

「大きな建物ね……確か住宅街の近くだった筈だから、何かの施設かしら？」

『まずは行動あるのみじゃ。兎に角行って確かめるのが言いじゃろ』

「そうね、まずは反応のあった場所に行って、何か手掛かりが無いか探してみましょう！」

プリズムの言葉に頷きながらミルファは座っていたベンチから立ち上がり、一度大きく伸びをしてから行動を開始した。

## 第３０話　すれちがう思いと重なる決意【前編】（後書き）

次に後編を更新したら、次は別の意味でお久し振りなキャラクターファイルを更新したいと思います。

それでは。

## 第３０話　すれちがう思いと重なる決意【後編】（前書き）

またしても更新が遅れてしまいましたが何とか続きが書けました。

来月はもう少し時間が取れるかも知れないので、もう少し執筆速度が上がるかも知れません。

それでは今回も楽しんでいただけたら幸いです。

# 第３０話　すれちがう思いと重なる決意【後編】

「ここは……」

『どうやらこの世界の、大学と呼ばれる学び舎のようじゃのう』

付近で一番大きな反応を追って、辿り着いたその場所でミルファが小さな声で呟き、彼女が身に付けている腕輪のプリズムがその呟きに答える。

「そんな事は分かってるのよ！私が言いたいのは、本当にこんな場所にあれが有るのかってこと！！！」

見当違いな答えを返す自らの相方に対して、ミルファは容赦の無い突っ込みを繰り出す。

ミルファが辿り着いた場所は海鳴市の住宅街に近い立地に存在する地元の市民から一般的に海鳴大学と呼ばれている国立の大学だった。

この海鳴大学は中々に広い敷地と立派な設備を多く有しており、その施設の一部を外部の人でも使用出来る様にしている為か、中庭のキャンパスは常に一般にも開放されているので、どう見ても外見が小学生なミルファが大学内を闊歩していても、変に注目される事は無く堂々と中庭を歩きながら捜索を続けている。

『残念じゃが分からんのう……まあ、兎に角反応は確かにこの付近から出ておるのじゃ。探せば何かしらのヒントが見つかるかも知れんぞい？』

「結局はそういう事なのよね……」

先程の公園では名案だと自負していたミルファだったが、少人数でやるには明らかに時間の掛かるこのやり方に、既に若干の精神的ストレスを感じて、一人溜息を零す。

その直後大きな爆発音と振動が、この海鳴大学の内部で巻き起こった。

「な、何なの！？」

その爆発に驚きながら、ミルファが声を上げる。

『どうやら校舎の中で爆発があったらしいのう。目の前の建物から煙が上がっておるぞい』

プリズムの言う通り、物が焼ける独特な臭気がミルファの鼻腔を刺激し、前方の校舎の窓からは黒い煙が大量に噴出していた。

その煙に火災報知器が反応したのだろう。

耳に残る大きな電子音と、それに加えてまだ大学内に残っていた人達の慌しい声がこの場の音の全てとなる。

そして次の瞬間。

この二つの音に新たな音が追加される事となった。

「全部壊してやるぜえええええええええええええ！！！！！」

歓喜に震える男性の声と共に、煙の上がっていた校舎の壁が勢い良く砕け散る。

その壁が砕け散った事で出来た新たな出入り口から、人間とは明らかに違う姿をした一体の異形の怪物がその全貌を現す。

くすんだ灰色のゴワゴワとした毛並みが全身を覆い、顔面は犬の様な口が突き出た形状をしているがその眼の鋭さは犬と言うよりも、その原種となる狼に近い。

だがその異形は当然ながら、本物の狼などでは無い。

二メートル近くの長身に二足歩行、あまつさえ人語を喋る狼などは他に類を見ないであろう。

「あの怪物ってもしかして……」

突如として現れた異形の存在に、ミルファは呟きながら脳内で今日の喫茶店で聞いた一人の少年の言葉を思い出す。

この海鳴市に頻繁に出没するホルダーと呼ばれる異形の存在。

他の世界から持ち込まれた、人と融合するプログラムによって誕生した人の力を超えた存在を、少年はホルダーと呼んでいた。

『どうやらあの怪物も昨日遭遇した怪物と同じホルダーの様じゃのう……』

歓喜の叫びを上げながら、尚も暴れ続けるホルダーを前にプリズムが言葉を紡ぐ。

「あんな奴を放って置く訳にはいかないわ！！！行くわよプリズム！！！」

暴れまわるホルダーに、ミルファはその瞳の奥に怒りの炎を宿しながら叫ぶ。

「プリズム、セットアップ！」

その言葉に呼応するかの様に、ミルファの全身は光の粒子に包まれると共に、瞬時に昨日と同様のチャイナドレスを彷彿とさせる格好へ変わり、その右手には身に付けていたブレスレットの宝石と酷似した一本の杖が握られる。

『放って置けないのはワシも同意見じゃが、具体的にどうするつもりじゃ？あのホルダーとやらには魔法の効果はあまり期待出来んぞい』

姿を変えたミルファに対して、現在は杖の形状となっているプリズムが、当然の疑問を投げ掛ける。

「魔法が効かないなら、別の戦い方をするまでよ！！！」

プリズムの疑問にミルファは威勢良く答えると、杖を振り被りながらその言葉を実行に移す。

「プリズムショット！」

ミルファが言葉を紡ぐと同時に杖の先端に光が集約され、振り被った杖が振り抜かれると光球が前方へと放たれて行く。

「!?」

その光球の向かう先に居たのは当然ながら暴れていたホルダーであり、突如として飛来してきた光球に、驚愕するが、その光球はホルダーを目前にして軌道を変えてしまう。

軌道を変えた光球は、本来の標的である筈のホルダーには当たらず、その足元に着弾したのだが、光球が地面を抉ると同時に、その大きな破片の多数がホルダーを強襲する。

『なるほど。考えたのう』

「魔法が効かないなら、間接的に使って物理攻撃を仕掛ければ良いだけよ!!!」

予想外の攻撃をその身に受けたホルダーを見て、プリズムが感心の声を上げ、ミルファはその声に当然とばかりに笑みを浮かべながら早速第二波の準備へと取り掛かるが、其処で事態はミルファ達にとって最悪の形で急変する事となった。

『あれは!?』

「こんな時に嘘でしょ!?」

ミルファとプリズムがほぼ同時に驚愕の声を上げる。

ミルファ達の追っていた謎の光。

それがこの戦いの場に突如として現れたのだ。

更に最悪な事にその光は、昨日と同じくまるで吸い込まれるかの様に、ホルダーの身体へと飛び込んでいく。

「ぐっ!?があああああああああああああああ!!!!!!!」

光を受け入れたホルダーは、断末魔にも似た叫びを上げながら、その異形の肉体をミルファ達の目の前で更に変質させる。

くすんだ灰色の毛並みは、鋭い刃の様な銀の毛並みへと変わり、両手両足にはその毛並み異常に鋭く研ぎ澄まされた鋭利な刃を彷彿とさせる長い爪が生まれた。

『昨日の奴と同一の現象が!?』

「相手の姿が変わってもやる事は同じよ!」

光を吸収した事により変貌したホルダーの姿にプリズムが驚く中で、ミルファが構わず先程と同様の動きを繰り返す。

再び杖の先端から放たれる光球が、ホルダーの足元に着弾して地面を抉り、その破片がホルダーへと降り掛かるが次の瞬間ホルダーの姿がまるで霞の如くミルファの視界から消え去ってしまう。

「消えた!?」

前触れも無く目の前で起こった事象に困惑するミルファだが、ホルダーの行方を探る為に辺りを見回すよりも早く背後から声が掛けられる。

「さっきのはお前の仕業か……」

その声は先程ミルファの目の前から、忽然と消えた筈のホルダーのものだった。

『後ろじゃミルファ！』

「くっ……シールド！」

プリズムが危険を知らせるとほぼ同時にミルファが振り返る事無く言葉を紡ぐと、瞬時にミルファとホルダーを隔てる様に半透明の壁が出現するが、ホルダーは構う事無くその鋭い爪と人の力を凌駕した圧倒的な破壊力で壁ごとミルファを薙ぎ払ってしまう。

「きゃあ！？」

半透明の壁の存在により、直接ホルダーの攻撃を受ける事は無かったが、その衝撃までは防ぐ事が出来ずにミルファは吹き飛ばされる。

「何だが知らねえが、今日は最高の日だぜ！今ならどんな事でもやれそうだ！！！」

吹き飛ばされたミルファを見て恍惚とした声を出しながら、ホルダーが一歩ずつ着実に未だ先程の衝撃で立ち上がる事すら出来ないでいるミルファの元へと向かって歩み寄る。

「だから……俺の邪魔をする奴はここから消えろ！」

ホルダー化した事と更なる変化が重なった事により、完全に理性を

失ったのか。

ホルダーは戸惑う事無くその鋭い爪を振り上げ、ミルファの苦痛に歪む顔を堪能しながら振り下ろそうとするが、そうするよりも早く、一台の黒いバイクが爆音と共に現れて、その速度を緩める事無くホルダーへと体当たりを決た。

「君は……」

全身を襲う痛みに絶えながら吹き飛ばされるホルダーを一瞥して、その要因である黒いバイクに視線を向けたミルファは思わず呟く。

それと言うのも、その黒いバイクから降りて此方に駆け寄って来た一人の少年の顔をミルファが知っていた為である。

「大丈夫ですか！？」

ホルダーをバイクアタックで吹き飛ばした後、俺はチェイサーさんから飛び降りて、倒れているミルファさんの下へと駆け寄る。

「……君、どうしてこの場所に？」

恐らくはホルダーにやられたのだろう。

見たところ外傷は無さそうだが、ふらつきながら立ち上がったミルファさんが俺に質問を投げ掛ける。

「ホルダーの反応をキャッチしたんで急いで来たんですけど、間に合ったみたいで本当に良かった」

俺はその質問に対してタッチノートを見せながら簡単に説明して、ホッと胸を撫で下ろす。

しかしその答えはミルファさんが待っていたものでは無かったらしく、その瞳に若干の苛立ちの色が伺える。

「そうじゃ無いわ……どうして君は私を助けたりするの？あまつさえ心配したりするのよ？私は君に何も話さなかったのよ！？一方的に自分の意見だけを押し通して、君の気持ちを踏み躙ったのに……どうしてそんな優しくするのよ……」

最初は苛立ちをそのままぶつけるかの様に言葉を発したミルファさんだったが、最後の方にはその声も消え入りそうな程に小さくなっていく。

俺はミルファさんの事情は何も知らない。

どうして其処まで頑なに、一人で解決しようとするのか見当も付かない俺には、どんな言葉を掛けて言いのか分からなかった。

だから俺は……今の自分が思っている想いと、決意を口にする。

「俺は自分に出来る事を、最大限やってるだけだよ」

「自分に出来る事を……」

ミルファさんが俺の言葉を繰り返すのを聞きながら、俺はミルファさんに背を向けてチェイサーさんに吹き飛ばされたダメージから早くも回復して立ち上がろうとするホルダーと、ミルファさんの間を隔てる立ち居地に陣取りながら、その手に持ったタッチノートを開く。

「何でも自分だけで出来る人なんてきっと殆ど居ないから……俺だって一人じゃ出来ない事が一杯あるけど、それでも譲れない想いがあるから……だから俺はその想いを守る為に戦う。最高の相棒と一緒に！」

『マスター！』

俺の声に呼応するかの様に、チェイサーさんの座席シートから飛び降りたメカ犬が俺の隣に並び立つ。

「行くぞメカ犬！！！」

『うむ！！！』

相棒の返事と同時に俺はタッチノートのボタンを押す。

『バックルモード』

タッチノートから音声が流れると、俺の隣に居たメカ犬がベルトに変形して、そのまま俺の腹部に自動的に巻きつく。

「変身」

音声コマンドとなっている言葉を紡ぎながら、タッチノートをベルト中央の窪みに差し込むと、白い光が俺の全身を包み込み、一人の戦士へとその姿を変えていく。

「か、仮面ライダー！？」

立ち上がったホルダーが、今の俺の容姿を目撃すると驚愕の声を上げた。

全身を覆うメタルブラックのボディーに、ベルトを中心に四肢へと伸びる銀のライン。

そのラインと同色の額に輝くV字型の角飾り。

そした二つの赤い複眼が特徴的な今の俺の姿を見た街の人間は、誰もがそう呼ぶ。

俺の決意は……その名を背負い戦う事だ。

だから俺は自らの決意を貫く為に、目の前のホルダーに右手を突き出して宣言する。

「悪夢はここで終わらせる！」

俺はそう叫びながら、目の前のホルダーに向けて駆け出した。

「どいつもこいつも俺の邪魔ばかりしやがってえええええええ！！！」

向かってくる俺を見てホルダーが怒声を放つと、俺と同様に此方に駆け出して来る。

互いに距離を詰めた状態となった俺とホルダーは、その常人の域を超えた肉体による接近戦を繰り広げていく。

俺はホルダーの繰り出す鋭い爪を使った連続攻撃を捌きながら、その隙間に拳と蹴りを放つがホルダーの方も異常な程にフットワークが軽快で、俺の攻撃を尽く避けきってしまう。

『相手の方がマスターよりも一段階素早いな』

「それならこっちのスピードを上げれば良い！」

ベルトから聞こえるメカ犬の指摘に答えながら、俺は後方に飛び上がる事で一時的にホルダーと距離を取り、すぐさまベルトの右側をスライドさせて緑と黄色のボタンを順番に押していく。

『スピードフォルム』

『スピードロッド』

音声が流れると、空中で俺のメタルブラックのボディーが鮮やかなライトグリーンへと染まり、その右手にはこのスピードフォルムの専用武器であるスピードロッドが生成される。

「はあああああああ！！！」

俺は空中でスピードロッドを上段に構えた状態で、ホルダー目掛けて落下と共に強烈な一撃を叩き込む。

「ぐはっ！？」

流石にホルダーも、いきなり俺が突然空中から武器を使った攻撃をしてくるとは考えていなかったのだろう。

スピードロッドによる一撃がホルダーの右肩に決まると同時に苦痛の声を上げた。

『畳み掛けろマスター！！！』

「分かってる！！！」

メカ犬の指示に返答を返しながら、俺はスピードロッドを振り回しながら、痛みに苦悶の声を漏らすホルダーに追撃を仕掛けようとするのだが……

『うむっ！？』

「き、消えた！？」

俺がホルダーに向けてスピードロッドを振るった次の瞬間に、先程までその場所に居た筈のホルダーの姿が忽然と消えてしまったのだ。

「こっちだよ！！！」

理解が追いつかない現象に俺とメカ犬が驚愕の声を漏らしたその直後、背後から急に聞こえた声に振り向く間も無く、俺の背中に鋭い痛みが走る。

「ぐあっ！？」

続いて俺の背中に叩き込まれた強烈な衝撃によりその場から吹き飛ばされながらも、何とか瞬時に受身を取って背後に視線を向けると、其処には先程目の前から消えた筈のホルダーの姿があった。

『どういう事だ！？』

「何で目の前に居た筈のホルダーが後ろに……」

突如として後ろから再び姿を現したホルダーに、俺とメカ犬は疑問の声を上げる。

「そのホルダーは昨日の奴と一緒よ！」

俺とメカ犬が疑問の声を上げたその直後、ミルファさんの声が大学のキャンパス内に響き渡った。

「……ミルファさん？」

その声に反応して俺はミルファさんに視線を向ける。

ミルファさんは、まだ少しふらついていて弱々しい状態ではあったが、その瞳からは今まで以上に強い何かを感じさせた。

「あのホルダーは昨日の奴と同じで、例の光を受けて変化したわ。多分ホルダーが元々持っていた能力が、異常に強化されてる！あの光にはそういう特性があるのよ！！！」

「……どうして、それを俺に教えてくれるんですか？あんなに話す事を拒んでいたのに……」

緊急事態という事はあるかも知れないが、あんなにも俺に話す事を拒んでいたミルファさんが、俺に情報を話してくれた事を不可解に感じてしまい、俺は思わず質問を投げ掛けてしまった。

俺の質問を聞いたミルファさんは、一瞬だけ呆けた顔をしたが、その表情は本当に一瞬だけであり、すぐに元の吊り眼がちで少し厳しい顔へと戻ってしまう。

「君に譲れない……大切なものがあるのと同じで、私にも絶対に譲りたくないものがあるわ。だけど私一人の力じゃ、出来そうに無い……それが分かったから……今更こんな事を言えた義理じゃ無いかも知れないけど……私は、私の出来る事をしたい！」

その後自身の心情を語ったミルファさんは、一時の間を置いて再び言葉を紡ぐ。

「だ、だから私に協力して一緒にこの街を守って……仮面ライダー！！！」

俺はその願いに言葉を返さなかった……

ただその代わりに俺は頷きながら右手の親指を上に突き出してサムズアップをする。

『元々の能力を更に強化する……そうか！』

俺とミルファさんの中で、一つの憤りが無くなった刹那に、メカ犬が声を張り上げる。

「どうしたんだメカ犬？」

『奴の消えた正体が分かったぞマスター。ミルファ嬢の情報が正しいのであれば、奴の能力は瞬間的な素早さの向上だ。あのホルダーの能力が素早さだったのであればその可能性が最も高い！』

「高い身体能力を更に高めるか……そう言えば昨日のホルダーは元々頑丈そうな身体が更に硬くなってたな……」

メカ犬の説明を聞いて、俺は昨日の戦いで見たホルダーの変化を思い出す。

『ならば答えは一つだ！此方も同じ舞台に上がれば良い！！！』

「ああ！！！」

俺はメカ犬の言おうとしている事を理解して、すぐに行動へと移す。

その場にスピードロッドを投げ捨てベルトからタッチノートを引き抜き、ディスプレイをある項目に設定して直接指でなぞる。

『コール・ライガー』

すると音声が流れて、数瞬の間を置いてから一体の緑の獣がこの場

に現れる。

『マスターお待たせじゃん！』

呼び出した手乗りサイズの緑色の虎、メカ虎が俺の肩に飛び乗りつつ軽い挨拶を披露した。

「呼んで早速だけど行くぞメカ虎！」

『オレッチに任せるじゃん！』

俺の言葉に相変わらずの乗りで答えるメカ虎を肩に乗せた状態で、俺はタッチノートの操作を続ける。

『スタンディングモード』

アタッチメントパーツへと変形したメカ虎を握った俺は、タッチノートを再びベルトに差し込み、続いてベルトの左側をスライドさせて、その差し込み口にアタッチメントパーツとなったメカ虎をセットする。

『スピード・ライガー』

音声が鳴り響いたその瞬間に、ライトグリーンの追加パーツが、ベルトから発せられる光から生成されて、次々と俺の身体に装着されていく。

メカ犬の言っていた同じ舞台に上がれば良いという言葉。

常人が感知出来ない程の速さに着いて行く為には、此方もその舞台

へと上がる為の能力を得なければ成らない。

ライガーモードはこの場でそれが出来る唯一の存在だ。

「折角こんな茶番に付き合って待ってやったんだ。精々楽しませてくれよ？」

ホルダーは下卑た笑いを浮かべながら、そう言うと再びその姿を消してしまう。

『マスター！オレッチ達も行くじゃん！！！』

「分かった！！！」

俺はメカ虎の言葉に頷きながら、地面に落ちていたスピードロッドを蹴り上げて、再び右手に握り締めてから、アタッチメントのレバー部分を引く。

『マックスチャージ』

ベルトから流れる音声と同時に、発生した光が、俺の四肢へと集約されていく。

まるで己の重さの全てが取り除かれた様な不思議な感覚を味わいながら、俺がその場から駆け出すと消えてしまった筈のホルダーが正面に駆け寄って来るのを視界に捉える事が出来た。

やはりホルダーは今の俺と同じ様に、常軌を越えた速さで動いていたのである。

だからこそ同じ感覚を得る事で、俺はその姿を再び目視する事に成功した。

ちなみにこの状態の名称なのだが、メカ虎の強い要望で【スピードタイム】と呼ぶ事が決定したのは全くの余談だ。

「な、何だと！？」

寧ろこの現状に驚いたのはホルダーの方だったのだろう。

己の速さに着いて来る俺に対して、驚愕の声を上げる。

「はあああああああ！！！」

俺は驚愕するホルダーに容赦なくスピードロッドによる連撃を浴びせかけて最後にホルダーの顎へと先端をぶつけて真上に吹き飛ばす。

『今がチャンスじゃん！！！』

「ＯＫ！！！」

メカ虎の指示に俺は一言で答えながら、再びアタッチメントパーツのレバーを引く。

『マックスチャージ』

先程はスピードタイムを発動させる為に全身へと流れたエネルギーが、今度は右腕のラインを伝って、スピードロッドへと集約される。

「こいつで決めるぜ」

俺は真上から落下してくるホルダーに眩い輝きを放つスピードロッドを構えた。

「スピードブレイク」

真下から落下してくるホルダーに対して、俺の繰り出した連続の突きがホルダーの全身を強襲する。

その衝撃をその身体に全て受け止めたホルダーは大きな爆発を起こす。

丁度その時点でタイムリミットである１０秒が経過してスピードタイムが終了の時を迎える。

時間の流れが通常に戻り、俺がその場で変身を解くと、爆発のあった真上から気絶した一人の男性が落下して地面に転がった。

年齢は若い見た目とカジュアルな服装から考えて、恐らくこの大学の生徒なのだろう。

そしてその男性の身体の中から、昨日と同様に謎の光の球体が飛び出してくる。

「これが今の私に出来る事かな……」

何時の間に近くまで来ていたのか。

ミルファさんは少し複雑そうな笑みと共に杖を振るい、その杖の先端に光が当たると、その光は最初からその場に居なかったかの様に

跡形も無く消えてしまった。

『マスター。ちょっとこっちに来てくれ』

俺がミルファさんの様子を見ていると、少しだけ離れた場所からメカ犬に声を掛けられる。

「どうしたんだメカ犬？」

『これを見てくれマスター』

言われた通りメカ犬の指し示す地面に視線を向けると、其処には先程のホルダーの原因となったであろう暴走プログラムの残骸が転がっていたのだが、それは俺の知っている暴走プログラムとは若干違っていた。

「……赤い色をしてる？」

『うむ。今まで見た事の無いタイプの暴走プログラムだ』

メカ犬の言う通り、今までに見た事のある暴走プログラムとはまた別のタイプなのは一目瞭然である。

何か手掛かりになればと思い、俺はその残骸に手を伸ばすが、俺の指先が触れると同時に、暴走プログラムは塵となってその存在は無へと帰ってしまう。

俺はその光景に先程の勝利の余韻より、得たいの知れない薄気味悪さを覚えた……

私はこの日、素晴らしい出会いをした。

初めはその人とは違う異形の姿から、少し早い地獄からの迎えが来たのかと思ったが、彼は私に素晴らしい贈り物をくれた。

もしかしたら彼は、私にとって地獄からの使者では無く、天より舞い降りた天使だったのかもしれない。

何故なら彼が私にくれた贈り物とは、それ程の価値がある素敵なものだったからだ。

この贈り物があれば、もしかしたら私の目的が達成出来る日が私の生きている内に来るかも知れない……

既に病魔に蝕まれ僅かな時間しか残されていないこの身体で、己の生きた証をこの世に残そうと躍起になっていた私にとって、それは神からの天恵と等しいものだった。

だが、私はまだ心の何処かで迷っている。

それは人間として正しい事なのか？

早計に答えを出す訳には行かない。

残された時間は決して多くは無いが、それでも私はその時間で考えなければ成らないだろう。

もしも私の導き出した答えが間違っていたその時は……

「あの光を私達は試練の光って呼んでいるわ」

「試練の光？」

俺はミルファさんの言葉に対してオウム返しに声を零す。

現在俺とミルファさんは我が家である板橋宅の俺の部屋で、例の光について話をしていた。

そして二度に渡り、ホルダーを変質させた光の名称が先程俺がオウム返しに聞き返した【試練の光】と言うらしい。

完全にとまでは言えないが、協力を申し出てくれたミルファさんは俺に幾つかの事を話してくれた。

まずミルファさん自身についてなのだが、どうやら話を聞く所によるとどうやらミルファさんの出身は、俺も一度だけ行った事のある……あのミッドチルダらしい。

昨日から偶に聞こえてきていたミルファさんの声とは明らかに違う謎の老人の声は、以前アリシアちゃんが話してくれたデバイスで、名前をプリズムというのだそうだ。

俺がミッドチルダに言った事があると話したら、随分と驚いていたミルファさん達だったが、今までにも何度か前例があるらしく、すぐに気を取り直して話を再開させた。

以前にアリシアちゃんから聞いた話だったのだが、どうやらミルファさんはそのミッドチルダの警察的な役割を持つ組織に属しているらしく、その任務でここに来たそうだ。

何でも例の光……試練の光は今まで厳重にその組織で保管されていたそうなのだが、何者かがその保管庫を爆発させたらしく、その際に試練の光が起動して俺達の居るこの世界に来てしまったらしい。

誰が組織の厳重な警備を掻い潜り保管庫を爆破したのか、その際にどうして試練の光がこの世界に来てしまったのかは、今も分かっていないそうだが、今のところ最も恐ろしいのはその試練の光がこの海鳴市で発動してしまったという事だ。

ミルファさんの話によると、試練の光は古代に失われた技術で作られた物で、人工物でありながらメカ犬やプリズムの様に己の意思を持って自身を所持するに相応しい人物を探しているらしい。

あのホルダーに入ってその姿を変貌させた光は、分身の様な物で強靭な肉体、一つの強い目的を持った者に仮初めの力を与えて、その人物が所有者に相応しいかどうかを見極めるという特性があるそうなのだが、今までその資格を得た者は誰も居ないそうだ……

ただこれでホルダーにあの光が呼び寄せられる様に来たのか納得出来た。

人を超えた強靭な身体と、暴走プログラムによる影響で捻じ曲げられているが一つの意思に支配された強力な意思。

ホルダーは聞けば聞く程に、試練の光の条件を満たしていたのである。

そしてそんな強力かつ危険な任務をどうしてミルファさんが受け持つ事になったのかというと、どうやらあの試練の光を単身で押さえ込めるには、先天的な才が必要で、その力を組織内で現状唯一持っていたのがミルファさんだった為らしい。

何とかしてその原因を突き止めて、増員を送る予定はあるらしいのだが、ミルファさんは一刻も早く試練の光を回収しなければいけないと考えて、単身先行して此方に来たそうなのだ。

「試練の光はこの海鳴市全体を自身の資格者を探す為の実験場にしたと考えて間違い無いわ。だから、その……協力して一緒に探して

くれるかしら……純？」

大体の話を終えた後、ミルファさんが遠慮がちに俺の名を呼びながら確認を取ってくる。

「うん。勿論だよミルファさん。一緒に頑張ろう」

俺は頷きながら肯定の返事を返すのだが、どうもミルファさんの表情からは不満と言いたげな感情が伺える。

「私と純は今日この時から、一蓮托生のパートナーなのよ！敬語は要らないし、さん付けも止めなさい！」

「え？」

ミルファさんの口から唐突に放たれた言葉に、俺は思わず唖然としながら声を上げた。

「ほら、敬語は無しでもう一度言ってみなさい！」

「えっと……どうしても言わなくちゃ駄目かな？」

「駄目よ！！！」

強い要求に対して、俺が断りの言葉を述べるがそれは即座に却下されてしまう。

こういった手合いの人物に説得は無理だという事は、俺は常々理解している。

まあ、見た目だけを言えばミルファさんの方が、二歳から三歳程年上に見えるが、本人がフランクに話しかけてくれと言っているのだから、其処まで頑なに拒む事も無い。

「……分かったよ。これから宜しくミルファ」

「こっちこそ。私の小さくて強い……パートナーさん」

俺とミルファは互いに右手を出して硬い握手を結ぶ。

「純君！遊びに来……た……よ……」

どんな星の巡り合わせだろうか？

新たな友情が芽生えた次の瞬間、俺の部屋の扉が開け放たれて、お隣に住む幼馴染の女の子、なのはちゃんが部屋の中へと飛び込んで来たのだが、俺とミルファさんが握手している姿を目撃すると同時に、何故か凄まじいまでの怒気がなのはちゃんから伝わってきた……

「純君……どうしてその子が純君のお家に居るのかな？しかも何で二人は手を握りあってるの？」

なのはちゃんは明るい笑顔と優しい口調で俺に問い掛ける。

そう……

笑顔なのだが……何故だろうか？

俺の生存本能が、逃げろと何度も訴えかけている気がする。

「あら、当然でしょ。だって私は純のパートナーなんだから」

この全体を震撼させる様な壮絶な空気の中で、一番最初に動いたのはミルファだった。

握手した俺の腕をそのまま引き込むと、胸で俺の顔を抱き止めてなのはちゃんに謎のアピールを開始する。

「な、幾ら歳が少し上だからって、ちょっとスキンシップが過剰じゃないんですか!?それに純君のパートナーってどういう意味なんです!?」

その光景を見て、どうしてか焦った様子で言葉を捲くし立てるなのはちゃんが気になったが、次の瞬間に放たれたミルファの言葉に俺は本日で一番大きい衝撃を受ける事となる。

「お姉さんと歳の離れた弟のスキンシップみたいなものよ。だって君も純もまだ精々１０歳になって無いでしょ?私は今年で１７だもの。何も問題無いわ」

……俺となのはちゃんがその場で驚愕の声を上げた事は言うまでも無い。

様々な出来事が起こり、騒動と驚きが尽きないが、今日の海鳴市はそれなりに平和だ。

## 第３０話　すれちがう思いと重なる決意【後編】（後書き）

この作品を一年以上連載してきて何となくどれだけの数の仮面ライダーが描写の中で出てきたか気になったので数えてみる事にしました。

１　仮面ライダーシード
２　仮面ライダーデビル
３　仮面ライダーＮＥＷ電王
４　仮面ライダー電王
５　仮面ライダーゼロノス
６　仮面ライダーネガ電王
７　仮面ライダーＥ２
８　仮面ライダーＷ
９　仮面ライダーサイファー
１０　仮面ライダーアクセル
１１　仮面ライダーオーズ
１２　仮面ライダーディケイド
１３　仮面ライダーブレイド
１４　仮面ライダークウガ
１５　仮面ライダーハンター
１６　仮面ライダーボマー
１７　仮面ライダーガンナー
番外編　仮面ライダーアスラ
番外編　仮面ライダー刃鬼
番外編　仮面ライダーアクエリアス
番外編　仮面ライダーファイズ
番外編　仮面ライダーキバ
番外編　仮面ライダーアギト

番外編　仮面ライダーカブト

番外編や例外的な形を合わせると総勢２４名……意外な程の数が出ていた事に書いた私が驚きました。

それでは。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6579n/

魔法少女リリカルなのは〜ヘタレ転生者は仮面ライダー？〜

2011年10月30日15時15分発行